

提督をみつけたら

源治

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深海棲艦のいない戦後の平穏な世界で、運命の提督を見つけるべく奔走する艦娘たちと、彼女たちにロックオンされちゃった提督適性者たちとの恋の日常。

おそらく、メイビー。

目次

『僕』と『正規空母：加賀』	1	『無職男』と『駆逐艦：不知火』	202
『無職男』と『駆逐艦：陽炎』	15	『ホスト』と『戦艦：榛名』	224
『ホスト』と『戦艦：霧島』	29	『無職男』と『駆逐艦：萩風』	249
『意識高い男』と『重巡：愛宕』	50	『意識高い男』と『重巡：高雄』	270
『弟』と『軽巡：由良』	72	『学者』と『駆逐艦：初霜』（設定回）	
『僕』と『正規空母：翔鶴』	90	300	
『無職男』と『駆逐艦：黒潮』	106	『僕』と『正規空母：瑞鶴』	336
『ホスト』と『戦艦：比叡』	121	『無職男』と『駆逐艦：磯風』	356
『ヒモ（主夫）』と『重巡：那智』	140	『ホスト』と『戦艦：金剛』	385
『独り身男』と『軽巡：川内』	159	『三文小説家』と『駆逐艦：朝霜』	
『僕』と『正規空母：赤城』	182	415	
		『僕』と『正規空母：飛龍』	432
		『無職男』と『駆逐艦：初風』	458

『服飾家』と『戦艦：陸奥』——
 『絵描き』と『重巡：足柄』——
 『負け犬』と『駆逐艦：島風』——
 『電波男』と『軽空母：飛鷹』——
 『無職男』と『駆逐艦：舞風』——
 『父』と『戦艦：扶桑』——
 『夫』と『戦艦：山城』——
 『無職男』と『駆逐艦：秋雲』——
 『僕』と『正規空母：Ark Royal』——
 『無職男』と『駆逐艦：時津風』——
 『困った人』と『戦艦：Richelieu』——

870
 816
 784
 758
 711
 688
 658
 631
 537
 502
 481

『意識高い男』と『重巡：鳥海』——
 『あるじ』と『駆逐艦：夕立』——
 『孝行息子』と『駆逐艦：望月』——
 『無職男』と『駆逐艦：嵐』——
 『運転手』と『駆逐艦：春風』——
 『幼馴染』と『重巡：最上』——
 『無職男』と『駆逐艦：浜風』——
 『僕』と『正規空母：Graf Zeppelin』——
 『無職男』と『駆逐艦：親潮』——
 『旅作家』と『軽空母：Gambier Bay』——
 『無職男』と『駆逐艦：浦風』——

1276
 1257
 1200
 1159
 1125
 1098
 1075
 1043
 1012
 930
 900

『芸術家』と『潜水艦：伊168』

1304

『玉子職人』と『軽空母：瑞鳳』

『無職男』と『駆逐艦：谷風』

『無職男』と『駆逐艦：天津風』

『食べたい男』と『軽巡：阿賀野』

1520

『無職男』と『駆逐艦：野分』

『僕』と『正規空母：蒼龍』

『二人の男』と『潜水艦：まるゆ』 前編

1620

『二人の男』と『潜水艦：まるゆ』 後編

1682

『無職男』と『駆逐艦：雪風』

『嘘つき』と『駆逐艦：卯月』

『意識高い男』と『重巡：摩耶』

『パパ活男』と『重巡：鈴谷』

『雷巡：北上』と『雷巡：大井』

146914351408

15951552

19911918187218341791

『僕』と『正規空母：加賀』

この世界は一度滅びかけたらしい。

しんかいせいいかんという、怪物が現れて世界をめちゃくちゃにしたんだ。

だけどどこからか現れた艦娘と、その辺に居た提督と、あと沢山の人たちが力を合わせてしんかいせいいかんをやっつけて平和を取り戻したんだって。

その後、艦娘たちは妖精さんに子供を作れるようにしてもらって、提督と呼ばれた人たちと結婚して子孫を増やしたらしい。

艦娘たちは一定まで年を取ると、死ぬまでその姿だったらしいので、ある日ぼっくりといく（なんとなくわかるらしい）その時まで、それはもう沢山沢山子供を作ったらしく、当時ものすごく減っていた人口がそれでけっこう増えたんだとか。

そうやって少しずつ人口は元に戻り、とつても長い時がかかったけれど、ようやく文明もしんかいせいいかんが現れるちよつと前からいまで復興したのが今の世界。

艦娘の寿命は八十年位（※気合で伸びる）らしく、当時の艦娘は今ももう居ない。

でも、艦娘は今でもこの世界に居る。

なぜなら時々、ぼろっと提督と艦娘の子孫の中から生まれることがあるからだ。ちなみに僕のおばあちゃんのお母さんも艦娘だったんだって。

おばあちゃんはよく、お母さんでもあった艦娘たちのことを僕に話してくれる。

彼女たちは生まれ持って色んな力を持っていたり、彼女たちのための法律があったり、彼女たちの中でも『駆逐艦』『軽巡洋艦』『重巡洋艦』『戦艦』『軽空母』『正規空母』『潜水艦』『その他（適当）』色んな種類があるとか。

そしてその中でも特に僕が気になったのが、彼女たち艦娘は提督適性者と呼ばれる素質を持った人としか子供が作れず、好きになったりすることも無いという話だ。

正確には提督適性者、というだけでも駄目らしく、その中でも自分にあった種類の艦種適性を持つてる提督じゃないと駄目らしい。

さらに提督適性者の中には艦種適性じゃなく、一つの艦の種類しか適性のない人もいるらしく、むしろその方が多いとか。

ちよつとわかり辛いかな。

一つ例を上げると正に僕のひいおじいちゃん。

おばあちゃんのお母さんは『天城』という艦娘だったらしいんだけど、ぼくのひいおじいちゃんはその『天城』という適性しかなかった。

そしてひいおじいちゃんとお会いしたことが、ひいおばあちゃんにとっては人生の中でのことよりの幸せなことだったとよく話してたとか。

でも僕は思ったんだ、最初から好きになる人が決まってるなんて、なんだか悲しいことなんじゃないのかなって。

そうおばあちゃんに聞くと、おばあちゃんはクスリと笑って教えてくれた。

なんでもおばあちゃんも同じことを聞いたらしい。

おばあちゃんのお母さんはそのことを聞かれると

『私たちの中の本能とでもいうのかしらね、それを信じて大事な人を探す、そして見つかる。まるで運命に導かれるようだけど、それを思うだけでもとっても幸せでいっぱいになるの。もう他のことなんか全部どうでもよくなっちゃうくらいに。個体差もあるでしょうけど、それは私たち艦娘にとってはとってもよくなっちゃうくらいに。個体差もあるでしょうよ』

そう、恋をして幸せで幸せで仕方が無い、そんな笑顔で答えたんだとか。

僕はよくわからなかったけど、おばあちゃんはそんな答えを聞いてとても綺麗だと感じたらしい。

そしておばあちゃんいわく、僕にももしかしたら、ひいおじいちゃんみたいに提督適性があつて、艦娘に選ばれる日が来るかもね、そう言つてた。

ちなみになんの艦娘の適性を持つているかは、周りの人や提督適性者側からは分から

ないらしく、適性に該当する艦娘がその適性者を見た瞬間、まるで雷が落ちたようにわかるらしい。

一目ぼれというやつなのだろうか？

随分長くなっちゃった。

まあ、僕がどうしてこんな長々とこんなことを思ってるのかだけど……

「航空母艦、加賀です。本名は別にあるのだけど、貴方にはそう呼んで欲しいわ。……それであなたが私の提督なの？ 正直かなり期待はしているわ」

下校途中に黒塗りの高級車から降りてきた、どうにもその艦娘らしき人に絡まれていく真つ最中だからだ。

『僕』と『正規空母：加賀』

髪を片方で結つてまとめ、高そうなスーツ姿の綺麗な顔をしたおねえさん？ 艦娘だから実際に何歳なのかはわから無いけど。

彼女はいきなり僕の前に現れて道をふさぐように立ちふさがった。

……正直逃げ出したいくらい怖い。

僕はランドセルについている防犯用の笛を握り締めて、ゆっくりと後ろに下がる。

「ご、ごめんなさい、突然で驚いたかしら。でもどうしても聞いて欲しいことがあるの、ほんの少しの時間でいいわ」

僕は悲しそうにしている彼女を見て、少し胸が痛くなる。

なので、少しだけ彼女の話を聞いてあげることにした。

「その、心配いらわないわ。一つだけ聞きたいことがあるだけだから」

そう言つて彼女はとも凛々しい真剣な顔をする。

「……子供は何人欲しいかしら？」

僕は力いっぱい笛を吹いた。



その後『加賀』という人は、黒塗りの高級車からでてきた二人の女の人に「クマー」「にゃー」という掛け声にあわせて引つ張られ、車の中に押し込められて走り去って行った。

僕が家に帰って今日の話をおばあちゃんにすると、おばあちゃんは「まあまあまあ」とうれしそうにして、本棚から『艦娘図鑑』つて図鑑を持ってきて、とあるページを開いて見せてくれた。

「この人だったかい？」

おばあちゃんが指差す写真に写ってるのは、胸当てに白い服と紺色のスカートを着て、肩の部分には大きな板のような防具？ をつけている黒髪の女の人。

同じページには『第一航空戦隊』と書かれた文字の下に、赤いスカートの同じような姿の人と、大きな弓を持って海の上を走っている姿の写真ものっていた。

ちなみにこの姿はしんかいせいかんをやつつける為の戦装束というらしい。

着ている服や髪の長さ、微妙な雰囲気みたいなのは違ったけれども、確かに今日あった人とよく似ていた。

「この人はばあちゃんのお母さんと一緒に、正規空母って呼ばれる艦種の人だね。やっぱりお父さんの血筋ねえ」

なんでも同じ種類の艦娘でも、親や生活環境で微妙に体つきや顔つきは変わるらしい。

あと、同じ種類の艦娘が近くに居ると、のうはきようしん？ とかいうのが起きて、頭が痛くなつちゃうからなるべく違う場所に住むように注意してるとか。

まあそんなに数が多くないからめつたに起きないらしいけど。

「ぼんはこの人を選ばれちゃったみたいだねえ……ふふふ、これから色々大変になりそうだねえ。まあ、ぼんの好きなようにするといいさね、どうしても困ったらばあちゃんにいいな」

正直もうすでに困ってるんだけど……。

でも、なんだかうれしそうな顔をしてるおばあちゃんを見てるとなにもいえなかった。

ちなみに僕はその夜、今日あった『加賀』という人に手を引かれて海の上を走る夢を見た。

めっちゃこわかった。



「え、まじで？ 提督適性持ってたのかよ、すっげーな」

次の日、学校の裏庭で校舎に住み着いている野良猫に牛乳を上げながら昨日あったことを友達に話すと、ものすごく驚いていた。

「提督適性を持つてるって、そんなにすごいことなの？」

「うちの兄ちゃんが詳しいんだけどさ、宝くじの一等に当たるほうがまだ現実味があるって言うってたぜ。ちなみに提督適性をもった人とその適性が合う艦娘が出会える確率は、世界一運の悪い刑事が別居中の妻の勤める商社のクリスマスパーティーに行つてテロリストに遭遇するくらいの確率なんだって」

「なんだかよくわからないとえだ、すごく低い確率とも思えるし、なぜか必ず起きることのようにも思える。」

「調べようが無いけど、俺もなんか提督適性持つてたりしてな」

「自分や機械とかじゃ調べることができないらしいからね」

「だよなー、調べたかったらとにかく艦娘に会いまくるしかないんだらうけど、俺らの学年で艦娘っていつたらあの子かしらないんだよなあ」

僕が同級生に艦娘なんて居たっけ、と首をかしげると友達はえーっと、と言いながら「あつ」といつて校舎の屋上を指差す。

「あの子だよあの子、確か『大鳳』って名前の艦娘だったはず。クラスは違うけど俺らと同じ学年だぜ」

友達が指す方を見ると、女の子が屋上の手すりを持ちながらじつと空を見つめていた。

うーん、普通の女の子と全然変わらない様に見えるんだけど、言われてみると加賀さんにとどこかになくもないような。

やっぱり似てないか、色んな所の大きさが。

「基本的に彼女たちはせんぞく？　の先生が直接指導する特別クラスだからなあ、よっぽど特別な理由がないと近づけないし、一回話しかけようとしたんだけどさ、なんていうかその子が艦娘だっけと思うとなんか足がすくんじやっつてさ、怖いとかじゃないんだけど話しかけられないんだよなあ」

「え、そうなの？」

意外だった、男になると叫びながら傘を持って二階から飛び降りた、怖いもの知らずの友達の言葉とは思えない。

「だって艦娘が居なかったら人間って滅びてたのかもしれないんだぜ？」

「それぐらいは知ってるけどさ……」

「なんつーか、そう思うとおそれおおいって気持ちかわいちゃうんだよなあ」

よくわからないけど、ふーん、と僕がうなずいてもう一回屋上を見ると、そこにはもう誰も居なかった。

僕がぼけつとそこを見つめてたら、牛乳を飲んでいた猫がもつともつとついていてるみたいに「にゃー」って鳴いた。



数日後、あの時の『加賀』という人が帰り道でガードレールに腰掛けて待っていた。

この前の服装とは違い、丈の短い紺色のワンピースに黒いハイソックスの姿だ、この前見た写真の姿と少し似ている気がする。

でもそんなことは関係ないので、僕はとっさに逃げようとしたけど

「あつ、お願い待って……」

と、あの時と同じようにとてもさびしそうな声で呼び止められてしまったので、またなんだか悪いような気になってしまい、ゆつくりと『加賀』という人のそばまで歩き、少し距離をとって止まった。

『加賀』という人は少しほっとしたようだったけれど、なにを言っているのかかわから無いように、うつむいてもじもじしている。

「あの……お姉さん僕になにかごようでしょうか……」

僕は正直早く帰ってトイレに行きたかったので、あまり気が乗らなかつたけど自分から話しかけた。

『加賀』という人は顔を上げてぱつとうれしそうな顔をし、話し出す。

「その、この前はごめんなさい。急にへんなことを言ってしまった。気分が高揚してしまったというか、その……あつ、私のことは加賀と呼んでくれていいのよ、できればその、お姉さんというのはなんだか他人行儀で好きになれないといえますか……」

『加賀』艦娘名で呼んで欲しいということは、つまりはそういうことなのだろうか。

「……加賀……さん。その、この前のことはもういいので、もう行ってもいいでしょうか」

あ、思わず加賀さんの名前を呼んでしまった。

というのも、彼女たち艦娘は同じ艦娘と提督適性者以外に、面と向かつて自分の艦娘名を呼ばれることがあまり好きではないらしい。

そして自分からそう呼ぶようお願いするのは、彼女たちが選んだ提督適性者だけだとか。

世間では彼女たちがそう呼ぶように願い、そして提督適性者が受け止めて、その名前を呼ぶこと。

それを『艦名の契り』とかすごい名前で呼ぶらしいんだけど……

正直、僕は早くトイレに行きたい。

「あの、ごめんなさい、正直なんて言ったらいいのかわから無いのだけど。貴方とお話したいの、本当に、今はただそれだけでもいいから。えつと、と、とても美味しいお菓子とか食べないかしら？ 直ぐ、直ぐそこにいいお店があるの」

僕は知っている、それはふしんしゃと呼ばれる人たちが必ず口にする言葉だつてことを。

胡散臭げに後ずさる僕を見て、加賀さんはとてもあわてた風になる。

「あつー……ごめんなさい待って、えつと、あの……。ううう、助けて赤城さん……」

そう言つて加賀さんは泣きそうな顔で自分の服をぎゅつと握り締める。

そんな加賀さんの姿を見て、僕はなんだか加賀さんが不器用なだけで、ただなんとかと仲良くできないか必死でがんばっているように見えた。

……そう考えると、加賀さんはそんなに悪い人じゃないのかもしれない。

「わかりました、いいですよ。少しだけ話すだけでしたら」

僕がそう言うのと彼女は驚いた顔をしたけど、その後とても綺麗な微笑を浮かべた。

その顔を見て僕は不覚にもどきりとしてしまう。

「じゃ、じゃあ乗って、直ぐそこだから」

そう慌てて車のドアを開けようとしたためか、彼女がひじからかけていたバッグがポトリと地面に落ちた。

そしてバッグの口が開き中身が飛び出す。

中から出て来たのは、僕が写っている沢山の写真。

遠くから撮られたような感じなので、多分隠し撮りという奴だ。

見ると加賀さんがすごく青い顔をしていた。

僕はそれを見て自分でも驚くような、さっきの加賀さんにも負けない、いい笑みを浮かべられたと思う。

そして僕は力いっぱい笛を吹いた。



あの後加賀さんはまた、クマーにヤーという掛け声と共に運ばれていった。

僕はなんだかどっと疲れてしまい、近くの公園のトイレで用を済ました。

そしてトイレから出て公園から見える景色を眺める。

海と港が見えて、その近くには沢山のビルが立ち並ぶ風景が見える。

ここは『艦夢守市（かんむすし）』

大きな港があり、その港と街の周りをぐるつと山に囲まれている、そんな立地の場所。都会とまではいかないけれど、それなりに騒がしくてそれなりに穏やかな大きさの街。

そしてこの街には一つの噂がある。

それは提督適性者が集まるといふ噂だ。

この街には居るかもしれない提督適性者たちと、その噂を聞いてやってきた割と多くの艦娘たちと、沢山の人たちが平和に暮らしている。

つまり、ここが僕の住んでいるところだ。

『無職男』と『駆逐艦：陽炎』

無職になってしまった。

上司にラリアットしたただけだというのに。

解せない。

……。

嘘だよ、解せるよ。

そんなのクビになるに決まってるじゃない。

なにをやってるんだよ、むしろシャバに居るだけでも奇跡だよ。

故郷を遠くはなれて、せつかくいいところに就職できたというのに、なんてこつたい。

最後は解雇扱いでなんとか穏便に取り計らってもらったものの、結果暇をもてあますことになってしまった俺は、河川敷の野球場が見えるベンチでぼけつと煙草を吸いながら自由な時間を謳歌していた。

昼下がりのよく晴れた秋空の下、野球場では練習にいそむ少女たちの姿。

時々聞こえてくる快音や、掛け声にはさわやかな熱気が溢れかえっていた。

若さってすてきやな、あの頃は当然のように結婚できて子供もいて、かわいい嫁さんのためにせっせと給料運んでくる働きアリの様な存在になれると思ってたのに。

多分時代が悪いんだろうなあ。

いかん、だめだ。

暇になると余計な事を考えてしまう、これはいけない。

しかし無為の思考はとめどなくわき出し溢れ、嫌な感情が鬱積するのを止められない。

そんな思考の毒沼に首までどっぷりつかり始めていたその時、目の前に野球のボールが転がってきた。

見ると野球をしていた少女たちがこちらを見ている。

よくもまああんな離れた所からこんな所まで飛ばせたものだ。

俺は携帯灰皿に吸い終わった煙草をねじ込むと、ボールを拾って手を振っているツインテールの少女に投げ返す。

そこそこ距離があつたので心配だったがボールは無事に少女のグローブに収まった。

少女はペコリと一礼して、綺麗なフォームで遠くの仲間にボールを投げる。

まだまだやれるな俺も。

そんな無意味な自信でも今はありがたい。

よつこらセックスと、自分でもどうかと思うが面白くてやめられない掛け声を出してベンチに座り、空を見上げる。

「まずは職探しだな」

そんな男の決意に差し込む影。

気配を感じて前を見ると、先ほどボールを投げ返したツインテールの少女がこちらをじつと見ていた。

年のころはよくわからない、ジュニアハイスクールくらいなんだろうか、勝気な瞳とスパッツからすらりと伸びる細い足が印象的である。

「なにか?」

近年は目を合わせただけで通報される世の中である。

心臓バクバクいってる、無職から犯罪者へのジョブチェンジはご遠慮願いたい。

「おにいさんこんな所でないしてるの?」

『無職男』と『駆逐艦：陽炎』

警戒、というより何故か純粹に興味からそう聞いている、そう感じられる言葉だった。だが、俺はだまされれない、隙があれば通報するつもりなんだ、俺は詳しいのだ。

「無職になったので人生を見つめなおしておりました」

でも言い訳が思いつかなかったのでとりあえず正直に答えてみた。

よく考えれば警戒している相手にさらに警戒を与えかねない情報だ。

まずいんじい。

「ふーん、へー、おにいさん無職なんだ」

そういつてニヤニヤしながら俺の座っている隣に腰を下ろす少女。

なんだ、このライトな感じ、近い。

彼女のやわらかそうな左右二房の髪がふわりとゆれ、僅かな汗と洗髪料の混じった甘い香が脳に直撃した。

さらに肩をぐいぐいとこちらに押し付けてくる絶妙の力加減。

これは癖になりそうだったが、犯罪者は勘弁なので、軽く押し返して言い放つ。

「なんででしょうか、無職がそんなに駄目でしょうかチクショウ」

「一般論でいえばいい年した男の人が無職なのは、いいこととはいえないと思うけど？」
言葉というのは時に刃物のレベルを超え、魚雷レベルまで進化するらしい、現にその言葉は俺の心の側面に突き刺さる。

あ、すみません、今バイタル（装甲）切らしてるんですよ。

爆発した。

損害大！ 損害大なり！ 浸水が止まりません！

退避————！ 退避だあああああああ！

いやだあ！ お、俺にはまだやりたいことが残ってるんだあ！

心情内の寸劇の結果、絶望にうなだれる俺。

少女があせつたように声を掛ける。

「あつ、ごめんごめん。なんとというかうれしくてついからかつちやっただいいうか、ごめんね？」

「……俺が無職ということのどこに、君を喜ばせる要素があったのだろうか」

「あーん！ そうじゃなくて、えっと。あつ、それよりもさ、おにいさん。君じゃなくてよければ『陽炎』って呼んでくれる？ 私の名前なの」

ぱたぱたと手を振りながら、必死に否定しつつも話の流れを変えるその見事な手法。コミユ力53万とお見受けします。

「かげろ…う？ えーつと、素適なお名前ですね、なんというか暗黒が付く大会に出てその炎使いの技名のようで」

……自分で割と失礼な事を言った気もするが、陽炎は心当たりが有ったのか「あはは、そういうや妹にもそんなこと言われたわね」と笑っていた。

「ていうか、しゃべり方がかったい！ 敬語じゃなくてタメ口でいいよ」
「それなら遠慮なく」

そもそも無職だからといって、年下の女学生に敬語で話す理由は無かったか。

「それより、おにいさんの名前教えてよ、ほら、自己紹介してやつ」

「え？ やだよ、名前押さえて不審者として通報する気だろ、コンチクショウ。無職がそんなに悪いか!! ……はい、悪いんです」

「えええ!! そんなことしないから！ てか自分でいって自分でダメージ受けないでよ。うーん、まあとりあえずは提督さんって呼ばしてもらおうわ」

えへへ、と、陽炎は何故か嬉そうに頬を掻きながら俺のことをそう呼んだ。
提督？

提督ってあれだろ、海軍を指揮したり大昔に世界を救った偉大な人らの呼称だっけ、なぜ俺がそのような呼称で呼ばれねばならない。

もしかしてあれか

さてはさっきの暗黒な大会の件を根に持つてらつしやるのだろうか？

「……無職を提督呼びとかもうそれ俺の事嫌いすぎないか？ 無職提督とかなにその不憫な感じ。ねえねえ、俺泣いていい？ 泣いていいか？」

「ええええ!!? そういう方向でもダメージ受けちゃうの!?! うわ無職って大変なんだね……」

軽くからかわれただけなのだろうか、なんにせよ地味に刺さるなその呼び名。

「へへへ、陽炎もいつかわかるさ。……いやわからない方がいいんだけどな、わかるのは無職になった時き。この世の全てが自分に対して冷たくしてるように感じられるこのっ、感じ!」

先ほどの決意を新たに、やっぱ職探しなきゃなと心に決める。

いつまでもこんなじゃりん子に、からかわれてはたまらん。

「まあ、陽炎は今の若さ溢れる時間を楽しんどけよ。青春時代は二度絶対来ないんだ、間

「違うからな」

そう諭すような、若い者からしたらうざいことこの上ないような俺のSEEKYOUを聞いた陽炎は「ああ、うん、まあ」と何故か気まずそうに目を逸らして頬を掻いていた。

なんやのん君

「でもさ、なんで辞めちゃったの？ 仕事」

「答えにくいことをさばさばと聞いてこられる」

「えへへ、長女ですから、悩みがあるなら言ってみなさい。おねえさんが相談に乗ってあげる」

また俺をからかおうというのか、だがそう言う陽炎の表情は、何故か本当に心配しているかのように優しいものだ。

「……別に、たいした話じゃない」

その優しさというか包容力に甘えてしまったのか、それとも心のどこかで聞いて欲しい部分があったのか、俺は仕事を辞める羽目になった状況をポツリポツリと語りだす。

珍しい話じゃない、色々セクハラがひどかった上司が居た。

そいつが取引を盾に一線を越えるようなことを取引先の女性にしよとしたので、色々手を回した上でラリアットして収めただけである。

結果はごらんの有様だが、まあ会社と取引先の被害は最小限だったかと思わないでもない、が、もっと上手くやれる方法も有ったかもしれない。

……いや、あるに決まってるだろ、なんだよその解決法。

でも思えばきつとガイアが囁いたのだろう、あの時はもうラリアットがしたくてしたくてしようがなかった、むしろ手段が目的になっていた。計画の着地点がそれになっていた。

きつとかつこいいだろうな、皆驚くだろうな、という想像にとり憑かれていて気がつけば上司のクビに綺麗に決まっていた。

……もしかして俺はアホなのか？（正解）

「なにそれ、提督さんにも悪くないじゃん。提督さんはその人を助けるためにやったんでしょ……」

いや、ラリアットは悪いだろ。

でもそんな俺の恥ずかしい過去を聞いて、怒ってる割に何故かぞつとするようにブツと爪をかみながらいう陽炎。

どこか若さ溢れる正義感とはちよつと違う？　なんだこの感じ、やだん、ちよつとやめなさいよ女子、爪かみながらブツブツとか怖いじゃない。

俺は陽炎の気持ちを静めるように、努めて平穏な声でため息を吐くように言葉を吐き

出す。

「そんなかつこいい話じゃないさ」

「？」

きよとんとしている陽炎に俺はごくごく自然に話を続ける、実際誇るようなことでもなく俺がそれをした恥ずかしい理由を。

「そんな大それたことをした理由は、ただの下心だよ。その取引先の女の子にいいところ見せたかっただけだ」

つまりはそういうわけで、別にやりたいことをやったからに過ぎないのだ。

「まあ……終わっただ後に既婚者だっただど知っただげだな……」（泣き顔覆い）

なお、結果は散々だった模様。

「つづ、あははははははは！ あは、あははははははははは!!」

陽炎は独白めいた俺のその言葉を聞いて、それはもう嬉しそうに大爆笑した。

殴つたろかコンチクショウ。

無然とする俺を見て陽炎は「ごめんごめん」と未だに笑いが収まらないように手を合わせながらあやまる。

「あのね、やっと会えた私の提督さんが実に好みの提督さんすぎて、もう色々おかしいくらいうれしくなっちゃったみたい」

「……わけがわからん」

やがて笑いが収まった陽炎は「よしっ！」と立ち上がって俺の手を掴み引つ張りながら走り出す。

突然の陽炎の行動と、その柔らかな手のぬくもりに驚いた俺は、抗う事もできずに引つ張られてしまう。

女の子に手を引かれて走るなんて、なんという青春の一ページなのだろうか。

まさかこの年でこんな経験をすることになるとは……

走りながらも悪戯な笑みを浮かべて、そんな驚く俺を見る陽炎と目が合う。

……やたらうれしそうな顔してるな。

「あのね提督さん！ 私やりたいことがどんなに難しいことでも、やれちゃう人ってとつても好き！ 提督さんが無職でもそんなの全然関係ないくらい！ ……まあ、さすがにラリアットはどうかと思うけど」

「いや、そう言ってもらえるのはありがたいが、てか陽炎いい加減その提督呼びやメロオ！ あと前を見ろお！ いや、それよかどこに連れて行く気だ！」

なにがおかしいのか、陽炎はとても楽しそうに笑いながら、さらに走る速度を上げる。

「ちよ、おま、速い、速いって！」

「あはははは！ 乙女の告白をスルーする提督さんのいうことなんて聞きませーん！」
「告白っておま！ そういうのは、せめて学校卒業してから」 言えっつてうおわあ！」

うお、てか力が強すぎだろこれ、何馬力だこれ!?

あと陽炎、お前はなぜ気まずそうにしているのだ？

「ほ、ほら、ちよようど審判がいなくて困ってたんだけ。バイト代払うから審判やってやって」

「ちよつとまておい、お前はいいかもしれないがあんなに女の子が居たら嫌がる子も……」
「へいきへいき！ みんな私の妹だから！」

え？ 野球二チーム分かれてできるくらいの数の姉妹が居るとか、お前の親どうなっ
てんだ!?

いや、もしかして腹違い？ 養子？ 下手に突つくと闇が這い出してきそうだなオ
イ。

そんな大きな疑問もあつたが、陽炎の勢いに押されて俺は審判をすることにした。

ちなみに他の少女たちは、何故かすごく驚いた様子で俺のを見ていた、なんだよ
チクショウ、やっぱり無職は駄目なのか。

「陽炎姉さん、その方は……」

「えへへ、いいでしょ。私の提督さん見つけちゃった!!」

そういつてマウンドに立っていた、やたら目つきの鋭い少女が俺を凝視する。

やだ、なにその戦艦クラスの眼光、怖い。

別にびびった訳じゃないが怖かったので、俺はとつとと審判の防具をつけて、キャッチャーミットを構える陽炎の後ろに立つ。

ちらりとこちらを見た陽炎はどこか、キラキラと光り輝いて見えた。多分気のせいだけだな。

あとバッターボックスに立つカピバラみたいな子が、ぽかんと大口を開けて俺を見てた。

こらこら、年頃の女の子がなんてツラしてやがる。

ピッチャーの方を見るように指差すと、慌てて前を向いたがどうにもこちらが気になるのか、チラチラとこつちを見ているな。

ほら陽炎、言わんこつちやない。

そんな様子でのおつかないピッチャーの球を打てるのだろうか。

まあ心配しててもしょうがないので「プレイボーイ!」と試合開始の合図の声を上げる俺。なんか一瞬世界が固まった気がしたけど多分気のせいだ。

少女たちの戦いが始まった。

防具をつけてる間もずっとこちらを凝視していた鋭い眼光のピッチャーが、ふんすと一呼吸入れて振りかぶる。

放たれたやたら気合の入った球は、少女とは思えない速さだ。てか速すぎだ、正直審判のポジションだとめちやくちや怖い。

へいへい審判ビビってるー！ ビビってるー！

そしてそのボールはズバン！ という快音と共に陽炎のキャッチャーミットに吸い込まれた。

微動だにしないバッターボックスのカピバラ少女。

俺はそれを見定め、高らかに宣言する。

「ストラーーーーイク！ ……ゾーンってどの辺なの？」

『ルールしらないのおおおおお！?』

秋晴れの空に、綺麗にハモった陽炎と少女たちのツツコミが響く。

許せ、俺の野球知識はあ○ち充の漫画しかないんだ。

『ホスト』と『戦艦：霧島』

ホスト、それは夜の住人、闇夜の時間を生きる者。

ホスト、その本質は飢えた狼、金と女性、そして名誉に飢える者。

ホスト、しかして彼らの仕事はきらめく世界で、夢を振りまく者。

『艦夢守市』その歓楽街にも彼らが住まう城があった。

ホストクラブ「YOKOSUKA」

今日も彼らは闇夜の時を駆け、飢えを満たし、そして夢を振りまくのだった……

「でも下つ端の仕事っていやあ、便所掃除くらいなんだよなあ」

某国民的RPGの七作目の主人公のような髪形をした金髪の男が、そう愚痴りながら便所ブラシを持って便器を磨いていた。

彼の名は、シヨウ（源氏名）

まだこのホストクラブに勤め始めて数ヶ月のペーパーだ。

一応採用された以上、そこそこの見た目と、それなりの酒耐性は有るのだが、彼には

ホストとして致命的な問題があった。

端的にいうとこの男、優しい馬鹿なのだ。

自分の手柄を人に譲る事に疑問を抱かず、重度に貢ぎそうになる女性は諫めたりする、飢えた狼の皮をかぶった羊さんなのである。

おまけにソフトKY（ちよつと空気読めない）が固定装備されていてはずせない。

どう考えてもホストには向いてない。

だがまあ、だからこそ別のホストの当て馬として重宝されていたり、また底抜けのポジティブを兼ね備えていたため、先輩たちに微妙に気に掛けてもらえたりして、まあいいかという感じで在籍を許されていた。

「今にみてるよみてるよー、超ビッグになつて俺は夜の帝王になつてやるぜ。というわけでもずはこの便器をなめれるくらい綺麗につと……」

「おいシヨウ!! いつまで便所掃除してんだ!! それはもういいから付いて来い、ちよつと行く所有るから運転手やれ」

奥から聞こえてきた重低音ボイス、声の主である店長（あだ名：大臣）にそう怒鳴られ、シヨウは「了解でウィツシュ！」と返事をしながら、駐車場に向かい車をホストクラブの前に着ける。

「お待たせいたしましたっすー！」

「ちんたらしやがって、首にされてえか!!」

「ぐふお!? ……あ、アザーツス!」

そう言つて後部座席のドアを開けたシヨウの腹を殴る店長、シヨウは殴られても指導してもらつたと思つてるので、体育会系のノリで感謝を叫ぶ。

ちなみに店長は恐い、ゴツイガタイに坊主頭にそりこみ、そしてサングラス。Eで始まるザイルの坊主の人にとてもよく似ていた。

「つたく、毎月毎月手渡しでもつてこいとか言いやがつてくそつたれ……」

そんな機嫌の悪そうにブツブツと文句を言う店長を乗せて、指示された場所まで運転するシヨウ。

やがて車は三十分ほどして目的地であるとあるビルの前に到着した。

そのビルはビジネス街の中にあるながら、どこか他のビルとは違う、重厚感のある雰囲気、なんというかシヨウとは逆の狼が羊の皮をかぶつて周りに溶け込もうとしているように感じられるビルだ。

「帰りはタクシー使うから、お前は店に戻つてろ」

そう言つて、とても重そうな黒い革のバッグを両手で大事そうに抱えてビルに入つていく店長。シヨウは一瞬店長がなにを持っていたのか気になつたが、二秒で忘れた。

そして店に戻ろうと車に乗り込もうとして、ビルの横に設置してある自動販売機に目

が留まる。

「あ、新作のジュース」

ホストとは常に流行に敏感でなければならぬ、トークのストックはホストの命綱。

そんな訳でシヨウは別に好きでもなかったがそのジュースを買おうとしたのだが

……

「くっそ、あと十円足りないっ！」

シヨウは貧乏だった、ぶっちやけ下つ端も下つ端であるシヨウは給料もすずめの涙。

勝者には限らない栄光を、弱者にはどこまでもつらい屈辱を、ホストの常である。

「あーちくしょう、どっかに落ちてないかなあ……」

地べたにはいずり、自動販売機の下を覗くシヨウ、だが無常、そこにはぺんぺん草しか生えてなかった。

「あの、どうかさされましたか？」

そんなシヨウに声をかける存在。

よく通る、芯が有り落ち着いたその声の主を見ようと顔を上げるシヨウ。

そして二人の眼があう、その瞬間。

ホスト・ミッツ・ガール

『ホスト』と『戦艦：霧島』

声の主は眼鏡をかけた、落ち着いたパンツスーツ姿の女性、短めの黒髪に意志が強そうでいて理知的な瞳、顔立ちには控えめに表現しても美人、そうとしか形容しようの無い女性だった。

まさに経理や秘書としてできる女性のイメージを体現したかのような、どこか近寄りがたい冷たさ漂う姿。

そんな女性にシヨウは、

「あ、すみません十円貸してくれませんか？」（返すとは言っていない）

基本装備のKYを無事発動させた。

「えっ？ あ、はい」

女性は少し驚いたが特に嫌なそぶりは見せず、むしろなぜか少しうれしそうに小銭入れから十円玉を取り出して渡す。

シヨウは十円玉を受け取ると、ピンツ、とカッコつけようと一回はじいて、無事地面に落とし慌てて拾って自動販売機に入れる。

そして目当てのジュースのボタンを押してガコン、と音を立てて来て来た『餡子チーズしめ鯖味 強炭酸』という名前のジュースの蓋を開け一気飲みするも、

「マズウウイー！」

見事に噴水のように天に向かって噴出した。

その様子を見ていた女性は一瞬驚くも、先ほどの冷たいイメージが嘘の様なやわらかい笑みで、クスクスと笑いながら持っていたハンカチでシヨウの顔を丁寧に拭く。

やがて拭き終わったハンカチをそのままポケットに戻す女性を見て、シヨウが礼を言う。

「悪いねおねえさん。あつ、そうだ。これ俺の名刺、ペーパーだから割引とかはできないけど指名してくれたら思いっきりサービスするから良かったら来てNE☆…：つてうわあああああ！ おい待って待って待って待ってください駐禁とっちゃだめええええ!!」

シヨウはビルの前に止めていた車に、駐禁を取ろうとしている監視員に向かって声をあげると慌てて車に乗り込み出発させた。

女性は少し驚いた顔で走り去っていく車が見えなくなるまで見送ると、シヨウからもらった名刺をいとおしそうに一撫でし、大事そうにバックにしまう。

「今日は驚くことばかりですね」

そしてそう一言つぶやくと、先ほどホストクラブの店長が入っていったビルに入って行った。



夜、今夜もホストたちの戦いが始まる。

ナンバーワンという名誉、そして金という力を求めて今日も彼らは女性たちを虜にすべくしのぎを削りあうのだ。

そして高級ホストクラブ「YOKOSUKA」の中央ホールにも狼たちが終結していた。

周りにはきらびやかなシャンデリアに赤い絨毯、高級感溢れる黒檀の壁、大理石のテーブル、そして黒革のソファア、まさに高級ホストクラブに相応しい内装である。

「さあ開店だ！ お前ら今日もバンバン貢がせろ！ 貢がせられんホストに生きる意味なんてねえぞお！」

『ウイーーーーーッス！』

店長の言葉に気合の入った返事を返すホスト軍団。

「特にシヨウ！ お前だお前、いい加減役立たずから卒業しやがれこの能無しが！」

「う、ウイッス！」

店長に名指しで怒られ気まずそうに返事をするシヨウに、周りのホストたちは同情の目を向ける。もはやシヨウの売り上げはそんなレベルだった。

何人かの先輩ホストに「がんばれよ」と小突かれるシヨウ、それぞれが持ち場に就き開店時刻と同時に店の看板に明かりがともった。

ホストクラブ「YOKOSUKA」の客入りは今日も上々で、開店と同時に結構な数の女性たちが各々のお目当てのホストを指名する。

そんな中ポツンと取り残されたホストが一人、もちろんシヨウである。

時々ヘルプや当て馬で出番はあるが、基本的にガンガンKY補正が発動してすべりまくるので出番は短い。

今日も指名ゼロで、晩飯はモヤシオンリー野菜炒めかなと彼が思った時、シヨウにホスト仲間の誰もが耳を疑う指示が入る。

「おいシヨウ、指名だぞ」

受付のボーイに言われてそこに行くのと、なんと今日シヨウに十円をくれた(貸した)女

性が一番高い席に座ってシヨウを待っていた。

なんたる僥倖、日ごろの地道な営業努力（と思ってるもの）が実ったとシヨウは気合を入れて新天地を指差す船長のようなポーズを決めて挨拶する。

「ご指名ありがとうございます！ マース！ シヨウデース！ 貴方のハートを掴む男の名前どうか覚えてくださいッス!!」

……なんかどっかで見たことのある挨拶だった。

多分普通の人ならこのホスト大丈夫だろうかと心配になる挨拶だ。

「っふ、ふっふ」

だがシヨウを指名した女性は、なにがそんなに面白かったのか、ツボにはまったようにクスクスと笑いが止まらない様子だ。

あるえ？ と何時ものお客と違う反応に戸惑いながら、シヨウは女性の隣に腰を下ろす。

「クスクス……ごめんなさい、貴方の挨拶が姉ととてもよく似ていたもので」

「あれ、マジで？ そりやまた面白い偶然もあるッスね」

「ええ、でもお陰でますます貴方に興味がわいたわ。あとしゃべり方は無理に畏まって頂かなくてもいいですよ」

そう言つて、女性ははずいといとシヨウに身を寄せる。

「サンキューおねえさん、あ、良かったら名前教えてもらえる☆」

「そうですね……『霧島』と呼んで下さるかしら」

「オツケー！ あ、じゃあ霧島ちゃんなんかお酒飲む？ なんでも注文しちやつてYO、できれば高いやつ」

いきなり図々しいシヨウのその言動に、霧島は少しも嫌な顔をせず、むしろうれしそうな

「じゃあとりあえず一番高いお酒頂けますか？」

と、初指名のホストに貢ぐとは思えないオーダーをした。

「え、大丈夫？ うちで一番高いやつっていったらその、別に安いのもいいんだよ……」

自分で言っておいていきなり心配してる、シヨウさんホスト向いてないっすよ。

だが、それを聞いて霧島は、

「大丈夫ですよ、私こう見えてお金持ちですから」

そう言つて微笑んだ。

その顔を見てシヨウは「んじゃ遠慮なく」と、いつか来る日のために練習しておいた取つて置ききの叫びを上げる。

「本日ご来店いただいたこちらのお嬢様ぬいいいいいい！ ロマネ・コンティ！ 頂

きましたー！ー！！」

ざわめく店内。

無理もない、シヨウがオーダーしたそれは三桁万円を超える超高級オーダーだ。

やがてきらびやかなカートに乗って運ばれてきた最高級酒を、シヨウは霧島と自分のグラスに注ぎ乾杯する。

二人でお酒を飲む（シヨウは一気飲み）その光景、傍から見ても霧島はとても幸せなものに感じているような至福の表情だ。

シヨウはそんな霧島を見つめながら飛び切り（と思ってる）のトークを繰り出す。

「そうそう、霧島チャン聞いてよ。俺すごいこと発見したんだけどエレベーター乗ってワイヤーが切れても、地面に着く直前にジャンプすれば助かるんじゃないか？」

そんなシヨウの微妙なトークを聞いていても、霧島の様子は変化することはなく、むしろさらに幸せさの度合いを深めているように見えた。

が

「シヨウクーン！ 駄目だよこんなすてきなお嬢さんにそんな寒いトーク聞かせちゃあ」

太客の臭いに釣られてやってきた飢えた狼のトップ、店のナンバーワンホストがシヨウを押しつけ霧島の隣にドスンと座る。

「ちよー！ 先輩、霧島チャンは俺のっ?！」

「シヨウ、まあこつちこいよ」

シヨウは完全にルール違反であるその行為にさすがに声をあげるも、ナンバーワンホストの取り巻きの一人に引きずられて店の奥に消えて行った。

「えっ、あのー！ シヨウさんー！」

店の奥に連れて行かれたシヨウを追おうと、霧島が立ち上がるとしたが、ナンバーワンホストに手を捕まれ、座らされる。

「おねーさんすごいね、このお酒この店で一番高いんだよ！ もしかしておねえさんお姫様？ ふふふ、じゃあぼくがさらっちゃおうかな？」

ナンバーワンホストはすかさず、女を落とす最高のスマイルを浮かべながら口説きにかかった。

静かで押し弱そうな霧島をみて、イケイケ押し押しモードに切り替え接客を開始するナンバーワンホスト。

シヨウにはできない客を見てあらゆる接客スタイルに切り替えるその技は、まさにナンバーワンの黄金技。

だが、しかし。

霧島は隣でピーチクわめくそのホストになんどの感情も浮かべていない、能面のような

顔で振り向いた。

「えつと、きりしつ!？」

その表情を見て少し怯えたホストが、空気を和らげようと先ほどシヨウが言っていた名前を思い出し、言おうとしたその瞬間。

ガシャン!

と、霧島はその音が聞こえてくるよりも速い速度で、掴まれていた手を振り払い、そのホストの髪の毛を掴んで大理石のテーブルに叩きつける。そして目にも留まらぬ早業でアイスペール（氷の入れ物）に付随していたアイスピックを手に取ると、ホストの鼻先すれすれにドンツ! と突き刺した。

「……店長を呼びなさい」

目の前の美女から発せられたとは思えない低い声と、大理石を貫通するアイスピックを見て、誰もが絶句する。

霧島はホストをテーブルに押し付けたまま取り巻きのホストの一人に視線を向ける。その眼は先ほどシヨウに向けていた柔らかなものとは違い、あらゆる生物に死の恐怖を与えるかのような眼つきに変貌していた。

まるで背後にまるで仁王像が居るかのような凄まじい迫力。ピキイ! ピキイ!
と見ていた者は空気がはじける音が聞こえた気がした。（実際聞こえた）

額に青筋を立てながら恐ろしい表情をする霧島のその視線を受けて、取り巻きのホストは慌てて店長を呼びに行く。

「店長大変です！ なんかすごいおつかない客が店長呼べて!!」

「あああ!! お前らなにやっつてんだ！ 女一人も相手にできねえのかこの玉無しども!!」

そう言つて呼びにきたホストの腹を一発殴り、霧島の席に向かう店長。

そして席を見つけ、「あの女か」とそこに座る霧島にドスを聞かせた声をかける。

「なにかトラブルでも？ おじようさ……」

店長は寿命が九割くらい消えたと思った。

そこに居るのはあの『霧島』だった。

『金剛連合会』

終戦の混乱期に仲間や争いを好まない人たちを守るために立ち上げられ、やがて強大な力を持つようになった四つの組からなるこの国最強の民間治安維持組織（任侠道組織）

現在では企業連合体として表の看板を掲げているが、その筋の人間には今でも裏の下

記の名称の方が有名である

『金剛組』『比叡組』『榛名組』『霧島組』

『霧島組』は、かつて金剛型の戦艦として戦った艦娘、『霧島』が長を務める組である
終戦後に発生したあらゆる戦闘の急先鋒として戦い続けた『霧島組』

現在に至るまでその闘争の血脈を残すこの組は、平和になった現代においてもなお、
金剛連合会の武力を象徴する超武闘派組織である

そして組のトップは常に『霧島』が継承し、今代の『霧島』も無論その名を次ぐに相
応しい艦娘と評価されている

※伊八書房『世界のアンダーグラウンド組織』より

金剛連合会最強の武闘派組織『霧島組』の組長の艦娘。

それがいま、目の前にいる彼女の持つ肩書きであり、正体。

そしてこのホストクラブはその霧島組の運営する店でもあった。

もちろん店長は知っている、なぜならまさに今日、自分や他のグループの責任者が上
納した売上金を数える会計士たち、その様子を冷たい顔で見ていた張本人こそが目の前

にいる彼女なのだから。

店長はその様子を真近で震えながら見ていた。

だつて彼女の周りには頭蓋骨をトロフィーにするエイリアンとでも渡り合うコマンドーと、ボクシングの世界王者だつたりヘリを弓矢で落としたりやうようなのを足して二で掛けたような強面の組員たちがごろごろ居たし、なによりもそんな組員たちですら、おびえたチワワのように恐ろしいまでの緊張感を持つて霧島と接していいからだ。

そしてその霧島組長が、今、目の、前に……

「あ、あのあのあのあの、く、組長さん、あの、う、うちのものがなにか……」

見てるのがかわいそうなほど真つ青になり、汗をだらだらかいて震える店長がなんとか声を絞り出す。

もはや彼にEで始まるザイルの人の面影は無く、とんちを取り上げた一休さんレベルの坊主にまでスケールダウンしていた。

「私がおね、楽しい時間を過ごしてたのに、この人がその時間を奪ったの。ごめんなさいね、ほんと、素人さんに手を出すなんてどうかしてると自分でも思うわ。でも止められなかったの、どうしてかしら？ どうして、どうして、どうしてかしら？ でも奪われた、そう、奪われてしまったの。奪われたなら取り返さなければなりませんね、ええ、ほんと。うん、取り返さなきゃ」

ギシリ、という音と共に、押しさえつけられたホストがつぶれたかえるのような悲鳴を上げる。

大理石のテーブルがきしむほどの力をホストを押しさえる手に掛けながら、淡々とあつたことと自分の気持ちを述べる霧島。その恐ろしく冷たい声色に店長の残りライフがガリガリ削れて行く。

というか、すでにマイナスである、閻魔様からライフを借りてなんとか意識を保っている状態だ。

「ああ、これが提督を持つということなのかしら？ 私の計算どおりにならないなんて、ふふふ、おかしい、おかしいわ、うれしくてとてもおかしい。ふふふふ、ふふふふふふ」

サイコパスな感じのスイッチが入りかけている霧島を見て、もう周りの全員の腰が抜けそうになる、真正面から立ってる店長にいたっては小鹿のように足がプルプルしている。

「どうしたらいいと思いますか？」

「え、あ、あの……」

無感情な瞳と平坦な声の疑問の言葉を向けられ、色んな汗が噴出す店長、やめて、もう店長のライフはゼロよ。

なにも答えない店長から目を逸らし、ホストを押さえつけていた手を離す霧島。解放されたホストは「ひっ、ひい」と腰を抜かしながら後ずさった。

そして、そんなホストや店長など居ないかのように、霧島は片手で顔を覆いながら、ガンツ：ガンツ：と一定の間隔で、なにかを必死に耐えるように大理石の机を叩き続ける。

ガンツ…ガンツ…

一回叩くごとに、ピキリ、ピキリと大理石の机にヒビが入る。

一回叩くごとに、店長たちの精神もランナウェイする

ガンツ…ガンツ…

誰も霧島から目を逸らすことができない。

もはやホストクラブ内の空気は蝕の降臨を目の当たりにしてしまった、某傭兵団のそれだ。

ガンツ…ガンツ…ゴト……

そして、とてもとても静かに、勝手にたまごが割れるようにあつけなく机が二つに割れた。

霧島は所在の無くなった方の手も顔に当て、両手で顔を覆い隠す。

そしてほんの僅か、しかし永遠に感じられる間を置いて霧島は店長とホストたちに再び目を向けた。

「……シヨウさんと呼んで、このテーブルで二人にさせて下さい。それだけでいいの、あの方が働く店を■■■■にするのは気が乗らないから。私、難しいこと言ってますか？」

店長は救いの言葉にも聞こえるそれを聞いて首が取れそうな勢いでうなずき、指示を飛ばす。

「おらちんたらししてんじゃねー！ シヨウを呼んで来い！！ 後このテーブルも交換だ！ さっさとしやがれお願いしましゅうううう！！」

泣きながら指示を飛ばし、それに従って場を片付けて空気をもとに戻す店員と客たち。

今、彼らの心は一つになったのだ！（いい話風）

そんなこんなで片づけが終わり、シヨウを呼びにナンバーワンホストが店の裏手に行くとき、そこでシヨウは幸せそうな顔でカップめんを食べていた。

連れて行った先輩が悪いと思つて渡したらしく、シヨウはそれであっさりと許して霧

島のことは忘れちゃってたらしい。

泣きそうな顔で霧島のところに行くように言われたシヨウは、なんだったんだらうと首をかしげながら席に戻ってきた。

ほかのホストや客たちが一切自分と眼を合わせないその様子に、なにがどうなったのかさっぱりわからなかったシヨウだったが、三秒で忘れて霧島の隣に座りまたトークを開始する。

「ただいま霧島チャーン！　そういえばさ、エスカレーター逆走したらウォーキングマシーンとかいらなくね？」

霧島はさっきの様子が嘘のような雰囲気で、楽しく嬉しそうにその微妙なトークをずっと聞いていた。

この日以降、霧島組の組長である極道艦娘を太客に持った、伝説のホストとしてシヨウの名前はとどろくことになら……ない。

なぜならとても危険な記憶としてその場に居合わせた全員が、記憶を封印して口をつぐんだからである。

提督適性者と艦娘の関係に口を挟むな関わるな貶めるな、は、現代における一般常識の分類である。

ちなみに、その後も霧島は今の関係でその逢瀬を楽しみたかったのか、シヨウにはそ

のことを隠して、今でもしげしげとホストクラブに通い続けている。

余談だが、シヨウの給料はモヤシ炒めに卵入れても平気なくらいにはアップした。

『意識高い男』と『重巡：愛宕』

私はロリコン（児童性愛者）だ。

「児童性愛者は大人の女性を愛することができない哀れな人間」

そういう声を耳にしたことがある。

確かに私はその性癖の都合上、大人の女性を愛せないかもしれない。

だが、そもそも愛する必要もないのだということをおわかっていただきたい。

無論、世間一般で犯罪者もしくは予備軍として扱われている者たちとは違う。

触れない、話しかけない、恐がらせない。

一部で紳士と揶揄されてる存在に近い者である、あろうと心がけている。

そしてこの思いは当然心に秘め、一生彼女たちへの神聖信仰を守りながら清らかなまま生涯を終えるものだと決めていた。

あの瞬間までは。

私は知ってしまったのだ。

我らが守るべき、そして生涯を通して神聖視すべき存在である彼女たちと結ばれるた

だ一つの方法があることに。

そう、艦娘の駆逐艦と呼ばれる少女たちだ。

彼女たちはある一定の年齢でその姿をとどめ、生涯を終える。

なんたる奇跡、なんたる神秘か。

かつて人類を救いたもうた偉大な少女たちと添い遂げる可能性。

私はそれを熱望してやまない、例え適性という壁が立ちはだかるうとも、私は必ずや夢をかなえて見せよう。

人の夢と書いて夢い？

夢いからこそ惹かれるのだ、夢いからこそ恋焦がれるのだ。

だから私は、今日もその可能性に手を伸ばす……。

「前島くん、ランチに行かない？」

夢はあきらめない、諦めるのはいつだって自分なのだから。

「前島くん？ 聞こえてないのかなー、愛宕さんさびしいなー」

話せば長くなるが、個人的には『雪風』と呼ばれる駆逐艦の艦娘である少女が好みだ。

無論あくまで好みの話だ、彼女たちはみな等しく私の崇拜すべき存在である。

(一部駆逐艦とRJについては審議中)

「ばんぱかばん！ ばんぱかばんしちゃうよー！ ねー！ 前島くん！」

「……部長、パワハラは止めてください」

そう言いながら、私は後ろから絡み付いてきた女性を引き剥がす。

広い割には比較的冷房の効いたオフィスだが、こう引つ付かれては暑くて仕方が無い。

私は椅子に座ったまま体を回転させ、先ほどから周囲の目を気にせず、私の背中に絡み付いてきていた相手と向き合う。

まず目に飛び込んでくるのは、メロンほどのサイズでもあろうレベルの大きな脂肪の固まり。(焼肉用の牛脂を見てわく程度の感情)

そしてその上に視線を向けると、ふわりとした長い金色の髪に、ブルーの瞳を備えた西洋風の整った顔立ちをした女性の幸せそうな笑顔。

パツンパツンに張り詰めたオーダーメイドのスーツを身にまとう彼女は、私の部署のトップでもある部長。ついでに『愛宕』と呼ばれる重巡洋艦の艦娘だ。

ちなみに、ふわふわした見た目や言動とは裏腹に、かなり仕事ができる上に部下の面倒見もいい。

おまけに一般的な価値観で見ればかなりの美人。正直上司としてだけ見れば素晴らしい存在だと思うが、個人的な女性の好みでいえば熟練観測手でも観測できないレベルの着弾位置である。

最低でももう三周りあらゆるサイズを落として欲しい、せめてそれから話しかけて欲しい。

後、極めて不要な情報だとは思うのだが。

「もう前島くんったら、愛宕と呼んでいつも言ってるじゃない」

艦娘である部長が、自らの艦娘名を呼ぶよう願うということ。

つまり私は重巡洋艦の、少なくとも『愛宕』の適性があるようなのだ……

『意識高いロリコン』と『重巡：愛宕』

まるでアンパン職人になりたい人間に、殺しのライセンスを与えるかのような冒瀆。なぜ神は駆逐艦ではなく重巡洋艦の適性を私に与えたもうた。

「部長、何度も申し上げておりますが仕事での公私を分ける為にも、そして私たちがなんら特に特別な関係ではないと周囲に誤解を与えないためにも、その名前でお呼びするのはお断りさせていただきます」

「ぶーぶー、私だってちゃんと分けてますよー、ほんとだったら『提督』って呼びたいのを我慢してるんですよ?」

できれば我慢のレベルを引き上げて一生我慢していただきたい。

「まあそれは今はまだいいわ、それよりほら、ランチに行きましょう。とつても美味しいランチを出すお店を見つけたんだけど、前島君とならもつとおいしく食べられると思うの、ね?」

私の手をいとおしそうに取り、両手で包み込むように握り締める動作。まるで花畑のような空間を形成しかねない部長のその甘い言葉と仕草に、こちらを見ていた仕事仲間たちの悩ましげなため息が聞こえてくる。

だが私には特になんの感情も抱かない不要なものなので、正直一山いくらで買い取って欲しい、むしろこちらが料金を支払おう。

「申し訳ありません部長、私は昼は用事(ランチ)が有るので無理です。失礼します」

部下が上司からの食事の誘いを断るのかと思われるかもしれないが、私は断固として自分の自由な時間を尊重させていただく。

誰と食べるかで料理の味は変わるといふ主張もわかるが、私はどんな料理も駆逐艦と食べるべきだと思ふ。いや、むしろ料理とかいいから駆逐艦といたい。

「ちよ、ちよつとおー」

私は追いすがる部長を努めて冷静に撒いた上で、何時も食事を摂る店に向かった。



我々ロリコンが駆逐艦の艦娘という神秘に向き合う上で、どうしても避けて通れない話がある。

彼女たちは見た目はそのままではあるが、年は取る、そうなるとう然精神は老衰していくということだ。

端的にいうと、ロリババアと呼ばれるものを認めるか否か、である。

私の結論を述べさせていただくならば、艦娘にいたってはYESである。

というのも……

「お待たせしました！ ご注文のミネラルウォーターとミートソースパスタ、ミートソース抜きになります！」

そんな元気な掛け声とともにパスタを運んでくる少女、彼女は駆逐艦の『リベツチオ』

と呼ばれる艦娘である。

小麦色に焼けた張りのある肌、抱きしめたい小さく華奢な体、あまりの美しさに表現する言葉が存在しない脇、常夏を思わせる大きな瞳にはじける笑顔、極めつけは黄金比率のラビット・スタイルツインテール。

楽園はあつたよ父さん。

ちなみに彼女は私が愛用しているイタリア料理店の店主で、御年七十歳。

しかし何時来ても彼女はあのように明るい笑顔と、あどけない仕草で接客し、来店した誰もを癒している。

無論染み付いた演技、と思う諸氏もおられるかもしれないが、私はあれが完全な演技だとは思えない。

そしてあらゆる方面から考察を重ねた結果、私は一つの結論に至った。

つまり『精神』は『肉体』に引きずられ影響を受ける。

人間誰しも自分の老いや見た目の変化を自覚し、それにあつた振る舞いをしようと思がける。

結果、精神や性格が老衰という過程を経るのであれば、一生若々しい見た目である彼

女たちはそのままの精神と性格であり続けるのではないか。

無論差異はあろう、人生の経験によつて人の精神構造は形成される、若くしてつらい経験を多くしたものは精神が老成するということも聞く。

だがそれら是对応力が付いたというだけで、精神や性格の老衰であるとはいえないのではないだろうか？

長々と説明をしたが、つまり私の中ではいくら年齢を重ねようと、彼女らは私の信仰の対象から外れ得ないということである。

うぬ、今日もリベッチオさんが作るミートソース抜きミートソースパスタは絶品だ。

「ご馳走様ですりベッチオさん、今日も美味しかったです」

名残惜しいが何時までも席を占領していると、店というよりリベッチオさんに迷惑がかかつてしまう。

ちなみに私は提督適性者なので、彼女を艦娘での名前で呼んでも怒られることはない。

『愛宕』の適性など必要ないと思っていたが、これだけは神に感謝してもいい。

「あはは、なんだかいつもすみません。その、何度も聞きますがほんとによろしいんですか？ 料金を割引いてもいいのですけど……」

申し訳なさそうに上目遣いに私を見るリベッチオさん。

そうだ、その瞳で見つめられるだけで私は、この先夢を掴むため一生戦える。

ちなみにミートソースを抜いているのは単純にカロリー計算のためである、一石二鳥だ。

「いえ、こんなすばらしいお店でお食事をさせてもらってるのですから、当然かと。むしろ手間をおかけしてる分追加でお支払いしたいくらいですよ」

そう言つて私は毎日練習を欠かさない、自分にできる最も優しい微笑を浮かべた。

残念なことだが私の見た目は怖い、眼鏡をかけてなんとかがまかしてはいるが、幼馴染と組織のために二丁拳銃を使い裏切り者を肅清するマフィアや、とある英国機関に所属する執事、彼らの最盛期のようにだといわれることがある。

なので、私が用いる最大限の優しい笑みを浮かべるのは、私に課せられた使命のようなものだ。

「えへへ、いい笑顔ありがとね。またよろしく!」

「ええ、また来させていただきます」

守らなければならぬ、この日常は、なにに変えても……。

「ぶーぶー、なにその表情。普段は表情を一切変えないのに、どうしてそんな優しい笑みを浮かべてるのかなー、愛宕さんそんな笑顔向けられたことないぞー」

本当の厄ネタというのは、人の都合など関係無しにいつも唐突に襲ってくる。

背中にのしかかる感じなれてしまった重さ、そして声。

ゆつくりと首だけ振り向くと、そこには部長の顔が真近にあった。

ひどく不機嫌そうにじと目になりながら、頬を膨らませている。

「……部長、お店の邪魔になるのでとりあえず離れてください」

努めて冷静に振舞ってはいるが、私の内心は過去例を見ないほど荒れている。

ここで選択を誤って、私がロリコンとばれてしまえば、もう二度とこの店に来ることができなくなってしまうだろう。

つまり今後一生リベッチオさんの料理を味わえなくなってしまう。

いつそ幸せな思い出を胸に秘めて、今後はここには来ないべきだろうか？

否、断じて否。

どんなにすばらしい経験も、その幸福感の詳細までは記憶できない。

つまり過去に経験した最高の幸せな思い出に浸るより、新たに最高の幸せを見つける方が遥かに魅力的だ。

そう、過去の幸せな思い出が、今日の前にある幸せより素晴らしい訳がないのだから。

「とりあえず外に出ましよう、リベッチオさん、ご馳走様でした」

あはは、またねー。と軽く手を振るリベッチオさんに見送られて私と部長は店の外に出る。

「ところでなぜ部長はあの店に？」

先制攻撃の軽い牽制、確かに私は完全に部長を撒いたと思っていたが、私に落ち度があつたのだろうか。

「前島君とランチに行く予定だったお店に一人で行ったら前島君がいたの、不思議よねー」

ふぬ、なるほど、つまりは偶然だったというわけか。

知っているだろうか？ 厄ネタの偶然が引き起こす結末は二つしかない、『不幸』か『不幸中の幸い』かだ。

つまり私は不運とタンゴを踊ってしまったというわけだな、しね。

「私の方は用事を済ませてから、たまたまあの店を見つけてましてね、昼食をとっていたのですよ」

このひたすら不要な会話を行っている最大の目的は、今後部長があの店に入り浸る可能性の排除である。

つまり、たまたまあの店に行ったということにすれば部長の私への心証はさておき、その最悪を回避できると私は見ていた。

楽園は汚してはならないのだ。

「ふーん、たまたま入ったお店で、何時も同じメニューを頼んでいて、おまけに〃名前を知ってるリベツチオさん〃にあんな素適な笑顔を見せるなんて、不思議だね？」

「……」

「ひどいなー、愛宕さん傷ついちゃったなー。これはもうダイナーを一緒にしてくれないと立ち直れないかもしれないなー」

部長が言わんとしていることは分かる、だが、しかし。

私のロリコンが原因で貴方を傷つけてしまったのなら……それは別にロリコンじゃなくても傷つけているだろうから、ダイナーはあきらめて可及的速やかに隕石とか落ちてきて私のことを忘れてどこかに行ってくれないだろうかと思わずにはいられない。

無論この心情を吐露すれば、色々終わってしまうのは私にだって分かる。

さて、どうすべきかと必死に頭を回転させていたところで、私の視界がとある幼女を捉える。

常に無意識に広範囲にわたってその姿を探している私の視界に、幼女が捉えられるのはそう珍しいことではない。

だが問題は、道路を挟んで建っている立体駐車場の六階、申し訳程度に立てられた簡素な鉄柵の隙間から、まさに幼女が落ちてしまいそうだということだ。

「……」

「ぱんぱかぱーん、前島くーん？　おーい……っ!?」

刹那の硬直をはじいて動けるもの、そこに凡と非凡の違いがある。

気が付けば私は無意識に駆けていた、そして道路を走る車を最小限の動作でよけ、最短で立体駐車場の下にたどり着く。

非常階段を上る時間が惜しい、階段の手すりを取っ掛かりに駆け登る。

急げ、急げ、急げ

今にでも幼女が落ちてしまいそうではないか。

私は三階程度まで駆け上がったところで、サラリーマンの基本装備品であるフックと、ワイヤーを組み合わせる。(通りすがりのサラリーマンの必須装備)

そして投擲し、フックを幼女と私の間くらいにある場所にひっかけた。

正直固定先の強度とフックの固定具合を確かめたかったがそんな余裕はない。状況に気が付いた周囲の人間たちが悲鳴を上げる。

その声に反応した幼女が……落ちた。

タイミングはギリギリだ、だが私にためらいはない。

私は私の信仰に従って、成すべきことを、為す。

飛び降りた私は重力と、ワイヤーの力を使い振り子のような動線を描いて少女の元に肉薄した。

片手はワイヤーを利用してぶら下がり、もう片方の手で少女を受け止める。

成功だ、見守っていた者たちの歓声が聞こえる。

だがしかし、やはり、といったところか。

私と少女の重量を支えきれず固定先が崩れる。

高さとしては二階程度、私はワイヤーを切り離し両手で少女を守るようにして抱きしめて背中を地面に向け落下の衝撃に備える。

可能な限り落下の衝撃を自らの体で吸収しなければならぬ。

私の手には守らねばならぬ小さなぬくもりがあるのだから。

そして強い衝撃が背中と、少女を抱えた腹側に走った。

私の中のあらゆる空気が排出され、一気に呼吸ができなくなる。

だが……耐えられる。

いつか来る、駆逐艦たちとの出会い。

姉妹が多い彼女たちにさびしい思いをさせないためには、彼女たち全員の愛を受け止められねば信仰にかかわる。

特に陽炎型と呼ばれる二十人近い駆逐艦たちに迫られたとき、彼女ら全員を受け止め、抱きかかえられるよう想定して、耐えられるよう体を鍛え続けた私の体ならば、この程度の衝撃など数分もあれば回復可能だ。

朦朧とする意識の中、私は胸の中の幼女を見る。

触れてしまつてすまない、怖がらせてしまつてすまないと心の中で謝りながら。

幼女はなにか起こつたのかわからなくてきよとんととしていたが、やがてなにか怖いことが起きてしまつたと理解し、泣き出してしまつた。

私は慰めるための声も出せない自分のふがいなさを恥じる。

そして、時を同じくして起きた不幸な事故

余所見でもしていたのか、私たちの直上の位置にある七階程の場所、バックしすぎた車が鉄柵にぶつかるのが見えた。

手抜き工事でもしていたのか、鉄柵を支えている根元の基礎はあっさりと崩れて、上から鉄柵やコンクリートが落下してくる。

それらを見ながら、不幸の続く自らの運の無さを呪つた。

厄ネタはこちらのお構い無しに、連続でやってくるのだな、と私はやたら冷えて冴え

ていく頭で漠然とそのようなことを思う。

まったく、どうせなら幸運の女神のキスが欲しいな、本当に。

自嘲気味な笑みを浮かべながら、まともに動かない体に鞭をうち、今動かずに何時動かすのだと自らを奮い立たせて少女に覆いかぶさる。

泣きやまない少女、彼女を安心させるように、私はせめてもと思い飛び切りの微笑を浮かべた。

「…………大丈夫、怖く、ない…ですよ」

私は上手く笑えただろうか？

願わくばどうかこの少女がこの恐ろしい事故を忘れて、今後健やかに成長できることを、祈…………

「はあああああああああああああ
!!!!!!」

私が最後の祈りを捧げようとした瞬間、凄まじい大喝破が響く。

そして上空で私たちに向かって落下してきた鉄柵やコンクリートが、風きり音と衝撃音を撒き散らしながら飛んできた。『街路樹』に衝突しそれらを巻き込んで遥か向こうの無人地帯に墜落した。

私は、いや、周りにいた誰もがなにが起きたのか、どうしてそれが起こりえたのかわからなかった。

視線を街路樹が飛んできた方向に向けると、そこには投擲後の姿勢で、肩で息をしながらかこちらを見つめる『愛宕』の姿が見えた。



あの後、私たちは会社を早退する旨を連絡し、色々な事故処理を終わらせた。

幸い私も幼女もほぼ無傷だったため、比較的早くにそれらは終わったのだが、それでも終わった時には夕方になってしまっていた。

私などはともかくとして、幼女を危険にさらした保護者や柵にぶつかった車の運転手、そして手抜き工事者に裁きを下さねばとは思いますが、それは司法にゆだねることにした。

ちなみ、現在私は夕焼けに染まる住宅街を部長を背負って歩いている。

というのも、部長が言うには、

なけなしの燃料を使い、出力を引つ張り出した反動でほとんど動けなくなつてしまつた。

ということらしかったからだ。

艦娘の生態に關してはいろいろと秘匿されていたりする部分もあるため、まあそういうことも有るのかと納得はした、が。

なぜだか動けない自分を背負つて家までつれて帰つてくれ、という部長のわがままに付き合つてるのか、それについては私も答えが出せないでいる。

真つ先にタクシーを使えばいいのでは？ と思つた。

すれ違ふ買い物帰りの主婦、帰宅途中の労働者たちの視線が悩ましい。

あと背中に当たる脂肪の塊がぐにやぐにやして背負いにくい。

(背中にグミを押し当てられた程度の感情)

まあ、命の恩人にお願ひされたとなれば多少のことはかなえねばならない。

「あははー、ごめんなさいね。重くない？」

「いえ、成人女性平均より少し上程度ですので平気ですよ」

ほかり、と頭を叩かれた、解せない。

そして部長は甘えるように、私の首に回していた腕に力をこめる。

もしかしたら思ったより現在の状況を心苦しく思っているのかもしれない、そう判断した私は部長の罪悪感を消すために声をかける。

「気になさらなくても部長は命の恩人ですから、私にできることなら……可能な限りさせていただけますよ」

自分で言っつてしまい少し後悔した、とんでもない要求をされてしまったらどうしようか。

そんな私の内心を知ってか知らずか、部長は思考の為なのか僅かに間を置いて

「じゃあ、今日のこと……褒めてくれる？」

どこか照れくさそうに、小さな声でそうこぼす。

割と色々覚悟していたのだが、思ったよりも安い願いだ。

それに命の恩人の願いだ、まあ、それくらいなら叶えねばならないだろう。

「よくがんばりましたね愛宕、えらいですよ」

サービスで艦娘名で呼んであげた。

それを聞いて部長はさらに腕に力を込めて、私の首裏に顔をこすり付ける。

「……提督もすごかったわ」

表情は窺えないが、伝わってくる体温が高いような気がしたので照れているのかもしれない。

「えへへへ」

自宅に着くまで、部長はずっとそんな感じだった。



「ここですか？」

とある高級マンションの部屋の前、ようやく到着した私はいまだ降りようとしなが部長に確認を取る。

「ええ、インターホンを鳴らすわ。ルームメイトが開けてくれるはずだから」

そう言って彼女は背負われた状態のまま、手を伸ばしてインターホンのボタンを押す。

しばらくして「はい」と応じる反応が返ってきて、部長が「わたしー」と間延びした返事をした。

しばらくしてドアが開く。

でてきたのは肩まである長さの黒髪の品のよさそうな、部屋着姿の女性、美人ではあるが残念なことに色んな所のサイズが部長と似ていると思われる。

当然だが熟練観測手が「着弾確認できません！」と心の中で声を上げた。

「あははー、ごめんね高雄。ちよつと力使っちゃって動けなくなっちゃった。悪いけど……」

そこで、私と部長は『高雄』と呼ばれた女性の様子がおかしいことに気が付く。彼女はまるで雷にでも打たれたかのような状態で固まっていた。

……部長との出合いを思い出す、正直、またしても厄ネタのにおいしかしい。警報が私の中でこだまする、逃げろ、今日一番の厄ネタが来るぞ、と。

そんな警報もむなしく、彼女はやたら興奮した様子で自己紹介を始める。

「こ、こんには。高雄です。貴方のような素敵な提督で良かったわ！」
いいえ、ケファイアです。

高雄と呼ばれた女性はそんな私の心中を無視し、自己紹介を終えた後、急に私に抱きつき、動けない私の唇を奪った。

背中で部長が悲鳴を上げる。

悲鳴を上げたいはこつちです。

しばしの抱擁と口付けのあと、解放された私は、努めて冷静な声で

「失礼」

そういつて部長を『高雄』と呼ばれた女性に押し付けて、部屋に土足で上がり、トイレと思われる場所に向かい入る。

後ろでは部長が珍しく怒声を上げていたが、今は関係ない。

扉を閉めて鍵をかけた私は、胃の中のもの全て便器にぶちまけた。

いつか素敵な駆逐艦と出会えた時のためにとっておいた、大事ななにかが、失われてしまった。

玄関の方から修羅場の様子をかもし出し始めた言い争いの声が届く、正直一ミリも興味が無い。

喪失感にさいなまれながら薄れゆく意識の中、私はいまや相棒となってしまうた便器を抱きしめながら、

どんなに辛い試練でも乗り越えて見せる。

そして駆逐艦と結ばれる、私はあきらめない。

そう誓いを新たにしました。

『弟』と『軽巡：由良』

姉、という存在が居る。

意地悪なお姉ちゃん、甘えんぼのお姉ちゃん、面倒見のいいおねえちゃん、優しいお姉ちゃん。

そりやもう世界には姉の数だけ姉の形がある、といつても過言ではないだろう。

ちなみに姉を持つ友達に聞くとほとんどが

「正直そんなにいいもんじゃないぞ」

と、どこか渋い顔で言う。

なんとというか、渋い顔としか表現できない。

ちなみに僕にも姉が三人いるが、確かに、姉がうらやましいと言われれば似たような顔をしてしまうかもしれない。

だが僕の場合少し意味合いが違う、なぜかというところとも僕の姉は少し変わってるのだ。

というのも……

「そろそろお風呂に入ろうかしら、ねえ、背中流してくれる？」

「由良姉さん、さすがにもう一人で入ってください」

「よーっし、次は長距離だね、訓練あるのみ！」

「鬼怒姉さん、僕は行かないので引つ張るのやめて」

「ちよつとお、前髪のセット手伝ってよお〜」

「阿武隈姉さん、いい加減一人でセットできるようになりなよ」

……笑えよ。

そうさ、全員艦娘だよ。

ちなみに三人がどんな艦娘か、軽く紹介しておくよ。

『由良』

とても長い銀色の髪をした軽巡洋艦の艦娘。

垂れ目でとても優しげな声、すらりとした体でとってもいい香がする。

しつかりものでとっても優しい姉さんの中の姉さん。

あと美人。

『鬼怒』

はねた赤毛が特徴的な軽巡洋艦の艦娘。

生命力に溢れてた瞳、いつも元気一杯でどこかおつちよこちよいで、でも実はけつこ
うかわいいものを集めるのが趣味。

一緒に居てとっても楽しく元気をくれる姉さん。

あと美人。

『阿武隈』

セーラー戦士みたいな髪型で、オレンジ色をした綺麗な髪の軽巡洋艦の艦娘。

自信が無さそうな垂れ目で、前髪をいつつもいじってるけど、やる時はやるんだから。
一緒にいろんなことに挑戦する相棒みたいな姉さん。

あと美人。

わーい、三人ともとっても素敵な姉さんだー（棒）

そして四人姉弟の末っ子長男が僕……だ。

僕が生まれたときそれはもう両親は喜んだ、なんせ三人が艦娘だったのだ、確率でい

えば九蓮宝燈の天和を三回連続で当てるレベルだ。

ようやく産まれた普通の人間の僕を両親はたいそうかわいがってくれた。

だが、三人の姉たちはその両親を遥かに上回る執着を僕に見せた。

というのも、

「ねえ提督、そんなこと言わずに一緒に入ってね、ね」

由良姉さん。

「早く走りに行こうよ！ 提督！」

鬼怒姉さん。

「提督早く前髪なおしてよお」

阿武隈姉さん。

……笑えよ。

そうさ、僕は三姉妹の適性全部を持って生まれてしまったのだ。

まあそんなわけで、なんというか。

僕がこの三人の姉とどういう気持ちで育ってきたか。それを全て説明するのは正直

難しい、現在進行形でも色々あるし。

だが両親の気持ちはガツツリ決まったりする、いわく

母「あんたが三人の誰かと結婚してくれば結婚式は楽だし、嫁姑の関係も気楽だし最高さね」

父「別に在学中に孫作つてもええんやで？　むしろ作るべきだと思わんかね？」

それでいいのか父よ母よ。

(父母は天空のに出てくる空賊の頭とグラサンの大佐に似ている)

いや、いいんだろうけどさ。

『そういう存在』として生まれてくる艦娘には近親交配の概念も無いし、戸籍だって人間ではなく艦娘としての戸籍を与えられるので法律的にも問題はない。

つまり社会的にも倫理的にもオツケーなんだろうけどさ。

「鬼怒、阿武隈、私は提督とお風呂に入ってくるからどこかに行つてなさい」

「由良姉さん、阿武隈、鬼怒は提督と訓練があるから二人は後だね!!」

「由良姉さん、鬼怒姉さん、私の前髪より大事な用事なんてな、無いと思うけど」

『……』

無言でにらみ合う三人、正直この三人が喧嘩を始めたら普通の人間ではどうしようもない、下手したら家が壊れかねない。

普段はとても仲のいい三人だが、偶にこうやって僕を取り合って対立することがある。

ちなみに今日も学校でこんなことがあつて。

エスカレーター式である僕の学校には、それはもう沢山の生徒が居るんだけど、そんな学校でも艦娘の生徒というのは多くない。

そんな学校で艦娘の姉を三人も持つということがどういふことかわかるだろうか、いや、持つだけならいいのだ、持つだけなら。

だが三人の提督適性者となつてしまった僕の日常は……

「ねえ提督、今日のは自信作、お茶、煎れますね。ね♪」

「由良姉さん、お弁当持ってきてくれるのはいいんだけど膝に座るのやめて」

「おう〜い！ ていとく〜！ なに食べよつか！」

「鬼怒姉さん、後ろから絡みつくのやめて」

「わかつたわ！ あたしの力が必要なのね！」

「阿武隈姉さん、一人で食べられるから、食べれるからアーンしようとするのやめて」

……笑えよ。

そうさ、昼休み、別クラスや下の学年だといふのにお構い無しにやってくる姉たちを囲んでランチの日々だ。

艦娘がどういうものか割と理解のあるこの学校で、彼女らの行為をとがめられるものは少ない。

そんな僕を見て友達に血の涙を流しながらうらやましいと言うけど、修羅場というのは色々大変だ、特に家族だと誰かを選んでさよならって訳には行かない、縁は一生続くのだから。

でもなんだかんだでみんなで姉弟仲良く過ごしてたんだ、あの時まで……

『弟』と『軽巡：由良』

家族でキャンプに出かけた時のことだ。

別に三人の誰かが悪いわけでもなく、三人の仲裁中に僕がへまをして怪我をしてしまったことがあった。

普段は絶対うろたえない由良姉さんは大泣きし、前向きで元気いっぱい鬼怒姉さんは青い顔で震え、阿武隈姉さんにいたっては「やっぱあたしじゃムリ……」と言いなから思いつめたような顔をしていた。

僕はなんとか三人を落ち着かせ、両親を呼んで色々がんばったが、さすがに限界だったのかばかりと倒れて救急車を呼ぶ羽目になった。

それからだ。

三人の仲はなんとというかどこか、よくわからないけど覚悟を共有する仲とでもいおうか、謎の決意を決めてしまったような感じになり。とりあえず三人は絶対僕の前では喧嘩をしなくなった。

そして僕と四人でいるとどうしても取り合いになることがおきそうになる、だから三人はなるべく僕には近づかなくなった。

正直その期間は僕もびつくりするくらいショックを受けて、姉さんたちと一緒に居られないのがこんなに寂しいものなのかと、衝撃的だった。

一緒に居たいのに居れない、話したいのに話せない。

そんなちぐはぐな、どこかかみ合わない僕らを見て両親は

母「女が簡単にあきらめるんじゃないよ！」

父「さん……二年間待ってやる！」

と言いながら一つの解決策を提示した。



「ふふふ、二人きりなんてほんと久しぶり」

夜、そう言っただけでベッドに並んで座っていた僕にパジャマ姿の由良姉さんがしなだれかかってくる。

どこか興奮したように紅潮する由良姉さん。こんなに密着すると首筋や髪からずごくいいにおいが強く感じられて理性が保てなくなってしまうそうだ。

「なんでこんなことに……」

両親はちぐはぐな関係が続ける僕らを見かねて、家の離れに僕の部屋を建ててしまった。

一応母屋と廊下で繋がってはいるけれども、風呂、トイレ、台所完備の完全にこの部屋だけで生活ができるレベルの部屋だ、てか家だ。

そして、この部屋に三姉妹が入る上で一つの決まりを作ったのだ。

『三姉妹がこの部屋に入れるのは、学校を卒業する前の二年間だけ。あと息子は用事が無ければ母屋に入っちゃ駄目』

僕と阿武隈姉さんは一つ（三月生まれと四月生まれの同学年）しか違わないけど、鬼怒姉さんとは二つ、由良姉さんは四つ違う。

・ 由良姉さん 二年後に卒業

・ 鬼怒姉さん 四年後に卒業

・ 阿武隈姉さん 六年後に卒業

つまり、今現在僕の部屋に入っているのは由良姉さんだけということになる。

ちなみに由良姉さんは僕の世話をするため、この部屋で寝泊りし、毎日通う気満々である。

どう考えても通い妻です、本当にありがとうございますでした。

……いや、解決策にすらなっていないし、おまけに力業じゃないか！

あとなに、なんで僕母屋に入っちゃ駄目なのさ!?

そう叫んだ僕に返答した父と母の姿を思い出す。

母「泣き言なんて聞きたくないね！ なんとかしな！」（ドヤ顔）

父「素晴らしい！ 最高のショーだとは思わんかね？」（ドヤ顔）

反論は意味を成さなかった。

姉さんたちに相談しても、僕抜きで行われた両親たちとの話し合いで、どこか三人とも吹っ切れてしまった感じになっていて話にならない。

つまり一番納得できないのは、僕の意見は完全にお構い無しということだ。

いや、別にこの状況が嫌というわけじゃもちろん無い、正直由良姉さんは好きだ。

でもこう、なんとというか長年姉として見れなかつた僕としては、こう踏ん切りが付かないわけで。

「私とそういうことするのは嫌？」

「というか僕の年齢を考えて欲しいと申しますか……」

「提督の年齢ならそういうの興味津々だつて聞いたけど」

「いやでも、なんとというか僕も色々と思うところがありまして……」

僕の部屋には入れない、そう聞いてとても寂しそうな顔をする鬼怒姉さんと阿武隈姉さんが脳裏に浮かんだ。

「二人のことが気になる？」

「ええ……」

なぜ解つたし。

顔に出てたのか、クスクスと笑いながら由良姉さんは僕から一度はなれ、そして後ろから包むように僕を抱きしめた。

残念ながら成長途中の僕はまだ由良姉さんと身長差があり、由良姉さんにすっぽり包まれるような感じになってしまう。

吐息が耳に当たるほどの近い距離、僕の肩に頭を乗せながらささやくように由良姉さんが言った。

「大丈夫、あの二人も何年かたてば同じように提督と二人つきりでこんな風になるんだから。でも今だけは、今だけは私だけの提督ね、ね」

そんな甘い言葉に脳がとろけそうになる。

「でも駄目なんだ由良姉さん、僕にはそんな資格があるとは思えないんだ」

ととてもとても素敵な僕の姉さんたち、艦娘とか関係なく姉としても女性としても素敵な、姉さんたち。

だからこそ、姉さんたちを悲しませてしまうような、そんな僕なんかじゃなくもつといい人と結ばれて欲しい。

そんなことを思ってしまう。

クスリ、と、由良姉さんが微笑んだのがわかった。

「相応しいかどうか、もっといい人が居るどうか、普通の女の人ならそういうのも考え

ちやうかもしれないわね」

「そう言いながら由良姉さんは、ぎゅっとほくを抱きしめる力を強くする。

「でも私たち艦娘に限っていえばね、もう他の人なんてありえないの。私たちの、ううん、私の心はもう一生提督のものなんだって、比喻でもなんでもなく他にはもう居ないんだって、わかってほしいな」

どこか悲哀めいた、由良姉さんのその言葉を聞いて、僕は湧き出した色んな感情で溺れそうになる。

僕はわかつてなかったし、覚悟だつてなかった、姉さんたちがどんな思いで僕と接していたかなんてわかつたつもりで居ても何一つわかつてなかったと思ひ知らされる。

そんな言葉にできない姉さんたちの想いを考えると、自然に涙が溢れてとまらなくなつた。

「あつ、ごめんね。泣かせちゃつたかな」

「そういつて僕を振り向かせ胸の中に包むようにして抱きしめる由良姉さん。」

「私たちのこと、ゆつくりでいいから見てくださいとうれしいな」

涙が止まらずにも言えない僕は、由良姉さんに抱きしめられるまま眠りに付いた。



歌が聞こえる、これは……由良姉さんの声だ……

遠い昔の記憶。

僕が覚えている一番古い記憶。

その時僕は泣いていて、それをあやすように由良姉さんが歌ってくれている。

よろしくね、提督

初めて会ったときの貴方の顔は忘れられないわ

出撃の時は何時もその顔を思い出すの

遠征は成功よ、でも補給はマメにさせてよね

最近こき使いすぎじゃないかしら？

たまには休ませて欲しいわ

泣かないで提督

泣かないで提督

泣かないで私の大切な人

しようがないから許してあげる

だから戻ってきたら、甘いものを一緒に食べましょう♪

古い、とても古い歌。

世界で初めて艦娘が作ったといわれている歌。

泣き虫な提督へ

曲名どおり、自分たちの為に泣いてくれた、泣き虫な提督の為に、艦娘が一生懸命考えて歌ったといわれている歌。

戦争が終わり、悲しみに満ちた二番を歌う必要はもう無いからと、二番は消してしまった歌。

それを由良姉さんが歌ってくれている。

きっと僕に泣き止んで欲しいから……。



夜中にふと目がさめた、泣き声が聞こえた。

自分の泣き声かと思っただけ、違う、聞こえる声は由良姉さんだ。

「……ごめんね、ごめんね」

なぜ由良姉さんが謝りながら泣いているのか、僕にはわからない。

僕はとつても無力だ。

でも、なぜかその瞬間ぼくは決めたんだ。

もう絶対由良姉さんを悲しませないって、決めた。

そして由良姉さんの今後の人生が、より富んだものであるように。

より幸せなものになるようにしてみせる。

僕を抱きしめてくれた由良姉さんを抱きしめ返す。

由良姉さんがびくつとなったのがわかった。

なにも言わずただ由良姉さんを抱きしめていると、やがて由良姉さんも泣きやんで僕

をまた抱きしめてくれた。



朝起きると、まだ隣で由良姉さんがすやすやと寝息を立てていた。

僕は体を起こし、そつと朝日を反射する由良姉さんの髪をなでる。

銀色のさらさらとした長い髪が指に絡み付いて気持ちいい。

んんっ、と、くすぐったそうにする由良姉さん。

僕は手を離してポツリと昨日の決意を言葉にする。

「必ず由良に相応しい提督になってみせるよ」

ははは、呼び捨てにしちやったよ……

顔が熱くなつてしまったのがわかる。

自分で言つて恥ずかしくなつた、とてもじゃないが起きてる由良姉さんには聞かせられない言葉だ。

なんて思つてたら、パツチリと目を見開いて由良姉さんがこちらを見ていた。

マズウイ。

由良姉さんは、それはもう、たまらなくうれしそうな笑みを浮かべる。

そしてがぼつと体を起こして僕の腰あたりに抱きついた。

なにも言わず、今までで一番強い力で僕を抱きしめる由良姉さん。

僕は寝起きの由良姉さんの温かさを感じながら、

ああ、もう後には引けないな、引くつもりも無いけど……

そんなことをぼけつと考えた。

由良姉さんの頭をよしよしと撫で撫でしながら、いつまでも二人でそうしていたら、

「朝だよ！ 今日も一日、頑張ろうね！」

「朝なんですけど！ 朝なんですけど！」

と、鬼怒姉さんと阿武隈姉さんが叫びながら部屋の扉を叩く音が聞こえてきた。

『僕』と『正規空母：翔鶴』

この世界は一度滅びかけたらしい。

しんかいせいかんという、怪物が現れて世界をめちやくちやにしたんだ。

だげどこからか現れた艦娘と、その辺に居た提督と、あと沢山の人たちが力を合わせてしんかいせいかんをやっつけて平和を取り戻したんだって。

その後、艦娘たちは妖精さん（以下一話参照

まあ、僕がどうしてこんな長々とこんなことを思ってるのかだけど……

「……」

今日も帰り道で、電柱に隠れてじっとこちらを見ている加賀さんを見てしまったからだ。

隠れているつもりでも、加賀さんの乗ってきた黒塗りの高級車が大体そばにあるので直ぐに分かってしまう。

あれから加賀さんは毎日僕を帰り道で待ち伏せして遠くから見ている。

二回も笛を吹かれたのがよほどこたえたのだろうか、あれ以降は直接話しかけてくる

ことは無くなった、んだけど……

「……ぐすん」

こう毎日涙目でこちらを見つめてくる加賀さんを見てみると、僕の中で悪いことをしてしまっただんじやないだろうかという思いがわいてくる。

隠し撮りした僕の写真を持っていた、ただそれだけのことだというのに。

……いや、やっぱりわいてこない、うん。

ちよつと悪いかなど思ったけど、僕はなにも見なかったことにして家に帰った。



「彼女たち艦娘は人間と変わらない姿で生まれてきます。ですが、普通の赤ん坊より成長速度が速く、一年たたないうちに自我がはつきりし、艦娘としての記憶はこの段階ですであるようです。そしてどんな環境で育ったとしても、その記憶にしたがって性格が形成されます。まったく違う環境で育った同じ艦種の艦娘でも、比較的近い性格になるのにはこういった背景があります」

今日は学校で艦娘についての授業のある日だ。

先生が熱心に難しいことをしゃべっているけど、あまりよくわからない部分もある、

でも多分大事なことなので一生懸命聞くことにする。

「そして二年たった頃には差異はありますが、六く九歳程度の体つきになり、身体能力もすでに成人男性を遥かに超えるものになります。その後、艦種にもよるようですが、六歳く十二歳くらいの際に『艦娘変わり』という、人間でいう成長期的な肉体変化が起こり、艦娘の姿として固定されます、図鑑や歴史の本に載ってるのはこの状態の彼女たちですね」

みんなも先生の授業を黙って、しっかりと聞いている、それくらい艦娘のことを知っておくのは大事なことなのだ。

「ちなみに『艦娘変わり』に関してはまた今度の授業で説明いたしますが、この期間は早くて一ヶ月、長くて一年以上続き、肉体的にも精神的にも不安定になることがあるようです。皆さんはもしなにか見てしまっても、温かい目で見守ってあげましょう」

窓の外を見ると、先日屋上に居た『大鳳』さんが三階から飛び降りてるのが見えた、なるほど。

「つまり六歳く十二歳で大人の見た目に見える状態となる艦娘も居ます、彼女たちが別のクラスで授業を受けているのはそのためでもあります。また何時起こるかも不明で、起こらないこともあります、『第二次艦娘変わり』という、専門の用語で『改二』という状態に変わる肉体変化が起こることもあります。この状態になると新たに様々な力

が備わるといわれています」

「うわあ、なにそれ、なんか怖い！」

隣の席の友達、健太君が大きな声を上げた。

本心じゃないのはわかる、多分ちよつとふざけた感じで言ったのだろう。

「はい！ 皆さん注目！ いま健太君が大事なことを言いました。彼女たちのことを怖いと言いました」

「なんだか先生のくうき？ が変わった気がした。」

先生はゆっくり健太君の前まで歩いていくと、健太君の両肩に手を置いてじつと眼を見つめる。

健太君はびくつてなつて、先生から目を逸らせずに居た。

「先生程度の力でも、ちよつと加減を間違えれば健太君に怪我をさせてしまいます、車や銃を使えばもつと簡単にです。力を怖がるのは人の本能なので仕方ありません。です。が大事なものは力の大小ではなく、危害を加えてくる意思があるかどうかです」

先生は、厳しく、でも優しく諭すような声で続ける。

「先生はとつても寛容な先生なので、健太君やあなたたちの個性や自主性は大いに尊重いたします。でも、艦娘に対しての認識が間違っているようならそれだけは徹底的に矯正します」

先生は健太君から手を放し、教壇まで戻ってから振り向いた。

「彼女たちは確かに人とは成長の仕方違いますし、大きな力を持って生まれてきます。ですがその力で、百年以上私たち人類を護る為に必死で戦ってくださいました。そして戦いの中で沢山沢山亡くなられました。私たちの御父さんお母さんおじいちゃんおばあさん、そのご先祖様たちが生まれてくれたのは彼女たちが戦ってくれたからです。私たちを、人類を護る為にです、そのための力なのです」

人類の守護者、艦娘。

おばあちゃんがよく僕に言っただけで聞かせてくれる言葉だ。

「そして現代でも、彼女たちは私たちを影から守ってくださいています。彼女たちは私欲で人間に力を振るうことは絶対ありません。もし彼女たちが誰かに力を振るったのであれば、それは誰かに危害を加えようとしたからではなく、自分か誰かを守るためです。それを履き違えてはなりません」

(※注意：艦娘の行動理由には個体差があります 例：提督)

健太君は泣きそうな顔をしていたが、先生の言葉になにか感じるものがあつたのか、ぐつと堪えていた。

男だな、健太君も。

「今日はここまでです、それでは当番、号令を」

外では人類の守護者である『大鳳』さんが、学校に住んでる猫を追い掛け回し、他の先生が後に続き彼女を追いかけるように走り回っていた。



その日の帰り道にも、電柱に隠れてじっとこちらを見ている加賀さんの姿があった。今日の授業を聞いて、艦娘のことを少し知ってしまったぼくのなかの罪悪感というのが刺激されたのか、せめてと思いきろく会釈だけしておいた。

そしたらそれを見て加賀さん、一瞬驚いた顔をし、うずくまって泣き出してしまった……

「ええ……」

人類の守護者を泣かせてしまった……

しようがないので僕は彼女のそばまで歩いて行って、おばあちゃんが僕が泣いてくれた時にしてくれるように、彼女の頭をなでてあげる。

でも、やっぱり怖いのもう片方の手には笛を握り締めたままだ。

「ごめんさい、ごめんさい」

そうごぼしながらごしごしと目をこする加賀さんを見ると、まあやはりこの人は悪

い人ではないんだろなあ、という思いがわいてくる。

情にほだされるというやつだろうか、こうしているとなんとなく加賀さんがかわいく見えて……

そう思いかけた瞬間、加賀さんが飛びかかってきた。

そして彼女の胸が目の前に迫ってきたかと思うと、顔にぐにやつという感触がして目の前が加賀さんの着ている紺色の服で一杯になる。

ああ、油断してしまったから捕まってしまった、僕は遅れてそう気が付いた。

だが次の瞬間、なにかがぶつかるとも大きな音が聞こえた。

後からわかったんだけど、この時加賀さんは視界の端から止めてあった黒塗りの高級車に向かって、突っ込んでくる白塗りの高級車が見えたので慌てて僕をかばうように抱きついたらしい。

でもそのことを説明してくれた時小さく「……たなぼたでした」とつぶやいたのを僕は知っている。

それは置いておいて、音にびつくりした僕がゆっくりと目を開けると、加賀さんの黒塗りの高級車に白塗りの高級車が追突していて、運転席でいつものクマーにやーの人たちが目を回しているのが見えた。

僕が大丈夫だろうか（加賀さんに抱きしめられたまま）心配していると、白塗りの

高級車から、銀色の長い髪の上品そうな女の人降りてきた。

とても高そうな赤いドレスを着ていて、首からは白いストールをかけている。

あまり道端では見かけないような格好だ、僕も初めて見た気がする。

「あらあら、ごめんなさいね。なんだか見覚えのある下品な黒い車が見えたものですか
ら挨拶しようとしたんですけど」

そういつて頬に手を当てながら謝罪の言葉を言う銀色の髪の女の人、でも正直全然悪く思っでなさそうだ。

後なんだかどの動作も、なんというかとても板についているというのか、そう、せんれんされているという感じがした。

『僕』と『正規空母：翔鶴』

「相変わらず礼儀のなっていない五航戦ね。なにをわざとらしいことを。本当に免許を持つてるのかしら？ 一度見せていたきたいものね、捨てるけど」

「あらあらあらあら、時代遅れの一航戦の遠吠えが聞こえますね、しばらく見ない間に犬にでもなられたのかしら？」

「……頭にきました」

聞いたことの無い低い声で加賀さんが言い争っているのが聞こえる、僕が見ている加賀さんはいつもおどおどしているか泣いている姿なので少し新鮮だ。

あと息苦しいのでそろそろ離して欲しい、なので軽くもがいてみた。

すると加賀さんが「あつ」と何故か切なげな声を上げ、銀色の髪の人「あら？」と始めて僕の存在に気が付いたような声を上げる。

「あら、その子供は……？」

「貴方には関係ないわ、早くどこかに行ってもらえるかしら。こう見えて忙しいの」

「あらあら、真昼間からこんな所に車を止めて道端にいらつしやつた方の言葉とは思えませんね？」

「真昼間から人様の車に突っ込んでくるような無粋な五航戦は言うことも無粋ね。私がどこでなにをしていようと関係ないのではなくて？」

「あらいやだ、無粋さでは一航戦の先輩方にはとてもとても敵わないと思つてたのです。私たちが貴方たちにされたことを覚えてらっしゃらないのかしら？」

何時までも終わりそうにない二人の言い争いの声を聞いて、このままでは埒が明かないと思つた僕は、ぽんぽんと加賀さんの体を叩く。

「うっ」と叩くたびに切なそうな声を上げる加賀さん。

そして何度も強くたたいていると、加賀さんは名残惜しそうにゆっくり離して地面に下ろしてくれた。

ようやく解放された僕は、ふう、と一息つく。そしてそこで初めて、まともに銀色の髪の人と目が合った。

僕を見て銀色の髪の人には雷でも落ちたかのような顔をして固まっていた。

僕はとても嫌な予感がした。

加賀さんにいたつてはとても見せられないような嫌な顔をした。

「は、初めまして、翔鶴型航空母艦一番艦、翔鶴です。提督を見つけておられたなんてさすがです。私も一航戦の先輩に、少しでも近づけるように頑張ります！」

僕の目を見てそう挨拶し、次に加賀さんの手を握りながら翔鶴と名乗った女の人はとても楽しげに話しかける。

その様子はさつきまでのけんのんな雰囲気とは正反対だ。

そしてやはりといった所だろうか、さっきの『艦名の契り』を聞く限り、この人もどうやら『翔鶴』という名前の艦娘のようだ。

加賀さんは親しげに自分の手を握るその人を見て、それはもうおぞましいものを見るような、それでいてこの世の終わりのような顔をしていてた。

「あの、加賀さん。この人は……」

「嫌ですよ提督、私のことは是非、翔鶴とよんでください！」

翔鶴と名乗るのその人は、ずずいと僕の目の前に顔を寄せてくる、近くて恐い。

「……加賀さん、その、翔鶴……さんとは友達なんですか」

「いいえ、違います。どちらかといえば敵です、私が経営する会社と業種が同じライバル企業の経営者ですね。さあ提督こちらに、目を合わせてはいけませんよ」

そういつてさりげなく自分の車に僕を乗せようとする加賀さん、止めてほしい。

「なっ！ 待つてくださいい加賀さん！」

そんな加賀さんを見て翔鶴さんは僕に駆け寄り持ち上げて、胸元に抱き寄せる。

ぐにやっという加賀さんと同じくくらいの大さきの感触が伝わってくる、ほのかに花のような香りがした、あと暑い。

「提督、よろしければこれから翔鶴と一緒に菓子のお店に参りましょう！」

ふふふ、それからこれからのことをじっくりと、ええ、じっくりとお話しましょう。う

ふふ、楽しみ」

「っ!? おやめなさい翔鶴! 提督が嫌がつておられるでしょう! それに提督と一緒に
にお菓子の美味しいお店に行くのは私のほうが先に約束をしていたのです!」

といて、加賀さんも僕の首に手を回して胸元に抱き寄せる。

お陰で僕は加賀さんの胸と、翔鶴さんの胸にサンドイッチされているような、ぐにや
ぐにやして息苦しいことこの上ない状態になってしまった。

「そもそも、どうして貴方がここにいるのかしら五航戦? もしかして昨年度の業績が
うちに負けたから腹いせにでも来たのかしら? だとしたら品性を疑いますが」

「業績は関係ありません!! それに昨年度は設備投資に割り振ったからで……それより
も加賀さん? 貴方常々自分は赤城さんと一緒に仕事に専念するから提督探しなんて
する気は一切無いか豪語されてましたでしょう? これはどうということなのでしょ
うか!」

「そんなこと言つてたかしら?」

「あら、そういえばもう物忘れが激しくなるお年でしたかしら?」

「……貴方も私と大して年は変わらなかつたと記憶してますが?」

『っう!?!』(言つた方も言われた方もダメージを受けている構図)

なんだか僕を抱きしめたまま額をぶつけ合って口喧嘩を始めてしまった二人。

正直暑いし、おまけにトイレに行きたい。

しかし弱った、この状態では笛がふけない。

なのでしようがないから僕は、ポケットに入れていた虎の子の防犯ブザーを引っ張って鳴らした。



加賀さんと翔鶴さんは、防犯ブザーの音を聞いて目を覚ました、クマーにやーの二人に引きずられて、車に押し込まれて走り去って行った。

翔鶴さんの車はどこから来たレッカー車が引っ張って行った。

僕はなんだかどっと疲れてしまった。

とりあえず近くの公園のトイレで用を済まし、トイレから出て公園から見える景色を眺める。

ここは『艦夢守市（かんむすし）』

大きな港があり、その港と街の周りをぐるっと山に囲まれている、そんな立地の場所。都会とまではいかないけれど、それなりに騒がしくてそれなりに穏やかな大きさの

街。

そしてこの街には一つの噂がある。

それは提督適性者が集まるといふ噂だ。

この街には沢山の人間と、居るかもしれない提督適性者たちと、その噂を聞いてやってきた割と多くの艦娘たちが平和に暮らしている。

つまり、ここが僕の住んでいるところだ。

後よくわからないけど、どうやら僕には『加賀』と『翔鶴』の適性があるようなのだつた。

正直困った。



その後の黒塗りの高級車の車内。

ぶすつとした顔の翔鶴と、深刻そうな顔をしている加賀が後部座席に並んで座っている。

「……球磨、料亭黒潮に向かつて」

「了解クマー」

「ふん、まだなにか話があるのですか？ 言つときますけど提督は……」

改めて宣戦布告を告げようとする翔鶴だったが、ひどく追い詰められたような真剣な目をした加賀を見て言葉を飲み込む。

「ねえ、五航戦の姉のほう」

「なんでしよう、一航戦の青いほう」

「提督の適性なのですが……私と貴方が適合した以上その、個別や型の適性ではなく、艦種適性である可能性があるわ」

そういつて片手で顔を覆いながら真剣な顔で呟く加賀。

それを聞いて首を傾げ、なんのこともかよくわかっていない様な翔鶴だったが、しばらくしてはつとした風に加賀に振り向く。

片手で顔を覆いながらも視界の隅にその様子を捉えた加賀は、コクリとうなずく。

「その、もしそうならお互い真つ先に報告するべき相手は居ると思うの。でもその、なにより提督に負担がかかってしまうし、もしそのせいでなにかの争いになってしまつて提督に嫌われたりしてしまつたらそれこそ……」

最悪の未来が頭をよぎりお互いブルリと身を震わせる。

そして搾り出すように加賀が言葉が続ける。

「正直かなり抵抗はあるし私たちの『艦娘』としての常識からは外れてしまうのだけど……」

言いにくそうに言葉を濁す加賀に、翔鶴は決意をしたように話しかける。

「いえ、その意見には賛成です。正直思うところや色々と身内の問題もあるとは思いますが。ここは……」

そして二人は向き合い手を握り合う。

ここに史上（あんまり）例を見ない、加賀と翔鶴による機動部隊が結成された。

『無職男』と『駆逐艦：黒潮』

無職になってしまった。(継続中)

次の職を探してはいるが、なかなか条件に合う会社が見つからない。

条件さえ選ばなければ直ぐにでもいけそうなのはいくつかあったのだが、いかんせんまたラリアットでやめてしまうのは避けねばならないだろう。

もう何時間かしたら日が沈みそうな夕方、職業斡旋所からの帰り道にある公園で、黒歴史を思い出しながら俺はベンチでうなだれていた。

職業斡旋所に行く途中に目に入った結婚式場の入り口、そこで沢山の人に祝福されながら出てくる、名前も知らないカップルの結婚式風景を思い出して涙がこみ上げてくる。

俺って何処で人生間違えたのだろうか、いや、自分が歩いてきた道に後悔などない、
が。

それとこれとは別っていう精神的ショックつてあるよな。

はあ……。

こういう時彼女とかいたら励ましてくれるのだろうか……。

あ“あ”あ“あ”……。

立ち上がれねえ……。

「おにいはんこんな所でなにしてはるん？」

そんな俺に声をかける誰か、顔を上げると白ジャージを着た黒髪ショートカットの少女が此方を見下ろしていた。

『無職男』と『駆逐艦：黒潮』

誰だろうか、どこかで見た気がしなくもないが。

「なんや思い出せんいう顔してはるなあ。黒潮や、自己紹介したやろ」

しょうがないなー、といいながら俺の隣にちよこんと腰を下ろす黒潮と名乗る少女。ふわりと髪が揺れてその髪を留める二本のヘアピンが日光を反射した。

そのヘアピンを見て、俺は先日遭遇した陽炎と妹たちの姿を思い出す。

「ああ……陽炎の妹か」

あの草野球の後、とりあえずなんとなく審判をやり終えた俺は陽炎に妹たちを紹介された。

(ついでにどやされながらルールブックを渡された)

なんというかどの少女たちも一癖も二癖もありそうな感じで、一体どんな染髪料を使ってるのかという髪色の少女も多数、正直親御さんや学校に怒られないのだろうか？

という疑問が尽きない。

まあ、最近の染髪料は便利らしいし、「憧れ」の人の髪の色に染めたいという気持ちもわからんでもないが。

だが待つて欲しい、二十人近い少女たちに一気に自己紹介されて一度で覚えられる人間がいるだろうか？

おまけに戦艦級の眼光やら自己主張の激しい髪色に染めた姉妹の仲で、いい意味で普

通、悪い意味で地味なこの少女の名前まで覚えられないわけがない。

俺は悪くねえ。

此方をぐるりとした瞳で見ながら、足をブラブラとしている黒潮。

「職業斡旋所からの帰りだよ、そっちは部活のトレーニング中かなにかか？」

「別になんでもないただのランニング中や、したらおにいはんがたこ焼きにタコが入ってへんかった見たいな顔でうなだれてるのが見えたさかい、気になってん」

そう言う黒潮は「やっぱりなー」と、なぜか楽しげである。こやつも俺が無職であることに喜びを覚える人種なのだろうか。

オノレエ……。

「あー、でも走ってたら喉かわいたわー、うち財布持つてくるの忘れたわー、困ったわー」
(チラチラ)

……こ、こいつまさか俺にたかっているのか!?

無職にたかるといふ意味を理解しているのだろうか？ だが、しかし。さすがに年端も行かぬ少女にジュースを買ってあげられないというのはなんとするか男の沽券に關わる気がする。

「……スポーツドリンクで良いか？」

「へへへ、おおきに！」

実時間で数秒、体感時間で二日悩んだ末に俺は黒潮に飲み物を買ってやる決断を下した。

決して今後、陽炎から審判のバイトを斡旋してもらえなくなる可能性に屈したわけではない。(結構もらった)

直ぐそばの自動販売機で飲み物を買ひ、黒潮に放り投げると「っほつ」と言いながら上手い具合に両手でキャッチした。

おいしそうにごくごくと飲む黒潮の隣に俺は再び腰を下ろす。

なんというか、よほど喉がかわいていたのか随分とおいしそうに飲むものだ。

素朴なかわいさというのだろうか、派手さはないがどこか心落ち着くようなほんのりと温かい魅力がこの少女にはあるように思う。

やれやれ、そんな顔をされては此方も買ってよかつたと思えてしまっじやないか。

「うまいか？ 味わって飲めよ、それは俺の血液飲んでるようなもんだからな」

無職からたかるといふことがどういふことか、なんとなく教えたかったのだが、それを聞いて黒潮は「ぶーーーー！」と口に含んでいた分を噴出した。

「あ、コラお前なんて勿体無いことを!!」

「おにいはんがきしよいこと言うからやる!!」

「俺は間違ったこと言っただけえ!!」

「なんとなく分かるけどもつとましな例えあるやろ!!」

実際それは俺の命をつなぐ血液も同然の金銭から捻出されてるんだゾ。

ケホケホと咽ながら黒潮は怒っていたが、しばらくしてクスクスと笑いだす。

「なんや、こんな怒ったり笑ったり随分久しぶりな気がするわー」

そりやまあ、なんとも潤いのない人生だこと、俺も人のことはいえんがな。

「うそこけ、お前らの年頃なら箸が転げても面白い年頃だろうに」

「ああ、うん、まあ……」

だからなぜ目を逸らす。

まあ、そんなことはいいか、それよりこれからどうすつかなあ……

軽いため息、だめだ、黒潮が横にいるというのに、重症だこれ。

そんな俺を見て黒潮はベンチから立ち上がって、公園で遊んで行つた誰かの忘れ物ら

しいゴムボールを拾い上げると、俺に向かって放り投げる。

あわててキャッチする俺。

黒潮はボールを受け取りきよんとしている俺のほうを見て、なにも言わずに軽く微

笑む。

そしてとつと離れた所まで駆けると、こちらに向かつて両手を振ってくる。

ああ、キャッチボールか。

よっこらセックスと言う掛け声とともに立ち上がる俺。

どれ、俺の強肩を見せてやるか。

野球漫画の主人公のような美しいフォーム（個人的主観）で投げたボールは黒潮の両手に収まる、黒潮は少し間をおいてからふわり投げ返す、それを俺が受け止める。

そんなことを何回も、繰り返し返す。

あー、キャッチボールなんざ何時ぶりだろうか。

まあなんというか、心が弱った時はこういう何気ないやり取りが沁みるもんだな。

もしこれを狙ってやってくれたとしたら、ずいぶんと察しのいい子だわ。

「ほれ、今度は強く投げるぞー」

「投げてから言わんといてーなー」

慌てて遠くに飛んで行ったボールを取りにかけていく黒潮。

それから俺たちは馬鹿みたいにデブい猫を見ただの、煙草が値上がりしただの、どうでもいいわいの無いことをだらだらとしやべりながらキャッチボールを続ける。

「お前今時間取れるか？」

「うん？ 別に大丈夫やけど、どうしたん？」

やがて俺がボールを受け止め、元あった場所にボールを放り投げた。

なんというか、俺はだんだんこの黒潮の素朴な怒り方や笑顔、そして方言が癖になっ

てきた気がする。

そう考えると、どうせだし飲み物だけなんていわず飯でもおごってやるか、なんて思いがわいてしまった。

「なんか家に帰って飯作るのも億劫だし、一人で外食するのもあれだからラーメンでも食に行かないかね」

「あー、うーん、でも陽炎姉さんがな……」

歯切れ悪そうに片手でぽりぽりと頭を掻く黒潮、なんだ、陽炎たちが家で飯でも作って待ってるのか。

まあ考えれば不思議でもない、二十人近くも姉妹がいればそれはもう毎日の食事は戦争のようでありながらも大事な時間なのだろう。

「ああ、陽炎たちが待っているとかが、すまんな配慮が足りなかった」

「あ、いや、そういうわけやないねん。それとはちよつと別問題というかな……」

「ん？ ああそうか、すまん俺も無遠慮に誘っちゃったな。ていうか俺みたいなのと飯つてのもあれな話だ」

年頃の少女を気軽に食事に誘うというのもデリカシーがなかったか、いかんいかん、通報されかねないぜ。

「ちやう！ そんなことやない!!」

と、そんな俺の言葉をびつくりするくらい大声で否定する黒潮。そんな大声も出せたのか、おじさんびつくりしちやっただぞ。

「お、おう」

「あーもう、なんや悩んでるのがあほらしいなってきたわ。いこ、おにいはん！」

そういつて俺の手を取り歩き始める黒潮。

てか力強いなおい、お前から姉妹は普段何食ってたんだ。

そんな疑問がわいたが、ふんふん♪と機嫌よさそうに俺の手を引きながら歩く黒潮を見て、まあどうでもいいかと思ってしまった。



ラーメン屋「大湊」

頑固な老年のオヤツさんと、生意気そうな若いにいちやんが切り盛りする艦夢守市でも隠れた名店だ。

ちなみにオヤツさんは銀行員から脱サラしてラーメン屋を始めた、チャレンジャー過ぎる。

店に入り、黒潮と並んでカウンター席に座る。

程なくして長い銀髪の店員の女性が注文を取りにきた。

さりげなくこの店員ももかわいいと評判だったりする、おっぱい大きいしな。軽く見とれてると黒潮が俺の脛を蹴つて来た。やめい。

スタンダードな店の名物ラーメンを注文すると、女性店員のよく通る声でオーダーが入る。

アイヌ文様のタオルを頭に巻いた二人がでかい声で返事を返した後、「声がでけえよバカ!」「うるせえつすよこのスカタン!」と言い争つてたが、まあ何時ものことである。適当に他の陽炎姉妹のことをだらだらとしやべつていると、やがて旨そうなおいを漂わせながらラーメンが運ばれてきた。

「ほな、いただきまーす」

「おう、たらふく……は無理だが味わって食え」

おおきにー、とニツコリ笑いながら礼を述べると、黒潮はハフハフとレンジに麺とスープを絡ませて上品に食べ始める。

きちんと躰がされているからだろうか、飾らなくも綺麗に食事を取るその所作に美しさを感じてしまった。

その様子に軽く見とれてしまった自分がなぜか悔しくて、

「うまいか? それ俺の血肉を食つてると思えよ」

と、ついつい悪戯心からそんなことを言ってしまった。

「っ!?」ゴホ、ごっほごほ!」

むせて麺を吐き出しかけてしまう黒潮。

「ははは、期待通りの反応だな」

ニヤニヤとその様子を見つめる俺、そんな俺を見て黒潮は抗議するように、ゴツゴツと俺の脛に蹴りを入れてきた。

「いて、いってえって、ははは」

「おにいはんのいけず! いけず!」

と、黒潮をからかって楽しんでたら厨房からすごい視線を感じたので見てみると、オヤツさんと若いのが青筋浮かべながらすすごいメンチ切ってきてた。

べ、別にびびった訳じゃないけど怖かったので「すみません」と軽く頭を下げた。

「でもこのラーメン美味しいわあ、隠し味に熊で取ったスープ加えるなんてえよう考えたはったなあ……」

え、これ熊はいつてんのか!?

いや、それよりなんでわかるんだ、どういう舌してるんだ、いやどうせ適当だろうけどさ。

だがちらりと見ると、さつきとは別の意味でオヤツさんと若いのが、驚愕に目を見開いていた。

え、本当に入ってるの？

何度も来てるけど初めて知ったわ、実はトップシークレットだったりしないよな……
口封じをされかねない圧迫感が厨房から放射されてるのを感じたが、必死に気のせい
だといいい聞かせる。

とりあえずいつも通り、ラーメンは旨かった。

やがてお互いどんぶりの中身がスープだけになり、だらだらとスープをすすりながら
会話を交わしていると。

「おにいさんは恋人とか結婚とか、どうおもてはるん？」

「おつまえなあ、それ結構無職……じゃなくてもきついワードだぞ」

と、黒潮がNGワードを踏んできた、まあこの年頃だと一番興味がある話題なんだろうが。

だが実際、職が無い俺が彼女や嫁さんを養う甲斐性を持つてるのかと聞かれれば、職
があつても無いと答えざるを得ないのが本音である。

が、わざわざ本当のことを言うこともなからう。

「まあ、せめてなんぞ定職に就くまでは厳しいだろうな」

「へー、つまり仕事見つけるまで、いい人とか作る気はないねんね」

ふんふん、となにやら考え込みながら俺の言葉を確認する黒潮。

やめろよ、そう深く考えられるとむなしくなってくるだろうが。

「なんだ、そういうのに興味のあるお年頃か」

軽い感じでたずねたのだが、それを聞いて黒潮はどこか悲しげな表情を浮かべた。

「うん、うちも素敵な人見つけられたらいいねんけどね、なんというか色々あつてなあ」

「まー、お前ならそのうちいい男捕まえられるだろうから、そう難しく考えなくてもいいんじゃないね?」

「でも例えばや、その人が陽炎姉さんとかと同じ人とかだったらどうしたらいいと思う?」

「修羅場じゃないですかヤダー」

ははは、笑って流そうとしてみたが、思ったより不安そうな黒潮のその真剣な顔を見て、少し真面目に考えてみる。

姉妹で修羅場かあ、なんか大変そうだ。

「正直俺もそんな経験があるわけじゃないから、そんな状況になった時どうしたら良いってのは言えないけどさ。恋をしらず大人になって死ぬなんて、つまらないんじゃない

いかと思うわけだよ」

「その結果が悲しいことになってしまっても？」

「生きていく上でその思いだけがあれば、その後どんな日々であつても生きていけるつてのを手に入れるためならさ、それもまた必要なことだと思ふわけだわ。でもさ、お前の言うとおりの悲しみ続けるつていうのは、生きた人間のすることじゃないからどこかで折り合いはつけなきゃだけどな」

「結局、なる様になれつてことなん？」

「いんや、俺の今の状況と同じで自分が行動を起こさなきゃ誰かがなにかやつてくれるつていう話じゃないんだよ、それは。なにもしなければなにも起こりはしない。自分を取り巻く環境は昨日のままなんだ」

未来への希望に溢れた若い人間にはついついSEKKYOUじみたことを言つてしまふな、いかんいかん。

俺のその言葉をどう受け取つたのかわから無いが、黒潮は店を出るまで「別に一番じゃなくても……」みたいなことをブツブツと言いながらずつとなにか考えてるようだった。

なんとなくそれっぽいことを言つただけに過ぎないのは秘密だがな。

悩めよ若者、それも君らの特権だ。



店を出ると、夕日がちようど沈むところだった。

「んじやまたな、黒潮」

そう挨拶をして俺は煙草を取り出し火をつける、最近は喫煙所は全部外だ、世知辛い。黒潮は直ぐに答えず俺の先をほっほっ、と数メートル駆けてからくると振り返る。生意気にも夕日をバックにして微笑を浮かべるその姿が絵になっていた。

「ごちそうさんやで提督はん。ほなまたなー!」

「お前までそう呼ぶかチクシヨウ。まあいいよ、陽炎たちによろしくな」

そうして俺の返事を聞きニツコリと微笑むと、黒潮は夕日に向かって駆けて行つた。そのなんでもない後ろ姿に、煙草を吸いながら見送っていた俺はどこか元氣をもらった気がした。

まったく、いちいち古臭いが絵になる姿をするやつだな。

……さて、明日も職探しががんばりますか。

『ホスト』と『戦艦：比叡』

金剛四姉妹

かつての大戦中、姉妹で背中を預け戦い海を駆け抜けてきた彼女達姉妹のそれぞれの主な役割は陸に上った今も変わらない。

象徴であり、全ての姉妹を束ねて愛に生きる長女『金剛』

表の顔として、雰囲気を前向きなものにする次女『比叡』

調停役として、勝手を許さず敵味方を抑える三女『榛名』

裏の顔として、姉妹達の力の側面を象徴する四女『霧島』

多少の差異はあると思うが、世間一般での認識はこのようなものだろう。

だが、私はここで一つの仮説を立てた。

次女である比叡、彼女は果たして本当に上記のような役割を担っていたのだろうか、と。

無論彼女の元気いっぱいな姿は、姉妹のみならず周りをも巻き込んで意識を前向きにさせる。

また、長女の目に届かぬ所に気を配り、姉妹や仲間が落ち込んでいれば元氣付けたりする細やかな心遣いも、表の顔の名に恥じないものだ。

で、あればこそ、よく話題に上げられる彼女の欠点の象徴である比叡カレーのエピソードに私は疑問を禁じえない。

そんな細やかな心遣いができる人物が、本当に食した艦娘達が意識不明になるような異常な料理を作るのか？

料理というものは一定の手順を踏めば、どんなに粗かろうが一定の味覚を感じるものとなる、科学ともいえる現象だ。

にも拘らず異常な料理が出来上がってしまうのは、工程の最中になにかおかしな手順が介入してしまった、もしくは“介入させた”ということになる。

以上を踏まえた上で、私が立てた仮説をお聞きいただきたい。

もし彼女が意図的に異常な料理を作る、というイメージを植えつけるために、わざと異常な工程を介入させているのだとしたら？

それが意味するものを推測すると、比叡の裏の役割が見えてくる。

便宜上、その役割を『裏の裏』と表現させていただく。

もちろん裏の裏が表という意味ではなく、裏のもう一段深い所に隠された裏側という意味だ。

それは事故に見せかけて、姉妹達の邪魔者を排除するためのブラフとなりえないだろうか？

もし、それが是とした場合、飛躍しすぎと思われるかもしれないが、本来の彼女の姉妹での役割が表の顔だけではなく、暗殺、諜報、工作といった裏の裏の側面を持っている。

そんな可能性はないだろうか？

私は怖い。

もしこの手記が彼女ら、いや。比叡の組織に発見されてしまった場合、私はどうなってしまうのだろうか。

しかし、私はジャーナリストとしての矜持を捨てられない。

私は今から比叡への張り込みを行おうと思う。

もし私が帰らなかった場合、そしてこの手記を見てしまった者がいたならばどうか忘れて燃やして欲しい。

比叡カレーの真実を覗く時、比叡カレーもまたこちらの口に飛び込む機会をうかがっているのだから。

『行方不明のとある記者の手記より』

『ホスト』と『戦艦：比叡』

霧島がホスト遊びにのめりこんでいる。

その報告が比叡組の組長であり、戦艦の艦娘である『比叡』の耳に届いたのは、霧島がシヨウウのホストクラブに出入りし始めて一週間後のことだった。

その時比叡は埠頭の倉庫でたこ焼きを焼いていた。

なぜ港の倉庫でたこ焼きを……というのも、比叡組の主な収入源は祭りの的屋の上がりと港湾の事業関係全般だからだ。

港湾事業は荷降ろしや倉庫の管理、物資の輸送など多岐にわたって非常に多くの利益を上げている。だが地域住民との交流なども非常に大事な仕事であり、特に表の顔としての役割をかねている比叡にとつては的屋の仕事もまた、非常に重要な仕事でもあった。

比叡は腹巻、パンチパーマ、大きなサングラスという典型的なあつちの家業の組員にしか見えない【諜報員】を下がらせ思案する。

（『霧島』の仕事も楽なものではない、自分とは違いまだ比較的若い艦娘でもある彼女のことだ、息抜きにホスト遊びに興味を持ったのかしら？）

カツカツカ！ と器用にピックを使ってたこ焼きをひっくり返す比叡。

その手際は世間一般でいう料理下手の雰囲気からはかけ離れた手さばきだ。

しかししよりによつてホスト遊びとは、人間の女ではあるまいしおかしなことだ、しかし霧島も息抜きやお酒を飲みたい年頃なのかもしれない。

だが万が一にものめり込み過ぎて、身を持ち崩し、私達金剛姉妹の顔に泥を塗るような事態になることは避けなければならぬ。

そんな思考を淡々とめぐらせる比叡。

「あまり気が乗らないのだけど、直接調べてみましょうか」

自分の姉妹ですら時には疑わなければならぬ因果な仕事、深いため息を吐く比叡。だが、それは必要なことなのだ。

艦娘として、金剛型の比叡として生を受けてしまった以上。

丁寧でありながら、どこか苛立つような手つきで練習用に焼いていたたこ焼きを、比叡は手早くパックにつめていく。

ふと、比叡は自分を見つめるなにかの視線に気が付く。

見るとネズミ対策に倉庫で飼っている猫がもの欲しそうにこちらを見ていた。クスリと笑って比叡は一つたこ焼きを猫の手前に投げる。

嬉しそうに猫はたこ焼きに飛びつく、が

フギャネアアアアア!

と、ひとかじりした瞬間、悲鳴を上げ目を回して気絶した。



ホスト、それは夜の住人、闇夜の時間を生きる者。

ホスト、その本質は飢えた狼、金と女性、そして名誉に飢える者。

ホスト、しかし彼らの仕事はきらめく世界で、夢を振りまく者。

『艦夢守市』その歓楽街にも彼らが住まう城があった。

ホストクラブ「YOKOSUKA」

今日も彼らは闇夜の時を駆け、飢えを満たし、そして夢を振りまくのだった……

「腹減った」

最近「YOKOSUKA」名物（局所的）になりつつある欠食ホストのシヨウは便器を磨きながら飢えていた。

今日家から出るときに食べたモヤシオンリーモヤシ炒めだけでは、どうにも腹を満たせなかったのだ。

「おいシヨウ!! いつまで便所掃除してんだ!! それはもういいから届いた酒をセラ―に運べ!!」

奥から聞こえてきた重低音ボイス、声の主である店長（あだ名：大臣）にそう怒鳴られ、シヨウは「了解でウィツシュ！」と返事をしながら、裏口に積まれていたケースを運び込む、も。

「腹減った……」

あまりの空腹に耐え切れず、店の床にへたり込んでしまう。

「なにサボってやがる、首にされてえか!!」

「イテ? ……あ、アザーツス!」

そう言つてへたり込んでいたシヨウの腹を殴……ろうとして思いとどまり、軽く頭に拳骨を落とす店長。

シヨウは殴られても指導してもらつたと思つてるので、体育会系のノリで感謝を叫ぶ。

ちなみに店長は恐い、ゴツイガタイに坊主頭にそりこみ、そしてサングラス。Eで始まるザイルの坊主の人にとてもよく似ていた。

でも何故か最近ちよつと痩せていた。

「腹減つたつてお前、組ちよ……ふ、太客のお陰で今は多少まともな給料払つてやつてるだろうが、ちゃんと飯食つてんのかあ?」

なにかとても怖い記憶を思い出した店長が、なにかを言い直したのがシヨウは気になつたが、二秒で忘れて言い訳をする。

「いや、孫が事故にあつたのに金が無いつて焦つてるばあちゃんがいたんで、財布の中身全部あげちやつたんすよ……」

詐欺だろそれ、孫が孫が詐欺だろそれ。

店長は頭を抱えた。

こいつホスト向いてない、なぜ俺はこいつを雇ったのか。

そもそもこいつを雇わなければ俺は、最近頻繁に悪夢を見なくてもすんだし、胃薬を飲む習慣がつくことも無くて平和な毎日が続いていたんじゃないのかと。

後の祭りだが、店長はIF（もしも）が好きだった。

正確に言えば最近好きになった。

しかしここでショウが栄養失調にでもなれば、店長に明日は無い。

「……厨房でなんか食ってこい、俺が許可してやる」

「マジっすか!! アザーーツス！」

超いい笑顔で返事をするショウ。

さすがに腹が立ったので、店長はやっぱりショウの腹を一発殴ることにした。

フルスイングで。



調査当日、比叡は何時もはざんばらな髪をきれいに整え、和柄のドレスを着てホスト

クラブ「YOKOSUKA」の前にタクシーで降り立った。

その「仕事柄」様々な所に入り出る比叡は、逆に場所によっては目立たない服装の方が目立ってしまうということを知っている。特に今回はホストクラブに向向くということ自分で持っているドレスの中で比較的派手すぎず、かといって地味すぎないものを選択した。

把握し「調整した」スケジュールでは、霧島は今日、仕事でここにはこれない。

店の扉をくぐると、高級ホストクラブらしく躰のよくできた受付の店員が対応した。

一般的なランクの席に通され、料金とプランの説明を受けた比叡は「ホストのチョイスを含めて全てお任せ」とオーダーする。

やがて比叡の席に、黒髪のさわやかなタイプのホストがやってきた。

そして十分ほど会話し、特に手ごたえを得られなかったのかホストが入れ替わる。

最初、比叡は見目麗しい男に言い寄られ面白い話を聞かせてもらえる、という新鮮なその状況を少し楽しんだが、だからといって比叡の中になにか揺さぶられるような感情はわかかなかった。

途中安めの酒を注文し飲むこともあったが、十分程度でチェンジを繰り返す比叡に店のホストは渋い客だなと早々に見切りを付け始める。

店側としても長時間いて料金を払い続けてくれるのはありがたいが、こうも目当ての

ホストのタイプが定まらない比叡を見て、ひとまず今いるホストはある程度ぐるっと見てもらおうという対応を取った。

入れ替わり立ち代り現れるホストを気のない様子で見る比叡。

比叡は妹の霧島が、なにが楽しくてこんな所に通うのか、まったく理解できなかった。(私達は金剛型、艦娘として大きな役目を負っている。それはととてもとても大事なことなのに、こんな所で遊ぶことで得られるものなど、無いというのに)

比叡には霧島の行動の理由が未だに理解できない。

それでも当然である、比叡はまだ、大事な、大事ななにかと出会えていないのだから。

やがて、チェンジ毎に次のホストが来る間隔が長くなり、比叡が今まで姉が飲んだ紅茶の数を数え始めるぐらい暇をもてあまし始めた頃、やつが……来た。

他のナンバーワンや上位のホストは常連客や指名客の相手で忙しく、残りのホストはもう全てチェンジされた。

なら申し訳ないが、店の味噌つかすであるやつしかもう残っていないかったのだ。

某国民的RPG七作目の髪形をした残念イケメン、この店が誇るKY、そう、やつの名は

「よろしくおねがいしまースッス！ ショウデース！ 貴方のハートを掴む男の名前ど

うか覚えてくださいッス!!」

そんな姉によく似たポーズを決めるシヨウの姿を見て、比叡に衝撃が走る。

頭ではない、自分の中の今まで一度も使われなかった動力機関に初めて火が入ったような感覚。

自分でもまさかと思った。

かつてその経験をした何人もの同族が幸せそうに語る光景を見てきた。

悩み恋焦がれた時期が自分にもあり、諦め、姉妹のために人生を捧げようと心に誓った自分がいた。

姉妹のためならなんでもできると、そう、それは間違いではなかったはずだ。

だが、これは。

自分の提督を見つけてしまったというこの感情は……。

かつてない経験に衝撃を受け固まっている比叡の姿に、シヨウはなんかこの人かーちゃんがゴキブリ見たときみたいなの顔してんなあ。

と、のんきなことを頭に浮かべながら比叡の席についてトークを開始する。

「おねーさん俺最近すげーことに気が付いちやっただけどき、世界中の人に一円づつもらえば超金持ちになれるんじゃないっすかね？」

周りでシヨウの挨拶とKYトークを聞いていた従業員やホスト達は、ああ、最近太客が付いてなにか変わったかと思つてたけど、やつぱシヨウだとなぜか安心していた。

「つぶ、ふーん。それ本気で言つてるんですか？ そんなことが不可能なことくらい少し考えればわかると思いませんか？」

凄まじい感情の波に翻弄されながらも、その得体の知れない感情に飲まれまいと、必死に抗うようにシヨウの馬鹿な話に大真面目に返す比叡。

それは比叡組の組長としてのプライドか、それとも……

「まあ、わかっちゃいるんすけどね。でも正しいコトとか本当のコトつて、案外つまんないスよ」

そうなのか、そうなのだろうか。

裏の裏として、綺麗では無いことも知りたくないことも、沢山の真実を知つてしまつた比叡にシヨウの言葉が突き刺さる。

「そ、それでも私は……」

「なんかつらいことあつたんすか？」

搾り出すように苦しげに言葉を吐き出す比叡、心配するシヨウ。

「つらくなんか、それは、私の仕事で、しなきゃならないことで……」

「そうなんすか、大変なお仕事されてるんすねー。なら楽しくしようとしなきゃ、どんな

「ことでも楽しくはならないと思うツスよ」

ニカツと太陽のような笑みを浮かべるシヨウ。

真正面からその笑顔を見てしまった比叡。

もうだめだった、比叡の心は溶けてしまった。

比叡は気が付いてしまった。

ちがう、そうじゃなかったのだ、仕事がつらかったんじゃない、足りないまま仕事をするのが、つらかったのだと。

「あ、おねーさんのことなんて呼んだらいいかな？ あとなんか飲む？ できれば高いやつだとうれしいでウイツシュ！」

比叡にはそれが自分の提督がくれた初めての命令（お願い）に聞こえ、歓喜した。そして理性ではなく、知識でもなく、本能から出た言葉を叫ぶ。

「ひつ、『比叡』です！ お酒を頼んで、シヨウさんに少しでも近づきたいです！ ですのでこのお店で一番高いお酒下さい!!」

比叡のその注文を聞いて周囲の人間は耳を疑った、全員が耳をホジホジした。

「え、比叡ちゃん大丈夫？　うちで一番高いやつつていつたらその、別に安いのもいいんつすよ……」

自分で言っておいてまたいきなり心配してる、やっぱりシヨウさんホスト向いてないっすよ。

「気にしないでください！　私お金持ちなので！　他のお客さんには負けません！」

「なら遠慮なくつす！　本日ご来店いただいたこちらのお嬢様ぬいひひひひひひ！　口マネ・コンティ！　頂きましたー！ー！！」

ホジホジが終わった直後に聞こえてきたシヨウのオーダーを聞いて、全員が酒の飲みすぎだな、と自分を戒め現実逃避した。

比叡はシヨウのトークをそれはもう目を輝かせて食い入るように聞いている。

その顔はなにか自分に欠けていたものを、完全に見つけて手に入れたかのように幸せな表情だ。

比叡は感じていた、今まででも自分は確かに幸せだった。

だがそれは姉妹を囲みお茶会をしてもどこか満たされない、そう、お菓子のないお茶会のような人生だったと。

そして提督を得た自分は今、初めてすべて満たされたのだと。

「え、比叡ちゃん料理が得意なの？」

「はい！ 特にカレーが得意で、あの、よかつたら今度味見します？」

「まじで!? やった！ カレーなんて高級品もう随分食ってなかつたんすよ!!」

「えへへ、気合！ 入れて！ 作ります！」

そんな幸せそうな（片方は食事的に）二人に忍び寄る影。

そう、太客のにおいにつられて現れたこの店のナンバーワンホストである。

「シヨウクーん!! だめじゃな……」

前のとさのようにさらりと割って入ろうとしたナンバーワンホストだったが、比叡の姿を見た瞬間いやな汗が背中から大量に噴出す。

一瞬こちらをちらりと見た比叡の、その、此方に、なんの感情も、能面、顔、どこか、で……。

なんだかとてもとても嫌な勘が働いたナンバーワンホストは、声と自分の姿を取り巻きのホストと一緒に、Eなザイルのくるくる回るダンスを踊りながらフェードアウトさせた。

勘のよさとパフォーマンスでは誰にも負けないからこそそのナンバーワン、その栄光の座にいつけるのは伊達ではないのだ!!

霧島の件？ あれは勘とかそういうんじゃない厄災っていうか蝕っていうか……。

くるくる回りながら器用にフェードアウトしていく先輩達を、ぼかんとした風に見ていたシヨウだったが、一秒で忘れてまた話し始めた。

嬉しそうにシヨウとトークをしながら、比叡は霧島がホストクラブに入り浸っている真の理由に気が付き、どうしたものかと考えをめぐらせる。

（霧島はたぶん、自分自身にだけシヨウさんとの適性があると思っっている。それは個別適性。歴史的に考えても、当然となる考え方。『艦種適性』や『艦型適性』など、過去の事例から見ても少数の例しか存在しない）

だが、と、比叡は思考し続ける。

（だけど。霧島がシヨウさんと適合した。そして、私もシヨウさんと適合した。お姉様や榛名とも適合する可能性はあるわね。まさか艦型適性……つまり金剛型適性？ そうだとするならば。いや、そうじゃなくても報告しなくちゃいけない。金剛姉様や榛名にも報告しなければ……）

隣を見る、シヨウが不器用ながら一生懸命、比叡のために、比叡のためだけに、やさしそうな笑みを浮かべ、比叡をひたすら見つめながらお酒を注いでくれる。

(……報告はしなければならぬ。でも、そうなればどうなる？ 勿論提督をめぐる姉妹同士の血みどろの争いが勃発、などという事態は起こらないだろう、起こるのはどう提督を共有するか、それが争点の会議になるはずだ)

そうなるが一番になるのは難しい、金剛姉様が居る。

戦後史上『最凶の金剛』とうたわれる金剛姉様が居る。

(なら今だけは、もう少しだけでも、シヨウさんに私のことだけを見ていて欲しい)

そして出した結論は、もうしばらく、もうしばらくだけこの幸せな時間を楽しんでみたい。

そんな、裏の裏の世界に身を置いた比叡とは思えない、砂糖菓子のように甘い夢のような結論だった。

……なにかの、カウントダウンが進んだ音がした。

『ヒモ（主夫）』と『重巡：那智』

重巡洋艦の艦娘である『那智』は、ちらりとオフィスの時計に目をやった。

時間は十七時、終業の時間である。

同時にそれを知らせるチャイムがなった。

伸びをして仕事の疲れを癒すもの、アフターファイブの約束のためにいそいそと帰り支度を始めるもの、終わらない仕事に絶望しながらも残業の覚悟を決めるもの。

各々だが、幸い那智は定時帰宅組だったので帰り支度をさっさと終わらせ、美しい黒髪サイドポニーを揺らしながら立ち上がる。

立つと女性にしては高めの身長とスレンダーな体つきがよくわかった。

那智はそんな立ち姿や振る舞い、そしてその美しいゆえの冷たい容貌と切れ長の瞳とあいまつて、武人然とした凛々しい印象を周りに抱かせていた。

「先輩っ！ よかったら飲みに行きませんか？」

そんな那智に小動物を思わせるかわいらしいスーツ姿の女性が声をかける。

彼女は那智が研修を受け持った社員で、今でも那智を慕い時々声をかけてくるのだ。

と、割と失礼なことを言った。

でもなぜか見ていた人間のほとんどが、うんうん、と同意をあらわにしている。

那智はそんな同僚たちの様子にどこか勝ち誇った笑みを浮かべた。

「ふふふ、悪いな」

そういつてバッグを肩に掛け颯爽とオフィスを出て行く那智を、同僚たちはあんなにかっこいい那智と付き合うなんて、いったいどんなにすごい男なんだという思いを胸に見送る。

那智は会社を出ると近くの駐車場に止めてあつた黒い乗用車に乗り込む。

普段は無愛想で冷たい雰囲気的那智が、今日ばかりはどこか機嫌がよさそうだった。

その様子を離れた場所で監視している存在がいた。

無地の黒い戦闘服を着た、中東系の傷だらけの顔に太い首。

腰には隠すつもりも無いのか、堂々と大型ホルスターに拳銃がぶら下がっている。

那智の姿を見て、その恐ろしい男は獰猛な笑みを浮かべた。

『ヒモ（主夫）』と『重巡：那智』

職場から車で三十分ほどの所にある、中ランク程度のマンション。

値段の割にベランダから見える海沿いの埠頭の風景が絶景で、艦娘である那智はその景色を気に入っていた。

那智は綺麗に掃除された玄関を抜け、リビングに入る。

そこにはきちんと掃除のされた部屋とは反対に、伸びたスエットを着ただらしめない感じの男が家庭用ゲーム機をプレイしていた。

「帰ったぞ」

「あ、なっちんおかえりー」

にへら、というようなしまりのない笑みを浮かべる男、お世辞にも美形とはいえないがどこか温かみのある顔の男だった。

那智はその姿を見て、

「うわーうわー！ 今日も大変だったよー！」

と、バッグも艦娘としてのプライドもなにもかも放り投げて男にダイブした。

男は割と大柄である那智を難なく優しく抱きとめる。

「よしよし、今日もいっぱい頑張ったんだねー」

慣れた手つきでよしよしと那智をあやす男、那智はしばらく甘えてから立ち上がる。

「よし、食事にしようー！」

「ご飯作つてあるから温めるねー」

慣れた手つきで食事の準備を始める男、那智はその間に部屋着へと着替える。

リビングに戻ると、まだ男が料理の準備の最中だったので、テーブルに座つてその姿を眺める。

「直ぐできるからもうちょっと待つててねー」

「いや、退屈はしていない。それなりに面白いぞ。貴様の様子を眺めているのもな」

やがて料理の準備を追えて二人が席に着く。

メニューはおいしそうなクリームシチューに、濃厚な麦の香りがするパン。そして自家製ドレッシングを使ったサラダ。

食事の挨拶を終え二人は食べ始める。

「なんかごめんねー、置いて貰つて」

「いや、構わないといつも言っているだろう？　むしろ働かずとも言ってくれればいいくらでも渡すぞ？　むしろ言ってくれ」

出撃や遠征を行い、戦果や資材を持って帰るといふ状況にとても近い（と思っている）今の現状。

那智の中では今の状態が、むしろ艦娘としてこれ以上無い位充実した日々といえた。

「やめてなっちゃん、駄目になるからそういうのやめてー」

「正直家事などは任せっきりなのだ。渡してる生活費だけではなくもつと必要なのではないか？　飲む打つ吸うなど必要であろう」

那智のその言葉は厳しそうに聞こえるのに、内容を聞けばもう骨の髄まで侵食されているのが伺える。

「お金が欲しいんじゃないじゃなくて労働したいんだよおー」

「やれやれ、まあそうあせることもなかろう。それよりもあれだ、あれ」

落ち着かないようにチラチラと男に目配せをする那智。

男は那智がなにを言いたいのかももちろん分かっているかのようで、

「もちろん用意してあるよー、ちよつと待っててねー」

そういつて男は冷蔵庫から準備してあつたものを持ってくる。

「はい、同棲三周年記念のケーキだよー」

「ふふふ、まだ三周年ではないか、そんなに大きさにするな」

「だって今日は特別な日だからねー、大きさにしちゃうよー」

那智は言葉とは裏腹に万遍の笑みを浮かべ、

「ああそうだ、今日は特別な日だな。今夜ばかりは飲ませてもらおう。貴様と共にな」
 そう嬉しそうに言った。



朝が来た、希望の朝だ。

「出るぞ！ 怖気づくものは残っておれ！」

「働くのが怖いんじゃないのが怖いー、けどなっちんいつてらっしやーい」

男に見送られ、戦意高揚状態のキラキラが見えるような凛々しい姿で出勤する那智。

男是那智を見送ると掃除、洗濯をはじめた。

その手際とこまめさは熟練の主婦にも匹敵するものだ、まさにパーフェクト。

家事が一段落して、ポストに入っていた手紙の中に自分宛の封筒を見つける。

そして中を開けて書かれている内容を見て唖った。

「また書類審査落かー、きびしー」

那智はああ言ってくれてるが、自分も男である、なんとかほれた女を養うくらいの甲斐性は持ちたいというのが本音だった。

だが、どうしてもものんびり屋であるこの男は、色々な仕事に向いていない。

それでも諦めない、そんな姿勢もまた那智をキunksンキunksンさせている要因だと気が付いていなかった。

天然のヒモとはかくも恐ろしきモノだ。

男は「よしー」と立ち上がると、コンビニまで自転車で行くことにした。

無料の求人情報誌を取りに行くためである。

そして雑誌を手に入れ家に戻る最中、那智の提督はさらわれた。



「かえったぞー！」

夜、その声をあげながら部屋に帰ると、何時もで迎えてくれる温かい返事が無く、那智は「おや？」と部屋に上がる。

リビングに入ると、何時もは提督が綺麗にしてくれている部屋のあちこちが荒らさ

れ、まるで別の世界にでも入ってしまったかのような印象を与える。

那智は自分の鼓動が早くなったのがわかった、戸惑い、不安、それらが渦巻いていく。ふと見ると、一番広い壁に『男は預かった。埠頭のA―三番倉庫で待つ』というメッセージが赤いスプレーで書かれていた。

那智の肩からバッグがするりと落ち、手に握っていた二人で飲もうと思いつてきたワインの入った袋がガチャンと音を立てて床に落ちる。

那智はしばらく呆然としていたが、やがて覚悟を決めた顔になり、クローゼットに向かう。

そしてその裏にある隠しスペースから、頑丈そうな黒いケースを取り出した。

リビングでそのケースを開け、中身を確認しながら那智はとある場所に電話をかける。

『はい』

「私だ、至急欲しい情報がある、場合によっては後処理も頼みたい」

『……いいわ、任せなさい』

「すまんな、またお前を頼ることになってしまった」

電話の向こうの声は「気にしないで」と優しい声色で答える。

そして那智の話聞き終えると、まるでその気持ちは今ならよくわかる、といったか

のような恐ろしい声色で答える。

『私たちが怒らせるなんて馬鹿なやつらね』

那智はケースの中身の一つを取り出し、動作を確認する。

カシャン、と凍えるような金属音がした。

「まったくだ」

そう答える那智の目は恐ろしいまでに冷たく、だが凄まじい怒りの炎が渦巻いていた。



指定された埠頭の倉庫に着くと、そこには十人近くの戦闘服を着た男たちが自動小銃を構えて待ち受けていた。

那智の提督は倉庫の中央、十メートルほどの高さの天井からたらされた鎖に繋がれるされている。

幸い意識はあり、特に暴行は加えられては居ないようで「あ、なっちーん」とのんきに那智を見て声をあげた。

那智はその様子を見てホツとするも、腕組みをして那智の提督がつるされている真下

に仁王立ちしている大男を睨みつける。

「さて、どういうつもりだ、なぜ私を呼び出した？」

「くくく、あなたに勝つためだよ、元腕利きの女傭兵さんよお……」

大男がかぶっていたベレー帽を取ると、一部隠れていた傷だらけの恐ろしい容貌があらわになる。

「……誰だお前？」

「忘れたとはいわせんで、この俺の顔に傷をつけただろうが！」

その顔を那智はじつと凝視するも、頭にクエツションマークを無限に浮かべ首をかしげる。

「すまん、本当に思い出せん、なんというか、すまん」

その言葉を聞いて大男は顔を真っ赤にして怒鳴りちらす。

「十五年前！ 貴様一人に小隊丸ごとつぶされた生き残りだ！ ようやくようやくようやく見つけたんだぞ！ 十五年だ！ 十五年探し続けてやっとだ！ この日のために俺は貴様と一対一で勝利するためにひたすら強さを追い求め……クドクド」

えらそうに言っているが、実の所この大男。たまたま仕事でこの街に来ていて、たまたま那智を見つけて、その瞬間封印していた忌まわしい過去がよみがえり復讐しようとする。ずさんな計画を立てただけだったりする。

人というのは過去を美化したがる物で、本当の所は当時放浪していた那智を見つければ、無謀にも襲おうとしてあっさり返り討ちにされた自業自得でしかない過去だった。

「おいちよつと待て、十五年前のこととか言われてもその、困るしちよつともう黙ってくれ。提督、き、貴様は今の話を聞いてその、なんだ。私の年を数えたりはしないよな、な？」

もう大男のことは完全に眼中に無いように提督に話しかける那智。

提督は提督で「なっちゃんは永遠の十八歳だよ」とのんきに返事をする。

その様子に、すでに大分加熱されていた大男の怒りは一気に沸点に達してしまった。多分本人としては那智に「ボスのお前を殺した手ごたえも無く……ああそうか、部下の死体の中に隠れていたのか」みたいなことを言われて「叩き壊してやる！ 過去にお前がそうしたように！」みたいなかつこいい展開を期待していたのにもう台無しである。

「ぶざけやがって!! ブッコロシテヤル!!」

大男が腰にぶら下げた大型拳銃を引き抜き、那智に銃口を向ける。

が、すでに大男の視界から那智は消えていた。

「ぶふえ!!」

そして大男の顔面に凄まじい衝撃が走り、ラグビーボールのようにきりもみしながら

十五メートルほど先に積まれた木箱にぶち当たる。

直後には、あ、死んだ、と誰もが思う派手な音を立てて、大男は粉碎された木箱と崩れてきた木箱の中に埋もれてしまった。

なんとというか大男にとつての積年の十五年（と思っていた物）は、そんな感じで実にあっさりと終わった、悲しいなあ。

大男が居た場所には、いつの間にか銃剣の付いた二丁の拳銃を構えた那智が居て、残った兵士たちに照準を合わせている。

一瞬で十メートル以上の距離をつめ、大男の顔面に蹴りをぶち込んだ那智の姿を誰も捉えることはできなかった。

「「ぐっ、軍曹————!!」」

「さて、お前たちのボスはこうしてご退場願ったわけだがまだやるか？ 私としてはお前たちが悔い改めて家に帰るといふのを望むが……」

「なめやがってえ！ お前なんか怖くねえ来いよベネツ!」

言い終わるより早く、お約束の台詞を言おうとした兵士是那智の拳銃から発射された銃弾を受けぶつ飛ばされる。

位置的に撃てる兵士は銃を構え、接近戦しか手段が無い兵士たちはナイフを構える。

だが、そんな武器がなんの意味も成さないことを彼らはわかっていなかった。

「まったく、口だけは達人なトーシロばかりよくそろえたものだな」

軍曹と呼ばれた男の認識は、あっているようでその実、とても大きく大きく外れていた。

本人是那智という存在をただの腕利きの“人間の傭兵”と思い込んでいたが、それは大きな誤りなのである。

もし、もしも那智が艦娘だと、そして彼女ら姉妹の異名を知っていれば関わってはいけないものだとなかったはずなのだ。

その昔、戦場を渡り歩く伝説の傭兵姉妹が居た。

時を翔る『妙高』

笑う餓狼『足柄』

闇染めの『羽黒』

そして

悪魔の尾『那智』

ただの艦娘というだけでも絶望的なのに、さらに最悪を掛けた陸上戦闘技術を極めた艦娘の傭兵、戦場という戦場を恐怖のどん底に陥れた絶望の代名詞。

自分や誰かを護る為以外には、基本的に力を振るうことは無いとされる艦娘でありな

がら、なにかを探すために力を振ったといわれる異色の存在。

かつて戦場で彼女らが相手にいることを伝える連絡は撤退の命令と同義とされた。だが、彼女らはある日唐突に姿を消す。

そして彼女たちは今や戦場で聞く御伽噺でのみ語られる恐怖の存在となった。

彼らの前に居るのはその御伽噺の中から出てきた悪魔の尾だ。

彼女の提督に手を出す、文字通り悪魔の尾を踏んだ彼らの命運はとつくに決まっていた。



「ぐっ、軍曹……」

「……あのアマア……なめたまねを……」

戦闘が終わり、那智と提督の二人が去った倉庫。

絶妙に手加減され、全員生存していたソルジャーたちは身動きできずビクンビクンしていた。

そこに、倉庫の持ち主であるとある組織の長が兵隊（港湾労働者組合員）を引き連れてやってくる。

「ウチの倉庫でなめたまねしてくれたのはコイツらですか、じゃあ皆さん、気合、入れて、回収しましょうねー」

『ウイーツス!』

「なんだおまえらあ!?! 俺たちがなにをしたとツツ!?!」

「……提督と艦娘に手を出したんだ。……覚悟はできてるんでしょう?」

とある組織の長が発した、凄まじくドスの利いた低く恐ろしい声を聞いて、凍りつく傭兵たち。

那智たちの本当の意味での正体を知らなかった傭兵たちは、自分がしでかしたことの重大さに、いまさら、気がついた。

できれば那智の姿が十五年前と変わっていない時点で、気がついてほしかった。

「んあ!?! まってくれ俺たちは!!」

「はーい、黙りましょうねー」

声をあげた軍曹の顔をボールのように蹴飛ばし、真つ黒い笑みを浮かべるとある組織の長。

軍曹はもう一回木箱に突っ込む羽目になった。

そして僅か数分で動けないソルジャーたちは全員速やかに收容される。

彼らのその後を知るものはあまり居ない。



「ごめんねー、なっちゃん」

「いや、私こそすまない、その、色々隠していて……お、驚いたか？　だがその、その、できれば私は、その……」

夜空に星空がきらめく埠頭の倉庫からの帰り道、二人は手をつないで家に向かって歩いていった。

だが、那智はといえば先ほどの鬼気迫る戦いがうそだったように恥ずかしそうに、そしてなにか言いたいことをどうしても言い出せないように顔を伏せながら、提督に引つ張られるように後ろを歩いている。

「なっちゃんの恥ずかしいことなら、もうとつくにいろいろ知ってるから大丈夫だよー」
「あう……」

色々思い当たる節のある那智は、提督のそんな優しい言葉を聞いてさらに顔を赤くする。

「それにあの雨の日になっちゃんを拾ったのは僕なんだから、なっちゃんが心配してるかもしれないようなことはないよ、安心してー」

姉妹とはなれ、宛てもなく生き、旅をする生活。

そんな終わりの見えない空虚な日々を終止符を打ったあの日を思い出す。

雨の中かさもささずに歩いていた那智に、かさを差し出してくれたその男こそ、今日の前にいる那智の提督だった。

なにもいわず抱きつく自分を優しく抱き返してくれた提督。

あの日のぬくもりを那智は決して忘れない。

だが、今回のことのように、もし彼になにか被害が及ぶなら、自分はもう……。

「まあ正直今考えるところがちがいが拾われたのかわから無いし、それに今なっちゃんに捨てられちゃったら僕の方が干からびちゃうわけでー」

いったいどこまで那智の心の中を把握しているのかわからないが、その言葉全てがごとごとく那智の不安を溶かしていく。

那智は無意識に握っていた提督の手を強く握り締めた。

「そんなことはない!! わ、私は貴様が居なければ一日で駄目になってしまうと断言できざるぞ!!」

必死に否定の声をあげる那智を見て、提督はニツコリと笑みを浮かべる。

「帰ったらお酒でも飲もうかなー。なっちゃんせつかくだし付き合つてよー」

「……いいだろう、今夜は飲もう! なあに一生逃がさんぞ!」

満天の星がきらめく綺麗な夜、那智の宣言がこだまする。

苦しいことも悲しいこともたくさんあったが、今はとても幸せだとそう思っている。
どうにかしてその気持ちを提督に伝えたい、そう願う那智は笑って見せた。

『独り身男』と『軽巡：川内』

「うえ、うえっ!! ……きもちわりい、飲む量間違えたか？」

トイレで男がえずいている、年は若く二十台になって間もないといった所だろうか、若さに似合わないどこか落ち着いたところのある雰囲気だった。

が

トイレから出て部屋に戻ると、そこには部屋の真ん中で待ち構えてポーズを取りながらドヤ顔をする軽巡の艦娘『川内』の姿。

それを見て男はぎよつと後ろにのぞけりながら驚く。

その様子を見て川内は、肩ぐらいまで伸ばした髪の一部、左右細めに縛られた二本の黒髪の束をピコピコと揺らしながら、嬉そうにピースサインをした。



「あほ、驚かすなよ川内。一体どっから入ってきた？」

「あははー、ごめんごめん。ベランダに隠れてただけど、いつ気が付くかなと思ってでも寒くなっちゃったから窓からひよいとね」

そういつてベランダに通じる窓を指差す川内、男は「鍵かけてたよな……」と、ぼやきながらコタツに入る。

その様子を見てすかさず川内もコタツに入り込む。

「そういや提督大丈夫？ さつきトイレで吐いてたでしょ」

「あー、昨日例の映研のやつらと朝まで飲んでたからなあ」

「またあ？ 最近しよっちゅうだね。山田さんだっけ、あの映画監督志望の人」

「まあ、あいつの映画と艦娘にかける思いは俺も評価してただけどなあ、あの酒豪っぷりにつき合わされるのはたまらんわ。後さすがに日本酒と焼酎のちゃんぽんはどうかかと思う」

「うえ、なにそれ。美味しいの」

「少なくとも俺はもう飲みたくねえ」

そんな会話をしながら、だらだらとテレビを見ていた二人だったが、しばらくして川内のお腹の音が聞こえた。

「飯作るか」

そういつて立ち上がり台所に向かう男。その後ろを、えへへ、と川内が恥ずかしそう

に頭をかきながら追う。

「炊き込みご飯と味噌汁でいいか、川内、冷凍庫から鶏肉とつてくれ。あときんぴらごぼう用のカット済み冷凍パックも」

「はい、他には？」

「あー、後タマネギとしいたけ出して刻んでくれるか、俺は米とぐわ」

「任せておいて！」

川内は冷蔵庫からタマネギとしいたけを取り出し、慣れた手つきでザクザクと刻むと、ボールにカット済みのごぼうとにんじんと一緒にカットした食材をまとめて入れる。

「できたよ提督」

「こつちもだ」

ふたりは連携し慣れた手つきで研いだ米を炊飯釜に入れ、調味料と水を足し、カットした食材を混ぜ込んで、一番上に鳥のモモ肉を一枚入れる。

そして炊飯器にセットすると、最後に炊飯のボタンを押して部屋に戻った。

「出来上がるまでこれ見ようよ、借りてきたんだ」

水仕事で冷えた手をコタツに入れて温めていた男に、川内が借りてきたドラマのタイ

トルを見せる。

そこには「暁の水雷戦隊 輸送大作戦編」と表記されていた。

「いいけど、それ何時間あるんだ？」

「長編のドラマシリーズだから一時間無いくらいだよ、ちょうど終わる頃にはご飯も炊き上がるね！」

そう言つて、再生機器に手早くメディアをセットし終わると、川内はぼすんと男の膝の上に陣取る。

男は後ろから見える川内の細いうなじ。そこから上る優しい香りや、見た目より肉付きのいい体から伝わるどこかやさしい温かさを感じ、まあこういうのも悪くないかなと心の中でつぶやいた。

やがて再生が始まり、簡単な他番組のCMが入った後に本編が始まる。

ドラマの内容は、過去の深海棲艦と艦娘の戦いを描いた戦争ドラマで、起死回生の輸送作戦を執行する為、船に乗り込んだ提督とそれを守る艦娘たちの様子が迫力ある映像で映し出されていた。

ワクワクしながら見ている川内とは対照的に、ボーッと見ている男が口を開く。

「やっぱ川内もこういう戦いがしたかったりするのか？」

ん？ といったふう首だけ男に向けて振り返る川内

「うーん、確かに昔はこういうのに憧れたり、戦いの無い世界に自分が居る意味とか悩んだりとか色々あったけど、今は特にそういうのはないかな。これは単純に面白いから見てるだけな感じ」

「へー、川内でもそんな悩みがあつたんだな」

思つたより真面目な返答に少し驚く男に川内が続ける。

「そりやもう、私だつて艦娘だからね。でも私はまだ提督に早くに出会えたから大分とマシな方だよ。提督に出会えなかつたりして結構な年までこじらせちゃう艦娘もいるしねー。そうなる結構悲惨。もう仕事だけが生きがいみたいな感じ？ 後はなんか結構思いつめちやつたりしたり色々」

「艦娘の権力者が多い理由の一端が、なんとなく分かつてしまったな……」

そんな男の呟きには特に答えず、川内はテレビに向き直り鑑賞を再開する。

やがて絶体絶命のピンチをどう切り抜けるのか、というところで物語が終わる。

そして川内がメディアを取り出しケースにしまっていた所で、炊飯器から炊き上がり知らせる音が響いた。



二人の出会いには珍しい場所といえるかもしれない。

粉雪のまい散る季節、大学受験の試験会場で試験官補助のアルバイトをしていた男は、当時受験生だった川内と出会った。

提督を見つけた川内はその場で、

「せ、川内、参上！ 私の提督、ね、私のこと川内って呼んで私を貴方の艦娘にして!!」
と提督の手を握り締めながらやけに熱っぽく色っぽい仕草で、貴方のものになります
宣言を大声でしたのである。

ちなみに試験開始の十分前。

一生でお目にかかることがあるかないかの生の『艦名の契り』を聞いて、それはもう
会場全体がパニックになった。

黄色い声をあげる受験生、ハンカチを噛む受験生、覚えていた単語を半分くらい忘れて
受験生の阿鼻叫喚が響き渡る。

試験官もあまりの事態にパニックになる中、川内の提督だけが冷静に

「試験に関係のないご質問は試験が終わってからお聞きしますので、まずは座って試験
を受けてください」

と、ド冷静な対応をした。

あんまりに機械的な対応に会場は静まり返りつた、それはあんまりではなからうか

と。

だがそれを指令と受け止めた川内は、もう初めての指令を受けちやつたうれしさで何度も首を縦に振り、キュンキュンな様子で試験に臨み、平均を遥かに超えた点数をたたき出した。

一つ目の試験が終わった直後、川内は直ぐに提督の元に走ると改めて貴方のものになります宣言を懲りずに大声で行った。

「ね、提督！ 夜戦（意味深）なら任せておいて！ うん、ね、夜戦！ そう、夜戦しよ！」

桃色の声をあげる受験生、血涙を流す受験生、覚えていた方程式が恋の方程式に置き換わった受験生の阿鼻叫喚が響き渡る。

試験官もあまりの事態にパニックになる中、川内の提督だけが冷静に「そうですか、それでは試験に受かったら後輩ですね」

と、的はずれな返答をした。

だがそれを聞いて、川内は次の科目満点をたたき出した。

無事入学を果たした川内の合格発表の時の笑顔は、地方新聞の頭を飾るほど満点の笑顔だった。



「あんときやそりやもう、えらいのになつかれちまったなと思つたもんだがなあ」

「ふえ？」

おいしそうにケーキをほおばる川内の姿を見ながら、提督がポツリとつぶやく。

川内は頭にはてなマークを一つ浮かべるも、にやりとして言う。

「ふふふー、こんなものを買つてあるとは。提督も中々気がきくねえ」

食後、二人はコタツに向かい合わせで座りながら、男が冷蔵庫に買つておいてあつたケーキを突つついていた。

ちなみに両方ともチョコレートクリームたつぶりのムースケーキ。

川内はおいしそうに食べていたが、男には甘すぎたのか「うえ」と顔をしかめてると、立ち上がつて台所でコーヒーを淹れはじめた。

「でも提督、甘いもの苦手なのになんで冷蔵庫にケーキなんて有つたの？」

目ざとく見つけて冷蔵庫から引つ張り出したのは誰だよ、と苦笑しながら男は答える。

「お前の誕生日を祝おうと思つて買つておいたんだよ」

「ふえ？ 私の誕生日つて三ヶ月先……あー、そつかちようど海外への短期留学の時期

とかぶっちゃうんだっけ」

そう言つて微妙な顔をしながら川内は頭をかく。

男はその様子を見てやれやれと行つた風に、二人分のコーヒーを持って、一つを川内の前においた。

「ほら、誕生日プレゼント」

「え!? このコーヒー誕生日プレゼントなの!? ちよ、ちよつと提督いくらなんでもそれってないよ!」

「うるせー、貧乏学生に高いもんねだつてんじゃねえ」

「普通ここはあれでしょあれ、こう帰ったら僕と結婚してくれって感じで指輪とか渡すシーンじゃん?」

身振り手振りの一人二役でロマンチックなシーンを再現する川内、無駄にいい演技だった。

「はいはい、わかつたわかつた、遺言にかいといてやるよ」

「それ生きてるうちに渡すアイテムなんじゃないのお!」

「お前俺への誕生日プレゼント今年も忍者グッズのつもりだろ、せめてそれ卒業してからだな」

それを聞いて川内は凶星を突かれたかのような、とても驚いた顔をした。



「ねー、提督ー」

ケーキを食べ終え、食器の後片付けをしていた川内が男に声をかける。

「なんだー」

男はコタツにひじをつけてテレビを見ながら返事をした。

「……あのさ、やっぱ留学についていい？」

「……駄目だつて言つただろ、一人身の男の所に通うだけでも親御さん随分妥協してくれてるんだろが。三ヶ月くらいなんだから我慢しろ」

「でも、でもさあ……」

「どうせ今日も喧嘩して飛び出してきたんだろ、来る分にはかまわないからせめて学校卒業するまでは言う事聞いてやれよ」

「うーー、なによ提督のケチ！ もう！」

男の論すような正論に川内は珍しくプンスカした様子で洗面所に駆け込む。

「ねーーーーーーー！ 提督！ 私の歯ブラシどこーーー！」

も、数秒と経たずに何時もの川内に戻ってしまった。

「窓の所においてある、日光で殺菌していたぞー」

そんな川内に苦笑しつつも、男はのんびりとした口調で返事をした。

しばらく男がテレビを見ていると、シャコシャコという音が後ろで聞こえてくる。いつの間にか川内が男の後ろに立って、歯を磨きながらじつと男の姿を見ていた。

男は背中に川内の視線を感じながら、ただ黙ってそうしている彼女になにも言わず、したいようにさせていた。

短い時間だが、長く感じられるその間、やがて川内がポツリと言葉をこぼす。

「……ほんとに帰ってくるよね？」

「……帰って来なかったら新しい提督見つけろ」

その言葉を聞いて川内は普段なら絶対見せない、まるで心臓を鷲掴みにされたかのような表情を浮かべる。

川内が歯ブラシをかみ締める音と、握り締める音がギシリと部屋に響いた。

ほんの少しの沈黙の後、川内は搾り出すように言葉をつむぐ。

「なにそれ、つまんない、二度と言わないで」

そんな川内がこぼした慣れない凄み言葉を聞いて、少しおかしく感じてしまった男がクスリと笑いながら「すまんすまん」と謝罪を述べる。

男には先ほどとは違う、少しだけ温かい沈黙が部屋を包んだように感じられた。

「……ん？ あ——————！！ 那珂が出てる！！」

しんみりした空気を吹き飛ばすかのような叫びを上げて、川内がテレビにかじりつく。

テレビでは丁度彼女の姉妹艦（実姉妹ではない）である軽巡の艦娘『那珂』が歌番組で歌っていた。

「提督！ これ、これ録画どうするの!？」

「そんな便利な機能は無い」（無慈悲）

「ええええええええ!!」

テレビでは今日も那珂ちゃんが百億万ドルの笑顔を振りまいていた。



草木も眠る、うしみつアワー

夜戦バカの血が騒いだのか、突然ベッドから起き上がる川内。

「提督!! 起きて起きて!!」

つよく揺さぶられて、一緒に寝ていた男がだるそうに身を起こした。

「……おい、何時だと思ってるんだ」

「提督!! 私この近くにあるラーメン屋に行きたいの思い出した!!」

「二時過ぎてんじゃないやねえか、開いてるわけ無いだろ……」

男はだるそうに時計を確認するも、川内は荷物の中から取り出したチラシを男の顔に押し付ける。

「大丈夫!! ラーメン屋大湊! ここは五時までやってるみたいだから!! ココ! わかる!」

「あー」

パジャマから外着に着替え、男は川内に引きずられるようにして外に出る。

自転車を引つ張り出して、川内を後ろに乗せると眠たい目をこすりながら男はラーメン屋に向かつてこぎ出した。

外はすっかり冬の気温で、二人の口から白い息が昇る。

後ろに乗った川内のハイテンションとは正反対の底いテンション

「ラーメン！」

「ねみーよ」

「ラーメン！」

「だりーよ」

十五分ほど自転車で走っていると、深夜だというのにやたら明るい『大湊』と書かれた看板が見えてきた。

男が店の前の駐輪場に自転車を止めると、川内が「ツホ！」つと見事なバク中を決めながら飛び降り着地する。

男はそれを見て苦笑を漏らし「ほら行くぞ」と川内をほうつて店に入る。慌てて川内が男の後を追う。

店内はそこそこ賑わっており、二人はテーブルに座って注文をとりに来た店員にスタンダードなラーメン二つを注文した。

注文してから数分と待たずラーメンが運ばれてくる。

「ハイッ！ ラーメン二つお待ちッス！」

元気な掛け声と共に目の前に出される熱々のラーメン。

深夜だろうとラーメン屋の熱気は衰えることはないと感じられる。

二人は出された割り箸を割ってラーメンを食べ始めた。

「うーうーうーん！ おいしい！ 美味しいね提督！」

「まあ、うまいけどさあ……。寝起きでラーメンはつらいというか、できれば昼に食いた
いっていうか……」

「そお？」

対極のテンションでラーメンを食べ終えた二人は店を出る。

ラーメン屋のオヤツさんは終始笑顔だった川内を気に入ったのか、餃子のサービス券を付けてくれた。

「おいしかったね、提督！」

「味はな」

男は後ろに川内を乗せ、行きと同じように今度は家に向かって自転車をこぎ出す。

「ねえ提督、また来ようね」

「まあ昼ならな」

「えへへ、約束だよ」

「へいへい」

約束、約束、とうれしそうに声をあげながら、後ろではしゃいでいる川内。

二人の温かさに嫉妬してか、空からはらはらと粉雪が降り始めていた。

三カ月後

「えっ？ なにそれどういうこと？」

海外に旅立った自分の提督を見送って三ヶ月たったある日、提督成分の不足で毎日もやもやしていた川内の元に、連絡が入る。

相手は川内と提督が通っている大学の映研の部長で、知らせを聞いた川内は映研の部

室を訪れていた。

偶然にもその日は川内の誕生日だった。

「……あいつ、もし自分が死んだら君に渡してくれってこれを」

部長の言葉の意味まったく理解できず、震える手で受け取った手紙を恐る恐る開封する川内。

手紙には海外で病気の治療を受けること、黙っていてすまないという謝罪、川内の幸せを願う言葉がつづられており、テレビの後ろに貼り付けた封筒に誕生日プレゼントを入れておいたという言葉で締めくくられていた。

「あいつずっと闘病してて、それを隠すために俺だけにはそのことを言ってたんだ。あいつ最後まで君と居るための時間を延ばそうとがんばったみたいんだけど、その、昨日向こうで亡くなったって連絡があったんだ……あいつ、あいつはさ……」

川内は部長の言葉を最後まで聞かずに飛び出した、そして提督の部屋に向かって走る、走る、走る。

「うそだ！　うそだ！　うそだあああッ！」

川内は誰にはばかることなく叫びながら走り続ける。普段の軽快な身のこなしとは程遠い、がむしやらかな走り、何度も転びその度に起き上がる。

まるで動くことをやめてしまったらなにか恐ろしいものに自分が覆われてしまっ

うで、その恐怖から逃れるように、助けを求めするように川内は走り続ける、自分の提督が待っているかもしれない彼の家へと。

きつとこれは全部嘘で、自分を驚かせるために提督が仕込んだ悪趣味なサプライズイベントかなにかだ、きつとそうだ、だから確かめなきや、提督はきつと今頃家でニヤニヤしながら自分が来るのを待ってるんだ。

こんな悪趣味なことをして、一発ひっぱりたいでやらなきや気がすまない、でも一発ひっぱりたいたらチャンスをあげよう、自分が欲しいものをプレゼントしてくれたなら許してあげよう。

そんな想像を膨らませながら走り続け、やがて提督のアパートに到着する。

階段を駆け上がり、提督の部屋のドアを渡されて、ずっと大事に持っていた合鍵を使い開ける。

「提督お帰り！ 馬鹿！ 悪趣味だよ!!」

そう悲鳴に近い叫びを上げながら部屋に入るも、そこに人の気配は、自分の提督の気配は……無かった。

恐る恐るテレビの後ろを確認すると、確かに封筒が貼り付けられていて「誕生日おめでとう」と短い言葉がつづられたカードと一緒に、銀色に輝く指輪が入っていた。

『はいはい、わかったわかった、遺言にかいといてやるよ』

昨日のことにように、提督が言っていた言葉が思い浮かぶ。

「なによそれ、ふざけないでよ……なんなのこれ、全然面白くないし、全然うれしくない」
あふれ出た涙が零れ落ち、カードの文字がにじむ。

限界だった、川内は指輪を強く握り締めて絶叫する。

「勝手に死んで勝手に渡してんじゃないわよ！　こんなの、こんなの貰っても……提督
がいなきゃ……意味、ないじゃない!!　ばかああ!!　うわああ、うわあああああ
あ!!」

恋愛の終わりは死に別れか生き別れしかないと言った人が居る、だがもし提督と艦娘
との関係を恋愛と例えるならば、それは前者の終わりしかありえないのだ。

己の半身ともいえる提督をなくした艦娘の泣き声が、いつまでも部屋に悲しくこだま
した。

『独り身男』と『軽巡：川内』

「はい、OKです！ これで全てのカットの撮影終了になります！」

「よっしゃー！ おわったー！」

川内は克蘭クアップの宣言を聞くと、先ほどまでの絶叫と涙が嘘だったかのように明るい笑顔を振りまきながら、部屋に居たスタッフに挨拶をしてまわった。

そして最後に監督と「提督役の提督」の元に駆け寄る。

「提督お疲れさま！」

「おう、お疲れ」

駆け寄ってきた川内の頭をワシヤワシヤと乱暴になでる提督、川内は乱暴なその手つきに嫌がるそぶりも見せず、むしろ嬉しそうにされるがまだ。

その様子を見ていた監督が胸焼けしたような表情を浮かべる。

「はいはい、仲がいいのは結構だがね。いちやつくのはできれば人目の無い所でやってくれませんかねえ……」

「なによ山田さん、せつかくこんなひどい映画に出てあげてるのにー」

「ひ、ひどいとはひどい！ この山田の映画としての監督デビュー作にして魂を削って描いた生涯の傑作。艦娘と提督の出会いと別れを描いたノンフィクション風映画のどこに文句があるというのだ！」

「はははー、私の提督が死ぬなんて脚本持ってきたときはほんと、ほんと……魂を削ってやろうと思っちゃったけどね……」

急に暗い顔になり低い声になった川内に、監督と部屋に居たスタッフたちは「っひー」と声をあげちびりそうになった。

そんな川内を落ち着かせるように、ぼんぼんと頭をなでる提督。

「まあまあ、お前も役者になったんだから忍者以外の役も回してくれる山田に感謝しろって」

「ぶーぶー、それでもこのシナリオはどうかと思うー！」

「そうは言うがな、お前が素人の俺が提督役じゃなきや嫌だつて駄々こねたからでもあるだろ。俺のシーンが少ないこのシナリオじゃなきや絶対無理だ、マジ無理だ」

「あはは、それもそうなんだけどさ」

そう言っただけで悪そうに頭を掻く川内、そんな川内をやれやれといった風に見ながら、提督の男は川内の左手を掴む。

およ？ つとする川内をみてクスリと笑いながら、先ほどスタッフから渡された小道具を川内の指にはめた。

「ほらやるよ、誕生日おめでとう」

「へ？」

信じられないものを見るように薬指にはめられた銀色のリングを見つめる川内、ふと回りを見るといつの間にかカメラが回っていた。

スタッフ一同も皆とんでもなくいい笑顔をしていた。

「えっと、て、提督？」

慣れないことをしてか、それとも別のなにかか、心なしか顔を赤くして目を逸らす提督の姿。

「よう親友、これで独身生活ともおさらばだな！ おめでとうチキショウ！」

数秒後、山田監督のその言葉の意味を理解した川内は、うれしさを爆発させ提督の胸に飛び込んだ。

なお、この時の映像は特典として同封され、映画の興行収入も含め戦後史上歴代トッ

プテンに入る売り上げを記録した。

これこそが後年、艦娘を題材に扱えば右に出るものはいないといわれるようになる、艦娘映画界の巨匠、山田監督のデビュー作である。

『僕』と『正規空母：赤城』

この世界は一度滅びかけたらしい。

しんかいせいかんという、怪物が現れて世界をめちやくちやにしたんだ。

だけどどこからか現れた艦娘と、その辺に居た提督と、あと沢山の人たちが力を合わせてしんかいせいかんをやっつけて平和を取り戻したんだって。

その後、艦娘たちは妖精さん（以下一話参照

まあ、僕がどうしてこんな長々とこんなことを思ってるのかだけど……。

「……」

何故か僕が寝ている病院のベッド、その隣に寝転がりながらさつきからじつと瞬きせず、かれこれ十分以上僕を見続けている白衣の人。

「航空母艦、赤城です。空母機動部隊を編成するなら、私にお任せくださいませ」

あ、そういう名前の艦娘なんですね。

……どうにもその艦娘らしき人に見つめられている真っ最中だからだ。

『僕』と『正規空母：赤城』

なんで僕が病院のベッドで寝ていて、隣に赤城さんが寝てるかは話せば短い。

今日の昼休み、いつものように学校に住み着いてる野良猫に牛乳をあげていたときのことだ。

なにか空から落ちてきた、それが人の形をしたのが一瞬見えたのを最後に僕の記憶は途切れて、気が付けばこのベッドで寝ていた。

そして目がさめたらそこに、きれいな顔をした白衣を着たお姉さんが、隣で寝転びながらこちらを見ていた。

それだけ。

「あの、おねえさ……」

「航空母艦、赤城です。空母機動部隊を編成するなら、私にお任せくださいませ」
キツリとした表情だけど、寝転びながらそんなこと言われてもいまいち説得力がない
と思う。

「ところでここはどこで……」

「航空母艦、赤城です。空母機動部隊を編成するなら、私にお任せくださいませ」
……。

名前を呼ばないと先に進めないらしい、友達がやっていたゲームで「はい」と答えないと先に進めない場面があったけど、あんな感じだろうか。

「……赤城……さん。ここはどこで……」

僕が名前を呼んだ瞬間、赤城さんがにこりと笑って僕に向かって手を伸ばす。

あ、抱きしめられるな、僕がそう思った瞬間。

「すみません、こちらに孫が居ると聞いて来たのですが……」

病室のドアを開けておばあちゃんが入ってきた。

「保護者の方ですか？ 安心してください、お孫さんはご無事ですよ」

一瞬だった、一瞬できりつとした表情を浮かべながら何事も無かったかのように、最初からそこに立っていたかのように赤城さんが移動していた。

はやい。

白衣の白との違いが栄えるようにきれいな長い黒髪。それがふわりと揺れていなければ、僕も赤城さんが最初からそこに居たと自分をうたがっていただろう。

「校庭で倒れていたようで、恐らく転んで頭を打ったことによる軽い脳震盪かと」
「そうですか、よかったです……」

おばあちゃんがホツとしている、心配を掛けてしまったようだ、もうしわけない。

「ところで先生はその……」

「あ、申し遅れました。私は南雲病院、ここの院長をしております赤鬼（あかき）と申します」

そう言つて赤城さん、赤城先生？ は丁寧に腰を折つておばあちゃんに礼をする。

おばあちゃんも礼を返す。

「それでなのですが。念のため。ええ、念のため何日か検査入院していただけますか？」
「はい、なにとぞ孫をよろしくお願いいたします」

別に大丈夫だとは思つたけど、そういうことになつた。

なんだか嫌な予感しかしないけど、そういうことなら仕方ないのだろうか。



少し話をしてから、僕の着替えとそのほか入院に必要なものを取りに、一度おばあちゃんの家に戻って行った。

ちなみにおばあちゃんは学校からの連絡を受けて、慌てて飛び出してきたせいで、財布を忘れてしまったらしく。取りに戻る時間も無く困っていたら、そこにとがった金色の髪型のかっこいいお兄さんがどうしたのかと話しかけてきたらしい。

おばあちゃんが事情を話すと、なんと財布の中のお金を全部渡して、渡されたおばあちゃんが受け取れないと言ったにも拘らず、なにも言わずに去って行ったんだとか。

……なにそれやばい、ちよっかっこいいい。

おばあちゃんは絶対探し出して見せると言い、特徴がとがった金髪でかっこいいお兄さんというくらいしかなく、難しいかもしれないけど、僕にも探してみても言っていた。がんばってみようと思う、おばあちゃんが受けた恩は孫の僕が返さなければ。でも、とりあえず目の前の問題がある。

「……」

まだ見ている、ベッドの隣に寝転がりながら、赤城さんが僕をじつと見ている。

「あの、院長せんせ……」

「航空母艦、赤城です。空母機動部隊を編成するなら、私にお任せくださいませ」

あつ、はい。

「赤城先生はその……」

僕が名前を呼んだ瞬間、赤城さんがにこりと笑って僕に向かって手を伸ばす。

あ、抱きしめられるな、僕がそう思った瞬間。

「看護婦だ。お前に最高の個室を与えてやる!!」

スパンと病室の扉を開けて、眼帯をした看護婦さんが入ってきた。

赤城さんがすぐく不愉快そうな目で、体を起こしながらその看護婦さんをにらむ。

「気持ちわかるが院長、流星にこの大部屋に院長が入り浸って、ベッドに寝転びながらじっと子供を見続けているなんて噂が立ってしまったてはまずい。とにかく部屋を移してくれ」

「個室……いいわね、うん。それもそうね」

なんだか取ってつけたかのような、それもそうね、に聞こえた。

あとなぜだか、個室は色々不味い気がする。

「あの、この部屋でいいです。お金ももつたないので……」

「遠慮なさらず、治療費含めて費用は全て病院持ちですので」

ピシヤリと断言する赤城さん。

「ええ……」

「“私の”提督になにかあれば一大事です、これは極めて私情的な行為ですので提督は御気になさらないで下さい」

あ、やっぱり僕は赤城さんの提督でもあるようだ。
なんとなくわかっていたけど。

「それでは、直ぐに移りましょう、病室変更を急いで！」

「体の傷が疼く。早く早くとけしかけてくるようだ……」

そうして僕は個室へ運ばれた。

へるぶみーおばーちゃん。



個室に移った日の夜、草木も眠るうしみつあわー。

もしかして僕はなにかの危機に陥ってるのではないのだろうか、今思っている。

何故なら。

「……」

当然のようにパジャマ姿で、僕のベッドにもぐりこんでいる赤城さんが隣にいるから。

そして相変わらずジーツと僕を見ているからだ。

ふとなにかの気配に気が付いて目を覚ましたら、赤城さんが隣にいたのですごくびっくりした。

小さい頃、クモの巣に引つかかっているちようちよを見て、このちようちよは今どんな気持ちなんだろうかって思ってたことがあったけど、この状況は今まで経験してきた中で最高にそれに近い状況なのではないのだろうか。

「上々ね」

うん、文句なし。これ本当にその状況、まじめに。

「あの、赤城先生」

僕が名前を呼んだ瞬間、赤城さんがにこりと笑って僕に向かって手を伸ばす。

話が進まないのです、とりあえずピシヤリとその手を叩き落とした。

「きやあつ！ 誘爆を防いで!!」

しないから。

「なぜ僕のベッドにもぐりこんでいるのかは置いておいて、お聞きしたいことがあります」

「はい？」

器用に寝転びながら首をかしげる赤城さん。

「艦娘については学校で習いましたし、ひいおばあちゃんが艦娘だったので、一応なんとなく僕が赤城先生の提督というのはわかるのですが。赤城先生はえつと……僕にどうしてほしいのですか？」

「……」

結構真面目な話、僕はまだ子供だし、赤城さんは大人だ。

加賀さんや翔鶴さんのこともあるし、僕にも一応将来というものがある。

彼女たちの都合で僕の人生をどうするか、ではないけれど、提督としての適性を持つて生まれてしまったのなら……

うーん、駄目だ。

結局の所、正直僕もまだどうしたらいいのかわから無いのだ。

だからこうして赤城さんに聞いているのだと思う。

「そうですね……」

どこか穏やかな目で、おばあちゃんがそうするように、赤城さんは僕の頬をなでる。赤城さんの手は、すべすべで冷たくて気持ちいい。

「提督はまだ子供です。そんな提督に多くを望むのは酷でしょう。そしてなにより、私

はまだそれを望めるほど提督のためなにかさせていただけでもありません」

「そういう終わってから、どこかさびしそうな目をする赤城さん。」

とても距離が近いので、赤城さんのはく息の音も聞こえる。

「ですが、もし叶うならば、どうかおそばに居ることだけでも許していただけでしよ
うか？」

「……」

「そう言つて僕の右手をそつと両手でつかんで、ゆつくりと胸に引き寄せる赤城さん。
その、とてもはかなげな気配を漂わせる赤城さんを見てしまい、僕は

「なんか危険な気配を感じたのでナースコールのボタンを押した。」

「俺をこんな時間に呼ぶ馬鹿は何奴だあ？」

「そつこうで、看護婦さんがスパンと個室の扉を開いて現れた。」

「僕です、赤城先生を引き取ってください」

「そして僕のベッドに入り込んでいた赤城さんを見て、看護婦さんの顔が固まった。」

「あつ、はい、うちの院長がすみません」

「そうして赤城さんは、ずるずると引きずられながら看護婦さんに連れて行かれる。」

とりあえずその日の夜は、それから特に何事も無く、ぐっすり眠ることができた。



次の日、おばあちゃんがお見舞いに来てくれた。

病室には赤城さんもいて、二人は特に僕に問題が無いことの話をし、それからおばあちゃんのお母さん、僕のひいおばあちゃんの『天城』のことを楽しそうに話していた。

「あら？ 天城さんですか。もちろん私は直接お会いしたわけではありませんが、艦娘として天城さんのことはよく存じております」

「それはそれは、でもまさか赤鬼先生の提督がぼんだったなんて、世の中不思議なものですねえ……」

そして二人は僕のほうを見て微笑む。

「はい、私もこの年ですし。正直諦めていた所もあつたのですが、まさか自分の病院に担ぎ込まれてきた患者さんが自分の提督だったなんて」

赤城さんは、昨日の挙動が嘘だったかのように上品そうに口に手を当てて微笑む。

「やはり運命的なものを感じられて？」

「ええ、おそらくお婆様のお母様。天城さんもこの気持ちを味わっておられたと思うと、

なんだかうれしく思えます」

誰だろう、これは本当に昨日とおなじ赤城さんなんだろうか……

「その、実はそのことで少しお話が……」

おばあちゃんは急に真面目な顔をする、そして僕には聞かせられない話なのだろうか
「できれば場所を移して……」と赤城さんにおねがいし、赤城さんが「でしたら院長室で

……」

と、言いかけたとき。

おばあちゃんは急に苦しそうにおなかを押える。

僕はベットから飛び起きて、あわてておばあちゃんの所に駆け寄った。

「おばあちゃん！ おばあちゃんどうしたの!？」

「ぼ、ぼん……」

僕に心配かけまいとしてなのか、おばあちゃんは苦しそうに微笑み

床に倒れた。



おばあちゃんは直ぐに緊急治療室に運ばれて、治療を受けた。

正直、僕が入院してて本当によかったと思う、処置が遅かったらあぶなかったと看護婦さんが言っていたのが聞こえたから。

治療室の前で待っていた僕のところに、赤城さんがやって来る。

そしておばあちゃんの状態を丁寧に説明してくれた。

内容はむずかしくてわからなかったけど、どうやらおばあちゃんはおなかの病気だったみたいで、直ぐにでも手術をしないと助からないらしい。

手術の同意はなんとかおばあちゃん本人から取れたようなんだけど、赤城さんは僕にもいろいろと丁寧に教えてくれた。

「赤城先生、どうかおばあちゃんを助けてください、僕にできることならなんでもします」

「手術の執刀は私がします、提督はどうか落ち着いてお待ち下さい」

おばあちゃんが死んじゃう。

そう考えると頭の中ぐちゃぐちゃになって、泣いてしまっただった。

「でもっ！」

赤城さんは、そんな僕をぎゅっと抱きしめてくれる。

大きくて柔らかいものに包まれるかんしょく、そして消毒薬のにおいがふわりとし

た。

でもそれは、どこか落ち着けるにおい、僕は少しだけ落ち着けた気がした。

「大丈夫です、私は艦娘で、貴方は提督。ですがそれと同時に私は医者です。患者のために全力を尽しますので。安心してください」

ほんほんと、僕のあたまを優しくなでてくれる赤城さん。

「ですが、できるなら一つだけ望んでもよろしいでしょうか？」

「僕にできることならなんでも、血でもなんでも、必要ならなんでも使つて下さい」

赤城さんは、どこか迷うように、でも、強く求めるような感じの目で僕を見つめる。

「……命じてください、提督として、提督らしく、艦娘であるこの赤城に」

真剣な目で僕を見つめる赤城さん。

赤城さんも不安なのだろうか、それとも、それが僕にできるただ一つのことだから、そんな僕のために言ってくれているのだろうか。

それはわからない。

でも

「赤城、おばあちゃんを助けろ」

とても自然に、そんな言葉が口から出た。

それが必要だつていうなら、いくらでも言う、おばあちゃんが助かるなら。

赤城さんは僕の言葉を聞き、胸に手を当てて、ぐつと目を閉じた。

そしてしばらく僕の言葉をかみ締めるようにしてから、すつと目を開け、とてもまっすぐな瞳で僕をみた。

「二航戦赤城、出ます！」

立ち上がり、白衣をひるがえして歩き出した赤城さんのその姿は、とても頼もしかった。



すごく心配したんだけど、おばあちゃんの手術はあっさり終わった。

いや、難しい手術ではあったようだけど、赤城さんがめちやくちやすごかったらしく、看護婦さんやお医者さんたちがあんなにすごい手術は見たことがないと、噂しているのが聞こえてきた。

だけど自分は安静ということで、僕と入れ替わるようにおばあちゃんは病院に入院することになった。

僕はすつとおばあちゃんについていたかったけど

『おばあちゃんのことはいいいから、明日からはちゃんと学校に行きな』

そうおばあちゃんに言われてしまったので、ひとまず家に帰ることになった。

今は赤城さんの高そうな赤い乗用車に乗せて貰い、家に送ってもらって帰る途中である。

「おばあちゃんは大丈夫でしょうか？」

運転中の赤城さんに聞いてみる。

「手術は成功ですし、命に別状はありませんよ。そう大きく切ったわけでもないのですが、時間がかかるかもしれないですね。もちろん退院されるまではいつでも病院へ来ていただいて構いません」

そう言って、僕の心配も次に聞きたかったことの答えもくれて、微笑んでくれた。

「ありがとう、赤城さん」

「当然のことをしたままで、提督」

赤城さんにとっては自分の仕事をしただけだったのかもしれないし、提督の命令を聞いただけなのかもしれないけど、ちゃんとお礼を言わなければと思ったので、改めて言ってみる。

「それでも、ありがとう赤城………さん」

危うく手術の前の時のかんじで呼び捨てにしそうになってしまった、怒られないかな？

でも赤城さんは僕のその言葉を聞いて、にへら、という表現が似合いそうなほどに、とろけた笑みを浮かべている。

ちなみに運転中なので赤城さんはずっと前を向いたまま。

ちよつと気恥ずかしくなってしまうた僕は、窓の外の風景を見る。

そこはちよつと、あれから毎日のように待ち伏せしてて、こちらをじつと見てくる二人、加賀さんと翔鶴さんが待ち伏せをしている場所だった。

「加賀さん、今日も待ってたのかな……」

「え？ 加賀さんを知っているのですか？」

ボソリとつぶやいた僕の声を聞いて、きよとんと、少し驚いた顔で赤城さんが聞いてくる。

「はい、僕はどうも加賀さんの適性を持つてるようでそれ以来何度か帰り道で。あと翔鶴さんの適性も、その二人にその帰り道で、この前一緒に会いました」

「へえ……」

赤城さんが、ちよつとらしくない感じの声色になる。

「加賀さんと翔鶴さんはその後二人でどこかに行ってしまったけど」

「加賀さんが翔鶴さんと一緒に……それはいつのことでしょうか？」
赤城さんの目が、すつと細くなる、ちよつとこわい。

「えつと、一週間くらい前です」

「一週間、そう……」

何故か据わつた目で前を向き遠くの方を見る赤城さん、こわい。

「赤城さんは加賀さんのお友達なんですか？」

聞いてから後悔した。

「……加賀さん？ いえ、知らない子ですね」

だって、よくわからないけど、こちらと目を合わさず、何故かそう言つて微笑む赤城さん。

でもそのふんいきは確かに『赤鬼』さんだったから。



赤城さんに家の近くの公園まで送ってもらい、車を降りる。ちょうど夕焼けがあたりを照らしていて、海に向こうの水平線に夕日が沈む様子が見えた。

「じゃあ、これからは毎日学校が終わった頃に迎えに行かせて頂きますので、学校で待つていて下さい」。あとなにかあったら渡した電話番号に連絡してくださいね、直ぐに出ますので」

「はい、今日はありがとうございます」

赤城さんは手を軽く振りながら優しい笑みを浮かべると、車を発進させた。何度か名残惜しそうにこちらを振り返っていたけど、やがて車は見えなくなつた。

今日はいろんなことがあつた気がする、僕はどつと疲れてしまった。

けど、おばあちゃんが無事で本当によかつた。

僕はさっきの赤城さんの迫力にあてられて、少しもおおしてしまつたので、近くの公園のトイレで用を済ますことにした。

トイレから出ると夕日が沈むところで景色がきれいだったので眺める。

ここは『艦夢守市（かんむすし）』

大きな港があり、その港と街の周りをぐるつと山に囲まれている、そんな立地の場所。

都会とまではいかないけれど、それなりに騒がしくてそれなりに穏やかな大きさの街。

そしてこの街には一つの噂がある。

それは提督適性者が集まるといふ噂だ。

この街には沢山の人間と、居るかもしれない提督適性者たちと、その噂を聞いてやってきた割と多くの艦娘たちが平和に暮らしている。

つまり、ここが僕の住んでいるところだ。

後よくわからないけど、どうやら僕には『赤城』と『加賀』と『翔鶴』の適性があるようなのだった。

もしかして、まだ増えるのかな？

『無職男』と『駆逐艦：不知火』

無職だよ。

あーもうこんな時間か。

昨日から動く気力も湧かなくて体育座りしてる。ずっと布団の上に居るので時間なんて分かんなかったけど、時間がたつのが異様に早かったな。

そういえば昨日からなんも食ってない、そう気がついた瞬間にぐうぐうって聞こえて乾いた笑いが出てしまった。

フフフ、(食い物) 入れて欲しいのか？

……流石に体が悲鳴を上げてきたのでレトルトカレーを食うことにする、米を炊く気が無いのでルーのみを二袋。

いやー参ったね。思ったより職が決まらなくて身動き取れねえぜ！

かッー！ つれーわ！ 職決まらなすぎ過ぎてつれーわ！

まっずいんごお……。

貯蓄はまだあるんだが、メンタルがどうにも持ち直してくれない、さすがに十社連続でお祈りされるとは思わなかった、リアットの呪いか？（自業自得）

腹にモノも入れたし、気分をリセットしようとしてシャワーを浴び、風呂から上がって全裸で部屋に戻ろうとしたら、最近なんとなく設置した泥棒対策用のトラップに自らはまっつて派手にこけた。

おい、どうしようもない状態になったこの俺の気分を弁償してくれ過去の俺。

涙を堪えながら服を着る、ペランダに出て煙草を啜えて震える手で火をつけた、泣くな俺。

ぼけつと煙草を吸いながら五階から見える外の景色を眺めていると、登校中と思われるランドセルを背負った男の子の姿。

その後ろを隠れるように同じ年頃の女の子が、こつそりと後をつけてるのが目に付いた。

好きな男の子を見ていたい恋する女の子か、若いつてステキやな……。

より絶望が増した気分をどうかしようとして、部屋を掃除してたまった郵便物を取りに行く。ほとんどが有象無象のチラシばかりだったが、その中に一つ気になる内容のものがあった。

大型のスポーツジムのチラシで、このチラシをもって行けば一日無料体験で施設を使

わせてくれるらしい。

普段ならそのままゴミ箱にポイーだが、どうにもメンタルが優れないので気晴らしに行ってみることにする、こんな時は体を動かすのが一番だからな。

てなわけで行動は迅速に、早速今から向かうと決めた。

プールもあるのか……水着も持っていこう。

やましい気持ちなんて無く、水着姿の美女の姿を拝めたらいいという期待くらいしかない。

さあ、未来は明るいぞ、いざゆかん魅惑のスポーツジムへと……。

『無職男』と『駆逐艦：不知火』

「期限切れ？」

「はい、無料体験は昨日までとなっております……」

ジムに到着後、受付のおねえさんにチラシを見せたところ、このような返答をいただきました。

ガーンだな、うん、ガーンだ、泣きたい。

確かに書いてありますね、はい、ちゃんと読まなかつた俺が悪いんです。

あまりに俺がどん底の空気を出していたからだろうか、おねえさんは「責任者に聞いてみますね」と、どこかに電話をかけようとしてくれたが。

「ああ、いや、いいんです気になさらないでください」

「ですが……」

俺のようなクソ雑魚ナメクジの為にわざわざお手数をおかけするのも忍びない、お願い、これ以上俺をみじめな気持ちにしないでくださいなんでもしますから。

そんな押し問答を何回か繰り返し、ようやく諦めていただいた。

ああ、もう泣きたい。

とぼとぼと肩を落しながら出口に向かうと、ちょうど入り口の自動ドアが開き見覚えのある鋭い眼光の少女が現れた。

確か陽炎の姉妹でピッチャーをやった子だ。

「あら、あなたは……」

灰色のパーカーを着て前のポケットに両手をつっこんでる、やたらなじんでいる落ち着いた桃色の髪の少女。

以前は鋭い目つきが印象的だったが、よっぽどおどろいたのか今は目を丸くしている。

「あー、久しぶり、えーっと」

「……不知火です」

「そうそう、暗黒な大会シリーズの技名っぽい名ま……なんでもないですハイ」

言いかけて不知火がおつかない目つきになっていたので、びびった訳じゃないけど怖かったからごまかしてしまった。

「それで、貴方はどうしてここに？」

「あー、まあなんとにかくこのチラシを見て、タダで使えると思ってきたんだけど、昨日までというオチでな……」

自分で言つてて恥ずかしくなってきた、泣きたい。

不知火はチラシを手に取りしばらく眺めると、「少しまっていてください」と言い残し、受付のお姉ちゃんの所に向かっていった。

受付のお姉ちゃんはひどく驚いた様子で、何度も不知火に頭を下げている。

怖いもんなあ、あの目つき。

そして俺の方まで戻ってくると、俺の手を掴んで奥に向かって歩き出した、チカラ強い。

なんで君ら姉妹は人の手を掴んで引つ張るのがすきなのかね。

いやまで、受付前を通過しちやったぞ、警備員呼ばれちやう。

「おいおいまでまで、俺登録もしてないし金も払ってないぞ!？」

「大丈夫です、話は通しておきましたから。不知火と一緒にならいつでもどこでもフリーパスです」

ちらりと受け付けのお姉ちゃんの方を見ると、こちらに向かって頭を下げていた。

おいおい、不知火なものヌイ。

「こちらが男性用の更衣室です、着替えは持っていますか、必要なら用意させますが」

「いや、持ってきてる、大丈夫だ」

いや、用意させますってなんですか。

もしかして不知火さんVIP? VIPなのか?

深く考えると色々格差社会を覗いてしまいそうだったので、おとなしく着替えることにする。

といつても、寝巻き代わりに使ってるジャージだけだな。

あ、このロツカーちゃんとお金返ってくるやつなのね、助かるわ。

野郎の着替えなどわざわざ説明するのもアホくさいので、着替え終わったという事実だけが残る。(ジ○ジョ風)

そんな感じで男子更衣室の外に出ると、そこにはすでに着替え終わった不知火が待機していた、早いなオイ。

といますか不知火さん、なんですのその格好。

ハーフサイズのスパツツに、肩、背中、へそ丸出しのセパレート陸上着みたいな上、下とも肌にびつたりと伸縮性の高そうな黒い布が張り付いている。

軽くストレッチをして体を伸ばしてくねらせ、こちらを見るその瞳はどこか挑発的だ。

無駄な肉の一切無いスレンダーな体をこれでもかと、アピールするその姿はなんというか。

「あれだな、殺し屋みたいな格好だな……」

スパアンツ！

ケツに走る鋭い衝撃、遅れてやってくる空気のはじける音、驚いて見るといつの間にか後ろに回って不知火が、俺のケツにキックを叩き込んでいた。

痛くは無いがすげえびっくりしたよ！

え？　なんで痛くないの？　なにその高度な技術の蹴り!?

「なにすんだ」

「知りません」

プンスカしながらどこかに向かつて歩き出す不知火。

ふむ、あの年頃ならセクシーな女の殺し屋とか、かつこいい例えでうれしいものだと
思っただが。

悪いこと言ってしまったかもな。

さて、これからどうしたものか。

とりあえず勝手に施設見て回ってもいいのかな。

と、考えていたら、どこかに行ってしまったと思ってた不知火がすごい勢いで戻って
きた。

え、なに、忘れ物でもしたのか？

「………ついてきてください、でないと施設を『使わせません』」

「お、おう」

あ、追いかけて欲しかったのね、ごめんごめん。

ん？　あれ今なんか不知火さん……と、なにか引つかかることを言ってた気がしたん

だが、俺の手を掴んで歩き出した、チカラ強い。

だからなんで君ら姉妹は人の手を掴んで引つ張るのが好きなのかね。

そんなこんなで連れて来られた最初の施設。

今はやりのボルダリングとかいう、人工的に埋め込まれた取っ掛かりを使ってやる壁のぼりだ。

しかし、いつも思うがこのボルダリングというやつ、なぜ金を払って壁を登るのだろうか？

崖のぼりなんてガキの頃に散々やっただろうに、なんで大人になってまでやるんだ。専用の靴と、滑り止めの腰から下げるチョークパックを施設入り口の受付で借りる。

ちなみにここの受付もやたら不知火に頭を下げていた、コリヤますます不知火さんVIPの娘説あるんじゃないかなろうか、怖いから聞かないけど。

二十人近い姉妹を持つ陽炎の家族問題に首突っ込むのダメ、ゼツタイ。

「手本を見せます」

そう言つて不知火はカラフルな取っ掛かりを掴みながら、垂直の壁を登り始める。

なるほど、どれでも好きな色の取っ掛かりを使っていいというわけではなく、同じ色

のものしか使っちゃダメなのか。ふぬ、奥が深いのかもな。

最適解を探す、体を使ったゲームみたいなイメージだな。

確かにはまれば面白いのかもしれん、ガキの頃に登る壁なんてせいせい二つ三つだしな、思い返せばルートを探しながら登ってた頃が一番楽しかったか。

そんなことを考えているうちに、まるで蜘蛛のように、ヌメヌメと手足を上手く使いながら高い所に登っていく不知火。

なんとというか細っこい体なのに筋肉が意外とあるんだな、布面積が狭いからよくわかるわ、手、肩、腰、太もも、それぞれの場所が力を入れた時に膨れるのがよくわかる。

五メートルほどの場所にある、『G』とマークされたゴールにタッチして、登ったのと同じような速度で降りてくる不知火、最後にホツと降り立つと「どうですか？」といわんばかりのドヤ顔でこちらを見た。

ちよつとうざいけどまあ、確かにたいしたものだ、素直に褒めよう。

「上手いもんだな、女郎蜘蛛みたいだったよ」

スパアンツ！

ケツに走る鋭い衝撃、遅れてやってくる空気のはじける音、驚いて見るといつの間にか後ろに回って不知火が、俺のケツにキックを叩き込んでいた。

相変わらず痛くは無いがすげえびつくりしたよ！

「二回めえ!？」

「貴方の番です、さっさと登ってください」

ふん! といわんばかりに、あさつての方向を向く不知火。

すねてる様子がちよつとかわいいかもしれん。

「よし、まあ見てろよ」

ちよつと体重は増えてるが、ガキの頃とおんなじだこんなもん。

チヨークの粉を多めに手につけて、自分でもどうかとは思うが面白くてやめられない
「よつこらセックス」という掛け声を言いながら最初のとつかかりに手をかけ体を引き
上げる。

初心者コースでもあるようだし、先ほど手本になる登り方を見てたからか、俺はさつ
さと登り切ることができた。

不知火より少し早いかもしれん、ふふ、まだまだできんじゃん俺も。

無意味な自信のストツクがたまった、ありがたい。

降りると不知火が微妙に渋い顔でこちらを見ていた。

ドヤ顔で返す俺。

「フィジカルに頼りすぎです……」

「ふいじかる?」

「貴方の登り方は、筋力と自身の身長を頼りに無理やり登ってるに過ぎません。それではボルダリングの醍醐味を味わえません」

筋肉至上主義者ではないが、スポーツの問題の八割は筋肉で解決できると思っている俺は、その言葉に衝撃を受ける。

「筋肉に頼っちゃダメなのか、マジか」

「いえ、まあなんといいいますか、今はまだいいのですが長いコースで、その登り方をする」と早々に握力が消えます」

なんですと、マジかよ。

「え？ 握力って消えるの？」

「はい、消えます。自身の体重が1だとして、2の力で体を支え続ければ早々に。1の体重を四つの手足で分配して支える技術がどうしても必要になります。ボルダリングは本来登山のために、そういう技術を磨く為に生まれたスポーツの側面もありますので」

あー、確かにそれが本当なら、山の中腹登ってる最中に握力消えるなんて大事件だな。「ほえー、なるほどなあ」

「……ですが、今日はお試しですので楽しんで登ることの方が重要だったかもしれませぬ。すみません水を差してしまいました、不知火の落ち度です」

おっと、相手のことを考えてきちんと自分の非を認められるなんて、ポイント高いな

ヌイヌイ。

「なに、中々興味深いこと聞かせてもらったわ。ありがとな」

ワシヤワシヤと頭をなでてやると、ちよつとびつくりした様だったのがされるがままにされていた。

あ、やべ、チヨークの粉がついた手でやつちまったから髪の毛粉だらけだわ、俺しーらヌイ。いや、まずい気がする、ケツキックされてしまう的に。

「……あまり沢山の場所を回りすぎても疲れるでしょうし、なにか使ってみたい施設などはありますか？」

「あー、プールに行きたいな。水着も持ってきてるし」

チヨークの粉だらけになってしまった不知火の髪を、どうにかせねばなるまいと思つてたところに渡りに船である。

三度目のケツキックは勘弁願いたい。

「プールですか？ ……かまいませんが」

微妙になにか考え込むような仕草をする不知火、なにか思うところでもあるのだろうか？

まあ考えても仕方がないので、さくつと借りていた靴とチヨークパックを返却して、俺たちは更衣室に向かった。



野郎の着替えシーンはカットして、抵抗の多いハーフパンツタイプの水着に着替えたという結果だけが残る。(ジョヨ風)

さすがに女が水着に着替えるのは、時間がかかると思ったので、先にシャワーを浴びてプールサイドで準備運動を始めることにする。

もつとかかるかと思ってたが、ほんの数分送れて不知火がやってきた。

機能性の高そうな競泳水着と、水泳キャップをかぶった姿でゴーグルはつけていない。

なんとというかさつきと露出面積は変わらないが、太ももがまぶしい感じだ、色白いッスね不知火さん。

「お待たせし……ました」

不知火が俺を見て、少しドキッとしたような顔をする。

なんだと思っただが、恐らく男の裸を見慣れてないからだろう、意外と純情なんだな。

「うーっし、じゃあ適当に泳ぐか。犬掻きと平泳ぎと背泳ぎくらいしかできんが」

「……泳げるのですか？」

試すような目つき、俺が泳げるのか知りたいのか、よかろう教えてやる。

「ぼっかおめえ、泳げるに決まってるだろ、これでもクラスの水泳大会では十位だった男だぞ。（三十二人クラス、内半分女子）」

「そうですか……」

泳げないと思ったか？ 残念だったな不知火さんよ。

しかしなぜそんなことを聞くのか……。

なんて思ったが、何処か自信無さげ、というかためらうような空気を出す不知火を見てひらめいた。

「もしかしておまえさん泳げサインっすかー？ なんてな……」

「……はい」

おう、地雷を踏んでしまった。

「えと、まあなんだ、よかったら教えよう……か？」

「いいのですか？」

「流石にこの状況でそれ以外言えるほどできた人間じゃないんだが……」

そう言つて手を差し出す俺、まずは手を引きながら泳ぐ練習が基本だからな。

そんな俺の気まずそうな、困ったような顔が面白かったのか

「(指導) 鞭撻、よろしくです」

クスリと笑いながら、不知火はその手を取った。



まあボルダリングの動きを察するに運動神経はいいんだろう、そう時間がかかることも無く不知火は泳げるようになった。

強いてあつたことがあるなら、途中一回おぼれかけて慌てたのか、抱きついてきたことくらいか。

不知火はお礼をさせてくれと言ってきたので、じゃあジュースおごってくれという俺の言葉を聞いて、買いに行っている。

その間、俺は自由気ままに泳いで面接に落ち続けたストレスをこれでもかと発散していたんだが、ふと、隣の競技レーンで明らかに素人じゃない速度で泳いでいた、二人組みの会話が聞こえてきた。

「なあ、このジムのオーナーのこと知ってるか？ なんでもすごいインストラクターで、色んなスポーツのプロ指導者のライセンスも持つてるらしいぜ、もちろん競泳も」

「マジかよ、俺たちも指導してもらえないかな！」

「ばっか、俺ら程度じゃ門前払いだよ」

「俺らより余裕ですごい選手が並んで待つてることか、チキショー」

なんてことをしゃべりながら、出口の方へ歩いて行つた。

マジか、結構すごいジムなんだなここ。

なんてことを考えてたら、不知火が戻つてきた。

プールから上がつて、設置されたベンチに座つた俺の隣に、不知火がジューズを渡しながら腰を下ろす。

「……それで、どうして今日はここに？ 職探しをがんばっていると黒潮に聞きました
が」

「お、おう……なんでお前ら姉妹のネットワークに俺の情報が流れてるんだ……」

個人情報だだもれやんけ。

いやまあ、俺が無職なのは彼女ら姉妹の仲ではとつくに周知の事実か。

「まあなんとというか、十社連続でお祈りされちまつてなあ。はあ、まったく泣きたくなるわ。時代かな、時代が悪いのかな……」

情けない愚痴だとは理解してるのだが、年甲斐も無く、おまけに年下の不知火にそんな愚痴をぼろぼろとこぼしてしまう。

不知火はそんな俺の愚痴を黙々と聞き続けてくれた。

そして語り終えて一息、冷静になると恥ずかしいことをしてしまった。

思ったより弱ってんなあ、俺。

「……………弱いよね、つまらない」

「ああ？」

おいおい、随分辛らつなことを言ってくれるな、いやまあその通りなんだが。

大人だつてしよつちゆうへこむのだ、そこまで言うこと……。

「そこに立つてください」

なにか言つてやろうとする俺に先んじて、不知火は立ち上がつて俺の前に立ち、ブルサイドに立つように言う。

お願いのような言葉でありながら、強い強制力を持つその言葉に、びびったわけではないが怖かつたので、俺はしぶしぶ言う通りにする。

「沈め」

スパアンツ！

「ギャーーーーー！！」

おつかない言葉が聞こえたと思つたら、俺は不知火の蹴りをケツにくらい、宙を舞つていた。

なにこれ、痛くないのになんで飛んでるの、どういう技術なの!?

なんて考えてる間に派手に着水、鼻に水が入つてツーンという感覚が襲う。

おぼれそうな感覚に恐怖しながら、俺は慌ててプールサイドまで泳いで、体を預けた。
「ゲツホゲツホ!! な、なにしゃがる!!」

「なんですか情けない!! たかが十社や二十社に蹴られたからといって、この世の終わりのような顔をして、それでも男ですか!!」

あまりに強い言葉だったので、その言い方にカチンと来る。

社会の辛さを知らんガキに言われたくねえわと、言い返してやろうとしたが。

「……」

なんというかまあ、俺をにらみつける不知火の目に、見間違いかもしれんが涙がにじんでるのを見てしまつて、急速に頭が冷える。

「つまらないわね。もっと骨のある人だと思つてました!」

おうおう言つてくれるじゃないの、そんな辛そうな顔しちゃつてまあ。

どんなつもりで言つてるかは分からんが、無理してるのはわかるぞ。

その様子を見て、今までの不知火の言動を思い返してみる。

そして都合のいい妄想かもしれないが、不器用ながら精一杯俺を励まそうとしてくれるんじゃないのかと、思つちやつたわけですわ。

正しく叱るつてのは、優しいやつじゃなきゃできないからな。

俺はそれに言葉を返すことなく、不知火の手をひっぱる。

不意をつけたからか、不知火をあっさりとプールに引きずり込むことに成功した。
「?!?!」

「おうおうじゃりん子言ってくれるじゃねえか！ このやろうこのやろう！ 不器用ながらも励まそうとしてくれたのには感謝するが、ケツキツクはねえだろケツキツクは!! このやろうこのやろう！ はははは!!」

俺は照れくささを隠したくて、不知火を水の中に沈めてやろうとふざける。

「そんなんで、不知火は沈まないわ!!」

と思ったのもつかの間、あっさりと俺の関節を固めて形勢を逆転させる不知火。

「フフ……不知火を怒らせたわね……!!」

「おま、ば、いてえ！ いてえって！ ははは!!」

なんだか楽しくて、笑いが止まらない俺。

いつの間にか笑顔で俺の関節を固める不知火。

周りで泳いでいた他の人間たちの、迷惑そうな視線がどこか心地よかった。



「これ、貰ってもいいのか？」

「はい、構いません。できれば私がいる時に来ていただきたいのですが。いえ、トラブルを避けるためにです、はい」

ジムの会員証、おまけに永年フリーパスを貰ってしまった。

もう俺は突っ込まないぞ、絶対不知火の正体とかつつこまねえからな!!

「まあ、そう言うなら貰つとくわ。ありがとうな、不知火」

「……いえ、いいですよ、提督」

「お前もか、お前までそう呼ぶのか……」

「ふふ、さあ、出口までお見送りしますよ」

そう言つて出口までゆつくり歩き、そして俺を見送つてくれる不知火。

「それではまた、いつでもいらつしやつてください」

「ああ、そうさせてもらうよ」

軽く微笑みながら、どこかさびしそうに手を振る不知火に見送られて、俺は歩き始める。

ポケットの煙草を取り出して火をつけた。

プールで湿った肺には煙がしみるぜ。

ふう。

じゃあ、まあ。

明日も職探しがんばりますか。

『ホスト』と『戦艦：榛名』

「……以上が本日の予定になります社長」

「はいはい、榛名は大丈夫大丈夫ですつと」

年配の女性秘書が予定表を読み上げる声が豪華な家具で彩られた寝室に響き、それに鈴の音のなるようなりんとした声が答える。

見ると朝日を反射するカラスの濡れ羽色の長く美しい黒髪女性が、出窓の窓枠に腰掛けながら外を眺めていた。

その瞳は特になにかを見ているというわけでなく、ただ気だるげな気分を紛らわせようと外を見ているだけのようで、その美しい表情は愁いを帯び覇気がまるで感じられない様子。

「それと、できればそのような格好はお控えください」

自らを榛名と言った戦艦の艦娘の姿は、黒と白のストライプ模様を上下そろえた下着姿で、上の下着の片方の肩紐はだらりと外れている。

榛名は年配の女性秘書のその言葉には返事を返さず、黙って外を見続けている。

反応の無い榛名の様子に、女性秘書はため息を吐くと「それではご予約に遅れませぬように」と一言述べて部屋を出て行った。

女性秘書が部屋から出てしばらくたち、榛名は言葉を漏らす。

「毎日毎日、笑顔を振りまく仕事はもう疲れました、榛名は実は大丈夫じゃないかもしれませんが」

榛名組のフロント企業『ハルナック』は警備会社として多くの社員（組員）を有し、その中には艦娘も多く所属している強力な企業である。

施設や個人の警備はもとより、船舶の航行の護衛任務などの大規模な作戦行動すら可能な力を有する、ある意味金剛連合の最大戦力ともいえた。（霧島組は最強戦力）

榛名はその会社のトップとして、日々様々な場所に赴いては会社の「顔」として笑顔を振りまく毎日だった。

もちろん榛名自身、社内で進行しているプロジェクトや業務などは把握しているし、補佐として多くの有能な人員が支えているので問題なく会社は回っている。

だが彼女に最も“多く”求められているのはただ、この『ハルナック』が金剛連合、そして艦娘主導によって運営されている事実を示すことだった。

「日々は変わらず、ただ流れていく。大儀もなく、提督もなく。あるのは姉妹と仲間への義理立てのみ。もちろんそれが嫌ではなく、されどただただ退屈な日々、なぜ榛名は生

きるのでしょうか？」

榛名はこのところこの手の独り言が多くなっているという自覚はあったが、毎朝の習慣となりつつあるこの独白をやめることができなかった。

「それを考えることに意味はありません、考えるのは無駄です。自分なりの答え？ 生まれてからずっと用意されたレールに沿った生き方しかして来なかった榛名が何故答えを出せましょうか」

独白を続けながら榛名は体勢を変え、ごろりと窓枠に頭を乗せ空を見上げる。

「型にはまった人生を退屈に生き、生き続け、やがて死ぬこと。それにどのような価値がありませんか。価値のない人生。意思のない人生。それはまるで淡々と続く……拷問のようです」

独白が終わわり榛名は静かに目を閉じる、そして再び目を開くとまるでスイッチが入ったかのように、世間で出回る多くの広告

『貴方の安全はハルナックが守ります、勝手は許しません!!』

と榛名とセットになった姿で見られる、元氣いっぱいなの明るい表情になっていた。だけど、ほんの少し、だけど確かにその表情はどこか辛そうに見えた。



ホスト、それは夜の住人、闇夜の時間を生きる者。

ホスト、その本質は飢えた狼、金と女性、そして名誉に飢える者。

ホスト、しかし彼らの仕事はきらめく世界で、夢を振りまく者。

『艦夢守市』その歓楽街にも彼らが住まう城があつた。

ホストクラブ「YOKOSUKA」

今日も彼らは闇夜の時を駆け、飢えを満たし、そして夢を振りまくのだった……

「え？ 五日間も店閉めちゃうんすか？」

「……ああ、店の拡張と内装工事含めてな、個室に近いVIPルームを増やすことになつたんだよ、誰かのせいだな」

最近どこかやつれたように見えるホストクラブ『YOKOSUKA』の店長が、閉店後の店内でシヨウを含めた従業員たちに通達する。

シヨウ以外の従業員たちは「ああ……」と納得したようにうなずいていた。

「まじつすかー、飯どうしよう……比叡ちゃんに甘えるつすかねえ……ぐふお？ あ、アザーツス？」

シヨウの腹に弱弱しくパンチを打ち込む店長、シヨウはなんだかちつとも痛くない店

長の指導。パンチにとりあえず感謝を叫ぶ。

「ほどほどにな……」

どこか背中のみすすけた店長が声をかけてその場は解散となった。

休み中は給料は出ないが、腐っても高級クラブなので給料は悪くない。

各々のホストや従業員は貯蓄でどうとでも食いつなげるのだが、シヨウだけは死活問題だった。

なぜならただでさえ少ない給料を先日、雨の日に公園で雨宿りしてたら、ホームレスが傘（ビニール）をくれたので、お礼に財布の中身を全部あげてしまったからである。

シヨウさんホスト向いてないすよ。（涙目ゴシゴシ）

そんなわけで給料日までの一週間を店のあまり物でなんとか食いつなごうと考えていたシヨウは、これからの一週間をどう乗り切るか切実な危機に直面していた。

「ひっさびさにあれで稼ぐしかないかあ」

シヨウはそうつぶやき、徒歩で住んでいる築五十年超えのぼろアパートに戻る。

カンカンと音を鳴らしながら二階へと続く、歩くたびに塗装がはがれて落ちる錆びた階段を上り鍵のかかってないドアを開けた。

昔は鍵をかけてたのだが、軽い衝撃でも簡単に鍵がガチャリと開いてしまうようなどうしようもないドアのため、以来鍵はかけなくなっていた。

ドアを開けて直ぐの狭いキッチンとトイレがある通路を抜け、四畳半の部屋に入る。狭い室内には布団とカラーボックスの棚、そしてゴミ捨て場から拾ってきた丸テーブル以外に家具はなく、雑誌やら整髪料やら脱ぎ散らかされた衣服が乱雑に散らばった床、典型的な男の部屋だ。

シヨウはその部屋の一角にある押入れの中からギターケースを取り出した。

ケースを開けると、古びたアコースティックギターが姿を現す。

「久々に俺のライブの幕が開くぜえ！」

ジャジャーンとギターを掻き鳴らすと、チューニングされていない間抜けな音が返って来る。

その音を聞いて深夜の仕事で疲れて寝ていたとなりの住人が壁ドンした。



警備会社ハルナック本社ビルの最上階社長室、そこに榛名は居た。

「はあ、あちらの国のファミリーが、うちの島で戦争を起こそうとしている？」

『今比叡に探らせてるけど、ここ最近うちへ国籍不明の傭兵の流入が確認されてる以上、その可能性は高いわ』

大きな机に置かれた電話、そこから伸びる受話器をもちながら金剛からの電話に返事を返す榛名。

『ただ相手はウチじゃないわね。兵隊山ほど飼ってる連中が、自分の所以外の兵隊を使う時は大体身内を手に掛ける時よ。恐らく向こうのファミリーはドン・リベツチオに手を出す気よ』

「しかしあの方は引退して、提督を探すために今では細々とお店をやっておられるだけなのでしょ？」

ドン・リベツチオ

かつてかの国にあった全てのファミリーを一代でまとめた艦娘

駆逐艦の艦娘でありながら、コミュニケーションで殺し合いをするようなかの国で、抗争を収めるために立ち上がった常夏の少女。

数多くの組織を力で、時に愛で隷下にくわえ、ついにはかの国でもっとも強大な組織リットリオファミリー、ローマファミリー

この二つを和解させ、長らく平和を築いたゴッド・マザー。

引退した今では、かつての戦いの日々は忘れ、ひっそりとこの艦夢守市で提督を探すためイタリア料理店を営んでいる。

『トロフィーとしての価値を求めているのかも知れないわね』

「……愚かですね」

『まあ、あいつらがどこで殺し合おうと勝手だけど、うちにきちんと義理立てしてるドン・リベッチオを、うちの島でやるなんていうなめたまねをするっていうなら黙っておけないわ。そして恐らく最後はリットリオとローマが出てくる』

そうなれば人間の兵隊では役に立たない、艦娘に勝てるのは艦娘だけだ。

榛名が最も「多く」求められているのは顔を売ること。

しかし最も「強く」求められているのは……

『と、いうわけで榛名、近々出番があるかもしれないわ』

「はい、勝手は榛名が許しません」

『戦闘人形』と呼ばれるほどの強さを持った今代の榛名。

金剛が下命し

比叡が調べ

霧島が切り込み

榛名が殲滅する

もっとも多くの血を浴びる任を担うのが彼女である。

「勝手は榛名が許しません」

その言葉を三回続けて呟いた時、その場で生き残れる者は彼女以外誰もいない。

それは儀式。

或いは様式。

美学めいた段階を追って、意識が切り替わる。

やさしげな大和撫子から非情な夜叉羅刹へと。

金剛からの電話を切り、ゆっくりと立ち上がる榛名。

ふと、自分の身長よりも高い、部屋の一面のガラス窓に映る自分の姿が目に入った。

その服装は、かつての大戦で彼女たち金剛型が身につけていた巫女服のような戦装束、ある程度特別な会議や要人と会うときは、彼女はこの衣装を身にまとうようにしている。

(まるでお飾りの人形のように……)

若い霧島や比叡はわからないが、自分は金剛姉さまと一緒に提督を探すことは疾うに諦めている。

今の自分にできるのはただ意味のない戦いで、意味の無い力を振るうことのみ。

……なんと無意味なことか。

なぜこんな強大な力を持って生まれてしまったのか、艦娘としての居場所は確かにあるかもしれない、いろんな方が尽力してくれたお陰で。

でも、言い換えればもはやこの世界では、自分のような壊れた力を持った艦娘の居場所など……

それでもし提督と出会えたとしても、そんな艦娘を率いることになる提督の居場所など無いだろうに……。

むなしく自分の姿を見ていると、ふと自社のビルの正面門の付近に変わった動きをするなにか。

「あれはなんでしょうか？」

艦娘の視力でなければ把握できないような距離に、目を引く動きをするなにかの姿が見える。

スーツ姿でもなく、かといってなにかの作業員というわけでもない。少なくとも働くものの格好ではない。

ギターを掻き鳴らし歌い続ける男を榛名はじつと見つめている。

「ああ、昨日からこの辺でうろついている路上ミュージシャンというやつですね」

榛名に侍る様にその部屋で仕事をしていた老年の女性秘書が報告する。

二代の『榛名』に仕えている彼女がどれだけ信用されているのかは、金剛との会話を同じ部屋で聞いても許されていることから察せられた。

「警備部から連絡がありました、特に害がないようなので放つています。それよりも社長、この後の会議の件なのですが……社長？」

こちらを振り向かず、じつと外を見続ける榛名。

その様子に、ここ最近の業務に気の入っていない榛名の様子も含めて、少し気になっていた秘書は強い言葉を投げかける。

無礼であるのは承知である、だが言わねばならない忠言でもあった。

「社長しつかりなさってください！ 貴方はわが社の、そしてそこに働くものたち全員の道しるべとなるべき方なのです。このところ業務に気が入っておられないのは存じておりますが……」

その言葉が引き金になったのかはわからない。

だが気がつけば榛名は、秘書を押しつけ走り出していた。

「だ、誰か社長をお引き止めして！」

後ろから聞こえる声を振りきり、非常階段を文字通り飛び降りる。

とてもではないが普通の人間が追いつけるような速度ではなく、追ってきていた警備員や社員たちはあつという間に引き離されていく。

やがて外に出て、目的の場所に到着した榛名は見た。

そこにある、地上の太陽を。

『ホスト』と『戦艦：榛名』

「俺の手で切り開く、俺の手で掴み取る、俺の手で作り上げる、それは俺のキングダムだ
ぜ。」

無駄にポジティブなワードを並べまくった歌が、平日昼間のビジネス街に響き渡る。
さんと太陽光が降り注ぐ中、汗をかきながらシヨウはとある大きなビルの前のス
トリートで歌っていた。

そんなショウをちらりと横目で見ながら、行きかうビジネスマンたちは足早で通り過ぎていく、なんとか明らかにか明らかに歌う場所も時間も間違えていた。

ショウの前に置かれた空のギターケースには、一円玉が数枚しかない。ショウのなけなしの見せ金である。

ストリートライブを始めて早二日目、実入りは悪い。

ぶつちやけショウ的には百円でも入れればもやしを買えるので、一縷の望みをかけて熱唱を続けていたのだが、世間の風は冷たかった。

いや、実は何人が聞きたいなど思ってる人は居たかもしれないが、足を止めて聞いてしまうと仕事に支障をきたすし、なんというか、青い希望に溢れた歌の内容はどうにも疲れた社会人には重過ぎる内容だった。

多分上司にリアアットするテーマや、駆逐艦は最高だぜのテーマ、あと出張に使うク○カードつき宿泊プランはすばらしいをテーマに歌ったりしたら思わず共感して足を止めてしまう人も多いと思ったりする。

しかしそんなことはお構い無しに、ショウは歌い続ける。

「有名な誰かが言った言葉、頭のいい誰かが書いた言葉、そんなものは俺には響かねえ♪ 知らない誰かの言葉より、俺は俺の言葉が聞きたい♪だから歌う、俺は歌う、誰かのためじゃなく俺は俺のために歌う♪」

間違つてない、今日の食費を稼ぐためにシヨウは歌つてる。
やがて曲を歌い終えたシヨウは、ポツリとつぶやいた。

「もしかして場所が悪いんすかね？」

遅い、気が付くのが遅いよシヨウさん、時間と場所をわきまえなよ。

しかしポジティブしんきんぐなシヨウは、そうと決まればとギターをしまつて場所を
変えようと歩き出す、と

「あつ、あの……」

そんなシヨウに声をかける存在、シヨウが振り向くとそこにはなにやら巫女服のよう
な格好をした長い黒髪の女性、榛名である。

シヨウはなんとなくコスプレに挑戦したどつかのお嬢様という印象を抱いた。

なにかを伝えようと必死に言葉を探すも、なにを言つたらいいのかわから無い榛名。

そんな榛名の姿と、後ろから何人ものスーツ姿の男たちが走ってくるのを見て、シヨ
ウはなんとなく別の方向に勘違いを膨らませた。

「なんだ、お嬢さん追われてるんすか、よっしこちつすよー」

シヨウは呆然としていた榛名の手を取り走り出す。

そして路肩に止めてあつたおんぼろスクーターの後ろに榛名を座らせ、一つしかない
ヘルメットを榛名にかぶせる。

「ほい、ついでにこれも担いで」

シヨウはそういつて榛名にギターケースを背負わせると、スクーター急発進させた。後ろからは榛名を呼ぶ声、それに対してシヨウが、

「はっはっはっは！ この支配からの卒業っすよ!!」

と、それっぽい青春のワンフレーズ溢れる捨て台詞を叫ぶ。

追いかけてきていた男たちがあつとという間に見えなくなつた。

ここまですがままシヨウに引つ張られていた榛名が、始めて大声を上げる。

「あ、あの、どこに行くのですか!？」

風にまぎれて消えてしまわないよう、自分の出せる一番大きな声をあげる榛名。

「ここじゃないどこかつすよー」

「どこかつて……どこに行つても、榛名の、榛名の居場所はこの世界のどこにも……」

「なーに青いこといつてんすか！ 居場所が無きや自分で掴み取るんすよ！ まあ俺も

まだまだ半端もんで職場じゃ味噌つかす扱いつすけどね！」

「それで貴方は……貴方は幸せなのですか？」

彼女は思った、自分はいったいどうしてこんなことを聞いてしまったのか、でも聞かずにはいられなかつた。

空虚な退屈が続く日々、色あせた世界。この本来の意義無き戦いのない世界で自分

と、そして提督の居場所はあるのだろうか。

「ああ？ 最高つすよ！ 晴れた空、よく走るバイク、後ろには美女！ こんな人生誰かに味合わせてあげたいくらいつす！」

シヨウはそんな不安に満ちた榛名に向かって、なに一つ迷いの無い笑顔で負けじと大声をあげる。

その言葉を聞いて榛名の心の中にあつた不安は、あふれ出んばかりの幸福によつてあつさりと塗りつぶされてしまった。

「榛名もです提督!!」

シヨウにしがみつきながら涙を流し、何度も「榛名は大丈夫です！」と叫びながら笑みを浮かべる榛名。

「榛名は大丈夫です！」

その言葉を三回続けて叫ぶ時、その場で彼女に魅了されない物は彼女以外誰もいない。

それは儀式。

或いは様式。

美学めいた段階を追って、意識が切り替わる。

存在することに疲れ果てた哀れな戦闘人形から。
咲き誇る愛に満ちたやさしげな大和撫子へと。

定員オーバーのスクーターが、ブスンブスンと抗議するように音を鳴らした。



「へー、榛名ちゃんっていうんすか、いい名前つすね」

「へへへ、ありがとうございます提督！」

社長とホストが並んで、立ち食いそば屋でたぬきそばを食べていた。ちなみに券売機で食券を買ったのは榛名である。

券売機の使い方が解らなかった榛名は、シヨウに買い方を教えてもらいながら、面白がって何枚も券を買っておぼちゃんに怒られてしまった。

ちなみになぜか返金はできないとのことだったので、余った食券はシヨウが全部貰うこととなり、結果的にシヨウの数日間の食料は無事確保された。（結果オーライ）

「そーいやさつきから気になってたけど、その提督ってなに？」

「提督は提督です！ 私たち艦娘にとって無くてはならない人です！」

「へー、そうなんすか」

カラムスつてなんだろう、よくわからなかったのでシヨウは考えることをやめた。

それよりも問題なのは、面白がつて榛名がたぬきそばに七味を大量に振りかけていることだ。慌ててシヨウが止めに入るも時すでに遅く、いつの間にかたぬきそばが赤いたぬきになってしまっていた。

「あーあー、榛名ちゃん。それつてー辛いっすよ」

「いえ、榛名は大丈夫です！」

そう言つて自信満々にたぬきそばを上品にフーフーとすする榛名、しかし案の定あまりの辛さに箸を落として口を押さえてしまった。

「ほらいわんこつちや無い、水っすよ」

見越してセルフの水を汲んできたシヨウが榛名に水を手渡す、榛名は慌ててその水を受け取るとごくごくと飲み干した。

「……大丈夫じゃありませんでしたあ」

「そりやそんだけかけりやね」

そういつてさらつとシヨウは榛名のどんぶりと自分のどんぶりを交換する。

あつ、と榛名が止める前に、シヨウは榛名のそばをすすり始め「カラアアアアイ！」と叫び声をあげる。

榛名は慌てて慣れない手つきでセルフサーブの水を汲み、シヨウに差し出した。シヨウはその水を受け取り、ごくごくと飲み干す。

やがて二人はどちらともなく見詰め合って、そして同時に笑い出した。



「ホントにここでいいんですか？」

「はい！　ありがとうございます！」

シヨウが榛名を降ろしたのは、先ほど逃げ出したビルの前だ。

ならいいんですけど、と、榛名がかぶっていたヘルメットを受け取り、かぶるシヨウ。

「また、お会いできますでしょうか？」

「おーっと、そういうえば榛名ちゃんに渡しとかなきゃならないものがあつたつすよ！」

そういつて懐から名刺を取り出し渡しシヨウ。

「ほすと……倶楽部ですか？」

「いえーつす！　俺と楽しくお酒が飲めてお話できる最高の場所さ！　今はまだ改装

中つすけど、明々後日にはリニユールオープンするからよかつたら来てね☆」

「シヨウさんと、お酒を飲みながらお話……行きます！　榛名、絶対行きます！」

「待つてるっすよ！」

そう言い残し、走り出したシヨウの後姿を、榛名はその姿が見えなくなるまで手を振っていた。

やがて、会社に戻った榛名は秘書や部下たちに頭を下げて謝罪を述べながら

「榛名はもう大丈夫です！」

と朗らかに告げる。

その笑顔はかつて大戦中の榛名が見せていたそれと、いや、それ以上に周りを魅了する明るく美しい生気に満ち溢れたものだった。



その日、色々なことが起きた。

まず霧島が、「マイクチェックの時間だオラアアア!!」と叫んだ。

改装工事も含めて一週間以上補充できなかった提督養分（学名：テイトクニウム）が切れてしまったのだ。

そして体と心が養分を求め、仕事を投げ出し盗んだバイク（組員の私物）でシヨウのホストクラブに走り出した。

そして比叡がホストクラブが改装中に急ぎで組み込んだ海外出張から帰り、出張中の報告受けるも、提督養分（商品名：テイトクニウム）を一刻でも早く補給しようと霧島の予定だけ確認し終えると、そのまま倉庫にあつたトラック（デコトラ）で走り出した。故に報告の中身の榛名がホストクラブに通いだしたことを聞き流してしまった。

最後に榛名、数日前からシヨウの居るホストクラブに通いだしどっぷりはまつてしまい、今日なんかはシャンパンタワーの予約まで入れてしまった。

普通は秘書たちが止めそうなもののだが、ここ数日の榛名のいい方向への変わりように、まあそれで榛名が精力的に仕事に励んでくれるならと見逃していた。

ちなみに、シヨウの予約で取られたシャンパンタワーの予約を掠め取ろうとしたナンバーワンホストだったが、予約名簿の『榛名』の文字を見た瞬間、とてもとても嫌な予感がした。

なのでむしろ掠め取るどころか、シヨウのためにバックダンス役に名乗りを上げ、更にシヨウにはシャンパンコールのいろはまで教えてくれた。

さすがナンバーワンホスト、恩を売る相手を間違えない。

そんなわけで当日。

ホストクラブの店内に響き渡るシヨウのシャンパンコール。

「こちらのおおお！ お嬢様、榛名ちゃんに！ シャンパンタワー！ いただきましたああ！」

「え、榛名？」

「え、榛名？」

思わずカーテンで区切られた個室から出る霧島と比叡、そしてその二人と目が合う榛名。

時が止まった。



「……」

「……」

「……」

ホストクラブからの帰りの車の中、後部座席に金剛姉妹の三人並んで座る車内に重い

沈黙が流れる。

正確には愛しさと切なさど心強さでコーティングされ、その中に殺害と覚悟と嫉妬強さが詰まった感じだけど、やっぱりその中に愛しさと切なさど心づり

自分たちの愛する姉妹の提督が見つかってとても喜ばしい、が、まさか同じ提督だなんて……ありやわしの提督じゃけえのお。が奇妙に混在する重い空気とでも思っていた。ただきたい。

ちなみ座席は【窓 比叡 榛名 霧島 窓】

「あの、二人はいつから……」
「……私は、三週間ほど前から」

恐る恐る榛名が切り出し、まず霧島が窓の外に目を向けながら答える。

「私は霧島がホスト通いを始めたという報告を受けて、二週間ほど前からよ」

続いて気まずそうに比叡が反対側の窓に目を向けながら答える。

「榛名は数日ほど前から、その、すみませんどうしてもシヨウさん、提督と二人つきりでお話する甘い時間を楽しんで居たくて」

「わかるわ」

「わかるわ」

ほぼ同時に同意を示す比叡と霧島、さすが姉妹。

しばしの沈黙の後、再び榛名が口を開く。

「……次の茶会で、金剛お姉さまに報告しないわけにはいかないですよ。その、そうなるかどうか？」

三人が適合した以上、シヨウに金剛型の適性があるのは明らかだった。

問題は金剛型の適性を持った提督という前例が無いことだ。艦娘の中でもかなりの権力を持つ金剛型の艦娘。その提督ともなれば集まる権力は正直想像もつかない。

一応、提督を見つけた場合の推奨方針もあるにはあるのだが、それは金剛型の誰か一人の提督が見つかった場合の緩やかな引継ぎマニュアルのようなものでしかない。

でも正直、三人はシヨウが権力をもつても全然今と変わらないと、なぜか確たる自信があった。

それはいい、それはいいのだ。だが、あの『最凶』の金剛姉さまが提督を見つけてしまった場合のことを考えると、いろいろと予測できるような予測できないような、三人はなんともいえない気持ちに包まれる。

無論、『最凶』の金剛のことを考えれば一刻でも早く、直ぐにでもこのことを教えたいたい気持ちもある、が……。

最悪の事態が想定されるとなった場合、私たちは金剛姉さまを……。

……。

『はあ……』

そして同時にため息をつき、もうちよつとだけ黙ってることにしちゃう？
と最終的に家に着く頃にはなにも言わず、そんな感じの空気になっていた。

……なにかのカウントダウンが進んだ音がした。

だがそれはまだ先の話、まだ。(近日)

ちなみに榛名の正体に気が付いてしまった店長は、店のトイレから四時間出てこなかった。

『無職男』と『駆逐艦：萩風』

無職にむにや……。

午前七時。

デデデン!! デデデデ♪ デデデッバンツ!!

はかつていたかのように、『加賀岬』が聞こえてきた。

イントロが流れる目覚まし時計を止め、体を起こす作業に移行する。

どうでもいいがこの目覚ましちゃんと歌声まで入ってるんだらうか?

デデデン!!

が聞こえた段階で、目が覚めてしまう俺には永遠の謎だ。

どうでもいい謎だが。

まあその目覚ましのお陰で、今日もまた無事に起きることができた。

ちなみに今日は陽炎たちと野球をする日だ、バイト代に目がくらんで今日も審判を引き受ける予定、やっぱ無職って辛いな。

うぐ、起きたばかりのせいで涙が少し、頭もぼんやりとしてる、シャワーでも浴びるか。

風呂から上がって全裸で一服、煙を肺に入れてようやく頭がしゃきつとした。

適当に身支度を終えて外に出る、待ち合わせ時間はまだ先だがたまには散歩しながらのんびり朝飯でも食うとしよう。

歩きながら食えるのがいいな、パン屋にでも行つてパンでも買うか。うまくいけば焼きたてのメロンパンにでもありつけるかもしれない。

『無職男』と『駆逐艦：萩風』

「メロンパン。おれの、メロンパン」

とんびに、メロンパン、とられた。

ちょうど焼きあがったところのメロンパンを無事買った俺が、ウツキウツキしながらどこで食べようかと歩いていたら、なんかちっちゃい小人みたいなのが背に乗ってるように見えた巨大な鳥類にメロンパンとられた。

あまりに衝撃的すぎて、なにもできなかつた。

「メロンパン。おれの、メロンパン」ってボソボソ言うしか

……できなかつた。

というか冷静に振り返って見てみたら、最近の俺の運の悪さは酷いものがある。

ラリアット退職 ↓ お祈りフルコンボ ↓ トンビにメロンパン。

次の厄年はまだ先だぞおい。

俺は、貝になりたい。
気がする。

「あ、あの！」

そんな絶望で立ち尽くす俺に向かって話しかける誰かの声。
振り向くと、陽炎姉妹たちの中では比較的年上に見える長く濃い紫の髪の少女がいた。

秋空の朝日に照らされた長い髪が、キラキラと輝いてまぶしい。

なんていうかあれだな、クラスで比較的上位カーズトにいな、控えめだけどちやんとおしやれして周りとか合わせて活動できる社交的なタイプ。

「おお、えーつと。陽炎姉妹シリーズの……」

「は、萩風（はぎかぜ）です!!」

ふんす！ というように両腕で胸を寄せながら、身を乗り出して俺に自己紹介する萩風。

結構おっぱいあるな、この子。

「あの、どうされたのですか？」

「いや、そのな。朝飯にメロンパンを外で食おうかと思つて歩いていたら、トンビにパンを持つていかれてしまった」

冷静に言葉にするとマヌケすぎる。

「さっきの光景はそういうことだったんですか……それで、あの、メロンパン以外の朝ご飯、ちゃんと食べられましたか？」

「見られていたのか、泣きたい……まあメロンパンが朝飯だったんだ、察してくれ……」
ぱあつと笑顔になる萩風、「早起きは三文の得だった、うんうん、三文どころじゃない……」とかブツブツ言ってる。

なんなの君ら、俺の不幸そんなにうれしいの？

「あ、あの。でしたら私、集合の時間まで漁港に行つて鮮魚を食べて、ヘクセン七階にて開催中の『北の国展』で北の海幸山幸を食べようかと思つてたんです！ よ、よろしければご一緒にしませんか？」

ああ、朝飯の連れ添いが欲しかったのか、てかなにその具体的過ぎる朝食プラン、朝からリッチすぎだろオイ。

だが陽炎たちとの約束は十三時、今八時だからまあ余裕か。

「そうするか、流石になにも食わずに肉体労働（野球の審判）は勘弁願いたいからな」
「じゃあ行きましよう！」

そうやって萩風は俺の手を取り、早足で歩き出す。

もう慣れたけど、君らやっぱ人の手をつかんで引つ張るのが好きね。



艦夢守市東南部の漁港へ、歩いて行く。

俺の手を引きながら歩く萩風はやたらご機嫌で、鼻歌なんぞも歌ってる。

上空に、海のほうから飛んできた早朝便の特殊大型飛行艇が見えた。

やがて飛行艇が俺たちのはるか真上を通り過ぎる。

重低音が響いて朝の空を斬り裂いて飛ぶ、あれは帝国からの船っぽいな。

遠めから見ても黄金色でかなり立派に見えるので、皇女専用機かもしれん。

やがて、漁港に近づき潮のにおいに包まれる。

活気のある港、地元客や観光客、漁師、そこで働く様々な人の声が響いてきた。

萩風は心なしか生き生きとして見える、海が好きなのだろうか。

おしやれに気を使ってそうだから、潮の香りが付くのか嫌がりそうに見えるが。

漁業組合直営の食堂で朝食を摂ることにする。

二階に上がると、意外と混雑していた。

俺はアジフライ定食を注文、萩風はオニオンブレッドとマグロのカツレットとアジのカルパッチョを注文する。

運ばれてくる料理、ああ、こういう朝飯はほんと久しぶりだわ。

新鮮な海の幸を堪能する、せつかくなら生魚もチョイスすべきだったか、勿体無いことをした。

まあ浅漬けも味噌汁もうまい、それだけでもありがたいか。

なんというか、久しぶりすぎるまともな食事な気がして、体が『これこれ、こういうの欲しかった』って言ってる気がするわ。

「わあ、美味しそう……はむっ!? これ美味しいです!」

おうおう、随分おいしそうに食べるな、両手でほっぺ支える仕草とか、可愛すぎるだろ。

なんて思いながら見てたら、俺の視線に気づいた萩風が箸でカルパッチョを一切れはさんで俺の前に差し出してきた。

「あ、ていと……おにいさんもどうぞ。あーん♪」

「……」

差し出されるアジのカルパッチョ。

……おい、マジか。

確かに生魚食いたいと思いはしたが、こういうシチュエーションでか。

ここ最近一気に青春時代取り戻してる気がするんだが、なんなんだろうかこの遅咲きの青春は。

よくわからん感情をかみ締めながら、差し出されたアジのカルパッチョにかぶりつく。

うまし

とどめに近場の牧場直送の低温殺菌牛乳を選び、海に見えるデッキに出て萩風と並んで飲む、朝日がまぶしいぜ。

無論、腰に手を当てる。

傍から見るとオヤジ丸出しである。

でも萩風も恥ずかしがりながら同じポーズで飲んでくれた。

マジで付き合いいいなこの子。

こんな俺に付き合ってくれたお礼に、料金は俺がおごることにした。

萩風は散々遠慮したが、年下に払わせられるかと押し切る。

正直、あの貝になりたいレベルだった俺のメンタルを救ってくれた。

そのことを考えれば安いものである。



その後、市街地に張り巡らされた路面電車を使って、次の目的地の駅舎直結型商業施設のヘクセンに向かう。

駅ビル『ヘクセン』。

この駅ビルは数年前に改築されて地下三階、地上は七階。

地元百貨店も一部入っている、その規模は都会の大型商業施設クラスだとか何とかんとか。

「ここ来るの久しぶりだな、できたばかりの時に一回来たきりだわ」

「そうなんですか？」

「こてんと首をかしげる萩風、可愛いなあおい。」

「こんな所で買い物なんざしないからなあ」

「買い物施設以外にも映画館群や、飲食店も充実してて。あつ、最上階の七階には市の艦

娘課があつて、直ぐそこにある市役所の面々からは『新店』と呼ばれているんです。『本店』とは特別仲が悪い訳でもないんですが、潜在的競争意識は意外と強いんですよ〜」
やたら饒舌に、ぺらぺらと愚痴をこぼすように話す萩風。

ははは、まるで関係者みたいだな。

「あとは……その、結婚相談所、結婚式場案内所なんかも」

「……」

うわー、それこそ一ミリも関わりが無いぞ。

でもなぜか上目遣いで恥ずかしそうにこつちを見てくる萩風はほほえましかった。

ああ、結婚を夢見るタイプか……

ヘクセンに入り、まず地下一階へ降りる。

広い地下フロアには駅弁、お土産物、名菓、惣菜、パン屋、和菓子屋、ケーキ屋、物販、飲食店他にも沢山のものを売る店が。

よくもまあこんなに詰め込んだもんだ。

とりあえず目に付いた豚まん、赤福、特産うどん、上方ラーメン、好み焼き、たこ焼きの店などをくるくる回る。

こんなにも沢山の食べ物が並んでいると、見ているだけでも楽しいもんだな。

ちなみに萩風は途中の食材コーナーを見て

「麦ご飯用の麦まだあったかな」

「明日の野菜のお浸しどの野菜にしよう」

「牛蒡とお豆腐のお味噌汁にしようかな……」

なんてことをブツブツとつぶやいていたので。

「えらい健康的なメニューだな、カレーのルーで食事を済ませるのが多い俺には眩しいわ」と言ったところ。

「だ、駄目ですレトルトなんて!! そうだ、よかつたら今度お料理を差し入れさせていただきます。人参に牛蒡に蓮根、自然薯と蒟蒻なんかを入れた特製根菜カレーです、健康にもいいですよ!」

などとやたら気合を入れてぐぐいと押しに来た。

やばい、この子健康マニアだわ。

家庭的な感じ溢れる女学生に料理を差し入れてもらうなんていうイベントに惹かれるものはあつたが、いかんせん健康信仰に汚染されるのは避けたかったので、なんやかんやと言って断る。

「ご迷惑をおかけしてすみません、萩風、少し下がらせていただきます……」

どこに下がるといふのだろうか、というかそんな落ち込んでも。

どん底みたいなオーラを放つ萩風をなんとかしようと、目に付いた特産コーナーにはいる。

二つのリンゴ特産地域と魚介類特産地域が合弁事業展開している『しんえつ』というコーナーらしい。

その場で作ってくれる搾りたての林檎ジュースを飲み、やたら香り高い笹団子を食べた。

リンゴジュース美味しいな、でかい瓶で買っていくか、野球終わったら陽炎たちと飲もう。

健康的なリンゴジュースを飲んでテンションが戻った萩風に連れられて、場所を移動。

お目当ては七階で行われている、北国の物産展だったっけか。

移動途中でどっかで見たことのある少年を脇に抱えて走る、おしやれな服を着たツインテールの女とすれ違う、姉弟だろうか。

「ツインテールか……」

あの髪型ができるギリギリの年齢な感じもするが、無駄に似合っていたな。

ぼけツと走り去るのを見ていたら、萩風がクイクイと袖を引っ張ってきた。見ると萩風が両手で髪を左右に分けてくいと握り、ポーズを取る。なんなの、そのツインテールできますよアピール。

七階に到着、フロアは大盛況だ。

老若男女、多くの人がそこにいる。

人生交錯点だな、ここは。

頭上を見上げると『北の国展』という看板。

近くには小さく設けられた展示スペースがあり

『失われた北海道、過去の食事の再現』

と銘打ったポスターが目に入った。

北海道ってなんだっけ、大昔の国名か、地名だっけか。

「しかしすごい人だな、全部見て回るのは骨が折れそうだ、適当にちよいちよいと……」
「なに言ってるんですか！ せつかくきたんだから全部回りますよ！」

え？ マジでいってんのか……。

「うへえ、お手柔らかにな」

そして俺の手を引っ張って人並みに突入する萩風。

チカラ強いっすね。



ほ、本気で全部まわらせられた。

若いつてステキやな（荒い呼吸）

時間は十一時すぎ、さつき食ったばかりではあるが、そろそろ昼の時間だ。

軽くなにか腹に入れておきたい、なにを食べよう、てか休みたい。

「付き合っていただきありがとうございます!! お礼というわけではないですが、もし萩風にできることがあったら言ってくださいね。頑張ります!!」

元気だね、若いもんは……。

ふと美味そうなおいを漂わせてきた店に目が行く。

北国の餡掛け焼きそばが食べられる仮設店舗だ。

「あれ食べたい」

「いいですね! 直ぐ買ってきます!!」

やたらと密着してくる萩風と共に、持ち帰りのパックを買って屋上に移動することにした。

屋上に到着、人はあまり多くなかった。

景色を見渡せる休憩スペースを見つけて、そこに萩風と並んで腰掛ける。

「よつこらせつくす」

「よ、よつこらせつ……く……」

「真似せんでよろしい」

悪影響を与えてしまった、流石にそろそろやめるかこれ。

「はいどうぞ！ めしあがれ♪」

「おー、わるいな」

バックをあけて差し出してくれる萩風、受け取った後にわざわざ割り箸も割って差し出してくれた、気がきくな。

二人でもそもそとあんかけ焼きそばを食う、いい景色だ。

ここはいいところだな、ほんと。

……では……。

「おにいさんはー」

「ん？」

思考を遮る様な声にはつととなって隣を見る。

隣の萩風が食べるのをやめて、こちらを見つめていた。

無言で少し見つめあう、こいつきれいな顔してんな。

少し間を置いて、何処かためらうような感じで萩風は話し出した。

「おにいさんは『外地』からこられたんですよね？」

「あれ、言ったっけかそのこと？ まあ言うとおおり、出身は艦夢守市の外だよ」

今ではもう慣れたが、当時ここに来たばかりの頃は『外地』『内地』という言葉がなんなのかと首をかきあげた記憶がある。

来るときは橋で繋がってるもんだから気がつかなかったけど、ここは一応島だからそういういい方が定着したのかもしれない。

普段は島全域を指して艦夢守市とか艦夢守島っていい方しかしたこと無いけど、一応大昔からの島の名前もあったよな、あわ、あわし……なんだっけか？

「あ、やっぱりそうなんですか……私って内地から出たこと無くて。あの、ご迷惑じゃなければここに来るまで、どんな人生を歩んでこられたかお聞きしてもいいですか？」

「どんなって、別に普通だよ。普通に生まれて普通に学校行って、普通のバイトして、普通にここに来て就職しただけだ。そして普通にラリアツ……なんでもない」

ありふれた男の人生だ。

ラリアツトして仕事クビになった以外……。

自分のことながら間抜けすぎる。

「その、でしたらおにいさんは、私たちについてどう思っておられますか？」

「お前たちつて、陽炎姉妹のことか？」

「はい……」

「まあ色々隠したいこと（家族問題）があるんだらうなどは薄々感じてるが」

「あはは、やつぱり（艦娘だつて）わかつてたんですか」

姉妹二十人とかどう考えてもその、な。

「でも陽炎とか自分から言い出さないあたり、色々事情があるんだら。別に気にしてないからそう神経質にならんでいいぞ」

「はい、ありがとうございます……」

何処かさびしそうにうつむく萩風。

俺がこの頃つてどんなことで悩んでたっけかなあ、思いません。

「まあ色々悩みはあるだらうし、俺にはわからんつらいこともあるだらうけどさ、〃まだ若い〃 んだし楽しんで生きるほうがいいぞ」

「え？」

ほかんとした顔をする萩風、どれ、一つ年長者のアドバイスでもくれてやるか。

「あと説教くさいかもしれないが、〃若い学生のうち〃 しかできないことは今のうちにやっ

とけ、年とつてからだとできないことが一杯あるからな」

「あつ、やだ、私ったら……あ……はい……」

ものすつごくばつが悪そうに、目を逸らす萩風。

なんやのん君。

え、なに、俺もしかして滑ったのか？

「あれだ、まあ、若もんに付き合うくらいどつてことないからさ、なにかあつたら話くらいはいつでも聞いてやるよ、萩風」

滑った恥ずかしさを隠すのを兼ねて、元氣付けてやろうとおしやれに整えられた髪をぐしやぐしやつと撫でてやる。

嫌がるだろうがまあ落ち込んでるよりは怒つてる方がましだろ。

ところが萩風は怒るどころか、うれしそうな顔で声を上げた。

「あ……私の名前をおぼえていただいて、光榮です！ 提督！」

「んな大げさな、つかお前、お前まで提督呼びか」

文句の一つでも言つてやろうと思つたが、嬉しそうに飛び回る萩風を見てどうでもよくなつた。

俺はぴよんぴよん跳ねる萩風の、頭上に広がる空を見上げる。

空は冬の澄みきつた色にして青い。

トンビにメロンパン取られていうのもなんだが、今日はなにかいいことが起きそうだな。



「えっと、あの、私先に球場に行ってますね！」

もうちよつとで河川敷の野球場に到着しそうになった時、萩風がそう言つて走つていった。

ボソツと「提督と一緒にだったって嵐や皆にばれたらその……」みたいなのが聞こえた気がするので、多分恥ずかしいのだろう。

親と一緒に出かけているのを見られるのが恥ずかしい心境、思春期だな。

ついでに陽炎たちと合流する前に一服することにする。

歩き煙草は色々うるさい世の中だが、誰も居ない河川敷の道で位は大目に見てくれ、ください。

火をつけて一服し、煙を吐き出す。

ふと、遠ざかつていく萩風の逆方向からこちらに向かつてゆつくりと歩いてくる、やたら目つきの悪い眼鏡をかけた長身の瘦躯の男の姿が目に入る。

やがてその男が俺の前で立ち止まる、少し驚いた顔だ。
こっちだつて驚きだわ、こんな所で会うとは。

「よう、相変わらず殺し屋みたいなツラしてるな」

俺の言葉を聞いてその男は、なんともいえない表情を浮かべた。

オマケ — 陽炎会議録 NO. 1 —

薄暗い部屋、円卓を囲む二十人近い少女らしい者たちがいた。

らしいというのは、何故か全員顔を隠すための尖った白い被り物をかぶっていて、その顔がよくわからないからだ。

そして被り物の額部分にはそれぞれ番号が振つてある。

その中で『1』と額に書かれた数字の被り物をかぶった少女が口を開く。

「それではこれより陽炎会議を始めます、まずは最大にして最重要の議題である私の提督に關してです」

「1番、私のというのは語弊があります！ ゆきか…いえ、私と貴方のです!!」

「8番、それは違います、不知火と1番と8番の提督です」

「2番、隠れてないから、名乗っちゃつてるから。と、いうかやっぱりあれよね、えーつと、ヒットしちやつた人、手あげて〜」

その場に居た全員の手が挙がる。

「や、やっぱりいいいいい→どおすんのよおおおこれえええ!!」

1番の被り物をした少女が頭を抱えてうずくまる。

残りのメンバーも頭を抱えた。

— 陽炎会議録NO. 2 — に続く。

『意識高い男』と『重巡：高雄』

私はロリコン（児童性愛者）だ。

「児童性愛者は大人の女性を愛することができない哀れな人間」

そういう声を耳にしたことがある。

確かに私はその性癖の都合上、大人の女性を愛せないかもしれない。

だが、そもそも愛する必要もないのだということ……わかっていただきたい。

わかっていただきたい。

大切なことなので二回言わせていただいた、必要であれば何回でも言わせていただく。

わかっていたらよかった。

机の上に広げられた『艦娘図鑑』に写る駆逐艦たちを見つめながら、私は先日の悪夢を払拭するように記憶を上書きする。

時間の経過というのは早いもので、このページを見始めてから既に数時間が経過した。

正直このページ（雪風・谷風）など、二十四時間見ていられる。

あの日、私は部長の友人に唇を奪われた。

恥辱の極みだ。

どうやら確認した所、重巡洋艦の『高雄』と呼ばれる艦娘らしい。

『愛宕』だけではなく『高雄』までとは、ははは、

リベッチオさんの脇汗の海で泳ぎたい。

リベッチオさんの脇汗の海は綺麗なのだろう。

それが元で衝撃を受け気絶した私は、数分後に目を覚ましてそのまま虚無の心を抱きながら世話になった便器に別れを告げた。

部屋の奥のほうでは怒声が飛び交っていて、「失礼致しました（蚊の鳴く声）」と述べた私の挨拶は聞こえていないようだったが問題ないだろう、私的に。

失われたものの重さを痛感しながら帰宅した私は、このシヨックから回復を図るために有給休暇を取ったのだった。

涙はもう出尽くした。
後は癒されるだけだ。

まず有給初日に、『ヘクセン』へ赴き、おにぎり専門店『霞ママ』にて駆逐艦の艦娘『霞』が握ってくれるおにぎりを頂いた。

わけ隔てなく全ての客に飛ばされる罵倒、しかし何処か客を気遣うような隠れた優しさに私の心は癒される。

そして私に言える数少ないが確かな、一つだけ言える真理がある。

霞ママに「このクズ！」と言われ、苦にならなくなつて半人前。

次に「○ねばいいのに！」と言われ、嬉しく思い始めてようやくこちら側の人間と名乗れるということだ。

おめでとうございます、あなたは胸を張つてこう言えるだろう。

『それ、我々の業界ではご褒美です』

更に次の日、稀に陽炎型が野球をしているグラウンドを横切る散歩コースを歩いた、無論じろじろ見るなんて失礼なまねはしない、ほんの一回横切るだけ、例え彼女たちがいなくとも彼女たちがいた場所の横を通れる、それだけで私は幸せだ。

そして最高に幸運なことにその日は彼女たちが野球をしていた、おまけに『萩風』と

呼ばれる駆逐艦の少女ともすれ違うという奇跡。

私の運もまだまだ捨てたものでは無いと思う。

以上の行動結果により、数値として表示するならあわせて99パーセントのメンタル向上が認められた。

また、途中で学生時代からよく行動を共にすることがあった先輩とすれ違った。

一声目が「相変わらず殺し屋みたいなツラしてるな」と言ってきたので「先輩も相変わらずラリアットで損してそんな人生歩んでますか？」と返しておいた。

この人は常にヤニ臭いものの、普段は面倒見のいい先輩だった。

が、ここぞというときには誰であろうと躊躇いなくラリアットをする人だったからだ。

かくいう私も被害者だ。

ちなみに現在は本当にラリアットで無職となり求職中のようだ。

お猪口一杯分の仕返しと、大きじ二杯分の善意から「なんなら私が再就職先の世話しましょうか？」と聞いたときの先輩の顔は見ものだった、ハーツハツハツハ！

思わぬ遭遇で、1パーセントのメンタル向上が認められた。

そして数日後、完全に持ち直し入社した私を待っていたのは、驚くべき知らせであった。

「前島主任！ 今日からお世話になります『高雄』です！ よろしくお願いいたしますわ
！」

私の心境変化の過程を省き結果だけを報告する。

100パーセントだったメンタルが1パーセントまで低下した。

『意識高いロリコン』と『重巡：高雄』

まさか先輩の1パーセントに命を救われることになるとは、今度リベツチオさんのパスタ（ミートソースパスタ、ミートソース抜き）でもご馳走させてもらおう。

それよりも問題は目の前の女性。

スーツの下のフリルブラウスを盛り上げる大きな胸はどうでもいいとして、上品に整えられたセミロングの黒髪がふわりと揺れて、漂ってくる薄く甘い香には覚えがある。

そして私を見つめる赤い瞳、どこか愁いを帯びた力強い視線にも。

どう見ても先日部長の家で、私の唇を奪った人物である。

「何故……?」

「提督と同じ場所にいたいと願うのは、艦娘として当然のことですわ!」

「成る程、当然……」

世の中には私の知らない当然が沢山あるということか。

しかしてこの状況は一体なんなのだろうか?

何故、私に急に部下が、部長はこのことを把握されているのだろうか。

「ところで部長は何処に? 出社の挨拶と休んでいた間の業務に関してお聞きしたいのですが」

私はひとまず目先の大問題は置いておいて、近くにいた同僚の一人を呼び止め聞いてみた。

「部長なら常務に話があるとか、すごい剣幕で先ほど走っていかれましたよ。あと常務の指示では新人さんはしばらく前島さん付になるそうなので、よろしく願いましたま

す」

吾輩は主任である。常務の命令を拒否できる権限はまだない。なるほど、大体の事態を理解できてしまった、辛い。

恐らく彼女は、艦娘のツテや人脈を使い中途入社扱いで入って来た上でこちらに配属希望を出したのであろう。

待つていただきたい。

現状ただでさえ部長一人でも暑苦しいのに、さらにもう一人？

なんの冗談だろうか。

「前島主任！　この高雄になんなりとお申し付けください」

ぐっと両手を握り締めながら私の顔を覗き込んでくる彼女。

「そうですね……」

とりあえず帰ってくれないかな。

なんて本音を呑み込んだ私は、取り急ぎ溜まっていた経理関係の仕事を振ってみることにする。

領収書を整理したり、資料を基に提出された見積もりなどが適正な価格かのチェックなどだ。

これでどの程度数字に強いかがわかれば今後の方針も見えてくるだろう、私としては

どうせ面倒を見なければならぬのであれば、少しでも使える能力があつてくれると「おにぎり温めますか？」と聞いてくれる程度にはありがたどうでもいい。

ある程度の要点を教えると、彼女は直ぐに理解をしたように計算に取り掛かった。要領は悪くないようで、さくさくとすすめている。

あと彼女の席は何故か私の隣だ、先日まで隣にいた同僚の姿は窓際の方にあつた。なんてむごいことを、と思つたが隣の女子社員とやたらいい雰囲気だ。

私はそのことについて考えるのをやめた、そして溜まっていた仕事に取り掛かる。

彼女に渡した仕事は、能力にもよるがまあよほど早くて四時間という所だろうか、昼過ぎにでも終われば上々であろう。

しばらくは静かな時間が流れる、いつもまとわり付いてくる部長もいない、極大の不安要素が隣にあるが順調に仕事を進められそうである。

ふむ、少し喉が渴いた。

「よろしければどうぞ」

などと思つていると、彼女がお茶を入れてきてくれたようで、一流秘書のような動作で私の横にそつと、お茶がはいった湯飲みを置く。

そして湯飲みを置く時にかがみこんで顔を近づけ、その愁いを帯びた瞳と優しげな表情で私の顔をじつと見つめてきた。

その動作に、思わず先日 of 件がよみがえって自衛のショートアツパーを打ち込みそうになったが思いとどまった私を、誰か褒めてほしい。

「どうもありがとうございます」

「ああん」

そう礼を述べながら彼女の顔を押し返す、あと変な声を出さないでいただきたい。

「ところで、部長とは今どのような状況でしょうか？」

「……お聞きになりたいですか？」

聞きたいから聞いているのだが、そんな恐ろしい笑顔をされては言葉に詰まる。

大事なことなんですよ、相打ちとか期待してるので。

「いえ、特には」

だがその様子ならそう低い可能性でもないのだろう、うむ。

お茶は温くて飲みやすく、微妙に彼女の気遣いを感じられた。(好感度プラス0)

そして三時間と少し過ぎた頃だろうか、隣の彼女から声がかかる。

「できあがりしましたわ、ご確認いただけますでしょうか？」

「……早いですね」

私の最速予想より一時間もはやいとは、流星に早すぎではないだろうか？

半信半疑で確認してみると、実際よくできている。

だがいくつか気になるのは、こちらに聞いてくるであろうと思われる、その手の資格を持つていないと難しい箇所が問題なくできているのと、彼女が艦娘というのを差し引いても早すぎるという所だ。

どう考えてもこの手の仕事の経験者である。

「失礼ですが前はどこに？」

「百万石海運の経理部ちよ……経理部にいましたわー」

今『部長』って言いかけなかっただろうか、しかも百万石海運ってうちより大きいイバル企業じゃなかったか。上で一体どんなやり取りがあったのだろうか、なぜその部長がここで平社員に転職するのか？

いや、それよりキャリアアップという言葉を知っているのだろうか？

ダウンしてんじゃん、アップしろよ。

どうしようこれ、彼女よりキャリアや経験に劣る私が、百万石海運の部長になんの仕事を頼めど？

むしろよその部署の部長とかやったらどうだろう、私のためにも。

などと考えていると、昼休みを知らせるチャイムが鳴る。

もうそんな時間か。

「昼休憩ですの、仕事は戻ってからの致しましょう」

銀行に行く予定があった私が立ち上がると、彼女が付いてきた。

「是非お昼を一緒にさせてください!!」

やだよ。

……いかん、さつきから思考が乱れている。

「私は銀行へ行く用事があるので、待っているのは貴方の休憩時間を無駄にしていま
すよ……」

優しさをアピールしつつ断るスタイルを選ぶことにする、これが成功したら明日から
毎日銀行へ行こう。

「かまいません、それでも是非お昼を一緒にさせてください、もちろん銀行への御用事の
際は邪魔にならないよう外でお待ちしますわ!!」

ですよね。

「部下にそこまで言われては、仕方ありませんね……」

部長ならともかく、流石にこうまで部下……いや、一時的な部下に懇願されてしまっ
ては仕方がないかもしれない。

まったく、芯の強く意志を通そうとするも、必ず一歩引いて気を利かせるその感じ、重
巡の艦娘はこのような気の利いた女性ばかりなのだろうか。

(好感度プラス0)



当然ながら昼の銀行というものは混む。

わかっているでも使わざるを得ないのが、サラリーマンのつらい所でもある。

とある事情から大きな額を引き出す予定だった私は、窓口で手続きをして順番を待っていた。

ちなみに彼女は銀行の向かいの喫茶店で待ってもらっている。

しかしまさか二人の重巡の艦娘の適性があつたとは……

彼女たちの提督として適合してしまつた以上、まあ、正直覚悟しなければならぬ所はあるだろう、私だつて艦娘にとつての提督がどういうものかは知っている。

そして当然ながら艦娘には感謝の念を持っている、が、大人の女は別だ。

別に彼女たちが嫌いというわけではない。

まあ好きでもないのだが。

だが無理なのだろうか。

あの日の私の願いをかなえるのは無理なのだろうか。

少し予想外のことがあっただけでここまでダメージを負うとは、私はこんなに弱かったのか。

などと悲嘆に暮れていると、ふと、隣の母娘が楽しそうにおしゃべりしているのが聞こえてきた。

幼女が楽しそうに「でつかいたてものだなー」と言っているのを、母親が「そうだね、おつきいねー」と優しく同意している。

……すばらしい、幼女はただ存在するだけで私を癒してくれる。

こんなにも穏やかな気持ちにさせてくれたことに感謝しつつ、私のような男が近くにいるのは怖がらせてしまうので、さりげなく立ち上がって席を移動しようとしたのだが。

「あめたべるか？」

なんと、一瞬目が合った幼女が、かばんの中から大事そうにしまっていたと思われ、飴玉を一つ私に差し出してくれた。

……。

まずい、泣いてしまいそうだ。

私は母親に視線を向ける、頂いてもかまわないだろうかという意味をこめて。上品そ

うな若い母親はコクリとうなずいてくれた。

私は片膝をつき幼女の目の高さまで視線を下げ、もちえる最高の優しい微笑みを浮かべて礼を述べる。

「これはこれはお嬢さん、ありがとうございます」

両手で大事に飴を受け取ると、幼女が微笑んでくれた。

コアコンピタンスがアグリーした。

翻訳するとメンタル1000パーセントまで回復した。

先ほどまで絶望に暮れていた過去の私に言いたい。

生きるのが辛くても絶対に諦めるなど。

私はこの後最高に幸せな瞬間を迎える、それは今まで生きてきて最高のレベルのものだと。

これはただの砂糖の塊ではない、幼女が私のために与えてくれた幸せの結晶だ。

どうやってお礼をしたものか、ダメだ払える対価が思いつかない。

私の残りの人生とかで足りるだろうか？

かつて無いレベルで脳細胞をフルに使い必死に考えていると、ふと、出入り口や窓口

付近に立つ男たちの姿が目に入る。

大きな目のバッグを持ち、視線や足運びから察せられる訓練された動き、六、いや七人か。

厄介ごとの気配を感じ取った私は、せめてこの母娘だけでも逃がさなければと思ったが、一足遅い。

「動くな！ 全員床に伏せろ!!」

そう叫びが聞こえたあと、男たちは携帯型サブマシンガンを何発か天井に向けて発砲した。

連続した発砲音が銀行内に響き渡る。

跳弾が飛んでくる可能性が少しでもあったため、私は母娘をかばうように床に倒れこむ。

遅れて悲鳴が響き渡り、従業員や客たちが慌てて伏せる。

典型的なやり取りで、金銭を要求する銀行強盗と応える銀行員。

母娘をかばうように伏せながら私は嫌な予感がぬぐえずにいた。

ただの銀行強盗ではない、装備も人数も大げさすぎる。

まず出入り口と窓の防犯シャッターが下ろされる、銀行専用の重厚なものだと動きと閉まる時の音でわかった、これで簡単には外部から侵入できなくなつた。

だが銀行強盗なら迅速に奪って迅速に逃げるのが基本だ、明らかに籠城の構えを見せる銀行強盗たち。

そして指示を出すリーダー格の男と目が合った、似たような目を見たことがある、よく知っている目だ。

リーダー格の男はしばらく私を見た後、視線をはずして部下たちに指示しながら集められた金を興味なさげに確認していく。

外ではすでに警察が到着しているようで、交渉のためか銀行の電話が鳴り響く音が聞こえてきた。

乱暴に受話器を取ったリーダー格の男が、早口にまくし立てる。

「車を一台用意しろ、十人乗りのワゴン車だ。二時間以内、五分遅れるごとに人質を一人殺す、人質は二人連れて行く、繰り返す、遅れれば一人殺す」

交渉の余地など一切ないように、返事は聞かずに電話を叩きつけた。

そして直ぐにリーダー格の男の下に部下の一人が駆け寄って耳打ちをする。

「……予定通りですリーダー、輸送車の準備整いました。いつでもいけます」

比較的近い場所にいた私はその声がよく聞こえた。

なるほど、警察に一息つかせてその隙に銀行内の駐車場にある輸送車で突破する算段か、おまけに現金輸送車は頑丈だろうから悪くない手だ。

あとは人質か、まあ選ばれてしまったものはご愁傷様だろう、おそらく生きて帰れない。

だが私にはどうしようもない、人には領分というものがある。

リーダーの男が指示を出し、指示を受けた部下の男が辺りを見回す。

そして、私の後ろで震えながら娘を抱きしめる母娘を見た。

……まずい。

母親は銀行強盗たちに目を付けられないよう、必死に幼女の口を押さえながら「しゃべっちゃダメ、しゃべっちゃダメよ……」と必死に言い聞かせている。

だが無情にも部下の男が母娘に近寄り、母親の手を引っ張り上げた。

「来い、二人共だ」

「む、娘だけは……」

「うるさい、死にたいのか！」

そう怒鳴りつけながら、母親に手を上げようとする。

気が付けば無意識に体が動き、私は部下の男の手を掴んでいた。

「待ってください、人質なら私がなりましたよ」

顔面に衝撃と痛み、かけていた眼鏡が飛び、視界がゆれて意識も飛びかける。

恐らく銃のストックで殴られたのだろう、だが、こんな所で気絶するわけにはいかな

い。

「人質なら私がりましょう」

再び顔面に衝撃と痛み、先ほどよりも強い、が、耐えられる。

「人質なら私がりましょう」

三度、顔面に衝撃と痛み、先ほどよりも強い、が、耐えられる。

「人質なら、私が、なりましょう」

四度目、顔面に衝撃と痛み、先ほどよりも強い、口の中を派手に切る、さすがに足がふらつく、が、意識はまだある。

誠意が足りなかったか、それとも言葉が聞こえなかったのだろうか。

「ひとじぢ、なら、わだし、が、なりま、じよう」

敵意の無いことをアピールするように、両手を広げながらも一度ゆっくりと言ってみる。

口の中の血を飲みながらしやべったため、少し言葉が崩れてしまった。

息を荒くしていた部下の男が、銃を振り上げた状態でなぜか距離をとるように一歩後ずさる。

「お、お前みたいなかいやつを連れて逃げれるか！」

「でしたら」

私は手のひらを上に向けて、両腕を部下の男の前に差し出す。

「どうぞ切り落としてください、さすがに足を切り落とされてしまうと運ぶのに不便でしょうから残していただけるとありがたいのですが」

「ふざけたこと言っただけじゃッ!」

嘘ではないことを証明しようと、まっすぐと部下の男を見据える。

なぜかまたしても、部下の男は二歩後ずさる。

なにもふざけてなどいない、さすがに止血はして欲しい所だが。

沈黙、誰もしゃべってくれない、おかしい、交渉方法を間違っただろうか。

「……その母娘はお前の身内かなにかか?」

周りにいる全員の視線が集まり、誰も動けずにいる中。リーダーの男がゆっくりと私に向かって歩いてきて、まるで道でも尋ねるような軽さで聞いてくる。

「いいえ? 居合わせただけの他人ではありませんが」

「なら言うとおりにしろ。そうしたらお前も、他のやつらも解放してやる」

「他のやつらに、彼女たちが含まれるなら言うとおりにいたしますが」

私は示すように幼女を守るように抱きしめながら、しやがみこむ母親の女性をちらりと見る。

「……なぜその母娘のためにそこまでしようとする?」

ああそうか、話がかみ合わないと思つたら確かに。

この銀行強盗たちに一番大事な経緯を伝えていなかった。

私はなるべく誠意が伝わるように、
「優しく微笑みながら」
わかりやすく端的に説明する。

「そちらのお嬢さんに、飴玉を一つ貰いましたので」

一瞬時が止まったような静寂が訪れたあと、私を四度殴りつけた部下の男が信じられないものを見るような顔で「狂ってやがる……」とつぶやいたのが聞こえた。

極めて正常だと思うのだが。

「何者だ、お前は」

「……」

無視したわけではないが、中々難しい問いだ。

なにについて知りたいのかをもう少し詳細に説明してくれないと、求める所がわからない。

黙っている私と、静かな目でこちらを見てくるリーダーの男。

やがてリーダーの男がゆっくりと腰から拳銃を抜き、私の眉間に銃口を向けた。

「俺が撃てないと思うか？」

「いいえ、貴方は撃てる人でしょう。力というものの振るい方を知り、そして力というものに絶対の信奉を抱いている目ですから。そういう人間を私は知っているので」

力（ラリアット）を振るうべき時に振るう目だ。

狂気に囚われず、必要なら必要なことをする目だ。

先輩と同じ目だ。

「俺もお前のようなやつを何人か見たことがある、どいつもこいつも信仰のためなら自分の命を躊躇無く捨てられる狂信者だった。お前はそいつらと同じ目をしてるよ」

視線がぶつかり合う、ここでこの男と相打ちに持ち込んだところで事態は打開できない。

なにより優先すべきは少女の命である、私は一つのカードを切ることにした。

「前島と申します」

「あ？」

「私の名前です」

「なんのつもりだ？ お前の名前など……」

目を細めるリーダーの男の声をさえぎり私はカードを切る。

「そして私は『提督』です、人質としての価値であればここにいる誰よりも、遥かに上で

しよう」

リーダーの男はその言葉を聞いて眉一つ動かさなかったが、彼らの部下の間に動揺が走ったのがわかった。

提督を人質にする、そのリターンもリスクもよくわかっている反応だった、やはりこの集団はただの銀行強盗では無い。

「ふん、上手い手だ。もしその情報が本当なら俺たちはお前を殺せないからな」

リーダーの男が銃を下げる。

「その情報が本当なら、な」

そしてリーダーの男は私の足を撃った。

衝撃と痛みで膝が折れそうになるが近くの座席の背もたれを掴み、なんとか踏みとどまる。

足の中にある異物の感触が感じられたので、おそらく弾は抜けていないだろう。

よかった、もし後ろの少女に跳弾が当たりでもしたらなにもかもおしまいだった。撃つならもつと上を撃ってほしかったという不満をこめて、リーダーの男を見る。

「その状態でなお俺をにらみつける、か。くそッ、本当に提督なのかお前は」

リーダーが忌々しそうに唇をゆがめる。

別ににらんでいたわけではないのだが。

しかしなるほど、彼は余計なリスクを負いたくないといった心境か。

「残念なことに、免許を忘れたので証明はできませんがね」

「ちツ……おい撤収だ、地下の逃走ルートを使う」

「リーダー！ こいつのたわごとを信じるんですか！ 唯でさえ先陣のマヌケ共がしくじって予定が押ししてるんです！ こんなやつとつとと殺して、予定通り続けましょう！」

「駄目だ、不確定要素が多すぎる。計画は破棄だ」

「しかし!!」

銀行強盗内での言い争い、まずい、もしここで内部分裂でもされて撃ち合いになれば、他の人間はともかく幼女に危険が……。

ギユメキユツ

その音は、とても鈍く重く、だがどこかコミカルな感じにでもあった。

言い争っていた強盗たちは息が止まったように静かになり、音の発生源の方に振り向く。

通常の物より遙かに重厚に設計された防犯シャッター、そのシャッターを貫くように

入り口付近の部分から突き出した細い腕。

細い腕の先、握られていた手が開きボトリとなにかが金属音を響かせながら床に落ちる。

それは握り破られ、圧縮されたシャツターの破片だった。

その手がゆつくりと引つ込んでから僅かに間をおいて、その穴を広げるように、まるで障子紙を破るような軽さで防犯シャツターがバリバリとこじ開けられ、いや、はがされる。

か細い女性の両腕で。

その場にいた誰もがその様子を見て固まっていた、そしてゆつくりと現れたのは……

「高雄」

ボソリと、私がつぶやいた言葉、その言葉が聞こえたのかこちらを見た高雄がにこりと微笑む、甘い甘い砂糖菓子のような溶けてしまいそうな笑みだった。

「ご無事でしたか、提督」

だが、その笑顔が私の足から流れる血と殴られた顔を見て、凍りついたような顔になり、ゆつくりと感情の無い瞳で、銃を私に向けていたリーダーを見た、瞬間

「スモオオオークツ!! スモークだああああ!!」

歴戦の判断のなせる反応速度か、リーダーの男が悲鳴に近い叫びをあげる。その声を聞いて凍り付いていた部下の全員が、スモークグレネードをばら撒いた。

構内にあつという間に充満する白い煙、訓練を受けていない普通の人たちがゴホゴホと咳き込む声があちこちに響く。

強盗たちがどこかに向かって逃走を開始した気配が感じられた、そしてリーダーの男が去り際に私に言葉を投げかける。

「前島といったか、この礼はいつかさせてもらおうぞ」

「別にあれ、倒してしまってもかまわないですよ？」

「……やっぱ礼は無しだ」

姿は見えないが、引きつった顔のリーダーの男の顔を想像してしまい、それがどうにも先輩とダブってしまったため軽く笑ってしまう。

リーダーの男の気配が消え、すぐに高雄が私の許に走ってくるのが気配でわかってしまった。

その姿を確認する前に、出血の為か私の意識は途切れた。



とりあえず気絶してからの経緯を軽く説明する。

警察の聴取などは全て放り出し、高雄は私をおぶって病院へ駆け込んだらしい。

部長の時とは逆だが気絶していたので覚えていない。

すぐに手術で銃弾を摘出、無事終わり個室のベッドで目を覚ます。

ゆっくりと目を開けると、高雄がベッドの横の椅子に座ってじつとこちらを見つめていた。

「あの母娘は？」

「まず最初に聞かれるのがそれですか……無事です、今この病院で検査中のようですが特に外傷は無いと聞いております。あと銀行強盗たち、あらかじめ地下に掘ってあったトンネルから逃げたようで、警察が追っているようですわ。後、警察への事情説明は全て私がしておきましたので」

よかった、幼女は無事だったか……

続いて金に興味の無さそうだった、リーダーの男の姿を思い出す。

もしかしたら彼らには、もっと別の目的があったのかもしれない。

しかし求める以上の情報を察して教えてくれる、か。

優秀な女性だ、本当になぜ……いや、私がいるからか……

「それはよかった」

「よくありません!!」

病室に響き渡る大声。

「提督は、提督は……やっとお逢いできたのに、もし提督になにかあれば……」

最後まで言うことができず、高雄は私の胸に飛び込んで泣きじやくる。

流石の私も、これを押しのけるような真似はできない。

あの人と同じ顔をしてた、高雄に。

泣きじやくる高雄をなだめていると、勢いよく音を立てて病室の扉が開く。

現れたのは部長（愛宕）だ。

さて

嫌な予感がしてきた。

「よかったああああ!! 提督無事だったああああ!!」

そう叫びながら、愛宕は高雄に抱きつかれて動けない私に飛び込んで来る。

そしてついでのように唇を奪った。

なん で で で す か

まったく流れが理解できない。

ついでにメンタルが1パーセントまで下降した、これ以上私にどうしろというのですか。

「高雄ごべんなさいいいいいい！ 提督をまもつでぐれてありがどおおお!!」

「ばがめといつてさしあげますわああああ!! でも愛宕わだじもごめんなさいいいいい!!」

貴方たちはまず私に謝まっていたください。

というか、高雄。相手がプロだったからよかつたものの、あんな突入の仕方をされたら、もし素人だったらかなり危険（幼女が）なことになってただろうから反省して欲しい。

でもどうやらお互いに謝りあっているのを見るに、私の知らないところで起きていた戦いは終わったということか、相打ちへの淡い期待が消えた。

しかし、つまりは今後二人でタッグを組んで攻勢を仕掛けてくるということだろうか？

ああ、もうダメかと人生を悲観し始め、そう思ったその時、あきつばなしだった扉から銀行にいた母娘が入ってくるのが見えた。

幼女が私を見つけてぱつと顔を輝かせる。

あ、メンタル1000パーセントまで回復した。

母親は申し訳無さそうにしながら、腰を深く折り曲げて私に感謝を示す。私も軽く目礼を返す。

そして幼女は私の寝ているベッドによじ登ると、愛宕と高雄に左右から抱きつかれて動けない私の真正面の胸の中へ、勢いよく飛び込んできた。

神はいませり。

「よかった、ぶじだったか！ かーちゃん守ってくれてありがとな!!」

「いえいえ、お嬢さんがご無事のようにでなによりですよ」

ああ、なんとという祝福、こんな人生でも生きていて本当によかったと思わせてくれる。やはり幼女は偉大だ。

「でも無理すんなよ、これからはわたしのうしろにかくれてるんだぞ」

はい、ずっと隠れていきたいです、貴方が大人になるその瞬間まで。

「ははは、それは頼もしい」

「あつたりまえだろ？ あたしはまやさまだぜ？ よろしくなっていく!!」

「ええ、よろしくお願います、まやさ……ん？」

はい？

今なんと？

『学者』と『駆逐艦：初霜』（設定回）

目次

- 学者と秘書の紹介
 - 本作の世界の大まかな歴史
 - 艦夢守市について
 - 提督適性者について
 - 艦娘について（誕生と寿命）
 - 艦娘について（身体能力―艤装）
 - 艦娘について（提督適性者関連）
 - 艦娘について（その他）
 - 制度や法律について
 - 登場人物紹介（登場済の提督や艦娘）
 - Q & A
-

■ 学者と秘書の紹介

・ 学者

名前は音羽悟志（おとはさとし）。

艦娘とか歴史の学者を名乗っているが副業で艦夢守市職員をしている。

現在『艦娘と世界の歴史』と、いう本を執筆作業中。

駆逐艦：初霜の個別適性者という以外、特にこれといった特長は多分無い。

初霜さんの作るリングジュースが好き。

・ 駆逐艦：初霜

人間名は音羽真琴（おとわまこと）

執筆にのめりこんで前しか見えなくなることが多く、どこかチキンの学者を上手く舵取りして引つ張ってくれる存在。

実は小説家と二足のわらじをしつつ、学者の秘書もしている。

この項目必要かと聞かれれば、学者と秘書の初霜さんによつてちよいちよいと、この設定の話数が書き足されたり修正されている、という感じを出したかったので、多分必要だった。

『学者』と『駆逐艦：初霜』

（設定回）

鉄の艤装は錆び

鉄の足は力を失い

埋もれた砲は

二度と火を噴くことが無い

深海棲艦も死んだ

妖精も見えなくなつた

だが

平和な艦夢守市に

住みながら

艦娘たちは

確信していた

提督は今日も生き

提督は今日も走っていると

艦娘は提督の声を聞いた

吹き渡る島風の中で

確かに聞いた

「うん、いいできた。実際と違う部分もあるかもだが、入りはこんな感じがいいだろう」
私たちの住むセカイは一度滅びかけた。

今から百年以上も昔の話だ。

地球上には今の数倍の国家があつて、人口も現在の五倍以上いたらしい。

新幹線という高速列車が走り、昔この国の首都だった東京と呼ばれる場所へも全国各地から人がやって来たという。

今ではその場所は五十万ほどの地方都市だけど、往時は一千万人以上住んでいたとか。

今の長距離移動手段は船舶と特殊大型飛行艇が中心だ。

沢山の船が世界の海を行き交う、時々艦娘の力を借りたりもする。

石油が枯渇し始めた為、代用エネルギーの発見が今の課題だろう。

ちなみに艦娘の燃料に関しては『艦連（艦娘連絡会）』によって管理されている。

また艦娘の燃料が通常燃料に転用可能かに関しては『できない』というのが公然の建前である。

艦連と正面からやりあいたければ調べてみるのもいいかもしれない。

また先ほどの『特殊大型飛行艇』についても艦連が製造、貸し出しを行っている。燃料や技術に関して機密が多く、艦娘しか操縦できないという点もあるからだ。

おっと、自己紹介がまだだったか。

私は音羽悟志、提督適性者でもあり艦娘を母に持っている。

母は『満潮』と呼ばれる艦娘だ。

母から聞いた昔話や絵本などで歴史好きになり、やがて歴史研究家を志すようになった経緯がある。

余談だがこの前母に「小さいママの貴方が好きです」

と言ったら本気で蹴られてしまった、艦娘の母への愛情表現はとても難しい。

職場は艦夢守市にある市役所の艦娘課。

一応、課長代理を務めているが、本業は学者であり、市役所の職員は副業だ。

ちなみにその副業の仕事は主に艦娘たちの愚痴を聞く役。

提督が見つかからない、お姉さまが見つかからない、不幸だわ、などと彼女たちが余人に漏らしても理解されにくい話の聞き役だ。

私の秘書艦は駆逐艦の初霜、人間名は音羽真琴。

見た目は女子中学生だが、私よりずっと歳上らしい。（詳しくは教えてもらえない）

頼れる先輩でもある。

艦娘たちの殆どが見た目未成年だから、『艦娘証明証』の携帯は必須だ。

運転免許証のようなもので、提督適性者が持つ『提督適性者免許』と同じく、うちの市役所で発行される身分証だ。

この証明証だが、国内では艦夢守市役所でしか発行されない。

この艦娘課で彼女たちは一元管理されるということだ。

そして、提督適性者たちも全員、この課で一元管理だ。

でも、今回は妙な提督が何人も見つかったている。

「ところで、初霜さん。このところなんだか変な提督適性者が何人も見つかったという噂だけど。あのさあ、『彼ら』を見つからなかったことにできないかなあ?」

「そんなことできる訳ないじゃないですか! 提督、きちんと仕事してくださいっ!」

「提督のお仕事は市役所の艦娘課の職員です!」

「え? いや、学者だよ」

ざわつく課内、何故だ、私が学者なのは周知の事実だろうに。

「そう思ってるのは提督だけですよ!!」

今日も私の職場は慌ただしい。

多分そんな毎日。

■ 本作の世界の（相当）大まかな歴史

・ 数百年前

その昔、今の現代くらいの時代にどこから現れた「深海棲艦」というフレンズによって世界は大騒ぎ。

その後どこかから現れた艦娘や妖精と、その辺にいた提督と、残った人類全部VS深海棲艦による生存競争がワンツースリーのはいどーぞではじまる。

半世紀近く戦って、人類の数超減る、まじばない「深海棲艦」

でももうおしまいかと思われたその時

『最終皇帝提督』（ラストエンペラーコマンドー）

『戦狂少佐提督』（ウォーモーターガンアドミラル）

『紅茶大好提督』（民主主義絶対守るマン）

『串刺し公提督』（佐世保のカズイクル・ベイ）

『黄金野獣提督』（私は全てを愛しますねえ！）

というなんかとつてもやばい提督（他にも）が誕生。

この辺の提督は後世に名前が付けられた人ばかりなので、当時こんな名前だったかは不明。

とりあえず大変だったけどなんとかギリギリ「深海棲艦」を滅ぼす。

・終戦

人類は超滅つて文明も退化したけど、艦娘とのラブコメとか人間のしぶとさでまた数が増える。

提督と艦娘は余裕で一夫多妻状態だった、修羅場とかはない、いいね？

結局人類なので途中で戦争とかある、でも艦娘主導によるすごい国連みたいな組織

国連ならぬ『艦連』英語では『KN』

正式名称：艦娘連絡会

の力により、世界規模の戦争はあんまり起こらず秩序は保たれる。

でも艦娘に関係のない戦争とかは好きにやっってくださいという流れ。

（大淀の気配がちらつく）

支部は世界中にあるけど、戦争の影響で当時と地名や地形が全部変わっているので詳細は省きます。

あと秩序を守るにはパワーが必要なので、『艦連』には艦娘の軍隊『艦娘軍』が存在し

てる。

が、それよりもっとヤバイくて多い『憲兵軍』っていう艦娘にその生涯を捧げる超ヤバイやつらが主力としている。

『憲兵軍』は『艦娘軍』の隷下組織、「憲兵」の文字が付いているけど、これは過去艦娘と共にあった憲兵たちの流れを汲んで付けられているだけなので、実際はあらゆる軍務を遂行する。

更にその中の『憲兵千鬼衆』っていう一人一人が洋画の主役レベルのもう一段ヤバイやつらも居る、悪党ほどその名前を聞くと吐く。

『憲兵千鬼衆』は他の憲兵軍と違い、普段は闇にまぎれてて特に現世の戦争とか争いには干渉しないけど、提督と艦娘に手を出したら（提督が死んだ場合を指す）、提督のあだ討ちのためにそいつらが、殺された提督の艦娘の隷下に編入されて壮絶な復讐劇が始まる。

後一部のタブーを破ると出張ってくる。

基本的に子供でも知ってるやばいことなので、提督には基本的に誰も手は出せないし、出さない。

あと必要な資金はいろいろな所から集まってくる。

（大淀の気配がちらつく part 2）

これらの軍はまとめて『艦連軍』と呼ばれることが多い。

※艦連や艦連軍に関して、詳細な組織設定、世界でどのように展開、活動しているのかなどはあんまし深く考えてません、なにかすごい影響力があるみたいなイメージでお願いします。

・本作の現在

脱線したけど、終戦後時間を掛けてなんやかんやで復興した、本作の現代。

上記のしびれるような綿密な設定により、ラブコメの下地作りは完璧。

色々書いたけどとりあえず全部忘れていい。基本的に艦娘が受け入れられ、敬われている優しい世界という認識があればオツケー。(ほんととお?)

ホントだよ、さあ、ラブコメの時間だ。

■艦夢守市について

・艦娘主導により治められている市、艦娘とその家族の移住推奨地域。

各国にある『艦連』の拠点地域でもあり、「一応」その国家所属の市でもある。

提督適性者も集まるといふ出所不明の統計情報もあったりする。

(艦娘を一部の地域に集め、提督と共に守りやすくするための建前という説もある)

・人口

二十万位、現在進行形で増加中。

少ない気もするのでもっと増えるかもしれない。

でも治安維持の関係であんまり多くはない。

・場所

大昔に淡路島と呼ばれていたらしい島（あくまでらしい島）

島全体を指して『艦夢守市』『艦夢守島』と呼ぶ。

周囲の海は艦連が警備しているのでかなり安全。

『僕』がいつも最後に眺めているのは、その中の一番大きな街のこと。

― 名所・施設など ―

・歓楽街

ホストクラブ「YOKOSUKA」がある

・ビジネス街

金剛連合会のビルや、意識高い人の働いている場所。

加賀さんや翔鶴ねえの経営する会社のビルもある。

・駅前

艦夢守市にある地方沿線の駅舎がある。

駅ビルは数年前に改築されて、都会の大型商業施設クラス。

駅ビル名は『ヘクセン』。

魔女の名前を持つショッピングモール。

地下三階、地上は七階。

地元百貨店も一部入っている。

・市役所

【本店】と呼ばれる場所は『ヘクセン』の近くにある。

だが【新店】は『ヘクセン』の最上階にある。

新店にあるのは艦夢守市艦娘課。

全国の艦娘と提督適性者を一元管理する場所。

憲兵軍の生え抜きを調査員として複数有し、艦娘たちは年一度の講習が義務付けられている。

艦娘課では情報提供をしており、関わりの深い同胞（艦娘）の情報を得たい艦娘たちが日々訪れている。

・ジェノヴァ料理店『マエストラーレ』

リベッチオが切り盛りしてる店、料理が超おいしい。

意識の高い男がよく出没する。

・ラーメン屋『大湊』

老年のオヤツさんと、生意気そうな若いニーちゃんがり盛りする隠れた名店。おっぱいの大きい補給艦のカモイポロトカプも働いている。

・料亭『黒潮』

格式あるお高い料亭。

関係者に艦娘が居て最近ラーメンにはまってるらしい。

・艦夢守港（艦夢守市最大の港）

大昔に洲本港と呼ばれた場所にあるっぽい

日々沢山の人や物資が行き来する大きな港。

港の運営は比叡組のフロント企業がやっている。

余談だが比叡組の湾岸労働者組合員は強い。

・公園

僕がよく行くトイレがあったり、無職がうなだれている公園。

景色がきれいなこと以外特に特筆すべきところはない。

・河川敷の野球場

よく陽炎型と無職が野球をしている。

意識の高い男がたまに出没する。

・学校

その辺にある、『僕』や『弟』、川内やその提督が通つてゐる（通つてた）学校などが市全体に点在してゐる。学園都市みたいにとまってる可能性もある。（ふわふわモード）

・南雲病院

市内有数の病院、『赤鬼』というスーパー外科医が院長をやつてゐる、切るのは得意だとか。

・スポーツジム『GIY』

色んなスポーツのインストラクターの資格を持つオーナーが経営してゐるジム。

月額会費はそれなりにお高いけど、設備や指導者が充実しているので人気はかなりあり、実は結構会員になるのも難しかったりする。

・銀行

昼間は混む、時々襲われる。

・艦連軍基地

艦娘軍、憲兵軍が駐屯してゐる場所、一般開放は多分無い。

また、官民問わず艦娘の基礎訓練、艦装の修理なども行う。

現代の鎮守府にあたる場所かもしれないが、艦娘を建造する設備は現代にはもう無

い、多分。

※艦夢守市以外の地域や国

現状本作には必要ないので特に考えてません。

必要になったら考えます。

■提督適性者について

・提督適性について

艦娘が捜し求めている『提督』の素質を持った人間のこと。

適性には種類があり

『全艦適性』 全ての艦娘にヒットする（登場予定なし）

『艦種適性』 戦艦、駆逐艦など、該当艦種艦娘にヒットする

『艦型適性』 川内型、高雄型、など該当型艦娘にヒットする

『個別適性』 特定の艦娘のみにヒットする（複数の場合あり）

『複合適性』 型、個別など両方の適性を持つ組み合わせ

があり、現在では個別適性以外の提督適性者は、ほとんど確認されていない。※重要

故に基本的には一人の艦娘につき、一人の提督というのが基本である。修羅場なんて基本起こらない、いいね？

艦娘はこの適性者しか好きになることもなく、子供を作ったりすることもできない。難しい問題もはらむが、艦娘たちはそういうものとして本能で捉え納得している。

一説では、仕える人を間違わないように妖精さんが艦娘に与えたスキルだという説もある。

・提督適性者の発見方法

【適性に該当する艦娘が出会って初めて判明する】※重要

それ以外に調べる方法はないので、正に運命の出会いにかけるしかないのが現状。

※投稿当初では、誰の提督かはわからないが、艦娘なら提督適性者かどうかは分かるという設定でしたが、大規模な提督探索システムの構築が容易になってしまいそうだったので、変更しました。矛盾箇所はのんびり随時修正していきます。

・女性の提督適性者について

過去に女性の適性者や提督が存在した例がある。

が、かなり稀な事例なので基本的には起こらない事態。

もし適合した場合は子供は作れないが、ガールズラブが始まる。
 （多分書かないというか、マ〇みてを全部みてないので書けない）

・提督適性者が二人いた場合

適合する提督適性者が二人同時にその艦娘の目の前に現れた場合

早い者勝ちで、先に見たほうが自分の提督として適合する。

でもこの状況はほぼ確実に起こらない。

何故なら自分に適合する提督適性者一人と出会えるだけでも十分奇跡的確率だから。

・提督のキャパにおける例外的な状況

加賀の個別適性を持つ提督が一人居たとする

そしてその目の前に加賀が二人居た場合は、先に提督を見つけたほうが優先され、もう片方は例え自分の適性を持っている提督だったとしても、自分の提督とはならない。

そして殺しても奪い取る、みたいな状況にはならない。

提督のキャパが埋まってしまい、たとえその艦娘を殺しても自分の提督にはならないと、本能で察せられるからだと思われる。（便利な本能設定）

個別適性以外でも同様、一回埋まってしまうともう他の同艦、艦娘は適合しなくなる。

←補足説明、感想のお返し引用

提督○○○（それぞれの○が由良、鬼怒、阿武隈のキャパ専用の穴だと思っ
てもらっ
て）

例えば初めて由良が提督を見た場合

提督●○○（由良のキャパが埋まった状態）

で、もしこの埋まった状態で、なんらかの原因で由良が死んだ場合でも

提督●○○（この状態は一生解除されない）

みたいなイメージでしょうか。

つまり、このあと再び別個体の由良と出会えたとしても、キャパが埋まってしまっ
ているため別個体の由良は弟を提督にはできない。

そんな感じで、残りのあいた穴には鬼怒と阿武隈がまだはまる余地が残っている感
じです。

正直、なんらかの原因で艦娘が身を引いた場合（既婚者など）その提督のキャパは無
駄に埋まってしまい、おまけにその埋まった提督が死ぬまで、艦娘側は新たな提督が見
つけられないという、凄まじく悲しいことになる。

でも、こうしないと艦娘同士の悲しい事件も起きてしまう。

書いてる人は神の様に無力なので、どうか読者側で幸せな世界を作ってあげてください。

・艦種の変化に伴う適性変化

鈴谷など『第二艦娘変わり』※詳細は別項目

などにより、重巡から軽空母などに艦種が変化した場合、重巡適性を持った提督の適性からは外れてしまうので、適合する提督が変わる場合が稀に稀にある。

だが、既にその提督に出会って適合している場合は、艦種変化を伴う艦娘変わりは起こらない。

個別適性、艦型適性などの場合は、艦種が変化しても問題なく適合する。

・『提督適性者免許』

艦娘を連れて市役所にいき、証明と書類手続きを終えると交付してもらえる免許。

身分の証明や、様々な人、団体や組織から色々な便宜を図ってもらえると思われる。

艦娘が運営する団体からの、交付金を受け取れたりするので登録推奨。

また、色んな施設使用の際も優遇してもらえる。（困い込まなきゃならんからなボソ）

『意識高い男』は愛宕に無理やり連れて行かれて取らされたので所持している。他に『ヒモ』や『弟』は普通に持つていて、『無職』や『僕』や『ホスト』はまだ取っていない。※15話現在情報

『艦娘証明証』というものがあり、こちらは艦娘と証明する以外特に使い道はない。なお、両方とも偽造すると『憲兵千鬼衆』がやってくる、アイヤー。

■艦娘について（誕生と寿命）

・誕生と寿命

普通の赤ん坊として生まれてくる。

生まれてからしばらく経ってから、通常よりも早い成長具合などで艦娘と判明する。

判明した場合は至急届出が必要。

普通の赤ん坊より成長速度が速く、一年たたないうちに自我がはつきりし、艦娘としての記憶はこの段階ですでにある。

そしてどんな環境で育ったとしても、その記憶にしたがって性格が形成されるため、まったく違う環境で育った同じ艦種の艦娘でも、比較的近い性格になる。

二年たった頃には差異はあるが、六く九歳程度の体つきになり、身体能力もすでに成人男性を遥かに超えるものになる。

その後、艦種にもよるが、六歳〜十二歳くらいの中に『艦娘変わり』という、人間でいう成長期的な肉体変化が起こり、艦娘の姿として固定される。

その後の艦娘たちは死ぬまでこの姿。

寿命は基本的に八十歳程度だが、年経た艦娘が若い提督と添い遂げるために気合で寿命を延ばすことが多々、多々ある（強調）

・補足

『艦娘変わり』

この期間は早くて一ヶ月、長くて一年以上続き、肉体的にも精神的にも不安定になることがある。

つまり六歳〜十二歳で大人の見た目に見える状態となる艦娘も居る。

彼女たちが隔離教育を受けているのはそのためでもある。

隔離教育は十二歳以降は、本人の希望で続けるか通常クラスへの編入かを選べるが、艦娘専門の履修科目があり、それを受ける必要がある。

だが提督がそのクラスにいるなどの理由が無い限り、ほとんどの艦娘はそのまま隔離教育希望する、なんとなく。

『第二次艦娘変わり』

いつ起こるかも不明で、起こらないこともある。

専門の用語で『改二』という状態に変わる肉体変化が起こることもある。

この状態になると新たに様々な力が備わる、戦闘能力とかとても上がる、おっぱいとかも大きくなる場合がある。(改三実装はR J最後の希望)

『艦娘が誕生してからの流れ』

艦娘と判明した場合は、国と専門の機関への届出が絶対に必要。

その後、艦娘の育成を専門の機関が引き取り行うか、家庭で行うかを選び、家庭で行う場合は専門の講習が必要になる。

『弟』の両親は当然これを受けている。

■艦娘について(艦装―身体能力―軍事関係)

・艦装

普段は秘密のポケット空間(艦装格納庫)にしまつてあるけど、任意で展開できる。

でも使える様(法律的)になるためには、色んな講習や免許が必要、免許を持つてないのに使うと「ダメだぞつて」怒られる。

動かすのや展開するのに燃料や弾薬が必要だけど、市役所で詳細な申請とかしないと

もらえない。（自前で調達してくる堅気じゃない艦娘も居る）

でも、生まれた時から最初持っている燃料や弾薬はあるので、いざというときはそれを使う。

・腕力、脚力等

艦娘変わりは後には通常時でもプロレスラーくらいある、コントロール訓練必要、提督とイチヤイチヤするときには多分力が抜ける。

ハートのタービンに火を入れる（燃料必要）と機関出力基準の力を出せるけど、出力に合わせて瞬間的に重量が肥大化するので、ある基準を超える力を出すなら、艦装を展開した上で水面に立たないと異常が出る。

・防御力（常時展開）

拳銃弾 ↓ひゃっ！

ライフル弾 ↓うざいってば！

対戦車ライフル ↓いったーい！

RPGとか ↓流石にかなりいてえな……

戦車砲 ↓撃たれた!!

・免疫

船には細菌とかウイルスはきかない。

でも艦娘を看病するシチュエーションが欲しくなったらなんかそういう病気が作られる。

・毒物

基本的に余裕で効かない。

でもアルコールは効くかもしれない、不思議。

媚薬？ R18ヘドウゾ。

・人間的、女性的な生理現象など

秘密、でも基本その辺とは無縁、察して欲しい。

長時間戦闘の邪魔になるので存在しないとかなんとか建前。

夢があるんです、リアルを求める人は許してほしい。

・軍事関係

艦娘は艦装をまもって軍人として活動している個体もいます。

ですが、提督がいない状態で戦えるのか？

艦装の修理は？ 燃料は？ 指揮系統は？

それら含めてどのように運用されている？

といった様々な設定に関してはなんとなくまくやつてる。

というイメージでおねがいます。

・陽炎で見る、艦娘の生息

■艦娘について（提督適性者関連）

・基本的な艦娘の感情

基本的には艦娘としての記憶もあいまって、普通の人間と変わらない安定した精神感情を持って生活をしているが、常に心のどこかでなにか足りないと思っている。

なにか足りない、というのが提督だと気が付くまで、

あらずじにあるような自己の存在理由に思い悩む。

（既に見つけてる場合はこの限りではない）

「戦わない私たちに意味があるのか」

「人を遥かに超えるこの力はなんだ」

「そもそも私たちは兵器なのか、人なのか」

「こんな私たちに生きる価値はあるのか」

「なぜ私たちは生きるのだ」

「意思とは」

「そして、生命とは」

「ただどある程度の年齢を重ねるとそんなことはど——でもよくなつて、誰もが己の内にある、たった一つの大切な想いに気が付く。」

『私の提督を見つけなければ』

問題はここからで、この後にも提督が見つからなければどんどん精神状況は変化していく。

建造されたのに、目の前に提督がないような精神状況が続き、それが存在意義の根底に関わる問題になるのかもしれない。

その時の艦娘の精神状況と、提督との出会いの組み合わせこそが、本作のネックになつている気がしなくもないので、とりあえずふわつとこの辺はこんな所で終わり。

・提督をみつけたら

本作のタイトルにもなつている一番の見せ場。

でも大体雷が落ちたようになるだけ、この人だ、と本能が叫びを上げる感じ。

艦娘によって、表現方法が変わったりする。

例を上げると比叡等は

『自分の中の今まで一度も使われなかった動力機関に初めて火が入ったような感覚。』
と、表現している。

まあどう言い繕おうと、もうデレデレである。

姉妹ラブ勢といえど、この感情からは、逃れられない。

一説では、仕える人を間違わないように妖精さんが艦娘に与えたスキルだという説もある。

・艦名の契り

艦娘が自分の艦名を呼ぶように願い、そして提督適性者が受け止めて、その名前を呼ぶことを指す。自分の艦名を自分からそう呼ぶようお願いするのは、彼女たちが選んだ提督適性者だけだとかなんとかかとかか。

艦娘は同じ艦娘と提督適性者以外に、面と向かって自分の艦名を呼ばれることがあまり好きではない（人間の名前はOK）。が、まあせいぜい親しくない人にあだ名で呼ばれる程度の感情なので、手を上げたりは多分しない。

あと「艦名の契り」をしたからといって、特になにか変化はない。でもしてもらえると艦娘は超ウルトラスーパーミラクルうれしい。もしかしたら「艦名の契り」をしてくれた場合、なんとなく提督のいる方向がわかるとかそういう設定が追加される可能性もあるが、今のところ保留中。

・複数の別種の艦娘が同じ適性者に適合した場合。
修羅場なんて無い、恐らくメイビー。
でも一番になりたい乙女心はあるかもしれない。

■艦娘について（その他）

・数は国内で千〜二千人くらい（増えたり減ったりする可能性高）
同じ艦種（例：川内と川内）みたいな同じ姿の艦娘が居る状況は、その時代に2〜3人くらいだと思われる、一人しか居ない場合もある。
世界全ての艦娘の数となるとちよつとわからない。

（まだ原作で登場してない艦娘も居る）

・艦娘は提督が見つからないと大体仕事に走る。

世界の仕組みと合わさって艦娘の権力者比率はめっちゃ高い。

・提督が事故死、病死した場合。

残された艦娘に寿命が残っていなければそのまま（除籍日）を迎える。まだ寿命が残っていれば、新たな提督適性者を見つけた場合適合する。が、その提督とまた添い遂げるかは、艦娘によって異なる。

また、最初の提督のような感情が湧くかも艦娘によって異なる。

・脳波共振について

同じ艦である艦娘同士が近くに居ると（距離不明）

二日酔いレベルの頭痛がする。

が、提督がいれば回避できる可能性もワンチャンある。（設定検討中）
また脳波共振が起こるのは、艦娘変わり終了後から。

■制度や法律について

・結婚に関して

艦娘としての戸籍があるので、同じ家族とでも結婚は可能。

生物学的にも問題はない。

重婚が可能かはまだ設定考え中ですが、ほぼほぼできると思われる。

ただ、重婚が必要な適性者が少ないので、形骸化しつつある制度なのかもしれない。
 ・艦娘は、艦娘名とは別に、人間としての名前を持っている。

■登場人物紹介（登場済の提督や艦娘）

※工事中

お茶濁し適当相関図

←

■Q & A

※頂いた感想を抜粋、変更して記載しているものもあります。

もし感想書いていただいた方の中で、消して欲しいという方がいらつしやいましたらお手数ですがメッセージでご連絡お願いいたします。

◆Q. 「提督をみつけたら」三次創作を書きたい!!

◆A. 是非に、ですが活動報告に「提督をみつけたら」三次創作ガイドライン というものを投稿しておりますので、そちらを一読後、ご判断いただければと思います。

◆Q. 代々トップは常に『霧島』という霧島組は、ダライ・ラマやパンチエン・ラマ

の様に代替わりしているのでしょうか？

◆A. 金剛連合会の組長継承問題は、組長不在の状態でも、継承する艦娘が現れるまでは、他の金剛型が肩代わりして組長は空位のまま運営する形を取っています。

基本的にどこかに一人くらいはいるので、提督が見つかったり寿命を迎えた組長の地位は、別の金剛型に継承されます。

……なんだかいよいよ仁義なきシリーズみたいな話ですね。

◆Q. 人間以外の提督も……いる？

◆A. 人間以外の提督はたぶん出ない予定……うん、予定です。

◆Q. 今のところ海外艦はリベツチオのみだけど、今後は他にも出てきそう？

◆A. 総勢200名以上の艦娘を実弾にした、ロシアンルーレットやってるイメージなので、海外艦登場の可能性はあります。

◆Q. ふと思ったんですけど、これ、島風や天津風、秋月型が来た場合、連装砲ちゃんなたちも懐くんでしょうか？

◆A. 懐く

◆Q. 由良さんはいい……。

◆A. うん、由良さんはいい……。

◆Q. 艦娘の成長速度……年下のお姉ちゃん……。

◆ A. 好きでしょ？

◆ Q. この世界での艦娘って、生まれた瞬間にこの女の子は艦娘の誰々だって判別できらんですかね？

親としては産まれる前から普通の子供の名前として決めてたりするのもあるだろうし、いつ頃艦娘として判明して艦娘の名前になったりするんですかね？ 産まれて少ししてから判明するのなら、それまで人間としての普通の名前もあるのかどうか。

◆ A. 生まれてからしばらくして、艦娘としての記憶を基に自分の艦娘名を申告する感じだと思います（恐らく）

また艦娘たちは艦娘名の他に人間としての名前も持っている設定ではありますので、名前を決める関係の問題は大丈夫だと思われれます、一話で僕がチラツとそれっぽいことを言ってる感じです。

◆ Q. 番外編でいいので全艦種適性持ちの提督がどんな目に遭うのか見てみたいです（小声）

◆ A. ゲームの艦これを起動して鏡を見ればそこに。

◆ Q. ラブコメ？

◆ A. ラブコメ！

◆ Q. ところで、提督適性者と艦娘の間に産まれた娘が適性のある艦娘だった場合ど

うなるんですかねえ（愉悦）

◆A. 「ああ分かったよ！ 書いてやるよ！ どうせ後戻りはできねえんだ。書きやいいんだろ！ 途中でどんな地獄が待ってようと パパとのシチュを：。パパツ●ス
を俺が読ませてやるよ！」

◆Q. 店長に一番良い胃薬を：

◆A. 店長は既にいい胃薬飲んでいる、沢山、飲んでいる。

◆Q. 居なくなつたはずの深海側が深海適性のある提督を見つけて：とか（チラツ

◆A. 深海側はほろんだ、やつらはもう、いない。（紙に書いた文字を読み上げてる感）

◆Q. 重巡適性の提督が、軽空母になつた鈴谷とかと出会つた場合はどう判断される
んでしょうか？

◆A. 「艦娘変わり」の後に訪れる「第二艦娘変わり」にて艦種変化がともなう艦娘変
わりが起こり、艦種が変化した艦娘の場合は、合致する適性が変化します。

ただ、艦種変化を伴う「艦娘変わり」は既に提督を見つけていた場合起こらない、そ
んな設定。

艦種変化の伴う「第二艦娘変わり」が起き、軽空母になつた鈴谷

その次の日、姉妹の熊野に自慢してやろうと学校に行くと、重巡の艦種適性を持った提督と幸せそうに腕を組みながら歩く熊野の姿が。

「待ってましたわ鈴谷！ さあ、これで私たち同じ提督の元で幸せになれますわよ!!」

「……」

いや、そんな未来は無いから。

◆Q. ツンデレ適性とかヤンデレ適性とかC V 適性とか、国別適性とか第七駆逐隊適性とかあるん？

◆A. 考え中です（特殊型適性はロマン、思いつかなかったのが悔しい）

◆Q. 店長、頑張れ。超頑張れ店長。悪夢のおかわりが二人も残ってるけど頑張れ。

◆A. 無理じゃないかな？

◆Q. 艦娘によつては適性者に会う機会を増やすために不特定多数の人に会う仕事を選ぶ艦娘もいそうですね。教師はもちろん、小売や飲食など B | t o | C とか。

逆に、揉め事になりそうな結婚式場は避けそう。

◆A. そこに気が付くとか天才かよ。

◆Q. 前作の「豚と呼ばれた提督」と世界線同じだったりするのでしょうか？

◆A. 過去か未来か、平行世界か異世界かはあんまり考えてないのですが、ラーメン

屋のオヤツさんみたいに本編に影響ない程度の微妙にクスリとしたネタも突っ込めればと思います。

（ごめん嘘、影響でるかも）

◆Q. 由良姉さんは「艦娘には恋愛において他の可能性を考える余地はない」みたいなこと言っていました。理論上、提督適性にもいろんなのがあり、適性持ちも少なくともないわけですから、実は艦娘にも恋愛対象を選ぶ余地はあったりしないの？

◆A. 『艦種適性』や『艦型適性』がすごいレアで、『個別適性』ですらも宝くじに当たるほうがまだ現実味のあるレベルとなっているため、選ぶ余地はほぼない感じとなっております。

また、本編では多分起きないのですが、該当する適性を持った人が二人居て同時に目の前に立った場合は、多分先に見て適合した方が提督になるんだと思います。（刷り込みスタイル）

◆Q. この世界観での教育を受けていて、無職が陽炎姉妹へあのような対応をしてしまったのはなぜなんだ、気が付くでしょ！

◆A. 地域よっての艦娘に対しての教育内容に差がある感じにして、艦夢守市の外から来た無職は、色々重なって陽炎たちが艦娘だと一ミリも気が付いてない感じですよ。

某アイドルグループ全てを覚えている人がそんなに居ないようなそんな感じですよ

うか。

髪の毛の色もこの世界では一応染髪料が進んでるの関係で特に疑問に思っていない感じですよ。

◆Q. 提督が既婚者だった場合は？

◆A. 祈れ、幸せな世界を（そのうち挑む命題）

◆Q. よく考えたら、給糧艦と工作艦って適性者少なすぎて涙目なのでは？

◆A. 艦種適性、艦型適性が極めてレアなので、結局の所艦娘たちは個別適性の提督を探すという形になる以上、結局涙目ですね。

◆Q. 「艦名の契り」は『僕』と『加賀』では「提督が呼ばなければ「艦名の契り」が成立しない」ように読めます。

しかし『僕』と『翔鶴』や今回の『独り身男』と『川内』から「艦娘が艦名を提督適性者に名乗った時点で「艦名の契り」とも取れます。

どの時点から「艦名の契り」になるのでしょうか？

◆A. 基本的に、艦娘が自分の艦娘名を提督適性者に呼ぶようにお願いする段階で既に「艦名の契り」が開始してる状況です、ただ成立はしてないというだけで。

だから呼ぶように願う時点で既に「艦名の契り」という表現を使っています（あせあせ）

『僕』と『正規空母：瑞鶴』

最近、姉の翔鶴の様子がおかしい。

艦娘として翔鶴の妹であり、年の離れた親しい親友でもある瑞鶴はそう感じていた。

「えー、翔鶴ねえ次の休みも駄目なの？」

『ごめんなさい瑞鶴、その、ちよつとはずせない観さ…用事があって』

今日も電話をかけたらこんな感じだった。

以前はどこに行くにもよく自分を連れまわすことが多かったのに、と首をかしげる瑞鶴。

そういえば最近の翔鶴は、仕事が終わった後も直ぐにどこかに行ってしまうらしく、いや、仕事中であつてもよく外回りを理由にどこかに行くことが多くなつたとか、翔鶴の秘書がこぼすのを聞いたのを瑞鶴は思い出した。

……。

この前などは直接会いに行つて、さりげなく聞いてみたが。

「なんでもないわ、ええなんでもないの」

と、目を逸らして気まずそうにしていた。
怪しい、とても怪しい。

そして瑞鶴は一つの結論にたどり着く。

「あつ、そつか。もう直ぐ私の誕生日だった」

自分のサプライズパーティーのために不器用に隠し事をしながら奔走する姉の姿を
想うと、瑞鶴は胸が熱くなった。

「そつかー、ふふふーん♪なら私も驚かせちゃおつかな〜」

気が付くが早いのか、瑞鶴は姉へのカウンタープレゼントを準備すべく街へシヨッピン
グに繰り出すことに決めた。

『僕』と『正規空母：瑞鶴』

この世界は一度滅びかけたらしい。

しんかいせいいかんという、怪物が現れて世界をめちやくちやにしたんだ。

だけどどこからか現れた艦娘と、その辺に居た提督と、あと沢山の人たちが力を合わせてしんかいせいいかんをやっつけて平和を取り戻し……

「翔鶴姉、なに？ ……って、提督さんじゃん！ なにやってんの？ 爆撃されたいの!?」

……またなんか出た。

入院中のおばあちゃんへの誕生日プレゼントを買おうと街に出て、駅ビルの中の婦人向けの階のお店を回っていると、気の強そうな美人というより、かわいいというイメージのツインテールのお姉さんに声をかけられた。

無地の赤色のワンピースと白いジャケットを羽織った服装なんだけど、高そうなブランド物のベルトを巻いていて、全体で見るととてもおしゃれで似合ってるなあと感じられる服装だ。

僕が無反応で居ると、そのお姉さんは首をかしげる。

僕は知っている、きつとこれは僕の後ろにこのお姉さんの提督さんが居るのだ、学年でかわいいと評判の子が僕に向かって手を振っていると勘違いして、振り返して恥ずかしい目にあつたことがある。

僕がすつと立ち去ろうとすると、お姉さんは慌てて僕が着ている服のフードの部分を掴む。離して欲しい。

「あ、あ、あ、ごめんごめん。自己紹介がまだだったね！ 翔鶴型航空母艦2番艦、妹の瑞鶴です。艦載機がある限り、負けないわ！」

どうやら勘違いではない上に、この人もまた艦娘のようでおまけに翔鶴さんの妹らしい。

あと艦載機が無いと負けてしまう人らしい。(※史実参照)

「はあ、どうも……」

とりあえず返事をしたけど弱った、今日は防犯用の笛も虎の子の防犯ブザーも持ってきていない、僕としたことが。

「なんとというかすごい誤算ね、翔鶴ねえのプレゼントを買いに来た店でまさか私の提督さんを見つけちゃうなんて……どうしようかしら、すつごいうれしいんだけど色々複雑。提督さん翔鶴ねえの適性もあるのかな……」

ぶつぶつとなにかつぶやく瑞鶴さん。

なんとか離してもらおうとフードを引つ張ると、瑞鶴さんはあっさりとは離してくれた。

「まつ、いつか！ とりあえず提督さん、ちよつと付き合つてよ！」

「あの、おねえさんすみません僕用事が……」

なんとか断ろうとしたけど、瑞鶴さんは言い終わる前に、しゃがみこみながらぼつと僕の両肩に手を置いてじつと此方を見つめる。

「ず、い、か、く」

「あの、おねえさ……」

「ず、い、か、く」

「……瑞鶴さん」

瑞鶴さんは、僕の言葉を聞いて「うゝん」と目をつぶつて唸り。

「さん、はいらないかな」

と言つたので、それに対して僕が、

「瑞鶴さんも僕のこと提督さんつて言ってるじゃないですか」

と言うと、きよとんとした顔をして大笑いした。

「つぷ、あはははは！ うん、そう、そうね。じゃあまあとりあえずは瑞鶴さんで勘弁し
といてあげる！」

なにが面白くてなにを勘弁してもらえるのかわから無いけど、とりあえずそういうことになった。



「ねえねえ提督さん！ これなんかどうかな！」

「はあ、いいんじゃないでしょうか」

なぜかあの後押し切られて、そのまま瑞鶴さんの買い物に付き合うことになった。

正直さつきから瑞鶴さんが見ている服やアクセサリーは、僕にはよくわからない。高そうだな、って思うくらいだ。

合間を見ておばあちゃんのプレゼントを買おうと思ってきたけど、ここの売り場にあるものの値段を見ると、とてもじゃないけど僕のお小遣いじゃ買える物なんて無い。

「てーとくー！ もつとちゃんと見てよー！ ふてくされるぞー！」

頬を膨れませて僕の後ろから抱きついてくる瑞鶴さん。どうでもいいけど翔鶴さんに抱きつかれた時の感触が無い。

「あの、僕そろそろ行っていいでしょうか……」

「ん？ 提督さんなにか用事あるの？」

「ええまあ、祖母への誕生日プレゼントを買いたいので」

両腕の拘束を解きながらそう言うのと、瑞鶴さんは驚いた顔をした。

「うそ！　なんだそれならそうと早く言つてよもう！　私もプレゼント買おうと思つてただから。一緒にさがそつか！」

「はあ、ですがこのデパートにあるものはとても僕には買えないので……」

ちらりとマネキンが着ている服の値札を見る、予算より二桁くらいオーバーしていた。

「別によさそうなのがあつたら私が買つて……つて、それは違うわよね」

当然だ、僕からおばあちゃんへのプレゼントを、他の誰かに買つてもらうのが間違いだつていうのは僕にだつてわかる。

じとーつとした目で僕が見てるのに気がついたのか、瑞鶴さんはぼつが悪そうに言い直しながら頬をかく。

「と、とりあえず喫茶店にでもいこつか。提督さんのお婆様のお話聞かせてよ！」

さすが艦娘とでもいおうか、瑞鶴さんは軽々と僕を小脇に抱え走り出す。

降ろしてほしい。

おじいさんやおばあさん、おじいさん？　お兄さん？　と手をつないで歩く学生っぽい

女の人や、三人のお姉さんたちに囲まれて、白いスーツを試着させてもらつてるかっこ

いい金髪の人。

ん、かっこいい金髪の人？

とにかく誰か誘拐と勘違いして、止めてくれないかなと思つた。

けど、周りの店員さんや大人の人たちの目は、そんな僕たちを姉弟を見るような目だつた。

飲食店のフロアに到着すると、瑞鶴さんはさつさと店を決めて入りアイスコーヒーを注文した。

ちなみに僕はオレンジジュース、お小遣いを使いたくないので水でいいと言つたんだけど、瑞鶴さんが払うから好きなものを頼むようにと強引に押し切られてしまった。

「知らない人に払ってもらうのは……」

と一応断つたんだけど、それを聞いて泣きそうな顔をされてしまったのでしぶしぶだ。でもオレンジジュースは美味しい、美味しいものを口にすれば口も軽くなる、そうして僕らはお互いのことを少しづつ話した。

瑞鶴さんは実姉妹ではないけど、艦娘の姉妹である翔鶴さんとても仲がよいとか。

瑞鶴さんは自分がデザインした服を作つて売つたり、買い付けたブランド物を販売するお店を経営したり、時々モデル？のお仕事をしているとか。

僕のおばあちゃんのお母さんが天城という艦娘だったとか、僕の予算とか。

「へー、提督さんのひいお婆様は天城さんだったんだ」

「ひいお婆あちゃんのこと知ってるんですか？」

「知ってる、っていうのとはちよつと違うんだけどね。艦娘としての知識として持つてるといふかそんな感じ」

僕が首をかしげると、瑞鶴さんは「その辺はちよつと提督さんでも説明がむずかしくてね」と、言葉をごぼす。

「それよりも、提督さんの予算で買えるいいもの思いついちゃった」

そう言つて悪戯を思いついた友達のように、瑞鶴さんはいい笑みを浮かべた。



「すい〜……」

目の前には大昔の船や飛行機、戦車や自動車、潜水艦や列車まですごい数の模型がガラスケースに展示されている。あの後、瑞鶴さんはまた僕を小脇に抱えて走り出し、同じデパートにあるこの模型専門のお店につれてきてくれた。

「えーつと、これこれ。零式艦上戦闘機 52型、私たち空母の武装の一つだった戦闘機

ね！」

瑞鶴さんが指さす先には綺麗な緑色の飛行機の模型があった。

「と、言っても私たち艦娘は皆元々軍艦だったからその頃の飛行機でもあつて……まあ、難しいことはいつか。とにかく、提督さんのひいお婆様もきつとこの飛行機を使つて戦つてたと思うわ、もちろん大戦当時の天城さんがだけど。これを組み立ててプレゼントするつてのはどうかしら？」

確かに、おばあちゃん部屋のこの飛行機の絵が飾つてあるのを見たことがある。僕が作つてプレゼントすれば喜んでくれるかもしれない。

そして瑞鶴さんの手にはいつの間にか、その零式艦上戦闘機 52型の模型の箱があつた。

「はい、これなら提督さんのお小遣いでもぎりぎり買えちゃうんじゃない？」

「うん、確かにこれなら買えそうだし、おばあちゃんも喜んでくれるかも。けど……」

だが大きな問題がある、僕は模型を作つたことが無いのだ。

「ふふふ、もちろんこの瑞鶴さんにその辺ばかりはないわ。この店の奥に組み立て用のスペースがあるから一緒に組み立てましょ、教えてあげる！」

瑞鶴さんはお店の人と顔見知りらしく、一言二言話すと奥の作業机があるスペースまで案内してくれた。

僕と瑞鶴さんは向かい合って座り、模型の箱を開け中身を取り出す。独特なおいのする透明な袋を開けると、細いプラスチックの枠の中に沢山のちっちゃいパーツがついている物が出てくる。

「はい、ニツパー。これを使ってまず一個づつパーツを切り離すの、間違つてパーツ切っちゃ駄目よ。ランナー……えつと、この枠の部分ね。で、これがパーツで、パーツとランナーの間の細い部分がゲートつていうの。ぎりぎりまで切り離さなくてもいいから余裕持つてこのゲートの部分を切つてね、残った部分は後から削るから大丈夫」

要点だけ説明すると、瑞鶴さんはお手本を示すように手際よくパーツを切り離し始める。

すぐく手馴れた様子で、あつという間にパーツが積みあがっていく。

僕も負けじとパーツを切り離す作業を黙々と始める、しばらくパチンパチンと、ニツパーでパーツを切る音だけがあたりに響く。

「……瑞鶴さんは随分と手馴れてるんですね、模型作るの好きなんですか?」

「まあ、好きかどうかでいえば好きなんだけどね。昔ちよつと悩んでた時に気晴らしにやったのが切つ掛けかなー」

艦娘も悩むことがあるのかな、瑞鶴さんとか特に悩みがなさそうだけど。

「あー、今悩みなんて無さそうって思ったでしょ?」

「……いえ、別に」

「まあ、私は翔鶴ねえが居てくれたからましな方だけだね。じつは艦娘も色々悩みがあるものなのよつと。よし、できた。ちよつと必要な道具や塗料買ってくるから、作業進めながらまつてね」

そう言つて瑞鶴さんは立ち上がり、売り場スペースの方へ歩いて行つた。

僕はそれを見送り、手元にあるパーツをパチンパチンと切り分ける作業を再開する。

パチンパチン、パチンパチン、パチンパチン

退屈すると思うかもしれないが、実はこういうの意外と得意なのだ。

パチンパチン、パチンパチン、パチンパチン

「あれ、彼女どこ行つたのかな？ そろそろいるだろうと思つてマスキングテープと塗料を持ってきたんだけど」

ふと、夢中になつて作業に没頭していると、渋いおじさんの声が聞こえた。顔を上げると、そこには声の通り渋い……ともいえなくもないけどどちらかという和白熊さんみたいな白いひげを生やした初老の男の人が居た。

青い前掛けの胸に『店長』と書かれたバッジをつけているから、多分このお店の店長さんなのだろう。

「瑞鶴さんなら、次の作業に必要な道具を買いに行かれましたよ」

「ありや、入れ違いになっちゃったか……ん？　今君、彼女のことを艦娘名で呼ばなかったかい？」

店長さんはすごく驚いた顔で僕に聞き返す。

「はい、瑞鶴さんにそう呼べて言われたので」

僕の言葉を聞いて、啞然とする店長さん。

「……ついに見つけたのか。今日は飛び切り機嫌がいいと思つたらそういうことだったんだねえ。ようやく長年の願いがかなつたのか、よかつた、本当によかつた……」

店長さんはポケットからハンカチを取り出すと、目元をぬぐう。

「瑞鶴さんのお知り合いなんですか？」

「ああ、彼女が学生の頃から知ってるよ。……当時はひどく無愛想で表情に乏しい子だねえ。よく学校帰りにここに移転する前の店に来ては、模型を買っては店にある組み立てスペースで一人で黙々と模型を作ってたもんだよ」

遠くの方を見ながら、ゆっくりと思ひ出すように語る店長さん。なんだかおぼあちやんがお父さんやお母さんの思い出話をするときの目に似ている。

「当時はもう鬼気迫るといった感じだね、なにか足りないものを埋めるみたいに必死で模型を作ってる様子を見て声をかけたことがあつたんだよ。なんでそんなにあせるように必死で模型を作ってるのかってね。そしたら彼女なんて答えたと思う？」

僕が瑞鶴さんに会ったのは今日が初めてだし、当時の瑞鶴さんのことなんて当然想像もできなかつたので、僕はわからず首を横に振る。

店長さんはそんな僕を見てから、悲しそうな顔で再び話し出す。

「彼女はこう言ったのさ『一生懸命やつてるだけ……よ』ってね。なんとというかそれを聞いて、彼女たち艦娘にはきつと僕らにはわからないとても大きな悩みがあるんじゃないかって、そう思つてね。それ以来少しづつ話すようになってたんだけど。それからしばらくたつて、彼女が就職したつて聞いてからかな、少しづつだけ明るくなって今の彼女みたいになつたのさ」

僕は赤城さんや加賀さんや翔鶴さん、そして瑞鶴さんのことを思い出す。

おかしなお姉さんたち、でも彼女たちは艦娘で、人間と一緒に生活しているけど、人間とはまた別の考えを持って生きているんだなど、店長の話を聞いてそう思った。

ふむ、店長さんは悲しそうにしてるけど、つまりそれは彼女たちはそういうものなんだと考えれば当然のことなのだ……。

あれ？

僕は今一体なにを考えていたのだろうか？

「あー！　店長レジにいないと思つたらこんな所に。ほらほら早くこれ精算してよ！」
そんなことを考えてると、向こうから瑞鶴さんの声が聞こえた。

「あはは、ごめんごめん、すぐいくよ！ ……今の話、私が言つてたつてのは内緒にしといてね」

そう僕に言い残して店長さんは去つて行つた。

店長の背中中は、嬉しそうでもあり、何処か悲しそうにも感じられた。

ゴトリ

ふと、なにか音がしたので振り向くと、机の上に見覚えの無いプラモデルの箱が置かれていた。

なんだろう、箱には『大鳳』つて書かれてるけど、むずかしくて読めない、多分船の模型だと思ふんだけど……。

「あら、なに？ それ空母じゃない、しかも大鳳とか。やめといたほうがいいわよ提督さん、それ初心者が作るにはちよつとハードルが高いわ」

見ると色々な道具の入つた小さなかごを持って瑞鶴さんがそこに居た。

「てかどうしてもつていうなら『瑞鶴』作りなさいよ！ なんで大鳳!？」

「いや、気が付いたらここに置いてあつて、僕知らないです」

瑞鶴さんは『大鳳』の箱を持って、不審そうな感じになるも、とりあえずおいてあつ

たと思われる場所に戻しに行った。

ほんと、なんだったんだろうか。

しばらくして瑞鶴さんが戻ってきた。

「どう、切り分けは終わった？」

「あ……もう少しです」

店長と話していたせいで中断されてしまったけど、残ったパーツは後少しだ。僕は少し急ぎながら切り離す作業を再開する。

「あ、別にそんな慌てなくても……っあー！」

少し慌ててしまったからだろうか、ニツパーで切断する時にパーツを持っているほうの手の指の先つちよも一緒に切ってしまった。

別にそんなに痛くは無いんだけど、指から流れる血を見て瑞鶴さんが慌てて僕の手を取る。

「や、やだ、血が出る。痛いかな、ちよつと我慢してね。んっ……」

少し焦ったような様子の瑞鶴さんが、僕の指を口にくわえてなめ始める。指先にぬちやつとした感触があり、少し荒い息があたっているのがわかる。そしてひと舐めするごとに、瑞鶴さんの頭が上下に揺れて、左右に結ったさらりとした長い髪が腕にふさふさとあたった。

とてもくすぐりたい。

「んあ……んっ、ん……よし、これでいいかな」

そうしてハンドバッグから小さな絆創膏を取り出して、僕の指に巻きつけてくれる。瑞鶴さんがあんまりにも一生懸命手当てしてくれたものだから、気恥ずかしくなってしまう僕は、お礼の言葉をこの前の赤城さんの時みたいに、ちよつと悪戯するような感じで言うことにした。

「ご苦労だった瑞鶴、ありがとう」

なにかで見た、軍人さんのような感じの言葉だ。あ、思わず呼び捨てにしちゃったけど大丈夫かな。

見ると瑞鶴さんがきよとんとした様子でこちらを見ていた。そしてふつとすごく真面目な表情になり、

「……ご無事でなによりです、提督」

そう返事をしてくれる。

僕たちはしばらく、そんな軍人さんのように真面目な顔で見合わせていたんだけど、やがて瑞鶴さんが耐えられなくなったのか、笑い出してしまった。

よかった、怒ってなかったようだ。

でも、そんな笑ってる瑞鶴さんに向かって、塗装に使うと思う小さなペンが飛んでき

てあたる。

「私がここまで被弾するなんて！」

思わず叫んだ瑞鶴さん、直ぐに飛んできた方向に向かって走って行ったけど、結局誰が投げたのかはわからなかったらしい。

謎だ。



どうにも、模型というのは一日で作るのは難しいらしく、今日はある程度まで作業を進めて、後日続きを作るということで帰ることになった。

ちなみに、作りかけの模型は瑞鶴さんが預かってくれるらしい。

瑞鶴さんが運転する屋根のないスポーツカーで家の近くの公園まで送ってもらい、車を降りる。ちょうど夕焼けがあたりを照らしていて、海の向こうの水平線に夕日が沈む様子が見えた。

「じゃあまた、来週の休日にあの店で待ち合わせね！ なにかあつたら渡した電話番号に電話して、直ぐに出るから」

「はい、今日はありがとうございます」

瑞鶴さんは手をひらひらさせながら優しい笑みを浮かべると、車を発進させた。何度か名残惜しそうにこちらを振り返っていたけど、やがて車は見えなくなつた。

今日はいろんなことがあつた気がする、僕はどつと疲れてしまつた。けど、いい日だつたと思う。

とりあえず近くの公園のトイレで用を済まし、トイレから出て公園から見える景色を眺める。

ここは『艦夢守市（かんむすし）』

大きな港があり、その港と街の周りをぐるつと山に囲まれている、そんな立地の場所。都会とまではいかないけれど、それなりに騒がしくてそれなりに穏やかな大きさの街。

そしてこの街には一つの噂がある。

それは提督適性者が集まるといふ噂だ。

この街には沢山の人間と、居るかもしれない提督適性者たちと、その噂を聞いてやつ

てきた割と多くの艦娘たちが平和に暮らしている。

つまり、ここが僕の住んでいるところだ。

後、ふと気が付いたのだけど、瑞鶴さんに僕が翔鶴さんの知り合いで、更に適性もあるってことを言いそびれてしまった。

まあ、また今度会ったときでいつか。

『無職男』と『駆逐艦：磯風』

無職でございま〜つす♪

……………。

「だが肉まんが食べたい」

季節はもうすっかり冬となり、寒い朝の室内に俺の寝起きの一声が響く。朝起きてからの一声がこれとか、わけわからん。

いや、実は予想ならつく。

今日、口に肉まん（豚まん）を詰め込まれる夢を見たからだろう。

何故かわからないが無性に肉まんを食った後に烏龍茶も飲みたい気がする。職は未だ決まらないが、まあなんとかなるだろう。

そう何回も不知火にケツを蹴られるわけにもいくまい。

そしてなにより、今の俺はかつてないほどの怒りの炎を湛えている。

何故ならば、先日学生時代からなにかと縁があつた、前島のアホに同情されたからだ。なにか「再就職先の世話しましょうか？」だ。

その殺し屋みたいなツラを、やたらと光を反射するメガネと一緒に殴りかけたわ。今の俺ならどこまでも行ける気がする。

人は怒りだけで動くことのできる生き物なのだろう。

ベッドから起き上がって一服、意識をからにして思考を尖らせる。

行くか、どうせ今日の予定はなにもないのだ。

肉まんを食って、その後で河原でも眺めながら一服し、優雅な朝を満喫しよう。

上手くいけば蒸しあがりの豚まんをゲットできるかもしれない。

「肉まん、おれの、肉まん」

とんびに、肉まん、とられた。

またかよ、いや、待て待て。

肉まんを買って、ウツキウツキしながらかぶりつこうとした所を狙われたのはわかるのだ。

問題は走行中の自転車から取られたということだ。

なんなんだあいつら、トンビの野生なめてたわ。

人類はそろそろ真面目に、奴らとの戦争を決断すべきだろ。

しかし、たっぷりとかけたカラシが辛かったのか、トンビは肉まんを吐き出してた。

見たか、人類をなめるなよ鳥類め。

後、それちゃんと拾って食えよ。

謎の達成感を胸に、もう一回肉まんを買いに戻ろうと思つて自転車をこぎだす。

そして後ろからの衝撃、トンビにやられたと気がついたのは川に落ちてからだつた。

川沿いの細い道を走ってたら見事に落ちた、頭から。

膝程度の深さだったため、溺れるなんてことはなかったが、この寒さの中で川に落ちるというのは控えめにいってなに一つ救いがない。

……ここ最近の俺の運のわるさは酷いものがある。

なんなんだこの感情は。

そういえば以前に似たような道を前島と並んで自転車で走ってたら、気がつけば隣に前島がいなかったことがあった。

そして道に戻ると、何故か前島が川に落ちていた。

あの時の前島のずれたメガネの向こうから、こちらを見る目がやたら面白かったので爆笑したもんだが……

ああ、なるほど、あの時前島が抱いていたのは、こういう感情なのか。

気持ち良かった。

今日はもう終わりだ。

テンションがもうピクリともせん。

「なにをしてるんだ君は？」

そんな絶望にくれる俺に声をかける誰か。

見るとやたらとプライドの高そうな顔の、長い黒髪のちっこい少女が俺を見下ろしていた。

上着は白いコートにマフラーを巻いてるが、下は冬だというのに短い黒のプリーツスカート。

子供は元気だな。

後どうでもいいけどパンツ見えてんぞ。

いや、しょうがないけど。

位置的に、俺、川に落ちてるし。

「あー、陽炎の縁者の者だな、確か味噌燻風」

「磯風（いそかぜ）だよ……で、もう一度聞くがなにをしてるんだね、君は」

そうだったな確か、うん、いそかぜいそかぜ。

「トンビと生死をかけた戦いの結果だよ」

「トンビに負けたのか、君は……」

改めて言葉にすると悲しすぎる、そうだよ、人類は負けたんだ。

そしてどん底の気分になる、どうすんだよこの感情。

人は怒りだけでは生きられないんだぞ。

「ああ、もうとにかく。幾らなんでもそのままだと風邪をひいてしまう。すぐ近くだからうちによつて服を乾かして行くといい」

まあ確かに、無職状態で風邪とかどう考えても即死コンボである、それはご遠慮願いたい。

「お言葉に甘えるか……」

「ふふふ、素直じゃないか」

そう言つて磯風はやたら強い力で、俺の手を掴み引つ張り上げてくれる。

ああ、こういうパターンで手を掴むのもいいのね、君ら。



「悪いな、そんなものしかなくて」

「いや、十分だよ。それにこれならサイズも気にしなくていいからな」

風呂を借りて、出ると乾燥機に放り込まれた服の代わりに、男物の着物が置かれていた。

浴衣はともかく、男の着物なんざ初めて着たわ、とりあえず帯は適当に締めただけで意外となんとかなるもんだな。

「しかし、古い家だなこり」

「まあ古物商だからな。まず形からということだ。祖父が古い建築物を真似て建てたらしい。頑丈ではあるのだが、中々手入れが大変なんだ」

こたつに入りながら、こちらに首を思いつきり傾けながら、顔だけ向けて丁寧に説明してくれる磯風。

ちよいつらそう、なんとか角つてやつか。

しかしそうなると築数十年か、旧時代劇だっけ、その手の番組で見たことがあるような建物だ。

別にならないわけじゃないが、なんせ結構建てるのに金がいるからよほどの見栄の張った金持ちくらいしかチョイスしない建物である。

「だけどもあ、悪くない趣味してるわこれ」

なんとというか、紙と布と木のぬくもり、草の香りと柔らかさみたいなのを感じられる。さらにこの部屋には無駄なものがなく、ただ木のタンスとコタツがあるだけだ。

あれだ、わびさびつてやつだな。

「さあ、突っ立ってないで入るといい、部屋の中といえど少し寒いからな」

「ああ、そうだな」

磯風が座る辺の隣に座る。

この場所にしたのは単純に、座布団がここに敷かれていたからである。

「しかし今日は平日だろ、学校に行かんでもいいのか？」

「……単位はすべて取り終わっている、問題はないさ」

ああ、そういうえば内地は単位制も選べる学校があるんだっけか、忘れてたわ。

「それに、ここには私一人しか住んでいないから、店番をしなくてはいけなからな。基本的に平日はずっとここにいます」

「え？ あ、ああ、そういうことか」

そういうことなんだな、陽炎家族問題。

迅速に話題を切り替える、俺。

「しかし古物商なんて儲かるのか？ 見た所随分暇そうだが」

ここに入るときに見た綺麗に掃除された店内、この室内もだが。

だが綺麗と同時に人がいた気配が極端に少なく、お世辞でもお客が多いとは思えない。

「よそはどうか知らないが。そうだな、うちは年に二つ三つ売れば十分食べていけるから問題ない」

「マジかよ、なにそれ羨ましい」

超高等民族じゃん、俺もなろうかな。

そんな俺のアホな思考が漏れてしまったのか、磯風はクスリと笑う。

「ただ、いろんな古物に関する知識と資格、親から受け継いだ色んな財産。それ以外にも沢山の目利きの経験が無いと、とてもできるものじゃ無いがな」

「やっぱ人生そう甘く無いか……」

いや、甘く無いっていうか、働けよ俺。

ふいに、どこか寂しげに磯風が言葉をこぼす。

「ほんと、感謝しているのさ。引き取ってくれた両親には……」

……これは、踏み込む、所なのだろうか、教えろ、前島。

『行くべきでしょう、少女のためにできることは全てやるべきです』

うるさいわ。

「あー……、なんだ。なんか困ってることとかないか？」

今はこれが精一杯だよチキシヨウ。(モンキー泥棒感)

「ふふふ、なんだ、藪から棒に」

「礼だよ礼。あのままだと風邪ひいて極めて惨めなことになってたからな」

磯風は俺の明け透けなご機嫌伺いを聞いて少し笑ってから、軽く考え込む。

「そうだな……そういうえば最近雨漏りしていてね。一箇所だけだからどうしたものかと思ってたんだが。少し見てもらえるか？」

「雨漏りい？」



屋根裏部屋に上がり、確認して見たところ、確かに雨がしみているような跡が一箇所。おそらく瓦が一枚割れたか、ヒビがいつてるなこりや。

下に戻り、乾いた服に着替える。

さすがに着物で屋根に上がるような特殊な訓練はしてないからな。

脚立を借りて二階の窓から屋根に出て、もう一段上の屋根に脚立をハシゴ形状に変えて登る。

陸屋根とかだと屋上に行くための、ハシゴが付いたりするから楽なんだが。構造的に外気の影響モロに受けるから、暑かったり寒かったりでかなわん。

たまに不知火のジムでボルダリングをやるようになった成果か、前より体が軽い気がするわ。

サンキューヌツイ。

無事一段上の屋根に登り確認すると、やはり瓦にヒビが入っていた。が、そう大きなものでも無い。

セメントボンドで固めりや問題ないだろう。

心配そうに二階の窓から、こちらを見ている磯風の所に戻る。

「セメントボンドあるか？」

「セメントボンド？　なんだそれは？」

まあ、あるわけないですよな。



そんなわけで買いに行くことにした。

目指すは少し離れた商店街にある工務用品店。

「家で待つてもよかつたんだぞ？」

「まあいいじゃないか、どうせ暇なんだ」

自転車を漕ぐ俺、荷台に座って俺の腰に手を回す磯風。

なんなんだ、女の子を後ろに乗せて自転車で走るってお前、なんかの青春映画かよ。

「店番はどうした、店番は……」

「なに、誰か来たら耳をすませば店のベルが聞こえるさ」

おいバカやめろ、あとんなわけあるかい。

途中軽い坂道を越えて、長い坂を下り降りた、びびったわけじゃないが怖かったので強ブレーキをかけながら安全運転で。

無事目的地の商店街にある工務用品店に到着する。

だがお目当てのものが、馬鹿でかい業務用のセメントボンドしかなかった。まあ普通そうだけどさ。

仕方ないので一番小さい（2キロ）のを買う。

どんなに頑張っても瓦一枚の補修に2キロとか絶対使わんけどな。

磯風が料金を払おうとしたが、ここで払わせたら札にならんからと断る。

プライドがあるのだよ。

くそう、でも2キロもいらねえ……

帰り道の寒空の下、重量が増えた自転車を、白い息を吐きながら漕ぐ。

なにが楽しいのか、磯風は歌なんぞ歌ってる。

いい声だし、うまいな。

コン〇リートロードはどうかと思うが。

「グオ、坂道かよ……」

「降りようか？」

うるせえ、大人をなめるな。

俺は無言でペダルを踏み込む。

んがががが、来るときは楽だったけど、意外ときついなこの坂道。

ゼエゼエと荒い息を吐きながら、汗だくになって自転車を漕ぐ俺。

残り三割というところで、ふとペダルが軽くなる、遅れてさらに軽く。

後ろを見ると磯風が黙ってグイグイ後ろから自転車を押していた。

「ぜえぜえ、おい、余計なこと……」

「この磯風をなめるな!!」

おうおう、余計な気を使いやがってじやりんこが。

くそう、だが今はその好意がありがたい。

やがて坂を登りきり、磯風が再び荷台に飛び乗った。

荷台に足を乗せて直立して、俺の肩をつかむ。

立ち乗りってやつだな。

坂道を下り始めると火照った体に当たる風が気持ちよくて、つい加速加速加速。

あと何故か無駄に楽しくてノーブレーキ。
やべえ、テンション上がって来たわこれ。

「コン〇リートロード！」

「進もう!!」

二人で謎の叫びを上げながら駆け下りる。

速度が上がるにつれアドレナリンがブリブリ噴出してきた。
今ならなんだってできる気がする!!

「はーっはっはっは！ 今ならトンビにだって勝てそうだ！」

「大丈夫、今度は……私が護ってあげる」

耳元でささやいてくる磯風、やかましいわじやりん子が。
でもなんかちよつと楽しいなおい。



「よし、まあこんなもんでいいだろう」

屋根の修理を無事に終えて、磯風の元に戻る。

「ありがとう、助かったよ。しかし器用なものだな、屋根の修理ができるなんて」

「まあ内地に来る前は、食える仕事で食って来たらな」

貧乏学生時代のなんでも屋バイト生活の日々を思い出す、ちなみに会社はブラックだった。

でもいろんな仕事せにやららんおかげで、資格無駄に増えた。

今思えば感謝すべきだったか。

辞めるとき社長に二発ラリアットぶち込んだけど、一発にすればよかったな。

「ふふふ、いやいや。素敵なものだよ。待っててくれ、風呂でも沸かそう、汗をかいただらう」

「おーありがたい。頼むわ」

鼻歌を歌いながら下に降りていく磯風。

脚立と道具を片付けて、下に降りようとするが、ふと壁にかかった一枚の写真が目に入る。

優しそうな老夫婦、その二人に挟まれ二人と手を繋ぎながら、どこか照れたような顔

をしている磯風が写っていた。

なんだ、少なくともここでは幸せだったみたいだな。

写真一枚でわかることでもないだろうが、なんとなく、そう感じた。

下に降りると、磯風がどこかに電話をかけていた。

「うん、至急頼むよ。一番高いのを。え？　うちは弁当屋じゃない？　そうか、ならいいんだ。いやいや、別ににも怪しくは無いさ。うん、私が料理が苦手なのは知っているだろう？　別に食べられなくはないだろうけどそんなものを『あの人』に食べさせるわけにはいかないじゃないか。うん？　誰かって？　私たちがよく知っていて、私が家にあげるのを躊躇しない男っていったらそんなの……ああ、すぐ用意して来る？　うん、悪いよ、それによく考えたら君の料理は高いじゃないか、え？　もちろんタダでいい？　そこまで言うんだったらしようがないかな、うん、ならいいよ、うちに持って来ても。……ふふふ、じゃあよろしく」

……。

多分聞いてはいけないことを聞いてしまった気もしくもない、ので、俺はそのままそつと風呂に向かった、風呂はすでに用意ができていた。

おそらく俺が作業を始める前から準備してくれていたのだろう、いい手際だ。

と、思つて体を洗おうとしたが、ちょうど石鹼が切れていた。

うーむ、別に構わんといえは構わんのだが、磯風の感じの後に後で石鹼が切れていたと知り、不手際と感じて落ち込んでしまふようなビジョンが浮かんだ。

ここは今ないから持つて来てくれと言ふべきだろう。

しようがない。

「おーい磯風!! 石鹼切れてるから持つて来てくれ!!」

『……ああ、いいだろう……この磯風に任せろ提督!!』

しばらく間を置いて、やたら気合の入った返事が返つて来る。

どうやら陽炎姉妹の間では俺のことを提督と呼ぶのが流行っているらしい。

別にいいけどな、ちきしよう。



腰にタオル巻いた俺に石鹼を渡し、磯風は赤い顔してコタツの部屋に帰って行つた。

ははは、純情ガールめ。

ピカピカに体を洗い終え、風呂から上がると、前と同じく用意されていた着物に着替える。

ホカホカしながらコタツの部屋に行くとき磯風の姿がなかった。

しようがないのでよつこらせつくすと言いながら、座つてコタツに足を突つ込む。

しばらくして、磯風が飲み物を盆に載せて部屋に入つて来た。

「よかつたらどうだい、りんごジュースだ。この前の野球の時に提督にもらつて美味しかったからね。自分でも買つて来たんだ」

「お、悪いな」

俺の前にリンゴジュースの入ったグラスを置くと、磯風はなにをトチ狂つたのか、俺の膝の上に乗つて座つた。

止める間もなく、そのままコタツに足を突つ込む、お香の香りがわずかに髪から漂つて来た、線香かなにかの匂いだろうか。

なんて考えてると、磯風はさらに俺の胸に背中を預け、体重をかけて来る。

ガキンチョかと思つたらちゃんをつくところには肉がついてるんだな、後体温が地味に高い気がする、着物の布が薄くて柔らかいからよくわかるわ。

「おい、重い、離れぬか」

「ふふふ、いいじゃないか。あたたかくするのに越したことはないだろう？」

まあそうだが、いや、親父が恋しいのかもしれんな、しようがあるまい。

俺は諦めてリンゴジュースを飲む。

テレビもなにもない部屋、することといったらコタツに座りながら、のんびりと窓の外に広がる庭を眺める位しかない。

……なるほど、この位置に座るとちょうど真正面に庭が見れるのな。

「いい庭じゃないか、この庭見るとお前を引き取ってくれた両親はいい人たちだったんだってわかるわ」

「……そうだね、とてもいい人たちだったよ」

すつと、磯風は先ほど押し込んで来るような体重の預け方ではなく、力を抜くように俺に体重を預けて来る。

「今から話すのは独り言だから、提督はなにも言わなくていい」

「……」

「私の生まれは外地でね、ただ、そのなんだ、両親は私のこの赤い目を見て私を育てることを諦めたらしい。特に記憶があるわけじゃないがなにか迷惑をかけてしまったという思いはずつとあった。だがその時の私にはどうしようもなく、私は内地のとある施

設に送られてそこで育った」

赤い目か、なんだっけか、時々遺伝子の悪戯でそういう目やおかしな髪の色の間が生まれるとは聞いたことがあるが。

まああれか、色々疑つちまうだろうな両親は、色々。

「で、ある程度育つて子供の居ない夫婦の養子としてここに引き取られた。ここに来てからは結構楽しい日々だったよ、大事にしてくれだし、陽炎たちも居たからな」

もしかして俺の思い違いで陽炎たちって、血ではなく絆で繋がった家族とかいうやつか？

おう、だとしたらそれを束ねる陽炎すげえな、ちよつと尊敬するわ。

「生みの親のことはまあ、正直もういいんだ、それよりも育ててくれた両親のために時間を使ったかったからね。あまり長くは一緒に居られなかったけど、色々お返しはできたとと思うよ」

偉いもんだな、立派だわ磯風。

俺はなにも言わず、優しく磯風の頭をなでてやった。

しばらく庭を見ながらそうする。

「一つだけ心残りがあつたな、そういえば」

「ん、なんだそれ？」

ググツと、前に体を向けながら首を傾けて俺の顔を覗き込んで来る磯風。

お前それ、首痛くないのか。

「孫の顔を、見せられなかったことだ」

「あー、それは残念だが。将来墓前で未来の旦那と一緒に見せてやっても、いいんじゃないかな」

磯風は、くるりと体を俺のほうに向け座りなおす。

そしてなぜか顔を真っ赤にしながら、こちらを見つめてきた。

「な、ならどうだい、ここは一つ夫役として子作りに協力してくれないか？　なに、別に責任を取れなんて言わない。す、好きに手を出してくれていいんだぞ？」

凄いいことを言いながら、やたらと熱っぽい視線でこちらを見て来る磯風。
え、なに、俺こういうときどんなことをすればいいのか、わからないの。

『笑って残りの人生捧げればいいと思うよ』（血涙）

うるさいわ前島、呼んでねーよ。

あとキャラ崩れてんぞ。

「アホか、犬猫じゃあるまいしそんなほいほい作れるかい」
「にや、にやーん」

アホがいた、俺の膝に座とつた。

恥ずかしそうにしながら、猫のようにこちらに体をすり寄せて来る磯風。

「恥ずかしいならやるなよ!？」

だが、せつかくだし猫みたいに扱ってやろうと、磯風の頭をわしゃわしゃと撫でたり、ほっぺた引つ張ったりしながら戯れてたら、

誰かが部屋に入って来る気配。

「いやー、参った参った。なんか上がやたらピリピリしててさー、もしかしたら戦争に……」

黒スーツに黒シャツに黒ネクタイ、ヤクザみたいな服を着た陽炎が入って来る。

そして俺たちを見て固まった。

「な、な、な、な……なにやってんの磯風……!!!」
うるせえ。

つか、なんだ、やっぱこうやって気楽に来れるような関係なのか、君たち。

なぜか死ぬほどテンパった様子で、早口にまくし立てて来る陽炎。

「あ、あ、あ、あんたもしかして、それ、は、挿入^{はい}してるの？」

「あ？ 見りやワカんだろ、(コタツに) 入ってるよ」

磯風に代わって答えてやった。

一方の磯風はなにも言わず、やたらニヤニヤしてる。

「ぎゃあああああああああ!!」

ツインテールをグワングワンと振り回しながら、頭を抱えてシエイクする陽炎。

うお、なんだそれ、面白いな。

「んだよ、そんなに叫ぶならお前も入れればいいだろうが」

「え……？」

すつと、磯風が俺の膝の片側に移動する、いや、そこまで移動するなら降りろよ。

磯風はちよいちよいと陽炎に手招きをして、俺の空いた片方の膝を指す。

「ゴクリ」

なんか陽炎は真つ赤な顔をしながら、すすすす、つとやって来て、止める間もなくちよこんと座った。

重いんだが。

「ふ、ふふふ、ふふふふ」

「どうだい、いいものだろ?」

いいものじゃねえ、降りろ、重いだろが。

「うん、悪くない、むしろ最高かも」

お前もかブルータス。

つーかなにバカなこと言ってんだ陽炎、さっきの俺の尊敬返せよ。

「あのなあ、お前からどうでもいいからはよおり……」

「持って来たで!! つてええええええ!!!!」

俺の抗議を遮るように今度は、着物姿の黒潮が重箱抱えて部屋に入って来る。

「なんで重箱をもつてんだよ……」

って初めて言ったわ人生で。

それとなんだ、その旅館の女将さんみたいな格好。

あとお前もうるさい。

「黒潮も」

「どう？」

そう言つて左右に分かれて俺の正面に、空間を開ける陽炎と磯風。

「ゴクリ……」

ゴクリ、じゃ、ないがあ。

重箱を置いてジリジリとやって来る黒潮。

「おい、ま……」

言い終わるよりも早く、黒潮が俺に向かってダイブして来た。

着物着ながら、ようやるわい……

やりきれん気持ちを抱えながら、ジャリんに絡まれるのを我慢する俺。

だがさすがに三人は重い。

おまけに犬猫みたいにじやれついてきて暑苦しい。

「んがー!! いい加減に退けー!!」

さすがに我慢ならず、立ち上がる。

それでも離れずにしがみついている三人、おいやめろ、腰にくるだろ。

さすがにそろそろタバコが吸いたくなくなったが、濡れてダメになったんだった。

あーちくしょう、なんかしらんがタバコは食欲のようなものだ。

って言葉を思いついた。

意味は多分あれだ。

俺朝からリンゴジュースしか飲んでない。

なのに現在進行形で重労働しすぎだってことだ。

薄暗い部屋、円卓を囲む二十人近い少女らしい者たちがいた。

らしいというのは、何故か全員顔を隠すための尖った白い被り物をかぶっていて、その顔がよくわからないからだ。

そして被り物の額部分にはそれぞれ番号が振ってある。

「はい、というわけで『陽炎型提督適性者出現☆』という未曾有の事態に当たり必死で考えた、前回決まった決まりをおさらいしまーす」

その中で『1』と額に書かれた数字の被り物をかぶった少女がホワイトボードに、すらすらスラーともじを書き込む。

① 抜け駆け禁止、ただし偶然の出会いにはOK

② ひとまず艦娘ということは伏せる、理由は今日

③ 提督適性者免許はまだ取らせない、理由は後日

④ 提督の情報は必ず共有、なにかあれば直ぐに対応、理由は当然だから

⑤ 二人だけの状況で名前を呼んでもらえるまで、提督を提督と呼ばない。理由はわからない

「①は当然ながら私たち姉妹全員に言い寄られたら絶対提督がてんぱってとんでもない

ことになるから、それはいいわよね？」

同意を示すメンバーたち、当然である。

もしせっかく見つけた自分たちの提督になにかあれば一大事だ、おまけにもし恐れられでもして逃げられてしまえば目も当てられない。

「じゃあ今日はこの②の項目について話します、これについてはずばり、子ども扱いしてもらえないから!!」

ドドーンと擬音が響きそうなポーズを決めながら『1』の少女が宣言する。

しかし、メンバーのほとんどは理由がわからず首をかしげている。

「理由を説明します、NO2、貴方が経験した、ずばりの結論を言ってください」
つすと、NO2と呼ばれた少女が立ち上がる。

「子ども扱いしてもらえないということはつまり、ある程度のスキンシップをしても多めにしてもらえます、ええ、抱きついたりしても平気です」

ざわつく室内、なるほど、と、同意する声も聞こえてくる。

「おまけに、頭をなでてもらえる、食事をおごってもらえるなどのメリットもあります。もし私たちの正体がわかればこれらの行為を受けられなくなる可能性があります。つまり今しかできない、そういうものだと思ってください」

頭をなでてもらえる、だ……と……?」

室内のざわつきが更に大きくなる。

ざわ……ざわ……

「むしろ、私たちの正体や年齢がわかればそれらの対応を取ってもらえず、ふつーに、年相応として扱われてしまう可能性が極めて高いです、それでもいいと思う？」

メンバー全員が頭の中で色々妄想した。

そして、ほぼ同時に②に関して全員、同意の意味をこめて

「「異議なし」」

薄暗い室内にその声はとてもよく響いた。

— 陽炎会議録NO. 3 — 続く。

『ホスト』と『戦艦：金剛』

その金剛を詠った詩がある

体は凶気で出来ている

血潮は重油で、心は鉄鑄

幾たびの鉄火場を越えて不敗

ただの一度も慈悲はなく

ただの一度も救いを求めず

彼の者は常に独り嵐の海で殺戮に酔う

故に、その生涯に提督はなく

その体は、きつと凶気で出来ていた

最凶の金剛

彼女がそう呼ばれる逸話や理由は数あるが、最もたる理由の一つ、それが

艦齢 百二十歳

年経た艦娘が若い提督と添い遂げるために、その意志の強さで寿命を延ばす例は多々あるが、提督なくしてここまで寿命を延ばした例はほぼ無い。

そこまで彼女が生きなければならぬ理由はわからないが、推測されているのは金剛という個体が現状世界で彼女一人しかいないからだと思われる。

そして恐るべきことに、結果として金剛連合会に百年近く君臨し続け、数多の戦いを越えて来た彼女は未だ衰えることなく現役である。

だが、身体は現役でもその心は、とつくに凶気に囚われていた。

もうずいぶん前から……

それでも、ずっと留めていた。

八十を越えたとき誰もが心配した。

九十を越えたとき誰もが恐怖した。

百を越えたとき、逆に誰もが安心した。

ああ、この金剛は大丈夫なのだ。

百十の時には誰もがその心配を忘れてしまっていた。

だが、それ故に誰も思い至らなかつた。

今まで大丈夫だったからといって、明日、大丈夫だという保証など、

どこにも無いというのに。



茶会

月に一度開かれる金剛連合会、そのトップ四組織の組長が集まる月例報告会を指す言葉である。

百畳近い広大な洋室、その中央に置かれた丸いテーブルを囲み四人の艦娘

金剛、比叡、榛名、霧島

四人の意識のすり合わせと決定を行う場所。

比叡、榛名、霧島の後ろには組織の幹部が数多く控え、中には艦娘と思われる女性たちも見受けられる。

だが、その場で発言することを許されるのは金剛四姉妹のみ。

不思議なことに金剛の後ろには幹部どころか誰一人控えていない。

金剛組：構成員一名

金剛とは象徴であり、意思の決定のみを行う存在である。

そこにしがらみや他の意思が介入する余地を入れてはならない。

故に金剛組は、創立当初から常にただ一人（雑事を行う人員は存在）、だがそれでいて他の三つの組織に匹敵する力を有していた。

金剛とはそういう存在なのだ。

恐ろしいまでの緊張感が室内に張り詰める中、金剛がカップを置いた音が響く。

「……こんな所かしらね。最後になにか報告することはあるかしら？」

金剛が口を開く。

榛名によく似た美しい顔立ち、いや榛名が似ているのか、カップを見つめるその瞳は憂いを含んでいて、見るものは思わずため息をつく、そんな美しさ。

そして美しく結われた腰まで長く伸びる艶やかな髪、女性らしさを体現したかのよう。なその姿は正に百合のようなはかなげな美を感じさせる。

だからこそ違和感を覚える、伝えられている、向日葵のような明るい美しさを持ったイメージの一般的な金剛とのギャップに。

そして話し方も、世間が知る金剛の話し方では無い。

「……比叡組は有りません」

「……榛名組も有りません」

「……霧島組もです、有りません」

三人はカップを口につけ傾ける、味はしない、香りもだ。
当然である、中身は空だ。

「そう」

そして金剛もカップを口につけ傾ける。

こちらの中身は無い、白湯すら、なにも入って無い。

「では最後に私から」

いつの頃からか、金剛は紅茶も、なにも飲まなくなった。

それに付き合うように三姉妹も、この席ではなにも飲まない。

誰も理由を聞けなかった。

そして、金剛がカップを皿に置いた音がカチャリとなる。

「ローマとリットリオに仕掛ける、霧島、榛名、準備しておきなさい」

まるで大したことでも無いように、二つの巨大組織への攻撃決定を告げる金剛。

慌てて比叡が口を挟む。

「ま、待ってください姉様！　ローマとリットリオが此方に傭兵を送り込んだという証

拠はなにも見つかっていません！　そう報告したはずでは!？」

「ドン・リベツチオが殺されてからでは遅いわ、そして二人が既に艦夢守市に入ったというの確かな情報。なら先手を打って仕掛ける方がいい」

再び中身の無いカップを傾ける金剛。

その目に光は無く、ただ空虚な闇があるだけ。

頭を取れば終わる、そんな簡単な話ではない。

彼女たちもまた巨大組織を束ねる艦娘であり、彼女たちに忠誠を誓う多くの部下たちがいる。

むしろ頭を取られてしまえば、残ったものたちは最後の一人まで徹底的に闘うだろう。

それはただの泥沼でしかない、とてもではないが確かな証拠と理由無しに、有ったとしてもとっていい行動ではないのだ。

それ故、三人は気がついてしまった、金剛が正気ではないということに。

いつからだ、いつ姉様は壊れたのだ？

いや、今だったのか？

それとももうずっと前からか……。

提督をみつけた、今なら、今の私たちだからわかる。

金剛姉さまは既に凶気を留めていない、溢れ出してしまっている。

金剛自身も気がついていない、彼女は無意識になにもかもを巻き込んで終わらせるつもりなのだ、自身も、金剛連合会すらも。

金剛以外の三人はお互い目を見合わせる。

こうなってしまった以上隠してはおけない、猶予もない、むしろよく間に合ったというべきか。

「金剛姉様、会っていただきたい方が居ます、攻撃するかの判断はどうかその後」
「?」

比叡の進言を聞いて、金剛は童女のように首をかしげた。

金剛四姉妹がそろって来店する。

その知らせは直ぐにホストクラブ「YOKOSUKA」に通達された。

実を言うところの店はもうだめです。突然こんなこと言ってごめんね。でも本当です。

2、3日後に金剛連合会、

そのトップ四組織の組長が来ます。

それが終わりの合図です。

程なく大きめの注文が入るので

気をつけて。

それがやんだら、少しだけ間を置いて

終わりがきます。

その知らせを聞いた日の店長の日記である。

『ホスト』と『戦艦：金剛』

ホスト、それは夜の住人、闇夜の時間を生きる者。

ホスト、その本質は飢えた狼、金と女性、そして名誉に飢える者。

ホスト、しかして彼らの仕事はきらめく世界で、夢を振りまく者。

『艦夢守市』その歓楽街にも彼らが住まう城があった。

ホストクラブ「YOKOSUKA」

今日も彼らは闇夜の時を駆け、飢えを満たし、そして夢を振りまくのだった……

が、その日のホストクラブ「YOKOSUKA」は異様な空気に包まれていた。

中央のホールに置かれた四角いテーブルを囲むように座るのは、

巫女服のような服にも見える艦娘としての正装に身を包んだ、金剛連合会の四つの組織の長、金剛、比叡、榛名、霧島。

そして、店の壁に背を付けるように店のホストたちが直立不動で並んで立っている。

ホストたちの誰もが緊張した面持ちで、誰もが今日出勤したことを後悔していた。

そして、霧島の少し後ろには、背を丸め極力自分を小さく見せようと必死に努力する店長の姿。

店はもちろん貸切だ。

誰もが口を開けず、ただ金剛がなにも入っていないカップを傾けては皿に置く音が規則的に響く。

ここで極めて重大な情報がある。

シヨウさんから、迷子になった外人さんを交番まで連れて行くので遅れるっす。

という連絡が先ほど店に入っていた。

速報：店長 その連絡を聞いてこの時代に生まれてしまったことを後悔する

「で、こんな所に連れてきて誰に会わせたいっていうの？」

カチャリ、とカップを皿に置く音、店長はさつきからこの音を聞きたびに寿命が一日

減つてるように感じていた。

「それは……」

チラリと霧島が店長のほうを見る、店長は冷や汗をぬぐいながら首を軽く横に振る。霧島には既にシヨウが遅れることを伝えてあったので、言葉にはせず軽くまだ到着していない意のみを伝えたるためだ。

と、どうかこの状況で発言できるわけない。

「今こちらに向かっています、もう少しお待ちを」

「そう」

カチャリ

「その男、向かつてるのは誰なのかしら？」

店長に特大のキラークラス!!

「金剛姉さま、それは……」

「霧島には聞いてない」

ピシヤリ、と霧島の言葉をさえぎる金剛、店長の胃酸が快調に逆流を始める。

なにも言えない店長、言える訳がない。

今向かつてるのは下つ端のホストなのだ、金剛連合会の事実上の頭首を待たせるほどの大物が下つ端のホストです、なんて言える訳がないだろお!! (錯乱)

なにも言えない店長にチラリと目をやる金剛。

「……命をかけてでも霧島の命令を守る、か。その霧島への忠義立てに免じてもう少し待つてあげるわ。霧島、いい部下を持ったわね」

ここで金剛が奇跡の勘違い、店長九死に一生を得る!!

「よ、よろしければなにか飲み物をお持ちしましょうか?」

店長、ここでなんとか寿命を延ばそうと、ホストクラブの店長らしい気を利かせるプレイ!!

「貴方の目は節穴? 私がさつきからなにを飲んでるのか見えてないのかしら?」

空気ですか?

言えるわけない、店長は自らのプレイでオウンゴールをたたき出す、代償は店長の寿命である。

でもその言葉で、その場にいる誰もが、金剛がもう壊れてしまっていると、わかってしまった。

「……まあ、なんとなく察しはつくのだけれど」

カチャリ、金剛がようやくカップを机の上に置いて手を離し、両手を膝の上に丁寧に添えるよう重ねて乗せる。

「提督なんですよ、三人のうちの誰のかはわからないけど」

「……」

「……」

「……いえ、金剛姉さま。私たちの、金剛型の提督です」

比叡の言葉に、今まで一切表情の動かなかった金剛の眉が少し動く。

なにを馬鹿な、金剛型の艦型適性の提督？

そんな都合のいい適性を持った提督など、と、金剛は一笑しようとする。

だがあまりに真剣な比叡の表情を見て、金剛はそれが嘘ではないと理解した。

「……そう、嘘ではないのね」

短い返事だった、その返事にこめられた金剛の心中を誰も察せない、だが。

「なら、殺さないといけないわね。今更……遅すぎよ。私に提督なんて必要ないわ、私は

一人で死ぬのよ、そう決めたの。例え滑稽だったとしてもその決意を汚させなんてしな

いわ……」

続いた搾り出すような、想像を絶する苦悶の感情、それが感じられる金剛の言葉に一同は啞然とする。

一体どれほどの悲しみや苦しみがあつたのか、百二十年、その重みは、この場にいる誰にも理解できないが、確かに重いものということだけは感じられた。

静まり返るホール、比叡、榛名、霧島がどうすべきか一瞬、金剛との衝突も視野に入

れた思考がよぎった、その、瞬間。

「お疲れ様です！ 店長遅くなってすみませんでしたー！」

空気を読まないタイミングで空気読まない挨拶が裏口から響く、静まり返っていたホールにその声はとてもよく響いた。



今でも、思い出す。

先代の金剛が提督と幸せそうに去っていく姿を。

提督が見つつかれば、基本的には金剛連合会の組長は世代交代をする。

決まりではないが、いろんな問題もあるし、なにより仕事よりも提督と一緒に居ることの方が大事だからだ。

なのでその時代に同型が何人いるかはわからないが、居るなら残った姉妹によつて選出された後任へ世代交代をする。

「貴方にもきつと、戦艦金剛としての、そして金剛連合会に相応しい素敵な提督が必ず見

つかるデース!!」

その言葉を信じてがんばった。

就任してから 一年たった、提督に出会えたらなんて言おう？

就任してから 十年たった、出会えてすぐ口づけをしても怒らないだろうか？

就任してから二十年たった、子供は何人欲しいだろうか

就任してから三十年たった、先代の金剛が提督と同じ墓に入ったと聞いた

就任してから四十年たった、まだかなまだかな、会いたいな

就任してから五十年たった、自分より年上だった妹たちはとつくに居ない

就任してから六十年たった、がんばらなくちゃ、艦娘の居場所を守らなくちゃ

就任してから七十年たった、がんばらなくちゃ、今の金剛は私しかいないのだから

就任してから八十年たった、がんばらなくちゃ、私は金剛なのだから

就任してから九十年たった、がんばらなくちゃ？

就任してから 百年たった、私は、なんでがんばってるんだろう？

就任してから……………、そうか私はひとりで死ぬのか。

□
□
□
□
□

やはり、というべきか。

誰よりも最初に動いたのは最凶の金剛、ホールに入ってきた、この日のために三人が用立てた、下ろし立ての真つ白な白装束スーツ姿のシヨウに向かって一気に距離をつめる。

続いて榛名が、「勝手は榛名が許しません」と凄まじい速さで三度つぶやき金剛に背後から掴みかかった。

そのかいあつてか、金剛の拳はシヨウにかすりはしたものの直撃を避けることができた。

だがそれでも凄まじい力なのは変わらない、その拳の衝撃でシヨウが何メートルも吹っ飛ばされ、壁に激突する。

遅れて比叡、シヨウを確保すべく少し迂回するようにシヨウに向かって動く。自身の致命的な遅れを悟った霧島は少しでも時間を稼ぐために叫びを上げる。

「貴方たち!! シヨウさんを守るわよ! 手伝いなさい!!」
ホストたちと店長はそれを聞いてまずこう思った。

え? 無理です。

なぜ自分たちがシヨウのために命を掛けねばならないのか、そもそも戦艦の艦娘を相手に自分たちがなんの役に立つとこののだ。

例え霧島の命令でもそんな馬鹿なことを……

『先輩どうしたんすか？ 失恋？ 元気出すつすよ、俺、先輩のために失恋ソング歌うつす！』

『先輩、俺の売上げ分そっちに足してください、彼女が妊娠したんなら色々物入りつすから』

『先輩、この前のカップめんマジでありがとうございました！ 超美味かったつす!!』

『先輩この掃除全部やっつくんで先に上がってください、おふくろさんの誕生日なんですしょ？』

『店長、拾ってくれてマジ感謝してるつす、俺、絶対店長にいつか恩返しして見せるつす！』

だが、そのとき各々の頭にシヨウの言葉がよぎる。

そして全員が思った。

クソツたれ。

「スクラームッ!!」

ナンバーワンホストが叫ぶ、普段のパフォーマンスフォーメーションの成果か、一瞬にしてホストたちがスクラムを組んで金剛に向かって突撃する。

ちょうど掴みかかっていた榛名を殴り飛ばした直後だったため、金剛はその突撃をもろに受けてしまう。

が、所詮人の力、あつという間に蹴散らされるホスト軍団のスクラム。

だがここで、その死角から迫り来る一人のゴツイ男がいた。

Eなザイルの坊主の人に似ているあの男。

ホストクラブYOKOSUKAを背負うその男は

「くたばれやあああッ!!」

店長。

ホスト同士の戦いには暗黙のルールがある、顔を狙わない、だ。

故にホスト同士の戦いは、下に、より下に攻撃を当てることこそが美しいとされていた。

今でこそ店長という役職を預かっている店長だが、かつては名のあるホストでもあった。

そして今ここで、現役時代最強と称えられたその技が金剛へ直撃する。

YOKOSUKA流 決闘術

ホスト式 超低空ドロップキック

精密にして捨て身のその技の直撃を足首に食らう金剛。

奇跡的にてこの原理に近い状況になり、金剛がバランスを崩す。

そして店長は満足げな表情を浮かべながら、一瞬で姿勢を立て直した金剛に吹っ飛ばされ、店の壁に激突して気絶した。

あまりに滑稽で無駄にしか見えない行為、時間にして僅かではあったが、そのお陰で持ち直した榛名と、出遅れた霧島は金剛の正面に立つことができた。

彼らの行為は決して無駄ではなかったのである。

そして自らの提督を守るため、僅かでも時間を稼ぐため、二人は最愛の姉と戦う決心をした。



「シヨウさん！ しっかりしてくださいシヨウさん!!」

比叡が泣きながら必死にシヨウに呼びかける。

「いててて、なんなんすか、あの人」

打ち身打撲、細かい傷だらけになりながらも、シヨウは無事なよう体を起こす。

比叡はその様子を見てホツとするも、焦るように、しどろもどろに言葉を紡ぐ。

「ごめんなさいシヨウさん、あの人は私や榛名や霧島の姉さまで、でも姉さまは壊れてしまつて、でもシヨウさんにあえば治せると。でも、姉さまは、ねえさまはもう……逃げてくださいシヨウさん、後は私たちが、全て私たちが……」

「なんかよくわかんないすけど、あの方は比叡ちゃんたちのお姉さんで、俺に会えば治るんすか?」

「そう、思つてたんですが、今の姉さまはシヨウさんを傷つけてしまう……」

「なら、やることは一つツスね」

なんとか体を起こし、金剛に向かって歩き出すシヨウ。

止めようとした比叡を、シヨウは手で制する。

榛名と霧島を戦闘不能にした金剛が、強烈な殺意をこめてシヨウに振り向く。

だがその顔には焦りの相が見て取れた、なにかを必死に堪えている、そう感じられる表情だ。

「く、来るな！ 死にたいのか!!」

金剛が叫ぶように声を上げる、嘘ではないだろう、シヨウはずっと彼女の戦いを見ていて、実際に殺されかかったのだから。

でもシヨウは止まらない、ゆつくりと金剛に向かって歩く。

止まらない、止まるわけがない。

なぜなら

「霧島ちゃんにおごって貰ったジュース、不味かったすけどいい思い出になったす」

痛めた足を引きずりながら、シヨウは歩く。

「比叡ちゃんが差し入れてくれたカレー、あれより美味しいもんは食ったこと無かったす」

シヨウの気迫に圧されてか、金剛が一步後ろに下がる。

「榛名ちゃんが買ってくれたたぬきそば、辛かったす、今思い出しても笑っちゃうす」

よ

ようやく金剛の前にたどり着き、涙を堪える金剛を見つめるシヨウ。

「みんなには世話になったつす、そんなみんなのねえちゃんが泣いてるんすから、その涙を止めるためにがんばるのは、当然つすよ」

シヨウは、金剛に向かって太陽のような笑みを浮かべた。

その昔

義理がある相手を切れと恩ある人に願われた、故にその両方への顔を立てるために切るふりをして、わざと相手に切られることを選んだ不器用な男がいた。

行方不明の妹を探すのを手伝ってくれた、お陰で妹の死に目に会えた。手伝ってくれたその人が一人で戦いに赴く時、恩を返すために鉄火場へ付き合った男がいた。

雪の日に傘を借りた、その時渡してくれた柄に残ったぬくもりが忘れられないから

と、ただ傘を貸してくれたというだけで、その女性のために命を懸けた男がいた。そんな男たちの生き方をこう呼ぶ時代があつた。

任侠

仁義を重んじ、困っていたり苦しんでいた人を見ると放っておけず、彼らを助けるために体を張る自己犠牲的精神や人の性質を指す語。

奇しくもそれは、シヨウの生き方のそれとかぶっていた。

任侠道組織 金剛連合会

初代金剛が掲げた看板、それを体現する生き様の提督が目の前にいた。

金剛はその場にへたり込む。

その目からはとめどなく涙が溢れ出す。

もう限界だった、地上の太陽に照らされ、金剛の心は溶けてしまった。

百年を超える孤独の凶気に侵されていた、分厚い心の錆が剥がれ落ちていく。ぼろぼろと剥がれ落ち、どんどん小さくなっていく心、やがて全ての錆が剥がれ落ちる。

そして残ったのは、とても小さい、でも最後に一つ残っていた一粒。

提督にいたいとい、想い続けた艦娘が長い年月大切に守り続けた、

「金剛デース……」

太陽に向けて花を咲かす、

「ヨロシク……オネガイシマース……」

向日葵の種だった。



ソファーに座り、治療を終えたシヨウに子供のように泣きじやくりながらしがみつく
金剛。

そんなシヨウと（対○座位）でしがみつく金剛を囲んで座る比叡、榛名、霧島。

離れたソファーで寝かされた店長。

散らかった店の後片付けをする、ホストや従業員たち。

「はあ、つまり俺はそのテイトク？　ってやつで、金剛ちゃんたちはカンムスってやつなんすね」

シヨウ、比叡たちの必死の説明により、ようやく提督と艦娘のことを知る。
(理解したとはいってない)

「あの、シヨウさんは本当にその辺ご存じなかつたのですか？」

恐る恐るといった感じで聞く榛名、

「俺、学校行つてないんすよ」

さらつと闇が深いワード、みんな深く考えちやダメだよ、説明しようと思つたら艦娘が出てこない話を一話書かなきゃならなくなるからね。(メタい)

「シヨウさん……」

金剛姉妹、何故かシヨウの過去を知れたことかその内容を知つて、私が幸せにしなきゃという感情が溢れだす。

というか、現状なに聞いてもあふれ出す、蛇口壊れてんな、これ。

「なら結婚しましよテイトクー！　絶対私が幸せにするネ！　そして私と二十四時間ずっと一緒に居てくださいー！」

シヨウにしがみついて泣いていた金剛が、唐突に涙をぬぐいながら宣言する。

さすが高速戦艦姉妹のネームドシップ、立ち直りも切り替えも言うことも速い。

突然のプロポーズに混乱する残りの姉妹たち。

みなさーん、ついて来てくださいネーwwww（煽り）

「えええ!? ちょ、金剛姉さま待つて……」

「そそそそそうです！ ここは私たち四人でシヨウさんを……」

「嫌デース！ どうせ私はみんなより先に死ぬですから、残り少ない時間だけどそれまでは独占させてもらうネー!!」

絶対嘘だ、絶対シヨウが死ぬまで生きるつもりだ。

三人は確信した、確実に訪れる未来をみた。

「いや、うれいししそういう事情がある以上、いつかはみんなと一緒にならなきゃとは思
うんすけど。俺はまだホスト続けるっすよ。店長に恩も返せてないし、ナンバーワンに
いつかなりたいんで、待たせてすまないっすけど、それまではホストがんばるっす」

悲報 店長、この時「俺のことはいい、お前はお嬢さんたちとともに生きてやりな」と
発言できれば無事シヨウと縁が切れた可能性、しかし無情にも店長は気絶中。

よって当分今と変わらない状況（悪化確定）が続くことが決定する。

やったね店長！ 売り上げが増えるよ！

納め先が霧島組の時点でマツチポンプだけどな！

「ウー、残念デース。でもそんなシヨウさんもステキだワー！」

残念がりながらも、シヨウの生き方を尊重する金剛はやっぱいい女。しかし残りの三姉妹、この時に悪魔の直感がひらめく。

つまり、シヨウはナンバーワンになるまではホストを辞めない。

と、いうことはそれまではこのホストクラブに通い続けることで、金剛姉さまに独占されずにシヨウとイチチャイチャできる。

即座にそれに気が付いた、比叡、榛名、霧島、店の片付けをしていたナンバーワンホストに

『わかってるな？ 死んでもナンバーワン守れよ？』

という意味をこめた特大のガン付け。

速報：ナンバーワンホスト 三発の流れ弾が直撃（35.6cm砲：徹甲弾）

後に艦夢守市歓楽街で『ホストの元帥』と呼ばれ、長年にわたりナンバーワンの地位を守り続けたホストが爆誕した瞬間でもある。

彼はこれまた後に、『店長大臣』と呼ばれる、ホストクラブ「YOKOSUKA」を経営し続けた男の一生の友人にもなった。

余談だが彼らの生涯は常に胃薬とともにあったという。

「とりあえず金剛ちゃんなんか飲むつすか？　できれば高いやつだとうれしいでウイツシユ！」

涙を流しすぎた金剛のためになにか飲み物をとって聞いたシヨウだったが、いつもの癖でホストの台詞を加えてしまう。

だが、それが自分の提督からの生まれて初めての命令（お願いに）に聞こえた金剛は、満面の笑みを浮かべながら、

「モチロン一番高いやつ頼むデース!!」

咲き誇るひまわりのような朗らかな声で、そうオーダーする。

ホストクラブに響き渡る金剛の注文にざわめく店内。

「わ、私たちも同じのお願いします!!」

続いて対抗する妹たちの追加オーダーが入る。

それを聞いて従業員たちは、慌てて準備に取り掛かりはじめた。

わいわいがやがや、狼たちの夜の城に少しづついつもの喧騒が戻り始める。

ホストクラブ「YOKOSUKA」は今日も大繁盛だ。

その後の金剛を詠った詩がある

体は愛で出来ている

血潮は紅茶で心は茶器

幾たびもクラブを訪れてはプロポーズ

ただ一度も時間をわきまえずに

ただ一度の場所もわきまえない

提督はここに有り

VIPの席で好意を叫ぶ

B u r n i n g L o v e !!

だってこの体は

貴方への愛で出来ているのだから

『ホスト』

と

『戦艦：金剛』：比叡：榛名：霧島』

おわり

『三文小説家』と『駆逐艦：朝霜』

「世界は私を拒絶しているのだ」

この世すべてを憎むかのような、重い声で男が呟いた。

ここはアンティークな雰囲気あふれる小さな喫茶店『frost』。

場所はオフィス街と住宅街の中間に建っており、おいしいコーヒーをいれてくれると評判の、小さくて威勢のいい艦娘のマスターが営んでいた。

その喫茶店のカウンター席に項垂れながら座るのは、先ほど重い言葉を呟いた陰気な空気をまき散らす三十代程度の見た目の男。

無精ひげを生やし、ぼさぼさに伸ばした天然パーマのウェーブの掛かったワカメ頭で、くたびれたシャツとズボンでサンダルを履いた姿は、とてもまともな成人男性には見えない。

「そりゃたいへんだねえ。あつ提督、コーヒーのおかわりいるか？」

「……もらう」

そしてカウンターを挟んでその向かいに居るのは、膝まで届くほどの長い灰色の髪を

後ろでくくった、背の低い少女。

男とは対照的に、生気があふれて自信のみなぎった表情で、生意気でやんちゃ盛りの元気いっぱいのお雰囲気を全身から放っている。

だが、バリスタの服を着こなし、空になった男のカップにコーヒーを入れる様子は、とても手慣れていて無駄の無い動きだ。

彼女こそがこの店のオーナーで噂のマスターである、駆逐艦の艦娘『朝霜』だ。

「死んでいるのは誰だ？　生きているのは誰だ？　私は？　私はどうなのだ？　生と死は紙を表裏に割くことができないうように同じ一つの構成体で、それがもしかしたら世界を構成している極めて重要なファクターでありうるかもしれないという、極めてライトなテーマであるのに。あの出版社は私から解き放たれる言葉の力を恐れるが故に、私の小説を読まずに破棄しているに違いない。でなければおかしいのだ、今年も落選するなんて……。私の言葉の力など大戦前の過去の文豪たちに比べればそう珍しいものではないというのに、彼らはなにを恐れて……」

「まあ提督の書く文学小説？　内容がえぐいしくれーし、よくワカンネーかな。残念だけど時代にあわねえ以上当然じゃね？」

朝霜の飾らないストレートな言葉が突き刺さり、男はカウンターに突っ伏す。

なるほど、確かに言葉は時に質量を凌駕した、恐るるに足る力を持つようだ。

『三文小説家』と『駆逐艦：朝霜』

この男と朝霜、一応は提督と艦娘という関係であり、役所にも登録済みである。

だが、基本的には喫茶店に入り浸る客と、仲のいい喫茶店のマスターといった間柄だった。

男が客としてこの喫茶店を訪れて出会った時は、さすがに固まってしまった朝霜だったが、すぐに何事も無かったかのように、

「おう、いらつしやい提督」

と、ごくごく自然に挨拶し、帰るときも

「また来てくれよな提督」

と、さらりと見送った。

喫茶店のマスターとしての矜持だったのか、それとも『朝霜』としてのカラツとした気性なのかは解らない。

ただ、その雰囲気居心地のよさを感じた男は、それ以来毎日この喫茶店に足を運んでいた。

そして長時間居座ってはブツブツと陰気を放出したり、執筆作業をしたりしていた。というか一日の半分以上をこの喫茶店で過ごすこともある、ほぼ仕事場だ。

ぶつちやけ営業妨害スレスレである。

でも朝霜的にはバツチ恋である。(not誤字)

「別に意図して暗い話を書いているわけではない、だが、確かに書き終えてみればその暗さは形となつてそこにあつた。確かにあれは私が生きてきて感じてきたすべての闇をすべて集めてたものより、なお暗い物だとさえいえる。闇が五臓六腑に染み渡るかのような暗さでありそれらは力となつて審査員を……ブツブツ」

この男、かれこれ十年以上小説を書いては有名な賞へ投稿しているのだが、佳作にすら引つかつたことが無く、当然世に出た本はまだ無い。

あれ、そう考えると三文小説家かどうかすら怪しいのでは？

……話を戻すと落選の理由は暗いから、これに尽きるだろう。

この男の書く話は人間の業の深さを浮かび上がらせるようなものだったり、他者から見ると不愉快極まる人間のエゴ、そして反吐が出るような悪意の塊など、それはもうこの世すべての闇を集めたかのような暗さであり、読後感が悪く、とにかく暗い気持ちにさせられてしまう。

一部審査員には「いったいどんな人生を送ればこんなものが書けるのだ」と、思わず言葉をこぼしてしまうほどのおぞましさ。

なので意を決して明るいテーマ（自己基準）で書いてみたこともあったが、描写の手法、単語の選び方、主人公がどういう場所を見ているのかなどの視点の選定等々の様々な理由のためか、どれも得体の知れない謎の暗さが付きまとう作品が出来上がってしまったのだった。

当然今年応募した大きな賞も、悲しい結果に終わっていた。

「ま、書き続けるつきやないね！ それよりもさ、ほら、アレどうなった？」

カウンター越しに身を乗り出し、鼻がぶつかるような近さまで顔を寄せる朝霜。

「……持ってきてある、言っておくがこれを手に入れるため私がどれだけ恥ずかしい思いをだな」

「ああもうそんなのいいからさ、ほら、はやくはやく」

熱のこもった目の朝霜に急かされてしまい、やりきれないような表情で男がリュック

から細長い箱を「二つ」取り出す。

パッケージには『黒のシユバルツ46センチ砲ロッド!!』と、なんか意味がかぶつたり物騒な内容の文字が大きく書かれており、黒いゴスロリの衣装をまとったアダルティーで大柄な女性が、黒い筒状のステッキのような物を持ち、長い黒髪のポニーテールを揺らしながらポーズを決めた絵がプリントされていた。

「おー！ たすかるよ！ これであいつも喜ぶぜ！」

「山程ある商品サンプルの貰い物だからそれはいいのだが、何故同じものを二本なのだ？」

慌てて取り繕うように理由を答える朝霜。

「そ、それはほら、に、二刀流!!」

「魔法のステッキ二刀流、そういうのもあるのか。成る程解からん。解らんが今度そのアイデア使ってみよう」

実はこの男、本業は文学小説家（と名乗ってる）だが、副業は脚本家である。

特に戦隊物や魔法少女物（実写、アニメ問わず）はいくつもヒット作を書いており、五年以上もシリーズを変えて愛されているタイトル等も手がけていた。

先ほど朝霜に渡した『黒のシユバルツ46センチ砲ロッド!!』は、この男の最新作である『魔法少女マジカルキヨシー』という、艦娘が主役の実写ドラマで使われているア

イテムである。

『魔法少女マジカルキョシー』は、戦艦になるのを夢見る駆逐艦の艦娘『清霜』が、ある日現れた妖精さんと契約して、魔法の力で魔道戦艦ヤマトに変身し、悪の組織と戦うストーリーだ。

そしてこの作品、社会現象になるレベルで受けた。

大きなお友達から小さなお友達、さらには世界中の艦娘にもバカ受けである。

例に漏れず朝霜の艦娘としての妹（遠縁の子供）である駆逐艦の清霜（テレビに出てる清霜役の俳優とは別人）も熱烈なファンで、放送が始まってからは毎日マジカルキョシーごっこで遊ぶ日々。

先日訪れた時などは「マジカルトカレフ徹甲弾！ 魔法の46センチ砲で大本営だつてやつつけちやいます！」といいながら布団叩きを振り回して遊んでいる清霜の姿。

朝霜はその様子を見てしまい、なんとか本物を買ってあげたいと思ってしまった。

しかしこのおもちや大人気で、どここの店を回っても売り切れで手に入らない。

困り果てた朝霜がどうしたものかと思いつながら提督に相談したところ、こうしてあつさり手に入れてきてくれたのであつた。

素の状態が状態なのでわかりにくいですが、実は朝霜さつきから胸がきゅんきゅんである。

色々なきゅんきゅんが混在してるが、そのうちの一つは直ぐにでも帰って二つあるうちの一つの箱を開けて、確認したい（遊びたい）感じのきゅんきゅんである。

朝霜の年齢？

……しかし件の脚本家であるこの男は、理解不能といった表情の不満顔。

「あんな話のなにおもしろいのやら……」

「いや、おもしろーだろ。この前の悪堕ち戦艦ムサシが味方になった話なんか、マジで震えたぜ」

朝霜が言う、放送時間帯の最高視聴率を叩き出した回である『悪堕ち戦艦ムサシ、抜錨！』は、この喫茶店で考え事をしながら手癖で書き殴って、二時間で書き上げたものだった。

にもかかわらず関係者一同は、渡された脚本を見て絶賛した。

あと特別報酬も貰えて、一話分の脚本だけでサラリーマンの平均月収三ヶ月分くらい貰った、時給換算するとやばいので考えたくなかった。

男はちよつと泣いた。

何故脚本として書いた場合だと普通におもしろくなるのかは、本人にもよくわかっていない。

憂さ晴らしとにかく下らないものを書いてやろうと思いつながら書いたら、何故か普

通に評価されてしまったからだ。

地の文が少ない脚本だからこそ、男の暗さもスパイス程度になってるのかもしれない。

それ以来仕事できた脚本は、男にとって下らないと思う基準で書くという方法で書いている。

そんな器用なことができるならと思うが、なまじ書きたいものをしっかりと持っているだけにたちが悪い、男はとて頑固だった。

頑固だけどへんに器用で凝り性でもあったので、基本的には脚本もちゃんとクライアートの意向は聞いて、必要なことはきちんと調べて書いてた。

そんなわけか、なまじ技術も才能もあるせいで、ずるずるとあきらめられず自分の書きたいものを書きつつも、仕事として脚本を書き続けるサイクルが出来上がってしまった。

それもまた男を苦しめている要因なのかもしれない。

補足すると小説家としてのペンネームと、脚本家としてのペンネームは別になっているので、周りからは普通に脚本家としてしか認識されていない。

「そもそもマジカルキヨシーは深夜枠でひっそりやるはずだったのに。艦娘をメインにした作品を作らせたなら右に出る者が居ないとかいう監督（山田監督）がしゃしゃり出て

きて、全力で予算確保したせいでこんなことに……」

『山田監督伝説 マーケティング編』

- ・ 昼休みに出かけて、帰ってきたら企業とスポンサー契約を締結していた。
- ・ 一部に本物の艦娘を使えないかと提案、ジョークまで優秀だと笑われる。
- ・ 次の日、艦連基地に突撃して十二時間に及ぶ交渉の末、協力を取り付た。
- ・ ついでに艦連関係の企業とスポンサー契約と全面協力も取り付けていた。
- ・ 局の責任者が泣いて感謝した、感謝の最中にもスポンサーと契約を締結。

「なあ、なんで提督はマジカルキョシーみたいな感じで、その文学小説をかかねーんだ？」

「その感じで書いたならばそれはもはや私の目指す物、書きたい物では無くなるのだ……」

そう呟いて、男はまたブツブツと陰気を放出しだした。

その様子を見て朝霜はやれやれ、といった風に一つため息を吐くと、なにも言わずにサイフォンを使用してコーヒーを作り始める。

サイフォンを使用して作るコーヒーは作る手間も、器具の手入れにも手間が掛かるた

め、よほどこだわりが無いと喫茶店で作るのには、利益率や回転率の関係から向かないとされている。

(※場合によります)

だが朝霜の店では豆と客の好みによって、ペーパードリップ式と使い分けるために専用の器具が設置されていた。

「……人はなにかを恐れるとき、そのなにかが自分とは関わりの無いものにしておくために遠ざける。その行為と向き合うために取り入れた要素が万人に受け入れられないなら、直接的な表現を避け湾曲的な表現に変えることによってその忌避性を抑える必要がある、だがそれでは私の表現したいことをぼけさせてしまうのなら、いつそ環境を変えられることによって逆に性質の変化を誘発し……ブツブツ」

男の陰気が成熟して発酵し始めたとき、店の入り口のドアが開いてベルが鳴り、ちらい雰囲気を出した茶髪でスーツ姿の男が入ってくる。

「あつ、先生こちらにいらしたんですね！ いやー、探しましたよ」

朝霜が少し眉をひそめ、入ってきた茶髪の男に背を向ける。

茶髪の男は朝霜の様子を気にもとめずに、男の隣に座った。

「……なにか用か、次の締め切りはまだ先だろう」

「やだなあ、用が無きゃこんな所まで来ませんよ、今日は新しい仕事を持ってきました

！」

茶髪の男は時々仕事を依頼してくる、クライアントの一人だ。

正直男にとってはありがたい存在でもあるが、基本的な気質が合わず、業界人特有の失礼な押し強さもあって、正直付き合うのが億劫な相手でもあった。

そんな男の気持ちなど知らぬといわんばかりに、クライアントの男はクリップにとめられた資料を鞆から取り出す。

「艦娘のOLが主人公の恋愛ドラマの脚本を、書いてほしいって仕事がありました。先生に是非書いてほしいんですよ。例の山田監督、他の人の書いた脚本持って行ったら、気に入らないってへそ曲げちゃって……」

「これ以上仕事は増やささない、そう言ったはずだ」

「えー、でも先生スケジュールには空きあるでしょ？ 執筆速度すごく速いですし、もっと仕事を増やしても大丈夫だと思いますよ」

「小説を書く時間が必要なのだ。だから仕事はこれ以上増やささない」

その言葉を聞いてクライアントの男が、頭にクエッションマークを浮かべたような顔になる。

「え、先生の小説って以前見せていただいた、あの醜悪なギャグみたいなやつですか？

アレって罰ゲーム用かなんかのやつでしょ、趣味で楽しむならいいですけど、あんなの

いくら書いたつてお金になりませんよお」

「……私かなにを書こうと勝手だろう」

クライアントの男がケラケラと「冗談きついですよー」と笑う。

「いやいや、あんなドス暗いのじゃなくて、先生が今まで書かれてきた脚本の、あの感じのやつこそ世間が求めているものなんですよ。ねえマスターからもなんとか言つてやつてくださいよ、マスターも艦娘なら見てみたいですよね？　艦娘のOLが主人公の、恋愛ドラマ」

朝霜は拭いてたグラスを置きながら、クライアントの男をにらみつける。

グラスを置いた音は、やたら重く響いて聞こえた。

「……くさいね」

「え？」

ぞつとするような冷たい目をした朝霜の視線を受けて、たじろぐクライアントの男。

「あんたが付けてる香水、コーヒーの香りを駄目にしちまう。悪いけど出てつてくれるかい？」

「いや、いくらなんでもそれは失礼じゃ……っひひ!？」

さらに冷たさの増す凍るような視線、その視線が自分の喉に向いてるのに気がつくクライアントの男。

朝霜が浮かべた愛想笑いでわずかに開いた口から覗く鋭い歯、本能的に首を咬みちぎられる恐怖を感じたクライアントの男は「か、考えておいてくださいね」と言い残して慌てて店を出て行った。

「ごめんな提督、他のお客さんの迷惑になるんで、追い出させてもらったよ」
「……ああ」

男の返事を聞いて、他の客なんて居ない店内を見渡し、朝霜は再びコップを磨き始めた。

サイフォンのフラスコの中の水が沸騰するコポコポという音と、朝霜がコップを磨く音しかしない、静かな時間が流れる。

「……朝霜」

「ん、どうしたんだい？」

ひどく打ちのめされたような表情を浮かべ、男が朝霜に聞く。

「私の小説は、未来永劫誰にも評価されないのだろうか……」

磨いていたグラスを棚にしまい、手を拭き終えると朝霜は目をつむった。

そして片方の手を胸に当て、片方の手を空に掲げながらゆっくりと語り出す。

世界のあらゆる物は私には価値が無いのです。

価値が無い物は無いということと同じなのです。すなわちこの世界のあらゆる物は無いのです。

無いというのは存在しないということなのです。

つまりはなにも無い無窮の世界がここなのです。

この世界では私すら無価値な物でありました。

なにも無いはずの世界でそれは有りました。

恐らくそれは別の世界だと思われました。

私はそつと別の世界を抱きしめてました。

世界はここにありました。

世界はここにおりました。

今回落選した賞に男が応募した作品、その中の一節を暗唱し終えた朝霜がゆっくりと目を開く。

「提督の書く話、内容がえぐいしくれーし、よくワカンネーけどさ、あたいは好きだぜ」投稿する前に朝霜に見せたのは、ほんの一日。

にもかかわらず穴が開きそうなほど、何度も朝霜はその話を読み返していた。

「普通に生きてれば目にしないし、目にしちまっても関わりたくないもの。それを目に

すると不安で不安でしようがなくなるもの。多分提督の書く話はそういうもんを煮詰めた物語なんだ、普通の人にはそれが怖いのだ」

朝霜には難しいことはあまり解らない、だが『朝霜』としての気性の関係かなのか、感受性に関わる感覚は強い。

「でもどんなに恐ろしくても向き合わなきゃいけないもんがある、そしてその恐ろしいもんに備えなきゃいけない。提督が書く話はそれを教えてくれる物語でもあると思うぜ」

理屈では無く、その強い感覚でとらえた感想が男の胸を打つ。

「あたいだって艦娘だ、普通の人らと同じだなんて言いやしなさい、だからあたいの感想なんてあてにはなんないかもしれない。でも、あたいら艦娘は艦娘で普通の人らとは違う物語を生きてる。ただの恋物語なんかじゃ無い、提督をみつけるまで悩んであがいて、得体の知れない感情と戦いながら生きる物語さ。そして提督をみつけたからだって、最後までどうなるかはわかんねえ。まあ、これは誰でも一緒か」

朝霜は抽出の終わったコーヒーを湛えたフラスコを取り外し、温めておいたカップにゆつくりと中身を注ぐ。

「提督の書いたやつを読むと、その時の気持ちを思いだして怖くなるけど懐かしい気もするし、忘れちゃいけない気持ちを蘇らせてくれる気もする。提督と出会う前だったら

違つてたかもしないけど……でも、だからこそ、あたいは提督の書いた物語が好きさ」朝霜ができあがつたコーヒーを、項垂れた男の鼻先から少しだけはなれたあたりに置く。

カチャリという音が静かになり、包み込むような優しく香ばしい香りが立ち上った。

「それに今は理解されなくても、時代が変われば評価されるかもよ？ それまではうちの店で書きたい物を書き続ければいいじゃん」

屈託の無い笑顔で微笑みながら、そう締めくくる朝霜。

「ホットケーキでも食うかい？」

「……もらう」

支えてくれる存在のありがたさを感じて、男はちよつとだけ泣いた。

『僕』と『正規空母：飛龍』

早朝、人通りのない道を学生服姿の女性が走っていた。

短く切りそろえられたショートカットの髪が走るたびに揺れ、ついでに大きな胸もゆっさゆっさと揺れている。

はつらつとした大きな瞳に、優しげなかわいい顔立ち。

健康的な肌の色艶も相まって、まさに青春真っ盛りの女学生といった雰囲気。

ついでにいえば何故か口に食パンをくわえて走っている。

たぶん遅刻しそうなのだろう、たぶん、明らかに始業時間に余裕がありそうな早朝だけだ。

さらにいえば今日は休日である。

食パンを口にくわえて走っているためしゃべることはできないが、もし彼女の心の中を解説するとすれば以下のようなことを考えながら走っているだろう。

私、飛龍。

花も恥じらう女学生。

素敵な提督との出会いを信じている正規空母の艦娘なの。

あとなんだか今日こそは、提督と出会えそうな気がする！

ああ楽しみ、どんな人なのかしら？

できたら、多聞丸みたいな人がいいなあ。

四人前の料理をペロツと食べて平気な人。

そんなわけで今日も提督をみつけるため、艦夢守市を提督特捜最前線よつ！

二航戦、参るっ！

こんな感じである、多分。

そんな彼女の進む先の曲がり角に、黒い影。

「わー！ あぶないどいてどいて！」

口とは裏腹に、飛龍はとてもイイ笑みを浮かべていた。

『僕』と『正規空母：飛龍』

この世界は一度滅びかけたらしい。

しんかいせいいかんという、怪物が現れて世界をめちやくちやにしたんだ。

だけどこからか現れた艦娘と、その辺に居た提督と、あと沢山の人たちが力を合わせてしんかいせいいかんをやっつけて平和を取り戻したんだって。

その後、艦娘たちは妖精さん（以下一話参照

まあ、現状それよりもピンチなことがあつて……

「どうした少年、このような所に一人で居るとは」

「……」

尻餅をついた僕を見下ろすとても大きい姿。

体中毛むくじやらで、鋭い爪に大きな口と大きな牙。

「……」

何故か二足歩行でたっている、しゃべる熊さんが僕の目の前に居るのだ。

妖精さんが居るくらいだから、しゃべる熊さんが居てもおかしくないような気がするけど、それでもいざ目の前に現れるとびっくりしてしまうのが人情というものだ。

そういうわけで、なぜこんな森の中でこんな状況になっているのか、順を追って思い出してみようと思う。

それまで僕が食べられなかったらだけど。



「おばあちゃんの弟？」

「そう、ぼんの大叔父にあたる人よ。冬休みの間に一度会ってらっしやい、ほんとはばあちゃんも一緒に行つてあげたいんだけどまだ入院してなきやいけないから」

その日お見舞いに行くと、おばあちゃんがそう言った。

今まであつたことはなかつたけど、なんでもおばあちゃんには年の離れた弟がいるらしく、今年あたり僕に会わせようと思つてたみたい。

どうしておばあちゃんが急にそんなことを言うのかわからなかつたけど、おばあちゃ

んの言うことなのできつと意味があるに違いない。

そんなわけで冬休みに入った初日、僕は艦夢守島の田舎にある大叔父さんの家に列車で行くことになった。

最初は赤城さんが付いてこようとしてたけど、手術の予定が沢山はいつているとかで難しかったらしく、それでも付いていくと駄々をこねて看護婦さんに羽交い締めにされていた。

流石に看護婦さんが大変そうだったので「赤城……さん、おばあちゃんのことと家の留守番をお願いできますか？」と、お願いしたらびたりとおとなしくなつて、何度も首を縦に振っていたので多分大丈夫だと思う。

看護婦さんにはすごく感謝されてしまった。

それから僕は赤城さんに送ってもらって家に帰り、準備を始める。

といつても数日分の着替えをリュックに詰めるだけなんだけど。

準備を終えて、何故かじつと後ろで座って待っていた赤城さんにうちの鍵を渡す。

赤城さんはその鍵をぎゅつと握りしめて、大事そうに胸ポケットにしまった。

そしてまた赤城さんに送ってもらって、艦夢守市中央駅に向かう。

艦夢守市中央駅は艦夢守島各地に伸びる沢山の路線が交差する大きな駅。だから列車が発車するホームもいっぱいある。

名残惜しそうに僕を見送る赤城さんと別れ、僕はおばあちゃんに書いてもらったメモを確認して切符を買い、茶色い二両編成という少ない目の車両数の列車に乗り込んだ。

荷物を足下に下ろして、ほとんど人が居ない座席に座り、しばらく待っているとやがて列車が動き出す。

流れる景色が楽しくて外を眺めていると、隣の線路を走る列車の中に、どこかで見たことのある女の子がいた。

確かえつと、うん、大鳳さんだ。

彼女は慌てたような顔で走る列車の窓から身を乗り出してたけど、窓がちよつとしかあかないみたいで飛び降りられず困っているようだった。

乗る列車を間違えたんだらうか？

やがて線路が分かれて大鳳さんの乗った列車が遠ざかる。

僕は大鳳さんが無事に目的地の駅に着くといいなと思いつつながら、しばらく外の景色を眺めていた。

一時間半ほどで降りる駅に着いたので、列車から降りる。

ここは無人数駅みたいで、駅員さんは居ない。

駅は森の中の少し高台に建っていて、駅から出て表の道の横は斜面になっており、眼下には森が広がっていた。

駅から大叔父さんの家までは、歩いて一時間くらい。

迎えが来るって言ってたけど、特にそれらしい人は見当たらなかった。

待ち合わせ時刻が過ぎて、それから三十分くらい待ってみたけど一向にそれらしい人が来る気配がない。

なので僕は歩いて向かうことにした。

幸い大叔父さんの家までの地図は、おばあちゃんから持たせてもらっている。

でもリュックから地図を取り出し広げた瞬間、とても強い風が吹いて森の方へ地図が飛ばされてしまう。

慌てて僕は地図を追いかけて、森に入ってしまったまい迷ってしまったあげく、結果としてこうしてしゃべる熊さんと遭遇してしまったのであった。



取りあえずまだ食べられていないけど、どうしたものか。

「……」

「まあ、大方道に迷ったという所か。しょうがない、近くの村まで送ろう」
なにを言っているのかわからず黙っていたら、そう熊さんが言った。

「どうやら熊さんは僕を食べないようだった、おまけに近くの村まで送ってくれるらしい。」

「ええと、ありがとうございます」

取りあえずお礼を言うと、熊さんはちらりとこちらを見て、長い爪の付いた手で僕の頭を撫でてくれる。

爪は鋭かったけど、肉球はプニプニしていた。

そして何故か僕を脇に抱えて歩き出した。

しかし今度は別の意味でどうしよう、なんだか色々聞きたいことがある気がしなくても無い。

なんで二足歩行なのかとか、なんでしゃべれるのかとか。

僕のなかで色々聞きたいことが浮かび上がる。

そんな僕の気持ちをよそに、無言で歩き続ける熊さん。

やがて森の出口が見え始めて、少し開けたところに出る手前で僕は意を決して聞いてみた。

「あの、僕の名前は……といます。よろしければ熊さんのお名前を教えてくださいませんか」

でも名前も知らない人に色々聞くのは失礼かと思ったので、まずは自己紹介を兼ねて

名前を聞いてみた。

「ふむ、ちゃんと名前が言えるとは感心だ。そうだな、色々と呼び名はあるが……まあ、私のことはクラウド、そう呼ぶといい」

え、なにその名前、超意外なんだけど。

でもちよつとかつこいいい気もする。

「よろしくお願いいたしますクラウドさん。後、送ってくださりありがとうございます……ごさいます」

「うむ、よろしくな少年。そして気にするな、迷子の子供を送り届けるのは当然だ」

そう言われると、なにかの歌にありそうな展開な気がした。

といつても、まさか同じ状況に陥るとは思つてなかつたけど。

人生は不思議でいっぱいだ。

「ところで聞きたいことがあるのですが、質問してもいいでしょうか」
「構わない、予想は付いている」

熊さんの表情はよくわからないけど、なんだか少し楽しそうな声の気がした。

機嫌を損ねてしまつて食べられるのもあれなので、下手なことは聞けないけど、これだけは聞いておかないと思つたことを聞いてみる。

「どうして僕は抱えられてるのでしょうか、歩けますが……」

「……ふむ」

熊さんがぴたりと止まる。

少し考えるように口元に手を当ててから、ゆっくりと僕を下ろしてくれた。

「やるじゃないか少年、その質問は予想外だ」

「はあ」

そう言つて熊さんは、僕の手を取るとゆっくりと歩き出した。

といつても、僕の方から軽く熊さんの爪の先を掴んでる感じだけど。

「昔……どこぞからやってきてこの森に居着いていた人の子供が居てな。その子を拾つて何年か育てていたことがあった。直ぐにどこかに突っ走つていくので、よく抱えて歩いてきたものだ。ある程度育ててから『びっくになるっす！』などと言つて街へ出て行つてしまったが。まあ……その頃を思い出してついな」

「なるほど」

昔を思い出して少し寂しそうな熊さんの横顔。

勿論表情なんてわからないから、なんとなくそんな気がしたただけなんだけど。

それとは別に、僕はその熊さんが拾つた人のことが少し気になった。

この熊さんに育てられたらいつたいどんな大人になるのだろうか。

「あの、その「危ない提督!!」は……」

その人のことをもう少し聞こうとした瞬間、なにか女の人の声が聞こえた。

と思つたら、すごい早さで現れた人影が熊さんの手から僕を奪い取る。

なんか変な表現だけど、僕、奪い取られたようだった。

見ると、僕を抱えているのは茶色の髪の毛の女の人で、学生服を着てるので多分学生。

問題は何故僕を奪い取つたのかだけ……

「危なかつたわね提督！ 農作業に向かうマイおじいちゃんの人に、偶々私がぶつかつてしまい、むち打ちになつてしまつたおじいちゃんの代わりに、今日約束をして駅に迎えに行くことになつていた親戚を迎えに行く途中、うっかり道を間違えて熊に襲われそうになつてた提督に出くわさなかつたら危ないところだつたわ!!」

説明がとても長い、気がする。

あと待たせている人はいいのだろうか。

でも大体わかつた、このお姉さん艦娘だと思う。

そして熊さんのことを勘違いしてる気がする、仕方ない気もするけど。

「えーつと、あのですねお姉さん、あの熊さんは……」

「航空母艦、飛龍です！ 空母戦なら、おまかせ！ どんな苦境でも戦えます！ 提督

!!

「あの、えっと、お姉さん、あの熊さんは……」

「飛龍よ!! 提督!!」

あ、これいつものやつだ。

「……飛龍さん、あの熊さんは……」

「ふふふー! 安心して提督!! この飛龍に任せておいて!! なあに、あんなの直ぐにやつつけちゃうんだから!!」

飛龍と名乗った艦娘と思われるお姉さんは僕を地面に下ろすと、すごくいい笑顔でこちらに向かって親指を立てながら言った。

僕は知っている、それは死亡フラグという奴だ。

というか、さすがに熊さんの誤解を解かないかと思っただけど、その前に飛龍さんは熊さんに向かって飛びかかってしまった。

「チェストー!!」

「ふむ、艦娘か……」

飛びかかった飛龍さんが熊さんに攻撃を当てたと思った瞬間、早くてよく見えなかったけど、なにかがぶつかる大きな音が聞こえる。

見ると、ものすごく見事に熊さんの拳が、飛龍さんのお腹にカウンターで突き刺さっ

ていた。

「ぐふあ!!」

熊さんは一拍おいて、インパクトの瞬間に曲げた状態で止めていた腕を伸ばしきる。すると飛龍さんが、腕を伸ばした勢いと拳をねじった回転の影響を受けて吹き飛ばされ、背後の大きな木に激突した。

「意気込みはよし。だが相手がヒョッコではな」

拳を突き出した状態の、ものすごく綺麗な構えで静止した熊さんがそう呟く。すごい、めっちゃつよい気がする。

「つくー！ 艦娘の防御力が無ければ即死だった……貴方ただ者じゃ無いわね……」

ただ者じゃ無いのは間違いないと思う、だって熊さんだし。

飛龍さんはあまりダメージを受けていないようで、ゆつくりと立ち上がったけどなんだか額から汗が一筋垂れていた。

「しかし、いきなりずいぶんな挨拶だな」

「うるさい！ 沈みなさい!!」

飛龍さんが大声を上げて、再び熊さんに飛びかかり拳をくりだす。

熊さんはやれやれといったふうに難なくかわした。

……すごい。

「その程度では、私を敵に回すにはまだ未熟」

「なにおおお！ 提督に出会えた艦娘のおおおお！ 想いの力を侮るなあああ!!」
飛龍さんはそう叫びながら、攻撃をかわされて体勢を崩した状態を利用し、体をねじめるように回し蹴りを放つ。

「それは一人前の艦娘のセリフだ」

でもあつさり熊さんに足を捕まれて、そのまま投げられる。

僕の近くの木に激突する飛龍さん、すごい音がした。

だけどやつぱりダメージは受けてないみたいで、直ぐに起き上がる。

しかし飛龍さんはかなり警戒して、構えながら僕をかばうような位置に移動した。

「怖いか未熟者よ、己の非力を嘆くがいい」

悪役みたいなことを言いながら、ゆっくりとこちらに近づいてくる熊さん。

でも何故かちよつと楽しそう。

「……やつと会えたんだ、やつと……だから提督は私を守る。たとえば、最後の艦になつても……守って見せます！」

そう叫びを上げながら飛龍さんが、構えをとる。

その瞬間、飛龍さんが立っている地面が少しへこみ、なんだかすごい力のような物が感じられた。

え、なにこれ、どういう展開なの？

「おいおい、なめられたものだな。出力を上げたからといって勝てるでも思ったか？ それに手持ちの燃料がどの程度か知らんが、未熟者が地上で缶に火を入れるリスクを正しく……」

「提督を守るためなら、たとえどんなことでもやるわ」

熊さんの言葉を遮るように、力強く、決意を以て宣言する飛龍さん。

なんというか、どこかさつきままでと違う様子だ。

その様子を見て、熊さんは「ふむ……悪くはない……」と呟きながら少し考え込む様なそぶりを見せ、ゆっくりと腰を落とし両手を構えた。

「名乗れ艦娘」

「第二航空戦隊、航空母艦、飛龍」

一触即発という空気なんだろうか、じりじりと真剣な感じで向かい合う二人。

うーん、さすがになんだかまずい気がしてきた。

熊さんはこの状況を楽しんでいるような感じだし、たとえ勘違いでも、飛龍さんは僕を守るために必死になってくれてるんだらうなというのは解る。

でも、どういふことであれ僕が飛龍さんの提督であるのなら、きつと僕の意に沿わずそしてまた飛龍さんに意味のない戦いをさせてはいけない気がするんだ。

だから、僕はこの戦いを止めることにした。

といつても話を聞いてくれない飛龍さんを止める方法はあるのだろうか？

そう考えて、ふと看護婦さんのことを思い出す。

『いいか坊主、もし院長が暴走することがあつたらお前が止めるんだ。それが提督の役目でもある』

『提督の役目……』

『望んで提督になつたわけじゃ無くても、だ。その辺の心構えや気構え、そしてそのあり方は提督によつて様々だから俺からは教えられねえ。だけどな、もしやらなきゃならなくなつた時に、やりたいと思つた時に、それができないつてのは嫌だろ？』

『はい』

『よし、じゃあ提督だけが使える必殺技を一つ教えてやろう。これは俺とは別の木曾が……ほんとだぞ、ほんとに別の木曾だぞ？ その木曾がその昔、とある戦いのために編み出した技の一つを応用したやつでな……』

僕は看護婦さんの言葉を思い出す。

艦娘は生まれもつて水上で戦う術を身につけているし、おまけにいつでも展開できる

艦装を使えば、軍艦の火力と機動力を引き出せる。

だから水上で艦装を展開した艦娘と戦うのは無謀もいいところだ。
だけど

『陸上での戦いは訓練を積まないと不慣れというか、ちよつと感覚が違って戸惑う「うわっ!! 海上と違う!!」ってな感じだな。といつても普通はそんな訓練受けなくてもいいんだ。なんせ俺たちはなにもしなくても力が強いし、それにダメージを与えたいなら、せめて戦車が必要だからな。だからその手の訓練を受けてるのは軍人か、専門の仕事に必要なやつだけ、まあ……後は趣味のやつか。話を戻すが、そんな俺たちをそれでも止めなきやいけない状況つてのが来たときどうするか。さつきも言ったけど、付け入るとしたらそこ、海上と違うつて所を突く、つまり……』

不慣れな足場へ

「むっ？」

僕は飛龍さんに近づくと、熊さんが少しうなつた声が聞こえた。

「危ないから下がつて！ ていと……ええ？」

僕を後ろに下げようとする飛龍さんの手を取り、強く強く握る。

それを感じて飛龍さんは、慌てて出力？ を下げたような気がした。

僕はくり出す、看護婦さんに教えてもらったその技を。

かつて夜の街でとつぷを取ったらしい看護婦さんとは別の木曾さんが、看護学校の学費を稼ぐために男装して働いていた店で編み出したとされる技。

YOKOSUKA流 決闘術

ホスト式 超低空 蟹挟み

飛龍さんの手を掴んだまま、僕の足で彼女の足を挟み込みひねる。

「ひぎゃー!」

すぐく見事に、びたんと飛龍さんが前のめりに倒れ込んだ。

僕はすかさず飛龍さんの耳元で囁く。

「やめろ飛龍、僕の恩人に手を出すな」

確かこうだったはず。

『ははは! どうだ簡単に倒れただろ? いいか坊主、自分の艦娘に言うことを聞かせるときは、この状態でこうやって後ろから覆い被さって耳元にぞつとするような冷たい言葉を、とろけるように甘く囁くように言うのさ。え? やり方がわからない? よし、試しにやってやろう………どうだ? え、よく解らなかつたからもう一回? しょう

がねえなあ、じゃあ……あ、院長、え、いや、あのこれは……ぼ、坊主今だ！ 今こそ止めぎやアツー!!』

あの後大変だった気がする……。

まあそれはおいといて。

うまくいったのかよくわからなかったけど、飛龍さんは顔を真っ赤にして何度もうなずいていた。

「……ほう、やるではないか少年よ」

熊さんが褒めてくれた、だとしたら多分うまくいったのだろう。

やった。



「こんのバカ孫が！ よりにもよって山神様にてえ出すとはなにしてんだ!!」

「ふええええん！ ごめんなさあいいいいい!!」

飛龍さんが大叔父さんにめっちゃおこられてる。

あの後僕は飛龍さんと、缶に火を入れた反動？ なのか、真っ赤になって動けなく

なつた飛龍さんを担いでくれた熊さんと一緒に、おばあちゃんの弟である大叔父さんの家に向かった。

大叔父さんの家は、珍しいかやぶき屋根の大きな家で、着くと大叔父さんが首を押さえながら僕たちを出迎えてくれた。

ちなみに熊さんはこの村では有名な熊さんだったらしい。

そんなこんなで今、僕と熊さんと大叔父さん、そして飛龍さんは囲炉裏を囲んで座つて居る。

「すみません山神様、バカ孫が」

「いや構わない、私もずいぶんと顔を出していなかったからな」

熊さんが器用に正座しながらのんびりと言う。

「そうだよおじいちゃん、私だつて山神様が熊の姿をしてるって聞いてたら……」

「バカもん、山神様はそのお姿をしょっちゅう変えられるんじや、ゆつたじやろ」

「え、そうなの？」

え、そうなの？

僕もびつくりである。

「はいはい、お説教はそこまですて夕飯にしましょうね」

奥から大叔母さんが、大きな鍋を抱えてやつてくる。

山で採れた山菜や獣の肉をふんだんに使ったお鍋らしい、おいしそう。

「ほんとにしようがねえ。山が荒れないように獣を抑えたり、危険が無いか見回ってくださってる山神様に感謝すんだぞ」

「ははは、言い過ぎだ。私はただ暇をもてあまして山を見回ってるだけさ……ああ、ありがとう」

熊さんは大叔母さんに差し出された料理の入った器を受け取ると、横に置いた。

あれ、食べないのかな？ と僕が思ったそのとき。

「よっこいしょつと。いや、これを脱ぐのも久しぶりだ」

……熊さんの中から、短い髪の綺麗なお姉さんが現れた。

なにを言ってるんだろう、僕は。

でも、なんか、うん、めちやくちリアルな熊の着ぐるみを脱いだってことなのだろうか、うん。

僕がわりとすごいショックを受けていると、飛龍さんが驚きの声を上げた。

「ええええええええええ!!」 山神様の中身って『日向』さんだったのおおおおお!!」

「うん、伊勢型航空戦艦、日向。一応この名前も覚えておいて。気がつけなかっただろう

？ 夕張重工の特注品だ、家に帰れば他にも色々な種類の着ぐるみがある」

えつとうん、つまりこの人は日向という艦娘みたいだった。

つまり熊さんでクラウドさんと山神様で日向さん。

「そういえば少年よ、飛龍を倒したあの技は見事だった。いい筋をしている、なんなら色々教えてやろうか？ ふふふ、弟子を取るのは久しぶりだ。ああ、そうなるなら私のことは師匠と呼ぶといい」

そして師匠。

「あつ!? そういえばおじいちゃん、私提督見つけたから。よろしくー」

「おおつー! 姉ちゃんが言ったとおりやつぱ坊主がそうじゃったか。それはめでてえ、めでてえけど学校はちゃんと卒業してから嫁入りすんだぞ」

「えー!」

「あつたりめえだばかもん、嫁ぐにもそれなりの学や作法を身につけてからにしろ!

提督捜しごつことかアホみたいなもんにつつを抜かしたるようじゃまだ嫁にだせん!!」

「ちよ!? やだおじいちゃんばらさないでよ!!」

……なんだろう、なんだか色々起こって僕はとても混乱している。

やばい、なんというかこの気持ちはなんなんだろうか。

とりあえず言えるのはえっと

ここは『艦夢守市（かんむすし）』

大きな港があり、その港と街の周りをぐるつと山に囲まれている、そんな立地の場所。都会とまではいかないけれど、それなりに騒がしくてそれなりに穏やかな大きさの街。

からそれなりに離れた場所にある村。

ここにはどうやら僕の親戚で、艦娘でもある飛龍さんが居た。

これから僕と飛龍さんがどうなるかはまだわからないけど……

大叔父さんに叱られてる飛龍さんが、ちらりと僕を見た。

そして舌をちよつと出しながらウインクして、とっても嬉しそうに笑う。

つまり、ここは僕の“もう一人の”お姉ちゃんともいえる人が住んでいる村なのだ。

「弟子になるなら特別な瑞雲を見せてやろう」

……あと、師匠。

つまり、人生は不思議でいっぱいだ。



とあるお家の扉の前。

一航戦の青い方と、五航戦の姉の方が意を決してインターホンをならそうとしていた。

勿論みんな大好き、百万石と鶴（姉）である。

なにをしているかというところ、何故か最近通学路で待ち伏せをしても全く出会えない提督に直接会いに来てしまったのだ。

ファーストアタックをしくじってしまった思いもあり、我慢していたのだが……

ぶっちゃけ、辛抱たまらなくなってしまった。

なのでとてもお高いお菓子などを手に、ついでに自らの提督の保護者にご挨拶もしてしまおうという覚悟も決めてきている。

「いいかしら翔鶴さん？」

「はい、加賀さん。いつでも」

いつの間にそんなに仲がよくなったのか、二人はうなずき合って恐る恐るインターホンを押す。

『はい』

扉越しに聞こえてくる女性の声、二人はきつとそれが自分の提督の母親だろうと思いい、ファーストインパクトに備えて背筋を伸ばす。

扉が開く。

「は、初めまして!! 私たちは……あ?」

扉を開けたのは、すごくいい顔をした赤城の山だった。

「提督さーん、頼まれてた天山のプラモデル持ってきた……よ……って、翔鶴姉じゃん?! なにやってんの!? 爆撃され……じゃなくて、え、いや。今海外出張中だから私の大事な話は帰ってから聞くって言うってたのに……ほんとになにやってんの?」(温度急降下のアイ)

そして後ろからプラモデルの箱をもって瑞鶴がやってきた。

ドーバー海峡沖海戦のボス戦BGMが、加賀と翔鶴の中で大音量で流れ始める。

挟撃を受けた史上あんまり例を見ない機動部隊に退路は……

無
か
つ
た。
。

『無職男』と『駆逐艦：初風』

無職とは？

今日も今日とて無職である。

いくらなんでも面接したその場でお祈りされるとは思わなかった。

なんでや

いや、なんとなくわかってきた気がする、あれだ、多分リアットした元上司の陰謀だわこれ。

有ること、有ることをいろんな同業種の奴らに言いふらしてるに違いない。

取りあえずあれか、そうなると別職種とか検討するべきだろうか？

しかしかといつてなんの職種にするべきか、正直年齢的に別職種への転職は難しいんだが。

だがまあぎりぎりなんとかなる年齢でもある。

だが年齢的に別職種への転職は難しい。

……だめだ、思考がループしている。

考えをまとめるため、目についた古びた喫茶店に入ることにした。

店内に入ると香ばしいコーヒーの香りが鼻をつく、いい香りだな、焙煎からやつてるのかも知れない。

店内を見渡すと、頭を抱えてカウンターにうずくまる無精ひげの生えたワカメみたいな髪の毛の男と、片肘をつけてケラケラ笑いながらその相手をするマスター？らしき長い白髪の少女が居た。

店主の娘とかが手伝っているのだろうか？

おう、いらつしやーい。と、こちらに気がついた長い白髪の少女が、元気だがどこか脱力するような癒やされる声で迎えてくれた後、お好きな席にどうぞーと続けて言う。

なので陰気なワカメ頭の男の近くは避けて、窓際のテーブル席に座ることにした。

もちろん自分でもどうかと思うが面白くてやめられない、よつこらセックスと言いながら。

灰皿を手前に持ってきて煙草を取り出し一服。

……ああ、煙が染み渡る。

落ち着いてからメニューを開くと、割と沢山の種類のコーヒーと簡単なドリンク類、

酒は無い。

まあなんでもいいか、おすすめのコーヒーでもあつたら頼もう。

缶コーヒーもインスタントもドリッポも俺には違いがわからない。

なんてメニュー表をじつと眺めていたら、ふつと影が差す。

いつの間にか店員がやってきていたのか、顔をあげるとどこかで見たことがあるような少女。

「ていと……あなたにとって私は何人目の私かしら？」

『無職男』と『駆逐艦：初風』

胸元に喫茶店のロゴが入った黒いエプロンを灰色のブラウスの上から掛け、下は紺色

のショートパンツに黒のニーソックス。

いかにも私服の上からバイト用のエプロンを掛けただけという服装で、注文伝票とボールペンを持ちながら、つんと澄ました顔でこちらを見てくる少女が居た。

その大きな瞳と、前髪ぱつつんの長い空色の髪には見覚えが。

「あー、陽炎の妹の恥風（はずかぜ）だっけか。会うのはこれで二、いや三度目か？」

「なんだかひどい間違いを聞いた気がするわ……初風（はつかぜ）よ……後四人目の私よ」

陽炎縁者でフィニッシュです。

「つかおめー、言葉の使い方おかしいぞ？」

「はあつ？ あつてるし！」

ああ、あれか、そういう年頃か。

不思議ちゃんってやつだな。

最近の若者の間ではこういうキャラがはやってるのだろうか、磯風もちよつとその気があるきがしなくもないが。

「ああ、まあ、うん。とりあえずなんかこのコーヒー頼むわ」

「なによやめてよその優しい目。とりあえず注文はブレンドつと、ま、いいんじゃないか
つーつー」

めんどくさかったので、とりあえず目に付いたコーヒーを指差してみたら、意外といちヨイスだったようだ。

初風は注文を丁寧な伝票に書き込むと、カウンターでニヤニヤしながらこつちを見ていた少女にオーダーを伝える。

「マスター、ブレンド一つお願いします」

「よっしゃー、淹れたろー!」

え？ あの子マスターなの？

おいしい大丈夫かよこの店、学祭の喫茶店に迷い込んだ気分だけ……

微妙に気になったがやる気満々のようなので、水をさすのも悪いかと思いつておく。

煙草を一本吸い終わり、思考の整理をしながらぼけつと窓の外を見る。

営業回りなのか、表の通りにはスーツ姿の企業戦士たちが行き交う。

そんな風景を見ていたら虚無の感情が心からわき出しかけた、あたりで初風によって運ばれてくるコーヒー。

なかなか様になる格好で、目の前にカチャリとコーヒーを置きながら「ブレンドになります、それではごゆっくりどうぞ」と、一応テンプレの接客文句を添えてくれた。

一抹の不安を感じながらも飲んでみると普通に美味しい気がする。

まろやかなコクというか、芳ばしい香りというか、酸味というか、なんだかとても贅沢なものを頂いている気がしてきた。

コーヒーなんてどれも一緒だと思つてた過去の自分さようなら、俺今日から毎日ここでコーヒー飲むわ。

あれだ、もしかしてオーナーの孫とかなのだろうか？ だとしたら納得の腕だな。

なんて静かな感動を味わっている俺を、隣に立ちながらじつと見つめてくる初風。

なんやのん君

「……なにか、用か？」

「じー……見てるだけよ？ いけないの？」

いけないにきまつてんだろ。

喫茶店だぞ、落ち着きを求めてきてんだよこっちは。

「まあ気にはなるな」

「この初風がコーヒーを運んできたってこと、忘れちゃダメよ」

やだこの子、話が通じない。

「ははは、にいちやん勘弁してやりなよ。そのコーヒー初風が入れたんで気になつてしかたねえんだろ、『そういうの、私がやります！』ってはりきつてたんだぜえ？ 味の感想聞かせてやんな」

カウンターの肘を突きながらマスターが、意地悪そうな顔をして言ってきた。
ああ、なるほどそういう。

「ちよッ!? マスター!」

慌てたように一瞬でカウンターのマスターの元に駆け寄り、マスターの胸座をつかんでぐわんぐわんと揺らす。

初風さんや、不思議ちゃんのカヤラ崩れてんぞ。

一方マスターはケタケタとした笑顔を崩さず、楽しそうに笑っていてなぞの貫禄。実は見た目よりもいい年してるのか？

「で、どうだいにいちゃん味のほうは？」

おう、急にふられてしまった

「コーヒーの味とかよくわかんないですけど、普通に美味しいですね」

「え、ほんと!」

マスターから手を放して、嬉しそうな顔で慌てて俺の元に戻ってくる初風。

いそがしいやつだな。

「お、おう。まあ煙草吸ってる人間の感想だけだな」

もうずいぶんと長いこと煙草を吸い続けているので、味覚も嗅覚も多少バカになってる可能性が捨てきれん。そんな俺の評価など当てにはならないだろう。

そう言ったつもりだったのだが、初風は自慢げでとても嬉しそうである。

なんというかあれだな、よほど自分の仕事に認められたのが嬉しかったのだろうか。やりがいのある仕事か、そつなくこなすというのも大事だが、失敗を恐れ批判を避けるような生き方してもアホみたいだよなと思えた。

当たり前だけど。

クールぶってたと思つたら急に嬉しそつになつたりと、若いもんは感情の動きが激しい。

いや、かくいう俺だつて数日ごとに、躁鬱を繰り返してるが。

そう思つていたら、初風は嬉しそつに厨房へ引つ込んでいった。

満足いったのだろうか、満足いく仕事、俺にはまず仕事が無い。

あまり深く考えないようにするために、二本目の煙草に火を付けて少し多めに煙を肺に入れる。

そうしてポケットと窓の外を見ながらその二本目の煙草の煙を肺と口内で転がし、絞るようにはき出す行動を何度か繰り返した。

二本目を吸い終え、ニコチンが染み渡つてきたので、適度に冷えたコーヒーをゴクゴクと飲み込む。

あー、なんでか知らんがコーヒーを飲みながらの煙草は格別に感じる瞬間があるが、

今日のはなんだか苦みが強い気がするぜ……

あ、やばい、いかん方にメンタルが入りそう。

無意識にうつむいてしまっていたので、頭を二度ほどトントンとたたく。

悪いもの出でてくれ。

「……なにかいやなことがあった、そういうった顔だ」

「うお!？」

急に正面から聞こえてきた声に驚いて顔を上げると、先ほどまでカウンターで陰気を放っていた、ワカメ頭の男が目の前に座っていた。

びつくした！ すげーびつくしたよ！

テーブル挟んでなかったら、絶対反射的にリアット打ち込んでたわ！

「よければ聞かせて貰えないか、これでも小説家の端くれだね。人の感情には興味がある」

「いや別に、いやなことつつつても単純に就職面接に落ちただけだ。……つてあんた誰だ」

思わず普通に答えてしまったが、なんで俺は初対面のワカメ野郎にこんなこと言ってるんだよ。

「ふぬ、なるほど。就職面接、それはどういう感情がわき出るのだ？」

「は？ どうつて？」

「自分がただの労働力的な観点の価値としてしか見られず、品定めされている視線を受ける状況でわき出る感情だよ」

「……まあ、いい気分では無いが向こうもそれが仕事だろうが」

なにが嬉しいのか、ワカメ野郎はばあつと顔を明るくした。

「なるほど不愉快ということか!! にもかかわらずその面接に落ちた君はこれから何度も、そういった視線で品定めされる行為を味わい続けるのだな!!」

「そうだよチキシヨウ!! マスターツ!! こいつ営業妨害してるから殴っていいか!」

「しよーがねーな、一発だけだぞー」

「ホットケーキも作ってきたわ! 味見しなさい!」

もうなんなんだッ! この喫茶店は!!



「無条件に愛されるということは、此方からも無条件に愛してもいいということの免罪符となる、惜しめない愛情には惜しめない愛情を返す。しかしそれはどういった感情から生まれ出る物なのだ? 価値はあるから交換されるのか? それとも交換されるか

ら価値があるのか？　そこに人類の連鎖を維持する上での、人間のあり方としての正しさはあるのか？」

「貸し借りの話か？　物理現象と一緒だろそんなもん、貸しや借りは必要な方や足りない方に移動すんだよ。つかカウンター席に戻れよ三文小説家」

「なるほど現象とはおもしろい答えだ、君は感覚的に物事をとらえる人間のようだな。だが我々小説家の仕事というのは、それらを文字として生成し、知性に届けねばならない。故に現象と一言に切り捨てられないわけだ。あと……正直私も少し戸惑っている、しかしなぜだか君にはどこか私と近い物を感じる気がしてね。初めてだよこうやって名も知らぬ他人に自分から話しかけるのは。しかしそのあだ名はなかなか自虐的な要素が含まれていて、感性に突き刺さる。別仕事の方のペンネームはそれに替えてみようか」

「好きにしろ、てか話長えしこっちの話も聞けよオイ」

それにしてもこの三文小説家は初めて自分から他人に話しかけたのか、ぶっちゃけ死ぬほどどうでもいい情報だけだな。

まあそれそうだろう、こんな変なのがしよっちゅう話しかけてくる喫茶店なんざ、どんなにコーヒーうまくても早々につぶれてるわい。

「ちよつとあなた、あつちの席に戻ってよ。せつかくの味見の練習台なんだから」

「そうだそうだ、つかオメーもなんでしれつと隣に座ってホットケーキ食ってんだよ」
俺の言葉を聞いて人差し指を顎に当てながら、コテンと首をかしげる初風。

かわいいなオイ。

でも仕事はちゃんとしような、たとえ他に客が居なくても。

まあ休憩中の可能性も捨てきれんが。

「甘いもの好き?」

「いやまあ、嫌いじゃ無いが」

その様子が憂かったのでじつと見てると、初風はなにを勘違いしたのかフォークにホットケーキを一切れ刺して、俺の方に差し出してきた。

「そう、ならこれを上げるわ。いらない? いる?」

「つーか味見の練習台が居るんだろ、もううよ」

「……っそう♪」

萩風で耐性が付いてなかったら拒否してたが、正直もはやく恥など無い。

差し出されたフォークの先のホットケーキを、躊躇無くパクリとかせてもらう。

「はむっ、うむ、うまい」

「つわ!?! ちょ、え、直接?!? ……え、おいしいの?」

「うむ。ふわふわもちもちで、ほのかに甘くてグツドだ」

初風は躊躇無く食いついた俺に少し驚いたようだったが、続くうまいの評価と味の感想を聞いて嬉しそうに目を輝かせた。

「そつ、そう？ ふふん、よかつたらもつと食べなさい」

「もらうわ、はむっ」

我ながらあおはるな空気を醸し出してる気がしてきた、傍から見たらどう見えてるのだろうか。

まあ兄と年の離れた妹、もしくは父親……友達の結婚式の招待状、送られてくる同級生の年賀状、赤ん坊の写真……うっ、頭がツ！

……これは考えるのやめよう。

しかしちよつとおだてただけで食い物を買いでくれるとは、チョロいぜ初風。

ホストとかに転職したろかな……

いやまて、早まるな俺。

「……ふぬ、初風くんが、ああ、そういう、成る程。ははは、私の直感や感性も捨てたものでは無いな！ つまり私たちは同じ種類の小舟に乗った旅人というわけか!!」

「小舟で悪かったね、ほらこつち来な。デートの邪魔しちゃ駄目だよ」

「デッ!? デートじゃ無いです!!」

ケタケタ笑いつつ初風の言葉を聞き流しながら、マスターはなんかよくわからんこと

を叫ぶ三文小説家を、ずるずると引きずって戻っていった。

頭とか御大事にな、もうこつちくんじゃねえぞ。

なんつーかでかい煤の塊みたいなのだったな、まっくら〇ろすけのでかい版みたい
な。

雰囲氣的にマスターと付き合ってるのだろうか、いやいくらなんでも年の差がきつい
か。

そもそも、他人の恋愛事情を詮索する趣味は俺にはない。

マスターがなにも言わなかったので、恐らく休憩時間だと仮定して、となりでぶらぶ
ら足を振りながらホットケーキをつまむ初風に話しかける。

「で、ここでバイトしてんのか？」

「そうよ、陽炎姉さんの伝で紹介してもらったの」

謎の陽炎ネットワークを垣間見た、アイツ顔広いなオイ。

だがあの面倒見のよさなら当然つちや当然か、将来が楽しみである。

それまで職が決まっていなかったら俺も紹介してもらうか、何十年先か解らんが。

「そりやまた頼りになる姉だな。その分怒らせたら怖そうだが」

とは言ってみたものの、陽炎が怒っている姿を想像してみても、頭を抱えてツイン
テールをぶんぶん振り回している姿しか思い浮かばなかった。

「そうね、でも……はつきり言って、妙高姉さんのほうが私は怖いわ」

ぶるつと、肩を抱いてどこかおびえるように震える初風。

「妙高？ おまえらの姉妹にそんな名前のやついたっけか？ いやそれより……」

親しいものに叱られる恐怖というより、もっと暗い気持ちに起因しているような、脅え方。

嫌な予感が頭をよぎる、自分のどこかでなにかのスイッチが入った様な気がした。

「……おまえ、そいつに虐められてんのか？」

誰かが、この少女を虐げているのか。

この、陽炎の身内である少女を。

「え？ 急にどうしたのよ怖い顔して……いや、別に親戚のお姉ちゃんみたいな人で、厳しい人だけ別に虐められてるわけじゃ無いわよ!？」

俺の聞き方というか、少し低くなってしまった声のせいだろうか、少し驚いたように慌てたように手を振りながら否定する初風。

いかん、怖がらせてしまったか、だが念のためもう一度確認しておく。

「ほんとにか？」

「ほ、ほんとよ」

なら大丈夫か。

まあそもそも所からして、陽炎が居るしそういうことは起きないよな。

でも今度会ったときに一応言っとこう。

「そか、ならいいんだ。なんかあつたら陽炎にちゃんと見えよ」

「……うん、ありがとう」

もし同年代や女が相手だと、俺が出て行つたら通報という悲しい未来が待ってるからな。

そんな情けない俺の言葉に特に突つ込みを入れることも無く、初風が素直に礼を言う。

さすが陽炎シスター、ちゃんと素直にお礼が言えるとは、ええ子や。

初風の頭が利き手の撫でやすい場所にあつたので、頭に手を乗せて撫でてやる。

「ちよつ！ なに触つてんのよ！ ぶつわよ！ たたくわよ！ 妙高姉さんに言いつけるわよ！」

「おお怖い、そりゃ勘弁してくれ」

顔を真っ赤にしながら怒る初風、でも特に暴れたり振りほどいたりしないあたり、まあそこまで嫌つて訳でもないみたいだな。

しばらくワシヤワシヤとしてから手を放すと、初風は手で髪を整え始めた。

その様子を見ながら俺はふと気になったことを聞いてみる。

「しかしお前くらい年頃だと、バイト代はなにに使うんだ？」

「別になにに使用したいって訳じゃ無いけど、なんとなくなるところかなって」

「貯蓄が趣味か、年の割に年寄りみたいな渋い趣味してんな」

「失礼ね、私は”見た目通りの年ですッ”

見た目通りの年ねえ、なんか微妙に引つかかる言い方だった気もするが。

「ははは、悪い悪い。どうだ、バイトは楽しいか？」

「うーん、そこそこかしら。コーヒーは嫌いじゃないし、マスターもいい人だし。まあ時間帯によって暇すぎる時があるけど」

「あの三文小説家が原因な気もしなくもないが……大丈夫かこの店、経営的に」

「大丈夫じゃない？ この店の裏のマンション、マスターがオーナーらしくて、そっちの収入があるから別にこの店は赤字でも平気みたいよ」

……マジか。

やっぱ不動産収入って最強だな。

あー、俺も不労所得がありやなあ……だから駄目だって、働けよ俺。

「なに？ どうかしたの？」

「あー、いやなんでもない。まあちよつとあれだが」

「……職探しうまくいってないの？」

「……まあな」

鋭いズバツと聞いてきたな、いや、なんか変な空気出してるのかもしれない、俺も三文小説家のことどうこう言えんな。

「まー、色々あつて前職と同じ職種じゃ厳しくてな。別の職種に移るかどうかつて所だ」
「ふーん、なんになるの？」

「なにになるつて、ガキじゃあるまいし別に食える仕事ならまあ……」

「なにかやりたいことがあるから働くんでしょ？　働くこと以外でやりたいなにかがあるなら別に働かなくていいんだから」

……すごく反論したい。

だが、初風が言つてゐることもある意味正しいといえれば正しい。

働くというのとはなにかの目的を持ってやるものであつて、その目的の為に働く必要がないのであれば働かなくてもいいといえはいいのだから。

生きるためとか、老後のためとか、結婚して子供を育てるためとか、そういうのが本来的な目的になるから、働いて収入を得るといふのが目的とイコールになるわけだが。

目的、か……夢と言ひ換えることも人によつてはできるかもしれない。

少し目を伏せて考え込んでしまった俺に、初風が続けて言葉を投げかける。

「なにしようぼくれてるのよ、シャキツとしなさい。それに明日なにかにぶつかつて死ん

じゃうかもしれないんだし、やりたいことやりなさいよ。私がお金貯めてるのもなにかやりたいことがあった時にそれができるようにするためだし。やりたかったことができずに死ぬなんて……嫌でしょ」

ツンとすました顔で生意気にそう言い放つ初風。

ガキの言うことと切り捨てることもできたが、どこか悲しそうな初風の顔を見て言葉が出なかった。

しかし、なんだ、やりたいことか……。

「なんだったかなあガキの頃になりたかったものって……冒険家とかになりたかった気もするが」

「冒険家？」

「世界中を飛び回って、誰も知らない場所を探検したり、まだ見つかってない生き物を探したりしたかった気がするなあ……」

「へー、ま、いいんじゃないかしら？」

自分で言つてて恥ずかしくなってきたわ、純粹すぎるだろ子供の頃の俺。

「いいんじゃないかしらってお前、この年で冒険家目指しますとか一周してすごすぎるだろ」

「別にそうでもないんじゃない？ 例えば艦夢守島にもビッグフット？ だっけ、人語

をしやべる毛むくじやらの巨大生物の噂とかあるし。そうだ、退屈してた所だし今から探しに行きましようよ、手伝ってあげる」

すごくいいことを思いついたといわんばかりに、立ち上がって俺の手を掴む初風。何故君ら姉妹は、人の手を掴んで引つ張るのが好きなのかね、そして力が強い。

「は!?! いや、働けよ、つか今からって俺スーツだぞおい!」

「初風! 出撃します!」

「おー、きいつけてなー」

「人の話聞けよ!?! そしてマスターも止めろよ!?!」

手を振るマスターに見送られて、店の外に出る俺たち。

あ、金払ってない。

「うおい初風! 勘定! 勘定払ってないぞ!」

「……ふふふ、大丈夫よ提督。私が立て替えといてあげるわ」

すましたどや顔で、嬉しそうに俺を見つめながらそう言い放つ初風。

おいバカやめろ、女学生に奢られるとか微妙に恥ずかしいんだよ、あと提督って言うな。

「それじゃあ行きましようか、絶対にUMAを捕まえてやるんだから」

「おいおいおい、本気か!?!」

「本気よ本気、足手まといになるようなら置いていくわよ」

「……俺の場合本気でやりたいことをやると、大抵ろくなことにならないんだがな」

俺のその言葉を聞いて、初風は

「言い訳しないで、本気が出せるなら出したらあ？」

そう、あまり力が入ってない感じで、俺を挑発するように言った。

でもその顔はどこか楽しそうで、歩く速度を上げる。

ああもうわかつたよ、つたく。

今しかできないことは今やる。

やりたいこと、やる人生か。

まあそれも今日くらいなら悪くないかもな。

オマケ | 『frost』店内 |

初風たちがドタバタと店の外に出て行った後、

「若いねえまったく。どうだい？ あたいらもどつか行くかい？」

「この店でいい……」

素っ気ない三文小説家の返事を聞いて、そりや残念と笑いながらコーヒーを淹れ始める朝霜。それと同時に店の扉が開き、一人の男が入ってきた。

男は三文小説家の姿を確認し、まっすぐに近づいてきて三文小説家の手前で立ち止まる。

「こうしてお目にかかるのは初めてですね……山田と申します」

「……ああ、例の監督か。追加の仕事は受けないぞ」

「いえ、伺ったのは別の仕事のお話です」

「同じだ、仕事は増やさない」

「そうですか、では一つ伺ってよろしいでしょうか？」

「なんだ」

「マジカルキヨシーの悪堕ち戦艦ムサシが登場する回の脚本を見て感じました。もしかして貴方は他に書きたいものがあるのでは無いのですか？」

「……」

山田は微笑を浮かべる、まるで取引を持ちかける悪魔のような表情。

「どうでしょう、私と共に艦娘がメインの映画の脚本を書いていただけないでしょうか。」

貴方の書きたい物と、私が撮りたい物、もしかしたら重なる部分があるかもしれませんよ？」

三文小説家は少し悩んでから、隣の席に視線を飛ばす。

「……話くらいは聞いてやる」

「ありがとうございます。あ、マスター珈琲を一つお願い致します」

こうして二人の男が出会い、深夜にまで及ぶ長い話し合いが始まった。

その様子はまるでこの世になにかを召喚しようと企む、黒魔術師のように見えたという。

後に、業界の内外で『混ぜるなキケン（歓喜）』と呼ばれることとなる二人の出会いだった。

『服飾家』と『戦艦：陸奥』

「あんのおクツソツインテールがあああ!!」

マネキンやミシン、型紙、はさみに大きな鏡、そして大量の布。

どこからどう見ても服飾デザイナーの工房と思われる部屋、その中央でショートカットのスマートな美女が叫び声を上げていた。

どこぞの歌劇団の男役でもできそうなほどの、ぞっとする中性的な美貌の女性だが、肩で息をしながらブチ切れているせいで色々台無しである。

「アヤ、うるさいわよ」

そんなショートカットの女性を横目に、くつろいだ様子でソファアに座りながら、爪の手入れをする綺麗に癖の付けられたショートカットのグラマーな女性。

こちらにもアヤと呼ばれた女性とは違うタイプではあるが、柔らかな美貌の美しい女性。

ノースリーブのタートルネックワンピースを着ていて、短い裾から伸びた長い足に、体のラインを浮き出させるような服も合わさって、健全な青少年にはとても目に毒だ。

特に隠す必要ないからさっさとぶっちゃけてしまおうが、この女性は艦娘の『陸奥』である。

「むっちゃちゃん!! セレクトショップのオーナーとして悔しくないの!? あんな小娘の店に客を取られて!! なによあの店の名前! ZUI5ってなに!? うちの店名のZUKAと微妙にかぶってるんだよオラア!!」

きー! と叫びながら地団駄を踏む、アヤと呼ばれた女性。

特に気にすること無く淡々と爪の手入れをする陸奥。

ちなみにこのアヤと呼ばれた女性、提督では無い。

なのに陸奥のことを「むっちゃちゃん」と呼んでる辺り大丈夫なのかと思われるかもしれないが、陸奥の普通の名前は 睦果（むつは）なので、特に問題は無いのだった。

艦娘のその辺の感覚は謎が多い。

「いいじゃない、余所は余所、うちはうちでアヤの作りたいものを、こだわったもの作ってあげば」

整えられた爪を光にかざしながら、のんびりと色っぽい声でそう返す陸奥。

大人びた美貌と相まって、とても余裕が感じられ、俗にいう正に『イイ女』そのものである。

ここでざっくりこの二人の関係を説明しよう。(唐突)

セレクトショップとは、そのショップのテイストに合わせて色々なブランドの衣服やアクセサリーなどを仕入れ販売する店である。

故にその店のオーナーとなると店の経営は元より、各地で開催されるショーなどを訪れては販売会で買い付けをするバイヤーとしての仕事を行いながら、仕入れたものを自分の店で販売するという様々な能力が要求される。

かなりの激務だが、オーナーのセンスが店の商品に全面的に反映され、それによって売上げが完全に左右されるので当然手は抜けない、故に責任重大である。

勿論店の規模によっては複数のバイヤーや販売員を抱えているので、仕事は分担されることもあるが、陸奥は一通り殆どの仕事をこなしていた。

(販売員だけはバイトを雇ってたりする)

で、先ほどから陸奥としゃべっているアヤと呼ばれる女性は、その陸奥の店の上の階に工房を構える一人親方的な服飾デザイナーである。

アヤの工房で出来上がった服は陸奥の店でのみ販売され、正にその関係は陸奥の店の専属ブランドともいえた。

また、お互いはお互いに出資しているので、ある意味共同経営者といった関係だった。んでもって、そんな二人の店のライバルともいえるのが、デザイナーやモデル、バイヤーなどすべてをこなしながら、二人と同じようにセレクトショップ『ZUI5』を経

営する艦娘の瑞鶴である。

店の場所もかなり近い。

だがぶつちやけ、落ち着きの出てきたお金のあるそこそこ若いおしやれを意識する女性向け（長い）の商品を取り扱う『ZUKA』と、学生く社会人になったばかり辺りの年齢までの層を意識した『ZUI5』では客層も、取り扱う商品もかなり違うので、果たしてライバルなのだろうか？　と思えなくも無い。

が、アヤは瑞鶴が嫌いだった、なんとなく、水と油的な感じで。

なので時々こうやってライバル心むき出しで切れることがあり、それを陸奥がしよつちゆう受け流すというのがテンプレだった、のだが……

店に掛かってくる一本の電話。

爪の手入れ中だったので、出たくないなーと思った陸奥がアヤをちらりと見る。

だがアヤは一通り切れ言を吐き出し尽くして疲れたのか、腰に手を当てながら直接ラッパ飲みで水差しに口を付け、水をがぶがぶ飲んでいた。

そんな様子を見て陸奥はため息を一つ吐き、電話に出る。

と、相手は今噂の瑞鶴。

「はいもしもし……あら、瑞鶴。ええ、うん……は？　え、ああ、うん……お、おめでとう。え、あ、うん。そうね、うん……ああ、ちゃんと役所には行きなさいね？　ええ、そ

れじゃ……おめでとう」

内容は提督が見つかったという報告の電話、別にわざわざ報告しなくてもいいようなものだが、なんか姉の翔鶴に電話がつかないようだったので、喜びを伝えたくて知り合いの陸奥に電話を入れてきたようなのだった。

陸奥がゆつくりと受話器を置く。

「ふう……あんおクツソツインテールがああああ!!」

わあ、今度はむつちゃんも切れたぞお。

なんか自慢げな瑞鶴からの提督はつけーん！ の報告を聞かされて、思わず切れちゃったみたいだったのである。

「……むつちゃん、うるさいわよ」

既に怒りを放出しきったアヤは、冷めた目でむつちゃんを見つめる。

「アヤ!! ブランドのTAKARAのオーナーとして悔しくないの!? あんな小娘に先に提督を見つけられて!! なによあの店の名前! ZUI5ってなに!! うちの店名のZUKAと微妙にかぶってるんだよオラア!!」

取りあえずアヤは、オウムのように先ほど陸奥が口にした言葉を返す。

「いいじゃない、余所は余所、うちはうちでむつちゃんの提督を、こだわって探せば……つーか私は艦娘じゃないし別に悔しく……」

根本的な部分を冷静になって指摘しようとしたアヤに、陸奥がずびしと指をさしながら乙女的キャリアウーマンに対する禁止ワードを叫ぶ。

「アヤは仕事でも男でも先に行かれて悔しくないの!？」

陸奥の言つてはいけない言葉に、アヤの収まっていた怒りが一気に水蒸気爆発した。

「それを言ったら戦争でしょうがああああああああ!!」

営業時間の終わった店に、二人のオンナの叫びが響き渡る。

取りあえずその怒りを発散するため、二人は夜の街にくり出すのだった。



「アヤは結婚するつもりはないの? いい人がいないのなら探してきてあげましょうか?」

「まだむつちゃんに心配される様な年じゃ無いわよ。てか私の心配するくらいなら自分

の心配しなさいよ」

アヤがハイボールの入ったジョッキをあおり、ドンと机にたたきつける、カランと氷が鳴る音が響く。

テーブル席の上には、豚モツの土手煮込みや、唐揚げ、シーザーサラダなどが並べられ、向かいの席に座る陸奥の手にも同じくハイボールの入ったくグラスが握られていた。

ここはどこにでもある大衆居酒屋。

古民家を改築して作られた居酒屋の白塗りの土壁は煙草のヤニなのか、料理の油なのか黄色く変色しているが、大きな木の梁と合わさってどこか温かい雰囲気醸し出していた。

「私たちはさ」

「うん？」

「なんのためにがんばってるんだろう」

ぼつりとアヤが弱音に近い声色でそうこぼす。

周りは仕事上がりのサラリーマンやOLが多く、上司に説教されていたり、同僚と日頃の鬱憤をぶちまけ合う喧噪が響いている。

「さてねえ、艦娘は一応根っこに提督をみつつけるってのがあるにはあるけど、それ言い出

したら女は子供を産んで育てるつてのがあるんだし。結局の所生まれ持った価値観に殉じるか、それとも生まれてから構築した価値観に殉じるか、それともその両方か……。でもどっちも楽しく歩き続けるしか無いんじゃないかしら？」

「ちきしよー！ 女は子供を産んで育てるつてそれあたしの大っ嫌いなくそじじいの言つてたことと同じじゃー！ それが嫌であたしは実家を飛び出したんだぞー!!」

アヤがハイボールを一気飲みし、お代わりを大声で注文する。

それを見て陸奥がケラケラと笑った。

「はは、でもアヤは毎日楽しそうじゃない。あーでも無いこーでも無いって布や型紙とにらめっこしながら」

「それを言ったらむっちゃんだつて、お客さんにあつた服を楽しそうにコーデしたり、イイ物買い付けるためにあつちこつち飛び回つてたのしそうじゃん」

「まあ、他にすることもしたいことも無いからねー」

「てかそもそもさ、なんで私たちは他の女が男を引き寄せるための服を必死こいて作つたり売つたりしてるのかって所の問題になつてくるのよね……」

アヤの言葉を聞き流しながら、陸奥がハイボールのお代わりと枝豆を注文する。

持つてきた女性の店員は、大衆居酒屋でくだを巻く美女二人を見てどこか目を輝かせつつも、何故こんなところにこんな綺麗な女性二人がという複雑な表情をしていた。

「いいじゃない、命短し恋せよ乙女たちが着飾る服を仕立てコーデしてあげる。いい仕事だと思っわ、着飾るのが苦手な女たちの心強い味方よ、味方」

「そんな正義のヒロインには、イケメンの王子様が必要だと思いまーす!!」
んがー!! と雄叫びを上げるように立ち上がり、グラスを掲げるアヤ。

周りの客たちが、なんだなんだとチラチラアヤの方を見る。

「あら、あらあら、そういうこと言っちゃうー?」

そんなアヤを見ながら陸奥がニヤニヤして、そう返す。

その様子を見てきよんとしたアヤだったが、直ぐに合点がいったかのようににやりと笑う。

そして二人は顔を合わせて、お互いのグラスをカチャンとぶつけた。

「じゃあいい男でも」

「探しに行っちゃおっか」

そうして二人は残ったハイボールを一气飲みしグラスを空にすると、いい男をみつけるため次の店へと向かうのであった。



ホスト、それは夜の住人、闇夜の時間を生きる者。

ホスト、その本質は飢えた狼、金と女性、そして名誉に飢える者。

ホスト、しかして彼らの仕事はきらめく世界で、夢を振りまく者。

『艦夢守市』その歓楽街にも彼らが住まう城があった。

ホストクラブ「YOKOSUKA」

今日も彼らは闇夜の時を駆け、飢えを満たし、そして夢を振りまくのだった……

「オライケメンどもー！ この喪ジョーズに酒を注げー！」

「そうだそうだー！ って、誰が喪ジョーズだー！」

そんな狼の城に既に出来上がってる二人が居た。

アヤとむっちゃんだった。

そんな二人をもてなすのは、ホストクラブYOKOSUKA屈指のホスト軍団。

でも最初は二人を上客だと思ってたホストたちだったが、なにやらいやな予感が止まらない。

具体的にいうと吹っ飛ばされたトラウマがフラッシュバックする感じで。

「か、可愛いお姫様たち、次はどのようなお酒をお持ちしましょうか？」

ナンバーワンホストが、アゲアゲおもてなしモードで接客する。

ちよつと嫌な汗が止まらない気がするけど、この程度でひるむようではナンバーワンでは無い!!

「コレ」

「これ」

アヤとむつちゃんが同時に指をさす、ドンペリだった。

「ボトルで注文するわ」

「あつ、ジョッキに注いできて」

羽振りのいい注文だというのに、ナンバーワンホストはすごく嫌な予感がした。

でも勇気を振り絞ってオーダーする、運ばれてくるジョッキに注がれたドンペリ。

「ちよつといいとこみてみたいー♪」

二人の美女に挟まれて、おだてられるナンバーワンホスト。

やはりか……そう思った。

ジョッキになみなみと注がれたドンペリ。

問題はアルコール度数ではなく、炭酸であるということ。

二酸化炭素の気泡がはじけるたびに、シャンパンの香りがナンバーワンホストの鼻を突く。

こんなもん一気とかしたら胃が爆発するで工藤!!

だが、しかし。

この程度でひるむようではナンバーワンホストは名乗れないのだ!!

「ウエーイ!! いっきまーす!!」

スタイリツシュにジョッキを持って立ち上がるナンバーワンホスト。

「さすが!」「われらが!」「なんばーわん!」

「ナンバーワンナンバーワン! ナンバーワン! ナンバーワンナンバーワン! ナンバーワン!」

取り巻きのアゲアゲコールが始まり、ゴクゴクとドンペリを飲み出すナンバーワンホスト。

「きやーきやー!!」

そんな男前の様子に、アヤとむっちゃんのテンションも上がる。

炭酸を気迫で抑え込み、こぼすこと無くゴクゴクとジョッキに注がれたシャンパンを飲み干すナンバーワンホスト!!

(※急アルやマールライオンになる可能性があるがあるので真似しないでください)

「つぶつはー!! ぐっちそうさつまでーす!」

飲み干し終えて華麗なポーズを決めるナンバーワンホスト、さすがホストの元帥、その称号は伊達では無い!!

その様子にご満悦のアヤとむっちゃん。

そんな二人の様子を見てナンバーワンホストは確かな手応えと、上客ゲッツの確信を得る。

が

「そういや金剛ちゃんこの前、新聞に出てなかったツスカ？ 市長と話してる写真格好よかつたツスよ」

「HEY、提督うー!? 私の活躍見てくれたの？ もっと頑張るから目を離しちやNO

！ なんだからネー！」

「シヨウさん!! 比叡、恋も仕事も…気合！ 入れてツ！ いきますツ!! ハアーイツ

!!」

「提督。今日も、榛名と一緒に夜を迎えていただいて、本っ当にありがとうございます！

榛名、感激です！ ふふっ♪ ……提督」

「はあ、すー…今夜はお日柄もよく、シヨウさん今日も指名を受けていただいて本当にありがとうございます。これからも私たち…え？ ん、長い？」

「じゃあおれもがんばっちゃうつすよ」(シャキーン)

「…ああもう!! シヨウさんステキ!! あっ、この店で一番高いお酒をry」

「こちらのお嬢さん型（not誤字）にいいいい!!」 ロマネコンry

近くのカーテンに区切られた個室から聞こえてくる声。

そのなんだか濃厚なラブラブ空気が喪ジョーズにまとわりつく。

明らかに提督を、そして自分の王子様をみつめてラブラブ幸せいっぱい艦娘、そしてわたたちの台詞だった。

そして流れ弾的な試練がナンバーワンホストに襲いかかる!!

（シヨウの奴今日だけでロマネコンティ―四本だとお!? いや、大丈夫だ今月はまだ始まったばかり、幾らでもチャンスはある!! あれ、だけどそれはシヨウも同じこと? いや……あれ俺まずくね?）

ナンバーワンホストは必死に自分の今月の売り上げを、頭の中で計算して結構まずいような感じを叩き出す!!

たらりと汗が流れる、ナンバーワンホスト。

ちらりと二人の上客予定を見ると、びっくりするくらい真顔だった。

なんで真顔がよく解らないかったけど、ナンバーワンホストはなんとかこの二人から絞り取れないか必死に頭を回転させた。

「ウイスキー、ボトルで注文するわ」

「氷抜きの水割りで、作れるだけ作ってきて」

ところで、羽振りのいい注文が炸裂する。

運ばれてくる茶色い液体の入ったダースのグラス。

いい酒だと思う、多分。

だが問題はダースで並べられているということ。

立ち上る濃厚なアルコール臭、ボトルを早く消費するためにボーイが気を利かせて、ちよい濃いめで作った気配がした。

「いい男が飲むところ見てると元気出るな」

「沢山飲むところ、見たいなみたいだな」

真顔だが、ほろ酔いの美女の左右からステレオぼいすうが耳に響く。

「ちよつといいとこみてみたいー♪」

そしてナンバーワンホストの脳に直撃した。

しかし水で割つてるとはいえ、ウイスキーのアルコール度数は四十度をこえる。

つまりこんな量一気したら肝臓が爆発するで工藤!!

「うっ、うっ、ウエーイ!! いっきまーす!!」

でもヤケクソになったナンバーワンが叫んで一つ目のグラスを手に取る。

だっているんな意味で上客だし、色んな意味で追い詰められてるし、やるつきや無い

よね。

つまりはここで引かないからこそそのナンバーワンなのだ!!

(※急アルやゾンビが口から出すレベルのヤツが起きる可能性があるので真似しないでください)

「いいオトコーいいオトコー! でもホントはどうでもいいオトコ?!」

「いいオトコーいいオトコー! でもホントは実際いいオトコ?!」

「いいオトコーいいオトコー! ホントにイケメンいいオトコ!!」

「「なぜなら彼こそナンバーワン! なぜなら我らのナンバーワン! それナンバーワンナンバーワン! ナンバーワン!」」

空気読んでせめてもと思い、取り巻きがヤケクソでコールを開始した。

がんばれナンバーワンホスト。

(なんやかんやで今月もナンバーワンだった模様)



バー『佐世保の薔薇』

なんかすんごい大昔からあるコングロマリットなグループの総帥が、隠れてこっそりマスターをやっている店。シックな雰囲気で、控えめの音量のジャズが流れる感じの隠れ家的なバーである。

そんなバーのカウンターに、二人の喪ジョーズ。

無事ナンバーワンホストをノックアウトし終えた二人は、店を変えて飲み直していた。

二人は先ほどのホストクラブとは違い、落ち着いた雰囲気でちびちびと綺麗な色のカクテルを飲んでいる。

黙っていれば二人ともすんごい美女なので、男どもがほうっておかなそうだが、幸か不幸か店内には彼女たちと、綺麗なオールバックの髪型で、短めの口髭が魅力的な巨漢の美中年であるマスターのみ。

因みにしゃべり方がちよつとオネエが入っているマスターがオカマなのか、同性愛者なのか、ノーマルなのか、客の間では割と頻繁に議論が交わされている。

でも今はそれよりも大事なことがある二人の喪ジョーズ、彼女らの話題は別のことだった。

「……アヤ、私たちってさ、そこそこ成功してる方じゃない。お互い一国一城の主でさ、

別にでかい借金があるわけでもないし、名前も売れてるし。そうなるをやつば足りないものが見えてくるのよ」

「わかるわー、あたしもクソソじじいと縁切つて、実家飛び出して。死にもものぐるいで働いてブランド立ち上げて。むっちゃんと組んでここまでの上がつてきたけど。あのクソインテールに対抗するわけじゃ無いけど、最後のピースが足りない気がしちゃうわよね……」

違うようで似ている、似ているようで違う。

お互い求めるものが似通つてる気がする二人が、同時にグラスをあおる。

「大体さー、私たちつて男の趣味絶対似てると思うんだよねー、うん、多分間違いないし」

「はははー、そうなつたら私の提督がアヤの男になるかもねー」

「うへえ……でもまあむっちゃんなら。いや、でも、うー、私の王子様とむっちゃんとさPつてどうなのよそれ……」

「それでアヤはどんな王子様がいいの？ 私も交ざるなら聞いておきたいわ」

そこそこ酔つ払い気味のアヤはむっちゃんの言葉を聞いて、音を立てて大げさに立ち上がり、天に指をさしながら声高らかに叫ぶ。

「そんなの心のチ○コが起つ男に決まってるでしょ！」

「おおおおお！ それいいわね、とても大事だと思うのでありまーす！」

んでもって、そこそこ酔っ払い気味のむっちゃんが追従するように立ち上がり、アヤと同じポーズを取る。

「……ちよつと、あんまり下品なことを大声で言わないでよ」

グラスを磨いていたマスターが、迷惑そうに眉をひそめながら注意する。

「でもまあ、若い子にしちやあ男の選び方を心得てるわね……人が人に惚れるってそういうことだわ」

どこか懐かしいものを思い出すように、マスターがスコッチをストレートでグラスに注ぎ、それを自分で飲み始める。

「え、え？ マスターが惚れた人って？」

「男なの？ え、それとも女？」

そんなマスターの過去に興味津々のオンナ二人。

無理も無い、マスターの恋愛歴とか絶対面白そうである。

「そうね、私が惚れた人は……って、こんなの人に話すようなものじゃないわね」

「えっ!? そこで切っちゃうの?」

「ちよつとマスター、そこは全部話す所なんじゃ無いのお?」

いいところで切られて、抗議の声を上げる二人。

「うるさいわよ、でもまあ、アンタ風に言うならそれこそ心のチ○コが起つ人を好きに

なったことは……あつたわね」

「ほうほう、その話詳しく」

「はよ、はよ」

「あーもううるさい！ 今日はまだ閉店よ！！ さっさといったいたった！」

そんなマスターを無視してぶーぶー不満の声を上げ続けるうるさい喪ジョーズは、巨漢のマスターに首根っこを掴まれ、ぽいと店の外に放り出されるのであった。



「いたたた、マスターなにも放り投げなくてもいいのに」

「うー、話もお酒も中途半端なところで放り出されちゃったわね」

二人は顔を見合わせ、ニヤニヤと笑い合う。

「よーし！ つぎいつてみよー！」

「おー……」

当てもなく次の店に歩き出す二人。

「しかしあれねえ、運命の人ってのはやっぱり出会えるから運命の人なんであって、出会えなきや運命の人じゃ無いわねえ……」

「まったく、艦娘も女も。因果なもんよねほんと……」

お互い肩を組み合つて、支え合いながら歩く二人。

灯りの消えることの無い歓楽街、そんな地上の光の明るさに負けないような満月が、二人を見下ろしていた。

「まあ、人生まだ長いんだし大丈夫よ。出会えなくても来世や前世に期待しましよ」

「ちつきしよー！ 来世はともかく前世つてなんだー！ 映画じゃねーんだぞー！」

夜の街に、女二人が肩を組みながら歩く。

運命の人を捜し求める女と艦娘、似ているようで違う、違うようで似ている。

そんな二人の夜はまだ始まったばかりである。

『絵描き』と『重巡：足柄』

空気が冷たく澄んで、晴れていても何処か暗いような季節の空の下。

一組の母子が墓石の前で手を合わせていた。

母親のほうは妙齡の美しい婦人で、ウェーブのかかった長い黒髪が風に揺れていた。

見るものが見れば、重巡洋艦の艦娘『足柄』だと気が付くかもしれない。

目を閉じて亡き父の墓石に向かって拝む母の姿を、先に手を合わせ終えた少年はじつと見つめていた。

少年は正直ここに来るのが好きではなかった。

物心が付いた時には父は既に他界していたので、悲しいという気持ちはあまりなく、それよりもここに来るといつもはとても明るく元気な母がとても悲しそうな顔をするからだ。

つまらなそうに母が手をあわせ終えるのを待っていると、やがて目を開けた母が少年を見て、少し困ったような顔で注意する。

「こら、ちゃんと手を合わせなさい」

「もう終わった」

「もう、ちゃんとお父さんに色々話してあげなさい。学校のこととかあるでしょ」

「うん……」

渋谷といった風に、もう一度手を合わせ目を閉じる少年。

少年がしばらくして目を開けると、母親がこちらを見てにっこり微笑んだ。

「そういうえば宿題で両親についての作文を書かなきゃいけないんだけど、母さんと父さんってどうやって知り合ったの？」

「あら、そんな宿題出たのね。うーん、そうねえ……。そろそろ話してもいいかしら」
母親が息子である少年の手を引き歩き出す。

「そうね、お父さんは絵描きで、あまり身体の丈夫な人じゃなかったんだけど……とつても素敵な人だったの」

何処か遠くを見るように立ち止まって、空を見上げる母親。
「お母さんとお父さんが出会ったのはね……」



××年前 某国某所

「あちやー、参ったわね。こりや完全に姉さんたちとはぐれちゃったわ」

山岳越え用の服装と装備に身を包んだ足柄が、地図を見ながら川と森しかない場所
で、あたりを見回していた。

数時間前、山岳越えの最中に足場が崩れて谷底を流れる川にまっさかさま。

そこから何時間も流されて、なんとか岸にたどり着いたものの随分と流されてしまっ
たせい、姉妹たちとの合流が絶望的となってしまった。

「はあ、我ながらやつちやつたわね。まあ私が居なくても姉さんたちなら問題なく仕事
をこなすでしょうから、ひとまず作戦完了後の集合地点に先に向かうとしますか」

足柄は地図をしまい、ひとまず川に沿って川下へ移動を開始する。

何時間か歩いていると、目の前に大きな湖があらわれた。

「いい場所ね、ここで一泊しようかしら」

何処か手ごろなキャンプの場所がないかと、湖の水辺に沿ってゆつくり足柄が歩いて
いると、ふと景色と同化していた緑色のテントがあるのが見えた。

一瞬、敵の兵士が居るのかと身構えた足柄だったが、そのテントの前にあるイーゼル、
そこにのせられた湖の風景が描かれたキャンバスを見て構えを解く。

あたりを警戒しながらキャンバスを覗き込むと、描きかけではあるが湖の風景が丁寧

に描かれている。

しかし穏やかな風景画のはずなのだが、何処か描く人間の感情、焦燥にも似た足掻くようなものが伝わってもきた。

穏やかな世界と、若い情熱のようなものが入り交じるアンバランスでありながら、それだからこそ魅力的に見えて引き寄せられる、そんな絵だった。

「ボケた絵でしよ」

その声に魅入ってしまった足柄がはっとなつて振り返ると、焚き火用の枯れ枝を抱えた青年がそこに居た。

長身でありながら痩せていて生気が薄く感じられるが、眼だけがぎらついていて全体的にとがったナイフのような印象を人に与える青年だ。

だが、それよりも問題なのが……

「ていと……くぐ……」

まさかのその青年が足柄の提督だったということだった。

肌寒い季節の湖のそばで、傭兵の艦娘と若い絵描きが出会う。

湖の前で見詰め合う二人の姿が、湖面に反射し何処か絵画的に見えた。

『絵描き』と『重巡：足柄』

提督を見つけた衝撃で動けない足柄を気にせず、青年は黙々と焚き火の準備をして火を起こし、湖の水を汲んでポットに入れて沸かし始める。

その様子を提督を見つけてしまったシヨックでなにも言えず、じつと見続ける足柄。やがてカップを一つ用意し、インスタントコーヒーを作ると、青年はそれを足柄に渡した。

呆然としながらも、驚くくらいあっさりとそれを受け取ってしまう足柄。

カップを渡すと青年はキャンバスに向かって、絵を描き始める。

そこでようやく、足柄はカップが一つしかないので青年がコーヒーを飲めないということに気がついた。

慌ててカップのコーヒーを飲み干そうとした足柄だが

「あ、あつツ!!」

と、熱さに驚いてカップを落としそうになる。

驚きと恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら、提督の邪魔にならなかつただろうかと青年の方を足柄が見るが、そんなベタなコントのような光景になんら興味を示すことなく、黙々と絵を描き続ける青年。

邪魔をしてしまったなら申し訳ないとは思ったが、一切興味を示してくれないのもそれはそれで思いながら、足柄はゆつくりとコーヒーを飲み干す。

そして背負っていたリュックを下ろすと、自分のカップを取り出し、そのカップにコーヒーを入れて青年に手渡した。

「はい、どうぞ」

「どうも」

一口飲んで、カップを足柄に返す青年。

不味かつたというわけではなく、カップを置く場所が無く、持ちながら絵を描くことができないからだ。

何故かそれがわかつた足柄は、カップを持って一步下がった場所で絵を描き続ける青年の様子を見つめる。

静かな時が流れる、足柄が空を見上げると渡り鳥が群れを成してはるか上空を飛ぶの

が見えた。

視線を青年に戻し、今更かと思いなながらも口を開く足柄。

「見てもいいかしら？」

「どうぞ」

まるで瑣末なことだと、振り向きもせず返事をする青年。

足柄は了承をもらい、下ろしたリュックに腰を掛け、再びじつとその様子を見つめる。
(誰かを見つめているだけで、見ているだけでこんな幸せな気持ちになるなんて)

足柄は自分の中に湧き出る初めての感情に戸惑いながらも、何処か楽しむようにそれを転がしてみる。

転がすたびに温かいものが湧き出して、胸を満たすその気持ち。

ひとしきりそれを楽しんだ後、しかしこれからどうしたものかとも思う。

姉妹たちとの合流はどうするか、そもそもこれからどうするか。

闘争こそが艦娘の本質ではないのかと思ひ、姉妹で始めた傭兵家業。

それをこれからも続けるべきなのか？

答えを探して思考を落とし込んでいると、唐突に『グ』と、間の抜けた音が響く。

その音が自分の腹から聞こえてきた音だと気が付いて、足柄は顔を真っ赤にしながら慌てて口を開く。

「い、い、飯を作るわね」

「……どうぞ」

今まで無表情で足柄に興味を示すことすらなかった青年が、微妙に気を使うような間を空けて返した返事を聞いて、足柄は泣きたくなかった。



「あら、画家じゃなかったの？」

「学生ですよ、まだね」

すっかり夜の帳が下り、辺りを暗闇が包む中、焚き火を囲むように向かい合いながら二人は座ってカレーを食べていた。

いつでもカレーを作れるように、足柄の装備には米とカレーと飯ごうセットが常備されている。

表情や感情の動きが乏しいように見える青年も、足柄のカレーを一口食べると、素直に「おいしいですね」と賛辞を述べ、先ほどの腹を鳴らす失態を挽回でき、足柄の乙女のプライドは無事回復していた。

なんてことはなく、それはそれで別にまだ少し引きずっていた。

「それでどうしてわざわざ外国、こんな山奥まで来て絵を描いてるの？」

「……自分の見てるこのボケた世界が、なにか変わるかと思ひまして。まあ、今のところなにも変わりはありませんが」

苦虫をかみつぶした様な表情を浮かべる青年。

足柄はそんな表情もできるんだな、と、感じた。

「それでその……貴方は……」

何処か聞きにくそうに、言葉を濁す青年。

その様子を見て今まで自分に一切興味を示さなかつたことから、自分になど興味が無いと思つていた足柄は、悪戯を思いついたような子供の笑みを浮かべる。

「あら？ 興味が無いんだと思つてたけど、そんなに私のことが気になるの？」

「……こんなところに貴方の様な綺麗な女性が居るのはおかしいと思つただけですよ」

少し顔を赤くしながら、すねたような返事を返す青年。

青年の『綺麗な』という部分をしっかりと耳にした足柄は、立ち上がつて青年の隣に座り肩をくつつけるように引つ付く。

「そう、心配してくれてるのね」

「……まあ、そうとれるかもしれませんが」

密着してくる足柄に、青年は一人分隙間を空けるように引く。

直ぐに足柄がその隙間を詰める。

そんなことを繰り返し、やがてこれ以上詰める隙間が無くなり、青年が追い詰められた。

「あの」

「なにかしら?」

「近いのですが……貴方のような人にあまり近くに来られるとその……」

「足柄よ」

唐突な自己紹介、さらにぐぐつと顔を寄せて耳元で囁かれる声に、青年の心拍数が上がる。

「え? ああ、はい。よろしくお願ひします足柄さん」

「ふふ、よろしくね」

「それで、その、近いのですが」

「この飢えた狼と呼ばれた足柄、この狼のような身のこなし……」

ああもう辛抱たまらないわといわんばかりに、決めぜりふ的な自己紹介をしながら青年に身を寄せて、がばつとやっちやいそうな勢いの足柄。

だったが、青年は足柄が言ったとある部分の言葉に反応する。

「……もしかしてまだお腹が減ってるのですか?」

「…………え？」

青年は立ち上がり、荷物の中から携帯食を取りだし足柄に手渡した。

「どうぞ、夕食のお礼です。それでは私は寝ますので」

「あつ、ちよ!？」

青年はそう言うのと、さっさと自分のテントの中に入ってしまった。

「出会いも戦いも、最初が肝心なんだから……」

啞然とする足柄、完全に色々機を逃してしまったと遅れて気がつく。

足柄はちよつと泣きそうな声でそう呟いた。



「おはよう！ いい朝ね!!」

青年が朝目覚めて、外に出ると既に起きていた足柄が、いい笑顔で挨拶をする。

青年は思わずドキリとして、心拍数が上昇した。

何故ならそれほどまでに湖畔の水辺で、笑みを浮かべる足柄のその姿は……

「…………おはようございます。ところでなぜ朝からイノシシを解体しているのですか？」

ほっぺに血を付けながらそう言うて笑う足柄の姿は、割とスプラッターだったから

だ。

あとイノシシの血を湖の水で洗い流しながら、毛皮をはぐその光景はとても怖かった。

朝からとんでもない物を見てしまったなあと、青年はちよつと吐きたくなつた。

「昨日せつかくカレーを作ったのに、カツを乗せられなかつたでしょ？ ふふふ、今晚の夕食は楽しみにしててね！」（ハート）

女子力の強さを見せつけようと、足柄は早朝から森を走り回つてナイフ一本でイノシシをゲットしてきたのだった。

だが見せつけたのは女子力じゃ無くて戦闘力では？（ボブは訝しんだ）

しかし足柄さんは気がつかない、駄目だ、傭兵暮らしが長すぎたんだ……

ふらふらとナイフを逆手に持ちながら、かわいらしさをアピールしつつウインクするその様子に、青年は昨夜この女性に対して感じた感情は生存本能の警告的な物では？

そう感じた。

「そうですか」

でも怖かつたので、無難に返事をする。

青年の表情はこわばっていたかもしれないが、元々の無表情のおかげで特に足柄は疑問に思わなかつたようだ。

青年は取りあえず足柄のことは忘れ、ポットに湖の水を入れてストーブ（携帯コンロのような物）で沸かしはじめる。

枝を集めて、火を起こしじっくり湯を沸かしてもよかったのだが、なにとなく早く沸かした方がいいかなと判断した。

朝はいい、こうして湯を沸かし入れて飲むコーヒーは、濁った自分の感情をほんの少し薄めてくれる。

そう思いながら湯が沸くのを待ちつつ足柄の方をちらりと見ると、楽しそうに解体していて少し薄まっていた濁った感情がなんだかよく解らない物になる。

なんなんだろうこの人は……

青年の率直な今の気持ちである、混じりつけなしの本音の。

でも自分に振る舞うために努力してくれているというのなら、まあ、うん、まあ。

ありがたいかありがたいかたか置か置いておき、害は無いと判断してもいいのかもしれない。

二つあるカップ、両方に湯を注ぎコーヒーを作る。

解体作業中の足柄に声をかけるのには勇気が必要だったが、青年はカップをもって側に行き、コーヒーを手渡そうとする。

「……………」

「あら？　ありがとう」

足柄はなんのためらいも無く、青年の持ち物であるカップを手を取った。

そして青年が止める間もなく、いたずらを思いついた子供のような顔で、熱いコーヒーを口に含む。

「あつっ!？」

でもコーヒーの熱さに負けて、いい女を演出するのに失敗するのであった。



数日が過ぎた。

いつまでここに居るんですかと、聞けない青年。

楽しそうにニコニコしながら、青年が絵を描く姿を眺め続ける足柄。

ここ数日の足柄は、食事の用意、野生の獣への警戒、さらにはどこから持ってきたドラム缶で風呂を用意したり、果ては『寒いから温めてあげるわ!』と青年のテントに入ってくる（丁重に追い出した）有様。

青年は軽く混乱していた。なんなんだろうこれは、この女性が自分に好意を抱いているというのわかるが、さすがにこれはアグレッシブすぎでは無いだろうか。

そして気がつけば、いつの間にもやらまるで売れない絵描きのために、働いてはかいが
いしく世話をするようなそんな関係になってしまいつつあった。

「私は貴方のひもでは無いのですが……」

「自分が貴方の役に立てるこの瞬間が、私は一番好き！」

そのたつた一度のやりとりで青年は『ああ、これはなにを言っても無駄だな』と痛感
した。

「というかぶつちやけもうこの女性、なんでもありだなと思うようにもなっていた。

昨夜など散歩に出ると言って出かけた後、十頭以上の狼を引き連れて戻ってきて。

「どう？ 可愛いでしょう？ 躰けてみたの！」

などと、自慢げに言うものだから、さすがの青年も開いた口がふさがらず。

「貴方が……居てくれて安心です」

と、少し皮肉交じりで言ってみただが。

「だって私、足柄がいるんだもの！ 当然よね！」

なんなんだこの女性は、という思いで一杯になったりもした。

そして深いため息をつき、足柄という存在を受け入れてしまつてる自分に気がついて
しまう。

そしてずっと気がつかないようにしていた、もう一つのことを認める。

いつの間にか自分がこの生命力溢れる女性に当てられて、ボケていると自分でそう評した絵に、生命力のような力強さが備わりはじめたことに。

この変化は、ここに来たからでは無く、この女性が居てくれたから起きたのだと……認めてしまったのだった。

そんな日々が続いた、ある日の昼。

昼食をとっていた足柄たち、ふと先日従えた狼たちの警戒を知らせる遠吠えを聞いて足柄が立ち上がる。

「この辺りに誰か来たみたいね……」

「現地の人間では無いのですか？」

「だといいんだけど、最悪山向こうの国境からゲリラが越えてきた可能性があるわ……」
「ゲリラですか？」

「この国は平和なんだけど、向こうの国はちよつとね。でも安心して、貴方は絶対私が守ってみせるわ」

「いえ、もし危険なら私を置いて……」

「実は私ね、艦娘なの」

「……」

足柄の突然の告白、それを聞いて青年が固まった。

「そして貴方は私の提督、ごめんなさい。隠すつもりは無かったんだけど、言い出せなくて」

「……そうですか」

「驚かないの？」

「十分驚いていますよ。まああまり顔に出ないので。ですが、成る程、色々都合がいきましましたよ……」

提督と艦娘、一見運命に導かれた恋人が出会うような物語的な部分もあるが、いざ自分がそうなってみると戸惑ってしまう部分もあるのは致し方ない。

「だけど、それでも、それだけでは無いのだと。」

初めて出会って、こうして短い間ではあったが日々を一緒に過ごして育んだ物は、きつかけがなんだったとしても、足柄にとってかけがえの無いもの。

だから、それだけでは無いんだという部分もわかって貰いたいと、足柄がその想いを自分の提督に伝えたい、そう思って口を開こうとした、ところで

「足柄さんさえよければ、国に戻ったらちゃんとしたカツカレーを、食べさせてください」

「え？」

足柄が口を開くより先にぼそりと、青年がそうこぼす。

「油が無いので揚げられずに焼くしか無かったでしょう。ですから、ちゃんと貴方の得意なカツカレー、食べさせてください」

どこか、少し照れたようにそう足柄に言う青年の姿様子を見て、足柄は先ほどまで自分のなかにあつた恐れや、脅えが綺麗さっぱりと消えてしまったことに気がつく。

「……それは、命令?」

足柄がどこか嬉しそうに、そう、問う。

「お願いですと言いたいところですが……そうですね。命令です」

比較的艦娘に対して理解のあつた青年は、足柄の言つたことの意味をある程度正しく受け取ることができた。

なので微笑を浮かべながら、その確認に対して肯定を伝える。

「うふふっ♪わかつたわ。任せておいて提督。足柄、出撃します! 戦果と勝利の報告を期待してて大丈夫よ!」

お茶目な笑顔でピースサインを決めた足柄。

その様子は年不相応なかわいらしきで溢れていた。



体が軽い……こんな幸せな気持ちで戦うなんて初めて……

もうなにも恐くない!!

「出撃よ！ 戦場が、勝利が私を呼んでいるわ！」

そんな感じで足柄は駆けていた、かなりまずいフラグである。

狼たちの遠吠えの内容から察するに、相手は恐らく三人。

(どちらにせよ私と提督の蜜月の邪魔をするようならお引き取り願わないとね！)

が、ある程度相手の痕跡に迫ったところで、その気配がピタリと消える。

まさか、私が誘い込まれた？

この段階で足柄は自分が相手にしているのが、生半可な相手ではないと察する。

すぐさま近くの木に身をかがめて、獲物を取り出した。

ただの自動拳銃、その先に愛用のナイフが取り付けられただけの簡単だが頑丈な獲物。

艦娘の防御力に胡座をかくわけではないが、彼女には、彼女たち姉妹にはこれで十分だった。

気配を探る、前に一人、残りは後ろ？

いや……まさか提督を!?

足柄は普段なら絶対しない新兵のような焦りからの行動で、思わず身を乗り出す、その瞬間。

死角である真上からの強襲、完全な不意を打たれた足柄は一瞬にして拘束される。

だが艦娘の力を侮るなど、足柄は笑いながらも立ち上がるうとして……

自分の体がピクリとも動かないことに驚愕した。

(これは、出力の強化により重量を増した艦娘の拘束術!?)

「油断大敵よ、足柄」

「妙高姉さん……」

なんと足柄を拘束していたのは、姉妹であり、傭兵チームのリーダーでもある妙高。

足柄と同じような山岳装備を身につけ、どこか似ているその顔や雰囲気はとても落ちていた様子で、足柄よりもあらゆる意味で実力が上と感じさせる風格だ。

まさか身内が相手だったとはと、しかも妙高姉さんが相手とかそりや無理よ、なんて思い知らされ、がくりと力が抜ける足柄。

そして前方の囿である気配の主だった、妹である羽黒がおっかなびつくりと姿を現した。

「もう、心配したんですよ足柄姉さん。合流地点にいつまでたっても現れないから」

「あつ…、忘れてたわ」

自分の提督をみつけ、側に居てその役に立てているという甘美な状況に、自分がどうしてこの場所にいるのかを完全に忘れてしまっていた足柄。

「はあ？ 忘れてたってあなた……どうしましょう」（真顔）

「あー！ あー！ あー！ ごめんなさい妙高姉さんお願いだから折らないで！！ 話せば長いようで短いんだけどこれには深い事情がね……」

どう上手く説明したものかと足柄が頭を悩ませていると、湖の方から縄で拘束された誰かを抱え、こちらにやってくる最後の姉妹、那智の姿。

「妙高姉さん、この辺をうろついていた怪しい男が居たので、少し乱暴かと思っただが念のため拘束しておいた。足柄よ、この男と……」

抱えられていたのは、漫画みたいに縄でぐるぐる巻きにされた、足柄の提督である青年。

「私の提督から手を離せええええ!!」

足柄は一瞬で頭が沸騰し、妙高の拘束を振りほどいて那智に飛びかかりその手から自らの提督を奪い返す。

「足柄、貴方……」

あまりの足柄の豹変ぶりに、啞然とする姉妹たち。

「……………そう、そうよ。私は提督をみつけてしまったの。ごめんなさい妙高姉さ

ん、みんな。私は……チームを抜けるわ」

決意を以て告げられた足柄の言葉に姉妹たちは呆然とする。

が、いち早く立ち直った妙高が、足柄に銃を向ける。

「許しません。今ならまだ間に合います、その男をおいて私たちと来なさい」

流石に銃は向けなかったが、那智と羽黒も同じ気持ちだといわんばかりの表情をしている。

「ごめんなさい、だめ、だめなのよ……」

悲痛な表情をしながら、ゆっくりと後ずさる足柄。

その様子に、嫌な予感を隠せない姉妹たち。

「足柄?」

「だって……だってこんな気持ち味わっちゃつたらもう戻れないからあ!! ごめんなさ

い妙高姉さん! 皆! 私幸せになります!!」

そう叫びながら、悲痛だった足柄の表情は、ハネムーンにこれから向かうわ! といわんばかりの幸せそうな表情に切り替わる。

「「ま、待ちなさいいい!!」」

男というか、提督を見つけて幸せ一杯の足柄は、背を向けて湖に向かって駆け出す。

そんな豹変した足柄を追いかける姉妹たち。

こうして、一抜けなんて許さんぞワレエ!! 姉さんたちはそこで乾いてユキナサイア
!!

と、テロップが流れそうな追撃戦にも似た壮絶な鬼ごっこが今始まったのだった!!
「私、あまり体は丈夫では無いのですが……」

ぐるぐるにロープに巻かれ足柄に抱えられたまま為す術の無い青年は、深い溜息を吐
いたあとそう呟き、無の心で成り行きに身を任せることに決めたのだった。



そんな足柄たちが鬼ごっこを開始した場所から10キロ位離れた、山岳地帯。

「リーダー、準備整いました。いつでもいけますー!」

「よし、その場で待機だ」

「ハッ!!」

格好いいベレー帽や、自動小銃や、色んな武器を持った百戦錬磨っぽい雰囲気
の男たち。

彼等はその筋では超有名な、超強いとある傭兵部隊。

金次第でなんでも、どんな仕事でも請け負うイカレタ奴等だ。

ゴツイ葉巻を吸いながら、ナイフを研いだり、銃の整備をしたり、爆薬の準備をしたりと、プロなんだか素人なんだかよく解らないところもあるけど、とにかく超強くて有名でクールな傭兵部隊なのだ。

これから彼等はある国の首都に潜入して破壊工作を行い混乱を引き起こすため、山岳部から国境を越えようと準備をしているところだった。

「楽な仕事ですね、好き勝手暴れるだけでかなりの金が入るんですから」

「さて、それはどうかな。どうにも嫌な予感がする」

「ははは、リーダーの何時もの直感ってやつですか。成る程……それやばくないですか？」

運はないが悪運は強いリーダー、ひとゆえにその勘のよさで生き延びてきたことを知る副官はたらりと汗を流す。

その直後。

彼等から数キロ離れた山の山頂付近に着弾する、砲撃。

驚いて着弾した山の方向を見ると山の形が少し変わっていた。

部隊は騒然とした、が、百戦錬磨の彼らはすかさずリーダーの指示によりその場に伏せる。

「り、リーダーあれは!? 帝国との小競り合いの戦闘に参加した時に近くに落ちた重野

砲の着弾音に似てる気がしますが……いや、それよりもっとデカイ!? 生半可な口径じゃないですよあれ!」

地べたに伏せ、混乱が隠せないようにまくし立てる副官には目も向けず、リーダーは冷静に双眼鏡で弾が飛んで来たと思われる湖の方向を見る。

確認できるのは湖の水面の上を走る四つの人影と、その後には続く航跡波。先ほどの砲撃はそのうちの一人から発射されたように思えた。

「撤退だ」

「は?」

冷静にそう告げるリーダー、思わず聞き返す副官。

「クソ、どこから情報が漏れたんだ。撤退だ、やってられるか。あれは艦娘、しかも重巡洋艦クラスだ。しかも、演習と呼ばれる艦娘同士で行う訓練。弾も油も潤沢にないといけない艦娘の専門訓練だ。あきらかに艦連がバックにいる艦娘だ、そんなもん相手にできるか。オマケにあの着弾音には覚えがある、20・3cmの2号砲だ、相手が悪すぎる、悪すぎだ。(大事なことなので二回言った)他に艦娘が何人あの湖の周りにいるか知らんが絶対憲兵軍も居るぞ、あの訓練と砲撃は示威行動の一環だ。あと大事なこと、これ大事なこと。あの四つの人影見覚えがある、あれ妙高姉妹だ、あの妙高四姉妹があの湖にいる。(歴戦のリーダーのトラウマ過去フラッシュバック)つまりあの湖には最

低でも四隻の重巡洋艦クラスの軍艦が浮いてると同じことだぞ、当然艦娘だから陸にも上がってくるゾ、むしろそっちのがやばい、そんなのが警戒してる地域なんぞ通れるか、戦車とかないし、航空支援とかないし、あつても無理だし。撤退だ撤退、ハイ撤退」

至極冷静に淡々と分析して判断した内容を告げるリーダー。

でも先ほどの超長いセリフをほぼ息継ぎ無しで一気に言い切ったあたり、リーダーもとてもとても焦っているように思えた。

「えーっと、つまりその」

「終了！ 撤収！ 帰っていいよ！ てか逃げるんだヨオおおお!!」

リーダーの悲鳴に近い叫びが辺りに響く。

慌てて命令の復唱を叫びながら撤収を始める傭兵たち。

彼らは、金がすべての世の中にばつちり順応してる、頼りになる神出鬼没の傭兵チーム！

金次第でどんな仕事でも引き受けるイカレタ奴等！

助けを借りたい時は、いつでも言ってくれ！（金額次第）

でも、艦娘だけは勘弁な!!

補足すると、生き延びてこの情報を持ち帰ったというところで、契約違反どころか当初の目的だった仕事の倍の報酬を貰って、彼らの名声は地味に高まった。

でも、もう一個補足すると、この後の人生でも艦娘となにかと縁のある人生になることを（既に縁がある人生なことを）彼らはまだ知らない。



「はあはあ、まさか警告とはいえ主砲を撃ってくるなんて、なに考えてるんですか」

ようやく足柄と、青年を追い詰めた妙高、那智、羽黒。

足柄はそれでも青年をかばうようにして抱きしめている。

「はあはあ、しつこい、これだからこじらせた艦娘つてやつは……」

「いや、数日前までは同じ立場だったでしょ!?!」

と、どったんばったんな追いかけっこをしていた姉妹だが、ふっと妙高がまじめな顔になり仕切り直す。

「ふーーーーーーー。ともかく、もう一度言います。帰ってきなさい足柄。提督という枷に縛られない生き方を模索する。そう誓ったでしょう？ 出会ってから間もない男と、共にずっと過ごしてきた私たち姉妹、どちらが大切？ あの誓いを忘れたの？」

「忘れてない、忘れてないわ……でも、でも無理なの」

姉妹たちが足柄に銃を向ける、まるでこれが最後だといわんばかり。

だが、追いかけてこの最中に気絶してしまった青年を足柄は抱きしめる。確かに初めて出会ってからそう日にちはたっていない。

だが、男女が恋に落ちるのには時間が関係ないように。

提督と艦娘としてお互いを想い合えるようになるのも時間は関係ないはずだ。

大切な姉妹たち、一緒に戦場を駆け巡り日々を過ごした思い出が蘇る。

それは確かになものにも代えがたい大切なものだ。

だけど、それでも、そうだったとしても……

足柄は気絶して目を閉じる、青年の顔を見つめる。

無愛想で、足柄のことなんて大して気にしてないようなつれないそぶりでも、キャ

ンバスと向き合うその姿はとても格好よくて。

なにより、足柄のことを自分の艦娘だと認めてくれた人。

足柄は顔をあげ、自然にいつの間にか流れていた涙をぬぐおうともせず、姉妹たちを見つめながら絞り出すように叫ぶ。

「見て！ 私の提督よ、この人が私の提督なの!! この人に私の全てをあげるの……私
はもう戦えない、この人のためにしか戦えない……ごめんなさい妙高姉さん、ごめんな
さい皆、ごめんなさい……」

悲しみと喜び、嬉しさ、色んなものが混じった涙を流しながら、自分たちを見つめ、そ

して提督を抱きしめる足柄の姿を見て、姉妹たちはなにも言えなかった。

様々な思いや気持ち、それらが渦巻き暴れ出しそうだった。

いつそ今すぐ足柄を、彼女の提督から引きはがしてやろうかとさえ思った。

だが、彼女たちの前にいる足柄の姿はまるで聖母の様だ。

優しさと悲しさと美しさ、そして幸せに満ちていた。

妙高が銃を下ろし、静かに告げる。

「……………チームを解散します、各々自らの提督を探しなさい」

だから、願ってしまった、望んでしまった。

そして気がついてしまったのだ。

『私たちが、提督をみつけないければ…………』

それが今の自分たちにはなによりも大切なことだと。

長女の諦めにも似た寂しい宣言を、残りの姉妹たちは静かに受け入れる。

こうしてこの日静かに、戦場を渡り歩く伝説の傭兵姉妹である妙高たちの傭兵チーム

は解散した。



翌日、目を覚ました青年と共に足柄は山を降り始める。

「よかったですか、あのまま別れてしまつて。大切な姉妹なのではないですか？」

「いいの、だって私は貴方の艦娘なんだから」

山道を腕を組みながら歩いているので、お世辞にも歩きやすいとはいえないのだが、提督の青年は足柄のしたいようにさせていた。

明るく振舞っている足柄が、どこか大事なものをなくし、寂しそうにしているように感じたからだ。

「私についてきたところで……」

「いいの、貴方のことをずっと見て居たいから。提督は提督で好きに生きてくれたらいいわ」

青年の言葉をさえぎり、力強く断言する足柄。

それを聞いて青年は、軽くため息を一つ吐く。

「難しいことを言いますね……まあ、言われなくても生きたいように生きますよ、私は」
湧き出る不安を我慢するためか、青年の腕をぎゅっと足柄が握り締める。

「だから……見ててください。ずっと、私の傍で……」

が、その言葉を聞いて、その意味をしつかりと理解してしまう。

自分の中で燃えるような感情を感じ、足柄は青年の腕に真っ赤になつてしまった顔を

うずめたのだった。

□□□□□□

現在 艦夢守市・南雲病院

南雲病院のとある病室。

「あら、ようやくお目覚めかしら？」

「母さん……来ていたのですか」

「そりや可愛い息子が撃たれたなんて連絡が来たらね」

老いることの無い艦娘。

いつの間にか見た目だけなら母よりも老けてしまった息子は、複雑そうな表情を浮かべながらため息をついた。

「でも驚いたわ、高雄型の適性とはねえ」

「まだ高雄型と決まったわけではありませんよ……」

「高雄、愛宕、摩耶が適合したんでしょ？ もう決まったようなものじゃ無い」

「個別適性であれば、駆逐艦の少女の可能性がまだ……」

「人の夢と書いて儂いとはよく言ったものねえ」

「うぐつ!!」

撃たれてないはずの胸を押さえる息子、その様子を見て楽しそうに笑う母。

「あんたまだ諦めてなかったのね、観念して高雄たちと結婚しなさいな」

「誰のせいでこんな性癖になったと思ってるんですか……」

母は息子のじつとりとした視線を受けて「ははは、ちよつとかわいがり過ぎちゃったのは反省してるわ……」と、呟きながら気まずそうに目をそらす。

しばらく気まずい沈黙があつたあと、母は撃たれた息子の片足を見て心配そうに口を開く。

「もし後遺症があるようなら、私の管理してる下宿に移つてもいいのよ? とつても楽しい子たちも居て毎日飽きないと思うわ。それに毎日揚げたてのカツカレーも食べられるわよ?」

「揚げ物はカロリーの計算が難しいので遠慮しておきます。それに明日で退院予定ですから、もう大丈夫ですよ。伊達に母さんに鍛えられてませんので」

「新調されたよく光る眼鏡を上げながら、息子が淡々と答える。

「あらそう、まあ思つたより元氣そうでよかつたわ」

少し残念そうな表情を浮かべ、母は微笑を浮かべる。

「たまにはそつちから顔を出しなさい」

「当分、その予定はありません」

「こまった子ね、せめてあの人の命日くらいは帰ってくればいいのに」

「ええ、わかっています。ですがまあ、色々予定がありますので今年も墓参りは母さん一人でお願います、父にはよろしく伝えておいてください」

「はいはい、と生返事をしながら立ち上がり、病室を出ようとした母を息子が呼び止める。

「……そういえば、新しい提督は見つかりましたか？」

提督適性を亡くした艦娘は、新たな提督適性を持つものと出会った場合、再び適合する。

もしかしたら自分に『足柄』の適性があるのではないか。

幼い頃からやたら自分をかわいがってくる母。

そして、偏執的とも呼べるほどのレベルで、自分が死なないようにと施される訓練。

それ故に、息子の中でその疑問が消えずにあった。

長年息子が聞けなかった思いを含んだ問いを投げかけられ、母が立ち止まる。

少し、だが何故か長く感じられた間において、母は振り返る。

「馬鹿ね、私の提督はあの人だけ。そしてあなたは私の息子よ」

息子が本当はなにを聞きたいかなど、お見通しといわんばかりに言葉を付け加える。儂げな笑みを浮かべながらそう返事を残し、若い母は病室をあとにした。

息子一人になった病室は、まるで台風が去ったあとのように静かになる。

「そういえば先輩を誘って、リベッチオさんの店に行こうと思ってたんでした」
誰も居ない病室に息子の声がこだました。

窓から差し込む朗らかな春の日差しを浴びて、息子が目を細める。

「……もう春ですね」

しばし静寂を堪能していた息子だが、やがて廊下から賑やかな声が聞こえてくる。

そして病室の扉が勢いよく開いた。

「前島主任、お加減はいかがですか？」

「前島くん、差し入れ持ってきたわよー」

「まえしまー！ おみまいにきてやったぜー！」

扉を開いて現れたのは三人の艦娘。

息子は複雑な顔で、三人の艦娘を見て深いため息をついた。

その仕草は、どこかの売れない絵描きにとても似ていたらしい。

『負け犬』と『駆逐艦：島風』

「……!!……!!」

「さてさて、もう少しで終わる」

短い金髪の背の低い子供が、早く早くと俺の服を引っ張って急かしてくる。

恐らく少女と思われるその子供は、オーバーオールを着ていて、胸には『風子』と書かれた名札をつけていた。

名札には名前の他にも連絡先と住所が書かれていて、初めて見た時はそれがまるで迷子の子犬に付けられた首輪に見えたものだ。

俺は橋の下に建てた自慢のダンボールハウスの、補修の出来を確認する。

欲しかったブルーシートが、たまたま手に入ってラッキーだった。

問題ないな、これですきま風なんかはもう大丈夫だろう。

……今年の冬はなかなか寒かった。

待ちきれなくなつたのか、風子はそのハウスの隅っこに立てかけてある、拾った自転車を俺の所まで持ってくる。

「わかったわかった、そろそろ行くか」

「……」

俺は風子の頭をガシガシと乱暴に撫でたあと、パンクした自転車にまたがる。すると直ぐに後ろの荷台に風子が飛び乗ってきた。

「しかし、お前はそこが好きだな」

肯定だと言わんばかりに、俺の背中をバシバシとたたく風子。

どうも風子は声を出すのが嫌いらしく、身振り手振りで俺と意思疎通を図ろうとする。

恐らく言葉を話すと寿命が縮むとか、魔術がどうこうとか思春期にありがちなあれだろ。

そう、決めつけている……その方が色々と楽だからな。

風子と俺はこの河川敷でたまたま知り合った関係で、それ以上でもそれ以下でも無い。

はずなのだが、気がつけばいつの間にか風子は俺の周りをうろちよろするようになっていた。

最初、面倒事に関わるのが嫌だった俺は、風子を邪険に扱い追い払っていたのだが、何度追い払っても、しつこく毎日俺のダンボールハウスにやってくるので諦めた。

それからというもの、今ではたまに走り方を教えてやったり、一緒に食い物の山草や川魚を捕る毎日だ。

「この前雨が降っただろ、その時ホストみたいな男が俺のセカンドハウスで雨宿りしててな。邪魔だから拾った傘やるから出て行けって言ったら財布の中身全部置いていったんだ。俺そんな怖い顔してたかな……まあ、今日は豪華に牛丼でも食おうか」

「……!!」

今度は嬉しそうに俺の背中をバシバシとたたたく風子。

家でろくなもんを食ってないのか、風子はよく俺と一緒に飯を食う。

ろくな家じゃ無いんだろう、ホームレスの俺に飯をたかるようじゃ。

……しかし誰が信じるだろうな。

こんな俺だが、かつては世界最速の称号まで後一步に迫った男だったなんて。

ふと、前を走る誰かの背中が見えた。

だが……あれは幻だ。

あの日から俺は夢で、そして現実でもあの幻を見る。

心底嫉妬して、ライバルで、尊敬もしてて、世界最速の称号を持つ奴。

俺がその背中を追い続け、今でもこうして追い続けている男、その幻影を。

その幻に迫るように風を切って走る……何て事はパンクした自転車では出来るはずも

無く。

空気の抜けたタイヤは一定間隔で衝撃を生産し、俺たちの尻にダメージを蓄積する。色々あつて世界最速へと挑んだ頃の面影は今の俺には無く、パンクした自転車の後ろによく解らない無口な子供を乗せながらトロトロ走るのでも精一杯、いや、生きるだけでも精一杯の毎日だ。

そんな諦めた日々を、今日が人生最後の日になるかもな、なんて思いながら生きていた。



バイクに乗って走るのが好きだった。

ただ漠然と走るだけじゃ無い、何よりも速く走る事が。

普通のやつとは違って、三歳から親父のバイクの後ろに乗ってた。

レーサー以外の道にも進めただろうけど、四歳の時にはバイクに乗り始めてたよ。

多分、それが自然な成り行きだったんだろう。

そんな俺が世界最速を目指して、世界最高のサーキットを、世界最高のバイクで走りたい。

そう思うようになるのに時間はかからなかった。

そのために俺は子供でも乗れるバイクにまたがって毎日練習した。

子供ながらこの情熱を持ち続けている間は、何があっても走る事は止めないって誓ったよ。

何に向けて練習するかって？決まってる。

世界最高のバイクに乗って、世界最高のサーキットを走り、世界最速の称号を得る。

それらすべてを満たす事が出来るのはただ一つ。

K a n m u s u G P

世界各国を転戦しながら全十八戦のレースを行い、ポイント制でチャンピオンを決定するロードレース。

そして世界最高峰のレースであるK a n m u s u G Pでチャンピオンになることは、それらすべてを叶える事が出来る。

時に死者も出るが、それに挑む奴らは命の限り走る。

大戦以降にそのG Pに出る事が出来たライダーは七百人以上。

誰もが皆勇敢で速さを誇り、究極の頂きに挑んだ。

K a n m u s u G Pの王者に輝いたのは、この五十年でわずか二十数名。

複数回王座に就いたのはさらに少ない。

そして六回以上栄冠を手にした者は僅か一人。

絶対王者ユーリー・タラソフ

彼はあと何度優勝し、王座に上がれるか？

バイクレースを愛する者は、いや、世界が固唾をのんで見守っていた。

誰もが魅了されてたんだ。

何故ならユーリーの走りは速く、そして美しかった。

俺が下位のレースでデビューした年だった。

南領大陸のレースで、ユーリーがライバルだった選手をゴール直前で抜き返して勝った時は、思わず見てて手を限界まで握りしめたのを覚えてる。

ユーリーが純粹に操縦技術でも最強だったと証明したレースでもあったからだ。

ユーリーが逆転を決めたトップクラスの選手は、前年に『夕張重工のマシンじゃ勝てない……』と言いつ残し、夕張重工を辞めて別のチームに移った。

実際に当時の夕張重工のチームはマシンも運営も厳しい状態だった。

夕張重工は選手確保のため、何とかしようとユーリーにオファーを打診。

でもユーリーに移籍を持ちかけるなんて、不可能なのは明らかだ。

夕張重工側もダメ元だったんだろう。

だが当時、ユーリーの所属してたチームでは、レーサーがマシンよりも軽んじられていた。

ユーリー自身、待遇はよかつただろうが窮屈に感じていたらしい。

そのチームに居れば勝てるだろう、だがそれは会社の看板を背負つた囚人だ。

「楽しむのが先、勝つのはその後でいい」

有名なユーリーの言葉の一つだ。

実際、当時ユーリーが所属してた『アカシ』のバイクはすごかつた。

それもあつて、当時誰もがユーリーが勝てたのはマシンのおかげ、そう言つてたよ。

ユーリーはそれを覆したかつたのさ。

だからなのか、ユーリーが夕張重工に移籍を発表した時は世界が驚いたもんだ。

そしてチームのメカニック兼開発技術者の夕張もそれに応えた。

「ユーリーとなら芝刈り機でもレースに勝てる。でも、だからこそ、私は最高の芝刈り機を、ユーリーのために作つて見せる」

当時夕張重工で最高のエンジン開発技術を持つとされた夕張の言葉だ。

そして、夕張重工のチームに移籍したその年。

ユーリーは異なるメーカーのマシンで前年最終戦と、初戦を制した。

マシンじゃ無く、自分の力で勝つていのだと、証明して見せたんだ。

それは戦後のバイク界における、前人未踏の快挙だった。

そしてそれは数あるユーリーの伝説の中でも、ひとときわ輝く偉業でもある。

熱狂する十二万七千人の大観衆。

テレビの画面越しだったが、俺は悔しくてたまらなかつたよ。

何で俺はまだこんな所で走ってるんだってな……

□□□□□□□□

「お前、何でこんな所で走ってるんだよ……」

「!?」

「まあどうでもいいが、走り方のフォームがめちゃくちゃだぞ。手を上げて走ってたら転ぶにきまつてるだろ、後足運びもめちゃくちゃ……いや、大きなお世話だったな」

「……」

それが俺たち二人の出会いだった。

橋の下に建てたダンボールハウス、そこに住んでる俺以外は誰もいない河川敷。

そんな河川敷で、ただ黙々と走り続け、転び、立ち上がり、走り、転ぶを繰り返す風子の姿を見かねて声をかけてしまった。

そんな俺をみてどこか衝撃を受けたようにしている、薄汚れた格好の短い金色の髪の毛の少女。

まあ、ホームレスから声を掛けられれば脅えるよな、当時はそう思った。

実際の所、風子が何者かなんて今でも俺は知らないし、どうでも良い。

警察にしょつ引かれるような事になったとして、今の俺にどれほどの意味があるのか。

だがそれ以来、何故か風子はしょつちゆう俺の所に来るようになった。

「なんだ今日も来たのか……」

「……」

「何で俺の服を掴むんだ、あっち行け」

「……」

「あっち行けって言うてるだろ、しっしっ！」

「……」

「なんだ、これ食いたいのか？野草の天ぷらだぞ……」

「……」(コクコク)

「腹壊しても知らないからな」

「……」（もぐもぐ）

「ホームレスに飯をたかるなんて、いい根性してるよ」

「……」（にっこにっこ）

「あー、ちがうちがう、そうじゃない。こうやるんだ」

「……？」

「こうやってこう、二回針を通すんだよ、そうすりゃ簡単にはとれない」

「……!!」

「ほら、やってみろ。しかしミミズなんてよく触れるなお前」

「……」

「しつかり釣れよ、じゃないと今日の晩飯は抜きだ」

「……!!」

「ああ、これビンだろ。探すのは缶だよ缶」

「……？」

「街は駄目だ、縄張りがあるからな。俺らはこの河川敷で探すんだよ」

「……」

「いいんだよ、無いなら無いで、別にな」

「……!!」

「わかったわかった、ほら、あっちに転がってるのもってこい」

「……!!」

「おいふうこ、それを……何でつねるんだよ？」

「……!!……!!」

「なんだ名札指さして?……なぜ？」

「……!!」(バシバシ)

「たたくなよ、なぜこ、でいいのか？」

「……!!……!!」

「何で逆につねるんだよ、どっちだよどっち」

「……!!」(バシバシ)

まあ、思い返せばろくな事をしてやった記憶が無い。

そんな日々が続いたある日、風子が昔のバイク雑誌を抱えてやってきた。

一瞬俺の事がばれたのかとドキリとしたが、別にばれてどうにかなるような物じゃないし、どうこう思うような物でも無い。

そう思つて冷めた気持ちに一人で勝手になったが、どうも風子はとあるページを指さして必死に何かを訴えていた。

「……………!!」

「あー、わかつたわかつた、どれどれ……おまえ、これ。ウォースパイト様じゃねえか」
風子が指を指すのはKanmusuGP最終決戦の地、ヨーロッパ北海の島に有るサーキットでのレースに勝利した選手の前に立つ美しい艦娘の写真だった。

気品あふれる出で立ち、女王陛下の愛称で親しまれる大戦を駆け抜けたQueen Elizabeth級 2番艦の戦艦の艦娘、その名はウォースパイト。

「……………!!」

嬉しそうに何度も女王陛下を指さす風子。

そしてこの艦娘は、代々KanmusuGPを制した王者に、トロフィーを手渡す艦娘でもあつた。

俺も含め、レーサーなら誰もが一度は、彼女にそれを手渡されるのを夢に見ただろう。もつとも、彼女の前に立つにはユウリーを倒さなければならぬ。

その榮譽を得るために、死にもの狂いでトレーニングしたものだ。

ユリーとは別の意味で俺の目標で有り、憧れでもあった彼女。憧れ……恋い焦がれたと言つてもおかしくないかもしれない。

『K a n m u s u G P のバイク乗りは、みんな女王陛下に恋をする』
ふと、そんな有名な言葉もあつたなと思ひ出した。



下位から上がってきた時、その舞台で走ると、色々な初めてを味わう。

コース、ライバル、マシン、すべてが未知のものだ。

軽量級から中量級にのりかえ、ついに重量級のバイクに乗り換えた日の事を覚えてる。

ふかした瞬間に感じたエンジンの振動が、これから乗るのは時速320キロの速度で走る重量級のバイクだと教えてくれた。

世界最速のバイクにまたがり、世界最高のライダーと戦う。

ようやくその場に立てた、そう、実感した瞬間だった。

その年に出場したルーキーは俺以外には四人だったかな。

全員が下位のクラスで競い合ったライバル同士だった。

もつとも、どいつもこいつも見てたのはユーリーただ一人。

ユーリーは王者であるが故に、若手を退けるために真剣に対策を練る必要があっただろう。

上がって来たばかりの連中にはユーリーの心理戦が通用しない。

何故なら爪あとを残すためなら死をも恐れぬ、命がけで突っ込んでくる奴らばかりだからだ。

KanmusuGPには毎年数十人のライダーが参戦し、大体毎年誰かが死ぬ。

そんな物に覚悟して挑んでくる人間がまともなわけが無い。

当時は連覇を続ける王者ユーリーを誰が追い落とすのか、そして誰がユーリーを倒して女王陛下の前に立つのか興味津々だった。

取り立てて俺は注目されていた、理由は色々あるが……

まあそう思われても仕方がない面もあった。

初めてユーリーと走ったレースで、俺がアホの様に彼を追ったときのことだ。

当時の俺は毎日が人生最後の一日、そう思ってた。

だからなのか、予選でもかなりのタイムを出せたよ。

0.09秒差でポールポジションはユーリーが取ったが、俺は二番手、悪くない。

ユーリーのケツを眺める最前列でスタートだ。

何週目かのコーナーで前をユーリーが走ってた時、当てる気満々で突っ込んだ。何故か別のチームから抗議を受けてたよ、俺がわざと接触しようとしたってな。でもユーリーは

「接触は技術の一つだ、それについてどうこう言うつもりは無い」

そうクールに言った、相手にされてないようにも聞こえて当時は荒れたもんだ。おかげで、命知らずな走りに磨きがかかったよ。

ついでに幸か不幸かタイムも縮んだな。

□
□
□
□
□

その後直ぐ、俺は風子に手を引かれてとある場所に來ていた。

高い塀で囲われ、嚴重な警備の建物だ。

正面門には強そうな複数の兵士の姿。

緑を基調とした赤いラインの入った制服、もしかしなくても憲兵である。

「お、おい風子。ハハハ……」

「……!!」

風子は俺の手を引いて門をくぐる。

門をくぐつて直ぐの場所には、装甲車両が数多く駐められており、門番よりも遙かに屈強な完全武装の憲兵達が待機していた。

憲兵、艦娘を守護するためならば、全人類が相手でも戦いを挑む兵士達の総称。

暴走を避けるため、彼らは多くの決まりで自らを縛り、艦娘への過度の干渉を避け、ひたすら影からその役目を果たす。

だが、悪意を以て艦娘に危険を及ぼそうとする存在の排除は、憲兵の宿命である。

故にそれらの存在の排除は絶対だ。

憲兵達が一斉にこちらをじろりと見た。

まずい、そう思った瞬間。風子が一瞬立ち止まつて子供が兵隊の真似をするような敬礼を軽くする、それを見て憲兵達は一斉に敬礼を返した。

「はっ！」

混乱する俺をさらに引つ張つて、中庭を進む風子。

途中、幾つかある建物の一つ、その屋上から飛び降りて走つていった少女とすれ違う。どこにでも居そうな短く茶色い髪の少女だが、どこか不思議な雰囲気を持つていた。

……ん？屋上から飛び降りてたよな？

俺は混乱を重ねながら風子に手を引かれ、やがて大きな建物の前に到着した。

その建物の扉の横に掛けられた大きな板には『艦娘寮』と書かれている。中に入ると大きなホール、そして奥に進み赤い絨毯が敷かれた廊下を進む。

おいおい、どうなってるんだいったい……

やがて俺たちは『貴賓室』と書かれた扉の前に到着した。

風子が遠慮無くドンドンと扉をたたく。

少し間をおいて扉が開くと、執事服を着た赤い髪の子が出てきた。

「君か……ん？この男は？」

きつい目つきでじろりと睨まれる。

かなり警戒の色を浮かべていたが、風子と俺のつないだ手を見て何か察したような表情になった。

「ああ、そういう事か。だが、ふむ……このまま奥様に会わせるわけには行かないな」

きつい目をした赤毛の女は、俺を見て冷たく微笑んだ。



因果応報とも言うのか、無茶をして危険な走りをしていると、何時か間違いが起こる。

その年の七戦目あたりから俺は優勝が狙えると思いはじめたよ。

実際ポイントはユーリーの後ろで、王座に手がかかる位置だった。

八戦目、ユーリーに勝利してトップでゴールできれば王座の篡奪が現実味を帯びる、その戦い。

序盤から激しいトップ争いがおきた、三周目の三コーナーを抜け先頭はユーリー。

俺は当然攻める、前に出るが再びインからユーリーに抜かれた。

誰でもだった、俺にとっても当時のユーリーは最も速い男だった。

何故あんなに速いのか見当も付かない程に。

だが今思えばユーリーもぎりぎりの勝負を何度も俺に仕掛けていたように思う。

思い返せばそう見える場面が幾つかあった。

まあ当時はその事に気がつかなかったが。

そんなわけで、速さで対抗できない俺は戦術を考えた。

前に出て、抜かれたらカウンタータックで抜き返し、ユーリーを前に出させない。

悪く言うともユーリーの邪魔して、速く走らせないという戦術だ。

そのためには前提として、なんとしても前に出てユーリーを抑える必要があった。

だから俺は最終ラップで、勝負をかけるため高低差の激しいシケインに速度を落とさず飛び込んだ。

(※シケインとは、マシンの速度を落とす目的でつくられた鋭い角度のS字コーナーのこと。)

シケインの手前、六速で時速300キロ出てたな。

そして方向を変えようと、マシンを左に寝かせた時……

タイヤがスライドしてひどいハイサイドが起きた。

宙を飛びながら『ひどいクラッシュになるな……』とどこか冷静に思ったよ。

地面に激突して転がってる時は三十人くらいに一斉に蹴られてる気分だった。

手、くるぶし、肩、鎖骨、あちこちの骨を損傷。

その後、骨折しながらでも何とかレースには出たが、どうしても勝つ事が出来ず、ポイント的にも精神的にも俺は追い詰められたよ。

当然ユーリーは進撃を続け、その年も王座を守った。

□□□□□□□□

強制的に叩き込まれた風呂で、野宿暮らしの垢を落とし浴場から出ると、何処から調達されてきた男もののワイシャツとズボンが置かれていた。(憲兵のか?)

それを着て外に出ると、先ほどの赤毛の執事服の女が待っていて、俺を見るなり何も言わず歩き出す、こんな所に残されてたまるかと慌てて追いかける俺。

先ほどの部屋に着くと、風子が上品な服装で長い金髪の……ウオースパイト様じゃないか。

風子が女王陛下の膝に座り、茶菓子を食べていた。

子供は怖いもの知らずだな……

赤毛の執事服の女に急かされて、女王陛下の前の席に座る。

女王陛下は俺を見てニコリと微笑まれた。

オーラが！圧倒的な王のオーラがあ！！

王たる者の宿す風格の圧力に思わず膝を屈しかけたが、何とか過去のプライドにすぎりついて必死に耐える。

「貴方もお風呂に入ってらっしゃい。大丈夫よ、それまで貴方の Admiral は私がおもてなししておくわ」

風子はチラリと俺の方を見る。

女王陛下と、何かあればすぐに俺をどうにかできる位置に立った赤毛からの圧力に押

されて、俺は軽く頷いた。

風子はそれを見てコクリと頷き部屋を出て行く。

「さて、まずはご挨拶を。我が名は、Queen Elizabeth class Battle ship Warspite、よろしく、頼むわね」

知ってますよ……

ほら、お前もはよ名乗らんかいと言わんばかりの赤毛執事の眼力に押されて俺は口を開くが。

「ど、どうも。俺は……その……」

名乗るべきかどうか、ためらってしまう。

何せ子供の頃より憧れ、そしてその前に立つことを何よりも望んだ相手が目の前に居るんだ。

だと言うのに今の俺はホームレス、惨めったら無い。

その様子を見て女王陛下はニコリと微笑んむ。

「ふふふ、知ってるわ。あの日、もし貴方が勝ってれば私が渡すはずだったから……」

悲しそうに女王陛下が目を伏せる。

その様子を見て、あの日のことが脳裏に浮かび頭が急速に冷えていくのを感じた。

「なぜ貴方がこんな所にとは聞かないわ。今はそれよりもあの子の Admiral が見

つかって嬉しく思ってるの」

女王陛下が軽く微笑み、赤毛の執事に目配せをする。

赤毛の執事は優雅な手つきで紅茶を入れて、俺の前に置いた。

「やつぱりアイツ、いや風子は艦娘なんですか……で、俺が提督だったと。しかし風子みたいな艦娘は、その……」

何処からどう見ても風子はそのへんに居そうな、ただの無口な子供だ。

そう口にするのを躊躇っていると、陛下が察したような笑みを浮かべる。

「あの子は艦娘変わりの最中なのよ、もつとも……もう三年以上、あのままのんだけど」
短くて数週間、長くて一年と言われる艦娘変わり。

それが三年……

「艦娘変わりの時に起こる症状は艦娘によつて違うけれど、あの子はあんな感じ。この寮に住む仲間たちは気にしていないみたいだけど、あの子はそのせいですつと孤独感を感じていたみたい。ずつと一人で、学校にも行かず毎日何処かに抜け出していたとか」
女王陛下が優雅な動作で紅茶に口を付ける。

「私がここにきたのは一年ほど前。ほら、私とあの子、髪の色が同じでしょ？そのせいなのか私にはとても懐いてくれたの。私も……Admiralを亡くしていたから……私がここにきたのはせめてあの人が生まれた地を見てみたかっただけなのだけど、ふふ

ふ、とても素敵な友達が出来たわ」

友達、そうか、風子をそう呼んでくれる人が居てくれたのか。

心の何処かで、風子が置かれてるであろう状況に何も出来ない自分に苛立っていたが、どうやらそれは俺の考え違いだったようだ……ん？

「あいつ、やたら飯を俺にたかってくるんですけど、この寮で食事は……」

「当然きちんと出されてるわ、ふふ、あの子は貴方と食事をしたり、貴方の側に居られる事が嬉しかったんでしょね」

おいおい、俺はあいつのために二人分の食料をせっせと確保していたと言うのに。

……まあ、あいつも手伝ってはいたが。

「でも一ヶ月ほど前からまたあの子が抜け出すようになって、心配してたの。それで聞いてみたらあの子、ほら、あの写真立て、あそこに写ってる私の Admiral……あの人を何度も指さすものだから、それであの子が Admiral……提督をみつけたんだって、わかったの」

「俺があいつとあったのも一ヶ月ほど前です」

女王陛下は少し寂しそうに笑う。

「肩の荷が下りた、そういうわけではないけれどホツとしてるわ……私は近々除籍日を迎えることになっているから」

「それは……」

『除籍日』 老いない艦娘がその生命を終える日。

寿命が尽きる艦娘は、ある日唐突にその日がわかるという。

「なので数日中にあの人が眠る祖国に戻ろうと思つてたの。だからそれまでにあの子の Admiral に会つておきたくて。ふふふ、でもまさか貴方があの子の Admiral だったなんてね……」

全く因果なものだ、まさか風子の友達が、俺と因果の深いこの人だったなんて。

「その事を風子には……」

「言つてないわ、ここを出ることは言っているけれど、除籍日の事を受け止めるにはあの子はまだ幼いから」

近しい人の死、それを受け止めるのは例え大人であろうと辛いものだ。

風子がそれを受け止められるような年齢になったら、教えてあげて。

口には出さなかったが、そう言いたげな様子で女王陛下は俺に微笑む。

俺は何も言えず紅茶に口をつける。

優雅な味わいだ、なぜか少し苦く感じた。

「俺に、風子の提督がつとまるでしょうか？」

「ええもちろん、何よりも提督で有る事が重要なものだから」

俺の弱音に、女王陛下は間を置く事無く断言した。

「ですが、過去はともかく今の俺は日々を生きるだけで精一杯のホームレスです。そんな俺が風子に出来る事なんて……」

「ふふふ、それは心配いらないわ。でも、そうね。参考になるかはわからないけど、よければ私の Admiral の事を話してあげる。いいえ、是非聞いてくださる？」

自虐と真実が入り交じった俺の言葉を聞いて、女王陛下はまるで子供に絵本を読み聞かせるような風に話しました。

自分がどのように生まれてどのようにして自分の提督と出会ったか、そしてどう感じて、どのように日々を過ごしたか。

艦娘としての価値観や考え方は、少し俺には難しい部分もあったが、風子以外の人間と久しく話していなかった俺には新鮮で、少し楽しくもある。

そして話をして感じたのは、この女性が聡明で優しく、またユーモアにもあふれた魅力的な人だと言う事。

もつとも、美化された思い出というか、憧れの想いで見てしまったところは否定出来ないが。

だがそれを差し引いても、やはり元ライダーの俺には眩しい人だ。

少し失礼だとは思ったが、興味がわいた俺は少し意地の悪い質問を試してみる。

いや、むしろ無礼にあたるだろう、だがそれでも聞いてみたい事でもあった。

「失礼かと思うのですが、心残りは無いのですか？」

その言葉を聞いて、赤毛の執事の眉がぴくりと動く。

だが女王陛下は赤毛の執事をたしなめるように、すつと手を上げ口を開く。

「勿論沢山あるわ、あの子の行く末を見守れない事や、家族や友達の事。あとは彼女、A

rk Royalの提督がまだ見つかってない事なんかも」

クスリと口に手を当てて笑みを浮かべる女王陛下。

赤毛の執事、Ark Royalと呼ばれた女が少し気まずそうに軽く咳払いを一つした。

「でもそれらは、冷たい言い方かもしれないけれど私が居なくてもいい問題なの。私は私の物語を生きたわ、そして物語には終わりが必要。貴方も貴方の物語があるはず、それをあの子と紡いでいって欲しい、そう願ってるわ」

俺の物語か、そんな物はとうに終わってると思っていたが。

この人にそう言われるとそれでも無いのかもなど、少し思ってしまう。

俺の、物語、か……

だが風子という艦娘になりきれない艦娘と、元レーサーのホームレスの物語なんて誰が読みたがるというのか。

そんな事を思い、ふと気になる疑問がわいた。

「あれ、そう言えば風子は一体何て名前の艦娘なんで？」

「ああ、それはね……」

女王陛下が口を開きかけた時、部屋の扉が開き、風子が飛び込んできた。

「こらーちゃんと髪の毛拭きなさい!!」

「……!!……!!」

続いて水色の髪の少女がそう叫びながら、バスタオルを持って入ってくる。

逃げる風子、追う水色の髪の少女。

俺の周りをぐるぐると回る。

女王陛下は困った様子の俺をチラリと見て、人差し指を口に当て……

秘密です。

と、言わんばかりにウインクをした。



翌年、異変が起きた。

俺は病人のように顔色が悪くなり、自分で見ても一目で精神的に参っているとわかっ

た。

話も出来ず、サインをねだるファンに脅えるほどに……

タフさが求められるレーサーにあるまじき事だ。

何せ常日頃から接触なんて日常茶飯事の、時速320キロのレースに挑まなきゃならない。

と言つてもレーサーの大半の者は半シーズンで消え、十年以上走り続けられる者は僅かだ。

安全性などあつてないようなもので、危険は常にあるからな。

結果として多くの者が去つて行く、俺もそうなる寸前だった。

休養し、時間を掛けて問題を解決すれば良かったのかもしれない。

だが当時の俺には出来なかつた、よく解らない恐怖に襲われて、ユウリーと戦わないといけないって強迫観念にとりつかれていたんだと思う。

そんな俺をみて、あの人は俺を殴って胸ぐらを掴みこう言った。

「知つての通りバイクのレースが熱狂を生むのはな、他のライダーと戦うスポーツだからだ。常に死と隣りあわせで生を謳歌してるライダーを見るとアホどもは生きる喜びが湧くんだろう。だがレース以外の時は自分と戦え。競争相手に、ましてやユウリーなんぞに気を取られているようでは極限の走りは出来ん。いいか、何にびびってるかは知

らんが恐怖心は乗り越えるしか無い、だから戦え、戦い続けろ、死んでからでも出来る事は、死んでからしろ!!」

無茶苦茶だった、でも当時の俺にはそれが本当に効いたよ。

そして今更思った、ああ、この人とならユーリーに勝てるなって。

ユーリーは確かにすごい、世界タイトルを数多く獲得し、バイク界にも貢献した。

だから尊敬されて当然だ、おまけに彼が誕生した街では聖人みたいにあがめられる。

でもこの人にすれば神じゃ無いんだ、なら俺にとつてもそのはずだ。

だから、だからこそそれに挑む為にマシンと肉体を極限まで鍛え上げ、命を削り挑み続けるんだ。

俺の肉体と技術を磨き、最高のメカニック達が研究し、そしてこの人が居れば……

勝てる、そう、思ったよ。

だから勝つて俺と、そしてこの人の夢を叶えようって。

仲間と自分の夢、何故走るのか、どうして戦うのか。

パズルのピースみたいにならばらだつた色んな物がはまった気がした。

その時かな、ようやく俺は本物のレーサーになれた気がしたよ。

□□□□□□□□

それから二日後の夕方。

俺のダンボールハウスにとんでもない客が来た。

「貴方は……」

「あの子は、ここに来てない?」

まさかの女王陛下が、ダンボールハウスのある橋の下にお越しになった。

どうしてここが……まあ、多分風子が教えていたのだろう。

「いえ、今日は見てませんね」

内心どきどきしながら、俺はそう伝える。

「そう……実は私の除籍日の事がばれてしまつて……ちよつと喧嘩をしまつたのよ。貴方も艦娘なら提督のために一人でがんばりなさいって、私なんて事を……」

「奥様違います、私が安易にその話題を口にしてしまつたためです」

かなり後悔している風な表情の女王陛下。

赤毛の執事もかなり辛そうな表情だ。

「あの、みつけたら直ぐ艦娘寮に連れて行きますんで」

「いえ、私たちはもうこの街を発たねばならないの。明日の十五時に、海護市から出発す

る船に乗るためには今から出て夜行列車に乗らないといけないから」
海護市、遠い。

ここから数百キロ以上離れた場所だ、確かに列車でそこまで行くには今から出ないといけないだろう。

「心残りはあつても、悔いは残さないようにと思つてたんだけど……いえ、何でもないわ」

様々な意味でこれから旅立つ女王陛下は、手のひらを見つめながら後悔を振り払うようにそう呟く。

「どうかあの子の事、よろしくお願いするわね」

女王陛下と、赤毛の執事までが俺に向かつて頭を下げる。

俺は慌てて口を開く。

「あつ、頭を上げてください……俺もアイツの提督なら、その、面倒はちゃんと見ますから」

なにが面倒をみるだ、こんな俺が誰の面倒を見れるというのか。

それでも言わずにはいられなかった、そんな俺の言葉を聞いて女王陛下は微笑む。

そして去って行つた。

やりきれない気持ち、俺はダンボールハウスに戻り寝転がる。

何もやる気が起きなかった。

「クソッ！」

思わずそんな言葉が口を突く。

そうさ、今の俺に何が出来ると言うんだ……



永遠の王者は居ない。

最速を目指し、現れては消えるライダー達。

何十年以上にわたり速度狂のライダー達は同じ夢を見てきた。

KanmusuGPでチャンピオンになること。

その年の俺は極まっていた。

それに今年俺がなる、そう確信できる程に。

そして恐らくこの年を逃せばユーリーには勝てない。

そう思える程に研ぎ澄まされてもいた。

その頃の俺はバイクには魂が宿っていると感じてた。

だから人間みたいにバイクによく話しかけてたよ。

我ながらアホみたいだけど「よう、今日の調子はどうか？」ってな風に。

実際の所、乗ってるバイクは恋人も同然だった。

バイクの発明者は思わなかっただろうな、俺たちがこんなにも夢中になるとは。

男は女が好きだが、それ以上に男はバイクを愛してる、間違いない。

チームあつてのライダーだが、いったんレースが始まればバイクと二人つきりだ。

コースの上ではバイクと一体になって楽しむ。

「楽しむのが先、勝つのはその後でいい」

あのユーリーの言葉が、ようやく理解できたと思えたよ。

成すべき事、成したい事、そして、走ると言う事。

そのときの俺はその全部がかみ合ってた。

その証拠に、開幕から俺はすべてのレースで自己ベストタイムを出し続けた。

だが逆にユーリーはその年不調だった、と言ってもポイントはトップだった。

いや、不調じゃ無い、恐らく俺がユーリーに迫ってたんだ。

つまりユーリーの速さに俺が並びつつあったって事だろう。

ユーリーは絶対王者故に追い詰められる事になれていなかったのかもしれない。

最終戦の一戦手前、意外な展開が待っていた。

ユーリーの転倒によるリタイアだ。

極めてミスが少ない者が王者になる、故にユーリーは王者だった。

それは一つの真実。

だが勝負は水物でもある、それを証明した戦いに思えた。

結果、俺はユーリーに十五ポイントリードを取りトップに立った。

そしてついに迎えた、最終戦にして決勝当日。

トップでゴールしなくても優勝の可能性がある、圧倒的有利な順位。

長年の夢だったチャンピオンの称号が目の前にある最後の戦い。

追い詰められた絶対王者ユーリーと、その王座の篡奪を目前にした俺。

そんな俺たちに熱い視線を注ぐのは二十万を超える観客、テレビ越しに見守る世界中の人々、そして憧れの艦娘であるウォースパイト様。

これ以上無いほどの熱い状況だ、正に人生最大の大舞台。

そんな状況だというのに、あの日俺が感じたあの気分、正直嫌な感覚だった。

うまく言えないが『今から重大な事が起きる』そう言う感覚だ。

よく解らない感覚を抱えながら、俺はスタートを切った。

そして驚愕する事になる。

その日のユーリーの走りは凄まじいの一言だった。

まるで彗星のようで、圧倒的な走り、速すぎて光の帯に見えたよ。

嫌な感覚を押さえ込み、俺は必死に食らいつく。

確かにユーリーは神じゃ無い、だがそれでもユーリーは倒すべき夢だ。

今日が最後だ、今日が人生最後の走りだと言い聞かせながら、俺は湧き出る闘志を爆発させ限界までスロットルを開いた。

バイクがそれに応え加速、ユーリーに食らいつく。

だがやはり、嫌な感覚が消えない、なぜ？

レースは危険か？だとしたら原因は何だ？

一つ目はマシンのトラブル。

二つ目は走行環境的な要因。

そして三つ目、最も一般的なのが人為的ミス。

例えばタイヤはレース前に八十度まで高められ、レーサーが百度まであげる。

そうするとタイヤにノリのような粘りが出て、地面に吸い付く。

結果グリップが増し、加速やコーナリングの性能が増す。

故にタイヤが温まるのを待たずに急なコーナリングをした場合、転倒する可能性があ

る。

冷えたタイヤでの転倒は恐ろしい、突然起きるからな。レンチで急に頭を殴られるようなものだ。

当然レーサーはその事を熟知している、それ以外にも様々なミスの可能性をつぶす。過去の事故を調べ、原因を究明し、それらを起こさないように日々研鑽を欠かさない。またレーサーとして成功するには、強い自己保存本能と、自信が必須だ。

そもそもがレーサーというのは希有な種類の人間なのだ。戦闘機のパイロットのような反射神経と冷静さを持つ。

厳しい鍛錬と試練に日々耐え、勝負の一瞬にすべてを懸ける。

だがいかにライダーが優秀でコースや装備が進歩しても、やはり、事故は……避けられない。

一人で転倒する時はせいぜい手の甲を骨折する程度で、滅多に重傷は負わない。だが集団走行時だと転倒者は他のライダーにひかれる恐れがある。

そして……

場所が悪すぎた、突っ込みすぎて無茶した周回遅れの複数人の集団が転倒。しかもトップスピードで走る場所だ。

もう無茶苦茶だった、俺も含め誰もがぶっ飛んだ。

俺に勝つためには一位でゴールする必要があった故に、誰よりも飛ばしてたユーリー。

彼は転倒したライダーのバイクに乗り上げ、ひときわ高く遠くに吹っ飛んだ。

いつものユーリーなら避けられたかもしれないのに、いや、分からないか……

だがよりにもよってユーリーが吹っ飛んだ先は、消火用の車のガソリタンクだった。

爆発が起きた。

騒然としたよ、俺は何とか起き上がってユーリーが吹っ飛んだ方向を見た。

ごうごうと紅い炎が立ち上った。

よりにもよって一番消火性能が高い車が使えない状況で起きた、最も恐ろしい爆発事故。

俺は以前襲われたよく解らない恐怖が何だったのか、少し分かった気がした。

自分が死ぬのは耐えられる。

だが、その打倒が夢と同義になっていたユーリーが死ぬのは？

重大事故の発生を知らせる赤い警告旗が上がった。

この数年に死んだレーサーは四人。

そして今日また一人のレーサーが死んだ。

珍しい事じゃない。

KanmusuGPには毎年数十人のライダーが参戦し、大体毎年誰かが死ぬ。

偶々、今日死んだのが世界王者だったってだけの事だ。

そして王者は永遠の王者になり。

俺は二度と王者になる事も勝つ事も出来なくなつたとき。

そうさ、そうなんだよ。

俺の物語はそこで終わったんだ。

□□□□□□□□

気がつくとも朝になっていた。

俺は眠っていたらしい。

結局あの試合は無効試合となり。

俺はポイントトツプで優勝。

だが辞退した。

優勝はユーリーだ、俺のその言葉に異を唱える奴はいなかった。

別にセンチな気分から出た言葉でも、受けようと思つて出た言葉でも無い。

ただ本当の事を言っただけだ。

結局その年の王座は空席、そして俺は違約金代わりに貯金やバイク、持っていた何もかもを押しつけるようにチームに渡し、レーサーをやめて姿を消した。

もうずいぶん昔のように思う。

ふと思ひ立って、ある場所に向かう。

目的の場所、俺のセカンドハウスであり、川が増水した時の避難先でもある、公園の洞窟をもした遊具の中。

そこで風子が膝を抱えてうずくまっていた。

「おい、何してんるんだ、こんな所で」

「……」

俺の声に反応して、風子が顔をあげる。

ずいぶん泣いたらしい、顔がぐちゃぐちゃだ。

「おまえ、喧嘩したんだってな。悲しそうな顔してたぞ、あの人も赤毛の執事も。気持ち
はわかるけど良いのか？このままあの人と別れてしまっても」

「……」

風子は何かが許せなかったんだろう、何かが、自分の中の感情がなんなのかわからず、
翻弄されて。おまけに風子はそれを言葉に出すことも出来ない。

思い出す、美しい金色の髪のある人、茶目つ気たつぷりにウインクした表情や、最後
にあつた時の悲しそうな表情。

俺と出会うまで、いや、出会った後もずっと風子の心の拠り所になってくれた優しい
女性。

恐らく実の子供のように優しく、時に厳しく接してくれていたんだろう。

だからこそ、感情があふれたんだろう、だからこそ……

「あの人、お前と同じ色だって自分の髪を嬉しそうに、触りながら言ってたよ。あとお前をあちこち探し回ったのか俺の所まで来て、お前の事を頼むって、最後に頭まで下げたな……」

そんな人と、喧嘩別れのまま最後を迎えて……

「もう、二度と会えないんだぞ、それで良いのか？」

「うっ……」

風子が必死に首を横に振る、そりやそうだ、良いわけが無い。

会いたいが決まってる、会って最後にお別れを言いたいが決まってる。

だが俺に何が出来る？

風子がネグレクトを受けてるかもしれないと思っていた時だって、俺は何もしなかったし出来なかった。

また、結果的に何事も無くてよかったねってのを期待するのか？

そもそもなんで俺はこんなことを言ってるんだ？

こんな事を言って、風子から何を引き出そうとしてるんだ？

「……会いたいか？」

何を聞いてるんだ俺は、俺は、俺は？

誰のため何のため、何故、どうして。

何故俺はユウリーが死んで走る事をやめたんだ？

引き留める仲間やあの人の手を振り払って、逃げた先に何があった？

俺はどうしたかったんだ、なんで逃げたんだ？

「……………あゝあゝい……………だ、ぎぎ!!」

必死に言葉を絞り出す風子、ぐちゃぐちゃの顔から涙がこぼれ落ちる。

何なんだ俺は、あの日から逃げて眠って、逃げて眠って、逃げて眠って。

今日が人生最後の日になれば良いなと思いつながら日々を繰り返す。

その繰り返しの中で体も心も疲弊していき、こんな事しても意味は無い、間違っていると思いつつも誤魔化して。そしてまたそれを繰り返す、毎日を無意味に惰性に生きて。

俺は何を、どうして、何を、何かを？

自分の感情が分からない、風子と違っていい大人だというのに自分が何をしたいくて、

何をしなきゃいけないくて、何よりもそれらを決定する自分の感情が分からない。

ぐしゃぐしゃに涙を流す風子から目をそらし、地面を見て、空を仰いだ。

雲一つ無い空にはすでに朝日が昇り、今日という日がとつくに始まっている事を告げている。

ふと、俺たちが居る遊具の中に、そんな混沌とした自分の中の感情とは無縁の優しい風が、吹き抜けた。

「わかった、任せろ」

思わずそんな言葉が沸き出る。

自分で言っておいて、思わず鼻で笑ってしまった。

何が任せろだ、今の俺に何が、だが……

『俺もアイツの提督なら、その、面倒はちゃんと見ますから』

でも約束してしまったんだ、よりにもよってあの女王陛下と。

レーサーが女王陛下との約束を破れるかよ。

だから少なくとも、今の俺には理由がある。

俺は風子の手を掴み、歩き出す。

そして道路の真ん中に立って、ちよんど走って来た車を止めた。

「アホツ!!死にてえのか!!」

「先輩、やめてくださいよ……」

煙草をくわえた男が窓を開けて声を上げ、運転席の眼鏡の男がたしなめる。

「すまない、連れて行ってほしい場所がある」

「ああ!?!何いってんだてめ……えっ?あ、あんた、島、プロレーサーの島か!?!」

煙草をくわえた男が驚愕の表情を浮かべる。

「島? 誰ですかそれ……それより私はそちらの少女の方が気になるのですが。もしかして誘拐……」

「アホか!!ユーリーに勝利しかけた……いや、事実上勝利した世界で唯一ただ一人の男だぞ?!お前親に何ならつてんだよ!!」って、それより島さん乗ってください、どこへもお連れしますよ!!」

「いや先輩、リベッチオさんの店で朝食を食べる予定が……」

「うるせえ!!そもそも朝からイタ飯とか気が乗らなかつたんだよ!!そんな事より島さんを後ろに乗せて走る方が重要だ!!」

はは、意外と有名人だな俺も。

捨てたはずの過去の栄光、だがそれが役に立つなら今はありがたい。

「マジか。今、後ろに島が乗ってるよ……」

「いや、まあ、いいんですが、少女がこまつてるなら……」

やたら興奮する煙草をくわえた男と、ブツブツと何か呟きながら運転する眼鏡の男。

風子の手を握りしめながら、後部座席に乗り込む。

向かう先はあそこ、あの場所だ。



個人所有サーキット場『KURE』

個人所有サーキットとは名ばかりで、複数のスポンサー（某コングロマリット等）からの莫大な援助を受け、広大なサーキットのみならず、巨大なモーター関連のショップやバイク、車の修理や開発を行う研究施設。さらには教習所や養成所、果てはそこに住む人間達の施設まで兼ね備えた一つの王国だ。

国内、いや世界でも有数の走り屋たちが集う速度狂い達のメッカでもある。

そして……あの人がいる場所。

「今度会ったらサインください、今度で良いですよ、急いでるんでしょ？」

「何か困った事があつたら何時でも言ってくください、お嬢さん」

俺はそう言つて笑う二人の男に礼を言つて別れを告げ、サーキット場の正面広場を進む。

たまり場になっているレーサーや、走り屋、バイク乗りたちが口々に俺の名を呼ぶのが聞こえた。

そして広場中央、簡素な椅子とテーブル。

広場にあるバイクや車が見渡せるあの人の特等席。

「虎瀬オーナー、ここで一番速いバイクを貸してください」

突然現れた俺の前に、この王国の王でもある虎瀬オーナーが杖をつきながら立ち上がる。

冷たい風貌で黒髪の長髪を後ろに束ねた壮年の美丈夫。

過去のモータースポーツ界において闘争の化身と呼ばれたレーサーだったが、事故で片足を失いレースに出ることを断念するも、こうして王国を作り上げチームのオーナーとして再びモータースポーツ界に挑んだ、いや、挑み続ける人。

その姿と、あまりに苛烈な気性故に、王と言うより魔王と呼ばれる事の多い人。

この人の、失った足の代わりになって俺が世界王者になる……

そう思った事も有ったっけかな。

「なんだ、ひつたくりでもする気か？」

そんな俺に、あの日以来ハンドルを握れなくなり、絶望して何もかも、すべてを捨てて逃げ出した俺に……冷たく、苛烈で、でもだからこそ格好いいあの時と変わらない様子で、吐き捨てるように問う虎瀬オーナー。

「バイクを物盗りの道具に使うような酔狂な性格はしてませんよ」

「ふん、俺のバイクを正面からよこせと言うようなアホは、今も昔も貴様ぐらいだ」

誰よりも苛烈で強烈な虎瀬オーナー。

そんな虎瀬オーナーに当時唯一食らいついたのが俺だった、何もかもが懐かしい。

「虎瀬オーナー……」

「貴様は今までなにをしていた？」

俺の言葉を遮り問いかけてきた虎瀬オーナーに、俺はただ、一つの真実を淡々と語る。

「毎日野宿してました、魚取ったり、山菜採ったり、時にはゴミをあさったりなんかも

あと空き缶って結構良い金になるって知りましたよ」

「……なんだそれは、まるで野良犬、いや、正に負け犬だな」

虎瀬オーナーが冷淡な微笑を浮かべる。

だが直ぐに冷たい目で俺を見て、続けて問うた。

「必要としているのはわかる、だがな負け犬。それで何に使う？何のために走る？」

「自分がやるべき事をやりに……いえ、そんな格好いいものじゃないですね。あれです、昔惚れてた女の旅立ちを見送りに行きたくて。あとはまあ、ついでにコイツも連れて行つてやろうかなと」

後ろで、俺の服の裾を握っていた風子が見えるように立ち位置をずらす。

虎瀬オーナーはちらりと風子を見て、再び俺をにらみつける。

まるで俺のすべてを暴き出すような、鋭すぎる目つき。

永遠にも思えた時間が流れ、ようやく虎瀬オーナーが俺から視線を外し、目を閉じて呆れたような様子で口を開く。

「女か……陳腐な理由だが、負け犬が走る理由としては上等すぎるな」

そう吐き捨てた虎瀬オーナーの顔は何故か……満足そうだった。



「列車では間に合わん、へりも無理だ、艦連軍の基地から近すぎるし、そもそもそんな物

すぐには用意できない。確かにバイクで高速に乗り、車を避けつつ平均時速230で走り続けられれば間に合う可能性がある」

俺たちは地図を広げて、海護市の港がある目的地までの距離を計算し、十五時までに到達可能かをはじき出す。

「ふん、勝負勘は鈍つてないようだな。俺を頼つたのは正解だ、喜べ、その条件を満たせるバイクが一台有る」

そう言つて虎瀬オーナーの部下が一台の深青のバイクを持つてくる。

驚く程スマートな流線型のマシン、だがその内部にはレギュレーションぎりぎりまでチューンされたすさまじい爆発力を生む鋼鉄の心臓が備わっているのを俺は知っている。る。

何故ならそれは俺と黄金の時代を駆け抜けた、恋人と呼んだバイクだったから。

そのフルオーダーメイドのバイクに名前は無い、虎瀬オーナーの意向だ。

バイクはただその性能こそがすべて、速さのみがその存在証明。

「何時でもレースに出られるよう整備してあつた一台だ。無論ナンバープレートやヘッドライト、テールランプ、ミラー何て上等な物は付いてない。こいつで走れば間違いなく免許を、そして貴様にとつて命と同じ価値を持つライセンスも取り上げだ。それでも走るか?……ククツ、愚問だつたな」

俺の目をまっすぐ見て、質問を取り消す虎瀬オーナー。

虎瀬オーナーは何人かの走り屋を集めて、地図を指さす。

「速度を上げて高速に乗る前に、この一般道の直線を封鎖する必要がある。時間もそうだが、タイヤウォーマーが使えん以上、タイヤを加熱するのはこししか無い。お前達、合図をしたら信号を操作してすべて赤に変えろ」

信号機を操作する鍵を虎瀬オーナーの部下が走り屋達に手渡す。

何でそんな物を持つてるかなんて聞かない、聞く必要も今は無い。

鍵を受け取った走り屋達がうなずく。

俺のわがままのために危険を冒す男達に俺は何も出来ない。

申し訳なさそうな表情の俺を見た男達が笑う。

「島さんの走りが特等席で見られる、そのためなら安いもんだぜ」

そう言って、男達は持ち場に向かって走って行った。

「十三分待て、公道用のタイヤに交換して、後ろにちびが乗れるようにしてやる。あとガソリンだ、スタンドで給油してる暇なんて無いぞ、そのちびに背負わせる。無くなったら継ぎ足せ、それも用意させる」

慌ただしく虎瀬オーナーの部下達や走りや達が動き出す。

見覚えのある、かつてチームの仲間だったスタッフが、当時俺が身につけていたレー

シングスーツを持ってきた。

バイクと同じ色の深青のラインの入った、黒を基調にしたヘルメットとスーツ。

こんな物まで、まだ残してくれていたのか……

目頭が熱くなるのを押さえ込む、俺に涙を流す資格は無い。

そんなみんなの思いを踏みにじって、俺はこれから身勝手な俺の理由で走るのだから。

「虎瀬オーナー、この子の分も……」

「そいつは艦娘だろう、ならヘルメットもスーツも不要だ。喜べ、転けたら死ぬのは貴様だけだ」

そう言つて虎瀬オーナーは不敵に笑う。

ああ、そう言えばそうだったな……

「分かつてると思うがレースコースと高速道を一緒にするなよ。それ用にブレーキングも調整してやる。走りながら感覚を掴め、高速に乗るまでにだ。あと……忠告しとくが、このバイクは当時よりスペックが上だ。運転する奴の腕は知らんがな」

「それは……心強い」

俺の自虐の混ざった言葉を聞いて、虎瀬オーナーが険しい顔をする。

「お膳立てはしてやる、後は好きにしろ。だがバイクは必ず返しに来い。もしちゃんと

返しに来れたら……今度こそあのとき振るはずだったチエツカーを振ってやる」

虎瀬オーナーは俺の顔をその大きな両手で挟み込み、力強く、あの日のようにそう
言ってくれる。

風子が俺の手を強く握りしめるのを感じた。

十六歳の頃を思い出す。

ただ走ってるだけで何の結果も残せなかったあの頃。

初めてのレースの世界は子供の俺には大きすぎた。

すごいプレッシャーを感じて、何度もクラッシュ、そして何度も吐いたな。

「……はい、必ず」

だけど、幸い今の俺は子供じゃ無い、だからきつと出来るはずだ。



高速に乗るための一般道の直線、その開始地点で俺は待っていた。

久しぶりに会って乗った恋人は相変わらずの力強さで、押さえ込むのも一苦労。

レースから離れていた俺には、ここまで運転してくるだけでも精一杯だ。

周りには数多くのライダー達。

彼らは俺たちを守るために一緒に走る、まあ野次馬も多いだろうが。

艦夢守市の警察は優秀だ、事態を重く見れば憲兵だってやってくる可能性がある。

俺たちが走り続けるために、このライダー達はそれらを引きつける役目を負っている。

損な役目だ、救えない、だと言うのに全員志願者というから信じられない。

レースの時、周りのライダーはすべて敵だったから、この状況は違和感がひどい。

……だが、嫌な気分じゃ無い

準備が完了したのか、ピルの上にいる人員が赤色の信号弾を打ち上げる。

一斉に目で見える先までの信号が赤に変わりはじめた。

もう後には引けない。

ライダー達が一斉にアクセルを吹かし、すさまじいエンジンの爆音が辺りに響く。

遅れてバイクの群れが発する熱が辺りを包み込んだ。

その音を聞いて、後ろの風子が俺の腰をぎゅっと握りしめる。

安心しろ、こいつらは俺とお前を守る仲間達だ。

そして絶対、絶対に俺がお前をあの人の上に送り届けてやる。

果せる根拠の無い誓いだ、平均時速230キロ、一般道で出し続ける速度としては狂

気の沙汰。

レースを離れてずいぶんたつ、技術、体力、自信、夢、そしてユーリー。

あの頃にあったものは殆ど無い。

でも、だけど。

背中に感じる重み、あの頃には無かったもの。

それが今の俺にはある。

負け犬のレーサーと、艦娘になりきれない子供。

半端者が二人。

だけど俺たちは二人なら一人前だ。

何故ならお前がいるから俺はこうやってもう一度ハンドルを握れる。

「先に言っとく。お前のおかげでもう一回走りたくなかった、闘志がわいたって言うのか

な……俺をここに戻してくれたのはお前だ」

後ろを振り返ると、風子が不思議そうな顔でこちらを見ていた。

「なんでもない、独り言だ……もう一度言うぞ風子、絶対俺から手を放すなよ?」

「……!!」

小さな手で俺の腰にしがみつきながら、力強く返事の意味を込めて俺の背中に何度も頭突きをする風子。俺はそれが何故かおかしくて「痛いよ」と言いながら笑う。

そして今度はバイクに向かって話しかけた。

「よう、今日の調子はどうだ？」

吹かした音で、彼女が『過去現在未来どの瞬間よりも最高よ!』と答えたように聞こえた。

なんだそりや、はは、俺もいよいよおかしくなってきたな。

だが俺はそれが楽しくて、また笑みを浮かべる。

レース前には感じた事の無い、ひどく落ち着いた気分だった。

深呼吸、晴れ渡った青空を見上げる。

様々な気候の土地を転戦し、世界中の空の下で戦った。

だと言うのに、こんな青い空は初めて見る気がする。

「ああ、今日はいい天気だなあ」

思わずそんな言葉がこぼれた。

視界全体に広がる青空が身体中に染み渡り、心は穏やかなのに腹の底が熱くなる。

ひたすら綺麗な空だった、きつと俺は死に際にこの空を思い出すだろう、そう思える程に。

周り数台のバイクの暖気が終わったのか、エンジン音が変わったのがわかった。

名残惜しさを感じながら、視線を前に戻す。

直線道路を走っていたすべての車が消え、準備が整う。

打ち上げられる青の信号弾、正面の信号が青に変わった。

さあ行くか、今日は人生最後の日だ。

『し負けま犬』と『か駆逐艦：ぜ島風』

停止状態からのレースマシンの加速力は、文字通りかっ飛ぶようなものだ。接地面積の小さいレースマシンだが、エンジンパワーは途方もなく大きい。

ライダーとクルーの仕事は、いかにマシンの最大のパワーを引き出すか。

高価なプロトタイプマシン、レース専用の特別仕様。

エンジン出力は220馬力、重量約160キロ。

搭載された最小限の機器が最大のパフォーマンスを生む。

条件を整えば、例えば直線の長いコースならこのマシンの限界速度は時速340キロに到達する。

四輪最大のモータースポーツでも最高時速320キロだと言うのに。

俺たちの乗ったバイクは十秒たたないうちに190キロまで加速。

その速度を維持したまま、艦夢守市の中央道路を駆ける。

引きはがされそうな風圧を、ただひたすら気合いと筋力で押さえ込む。

加速のGに肋骨がきしむ、まだ190キロだといふのになまった俺の体は早くも悲鳴を上げた。

だがこんな俺でも、かつてはユーリーに迫った男だ。

まだまだこれからだろ、そう体に言い聞かせる。

俺たちを追う他のライダー、だが初動の時点で既に差が付いている。

だと言うのに彼らは食らいついてくる、さすがKUREのライダーどもだ。

信号を一つ越えるたびに、役割を終えた奴らの歓声が聞こえた気がした。

はは、まるでサーキットを走ってるみたいだな。

だが異変に気がついた警察車両がちらほら現れ始める、クソツ、やはり早い。

後ろに居たライダー達が、別の道に散ってゆく。

警察車両は一瞬悩んだ末、捕まえやすそうな少数のライダー達を追う。

ついてる、こつちを追う判断を下せる奴が乗ってたら危なかった。

高速に乗り、250キロまで出せれば四輪車両じゃ絶対に追いつけない。

何とか高速まで乗れば……

そう、一瞬気が緩んだ瞬間。

目の前に信号無視をした一台の乗用車。

一瞬で俺はかなり多くの観察と考察と判断を下した。

まず、避ける事が可能かどうか、避けたあと走り続けられるか、ブレーキは間に合うか、タイヤの温度は大丈夫か。

様々な選択肢と判断を積み重ねながら、頭の中で別の計算をする。

バイクは単純な乗り物に見えるが、実際は四輪自動車に比べかなり複雑な動きを求められる。

あれは動力学的に航空機に似ている、バイクの動きをそう分析する奴も居るほどだ。

実際レース用のマシンは飛んでるようなもので、バイクがコーナーに侵入し60度に傾く時

タイヤには二つの重力が働く。

航空機でも同じ事が起き翼をもぎ取ろうとする。

時速230キロでコーナーを曲がる時、地面に吸い込まれそうな感じになる。

本来はバイクに重力が働き倒れるが、スピードが速ければそれだけ遠心力が働く。

二つの力の釣り合いがとれるわけだ。

だから車体を傾けても転ばない。

コーナーでは外側に引つ張られる。

だから倒れないように内側に傾ける。

自転車でも同じだ。

バイクはずっと速いけどな。

そういつたことを考えながら。

俺は中央分離帯ブロックに乗り上げ、ジャンプした。

我ながらバカな判断だ。

乗り上げても事故が起こらないよう斜面がつけられ、等間隔に配置された低めの中央分離帯ブロック。とつさにそれを使いジャンプする判断を下すなんてな。

だがシーズンオフの間、レーサーは何をしてると思う？

答えは趣味と筋力増強を兼ね、モトクロス場へいつてるのさ。バイクで宙を舞うモトクロスは心身の訓練に欠かせなかった。

そして何より楽しい。

自分がバイクに乗るのが好きなんだと、実感できた。

てな訳で今俺は乗用車の上を飛んでる。

全く復帰早々ひどいスタントを要求してくるな!!

「!？」

着地の瞬間、風子が驚いたのか俺の腰をひときわ強く掴む。

お悪い悪い、大丈夫か？

しかしなんだな、なんだか色々思い出してきたな。

忘れていた色んな感覚が蘇る。

後ろを走っていたライダー達が歓声を上げるのが聞こえた。

まったく、俺はGPレーサーだったのにな。

まあ、タイヤも温まってきた事だ、そろそろギアを上げるか。

そして俺たちの乗ったバイクはさらに加速する。

散ってゆくライダー達。

最後までついてきたのは、まだ免許を取ったばかりの年齢の子供のようだった。

まるで十六歳の頃の俺のような、懐かしい目をしている。

そして彼もまた、俺たちのために警察車両を引きつけるために散ってゆく。

すまない、すまない、すまない。

感情を押し殺し、俺たちは走り続ける。

やがて無事直線道路を抜け、高速入り口ゲートを抜け、海護市に向かう直線の高速道路に出た。

もう俺たちを守ってくれるライダーは居ない。

だと言うのに、まだここから何時間もかけて走り続けなければならない。

風子の体力が心配……いや、それよりも俺の方が心配だな。

「……」

風子が心配そうに俺を見る。

不安か？俺もだよ……

だが走り続けるしか無い、大丈夫だ。

まだ今日は……終わってないからな。



それから俺たちは給油を挟み、走り続けた。

風子はよくしがみついている、平均時速220は出てたというのにだ。

艦娘変わり前とはいえど、艦娘はだてじゃないという訳か。

まったく、こっちはもうあちこちガタガタだつてのに。

だが、俺にも元プロレーサーという意地がある。

まだまだ、いや、もう少しでいい、耐えてくれよ俺の体。

途中何度も警察車両に追われたが、すべてを振り切る。

本当にこのバイクは当時よりスペックが上だ、虎瀬オーナーやメカニック達はどんな
思いでこのバイクを改良し続けたのだろうか。

……だめだ、考えるな。

今は走り続けろ、すべての清算は風子を、送り届けてからだ。

そうして自分の感情と身体を削りながら走り続ける。

ひどい負荷がかかっていると自覚していたが、だからなんだと言うんだ。

どうせこれが最後だ、最後なんだ。

何度も言い聞かせる、身体に、バイクに、そして心に。

そうやって走り続け、やがて目的地まで残り百キロを切った時だった。

後ろからものすごいスピードで迫って来たバイクが、俺たちを追い抜き、六メートル
程前にピタリとつける。

一瞬警察の高速バイクかとも思ったが、だとしてもこのバイクに追いつけるはずが無
い。

そして……警察のバイクはあんな色をしていない。

緑色のバイクに乗った真っ白なレーシングスーツのライダー、見覚えがある。

緑のバイクは『芝刈り機』の愛称で呼ばれるバイク。

夕張重工最高のバイクエンジンを積んだ傑作機。

機体名『YBR—GP』

そして緑のラインの入った雪のような真っ白いスーツ。

そんな色のスーツを着るような奴はただ一人。

絶対王者ユーリー・タラソフ

「ユーリー!!」

思わず俺は叫ぶ。

俺を抜いて前に出たユーリー。

わかってる、あれは幻だ、俺がずっと追いかけてる奴の幻影だ。

わかってる。

ユーリーはちらりとこちらを振り返り、笑ったような気がした。

無意識に俺はアクセルを全開にする。

加速し続ける俺たちのバイクは、時速は250キロを超えた。

さらに加速、スピードメーターが260、270、280と上がってゆく。

だと言うのにユーリーは俺たちのちようど六メートル前を、ピタリと走り続ける。クソツ、あっちも加速してるんだ。

既に幻影だというのは頭から抜け落ちていた。

290……………300……………

この速度になるともはや普通の車やバイクでは到底たどり着けない領域。だと言うのに差はまだ縮まらない。

当然だ、奴が駆るバイクは夕張重工が心血を注いで作り上げた傑作機。

だが、それはこちらも同じ。

310……………320……………

すさまじい風圧と振動が俺を襲う、もはやこの速度では風景が認識出来ない。希にすれ違う車やバイクが、流星のように後ろへと飛び去ってゆく。

飛びそうになる意識を、朽ち果てたプライドにすがり、必死につなぎ止め。

悲鳴を上げ続ける身体を、絞りかすのような意志の力で動かす。

そんな極限の状況の中、レーサーとして忘れていた最後の感覚が覚醒した。血が沸騰しているこの感じ。

なのに、頭と視界は驚くほど冴え渡ってるこの感覚。

俺の目はもはやユウリーしか見えていなかった。

それ以外はすべてただの光だ。

いや、今やユウリーすら白い光に包まれている。

330……………340……………

限界速度に到達、だと言うのに感覚的にはまだ加速してるように感じる。

世界から音が消えた、もう頼りになる感覚は振動と狭い視界だけだ。

加速するにしたがって、ユウリーの白い光に緑が合わさったような色が混ざり始める。

ある国ではライダーの事を『ケンタウロス』と呼ぶ。

神話の中の半馬半人の生物だ。

ライダーも同じでマシンと一体化する。

恐らくユウリーは本当にバイクと融合を始めたのだろう。

光の帯を残しながら、さらに加速するユーリー。

だが奴に出来て俺に出来ない道理は無い。

俺は、俺は、今度こそユーリーに勝つ。

そして俺の物語を終わらせる、完結させる。

そうだ、あの日から、夢見てた、ただそれだけを。

ユーリーに勝つ、ただ、それだけを、夢に……

歯を食いしぼる、身体中が燃えるように熱い。

いや、きつと俺も光に包まれ燃えてるのだろう。

ユーリーのように。

そしてそこに到達するとは想定されてない数字。

………360

速度 計の針がそこ を指し ていた。

ユ ーリーと の差が

ついに縮まって ゆく。

……ああ、よ うやくか

待た せたな、ユ ーリー

あ のなこ こまで来 るの

大変だっ たんだ ぜ

やっと、おいつ いたよはは、疲れ たな

目の前の エメラルドグ リーンの光

伸ばす綺麗だな
その光に手を

ゆーりーに

てを…：

『それであの子が Admiral……』

『提督をみつけたんだって、わかったの』

すべてが光に包まれそうになった瞬間

そう……言った誰かに

汚い顔でぐちゃぐちゃに涙を流しながら

会いたいと叫んだ奴が居たという事を思い出した。

そいつは今でも俺の腰に、必死にしがみつき続けている。

急速に夢から覚めるような感覚。

背中に感じる感触が教えてくれる。

そうだった、俺たちは今、二人で走ってたんだったなど。

いつの間にか俺は、一人で走っていると思いついていたようだ。

先をゆくユーリーの幻影、それに向かって声を上げる。

「すまんユーリー!!俺たちのフィニッシュラインはそつちじゃないんだ!!」

高速の降り口を示す『海護市』の看板、速度を落とし降り口に向け左折する。

最後に一瞬見えたユーリーの幻影が、ふっと笑って消えた。

すまんユーリー。

勝負はまた別の日にしよう。



高速を降り、港を目指す。

既にガソリンは殆ど無く、港にたどり着けるか怪しい。

いや、それよりもいよいよ本当に俺の身体の動きが怪しくなってきた。

少しでも気を抜けば意識が飛びそうで、身体ももう殆ど動かせない。

どうした、昔は一日中でも乗り続けられたと言うのに。ブランクがここまで酷いとはな。

幸い周りに警察車両は無く、農地に囲まれた平坦な道路なのでそこまでキツクはない。い。

だが、だからこそこでも距離を稼ぎたいというのに、俺の手は思うように動いてくれない。

ふと、先ほどのユーリーの幻とのレースを思い出す。

むしろあれが無ければまだ高速道を走り続けていた可能性が高く、下手をすれば意識を失っていたかもしれない。

そう考えれば、あのユーリーの幻は俺たちを引っ張ってくれていたのか。

……まさかな。

そう自嘲した瞬間、砂が散らばった道路の上を走ってしまい、バランスを崩して車体を倒してしまう。

完全に集中力が切れていたのか、普段なら絶対しないミスだ。

「っ!？」

バイクがスリップし、俺と風子が道路に投げ出される。

そんな状況でも、風子は俺を離さなかった。

はは、根性あるな。

俺たちは何度かバウンドしながら、道路の上を十メートル程滑り、止まった。

幸いスーツのおかげで俺は大きな怪我はなさそうだ、風子は当然無傷。

あまり速度が出てなかったからか、バイクは俺たちよりさらに十メートル程先に転がってる。

直ぐに出発しようと、必死に体を起こそうとする。

が、なぜか俺の体はびくりとも動いてくれない。

……おい待てよ、まさかこんなところか？

風子が心配そうに、俺をのぞき込む。

すまん風子、すぐ、直ぐ起き上がるから。

そう口に出したつもりだったが、声すら出てくれない。

そんな俺にしびれを切らしたのか、視界から風子が消えた。

ああ、そうだ、そうだな。

俺を置いてあの人の所に向かえ、大丈夫、もう、そう遠くないはずだから。

あの人に、お前の大切なあの人に、会って……

エンジンの焼ける、チリチリという音、いや、焼けてるのは風子の手か？

ばか、さつきまで走ってたバイクのエンジンだぞ、触ったら火傷するに決まってるだろ。

それでも風子は何とかバイクを立てようと必死にがんばっている。

おいおい、やめろよ、あの人に会いたいののはわかるけどさ、そんなに必死に……

『先に言つとく。お前のおかげでもう一回走りたくなかった、闘志がわいたつて言うのかな……俺をここに戻してくれたのはお前だ』

……いや違う、風子は俺のために必死になってくれてるんだ。

何故かそう感じた。

はは、なんだなんだ、これは提督だからそう思うのか？

だけどそれは問題じゃ無い。

そうだな、そうだ、俺たちでゴールしよう。

体が動く、どうやら転けた事による一時的なものだったらしい。

俺はゆつくりと立ち上がり、バイクを起こす。

風子が心配そうに俺を見上げる、大丈夫、まだ走れるよ。

口には出さず、ヘルメットのバイザー越しにそう目で伝える。

我ながら緩慢な動きでバイクにまたがると、風子は嬉しそうにバイクを這い上り、後ろに座った。

「……しかし、お前はそこが好きだな」

「……!!」

俺の言葉を肯定するように背中をたたく風子。

ついこの間と同じやりとり、だがもういぶん昔の事のようにも感じる。

さあ行くか、俺はセルスイッチを押し込む。

この動きだけは十六歳の頃から変わらんな、漠然とそう思った。

すこし遅れてエンジンが再び動き出す。

バイクが『もう、今度こそちゃんと最後まで走ってよね』と、ぶつくさ言いながら、渋々

エンジンをかけてくれた様な気がした。

わかってる、今度はちゃんと最後まで走るから。

そうして俺たちは再び走り出した。

農業地帯を通り過ぎ、山道に入り坂を上ると、やがて港を見下ろす場所に出る。

恐らくそれと思われる豪華客船の姿が見える、汽笛を鳴らし出港を告げていた。

「……………!!」

嬉しそうに、そして早く早くと言わんばかりに、俺の背中に頭突きをする風子。「飛ばすぞー！しっかり掴まってる!!」

最後の力を振り絞り、俺はアクセルを開けた。



近くの船着き場、そこにたどり着いた時には既に船は数百メートル先だった。

「うそだろ……………」

あまりのショックに脱いだヘルメットが手から滑り落ちて地面に落ちる。

ユリーに負けた時でもこんなに悔しくはなかった。

ようやく、ようやくこれたつて言うのに、ようやくゴール出来たというのに。

そうだよ、勝てなきゃ悔しいに決まってるんだ……………」

くそくそくそ!!

だが、風子はバイクから飛び降りると、俺を見てこれ以上無いような笑みを浮かべる。

そして、栈橋から海へと飛びおりた。

「おっ、おい!?!」

海上に着水する瞬間、風子の体を光が包み込む。

短かった金色の髪は一気に長く伸び、身長も少しだけ伸びた気がした。

さらに身につけていたオーバーオールがきえ、水兵の服装、セーラー服へと変わる。

そして、現れる艦装と呼ばれる装備。

水面に立つその姿は、過去世界を救ったとされる者。

かつて海を支配していた深海棲艦に戦いを挑んだ物。

最後の最後まで、人の為に戦い抜いた人類の救世主。

艦娘と呼ばれる存在。

艦娘変わりは、徐々にゆっくり起きると聞くが……

まあ三年も我慢してたんだ、こういうこともあるんだろう。

啞然とする俺を見て、風子は少し涙を流しながら、高らかに声を上げる。

「ありがとう提督!!戻ったら私の名前、教えてあげるね!!」

初めてちゃんと聞く彼女の声は、まるで青空に響く美しいカモメの鳴き声のようだった

た。

そして風子は、船へと向けて猛スピードで水上を走り出す。

「……バレバレだよ」

知ってるよ、知ってたよ。

だつてガキの頃から自分のバイクには、お前のステッカー貼ってたからな……

幸運を司る艦娘に縋りたくなる事もあるし、女王陛下に恋もするが、何よりもこの国のレーサーにとって魅力的な艦娘はお前だったのさ。

最速で戦場を駆け抜けた艦娘、御利益をあやかるとならこれ以上は無い。

俺以外のプロのレーサーでも当時は……いや、今でもか。

お前のステッカーをヘルメットやバイクに貼ってる奴がいた。

最速を夢見るレーサーたちが愛してやまない艦娘……その名は

「島風型一番艦、駆逐艦……島風」

船に向かいすごいスピードで駆けてゆく風子……いや、島風。

「やっぱ、はええな」

思わずそんな感想がこぼれる。

船の後ろのデッキから涙を流し、必死に手を振る女王陛下が見えた気がした。

そして島風も手を振り返す。

約束、果たしたかな……

後ろからサイレンの音が山程聞こえてきた。

ようやくご到着か。

「ようやく追い詰めたわ。もう逃がしはしないわよ！」

「やだ……マジ、センパイっ落ち着いて!？」

真つ先に到着したパトカーから降りてきた、艦娘と思われる水色の髪と緑の髪の二人の警官。

彼女達に抵抗はしないと示すように、両手を上げながら俺は言う。

まるであの日やり損ねた、勝者のインタビューに答えるような気分だった。

「お騒がせしてすみませんでした。俺はどうしてもらってもいいんですが……このバイク借り物なんです。悪いんですがこれだけは丁重に運んでもらっていいですかね？」

俺の言葉を聞いて二人の警官は『はあ?』と聞こえてきそうな表情を浮かべた。確かにこんな大それた事をしておいて、言う事じゃない。

インタビューの答えに失敗した気分だ。

あの日勝つてたら俺は何と答えたのだろう、いや、今はそれどころじゃ無い。

俺は何かもつと良い言葉は無いものかと考えを巡らせ、答えを探し空を仰ぐ。

視界に飛び込んできた空は出発前と変わらず青い。

が、特に良さそうな答えは浮かばない、参ったな。

ふと、汽笛の鳴る音が聞こえて海の方に目をやる。

そこでは、俺を提督と呼ぶ艦娘と、俺が憧れた艦娘が海の上で抱きしめ合っていた。



一発免許を遙かに超える速度でかつ飛ばした俺は、無事免許もライセンスも没収され、オマケに艦夢守市警察署の留置所にぶち込まれた。

だがどこかのオーナーが保釈金と罰金を払った上に、弁護士の手配までしてくれたらしく、なんとか刑務所には行かずにすんだようだった。

もう一生頭が上がないな……

そんなわけで税金の無駄である俺を何時までもいれておく留置所は無いと、あつさり追い出されたわけだが、何故か表の駐車場には虎瀬オーナーのバイクと、それに乗った島風の姿。

「てーとく、おつそーいー!」

「待たせたな、島風」

出迎えの島風の言葉に思わずため息と笑みがこぼれた。

島風も笑みを浮かべる。

しかし、このバイクはどういう事だろうか、確かにKUREのバイクだと伝えたはずだが。

まさかレッカー代の節約のため、自分で押して持って行けと言う事なのか?

「オーナーから伝言だよ、今度こそちゃんとフィニッシュラインを踏め、だからバイクは自分で返しに來いってさ!」

「本気か……」

だがそう言われたら……やるしか無いよな。

しかし免許が取り上げられてしまった俺にはこのバイクは重い。

「ほらがんばってー!」

バイクに乗ったまま、島風が急かしてくる。

せめて降りろよ……

「と言うか、お前よくしゃべるな。前とは大違いだ」

「えへへ、なんだか提督と話せるのが嬉しくって!!」

やれやれ、そう言われてしまうとどうにも強く言えないな。

俺はどうやら自分の艦娘には甘いようで、黙ってバイクを押し始める事にした。

日射しが照りつける、熱いったら無い。

そして何より人目がすごい。

周りの人間には、パンクかガス欠のせいで、ヒーコラ言いながら汗を流し、子供を乗せたバイクを押し間抜けた男に見える事だろう。

だが、先ほどすれ違った少年は「チームKUREのバイクだ……」と呟きながら驚いた目でこちらを凝視していた。

まああの位の年の男の子は車やバイクに……いや、大人になっても男は皆マシンに夢中だな。

「ねー提督?」

「なんだ?」

「私レーサーになりたい!」

「おまえ簡単に言うけどなあ……」

艦娘がレーサーになるのは難しい。

普通の純粋な身体能力を競うスポーツと違い、機体の性能に依存する部分もある競技なのでなれないわけじゃ無かったはずだが、選手期間は十年だとか、転倒の度合いによつて特殊なポイント増減があつたりとか、他にも色々規定があつた気がする。

あとそもそもが艦娘と言えど、トップクラスのレーサーと戦うには難しい。

確かにある一定のラインまでなら、頑丈で尚且つ身体能力がある艦娘は有利だ。

だがレーサーというのはそれだけじゃないし、極限まで磨かれた人の神経や感覚というのは艦装を展開していない艦娘よりは上というのが未だ一般論である。

故にモータースポーツの、しかもトップクラスの世界で戦えるようなのは、艦娘でも極めて希だ。

「でもオーナーは良いって言つてくれたよ？走つて見せたらそう言つてくれたの。あ、コーチは提督に任せるって」

信じられん。

だが虎瀬オーナーが認めたと言う事は素質は有ると言う事だろうか。

そしてさりげなく就職先が決まってしまった。

……いや、虎瀬オーナーの指示ならまあ、従わないわけにはいかないよな。

「でもおまえ、勝負の世界は厳しいぞ？ 毎日が戦いだ、クソみたいなトレーニングもある、艦娘がその辺どうなのかは知らんが確か専用のトレーニングがあったはずだし、いざレースに挑むのにだって大事な事が山程……」

「もー！ 分かっているよそんなの!! でも私はまず走りたい! 走って楽しみたいの!!」
その言葉を聞いて俺は何も言えなくなった。

ああまったく、その通りだな。

ははは、成る程、こいつは確かにレーサー向きだ。

さすが虎瀬オーナーだ、見る目がある。

「なら虎瀬オーナーに色々お願いしないなあ」

「うん！ がんばる！」

おうがんばれがんばれ、しかしあれだ。

俺はさつきから一緒にバイクを押してくれる謎の金属生命体が気になっていた。

一番でかいのと中くらいののが押すのを手伝ってくれて、小さいのは俺によじ登って、なつかれてるのだろうか？

「……こいつら、艦装だろ？ 格納しなくても良いのかよ」

「大丈夫だと思うよ？ 海上じゃないと砲撃も出来ないし、それに個別で入ってる燃料が切れたら勝手に格納されるから」

「へー、この前艀装展開したのが何日前だ、結構立つけど燃料って結構持つんだな……」
「持つわけ無いじゃーん、燃料補給してるんだよ」

「ん、お前がか？よくそんな金あつたな？」

「うんうん、オーナーが入れてくれてるみたい。この前こつそりとガソリン入れてるの見た!!」

「は？」

「昨今の燃料不足による燃料の高騰、決して安いものではない。」

「その燃料を？虎瀬オーナーが？意味も無く？」

「そもそもこいつらは重油とかじゃなくて、ガソリンで動くのか？」

「連装砲ちゃんの事見て、何時消えるんだ？つて聞いてきたから燃料が切れたら勝手に消えるよ？つて教えてあげたら毎日燃料あげてるみたい!!」

「あ、うん、そうか……お礼言つとけよ」

「うん!!」

「そうか、ふーん、あの虎瀬オーナーが。」

「……意外すぎる。」



汗だくになりながらバイクを押し、ようやく『KURE』に到着した。

KUREの走り屋たちが俺たちを出迎え、祝福の言葉を掛けてくる。

チャンピオンにはなれなかったが、どうやら俺はレーサーの女神のために駆け抜けたケンタウロスというよく解らん扱いらしい、なんだそりや。

そんな俺を見て「貴様にはこれで十分だ」と、お子様ランチの旗みたいなチエツカーフラッグを振る虎瀬オーナー。

それが連装砲ちやんの件もあってやたらおかしく、つつい笑ってしまった俺。

その俺の笑顔を見て、虎瀬オーナーが憲兵でもぶち殺しそうな顔をしたので慌てて話題を出す。

「そ、そう言えば風子……いや島風をバイクに乗せてやったそうですね」

「ふん、まあな……どこぞの負け犬より筋が良い。化けるかもしれん」

そう言って愉快そうに椅子に腰掛ける虎瀬オーナー。

俺も虎瀬オーナーの前にある椅子に座る。

すぐさま俺の膝の上に島風と連装砲ちやんが乗ってきた。

文句の一つでもいってやろうと思ったが、連装砲ちやんが俺になついている様子を見

て今まで見た事の無いような驚愕の表情の虎瀬オーナーを見てしまい、したいようにさせる事にする。

「しかしそこまでですか、どうせならユウリーを超えるようなレーサーになつてほしいですね」

「スピードなら誰にも負けません。速きこと、島風の如し、です！私には誰も追いつけないよ！」

「いやお前、それ海上での話だろうが……」

「おなじおなじ！それより提督、さっき言いかけてたレースに挑むのに大事な事つて何？」

「ん？そりやお前色々あるけど……」

そんな俺たちを見て虎瀬オーナーが呟く。

「ユウリー、ユウリーか……今日辺りまた来るかもしれないな」

「え？」

虎瀬オーナーにもあの幻影が見えていたのだろうか？

それとも本物の幽霊が？

そんな事が頭をよぎった瞬間、正面ゲートから女のでかい声が聞こえてきた。

「今日こそあの人を出すんだ！！もしくは居場所を教えるんだ！！」

ずかずかとこちらに向かってくる、毛皮の帽子と空色の上着を身に纏った少女。年頃の少女にしては背が高く感じる。

その少女がこちらまで来て、俺を見た途端に固まった。

「あつ……」

「お嬢ちゃん、ここがどこだか……」

たしなめようとした俺の言葉を遮り、少女が声を上げる。

「Здравствуйте! 嚮導駆逐艦、Ташкент! はじめまして同志А
Дмирал! はるばる来てみたよ!」

「は?」

なんだって? た、タツシ? タツシなんだって?

北の言語みたいだがよく解らない。

「ユーリーの娘だそうだ。そして艦娘でもある。なんでも子供の頃にレース場で貴様を見て、貴様が自分の提督だと分かったらしい」

心底めんどくさそうに説明してくれる虎瀬オーナー。

「え? は? うえ?」

と言うかユーリーの娘で艦娘?

それよりも俺がこの少女の提督?

……なにそれ？

「あたし、パーパに師事してレーザーを屈指してたんだ!!パーパが言ってたよ!!俺に勝てるとしたらシマだけだつて!!だからパーパの代わりに……うんうん、君がいいんだ、君だからこそいいんだ!!私と一緒に夕張重工に来て!!大丈夫、夕張マーマも賛成してるよ!!一緒に世界を取ろう!!」

え、夕張マーマ？

夕張つて夕張重工の夕張？

「お、うっ!?ちよ何言ってるの!!提督は渡さないんだから!!それに世界最速のGP王者には提督と一緒にこの島風がなるの!!」

「うん?何を言ってるのさ、世界最速の駆逐艦はずつと昔から私、Т а ш к е н тだよ!!」

「海上の話で、おまけに瞬間最高速度だけでしょ!!燃費と航続距離は圧倒的にあたしの方が上なの!!最速で走り続けられるのはこの島風なんだから!!」

言い争いを始める島風とえつとタシユケント。

正直急展開すぎてついていけない……

助けを求めようと虎瀬オーナーを見ると、連装砲ちゃんを連れて給油場へと向かおうとしていた。

慌てて虎瀬オーナーに追いつがる。

「と、虎瀬オーナー!!どこに行くんですか!?!」

「ええいうるさい!貴様がまいた種だろうが!!自分で何とかしろ!!」

虎瀬オーナーは珍しくちよつと焦ったような感じで、連装砲ちゃんを引き連れ去って行った。

焦ると言うより、このチャンスを逃すまいといった様子で。

ドンだけ連装砲ちゃんが好きなんですか……

恐る恐る振り返ると二人の艦娘の戦いは、言い争いからとつくみあいへと変貌していた。

タシユケント、艦娘といえどユリーの娘には違いないのか、負けず嫌いそうだ。

ふと、俺はたった一度、ユリーと一緒に飲みながら話した内容を思い出す。

俺が初めてGPクラスのレースに参加した年に、バーで偶々出くわした時の事だ。

『島、宿敵の存在を呪わず感謝しろ。賢者は敵から多くを学ぶ』

意外と多い自身の失敗談なんかと一緒に、そんな事を語る姿はどこか嬉しそうだった。

まあ今にして思えば、だけどな。

『だからこれからも俺を脅かし続けてくれ。頼んだぞ』

あの時は何を偉そうにと憤ったものだが……

そうだな、ああそうだ。

ユーリー、あんたの娘と島風は良いライバルになりそうだ。

俺と……あんたみたいにな。

「あーもう、なにやっつてんだお前ら。やり合うなら走りで戦え！」

「駆けついで勝負すればいいの？ 負けないんだから！」

「このT a m e H Tとレースをお望みかい。いいよ！」

俺の言葉を聞いて、最速の名を背負った二人の艦娘が望むところだと笑う。

はは、そうだ。

レースに挑むのに何よりも大事なのはそれ。

情熱……そしてそれを生む愛だ。

短い言葉だ、だが結局の所俺たちを駆り立てるのはそれしかない。

だから命を懸けられる。

毎日が人生最高の一日、そう思って走れるんだ。

『負け犬』と『駆逐艦：島風』
おわり

『電波男』と『軽空母：飛鷹』

僕は一乗寺明。

第五宇宙に君臨する運命神ズイーウンの下方使徒だ。

使命を果たすために、僕はこの惑星にやって来た。

現在僕が使用している外殻は、この惑星で文明を発展させている二足歩行種族の幾何学的平均値で構成されており、機能は下方使徒の超感覚に対応するように改造されている。

僕の隣で原形質補給を行っているのは『飛鷹』。

朱と白のコントラストが鮮やかな服装で、長い黒髪は原形質補給の邪魔にならないように、くるくる巻きにしてブローチで留められている。

実のところ飛鷹は現在この惑星に存在している最大数の知的生命体と、見た目こそ同じだが全く別の種族の知的生命体である。

僕は彼女の種族がこの星系の支配者の使徒ではないかと推察していた。

そのため飛鷹は僕に与えられた使命遂行にあたって、極めて重要性の高い調査対象で

もある。

「僕ら」の最終目的は、この惑星系の支配者を運命神ズイーウンに従わせることだ。

最もその最終目的を達成するまでには多くの段階プロセスがあり、また現状問題を多く抱えていることから、目的達成には莫大な時間を要すると推測されている。

よって状況が変化しない場合は、恐らく僕の外殻耐久年数程度では数百段階あるプロセスの第一段階である、情報収集ですら完了しないと推測されていた。

現状の問題の一つとして、飛鷹は僕にこの世界について教えてくれる貴重な協力者で、『トモダチ』と分類されるレベルの協力関係を結んでもいるのだが、協力的過ぎるのが問題なのである。

そのどこかに僕に対する情報操作が入っている可能性を考えると、……理解が難しすぎる。

本来それら考察判断の役割を担う上方使徒の応援を仰ぎたいが、上方使徒とはこの星に降り立った時にはぐれて以来連絡が取れない。これが現状最大の問題だ。

そのため、僕は本来の役割ではない情報精査やすべての行動判断とそれら決定を、単体で行わざるを得ない状況に置かれていた。

よって現状、それら頭脳労働（土着種族表現）の能力が低い僕は、提供された情報が正しいものとして行動するしか方法がないのだ。

そもそもこの世界の概念は難解すぎる。

僕は現在、幼体の育成過程を調査しているが、凄まじいばかりの情報供給に少しばかり辟易している。

上方使徒と下方使徒の役割のどちらもこの生命は単体でこなすのである。

どちらの方向にも中途半端な能力しか持てないのはそのせいだろう。運命神ズイウンにこの星を捧げる際には、しかるべき建白書を提示するつもりである。

「足柄御前、二杯目をいただきたい」

僕は現在拠点にしている『コーポ第五』と呼ばれる経年劣化著しい八ブロック（八つの住居区画）の容量を持つ木製の建築物の管理者である『足柄』と呼ばれる飛鷹と同じ種族の生命体に皿を突き出す。

拠点内には『食堂』と呼ばれる、共用のエネルギー物質の生産と補給を行う施設があり、現在僕らはそこで規定時刻毎に供給される、足柄御前が生産したエネルギー物質を補給していた。

「はいはい一乗寺君、大盛りにする？ それとも少な目？」

イネと呼ばれる植物の種子を盛る足柄御前に、僕は答える。

「足柄御前、恐れながら申し上げますとエネルギーはまだ足りていません。大盛りで願いたき候」

「あはは、一乗寺くんはいつも沢山食べてくれるから作りがいがあるわ。ルーの量はどれくらいがいいかしら？」

足柄御前は容器のカバーを開いて、内部のどろどろとした内臓のような色のゲル状混合物を長い操作用の棒がついた半球状の金属容器ですくう。

「副食の量も大盛りで願いたい。あふれるほどに」

「はいはい、しっかり食べなさい。ほら、カツも乗せてあげるわよ」

僕は表面張力の崩壊するぎりぎりまで混合物がたたえられた皿を受け取る。

「恐悦至極。それにしても相変わらずフアジーなエネルギー補給方法とお見受けする。感動に値いたします」

この外殻を使用するようになってから、まず問題になったエネルギーの補給だが、コーポ第五に拠点を置いてからは足柄御前の協力により定期的にエネルギーの摂取が可能になった。

作戦完了の暁には足柄御前に、相応の恩賞を与えるよう申請するつもりだ。

そして僕は飛鷹の視線に気づいた。

「どうしたの？ 飛鷹？ なにか変かな？」

「その、相手によって時々変な口調になるのなんとかならない？ 明くん」

「どうしてだい？」

「だって変じゃない？　なんというかその独特というか古風な言葉遣いというか」

しかし現地地で得た情報によると『艦娘』と呼ばれる種族には、独自の儀礼的価値観を以て接するのが基本とされている。

なぜか僕はそれらに準じる必要は無いと、飛鷹や足柄御前からは許可をもらっているのだが、それらを抜きにしても足柄御前に対しては、現地上級階級者への対応を以て当たるべきとの判断が下っていた。（理由は上記協力に対する支援活動評価）

ヒエラルキーの維持は最優先であるが、土着種族の価値観に順応するのも重要だ。

僕は飛鷹に答える。

「僕も迷ったんだけど、ズイーウンの使徒として土着種族の価値観に順応する方がいいって統括使徒からの判断が降りたんだ」

下方使徒の本来の行為ではないため、エネルギーの消耗が激しく、頻繁には行えないが。僕だけでは判断が不可能で、なおかつ緊急性の高い問題の場合、統括使徒に判断を仰ぐことができる。（年に一回程度）

上方使徒とははぐれてしまったが、幸い統括使徒の外殻は僕が保持していた。

僕の部屋の端にある『床の間』と呼ばれる場所に、過ごしやすい低温で湿度が一定な空間。こちらの用語ではレイゾウコと呼称し原形質保存に利用されるものを僕は設置し、統括使徒の外殻を維持していた。

僕はその扉を開け第七感覺器官を使用することにより、統括使徒に意見を伝えることができる。

ちなみに統括使徒の最新の指示は『潜伏及情報収集優先他要項空氣読後独自判断許可』だった。

なお、例外とし飛鷹には通常の会話プロセスを使用している。

彼女からの強い要請と、それを行うにあたっての交渉の結果である。

「足柄さんはどう思います？」

「いいじゃない、変な方向にクソ真面目な感じが息子にそっくりで懐かしいわ」

楽しそうに笑うその様子に、僕から足柄御前への現状の言語選択は問題ないと判断する。

だが飛鷹にとって足柄御前の返答は納得いくものではなかったようで、深いため息をつく。

「わけ分かんないわ」

飛鷹と僕の関係が難しいものであるのは確かだ、だけど彼女にとってなにか問題があれば協力者として解決に力を貸すべきと現状は決めている。

なぜなら飛鷹は僕が最初に発見した、僕の説明に対して、感情的な忌避感を持たなかった土着種族だからだ。

僕はその日のことを思い出す。

『電波男』と『軽空母：飛鷹』

ここにベースキャンプを開いてから、僕は積極的な広報活動を開始した。

だが人々は全く聞く耳を持たなかった。たまに立ち止まってくれる人も、僕がズイウンの宣告について話し出すと、そそくさと離れていってしまう。

彼らは、なにか、本能的に聞いてはならないことを悟って、逃げ出すのだろうか？

そうだとするならば、僕たちは完全に存在を把握されているということになる。僕は不安になりながら、活動を継続した。

彼女が声をかけてきたのはそんな頃だった。

「ねえ、あなた、一乗寺明ってあなたよね？」

「そうだけど」

放課後、教室で教科書を片付けていた僕に彼女は声をかけてきた。

飛鷹の種族は本来、僕が選択した外殻の種族とは隔離された区画で教育を受けるらしいのだが、彼女は何かこの区画に移ってきた変り種だ。

もつとも、このときは彼女たちの種族と、使用している外殻の種族が違う物という情報が無かったので、そのことに関しての情報はあとから得たのだが。

一部のクラスメイト以外、飛鷹に対しては遠巻きに接していて、それに習って僕も四月に転校してきてから一週間、おはようの挨拶しかしたことはなかったのだが。

「私はえーっと、そのね、その。出雲ま……じゃなかった。飛鷹よ」

「知ってるよ、飛鷹さん」

飛鷹がその時名乗ったのは、何故か彼女の個体としての種族名である判別名称だった。

別のクラスメイトが会話していた情報を取得していたため、僕はそのこと（飛鷹の固有名称のみを指し、艦娘に対しての種族情報などは未取得）を把握していた。

飛鷹は「あれ？もしかしてこれ、通じてないのかしら……やばい、どうしよう」と呟いた後、少し考え込んでから話しだした。

「あなた、よく分からない宗教を広めようとしているそうね」
僕は内心の混乱を押し隠して答えた。

「宗教、とは違うけど?」

「話聞かせてくれる。興味あるわ」

それから僕は何度も繰り返した説明を彼女に聞かせ始めた。

運命神ズイーウン。

その寛容な統治。もちろん幾つかの問題点はある。

だが、それまでに経験してきた幾つかの統治に較べれば、それは格段に素晴らしいものだった。

この宇宙の生命もきつと気に入るだろう。

僕はそんなことを一生懸命説明した。

「……」乗寺くんがとつても特殊な立場にいるというのは理解できたわ。ちなみにそのズイーウンというのは妖精さんとも深海凄艦とも大本営の残党とも全く関係がないのよね?」

彼女が使った幾つかの言葉はまるで耳馴染みのないものだった。

「ズイーウンは運命の神で、第五宇宙に遍く存在している。僕はその下方使徒だ」

彼女は頭を抱えると渋い顔で「違うみたい」と呟く。僕は尋ねた。

「どうして飛鷹さんは笑わないんだろう？　　この人は僕の話の話を聞きたびに笑った」

「え、どうして笑わなきゃいけないの？」

彼女はそう尋ね返した。

「それは……」

上方使徒ではない僕には、その理由があまり理解できていなかった。

「それは明くんの話がこの常識ではあり得ないから、私たちを不安にさせるの。だから私たちはそれを笑い飛ばしてなかったことにする。無意味だと行動で示して安心するの。でも、あなたにとつてはズイーウンというものが存在しているのかもしれない。誰にだつて自分だけの真実がある。私にもそういうものがあるの。だから私には笑う理由がない。それだよ。そんなことより一乗寺くんつて、もしかしてその、この地域というか世間の一般常識とかに疎かったり……する？」

あの時、飛鷹の言っていたことはよく分からなかった。今でもそうだ。

「正直、情報はまったく足りていないよ……」

「よかつたら色々教えてあげましょう、か？」

でも彼女には独特の力強さと、懐の広さがある。それは確かだ。

その証拠に、その時結ばれた『トモダチ』と呼ばれる協力関係は、僕にとつてなくてはならないものになっているのだから。



僕は飛鷹の様子がおかしなことに気づいていた。

いつもなら僕の習慣にもっと突っ込みを入れてくるはずなのだが（それは僕がこの文
明に溶け込むために非常に有用である。この貢献についても彼女には感謝しなければ
ならないだろう）、今日は別のことに気を取られているようだ。

僕は、憂鬱な表情でスプーンを動かし続ける飛鷹に尋ねた。

「飛鷹、なにか気になることがあるみたいだね」

「え？」 飛鷹が我に返る。

本当に心がどこかに飛んでいたらしい。

「あ、明くん、なにか言った？ ごめん、ぼうつとしてて」

「……なにか困ったことでもあるの？ 僕でよければ相談に乗るよ」

飛鷹は関わりを拒むように首を振る。

「ううん、なんでもない」

僕はそれ以上追及できず、どうしたものかと思っていると、

「遅刻ですわああああああ!!」

と、大きな音量の声がコーポ第五にこだました。

続いて建造物を揺らす振動が伝わってくる。

「熊野ったら、寝ぼけてるわね……」

飛鷹がつぶやいてしばらくしてから、僕らが所属する教育処置施設の規範装束（以後、制服と呼称）を身にまとった『熊野』と呼ばれる飛鷹と同じ種族の個体が、食堂を通り過ぎて玄関に向かい走って行った。

現時刻はちょうど十二時であり、通常であれば確かに教育処置施設への出頭基準時刻から大きく遅れている。

ただ現在の日付は、現地基準で休日と呼ばれる日に当たるため、幼体の教育処置施設へ出頭する必要は無いはずだ。

「飛鷹、今日は……」

「大丈夫よ明くん、今日は休日だから、間違っても学校に行く必要はないわよ」

熊野は『苦学生』と呼ばれる階級に分類されるらしく、僕と同様の理由で対価貨幣が少量で済むコーポ第五に拠点を構えている。

個体情報としては外殻の手入れを重要視するらしく、先日は『ゼンシンエステフル

コース』と呼ばれる技術を使った手入れの為、コーポ第五で実験的に僕が栽培していた『糸瓜』という植物を譲って欲しいと頼まれた。

僕は必要な情報収集を完了し廃棄する予定だったので、こちらとしても廃棄のための労力削減のメリットから問題ないと判断し提供した。

彼女はそれ以来対価として、情報交換を定期的に申し出てくれている協力者となっている。

だが、彼女もまた飛鷹ほどでは無いが協力的過ぎで、その内容のどこに情報操作が入っているのかと考えると、……これもまた現状抱えている問題の一つだ。

追記すると飛鷹の拠点はコーポ第五ではなく、ここから徒歩十五分ほどの場所にある『神社』と呼ばれる、恐らくこの惑星系の支配者の布教基地を拠点にしている。

正直こちらの方が問題のレベルとしては大きい。

「そろそろ帰るわ……」

補給を終えた飛鷹が立ち上がる。

「わかったよ飛鷹。さようなら」

僕が短く返事と別れの挨拶を返すと、飛鷹は大きなため息を一つ吐いた。

「……駄目だこの子、休日に女の子が会いに来る理由を解ってない。飛鷹ちよつとこつちに来なさい」

その様子を見て、足柄御前はそう呟くと、飛鷹の首根つこをつかんで部屋の端まで連行し、なにかをしやべり出した。

「……まだ打ち明けて……の？ ……に気がついて貰えるなんて……いい加減……」

「でも足柄さん……つたら……」

「そんなんじや……とられ……」一乗寺くん顔だけは最高に……」

「ええ!!? でも彼……ですよ?」

「提督艦娘……抜きにしても……いいから……決めちゃいなさい……」

「でも……心の……備が……」

少量の空気の振動で、ノイズがひどかったのでうまく聞き取れなかったが、聴覚器官が断片的な情報をとらえる。

「じれったいわね」

聴覚器官の調整を開始しようかと検討していたら、足柄御前が振り返った。

「一乗寺くん、悪いんだけどお醤油切れちゃったから買ってきてくれる? ついでに飛鷹を家まで送っていつてあげなさい、艦娘でも女の子なんだからちゃんとして手をつないで送ってあげるのよ」

「ちよっ! 足柄さん!」

足柄御前から、かなり難易度の高い要請を受けた。

現状の状態がこの星系の支配者にどう認識されているのか不明だが、その拠点と思われる場所に赴くのはリスクが高い。

だが、場合によっては交渉のきっかけを掴める可能性もある。

実際に行動を起こすのは上方使徒と合流の後になるが、調査だけでも行う価値はあるかもしれない。

「承諾した足柄御前、期待に添えるよう行動する。じゃあ行こうか飛鷹」

足柄御前の要望と先導牽引、そして不測の事態に備えて飛鷹の手を僕の手と連結する。

するとなぜか飛鷹の体温上昇がはじまり、表皮から放熱が始まった。



飛鷹の拠点に向けて出発してしばらくたったが、飛鷹は黙ってうつむいたままだった。特に情報交換は行われなかった。

可能性は低いが、星系の支配者と通信しているのかもしれない、僕は警戒のレベルを上げる。

「オーツス一乗寺くん！ と、委員長」

そんな状況の中、僕たちが『商店街』と呼ばれる物資交換施設が建ち並ぶ通りを歩いていると、声をかけられる。

見ると『屋台』と呼ばれる施設（※交換物資名称は『ヤキソバ』と呼ばれるエネルギー補給原型物質）で交換員をしている土着種族が居た。

「やあ、原くん。労働活動は順調かい？」

「いまいちだな、あんまり売れねえ」

彼の種族内識別名称は『原』、僕の使用してゐる外殻と同じ種族の知的生命体だ。

また彼は幼体の教育処置施設内の活動における『ダチコウ』と呼ばれる協力関係を結んでいる一人でもある。

（土着種族基準における協力関係の種類に関しては多種多様である、別項目レポート1567参照）

補足すると熊野が『苦学生』という階級であるなら、彼は『不良』と呼ばれる階級にカテゴリされているらしい。

「そうなるかと貨幣が得られず困ったことになるんじゃないのかな、なにか手伝えることはあるかい？」

「へへっ、そうなんだよなあ。バイクのタイヤ交換に必要な分がたまるのは何時になるやらって……おっと、わりい。大丈夫さ一乗寺くん、自分の面倒は自分で見れるよ」

「自己のリソースで対応できるなら問題なさそうだね。わかったよ、もし対応の限界点を超えそうなら要請してくれるかな」

「あんがとな。ああそうだ一乗寺くん。すげーニュースがあるんだ、明日学校で聞かせてやるよ」

「ん？ 有益な情報ならすぐにでも提供して欲しいな」

「いや、別にレーサーと一緒に走ったって自慢話だから何時でもいいんだよ」

原と情報交換を行っていると、飛鷹が連結部分の接続強度を上げながら声を発した。

「ちよつと原。ていと……明くんをあまり変な道に引きずり込まないでよ」

振り返ると飛鷹の視線が、なにかしらの圧力を持ち（未知のエネルギー移動現象だろうか、調査対象リスト57827に追加）原に向けて放射されていた。

「そう睨むなよ委員長。つーか、心配しなくても一乗寺くんはトラックで引つ張ったって自分の道を歩き続けるっしょ」

「……まあそうなんだけど」

二人はどうやら僕の外殻の性能に関して話し合っているようだった。

僕は僕の限られた処理能力をもちいて思考する。

彼ら、彼女らの会話の意味を。

なにを意図して話し合っているのかを。

僕は少し悩んだ後、彼らとの協力関係レベルで開示できる範囲の情報を提供する。

「トラックの状態にもよるけど、この外殻の通常性能では難しいかも知れないね」

だが僕の提示した情報に満足がいかなかったのか、二人は同時に難しい表情を浮かべた。

残念ながらリミッター解除状態の外殻性能情報は、第一種情報のため提示が禁じられている、先ほど出した情報で納得してもらえない。

「まあそれよりも今はデート中なんだろう？ 俺なんかにつ構ってないで楽しんでこいよ」
「デートじゃないわよ……」

原は視線を僕と飛鷹の連結された手に向け、ため息を吐く。

「世間一般の常識から見ればデート以外のなにもんでもねえよ」

それは新情報だ、ところでデートとはなんなのだろうか？

情報の提供を求む。



商店街を抜けてようやく飛鷹の拠点へと続く入り口となる『鳥居』と呼ばれる文明建造物の前に到着した。

『鳥居』を抜け拠点へ続く勾配のきつい進路を昇るために整備された石階段を昇っていると、今までずっと黙っていた飛鷹が立ち止まって口を開く。

「……あのね明くん、実は伝えなきゃならないことがあるの」

繋いでいた手の連結強度が強まる、僕は言葉の内容とその行動に身構える。

もしここに誘導されたのが、ズイーウンの使徒である僕を籠絡、もしくは排除するためだった場合、位置的にも戦力的にも不利は免れない。

「あつ、別にそんなたいしたことじゃ無くて……いいえ、私にとってはたいしたことなんだけど」

僕は連結された部分から、彼女の体温が急激に上がるのを感じ取った。

現状とれる行動が限られすぎているため、そのまま待機を継続する。

「あのね、あの、私たちにとって提督と呼ばれる人が居るのは知ってるよ……ね?」

「把握しているよ、飛鷹の種族にとって必要な、特殊な識別信号を持つ人間（土着種族名）の雄個体のことですよ?」

提督。

飛鷹の種族である『艦娘』について調べていた時に目にした言葉。

それは雌個体しか存在しない彼女たちの種族にとって、繁殖のために必要な雄個体（例外的な雌個体も存在する模様）として選ばれる人間だったはずだ。

「いや、うん、まあそうっちゃそうなんだけどね……。えっとね、提督っていうのは私たちにとって替えの効かない大事な人を指すの。私たちはその人を探すのがなにより大切なことで、えーつと、うんとね、えつと……」

飛鷹にしては珍しく要領を得ない。

僕は限られた情報の中で答えを模索する。

飛鷹の様子を見るに、僕が持っている提督と呼ばれる存在の情報は不足していると判断。

追加の情報内容から提督は飛鷹にとって、僕にとっての上方使徒の役割を担う存在と推測。

結論として上方使徒とはぐれてしまっている僕にとって、提督がないという飛鷹の現状の深刻さは十分理解できるものだった。

「成る程、つまりその提督を探すための協力を僕に求めてることかな？ 飛鷹とはトモダチ関係にあるから構わないよ。その提督なる存在の判別方法を教えてくれるかな」

「だからその、あのね。う~~~~~!!」

飛鷹は顔を赤くし、うつむきながらうなった後、なにか決心をしたような顔で僕を見つめ、

「つまり！ 明くんが私の提督なの!!」

そう、叫び、宣言した。

情報開示の為に、かなりのエネルギーを消費したのか、肩で息をしながら僕を見つめる飛鷹。

提督、僕が、飛鷹にとっての上方使徒。

それは、僕と飛鷹の個体としての問題ということで、完結できる事柄なのだろうか？
これは、使命の遂行にあたり問題となるうるのだろうか？

現状、この惑星の支配者が僕やズィーウンを、どう認識しているのかは不明だ。

だが僕が飛鷹にとってその提督だというのなら、現在の協力関係を解消し別の関係を構築して情報収集を継続するべきだろうか？

それとも今後の交渉如何では、僕は彼女にとっての下方使徒となるべきなのだろうか？

……駄目だ、そもそも提督なるものの情報が足りなさすぎる。

そして、これは僕に判断できる範囲を超えている。

統括使徒にも、上方使徒にも連絡が取れない現状。

僕は選択肢が無いことに気づき、飛鷹に正直にそのことを告白する。

「正直なところ、飛鷹にとって提督と呼ばれる存在がどういったものなのか、僕にはよく解らない。それに僕はズイーウンの使徒だから……」

「まっつて、お願い。これだけは知って欲しい、信じて欲しい。明くんがどんな人でどんな神様に仕えていようと、私にとってあなたは替えの効かないただ一人の大事な人だつてことを。私はあなたに飛鷹という艦娘である私の提督になつて欲しいの」

僕の説明を遮り断言する飛鷹。

その姿はあの日、放課後の教室で僕に向かって断言したあの時と同じ様子だった。

飛鷹の言葉から、飛鷹が僕と『提督と艦娘』という関係の締結を要請していると推測。

僕は現在の権限で下せる判断を検討し、答えと用意できる選択肢を提示することにした。

「それが飛鷹にとつて大事なものはわかったよ。でも僕には提督というものがどういうものなのか正確な情報を持っていないし、『飛鷹の提督』となつた場合どういった契約が発生するのもかもしれない。だから僕は飛鷹の提督にはなれない」

「そっか……」

僕の言葉を聞いて、飛鷹から力が抜けていくのが感じられた。

一先ず戦闘は回避できたということだろうか、ならば交渉の余地はあると判断し、提

案をする。

「そこで提案があるんだ」

「……なに？」

飛鷹は、力なく僕を見つめる。

「もしよければ僕と交際、カレカノの関係になってくれないかな？」

「……っえ？ は？ え？」

僕は『提督と艦娘』という最上級と思われる協力関係がどういうものなのか理解するために、それよりも低く、現状よりレベルの高い長期間の協力関係を構築することが必要だと判断。

これは以前、土着種族の風習でそれら関係強化を図る方法や、協力関係状態の範囲や強度的な種類を原に相談したとき、

『あ？ そりゃ一乗寺くん。カレカノになるのが早いっしょ。つきあうっつか、交際関係？ そういうやつ』

と、原が教えてくれたものだ。

僕の提案が飛鷹には理解が難しかったのか、彼女は僕の言葉を聞いて驚いた表情を浮かべた。

僕はさらに説明を続ける。

「飛鷹にとって重要なことなら、きつと僕にとっても重要なことの可能性が高いはずなんだ。だから僕はそれを知りたいし、もし問題ない（と統括使徒の判断が下った）なら提督になってもいい。その前段階としてカレカノの交際関係になって、まず提督というものがどういふものなのか、理解できるように協力してほしい。もう一度提案する。飛鷹、僕とカレカノの関係になって欲しい」

飛鷹は顔を赤くしている、おそらく高速情報処理による放熱と思われる。

「現状対価として用意できる物は、僕の外殻耐久期限が切れるまでの使命遂行外の時間（労力）ぐらいしかないんだけど。必要なら必要な分だけ提供を検討する用意があるよ」
内容の確認と僕への刺激を避けるためなのか、飛鷹は上目遣いになりながら恐る恐る、追加の確認事項を僕に問う。

「……えーつと、それつてもし私が望めば。死ぬまで一緒に、そばに居てくれるってこと？」

「うん？ うん、駄目かな？」

僕は死が外殻耐久期限が切れるまでの時間とするなら、その認識で正しいと判断する。

この提案は飛鷹にとってかなり難しいものだったのか、彼女はぐるぐると表情を変えた後、とても大きなため息を吐いて「こんな告白ってあり？」とぼそりと呟いた。

「もちろんそれらに必要な社会的証明には同意するし。その他必要な行動があるなら使命に支障のない範囲で行わせてもらおうよ」

「……あーもう！ わかった、わかったわ。ほんつと、明くんときたら……でも、うん、いいわよ。明くんの神様がなんであれ、私はあなたに一生付き合っただけあげるわ」

そして彼女は僕との連結を解除、そして右手を僕に差し出す。

恐らく取引の締結を確認するための『握手』と呼ばれる行動を求められているのだろう。

取引の内容に関して問題が無かったので、僕は彼女の手を握る。

「よかった、協力に感謝するよ。これからよろしく飛鷹」

「ええ、任せといて明くん……よろしくね提督」

飛鷹との取引の結果、そういうこととなった。

恐らく彼女にとっても満足のゆく内容だったのだろう、情報分析の得意では無い僕から見ても、そう返事をする彼女の笑顔は正常な反射行動に思えたから。



飛鷹を送り届けた後、布教基地を目視で少し調査してみたが目立った情報は得られな

かった。

機会があれば『ご神体』なる、惑星系の支配者の一角と思われる存在の外殻が見られるようなのだが、それは『祭り』と呼ばれる一定の期間のみらしい。

なんのエネルギーも観測できなかったため、恐らくあの外殻は現状停止状態なのだろう。

それらの状況も合わせ、行動を起こす必要が感じられ無かったため、僕は判断を保留した。

僕は足柄御前より要請があつた醤油を手に入れ、拠点（メゾン第五）に帰投する。

そして醤油を足柄御前に提供したところ、指摘を受けた。

「……一乗寺くん、これソースよ」

足柄御前の指摘に僕は愕然とした、色彩での判別では醤油で間違いなかつたはずなのだが、やはりこの惑星の情報量は膨大である。

現状の予測通りこの外殻の耐久年数だけでは、恐らく必要な情報を集めることすら難しいだろう。

上方使徒との連携がとれない現状、そう判断せざるをえない。

でも幸い、上方使徒に代わる部分を補う協力者（カノ）が僕（カレ）には居てくれた。

『無職男』と『駆逐艦：舞風』

ノージョブです。（無職だよ）

休日とか祝日という縛られた自由時間から解放され、二十四時間エブリヴァデー自由状態を謳歌している今日この頃。

最近開き直って無職を楽しんでしまってる感が否めない。

そんなある日、前島に朝っぱらからイタ飯を食べに行こうと誘われた。

お眠な時間なのだが、お暇でもあるのでほいほい同意。便利な男だな俺。

そんなわけで待ち合わせの日時に待ち合わせの場所に行くと、さも当然のように先に来ていた前島の姿と見覚えのある濃緑の乗用車があった。

久しぶりに目にしたけど、確かお袋さんか誰かのお下がりの車だったっけか。

コイツの無駄に几帳面な性格は変わってないようで、昔と変わらずピカピカである。

片手を上げて軽く挨拶し、「よっこらせつくす」と口に出しながら助手席に乗り込む。

車は持ち主に似て頑丈らしく、もう20万キロ以上走ってるというのに、俺が学生と

いう職業についていた頃と変わらない快調なエンジン音を響かせていた。「んで、なんつつつたつけその店」

「ジエノヴァ料理店『マエストラーレ』です」

運転しながらクイツと、眼鏡を上げて答える前島。

相変わらずよく光る眼鏡だな。

「ジエノヴァ料理？ イタ飯じゃなかったのかよ」

「そうですね、詳しく説明すると……」

「あー、まて。その話長くなるか？」

「はい。それでですね……」

「一行で説明しろ」

「……イタ飯のルーツのひとつです」

前島は微妙な間を空けてから不服そうに、だがこちらの希望通り一行で説明した。

そうそう、やりやできんじやねえか。

「相変わらずですね……」

「お前もな」

窓を少し開けて、最後の一本だった煙草に火をつける。

車内に入ってくる風に肌を刺すような寒さは無く、いつの間にやら春の訪れを感じさ

せる心配。

フロントガラスから見える空は、抜けるような青空だ。

「!?」

と、道路の真ん中にたつて道をふさぐ、男と少女の姿。

慌てて前島がブレーキを踏む。

微妙な急停車に思わず煙草を落としかけ、腹が立った俺は窓を全開にして叫ぶ。

「アホッ!! 死にてえのか!!」

「先輩、やめてくださいよ……」

いわれて頭に血が少し上っていたことに気付きソフト冷静さを取り戻す。

ホームレスみたいな格好の精悍な顔つきの男は、俺の叫びを気にせず車の側まで歩いて来て、ドア越しに話しかけてきた。

「すまない、連れて行ってほしい場所がある」

「ああ!? なにいつてんだてめ……」

強引すぎるヒッチハイクに、再びカツとなりかけた俺だが、その男の顔を思い出し愕然とした。

おいおいおいおい、コイツは

「えっ? あ、あんた、島、プロレーサーの島か!？」



「なにか急いでたようですが、間に合ったんでしょうか？」

「さあな、でもまあ間に合わせるだろ、あの島なら。なんとって世界一速いバイク乗りだ」

しっかし、まさかあのプロレーサーの島を後ろに乗せて走ることになるなんて、人生ってなにが起こるかわからんな。

自分とそう変わらない年齢でありながら世界に挑んだ男を近くに感じ、心に妙な熱さが湧き出す、ついでに惨めさも。

「今からだとランチになってしまいますね……」

「よかったな、朝飯も昼飯も一緒にとれて一食分浮くよ」

ウマイものは当然嫌いじゃないが、俺は基本的に食い物への欲求が薄い。

なので一日一食で平気だし、三食きっちり取るという風習もない。

だというのに、最近陽炎たちから飯に誘われたり、面倒見てもらうことが多い気がする。

黒潮や磯風とラーメン食いに行ったり、萩風が弁当作ってきてくれたり、初風なんか

はあの喫茶店で会うたびに、頼んでないのにホットケーキ焼いてくれたり。

そういうえばこの前は陽炎に呼び出されてファミレスで飯食ったな。

あの時、トイレのために席を立って戻ってきたら、陽炎と不知火が俺が頼んだビールジョッキに口を付けてたので、とっさに二人の頭に拳骨を落としてしまった。

二人とも頭が固くてこっちの手が痛かった。

興味があるのはわかるが、さすがにアカンやろ。

なぜか二人は笑っていたが、なにわろてんねんと思った次第。

「そういうえば先輩って学生時代バイク持ってましたけど、まだ乗ってらっしゃるんですか？」

「さすがに前のは古くなって売ったけど、バイク自体は一応持つてるぞ。こっちで就職して二年目くらいに売ったやつ次モデル買ったよ。最近というかも随分と乗ってないけど」

正直、前に乗ってた夕張重工のバイクのときはアレだった。

なので次は絶対アカシのバイクにしようとか心に決めてたんだが、結局夕張重工のバイク買っちゃったな。

多分、当時の俺のバイク愛は「バイクとしてのクオリティ」ではなく、「とにかく開発者が次のモデルを作ってくれた！」ってところに向いていたんだろう。 じゃないと、

あんな手間のかかるバイクの後継モデルなんて絶対買わん。

なんてことを思いながら、窓の外の景色をぼんやり眺めていると、たばこ屋が目についた。

ふと煙草が切れていたのを思い出し、前島に車を止めてもらう。

信号を渡り反対車線側のビルが建ち並ぶ通りに、ぽつりとあつた小さな煙草屋に着。

耳の遠いばあさんが店番をやっていて、何時も吸ってる銘柄を伝えるために何分もかかった。

ようやく伝わって、ばあさんが腰を上げて棚の煙草をあさってる姿を見て、謎の達成感を味わっていたのもつかの間。

ポケットに入っていた空箱を見せれば、早かったんじゃないかと気付き凹む。もつとがんばれよ俺のシナプス。

別に車に戻って吸ってもよかったのだが、脱力感から思わず買ってしまった自販機の缶コーヒー片手に一服することにした。許せ前島。

あー、ニコチンとカフェインの混ざり合う音が聞こえる。(幻聴)

リフレッシュした気分に戻ると、車の外で前島が誰かに絡まれていた。

前島に絡むとかどこのアホだよと思いつながら相手を見ると、綺麗な金髪と黒髪のグラ

マーなすごい美女二人。気品というか、身なりに金をかけてるともいえないのか。全く違う髪の色なのに似たような服装の為か、なぜか姉妹に見えるな。

「知り合いか前島？」

「遅いですよ先輩。ええと、この方たちは……」

前島いわく、明らかに前島に向かって好意全開なこの二人は、会社の上司と部下らしい。

そういやコイツ昔から地味にもてたよな、ロリコンのくせに。

前島の紹介に口を挟まず、笑みを浮かべながら綺麗な姿勢で立っていた二人の美女が、紹介を聞き終えた俺に向かって軽く頭を下げる。

え、なに？ なんなのこのパーフェクト美女。

大手ってホワイトな上に、こんな美女が上司や部下になるの？

こいつの頭に今すぐ隕石落ちないかな。と、久しぶりに思った。

これで百回目くらいだわ。

「だからいったでしょう、これから先輩と用事があるので一緒にできませんと」

前島の言葉を聞いて、なんとも残念そうな表情を浮かべる美女二人。

おいバカやめろ、なんか罪悪感がすごいだろうが。

なんというか、恐らく休日にはったり出会った意中の相手である前島を見て、とても

嬉しかったんだろうと初対面の俺が見てもわかってしまう表情だ。

愛されてるんだな。

こいつの頭に今すぐ隕石落ちないかな。(百一回目)

「あー、すまんが急用ができたんだわ、飯はまた今度な。埋め合わせはまた今度するから今日はその二人に相手してもらえ」

「え？」

俺の言葉を聞いて哑然とする前島。

さすがにぶった切りすぎた感が否めんが、美女にあんな残念そうな顔をされたらなんとかしなければなるまいと思うのが男の性。

後日ちゃんとフォローいれないとだが。

それに前島がこの二人をどう思ってるかはわからんが、悪い女じゃないのは一目見てわかるし、いい加減コイツもロリコンを治して彼女つくって、ゆくゆくは結婚して家庭を持つべきだろう。

前島はロリコンだが、大人の女というものを信じてない訳じゃない、はずだ。

そして男として、というか生物として相手が必要だとも理解してる、はずだ。

自信ないけど。

まあこの二人のどちらかなら、問題なさそうだしな。

あまり先輩らしいことをしてやれなかったから、せめてこれくらいの気は利かせてやりたい。

……いや、違う。

自分の気持ちを正直に表すなら、なんとというか言葉にならない惨めさがすごい。こんな心境じゃ、冷静に飯食える気がしない。

前島がなにかいつてるのが聞こえたが、俺は振り返らずにぶらぶらと片手を振って別れを告げた。



前島と別れ、目についた路面電車に乗り込み、適当なところで降りてぼおつとする。

なんだか今日これからなにをするかを考えるのが、少し億劫になってきた。

知らない他人や疎遠になった友人が、結婚したただの子供が生まれただのつてのを聞いてよく凹むが、まさかあの前島がなあと思う。

もうなんなんだろなあ、これ。

自分のやって来たことに後悔はない、が、無職の俺と美人の部下や上司に囲まれ一流の企業で働く後輩の差を目の当たりにしてしまうと、なんとというかそれを招いた自らの

過去を恨んでしまいたい。

自分の愚かさを痛感し、どす黒い煮こごりみたいなものが臍物に溜まつてく感覚がする。

酒飲んでゲロつたら消えるだろうか、昼間つから飲んじやおうかな。

そんなことを思う自分がアホに見えてぐぬぬ。つてことが最近多い。

ダウン―気分を引きずり、街の雑踏の中を歩いていると、ふと大きなビル前の広場から樂しげな音楽が聞こえてきた。

目を向けると、そこそこの数の観衆に囲まれながら、動く人影の姿。

近くによつてみると、野外蓄音機から流れるリズムに合わせて踊る少女。

ステップを踏むたびに後ろで括られた金色の髪がピコピコ揺れて、見ていて面白い。

やがて最後の山場を迎え、片手でその小さな体を支えながら、くるりと体を回転させる大技を決める。

えらいアクロバティックなダンスだな。

だがその難易度の高そうな技を、かなり切れのある動きでやつてのけたあたり、少女のダンスの技術力の高さが伺える。見始めたのは途中からだったが、むしろダンスというより舞踏のような動きだったな。

しかし観衆から拍手を受けて、ドーもドーもと応える少女に見覚えが。

少女は観衆の中に俺の姿を見つけ、目を丸くする。

「おお？ あれー？ そこにいるのは……」

『無職男』と『駆逐艦：舞風』

「よう、マイマイ。奇遇だな」

「なんで女友達感覚!? 舞風ですよ!!」

そうそう、陽炎の妹の一人である舞風だ。

前島の上司の方も金髪だったが、こっちの金髪はずいぶんとちっこいな。

細く小さな体、肩幅や腕なんか俺の半分もないんじゃないだろうか。

だというのによくもまあ、あんなアクロバティックな技ができるもんだな。

俺と話している様子から、舞風のダンスが終わったと感じたのか、観戦していた通行人たちが散っていく。

どうやらこの広場はミュージシャンやパフォーマーの集まる場所だったらしく、あちらこちらで身につけた芸を披露している奴らと、それを見ようとする人々の姿。

「若いのに度胸あるな、こんな場所でダンスの練習か？」

「まあ練習というか、鈍らないように維持するためというかあ。あつ、それよりもどうでした？ あたしのダンス」

そう俺に聞きながらポーズをとる舞風の服装は、白いVネックのTシャツに白手袋。

そして動きやすそうでありながら、おしやれなチエック柄のスカート？ いや、大技の時にパンツ見えなかったから多分キュロットスカートってヤツだろうか、そんな感じだ。

なんとかカテゴリー分けするとしたら、今時の垢抜けたおしやれなストリート街ガール。(長い)

「まあ、悪くなかったな。途中からしか見てないけど」

「えー、じゃあもう一回踊るからみてくださいー！」

そういつても、ダンスの善し悪しなんざ俺にはわからない。

女学生にしてはやたらうまいようにも思えたが、それくらいしかわからん。

それに気分的にも億劫だしなあ、邪魔にならないようにさっさと帰るか。

「……いや、遠慮しとくわ」

「あれ？ もしかして元気ない感じですかあ〜？」

なにか察したのか、立ち去ろうとする俺の手を掴んで引つ張り、強引に地べたに座らせる舞風。

なすがままに座らせられる俺、相変わらず君ら姉妹は力強いツスね。

お互い近くに向かい合って座った動きで、舞風の綺麗な金色の前髪がふわりと揺れる。

じつと見つめるのも気恥ずかしくて、目をそらすように視線を下にそらすと、折り曲げた舞風の小さくツルリとした膝と細い美脚が目にはいった。

「で、なにかあったんですか？」

「いや別に、なにもないが」

どこに視線を合わせても気ままずくなりそうだったので、顔をあげて舞風の顔をまっすぐ見る。

「嘘、絶対なんかあったって顔してますっつて〜」

「そんなにわかりやすいか……」

俺の問いには答えず、まっすぐな瞳でこちらを見てくる舞風。

不思議な瞳だ。なんというか、年不相応というのか色んな物を見てきたような瞳。陽炎姉妹はどうもこの手の目をしたのが多い、まあ色々ある娘が多いんだろうが。

「うん、あたしがそういうのに鋭いつてもありますけどお。暗い雰囲気は苦手なんです、だからそういうのに敏感になっちゃうっていかあ。なのでよかったら話してみてください、やつぱりそういうのって話せば楽になると思います！」

暗い雰囲気が苦手、ね。

だというのに俺に話してみると、そういつてくれる舞風、泣かせるな。

どう見ても自分の方が、つらいものを抱えてそうだったのに。

しゃーない、踏み込むのはアレだが、俺を出汁に舞風の身の上話にでも付き合ってみるか。

「ならば聞いてもらおうじゃないか。そうだな……世の中は残酷だ、おもいつきり辛い。どんなに前向きに生きてみても、幸せな未来なんて来ない、そんなもの幻想だ。そう思うことってあるか？」

「……うわあ、思ったよりヘビーそうですね。やつぱ止めて踊りませんか？」

予想外の切り出しに、ちよつと引いてる舞風。

やつちまったか。

女の子の本音を引き出すなんて、ずいぶん長いことやってなかったから手順を忘れて

るわ。

だからってここで止めたりはしないが。

「踊らねえよ、まあそれでだ。人生ってのは人や物、時に過去や世界そのものから。ありとあらゆる方法で傷つけられるものだと思うんだわ、体だけじゃ無く心もな」

「えとそれは、うん……まあ、そうですね」

なにか辛いことを思い出したのか、少し影のある表情になる舞風。

「そんな色んな方法の一個をくらっちゃまって、俺は今傷ついてる。以上だ」

「え、なんでですかそれえ!? なにがあつたか全然わからないですし、無理矢理終わらせすぎですってえ!」

「いいんだよ、俺のことなんざひとまずこれで。それよりあれだ、セラピーつつーのか、そういうのはお互い辛いことを話し合いながらの方が効果があるらしいぞ。お前もなかなかいいのか、相談事でもいいぞ?」

俺の言葉を聞いて、舞風はふと無表情になり、視線を落とす。

うーむ、思ったより根深いなにかがありそうだなこれ。

しばらく沈黙が流れたあと、意を決したように舞風が話し出す。

「あたしがどうしてダンスが好きか、陽炎姉さんに聞いたことありますか?」

「いいや? そもそもダンスが好きだって知ったのも今日が初めてだよ」

舞風は俺の返事を聞いてまた少し考え、再び口を開く。

「えつと、えつとですね。昔とつても辛いことがありました。その記憶があたしを苦しめるんです。だから暗いのは苦手なんです、そんな辛い過去と向き合うってどうしたらいいと思いますか？」

「辛い過去、ねえ……」

難しいな、過去の思い出はいくつになっても自身をさいなむ。

人つてのは唐突にろくでもない思い出がフラッシュバックして、壁を殴ったり叫びたくなるものだ。(例：上司にリアアツトする思い出)

「あたしはダンスが好きです。でも、この体に染みついたとれない記憶というか、過去。それを忘れたいが為にダンスに傾倒している。正直そういう面もあるんだっていうのも認めています。あたしという存在が向き合うことを運命づけられた過去といえますか、それとどう付き合うのか。何時も悩んでは……な、なーんてね。あ、あはは♪」

無理矢理浮かべた痛々しい笑顔、おいおい、なんて顔しやがる。

しかし体に染みついた過去か。

どんなものなのかはわからんが、その年ですいぶんとまあご大層なものを背負い込んだもんだ。

「お前、自分が好きか？」

「え、あ、どうでしょう。あまり考えたこと無かったです」

「じゃあ自分を好きになりたいと思うか？」

「そりや、ええ、はい」

戸惑いながら頷く舞風。

「俺にもつらい過去がある、つってもそう大したもんじゃないが。いろいろやんちゃだった時期もあつたし、死にたいような恥ずかしい過去とかもある」

「……例えばどんな？」

突っ込んできたな。

いやまあ、こんないい方したら確かに気になるかもしれないが。

「昔、夜の遊園地でライトアップした観覧車の下でな、好きだった女に告白した。ロマンチックだろ？ 返事はOKだ」

「……」

舞風は無言で俺の側まで寄ってきて、軽く腕をつねった。

この流れでこんな幸せっぽい話されて怒ったか。

「痛い痛い、まあ聞けよ。でだ、次の日に無事付き合うことになった彼女から電話がかかってきてな、こういわれたんだよ」

——ごめん、やっぱ勘違いだったっぽい。昨日の返事なしで。

「……なんですか、それ」

「おいおい、笑うところだぞ」

割と洒落にならないぞつとするような目つきになるマイマイ。

怖いongo!

「まああれだ、誰だってひとつやふたつそんな惨めな過去や、辛い過去があるもんだわ。でもな、それも含めての俺なんだよ。その過去が今の俺を作ったんだからな。俺はアホで惨めな男だが、どんなときも自分を好きでありたいし、前向きでありたいとも望んではいる、望んでは」

じつと、俺の目を見つめてくる舞風。

「同じことがお前も自分にいえるか？　もし自分を好きになりたい、そう願うなら、過去を受け入れるしかないぞ。過去を含め今の自分を好きにならないと、一度立ち直ったり辛いことを忘れたとしても、同じことを繰り返すからな」

あ、やばい、またやつちまったよ。

なんとなくそれっぽいこと感じの、ウザイおっさんのSEKKYOU。

てかあれ？　今気がついたけど、これって全部ブーメランじゃないのか？

投げたそばから刺さる刺さる、自分でいっててなんだか凹んできたわこれ。

あ、駄目だこれ、俺……駄目っぼい。

「過去を含めて自分を好きになる……ですか。簡単にいいますけど、そもそもそれまできたらこんなこと……って!?」 なんていった人がダメージうけてるんですか!？」

前向きな言葉と反比例するように、ドンドン沈んでいく俺の様子に気がついた舞風が、慌てて俺の手を引いて立ち上がらせる。

「いやなんかもう、俺って駄目なヤツだなって……」

「ああもう、提督。舞風と一緒に踊ろうよ、ねっ?」 踊ろうっ踊ろうよー!」

蓄音機のスイッチを入れて、俺の両手をとる舞風。

流れてきた曲は、あの日の遊園地で流れていた歌手の曲だった。

「いらつく曲だ、センスが悪い」

「えっ、ええっ!?!」

舞風の手を離して蓄音機の停止スイッチを押す。

それを見て、がっかりした様子の舞風。

だがまあ、さすがに俺を元気づけようとしてくれるのはわかる。

そしてそんな舞風の好意を感じ取れない程、俺は鈍くない、はずだ多分。

「そもそも俺はダンスなんて知らん。だからまず基礎的なことから教えてくれよ、簡単

なステップ？　そういうのでいいからさ」

だから俺も舞風を見習って、全て忘れて踊ってみようと思った。

その言葉を聞いて、舞風はきよとんとした表情を浮かべる。

だがやる気を出した俺が嬉しかったのか、ニヤリと笑い、俺との間の距離をとった。

「じゃあまず単純な動きからやってみましょう、こつちに歩いてきてください」

「は？　ああ、うん」

歩き出そうとしたところで、舞風が続けていう。

「あっ、でもただ歩くんじゃないなくて、歩き方で自分の今の気持ちを表す感じで」

「今の気持ちつつたつてなあ……」

どす黒い煮こごりみたいなものが臍物に溜まつてく感覚、そんな気持ちを表しながら歩くってどうすりゃいいんだ、花粉症と便意に苦しむ尺取り虫みたいな感じで歩けばいいのか？

「はいはい、口は閉じて。ゆっくり、でも感情を表しながら！」

「いや、そういうがなあ。今の気分じゃ痛々しいもんにはかならんぞ」

舞風は少し考えるそぶりをしたあと、アドバイスを叫ぶ。

「うーん……じゃ、じゃあ。あ、あたしを恋人だと思って！　そしてこれから初めての

デートに向かうような気持で歩いてみてください」

ずいぶんとちつこい恋人だな。

「ほらほらはやく！ それと顔はうつむいたままで、あたしの前まで来たらゆっくりと顔をあげて。その時は待ち望んでいた最高の恋人と出会えた時のような表情を見せてくださいね！」

おまけに注文が多い。

ああクソ、だがもうこうなりやヤケだ。

今から俺は最高の美女の元に向かつて歩き出す、そう思い込む。(自己暗示)

そうだ、やるぞ俺は、これから俺は鬱をぶつ飛ばして、希望の女神と踊るんだ。

視線を下げて石畳を見ながら、一歩一歩。

ワクワクする気持ちを無理矢理湧き出させるような気分で歩く。

「いいですよー。ほら、ワンツーワンツー♪いひひ♪」

微妙にキモ可愛い笑い声あげやがってこんちくしょう。

そう叫びたくなる気持ちを抑えて、ヤケクソ気味に腰なんか振りながらさらに歩く。

「ワンツーワンツー…つぶ、アツハハ」

俺の華麗な腰振りがよほどツボに入ったのか、楽しそうに笑う舞風の声の方向を目指し、更に腰や手を振りながらゆっくり歩く。

我ながらテンション高いな、薬でもやってんのかってくらいだ。

「一緒につつつたってなあ、タンゴとかそういうヤツか？」

「それもいいですけど、向かい合って手を繋いで、音楽に合わせて飛び跳ねる。それだけでいいんです」

「……あの歌手の音楽はゴメンだぞ」

少し困った顔をする舞風。

困らせる気は無かったが、どうやらあの蓄音機には同じ歌手の歌しか入ってないんだろうと、その表情で察することができた。

どうしたものかと思案したその時、ジャジャーンとかき鳴らされるギターの音。

見るとツンツンに固めた金髪のプロストのような男が、近くで演奏を始めようとしていた。

「まあ、アレでいいか」

「はい、アレでいいです」

やがてノリのいいギター演奏、そしてどこか変な歌詞の歌が聞こえてくる。

——俺はお前に心を開いたのに。

——お前は何時も俺を非難するのに必死だ。

——偽善者で優柔不断で嘘つきだっとな。

—— お前は俺にいったよな。出会わなきやよかつたつて。

—— そう簡単に俺を投げ出すな。

—— そう簡単に愛を投げ出すな。

—— なあお前であり俺の世界よ。

—— お前は、人生を楽しむのが怖いのか？

—— 俺は平気だぜ。だから深呼吸しろ。

—— 落ち着いたしもう大丈夫だろ、変わっただろ、な？

—— だから簡単に俺を投げ出すな。

—— だから簡単に愛を投げ出すな。

変な歌だ、だが悪くない。

俺は一緒にくるくると回り、飛び跳ねてくれてる舞風に向かって叫ぶ。

自身も辛いものを抱えてるのだから、どん底だった俺の気分を再び元に戻してくれ
た舞風という少女になにかしてやりたくて。

「舞風っ！ なんかつ！ 俺にできることっ！ あるかあ!？」

「提督っ！ 次も…また舞風と一緒に、踊っててください！」

なんとも欲のないお願いだな。

「気が向いたらなー！」

「いひひほら、ここで大きくジャンプ&ターン！」

ちっこい体に見合わない強い力で、俺を引っ張り振り回す舞風。

「どわああ!!」

まったく無茶しやがって、腰やられちまうだろうが。

しかし、ずいぶんと楽しそうに踊るもんだな。

まるで怖れるものなどない、踊りの女神様みたいだ。

オマケ — 陽炎改二記念 —

日暮れ間近の夕方。

慣れない動きの運動をしたということもあり、体の節々が痛い。

そんな訳で舞風とわかれた後、俺は家に帰る途中の公園の噴水の縁に腰掛け休んでいた。

あー、ちよつと疲れたな、横になるか。

体を横に倒すと、縁に使われてる光沢レンガのひやりとした感触、きもちええやん。

そんな態勢でポケットとしていたら、公園の外の方から車が急停車する音が聞こえて来た。

なんだなんだと、体を起こして公園の入り口の方を見ると、誰かがこつちに走つてくる姿。

「提督!!」

現れたのは、黒ネクタイ黒スーツで黒シャツ姿の陽炎。

「おお、陽炎。どうした、そんなに焦つて?」

「どうしたじゃないわよ、通りかかったら提督が倒れてるのが見えたんだもん。そりや焦るわよ!」

そういいながら軽く息を切らし、ネクタイを緩める動作が様になっていた。

もしかして最近の女学生の制服って、こんな感じなのか?

「でもよかった。今にも飛び込みそうな顔してるようにも見えたけど。たいしたことなさそうね」

「飛び込むって、どこにだよ。この噴水か?」

微妙に投げやりな口調で言葉を吐いてしまった、恥ずかしい。

もしかしたらまだ微妙にダメージが残ってるのかもしれない、重傷だなこりゃ。

俺の言葉を聞いて、陽炎は一瞬まじめな顔をした。

なんだこの顔、どこか、不安そうだな。

不知火が俺のケツを蹴ってプールにたたき込んだ後の表情に似ているような。

と、一瞬頭をよぎったが、陽炎はすぐにいたずらを思いついた子供のような表情を浮かべて、ドスドスと足音を響かせながら俺の側まで来ると、ドンツと両手で俺の胸を押す。

突然のことに抵抗もできず、俺は噴水に頭から突っ込んだ。

「ぐばう、ああ!？」

鼻に水が入り、ツーンとした痛みを感じながら必死に立ち上がる。

春とはいえ、夜は微妙に冷える、そんな季節に噴水に突き落とされるってどういうことだよ。

「なにしやが!？」

「とりゃー」

さすがに怒ろうかと思って声を上げようとしたら、追撃するように陽炎が俺の胸の中に飛び込んできた。

支えきれず再び水没する俺。

「ちよ、おま、ぼツ！」

しがみついていた陽炎の重量マシマシ状態で、なんとかもう一度体を起こす。

どういふつもりかと問い詰めようと、陽炎をにらみつける。

だが陽炎はそんな俺を黙らせるように、ゆっくりと俺の首に手を回し、鼻先がぶつかるような距離まで顔を寄せる。あまりに近い距離に言葉が出ない俺を、微笑みながら澄んだ瞳で俺を見つめ返してくる陽炎。

「なにしょげてんのよ、元気出しなさい」

……ああ、またか。

不知火に続いてまた俺は、こいつら姉妹に心配をかけるようなツラをってしまったか。

まったくしょうがねえな俺も。

「つーか！　なんでお前ら姉妹は、弱ってる俺を水に突き落とす!？」

「えへへー、なんででしょ?」

質問を質問で返すな馬鹿!

あーくそ、絶対煙草が駄目になったし、このずぶ濡れ状態で家に帰ることを考えると、なんだか気が重くなってきた。

「ほらほら、どう?　私の励ましは。少しは元気になったかな?　ああ、お礼なんていい

のよゝ」

だというのに陽炎は俺から少し離れ、濡れたツインテールを少し赤くなっている顔に張り付かせながら楽しそうに笑い、こっちに水をばっしやばっしやとかけてくる。

「……」

まあ、そんなことはどうでもいいか。

今はそれよりこの生意気で優しい少女に、大人の本気を教えてやらねばならない。

「どこの世界に噴水に落とされて、水かけられて元気になるヤツがおるんじやい!!」

ここに居るけどな。

なんてことは口に出せるはずもなく、俺は反撃を開始する。

水をかけられながら、ケラケラと笑う陽炎。

……まったく、なんで、どうして。

このつまらない男のなにか気に入って、陽炎は、そして陽炎の姉妹たちは俺を構うのか。

普通ならとつくに離れていきそうなものだが。

いい年して、いつも情けない姿勢している男だというのに。

まともな同年代の男なんざ幾らでもいるだろうに。

例えば、同じ学校のクラスメイトとか。

それなのに。

この娘は、どうして。毎回。

会うたびに花が咲くような笑顔を、俺に向けてくれるのか。

『父』と『戦艦：扶桑』

私には娘がいる。

目に入れても痛くないとは正にこのことかと思えるほどに、可愛い娘だ。

仕事柄、家を留守にしがちな妻に代わり、子育てはある程度時間に融通がきく仕事だった私が主に受け持った。

だがそれでも仕事と子育ての両立は大変なことで、残業で遅くなる日などは娘に寂しい思いをさせていたであろうことは想像に難しくない。

決して褒められるような父親とはいえなかっただろう。

実際これでいいのだろうか、何度もうけそうになった。

だが、とおさまとおさまと私を呼び、慕ってくれる娘に何度も元気づけられ、不器用ながらもなんとかこの生活を続けられている。

少しだけ反抗期のようなものもあつたように思うが、それも一瞬のこと。

あつという間には過ぎ、娘はすっかり大きくなった。

「お父さま。お茶になります」

「ああ、ありがとう葵（あおい）」

居間のソファアでくつろいでいた私に、娘の葵がお茶を入れて持ってきてくれた。

私は読んでいた新聞をたたみ、娘の淹れてくれたお茶を飲む。

大きくなって手のかからなくなった娘。

普通の父親なら次の段階として、嫁ぐ娘を見送る寂しさを味わうことになるのだろう

が……

「ねえ、お父さま。たまには扶桑と呼んでくださってもいいんですよ？」

あいにく娘は艦娘で、私はその提督適性者だった。

『父』と『戦艦：扶桑』

私の名は富楽寿吉。

富楽（とみらく）が姓で、寿吉（じゅきち）が名だ。

やたら縁起の良い名前だが、特別運が良いわけではない。

いや……確かに数万分の一の確率で生まれてくる艦娘を子供として授かり。

更に大きな宝くじの一等にあたる方がまだ現実味があるといわれる、提督適性者であり。

その上で、娘が自らの提督適性に適合するなどということは、奇跡のようなものなのだろう。

しかしそんな希有な人生を歩んでいるといっても、私自身は特に面白みの無い普通の男だ。

「まあそう言うな、葵という名も父さんと母さんが一生懸命考えた大切な名前なのだ」
自身を艦娘名で呼んで欲しいと願う娘。

私は本心ではあるが、どこかはぐらかすように返す。

娘は夢げで少し困ったような表情を浮かべ、自然な動作で長い黒髪を耳に掛ける。

「もう、お父さまったら。そう言われてしまうとなにも言えないわ」

娘はそう言いながら軽くため息をつき、私の隣に座った。

妻と並んで座る目的で購入した大きなソファだが、振り返ればこうして娘と並んで座る時間の方が多かったように思う。

娘は美しい。

もし彼女が恋人であれば、世界中の男が羨ましがると思えるほどに。

そして、彼女が娘であるということを羨ましがると思えるほどに。

私の視線に気がついた娘は軽く微笑むと、甘えるように私の肩に頭を乗せる。

ほのかに、娘の美しい黒髪から柔らかな椿油の香りがした。

「ねえお父さま、明後日がなんの日か覚えていらしゃいますか？」

「……さて、なんだったかな」

とぼけてみたが、もちろん覚えていない。

愛娘の誕生日を忘れるほど年はとっていない。

だが、どこか気恥ずかしい部分と、誕生日プレゼントに驚いて欲しいという僅かな思いつきからそのような返答をしてしまった。

そんな私の浅はかな内心など見通しといわんばかりに、娘はクスリと口に手を当てて微笑む。

「あらひどい、娘の誕生日をお忘れになるなんて」

「……毎年面白みの無い誕生日祝いしかしてやれないのが恥ずかしくてな」

「いいえ。お父さまに祝っていただけで私は幸せだわ」

「すまないな、私と二人だけの誕生日など寂しいだろうに」

妻は仕事が忙しく、娘の誕生日にも帰ってこれないことが多い。

そのような事情から、お互いの誕生日は娘と二人で祝うのが普通になってしまった。

妻は今年こそはなんとか一緒にと言ってくれてはいるが、あまり無理をして欲しくはない気持ちもある。

「気の利いた冗談の一つでも言えればよかったのだがな、つまらない男だ、私は。せめて母さんが居ればよかったのだが」

「私はお父さまのお話、好きですよ。それに私はお父さまと二人きりの方が嬉しいです。

正直あの人を私は母親とは——」

「葵」

言っではいけないことを娘が口にしかけたので、少し固い声で名前を呼び暗に諭す。

娘は少し驚いたのか一瞬びくりと体を震わせ、拗ねるように私の左腕を抱きしめた。

気まずい沈黙の後、娘が呟くように口を開く。

「お父さま……私は、扶桑は今年の誕生日で結婚のできる年齢になります」

「……そうだったな」

あつという間だった。

娘が生まれ、そして扶桑という艦娘だとわかり。娘にとっての提督が、私だとわかったあの日から。



「ああ、富楽さんいらっしやい。注文のやつできてるわよ」

落ち着きがありつつ、どこかかわいらしさがあるようなデザインの服を着た女性が、店に入ってきた私を見て声を掛けてくる。

彼女はこの店、セレクトショップZUKAの店長であるむつはさん。

そして娘と同じ戦艦の艦娘である『陸奥』とも呼ばれる女性だ。

葵の艦娘変わりが終わってからは、娘の誕生日プレゼントは毎年ここで購入することになっているのでお互い顔なじみとっていい関係である。

「毎年ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ何時もオーダーメイドで注文して貰って嬉しいわ」

基本的に艦娘である娘の体型は、艦娘変わり後は特に変化が無い。

その為一度採寸すればその後は何度も採寸し直す手間がなく、更に同じ店で注文することによってそれを伝える手間も省ける。

もつとも、この店を利用する一番の理由は、この店専属のブランドTAKARAの服を娘が好んでいるからだが。

「今年はなにかと着る機会がありそうな服を仕立てさせて貰ったから、期待しておいてね」

「それは楽しみです」

私に若い女性の服の良し悪しなどわかるはずも無く、毎年どんな服が仕立てられているかは開けてみるまでのお楽しみとなっている。

娘も受け取った服を着て、私に一番に見せることを楽しみにしている節があり、恐らく今年も夕食の後にでもお披露目してくれるだろう。

「でも早いものね、葵ちゃん今年成人でしょ？」

「ええ、おかげさまでなんとか無事に迎えられるそうです」

「あの葵ちゃんがいつの間にかやらねえ、私も年取るわけだわ……」

うんざりしたような表情を浮かべ、どこか遠い所を見つめるむつはさん。

あまり老いとは縁の無いように見える彼女もまた、女性として思うところがあるのだろうか。

しかし改めて成人という言葉を聞いて、あの日の出来事が頭をよぎる。

「どうしたの、浮かない顔して」

「いえ、その……」

どうやら顔に出ていたようだ。

あまり表情を動かささない人間だという自覚があるが、どうやら彼女にはお見通しらしい。

少し心配そうに問うてくるむつはさんの様子に、艦娘関係なく彼女が人を見て気遣いのできる女性だと実感する。

「よかつたら話してくれてもいいのよ?」

少し悩んだ後、この手の相談をする相手としては、むつはさんがこれ以上無い適任だと気がつき、恥を覚悟で聞いてみる。

「……私が葵の、艦娘である娘の提督だというのはご存じかと思うのですが。艦娘としての娘とどう向き合うべきか、未だに自分の中で決められないところがありました」

「ああ、そういうことね」

むつはさんは「うらやましい話だこと」と一言呟き、話を続ける。

「奥さんはそのことについてなんておっしゃってるの?」

「家内はある程度しやうがないと割り切ってるようなのですが、それでも実のところはまだ私と同じく迷っているところがあるのではと、思っています」

「まあ、そういうものよね……でも富楽さん。難しいでしょうけど貴方が『扶桑』の提督

である以上、どこかで葵ちゃんとの関係を娘から艦娘に切り替えてあげるのをおすすめるわ。いくら私たちでも、魂から望んでいるものが手に届くところにあるのに、それを我慢し続けなければならぬような状況。そんなものに延々と耐えられるほど強くはないのよ」

その言葉を聞いて、私は鼓動が跳ね上がるのを感じた。

もしかして私は、なにか大きな過ちを犯しているのではないだろうか。

一見穏やかに見える娘が時折見せるあの表情。

唐突に杯に注がれてゆく水が、ある量を超境にあふれ出すようなイメージが浮かぶ。

「切り替えるなんて言葉を使っただけ、それは貴方が父親でだけありたいと望んでるみたいだから、そう言っただけであつて。もちろん父親でありながら艦娘として葵ちゃんを受け入れてあげるといふことでもいいのよ？」

内心穏やかではない私を見ながら、からかうような口調で言いながら「まあ、難しいでしょうけどね」と言葉を締めくくるむつはさん。

だがその目には僅かな真剣さと、どこか寂しげななにかが潜んでいるようにも見えた。

「切り替える……いえ、受け入れる。確かにそれが娘にとって重要なことだというのは感じています。ですが……不安なんです。そうすることによって“娘”を失ってしま

いそうな気がして」

「そうね、父親として娘を守る為に油断をしないというのはいいことだわ」

私の迷いを聞いて、彼女はその慎重さを讃えつつ微笑を浮かべる。

だがその表情は何故か、なにも知らずに破滅へと向かう道化を見ているかのようにも見えて……

「そんなステキな『父親』である富楽さんへ心からの忠告。決断は慎重に、でもなにより早いほうがいいわ」

「……それは艦娘としての忠告でしょうか？」

私の問いかけを聞いて、彼女はどこかもったいぶるような間を置いた後。

「女としての忠告よ」

そう言つて怪しく微笑む。

私は何故かその様子を娘と重ねる。

何時も穏やかに微笑む娘。

その表情とは似ても似つかない、謎めいた女の顔をしたむつはさん。

私はしばらくその表情が頭から離れず、漠然とした不安を抱えながら家路についた。



『どうして!? どうしてお父さまのことを提督と呼んではいけないの!?』

『落ち着きなさい葵、確かに私たちは提督と艦娘かも知れないが……』

娘が泣いている。

艦娘変わりが始まって、少し情緒が不安定だった頃の娘の姿。

『いやッ! 聞きたくない!』

『いいから、聞いてくれ葵』

耳をふさぎ目を閉じて頭を振る娘の両手を掴む。

娘は震えながらさらに言葉をはき出す。

『いや……それもいやッ! どうしてですか、どうして私のことを扶桑と呼んでくださらないのですか!』

私は泣きじゃくる娘を抱きしめる。

『いいか、私は葵の提督なのかもしれない。だけどそれ以上に父親なんだ。確かに私は褒められたような父親でもないだろう。だけどそれでも私は葵の父親でありたいんだ』

『……なら私は、扶桑は、一生お父さまの艦娘にはなれないのですか?』

縋るような瞳で私を見る、絶望した様子の娘。

私はその姿に危うげななにかを感じ、とつさに、まるでわがままをいう子供相手に、そ

の場を誤魔化すかのような気持ちで一つの約束をした。

『ならこうしよう、葵がお嫁さんに行ける年齢まで良い子にしてくれてたら、その時に――』

『え……？ ほ、ほんとう？ほんとに!!』

何度も何度も確認してくる娘。

私は内心不安を抱えながらも、娘が幼い子供だとたかをくくって、愚かにも軽い気持ちで。

『ああ、約束だ。必ず叶えてあげるよ』

『約束、約束ですよお父さま……』

そう返答してしまった。

それを聞いて泣きながら笑う娘。

それ見て何故か胸が締め付けられる。

私は、あの時。

――なにを約束したんだっただろうか？



まどろみから覚める。

懐かしい夢を見ていたようだ。

娘の誕生日、ささやかな晚餐を終え、プレゼントを渡したのは覚えているのだがその後……

ああ、そうか。その後洗い物をしようとして止められたのだった。

台所から追い出され、ソファで娘が洗い物をする姿と眺めつつ、音を聞きながら考え事をしていたら、いつの間にか寝ていたらしい。

台所に目を向けるが、そこに娘の姿は無かった。

「お父さま……」

居間の入り口から聞こえてきたのは娘の声。

見ると、結婚式の礼服にでも使えそうな、深紅のドレスを着た娘がそこに立っていた。そのドレスは丈の短いワンピース型で、光沢のある薄い生地。

派手すぎず、だが確かに女性としての美しさを際立たせるデザイン。

なにより大きく開いた胸元から覗く豊かな胸と、眩しい脚が目玉だ。

これはまた、随分なサプライズプレゼントだな、そう思う。

娘はゆつくりと私の側まで来て、隣に腰を下す。

娘の柔肌と体温がすぐ近くに感じられる距離、不思議と鼓動が跳ね上がる。

「お父さま、申し訳ないのですがおねがいしても？」

「ん、なにをだ？」

娘は恥ずかしそうに微笑みながら体を捻り、ドレスの背にあるファスナーを私に見せた。

閉められていない開いたドレス、白く美しい素肌、それは娘の背中。

そして気がつく、何故か娘が下着を着けていないことに。

その為細い肩、その下の脇の間からは豊かな胸が僅かに見え、更に下に視線をやるとくびれた腰、そしてその下の柔らかな臀部の膨らみが見えた。

存在するだけで男を誘惑し、虜にしてしまうかのような身体。

私は不覚にも劣情を抱いてしまう。

同時に罪悪感に襲われる、娘に欲情する自分が恥ずかしくて仕方がなかった。

頭を振り、震える手で背中中のファスナーを上げる。

娘の体に触れないよう、ゆっくりと、慎重に。

「これでいいだろう」

「ふふ、ありがとうございますお父さま」

振り向き、儂い微笑を浮かべながら私の手を握る娘。

娘が私の体によく触れるのは今に始まったことでは無い。

だというのに、何故だか私は見知らぬ美しい女性に触られているような、そんな錯覚を覚える。

「このような服を着るのは初めてで……似合いますか？」

「ああ、よく似合ってる」

渴いた口をなんとかしようとして、つばを飲み込む。

何故かその音が大きく響いた。

長い沈黙。

娘は私の手を離し、ゆっくりと私にしなだれかかってきた。

私は震える手で抱きしめる。

「……お父さま、扶桑は今日結婚できる年齢になりました」

「ああ、そうだな」

私は僅かに身じろぎする、何故かその言葉を聞いて蜘蛛の糸に絡め取られてゆくような錯覚を感じて、とっさに逃げようとしたのかも知れない。

そんな馬鹿な考えを振り払うように軽く頭を振る。

「……です、あの日の約束を叶えていたかったです」

「随分と昔のことを覚えているのだな」

なんの約束をしたんだったのかと、聞こうとは思わなかった。聞いてしまえば、ひどく娘を傷つけてしまうような気がして。

「はい、それだけを心の支えにして今日まで頑張ってきましたから」
そんなにも重い約束を忘れてしまっていることに衝撃を受ける。

あの日、私は一体なにを……。

「葵、あの日私は——」

「約束通りなんでも一つ、お願いを聞いてくださるのでしょ？」

私の言葉を遮るように、娘がそう確認してくる。

「それは……」

なんでも。

重いようで、日常的に軽く口にしてしまうことがある言葉。

だが、今はその言葉の重みに押しつぶされてしまいそうになる。

娘は私から体を離し、私の目をまっすぐ見つめてくる。

その真剣そのものの眼差しに、私は言葉が続けることができない。

娘の願いはなんなのか。

それはわかりきったことだった。

だがそれは、彼女を娘として大事に育ててきた私には、どうしてもできなかったこと。

「私の願いはお父さまに提督として私を扶桑として受け入れていただくこと。でも……お父さまが私に対して艦娘として接したくないというのはわかっています。もちろんそれは私を娘として強く愛していただいている為だからということも、わかってもいいます」

微笑みながら、淡々と言葉を綴る扶桑。

だが、感情があふれ出してももらえないかのように、その瞳からボロボロとこぼれる涙が娘の内心がどれだけ揺れているのか表している。

「ですが、それは私にはとても酷なこと……でも、そんな私の願いをお父さまに押しつけるのも私は望んでいません」

よくできた娘だ。

私にはもつたいなさ過ぎるほどに。

「ですから、今日一日。後数時間で終わる今日一日だけ」

娘が継るように、私の手を握る。

「……私をお父さまの妻として扱ってください。それが、それだけが私の唯一つの願いです」

そして一拍おいて、自らが今望むその願いを、口にした。

「妻として、扱って欲しいというのはその……」

その行為を口にすることができない。

私から、それを口にすることがどうしてもできない。

「はい、一度だけ私を抱いていただけのなら、明日からは親子の関係にもどります。もう二度とお父さまにご迷惑はおかけしません。ただ一度だけの思い出を私に頂けないでしょうか？」

私が口に出せなかつたその行為を、娘は包み込むよう優しい声で代弁してくれる。

「わ、私を……むす、娘である葵としてではなく、か、艦娘の扶桑を提督として抱いて——」

涙を流しながら、震える声で絞り出すように、想いを吐露する娘。

私はこらえきれず娘を抱きしめる。娘は震える手で私を抱きしめ返してきた。

その時、私は自分がどれだけ娘に辛い思いを強いていたのかようやくわかつた。

『いくら私たちでも、魂から望んでいるものが手に届くところにあるのに、それを我慢し続けなければならぬような状況。そんなものに延々と耐えられるほど強くはないのよ』

むつはさんの言葉が頭をよぎる。

私は馬鹿だ。

優しく微笑む娘がその裏側でどれだけ辛い想いを隠していたのか気がつけなかつた。

それが正しい事かどうかはわからない。

少なくとも私の倫理観的に正しくないというのは確かだ。

もつと娘の気持ちに耳を傾け、私の気持ちなど関係なく、彼女を艦娘として、提督の立場から受け入れてあげられればこんな事にはならなかっただろう。

だがもう、それはもう手遅れなのだ。

彼女の気持ちがあふれ出した今となつてはもう、それだけでは駄目なのだ。

だから例えそれが間違いだつたとしても、今だけは、今だけは娘の……

いや、扶桑の想いに応えるべきなのだ。

私は改めて娘を抱きしめる。

親子ではなく、恋人とするかのような情熱的な抱擁。

「すまなかつた……扶桑」

艦娘として名前を呼ばれ、そして私自身の雰囲気が変わつたことに気がついたのか、扶桑がびくりと震えた。

「ああ……提督、提督ッ!!」

だがそれもつかの間、すぐに私の抱擁に応えるように、熱い吐息を切なげに吐きながら何度も体を擦りつけるように私に抱擁を返してくる。

“娘”を“女”として抱きしめたのはこれが初めてだ。

そんなことを思いながら、ふと考える。

私は娘を愛している。

だがその愛は一体なにに対する愛なのか？

いや、わかっている、

私にあるのは家族愛だ。

家族に向ける愛のはずなんだ。

だというのに今は恋人や妻に向ける愛が必要になっている。

この愛をその愛に変えることは可能なのだろうか？

その答えは恐らく出ないだろう。

それに今日だけだ、今日だけ偽ればそれでいいんだから出す必要もない。

何故なら明日にはなにもかも元に戻るはずなのだから。

——だから今日だけは。



二人で重なり合って横になっても落ちない、大きなソファアールから体を起こし座り直す。

心地よい余韻と満足感を感じながらも、強い後悔に襲われる。

隣にはソファアールに横たわりながら、幸せそうな顔で私を見つめる扶桑。

未だ情事の余韻にさめやらぬ汗ばんだ裸身が、先ほどまで私たちが行っていた行為が夢ではなかったと認識させてくれる。

果たしてこれで良かったのか。

自問するも答えは出ず、せめて扶桑の気持ち聞いてみたいという思いがわいた。

だがなんと声を掛けるべきか悩む、娘を女として抱いた私に言えることはなんだろうか。

そんな私を見透かすように、扶桑は体を起こして私に口づけをした。

まるでなにも言わなくてもいいんだと、そう伝えるように。

長い口づけ、いつまでもつづくように思えた。

だがそれは、なにかが床に落ちる音で唐突に終わりを告げる。

「なっ、なにをやっている……の?」

震える声が聞こえた居間の扉の方を見る。

そこには妻が立っていた。

大きく見開かれた目、私はその視線に貫かれて一気に血の気が引く。
だが、扶桑はその視線を受けても一切動じず。

「あら、お帰りなさいませ。『山城』お母さま」

そう挑発するように言いながら、妖艶な顔で微笑みを返した。

それは私の知らない、娘の……女の顔だった。

私はそれを見て、どこか他人事のように

——ああ、これはもう元には戻らないな。

そう、思った。

『夫』と『戦艦：山城』につづく

『夫』と『戦艦：山城』

意識がもうろうとしている。

自分の手のひらが赤く染まっていることに気づいた。

顔をあげると涙を流しながら、私を見下ろす美しい妻と娘。

薄れゆく意識の中で考える。

どうしてこんなことになってしまったのか。

私はどこで間違えてしまったのだろうか？

娘を抱いてしまったからなのか。

むつはさんの忠告を真剣に受け止めなかったからなのか。

娘に泣き止んで欲しくて、あんな約束をしてしまったからなのか。

それとも、あの時——

あの時——



私が彼女と出会ったのは、外地から艦夢守市に引越してきてすぐのこと。場所は役所で手続きをした帰り道、通りかかった高台にある公園だった。

「はあ……姉さまが見つからない、不幸だわ」

柵の手すりに手を掛け、海の方を見ながらそう呟く美しい黒髪の女性。

その美しさに目を奪われ、私は足を止めてしまう。

なんと儂げな美しさに満ちた女性だろうと思った。

それは、孤独でか弱い存在でありながらも、強い意志のようなものを秘めた存在の優雅さを併せ持った美しさともいうのだろうか。たとえどれだけ言葉を尽くそうとも、あの日の彼女の魅力を表すことはできないだろう。

そしてその時、私を感じていた想いや感情も。

それでも、もしあの感情をなんとか言葉にするのなら、私はあの時——

彼女に恋をしたのだ。

『夫』と『戦艦：山城』

そして私は彼女が何者かなどと考えず、声をかけた。

今この瞬間を逃せば、二度と出会えないと自らを奮い立たせ。

彼女は最初驚いた様子だったが、探し人がいるなら探すのを手伝うということと、彼女の美しさを伝えようとする内容が交じった、私のつたない言葉を最後まで聞いてくれた。

聞き終えたあと、彼女はため息を一つついで。

「まさか姉さまよりも先に提督が見つかるなんて……」
そう呟いた。

それからの日々はあつという間で。

交際を始め、やがて結婚。

そして葵が生まれた。

私はその時にはじめて妻に告げられた。

自分が艦娘であるということ。

もつとも、私はそのことには気がついていた。

だが当時の私は艦娘について、内地の人間と多少の意識差があるということを感じていて、そういうこともあるのだろうと思っていたし、それら全ては追々知っていけばいい、そう感じていた。

今までそのことを告げなかったのも、きっと彼女なりに考えがあつてのことなのだろうと。

なので私は、そう告げた後ほんの少し陰りのある表情で、胸に抱いた娘を見つめる妻に。

「山城の提督になれて私は幸運だ」

そう、答えた。

それを聞いて妻はどこか寂しきとうれしきが混じったような、あの日と変わらない夢げな美しさを含んだ表情で笑ってくれた。

だが、あの日。

娘である葵が、艦娘で戦艦の扶桑だと、そして私が娘の提督だと分かったあの日。妻はまたあの時と同じ顔で笑った。

でもそれは、寂しさとうれしさが混じったような表情ではなく。

うれしさと罪悪感のようなものが混じった表情に見え。

それから妻は仕事に没頭するようになり、ほとんど家に帰らなくなった。

無論、妻には仕事で重要な役目を任されたからだ、そのことについてきちんと説明して貰い。

私自身も妻の助けになりたいと納得していた。

だからこそ、妻に代わって子育てを頑張ると決心したのだ。

妻が私を信じて任せてくれた娘を、立派に育ててみせると。

だが思えばあの時、私はもつと真剣に艦娘というものを学ぶべきだったのだ。

妻が艦娘だったからと、大半を免除された艦娘保護者講習も全て受けるべきだったし、妻がなにを考えなを思っていたのか、それらを知るためにも話し合うべきだった。

私は夫と父になる覚悟はできていたつもりだった。

だが、肝心の提督になる覚悟ができていなかった。

だからなのか、あの時私は聞けなかった。

彼女の負担になりたくなかったから、そしてこれ以上辛い顔をして欲しくなかったか

ら。

だがそれは間違つた優しさだったのでらうか。

それとも私は彼女に嫌われたくなかつただけなのだろうか。

今となつては、それは分からない。

□
□
□
□

妻に娘との情事を見られてしまつてから数日が過ぎた。

あの日、挑発するような扶桑……娘の顔を見て、妻は驚いてはいたものの、しばらくして寂しげでどこか悟つたような表情に変わり、なにも言わず自室へと去つて行つた。

そして次の日から娘は約束通り、これまでと変わらない振る舞いに戻つてくれた。

まるで、何事もなかつたかのように。

私は妻に軽蔑され憎まれる覚悟で、娘とのことを説明しようとした。

しかし妻には娘との件に関して「何時かそうなると分かつていたし、むしろ望んでい
たことだから気にしないで」と、優しく返されてしまった。

妻は、私とは違いとつくに色々な覚悟をしていたのかもしれない。

誰も私を責めない、私がしたのは正しいことだったのだろうか？

何事もなかったかのように、再び始まった日常の日々。

だが、変わったこともある、それは妻が毎日家に居るようになったことだ。

なんでも今年の葵の誕生日を区切りに、仕事の内容や部署を調整していたらしい。

おかげで今では毎日、妻は家についてくれるようになった。

例えその資格をなくしていても、私はそのことが嬉しかった。

妻と再び共に暮らせる、そのことが。

そしてようやく始まった家族三人での生活。

だがそれは……

「あ——」

「どうぞ、お父さま」

朝食を三人で食べていた時のこと、言葉を発するよりも先に。

私の求めていたものを察してくれた娘が、醤油差しを手渡してくれる。

そして気がつく、そんな娘と私の様子をどこかうらやましそうに見つめる妻の姿。

そんな妻に流し目を送る娘、それはどこか……

「や、山城も使うか？」

「え？ ああ、そうね、ありがとう」

頭に浮かんだなにかを振り払うように、妻に使い終えた醤油差しを手渡す。

視界の端で、娘が辛そうな表情をしているのが一瞬見えた。

すぐに娘に視線を移すが、娘はいつも通りの穏やかな表情で食事を続けている。

「そういえばお父さま、今度休日と一緒にあの服を着て買い物に行きませんか？」

「ん？ あ、ああ、構わないよ」

娘が言うあの服というのは、恐らく二年前の誕生日の服だろう。

買い物に行く時などに娘が好んで着る、白いワンピースを思い出す。

「え……その、あの服を着るのかしら？」

妻が恐る恐るといった風に、口を開く。

彼女は恐らくあの日、床に脱ぎ捨てられていた赤いドレスのことを思い出してしまっ

たのかも知れない。

「あなたが考えてる服じゃありませんよ」

「ツ!？」

私が訂正するより早く、娘が素っ気なく答える。

言葉に詰まる妻、どこか冷たい娘。

「せ、せつかくだし三人で行こうか、山城も色々と必要なものがあるだろうし」

「え、あ、そうですね。ありがとうあなた——」

「嫌」

私の提案に同意しようとした妻に被せられる、娘の短く鋭い拒絶。

その拒絶はなににたいしてなのか、誰にたいしてなのか。

「ど、どうしたの扶桑ねえさ……いえ、葵。えっと、どうしてなのかしら？」

「……」

娘として接するのになれていない、妻の拙い問いかけ。

娘は妻の問いかけには答えず、私の方を向いて笑みを浮かべる。

「ねえお父さま、お父さまは私のことを愛してくださいさつてますか？」

「あ、ああ、勿論だ。『娘』として大切に思っているよ」

何故か、娘という部分を強く意識してそんな答えを返してしまう。

それは妻への罪悪感からか、それとも自分の行いに対する罪悪感からなのか。

娘はその答えを聞いて、どこか悲しそうな表情を浮かべる。

「ねえ、葵——」

「どこかに行きたいなら、一人で行けばいいでしょ」

妻に顔も向かず吐き捨てるように、答える娘。

啞然とする私や妻がなにか言う前に、娘は立ち上がって居間から出て行ってしまっ

た。

残された妻と私、妻は箸を置くと手で顔を覆って泣き始める。

私はなにも言えず、妻の肩を優しくさすることしかできなかった。

今まで通りの、普通の家庭の食事風景のはずだったのに。

それは……。



食事の後、妻の自室である和室に呼ばれた。

妻の自室はあまり物がなく、腰までの高さのダンスの上に一つ置かれた娘と写った写真。
真。

その写真が入った写真立て以外、特に目立つものはない。

座布団を二枚並べ、向かい合って座る。

「ごめんなさい」

妻がなにについてなのか分からない謝罪を述べた。

私はなにがとは聞かず、続く言葉を待つ。

「ごめんなさい、あなたにずっと黙っていたことがあったの。本当はあの日、全てを話そ

うと思つていただけれど、その、あのことがあつたから……扶桑姉さまにはあの日、帰ると伝えていたのだけれど。それから……これからはずっと一緒にいられるということも」

少し悲しそうに目を伏せる妻。

だがそんな表情ですら美しく感じてしまふ自分に、罪悪感を覚える。

そしてあの日のことは、全て娘の計画だつたということなのか。

しかし、なぜそんなことを……そんなことすらわからないのか、私は。

「なにかから話すべきなのかしら……そう、私はあの子が、扶桑姉さまが生まれてとても嬉しかった。提督という存在と同じくらい扶桑姉さまをずっと探していたから」

妻が誰かを探していたというのは知っていた、それが自分の姉であるということも。

だが、それが艦娘としての姉だということは知らなかった。

そして、そんなことすら知らなかったことに愕然とする。

結婚して何年もたっているのに、私は妻のことをなにも知らないのだと思ひ知らされ
て。

妻のことも、娘のことも、私はなにも分かつていなかったのだ。

「これは、私たち艦娘という種の間接や感情というより。私の、艦娘としての山城の個性というべきものなだけけれど……山城という存在は提督と同じくらい、艦娘としての姉

である扶桑姉さまを求めるの。事情あつて私はこの街から出られないのに、この街には大切な存在である姉さまにあたる艦娘が居ない。そんな時、あなたと出会えて、そして生まれてきた子が扶桑姉さまだったとわかつた時、本当に嬉しかった」

珍しく温かな微笑みを妻が浮かべた。

だがそれはすぐ悲しげな表情に変わる。

「だからこそとでもいうのか、私は悩んだわ。このまま母親として扶桑姉さまと長く一緒に居れば、姉妹として接することができなくなるんじゃないのかつて。おまけに姉さまよりも先に提督であるあなたと出会つて結婚までして……姉さまより先でよかつたのかつて、凄く悩んだ」

探し求め、そしてなによりも大切に思う姉が、娘だった。

私の乏しい想像力でも複雑に感じるのだから、妻はどれだけ複雑で深刻な想いを抱えていたのだろうか。

「だから……私は扶桑姉さまと離れることにした。あなたと私が過ごした時間以上に、二人が一緒にいてくれたら、お互いの立場が同じになると思つたの。扶桑姉さまとも、その、あなたとも離れて過ごすのはとても辛かつたんだけど」

私は妻の苦悩と、その決断の重さに震える。

彼女がどれだけのことを考えて、難しいその決断をしたのかという悲しさと、そして

そのことについて力になれなかった自分の力のなさに。

「でもそれは……間違いだつたんだと思う」

妻が膝の上で両手を握りしめる。

「その結果、あなたに扶桑姉さまを自分の子供として強く意識させてしまうことになった……あなたの気持ちを考えて、もつときちんと話し合うべきだった。ごめんなさい、全ては私が招いたことだわ」

妻は瞳に涙を湛えながら、言葉を続ける。

まるで自分には涙を流す権利などないと、自らの感情を抑え込むように。

「多分、扶桑姉さまは焦っていたんだと思うの。あなたにはいつまでも娘としてしか見て貰えず、母としても妹としても頼るべき私は家に居ない。だからなんとか女としてあなたに見てもらおうとした」

「そして私は……それに応えてしまった。すまない、私が全て悪いんだ。君はなにも悪くない」

口に出して、自らの過ちを深く痛感した。

だが妻は首を横に振って、私の過ちを否定する。

「いいえ、それは悪くないし、あなたも悪くない。扶桑姉さまはただあなたと肉体関係じゃなく、提督と艦娘として繋がりがたかただけだったのに。私が急に家に戻るなんて

なにも考えずに言ってしまったせいで、扶桑姉さまを追い詰めてしまった……私が家にいるようになる前に肉体関係を結べれば、私に追いつける、並べると思ったのかも知れない。全て私のせいよ」

妻はこらえきれず、ついに涙をボロボロとこぼす。

私は思わず妻を抱きしめる、嗚咽をこらえながら妻は続ける。

「でもあれからあの子は、扶桑姉さまは私のことをまるで敵のように見る。扶桑姉さまに母親として見て貰えるなんて思っていなかったけれど……妹としてすら見て貰えないなんて!! 話をしてみても凄くよそよそしくてツ!! ……自業自得なのはわかってる、でも悲しいの。こんな、こんなことになってしまふなんて……不幸だわ」

妻は本当に葵のことを愛していて、色々なことを考えたのだろう。

だがそれはきつと、山城として扶桑に接したいという強い思いから。

そして嫌な考えが頭をよぎる。

妻が娘を愛しているのは間違いない、そしてそれ以上に山城として姉である扶桑を愛しているのだと。

つまり彼女にとつてはなによりも大事なものは扶桑なのであって、私のことはおまけ程度でしかなく、むしろ愛してなどいないのではないのか……と。

「私が言えた義理ではないけれども。扶桑姉さまには……艦娘として接してあげて欲し

い。そして叶うなら扶桑と呼んであげて……」

妻は娘の、いや、姉としての扶桑の幸せをなによりも願っている。

そんな妻が涙をこぼし継るように絞り出した願いに、私はただ頷くことしかできなかった。

何故なら例えもうその資格をなくしていたとしても。

私は――



それからまた何日かが過ぎた。

私は妻と話し合ったその日に葵……扶桑に、これからはそう呼ぶと伝え、私のことは好きな時に提督と呼んでいいと伝えた。

娘は「それがお父さまの、提督のお望みでしたら」と微笑み受け入れてくれた。

それからというものの妻を見る時、どこか自信に満ちた表情を浮かべていた娘だったが、何故か時間がたつにつれ、その余裕がどんどんなくなっていくように見えた。

それに比例するように、家にいる時間が長くなった妻もまた、その表情を曇らせてゆく。

私はどうにかできないものかと、何度も娘と話をしようとした。

だが私が娘の艦娘名を呼ぶたび、そして娘が私のことを提督と呼ぶたびに娘は辛そうな表情を浮かべ、私から逃げるように去って行き、どうしても話をする事ができなかった。

そんな、歪な生活が続く毎日。

私は、自室で艦娘について書かれた本を読む。

そこには現在艦娘について解かっている様々なことが記載されていた。

そしてその中の「提督」の項目。

現在適合している提督が死ぬと、艦娘たちは新たな提督に適合することができない。

その項目を何度も読み返す。

馬鹿なことを考えていると、自分でも思う。

だが、もし解決する方法がこれしかないのであれば、そうどこかで思っている自分がない。

そんな答えのない思考にとりつかれ、延々と悩む。

ふと、大きな物音が居間の方から聞こえてきた。

自室を出て居間の扉の近くまで移動すると、妻と娘の言い争う声はつきりと聞こえてくる。

「私とお父さまにはあなたに無い繋がりがある!! あなたは艦娘で妻としてお父さまと関わりがあるかも知れないけれど、それは他人だわ!! それと比べて私にはお父さまと親子の絆がある!!」

「……な、なにを言っているの?」

「言葉通りの意味よ、この家ではあなただけが他人なの!!」

「いッ!? いい加減にしなさい!! 一体なにが、なにが不満なの!! 母さんに話して頂戴!」

「今更……今更母親面しないで!!」

「なら妹として聞きます! どうして、扶桑姉さまはなにが不満なのですか!」

「不満? 不満なんてないわ、不満なんてない!!」

娘の聞いたことのない怒りに満ちた声。

なにより会話の中で、娘が一度も妻のことを「お母さま」と、そして「山城」とすら呼ばないことがひたすら胸に刺さった。

「ただ悲しいの……」

肩で息をしていた娘は、呼吸を落ち着けぼそりと呟く。

「お父さまはね……あなたの名前を呼ぶ時と違って、私の名前を呼ぶ時……どうしてこの名前前で呼ばなきゃならないんだらうって感じで、私を扶桑と呼ぶのよ」

「それは!？」

「違う、おまえは私の娘で扶桑なんて名前じゃ無い、葵という名前だ。そんな、感じて……確かに扶桑と呼んでくださるようにはなつたけど。それは……あなたの、山城という名前のように、御自分の艦娘を呼ぶような呼び方じゃ無い、お父さまは私を娘としか見ていない……」

娘の苦悩はわかっていたつもりだった。

だがそれはほんの氷山の一角で、私は……

「抱いてくださった後でもお父さまは……私を……娘としてしか見てくれなかった。あなたを見るように、愛する艦娘を見るような目じゃなかった。私が、お父さまを提督と呼ぶことを許して貰えた今になっても……お父さま自身はそれは正しくないことだって、思われてる……」

娘の言葉を聞いて、胸が締め付けられる。

妻の願いを叶えるどころか、かえって娘を傷つけてしまっていたという事実。

そんな自分が不甲斐なくて、自分を殺したくなる衝動が湧く。

「私は嬉しかったの」

「……なにがですか？」

「私はお父さまの娘、これは永遠に変わらない事実のはずだった。私は今までお父さまの娘であることがとても嬉しくてとても辛かったわ、だってそのせいで私はお父さまに艦娘として見て貰えず、私はお父さまを提督として見ることを許されなかったから」

先ほどとは違い、一見冷静な様子に戻った娘。

だが、淡々と紡がれる言葉にはひたすら悲しみが滲み出ている。

「でも、お父さまに抱かれてから私は変わった気がした。お父さまはあれから少しだけ私のことを女として見てくださってると思えた、だからこのまま頑張ればいずれ艦娘としてみて貰えるようになるって……」

少しだけ明るさを取り戻したかに聞こえた娘の声。

だが、それはどこか狂いはじめた時計の歯車の音にも似ており。

「だけど気づいてしまったの、それでもお父さまにとつて私は永遠に娘でしかないということに。私がこんなにも愛しているのに、想っているのに……お父さまの気持ちは、全部あなたに向いていて。お父さまはあなたと私が姉妹だなんて思っていない、私とあなたはこんなにも似ているのに……身体の関係を結んだ今でも、お父さまは私のことを娘だと思ってくださってる。とても大切で、お父さまにとつてかけがえのない存在で、つまりそれは他のどんなものと比べたって私の方が大事だって」

「その通りです！ あの人は扶桑姉さまのことを大切におもって——」

「そうよ!! 大切な大切な娘だとおもってくださいってた!! でもそれはあなたの娘だったからよ!! だからこそ私は大切にして貰えて、そしてそう思ってくださいってたお父さまにつけ込んで抱いて貰えたの!!」

そして噴火するかのような娘の叫び、絶句する妻。

「……私は卑しい艦娘だわ、あの日も心の中ではもう全部わかっていて。だからこそあなたに見せつけるようなことをして、憂さ晴らしをしたかったのかも知れない……あは、あはははははは——」

「ふ、扶桑姉さま?」

娘の様子が明らかに変わったことに、妻も動揺している。

娘の乾いた笑いが聞こえる。

どンドン娘が崩れてゆく、全て、私の……

ツ……!!

駄目だ、駄目だ、絶望するな。

今この瞬間、元凶である私自身にそんなことが許されてなるものか。

「……こんな感情、持たなければよかった。娘でなんてなければよかった、お父さまが提督じゃなければ……なけ、なければ……」

「……いやだ、私に、私なんかが父親で提督でなければこんなことには——」

娘の言葉に同意を覚えるも、すぐさま娘の言葉に否定される。

「いやだ、いやだッ、いやだッ!!」

必死になにかを繋ぎとめるように、娘が何度もそれを否定する。

何度も、何度も、いやだと叫ぶ。

「お父さまのお声を聞いたはじめての日も、朝起きてお父さまの顔を見る毎日も、そしてお父さまが抱きしめてくれたあの日も、全部、全部覚えてる……お父さまが、お父さまが提督じゃなければいやッ!! この感情を失うなんて嫌!! どんなに辛くても、これはお父さまへの想いは、提督への想いは……」

どうして、どうしてだ、私はなにを間違えたんだ。

「結局、私はどこまでいってもお父さまにとっては娘で、いえ……こうなってしまった以上もう娘ですらない。私は……一体なんなの……なにに縋ればいいの……どうすればよかつたの……私が……悪かつたの……?」

自分を形作っている色々なものがはがれ落ちてゆくかのように。

娘の言葉の内容は、どんどん不安定になっていく。

本当なら今すぐ娘を抱きしめて安心させてやりたいのに。

私にはもう、その資格が、妻と娘に触れていい資格がもう。

「扶桑姉さまあの人も悪くありません！ 全ては——」

「そういえばあなたは、どうしてお父さまのことを『提督』と呼ばないの？ あの人の、あなた、主人、ねえどうして？ もしかして私に遠慮してるのかしら？ 実は二人きりの時は提督と呼んでたりするのかしら？ ああ、そうか、私が邪魔だったんだわ。うん、姉妹で母親のあなたにとつて……私は邪魔な存在だったのね……違う？ あれ、つまり私こそが他人だった……の？」

私は妻を、そして娘を愛していたはずなのに。

愛していたはずなのに、私がそれを壊してしまった。

「ち、違います、扶桑姉さまはあたしの大切な『家族』です！」

必死に妻が叫ぶ『家族』が果たしてどちらを指すのかはわからない。

だがそれでも、もうこれ以上私は妻と娘の叫びを聞いていられなかった。

言い争いを止めるため、居間の扉を開ける。

音を立てて現れた為、すぐに二人の視線が私に集中した。

私は妻の助けになりたいと、いや、それと関係なくどれだけ私が娘のことを大切に思っているか、こんなことになってしまったけれども、変わらず娘のことをどれだけ大切に思っているか伝えようと口を開く。

「そうだ、おまえは私にとって大切な——」

大切な、大切ななんだ？

葵、扶桑？ 私は彼女をなんと呼べばいい？

大切な子供？

大切な女性？

大切な艦娘？

愕然とする、正しい答えがわからないということに。

どう言えればいいのだ、どうすれば娘を傷つけずにすむ？

こちらを真つ直ぐに見つめる妻と娘。

彼女たちの目に今の私はどう映っているのか。

間違つた愛を与える父親。

愛妻の信頼を裏切つた夫。

罪を犯せばなんらかの形で、罰を受けなければならない。

娘に手を出しておきながら罰せられない。そんなわけがない。

妻は言った、あなたはなにも悪くないと。

娘は言った、お父さまを愛していると。

私に罪はないのか？

そんなわけはない、過ちを犯したのは私だ。

私こそが全ての原因だ。

自分の罪を理解した瞬間、突然胸が苦しくなる。

整えようとしても呼吸は荒くなり、感じたことのない痛みを胃に感じた。

心臓が鼓動する度にその痛みが胃に走り、思わずうずくまる。

なにかが食道をのぼってくる感覚、とつさに手を口に当てるが吐き出してしまふ。

赤黒い、それが血だと気がつくのに少し時間がかかった。

「あなた!!」

「お父さま!!」

妻と娘の叫び声が聞こえる、薄れてゆく意識の中で思う。

どうしてこんなことになってしまったのか、どこで間違ったのかと。

だが答えは出ず、痛みを増してゆく心臓の不規則な鼓動を感じて思う。

思い通りにならない身体、感じたことのない痛み、恐らくこれは死の前兆なのだ。

だが、これでよかったのかもしれない。

涙を流しながら私を抱える妻、手を握る娘。

彼女たちをこれ以上苦しめ、悲しませない為にもこれで。

願わずにはいられない、妻と娘が幸せになれますようにと……

「あなたッ!! あなたッ!!」

「は、早く救急車を、お、お父さましつかりして!!」

すまない、すまない、すまない。

こんな夫で、そしてこんな父親ですまない。

そう言つて二人を落ち着かせようと口を開くが、声が出ない。

最後まで無力な父親で、そして夫ですまない。

だがもう大丈夫だ、もう大丈夫だ。

どうか、二人とも幸せになつて——

『
』と『戦艦：扶桑：山城』

私があの人と出会ったのは、仕事の合間に姉さまを探していた時。

役所でなにか情報がないか聞きに訪れたけど、見事に空振りに終わって失意に暮れていた日。

そしてその帰り、高台にある公園で落ち込んでいたあの日。

「あ、あの。誰かお探しですか？」

声を掛けてくれた、その声を聞いた日のことを覚えている。

その時私は誰かを探していて、今思えばそれは母親で妹である存在だった気もする。

「父さんだけでごめんな、でも今日はお母さんが帰ってくるよ」

それは会いたかった人。

でも、まだ会いたくなかった人。

「あの、その、今日はあなたの美しさのような、いい天気ですね」

不器用だけど、優しさに溢れた言葉。

私はきつと幸せなんだろう、探し求めていた人に会えたのだから。

「今日は葵の好きなものを作ってあげるよ、父さん頑張って覚えてんだ」

始まった幸せで、不幸な日々。

求めるものは得られず、求めるものがそこにあるのに。

「愛しているよ」

妻である私に愛を伝えてくれるあの人。

私はあの人を提督と呼んだことがない。

いつか時が来たら、姉さまと一緒にそう呼べる日が来ればと。

「愛しているよ」

娘である私に愛を伝えてくれるあの人。

私はあの人に艦娘として見て貰えたことがない。

でもいつかは、山城と一緒に艦娘としてあの人を支えたい。

でもそれは。

でもそれは。

私の、私たちの過ち。

あの人にとってなにか一番なのか考えもせず。

あの人にとってなにか正解なのか話し合おうともせず。

あの人を追い詰めてしまった。

それは。

あの日に私の手を引いてくれていた存在を。

あの日あの場所で声を掛けてくれた存在を。

失う——

すべてはもう元には戻らない。

私たちはどうすれば。

□□□□□

極度のストレスが原因と思われる急性胃粘膜病変。

それが富楽が吐血した理由だと、扶桑と山城は医師に告げられた。

今のところ命に別状はないが、絶対安静だとも。

病室で眠る二人の提督である富楽を扶桑と山城が見守っている。

やがて山城が静かに立ち上がり、病室の外へと出る。

その姿を見て、黙って扶桑も後に続いた。

人気のない待合室のベンチに、二人は並んで腰を下ろす。

お互いにも言わず、黙って座っていたが、やがて扶桑が呟く。

「どうしてこうなってしまったんでしょうね」

山城が静かに答える。

「多分、色々な歯車がずれてしまっていたんです。それに気づかず私が回し続けてしまったから、あの人に負担を掛けて。そして扶桑姉さまを傷つけてしまって……私のせ

いですが、私がつとあの人にきちんと色んなことを話していれば、私が一人で決めずに扶桑姉さまと話し合っていたらいいよ——」

「違うわ、それをいつたとしても全ては私のわがままが原因だったの。私が……私こそあなた……山城ときちんと話をするにはいつでもできたはずだったのに、それをしようとしなかった。こうなってしまうから気がつくなんて皮肉なものだけど、山城がどれだけ私のことを思ってくれて、考えてくれてるかなんて……わかつていたはずなのに」

扶桑の言葉を聞いて、山城は悲しそうに微笑む。

「なんだか不思議です。娘の部分を知らないのはしょうがない、でも扶桑姉さまのことならなんでも知ってるつもりだった……はずなのに、全然知らないことばかり。ねえ扶桑姉さま？ 扶桑姉さまは提督が私のことを、自分の艦娘として名前を呼んでるっておっしゃってましたが、実はそうでもないんですよ？」

「え？」

「実は私は扶桑姉さまが生まれるまで、あの人に自分が艦娘だということを隠してたんです。だからずっと私は名前を呼ばれるとき、艦娘ではなくて恋人や妻のような感じで呼ばれて。私が悪いはずなのに、姉さまみたいにどうして自分の艦娘として呼んでもらえないんだろうって……ふふふ、姉さまと同じことを思っていました」

「……ふふふ、おかしいわね。ほんと、姉妹そろっておかしいわ」
再び沈黙が二人を包む。

「扶桑姉さま。私たちは元の形には……いえ、幸せな形にはなれないのでしょうか？」
「私たちの……私の意識は時間をかければ変えられると思う。いえ、絶対に変えなければいけないわ。でもお父さまが……」

自分たちと強く家族でありたいと願う父の姿が頭に浮かび、言葉に詰まる扶桑。

だが自分たちが側にいれば、あの優しい父はきつと己のことを顧みず、艦娘としてありたいと願う自分たちのために、無理をし続けるだろう。

そうなれば今回のようなことがまた……

あの人の、お父さまの、提督の側を離れるなんてという考え。

でもそれしか方法がないのであればと、出せない、出たくない答えが浮かんでしま
う。

扶桑と同じく、そのことを察した山城はなにも言えず、ただ時が流れる。

ふとそこに、カラカラと点滴スタンドを持ちながら二人の前に通りかかる女性。

その女性は、項垂れた扶桑と山城、二人の前で立ち止まり声を掛けた。

「あら珍しい、扶桑と山城がそろって並んでるなんて。久しぶりに見た……デース」

自分たちの名前を聞いて顔をあげた二人が見たのは、患者衣を着た美しい亜麻色の髪
の女性。

その姿にどこか見覚えのあつた山城は、女性の名前を呼ぶ。

「あなたは……金剛さん？」

艦娘としての記憶、そして新聞やテレビニュースで目にするところのあるその姿。

「そうよ、しかしあなたたち姉妹は何時も揃って不幸そうな顔をしてる気がし……マー
スって、考えてみれば、あの人のため以外にわざわざしゃべり方を変える必要はないわ
ね」

そう言つて金剛は二人の間に無理矢理ドスンと座ると、点滴から伸びた管を口に咥え
る。

点滴の中身は紅茶だった、そもそも艦娘に針とか通らないし当然なのだが。

「検査入院つてやつの中でね。死ねない理由ができたから、試しに受けてみたんだけ
どこれがまた退屈で退屈でしょうがないわ。丁度いいからその不幸な顔の理由でも話
しなさいよ」

ひどく尊大な物言い、だが扶桑も山城も彼女が生きた伝説であるあの金剛だというこ

とは、よく知っていた。

百年を生きる伝説の艦娘、金剛連合会の最高権力者。

そしてこの艦夢守市の中でも、最大の力を持つ存在の一人。

現状世界で唯一存在している金剛の個体。

扶桑と山城は、艦娘としても永きを生きている存在を前に一瞬萎縮するも、自分たちが抱えている今の問題について、なにか解決する術がないかと縋る思いでこれまでの経緯を話す。

金剛は、悲しみに満ちた彼女たちのこれまでのことを、黙って聞いていた。

ただ、話を聞くにつれ金剛の表情はひどく不機嫌そうなものに変化していく。

聞き終えた金剛は、啞えていた点滴の管をペツツと吐き出し、苛立ちを隠そうともしない口調でしゃべりだす。

「まったく、あなたたち扶桑型は根がネガティブで、不幸不幸とぼやいてるからなのか、どうしても幸せについて難しく考えすぎるところがあるのよね……私たち艦娘にとつて唯それだけで幸せになれる、それがどういふことなのかなんて少し考えれば分かることなのに」

金剛はそう吐き捨て立ち上がると、拳を握り締める。

そして呆然と金剛を見つめる扶桑と山城の頭の上に、ノーモーションで拳骨を落し

た。

「ツいゝゝゝ!?」

艦娘の不思議な装甲をぶち抜いてはいるダメージの痛みに、思わず頭を抱えてうずくまる二人。

そこに追い討ちをかけるように金剛は続ける。

「艦娘として扱って欲しい? 妻や娘として艦娘名を呼ばれるのが嫌? あなたたちもしかして頭バーニングしてんじやないですかあ!? 提督をみつけていて、そして側に居られる。それ以上の幸せを求めようだなんてあなたたちには百年早いのだよ!!」

その言葉と拳には、百年以上提督を探し続けた艦娘の想いが込められていた。

そして扶桑と山城は今まで自分たちが犯してきた過ちの、根本に行き着く。

ただ大切な存在の側にいられるだけでよかったのに、自分たちはなにをやっているのかと。

「提督にどう思っただけで欲しいかなんて贅沢は五十年たつてから考えなさい、どうしても提督を変えたいのなら変わるまで百年でも側で待ち続けなさい。変化を急いだってろくなことにはならないのは、今回のことでよくわかったでしょ!」

過ちを認めた、なら、認めたならどうすべきか。

これからどうすべきなのか……

繼る目つきの二人に金剛の言葉が降り注ぐ。

「そもそもこんな所でばやいてる暇があったら、提督のそばに寄り添って、助けに、力に、そして役に立てるよう努力しなさい。なにもできないならせめて愛していると伝え続けなさい！」

そうだ、できることはある。

艦娘としてできることは？

家族としてできることは？

二人の女、二人の艦娘、二人の姉妹、そして二人の母娘にできることは？

同じことだ、それは同じことだったんだと。

自分たちにはまだできることがあった。

そのことを教えられた扶桑と山城は、無意識にお互いの手をつなぎ、握りしめる。

「ぼさつとしてんじやない！ ほらとつとと行けッ!!」

発破を掛けるような金剛の大きな声を聞いて、ビクリと一瞬固まった扶桑と山城だったが、すぐに力を取り戻したかのように立ち上がる。

その様子を見て、金剛が愉快そうに凄みのある笑みを浮かべる。

扶桑と山城はそんな金剛に一礼して走り去っていった。

自分たちにとってなによりも大切な存在の元に。

「まったく、これだから扶桑型つてのは……」

金剛は二人を見送ったあと、頭をかきながら再び点滴の管を啜える。

「でもまあ覚悟を決めたらやたら強くなるのも、扶桑型よね」

金剛はため息を一つ吐くと、とある店がある繁華街の方向に目を向ける。

その表情は先ほどまでと比べて、とても柔らかいものだった。



目が覚めて、まず感じたのは失望だった。

自分が生きていることに一体どんな価値がある、妻と娘を悲しませるだけだ。

幸い妻と娘はいない。

幸い、なるほど、確かに名前の通り幸運だなと、自嘲が浮かぶ。

痛む胃を押さえて、病室の外に出る。

階段をみつけ、上に向かう、目的地は屋上。

「私は、生きていてはいけなかった」

馬鹿な考えだと思っていたが、それは正解だった。

妻と娘の叫びと涙を思い出す。

自分と似た人間が大勢いるとは思わないが、そういった人たちはこの問題にどのような答えを出すのか、ふと気になる。

だがその答えが出る前に屋上に着いてしまう、まあ構わないか。

幸い屋上のフェンスは乗り越えられる程度の高さだった。

「あなた!!」

「お父さま!!」

乗り越えようとしたところで、もう聞くことができないうちで聞いた声が聞こえる。

「まいったな、どうしてここがわかったんだ?」

私がこの答えに行き着いたのは、ついさっきだというのに。

「あなたが……屋上に向かうのを見かけた少年がいて、その子に聞きました」

なるほど、これは運がいいことなのだろうか。

最後にもうそんな資格はないとしても、愛する妻と、愛する娘の姿を見ることが嬉しい。

そして、そんな彼女たちに余計なものを見せてしまうことを申し訳なく思う。

「私は、生きていては駄目だった。これ以上私が生きていれば君たちを不幸にしてしまう」

そう告げて私はフェンスを乗り越える。

誰かを巻き込んでしまわないように選んだ位置。

病院の裏手のなにもない場所が眼下に見えた。

「やめてあなた!!」

「まって、まってくださいお父さま!!」

「すまない……二人とも」

私は目を瞑る。

倫理的に見れば私は娘を抱いた最低の父親だが、世間一般的に見れば提督として艦娘を抱いたということでもあり、その為私がしたことは正しいこととなってしまう。

だから彼女たちは私を心配し、こうして私がしようとしていることを止めようとしてくれている。

だが、やはり私がしたことは彼女たちを不幸にすることで、その責任はとらなければならぬ。

いや、責任というよりも罰を受けなければならぬのだ。

走馬燈が浮かぶ。

妻と、そして娘との日々。

幸せだった、私だけが幸せだった。

私はもう十分幸せだったんだ。

だから、今度は彼女たちが幸せに――

「もしっ！　もしあなたが命を絶つたら私は後を追います」

妻が叫んだ言葉が聞こえ、私は意識を引き戻される。

「なッ!」

「……そうね山城、一人でなんていかせないわ、私も一緒よ?」

続く娘の言葉。

私はその時はじめて、妻と娘が手を繋いでいることに気がつく。

何故?」

「き、君たちが死ぬ必要はないだろう!!」

沢山の疑問、だがなによりも何故、何故彼女たちが死ぬ必要があるのか。

そのことで頭がいっぱいになる。

「あら、どうして?　これからは一緒にいるっていったでしょ?」

「私には、お父さまが存在しない未来に価値なんてないんです」

静かにそう告げる妻と娘、静かで儂げで、でも強い意志の籠もった美しい瞳。

彼女たちが私を思いとどまらせる為嘘を言っている訳ではないと、その視線から

伝わった。

「わ、私が死ねば私は君たちの提督では無くなる！　そうすれば葬はきつと幸せになれる！　それに妻がいるのに、よりもよつて娘を抱いた愚かな夫などいない方がいいに決まつてる!!　艦娘としても母娘としてもそれが救われる道なのに、何故それが——」

「あなたを愛する存在が、それでは救えないわ」

そう言ったのは妻だったのか、それとも娘だったのか。

だがその言葉で、先ほどまで絶対に正しいことだと。

そう思っていた行為が、絶対に間違っていることだと——

「愛しているんです、お父さまとして提督として、なによりも富楽寿吉であるあなたを……」

「お願い、お願いよあなた。愛する人を失う悲しみを……私たちに与えないで」

ゆつくりと手を繋ぎながら、私の方へ歩いてくる妻と娘。

その一步一步に凄まじい悲壯感を感じてしまう。

彼女たちの悲しい叫びも、表情も、なにもかもを見てしまったつもりでいたのに。

またそれを上回る、悲みを私は目にしてしまった。

罪に対する罰が必ず行使されるというのなら、この状況は私のなんの罪に対する罰なのだろうか。

「く、来るんじゃない!」

叫ぶ、なにを怖れているのかわからないまま。

だけど彼女たちは止まらない、一步一步ゆっくりと私に向かって歩み続ける。

「家族として、そして提督と艦娘として、一緒に幸せになる道を探しましょう? 大丈夫、

時間はある、きつとみつけられるわ」

「無理だ。わ、私には提督なんて無理だ。艦娘についてこんなにも無知でなにもできない

い、こんな男が——」

「私が教えるわ、娘と一緒に。それにあなたが願うなら私たちが艦娘だということとは忘れて、家族として生きる道を選んでもいい。大丈夫よ、今の私たちならできる」

静かに、だけど力強く、妻が涙を流しながらそう言つて笑みを浮かべる。

なにがあつたのかはわからない、だが今の妻と娘はなにか固い絆で結ばれているように見える。

どこか安堵している自分がいた。

そうか、もう二人は大丈夫なのだ。

「だが……私は娘を抱くような畜生な父親だ。それに何年も何年も、墓が苦しんでいるのに気がつけなかった、そんな父親は——」

「愛しているから艦娘として抱いてくださったんでしよう？ それに今ならわかります。どんなに苦しくてもどんな形であつたとしても。お父さまが私を愛して下さつてくれていたことが、そして何時も側にいて下さつたことが、どれだけ幸せだったのか」

胸に手を当てながら、妻と同じ顔で涙をこぼしながらそう言つてくれる娘。

苦しなくても幸せだった、何故かその気持ちがあつた。

皆の思いの方向はずれていたのかも知れない。

でもそれでも、それでも皆が皆を愛していたのだ。

苦しなくても想い合っていたことが幸せだったのだ。

「それは、それは……だが私で、私で本当にいいの……か？」

私にはもうわからなかつた。

なにが正しいことなのか、私には。

「お父さま以外のお父さまは……ごめんです。ずっとずっと、ずっとお父さまと一緒にが

いい、お父さまとお母さまと一緒にいいの」

「私はもうあなたなしに生きられない。私……素直じゃないから、ずっと言えなかったけど。愛しています、あなた」

二人の手が、フェンスを掴んでいた私の手にふれる。

その瞬間、自分の身体から色んななにかが消えてゆくのを感じた。

もう二度と、触れる資格をなくしてしまったと思っていた、妻と娘の手を握る。

私は二人の手を再び握れることが嬉しくて、そんな自分が情けなくて。

涙をこらえることができず、泣いてしまった。

『幸せな男』と『戦艦：扶桑：山城』

「お父さまどうぞ、お茶になります」

「あなた、ほらそこ詰めてください」

青い空の下、シートを広げて妻と娘の三人で昼食をとる。

「ここでお父さまとお母さまは出会ったのですね」

「そうよねえさ……葵。そのベンチに座ってる時に、この人にナンパされたの」

「いや、あれは……まあ、そうだな」

クスクスと笑う娘と、じつとりとした目で私を見つめる妻。

退院後、私たちはあの高台の公園で家族の時間を過ごしていた。

あれから私たちは話し合い、しばらくは家族として一緒に生きようと決めた。

まだどこかきこちなさはあるものの、妻は娘を葬という名前で呼び、娘は妻をお母さまと呼ぶ。

慣れないことで、時々扶桑姉さま、山城と呼び合うこともあるようなのだが、別に何がめることでもないし、慣れるための時間は沢山ある。

ゆつくり、ゆつくりと家族としてやってゆければと思う。

だが彼女たちを幸せにするには、私も変わらなければならぬことがある。

それはいつかは娘を、そして妻を艦娘として受け入れられるようになりたいのだ。

妻と娘を艦娘としても愛せるようになりたい、そう心のどこかで思うようになった。

でも今はまだ難しい、そもそもそれが一体どういふことなのかもよく解っていない。だからそれはまだ先の話だ。

先送りにしただけでも取れるが、ゆつくりと、ゆつくりと変わればと思う。

その先に妻と娘が、家族としても姉妹としても幸せになる道があるなら、きつと辛くはない。

だから。

呆れたように昔の話をする妻と、楽しそうにその話を聞く娘。

二人を見つめていると、それに気がついた彼女たちが不思議そうな顔でこちらを向く。

そんな二人が見つめる中、私は小さな一步を踏み出す。

「私はつまらない男だし、名前の割にそこまで運が有るわけでは無いと思っていたが……そうでもなかったな。私のことをこんなに想ってくれる妻と娘、そして二人の艦娘がいてくれるのだから」

彼女たちを艦娘としても受け止めようとしている私の言葉に、驚いた顔をする妻と娘。

私は気恥ずかしくなったが、どうせなら全てをはき出そうと言葉を続ける。

「扶桑、山城……私は、幸せな男だ、そして幸せな提督だ」

目を閉じてかみしめるように、言葉を締めくくる。

そして私は病院の屋上でのことを思い出した。

浮かんだのは涙を流しながら、私の手を握ってくれた二人の姿。

私は二度と彼女たちにそんな顔をさせないと心に誓う。

「私たちもですよ、提督——」

二人の声が聞こえ、ゆっくりと目を開く。

そこには後ろの晴れ渡った青空に負けない、扶桑と山城の笑顔があった。

『父で夫で、そして幸せな男』

と

『戦艦：扶桑：山城』

おわり

『無職男』と『駆逐艦：秋雲』

I ^無lost ^職 my ^だ job. ^よ (教えて貰った)

今日も今日とて求職活動に励んでいた時のこと。

履歴書を書いていてボールペンのインクが出ないことに気がつく。

確か辞めた後に買ったボールペンだったはずだが、まさか使い切ってしまうとは……
送れども送れども、我が職歴増えず、じっと手を見る。

なんにせよ、一本使い切ってしまったという事実が重くのしかかる、今となつては履歴書を何枚書いたのか思い出せない。

多分あれだな、もしかしたら書類で落とされたのは全部ボールペンが悪かったんじゃないかと。

などと道具のせいにするところまでメンタルが陥没していたことにハツと気がつく。
タバコを一本消費して、なんとか冷静さを取り戻す。

お、落ち着け俺、ボールペンはただボールペンであるだけでボールペン以上の意味な

どない。

とにかく気分転換と風向きを変えるため、新しいボールペンを買に行くことにする。

そういえば磯風がそろそろ米が切れるとかなんとかいってた気がするな、二十キロくらい買つていつてやるか。

そんなわけで磯風の家の途中にある商店街にある、文具屋のような画材屋のような店に向かう。

どっちかよくわからんけどボールペンくらいあるだろう、多分すごい書きやすいやつとか。

季節は梅雨を過ぎ、もう夏といつてもいいような気配。

外に出て歩いていると、照りつける太陽が歩みを遅くする。

来週くらいから学生は夏休みなので、何故か俺も夏休みだとか思ってたけど、求職中の俺に精神的な休みはない。でも物理的には毎日夏休みみたいなもんだよな……

あーくそ、駄目だ。ボールペン買ったら途中で初風の働いてる喫茶店に寄ろう。

あのワカメ頭に遭遇する危険もあるが、アイスコーヒーが無性に飲みたい。

そんなことを思いながら歩き続け、ようやく画材屋のような文具屋みたいな店に到着。

店の中は冷房がよくきいており、生き返る。ふふふ、どうだ俺は暑さに耐えきったぞ。無意味な自信でも今はありがたい。

と、思ってみるが自信など一ミリも湧いていない。

……取り敢えずボールペン探すか。

そんな訳でボールペンが置いてある場所を探していると、なんやら買い物カゴになんかの画材を大量に詰め込んでいる少女の姿。

なんか見覚えあるなと思いつつ見ていると、こちらの視線に気がついた少女が俺の方を見る。

癖のある長い茶色の髪をポニーテールでまとめた、愛嬌のあるふつくらとした顔の少女。

生意気さと謙虚さを併せ持つ不思議な魅力の表情に、時折見せる鋭い観察眼的な視線にはどこか見覚えが。

「ん？ あれ？ もしかして……えっ？ えっ！ えー!?」

『無職男』と『駆逐艦：秋雲』

「あー、えっーと……夏雲だっけか？」

「ニアミス!? 秋雲さんだよ!!」

あー、そーだったそーだった。

陽炎姉妹の一人である秋雲だ。

どうやら季節的なものの干渉を受けていたらしい。

しかし俺と出会ったせいなのか、なにやら慌てた様子の秋雲。

ふと先ほどの光景を思い出す。

「えらい大量に買い込んでるんだな？ 祭りかなんかの飾り付けでも作るのか？」

秋雲のカゴの中には大量のマジックペン？ やら柄付きの紙が入っていて、なんに使うのかよくわからないものもちらほら。

なんだろう、貼り絵とか切り絵的なものにも使うのだろうか。

「これはえーつと、その、えーつと……どうしようこんな時に会っちゃうなんて。やつ

べー、全然心構えしてなかったあ〜」

目を逸らしながら、ブツブツとなんやら呟いている秋雲。

なんだろう、恥ずかしがることでもないだろうに。

「そ、それよりていと……お、おにいさんはどうしてここに？」

質問に質問で返される。

年頃の少女の心理のなんと複雑なことか。

無職には少女の心が分からぬ。

「履歴書を書くためのボールペンを買いにだ……」

自分でいっつと泣きたくなる。

ボールペン何本消費してると思われたんだろうか。

少なくともボールペンを使い切るくらい履歴書を書いていて、それが無駄になったこ

とを察せないほど鈍い子でもなかったと思うが。

「ま、まじっすか」

「ああ、まじなのだ」

案の定、察してしまつたらしい秋雲は、えーつと、あーつと、と言葉に詰まっていた

が「うっひよひよ、これってチャンスだよね……」と、呟いた後。

「よ、よければおすすめのボールペン教えてあげよつか？」

遠慮がちに提案してきた。

これはもしかしてあれか、気を使われてるのだろうか？

あ、やばい、泣きそう。

「お、お願いできるか……」（男は涙を見せぬも我慢ボイス）

秋雲は、まっかせなさーい！ と景気のいい返事をすると、俺の手を掴んで歩き出す。なんだろう、例に漏れずこの子も力強いんだけど、陽炎姉妹の中で俺は方向オンチみたいなの先入観があるのだろうか？

そんなことを思いながら、二階にあるとある棚の前まで連れてきて貰う。

その棚には、一階とは違ってどこか高級感のあるペン類が多く陳列されていた。

秋雲はその中の一本を手に取り、俺に手渡す。

「少し高いんだけどこれが超おすすめですよ。書き味もいいけど、インクが最後まで一定の量きちんと出続けるんで、ストレスもゼロなんだからー！」

ああ、確かに途中でインクの出が悪くなることってあるよな。

あれもうほんとなんだろうなあ……

出が悪くて何度もなぞるから、紙もへこんでそのせいで更に出が悪くなる悪循環。

それが無いというのは確かに魅力的だ。

俺は試し書き用の紙に、サラサラと文字を書いてみる。

驚くくらい気持ちよく一定量のインクがどぼーっと出た、書けた。

「びつくりするくらい気持ちよく書けるな……」

「でしょ……つて、なんでも○ち!?!」

「こらこら、大声ではしたない。」

「試し書きでなにを書こうと自由だ、うんちと書いてもいい、自由とはそういうものだ」

「なんでキメ顔!? うえ! 私が変なの!?!」

「なんか驚いてら。」

「が、なにやらハツとなつて思索しだした秋雲はふとこんなことを聞いてくる。

「あ、でもそうだ、おにいさんなにか絵とか描けるう?」

微妙に挑発的な視線を向けながら、そう問いかけてくる秋雲。

俺は無言で試し書きの紙にペンを走らせる。

絵なんてほとんど描いたことはないが、こういうのは心から湧き出るなにかに身を任せるのがいい。

「描けたぞ」

「ふっふーん、秋雲さんこう見えても絵心あるんだよー。どれどれっと——」

「うわああ!？」

俺の描いた魂の叫び的力作を見て、なにやらよくわからない叫びをあげる秋雲。

なんなんだよその反応は……

「え？ なんなんだろうこれ、なに、下手なはずなんだけどなんだろう、心に刺さるこれ……」

「失礼なやつちやな、なにか描けというから描いたというのに」

だが秋雲は絵を見ながらハツとすると、俺の左手を両手で包み込むように掴む。

「あ、あのさ。これから時間とかある？」

「あるけどな、悲しいことに……」

履歴書を増産するという用事があるが、正直もう見たくないメンタルでもある。

米を貢物にして、冷房の効いた磯風の家でダラダラしたい気もするが、まあそれはいい

つでもできるからな。

「な、なら手伝つて欲しいことがあるんだけどさ……」

そう、すぎるような目つきで見えてくる秋雲。

その目の下をよくみると、うつすらクマが見えた。



「で、この×マークが書いてあるところを黒く塗りつぶせばいいのか？」

「うん、お願いできそう？」

「まあ大丈夫だろ、まかせとけ」

何故か秋雲の家（ビルの一室）で、絵の一部を塗りつぶすことになった。

つーかここ、初風が働いてる喫茶店の後ろにあるビルじゃん。

そしてあのマスターが所有しているビルじゃなかっただろうか……

「そういうえばここって、喫茶店のマスターの持ちビルだつて知ってたか？」

「あー、うん。えつとき、説明が難しいんだけど朝霜……喫茶店のマスターとはちよつと浅からぬ縁があるというか。その縁でこの部屋も貸してもらつてる感じなのよ」

なるほど、この歳で一人暮らしは難しいと思つていたが、縁故の管理する物件なら

ハードルは下がる……のか？

いや、一人暮らしの家に俺みたいな男を連れ込むなよ、危ないだろうが、なにもしないけどさ。

と、いうより。一人で暮らしているのが確定した気配の秋雲。

久々に目撃する陽炎姉妹の家族問題、だが今回はスルーを決める。

何故ならそんなこと関係ないくらい、激ウマの絵を目の前にしているからだ。漫画、というやつだろうか。

勤め人時代に暇つぶしにたまに買うこともあったが、こうして生の絵を間近で見ると、なんと、なんかいうかあれだな、よくわからん圧力を感じる。

秋雲曰く、夏にある大きな手渡し販売をする、なんかそういう催しで売るためのものだとか。

確かにこれなら金が取れるレベルだろう、内容はよく分かんが。

女同士でキスしてるし。(原作：魔法少女マジカルキョシー)

しかし、果たしてこれに俺が手を加えてもいいのだろうか？

この漫画を読む人間は、おそらく秋雲の描いた絵が見たいのであって、そこに俺が手を加えることによつて別のものとなり、失望させてしまうのでは？

そんな疑問がぐるぐると渦巻く。

そしてじっとその絵を見つめること数分、俺は覚悟を決めて塗り始める。

悲しいことに、ここのところひたすら文字を書く毎日だったため、寸分の狂いなく指定の場所を黒く染めることができた。

一度やり始めると、スイスイと作業は進む。

たまに秋雲にわからないところを聞いたり、漫画を描く上での簡単な知識なんかを雑談がてらに教えて貰いながら適度に息抜きしつつ作業を進める。

そして気がつけば、ひたすら指定の場所を黒く塗りつぶす行為に俺は没頭していた。やがてどれだけの時間が流れたのか、単純作業が生み出す快樂に脳が浸り始めた頃。

秋雲が「あの、よければ……」といいながら、すつと冷たい麦茶を差し入れてくれる。

時計を見ると作業を始めてから、三時間ほどたっていた。

「もうこんな時間か。しかしこれだけやってもまだまだあるとは、思ったよりも量があるんだな。もう夏休みだろうし、俺の他にも誰かに手伝って貰った方がいいんじゃないのか？」

「え、いやー、まあなんというか。普段はずっと一人でやってるんだけどさ、今回別の仕事も重なっちゃって」

「ばつが悪そうに頭をかく秋雲。」

「つか仕事としても漫画描いてるのか、マジかよ。」

「でも意外といったらあれだけど、おにいさんも結構やるじゃん。集中力もすごいけど、なんとというかどっか手慣れてるといふか」

「スケールは違うけど、昔ペンキ塗りのバイトしてたことがあつてな。それと似たようなもんだ」

出来高が多いその手の仕事はダラダラやると金にならないから、集中して終わらせるのが一番だった。

ちなみに現場バイトの常とでもいうのか、バイト代を受け取ったその場で数えないと、ちよろまかされているのに気がつかずひどい目にあう。

後から文句いっても後の祭り、泣き寝入りしかない。

ちなみに俺は何回かやられて結局ラリアット（略）

「なるほど、そんな過去が……なんというか、瓦の修理できたりいろいろと器用なんだねえ、ひひっ♪」

「まあ、こつち来るまでは食える仕事で食ってきたからな」

「やっべー、なにその意味ありげな台詞、でも謎が多い感じで捗るわ〜！」
なにが捗るんだよ。

あれ、でも磯風の家の瓦修理のことって誰かにいったっけか？

と、思うもあれか、陽炎ネットワークか、もう驚かねえぞ。（驚愕）

だがこのまま内地で仕事が見つからないのなら、いつそ外地に戻るといふ選択肢も考
えとなあ……流石にいつまでも無職というわけにもいくまい。

「……いつそのまま私のアシスタントとして……いや、駄目、陽炎会議が、でも……」

少し考え事をしてたら、なにやら爪を噛みながらブツブツと呟いていた秋雲。

やだ、ちよつとやめなさいよ女子、爪噛みながらブツブツとか怖いじゃない。

というか、こういう所で秋雲と陽炎が姉妹だと実感してしまいうなかつた！

「し、しかしあれだな、うまいもんだな。絵心あるっていうからうまいんだろうとは思っ

てたけど、まさかここまでとは、俺としてはこつちの方がちよつと意外だったわ」

「えっ？ あ、えつと、うん、すごいでしょ。私つて他の姉妹にはできないことできちや

うのよ〜」

頬を染めながらモジモジと手を合わせる秋雲、かわいいなオイ。

だが真面目な話、その歳でこれだけ描けるってのはすごいんじゃないのか？

しかも本として販売して収入も得ているのなら、もはやプロといつてもいいだろう
し。

俺が秋雲くらいのころはなにしてたっけか？

確か前島とつるんで「爪を燃やすと焼肉みたいな匂いするらしいぜ！」みたいなどう

でもいいことを、その辺でたむろしながら話してた記憶はあるが。

なんせもはや人生の半分以上昔の話だし、あまりよく覚えてないことの方が多い。とにかくそれはどうでもいいとして。

秋雲を見てると一流を目指す人間というのは、若い時に自分になにができるか、なにがしたいかを早々と見定め活動することができるといふ存在だという言葉をなんかで読んだのを思い出す。

まさに秋雲はこの類の人種なのだろう、思えば不知火とか舞風とかもか、そう考えると陽炎姉妹は優秀なのが多いな。

「やつぱあれか？ 尊敬する人やなにか衝撃を受けてとか、そういう理由があつて描き始めた感じなのか？」

「あー、えっと、なんていうか。元々その手の才能があるのはわかつてたから、それを活かさない手はないかなつて。正直色々思うところもあつたんだけど、やつぱ自分がしたことには変わらないんだしつて所で落ち着いた感じなんだよねー」

ははは、と、陽炎姉妹が時々見せる訳ありなものを含んだ笑みを浮かべる秋雲。恐らくあれか、多分有名な画家を輩出するみたいな家の生まれなのだろう。

持つて生まれた才能をどう生かすかとかで、親と衝突したとか、敷かれたレールの上をとか、思春期にありがちな悩みがありそうな背景を想像する。

だが、なまじ才能や自力を伴つていたからか、それとも秋雲の気質からなのか。

とにかくやりたいことを貫くために、自分の腕一本で生きることを決めたのが今の秋雲の姿に違いない。

そう考えると、今の俺自身の状況もあつてなのかな、込み上げて来るものがあるな。

「まだ若いのにすごいな」

ぐわしぐわしと、秋雲の頭を撫でる。

撫でるたびに柔らかくなくせ毛と、黒いリボンがふわふわと揺れる。

「えあ？ う、うひひ。なにになに、セクハラ？ いいの〜？」

溶けたような笑顔で変な声を上げ、俺をからかってくる秋雲。

ほんとすごいよ、ちゃんと仕事を頑張ってるその姿が今の俺には眩しすぎる。

「ちよつとタバコ吸って来る」

悲しさと気恥ずかしさと心弱さが混ざってしまいそうだったので、メンタルリセットのためにベランダでタバコを吸うことにする。

秋雲が「私も私も」とついて来ようとしたので、なにいつとるかアイアンクロー。

副流煙とか吸っちゃったらどうすんだ。

あひんつ！ と悲鳴を上げて床に崩れ落ちた秋雲を放置し、ベランダに出てタバコに

火をつける。

二階なので、そこまでいい眺めじゃないが、遮る建物がないので陽射しは十分、つか

暑いな。

ぼけつと景色を眺めながら、陽射しに負けず、肌を焼き、そしてタバコを焼くという行為に哲学を感じていると、喫茶店の裏口から初風が大きなゴミ袋を抱えて出て来るのが見えた。

あいつも頑張ってるなあ、俺も頑張らないと。

ゴミを出し終え、ジジくさい仕草で腰を叩きながら、伸びをする初風。

あ、目があった。

微妙に気恥ずかしい間が流れる。

とりあえず手でも振つとくか。

初風はしばらくぼかんとした顔でこちらを見ていたが、すぐに喫茶店の中に戻っていった。

無視かよ。

さては先日、未確認生物探しをしていた時に、タヌキに追いかけられ「なんでこつちくるのよ！」と逃げ惑う初風を見ながらゲラゲラ笑ったのを未だに根に持つてやがるな。

でもしようがないから後で喫茶店寄って、顔見ていくか。

決して焦げたホットケーキとか出されたらヤダ、と、思う打算があるわけじゃない。

まあそんなことするやつじゃないけど。

吸い終えて部屋に戻ると、未だに秋雲が床に崩れ落ちた状態だった。

近くでよく見ると、とろけた笑顔のままグースカいびきをかいている。

思い返せば目の下にクマとかあつたな、寝てないのだろうか。

締め切りがやばいとかどうとかいつてたな、そういや。

仕方ないので抱きかかえて寝室まで運んでやることにする。

抱き上げるととても軽い、ちゃんと飯食ってるのかよこれ。

意外と飾り気のない機能性重視の寝室、その部屋の真ん中にあるベッドに寝かせると

「ううん……」と、秋雲は短くうなつて目を薄く開ける。

秋雲はしばらくぼーっと俺を見ていたが、すぐにハツとなつて飛び起きた。

「やばッ！ 私寝てたあ!？」

「そう慌てるなつて、十分くらいだ」

「うう……三徹くらいで落ちちやうなんて情けない……」

「おいおい、三徹つてオイ、三徹つて。」

デスクワークの仕事でも、さすがに三徹したら眠さも限界だろうが。

「いやおまえ、根性は認めるがさすがに寝ろよ……」

「いやいやいや、ここで寝ちゃうとスケジュールが……うー、どうしてパレードの見開きなんてネーム描いたんだろう半月前の私。いま何人描いたのかもわからないし、あと何人描けばいいのかもわからない……」

指折り日数かなにかを数える秋雲。

「……後どれくらいあつて、何日くらいで終わりそうなんだ？」

「あと三日で、50ページくらいかなあ……これから三日間寝ずに頑張ればなんとか終わる予定だったんだけど……」

泊まり込みで仕事した経験のある元会社員の俺の経験からみて、今のおまえに圧倒的に足りないものがあるとしたらそれは多分危機感だ。

おまえもしかしてまだ自分が寝なくても大丈夫だと思つてたんじゃないのか？

「正直、俺には漫画のことはよくわからないが。一つの枠の中を描くだけでも、空間把握してから下書きして、構図が破綻のないように調整。配置するえーつと、トーンだっけ。その配置を考えて、ようやくそこに線を引いて、それでもつてトーン貼ったり黒塗りする。更にこれをいくつも作つてページとして構成させるとか……技術も知識も作業量も考えると、やつぱこれって一人で抱え切れる能力を超えてないか？ 残り終わつてない分だつて、寝ずに三日頑張つたところで、少なくとも時間は絶対足りないだろ」

「それは……」

秋雲が言葉に詰まるのをみて、あながち俺の推測が間違つてないとわかる。

「そもそも俺じゃなくても、もつと早くに陽炎姉妹の誰かに手伝つて貰うとかできたらうに。色々とプライドやら費用やらなにやらあるのはわかるが、仕事としてやるならその辺はなんとかした方がいいんじゃないのか？」

「でも、だって、私アレだしさ……陽炎型の中で浮いてるっていうか、なんていうかその手伝つて貰うの遠慮しちゃうっていうかさ。あはは……」

秋雲は無理矢理な笑顔を作ろうとするが、疲れからか感情の制御がうまくできないようだ。

「陽炎姉妹の中でも色々あるのだろうか、そういえば野球の時とか離れたところでスケッチしてるやつがいると思つてたけど、アレ今思えば秋雲だわ。」

だが……

「まあなんだ、お前もわかつてると思うが陽炎や他の姉妹も、お前のことそんな風に見てないのはわかつてるんだろ。意地張らず困つてる時は困つてるって、頼つてみたらどうだ」

「で、でも……や、やっぱ大丈夫だって。追い込まれてから力を発揮するタイプなの、あたしつて、火事場の馬鹿力つてやつ？ だから……」

中々頑固だ、これも陽炎姉妹か。

ちよつとあれだが、さすがにこれは教えてやらねばなるまい。

「まあ追い込まれてる感じの状態だと集中力が上がるのもわからんでもない。俺だって追い込まれ感が欲しいなあとか思うこともある（自分にダメージ！）でもいざ改めて追い込まれるとやっぱ追い込まれ感って意味ないんだ。いつておくが、追い込まれてる時点でもう駄目なんだよ。仕事としてやるなら特にな」

追い込まれても苦しいだけだから、常に計画をもつて動くのが仕事人の基本だ。

まあその計画をぶちこわすのも、大体その仕事関係の人間だが。

だが仕事というものの姿勢に関しては、幸い俺の方に一日の長がある。

俺の言葉を聞いて、どこかでそのことがわかってただろう秋雲は、悔しそうにボロボロと涙をこぼす。

多分間に合わないのは画材を買いあさってる段階で気がついてたけど、ずっと気がつかないようにしてたのかも知れない。

でも俺という頼りやすい人間をみつけられて、一縷の希望を見いだした。

でもこうやってその俺に説教されたせいで、それも切れちまって、おまけに気がつかないようにしてたことにも気がついてしまった。

恐らくできなかつたらできなかつたで、やつちまつたと笑顔で誤魔化しながら、陰で泣くんだろうなこいつ。

てか、ああやばい、今まさに泣かせちまつてるじゃないか。

俺は秋雲の手を握り、優しく諭すようにいつてやる。

「いいか、よく聞け秋雲」

「うえ、!？」

ビクリと、握った手から秋雲が震えたのが伝わってきた。

「とりあえず三時間だけ寝ろ、それまでに俺ができるところまでなんとかしといてやるし、起きたらまた手伝えることは手伝ってやる。できる方法がないか一緒に考えよう。」

なんなら陽炎に連絡してもいい、だから今は少しだけでも寝ろ、わかったか？」

「あ、あう……う、くん」

「俺のこと信用できないか？」

「……わ、わかったよお」

ようやく素直になったな、まあそれでいいんだが。

俺は秋雲の手を離し、立ち上がる。

「じゃあ眠いから、ちよつとだけ寝るね。あ、えつと、提督は入ってきちや、ダ・メ・よ？」

布団に潜り込んで、少しでも顔を出しながら恥ずかしそうに変なことをいう秋雲。恥ずかしいなら言うなよ。

「馬鹿いつてないでさっさと寝ろ」

「……うん」

しかしながら秋雲もまた、俺を提督と呼ぶのか……ちくしよう。

寝室の扉を閉め、俺は深呼吸して気持ちを切り替える。

働きたいとは思ってたが……

まあ、こういう労働も悪くないだろう。

そう覚悟を決めたところで、丁度玄関のドアを開けて初風が現れる。

「ちよつと秋雲ッ！ あんた提督連れ込んで——」

グツドタイミングだ。

「初風、丁度いいところに来た」

「ふえ？」

俺はワntenポで初風の前まで移動し、力強く彼女の肩を掴む。

ちよつとびびってる感じの初風が可愛い、いやちがう。

「陽炎に連絡して三時間後くらいに、二、三人ほど手先が器用で暇そうなヤツをここによこしてくれるよう頼んでくれ。秋雲の漫画を描くのを手伝うんだ。あと、コーヒーの配達も頼む、山ほどな……頼めるか？」

初風は少し面食らっていたようだったが、すぐに真剣な表情をつくり。

「——いいわ、手伝ってあげる」

といい残して、喫茶店の方に走って行った。

これでいい、秋雲の目が覚めたらきつとお前の姉妹たちが駆けつけてくれる。

だから安心して寝てろ。

そして俺は残りの×の箇所を黒く塗りつぶす作業に戻る。

俺がわかる作業の範囲、それを終わらせるための時間を考えただけでも中々厳しい。

だが、まあなんとかなるだろう。

なにを隠そう、俺は九回裏ツーアウトからしぶとい男なんだよ。

追い込まれた人間の火事場の馬鹿力を見せてやろうじゃないか。

でも火事場の馬鹿力とか信じてるやつ、マジアホだとは思う。

俺だけ。

あと俺、審判しかやったことないけど。

— エピローグ —

ようやく印刷所へ原稿を届け終わって、一息つく。

本気でギリギリだったな、よく間に合ったもんだ。

刷り上がった本は後日、例の手渡し販売の日に、この街にあるらしいデカイ会場に届けてくれるらしい。

あの後、陽炎の招集で半日ずつ入れ替わりで陽炎たちの姉妹が来て手伝ってくれたおかげで、不可能と思われていた原稿をなんとか仕上げることができた。

当然ながら、誰もが秋雲を手伝うことをイヤがることもなく、そしてまた困ったことがあつたら呼んでくれと秋雲と肩を組んで笑っていた。

秋雲も申し訳なさそうにしながらも嬉しそうに笑ってたっけか。
しかし見た目通り萩風とかが器用だったけど、他の子たちも結構器用だったな。

黒潮とかトーンを削る姿が包丁扱うみたいなクソ速い手さばきで、普通にびつくりしたわ。

後、成長期か知らんけどちよつと大きくなつてたな。(改二感)

まあ陽炎も秋雲がどこか自分たちと壁を作っていると感じていたらしいから、今回のこととはいい機会だったとか。そう思うとほとんど寝ずに、手伝ったかいがあったというものだ。

印刷所内にあつた喫煙所で、一服してから外に出る。

夏空の下、秋雲がすぐそこにある見晴らしのいい場所で、東の方にある海を見ていた。

「なにかあるのか?」

「ん? あーうん、ほんとはさ、あっちにあるはずだったんだ」

「なにが」

「有明、古い即売会の会場で聖地ってやつ」

なんのこつちや、寝不足で頭が回ってないのだろうか?

しかし聖地といつても、あっちになにかあつたかと考えを巡らす。

有明?

ここより東には地方都市が幾つかあつただけの気もするが、そんな名前の都市あつたっけか。

あれか、聖地なんて大げさな呼び名からして、戦前の地名か?

「ねえ提督」

「ん?」

「——ありがとう、ね」

いいツラで笑うもんだ、俺は素直にそう思った。

『僕』と『正規空母：Ark Royal』

この世界は一度滅びかけたらしい。

しんかいせいかんという、怪物が現れて世界をめちやくちやにしたんだ。

だげどこからか現れた艦娘と、その辺に居た提督と、あと沢山の人たちが力を合わせてしんかいせいかんをやっつけて平和を取り戻したんだって。

その後、艦娘たちは妖精さん——

「離して！ 提督とお風呂に入るイベントがまだ終わってないの!!」

「ええい、いい加減諦めろ」

えっと、大叔父さんの村でしばらく過ごした後、僕が街に帰る日が来た。

帰る時、飛龍さんがついて来ると叫びながら暴れてたけど、夏休みまで我慢しなさいと師匠（航空戦艦：日向）に、一撃で黙らされてしまった。

師匠は強かった。

そんな訳で、僕はまた列車に乗って街まで帰ってきた。

今は艦夢守市中央駅で迎えが来るのを待っているとこらだ。

少し早く着いてしまったみたいだけ。

待ち時間の間、駅の中央待合室で座って待つっていると、綺麗な金髪のお姫様みたいな人と、黒いスーツのような服を着た蝶ネクタイの赤い髪のお姉さんが歩いて来るのが見えた。

あれ、あの金髪の人って、うおーすばいと様に似てる気がする。

僕はテレビで見たバイクのレースを思い出す。

うおーすばいと様はバイクのレースの一番大きな大会で、トロフィーを渡す艦娘だったはずだ。

この艦夢守市にもチームKUREというその大会に出場するチームがあつて、たまにそのチームが持つてるレース場でも色んなレースの大会をやっている。

友達がすごく好きなんだけど、実は僕も結構好きだ。

僕の近くの大きなソファーに座るうおーすばいと様、でもなんだか浮かない顔だ。

悲しいことでもあったのかな？

隣の紅い髪のお姉さんも心配そうにうおーすばいと様を気遣ってるみたいだ。

少し気になったけど、僕はあまりじろじろ見るのも失礼かと思つて、見るのをやめようとした。

ら、紅い髪のお姉さんが、僕の視線に気がついたのか、こつちを見る。

そして、固まってしまった。
あ、これあれかも。

『僕』と『正規空母：Ark Royal』

紅い髪のお姉さんは、じつと僕の方を見てるんだけど、見てるだけで特に動こうとしない。

僕の勘違いだったかな？　と思っていると、紅い髪のお姉さんの様子がおかしいことに気がついたうおーすぱいと様が、紅い髪の人を不思議そうに見る。

そして、その視線の先にいる僕に気がつき、交互に見て「まあ！」と声を上げて両手を合わせ、とても嬉しそうな表情を浮かべる。

うおーすばいと様は僕の方を見て軽く微笑み、手招きした。

じょうおうへいかに呼ばれたならば、はせさんじぬわけにはいくまい。

僕は立ち上がって、うおーすばいと様の元に向かう。

紅い髪のお姉さんは瞬きせずに僕の方を見続けている、ちよつと怖い。

「はじめまして、ボーイ。私はウォースパイト、よろしくね」

「ぞんじております、じょうおうへいか。お目にかかれて光栄です」

僕は丁寧な言葉で挨拶をする。

密かに練習していた挨拶が、まさか役に立つ日が来るとは。

「あら……これはこれは、ありがとうステキな紳士さん。実は夜行列車に乗る予定だったのだけど、少し早く駅に来てしまつて。よければ話し相手になつていただけませんか」

「らっ」

「はい、僕でよろしければ」

僕は視線で示されたうおーすばいと様の隣に座る。

紅い髪のお姉さんは、僕の様子をじつと見ていた。

もしかして執事さんというやつなのだろうか？

確かにうおーすばいと様であれば、執事さんやメイドさんがいても不思議ではなさそうだ。

「あらいけない、私だったらせつかくステキな紳士さんが話し相手になつてくださるとい
うのに、お茶も用意できないなんて。ごめんなさい、すぐに用意するから少し待つて
くださいな」

そういつて、うおーすばいと様は立ち上がる。

「あ、奥様。でしたら私が……」

うおーすばいと様が立ち上がつて、それまで石像みたいだった執事さんがハツとなつ
て動きだし、慌てたように口を開く。

「いいえアーク、私がお誘いしたのだから私が用意するわ。だからあなたはこちらの紳
士さんが退屈されないようトークしてあげてくれるかしら？」

「は、え？ 奥様？」

そういつて、うおーすばいと様は「オホホホ」と、まるでお姫様のように口に手を
あてて笑いながらどこかに去つていった。

取り残される僕と、アークと呼ばれた執事さん。

僕らはお互い見合わせ、もう一度うおーすばいと様が去つていた方を見る。

そしてしばらくぼかんとしていたけど、いつまでも執事さんを立たせているのも悪い
ので座つてもらふことにする。

「えっと、おねえさん。その、よろしければどうぞ」

僕は先ほどまでうおーすぱいと様が座っていた場所に視線を向ける。

「え、あ、だが……そうだな……お言葉に甘えさせていただく」

僕の隣に綺麗な動作で腰を下ろす執事さん。

沈黙、執事さんは僕のことをじっと見ている。

僕もどうしたらいいのかわからないので、執事さんを見つめる。

何分かそんな状態が続いて、流石に困ったので、とにかく僕から話しかけてみることにした。

「はじめましておねえさん、僕の名前は——といます」

まずは自己紹介、場合によってはクマさんにも使える挨拶の基本だ。

「あ、ああ、よろしく頼む。私の名はArk……」

執事さんは、名前を名乗ろうとして急に口ごもる。

そして二十秒ほどぐつとなにかを噛みしめるようにしてから、ようやく口を開く。

「いや、たいした名ではないから執事とでも呼んでくれ」

執事さんはそういつて辛そうに顔を背けてしまった。

「えっと、執事さんはうおーすぱいと様と旅行の最中なのでしょうか？」

僕くらいなら入りそうな大きさのスーツケース、この街には旅行できたのかもしれない。

「まあそのようなものかな、この街は奥様の Admiralty だった、旦那様の生まれ故郷なんだ」

「なるほど、あどみらるって確か提督のことですよ、えっと、その」

僕は気になったことを聞こうとしたけど、聞いていいことなのか分からず口ごもってしまう。

執事さんは、そんな僕を見て軽く微笑む。

「旦那様はすでにお亡くなりになられていてな、とてもお優しい方だったよ。奥様と並んで庭を眺めておられる姿はまるで絵画のようだった。ただ旦那様を亡くされてから奥様はずっと気落ちしておられて……見ていられなくてな。外に連れ出す名目で旦那様の故郷を見に行こうと私が提案したんだ」

そう話しながら、懐かしそうに目を伏せる執事さん。

「ここに来てからは、奥様は新しい友人との出会いなどに恵まれて元気を取り戻されて。楽しげなご様子の毎日だった、旦那様はおられないがまた奥様との日々がこれからもずっと……」

目を閉じてその様子を思い出すように楽しそうに喋っていた執事さんだったが、急に言葉に詰まったようにだまってしまい、目をゆっくり開けて悲しそうな顔になる。

そんな表情で少しの間黙っていた執事さんだったが、ふっと僕の方を向いてじつと

こちらを見つめてくる。

どこかで似たようなことがあつた気がする。

ああそうだ、はじめて赤城さんと会つた時と同じ感じだ。

「あ、あの」

「あ……その、すまない」

じつと見られて恥ずかしくなつてしまい、執事さんに声をかける。

執事さんはもう少し頬を染めてコホンと咳払いをした。

「よければ君のことを、聞かせてもらえないだろうか。その、よければなのだが」

「僕のことですか？　そうですね……」

なにを話したらいいのかよく解らなかつたけど、僕は大叔父さんの村でのことや、最近プラモデルを作るのが好きだということ。

そして、最近何人かのおねえさんたちと知り合いになつたということを話した。

「——ま、待ち伏せされたり、抱きしめられたり、添い寝されたり、脇に抱えて走られたり、あまつさえお風呂と一緒に入らされそうになつただ……と？　ま、待つてくれそれは一体どういうことだ？」

執事さんが焦つたような表情で僕に顔を近づける、近い。

心なしか鼻息が荒い執事さんがぐぐつと迫つてくる、僕がどう説明しようかと考えて

いたら、少し離れた柱の陰からじつとこちらを見つめている誰かの姿が見えた。

僕がなにかを見ていることに気がついた執事さんが、視線の先を見る。

柱の陰から半分顔を覗かせてニコニコしている、金色の髪の人。

こつちをじつと見ていたのはうおーすぱいと様だった。

「……なにをなさっているのですか奥様」

「小さな紳士さんを手込めにしようとしているアークを見ていたわ」

その言葉を聞いて、執事さんは僕の方を見てはつとなり、顔を真っ赤にしてちよつとだけ距離を取った。

どうやら僕は手込めにされるところだったらしい。

「それよりスターゲイジー・パイが売ってないなんてどういうことかしら全く」

スターゲイジー・パイってなんだろうか、凄いな名前だけど。

不満そうな感じでそういいながら、うおーすぱいと様は僕の隣に座る。

なんとというか形てきに、うおーすぱいと様と執事さんに挟まれてしまった。

左右からサンドイッチみたいにぎゅーつとされて、抜け出そうと体を動かしてみたけど、中々抜け出せない。

「あつ……」

「んっ……」

肌触りのいい生地の方がこされる、一番強くあたつてゐる場所は胸の部分だから柔らかくて痛くはないんだけど、どうも息苦しい。

おまけに違う種類の薄い香水の香りでちよつとくらぐらしそうになる。

「あの、えつと」

「あら？ あらあらあら、これはいけないわね。アーク、こちらの紳士さんが窮屈な思いをしてらつしやるわ、あなた椅子になつてくれる？」

「は？ 奥様それは一体どういう——」

うおーすばいと様はすつと立ち上がつて、につこりと微笑み僕を抱え上げる。

執事さんがなにか言おうとしていたようだけど、それには耳を貸さずに僕を執事さんの膝の上に座らせた。

突然のことに驚いたのか、慌てて僕がずり落ちないように後ろから抱きしめてくれる執事さん。

うおーすばいと様は、なにやら悪い笑顔で「おほほほ」と手に口を当てて笑つてゐる。

これ、一体どういう状況なのだろうか？

「ああ、その姿を見ていふと思ひ出すわ。私の Admirer は私より下の歳だったから、先に大きくなった私がよく彼をそうして膝に抱えて座つてもらつたものよ」

懐かしそうに目を細めるうおーすぱいと様。

僕からは表情は見えないけど、何故だか執事さんは更にぎゅつと僕を強く抱きしめる。

「んっ……ハアあ」

執事さんの熱い息が頭に当る、湿度が高い。

あとなかで髪の毛を擦られている気がする、両手はふさがってるし、顔とかだろうか？

僕は「猫に顔スリスリしたら嫌がられるからもつとスリスリする」といつていた友達のキメ顔を思い出す。

「あらあら、アークつたらはしたな——」

「ぶへらっ!？」

うおーすぱいと様の言葉を遮り、突然変な声を上げた執事さん。

何事だろうと振り向くと、何故だか執事さんの顔にどこから飛んできたらしい魚が張り付いていた。

なんの魚だろうか、うおーすぱいと様が「何故サーデインが……」と呟いてるので多分そういう名前の魚っぽいけど。

僕は執事さんの膝から降りる、執事さんはゆっくりと顔に張り付いたサーデインを剥

がして「生臭い……」とこぼす。

執事さんはキツとした表情で辺りを見回してたけど、しばらくして誰もいないとわかると、げんなりした顔をした。

そして「申し訳ありません奥様、紛失物として届け出たあと顔を洗ってきます」と、サーデインを摘まみながら駅員室の方に歩いて行った。

僕どうおーすばいと様はしばらく唾然としていたけど、一先ず腰を下ろす。

二人で座ったので、先ほどとは違いゆったりとした感じだ。

なにを言えばいいのかわからず、ポツと駅を行き交う人たちを眺めていると、うおーすばいと様がそつと僕の手を握ってきた。

「あなたの目から見てアークはどうかしら？」

「え？」

質問の意味がよく解らず、僕はうまく答えることができない。

アークというのは執事さんのことだというのはわかるけど。

「えーつとね、ほら。アークってああ見えてとても料理が上手なのよ、アークの作るサンドイツチは最高で、勿論お茶を入れるもの上手だし。それに家のことや私の身の回りのこともやってくれてたから家事はお手の物。それにね、とっても強いのも、どんな悪い人が来てもアークがいればやつつけてくれるわ！ ……あ、でもああ見えて可愛いところ

もあって、えっと、秘密なんだけどよく庭の隅っこで猫と喋ってたりするの、あのすました顔でにやーにやーってね、ふふふ、可愛いでしょ？ ああ、それと——」

凄い勢いで執事さんのことをしゃべりはじめたうおーすぱいと様。

なんだか色々聞いてはいけないこともいつてる気がするけど、いいのだろうか。

でもうおーすぱいと様が、執事さんのことをとてもとても好きだということとはなんとなくわかる、そうじゃなきゃこんなスラスラと誰かのいいところを話すなんてできないだろうし。

でも、それよりも少し気になることが。

「——そんな訳で、すつごく優良物件だと思っただけど、どうかしら？」

「ええと、あの、執事さんが凄いということはよくわかったのですが、どうしてうおーすぱいと様はそんなに焦ってるんですか？」

そう、大好きな人のことを話しているはずなのに、その様子が何故か必死そうに見えるんだ。

僕の言葉を聞いて、うおーすぱいと様の表情が固まる。

そしてしばらくなくにかいおうと口をぱくぱくさせていたんだけど、やがて「ふう」と、息を静かに吐いて、先ほどよりも凄くゆつくりとした口調で話し始めた。

「……アークはね、ずっと私の側にいてくれたの。あの人との楽しい日々も、そしてあの

人……私の Admiral が亡くなって落ち込んでいた時も、ずっとずっと私を支え続けてくれたわ。私はアークに沢山のことをして貰った、私は……もう、長くないから、もう十分幸せだったから、アークにも幸せになって欲しいの。それが私がアークにしてあげられる最後のことになると思うから」

とつても悲しそうなその様子。

僕は昔おばあちゃんが話してくれた、おばあちゃんのお母さんとお別れした話を思い出す。

老いない艦娘がその命を終える日の話を。

「……除籍日ですか？」

僕の言葉を聞いてうおーすばいと様は軽く頷く。

「気がついてるかも知れないけれど、アークも艦娘なのよ。えっと、艦娘にとつての Admiral……いえ、提督がどんなものかわかるかしら？」

僕は頷く、そして僕のひいおばあちゃんも艦娘だったということを話す。

その話を聞いて、うおーすばいと様は優しく微笑んだ。

「そう、それはよかったわ。アークはね、Ark Royalという名前の正規空母の艦娘なの。よかつたらあの子のことをその名前で呼んであげてくれなにかしら。大丈夫、絶対怒らないから。戸惑うのも無理はないんだけど、その、わかるでしょ。アークに

とつての提督が誰なのか……」

僕は再び頷く、その意味や責任はまだよく解らないけど。

その事実だけは何度も受け止めてきたから。

「ありがとう、小さな提督さん。ほんと、人生つてわからないものね。まさか最後にアークが提督をみつけるところに立ち会えるなんて……」

うおーすばいと様は軽く目を閉じ、一呼吸置いてゆつくりと目を開く。

そしてポケットから一通の手紙のようなものを取りだし、僕に差し出した。

「これを、鐘の前でアークに渡してもらえるかしら」

僕はそれを思わず受け取ってしまう、鐘つてなんだろう。

それよりおかしい、いちいち僕に渡さなくても直接渡せばいいのに。

それを聞こうとしたんだけど、うおーすばいと様の人差し指に口を押さえられてしまう。

「お願い……でござるっ」

切なそうなうおーすばいと様の表情。

僕はそのただならぬ感じに圧されて頷いてしまう。

「ありがとう、小さな提督さん」

うおーすばいと様はゆつくりと僕の口から指を離した。

丁度その時、執事さんが戻ってくる。

「まったく、どうしてあんなものが……奥様、まだ少し時間はありますが、そろそろホームの方に——」

「ああ!! 大変、この駅ビルの屋上にあるという、海底に沈んでいた大昔の鐘を引き上げて吊つてあるというメインスポツトを見るのを忘れていたわ!! ああ、でもなんということでしょう、脚の悪い私がそこに向かつては列車の時間に間に合わないわ、なんということでしょう!!」

突然、お芝居のような言葉をうおーすぱいと様が叫びはじめ。

執事さんと僕はあつげにとられてしまう。

「だから私は一足先にホームに向かわせてもらうわ。そしてアークと小さな紳士さんには駅のホームからでも聞こえるように鐘を鳴らして貰わないといけない気がするわ!!」

「は、え? 奥様、しかしそれでは時間が……」

うおーすぱいと様は、一瞬で移動して戸惑う執事さんの両手を握りしめる。

速い。

本当に脚が悪いのだろうか?

「大丈夫!! アークと小さな紳士さんが手を繋いで走ればきつと間に合うわ、だって私信じてるから!! どんな困難なことも、アークならきつと成し遂げてくれると信じてる

から!!」

「は、はあ」

なんだか少し照れているような執事さん。

ちよろい。

うおーすぱいと様は、優雅に胸に左手を当てて高らかに右手を掲げる。

そして、階段の方を指さした。

「さあ、戸惑っている時間はないわ、祝福の鐘の音を聞かせてちよろだい!!」

「は、はい!」

執事さんはびくつとなつて、慌てて僕を脇に抱えて走り出す。

ふむ、なんだか覚えのある状況だ。

僕は抱えられながら、遠ざかってゆくうおーすぱいと様を見る。

うおーすぱいと様は安心したように微笑みながら、でもどこか寂しそうな顔で軽く手を振っていた。

その表情をみて、僕は何故だか悲しくなってしまった。



僕を抱えてすごい勢いで駅の大階段を駆け上がる執事さん。

周りの人の視線がすごい、だどいうのに執事さんは息一つ切れていない。

「あの、執事さん。列車が何時出発かはわからないんですが、大丈夫なんですか？」

「問題ない、いざとなったら奥の手もある。それに奥様の願いは一つでも多く叶えて差し上げたいんだ！」

必死な様子の執事さん。

それを見て僕は執事さんも、うおーすばいと様のこと大好きなんだなってわかった。

「……うおーすばいと様に聞きました、除籍日のことを」

「そうか」

短く返事をする執事さん。

とても悲しそうだ。

「執事さんはその、その後は……」

「その後？ ああ、元に戻るだけだ、執事になる前の私に戻って。奥様と旦那様の思い出を抱いて余生を過ごすだろうな」

「でも、さみしくはないんですか？」

「さみしい、か……さみしくなんてないさ、私には思い出があるからな……さみしくな

んで、ない。それより舌をかむ、あまり喋らないでくれ」

僕にだつてわかる、その言葉は強がりだつて。

大事な人がいなくなるつてことが、さみしくないわけないんだから。

そして駅ビルの屋上に到着する。

屋上は広い展望台スペースにもなっていて、その一角にうおーすぱいと様がついていた有名な鐘が吊つてあつた。

あれ、手紙みたいなのを渡す時にうおーすぱいと様がついていた鐘つて、これのことかな？

「これか、じゃあさつきと鳴らして——」

「あの、待つてください。うおーすぱいと様が鐘の前で執事さんにこれを渡して欲しいと」

僕はうおーすぱいと様に預けられた、手紙のようなものを執事さんに渡す。

執事さんは不思議そうにそれを受け取ると、それを読み始めた。

やがて手紙を読み終えたのか、執事さんは静かに泣き始めた。

「あ、あの、なにが書いてあつたんですか」

子供のように泣き始めてしまった執事さん。

さつきまでの、とても凜々しくて格好良かった人とは思えないほどだ。

「うッ、グス、わ、私に。ひ、暇を与えると……グス、国には一緒に帰らなくても、いいつて……そ、そして、こ、これからは、あ、あなたの側にいるようにつて、それが最後のお願いだつて。あ、あと、ありがとうつて……」

どうやら執事さんは、うおーすばいと様の執事じゃなくなつて、僕の執事になるようにつて、うおーすばいと様にお願ひされてしまったらしい。

汽笛が聞こえる、おそろくうおーすばいと様が乗る夜行列車の出発場所の方からだと
思う。

「行かなくてもいいんですか、列車が出ちやいますよ?」

執事さんは動かない、ぐつと手紙を握りしめて下を向いている。

「後悔しませんか? うおーすばいと様の側を離れて」

「……わからない、でもおそらく後悔はしない、どうすることもできないことに後悔なんてできないんだ。だからせめて奥様の願ひを……でも、今奥様の側を……わ、わたしは、どうしたら……」

僕には執事さんのことはわからないけれど、でもとても苦しんでいるのはわかる。

多分艦娘としての気持ちと、執事さんとしての気持ちと、そしてなによりうおーすばいと様の願ひを叶えたいという本人の気持ちがごっちゃごちゃになつてしまつてるように思えた。

僕は思い出す、うおーすぱいと様の安心したようで、でも、とても寂しそうだったあの表情を。

うおーすぱいと様が執事さんを想って願ったことは、執事さんにとっては正しくても、うおーすぱいと様にとっては正しいことだったのだろうか？

執事さんがうおーすぱいと様を想ってその願いを叶えようとすることは、うおーすぱいと様にとって正しいことでも、執事さんにとって正しいことなのだろうか？
わからない。

誰にとつてなかが正しいのかなんていうのは、きつと誰にもわからない。

——でも、きつと今この瞬間に、僕ができる僕にとつての正しいことはあるはずだ。ちよつとだけ考えて、僕は執事さんの手を握る。

僕と執事さんは身長差があるから、僕が見上げるような感じだ。

執事さんはゆっくりと僕の方を見た、縫るような目だ。

「——アークロイヤル」

僕は彼女の名前を呼ぶ。

自分の名前が呼ばれたと気がついて、彼女は驚いたような表情を浮かべる。

「僕はアークロイヤルの提督ですか？」

「あ、ああ、いや、はい。貴方が、貴方が私の Admiral……だ」

僕は頷く、僕が彼女の提督であるということを認めるように。

「これでアークロイヤルは僕の艦娘、でもアークロイヤルはうおーすぱいと様の執事だ。なら執事としてやるべきことがあるんじゃないの？」

「それは……だけど私はもう……」

「うおーすぱいと様はいつてたよ、アークロイヤルのおかげで自分は十分幸せだったって、だからアークロイヤルには幸せになつて欲しいって」

だからアークロイヤルさんにとっての幸せを考えてあげるのが、今の僕の正解だ。

だつてじようおうへいかにお願いされてしまったんだから。

「でもそれならアークロイヤルは責任を持つて、最後までうおーすぱいと様が幸せであり続けられるようにしてあげるべきだ、これは僕のがままんだろうけど。でも、だからこそ、これは僕の命令。アークロイヤル、君は最後の最後までうおーすぱいと様を幸せな気持ちで送つてあげて。その為にはアークロイヤルは絶対うおーすぱいと様の側にいなきや駄目だ」

アークロイヤルさんがはつとした顔になる。

僕は続ける。

「もう一度言うよ、これは提督としての僕の命令。しっかり頑張るんだ、うおーすばいよ様の執事としての仕事を、最後まで頑張るんだ」

アークロイヤルさんは涙をボロボロと流す。

そして僕の手を握りながら、ゆっくりとひざまずいた。

「――拝命した my Admiral、必ずやその命を遂行してみせます」

とても格好いい騎士が王様に忠誠を誓うようなポーズ。

それを見ると、なんだかとても大それたことをしてる気がしてきた。

……はずかしい。

「じゃあ急いで、でも間に合うかな」

僕はゆっくりと手を離して、夜行列車の出発する方のホームを見る。

出発が近い事を知らせる、合図の汽笛が鳴っている。

アークロイヤルさんは目元を拭いながらゆっくりと立ち上がった。

そしてキリッとした表情で叫ぶ。

「問題ありません my Admiral、私は Your Ship Ark Royal であり、空を駆ける騎士たちの母艦なれば!!」

アークロイヤルさんとはとても格好いい歩き方で、ゆっくりと鐘のすぐ前にあつた屋上のフェンスまで歩き、フェンスを背負って片手を胸に当て僕の目を見つめる。

「ありがとう我が提督、私は必ず役目を果たしてまた帰って参ります。必ず、再び貴方の元に参加します！　そしてその時は改めて私の忠誠を捧げさせていただきます、最低でも三男三女を授かつてみせます!!」

「……うん、うん？」

三男三女つてなんだろう？

僕の肯定と疑問の返事を聞いて、アークロイヤルさんはさつきまで泣いていたとは思えない、格好いい笑みを浮かべる。

そして背負っていた屋上のフェンスを乗り越え屋上から飛び降りた。

僕は驚いたけど、直ぐにアークロイヤルさんの体が光り、大きな弓が現れる。

そしてその弓を凄く速さで二回引いて、矢を発射した。

二つの矢は、すぐに大きな鳥くらいの大きさの飛行機に変わる。

上下に二つの翼を持った複葉機と呼ばれる飛行機だ、前に瑞鶴さんが教えてくれた。

「Swordfish!」

アークロイヤルさんの命令に反応したのか。

そーどふいっしゅと呼ばれた飛行機はくると宙返りして、夜行列車のホームに方向を向けアークロイヤルさんの少し上を通過する。

瞬間アークロイヤルさんの持っていた弓が消える。

そしてアークロイヤルさんは二機の飛行機の脚を掴み、グライダーのように滑空しながら、駅のホームに向かって飛んでいった。

「かつこい……」

聞いたことがある、艦娘の艦装は凄く重いから海の上じゃないと使えない。

でも、空中で一瞬だけなら展開できなくもないって。

敵密には艦装と兵装は別物で、兵装を支えるための艦装らしいんだけど。

空中でならその艦装が必要ないから、兵装だけを取りだして使うことができる艦娘もいるって。（※艦装と兵装が一体化しているものは同時展開の必要あり）

でも、それはめっちゃくちゃ難しいらしい。

よほど特殊な訓練を長い時間積まないとできないって、おばあちゃんがいった気がする。

おまけに取り出すだけでも難しいのに、使えるようになるのは更に長い訓練と才能が必要だって。

おばあちゃんのお母さんもやろうとして、ついぞできなかったらしい。

「あつ」

僕はしばらくその姿に見とれてたけど、ハツとなつて鐘を見る。

そうだ、うおーすぱいと様の願いを叶えなければ。

僕は紐を引いて、鐘を鳴らす。

うおーすぱいと様と、アークロイヤルさんの幸せを願って。
何度も紐を引く。

——ゴーンゴーンゴーン

彼女たちの旅路に、幸あれ。



アークロイヤルさんは、うおーすぱいと様の元に戻れただろうか？
きっと戻れただろうなって思う、なんとなくだけど。

僕は階段を降りはじめ。

ふと後ろで、誰かが鐘を鳴らすのが聞こえた。

振り向くと、どこかで見たことがあるような女の子が紐を引っ張っている。

少し気になったけど、多分お姉ちゃんが待つてるだろうから、僕は急いで階段を降りる。

駅の中央口前の広場に着くと、お姉ちゃんが退屈そうに車の前で待っていた。

僕はお姉ちゃんの名前を呼ぶ。

「蒼ねえちゃん！」

僕の声を聞いて、ぱつと顔をあげる蒼ねえちゃん。

前に会った時は蒼い髪を左右で縛ってツインテールにした髪型だったけど、今日はヘアピンで前髪を留めてるくらいで、服装も黒くて長いスカートに白いセーター。

そのせいかとても大人っぽく見える。

「もう、遅いぞ弟よ」

腰に手を当てながらぶんすかと聞こえてきそうな感じで、僕を叱る蒼ねえちゃん。

でも表情はどこか嬉しそうだ。

蒼ねえちゃんは僕の前まで歩いてくると「悪い子はこうだー！」っていいながら、僕を抱き上げてぎゅーっと抱きしめてくれる。

懐かしい香りに包まれる、僕も負けずと抱き返した。

しばらくそうやって抱き合った後、蒼ねえちゃんは僕を解放してくれた。

「ごめんね、ちよつと屋上の鐘を見に行ってたんだ」

「鐘？ ああ、あれか。どうせなら私と一緒に見に行けばよかったのに……まあいいか。乗って乗って」

僕は蒼ねえちゃんの車の助手席に座る。

「そういえば蒼ねえちゃん、舞鶴法律事務所だっけ、仕事どう？」

「あー、相変わらず大変よ。所長の竜崎さんがチョーいやなヤツで、仕事はチョーできるくせに、イヤーな笑みで色々無茶振りしてくるのがチョー大変」

大人は大変らしい。

「それよりさ、あつちでのこと聞かせてよ。大叔父さんに会ったんでしょ？」

「うん、すごかったよ。えつとね、熊さんで神様なお姉さんが師匠になつたり」

それを聞いて蒼ねえちゃんは、目を丸くする。

「え、なにそれ、どういうこと？」

血は繋がってないけれど昔から近所に住んでて、よく僕の面倒を見てくれていた家族同然の蒼ねえちゃん。

最近はお仕事で外地に行つてたらしく、忙しくて会えなかつたけど。

おばあちゃんの次に大好きな蒼ねえちゃんに久しぶりに会えて僕は嬉しい。

「話せば長くなるんだけどね」

僕はそう前置きして、あつちであつたことを話し始めた。

師匠のことや飛龍さんのこと、そして女王陛下とその執事さんの話を。

あと、加賀さんや翔鶴さん、赤城さんに瑞鶴さんのことも。

蒼ねえちゃんは「え、いやちよつとまって、それどういうこと？」と何度も聞き返してきて説明するのが大変だった。

ふと、乗っていた車が見渡せる道に出る。

ここは『艦夢守市（かんむすし）』

大きな港があり、その港と街の周りをぐるつと山に囲まれている、そんな立地の場所。都会とまではいかないけれど、それなりに騒がしくてそれなりに穏やかな大きさの街。

そしてこの街には一つの噂がある。

それは提督適性者が集まるといふ噂だ。

この街には沢山の人間と、居るかもしれない提督適性者たちと、その噂を聞いてやってきた割と多くの艦娘たちが平和に暮らしている。

つまり、ここが僕の住んでいるところだ。

あとえつと、今現在僕は“六人”の艦娘の提督適性者らしい。びつくりである。

ちなみに数日後にチームKUREのバイクを生で見ってしまった。なぜか持ち主らしいお兄さんは手で押して歩いてたけど。格好良かった。



とあるお高い料亭の一室。

一航戦の青い方と、五航戦の姉の方が正座していた。

勿論みんな大好き、百万石と鶴（姉）である。

首には『私たちは提督を二人占めしようとしました』と書かれたプラカードがつるさ
れている。

「山桃甘露煮と合鴨の唐揚げと鮎の塩焼きです」

「ありがとう、そこに置いておいて」

現在この店はフル稼働しており、腕のいい料理人が必死で料理を作り、若い仲居さんが運んでは下げ運んでは下げを繰り返している。

「まさか加賀さんがねえ」

もぐもぐと休みなく料理を口に運んで咀嚼する、赤い鬼の名字を持つ女性医師はいつた。

「翔鶴ねえが抜け駆けするなんて」

温かい料理をはふはふしながら食べていた、普段はツインテールの服飾意匠家が入った。

因みにいまは髪をほどいて何故か決戦モードである。

正座している百万石と鶴（姉）たちのおなががキュルキュル鳴る。

涙目の二人、お腹がとてもすいていた。

「あ、あの、赤城さん……」

「えつと、瑞鶴？ あのね……」

じろつと、決戦仕様の妹鶴と、赤城の山の視線が二人に刺さる。

百万石と姉鶴は睨まれてなにもいえず、ぶるぶると震えて涙目になった。

正規空母同士による、史上あまり例を見ない決戦の勝敗は今ここに決したのであった。

でもなんだかんだで一応この後めちやくちや仲直りした。

色々大変だったみたいだがその詳細は省く。

そして、再び自分たちの提督とどう付き合っただけか。

また、今後どうすべきかなどを色々相談したりした。

しかし彼女たちは知らない。

今、彼女たちの提督の側にはその提督にとっても信頼されている蒼き龍がいることを。

そして自分たちがその蒼き龍の逆鱗にべたべたと触りまくってしまったことを。

彼女たちはまだ、知らない。

『無職男』と『駆逐艦：時津風』

無職だよ。

ああ無職だよ。

無職だよ。

俺、心の一句。

仕事を辞めて初めての夏になってしまった。

これはもうアレだろうか、求職活動も夏休みに入るべきだろうか？

とかなにかと理由をつけては、いやなことから逃げようとする行動が増えて最近叫びたくなる。

基本的に自分の機嫌は自分で取れるのが大人だという持論があるが、ここのところ陽炎たちに励まして貰っていることが多すぎて、なんだか自分が大人なのか怪しくなってきた。

話を戻すが、やらなきゃならないことに対する、できない言い訳を探すことが最近多

い。

見つけたらそれを理由にとことんやらない、だって自分は悪くないって理由ができるから。

今の自分の行動が前に進んでいるような錯覚も味わえて一石二鳥だ、ハハハ。

……虚しい。

そんなことを考えながらレトルトカレーが入った袋に、直接食パンをつけながら食べている夏の日の午前。無性に野菜の水分だけを使って作ったとかいう、萩風のカレーが恋しくなってくる。

でも萩風ってなにも言わないけど、灰皿に積まれた煙草や、俺が煙草吸ってるのを見るとスツゴイ悲しそうな顔するんだよなあ。

あいつらの前じゃ吸わないように気をつけてるんだが、臭いとか駄目なのだろうか。しかしながら20戦20敗の禁煙敗北記録を持つ俺に、禁煙は難しい。

というか食後の一服したら、それが最後の一本という事実に気づいてしまった。最近暑くて外に出るのもうんざりしてしまって、買い置きもない。

ちくしょう、行くか。

意を決して外に出てみたものの、やはり暑いものは暑い。

外に出て数分で、体が水分という名の快楽を求めはじめる。

ちようどいいところに駄菓子屋があったので、ラムネを購入。

ビー玉を押し込むと、炭酸の弾ける音と微妙に溢れる液体の感触。

この噴きこぼれるのが嫌というやつもいるが、嫌なら缶を買えばと突っ込みたくなる。

瓶の口当たりで得られる清涼感は、そのリスクを払っても味わいたくなるものだ。

そういや陽炎姉妹の中にビー玉をもらって嬉しがりそうなやついたかな。

取り出すのが面倒だが一応取り出しておこう。

額の汗と口からこぼれたラムネをぬぐいながらそんなことを考えていると、カランと中のビー玉がビンとぶつかる音に反応したのか。

駄菓子屋の前にあるベンチに座っている、麦わら帽子を被った子供がこちらを見る。

「あつ、おにいさんだー」

『無職男』と『駆逐艦：時津風』

陽炎姉妹の中でビー玉を一番欲しがりそうなやつの一人がいた。

「奇遇だなワンコ」

「ワンコじゃないよお!! 時津風だつてばー!」

知ってる、でもワンコっぽいよな、コイツ。

背とかめちやくちや低いし、俺の半分も無いんじゃないのか？

ブルーのホットパンツに白シャツ姿、出会った頃はいつも黒タイツをはいていた記憶があるが、流石に夏にはくには暑すぎるか。

「おにいさんはー、なにしてんのお？」

可愛い声でのんびりとしたしゃべり方するやつだな。

麦わら帽子を脱いで首の後ろに垂らし、大きな瞳で俺の方を嬉しそうに見てくる時津風。

なんか一部灰色になっている垂れた犬耳っぽい横髪も相まって、ぶんぶんと振られる

尻尾を幻視してしまえうだ。

「夏休みだからタバコ買いに行くんだよ」

自分で言つといてクソすぎる答えだなオイ。

前世からやり直したくなつてきたわ。

「ほうほう、ならこのあたしに任せてよ！」

なにを理解したのか、ビシツとした敬礼をして、時津風が駄菓子屋の中に入つて行く。

あれ、この駄菓子屋タバコなんて売つてたっけかな？

というか、時津風は俺の吸つてるタバコの銘柄を知っているのだろうか？

飲み終えたラムネの瓶のキャップを外して、中のビー玉を取り出しながら待っている

と、時津風がタバコ……に、見せかけた駄菓子を持つてきやがった。

「かつてきたよ〜！」

嬉しそうに俺にタバコみたいな駄菓子を手渡す時津風。

「……ああ、ありがとな。ほれお駄賃、これでアイスでも買つてこい」

なんていつてやろうか悩んだが、おそらく善意100パーセントだから叱るのもあれだと思ひ、お駄賃を渡してやる。

時津風は嬉しそうにタバコ代予定だった金を受け取ると、再び駄菓子屋に入つていった。

「あつま……」

時津風が買ってきたタバコを模したチョコレートをくわえると、安っぽい甘みが口に広がる。

とても長く味わってられる気がしなかったのとつとと噛み砕く。

なんで俺はいい年して駄菓子なんぞくわえてるのだろうか、これは確か大人に憧れる子供の為の駄菓子のはずなのに。

いや、子供は子供という職業についてるだけ俺よりマシか、ははは。

もったいないのもう一本取りだしてくわえたものの、禁煙パイプより無意味なものをくわえているという事実と、己の立場の無さから来る現実を実感してしまい泣きたくなってくる。

「おまたせく……ふぁい！」

俺の中のアイデンティティが乱れそうになっていた時、時津風がアイスを持って戻ってくる。

そして袋から連なった細い牛乳瓶みたいなアイスを取り出し、二つに分けて片方を俺に差し出してきた。

……なんとというか、アレだな。

ちんまいガキンチョだが、こうやって女の子とアイスに分け合うのってなんなんだろう

う、グツとくるものがあるな。

あと、自然にこうやって食べ物に分かち合う気づかいのできるところが陽炎の妹だなあつて思う。

「ありがとな」

素直に礼をいって受け取る。

時津風はニヒツと笑うと、俺の隣に座って、アイス容器の吸い口をちぎって吸い始める。

俺も同じように吸い口を引きちぎり、切り離れた吸い口の方に残ったところを吸い出した。

同じチョコレート味だが、こちらのアイスは清涼感のある冷たい甘さだ。

「あついなあ」

「あついなね！ あついなね！」

座ってるベンチは影になってはいるが、それでも暑いものは暑い。

俺と時津風はアイスをチューチュー吸いながら、ウザいくらい青い空に浮かぶ入道雲を眺める。

「でっけえなあ」

「おっきい！ おっきい！」

どうでもいい俺のつぶやき一つにも嬉しそうに反応する時津風。
なにがそんなに嬉しいんだろうな。

「おにいさんこれからどうするのー?」

みみつつちく空の容器をチューチュー吸うのにも飽き始めた頃、特になにもする気力がわかない俺に時津風が聞いてくる。

「そうだなあ、夏休みだし虫取りでもするか。なんてな……」

「ほんと!? あたしも行く行くー!」

自虐で言った言葉にめちやくちや食いついてくる時津風。

おおい、マジか。

だが冗談だとこれっぽっちも疑っていない時津風は、駄菓子屋に入っていつて虫取り網と虫かごを手に戻ってくる。もしかしてここって時津風の家なのか?

時津風は一旦網と虫かごを置くと、嬉しそうに首の後ろに垂らしていた麦わら帽子を外して俺に差し出してきた。

あつ、コイツめっちゃいいやつだわ。

日射病対策のために自分が被った帽子を俺に差し出すとか、普通に自分より相手のことをナチュラルに心配できないとできない行動だわ。

ワンコっぽいとか関係なく多分コイツめっちゃいいやつだ。

俺はそれを受け取ってかぶる、小さいしちよつときついが問題はない。

これで白のタンクトップシャツでも着れば何処その大将だな。

「似合うか？」

「すつこくかつこいいよ〜！」

麦わら帽子の似合う無職の俺、夏。

やるせなさ無限大だが、まあ、コイツにそういつてもらえるなら救いはあるな。

俺は時津風にちよつと待つようにいつて駄菓子屋に入り、店の一角に積まれていた麦わら帽子を一つとつて購入する。

最初にラムネを買った時はよく見ていなかったが、店番をしていたのは浅黒い肌の南国系っぽい中年の女だ。

おぼちゃんというには妙に精悍な感じがする彼女は、ちらりと外で待つ時津風に視線をやったあと、片言で「アノカタ ヲ ヨロシクオネガイシマス」と、なんか間違ってる気配がする言葉をいいながら麦わら帽子を手渡してきた。

……母親か？

相変わらず摩訶不思議な陽炎姉妹の家族構成、関わるまいと思っていたが流石にそろそろ真面目に聞いてやるべきだろうか。

「ほれ、やるよ」

ひとまず保留にして、麦わら帽子を時津風にかぶせてやった。

時津風はキョトンとした顔をしたが、しばらくしてなにが嬉しいのかキャツキャツと何度もその場で飛び跳ねる。

喜びすぎだろ。

「嬉しい嬉しい、ありがとう！　これ、大切にするね!!」

「お、おう」

そこまで喜んでもらえるなら買ってやった甲斐があつたつてもものだが、元を正せばもらったもののお返しである。が、まあそれを言うのは野暮か。

「あつ、そうだおにいさん、お礼にいいものあげる♪」

そういつて時津風は、肩からかけたちっちゃなカバンをごそごそと漁る。

いいものつてなんだろ、セミの抜け殻とかかな？

「はいー！　どうぞー！」

「ああ、ありがとよ」

予想外なことに、時津風が取り出したのはタバコの箱くらいのサイズの金色の物体……てか金塊だコレ、当然金メッキの偽物だろうけど。

やたらずっしりしてるが多分アレか、子供銀行的なアイテムだな、コレ。

しかし最近のおもちやはよくできてんな、重さまで再現してるとは。

金塊の重さとか知らんけど。

「なんかやたらよくできてるけど、もらっていいのか、コレ？」

「大丈夫だよー！ 昔お仕事のお駄賃を粉で払おうとした人たちから、たつくさんもらったんだー！」

たこ焼き屋かな？

粉つて、せめて焼いたやつやれよ。

まあ代わりにこのおもちやをいっぱい貰ったつていうのなら、いいのかね。

しかし、お駄賃ケチつて金塊払う羽目になるとは、テキ屋のオヤジも下手打ったな。

(笑)

「そうか、なら貰つとくわ。んじゃ裏山にでも行くか」

ポケットに金塊(笑)を詰め込んで歩き出す。

向かうのは、たまに初風と遊びに行く裏山だ。

なんというか裏山ってなんか便利な言葉だよな、なにの裏にあるのか知ってるわけじゃないけど、とりあえず近場の山のことを言うのに使いやすい。

あれ、今更だけどこのクソ暑い中、山に入って虫取りするの？

湧いてきた後悔の大きさに、思わず歩くペースがぐんと落ちる。

「はやくはやくー！」

ペースが落ちた俺の手を引きながら、元気に前を歩き始める時津風。子供は元気だな。

あと、力強いな。



そんなわけでやってきました、勝手知ったる裏の山。

生い茂る広葉樹、なんとなくある山道、さらにうるさくなつたセミの声。

夏の山特有のむわつとした生命と緑と土の匂いが充満している。

暑さは木々が日光を遮ってくれていておかげで……いや、それでも十分暑いな。

しかしこれ誰の所有地なんだろうな、多分市有地だとは思いますが、警察に聞かれたらなんていおうかな、とりあえず土下座か？

鼻歌歌いながら俺の前の、草が生い茂る山道を気にせず歩く時津風。

本当なら長靴がベストなんだが、急なことだったので二人ともスニーカーだ。

ミスつたな、今からでも取りに帰るか。

そもそも冷静に考えて虫取りするなら昼より夜だし、長靴の他に虫除けやら軍手やらを揃えたいところだが……

あそこまで楽しそうにしているところに、水をさすのもアレだよな。

「おい、ちよつと止まれ」

「んー？ なになに？ なにしたいの？」

俺はよつこらセックスといいながら、ちっちゃいくて軽い時津風を持ち上げて、肩に乗せる。

俗に言う肩車の体勢だ、これなら草木で足切ったり蛇や虫に噛まれる心配も減るだろう。

「おおおー!!」

「そこなら上の方もよく見えるだろ、昼でも晩飯食い損ねたカブトムシやクワガタもいるかもしれないからな。よく探せよ」

時津風は嬉しそうに俺の頭に抱きつきながら、了解でーす！ と元気よく答える。

しかし、子供は体温が高いな、首筋の後ろが少しじっとりしてきたぞ。

まあ、子供は肌がスベスベだからあんまり気にならないが。

羨ましい限りだ、俺なんか朝起きて顔に油が浮いている現実に、加齢を実感する毎日だというのに。

「おにいさん、あそこになにかいるよー」

「お、どこどこだどこだ？」

時津風隊員がなにかを発見したらしい。

見ると茂みがあるだけで、特になにかがあるようには見えないんだが。

多分タヌキかなんかかな。

試しに木の棒を拾って、茂みの方に投げる。

木の棒がクルクル回りながら、茂みに飛び込む、その瞬間。

「……ツチ」

何故か迷彩服を着たゴツい野生のおっさんが茂みの中から急に現れ、投げた木の棒をキヤツチする。

あ、やべ、タヌキよりデカイやつだこれ。

そのおっさんの登場を合図に、次々と木の上やら土の中からなんか出てきた。

最初に現れたおっさん含めて、合計三名様の迷彩服の集団だ。

「……リーダー、どうします？」

その中の一人が、最初に現れたゴツいおっさんに問いかける。

というか、なにこの人たち？

もしかしてかくれんぼ？ この暑い中？ バカなの、死ぬの？

いや、マジで熱中症で死んじゃうぞ、大丈夫かコイツら？

あ、待て、偏見はよくない。

多分これアレだ、なんとかゲームっていうなんかおもちゃの鉄砲で撃ちあったり、かくれんぼしたり、なにかその手の職種の間になりきったりして遊ぶやつだ。

不知火のジムの隣に同系列経営と思わしきその手の施設があったから、スポーツよりのゲームともいえるやつなんだろうけど、多分その野外版だわこれ。

「いい潜伏場所だと思っただがな、こーも簡単に見つけられるようでは使えん。移動する」

「了解です。で、コイツらは？」

なんかやばい目でこちらを見てくるおっさんたち。

いやまあ、リーダーの人は俺よりそこそこ年上みたいだけど、取り巻きの奴らは俺と似たような年だから、おっさんおっさん言うのもなんか違うか。

「そうだな、どうするか……」

どうするって、ナニでもするのかよ。

あれかな、もしかしてアレかな、人数が足りないから誘おうか迷ってるんだらうか？
本人の目の前で相談とか、いい歳してシャイすぎるだろ。

でもこっちは子供づれだしなあ、というかこんな暑い中かくれんぼとかしたくないん

だが。

「——誰をどう、なにするんですかあ〜♪」

どうお断りしようか悩んでいると、頭の上の時津風が妙に甘えた声を出した。

瞬間

パツと一瞬で数メートル後ずさる迷彩服集団。

なんだなんだ、よく見たら顔からすごい汗かいてるなコイツら。

いわんこつちやない、脱水症状になっても知らんぞ、いつてないけど。

うーん、汗をかくほど必死に俺たちを誘おうとしてくれるところ悪いんだが、こちらとしては初志貫徹で虫取りをしたいのが本音である。

ここは大人でコミュニケーション能力（物理）のある俺がなんとかしてやるしかないか。

「俺たちは捕り物（虫取り）をしに来た」

「……捕り物だと？」

流れる汗を拭おうともしない、鋭い目つきのリーダーの人。

この人いい歳して……いや、何歳になつてもなにかに狂えるほど打ち込める趣味があるのは幸せなことだつて誰かがいつてたな。

「ああ、あんたらも驚くようなデカイ獲物をな。どうだ？ よかつたら一緒にやらないか？」

「（銀行強盗に失敗し、あまつさえ提督らしい男を撃つちやつたせいでおそらく賞金もかかつている可能性がある、今この街で一番危険視されているであろう俺たちより）デカイ獲物だと？ 貴様、何者だ？」

何者、何者かと聞かれれば無職ですとしかいいようがないのだが、どうしよう、その、無職と一緒に虫取りとか噂されたら恥ずかしいとかいわれるのやだなあ……（男泣き）

「あたしのお、ご主人様だよ！」

部下A 「ふあッ!？」

部下B 「ひえッ!？」

リーダー「なにッ!？」

俺「…………え？」

なに言ってるんだバカやめろ！

変な誤解うんじやうから！

「この時津風のね、ご主人様!!」

「…………成る程、そういうことか」

「おい待ってッ！ 今、お前なに納得した!?!」

焦る俺を尻目に、会話を続けるリーダーと呼ばれた男と時津風。

「だが、俺たちはタダじゃ働かん。雇うなら出すものを出してもらわんな……いくら出す？」

「え〜？ 命よりも高いものってー、あるのかなあー？」

取れるかどうかともわからない虫の命の価値を真面目に考えだすと、いろいろ難しい哲学とか宗教観の話になるからやめようね。

と、いうか成る程、そういうノリか、なかなか本格的にキャラ作って楽しんでるなこ

イツら。

そしてそれをすぐに察して会話するとか、時津風もなかなかやるな、子供は柔軟性があるわ。

「くツ……なめるなよ、俺たちはプロだ」

「あはは、そんなの見たらわかるよー」

なに楽しくそうに会話してんだよ。

お前らするいぞ、俺も交ぜろ。

「まあまで、確かに空手形を切るわけにはいかんな、いいだろう」

俺は会話に無理やり交ざり、先程時津風がくれた（なんちやつて）金塊をポケットから取り出し、リーダーと呼ばれた男に放り投げる。

「これは……」

「成功したらもう一本やる、どうだ？」

受け取った金塊（多分鉛）をじっくり見つめる男たち。

「本物、ですかね……」

「いや、この刻印商標は Prinz Material の……」

金塊を手にブツブツと呟きながら相談している迷彩服集団。

偽物に決まってんだろ、という言葉がグツと堪える、雰囲気大事。

時津風が肩からかけたバックから、もう一本同じのを取り出して、ぷらぷら揺らす。あ、本当にいっぱいあったんだな。

「すまん、勝手に約束しちゃった」

「えへへ、全然いいよ〜♪」

小声で時津風とそんなやりとりをする。

最初は馬鹿みたいだと思っていたが、なんとというかちよつとわかるわ。

こんなふうになりにきって、映画みたいな台詞のやりとりするのって、ちよつと楽しい。

「いいだろう、ただしこちらも予定がある。今日、一日だけだ」

「よし、契約成立だな」

俺は片手を差し出す。

リーダーと呼ばれた男は少し迷ったそぶりを見せた後、俺の手を握った。

ふふん、なかなかそれっぽいじゃないの。

「さつきも言ったが今日一日限りだし慣れ合う気は無い、俺のことはブラックとでも呼べ」

「ブルーだ」

「グリーン」

迷彩服三人組が、思い思いの色を名乗る。

そして貴様も色を決めろといわんばかりの目で、俺を見つめてきた。

じゃあ俺は……

「無色（無職）」

「は？」

自虐ネタで自分にダメージ！

「……なんでもない、レッドでいいよ」

「あたしはあ、時津風です！」

ああ、はい、お前はそれでいいのね。

そんな素で返されるとノリノリで色決めたおっさん四人がバカみたいじゃないか。

ほら見ろ、グリーンとブルーの人とかちよつとバツが悪そうにしてるだろ。

「でもー、あなたたちは様をつけてねー」

「まあ雇い主には違いなからな、いいだろう」

様をつけるよデコスケ要求をさらりと受け入れるリーダーブラック、意外と懐深いな。

まあ子供の言うことだし。

「で、どうする。居場所のあてはあるのか？」

「あ？ ああ、いそうな場所の見当はついてる、まあそれでもこの手のことの常だが、見つかれば儲けもん程度で考えといてくれ」

倒木の下とか、木の根元とか、木の蜜が出てるところとか。

人が増えればその分見つけやすくもなるだろうが、焦って探してもろくなことないからな。

のんびり行こう。



「なんで俺だけ見つからないんだよ!!」

「そんなこと知るか」

時津風はノコギリクワガタ、ブラックはミヤマクワガタ、ブルーはオオクワガタ。

虫取れない同盟の最後のメンバーであるグリーンに至っては土壇場でカブトムシを見つけたという大逆転劇。

時津風の虫かごにはそれら黒いダイヤがいっぱいである。

なんだよチクシヨウ、俺だけ坊主か？

そりやないだろ!!

「つか、あんたら、なんでそんな見つけるの上手いんだよ! しかも最初幼虫とかみつけてくるし、虫のストーカーか!」

「自然観察は生存の基本だ、それに現地での食料確保の技術くらい持っていて当然だろう。成虫より幼虫のほうが可食部が多い、そんなことも知らんのか?」

サラッと答えるブラックのおっさん。

生存の基本ってなんだよ、当然じゃねえよ。

つか食うのかよ!

虫、食うのかよ!

「なんでこんなものを集めるのかは知らんが……いや、それ以前に気になっていたんだが、貴様の狙っている獲物というのはもしかして……」

「ぼっ!? バッカお前、バカにすんな!? 俺が狙ってるのはもっところ、なんかすごいやつだ!!」

なぜだか麦わら帽子をかぶり、虫取り網を持った俺を生温かい目で見ると迷彩服ズ。

あークソ、でもこれ多分このまま探し続けてもドツボにハマるパターンだわ。

「一先ず休憩だ休憩、その河原で一休みするぞ」

「まあ構わんが……」

そんなわけで、先ほど見つけた小さな河原に移動する。

山間を流れる小さな小川で、周り一面が緑に囲まれた、自然の清涼感満点な場所。キャンプするならここ以外ないだろうと思えるレベルの最高のロケーションだ。

もつとも、来るのが大変すぎるけどな。

到着すると迷彩服は石と枯れ木を集めて焚き火をおこし、どこかから持ってきたポットに汲んできた水を入れ、インスタントコーヒーを作りはじめた。

なにこの人たち、手馴れすぎだろ。

「おいおい、コイツら……」

と、時津風に同意を求めようとしたら、見当たらない。

しまった、子供から目を離してしまうとは俺としたことが……と、思ったら時津風はいつの間にもやら川に入っていたらしく、水から上がると何匹ものでかい魚を手でつかんで戻ってきた。

あれ、もしかして私のサバイバル能力低すぎ？（両手を口に当てるポーズ）

ブルーの人が時津風から魚を受け取ると、ささっとナイフで捌いてワタを取り出し、どこかから持ってきた枝の皮を綺麗に剥がして突き刺していく。

おいちよつと待て、俺もなんかやらせてくれ、ザリガニとかとつてくるから。

あ、その前にやることか。

俺は時津風に向かつて手招きする。

すぐに走ってくる時津風、目の前までくると褒めてもらうのを期待するワンコのよう
な顔でニコニコしながら俺を見上げてきた。

うぐ、心が痛むが仕方ない。

俺は心を鬼にして時津風の頭に軽くゲンコツを落とす。

「ふえっ？」

「ばか、勝手にいなくなるから心配したぞ。それに川に一人で入るなんて危ないだろ。
はしやぐ気持ちはわかるが、今日は俺のそばを離れるんじゃない、わかったか？」

時津風はなにが起きたかわからない様子で、頭を押さえながらポカンとしている。

ヤバイな、怒り過ぎたかな、泣かないかな。

「えへ、えへへへへ、了解です！！」

なんでかわからんが、超嬉しそうに返事をする時津風。

まあわかってくれたならいいんだが、なにわろとんねんと思つた次第。

その後、魚が焼けるまで川で遊んで時間を潰すことに。

迷彩服ズはなんでこんなことを……みたいなツラだったけど、俺に石投げ水切りで負
けたのが悔しかったのかムキになって挑んできたり、川の中で手押し相撲してぼろ負け

してびしょ濡れになったりと、結局エンジョイしまくってる。

「おいブルー！　そこ代われ!!」

「えええ、いいですけど……」

つかブラツク弱いな。

いや、弱いというか運がない感じか。

なぜかここぞというところで木が流れてきたり、太陽の光が反射して視界が遮られたり。

運がない、マジで。

ちなみに今は手押し相撲の最下位決定戦を、時津風とグリーンの人とで眺めてる。

怒った手前仕方がないが、あれから時津風は俺の肩の上から離れようとしなない。

手押し相撲の時もずっと肩の上に乗ってた。

冷静に考えるとその状態でよく勝てたよな。

しかしなにしてんだろうなあ、俺。

タバコ買いに外に出たら、なぜか山の中で。虫取りしたり河原で遊んだり。

こう、青春というか少年時代な大冒険してるんだ。

自分の面倒だけでも一杯一杯なのに、時津風の面倒も見てるし。

しかもよくわからんゴツイおっさんたちと一緒に。

クソ青い空とでかい入道雲を見上げながらそんなことを思う。

「いい天気！ いい天気！」

「本当にな」

俺が空を見上げれば、必然的に頭にしがみついている時津風も空を見上げることになる。

何気なしにそうやって空を見上げていると、バシャンという水音が聞こえた。

見るとブラックが敗北し、川の中に倒れ込んでいる。

なにかわめいている内容的に、何故かカワセミが突っ込んできたらしい。

ほんと、運がない男だな。



「なんか夏っぽい話でもないのか、怪談とか」

全員で濡れた服を乾かす為に火にあたりながら、魚食ったり、煙草型チョコレートかじったり（押しつけた）、コーヒー飲んでたんだが。

元がシャイな迷彩服ズと向かい合って座っていても特に喋ることもなく、微妙に無言タイムとあいなってしまうた。

「なんだいきなり、慣れ合う気は無いと——」

「いや、いまさらだろ。つーかあんたが一番びしょ濡れになったせいで乾かすのに時間かかってるんだからな？」

うぐつと痛いところをつかれたみたいなお表情を浮かべるブラック。

ブルーとグリーンの人も微妙に気まずそうだ。

「……この仕事をしていると、確かにその手のおとぎ話やら噂話なんかは耳に入ってくる」

お、観念したのかなんか語り始めた。

しかもなかなか面白そうに滑り出した。

コーヒーを飲みながら炎を見つめる様子。

そして思わせぶりなしやべり方なんかも芸がこまかくて悪くない。

「そうだな、怪談かどうかはわからんが。戦場のおとぎ話の類、だが存在している可能性が極めて高いといわれる三組の奴らの話でもするか……」

戦場のおとぎ話ねえ、キャラ作り凝ってるな。

ちよつと現実感がないけど、まあいいか。

「二つ目は妙高四姉妹といわれる伝説の傭兵チーム。だがこれは実在していたのはほぼ間違いないらしい。俺の親父はやり合ったことがあるとかなんとかいつてたな、まあ眉

唾だが。その手の界限じゃ一番ポピュラーな話だ、あまりにも強すぎて、相手に妙高姉妹がいることを伝える連絡は撤退命令と同義だったって逸話もあるくらいだ。特に『羽黒』つて末の妹は敵の目玉をえぐって食べるって噂でな、ついたあだ名が『闇染め』だよ。まあ、ある日パツタリと姿を消したらしいから、おとぎ話みたいに扱われるがな」

へー、そんなのがいるのか。

つか、目玉を食べるってやばいな、怖すぎだろ。

ん？ 妙高つてどつかで聞いたことがあるような。

……思い出せん、まあいいか。

でも女で傭兵とか、行き遅れたりしないのだろうか？

なんて場違いな思いが湧く。

「二つ目は獵犬部隊と呼ばれる奴ら、コイツらは名前の通り群れで行動し、すごい速度で戦場をかけて獲物を狩るらしい。戦場で少女の笑い声を聞いたり、赤い目をした少女の姿を見たらすぐに逃げろって爺さんがよくいつてたが、後からコイツらのことだつてわかったよ。十年かそれ以上前に西で一番大きいカルテルがコイツらを雇ったつて噂だったが、そのすぐあとにそこは壊滅した。憲兵軍の暗部特殊部隊、戦前から存在する暗殺者集団、ワーウルフの生き残りなんて噂もあるが……これが怖いのは俺のじいさんの代、百年以上前から語られてるつてことだ。そいつらが百年以上生きてるのか、それ

とも代替わりしてるのかは知らんが、これは今でも目撃情報がある。仕事の内容は話せんが、実際俺も若い頃にもしかしたらつてのに出会った。あの時のことは今でも悪夢に見る」

お、ちよつと怪談ぽい。

でもなんというかいまいち怖さが伝わつてこないな、武勇伝みたいになつてるし、さつきの羽黒とかいうヤツのほうが怖いな。

せめて友達の友達から聞いた話とかそういうのにしとけよ。

なんて考えていたら、時津風がギョツと俺の頭を抱きしめてきた。

おつと、子供には結構怖い話なのかな？

「だが、それよりも今の状況で恐ろしいのが最後のヤツだ。今までののは戦場に近寄らなければまず出会うことはない。だがコイツだけは戦場に関わらずに、ある場所に現れる……」

「今の状況？」

ブラツクは軽く頷く。

おうおう、なんか雰囲気出てきたな。

「そいつはインビジュアルって呼ばれてる。主にジャングルやこういう森の中で襲つてくるナニカだ。単独らしいということ以外、正体は一切不明。深海棲艦の亡霊や実験施設

から逃げ出した兵士、大本營の残党、果ては宇宙人なんて眉唾なものもあるが。事実としてコイツは三つの中で一番被害者が多い。なんでわかると思う？ 文字通り生きた証拠があるからさ。コイツに目をつけられると死ぬより恐ろしい目にあうと有名だ」

ゴクリと、ブルーとグリーンの人が唾を飲み込んだ音が聞こえた。

「死ぬより恐ろしい？」

「ああ、インビジブルに襲われると逆さ吊りにされて、身体中を粘膜性の緑の液体で染められるらしくてな。そのあと助け出されても、ジウン、ジウンってブツブツ呟くだけの廃人にされちゃうらしいのさ」

マジかよ、似たようなのでなんか遠くで揺れてるなにかを見続けてたら廃人になったとかいう、地方に伝わる怪談を聞いたことがあるような気がするけど。

物理的に襲ってくるのか、ヤバイな。

「うちのじいさんがやりあったこともあるらしいんだが、十倍の数とでもやり合えるような精鋭部隊が一夜で壊滅したらしい。じいさんは頼りになる仲間と戦い続け、罨を駆使したりして戦ったが。やがて仲間とはぐれ、最後は泥をかぶって逃げ延びたとかいってた。結局姿が見えないそいつに襲われて部隊は壊滅、そのあと救出された仲間も全員逆さ吊りにされてて精神病院送りになったんだとき。被害甚大なのに正体不明で、誰も姿を見たヤツがない、そんな経緯からつけられた名前がインビジブル（目に見えない）

というわけだ」

色々と思うことはあるが、なんとというかブラックの一家、運が悪すぎないか？

いやでも、全員生き延びてるっていうのなら悪運は強いのだろうか。

ちなみに、ブルーとグリーンはビビっていたようだが、俺にはイマイチピンとこなかつた。

まあ、暇つぶしくらいにはなつたけどさ。

あと怖かつたのか、時津風はずつと無言だつた。



ブラックのおっさんの服が乾いた後、再び虫取りを再開する。

気になるのはなぜだか時津風がおとなしいこと、よほどさっきの話が怖かつたのだろうか？

時津風は今俺から降りて少し先を歩いている。

表情も少し暗いな、うーむ。

そういえばこの手の怪談は、対策として念仏とか三回まわってワンとかいえば助かるとかの救済措置があるはずだよな。

「なあブラック、さっきの話なんだが。そのインキンブルとかいうの、なんか襲われないようにする対策とか、襲われたら助かる方法とかないのか？」

「なんだ？ 信じていなさうだった割に、随分と気にしているじゃないか。それよりさっきの煙草みたいな菓子はもうないのか？」

俺の隣を歩いていたブラックが、こちらを見ずに辺りを見回しながら返事をする。

つか、気に入ったのかあの駄菓子……

「もうねえよ、いいから教えろ」

ふんと鼻で笑ってから、ブラックは話し始める。

「対策、になるかは知らんが。インビジブルは戦士や兵士しか襲わないらしい。じいさんも現地の女ゲリラと行動していたらしいが、その女は最後まで襲われなかったとかいつてたな」

「なるほどな、それならなんとかなりそうだな。つかそういうことならこの中で真っ先に襲われるのはあんたらだな、服装的に」

ブラックはニヤリと口をゆがめる。

お、珍しい表情。

「抜かせ、返り討ちにしてやるさ」

「そりゃ心強いこつて」

なんて会話をしていると、前を歩いてきた時津風がピタリと止まる。

つられて足を止めるおっさんカラーズ、いや、俺はおっさんじゃない。

……確かにもういい歳だけどき。

「なにかいる」

ぽつりと時津風が呟いた、瞬間。

「つつ!? 右だブルーー!」

ブラックのおっさんが大声で叫ぶ。

その声に反応したブルーが、ためらわず右に飛んだ。

その直後、ガラスのような物が碎ける音がして土が舞い上がる。

見るとさっきまでブルーが立っていた場所が少しえぐれていた。

「な、なんどあああ!」

「攻撃だ! だが弾頭が見えなかった、恐らく透明な素材を使ったなにかだ……」

いつの間にやら、木を背負うように身をかがめているブラックたち。

てか君たち反応いいな!!

「つて、だ、弾頭!」

「小口径だとは思うが、当然食らえばタダじゃすまん! いや、それにしても発砲音がし

ないのはおかしい!!」

なんでそんなもんが飛んでくるんだよ！

いや、そんなことはどうでもいい、それより時津風は無事か!?

慌てて時津風がいた方を確認すると、時津風は唸るようにしてどこかの木の上を見ている。

釣られて俺と迷彩服ズもその視線の先に目をやる。

「な、なんだあれは……」

グリーンが震える声をこぼす、木の上の一部、景色が妙に歪んでいる場所がある。

サイズは大人一人分ほど、よく見るとなんとというかそこだけ目のピントが合わない時みたい、妙に歪んでいる。

か、怪奇現象!?

「ミラーージュコート……光学迷彩かッ!」

ブラックのおっさんが絞り出すようにつぶやく。

は? え? コウガクメイサイ?

なにそれ、美味しいの?

「馬鹿な、戦史前失伝技術だど!?! いやそれでも完成していなかったはず……まさか本

当に宇宙人だともいうのか? ツク、ククク……成る程、これがインビジブルの正体

か……」

よく解らないことをいいながら、なにかを納得している様子のブラック。
え、てかコイツがさつきいってたインキンブルとかなんとかってヤツなの？

「貴様のいつていたでかい獲物はコイツか、まさかインビジブルだったとは。これもう一本もらつても割に合わんな」

「いや、流石にこれは狙つてなかつたよ！」

オオヒラクワガタで十分だったよ！

しかし問答無用で攻撃してくるとかヤバイな、なんかすぐくヤバイ気がする。

「……あたしが相手をするから、おにいさんたちは逃げて」

がるるくと、威嚇声を上げながら怯えるオッサンズの前に進み出る時津風。

「なっ、おいなにやつてんだ！」

「大丈夫だよ、あたしはねー、とつても強いから。うんうん、戦うことしかできないから。

「こんなのよゆうで……」

どこか冷めた目で俺の方を振り返りながら、そんなことをいう時津風。

おいおい、こんな時まで迷彩服ズのノリにつきあつてんじやねえ。

うだうだいつても仕方ないので、俺はブラックにアイコンタクトを送る。

頷くブラック、俺は持つていた虫取り網をインキンブルが居るっほい場所に投げつけ

た。

そしてなにか喋ってた時津風を抱えて、急いで走り出す。

ブラックたちも懐からなにかを取りだしてソイツに投げつけ、俺たちに追従して走り出した。

なんかやたら凄い光やらデカイ音やら煙っぽいものが出てるものを投げてた気がするけど。

花火かなんかか？

「は、離してよお！ 行かせてよおにいさん、アレは簡単に逃げられるような相手じゃ——」

「うるせー!!」

こちとら子供といえど一人抱えて走ってるんだ、問答してる余裕なんてない。

つかなんなんだよ俺は、なんでこの歳になって山の中をマジ走りしてんだ。

「聞いてよおにいさーん……あのね、えつとね、あたしちっちゃいころからあちこち転々としてて。おにいさんにいえないことだっけいっばいして……アレは凄く危ないヤツ、なんとなくわかるんだ。無理な作戦は凄く嫌、でもおにいさんのためなら戦えるから。それにあたしは先に行くの得意だから、こういうの慣れてるから、だから——」

「ああそうかい！ 羨ましいな戦えるって！ なんせこの世は敵だらけだ！ 家、学校、職場、街角！ 相手だっけことかかねえ！ 身内に他人、クラスメイトに教師にアホな

上司に部下に取引先！ 便意に劣等感にニコチン禁断症状、タバコは値上がりするし、あと自分！ むかつくヤツばっかりだ!!」

今の自分の現状と、時津風のなんとなく悲惨そうな過去の気配も相まって、腹の底から怒りが込み上げてくる。

黙って走ればいいのに言葉が止まらない。

「ああ羨ましいね！ 最近逃げてばかりだから俺は！ 知ってるか!? 俺がいま何社落ちてるか？ この前ちようど六十社超えたよ！ 応募動機をいつてくさいだあ？ そんなもんおまえんところが求人出してたからにきまつてんだろ！ バツカみたいだろ、ほんとバカみたいだ！」

ああもう、俺はなに叫んでんだよ、ほんと。

なんで時津風に当たり散らしてんだ、俺ってホント駄目なやつだ。

「わかるか!? これまではどうだったか知らんが、これからも嫌ってほどお前は戦うことになる！ だから今わざわざ戦う必要なんかねえ。どうしても戦いたいつてなら、ブラックやブルーやグリーンも一緒に戦ってやるよ、俺たちや仲間だからな！ あとなんか高い金も払ってるんだからな、大人だから仕事してるんだよ！ もちろん俺も一緒だ、レッドだからな！ つかお前あそこはピンクっていつとけよ！ 俺らノリノリで色決めてたのが馬鹿みたいじゃねえか！ 俺たちや五人戦隊なんだぞ！ この先戦う時

は俺たちみんな一緒なんだ！ だけど今は逃げるんだよおおお！」

「[[……]]」

「おいさん……」

無茶苦茶なこといつてるわ、俺。

脳に酸素がいつてない証拠だ。

心臓もめっちゃバクバクいつとるわ。

死ぬんじゃないのかこれ？

「……おいレッド、ヤツはまだ追ってくる。このままじゃ共倒れだ。ひとまず貴様らは先に行け、ここは俺たちが食い止める」

「は、はあ？ お前それ死亡フラ——」

不吉なことをブラックが言った瞬間、鋭く風を切る音が聞こえなにかが近くの木に突き刺さる。

木の幹を貫通して刺さっていたのは、俺がさつきインキンブルに投げた虫取り網だ。

キヤーツ!!

「いいから聞け、お互い足手まといがいては逃げきれん、当然俺たちもやられる気は無
い。これは貴様らが逃げるための時間稼ぎじゃない、二手に分かれないう提案
だ。そのついでに前金分くらいの足止めをしてやる、だから先に行け」

「なあ!？」

「おいおい、なんかかつこいいな。」

「だが確かにこのままじゃあ、やばそうなのも確かだ。」

「それにコイツならワンチャンある可能性、趣味の力は侮れんからな。」

「少なくとも子供を危険にさらすよりは百倍マシか。」

「ああわかったよ! 勝手にいつちまえこの迷彩服カラーズ! だけどまだ契約は途中だからな! 今度会ったら虫取りの続きと、あとキャンプもだ、星とか眺めながらえつと、そういえば俺キャンプでカレー作ってみたかったんだ、前金払ったんだからな! 絶対残りの代金分も付き合ってもらうからな、絶対だぞ!」

「やつぱり虫取りだったんだな……まあいい、任せておけ。カレーは傭兵の必須料理だ!」

ニヒルな笑みを浮かべるブラック、あとグリーンとブルーも。

「やつらは立ち止まって反転する。」

「行くぞブルー、グリーン! トライデントフォーメションだ! ヤツにエターナルフォースブルクラッシュを仕掛ける、スーツ強度を最大まで上げろ! 間違っても倒そうと思うなよ、あくまで時間稼ぎだ!」

「了解!!」

「ああクソ、楽しそうだなちくしょう、あとその技名長すぎる。」

てかやつぱり時間稼ぎじゃねえか。

格好つけすぎなんだよ馬鹿野郎。



ひたすら走り続け、気がつけば森を抜けてどこかの原っぱに出ていた。

見渡す限りヒマワリが咲いている、野生してるのかこれ？

もう走ることができず、ヘトヘトになりながらもヒマワリの海の中を進む。

あつ、ダメだ。

もう限界。

ガクガクプルプルが止まらない足がついに限界を迎えた。

俺はその場にヘタリ込む、兎にも角にも時津風が無事で――

あれ？

ついさつきまで脇に抱えていたはずの時津風の感触がない。

慌てて立ち上がって辺りを見渡すも、背の高いヒマワリに視界を遮られて見つけれない。

ヤバイ、ヤバイぞおい。

「と、時津風ー!! 時津風ー!! どこだ時津風ー!! こっちに來い時津風ー!!」
滝みたいに流れる汗をぬぐいながら叫ぶ。

ああ、クソ、陽炎になんていやいいんだ。

こうなれば來た道を引き返すしかないと決断した瞬間。

ヒマワリ畑をかき分けて、なにかが猛スピードで向かってくる気配。
身構える、クソ、ブラックたちはやられちまったのか？

ブリブリと嫌な汗が噴き出す、が。

せめて時津風だけでも見つけないと、死ぬに死ねんと覚悟を決める。

「あークソ、くるなら來いヤアあああ!!」

バツと飛び出す小さな影。

「うわあああん! ていとくうー!!」

影の正体は時津風だった。

てか、お前かーい!! そして提督呼びかーい!!

「ごめんねてーとくう、てーとくがくれた帽子なくしちゃたあああ、うわあああん!!」
そのまま俺は時津風に飛びかかれて地面に押し倒される。

あ、もう駄目、俺もう動けない、今日はもうホント無理。

そんな俺の状況なんぞ知らんといわんばかりに、動けない俺に馬乗りになって、胸にしがみつきなからぎやあぎやあと泣き叫ぶ時津風。

「ああもう、そんなもんいくらでも買ってやるから、ほんと、お前が無事でよかったよ」
「でも、でもお！」

泣き止まない時津風、つか麦わら帽子俺も落としたし、おあいこだわ。

「まあ、無くしたもんは仕方ないよ。俺の帽子もどっかいったしな。夏にでもくれてやったと思つとけ、な？ あともう怖くないからな、あのインキンブルとかいうヤツは兵隊さんじゃないと襲つてこないらしいし、それに森の中にしか現れないっていったらどう？ もう大丈夫だ、だから泣き止め、そしたらいいもんやるよ」

「グス、グス……じゃあ、あたしも……」

時津風はカバンに手を伸ばし、例の金塊を取り出そうとする。

「ああ、いいっていいって。お前ら陽炎姉妹には散々いろんなもんもらってんだ、俺がもらい過ぎなくらいにな。だからいいんだよ」

ぐしやぐしやと時津風の頭を撫でながら、ポケットのビー玉を確認する。
が、無かった。

落としたらしい、ファッキンあのインキンブル!!

しかし、冷静に考えるとアレってプラズマとか蜃気楼とかポルノガイジン現象とかそ

ういやつなんじゃないのか？

ブラックや時津風のノリがあんまりにもいいもんだから、俺も思わず本気になっちゃったけど、アレって子供の頃によくある、飛んでるビニール袋が幽霊やらなんやらに見えちやう、感受性豊かな時代の産物じゃないのだろうか？

やつぱ俺つて馬鹿みたいだな。

「う、うん、グス……泣き止むね、グス」

必死に泣き止もうと目頭を押さえる時津風。

俺は馬鹿だけど、こいつはえらいな、くそ。

俺はなにかやれるものがないか、ポケットをまさぐる。

が、悲しいかなせいぜい貰い物のライターくらいしかない。

子供のポケットでも、もう少しましなものが入っているだろうに。

しょうがないので時津風を肩車し、震える脚で立ち上がる。

ああもう、これしかないか、絶対いいたくなかつたんだが……

「ほれみる時津風、いい景色だろ？ 物より思い出つてな。今日は散々だったが、このヒマワリ畑の風景だけはまあ悪くないだろ？ クソ暑い気温も、うざいくらい青い青空も、馬鹿でかい入道雲も、うるさい蝉の声も、このヒマワリのおかげでゼーンぶ夏の思ひ出アクセントに早変わりだ!!」(疲労限界ハイテンション状態)

ハハハ、なに言ってるんだよ俺は、物より思い出っでなんだよ。そもそも、今日の恐怖体験のインパクトが強すぎなんだよ。やっぱ俺馬鹿だー!!

「——すごい」

ポツリと、言葉をこぼす時津風。

そして風が吹き、ひまわり畑が波打つ。

「すごいすごい！ ひまわりの海みたい！ こんな見るのも、こんなに楽しいのも生まれて初めて、初めて!! この景色すごく好き！ てーとくに肩車してもらって見える景色は全部好き！ 好き！」

嘘だろマジかよ信じられねえ。

時津風が喜んでくれたぞ。

……というか、お前も潤いのない人生だったんだな。

まあ、これから色々経験していけばいいさ。

時間はたっぷりある、夏はまだまだ終わらんからな。

「あー、なら今度、陽炎たち誘って海やら花火大会やら縁日やらでも行くか？」

「ほ、ほんと!? わーい、楽しみ!! 絶対だよ? 約束だよ? 絶対泳ぎに行こうねー♪
ねー! ねー!!」

これまた随分と嬉しそうだな。

そこまで期待されちゃあ叶えないわけにはいかないか。

そうだな、せめて俺が内地にいられる間は、コイツらに楽しい思い出を作つてやりたい。

それが、陽炎たちにはできるほんとうに数少ないことだろうしな。

「——しかしあつついなあ。もう汗でべちゃべちゃだわ」

「うん! とつてもあつついね! あつついね!」

汗をかいだ男の上だというのに、時津風はちつとも気にすることなく足や腕に力を込めて俺を握つてくる。

子供は元気だな、ほんと。

あつ……今更だが朝から煙草吸つてない。

なけなしの体力だけでなくニコチンも切れた。

「もう駄目……」

全ての力を出し尽くして、俺は今度こそ地面に仰向けになつて倒れ込む。

肩車の体勢のままだったので、時津風も一緒に。

「て、ていとくう!？」

時津風の柔らかな腹を枕にひまわり畑で寝そべりながら、夏空を見上げる。

ひまわりは元気にお天道様に向かって咲き、風に揺られて楽しそうだ。

ひまわりに囲まれた、青ペンキをぶちまけたような空が視界に染み渡る。

青いなあ、土臭いなあ、あつついなあ、植物臭いなあ。

蝉が遠くで鳴くのが聞こえる、嫌んなるくらい夏だわ。

こんなに夏を心と体で感じたのって何時ぶりだ？

「てーとく、てーとく? てーとくってばー、ねー!! おーい、聞こえてないの? う

おーい!」

俺のことを心配そうに、てーとくてーとくと呼び続ける時津風。

その度に不規則に膨らむ、時津風の腹の感触だけが今この瞬間心地いい。

「すまん時津かぜえ、もうちよつとこのままで頼む。もうちよつとしたら起きるから

……もうちよつとだけ頼む」

「……うん、いいよ」

時津風の呼吸が落ち着いたのか、腹の動きがゆつたりとした上下のリズムに変わる。

「ていとくはあ、今日頑張ったもんねー」

時津風は俺の泥だらけになった、汗でべちゃべちゃの頭を撫でてくれる。

あー、やつぱコイツいいやつだなあ、ちっちゃいのに優しいなあ……

ほんと、今日は色々ありすぎた、ヘトヘトでボロボロで汗だくの泥だらけだ。

現状の情けなさも相まって、感傷的になって泣いちゃいそうさ。

今の俺を見てまともな大人は、ああはなりたくないって思うのか。

そして子供が見れば、あんな大人になるのは嫌だっけ思うんだろうか。

思うだろうなあ、俺だっけ立場が違えばそう思うかもしれないからなあ。

でも、たまにならこんなことがあってもいいじゃん。

綺麗だけの生き方なんていやだし。

ああそうだ、そんな生き方いやだ。

タバコも吸わずに綺麗な一戸建てに住んで、なんかその手のおしゃれなイベントに行ったり、それを自慢し合ったり。

ギャンブルなんてしなかったり、もうテレビなんて見てないよねとかいたり、ジム行つて細マツチョ目指したり、大事なものは近くにあってたねとかいい合ったり……

そんな生き方いやだわって、今だけかもだがなんかそう思うわ。

いい歳して無職で求職活動もせずに古くさい駄菓子屋でダラダラしたり、山で虫取りしてうさんくさい迷彩服のおっさんたちと遊んだり。

幻覚を幽霊だと騒いでマジびびりしながら子供相手に怒鳴ったり、全力で走って、力

尽きて地べたに寝転がって自分が情けなくなつて泣いて、子供に慰められたり。

そんな生き方も正直どうかとは思うが。

それもわるくないよって、なんかそう思うわ。

まあ、それもこれも時津風がいてくれたからなんだろうけどさ。

ほんと、もう陽炎姉妹には頭が上がらんなあ。

そもそもなんで俺はこんなことを考えているのか。

今日の少年時代のような体験がそうさせたのだろうか。

なんか恥ずかしくなってきたぞおい。

「そーいや、ブラックのおっさんたち大丈夫かなあ」

「大丈夫だとおもうよー、自分たちのことプロだつていつてたしー」

ああ、そーいやいつてたなそんなこと。

プロならなんとかするだろう、なんせプロだしな。

次いつ会えるかわからんが、会えたらまた誘つてやるか。

なんだかんだであいつらも楽しそうだったし。

楽しそうか、そりやそうだよな。

好きでやつてるんだ、楽しくないわけないよな。

俺もやりたいことはやらないし、やりたいことはやってみようかね。

そう考えるとなんだか色々と気が楽になった。
単純だわ、俺って。

でもそうと決めれば、体も軽くなる。

腹も減った気がするし、時津風送り届けるついでにラーメン屋にでもよっていくか。
地べたに座った状態で体を起こす、歩くくらいならなんとかなりそうだな、帰ろう。

「帰るかあ」

「うん、また来ようねー」

ははは、この場所にもう一回来られる気が一ミリもしないけどな。

……ちよつと待て。

今気がついたけど、マジでここどこだよ。

オマケ | 陽炎会議録NO. 3 |

薄暗い部屋、円卓を囲む二十人近い少女らしい者たちがいた。

らしいというのは、何故か全員顔を隠すための尖った白い被り物をかぶっていて、その顔がよくわからないからだ。

そして被り物の額部分にはそれぞれ番号が振ってある。

あと因みに時間軸的には萩風の話より前のことである（伸びに伸びた）

「はい、というわけで『陽炎型提督適性者出現☆』という未曾有時の事態に当たり必死で考えた、最後の決まりの理由を話すわ」

その中で『1』と額に書かれた数字の被り物をかぶった少女がホワイトボードに、すらすらスラーと文字を書き込む。

① 抜け駆け禁止、ただし偶然の出会いにはOK

② ひとまず艦娘ということは伏せる『済』

③ 提督適性者免許はまだ取らせない、理由は今日

④ 提督の情報は必ず共有、なにかあれば直ぐに対応、理由は当然だから

れ
⑤二人だけの状況で名前を呼んでもらえるまで、提督を提督と呼ばない。理由はわか

「前回③を除く全てを話したと思うけど、今日は③について話すわ。それに付随する大事なこともあるからよく聞くように」

神妙な顔で頷くメンバーたち。

「この③の項目だけど、そもそも②の為には当然なんだけど、それとは別の理由があるわ。提督が求職中だっていうのは知ってる通りだと思うけど、これが関係するの」

どこぞのグラサンの基地司令のポーズを決めながら『1』の少女が説明をはじめ。

しかし、メンバーのほとんどは理由がわからず首をかしげている。

「正直どの企業も提督適性者免許を持った提督をほしがる。これはしょうが無いことよ、だって艦娘と関わりが強い人間⇨色んな所との繋がりが強くなるんだもの」

すつと『9』と額に書かれた少女が立ち上がる。

「ちよつとまつて、提督のことを考えたら私たちの私情や事情は抜きにして、すぐにでもとらせるべきなんじゃないのかしら？」

ざわつく室内、確かに確かにと、同意する声も聞こえてくる。

先日自分たちの提督が「またお祈りされたンゴ……」と項垂れていたという報告も上

がっているのだ、提督のためにできることがあるならすべきだという意見が飛び交う。

「ほしがりすぎるのよ……それが提督に与える影響が読めない」

その言葉に、ハツとなる室内全員のメンバー。

確かに、二十近い艦娘の提督、それは過去例のない多さだ。

例え艦夢守市といえど、それが周りにどういふ影響を与えるのか未知数なのだ。

それが自分たちのためになつたとしても、それは提督にとつて好ましいことなのか。

「艦連のバックアップもあるだろうけど根回しや調査は絶対必要よ。だから一先ずは保留にするの。このことは私たち以外には秘密とします、いいわね？　提督の求職活動への干渉も禁止よ、自分たちからコンタクトを取りたくても必ず私に相談して、過度に取り過ぎるとどこかに悟られる可能性があるわ——コレは長女命令よ」

『1』と額に書かれた少女は最後にそう付け加える。

室内のざわつきが更に大きくなる。

ざわ……ざわ……

「疑問は有るかもしれないけど今は慎重になる時よ、コレは何時の日か私たちが提督と

“くんずほぐれつハッピーでイヤンなR18めくるめく” 平穏な毎日を迎えるために必要なことなの、納得してちょうだい”

格好よく決めたつもりのもりの某長女だったが、“くんず” 部分の願望流出ワードをバツチリとキヤツチしたメンバー全員。

彼女らの頭の中で、来たるべき“くんずほぐれつハッピーでイヤンなR18めくるめく” 平穏な毎日の妄想が展開される。

そして、ほぼ同時に③に関して全員、同意の意味をこめてヨダレや鼻血を拭いながら「私たちの提督のために!!」

と、声を上げる。

薄暗い室内にその声はとてもよく響いた。

『困った人』と『戦艦：Richelieu』

——— こんなのつてないよ!!

あなたは叫んだ、ブドウ畑の中心で哀を叫んだ。

雨の日も風の日も、雷が鳴る日や那珂ちゃんのライプがある日以外は、大体毎日ブドウの樹を見て回っていた勤勉？ なあなたは、カミキリムシに食われてしまったブドウの糖度が、微妙に高くなっていることに目をつけた。

そして人為的にカミキリムシによるブドウ糖度の調整ができないかと考え、実験的にワインの樹を囲む小さなハウスを作り、そこにカミキリムシを放り込んでみたのだ、が、結果としてそのハウス内は外敵のいなくなったカミキリムシの楽園となり、もはや手がつけられない状態になってしまった。

その失敗にあなたは膝をつく。

ワイン造りに携わって早二十三年、新たなワインの研究をはじめて未だ三年。

生まれた時から親の手伝いをしてるので、二十三年であつてははずだ。

借金を残して他界した偉大な父親（笑）から成り行きで受け継いだ小規模なワイン農園だったが、ワイン造りが性に合っていたこともあり、なんやかんやでこの道に進むことに決めたのが三年前。

本当は三年前に農園をうっぱらって借金を返済し、別の人生を歩もうと思っていたのだが、とある御仁から待ったがかかった。

なにを隠そう、ジエノヴァ料理店『マエストラーレ』のオーナーである駆逐艦の艦娘、リベツチオだ。

ワイン農園を開く際に資金を用立ててくれたので、ある意味ワイン農園のオーナーでもある。

『カーサジュニアに、これからも私のお店で出すワインを造って欲しいの』

と、そのリベツチオ嬢（御年七十歳）に涙目で懇願されて断ることができようか？

いや、できない。（強弁）

何故なら断ればおむつを替えてあげただのどうだのという類いの、悲し恥ずかしな思い出話を延々と聞かされる羽目になってしまふからだ。

ちなみにあなたは知らないが、あなたの父親は艦夢守市でリベツチオに世話になる以前。

リベツチオの母国にワイン造りを学びに行っていた時から、ずーっと世話になってい

る。

付け加えるとその時はリベッチオがドン・リベッチオだった頃である。

晩年父親が「ファミリー」がどうか「血の掟」がどうかかなにかを伝えようとしていたが、あなたは大発生したカミキリムシの対処に夢中だった。

ともかく、動機はどうあれ、あなたはワイン農家になった。

最低限『マエストラーレ』に出荷する分と、ひいきの卸が買い取ってくれる分を十年間ほど作れば、まあなんとか借金は返済できるとはじき出したあなただったが、そうすると今度は暇をもてあましてはじめてしまう。

現在作っているワインは父親によって、作り方が完全にシステム化されている。

その年の気候などによってある程度手を加えたりする必要はあるが、それは品質を一定にするためのノウハウであり、それもきちんとマニュアル化されていて、改良の余地は無い。

毎年安定した品質のワインを作れるというのは凄いことだとは思いますが、どうせなら父親の作るワインを超えてやろうとあなたは目標を立てた。

夢、そう言い換えてもいいかもしれない。

父親を超えるワインを造る、それを夢と定めた。

訳だったのだが、今年の結果はカミキリムシファームを設立しただけである。

かなしいなあ。

まあよくよしてもしょうがないな、と、あなたはさつきと立ち直って、お手製の濃縮唐辛子プラス色々ミックス忌避剤を大量に散布しハウスクリーニングする。

(※忌避剤：害虫などを近づけさせないために用いる薬剤)

フルフェイスのガスマスクをしていても染みるような刺激、あなたは生を実感した。

「ケホッ！ ケホケホッ!」

ふと、風下に立っていたためか、不幸にも人間をゾンビに変えてしまうおっかないウイルスですら改心して仏門に下りそうな忌避剤を僅かに吸い込んでしまったと思われる誰かの咳き込む声が聞こえ、あなたはそちらに目を向ける。

そこには大きなサングラスをかけたフワフワ金髪の女性がいた。

太陽の光を反射し輝く長いプラチナブロンドは白金の板のようで、その髪よりも更に白い肌、おしやれな白いシャツにハイライズのジーンズで着飾られた体は、女性の理想のような等身と体型。

彼女を美しいと思いますかと、百人の二十代〜九十代の男性に聞けば、大半が前提として美しい、故に「あなたに恋をしました」とひざまずきそうにレベルアップした答えが返ってくるような女性だった。(ひざまずかない内の一人は多分どこかの高雄型適性の提督)

目は大きなサングラスのせいで見えないが、むしろ夜会で目元を隠すアイマスクのようなミステリアスな雰囲気を漂わせ、彼女の魅力を引き立たせるコーデの一部として機能している。

——おのれ不審者、何用だ。ここにはネロとカミキリムシ以外金目のものはないぞ！

(※『ネロ・ダヴオラ』リベツチオの母国の島の土着品種。非常に色が濃く力強いワインとなる。樽熟成に適しているといわれる。但しあなたが叫んだ『ネロ』は艦夢守島の気候に適応した改良品種である『ネロ・リベチ』を指す)

フルフェイスのガスマスクをかぶったあなたと、どちらが不審者かと聞かれれば誰もがあなたが不審者だと指さすだろう。

だがそんなこと知ったことかといわんばかりにあなたは叫び、唐辛子バイオ物質を浴びてピクンピクンしている、カミキリムシをサングラスの女性に毎分二十四匹のペースで投げつける。

「やつ!?! あ、アナタ! E s t u f o u !? って、ほんとちよ、やめなさい!!」

金目のものを渡してお引き取り願おうと思つたあなただったが、どうやら女性はカミキリムシがお気に召さないようだった。

あなたはしょうがないので投げ散らかしたカミキリムシを回収する。

作業着には分厚く大きなポケットがあり、カミキリムシ専用の格納場所となっていた。

「なんなのよ……おかしな人ね。確認するけどアナタこのワイン農場のシャトーかしら？」

サングラス越しでも伝わりそうな鋭い視線をあなたは感じた。

だがあなたは美女に鋭く品定めされるような視線に動じること無く、自分は『カーサ』（リベッチオ出身地域のワインの造り手を指す名称）であつて、『シャトー』でもなければ『ドメーヌ』でもなく、ましてや『ネゴシアン』では無いと答えた。

（すべて自由・平等・博愛の国のワインの造り手を指す名称、但しワイン農園、または卸業者ことを指して使われる場合のほうが多い、恐らく、メイビー）

だがまあ正直なところ父親がそう名乗っていたからそう名乗つてただけであつて、ややこしいなら『ワイナリー』とでも呼んでくれと、興味なさげに言い捨てる。

リシユリユーは自分の美貌に絶対の自信があり、それに対して男がどのような反応をするか重々承知しているが故に、自分に一ミリも興味を示さずカミキリムシを拾い集めるのに夢中になっているあなたを信じられない者を見るような目で見る。

それよりもまず、いいかげんそのフルフェイスガスマスクを取れよと思う。

が、ともかくこのままでは話が一切進まないと判断したりシユリユーは、肩にかけて

いたシヨルダーバッグから古いパンフレットのようなものを取り出し、あなたの前に回り込んで見せる。

「そう……：ワインナリー、昔ここでワインのことを——」

——俺はカーサだ！

自分でいつておいて、やっぱりそう呼ばれることに腹が立つてしまったあなた。

あなたは理不尽なことを叫び、そして再び彼女にカミキリムシを投げつける。

運悪く、そのカミキリムシが彼女の大きく開いた胸元にすっぽりとインした。

「びゃあああああつ?!」

豊かな胸の谷間をもどもぞと微妙に動くカミキリムシの感触に、彼女はその見た目からは信じられないような可愛い悲鳴を上げてどこかに走り去つてゆく。

——たわいない不審者め。

あなたはニヒルに笑みを浮かべながらそう呟くと、再びカミキリムシの回収をはじめ

る。
説明しておくあなたを見ている大半の存在は、あなたはアレな人だというイメージを抱きはじめているだろう。

間違つてはいないが、何時もならここまでひどくない。

というのも、朝にかぶったガスマスクのベルトを固く締めすぎて、外れなくなつてし

まったあなたは、ベルトを切るのがもつたないからとせめて害虫除けの薬を撒き終わるまではこのままでいることにした。

結果、ちよつと酸素が足りない状態になっており、何時もよりネジが二、三本ほど外れたハイな状態になってしまっていたのだ、ついでにいうと視界もあまりよろしくない。

医者に聞けばナチュラルハイの症状が疑われますと答えが返ってきそうな状態だ。もつとも、素の状態とどの程度違いがあるかと聞かれれば説明が難しいが。

そんなわけでカミキリムシを拾い集めていたあなただったが、途中で先ほどの不審者が落としたバックから落ちた手帳のようなものをみつけた。

手に取ってみてみると、サングラスをかけていない先ほどの女性の顔写真。

その免許のようなものには外来語で、国際的な警察機構の組織名が書かれている。

あなたは思案する、どうやら先ほどの不審者は外国人の不審者だったらしいと。

リベツチオの出身地の言葉が少しわかる以外、外来語が読めないあなたは、残念ながらその手帳がどういう組織でどういう身分を示すのか、全くわからなかった。

しかし問題はその手帳とは別に落ちていた、このワイン農園の古いパンフレット。

そこにはかつてあなたの父親が存命だった頃に実施していた、ワイン農場一日体験の案内が書かれている。

先ほどの不審者はこれが目的でやって来たのかとあなたは理解した。

あなたはそうならそうとさっさと行ってくれればよかつたのにと、カミキリムシを問答無用で投げつけておいて愚痴をこぼす。

一日体験ツアーは代替わりしてからはやめてしまっていたのだが、わざわざ外国からこんなところまでできてくれたのなら、多少のOMOTENASHIをしてあげなければなるまい。

あなたは彼女が走り去っていった方をみる。

丁度サングラスを外し微妙に不亂れた服装になった彼女が、ぶんすかぶんすかと擬音を発しそうな雰囲気に戻って来る最中だった。



国際的な警察機構に所属する戦艦の艦娘、Richelieu（リシュリユー）捜査官は困惑していた。

かの有名なリットリオファミリーとローマファミリーのボスである、リットリオとローマが艦夢守市を訪れていると情報を得たりシユリユー。

金剛連合会の縄張りである艦夢守市に、この二人が訪れるという非常事態だというの

に、なにも起きていないからという理由で動こうとしない上層部。

なにかが起きてからでは遅いのだと、無理矢理長期の休暇を取って艦夢守市へやって来たリシユリユーだったが、蓋を開けてみればなーんにも起きなかった。

大規模な銀行強盗事件などが起きてはいたようだが、それとリットリオ、ローマとの関係は見いだせず、そもそもその二人の行方もさっぱり。

途方に暮れていた矢先、リシユリユーはとある筋から、かのドン・リベツチオが艦夢守市で飲食店を経営しているという情報を手に入れる。

リシユリユーはそれを足がかりに二人の行方を探ろうと決め、そのためにまずはその飲食店と関わりのある場所の調査を開始したのだった。

そしてついに、ドン・リベツチオと関わりの深いと思われる人物が経営していたと思わしきワイン農園を突き止め、観光客を装い聞き込みを開始しようとしたが——あつさりとは体がばれてしまった。

服の中に入ってしまったカミキリムシを、人目の無いところで服を脱いで取り出し。あのガスマスクの変人に一言文句を言つてやろうと思つて戻ると、落としてしまった国際的な警察機構のIDカードと自分を見比べられてしまい、正体がばれてしまったことをリシユリユーは悟る。

もしこのガスマスクの変人が、リベツチオと関わりの深い者であるなら、これは痛恨

のミスである。

どうすべきか悩んでいると、ガスマスクの変人は落としたバックを拾ってリシュリーに渡すと、ついてくるようにクイツと首を動かす。

畏？ それともなにかしらの情報提供を？

面白い、例えどう転んだとしても数多くの現場をくぐってきたリシュリーは、手がかかりを得られる自信があった、の、だが……

何故かりシユリユーは今、OMOTENASHIされていた。



父親が健在だったころ、あなたのワイン農園はワインの試飲やワイン造り体験なんかもやっていたのだが、あなたに代替わりした後は煩わしさから全てやめてしまった。た。

当時は何人ものスタッフが常駐していたのだが、リベツチオの店の拡張もありそちらに移って貰ったため、もっぱらこのワイン農園にいるのはあなた一人だ。

それはともかく。

あなたはその名残である、ブドウ畑を見渡す眺めのいい飲食スペースのあるコテージにリシユリユーを招き、料理とワインを振る舞うことに決めた。

あなたは慣れた手つきで鯛を捌き流水でよく洗い、そして両面に粗塩をまぶし、スライスしたんにく、ローリエ、白ワイン少々を加えて優しく揉むように馴染ませると、冷蔵庫に入れる。

その間に何品かのパーネ・クンツアートと呼ばれる、オーブンで温めたパンにオリブオイル、塩、オレガノ、唐辛子、刻んだアンチョビー、種抜き黒オリーブ、刻んだドライトマト等をのせた、リベツチオの出身地の伝統的なストリートフードを手早く作ってゆく。

キリツとしたコックシャツと黒のソムリエエプロン姿に着替え、きびきびとした動きで料理するあなたの姿は、絵になるようなスタイリッシュさで。どんな料理ができるのかという期待感のみならず、その調理工程すら一種のショーとして楽しめそうな見応えのあるものだ。

フルフェイスのガスマスクさえ、つけていなければ……だが。

その様子を不思議な者を見る目つきで見ているリシユリユー。

驚き半分、戸惑い半分といったところだろうか。

余談だが、あなたはリベツチオの店で子供の時からお手伝いのような形で働いていたので、料理も接客もお手の物である。

もつとも接客するとリンボーダンスを唐突に始めたり、某有名閉店ソングを熱唱したりと、客を喜ばせるか怒らせるかの二極だったため、もっぱら調理場で手伝うことが多かったのだが。（リベツチオに拳骨落とされた回数は数知れず）

あなたはさきほど寝かせて味を染みこませておいた鰯を冷蔵庫から出して、網の上のせると、リシユリユーの前に置きバーナーで軽くあぶる。

えもいえぬ香辛料と脂の焼ける濃厚な香りが立ち上り、リシユリユーの胃袋を刺激した。

あなたはあぶり終えた鰯をベビーリーフを敷いた皿に盛りつけて、オリーブオイルをまわしかけると、クライマックスだといわんばかりな優雅な動作で、ぱらぱらと肘に塩を当てて散らす。

最後の謎のポーズで塩をかける動作は少し気になったが、リシユリユーは既に仕事のことを忘れてしまっていた。

料理自体は珍しいものでも無いのだが、目の前に広がるブドウ畑を眺めながら、調理の様子を見せてくれるというもてなし。

あなたがガスマスクをかぶっているということを差し引いても、中々ステキなシチュ

エーション、むしろ出会いが最悪すぎたギャップもまた今となつては悪くない気がしてくる。

鯛の炙りとパーネ・クンツアートをリシユリユーの前に並べ、最後に自慢のワインを注ぐ。

すつと半歩下がってリシユリユーの後ろに立つあなた。

リシユリユーはこのもてなしの雰囲気を受け入れることにして、出された料理とワインを味わうことにした。

「……Cest bon.」（おいしいわ）

一口食べると、自然とその言葉がこぼれた。

更にもう一口食べて、ワインを味わう。

太陽の恵みと、優しい海風が届く場所で熟成されたワインの芳醇な味。

そしてこのワイン農園の特有と思われる土の香り……

風に揺れるブドウ畑と青い空を眺めながら、リシユリユーはこれまでの人生を振り返る。

思えばがむしやらに走り続けてばかりの人生だったなど。

なにか足りないという漠然とした気持ち、それから目を背けるように働き続けた。

血なまぐさい現場に何度も出くわしたし、どうにもならなくて辛い思いも何度もし

た。

正直今の仕事につくことを強く望んではいなかった。

艦娘が関わるような捜査には、そういう組織に艦娘がいることも必要なのである。

艦連から提示されたこの仕事を、なんとなく選んだ、強い理由が有ったわけでも無い。

それでも身近な人や大切な仲間たち、そしていつか出会えるかも知れない提督が平和に暮らせる世の中になればと、働き続けた。

やりがいはそれなりにあつたし、人生も十分楽しんでるつもりだったが、こうやってなにかも忘れ、落ち着いて食事をとったのはいつ以来だろうか。

自分は何故この仕事に就いたのか、就くべきだったのか。

そんな苦悩とセンチメンタルの混じった気分になる。

「……私の正体を知って、どうしてもてなしてくれるのかしら？」

あなたは首をかしげ答える、あなたの目的を知ったからもてなしたのだと。

それを聞いて、すつとりシユリユの目が細まる。

「どういふことかしら？」

どういふこともなにもない、ここに来るのはワインが必要な人たちだけなのだから。

ならばワインが美味しく飲めるよう、もてなすのが当然だ。

あなたは胸を張って答える。

どこかずれたその答えに、リシユリユーはきよとんとしてしまふ。

そして毒気を抜かれてしまったかのような、呆れた顔で微笑む。

その様子を見て満足したあなたは、どこかに行ってしまう。

一人にしてくれたのだろうか、そう感じたリシユリユー。

リシユリユーはあなたに対して不思議な人という印象を持った。

食事を終えてしばらくの間のんびりと風景を眺めていると、なにかを手に持ったあなたに戻ってくる。

そしてあなたはリシユリユーにジャージを差し出した。

「この服はなに？」

ハヤスイ（メーカー名）です、あなたは自慢げに答える。

リシユリユーのあなたへの印象は、「変な人」から「不思議な人」になったが、結局「よくわからない変な人」にパワーアップして戻った。



リシユリユーは今、ブドウの樹の葉っぱの剪定を行っていた。

ジャージを差し出したあなたに、

——さあ、食うもの食ったんだから働いて貰おうか！
と言われ。

「こ、このリシユリユーにジャージを着ろというの!？」

と返したが、無言でカミキリムシをポケットから取り出したあなたに、カミキリムシが胸に入るジェスチャーをされてしまつては黙るほかない。

もつともあなたは100%善意で行動している、本来なら追い返すところだがわざわざワイン農場見学会のために外国から来てくれたという理由で、もうやめていたはずのこの催しを実施しているのだから。

リシユリユーの目的がそれだと、あなたは全く疑っていない。

いい手付きだ、覚えも早い、立派なワイン農家の嫁になれる。

あなたは素直にリシユリユーを褒める。

「アナタもしかしてこのリシユリユーを口説いてるのかしら？　だとしたらおあいにく様、リシユリユーの心はまだ見ぬamirralのものなのよ」

amirralって誰やねん。

という言葉あなたを飲み込む。

そういうつもりではなく、単純にいい手付きだったので褒めただけだったので。

でも何故か自信を取り戻したかのように、嬉しそうにべらべらとしゃべり出した

シユリユーがなんだか可哀想な子に見え始めたあなたは、彼女を生温かい目で見てあげることにした。

「あと言っておくと、それプロポーズの言葉としては2点よ、モチロン100点満点ちゅう——」

が、そう言われて腹が立ったので、あなたはカミキリムシを投げつけた。

「ちよっ！ やめなさいよ！フッフ」

だがあなたの奇行になれはじめていたリシユリユーは、華麗にそれを避ける。

—— あほ——！ ばか——！ うんこ——！ お前のかーちゃんリベチおばさん——！

失礼な単語の中に聞き逃せない言葉があったことに気がついたリシユリユーは、急に真剣な目をする。

どこか変わった空気を敏感に察知……：……できなかつたあなたは、構わずカミキリムシを投げ続ける。

「アナタ、ドン・リベツチオを知ってるの？」

—— 知ってるかと聞かれれば知っている。

カミキリムシのストックが尽きてしまったあなたは、地面に落ちているカミキリムシ

を再び拾い始める。

「よかつたら聞かせてくれないかしら？」

そう聞かれて、あなたは考えを整理してから、話し始める。

——リベチおばさんと自分の父親は、自分が生まれる前からの付き合いだったらしい。

リベチおばさんと父親がこの街に来る以前のことは知らないが、自分が生まれた時は既にリベチおばさんは飯屋の店主で、自分が知る限りはただの明るくて気のいいおばあちゃんだ。

あとこのワイン農園はリベチおばさんのものといってもいいようなもので、自分は借金があるから働いているに過ぎない。つまりこの身もワイン農園もリベチおばさんのものだ、あなたは誤解を招きそうな説明を加える。

「そう……なんとなくわかったわ」

リシユリユーは黙りこんで、なにかを考えるように手を口に当てる。

「ねえ、提案なんだけど。アナタを自由にしてあげるから私に協力してくれないかしら？」

あなたは首をかしげ、自由とは、そして協力とはどういうことだと聞き返す。

「このリシユリユーに協力、例えば普段の店でのドン・リベツチオの様子や出入りする人

間なんかの報告をしてくれるなら、取引材料としてアナタの借金をどうにかしてあげられるかも知れないわ。そうなればアナタは自由になる。正直アナタもそれを望んでいたのではなくて？ だからこそドン・リベツチオの敵になりかねないリシユリユーをもてなしてくれたんではしょ？」

その時あなたに電撃走る。

そうかなるほど、この女は恐らくリベチおばさんの商売敵の飲食店関係者なのだ、と。だからこのワイン農園の切り崩しにかかったのだと。

あなたはガスマスク越しにじつとリシユリユーをにらみつける。

確かに借金はある、だが例えそれが偉大な父親（笑）から受け継いだ望まぬものだったとしても、それをこの農園を経営しながら返すと選択したのは自分だ。

ふつふつとわき上がる激情。

あなたの頭に先日、恍惚とした表情で「ああ、このブツは上物だわ……」と呟きながら涼月農園から仕入れたトマトにほおずりしていたリベツチオの姿が思い浮かぶ。

ちがう、これじゃない。

あなたの頭にあなたが子供の時から、朝から晩まで働き続けるリベツチオの姿が思い浮かぶ。

従業員や客のため寝る間も惜しんで働き、テーブルに突っ伏して眠るリベツチオの姿

を見たのも一度や二度ではない。

そのリベチおぼさんの店を、つぶそうというのか（いつて無い）この女は。

あなたは腰の裏に差してあるナイフに手を伸ばす。

「アナタが手を貸してくれるなら、もちろん借金とは別にそれなりの謝礼もするわ。ただその為にはある程度の面倒やリスクがあることは覚悟して貰わないと——」

刃の飛び出す、こすれ、固い物にあたる小さな金属音が響く。

思わず息を呑むリシユリユー、あなたの持つ小さなナイフに目が行く。

だがそんなナイフで戦艦の艦娘をどうにかできるものかと、直ぐに平静を取り戻しあなたの動向を見定めようとする。

——悪いがその提案の返事は絶対にノウだ、例え望まぬ借金だろうとそれは自分が背負ったものであり、それを他の誰かに肩代わりして貰ったり、ましてや踏み倒したりするようなことなど絶対にしない、絶対にだ。

今までは打って変わった様子のあなたに、リシユリユーはたじろぐ。

——それに……

あなたは自分の頭を強く拘束していたガスマスクのベルトを、手に持ったナイフで切り裂く。

そして乱暴にガスマスクを脱ぎ捨てて叫んだ。

——「覚悟」とは……………犠牲の心ではないッ!

——「覚悟」とは!! 暗闇の荒野に!! 進むべき道を切り開くことだッ!

(※ジ○ルノ・ジョバァーナの名言感)

華麗なジ○ヨ立ちをキメながらここぞとばかりに、暗記していた大好きな漫画(作者存命中)の台詞を叫ぶあなた。

朝以来の新鮮な空気を肺一杯に吸い込んだあなたはいつそうハイになり、更に続けて「去ってしまった者たちから受け継いだものは〜」とか「あなた…『覚悟して来てる人』……………ですよね」とか聞いていたが、リシユリユーはそれどころではなかった。

何故なら目の前のあなたは、リシユリユーにとつての提督だったのだから。

Pourquoi? why? 何故?

どうしてこんなところに、このリシユリユーの提督が?

あれ、なにこの気持ち? 今まで稼働したことがなかった、乙女チックタービン全開に起動し始めたこの感覚。

確かにヘルメットや仮面など、顔を隠していた場合、直接肌が触れでもしない限りは

その人物が提督かどうかの判別ができない可能性があることは知られているが、まさか目の前でそれが起きるなんて。

目の前で凜々しいポーズを決めながら、決めぜりふっぽいものをしゃべり続けるあなたから、リシユリユーは目をそらせない。

この失礼で不思議で変な男、リベツチ才の母国の血を引いているのか、少し伊達男風な顔立ちのあなたをリシユリユーは見つめる。

長年の想いが弾け、様々な感情が駆け巡る。

戸惑いは山ほどあるが、それを塗りつぶす事実をリシユリユーは知る。大事なこと、それはあなたがリシユリユーの提督だったということ。

じわりとリシユリユーの目元に涙が浮かぶ。

馬鹿、mon boureaux、こんなに待たせるなんて。

もっとロマンチックな出会いを期待していた、こんなひどい出会いってあるのかしら。

馬鹿、リシユリユーのamiral。

でもやつと会えた、私の、私だけのamiral。

——このカーサ・ジュニアには

でも会えた、出会ってくれた。

だから、特別に許してあげる。

——『夢』があ……

「Salut, mon admiral.」(こんにちは私の提督)

リシユリユーはそう眩き、涙を湛えながらあなたの胸に飛び込んだ。

シRichelieu』

『困った人』と『戦艦：(ノ。D。)ノポイツ

「なつ、なにをするのよ!?!」

——それはこちらの台詞だ! 色仕掛けで籠絡しリベチおばさんへの刺客に仕立

てようとする気ならそうはいかないぞ!

さあこれから決めぜりふというところで、あなたの胸に飛び込んできたリシユ

リユー。

びつくりしたあなたは、それをとっさに古代ローマ神秘の合気道術で投げ飛ばした。無理もない、唐突に色仕掛けに切り替えたのかどうかの真偽は不明だが、敵と定めた相手に迫られたら、投げ飛ばすかはともかく誰だつてびつくりする。

そして更にもう一個、今まで微妙に曇つた視界越しでしか見てなかつたりリシユリーの姿。

ジャージ姿だというのに向に損なわれることのないその美しさ、あなたは思わず息を呑む、やべえこんな美人ぶん投げてしまったという事実に息を呑む。

「ど、ドン・リベツチ才は関係ないでしょ！　なによりこのリシユリーの愛を受け入れることのが不満だというの!？」

関係ないなら何故抱きついてきたんだという疑問を口に出せないレベルの、怒る美人の迫力に珍しくテンパツてしまったあなたは、ぶんすこ状態のリシユリーをなんとかなだめようと言いつつ、それはもう必死で考えた。結果……

——あ、あなたがどういふつもりか知らないが、さつきも言った通り自分の身は（借金的に）リベチおばさんのものだ。

あなたはふと冷静になって、やつぱ借金つて嫌だなあと感じ、苦々しげにそう答えた。冷静になつたついでに色々考えてみたが、そもそも何故自分がリベチおばさんのため

にこのフワフワ金髪の相手をしなければならぬのだと思い始めたあなた。

色々たわき上がってきた感情があった気もしたけど、なんだかよく解らなくなったあなたは、元凶である（と思ってる）リベッチオに押しつけることにした。

正直なところ、このフワフワ金髪が何者でなにが目的だろうと、あのリベチおばさんをどうこうできるわけないし、あと無駄に頼りになりそうな従業員（ファミリー）のメンバーもいるし。

そう考えれば自分よりよっぽどうまくやってくれるはずだ。

——だからもし自分をどうこうしたいのであれば、まずはリベチおばさんに話を通してくれ。

だがあなたの発言と辛そうな（嫌そうな）表情を見て、すべてを（間違った方向に）察したりシユリユー。

気高くも自ら背負ったものに対して、真摯に向き合おうとするその姿勢。（リシユリユー視点）

例えばどういう経緯であろうとも、己の持ち主に筋を通そうとする高潔さ。（リシユリユー視点）

リシユリユーのあなたへの好感度は、ストップ高をぶつちぎって上昇し続ける。

そしてその時不思議なことが起こって、リシユリユーのこれまでの仕事の経験と、こ

れからの *amirail* の為にできることはなにかという考えが絶妙な感じで混ざり合って融合を開始した。

このリシユリユーが今までやってきたことは全て、引き裂かれたアドミラルと結ばれるための試練を越えるための、今この瞬間訪れた戦いに勝つための力を得るためのものだっただと。

全てが満たされてゆく恍惚感に高揚しながらも、そうと決まればとリシユリユーは早速リベツチオと直談判することを決意する。

「そう、ならしやうがないわ。アナタを手に入れるためには乗り越えるべき試練があるということなのね……」

——え、あ、うん。

思わず返事をしてしまったあなた。

あなたはこのフワフワ金髪美人はどれだけ自分を鉄砲玉にしたいのだと驚愕する。

その返事を聞いてリシユリユーは服についた土を払いながら、ゆっくりと立ち上がる。

「いいこと、事情はわかったけど、このリシユリユーがヒロインである以上。決して私たちの関係をロミオとジュリエットの結末になんてさせないわ！ *amirail* はこのリシユリユーに全て任せて、おとなしく待っていなさい！」

そう宣言してあなたの反応も見ずに、リシユリユーは颯爽と走り去っていく。

あなたはそれを、自分が鉄砲玉にされた場合の結末は、多分肉の貯蔵冷蔵庫に逆さに吊されて、そこで一晩反省してなさいとリベチおばさんに怒られる結末だろうなあという思いで見送る。

なんだか色々あつた気がするが、取りあえず一日中ガスマスクをつけてたせいで、汗まみれになった顔をあなたは洗いたかつた。

ポリポリと頭をかきながら、あなたは放り投げたガスマスクを回収する。

と、なにかを思い出したのかりシユリユーが途中できびすを返し、あなたの目の前に戻ってきた。

そして思わず身構えたあなたの防御をかくぐり、リシユリユーはあなたの首の後ろに手を回し、さらに脚を腰に絡める。(はしたない)

時間差!? とあなたは驚く。

それならばと再び古代神秘コロッセオ合気道術を展開しようとするあなた。

だがあなたはリシユリユーの脚にガツツリ腰をホールドされ、動きを封じられて動けない。

「忘れていたわ mon boureaux」

リシユリユーはそういうと、身動きできないあなたに微笑みながら情熱的な口づけを

した。

口内に差し込まれた柔らかな舌に蹂躪される感触。

手付け金か前金代りにしてはやたら長い時間じつくりと絡められた後、唇を離す時に下唇を少し噛まれ、あなたはそこでようやくキスをされたのだと気がつく。

リシユリユーは汗まみれになったあなたの頬をひと舐めすると、ウインクをした。

「ふふっ、続きは全て片付いてからね♪」

呆然とするあなた、その様子を見て今まで振り回されっぱなしだったことに一矢報いたといわんばかりの満足げな笑みを浮かべるリシユリユー。

リシユリユーは再び走り出した、その先にどんな困難があろうとも、自分と提督のステキな未来があると信じて。

相手は百戦錬磨を通り越して母国のマフィア統一しちゃったほどヤバイ駆逐艦だけど、この燃えさかるような愛の前ではどんな敵もつていうか、そもそもリベツチオ敵じゃないけど！

とぼつちりをモロに受けた気配のリベツチオがどこかでくしゃみをする。

頑張れリシユリユー!! 負けるなリシユリユー!!

リシユリユー捜査官の戦いは始まったばかりだ!!

あとジャージ返して!!

『意識高い男』と『重巡：鳥海』

私はロリコン（児童性愛者）だ。

「児童性愛者は大人の女性を愛することができない哀れな人間」

そういう声を耳にしたことがある。

確かに私はその性癖の都合上、大人の女性を愛せないかもしれない。

だが、そもそも愛する必要もないのだということ……分かっていただきたい。

ロリコンだということを恥じるあまり大人の女性と向き合えない、そんな記事を先日見かけた。

別にロリコンは恥ずかしいものじゃないし、本当に恥ずかしいと思うのなら努力して大人の女性を好きになればいい。

世界を変えるよりも、自分が変わってしまう方が遙かに楽だろうに。

話は変わるが艦夢守市のオフィス街と高級住宅街の間の一角。

そこにはとある紳士たち垂涎の店がある。

メイド喫茶『Big Slope』

この店、ただのメイド喫茶ではない。

なんと店の店員のほとんどは艦娘なのである。

おまけに一つの屋敷を丸ごと改装して作られたこの店は、オーブンスペース的な場所だけでは無く、多数の個室なども用意されていて、どの部屋もかなり豪華な造りになっているとか。

むしろ喫茶店というより高級サロンといったほうがいいだろう。

当然値段は高い。

前提としてまず会員にならないといけないのだが、他の会員からの紹介が必要で、紹介された後も年収や品性など多数のチェック項目がある。

それに合格してようやく、会員になる資格が与えられる。

あくまで『資格が与えられる』である。

そして入会費は私の年収に匹敵する、三ヶ月というレベルでは無く年収だ。

おまけに年会費も高く、私では払い続けられるか微妙なラインだ。

正直、私の収入でこの会員になるのは無謀もいいところだろう。

そもそも艦娘と特別な関係になれるという訳でも無く、ただ給仕してもらっただけだというのにそこまでの大金を払う人間が居るのだろうか？

いるのである、結構沢山。

提督の気持ちを味わえる、それだけで大金を払う酔狂な人間というのは多い。

まあもつとも、高級サロンとしての役割の方が重要と思っている者も多いだろうが。

話がそれだが、実は提督適性の免許保持者は紹介や審査が免除される。

また、入会費さえ払えば年会費も九割近く割引きが適用される。

愛宕や高雄の提督適性など必要ないと思っていたが、こういう時あつてよかつたと感じる。

まや……ま……や……さま……（ノイズ）

とにかく、こうして無事入会費を払い終えた私は、会員となりこのメイド喫茶に足を踏み入れることができるのである。

ふふふ、いったいどんな駆逐艦の少女に給仕をして貰えるのだろうか？

もつと私に頼つてといつてくれる駆逐艦メイドの『雷』

ストレートに変化球、元気はつらつ駆逐艦メイド『漣』

ツンツンデレツンデレツンツン駆逐艦メイド『天津風』

ああ、想像しただけで胸がいつぱいで幸せになれる。

さあ行こう、楽園は直ぐそこだ。

目の前に建つ屋敷を見上げ、一步踏み出す。

会員証を守衛に見せて門をくぐり、美しく整えられた広い中庭を歩いていると、やがて館の大きな扉の前に到着した。

私が門をくぐった連絡を受けていたのか、その扉がゆつくりと内側から開かれる。

そして現れた、クラシッククロングのメイド服姿の、長い黒髪的眼鏡を掛けた女性が丁寧にお辞儀をして出迎えてくれた。

「お帰りなさいませ、ご主人さま……あつ」

だが出迎への挨拶が途中で言葉が途切れ、雷にでも打たれたような様子で私を見て固まる。

高雄、愛宕、まやさま。

つまりはそういうことか、ああ、ええ、わかっていましたとも。

ホールに設置された大きな時計が、十二時を告げる鐘の音を鳴らす。

「……私が鳥海です。よろしくです」

涙をこらえるように、口元を押さえながらメイドの女性はそう名乗った。

『意識高いロリコン』と『重巡：鳥海』

「だーかーらー、ここに書いてあるでしょうが。『当店に適合した艦娘が居た場合は、その艦娘が専属となります。』ほら、ここ」

鳥海につれられて支配人室と札に書かれた場所に通された私は、支配人自ら規約書を指さされ、説明を受けていた。

支配人は軽巡の『五十鈴』とよばれる艦娘らしく、黒いリボンで長い髪を左右に縛り、胸元の開いた豪華な赤い夜会服を着て、キセルを片手に持っている。

煙のにおいが付くからせめて火は消してほしいのだが……

いやそれより、私が鳥海の適性者というのは億歩譲って仕方ないでしょう。

だが、でも、それでもこの店を普通に利用し、駆逐艦に給仕して貰うのはできないのかと、遠回しに聞いてみたのだが……

ご覧の有様である。

「香取メイド長？ うんそう、悪いんだけど個室の用意をお願い、鳥海がおめでたみた

「い

机の上に置かれたアンティーク調の豪華な電話機で、どこかに連絡をつける支配人。感知的に恐らく内線で他の従業員に指示を出しているのだろう。

……だがおめでたという表現はよくない。

ただいい言葉が無いのでその言葉を使いましたというのでは駄目だ。

おめでたの中にも、カースト制度があることを忘れないでほしい。

因みに私の中では今のところ、そのおめでたはカースト最下位である。

いやそんなことは今はいいとして……

「そういうわけで個室も用意させたから、そこで好きなだけいちやつきなさい。あと鳥海、親御さんには一応連絡いれさせて貰うわよ。あのじいさんうるさそうだから。

あー、そうそう……」

先ほどまでやさぐれていた風だった支配人は急に真面目な表情になってキセルを置く。

そして目を閉じて、両手を組み胸に手を当てると、厳かに言葉を紡ぎだした。

「私たち艦娘に神様がいるのなら、どうか今日、この出会いを果たしたふたりに満ちあふれる祝福を注いでください。ふたりの航海に幸多からんことを、そして幸せな生活を送

れるように。どうか、どうか——」

その祈りの言葉にはいいしれぬ静かな力がこもっていて、私は思わず息をのんでしま
う、が。

「んじゃ、いったいった」

すぐに元の様子に戻ったせいで、祝福されているのか、ひがまれているのかよく解ら
ない印象が変わってしまった。

その後しつしと追い払われるように、やさぐれた様子の支配人に追い出されて、私た
ちは外に出る。

部屋を出て、重い扉が閉まる音が聞こえた。

「あ、あの……」

「はい？」

エプロンの裾をぎゅつと握りしめながら、鳥海が口を開く。

「どうか、よろしく願います。ていと……ご主人様」

「ああ、はい。よろしく願います」

なにをよろしくなのだろうか、いやまあ……わかるんですが。

彼女は私の返事を聞いて、少し照れくさそうに微笑んだ。

私にとっては色々と思うところがあるのだが、とにかく突っ立っていてもしょうがないので、用意された個室に移動する。

個室に入ると、鳥海は自然な動作で私の上着を預かり、ソファアに座るよう促してくれる。

私が深く柔らかな黒革のソファアに身を沈めるのを確認すると、彼女は室内にあった器具で紅茶らしき飲み物を用意し始めた。

しかしこうして改めて見ると、大人しそうな外見でありながら、理知的であり意志の強い瞳がどことなく他の姉妹たちに似ている気がしなくもない。

また、豊かな体つきに締まったウエスト、美しく長い黒髪なども高雄に似ている。

そして身に纏うメイド服。支配人の趣味なのか、かなり凝った作りだ。

まずシンプルなデザインでありながらも、上質な生地を使っていると見受けられる。

また、細かいところに入ったレースなどを見るに、主人に恥をかかさず、だが目立ちもせぬようという思いが感じられる突き詰められた装飾に、執念じみたこだわりを感じる。

先ほどの支配人である五十鈴の夜会服も見事だったので、恐らく専属の衣装デザイナーがこの店にはいるのかも知れない。

もつとも私にはどんな素晴らしい衣装で着飾った大人の女性よりも、サイズの合わな

いぶかぶかのTシャツを着た少女の方が美しく見える。

なにを着るかということよりも、誰が着るかの方に重点を置くことにイノベーションを感じるのだ。

誰になんといわれようと、私の美的価値観が揺らぐことはないだろう。

ポリシーに忠実に従った結果、今の私があるのだから。

などということを考えていたら、鳥海が出来上がった紅茶を丁寧な動作で目の前に置いてくれる。

立ち上る芳醇な香りに、茶葉もそうだが入れ方も見事なものだと感じられる。

「どうも、素晴らしい香りですね」

「あつ、ありがとう、ございます……」

私のお礼を聞いて鳥海は真つ赤な顔になり、顔を伏せる。

口に含んでみると、味も見事なものだった。

さてしかし、なにを話したものでしょうか。

今まで出会った三人は、特になにするでもなくグイグイと迫ってくる感じだったのだが、鳥海はというと静かに側に侍っているだけだ。

無論、私としてはその方が好ましくはあるのだが、それはそれでどうしたものかとなってしまう。

「ここでの仕事は大変ですか？」

話題に困った時は、家族か天気か仕事の話という法則に従って取りあえず無難な質問を投げてみる。

鳥海は最初それが自分に向けられた言葉だとは気づかなかつたのか、しばらくしてハツとなり、慌ててしゃべり出した。

「え、あ、私はその、父が行儀見習いということと、ここで働かさせて貰い始めたのですが、仕事はともやりがいがあつて楽しいです。ただ、元々これといった特徴も無いのであまり人気が無くて……」

「人気……ですか？」

「はい、その、他にもこの館には凄い方たちが沢山いらして。一番人気があるのは羽黒さんという重巡の艦娘の方なんです。凄くステキな特徴のある方で、バリエーションがあるというか、お客様に合った給仕を演じ分けられます。特にステキなのが闇染めの羽黒と呼ばれてるパターンで、こう『悠久の闇に呑まれよ！』ってポーズを決めながら給仕をしてくれる姿なんて凄くて！」

「なるほど」

なるほど（無感情）

しかし羽黒といえは母さんと同じ、妙高型の艦娘だったはずだ。

確かにあの年齢の姿の女性がそのようなキャラクターを演じたならば、少なくともインパクトは大きいだろう。

だが、そのキャラクターが一番似合うのは駆逐艦『菊月』、もしくは髪型的に駆逐艦『旗風』ではないだろうか？（異論は認める）

身振り手振りでその様子を説明してくれていた鳥海が、急に声を落とす。

「ですが私はなにも特徴がないですし、器用なことまでできないので……」

「それでもありませんよ」

「え？」

「お茶を入れている時の貴方の動きは洗練されていて、端々に至るまで見事なものでしたし、入れていただいたお茶はとても美味しかった。一つ一つのことを丁寧にこなす姿は個人的にとても好感が持てます」

無論性癖としての好みではない、あくまで仕事ぶりに対する好みである。

褒められることになれていないのか、鳥海はそれを聞いて顔を赤くし、風が吹けば消えそうな声で「ありがとうございます」と呟く。

「そういうえば先ほど、ご家族に連絡されると支配人がおっしゃっていましたが……」

「あつ、はい、あれは父のことです。その、わたしは父が年をとつてからできた子供なのか、どうしても過保護になっているようで。年の離れた姉もいるのですが、父とは仲が

悪くて七年以上前に家から飛び出していつてしまつて……あつ、別にそれつきりというわけじゃなくて、今はTAKARAというブランドの衣装デザイナーをやつていて、元気でやつてるみたいです。ここの衣装も一部は姉が携わつていよう、この前支配人室で見かけて少し話を——」

さらりと家族構成を含めた色々な説明を始める鳥海。

なるほど、過保護な親を持つ気持ちや苦労は分からなくもない。

少し恥ずかしさと苦労をにじませた表情に、私は親近感を覚えた。

落ち着いた声色でゆっくりと話をする鳥海の声にしばらく耳を傾ける。

彼女と話していると、どこか安らぎを覚える。

持つつもりも持てると思わないが、もし伴侶をもつのならこのような気持ちになれる女性がいいのかも知れない。

もつとも、憎まれ口が多かつたり罵倒や罵声を浴びせられたり、落ち着きがなく元気いっぱいのお伴ひだつたとしても、駆逐艦の艦娘、ただそれだけで全ての希望を超越するのだが。

ゆつたりとした時間の流れに身を任せながら、鳥海と会話を続ける。

時に無言になることもあるのだが、無理をして会話を続けるといふ空気にもなることはない。

また、静かに紅茶を継ぎ足してくれたり、茶菓子を用意してくれるのもありがたい。駆逐艦の艦娘には会えなかったが、これはこれで悪くないかもしれない。

などと思いつながらしばらく時を過ごしていると、静かにドアをノックする音が部屋に響く。

鳥海は私に向かって軽く一礼し、慌てず、だが相手を待たせることのない早さでドアを開いた。

軽く開いた扉の隙間から、眼鏡をかけた鈍い金色の髪の女性の姿が見える。

「香取メイド長、なにか？」

「鳥海さん、お父様がいらしてらるわ。あなたと、その、あなたの提督に話があるみたいなんだけど、お通ししていいかしら？」

鳥海が私に目配せをする。

「構いませんよ」

そう答えた後、鳥海の目配せだけで彼女がなにをいいたいのか、わかってしまったことに少し驚く。

鳥海が香取と呼ばれたメイド長にその旨を伝えてしばらくしてから、扉の向こうの廊下から慌ただしい足音が聞こえてきた。

そして足音が部屋の前で止まり、扉が開かれる。

現れたのは三人。

一人は黒いスーツにサングラスをかけた大柄で筋肉質の男、手になにも持たずなにかあればすぐに対応できるような気配を漂わせている。

二人目はきつちりとしたスーツ姿で、重厚な革の鞆を抱えている、鞆持ちというか秘書といった感じの若い男。

そして三人目、おそらく鳥海の父親と思われる着物姿で白髪の老人、厳しい目つきで部屋を見回し、すぐに私も見つけにらみつけてくる。

「貴様が娘の提督か……」

すつと、控えていた秘書らしき人物が私に名刺を差し出してくる。

サラリーマンの性か、私も立ち上がって懐から名刺を出し、一般的なビジネスマナーで名刺の交換を行った。

見るとこの街で有数の銀行の名前と、その頭取の肩書きが目に入る。

おそらく老人の名刺なのだろう、身分のある人間が付き人に名刺を差し出させるのは希にある。

「ほう、Pentagon海運の経理部主任か、大学はどこを出ている？」

老人は誰に許可をとるでもなくドサリと部屋のソファに腰を下ろし、秘書から受け取った私の名刺を確認すると、そう聞いてきた。

私は老人の前のソファアに腰を下ろし、出身地域にあった外地の大学名を口にする。余談だが先輩（一浪）も同じ大学を出ている。

「ふん、率直にいうと外地の大卒という最低限の学歴にしては悪い会社では無いが、それにしたつて貴様が娘を一生幸せにできるとは思えんな」

いきなりの喧嘩腰、まず前提を間違えていることを指摘したい。

なぜに私があなたの娘を幸せにしなければならぬのかと。

「知つての通りこの娘は艦娘だ、普通の女を養うのとは訳が違う。貴様は娘がどういう存在なのか詳しいか？」

母親が艦娘であり、他の重巡洋艦の艦娘のことも含め知っていることはあると思いますが、取り立てて興味も無いですしマイフェアエンジェル駆逐艦の艦娘に比べたら――

「あまり詳しくは知りませんね」

「ふん、外地育ちならそんなものか。ならこの子が背負った艦娘についての歴史は？」

重巡洋艦・鳥海、かつて深海棲艦との戦争において重巡、高雄型の艦娘として活躍。性格は冷静で温厚、数字に強く計算能力や解析力に優れる。また艦の性能として他の重巡洋艦より僅かに火力が高く、決戦において武勲をあげることが多かった。程度しか――

「あまり詳しくは知りませんね」

「それでよくこの娘の提督がつとまると思つたモノだなッ！」

淡々とした私の受け答えにいらだつたのか、声を上げる老人。

思つてないですから、つとめる気もないですから、そもそも今日あつたばかりですから。

などといつてしまいたい気持ちをぐつとこらえ、とにかく穩便にお引き取り願う方法が無いか思案する。

権力がある人間を怒らせたところでもろくなことにはならない。

まあ正直ほうつておいても、このまま勝手に失望して鳥海を連れて帰つてくれそうなものだが。

「お父さま、そういう言い方は……」

「いいから、私に任せておきなさい」

強い口調でありながら優しい表情を浮かべ、鳥海に伝える老人。

鳥海のいつたように確かに大事に、ともすれば過保護と呼ばれるような様子だ。

鳥海はそれを聞いて「はい……」と返すも、ぐつとこらえるような表情を浮かべている。

老人は鋭い目つきで再び私をにらみつけた。

「いつちやなんだが、その年で主任なんてのは遅すぎる。少し才能や人脈があればその年なら係長……いや、課長補佐くらいにはなってるはずだ。その程度で甘んじているのは何故だ？ それは現状に満足しているか人生を諦めているかだ！ 正直野心の無い男など信用にあたいせんわ、そんな人間に可愛い娘を任せられるはずが無いだろ！」

私に野心が無い、ねえ……

「なんといいですか、大した情報も無しに会って間もない人間をよくそこまで判断できるものですね」

「会って間もない人間を直ぐに見極められずに、人の上には立てん」

尊大な態度で、私を見下すように言い放つご老人。

まあ実際の所、老人の名字はこの街でも有数の名家のものですし、忠誠心が高そうな護衛に付き人などを見ても、自身の才覚や人望もあるようですし、実績がある以上間違いでは無いのでしょうか。

私はちらりと鳥海の方を見る。

目を伏せて震えているようで、なにかをぐっと我慢しているようにも見えた。

「まあいい、貴様が提督である以上、これは仕方のないことなんだろう。だがあくまで提督適性者免許を取らせるだけだ、その後は娘には近寄るな」

「え？」

驚く鳥海をよそに老人はそう一方的に言い放つと、秘書に目配せをする。

秘書はすぐに鞆から小切手とペンを取り出してテーブルの上に置いた。

「すきな額を書け、それで娘からは手を引いてもらおう」

正直私としては願ったり叶ったりなのだが、この老人は正気なのだろうか？

私がいちのものなんだが、艦娘にとつての提督がどういふ存在なのかわかつているか怪しい。

艦娘というより実の娘という部分を強く見過ぎているためなのか、正常に見ることができていないように思える。

彼女たちが提督という存在を求める感情は、私が駆逐艦の少女と結ばれたいと願う気持ちと同じか、それ以上だろうに。

と、私自身も確かに艦娘の想いを正しく理解できていなかったことに気がつく。

なるほど、ああ、なるほど、そういう気持ちだったのか、彼女たちは。

……どうしたものか、これをいって私が得になるようなことはないし、むしろ色々と被害を被ることになるだろう。

だが、それでもこの老人にいわなければならぬことがある気がする。

しかたない、まあ提督である以上最悪の事態は避けられるだろうという、我ながら姑息な考えがわき、心の中で苦笑する。

「あの、一つお尋ねしてもよろしいでしょうか？」

「なんだ」

不機嫌そうに返事をする老人。

「いえ、貴方ではなく娘さんに」

私は老人には目を向けず、鳥海の方を見る。

「え、あの、私でしょうか？」

「はい、あなたはこう思つてらっしゃるんですか？」

私の言葉を聞いて、鳥海はぐつとこらえるようにしばらくエプロンを握りしめていたが、やがてぼつりぼつりとしやべり出す。

「私は……その、できれば……しゅじ……前島様のおそばにいらればなど……それからどうなるかはまだよくわからないのですが。でも今は少しだけでもおそばにいたいと思います……提督と艦娘としてどう関係を作つてゆくかは、その後かなと」

一步身を引き相手を気遣う、なによりまず相手にあつた付き合いを考えたい。

重巡洋艦の艦娘というのはこんな気遣いができる艦娘ばかりなのでしようかね（好感度＋0）

「馬鹿をいわないでくれ、このなにもわかつていない男にお前をまかせ——」

「私には貴方が、娘さんが艦娘だから特別なんだと決めつけて、結果として娘さんの気持

ちをないがしろにしているように見えますがね」

意識して重い声を出し、老人の言葉を遮る。

あと、特別扱いしていいのは駆逐艦の艦娘と龍驤（幼女認定）だけでしように。

「艦娘に対して理解が薄い、外地出身の貴様がなにを偉そうに」

憤怒の表情を浮かべる老人、後ろの付き人二人ががびくりと動く。

老人は片手をあげてそれを制し、私をにらみつける。

「君はこの娘ら艦娘がなにを思つて生きて、どのように成長してゆくのか見てきたわけでは無いだろうが。この娘たちがワシたちと、どんな違いがあるのか正確に理解しているのか?」

「勿論正確に理解しているとは申しませんが、かくいう貴方こそ本当にお嬢さんを理解していらつしやるのか怪しいものですね」

「なんだとツ!?!」

「私は艦娘ではありませんが、身が焦げ付くほどに焦がれるものならあります」

こんなふうになにに熱くなる人間ではないという自覚はあるが、何故か止められない。

私はいつたいなにに苛立っているのだろうか。

「血を吐くほどに努力をしたわけではありませんし（血を流すほど努力はした）、なにを犠牲にしても手に入れる覚悟があるともいえません（ただ見ているだけでも幸せだ

し)。なんとか手に入れようと頑張ってみても、そもそも後天的に手に入るものではないですし……でも、それでも、今でも欲しいと願っています」

「なにがいいたい？」

「貴方は本当に飢えた経験はありますか？ 自らのことをよく知らない相手に、異常者だと忌諱されたことは？ 自分の夢を誰かに笑われたことは？」

まあ、無いでしょうがね。

「大多数の人間は上質な食べ物、豪華な服装、高価な装飾品、ありとあらゆる娯楽、そして社会的、肉体的にも性格的にも優れた伴侶、それらを手に入れられれば幸せになれるのかもしれない。ですが、それらどんなものでも満たすことができない望みを抱えた存在がいます」

老人が手に持った杖を握りしめる音がする、よほど怒っているらしい。

「例えば貴方の娘さんとか……貴方が考える幸せと、貴方の娘さんが考える幸せは違っているんじゃないでしょうか？」

「いわせておけばッ！」

老人は急に立ち上がり、持っていた杖で横から私の顔を叩きつける。

痛みはあるが、それよりも飛んでいった眼鏡の方が痛い、新調したばかりだというのに。

が、それよりも。

「つ……！なにをするんですかッ！」

憎いものを見る表情で、自分の父親につかみかかろうとする鳥海。

老人は鳥海の言葉に反応して振り返り、その顔を見てしまつて衝撃を受けている。

大事に育ててきたはずの娘が、自分を敵としてみるような顔をしていることに。

鳥海が拳を振り上げる。

艦娘ではあるが、それでも、自分の父親を大事に思っていたであろうことは、紅茶を

飲んでる時にした短い話からでも分かった。

父の日になにをプレゼントするか、そんなことをいつていたのを思い出す。

その父親に拳を振り上げている。

その鳥海の姿を見て、老人はどう感じているのだろうか。

「——やめなさい鳥海」

だが、それはいけない。

それはいけないのだ。

「え、あ………て、提督？」

床に落ちた眼鏡を拾ってかける、レンズが割れて外れているので、フレームだけだが。「私のことはどうだっていい、娘さんを私に近づけたくないのであれば、それはそれで構いませんし受け入れます（混じりつけなしの本音）。ですが、その前に一度腰を据えて娘さんとお話しされたらどうですか、家族がすれ違う状態というのは好ましくないのでしようから」

「わ、わしは……娘の幸せを……」

ドサリとソファアーに腰を下ろし、呆然とする老人を横目に私は部屋を出る。

好き放題に言いたいことを言つてすつきりはしたが、少し疲れた。

せめてもの癒やしを求め、駆逐艦の少女を一目見られないものかと僅かに期待していたが、ホールに向かう廊下の途中では誰ともすれ違うことはなかった。

全く、今日ほろくなことがない。

「あ、あのー！」

館の正面ホールの扉に手をかけたとき、鳥海の声が後ろから聞こえてくる。

私は振り向いて軽く一礼し、続く鳥海の言葉を待つ。

だが鳥海は、思わず追いかけてきたようだなにをいったらいいのかわからない様子。仕方が無いので、私は彼女を落ち着かせるように言葉を選ぶ。

「お父さんと仲良く、ああ、それとまたここに来ます。そのときはもう一度紅茶をごちそうしてください」

「あ……は、はい！ お帰りをお待ちしております提督。それでは行つてらっしゃいませ……ご主人様」

鳥海は目尻に涙をためてほほえみながら、深く礼をして送り出してくれた。



眼鏡を修理に出し、繁華街で目についたBARに入つて酒を飲む。

私だつて酒を飲んで憂さを晴らしたくなることもある。

高い金額を払つて手に入れた、現状最後の希望だつた合法的に駆逐艦と触れあう機会を奪われ、そして眼鏡は割れるし、権力者には恨まれる。

世の中うまくいかないことだらけだ。

さすがに歩行に支障が出たり酔いつぶれるまでは飲まなかったが、それでも少し思考に影響が出る程度飲んだところで帰路につく。

それなりに長い時間たつていたのか、家に着く頃にはすでに夜の九時を超えていた。

家に戻り、鍵を開けて中に入る。

「あつ、お帰りなさい前島君」

「お帰りなさいませ、前島主任」

……何故か愛宕と高雄が部屋にいた。

「どうして……」

努めて冷静に聞く、ほんと、何故ここにいるのだろうか。

「ほら前島君、まやちゃんになにかあつても無くても、いつでもうちに来てくださいって
いつて合い鍵渡したじゃない」

「その、まやちゃんが前島主任と遊ぶんだって私たちのところに来てね、その、ご一緒させていただくことに」

言い辛そうに説明をする、愛宕と高雄。

ああ、そういうえばまやさまに無意識に合い鍵を渡してそんなことをいつてしまった記憶が……

「なるほど」(納得)

「まやちゃんは夜も遅いし、また今度ということになって、少し前にまやちゃんのお母さんに迎えに来てもらったのだけど……その、私たちは勝手に上がらせていただいた謝罪とそのご説明のために残らせていただきました」

「あつ、もちろん部屋を荒らしたりはしてないわ、ほんとよ。ただその、まやちゃんが色々と……」

喜々として部屋の中を走り回るまやさまの姿が、ありありと思い浮かんでしまう。

「いえ、そういうことであれば構いません。わざわざありがとうございます」

部屋に戻り上着を脱ぐと、すかさず高雄が受け取ってハンガーに掛けてくれる。

あの、もう帰ってくれませんか……と口にする前に、愛宕が遠慮がちに聞いてくる。

「その、前島くんその怪我は……」

「なにかあったんですか？」

「いえ、大したことはありません。ちよつと棒で殴られただけです」

驚く愛宕と高雄。

「あ、あの、もしかして前に町でお会いした、あの先輩さんに？」

「は？ 何故そこで先輩が？」

私の視線を受けてビクリとした愛宕。

少し迷った素振りを見せたあと、話し出した。

なんでも用事で人事部に行った時、丁度中途面接を受け持っている担当者と話をしたそう、曰く表向きは会社の事情による解雇扱いとなっているが、実際は暴力事件を起こしてクビになった男の情報が回ってきていたそうだ。

そこに貼られていた写真が先輩だったようで、この前私と一緒にいたのを思い出して不安になったらしい。

高雄も愛宕と同じ気持ちだというように頷いている。

「だからその、あまり素行のいい人とはいえないみたいだし、もしかして前島君になにか――」

「確かに、先輩はあまり素行がいい人ではありませんね」

愛宕の言葉を自分でも驚くほどの硬い口調で遮る、愛宕と高雄がビクリとしたのが分かった。

子供時代を思い出す、父の故郷で過ごした日々を。

「ところで私の母が重巡の足柄だという話を以前させていただいたかと思うのですが、まあ外地の常と申しますか、一部の地域では艦娘や艦連に対して丁寧な教育されていない場所もあります。私が学生時代を過ごした地域では子供の頃、『鉄の腹から生まれたい子供』などと私のことを呼ぶ人たちがいました。そのせいかよく絡まれましたね、まあ幸い頑丈だったものですから我慢していればどうということは無かったです。それでもあまり気分よいものではありませんでした」

アルコールのせいなのか、頭に血が上っているのが分かるのに、言葉が止められない。私は冷蔵庫から水を取りだし、一口飲んでから話を続ける。

「そんなある日、絡んできた三人組に飲料水の入った缶を投げられまして、とっさにかわしたのですが、それが近くを歩いてきた先輩にあたりまして。ええ、中身を頭からかぶった先輩は、静かに私たちの方に歩いてきて「これを投げたのは誰だ？」と恐ろしい声色で聞いてきました。その時私に絡んできた相手の三人は、先輩の様子を相当怖かったのか、すぐに私を指さしました。私は違うと必死に否定しましたが、真偽はどうあれ、人数を考えたらどちらを信じるかは明白な状況でした」

あの時、頭から飲料水をかぶってびしょ濡れになった先輩の姿を思い出す。

母以外に誰かが怖いと思ったのは、あれが初めてだった、だが……

「ですが先輩はその様子を見て、私のことをなにも知らないのに私の話を……信じてくれました」

何故先輩はあの時私を信じてくれたのか、それは今でも分からない。

でもあの時から私にとって先輩は信じられる人になった。

「まあその後、相手の三人に殴りかかっていって、それを止めようとした私まで巻き込まれてラリアットされたりと大変でしたが。なんだかんだとそのままズルズルとつるむようになつて……学生時代はずっと先輩と一緒に行動して、あの人の長所も短所も見て

きました。ご存じの通り私はこんな性格ですので、知り合いと呼べる人間はいますが友人は少ない、いや、私にとって友人と呼べるのは今も昔もあの人だけですよ」

あの人のことだ、その暴力事件も自業自得なんだろう。でもきつと理由はあるんだろう、あの時のように。

「そうです、先輩はまっとうな人間ではありません。粗暴で親切で苛烈で義理堅く、短慮で心優しい——世間の物差しでは測れない男です」

人生の知恵の多くを私は先輩から学んだ。

父の居なかった私に、先輩は悪い意味でも良い意味でも男らしい生き方を見せてくれた。

もつとも、それをかき消すほどさんざんな目にも、先輩のせいで巻き込まれたものが。

良い思い出もあるが、その百倍くらいひどい目に遭ったようにも思う。

——はて、何故私はこんなに必死にあの人のことを擁護しているのだろうか？

「あ、あの、ごめんなさい提督……」

「なにも知らず、私も同意してしまって……」

「いえ、すみません。私も少し熱くなっていたようで」

少し気まずい空気が室内に流れる。

その時、部屋の電話の音が鳴る。

電話に出ると、相手はよく知った声だった。

「なんでしよう母さん、こんな夜中に」

『夜は私の時間よ……じゃなくて。結婚するんだってね、おめでとう』

「はあ、誰がですか？」

『いや、あんたよあんた。さっき私のところに鳥海と鳥海の父親？　みたいな人がやって来て、なんか息子さんをいただくために結婚の挨拶に来ましたって、すごい腰を低くして丁寧に。話してみたら私が重巡の足柄だつて知らなかったらしくて驚いてたみたいだけど』

——は？

『あるじ』と『駆逐艦：夕立』

深海棲艦亡き後のこの世界で、艦娘という存在がどういう役割を果たし、どのような立ち位置にいるのか、それを簡単に説明するのは難しい。

それらは人間というくりの中にも、様々な役割、立場、地位があるように。

艦娘というものの中にもそれぞれの個性や気質の違いがあり、そして生まれによってもその立ち位置は変わるからだ。

当然『艦娘連絡会（通称：艦連）』という国家よりも強大な組織が艦娘と提督の保護を掲げて運営されている以上、艦娘という種の世界での地位は高いといわざるをえないだろう。

おまけに数が少ないとはいえ、生物的にも優位性が高いとなればなおさらである。

艦娘はその特異性に起因する無用の争いを避けるため、基本的には艦連の影響が強い特定の地域に集まり平和に暮らしている。

が、希に自らの存在意義を問うため、艦連の庇護下を離れ世界を旅したり、種としての在り方を問うために自ら戦いの場に赴く者たちがいる。

有名な例を挙げると、妙高姉妹の傭兵チームなどだ。

戦いは世界中にあり、そして強い力を持った艦娘を欲するものもまた大勢いるからだ。

そして更に希なこと。

そういつた艦連の庇護下を離れた艦娘が、艦連と敵対する戦いに身を投じた時。

ほとんどの艦娘は当然艦連との戦いを避ける、艦連と敵対するリスクが大きすぎるのだ。

そもそも敵対する理由となる組織に所属しているとしても、その組織が戦いを避ける。

だが更に更に、極めて珍しいことに。

ここにそのリスクを求め艦連と衝突した一人の艦娘がいた。

白露型駆逐艦 四番艦『夕立』

希に戦闘狂の気質を発現することがあるとされる、駆逐艦の艦娘。これは終戦から百年以上たった時代に生まれた、とある夕立の話。



「はあはあ……」

まだ日も昇らぬ早朝の砂浜。

一人の少女が濡れた身体を引きずるように、重い足取りで歩いてきた。

「なんで、どうして——」

ブツブツと同じことを繰り返しながら少女は歩く。

赤い瞳に、長い金色の髪、そして浮かべる凶相。

詳しいものが見れば、それが『改二』と呼ばれる二回目の艦娘変わりを終えた、駆逐艦の艦娘である『夕立』と気がついたかも知れない。

「どうしてッ!!」

答えるものは居ない。

その叫びを最後に夕立は砂浜に倒れ込む。

人を遙かに超えた体力を持つ艦娘だが、長期間の不眠不休の戦闘行動に起因するストレスを伴った疲労が限界を迎えたのだ。

薄れゆく意識の中で夕立は、寄せては返す波の音に混じって、犬の鳴き声を聞いた気がした。

『あるじ』と『駆逐艦：夕立』

夕立が眠りから目を覚ますと、彼女の知らない天井が目に入ってきた。

身体を起こすと、大きなベッドに自分が寝かされていることに気がつく。

ハッと気配を感じて隣を見る。

ふわふわの白い毛の大きな犬が、隣でじっと夕立を見ていた。

意外な気配の正体に、一瞬どうしていいのかわからず、固まってしまった夕立。

そんな夕立の顔をぺろりと犬がなめる。

「にやあつ!?!」

思わず声を出してしまった夕立、その様子を見て白い犬は、ゆつくりと部屋の外に出て行った。

「な、なんなのよもう」

夕立はベッドから降りて部屋を見渡す。

十畳ほどある寢室のようで、豪華な鏡台やクローゼット等の家具デザイナーを見るに、女性の部屋のようなだった。

自分が何故こんなところに、拘束もされずにただ寝かされていたのか、全く心当たりがない夕立。

ふと、先ほど出て行った白い犬が、何かの入った風呂敷包みをくわえて戻ってくる。そして夕立の足下にそれを置くと、嬉しそうに尻尾を振ってその場に座った。

夕立が不思議に思いながらも風呂敷包みを解くと、中には黒のブラウスと赤のスカート、そして黒のハイソックスや下着の類が入っていた。

「これは？」

「ワオン」

着ろといわんばかりに、白い犬が尻尾を振り回しながら吠える。

夕立はそこで、ようやく自分の服装に気がついた。

あちこち破れ焦げた服、戦装束と呼ばれる艦娘の衣服は、かなりの強度を誇っており、生半可な攻撃では損傷することもないのだが、それが今や見る影もないほどボロボロになっっている。

こうなると一度艦装として格納し、専用の修復設備を使用しないと直らない。

夕立はため息をつき、戦装束を格納する。

あらわになったのは、速度と小回りが求められる、駆逐艦特有の小柄でしなやかな体もつとも、艦娘の見た目の肉体的性能と、実際の性能は艦種や個体によつて大きく異なるのだが。

裸で居るわけにもいかず、夕立は白い犬が持つてきた衣服を着る。

そして鏡台の前に行き、着こなしを確認して軽く髪を整えた。

「どう？　似合うかしら？」

白い犬に向かって夕立が自嘲交じりに聞くと、ワンと元気のいい声が返ってくる。

「ワンツ」

白い犬はドアの付近まで移動し、ついてくるようにと伝えるかのように一度吠える。

「お呼び？」

白い犬のあとをなんとなく追つて、部屋の外に出て廊下を歩く。

小さな館のようで、歩いてすぐに外への扉が見えた。

その扉の隙間からすると、白い犬が外に出て行く。

ある程度掃除はされているようだが、所々ほこりが積もっていたり、劣化部分の修繕がされていない場所があった。

大きさに割に、一人か二人くらいしか住んでいないのだろうか、という考えが浮かぶ。

一瞬振り返つて家の中を見ていた夕立は、すぐにどうでもいいことだと気にするのをやめた。

そして白い犬が通つた扉の隙間に手を差し入れて、扉を開ける。

晴れ渡つた青空と太陽の明るい光に、夕立は目を細める。

まず目に飛び込んできたのは、見事な西洋風の庭園。

生い茂る緑の芝、家の周りの柵に絡みついた薔薇のツタ。

正面玄関から門に向かう道の、両脇に植えられた小さな木。

更に景観を壊さぬ程度に植えられた、何本かの大きな木。

庭全体の広さは、バスケットコートコート二面分ほどなのだろうが、美しく整えられた庭は

見た目よりも広く見えた。

少し離れた場所にある大きな木の一本の根元に、先ほどの白い犬が座つてこちらを見

ていた。

その隣には脚立に登つて、その木の剪定を行っている庭師の格好をした誰かの姿。

「ワン！」

夕立がその木に近づくと、白い犬が一回吠えた。

「なんじゃ、もう起きたんか」

麦わら帽子でその顔は見えないが、愛想の無い男性の老人の声がした。

老人は剪定を続けながら、振り向きもせずと言葉を続ける。

「砂浜でグースカ寝とつたお前さんを、運んでくるのは骨だつたワイ。本当は放つておくか通報しようかとも思つたんだが、ハチが意地でもお前さんの側を離れようとせんでな、感謝しろよ」

「ワン！」

白い犬の名前は、どうやらハチというらしい。

夕立はハチの頭をそつと撫でる、ハチは嬉しそうに尻尾を振つた。

「よつこいしよつこ」

老人が脚立から降りて、麦わら帽子を脱ぐ。

現れた顔には沢山の皺が刻まれており、髪の毛はあるものの、ほとんど白に近い灰色だった。

陽に焼けた顔や肌、分厚い手のひらと土の香り。

夕立は知識でしか知らなかつたが、老人から庭師という言葉がしつくりくる印象を受けた。

「お前さん艦娘じゃろ、しかもあんな所で倒れとつたんじゃから相当訳ありの」

その言葉を聞き、ハチの頭を撫でていた夕立はその手を止める。

そしてなにもいわずに老人をにらみつけた、冷たい狂犬の目で。

「別にだから問題があるって訳じゃないわい、むしろ好都合じゃ」

そんな夕立の発する鬼気に応えた様子もなく、カカカと老人が笑う。

ハチもつられてワフワフと吠えた。

その主従の様子を見て、拍子抜けした夕立の緊張が解ける。

「お前さんどっか行く場所はあるんか？」

少し迷った素振りを見せたあと、夕立は首を横に振る。

「ならここに居たならええ、ここにはワシとコイツしかおらんから部屋はあまつとるし、

丁度人手が欲しかったところじゃ」

夕立は広い庭と小さな館を見る。

確かに一人で管理するには、手が足らなそうだ。

だが、それなら誰か人を雇えばいいのでは？ と思つた夕立の表情を察してか。

「人間は信用ならんからなあ」

そう言葉をこぼし、脚立を抱えて老人は歩き出した。

無意識に夕立はその後を追う。

「……服、ありがとう」

老人に向かつて初めて口を開いた夕立。

その言葉を聞いて、老人は一瞬立ち止まる。

「ああ……死んだ娘のもんで悪いがな、あの部屋とあの部屋にあるもんは、お前さんの好きにするといい」

老人は振り向かなかつたので、どんな表情でその言葉を吐いたのか。夕立にはわからなかつた。



夢を見た。

戦場を渡り歩く夢、過去の記憶。

自分が死を与える存在だと自覚する、戦いの日々の記憶。

生を実感するために、同じ艦娘である格上の相手とも戦った。

湧き上がる戦闘衝動に、身をゆだね続けた日々の記憶。

心揺さぶられるなにかが、戦いの中にはあつた。

しかし月日がたつと、何時しかその日々も空虚に感じるようになった。

生や死という逃れられないものにさえ、繋がりを見いだせず。

世界全てに自分が無視されているような感覚。

そんな日々の中、胸の奥底にくすぶる、提督に会いたいという感情。

もし出会えたらどんな気持ちになるのだろうと、暇つぶしに想像する。

愛おしさがこみ上げるのか、それとも仕えられる喜びが湧くのか。

けれどもそんな感情もやがて薄れていき。

敵が死んでも、味方が死んでも。

昼が終わったり、夜が終わった程度の感慨しか湧かなくなり。

巡っては繰り返し、他人の人生を見送る。

今撃ち込んだ砲弾の先に、もしかしたら自分の提督がいるのかも知れない。

そんな大事なことすら、どうでもいいと思ってしまうようになり。

途方もない出会いと別れと、苦悩の時間の中で。

何時しか終わりを望むように――

「ワフツッ！」

「にやあつ!?!」

ハチに顔を舐められて起こされた夕立が、ベッドから跳ね起きる。

あまりいい夢を見ない日は、何故か決まってハチが顔を舐めて起こしてくれた。

「もう、驚かせないで欲しいっぼい」

褒めて褒めてと尻尾を振るハチの顔を、ワシヤワシヤと撫でる。

しばらくそうして、先ほど見た夢と現実が混ざり合う混乱した思考を落ち着けた。身支度をしてダイニングに向かうと、新聞を片手に朝食をとる老人の姿があった。

「おはよう」

「ああ、おはようさん」

夕立がこの小さな館に住み始めて、既に一ヶ月以上たっていた。

午前中は老人の庭仕事を手伝い、午後は屋敷の掃除と修繕、たまにハチを連れて館から十五分ほどの所にある、海岸を歩くコースの散歩に付き合う。

屋敷の周り数キロには民家は無く、老人とハチの他には、たまに食料や雑貨の配達に来る配達員以外、夕立は誰とも出会わなかった。

単調な毎日ではあるが、庭仕事に関して覚えることも多く、退屈することはない。

また、雨などで庭仕事ができず、時間ができた時は、館の蔵書を漁ったりもできた。あと老人の機嫌がいい時には、彼の奏でるギターを聴いたりもした。

戦友でもなく、同じ艦娘でもなく、ましてやまだ見ぬ提督でも無い人間と、こんなに長い時間一緒にいるのは、夕立にとって初めてのことだった。

居心地がいい、何故かそう思えるものが、この老人にあつたのかもしれない。

老人は庭仕事や屋敷の修繕作業に関しては何も口うるさかったが、夕立の過去については

特に興味も無いのか触れなかったし。

夕立もまた、死んだと聞いた娘のことや、決して近づくなといわれた『地下室』のこ
と等、特に聞こうとは思わなかった。

放浪と戦いの日々を送っていた夕立にとって、この館での毎日が新鮮だったのも理由
だろう。

望んでいたわけではないが、どこか居心地のいいこの環境を、自ら壊すことも無いと
思ったのだ。

「今日は薔薇の手入れを教えてやる、薔薇は花が咲くまでの世話が大事だな」

「わかった」

なにかを育てたり世話をする。

そんなことが自分にできるとは、ここに来る前の夕立なら信じなかつただろう。



「なあじいさん、こつちもガキの使いで来てんじゃねえんだよ。払うもんは払うつて
いつてんだからさあ、墓までお宝は持って行けねえんだからよ、ここらで一稼ぎして残
りの余生を楽しんでみたらどうだい？」

老人と夕立が門の横にある薔薇の手入れをしていると、二人組の柄の悪い男たちがやって来て、門越しに話しかけてきた。

典型的なチンピラとその兄貴分といった風体で、柄シャツを着た細身のチンピラが恫喝し、スーツを着た大柄で筋肉質な兄貴分が後ろに控えて、アメとムチの要領で脅す単純な手口だ。

「しつこいな貴様らも、ここにそんなもんはありやせん。とつとと失せろ」

夕立は老人の隣で、黙ってその様子を見ていた。

老人は関わるのも時間の無駄といわんばかりに、薔薇の手入れをしながらチンピラの方を見ようともせずに吐き捨てる。

「んだとじじい……」

チンピラが門の隙間から手を伸ばし、老人につかみかかろうとする。

が、隣に立っていた夕立が、無表情でその手を掴んで止めた。

「なんだあ？ 嬢ちゃんが相手してくれるのかあ？ へへへ、けっこうかわいいじゃねえか、おじいさん、いいのか？ このガキやご自慢の庭が無茶苦茶にされても……ぎゃあ!!」

夕立が掴んでいた左手に力を込め、痛みに耐えかねたチンピラが膝をつく。

ひねりなど一切くわえていない純粋な握力、骨のきしむ音が聞こえた。

「おいおい、嬢ちゃん。やんちゃもほどほどに……ほがあ!？」

諫めようとした兄貴分が門に近づいたところで、夕立の右手が兄貴分のネクタイを掴んで引き寄せ、チンピラを握っていた左手を離れたかと思うと、すぐに髪の毛を掴んで引き寄せた。

引つ張られて、門に押しつけられるようになった二人の男。

「いい、もしこの庭園になにか、例えばこの薔薇をむしったりしたら、貴様らの髪の毛を頭皮ごと全部剥がしてやる。門を越えてみる、目玉をえぐって舌を引きちぎってやる。できないと思う?」

夕立は二人の顔の近くに口を寄せ、ゾツとするような冷たい声でそう警告する。

「てっ!? てめえこのいだだだだあ!!」

「あら、今剥がされるのがお望みかしら?」

ミシリミシリと、髪の毛を掴まれていた、チンピラの頭皮からいやな音がする。

兄貴分がやめさせようと声を出そうとするも、ネクタイで首が絞まって声が出せない。

「やめんか、門が傷む」

夕立は老人の言葉を聞いて、それもそうだと納得して手を離す。

チンピラ二人が尻餅をつき、兄貴分の方は苦しそうに咳き込んでいた。

「このアマ……ぶつころして——」

なんとか息を整えて、兄貴分の男が顔をあげると、無言で門を開けてこちらに歩いて来ようとする夕立が目映る。

チンピラ二人は、尻餅をつきながら後ずさり、慌てて距離をとった。

「ま、マサのアニキ！ こ、コイツ、もしかして艦娘じゃあ……」

「なっ!? クソツ!! 一先ず退くぞヤス！ お、覚えてやがれ!!」

その見た目からは想像できない、夕立の異常な握力を身をもって体感した、マサとヤスと呼び合ったチンピラ二人は、夕立の正体に気がつき慌てて逃げていく。

逃げ足と判断力は悪くない……夕立は逃げていくチンピラを眺めながら、不思議と称賛する気持ちが湧いた。

薔薇の手入れを止め、腰を伸ばしながら立ち上がった老人がため息を吐く。

「何処で聞いたのやら、半年ほど前から、ここにある宝をよこせというてくるようになってな」

「宝？」

「ああ、そんな物ありやせんというのに、しつこくしつこくいつてきおる。最初は幾分かまともな奴らがあったり、電話をかけてきよったが。何度も追いつたり無視しとるうちに、ついにはあんな奴らまで送ってくるようになりおったわ」

「ふーん」

「電話の線を抜いとるのもそれが理由じゃ、おまえさんも使う時は線を挿して使うとええ」

例の『地下室』と関係があるのかと夕立は一瞬思うも、すぐに興味が薄れる。

何故なら夕立にとってはそれよりも、薔薇の手入れを覚える方が重要な案件だったからだ。



夕立は内地の、ごく普通の家庭の子供として生まれた。

だが艦娘を育てるのが難しいと判断した両親は、艦連に夕立を預けた。

そういったケースは多くもないが、少なくもない。

特筆すべき出会いや別れがあったわけではなく、特別ななにかを経験をすることもなく。

艦連の施設で育った夕立は、周りの艦娘と同様に成長し、ごく普通に基礎教育を終えた。

そしてなんとなく、艦連軍に入隊することになった。

特別なことが起こったのは、入隊して三年後のことだ。

その日、夕立の身に『改二』と呼ばれる現象が起こった。

艦娘変わり後に起こる場合がある、艦娘の戦闘能力の向上や見た目などが変化する現象だ。

上層部は、その適性の関係から、夕立を『獵犬部隊』と通称で呼ばれる、特殊な部隊に配属することに決定した。

夕立は『改二』になることによつて、その氣質が変化すると言われていたからだ。

獵犬部隊はその特性上、様々な特殊作戦に投入される。

国際的な犯罪組織に、傭兵として雇われる振りをして、証拠を集め秘密裏に潰したり。

極めて希に起こる、艦連法を破つた艦娘の拘束を、憲兵千鬼衆と共に請け負うこともあつた。

陸海問わず、通常より戦闘する機会が多いその部隊で、夕立は力をふるつた。

そしてある日、とある事件の責任をとつて軍を辞めた。

もつともそれはただのきつかけで、遅かれ早かれ軍は辞めるつもりだった。

だが、いざ辞めてみたところで、戦いに長く身を置きすぎた夕立には、街で普通の生活を送るのが苦痛だった。

自分の中のかなかが叫ぶ。

戦え、戦え、戦えと。

夕立は結局、再び戦うことを選び、傭兵となって世界各地を放浪した。いくら戦ったところで満たされない、空虚さを埋めようと戦った。

転々と戦場を渡り歩き、力をふるい続け。

時には艦連とも敵対した。

そんなことを続けていたら、ついには艦連からの追っ手がかかった。

むしろそれは、望んでいたことだったのかも知れない。

今考えれば、満たされることのない、空虚な日々に終わりを求めたのかもしれない。かつての仲間や千鬼衆に追われ、ついには終わりを受け入れようとした。

はずだったのに。

何故あの時——

「ワフツ！」

「にやあつ!?!」

ハチに顔を舐められて起こされた夕立が、ベッドから跳ね起きる。

夢見が悪かったのかどうかは思い出せないが、うなされていた夕立を、ハチが顔を舐

めて起こしてくれたらしい。

「もう、夕立の顔がそんなにおいしいっぼい？」

夕立は褒めて褒めてと、尻尾を振るハチの顔をワシヤワシヤと撫でる。

しばらくそうしてハチと戯れ、寝起きの思考を落ち着けた。

窓の外は暗く、夜明けは未だだいぶ先だ。

ふと、窓の外に人影が見えた。

目をこらしてみると、庭のベンチに老人が座っている。

気になった夕立は、上着を羽織って外に出る。

とことと、後ろからハチが付いてきた。

「……くんぼんは」

「ん、ああ、おまえさんか」

夕立は老人から、一人分空けた場所に腰を下ろす。

満天の星の下で見る夜の庭は、昼間とはまた趣が違う。

だが、それでもその光景は美しく、そしてどこか優しかった。

老人は夜の庭の見え方にも、気を配っているのだろうか。

夕立はふとそんなことを思う。

なにもいわず、しばらくそうやって庭を眺めていると、待つことに飽きたのかハチが

夕立の膝に頭を乗せ、ふわあとひとつアクビをして目を閉じた。

そんなハチを夕立が優しく撫でてしていると、老人が軽く咳をして話し出す。

「ハチは子犬の頃にあいつ……ワシの女房が拾ってきた犬でなあ、ようなついとつた。あいつはその、なんだ、いわゆる姉さん女房というヤツでな。ワシより結構年上だったというのに頑張つとつたんじゃが、歳には勝てず去年ほっくりとな」

老人の懐かしむような、悲しむような、そんな静かな声が夜の庭に響く。

「自分だつて辛かつただろうに、子供を亡くして落ちこんどつたワシを……見捨てもせず、に最期までよう面倒見てくれたわ。ワシは……あいつになあんもしてやれなんだというのになあ」

夕立はなにもいわずに、ただ老人の話を聞いていた。

「あいつはこの庭が好きじゃつた。だからせめてワシが生きとるうちは、この庭を綺麗にしておきたくてな。まあワシも歳だからな、正直なところおまえさんが来てくれて助かつたわい」

「……助かつたのは、私の方」

らしくも無い老人の身の上話を聞いて、なにかを感じたのか。夕立もほつりほつりと、今まで話さなかつたことを口にする。

「あのまま、あの場所で倒れていたら、私はきつと凄くつまらないことになってたと思う」

もしあのまま、目が覚めてあのままあの砂浜にいたら。

夕立はそんなもしもを想像する。

「私は逃げたの、あのまま終わってもいいと思っていたはずなのに……急に怖くなった、ううん、死ぬことがじゃない。知らないまま死ぬことが、怖く……」

「知らないまま、か」

「うん、あのまま死んで、生まれ持ってこの胸に抱えたこの気持ち、その正体が。きつと……わからないまま死ぬのが、怖くなったのね。あの時は気がつかなかったけど、今ならそう思える」

「何時かそれがわかる時が来るといいのう」

夕立はハチの頭を撫でながら、老人のその言葉に静かに頷く。
それから二人は、何時間もそこに座って夜の庭を眺めていた。



『新しく着任した時津風です！ よろしくお願い致します！』

また随分とこの部隊「らしい」のが入ってきたものだ。

それが夕立の感じた、時津風に対する第一印象だった。

結局、夕立はその「らしい」艦娘である『時津風』とバディーを組むことになった。というのも、かつて組んで行動していた同僚の艦娘である『時雨』が、運悪く出世して部隊の取りまとめをすることになったからだ。

夕立は新人を押し付けられてうんざりだったが、時雨の「じゃあ僕の代わりに部隊長になるかい？」といわんばかりの視線を感じ、渋々引き受けることにした。

だが、今思えば変に愛嬌のある時津風を、夕立は気に入っていたようにも思う。

『ねえねえ夕立さん！ 夕立さんは自分の提督が、どんな人かって想像したことあります？』

『そりやあるわよ、というか想像しない艦娘なんていないでしょ』

『えへへー、そうですねえ。時津風の提督はですねー、きつとすごく素敵なんですよ！』

『素敵ねえ、そりやまた随分とふんわりとした提督なこと。もつと具体的に想像して見たら？ たとえば腕が六本あって、目が三つあるとか』

『な、なんですかそれ〜!? 時津風の提督はエイリアンなんですかあ!?!』

思ったより鮮明にその姿を想像してしまったのか、時津風が青い顔で悲鳴をあげる。その様子がおかしくて、夕立は珍しくケラケラと笑った。

『まあ、でもそうね。提督と出会えたらどんな気持ちになるのか、それが知りたいなって、そう思うことは今でもあるわ』

『時津風も想像してみる……うん、それはきつと、すごく素敵な感じだと思います!!』
 きつとすごい、めっちゃすごいと根拠のない断言を連呼する時津風の様子がおかしくて、夕立はまたケラケラと笑う。

『おや、随分と楽しそうにしてるね』

そこに部隊の指揮官となった同僚の時雨がやってきた。

『あら、時雨「隊長殿」じゃない。出世おめでどう♪』

『おめでどうございます! しぐれたいちよう♪』

おどけたように敬礼する夕立と、子供が兵隊さんの真似をするような敬礼をする時津風を見て、時雨は女の子がしてはいけないようなレベルの嫌な顔をする。

『やれやれさ、こんな時代に好きこのんで戦うことを選んだ“ろくでなし”たちのお守りを押しつけられるなんてね』

『と、時津風はろくでなしなんですかあ〜?!』

驚く時津風の様子がこれまたツボにはまったのか、夕立は「違いな違いない」とい

いながら、目に涙をにじませ、腹を抱えて笑う。

そんな夕立を、時雨が恨めしそうににらみつけている。

そんな頃もあつたなど、夕立は夢に見る。

もう随分と遠い世界のことのように思えた。

□□□□□

その日、特に悪い夢も見なかつた夕立は一人で起きた。

ハチの姿を探したが、今日は起こしに來なかつたようだ。

身支度をしてダイニングに向かうと、いつもと変わらず新聞を片手に朝食をとる老人、そして足下に寝そべるハチの姿があつた。

「おはよう」

「ああ、おはようさん」

夕立がこの小さな館に住み始めて、今日で三ヶ月。

老人はいつも夕立よりも先に起きて、そこに座っていた。

「今日は植木の手入れ？」

「そうじゃな……いや、その前にちよつと話がある」

改まった風な老人の様子に、朝食のトーストをかじりながら首をかしげる夕立。

老人は新聞をたたんで、少し悩んだような間を置いて話し出した。

「まあなんじゃ、ワシは見ての通りそう長くはない。ここ何ヶ月か見ていたが、おまえさんはそれなりに筋がいい、勿論まだまだじゃが。だがなんだ、もしこの屋敷と庭の手入れをこれからもしてくれるなら、ここをお前さんに譲つてもいいと思つとる」

老人は慣れないことをいつている自覚があるのか、頬をかきながら落ち着きが無い。

「おまえさんも特に行く当てがないなら、住む場所はあるじゃろ、めんどくさい手続きは全部すませとくんで、考えてみてはくれんか」

夕立は悩んだ、正直なところ今の暮らしは嫌いではない。

数ヶ月前には思いもしなかったが、こんな余生を過ごすのも悪くないとさえ思っている。

だが。

「私は……貴方がいったように訳ありなの、正直いうと何時追つ手が来るかも分からない身だから、むしろ——これ以上ここにいる方が迷惑になるわ」

「ふぬ……そうか、だがまあそれも大丈夫じゃといったらう？」

「どういふこと？」

「おまえさんがどういふもんを背負つてるかは知らんが、少なくとも肩書き上ではまっ

とうな身の上にてできる方法がある。まだうまくいくかは分らんが、少なくともそれを試してみてもうまくいってから、もう一度考えてみてくれんか？」

恩がある、少なくとも夕立は恩に感じている。

戦うことしかできないと思っていた自分に、新しい生き方や住む場所をくれた。

今と過去、二人の自分がせめぎ合う。

結局のところ答えは出せず、夕立はなんとなく曖昧に頷いてしまった。

そう、なんとなく。

「そうかそうか!! まあすぐにはいかんが、そう長くも待たせんよ。ワシもいい加減お迎えが近いじやろうからな、急がんと」

「まだ元気でしょ。それに私だつてそう若いわけじゃないわ、ちゃんと数えてないけど多分五十は超えてると思う」

「なんじや、おまえさん意外に年寄りじやったんじやな。そうじや、これからはばあさんとも呼んでやろうか？」

「えええ、それはやめて欲しい……ぼい」

戦いで気が高ぶった時か、もしくは気を許した相手にしかつけない夕立特有の語尾。

それを初めてつけたことに、夕立は気づいていなかった。



「なあ、あんたいい加減……その、あの、その、なんとか考えてもらえないでしょうか、ほんと、マジでお願いします。俺この仕事が成功して、まとまった金が入ったら結婚しようかと……」

「実はお袋が病気で、入院費が必要なんだ。この仕事が成功すれば、その金でデカイ病院に入れてやれるんだ、せめて最後に親孝行してやりたくてよ……」

チンピラ二人が、一人で薔薇の手入れをしていた夕立に向かって、拝むように土下座しながら必死に話しかけていた。

あれから数ヶ月、チンピラ二人は何日かに一回のペースで懲りずにやって来て、恫喝やら嫌がらせやらなんやらをしてくれていたのだが、その度に夕立にボコボコにされて懲りたのか、今日は泣き落としに切り替えたらしい。

ここ最近はそのこんなで、ノルマのように毎回違ったあの手この手を試し、そして失敗して、夕立に物理で追い返されるのが当たり前の日々になっていた。

「……まあ、そのなんだ、いい加減俺らもクビになりそうなんだがよ。それはいいとして、ホント、なんなんだろうなお宝って？ 結構なお偉いさんがマジで狙ってるみたいなんだが」

「正直よ、なんか俺らなんかとは比べものにならない、すげえヤバイ奴らと呼ばぶって話もあるみたいツスよ、大丈夫ですか姐さん？」

何処に出しても恥ずかしくないクズ、弱者を食い物にするには定評のあるチンピラ二人だが、当然死ぬのは怖い。

初日で夕立が躊躇せず、こちらを攻撃してくるのを痛感した二人は、適当にノルマをこなしてから、絶対強者である夕立を怒らせないように、ゴマをするのを忘れなかった。気が弱いというよりは、艦娘相手ではさすがにどうしようもない、というのがあるのかも知れないが。

「誰が姐さんよ……」

薔薇の手入れをしながら、ひどく嫌そうな顔して夕立は答える。

「いっとくけど、あの人やこの場所に危害を加えたら、本気で命はないわよ」

チンピラ二人をにらみつけながら、ゾツとするような声で呟く夕立。

そのあまりの恐ろしさに、チンピラ二人は思わず抱き合って、ぶるぶる震えてしまった。

「そ、それよりじいさんは？ 最近見ないけどよ」

「もしかしてとうとうお迎えが……ひい!!」

夕立に無言で手入れ用の小さなはさみを向けられ、ろくでもないことをいいかけたチ

ンピラ二人が慌てて逃げ出す。

その姿を見送りながら、夕立はため息をついた。

老人は一週間ほど前から、家を留守にしている。

どうにも先日話していた方法や手続きの関係で、艦夢守市まで足を運んでいるらしい。

出る前にしばらくかかるだろうから、それまで留守を頼むと、夕立は老人から頼まれていた。

夕立はついて行くべきか悩んだが、恐らくお尋ね者の自分が、この国最大の艦連拠点に行っても、ろくなことにはならないだろうし。

それにちよつかいをかけてくる厄介なチンピラのことなどもあったので、残ることにした。

もつとも一番の理由は『老人から留守番を頼まれた』からではあるのだが。
「ヤバイ奴らか……」

先ほどチンピラ二人がいつていたことが少し気になったが、もし力づくで来るのなら力づくで追い返すまでである。

そうできる確かな力と自信、そして経験が夕立にはあった。



『投降してください夕立さん!』

『あら、時津風』

追撃をかわすために海に出た夕立を最初に見つけたのは、長く付き合いのあった時津風だった。

『久しぶりね、あの時の女の子は元氣?』

『おかげさまで……今では憲兵軍で立派に働いています』

『そう、それはよかったわ』

『ごめんなさい、あの時、あたしがあんなことをいわなければ夕立さんは……』

本来なら発見時点で砲撃し、行動不能にして問答無用で拘束するのが正しいはず。

だというのに、時津風は過去のことを謝るために砲も構えず、わざわざ夕立の前に姿を現した。

優しいこの子犬には、自分を見つけることはできても、殺すことはできないなど夕立は苦笑する。

『それは関係ないわ、どのみち軍は辞めるつもりだったし、あの事件で辞めなくても結局は今と同じことになってたわよ』

『そんなことありません！ 夕立さんは——』

『時津風……提督のいない私たちのような“ろくでなし”の艦娘はね、結局戦うことしかできないの。貴方もそのうち……わかるっばい』

『なら、力づくでも止めて見せます!!』

その時、時津風と夕立がいる上空に、艦娘の兵装である数機の艦載機が現れる。

水上フロートを履く独特なシルエット、その艦載機を操れるのは一部の艦娘のみ。

『瑞雲、か……』

夕立はすぐさま対空機銃を発射するも、狙われた瑞雲は華麗に攻撃をかわす。

そのなめらかで繊細な動きから、操る存在の練度がうかがい知れた。

『まさか日向……いや、さすがにあの化け物じゃないわね。となると、山城辺りでも連れてきたのかしら？ 艦夢守市の護国艦を引っ張り出してくるなんて、いよいよ本気みたいね』

『時雨さんも、部隊の皆も来ています。今、発見の連絡を入れました。夕立さん、投降してください——ッ!?!』

時津風が一瞬視線を瑞雲に向け、夕立に戻した瞬間。

いつの間にか砲を構えていた夕立が、引き金を引く。

空気を震わす轟音と衝撃。

虚を突いた夕立の砲撃を、時津風は辛うじてかわす。

この超至近距離で砲撃戦を躊躇無く仕掛けてくる夕立の恐ろしさに、時津風の背筋が凍る。

『時雨たちが来るまで、遊んであげる!!』

既に撤退など頭のないその行動に、夕立は最初からこうなることを望んで海に出たのだと時津風は気がついた。

時津風は気構えの差が致命的なことになるということを、嫌というほどわかっていたはずなのに、後悔しながら唇を噛む。

ほどなくして、夕立は時津風を戦闘不能に追い込み、遅れてやってきた戦艦を含む追撃部隊を迎え撃った。

□□□□□□

「本当にただの駆逐艦の艦娘が一人なんだろうな?」

「ええ、間違いありません。裏はとれています、戦闘訓練など一切受けていない」ただの駆逐艦の艦娘一人です」

「ならいいが、もし情報に大きなズレがあつたら、あんただじや済まんぞ?」

「え、ええ、それはもう……ハイ」とあるビルの一室。

外地の一部を任された政治家の秘書と、世界でも有数の傭兵部隊のリーダーが話をしていた。

「しかし戦史前の遺産か……よくもそんな不確かなものに、俺たちみたいなのを雇うような金と手間をかけるもんだな？」

「ただの戦史前の遺産なら、まあそうでしょうがね。ただあそこに眠っているのはただの遺産じゃないんですよ……恐らくですが『最終皇帝提督』の遺品の類いと思われませう」
びくりと傭兵の表情がこわばる。

ラストエンペラーコマンダー
『最終皇帝提督』

深海棲艦との戦争を終わらせた中心人物であるとされる、五人の提督の内の一人。

戦後の混乱期に、その五人の情報や遺品はほとんどが失われたとされているが、それでも現存する幾つかの遺品が確認されている。

そのどれもが国宝、いや、世界遺産レベルの価値がついたものばかりだ。

もし値段をつけるなら、一体いくらになるのか想像もできないほどである。

うまく扱えば世界中のどんな権力者でも、果ては艦連の元老院ですら動かせる。

そんな一品が、この外地の片田舎にあるというのか。

「まあ、払うものを払ってくれるなら、その辺は俺たちには関係ない。その艦娘を俺たちが引きつけているうちに、うまくやるんだな。だが間違ってもその館の主人には手を出すなよ、もしそいつが提督だったとしたら。俺たちもあんたらも根こそぎ吊るされるぞ」

害意や悪意を以て提督を死なせた場合、地獄の釜の蓋が開くのは世界レベルの共通認識だ。

戦後から現在に至るまで、提督を死なせた際に発動された憲兵軍千鬼衆による徹底的な報復行動は、その恐ろしさから子供から大人までもを震え上がった。

「そこも抜かりありません。館の主は現在留守にしている、艦夢守市にいるようです」

「なるほどな、ならすぐにも行動した方がいいだろう、今夜やる」



その時、夕立はその感情の正体に気がついたことにより戸惑っていた。

孤独感。

かつては常にそばにあり、その感情が胸に居座っているのが当然だった気持ち。

今日は老人が艦夢守市に向かつて、丁度十日目の夜。

これまでの夜はあつという間だったのに、今日の夜はひどく長く感じることに不思議で、手元の本の内容も頭に入らず、その正体を考えていたのだが。

それが孤独感だと、気がついたのだ。

その為なのか、先にその異常に気がついたのはハチの方だった。

書齋で本を読んでいた夕立の足元で眠っていたハチが、なにかの気配を感じて体を起こす。

遅れて夕立は誰かが走ってくる気配を感じて立ち上がり、玄関を開ける。

門のところに、息を切らして座り込むチンピラ二人がいた。

先日これが最後でしくじったらクビだといいながら、必死に土下座してきたのを無情に追い返したのを思い出す。

ハチに玄関で待っているようにいって、夕立は二人の元に向かった。

「あ、姐さん大変です！」

「アイツらよ、よりによって傭兵なんざ雇いやがって、そこの海岸から上陸して、すぐそこまで来てやがる！」

チンピラたちが嘘をいつているかどうかはわからないが、確かに首筋の後ろにヒリヒリとしたものを感じる。

それは夕立にとってでは感じ慣れた気配、忘れたくても忘れられない気配。戦場の気配。

夕立はどこかから、煙草の箱くらしいの大きさの金塊を取り出す。

そしてそれを、チンピラ二人に放り投げた。

「あんたたち仕事をクビになつたんでしょ。報酬は払うから、私が戻ってくるまでここで見張つてて」

「あ、姐さんこれ」

「き、金塊じゃねえか!？」

確かにこの二人は信用できない。

だが目先の利益を提示すれば、ある程度コントロールは可能だろうと、夕立はこれまでのことで気がついていた。

「ちゃんとここを守れたら、後でもう一本渡すわ」

二人は首が取れそうな速度で何度も頷く。

これで少しはここを離れても、多少の時間は確保できる。

そして夕立は走り出す。

やがて夕立が海岸に続く道、途中にある緩やかな坂道を下りながら走っていると、丁

度上陸を終え、館に向かつて進軍を開始していた一個小隊ほどの傭兵と何両かの装輪装甲車（キャタピラでなく、タイヤで走行する装甲車両）の列が遠くに見えた。

そしてその中の二台は、他の車両と異なり、戦車のような砲塔と大砲を備えている。

その大口徑で長大な砲、それは艦娘にダメージを与えることが可能な兵器。

その存在を目にして、夕立は先ほどまで感じていた孤独感が消え去り、かわりに背筋に強烈な戦闘衝動が這い上がるのを感じる。

夕立はその衝動が命じるがままに、見つけた敵に向かつて走る。

月明かりしか無いというのに、敵の斥候が駆けてくる夕立に気づき、すぐさま発砲。

夕立は迫り来る銃弾をかわすため、背を低くしながら走る。

この暗闇の中で夕立の接近にすぐさま気がつき、躊躇無く発砲してくる優秀な偵察兵。

自ずと敵部隊のレベルが見えてくる、こんな所にいるのが不思議なほどの手練れだ。

艦装や兵装は破損しており、精々12.7cm砲が撃てて一発。

それだけであの装甲車両群と、手練れの傭兵たち相手に立ち回らなければならぬ。

なにかしらの作戦を立てなければ、艦娘といえど危うい状況。

だというのに、夕立は自分でも気づいていなかったが、知らず知らずのうちに唇を歪ませていた。

それは戦闘本能からか、それとも狩猟本能なのか、それとも――

「……………は通さない」

闇夜を裂いて、覚悟を決めた赤い目の少女が駆けてゆく。

「さあ、最高にステキなパーティーしましょ！」

皆殺しの雄叫びを上げて、戦いの犬が野を駆けてゆく。



「嫌な予感がする」

「えええ……………親父さんもそうでしたが、あんたらの家系のその手の直感、外れたためしがないんですがねえ……………」

数年前に引退した親の後を継いで、傭兵部隊のリーダーになった男と、親の代から副官をやっていた男が、装甲車両の上部ハッチから顔を出し、辺りを警戒しながら話していた。

副官は備え付けられた機銃用の上部ハッチ、リーダーは周囲確認のための上部ハッチから体を出して隣り合っている。

久々に舞い込んできた高額報酬の仕事を引き受けたのはいいが、どうも先ほどから嫌

な予感がピンピンするリーダーは、祖父と親父が口を酸っぱくしていつていたことを思い出す。

『艦娘を敵に回すな』

だというのに今回の仕事を引き受けたのは、全額前払いの高額報酬だったというのが一つと。時間稼ぎという条件なら、陸上戦闘訓練を受けていない駆逐艦の艦娘であれば、用意できた装備と車両があれば可能だと判断したからだ。

これが重巡や戦艦クラスなら装甲の厚さの関係で絶望的だし、空母なら水場まで退かれて艦載機でも射出されれば全滅は必至だ。

だが駆逐艦であれば、まだやりようはある。

例え小口径の機銃だろうと、駆逐艦であればダメージは与えられないにしろ、体重の関係で当たれば衝撃による足止めくらいはできるだろうし、大口径砲を撃てば警戒して近寄れない。

まず斥候部隊の手で艦娘をおびき出し、予定の時刻まで足止め。

そして用意してあった撤退用のルートを使って離脱。

難しくはあるが、不可能ではない仕事。

そのはずなのだが……

「リーダー！ 先行の部隊から連絡！ 坂の上に女が待ち構えて……いや、こちらに向

かつて走ってきますす！」

「ちっ！ 先手を取られたか、構わん照明弾を打ち上げろ！ 撃ちまくって足を止めるんだ！」

夜目の利く腕利きの偵察兵が、いち早く接近してくる夕立を発見して連絡をしてくる。

その連絡を受け、すぐさまリーダーの指示が飛び、照明弾が打ち上げられた。

あらかじめ予想されていたパターンを、頭にたたき込んだのである歴戦の傭兵たちが、夕立に対して半円状になるように横に広がり攻撃を開始する。

自動小銃に対物ライフル、そして装甲車に備え付けられた軽機関銃による銃弾の雨が夕立に降り注ぐ。

夕立は何発も銃弾を受けながらも、低い姿勢を保ちながら、傭兵たちの半円の陣形、その端の方に向かって走る。

「つく、退くか中央に突っ込んでくると思ったが、判断が早い！ なんとかしてもヤツの足を止めろ！ 恐らく対人用の艀装は持ってないはずだ、近づけなければ勝機はある！

絶対に近づけさせるな！」

銃撃を受けてもビクともしないのは想定内だったが、それでも足くらいは止めると思っていた。

だが、相手は足を止めるどころか、こちらのやりにくい位置に、迷い無く移動しようとしている。

さらにその注意が、装輪装甲車の主砲にのみ向けられているのを感じたりリーダー。あの二両が潰されれば、ダメージを与える手段がなくなり、なぶり殺しにされる。

背筋が凍る、明らかに戦い慣れた艦娘の行動だ。

「LAM！」
機帯対戦車弾

リーダーの指示が飛び、既に対戦車用兵器を肩に担ぎ、発射準備を完了していた傭兵がロケット弾を発射する。

ロケット弾は直撃はしなかったものの、なんとか夕立の進行方向少し手前に着弾。

激しい爆発が起こるも、それで仕留められるはずがないと確信していた傭兵たちは、ひたすら銃撃を続ける。

ロケット弾の爆風で足を取られたのか、速度は落ちたものの、それでも夕立は止まらない。

「銃では駄目だ！ 手榴弾、手榴弾だ!!」

さらにリーダーの指示を聞き、何人かが銃撃を止めて夕立の進行方向、もしくははいると思われる地点にありつたけの手榴弾を投げこむ。

爆発ギリギリまでタイミングを調整された手榴弾が、夕立に直撃した。

十個以上の手榴弾による爆風と破片を浴びて、夕立の足が止まる。すかさずリーダーの指示が飛ぶ。

「今だ、撃てえ!!」

二両の装輪装甲車の主砲が火を噴く。当たった、そう感じた誰かが声を上げる。

「やったか!?!」

辺り一面、砂埃で視界がとれない。

必死に目をこらして、夕立がいた場所を見ていた傭兵たち。

一秒、二秒、三秒。

数秒だが傭兵たちにとって、恐ろしいほど長い時間が流れる。

さすがの艦娘でも、あれだけの銃弾や手榴弾、ましてや戦車砲の砲撃を食らってはただではすむまい。

そう、傭兵たちが勝利を確信した、瞬間。

「あはっ! あははははははははは!! やるじゃない!!」

絶望の笑い声が辺りに響く。

爆炎と土煙をかき分け、笑い声を上げながら、ゆつくりと夕立が姿を現したからだ。炎を背負って、赤い目を輝かせながら笑う、あまりに美しく恐ろしいその姿に、熟練の傭兵たちですら攻撃の手を止めてしまう。

夕立は唇の端を嗤うように吊り上げながら、傭兵たちを見つめる。

「軽く蹴散らすつもりだったんだけど、難しそうっほい。だから本気で相手をしてあげる！」

恐ろしい宣言が響き渡る、そして戦場の空気が変わった。

夕立の缶に火が入り、陸上で出せる限界出力まで引き上げられたからだ。

続いて、それによる重量増加が発生する。

瞬間、傭兵たちの誰もが重厚な鋼鉄の要塞が目の前に表れたような、圧迫感を感じた。

それは、軍艦の気配。

重厚な足音を響かせ彼らに向かって歩き出す夕立。

その様子に人が相対する存在ではないと、人一倍戦いを経験してきた傭兵たちの本能が警鐘を鳴らす。

傭兵たちの誰もが思った、話が違う、相手は戦闘訓練を受けてないただの駆逐艦の艦娘だったはずだと。

だが陸上で出せる限界ギリギリの出力を、まるで息をするように自然に、調節してこ

ントロールできる艦娘が、戦闘訓練を受けていないはずはない。

こうなった以上、もはや小銃や機銃、手榴弾による攻撃では足止めすらかなわない。現状傭兵たちにとつての唯一の有効打は、対戦車用兵器と装輪装甲車の主砲による攻撃のみ。

雇い主にだまされるなんていうのはよくある話だが、今回は特に最悪だ、最高に最悪だ、もしも“生きて”帰れたなら絶対容赦しない。

生きて、帰れたなら――

「次弾撃てッ!! ぼさつとするなさつさとLAM携帯対戦車弾に持ち替えろ!!」

リーダーの叫びに近い指示が飛び、再び砲撃が放たれる。

着弾の爆風を利用して、夕立が空高く舞い上がる。

そして空中で兵装が展開される。

所々破損しているようだが、夕立の手に握られているのは駆逐艦を象徴する兵装。

『12.7cm連装砲』

装輪装甲車に取り付けられている主砲より、遙かに大きい口径。

空中で展開された、その砲口が傭兵たちに向けられる。

「ソロモンの悪夢、見せてあげる!」

夜はまだ始まったばかりだ。



『ねえじいちゃん、じいちゃんと親父は妙高傭兵姉妹にどうやって勝ったの?』

『あの馬鹿そんなこといつてたのか……別に勝ったわけじゃねえさ、なんとか生き延びられただけだ』

少年が祖父に昔話をせがんでいる。

祖父は少し困ったように孫に答えた。

『えー、なにそれ、なんでなんで?』

祖父は読んでいた新聞を置き、くわえていた葉巻を指に挟んで、昔を思い出すように静かに話し出した。

『ふう、ありやあ俺の最後の仕事だった……あんどきや帝国軍部隊相手の防衛戦の最中でなあ……俺たちは防衛線に沿って掘られた塹壕や、トーチカに籠もりながら踏ん張ってる最中だった。その日、相手に妙高姉妹がついて、こつちに向かつてるって情報入ってきてな。お偉いさんはケツに火がついたように逃げ出した、貧乏くじを引いたのは俺

たち傭兵さ。撤退戦のしんがりとして時間を稼げつてな、クソツタレな命令が下ったよ』

祖父は安楽椅子に沈み込むように体を横たえ、懐かしそうに目を細める。

穏やかなその様子と、話の内容のギャップが、どうしようも無く少年を不安にさせた。『どいつもこいつも、今までみたことないほど悲惨な顔をした、おまえの親父も、俺もな……そんな時、援軍が来るって連絡が入った。だが妙高姉妹相手にどんな援軍が来たところだと思つたが、なんでもその援軍つてのは艦娘だつていうじゃねえか。これぞまさに地獄に仏つて、俺たちや喜んだ。だが来たのは赤い目の金髪のがきが一人、今のおまえよりもちつこい女の子さ。恐らく駆逐艦だ、重巡の妙高姉妹相手に、駆逐艦の艦娘一人でどうしようつてんだつて思つたもんだ。やがて戦闘が始まつて、俺たちや死にもの狂いで撃ち続けた』

祖父は突然椅子から起き上がると、「バババババ！」と発砲音を真似ながら機関銃を撃つような動作をする。

少年がビクリと震え、その様子を見て穏やかに祖父は微笑む。

『ふと戦闘が小康状態になつた時にな、その駆逐艦の艦娘がトーチカの上にあぐらをかいて座つてるのが見えた、小康状態ついても銃弾や砲弾は飛び交つてるつていうのに、まるで平和な公園のベンチに座つてるみたいなき様子で、ナイフで木の切れ端を彫つ

てなにか作つてた……あの光景は忘れられんよ、あんまりにも綺麗だったからな』

祖父がその駆逐艦が彫つていた彫刻をよく見ると、人型のなんかだつたらしい。

『そして次の瞬間、ピタリと砲撃も銃撃もやんだ。誰かが叫んだ、妙高姉妹が来るぞっ!! てな。その駆逐艦の艦娘は作りかけの木の彫刻を、その場に置いてゆつくりと立ち上がつて……そして文字通り飛んだのさ、トーチカがぶつ壊れるような威力で足場を蹴つて飛んでいった』

その衝撃で近くにはいた何人かはヒックリ返つてた、おまえの親父もな。

そう付け加えて祖父はカカカと笑う。

『その後は……もう俺たちは必死になつて撃ちまくつて、その駆逐艦を援護した。一人だつてのに、その駆逐艦は最後まで一步も退かないで、狂つたように笑いながら戦い続けてた。まるでそこだけ、おとぎ話みたいな世界だつたなあ……結局その戦いは負けちゃったけど、俺は生き残れた。あの駆逐艦のおかげだな』

指に挟んでいた葉巻を置き、祖父は少年の両肩に手を乗せる。

しつかりと、大事なことをいい聞かせようとするように。

『いいか坊主、艦娘とは戦うな。ありや文字通り軍艦なのさ、絶対に人が敵う相手じゃねえ。特に戦場で少女の笑い声を聞いたり、赤い目を見たらすぐに逃げ——』

「走馬燈見えたー!?!」

「あ、気がつきました?」

戦闘開始から一時間。

辛うじて動くことのできる傭兵たち全員が、一両の装輪装甲車を囲み、車両の残骸を盾にしながら、身を寄せ合うように戦っていた。

何両もあつた装甲車や戦闘車両は、この一両を残して全て破壊され、死者はいないも

□
□
□
□
□
□

|
|
|
|
|
|
|

のの負傷者だらけ。

この状況で統率が崩れていないのは、一流の傭兵としての矜持か、それともそれだけが唯一生き残る方法だと理解しているからか。

「ああくそ、不覚をとった。気を失ってどれくらいだ、戦況は？」

「リーダーが飛んできた石ころに当たって気絶してから、一分やそこらです。戦況は膠着状態です、なんで死人がいないのか不思議ですよ」

「手を抜く余裕があるということだろうな、手間だが結果的に足手まといが増えて、こちらが不利になるということ、狙ってやってるんだらう。もしくは狩りを楽しんでいるのか、どちらにしろ、このままじゃ時間の問題だ」

「はは、俺たち相手に手加減とは……まったく、嫌になりますねえ」

「親のいうことは聞くもんだな、まったく。しかしあいづらみたいなのが、何万と艦隊を組織して戦っても滅ぼされかけたってんだから、俺たちのご先祖様たちは、とんでもない奴らと戦ってたんだな、つくづくそう思うよ」

相手はたった一人だというのに、まるで大部隊を相手にしているかのような状況。

軽く戦闘が小康状態になっていることもあつてか、ヤケクソ気味にリーダーと副官が会話をしている。

「で、どうしますかリーダー？」

「撤退する、これ以上の戦闘継続は意味が無い。それに約束の時間は十分稼いだ」

「すんなりと逃がしてくれるとは、思えませんがねえ」

「考えがある、まあ一つ試してみるさ、祈ってる」

リーダーが車両に備え付けられていた、拡声器を手に取る。

『撤退だ!! 撤退する!! 時間は十分稼いだ、あとは館に向かった別働隊がやってくれるはずだ!! いいか、もう攻撃する必要はない、撤退だ!!』

白々しい演技で叫び終えたリーダーが、すぐに身を伏せる。

「いいんですかい? ばらしちまって」

「なに、料金分の仕事はした。それにこれだけ派手にやったんだ、いくらのおんきな外地だといつてもさすがにこの国の軍が動くだろう。そうなる前にケツに帆を張って逃げなきゃならん。少し癩だが、騙された落とし前を俺たちの代わりにつけてもらえるなら、一石二鳥だろう」

「成る程、あとは向こうさんが乗ってくれるかどうかですが……」

「そこは祈るしかないな」

しばらくして、戦場を覆っていた夕立の気配が消える。

見逃されたのか、優先順位を判断したのかはわからない。

確かなのは悪夢が去ったということ。

それを感じた傭兵たちは、急ぎつつも慎重に撤退を開始した。

「助かったか……まったく、運がいいのか悪いのかわからんな」

「それも、あんたらの家系の特徴ですよ」

ため息交じりの副官の声が、虚しく響いた。

余談だがこの後、彼らの傭兵チームは艦娘と戦い、依頼を遂行して生還したという、傭兵として最大級の肩書きを得ることになり、とても仕事がしやすくなったとかなんとかだが、もう艦娘の相手はこりこりだと誰もがこぼしていたらしい。

しかし彼らは知らない、この後の人生でも艦娘となにかと縁のある人生になることを（既に縁がある人生なことを）彼らはまだ……いや、微妙に感じ始めていた。



重たくなった体を引きずりながら、夕立は歩く。

実のところ、夕立はギリギリの所で戦っていた。

数ヶ月前の戦場で艦装は大破状態であり、弾薬も燃料も残り僅かだった。

単純に突っ込んで蹴散らせる相手なら、それでも十二分なのだが、相手は手練れの傭

兵と戦闘車両。

夕立は動きの鈍い体を無理矢理動かし、なんとか余裕を見せつけようと、死者を出さないように戦った。

だが、今思えば悪手だったかもしれないと、夕立は自分の判断を一瞬疑う。といつても、何人殺したところで退く手合いにも見えなかったのも確かだ。

「見逃されたのかもね」

あの拡声器による宣言は、恐らく夕立に向けてのもの。

料金分の仕事が完了したから、撤退するとわざわざ教えてくれたのだろう。

最も、向こうも無駄な犠牲や労力を、払いたくなかった可能性もあるが。

陸上で缶に火を入れた反動はあるものの、致命的になるギリギリ手前でコントロールすることに成功していた夕立は、館に向かつて足を引きずりながらも急ぐ。

だが急いだところで、もし館に向かった部隊が先ほどと同レベルなら、今度こそ駄目かも知れない。

「陸で死ぬのもしまらない、か……」

できれば海で死にたかつたと、夕立は思う。

さらに叶うなら、せめてあの老人が帰ってくるまでは持たせたかつたとも。

「なにを今更」

だが夕立は今回のことで痛感する。

戦闘開始前に、背筋を走った強烈な戦闘衝動。

やはり自分は戦うことしかできない、戦いの中こそが自分の居場所なんだと。

だから老人が帰ってきたら、あの場所を離れよう。

そして今度こそ、どこかの海の上で……

「やあ、遅かったね」

夕立が館に戻ると、見覚えのある人物の姿があった。

「……時雨」

夕立にとつて、同じ白露型の二番艦である『時雨』だ。

黒髪を三つ編みにしたお下げ姿の少女だが、彼女もまた駆逐艦の艦娘である。

夕立は門の前に立つ、かつて戦友だったその艦娘を見つめ、その近くにいたる気を失ったチンピラ二人に目をやる。

二人は夕立のいっつけ通り律儀に抵抗でもしたのか、何発も殴られたようで、顔を腫らして門柱にもたれかかっていた。

そして時雨の周りには、別働隊と思われる黒い作業服の男が何人かと、スーツを着た

身なりのいい男が倒れている。

「ああ、彼らかい？ 僕がきた時にその二人と揉めててね、と、いつでもこの二人が一方的にやられていただけなんだけど。面倒だから両方とも片付けさせてもらったよ。もしかして知り合いだったかな？」

夕立は時雨の問いに答えず、じつと時雨を見つめる。

「まあそれはともかくとして。夕立、大人しく捕まってくれないかな？」

夕立は静かに首を横に振る。

「まいったね、そんな状態で『僕たち』から逃げられると思うのかい？」

複数人を思わせるニユアンス、その言葉を時雨が告げると、闇夜から一人二人と複数の少女たちが現れ、それに付き従うように、鬼の仮面をつけた緑の軍服姿の兵士たちが続いて姿を現す。

猟犬部隊の艦娘の面々と、憲兵千鬼衆。

夕立は「まあいるでしょうね……」と眩き、残りの燃料全てを缶に注ぎ込む。

もつとも燃料の残量的には、一回力を入れれば底をつく量しかなかった。

周りの景色が歪むかのように空気が変わり、夕立を囲んで居る者たちが身構える。

それを抑えるように、時雨がすつと片手をあげた。

機を抑えられ、じれるような空気の中で夕立が口を開く。

「時津風は……療養中かしら？」

あの時の戦闘のダメージが抜けなかったのか、夕立を囲む猟犬部隊の中に、時津風の姿は無かった。

「まあそんなところさ。それよりも夕立、一つ聞かせてくれないかな。君は戦って死ぬことを望んでいたんじゃないのかい？　そう思ってたからこそ僕はあの時、君を沈める覚悟をしたのに……どうしてあの時、君は逃げ出したんだい？」

数ヶ月前、海の上で追い詰められた夕立に、時雨がとどめを刺そうとした時。

夕立は突如として、虎の子の魚雷全てを撒きながら、反転して逃げ出した。

魚雷は最後の最後に、相手を仕留めるために使う駆逐艦にとつての切り札だ。

だというのに夕立は、誇りもなにもかもをかなぐり捨てて、逃走のためにそれを使った。

確かに撤退戦術として使用することはあるだろう。

だがその時の夕立には、生き延びたところで補給できるあても無く、ましてや逃げたところで、その先などありはしない。

そのつもりで戦っていた時雨たちは、思いもしないその行動に虚を突かれ、夕立を逃してしまった。

時雨にとつてそれは、もし自分が夕立と同じ立場なら絶対に受け入れられない行為。

艦娘としての姉妹というだけで無く、どこか夕立が自分と同じだと思っていた時雨は、それが不思議でならなかった。

何故、戦って死ねる機会を、あの時夕立は拒んだのか、が。

「……あの時はわからなかった……でも、今思えば……私は知りたいことがあったんだと思う」

「うん？ それは一体どういう——」

時雨が首をかき上げた瞬間、夕立が時雨に飛びかかる。

だがそれを予期していたかのように、時雨は夕立の手を掴んでひねり、そのまま地面に押し倒して馬乗りになった。

「夕立、もう君は……ボロボロじゃ無いか。艦装も大破、燃料も弾薬も空っぽ。今だって動くのが精一杯だろうに、それなのにどうして……あの時みたいに逃げようとしなないかい？」

夕立は時雨の言葉には答えず、不敵に笑う。

その様子が癪に障ったのか、時雨が夕立の細い首に手をかける。

「ねえ夕立、教えてよ、もしかして君は——」

「あの一、お取り込み中すみません」

時雨がその手に力を入れて、夕立を痛めつけようとしたその時。

まるで緊張感の無い声が、二人にかけられた。

その場にいた艦娘や千鬼衆たちが驚いたように見ると、そこにはいつの間にも現れたのか、スーツ姿の若い男の姿。

スーツの男は一人の長い黒髪の少女を伴っており、鋭い眼差しで辺りをにらみつけていることから、少女がただ者では無いということはわかる。

だが、そのことが余計に緊張感の無い、平凡そのものなスーツ姿の男の異常さを際立たせる。

「えーっと、その、この部隊の責任者の方はどちらでしょう？ 私、艦夢守市、市役所艦娘課の音羽悟志（おとはさとし）と申します、あ、一応提督適性者でして、はい。こっちは同僚というか先輩なんです、一応私の艦娘の駆逐艦である初霜さんです」

初霜、と呼ばれた駆逐艦の艦娘が、緊張を解かずに軽く会釈をする。

「えーっと、それでですね、実はそちらの……あ、艦娘名で失礼させていただきます、そちらの『夕立』さんにお話が御座いまして、はい」

周りの冷たい視線など全く気にしないかのように、ゆつくりと夕立と時雨に歩み寄る音羽と初霜。

周りの千鬼衆たちが動こうとするが、時雨がすつと片手をあげてそれを押しとどめる。

艦夢守市の市役所艦娘課、国内の艦娘や提督適性者を一元管理し取り扱うその課は、ありふれた名称のように見え、その実態は艦連内部でも強い力を持つ艦連の直轄組織。

またその性質上、国内においても各行政機関に行使できる強い権限を有している。

つまりその職員ともなればそれなりに厄介な存在、もしスーツ姿の男が本当にそうなら、下手に手を出すのは得策では無い。

「どうも音羽さん、僕がこの部隊の指揮官さ。悪いけど作戦行動の最中で、姓名と部隊名は明かせないけど、僕たちは艦連軍指揮下の特殊部隊だ。見ての通り今取り込み中でね、後にもしてもらえるかい？」

「はあ、それはそれは……ですがその、実はこちらもかなりの緊急案件でして、はい。ああ、そのまま結構ですので、少しだけお時間いただけませんかでしょうか？」

引き下がるつもりは一切無い、強情なその様子。

時雨はちらりと初霜と呼ばれた艦娘をみる、もし彼が提督で彼女が艦娘であるなら、命令すれば彼女は躊躇無く自分たちと戦うだろう、そう思わせる気配。

艦娘課所属の艦娘の戦闘能力が、低いわけがない。

例え初霜が一人であろうと、彼女が艦娘である以上、馬鹿にならない被害が出る。

時雨は少し悩んだ末、軽く頷く。

音羽はそれを見てホツとしたように、胸をなで下ろした。

「どうもどうも、ありがとうございます。それでえつと夕立さん、はい、確かに『改二』になられていますね、それではこれをお受け取りください。後ここにサインをお願いします」

そういつて音羽は時雨に押さえつけられた、夕立の手に封筒と、クリップボードに挟まれた書類を見せながらペンを手渡す。

書類には、「第二艦娘変わりに伴う『艦娘証明書』変更手続き」と書かれていた。

夕立は遙か以前、似たような書類にサインしたことを思い出す。

もしかしてあの時の書類に不備があつたのだろうか、しかしそれが何故今？

周りが事態を飲み込めずに動けない中、ただ時間が流れる。

まるでサインするまでテコでも動かない、そう思わせる音羽の空気に押されてか、夕立はなんとなくサインをしてしまった。

音羽はサインが終わつたのを確認すると、書類を確認して頷く。

「はい、確かに。いやあ、本当は郵送でこちらへお送りして、さらに幾つかの手続きをしていたが必要があつたんですが、色々と例外的な事態でして、はい」

「そう、じゃあ用事は済んだでしょ。さっさと艦夢守市に帰りなよ」

時雨はそういつて、再び夕立の首に力を込めた。

ギリギリという音が、夕立の首から聞こえてくる。

「はあ、実はそうもいかんのですわ。そちらの夕立さんの提督が先日お亡くなりになりました。夕立さんがご本人と確認できた以上、そちらの手続きもして貰わないといけなくなりましたので」

「なんだって!?! 夕立、君は提督を見つけていたのかい!?!」

時雨が珍しく取り乱していたが、当の本人である夕立もまた混乱していた。

提督? 一体それはどういうことだということのかと。

そう夕立は声を上げようとすも、時雨に押さえつけられて声が出せない。

「はい、ええまあ。心臓に重い持病を抱えられていたようでした、夕立さんの改二申請を行われてからすぐのことでした……すぐにご連絡をと思つたのですが、発見された時には身分を証明されるものを持つておられなかつたらしく。確認が取れた時には既に遺体の保管期間が過ぎて、火葬が終わつておりました。ただその後、提督適性者と判明して大変な騒ぎとなつたのですが……」

音羽が持つていた大きな鞆から、そつと骨壺を取り出す。

「本来は役所まで来ていただく予定だったのでですが、どうしても連絡がつかず、こうしてお運びさせていただきました……ところで指揮官さん、その夕立さんは本当にあなた方

の追っておられる『夕立』さんなのでしようか？」

「……どういふことだい？」

「『真実』はどうあれ、艦娘証明書の変更手続きにサインされた以上、その夕立さんはこちらの提督さんの艦娘の『夕立』さんということになります。つまりまあ、なんともうしませんか、現状そうで無いと証明することは、できないというわけですし、はい」

「なにを馬鹿なことを——」

「いえ、もし艦連法に則るといふのであれば、間違っているのはそちらということになりますよ。まず間違いなく、法律上は……ですが。それでもというのであれば、私も艦夢守市役所、艦娘課の職員としてやるべきことを、やらねばならなくなりましたですね、はい」

音羽の空気が変わる、温和で温厚だったその様子が急に、冷たいカミソリのようなものに変化した。

千鬼衆と猟犬部隊が動きを見せるが、初霜は缶に火を入れ何時でも戦闘開始する覚悟でそれをにらみつける。

一触即発の状況でしばらくにらみ合いが続いたが、時雨は熟考の末にゆつくりと夕立の首から手を離して立ち上がった。

「ッガ！ ゲッホッ！！ ぐほッ！！」

夕立は咳き込みながら、にじむ視界で音羽の手にある骨壺を見る。

（死んだ、あの人が、死んだ？）

『——まあなんじゃ、ワシは見ての通りそう長くはない。ここ何ヶ月か見ていたが、おまえさんはそれなりに筋がいい、勿論まだまだじゃが。だがなんだ、もしこの屋敷と庭の手入れをこれからもししてくれるなら、ここをお前さんに譲つてもいいとおもつとる』

夕立は力の入らない脚を引きずり、音羽の元まで這いながら移動して、骨壺を受け取る。

『——おまえさんも特に行く当てがないなら住む場所はあるじやろ、めんどくさい手続きは全部すませとくで、考えてみてはくれんか』

なんとか体を起こして地べたに座り、震える手で夕立が骨壺の蓋を開くと、焼かれた骨の欠片が幾つも収められていた。

『——おまえさんがどういふもんを背負つてるかは知らんが、少なくとも肩書き上で

はまっとうな身の上にてできる方法がある。まだうまくいくかは分らんが、少なくともそれを試してみてもうまいってから、もう一度考えてみてくれんか？」

「あ……」

老人の言葉は、このことを指していたのだと、夕立は理解した。

『———そうかそうか!! まあすぐにはいかんが、そう長くも待たせんよ。ワシもいい加減お迎えが近いじやろうからな、急がんと』

だがあの時、あの老人はなにを思いながらあんなことをいったのか。

自分の死期を予感していたのか、それとも別のなにかがあったのか。

「……ばか、なに本当に死んじやってるのよ。これじゃあ、もう庭の手入れ……教えてもらえないっばい」

絞り出すような、夕立のその呟きが辺りに響く。

時雨や猟犬部隊の艦娘たちの目が、門の向こうにある美しい庭園に向けられた。

「夕立、君は———」

時雨はなにかを口に出そうとしたが、結局最後までその言葉が紡がれることはなかった

た。

艦娘とて傷みが無いわけではない、なのにこんなにまで、限界までその身をすり減らしてまで戦い続け、ボロボロになってまで守ろうとしたなにかを、失った様子の夕立。

そんなかつての戦友の、悲痛な後ろ姿を時雨は複雑な心境でじつと見続ける。

ずつと館の中で待ち続けていたハチが、夕立が帰ってきたことに気がついたのか。

館の中から飛び出し、夕立の隣に走り寄ってきた。

ハチは呆然と骨壺を見つめ続ける夕立の頬を舐め、空に向かって吠える。

あるじを無くした犬の鳴き声が、朝焼けの夜空に響いた。



痛む体を引きずりながら、老人の骨壺を手に『地下室』に向かう階段を下りる夕立。

あの後、呆然と座り込む夕立を残して、音羽と時雨たちは、館に侵入しようとした者たちを回収して去って行った。

両者とも、あまりに痛ましい夕立とハチの姿を見ていられなかったのか、それとも。

ただ千鬼衆たちが、老人の遺骨に向けて敬意を払うように、胸に片手を当て一礼して

いたのが妙に夕立の印象に残った。

音羽は手続きの為の正式な書類を、後日持ってまた来ると言い残し。

また時雨も去り際に、夕立に一言「またくるよ」と言い残した。

だが夕立はなんとなく、時雨とはもう会うことは無いだろう、そう思った。

地下室の扉の前に着く。

夕立は鍵が掛っている可能性を考えしばらく悩んだが、試しに一度ドアノブを握った。

予想に反して扉には鍵はかかっておらず、すぐに開く。

後ろからついてきていたハチが、夕立の隣をすりりと抜けて先に部屋に入る。

入り口すぐの所にあつたスイッチを入れると、八畳ほどの広さの部屋を灯りが照らす。

部屋には幾つかの物置棚と本棚、そして簡素な机があつたが、どれも綺麗に整理されており、部屋は地下室特有の空気のおよみはあつたが、綺麗なものだった。

だがなにより存在感を放っているのは、部屋の中央に置かれた棺。

ハチが悲しそうに棺の前に座り、夕立の方を見る。

夕立は老人の骨壺を机に置き、その棺をゆっくりと開く。

現れたのは、死後の処理を施され、美しく着飾られた少女の遺体。

長い金髪の少女の顔には、見覚えがあつた。

白露型駆逐艦 四番艦『夕立』だ。

「はじめましてね、夕立さん……」

何故こんな所に、老人の艦娘であつた夕立の遺体があるかは、わからない。

そして何故老人が、夕立の死をひた隠しにし続けたのかも。

だが老人にとって、この夕立は宝だつたのだろう。

ハチが悲しそうに、棺を舐める。

「貴方は、どんな気持ちだつた？ 自分の提督をみつけられて、こんなに大切にされて

……」

夕立はしばらく棺の中の夕立を見つめていたが、ずっと老人の骨壺を手にとって棺の中に入れ、棺を閉じる。

いずれきちんと葬るべきなのだろうが、しばらくはこうしておいた方がいい気がしたからだ。

夕立は地下室をあとにしようとしたが、ふと、物置棚の一角にある、やたら重厚な造りの黒い箱が目にとまる。

鍵はかかつていないが、やたらと留め具がついているその箱を手にとって開いてみると、強化アクリルフレームに挟まれた、六切サイズの写真が収められていた。

かなり古いものようだが状態は悪くなく、そこには白い軍服を着た十人の軍人の姿

が写っている。

もつとも、十人のほとんどが軍人らしくなく、子供や、太った巨漢の眼鏡の男、美しい女性、目つきの鋭い筋モノのような男、大柄の美中年、老人と、見た目も年代も性別もバラバラ。

おそらくは戦史時代の、提督たちの写真なのだろう。

だが何故こんなに重厚な箱に、入れられていたのか。

答えは出なかったが、物置棚の隅にあつたことから、老人にとってなによりも重要だったのはこの箱では無く、あの棺なのだろうとわかる。

そうだ、なんであろうと、今日も、そして明日も。

自分は約束を守るのだ、あの、約束を。

夕立はそう自分に言い聞かせて、箱を物置棚に戻す。

部屋を出る時、夕立は軽く振り返って棺をみる。

「これからはずっと一緒ね。少し……うらやましいっぽい」

夕立は軽く皮肉と嫉妬の交じった口調でそういいながら、部屋を後にした。



あの後しばらくしてから、夕立は新聞に何処その政治家が汚職で捕まったと、でかどかと書いてあるのを目にした。

その反面、あれだけ激しい戦闘があつたのに、あの日のことは何処にも書いておらず、またあの時の傭兵たちのことも、何処にも書かれていなかった。

ここを狙っていた存在によるなにかしらもみ消しの力が働いたのか、それとも傭兵たちの運がよかつたのか。

結局夕立はあの後、老人の遺言通り館にとどまることに決めた。

特に行く当ても無かつたからというのものもあるが、新しい身元を用意してくれた恩や、あの時の約束を守りたかつたからだ。

戦いのあつた次の日から、今までと変わらず、夕立は庭の手入れを開始した。

わからないことは、本や老人の書いた庭の手入れの日誌のようなものを参考にする。意外とマメだったようで、必要なことのほとんどは、それから学ぶことはできた。

それとは別に、老人の個人的な日記のようなものもあつたが、夕立はそれを読もうとは思わなかつた。

自分とは違う夕立の人生をみるのが、どこか怖いと思う気持ちがあつたのかもしれない。

しばらくは館の主人に代わって、庭を守り続ける代わり映えのしない日々が続く。

そして月日は流れる。

春が来て、春が終わり。

夏が来て、夏が終わり。

秋が来て、秋が終わり。

冬が来て、冬が終わる。

その日、高齢だったハチが老衰で息を引き取った。

ハチは夕立の膝の上で、後は任せるといふように、ゆっくりと夕立の顔を舐めて、眠るように逝った。

零れた涙を舐めてくれたのだと、しばらく経ってから気がついた。

あの日出会ってから、ハチはずっと夕立の涙を拭ってくれていたのだと、ようやく知った。

夕立は庭園にハチを埋めた。

飼犬を敷地内に埋めるのは、余りいいことではないといわれ、夕立もそれを知っていたのだが、何故かその方がいいと思っただからだ。

夕立はまた一人になった。

だが、今は役目がある。

それにここを訪れる、変わり者もたまにいる。

あれ以来、カイシヤをクビになったチンピラ二人は、夕立の払った金塊を元手に、なんでも屋のようなものを始めたらしく、夕立もたまに庭関係の物資の配達を頼んだり、柵や門の取り換えなどの大きな作業を手伝ってもらった。

縁というのは奇妙なものだ、つくづく思う。

春が来て、春が終わり。

夏が来て、夏が終わり。

秋が来て、秋が終わり。

冬が来て、冬が終わる。

やがて庭を守り始めてから、何度目かの春が来る。

春は命が芽吹く時季だ、庭園の管理も手が抜けない。

「ねーちゃんなにしてんの？」

植木の剪定をしている時、そんな声をかけられた。

見ると、十才くらいの生意気そうな男の子が、脚立の上に立つ夕立を見上げている。どうやら、どこかからこの庭園に潜り込んで来たらしい。

少年を目にして、夕立の胸が高鳴った。

その少年が自らの提督であると、艦娘の本能が告げたのだ。

「……庭の手入れをしているのよ」

「へー、スゲーじゃん」

あまりに突然のことに、どうすればいいのかわからない夕立。

うるさいくらいに高鳴る胸をおさえ、少年に問いかける。

「ところで君は、どこから入って来たの？」

「あっち、なんか柵が曲がってたからさ。ところでこの辺にボールとか転がってなかった？」

未知の感覚に戸惑いながら、どうすればいいのかわからず、少年と話をする夕立。

話を聞いていると、先日少年のクラスメイトが、この近くで遊んでいた時、ここにボールが入っていったということを知りたいらしい。

だが、この屋敷は学校でも有名な幽霊屋敷と呼ばれているらしく、怖くてボールを取

りに入れなかつたんだとか。

「だからさー、そのボールを俺が取ってきてやろうかと思つて」

ニシシと、笑う少年。

夕立は先日庭に転がっていたボールを思い出し、自分の提督である少年に、少し待っているようにいつて、保管してあつたボールを取りに行く。

夕立がボールを手に戻つてくると、手持ち無沙汰で退屈そうにしていた少年の顔がパツと輝き、投げて投げてというふうには手を振る。

「もう……」

軽くため息をつきながら苦笑し、夕立はバレーボールほどの大きさのゴムボールを、少年に向かって軽く投げる。

「おつ、ナイス」

それなりに距離があつたが、ボールは少年の胸の中にフワリと落ちてゆく。

ボールを受け止めた少年が、思わず称賛の声をあげた。

「それっ！」

そして受け止めたボールを、夕立に向かって投げる。

だがボールはあらぬ方向に飛んで行き、夕立が立っていた場所から、十歩ほど離れた場所に落ちる。

「あつ、ゴメン」

「……ごうよ」

夕立は駆け足でボールが落ちた場所まで行き、拾い上げる。

そして再びボールを、少年に向かって投げた。

何度も何度も、あまりコントロールのよくない少年の投げるボールが遠くに飛んで行くたびに、夕立は走る。

楽しい、そんな気持ち湧き上がる。

何度もボール投げをねだった、ハチの気持ち少しだけわかった。

「くそく、なんでまっすぐ投げられないんだ」

「姿勢が悪いのよ。ほら、こうするの」

何度か投げる動作を少年に見せる夕立。

しかし中々うまく真似できないようで、何度も首を傾げている。

「しようがないわね」

夕立は少年の後ろに回り、抱きしめるようにして手と腰に手を回す。

柔らかく、温かい、小さな手のひら。

自分の提督。

優しい波のような感情が、夕立の心に満ちる。

このまま、抱きしめて一生離したくないという思いが湧き上がる。

「ねえちゃんの手、つめたいな！」

「そう？ 君の手は温かいね……ほら、こうするの、こうやって投げてみなさい」

何度か少年の体を動かして、動きを覚えさせる。

覚えは悪くないのか、夕立が離れた後に少年がボールを投げると、先ほどよりも遠くにボールが飛んでいった。

夕立はゆつくりとそのボールまで歩いて行き、拾い上げる。

「ほら、投げるわよ」

「おうー」

それからしばらく、二人はボール投げをしたり、庭園を散歩したり、夕立が暇つぶしに作ったお菓子を食べながら、庭のテラスで休憩したりした。

休憩が終わり、少年がテレビで見たという、水雷戦隊の歴史ドラマごっこがしたいといった。

少年が提督役で、夕立が艦娘役。

と、いつでも内容はただのボール遊びだったが。

夕立が館の壁を蹴って高く飛び、ボールをキャッチした時に少年がいった。

「すげえなねえちゃん、才能あるよ。艦娘役の」

「——ありがと。君も才能あるよ。提督の」

やがて少年と夕立の時間はあつという間に流れ、夕方になる。

「ねえちゃん今日すげー楽しかった、また遊んでよ！」

その言葉に夕立は震える。

自分の提督の願いを叶えたいと、そんな気持ち湧き上がる。

艦娘の本能が、提督のそばにいたいと叫ぶ。

だが夕立は頭を振って、その想いを振りほどく。

理由はたくさんある、夕立を恨む存在は世界中にいるだろうし、それに艦連だって、自分の捕縛をまだ諦めてはいない可能性もある。

自分といることで、この大切な提督に危険や迷惑がかかる、そばにはいられない。

それに——

夕立は振り返って、夕焼けに染まった庭園と、小さな館を見る。

しばらくその風景を見つめた後、夕立は振り返り、自分より背の低い少年、自らの提督と視線を合わせるために屈む。

「……もう、ここには来ちゃダメ」

「えー！　なんでだよー！」

「なんでもよ、わかった？」

夕立の拒否の言葉に、ブーブーと不満の声を上げる少年。

しまいには涙目になって、駄々をこねるように夕立の肩をペシペシと叩き始める。

泣きたいのはこつちだというのに、そう思いながら、夕立は優しく少年の頬を撫でた。「もう、わかったわよ。そうね、じゃあもし、君がどうしようもなくピンチになったら……ここに来なさい。その時は、ここにかくまってあげるし、ここにずっと居てもいいから」

言葉を紡ぎながら、夕立は本当に泣きそうになる。

だが、自分の提督に無様などころは見せたくないという思いからか、必死にこらえた。「え？　じゃあ、その時はまたここに来てもいいのか!？」

「そうね……その時は、ね。だからその時まで、君がいつでも帰ってこれるように、私にここに居てあげるから」

「うーん、わかった。じゃあ約束だけ、それまでねえちゃん、ここで待っててくれよな」
渋々と納得した様子の少年が、小指を出す。

「……うん、約束っばい」

夕立の震える小指が、少年の小指と絡まる。

そして絡まった指の感触を感じつつも、お互い名残惜しそうに離れた。

約束だからなともう一度言い残し、少年は正面の門ではなく、入って来た時と同じ、隙間の空いた柵の間から出て行つた。

「約束っばい……」

夕立は寂しさと、艦娘の強い提督を求める衝動のようなものが、湧き上がるのを感じた。

それをぐっと、胸に両手を当てて、夕立は抑え込む。

自分は幸せだ、恩人に居場所をもらつて、おまけにその場所で提督にも会えた。

それに――

「あつたんだ、私の中にも、こんなに温かいものが――あつたん、だ」

ずっと探していた、知りたかつたもの。

それを見つけた、ついにそれを知つた。

夕立の目から、我慢していた涙が一粒、二粒とこぼれ、止めどなくあふれ出す。

ずっとずっと知りたかつた、この胸の躍るような温かい気持ちを、やっと知ることができた。

恩人から貰った、奇跡のように美しいこの場所。
提督がくれた、奇跡のように温かいこの気持ち。

これがあれば、もう自分は大丈夫だと思えた。

自分は幸せなんだと思えた。

そうだ、これ以上の幸せはない。

だけど、今日だけは、あと一つだけ、今夜だけは

——夕立、頑張つてずくくつと待つてたっぽい！

——提督さん、褒めて褒めてー♪

そんな、訪れるはずの無い、幸せな未来の夢をみたいと……

日が落ちて、あたりに夜の帳が下りても、夕立はそこにずっと立ち続けていた。

春が来て、春が終わり。

夏が来て、夏が終わり。

秋が来て、秋が終わり。

冬が来て、冬が終わる。

月日は流れる。

奇跡のような美しいその庭に、一人の艦娘はいた。

長い放浪と戦いの末に、あるじと居場所を手に入れた、とある駆逐艦の艦娘。

白露型駆逐艦 四番艦『夕立』

その夕立は、今日も約束の庭で

あるじの帰りを待っている。

『あるじ』と『駆逐艦：夕立』
おわり

『孝行息子』と『駆逐艦：望月』

「母さん、ご飯できたよ」

「ん？ あー、わかったー」

そう返事をしたものの、母さんは漫画を手に持ったまま、人をダメにしてしまいそうなソファアールから動こうとしない。

「母さん、ご飯冷めちゃうよ？」

「んー、それはやだなあ」

そう返事はするものの、やはり母さんは動こうとしない。

仕方ないので、僕は動こうとしない母さんを抱き上げる。

太いフレームの眼鏡、そのレンズの向こう側の大きな瞳が、わずかに揺らめいたけど、その視線は相変わらず漫画に向けられたままだ。

俗にいうお姫様抱っこの体勢。

僕の体よりはるかに小さくて軽い、見た目だけなら少女といっても差し支えない母さんを抱えながら歩く。

歩きたび、栗色の長くて柔らかい髪が揺れ、懐かしくて温かい香りがふわりとした。僕にとってそれは母さんの香りだ。

廊下を挟んでその先にある和室、台所から一番近い部屋のちやぶ台の上には、僕が用意した二膳の夕食が向かい合わせになるような形で置いてある。

母さんを下ろして向かい側に移動しようとしたら、母さんが僕の服を掴んで引き止める、視線は漫画に向けたままだ。

それだけで母さんがなにをして欲しいのかがわかる。たまにあるアレだ、よほど今読んでいる本が面白いらしい。

あぐらをかいて座ると、母さんがストンと僕の足のの上に座る。

僕が手を合わせて頂きますと口にする、母さんも申し訳程度に「頂きまーす」とつぶやき軽く手を合わせた、本を持ちながらだけど。

僕はまずお米を軽くつまんで母さんの口へ運ぶと、パクリと母さんが口にする。

三角食べを守りながら、焼き魚やおひたしなどのおかず、汁物も碗を母さんの口元まで運び順番に食べてもらう。

二人羽織、と呼ばれる難しい芸のように見えるけど、母さんは僕よりかなり小さく、しかももう随分前から何度もやってることなので、今では慣れたものだ。

やがて用意されていた食事を食べ終えた母さんが「ご馳走さま」と呟き、母さんの食

事が終わる。

僕は母さんを持ち上げて普通に座らせてから、向かいの席に移動して正座し、自分の食事を食べ始める。

でも直ぐに母さんは立ち上がって、僕の正座した足の上に座り、本を読み始める。

行儀が悪いのはわかっているけど、流石に正座した足の上に母さんが座ると、高さに食事が取りにくかったので、足を崩して胡座をかく。

座りにくそうにしていた母さんが、ストンと足の間に収まった。

食事を終えて、僕は母さんをさっきの部屋に運び、洗い物を済ませる。

そして自分の部屋に戻ると、今日学校で出された課題に取り掛かった。

課題の内容は自分の家族についての、作文。

高校生にもなつてこの課題はどうなのだろうと思わなくもないけど、きつと意味があることなのだと思います。真剣に取り組むことにする。

僕は書き出しをどうするか、少し悩んだ後こう書き始めた。

僕の母さんは、艦娘です。

僕は養子だ。

どこの国の生まれなのかはわからないけど、艦連の人道支援により、色んな場所から引き取られてきた孤児が集まる『鳳翔街』と呼ばれる場所、その出身。

母さんは定年まで勤め上げた後、余生の手慰みとして僕を引き取ったらしい。

僕は世間でいう、提督適性者という存在では無い。

なので当然、母さんの艦娘名である望月の提督適性者でも無い。

だというのに、どうして僕を引き取ったのかと、母さんに聞いたことがある。

「利口そうだったから」

以上だ。

多分母さんは、手がかからなくて、ある程度自分の世話が出来そうなら、誰でも良かったんだろう。（余談だけど鳳翔街出身者は、身の回りのことは全て自分で出来るよう仕込まれる）

勿論、僕はそのことに不満なんてない。

どういう形であれ、母さんは僕を養ってくれているし、普段はあんな感じだけどちゃんと大事なことは教えてくれる。

そんな母さんのことをつらつらと書き終えて、課題を仕上げた。

そして今日の復習と明日の予習を始め——

『おーい、ゲームするから付き合え』

ようとしたところで、母さんの部屋の方から僕を呼ぶ母さんの声が聞こえてきた。

僕は広げていた教科書とノートを閉じて、母さんの元に向かう。

だって予習復習は大事だけれども、母さんはもつと大切だからだ。



お互いのカードが見える不思議な状態。

つまり母さんを膝に乗せながらやるババ抜きに意味はあるのだろうか？

そう思いながら、ゲーム性を遵守する為に、目をつぶりながらカードを引く。

ババだった。

「ババ引いたな」

「うん、引いちゃった」

この位置から母さんの顔は見えないけど、多分微笑んでいるような気がする。

「どうだ？ 学校は」

「うん、なんとかやってるよ」

「勉強ばかりしてちゃダメだぞ。ちゃんと遊んでるのか？」

「普通は逆だと思うけど。それなりにやれてると思うよ」

「そうか、ならいい」

母さんが僕のカードを引く。

母さんは普通に目を開けて引いてるので、ババはそのままだ。

「別に勉強なんかしなくてもいいんだぞ、あたしの軍属年金だつてあるし。使わず貯めてあった給金もあるから、あたしが死んだ後も、おまえが困らないくらいに余裕はある」

「うん、でもなにがあるかわからないから頑張るよ」

僕は嘘をついた。

僕が頑張る本当の理由は、なにかあった時に母さんを助けられるようになりたいからだ。

でもそれはいわない。

母さんは艦娘軍の職業軍人だったらしい。

軍人といつても毎日近海の見回りをしたり、座礁した船や燃料を節約したい海運会社から要請があつたら、その船を曳航するような仕事が多かつたらしいけど。

それでも、たまに外国に向かう途中に現れる、海賊を追つ払うような仕事もあつただとか。

そう、以前お酒を飲んだ時にこぼしていた。

僕がそんな母さんを助けられるような状況が思い浮かばないから、だから、今はまだそんなことはいふ必要はない。

「まあ、あたしがこうやって息抜きさせてやってるから大丈夫だと思ふけどさ、勉強のしすぎでおかしくならないように気をつけるんだぞ。そうだ、なんか欲しいものとかないか？ なんでも買ってやるぞ」

僕は少し考えたけど、必要なものは十分足りているので「特にはないよ」と、答える。母さんは「つまんねーな」と、不満をこぼした。

「そーいや彼女とかできたか？」

「……居ないよ、彼女なんて」

「マジかー、世の中の女は見る目がないな。あつ、もしかしてあたしに気を使つてるのか？ なら気にせず家に連れてきていいんだぞ」

ほんの僅か、多分僕以外誰も気がつけないような変化だったけど、確かに母さんの声

が震えていた。

「ほんとにいないよ、彼女なんて」

「そうか」

それに彼女なんてつくつたら、母さんの世話ができないじゃないか。

とはいわない、母さんに気を使わせてしまいそうだから。

「おまえ、将来なりたいたいものとかあるのか？」

「うーん、まだわからないかな」

「そうか、まあ焦ることもないと思うけどな。早く決めれば、あたしも手伝ってやれるから有利になる」

「うん」

母さんが最後のカードを引く。

当然だけど、僕の手元にはババが残る。

「ほんと、なりたいたいもの……あるよ」

「ん？　なんだ決まってたのか、教えろ」

言葉に出すつもりはなかったのに、つい口に出してしまった。

僕は悩む、本当のことをいってもいいのかどうか。

適当になにかいって誤魔化そうと思っただけど、上手い言葉が出てこない。

それになにか言ってしまったら、母さんはきつと本気でそれを手伝ってくれる気だろう。

らしくないけど、母さんは必ずそうするだろう。

だから、僕は正直に言うことにした。

「——母さんの本当の名前を呼べるようになりたい」

空気が凍るのがわかった。

母さんが震えたのも。

「……それは駄目だって言っただろ」

「うん、ごめん」

なんでもない風を装いながら、絞り出された母さんの声。

母さんは立ち上がって「ちよつと漫画取ってくる」と、いつて自分の部屋に歩いていった。

『ウグツ、うえつぐ、うぐ』

母さんの部屋の扉が閉まる音がした後、母さんの泣き声が、聞こえてきた。

僕は母さんがどうして泣いているのか、わからなかった。



「と、いうわけなんだけど。どう思う？」

「どう思うって、おまえそれ……どうなんだろうな？ 一乗寺くんはどう思う」

「興味深いね、そのお弁当のエネルギー量はどれくらいなの？」

「一乗寺くんに聞いたのが間違いでしたー！」

「1000キロカロリーだね」

「ノゾムも真面目に答えてるんじゃないやねえ！ てかちゃんと測ってるのかよ！」

「母さんに作ってるのと同じだからね、手は抜けないよ」

「そういえばノゾム君は料理が得意だったね」

「うん、昔は母さんが作ってくれてただけど『あたしや、出来たもんを食いたいのよお。』っていつてたから、頑張つて覚えたんだ。お弁当はいいよ、離れていても母さんと同じものを食べられるから」

「はいはい、そりゃ結構なことって……って、それより話がずれてるんだよ！」

「原は今日も元気だね」

「確かに原くんの通常状態の活動は活発だ、同意するよ」

「お、落ち着け、今ここで俺がキレたら昼休みが終わる……」

昼休み、付き合いのある友達たちと昼食をとりながら、昨日あったことを相談する。

友人のうちの一人、体格のいい目つきの悪い方は幼馴染の『原』だ。

染めた金髪からわかるように、去年くらいまでは手のつけられない不良だったけど、いつの間にか落ち着いていた。

今は趣味のバイクのために、アルバイトに精を出しているらしい。

面倒見がよく、時々後輩たちから原の兄貴と呼ばれている。

「情報が不足してるね。僕にはノゾム君の考察問題に関して、有用な考察結果を提示できないんだけど、飛鷹ならなにかわかるかもしれないね。聞いてみようか？」

もう一人の友人、一乗寺明君。

一年くらい前に転校してきた、独特な価値観を持つてる、近寄りがたい存在。

また、近寄りがたい理由を追加であげるなら、その容姿だろう。

サラサラの黒髪に、まるで作り物のような恐ろしく整った容姿、一言でいうなら絶世の美男子。

だがなにより彼を近寄りがたい存在である理由は、彼の信じる神様にある。

この国は宗教には寛容だ、だが、その中であつてなお、一乗寺君の信じる神の存在は異質なものである。

それらの要因が相まって、クラスでは浮いた存在だけど、彼自身は彼の神様が絡まない限り、誠実でありいい人だ。

また、クラスの良心たる委員長（飛鷹）の手助けもあって、なんとか日常生活を送れている。

もつとも本人はなにも気がついていないみたいだけど。

「ありがとう一乗寺君、お願いできるかな」

「飛鷹、ちよつと来てくれるかな？」

一乗寺君が、さつきまで僕たちが会話していたのと、同じ大きさの声で委員長を呼ぶ。窓際で昼食をとっている委員長まで少し距離があるのに、聞こえるんだろうか？ と思ったけど、委員長はすぐに立ち上がって、少し嬉しそうにこちらにやって来る。

「どうしたのていと……あ、明君」

長い黒髪と、制服のスカートを揺らしながら、委員長は後ろから一乗寺君の肩に手を置く。

その手を慣れた様子で握る一乗寺くん、因みに最近つきあい始めたらしい。

原が砂糖でも吐きそうな表情で、その様子を見ていた。

「飛鷹は統計的に、どういった時に涙を流すことがあるかな？」

「えーつと、話の流れ的にノゾム君のお母さんの望月さんのことよね、うーん、そうね。私たちも感情は人と変わらない部分があるけど、やっぱり……悲しい時が多いと思うけど、嬉しい時もたまに泣いちゃうことがあると思う。ただ、そこまで感情が動く

のはその、やっぱり提督に関係する時だとは思うけど……」

なぜ今、話に加わった委員長が、話の流れを把握しているのかはおいといて。

もしそうなら、母さんは提督に関係するなにかで、泣いてしまったんだろうか。

思い返せば、僕が母さんの名前を呼びたいと願った時、母さんは急に立ち上がった。

……僕が、母さんを泣かせてしまったんだ。



家に帰ると珍しく来客中で、何時もめんどくさそうにしながらも、僕の帰りを迎えてくれる母さんの姿がなかった。

居間に入ると、母さんがお茶も出さずに、黒髪の綺麗な大人の女性と向き合っていた。

「そうはいつてもなあ山城、その問題はあたしじゃどうしようも無いぞ」

「ですがその、望月先輩なら——」

「そもそも、提督を……見つけてるって時点で、あたしにやそれ以上なかが不満なのかよく解らん。悪いがもつと経験者が年長者を頼ってくれ」

「経験者はともかく、年長者は望月先輩より上の知り合いはいなくて……」

「あ、？」

「す、すみませんなんでもないです……あつ、ごめんなさいお邪魔しています」

黒髪の女性が、僕に向かって軽く頭を下げる。

綺麗な人だなと思った。

僕は会釈を返し、台所にいってお茶を用意する。

戻つてくると、母さんが黒髪の人に「とにかく、まずはおまえの提督とちゃんと話し合え」と、いつてるところだった。

提督、つまりこの黒髪の人は艦娘なのだろうか。

「どうぞ」

母さんのお客さんの前に、ゆっくりとお茶を置く。

黒髪の人は、洗練されたような仕草で、僕の方に振り向いた。

「あ、ありがとうございます。えっと、貴方は望月先輩の……」

「息子のノゾムです、何時も母がお世話になっております」

「あつ、こちらこそお世話になってます、山城です……えっと、戸籍名を名乗った方がよかったですら、ごめんなさい。あつ、確か望月先輩が除隊されてから……ずいぶんと、すっかりしていらいっしやるのね」

少しうるんだ瞳で、僕を見てくる山城さん。

その様子が色っぽくて、ちよつとドキツとしてしまった。

「んがー！ 人の息子に色目使うなあ!!」

僕の心を見透かしたように、母さんが珍しく大声を出しながら立ち上がる。

「えつ、ええええ!? ベ、別にそういうつもりは。それに私には提督がいますし、そもそも息子さんは望月先輩の提督じゃ——」

「うるさい！ もうおまえ帰れよお！」

なにか焦つたような様子で、母さんは山城さんの背中を押しながら、家から追い出す。山城さんは母さんに押されながら「また、お邪魔させてもらいますうううう」と、いながら帰っていった。

「まったく……おい、風呂に入る」

「あ、うん。いれてくるね」

「いますぐがいい。お湯張りながらでいいから、先に髪を洗ってくれ」

「うん」

母さんと手を繋いで脱衣所まで行き、母さんの服を脱がせて、僕も服を脱ぐ。

母さんは裸になると、さつさと浴室に入って椅子に座った。

僕はお湯を張りながら、母さんの髪をシャワーで濡らし、お湯が染みこむように軽く髪をすく。

「ぼかぼかするねえ、いい気持ちだ。いつの間にか、昔と逆になっちゃったな。あの頃はあたしがおまえの髪を洗ってやってたのに」

「うん、そうだったね」

母さんの髪にシャンプーをつけて、洗う。

母さんの髪はとも長い、思えば僕が最初に出来るようになった手伝いは、母さんの髪を洗うことだった気がする。

「しかし、おまえを引き取ってもうどれくらいになるんだっけ？」

「七年くらいだと思っよう」

「嘘だろ、マジい……？ マジで？ なにそれマジかよ、こりや参ったわ。年がたつのは早いな」

参ったわー、といいながら、母さんが足をパタパタさせる。

母さんの機嫌がちよつといい、少しずるいけど、昨日のことを謝ろう。

「母さん、昨日はゴメンね」

「んー？ ん……もつと上……あーそこそこ。凝ってんだよね。ん、うまいじゃん」

ゆつたりとした浴室の空気の中で、僕は母さんの頭皮をマッサージしながら、昨日のこととを謝る。

「母さんの、名前のこと。ごめんね、もういいたって、いわないようにするから」

「……………」

少し間を空けて、悲しそうな声でそう返事をした母さん。

そのあと、髪と体を洗い終えて湯船につき、トリートメントをしてお風呂を出るまで、母さんは一言も喋らなかつた。



次の日、僕は校庭を走っていた。

授業のマラソン、決められた回数グラウンドをまわる必要がある。

当然、能力は全員違うので、早い人もいれば遅い人もいる。

僕は真ん中くらい、原は身体能力に根性がプラスされてるから、上の方。

一乗寺くんはぶつちぎりのトップだ。

身体能力を兼ね備えた美しさ、天は二物を与えた。

けど三物は無理だったようで、実は一乗寺くんはかなり座学の成績が悪い。

引くくらい悪い。

委員長が一生懸命フォローしなければ、多分留年は免れなかつただろう。

そして夏の日差しは強くて、中々しんどい。

か。 どうしてこの時期に外を走らせるのか、現代の教育は根性の育成も入ってるんだらうか。

ふと、昨日の母さんのことを思い出す。

風呂上がり母さんを、膝に抱えて髪をといていた時のことだ。

母さんは、なにかをいいたそうにしていた気がする。

それがなんだったのか、僕は走り、汗を流しながら考える。

答えは出ない、それが悔しくて僕は走る速度を上げる。

走る、考える、答えが出ない、走る、考える、答えは出ない。

原の背中が見えた、思ったよりペースが上がっていたようだ。

そんなことに気がついた瞬間、目の前が急に真っ暗になった。

意識が途切れる前、原と一乗寺くんが慌てたように、こっちに走ってくるのが見えた。



母さんに手を引かれて、街を歩いた日のことを思い出す。

母さんと僕が、同じくらしい身長だったあの頃。

周りからはまるで姉弟のように見えていたと思う。

『あの、今日からよろしくお願いします』

『ん？ ああ、よろしくなー』

そう答えながら母さんは、店先でこれから暮らす上で必要なモノを見繕っていく。

当時は知らなかったけど、母さんは軍隊での暮らしが長かったからか、物を持っていなかったらしく、当時は日用品だけでも足りない物が沢山有った。

『かえったぞー、あぁーしんどー』

両手に沢山の荷物を持って、家に戻る。

母さんは玄関に荷物を放り投げて、ぐでーつと寝転がる。

『あとなにがあるんだっけか』

『えっと、調理器具はありますし、あとは、布団とかでしようか？』

『あく、一組は家にあるけど、あんな重いもの持ち運びたくねえよ。宅配は金かかるし、うあぁーマジめんどくせえー！』

『あの、だったら僕は別に、布団が無くて寝られるので』

『なにいつてんだ、今日からおまえは、あたしの息子なんだ。当分は一緒に布団で寝ればいいじゃん』

『えっと、それは……』

『なに、いやなのか？』

『え、そんなことは』

『じゃあいいだろ、奥の部屋にあるはずだから布団を敷いてくれ、今日はもう寝ちやおうぜえ』

『はい、わかりました』

『あと、かしこまったしやべり方禁止な。めんどくせーし』

『えっと、あの、わか、わかったよ』

『ん、じゃああたしを部屋まで運んでくれ、息子よ』

『……わかったよ、その、母さん』

当時の僕は体が小さかったので、母さんを持ち上げることが出来なかったから。

母さんを一生懸命引きずりながら、部屋まで運んだ。

引きずりながら、眼鏡のレンズ越しに僕を優しく見つめてくれる、母さんの目。

それ以来、僕は眼鏡越しに見る母さんの目が、たまらなく好きになった。

□□□□□□

「軽い貧血です、休んでいれば良くなりますよ。すみません、クラスの子が慌ててお母さんの方に連絡を入れてしまったようです」

「いえ、とんでもございません」

保健室の先生が、誰かと話している声で、僕は目を覚ました。

でも身体はまだうまく動かせない、僕は諦めて目を閉じる。

「私はちよつと席を外しますが、良かったら見ていつてあげてください。今はまだ眠つてますが、そのうち目を覚ますと思います」

素晴らしい残して、保健室の先生が出て行くのがわかった。

カーテンで遮られたベッドに、誰かが近づいてくる。

なんとなく、母さんだとわかった。

「よかったよ、おまえが無事で」

母さんは、僕のお腹に頭を乗せる。

意識が少しづつはつきりしてきた、どうやら僕は授業中に倒れたみたいだ。

「頼むぞ、頼むからあたしより先に死んでくれるなよ。なあ、お願いだぞ——提督」

提督？

「……母さん、いま、なんて？」

「っ!？」

ばつと母さんが、僕から離れる。

僕はゆっくりと目を開けて、体を起こす。

「おまえ、起きてたのか？」

「うん、ちよつと前に。体がうまく動かなかったから、起き上がれなかつただけど」

「そうか、まあなんだ、おまえが無事でよか——」

「僕は、母さんの提督なの？」

母さんの言葉を遮り、僕がそう聞くと、母さんの顔が真っ青になった。

母さんは口をぱくぱくさせながら、じりじりと後ろに下がる。

「ねえ母さん、僕は母さんの——」

「違う!!」

保健室に母さんの大声が響く。

母さんは震えながら、僕を強く睨む。

「いいから、忘れろ。頼むから、忘れてくれ……」

そういつて母さんは、逃げるように保健室から出て行った。



どうしたらいいのかわからなくなった僕は、その日の放課後、学校のベンチで原に今日のことを相談した。

原は黙って僕の話最後まで聞いてくれたあと、飲んでいたジュースの空き缶を、ゴミ箱に向かって投げる。

空き缶はゴミ箱から外れて、地面に落ちた。

原は舌打ちしたあと、空を見上げながら話し始める。

「難しい問題なんだろうな、アホな俺には荷が重い。まあ幸い俺は当事者じゃねえけどな」

「どうしたらいいんだろう、母さん、泣いてたんだ……」

僕は原と同じように、夕焼けの空を見上げる。

「……なあノゾム、俺がなんでおまえとつるんでるかわかるか？」

「幼馴染だからじゃ無いの？」

「ちげーよ馬鹿、幼馴染ってだけなら他にいくらでもいるだろうが」

「……僕、そっちの趣味はないんだけど」

「それこそちげーよ馬鹿！　ったく……いいか、俺がおまえとつるんでるのは、おまえに根性、あー、ちよつと違うか。あれだ、そう、おまえに勇気があるからだよ」

「勇気？」

「そうさ、勇気だよ。なあノゾム、俺は見ての通りこんだ、傍から見たらまあ、近づきたい人種じゃねえ。でもおまえはむかしつから俺に臆せず絡んできてたし、何時だった

かおまえ、お袋さんを馬鹿にしたやつをボコボコにしたことがあつただろ。俺が言うのもなんだが、別に暴力を肯定してんじやねえ。でも、その時のおまえを見て、俺はおまえに勇気があるんだと感じたんだ。勇気の証明っていうのかな、いざつて時にやることをやる男だつて証明したのさ。いざつて時にダチを見捨てるようなヤツじや無いつてな」

「初耳だね」

「まあ、わざわざ言うことでもねえからな。だがなんだ、つまりおまえには勇気がある、だから恐れを取り除いて考えてみる。おまえは、どうしたいのかつてな。そこんところは結局おまえにしかわかかんねえ」

「僕は母さんが一番喜ぶことをしたいかな」

「即答かよ……ならまあ、そうしたらいいだろ、勇気を出してな」

そういつて、原は立ち上がり、バイトに行くてくるといいながら去ろうとした。

「空き缶、ちゃんと拾つときなよ」

けど、僕にそういわれて、嫌そうな顔で振り向き、さつき外れた空き缶を拾つてゴミ箱に捨て直す。

そして「なら、そうしたらいいだろ、勇気を出してな」ともう一度いい直して、今度こそ去つて行つた。

色々考えることは多いけど、それでもその方向はわかった気がする。
僕は心の中で、もう近くにはいない原に感謝した。



家に帰ると母さんの出迎えは無く、母さんは自分の部屋で、人を駄目にしそうなソファアーに座りながら、漫画を読んでいた。

僕が帰宅の挨拶をすると、母さんは漫画を見ながら、お帰りとはいつてくれたけど、僕の方を向こうとはしない。

母さんは今、なにを思ってるんだらうか。

「ねえ母さん、本当は僕が母さんの提督なんだよね？」

母さんがビクリと震えた。

そのあとゆっくりと漫画のページをめくる。

「言っただろ、違うって。おまえがどうしてもそうして欲しそうだったから、ちよつとだけ魔が差したんだよ。今は馬鹿なことしたって……思ってる」

眼鏡のレンズ、その奥にある母さんの瞳が揺れているのがわかる。

母さんが、嘘をいっていることも、わかる。

「なぜ、嘘を言うの、母さん」

「うそ?」

「母さんは、嘘をついている。理由を聞かせて欲しいな」

「嘘なんてついてねーよ」

「それも嘘」

母さんの瞳を見つめる。

レンズ越しに見る母さんの瞳は、さっきよりも大きく、確かに揺れていた。

「利口なのは知ってたけど、勘も鋭いとはね、育て方が良かったのかな」

しばらく見つめてっていると、母さんは観念したように、ため息交じりに肩をすくめて首を振った。

諦めたような口振り、母さんらしいようで母さんらしくない、そんな口振り。

あんまり好きじゃないな、と思った。

嘘を認めた途端、急に母さんの周りに張り詰めていた空気が消えたような錯覚。

母さんはぼそりと呟く「どうせ、もう長くないからいいかな」と。

そして僕に背を向けて、悲しそうな声で話しました。

「あたしの寿命を考えれば、おまえが成人した後くらいか、そう遠くないうちにあたしは死ぬ。だから余計なものを残したくない。それだけのことだよ。だからおまえは普通

に生きる、あたしの……あたしの提督だなんて、余計な肩書きなんて持つ必要はない。だから、忘れろ」

そう言った母さんの後ろ姿は、とてもとても寂しそうで。

僕はそれが許せなくて、勇気を出す。

母さんは、きつと我慢してるんだらうから。

「駄目だよ母さん、それじゃ駄目だよ」

母さんには絶対使わなかった、強い口調。

母さんがビクリと震えた。

「なんだ、あたしの言うことが聞けないのか？ 反抗期にしてはちよつと遅い……いや、

丁度今くらいなのかな」

「うん、反抗期。だから母さんの言うことは聞かない。僕は母さんを母さんの本当の名前で呼びたい」

僕はそういつて、まっすぐに母さんを見つめ、母さんに向かって手を伸ばす。

母さんはびくつと震えると、僕から逃げるように部屋の外に行こうとする。

僕は逃がさないよう、後ろから母さんを抱きしめた。

「だめ、だめだ……駄目だつて」

震える母さんの髪から、母さんの香りがした。

優しくて温かくて、あの時から変わらない母さん。

「はな、はなせよお……」

「母さんが本気で振りほどけば、僕は敵わないよ?」

「そんなこと、そんなことできるわけないだろお」

グスングスンと泣きながら、母さんは振り向いて、僕の胸に顔を埋める。

「母さん、例えあとどれくらい一緒にいられるかわからなくても、僕は母さんが望む形で、母さんと一緒にいたいよ。ねえ母さん、母さんは本当に僕に、母さんの本当の名前を呼んで欲しくないの?」

母さんは僕の胸に顔を埋めながら、ちよつとだけ首を左右に振つた。

「別に夫婦になりたいとか、そういうんじや無いんだと思う。僕はね、母さんと一緒に、母さんが望む形で一緒にいたいんだ、それが一番僕は嬉しいんだ。だから母さん、お願いだよ」

母さんは長い間にも言わずに、ぎゅつと僕に抱きついたまま動かなかった。

一分、二分、五分、十分、ずっとずっと僕は母さんを抱きしめ続け、母さんも僕を抱きしめ続ける。

そして、母さんはふつと力が抜けたように手を緩め、少し嗚咽交じりになりながらしゃべり出した。

「……あたしのほんとの名前を呼べたら、ちゃんと、これからはちゃんと、あたしの言うこと聞くか？」

「うん、ちゃんと言うこと聞く」

「ちゃんとだぞ、家の手伝いも勉強も遊びも、あたしの髪をといたり、お風呂に入れたり、あと今日の晩ご飯はハンバーグにするんだぞ」

「うん」

「ゲームの相手も絶対するんだぞ、おやつもちゃんと用意しろよ。あと、あと……どうしてもって言うなら、彼女とか作ってもいいけど。あたしがいる間はあたしが一番だからな？」

「うん、母さんが一番だよ」

「それから、それからな——」

「うん、なんでもいって母さん」

母さんは、少し間を空けて、絞り出すように言う。

「——わたしの、本当の名前を今、呼べ」

母さんが真っ赤になっているのが、なんとなくわかった。

胸がとても温かいから。

「うん、わかったよ」

僕は少し悩んだけど、胸にしがみついている母さんをそつと引き離す。

母さんの顔はぐしやぐしやで、見られるのが恥ずかしいからなのか、母さんは一生懸命袖で目元を拭うんだけど、眼鏡が邪魔でうまく拭えないみたいだ。

僕は母さんの眼鏡を外して、自分の首元に掛けて、ハンカチをとりだして母さんの目元や濡れた顔を優しく拭く。

母さんはぐすぐすと、嗚咽をこぼしながらも、僕のしたいようにさせてくれた。

最後に母さんに鼻をかねで貰い、ハンカチをたたんでポケットに戻し、眼鏡をかけ直して上げる。

母さんは赤くなった目で僕を見ながら、少し恥ずかしそうにしていた。

やっぱり、眼鏡のレンズ越しに見る母さんの目が、僕は好きだ。

「えっと、じゃあ呼ぶね」

「ああ、わたしの名前を呼んでくれ、提督」

僕は深呼吸を一つして、優しく微笑む母さんに向かって口を開く。

『孝行息子』と『駆逐艦：望月』

「ふ、ふうーん、いいねえ。ちよつとやる気わいてきた」

面と向かって母さんの本当の名前を呼ぶというのは、思ったより恥ずかしくて、顔を伏せてしまった僕を抱きしめながら、母さんはそう耳元で囁いた。

『無職男』と『駆逐艦：嵐』

無職の頃。

なんだか懐かしい夢を見たような気もするが、もう過去の記憶も消え始めた昨今。

夢で見る自分の過去のことが、他人の人生に思えることもしばしば。

そんな中、寝苦しさで、うるさい蝉の声で目を覚ます。

なんだか寝汗が凄い、本来起きる予定だった時間より少し早い、もう一度寝直す気にもなれないので起きることにする。

体を起こすと、地味に腰が痛い。

先日、相談したいことがあったので、陽炎と話をしたのだが。

時津風とこのことを話したら微妙に機嫌が悪くなつて、何故か肩車を要求された次第。

無職には少女の心がわからぬ。

まあ意外と喜んでいたのでよしとしよう。

娯楽に飢えているのか、今度遊園地にでも連れて行ってやるのもいいかもしれない。

遊園地のトラウマあるけどな、俺。

シャワーを浴びて汗を洗い流し、汗が引くまでは服を着るのもあれなので、この前新品に替えた。パンツだけ穿き、ベランダに出て一服。

夏の朝は陽が昇るのも早く、朝日が景色を照らしていた。

熱くて忌々しいだけだった、昨日までとは違う気がする朝日。

おっと、のんびりしすぎて遅刻するわけにもいかん。

とつと服を着て準備せねば。

さあいくか、今日は出勤最初の日だ。

『無職男』と『駆逐艦：嵐』

「オーホツツホ!! 愚かな人間どもよ、我らビッグヘッドクオーターズの前にひれ伏すがいい! オーホツホ、オーホツホツホ!!」

目の前には黒いマントをたなびかせ、やたらひらひらしたレースや黒革でつくられた露出の多い衣装を着た黒髪の女。

目を隠す仮面をつけたその女は、このクソ暑い中でも元気に高笑いをしている。

「出たぞ! 悪の組織の大幹部、ゴスロリクイーン! フェザーブラック様だ!」

「テレビに映った瞬間視聴率が二倍になる! フェザーブラック様だ!」

「某重巡の艦娘を元にイメージされたのに、まさかのご本人がやってるなんてマニアの間でも知られていないフェザーブラック様だ!」

「しかも今日来ててくれるのは、あらゆる役をこなす技巧派俳優、実際にテレビに出演してるフェザーブラック様ご本人だ!」

フェザーブラック?

普通はブラックフェザーじゃないのか?

その様子を観客席から、子供たちやいい歳したおっさんが、実況しながら熱心に見つめていた。

いい歳したおっさんといったが、かくいう俺もいい歳して全身黒タイツを着て、後ろでキーキーと威嚇声を上げているので大概だが。

正直クソ暑くてたまらないが、分厚いマントや、ゴテゴテした衣装を着たフェザーブラック様に比べれば大分マシか。

夏休み、艦夢守市にある駅ビルの屋上。

今俺はそこで開催されているヒーローショー、その悪役の下っ端戦闘員を演じていた。

ほんと、なんでこんなことやってるんだろ、俺。

俺つてなにがやりたいんだっけ？　そもそもなんでここに居るんだっけ？

揺らぐ人生の立場について、無限に思考のループ状態。

いや、まあ、金が必要だから、急募の日雇いバイトに手を出したわけだが。

労働しているはずなのに、定職からは遠のいていく気がするこの状況のせいか、仕事
中なのに思考が沈み始める。

「そこまでだぜ!!」

「でたわねえ、海面ライダー、嵐!!」

そんなメンタルダウン状況の中で現れる、なにやら赤いヘルメットとアーマーをつけた、正義のヒーロー。

「どういふ台本なのだろうか、現場に到着した直後に着替えさせられたので、話の流れがまったくわからん。」

えつとなんだったけか、海面ライダーとフェザーブラック様の掛け合いからするに、悪の組織にとらえられて改造手術を受けた海面ライダーが、組織から抜け出してうんたらかんたら。

なんか昔からその手のシリーズの話があるのは知ってるが、今何代目なんだろうか。子供の頃は正座して、それらしい番組を見ていた気もする。

海面を走って戦う水上戦闘が、かつこよかったのは覚えているが。

「ほらおっさん、いくぞ」

隣の戦闘員の同僚に、肘でつつかれる。

なんだ、もう出番か。

前を見ると、戦闘員と海面ライダーによる壮絶な戦いが始まっていた。

なんでもあの海面ライダーの中の間人は、プロのスタントマンらしい。

アドリブで処理するので、戦闘員（日雇バイト）は、とにかく本気で派手に殴りかけれというふざけた仕事内容だったはずだが、本当にいいのだろうか。

いや、というより海面ライダーはよくても、戦闘員は普通の間人だと思うのだが。

なんて心配を余所に、先に殴りかかった同僚たちは次々に投げ飛ばされて、観客席から見えない場所に設置されたマットの上に落ちてゆく。

ああなるほど、さすがプロだな。（思考停止）

こちらが全力で殴りかかっても、手加減しつつアドリブで捌ききる実力があらし
い。

隣にいた戦闘員も既に投げ飛ばされていて、今は竜巻にさらわれたかのように宙を
舞っている。

まさに嵐のようだ。(思考後退)

さて、そういうことなら俺も給料分の仕事をしなければなるまい。

精々派手に投げ飛ばされて、観客を楽しませてやるとしよう。

そしてまあなんだ。

別にあれ、倒してしまっても構わんのだろう？



午前の演目が終わり、昼休みの最中。

俺は喫煙所で敗北感にうちひしがれていた。

「なんなんだあれ、本気で殴りかかったのにかすりもしなかったぞ……」

「気にすんなよおっさん。こんなバイト腕に自信があるヤツぐらいしかこないんだけ
ど、みんなあのスタントマンにボコボコにされて凹むんだわ。おかげで年中人手不足。

何時もはもつと普通に募集したのでまわすんだけどよ。今日のイベント、あの中に入ってる人が人だから今日は特別さ。なんせ実際の番組で中に入ってるスタントマンと同一人物なんだぜ、強すぎて笑っちまうよ。まあだからこそその高額日当なんだけどな」隣にすわっている、目つきの悪い金髪の男が遠い目で煙草を吸いながら、俺の独り言に答えてくれる。

確か原とかいったっけか、学生のくせに堂々と喫煙して、まあ自分で稼いだ金だろうからなにに使おうと自由だが。

かくいう俺も何時から煙草を吸い始めたかと聞かれたら、言葉を濁すほか無いのである。

実際、萩風に一度聞かれて目をそらした。

「ところでおっさん、いい歳してなんでこんなきついバイトしてんだ？」

「おっさんじゃ無い、まだ俺は……いや、まあそんな歳か。当然金があるんだよ、面倒見てる（見てもらってる）じゃりんこたちを海に連れて行ってやりたくてな。だが数が多いんだわ、そいつら。だからいつそマイクロバスをレンタルしようと思っただが、思ったよりレンタル料が高くてな……」

「へー、何人くらい？」

「二十人くらい」

「は？ 多すぎだろ……あんたそいつらのなんなんだ？ センコーかなんかか？」

「あー……なんなんだろう、しいていうなら野球のコーチだと思うんだが」

「ああ、そういう」

プシュツとプルタブを開けて、缶についた水滴をたらし、冷えた缶コーヒーを飲み始める原。

俺も飲みたくなってきたな、だが我慢。

来る途中に時津風の家の駄菓子屋で買った、二リットル入りのお茶をがぶ飲みする。大変ぬるい、もはや水分補給でしかない。

今日も駄菓子屋の前のベンチで暇そうに座っていた時津風に、どこにいくのかと聞かれたが、海のこととは秘密にしておきたかったのではぐらかした。

すまん時津風、だが男には譲れぬモノがあるんだ。

女子は好きだろ、サプライズ。

「それより原だったか、正直やられつぱなしというのは性に合わん。一発かましてやりたいんだが、協力してくれないか？」

「へえ……あんだだけボコられて、まだそんなこといえんなんて根性あるじゃんか。おもしれえ、聞かせろよ」

まあ、なにか目的が無いとモチベーションが上がらないというのが、一番の理由だけ

どな。



そして始まった午後のイベント。

「オーホッソホ!! 愚昧で愚鈍で愚かな一般大衆どもよ、我らビッグヘッドクオーターズの前に汗水たらして許しを請いながら、ひれ伏しなさい! オーホッソホ、オーホッソホ!! オーホッソホ、オーホッソホ!!」

「フェザーブラツク様だ! なんだか午前の部よりもテンションが高いぞ!」

「フェザーブラツク様だ! 恐らく暑さのせいでテンション無理矢理にでもあげなきややってられないに違いない!!」

「おだまり!!」

若干台本と違う気がしなくも無いが、予定通りに話は進行していく。というか、午前の部にもいた、いい歳したおっさんたちがまたいた。追っかけというヤツなのだろうか、このクソ暑い中で根性あるな。

「そこまでだぜ!!」

「でたわねえ、海面ライダー、嵐!!」

そして現れる海面ライダー。

午前のアクション含め、一番派手に動いてるはずなのに、それを感じさせない演技。装備というか格好的に誰よりも暑いだろうに、役者の中で一番きびきび動いている。さすがプロだな。

「ええい忌々しい!! おまえたち、やっておしまい!!」

フェザーブラック様の指示が飛び、戦闘員たちが飛びかかる。

「嵐巻き起こしてやるぜっ! 見てな!」

そして海面ライダーの技が炸裂し、五人一斉に仕掛けた先陣の戦闘員たちが宙を舞った。

人って飛ぶんだな。(思考迷子)

「おいおっさん、いくぞー!」

目の前の光景を見ても、ひるまない様子の原。

うっただけあってコイツも大概根性あるよな。

「おっさんじゃない!」

先行する原、そのすぐ後ろを追う俺。

接近に気がついた、海面ライダーが構えをとる。

原が「キッー!!」と大声を上げ、注意を向けさせる。

これでいい、これで海面ライダーの意識は完全に原に向いたはずだ。接触まで数メートルというところで、急に原がかがむ。

俺は原の肩に足を乗せ、膝を曲げる。

その瞬間、勢いよく立ち上がる原、タイミングを合わせてジャンプする俺。

消防士が使用する技術の一つに、土台となる相手の手に足を乗せて、上に向かって投げるといふ技がある。相手と自分の力を使い、ハシゴが無い状態でも、素早く建物の高所に移動する為の跳躍技術だ。

これはそれと似たようなモノで、うまくやれば自分の身長より高く、飛び上がる事ができる。

空中からの奇襲、上に投げ飛ばすのは得意なんだろうが、上から来る攻撃にはどう対処する？

そんな思いつきの奇策ではあったが、正直いうと今は超ウルトラミラクル後悔してる。

何故かというと飛びすぎた。

原の立ち上がる勢いが強かったのか、俺のジャンプのタイミングがよすぎたのか。俺は想定より遙かに高い、五メートル程の所まで飛び上がってしまった。

よぎる走馬燈。

なんで俺はこんなことをしたんだろうか。

暑さかな、そうだ、暑さのせいだ。

というか、ヤバイこれ死んだかも。

原が、観客が、フェザーブラック様や、海面ライダーすら驚いているのがわかる。一番驚いてるのは飛んでる本人なんだが。

ええい、こうなりやヤケだ。

俺はそのまま上昇の頂点をつかみ、落下が始まる停滞の一瞬、重力を利用しつつ体の

ひねりを加えて、海面ライダーに向けて滑空する体勢に入る。
必殺のフライングリアット、お見舞いしてやろうじゃないの。

『週刊 艦夢守タウン 今週号37ページ』

その日、私はうだるような暑さの中、駅ビルヘクセンの屋上で開催されていた、ヒーローショーの取材の為に、その場所に訪れた。

その理由は、フェザーブラック役と海面ライダー嵐役、両方の本物が出演するという情報が入ったからだ。

ご存じの方もいると思うが、両役とも艦娘が所属する芸能プロダクション『Big Slope』に所属する艦娘である。

『Big Slope』は喫茶店も運営しているとの都市伝説もあるが、それはまた別の機会にして、今回の記事に出演した役者に関して紹介していこう。

まずはフェザーブラック役の　　（中略）　　

そして今期の主役である、海面ライダー嵐役の　　（中略）　　

やはり本物の動きは素晴らしく、テレビ越しには味わえない迫力を感じることができた。

そんな中、午後の部で起きたアクシデント、いや、あれはむしろサプライズといえるだろう。

一人の悪の戦闘員が、なんと別の戦闘員を踏み台にして、空高く飛び上がり、海面ライダー嵐に滑空攻撃を行ったのである。

私はそれに感動を覚えた。

何故ならそれは、初代海面ライダーが使う必殺技。

ライダーラリアットそのものだったからだ。

高波を使って空高く飛び上がり、一回転をくわえ相手に滑空攻撃を行う、初代海面ライダーを象徴する技。

やや差異はあったが、まさか生で拝める日が来るとは夢にも思わなかった。

しかもそれを、敵である戦闘員が行ったのだ。

この展開に感動しない初代海面ライダーファンはいないだろう。

何故なら確かにバックストーリーとして存在する設定、初代海面ライダーは戦闘員から改造され（中略）つまりそれは、あり得たかも知れないIFストーリー。

かくいう私も、正直に述べるとそれを見て心が震えた。

そしてその後の展開は、更に驚くべきモノだった。

それは初代海面ライダーファンならば、予想できるが信じられないこと。

当然ながら攻撃を受けた、海面ライダー嵐も知っていたのだろう。そう、ライダーリアットには、返し技が存在するのである。

来週号につづく



「おっさん、ほんと大丈夫か？」

「……まあなんとか生きてるよ」

気がつくくとヒーローショーは終わっていた。

正直、海面ライダーに滑空突撃したあとの記憶があやふやだ。

聞くところによると、なにかとんでもない返し技を食らったとか。

観客は大喜びだったみたいだが、運営にはさすがに危なすぎると怒られてしまった。

はい、おっしやるとおりで御座います、いい歳してほんと、なにやってんだよ俺。

だが次があれば是非またこの仕事に応募して欲しいともいわれた。

よかったのやら悪かったのやら。

「結果はまあアレだったけどよ、おもしろかったぜ」

「そりやよかつたな……くそ、首が痛い」

痛む首をさする、多分頭から落ちたなこれ。

日当をもらつてさっさと着替え終えた俺たちは、喫煙室で一服していた。

喫煙室には俺と原以外の姿は無く、ゴウンゴウンと換気扇のまわる音が響いている。

「おっさん誘われてたけど、またこのバイトやるのか？」

「あー、多分今日の日当と蓄えでなんとかなると思うから、これつきりにしたいところだけだな」

「もつたいねえ、おっさん絶対この仕事向いてるぜ」

「そりやどうも……」

原からあんまり嬉しくない称賛を送られていると、喫煙室の扉が開き、清楚な白のワンピースを着た、育ちの良さそうな女が入ってきた。

喫煙所とはまるで縁のなさそうな、どこぞの令嬢のようなその黒髪の美人は、おどおどしながら俺たちの所まで来て一礼する。

「あ、あの、今日はお疲れ様でした。驚きましたけど、すごかったです」

「あつ、どうもつす」

原がすぐに立ち上がって、その女に一礼する。

だれだろう、オペレーターとかスタッフの人かな。
それにしちや原が、やけにかしこまった様子だけど。

「お疲れ様でした」

長いものに巻かれる流れで、俺も立ち上がって挨拶をする。

黒髪の美人は俺に軽く微笑みを返してくれたあと、喫煙所から出ていった。

「さっきの、だれだ?」

「あー、普通はわかんねえか。フェザーブラック様だよ。しかもテレビに出てるマジもんだぜ、たまにこういうイベントにも出演してくれるらしくて、何回かあったことあるんだけどさ。ファンサービスいいよなあ、おまけに腰が低くて、俺らみたいなのにも挨拶してくれるし」

「へ?」

あれがフェザーブラック様?

驚くほど違和感なく高笑いしながら、テンション高いドSオーラ出してたあの?
完全に別人だろ、あれ。

「プロだなあ」

「ああ、プロだぜ」

役者の演技力に驚きつつ、ポケットと煙草を一本吸いきる。

そして二本目を吸い始めたところで、再び喫煙所の扉が開いた。

入ってきたのは外ハネした赤いくせっ毛が印象的な、女子学生の見た目の少女。

勝ち気な瞳に、無駄の無い引き締まった体つきのせいにか、陸上競技が似合いそうないメージだ。

ボーイツシユと少し違う、野性味も備えた雰囲気がある。

そんな健康そうな少女が、何故不健康の象徴であるこの場所に来るのか。

俺の疑問を余所に、少女は機嫌良さそうに笑みを浮かべて、片手をあげて近づいてくる。

はて、どつかで見たことあるような。

「よおー！ おまえら今日なかなかすごかったなー！」

「あつ、アネサンおつかれースツ!!」

先ほどとは違い、バリバリの体育会系の挨拶を返す原。
なんだなんだ。

「ははっ、そんなに畏まるなよ。それよりそっちのがツ——」

そういいかけたところで、俺を見たその少女が、笑顔のまま凍り付いたように固まる。

あ、コイツあれだ、陽炎姉妹の一人だ、確かえーつと。

「よお、嵐風」

「かつ、風はいらねえから!! 嵐だよ!!」

ああ、そうだったそうだった。

陽炎姉妹は名前の後ろに風がついてるのが多いせいか、ごつちやになってたわ。

「なんでこんな所にいるか知らんが、駄目だぞ喫煙所なんかに入つて来ちゃ。未成年のうちから煙草吸うなんて馬鹿がすることだからな」

「は? おっさんなにいってんだ、この人は——イツデエ!!」

原がしゃべり終わるよりも早く、一瞬で距離を詰めてきた嵐。

途中で原の足でも踏んだのか、原が叫び声を上げた。

「そ、それにしても奇遇だなアニキ!! えっと、その……ひ、昼飯食ったか!」

「ん、いや、暑さで吐くかもしれないから食つてないが……それより原が——」

「な、なら食いにいこうぜ!! 丁度ヘクセンの飲食フロアも近いし、なっ、なっ!」

「そりや構わんが、原があ!」

よっぽど腹が減つてたのか、慌てるように俺の手を掴んで歩き出す嵐。

後ろでは原が足先を抱えて、ピョンピョン跳びはねている。

まあ、縁があればまた会うこともあるだろうな

それにしても、相変わらず君ら姉妹は力強いな。



フードコートでホットドッグなんかを軽く食ったあと、何故か俺たちは水着売り場にいた。

話せば長い訳が……いや、短いな。

「うーん、色々あるんだな。あつ、こういうのはどうだ!？」

嵐が食い込みの激しいブーメラントタイプの、男性水着を手に持ってすすめてくる。

なにその、ピッチピチしたやつ。

「いや、俺みたいな貧相な体でそんなの無理だつて」

別の意味でも無理だつて。

「そうかあ？ アニキ結構いい体してるって不知火ねえがいつてたから、似合うと思うんだけどなあ」

陽炎ネットワークに広まるデマ。

間違った情報が拡散することもあるようだ、というか俺の個人情報流れすぎだろ。

ぶつぶつといいながら、その水着を戻して別の水着を物色し始める嵐。

ふーむ、正直バミューダタイプで安けりやなんでもいいんだが。

というのも、実は持っていた水着をこの前なくしてしまったのである。

正確には誰かに持っていていかれたというべきか。

不知火のジムのプールから上がって着替え、荷物（水着だけ）を置いたままトイレにいき、不知火と駄弁ったあとに戻ってきたら、水着が無くなっていた。

盗まれたのかと思ったが、水着が入れてあったビニール袋の中には、万札が三枚。

多分大急ぎでバミューダタイプの水着（ジムには競泳用しか売ってない）が必要な誰かが、持っていていったんだろう。

勝手に持っていていかれたことには思うところがないでもないが、さすがに万札三枚も置いていかれては許さざるをえまい。

というか許す。

が、となると海に行くこともあって、新しい水着が必要になった。

そのことを飯を食いながら話していたら、なんとなく水着を買いに行く流れに。

「まあ別に男の水着なんてなんでもいいんだよ、それよりおまえは水着持つてるのか？」

「へ、オレ？ あー、どうだったかな……多分五年位前に萩や舞やのわっちと一緒に買った、昔のヤツがあると思うけど……」

（※嵐は萩風のことを萩、舞風のことを舞と呼びます、のわっちは野分のこと）

五年で、五年で。

「おまえぐらいの歳で五年前とか、どう考えても成長期挟んでるだろ。そんな昔の水着

なら、今とサイズ全然違ってるんじゃないののか？」

最近の学生は、授業で水泳とかやらないのだろうか。

いや、内地と外地でカリキュラムが違うのかも知れん。

しかしそうなると、水着を持ってない子もいるかもな。

一応陽炎に相談しとくか、場合によってはその費用も必要になる。

やはりもう一回位バイトするべきだろうか。

そして何故か気まずそうに、目をそらしている嵐。

どうしたどうした。

「じゃ、じゃあせつかくだし、新しいの買うかなー！」

「それがいいとおもうけどな、ああそうだ、ついでだし一緒に買っちゃおうか」

「えええ！ いやいやいや、さすがに悪いって!!」

「気にするな、ついでだ、ついで」

恐縮してる嵐の手を引き、女性用水着売り場に移動する。

俺一人なら冷たい目で見られる場所だが、嵐と一緒になら大丈夫だろう。

「さあ、好きなもの選ぶといい」

「い、いいのよ……じゃ、じゃあこういうの」

そういつて遠慮がちに嵐が手に取ったのは、変哲もない紺の競泳水着。

ええんか、それで。

「おまえらの年頃なら、もつとおしやれなヤツとかの方がいいんじゃないのか？　こういうのとか」

マネキンに着せられた、赤いビキニタイプの水着を指さす。

さすがに過激すぎるだろうかと思わなくもないが、まあ、夏だしな。

「ばっ！　こ、こんな派手なヤツ着られるか！　浜風（風評被害）や親潮（審議中）や天津風（満場一致）じゃあるまいし！！　そ、それにオレ、萩みたいにかわいくないし、こんなを着てもにあわねえって……」

真つ赤になって拒否の声を上げる嵐。

まあ確かに派手だが。

「似合うと思うんだけどなあ。ほら、嵐の髪と色がいつしよだし」

「ふえ!？」

今なら顔の色とも一緒だけどな。

というか、さすがにデリカシーが足らなすぎただろうか。

真つ赤になってうつむく嵐を見ると、微妙に罪悪感が。

「あ、あのさ提督。ほ、ほんとにそれオレに似合うかな？」

「ん、ああ、正直直感で選んだけど、実際悪くないと思うぞ」

短いアニキ期間が終わり、提督呼びになってしまった。

陽炎たちのこの呼び方変化のスイッチはなんなんだろう、謎が深まる。

「そ、そうか？ えへ、えへへへへ」

照れた表情を浮かべながら頬をかく嵐。

かわいいなオイ。

萩風なんかと比べると、確かに女の子らしくないのかも知れんが、はねつ毛を揺らしながら照れるその様子には、年相応の可愛さがあるような気がする。

あと男勝りな普段との様子と、今みたいな恥ずかしがってもじもじする感じのギャップというのも、これまた男心をくすぐるような……なんだかオヤジっぽいな、俺。

しかしなんだな、女の子と水着を買いに来て一緒に選ぶとか、学生時代にやりたかったイベントだな、ほんと。

なんてことを考えていたら、嵐は「じゃあ買ってくる!!」と、マネキンごと抱えて走り出そうとしたので、慌てて止める。

おちつけ、それは展示用だ。

それにサイズとかあるだろうし、ちゃんと試着しろ。



夕焼けに染まった駅ビル前の通りを、嵐と並んで歩く。

あれから色々とおつたが、なんとかお互い無事に水着を買うことができた。

昼飯が軽すぎたので、帰りにラーメンでも食って帰るかなとこぼしたら、嵐が遠慮がちに一緒にいきたいとせがんできたので、今はラーメン屋に向かっているとこである。

よきかなよきかな。

黒潮にラーメンを初めて奢ったあの頃は、もう過去のこと。

今ではすっかり陽炎姉妹に飯を奢ってやることに、色んな意味で抵抗がなくなつてしまった。

むしろダラダラと草野球の審判してるだけで入ってくる収入を、少しでも陽炎姉妹に還元しなければという使命感のようなものが芽生えつつある。

「そーいや今日のヒーローショーで飛んでた戦闘員、あれ提督だろ？ あんな技どこで覚えたんだ？」

「見てたのか……しかしどこだったっけかな。昔見たなんかの番組だったか……いや、ああいうのが得意な知り合いに教えて貰ったような記憶も……」

もはや内地に来て幾星霜、過去の記憶がとてもおぼろげである。

ほんと、歳はとりたくないものだ。

なんて考えながら歩いていると、突然嵐が足を止めて、沈む夕日を見つめはじめた。「夕焼け綺麗だよな……あれ、夕焼けボケつとみてたら、なんか、泣けてきた。あ、あれ？」

「おいおい、大丈夫か？」

ああそうか、コイツもなんだかんだで色んな物を背負ってそうな、陽炎姉妹の一人だったな。

きつと夕日を見て色々とあふれ出してしまったのか。

目を擦る嵐の頭後ろから手をやって、ゴシゴシと撫でてやる。

くせつ毛の手触りが妙に気持ちいい。

「……わりい提督、なんか今までのこととか今日のこととか、色々思い出しちまって」「いいんだよ」

今は色々も辛いこともあるだろうけどな、時がたてば色々変わるさ。

悩めよ若人、これから辛いことも沢山あるだろうが、いいことだって沢山ある。

夕焼けを眺めながら、俺は嵐が泣き止むまで頭を撫で続けた。

オマケ — 陽炎会議録NO. 4 —

(※NO. は掲載順の番号となり、時系列とは一致しません)

薄暗い部屋、円卓を囲む二十人近い少女らしい者たちがいた。

らしいというのは、何故か全員顔を隠すための尖った白い被り物をかぶっていて、その顔がよくわからないからだ。

そして被り物の額部分にはそれぞれ番号が振ってある。

あと因みに時間軸的には今回の話の翌日である。

「はい、というわけで、今回集まって貰ったのは緊急の議題、提督の水着が何者かに盗まれました事件についてになりまーす」

その中で『1』と額に書かれた数字の被り物をかぶった少女が、被り物の上からでも感じることでできる、やさぐれ不機嫌オーラを放出しながら議題を提示する。

「16番の報告によると、2番のジムで提督の水着が盗まれたらしいわ。ちゃんと対価

は払われていたみたいだけど、だからといって私たちの提督の物を私物化するなんてうらやま……じゃなくて、勝手に私物化するなんていうのは許されないことよねえ」

神妙な顔（被り物で見えない）で頷くメンバーたち。

あ、でもなんだか気配が怪しいのが何人かいる気がしなくもない。

「当然そんなことはないと思うけど、私たちの中に犯人がいる可能性はあると思うかしら？」

『1』の少女がちらりと、『2』の少女を見る。

「待ってください、不知火にはその時、提督と話をしていたという完璧なアリバイがありますー！」

「いや2番、隠して隠して、名前出しちゃってるから」

勢いよく立ち上がった『2』の少女の袖を、『1』の少女が慌てて掴んで座らせる。

「そうはいうてもなあ、複数犯という可能性もあらへん？　そもそも2番はんは自分のテリトリーで起きた失態に関して、思うことはないん？」

「どういうことですか黒潮、不知火になにか落ち度でも？」

「だから名前ー！」

ニヤニヤした顔（だから被り物で見えないってば）で、『3』の少女が『2』の少女を見る。

再び立ち上がろうとした『2』の少女の袖を、『1』の少女がこれまた慌てて掴んで座らせる。

上の姉二人の様子に、思ったより大事になったやべえと汗を流す誰かたち。

「まあ、そう波風を立てることもないだろう、この中には長く提督に会えず色々溜まってしまつてる者もいるだろうからな。そうだろ……13番?」

「きつ、聞き捨てなりませんね12番! 9番じゃあるまいし、そもそも貴方だつて同じでしょう!」

「ちよつと13番、なんで私が——」

「ふつ、提督はこの12番の家に来てちよくちよく休んでいく、当然風呂もつかう。なあ

13番、風呂場では服を脱ぐ、この意味がわかるか?」

「なっ!? 貴方もしかして提督の下着を……」（鼻血がたれてますよ）

「洗った!! つまりこの磯風には今更水着など、どうというものではない!!」

ドドーン!! という擬音がバツクに出てきそうなどや顔を決める、名前を隠し忘れた12番。

衝撃を受ける13番と、幾人か。

衝撃を受けていない幾人かの内の一人は、泊まりで手伝って貰ったときに、提督が仮眠をとったベッドで残り香を嗅ぎながら、毎日幸せに包まれている19番。

しかも妄想具現化（漫画化）で色々と補完ができることから、余裕の表情を崩していない!!

さすが修羅場を抜けた先生は強い、新刊二部下さい。

「ねえ17番、そういえばこの前カレー作ってくれたとき、やけに古ぼけたスプーン使ってたけど、もしかしてアレって……」

「今度使わせて上げるから今はちよつと静かにしてて18番」（ワンブレス早口）

「ねえ13番、もう一回聞くけどなんで私が——」

「提督今度は何時、未確認生物探しに連れていってくれるんだろ……」

「あつ、今度は10番も一緒にいくからね——」

一気にガヤガヤと騒がしくなる室内。

「静かにしなさい」

ぴしやりと響き渡る『1』の少女の声。

一瞬でしんと静かになる室内、さすが長姉。

「まあ今回のことは大目に見ましよう、但し今後は提督に不安を与えるような行動は慎むように。それよりも、よ」

どこぞのグラサン基地司令のポーズをとる、『1』の少女。ただならぬその気配に、注目が集まる。

「あんなたち……提督が好きそうな水着……ちゃんと用意してあるの?」

その言葉に、先ほどとは比にならない衝撃が室内に走った。

発言者の長姉以外で衝撃を受けていないのは、普段から水着姿を晒している『2』の少女と、今回提督直々に水着を選んで貰った『16』の少女だけだ。

「わかっているとと思うけど、提督が海に連れていつてくれるイベントが迫ってるわ。この機会を逃さずしっかりと私たちの魅力を伝える為には、各自本気で勝負水着を用意しなさい。大丈夫、私のプライベートビーチを準備したから、他人の目を気にする必要はないわ」

先ほどまでの争いはどこへやら、一瞬にして誰もがどんな水着を着ればいいだろうと、お互いの長所を出し合い、相談を始める。

特に『2』の少女と、『16』の少女の周りには、メンバーが集まりあーでもないこーでもないと盛んに意見が交わされた。

さすが姉妹駆逐艦、不測の事態には気持ちは切り替え、瞬時に連携をとれる。

「夏だろうと冬だろうと、海は私たちの独壇場よ。ふふふ、楽しみじゃない……あんなたち、気合い入れていくわよ!!」

「了解!!」

誰もが一夏のアバンチュールを妄想しながら、ヨダレを拭いつつ返事をする。
薄暗い室内にその声はとてよく響いた。

『運転手』と『駆逐艦：春風』

何事にも終わりはある。

『ツー、ツー、ツー、メッセージをどうぞ——…：貴方、短い間でしたがお世話になりました、離婚届にサインしておきましたので出しておいてください。慰謝料はいりません。そういう訳で、これ以上お話しすることもありません、じゃあ、さようなら』

妻だった女性からの留守番電話で、私の人生は終わった。

出世の為の見合い結婚で、彼女が私との生活に退屈していることは知っていた。

それでも私なりに精一杯やって来たつもりだったが、こうもあつさりと終わることになるとは。

外地の政治家の秘書の下の下、更に見習いのようなものだった私は、ある日唐突に職を失った。

一番上の政治家の先生が憲兵、しかも千鬼衆に引つ張られるようなことに手を出した

からだ。

綺麗な政治家などというものが、欠片も信用出来ないのは確かだ。

だが、喧嘩を売る相手を間違うような政治家もまた信用できない。

幸いほぼ無関係だった私は、事情聴取のみで釈放された。

だが世間の目は厳しく、再就職先の当ても当然無かった。

親の言うことを素直に聞き、親に言われた相手と結婚し、いつだって人に言われたことしかやってこなかった我の薄い人間、それが私だ。

そんな自分の欲望がない私のような人間が、政治家やその秘書としてやっていける器ではないと、薄々気がついていた。

それでも運転手としてぐらいなら、なんとかやっていけるだろうと甘い考えがあったのだが、やはり人生はそう甘くない。

そんなこんなで私は、弟に家督を継がせるからと、家族の縁を切られて故郷から追い出された。

そして非合法的な港の荷下ろしや、慣れない荒事の手伝いなどで小銭を稼ぎながら落ちるところまで落ち、長い放浪の末『艦夢守市』という街にたどり着く。

艦連指定都市である『艦夢守市』は、出入りは普通だが、定住すると意外と難しい。

住所もなくホームレス同然の生活をしていた私は、そのうちしよつ引かれるのも覚悟していたが、その頃になるともう何もかもがどうでもよくなっていた。

その日、酒代もなくなり、いよいよよかつぱらいにでも手を染めようかと考えながら、夜明け前の繁華街をさまよっていた時のことだ。

道に落ちていた財布をみつけた私は、ぎつしりと詰まった中身を見て、そのまま懐に入れようとした。

だが、この金があつたところで、またしばらく今の生活が続くだけだと気がついた。そしてこんな暮らしを続けることに意味などあるのか、そう思うと無性に虚しくなつてしまった。

ならばいつそ終わらせよう。

そう思った私は、その財布の中にあつた住所、そこに向かい、店舗兼住宅と思われるビルの裏口に回つて、ポストに財布を投げ込んだ。

もう随分と味わつていなかつた清々しい気持ち。

それを抱えながら、さてどこで首をくくつたものかと、当てもなく歩き出した瞬間。

「ちよつと、あんた待ちなさいよ」

振り向くと、オールバックの髪型に短めの口髭の、バーテンの服を着た巨漢の美中年が立っていた。口ぶりからしてあちらの人間なのだろうか。

そのバーテンらしき男は、財布の中身を確認すると、何もいわずに私をひつつかんで閉店後の店に連れ込み、カウンターに座らせた。

「少し待ってなさい」

そういつて、バーテンの男はどこかに行ってしまった。

私は何が何だかわからず、呆然としてしまう。

しばらくして、バーテンの男が何かを持って戻ってきた。

手に持っていたのは味噌汁にご飯、漬け物に焼き鯖という、典型的な朝食。

「ほら、お礼よ。たべなさい」

もう、一生縁の無いだろうと思っていた、温かい香りが私の鼻に届く。

何故かあふれ出してしまった涙、私はそれを拭うことなく味噌汁をすする。

合わせ味噌に、丁寧に出汁が取られた、優しさに溢れた味、私のために作られた料理。

あの味噌汁の味を、私は生涯忘れることはないだろう。

私を拾ったバーのマスターの名前は、上堂菌さんというらしく。

彼はそんな私の前で、何もいわずにグラスを磨き続けていた。

その後、上堂菌さんは秘書時代に運転手経験があるならと、艦夢守市にあるタクシー

会社の仕事を紹介してくれた。

更には身元保証人にもなってくれ、住む場所まで用意してくれた。

私がこの恩は必ず返すと申し出ると、上堂園さんは
「いらぬわよ」

と、ばつさりと断ったあと

「どうせならこの街でまた一からやり直しなさい、そして好きなように生きたら良いわ。
それこそ誰の意志でもない、あんたの意志でね」

そう続けた。

『運転手』と『駆逐艦：春風』

つまり、私が今こうして公園のベンチで昼寝していたのは、そういう訳なのだ。
くれぐれも、決して、誓って仕事をさぼっているわけではない。

「それはサボリというものではないのですか？」

「断じて違います」

いや、真面目に、昨今の燃料高騰で、無駄に流す余裕はタクシー会社にはないのだ。
 (※流す↓走りながら客を探すこと)

主に仕事は夜、路面電車が止まってからが稼ぎ時となるため、私以外のタクシー運転手もちよいちよいとこうやって休息を取ることが多い。

「うふふ、ではそういうことにしておきましょうか」

「なんですかその目は……」

私の隣に座って、ニコニコと笑みを浮かべている少女。

桜色の着物に小豆色の袴を着こなし、赤いリボンで括られ綺麗にカールされた弁柄色べんがらいろの髪。

リボンと同じ色の日傘を差しながら優雅に笑うその姿は、育ちの良さそうな女学生そのもの。

そんな彼女に声を掛けられたのが少し前。

ベンチで休憩を兼ねた昼寝をしていた時のことだ。

『ご機嫌よう。今日は良い天気ですね』

そういいながら私を朱色の瞳で、のぞき込んできた彼女。

その可憐な姿と相まって、一瞬春の精霊か何かに見えてしまった。

公園前に駐めた自分の車が見えなければ、ここが天国か桃源郷だと思つてしまつたらう。

自分よりも二回り以上は年下に見える彼女が今、日差しから私を守るように日傘を少し高めに掲げてくれている。

いつの間にやら太陽の位置が移動していたのか、木陰だったベンチには、春の訪れを感じさせる柔らかな日差しが降り注いでいた。

日中の公園には私たちの他には誰もおらず、噴水から噴き出した水が、ジャバジャバと涼しげな音を立てているのがよく聞こえる。

「ところでその、私に何かご用でしょうか？」

私はハンカチを取りだして汗を拭きながら、今更なことを少女に問いかけた。

「ふふつ、日射しの中で寝苦しそうにされていましたので。それが気になり思わず声を掛けてしまいました」

「あつ……いや、それはどうもすみません」

思い返せば確かに、日光に長時間当たっていたせいか、気温の割に汗をかいていた理

由を今更ながら理解してしまい、恥ずかしくなる。

「ですが……そうですね、よろしければ連れて行っていただきたい場所があるのですが」
気を遣わせてしまったのか、そんな私を見て彼女は雅な動作で立ち上がり、小豆色の袴をはためかせながら振り返る。

立ち上がった彼女の身長は小柄で、ヒールのついたブーツを履いているにもかかわらず、私の胸元ほどの高さだ。

だが、背筋をしゃんと伸ばして立っているからか、実際より高く見えた。

「じつはわたくし、この街に来たばかりなのです。ですので、よろしければこの街をご案内いただけますか？」

「それなら、すぐそこに交番がありますが……」

「そう意地悪をおっしゃらずに、それにお見受けしたところ、お仕事はタクシートの運転手をされているのでしょうか？ ふふ、ほら、お仕事お仕事」

そういつて、日傘をまわしながら微笑む彼女。

未成年のようだが保護者は、どうか金はあるのか、ついでに昼飯もまだなのに。

そんなことが浮かんでは消えてゆく。

だが結局、私は彼女のその微笑みにおされて、街を案内することになった。



「ここがこの街の主要港なのですわ」

「正確には客船ターミナル港、そこから延びる観光客向けの通りですわ。この倉庫に見える建物の中には、ホテルの他に特産品などを扱う土産物屋、飲食店や屋台なんかがあります」

今、私たちの目の前には、赤いレンガで造られた大型倉庫が建ち並んでいる。

ここは艦夢守市に來航する客船が停泊する港、そこに最も近い商業施設だ。

過去の頑丈な大型倉庫を改装し、來港者向けの宿泊施設、その宿泊者目当ての飲食店や土産物屋を収容できる区画として改造されたこの場所は、どこも賑わっていた。

余談だが、港を含めこの区画全域は、代々艦娘が経営する会社……というか組織によつて運営されている。

当然のことだが、その組織の縄張りで不法に荷下ろしなどをした場合、大変優秀な従業員（オブラートな表現）によつて大変ひどい目に遭う、身をもつて学んだことなので間違いない。

「えっと、あの遠くに見えるあそこが艦夢守市、艦連軍の基地ですよ」

気を取り直して、この国最大の艦連軍の拠点、艦夢守市艦連軍基地を指さす。

近隣の航海の安全確保や、有事の際の迅速な展開は元より。

地元の市政や企業とも協力関係を結んでおり、経済的な効果も大きい。

艦娘と憲兵が常に駐屯しているあの基地の存在こそが、艦連指定都市たる、最大の理由の一つだろう。

「そうなのですね……あつ、あちらで売られているものは何でしょうか？」

そういつて彼女は歩き出し、ちらりと振り返つては、私を急かすように日傘をくるくると回す。

まあ、確かに女性は軍事基地より、おしゃれな小物や美味しい食べ物の方が好きなのだろう。

しかし、誰かところやつて歩くのはいつぶりだろうか。

観光客の案内をすることはあったが、こうやって誰かと一緒に店を回るというのは、もう随分と久しぶりに思える。

いや、彼女もいかなければ客ではあるのだが、どこかそう思いきれない自分がいた。

何を考えているのか、こんな枯れた男が、何を——

「あの、どうかなさいましたか？」

「ああ、すみません」

私とは違い、一瞬一瞬が輝くように楽しそうな様子の彼女。

彼女といること、自分が価値のあるような人間に思える。きつとそんな間違ったことを、考えてしまったのだろう。

それから昼過ぎまで、私たちはあちこちの店を見て回った。



「この店は艦娘の方が店長として、腕をふるってらっしゃること、有名ですね。ランチタイムも十五時までと長く、値段も手頃でありがたいんですよ」
「そうなのですね」

石造りの壁に高い天井、温暖な気候特有の建物の店内を、物珍しそうに見まわす彼女。ここはこの街でそこそこ有名な飲食店、ジェノヴァ料理店『マエストラーレ』だ。

先ほどの場所で何か食べてもよかったのだが、私が普段昼食を取る場所で食べたいとの彼女の希望で、この店に来ることになった。

ふと、色白でプラチナブロンドの長い髪の女性の姿が目に入る。

映画にでも出てきそうな美しい女性だが、店員になって日が浅いのか、少し慣れなそうに別の席の注文を取っていた。

「コホン………そういえば先ほどの、ばいく………というのでしょうか、すごい音でしたね」

「えっ？ ええ、確かそう遠くない場所にKUREというサーキット場があるので、その関係のデモンストレーションだった可能性がありますね」

この店に来る途中、謎の渋滞につかまり、直線道路をものすごい勢いで駆け抜けてゆくバイクを目にした。

先頭を走るバイクは後ろに子供を乗せているようにも見えたが、さすがに見間違いだろう。

「そのサーキットでは年に何回か、大きなレースの大会がありますので。それに関する宣伝か何かだったのかもしれませんが」

「あら、物知りですね」

「まあ、この街に住み始めてそこそこ長いものですか——」

「ちわあーっ！ MIKA WAWA でーっす！」

(※MIKAWAWA↓戦史前記録媒体より見つかった、有名な酒屋の名称)

突然、私の声をかき消すほどの大きな声が入り口から聞こえてくる。

見ると、何故かガスマスクをかぶった男が、ワインのケースを担ぎながらポーズを取っていた。

店内の客たちが唖然とする中、厨房の方からバタバタと誰かが走ってくる。

「こちらカーサジュニア！ 配達のときは裏口からきなさいっていつてるでしょー！ 正

面から堂々としてきちや駄目だよ！」

「だが断る」

「断つちや駄目——！」

店の奥から現れたのは、長い亜麻色の髪を左右でくくった幼い少女。

少女は、ぶんすかという文字が見えそうな様子で、ガスマスクの男を怒っている。

むしろ幼女にしか見えない姿だが、確か彼女がこの店のオーナーの艦娘だったはずだ。

「ああつ！ 私に会いに来てくれたのね モン・ブーロー」

そんな二人……いや、ガスマスクの男に駆け寄る、先ほどの美しい女性の店員。

だがガスマスクの男は見たこともない不思議な動きで、駆け寄ってきた女性の店員を華麗にかわす。

「こら新入り!! 勘違いして突っ込んできた時に壊した店の備品の弁償を、この店で働いた給金で返すまでは、カーサジュニアと会うのは禁止って言ったでしょ!!」

「おあいにくさま! 私たちの燃えさかる愛の前では、意地悪な小姑のいびりなんてぶええ!!」

ガスマスクの男にかわされながらも華麗に体勢を整え、オーナーに向かって喋っていた店員の女性が、突然空中に舞い上がった。

唾然とする、いや、さつきからしっぱなしの店内。

彼女たち以外で動いているのは、何故かオーナーの後ろでポーズを決めながら、ゴゴゴゴという効果音を、無駄に高いクオリティーの肉声で発し続けるガスマスクの男だけだ。

「おツ、おかしいのよア、ナ、タ！ 何で駆逐艦なのに戦艦であるリシユリユーより強いのだよ!? そもそも片手で私を壁に叩き付けて、店を穴だらけにしたのはぶふえ!? またぶつたわね！ もうこうなったら容赦しないわよ！」

「だからあ、それも含めてこれはフアミリーの一員になる為に必要なことなのに……ああもう、こうなったらリベも本気で行くよー！」

何故か始まる艦娘同士の戦い、そして戦う黄金とかなんとかいう内容を歌い始める、ガスマスクの男。

呆然としていた店内だったが、いつしかやたらとうまいその歌と、闘牛ショーのような迫力溢れる戦いを前に、盛り上がり始める。

私はちらりと、同じテーブルの席に座る彼女を見る。

彼女もまた、そんな様子を口に手を当てながら笑いつつ眺めていた。



ジェノヴァ料理店『マエストラーレ』で（無料になった）昼食を取った後に向かったのは、この街で最も有名な場所の一つである、戦史時代博物館だった。

この博物館には主に、深海棲艦発生と対深海棲艦戦争の終戦までの期間を指す、戦史時代に関する資料や美術品が展示されている。

何度か来たことがあったので、私が先導しながら歩くと、彼女は三步下がって私の後ろから着いてくる。

あまり褒められたものでは無いとわかっているのだが、正直に言うと彼女が歩く姿を後ろから見たかった。

歩きたびに揺れる、カールされた弁柄色べんがらいろの髪とリボンがとても美しく、ずっとそれを見ていたい思いに駆られるのだ。

だが、彼女は自身の心情というより、男性の影を踏むのは失礼にあたるとでも躰を受けているか、基本的に私の後ろを着いて歩くことに、特に疑問を持ってはいないようだった。

そんな感じで、建物内に展示されている、当時の貴重な写真や深海棲艦の姿を復元した模型などを、ゆつくりと見て回っていると、ホールの中央に展示されていた壁像が目についた。

この壁像は、確か戦後何年だったかを記念して、本物の贋作師と称された、艦連お抱えの芸術家である『ひまわり』が彫ったものだったはずだ。

彫られているのは海の中を泳ぎ回る、美しい艦娘たちの姿。

「これが、見たかったのです……」

彼女は静かに眩き、壁像を静かな瞳で見つめる。

そして軽く顔を伏せて、黙祷するように目を閉じた。

『ひまわり』の作品は、この壁像の前と後で、印象ががらりと変わる。

この作品以前は、強烈なまでの孤独を叩き付けてくるような作品だが、この作品以降は優しさに溢れた印象を与えるものになったらしい。

昔、ここのパンフレットが何かで読んだ受け売りではあるが。

確かこの壁像のタイトルは——

「タイトルは『別れ』……名前と違って、凄く温かい気持ちになりますね」

「そうですね……どういう意味でそんな名前をつけたのでしょうか」

この作品の印象のような、穏やかな別れなど存在するのだろうか。

別れというものは、常に冷たく孤独なものはずだが。

だが、その反対の言葉が『出会い』であるなら……

「あら、何か思われることがあるのですか？」

「いえ、何といたしますか……『出会い』というタイトルであるなら、この作品の印象も頷けるような気もするのですが」

さようなら。

唐突に妻だった女性の、最後の言葉を思い出す。

「ですが、結局は同じなのかも知れません。人と出会えば別れがあります。私はその、別れというものが苦手です。大したことのない人生でしたが、別れだけは人一倍ひどいものを経験してきましたので……はは、何をいつてるのやら」

人と出会えばそれだけ悲しい経験をやる可能性が増える。

そうなのだ、私の人生を一言で表すのなら「さようなら」だった。

中年の男がこぼす、情けない過去の吐露。

彼女はそんな私を嫌な顔もせず、穏やかな瞳で見つめてくれていた。



「今日はありがとうございました、おかげで決心ができました」

最後の目的地として彼女が指定したのは、最初に私と出会った場所である公園だった。

彼女は夕焼けに染まる街を見ながら、そう口にする。

「は？ 決心……ですか？」

「はい。じつはわたくし、ずっと迷っていたのです。故郷を離れてこの街に住むかどうかを」

彼女は夕日に背を向けて、私を見つめる。

そのうるんだ瞳を見て、思わず胸が高鳴った。

「そうだったのですか、えっと、よろしければ理由を伺っても？」

「それは……わたくしの大切な方が住むこの街、この場所で生きる意味を見いだせたからですわ」

どこか儂げな笑顔。

その表情に、私は高鳴っていた胸が、何故か締め付けられるのを感じた。

「その、お相手とは……」

「恥ずかしながらその、まだお名前も存じません。とは申しても、名前も住所も調べればきつとわかるのでしようが、その方にお相手がいらっしゃったり、家庭があるのなら……難しいと思われそうです」

彼女は普通とは違う、辛い恋をしている。

そういう不安が伝わるような言葉。

「でも、もしそうなら……それで良いのです。もし、わたくしのことを受け入れていただけなくても、その人が幸せに暮らせているのなら、わたくしはそれで良いと思つています。

わたくしはただ、もしこの街に住んでいけば、もしかしたら数年に一度だけでも、街ですれ違うことがあるかもしれません。そんな可能性が少しでもあるのなら、たつたそれだけで、この街に住む一日いちにちがとても尊く思えますので」

忍ぶ恋、とても言うのだろうか。

彼女が紡ぐその想いを、私は呆然としながら聞く。

「それにこの街にいれば、その方が吐く息を吸うこともあるかもしれませんが、わたくしが吐いた息もその方が吸ってくれるかもしれません。その方と同じものをやりとりしているという、そう思うだけで嬉しい気持ちになれると思います。

雨が降れば、その人と同じ雨に濡れて、青空を見上げればその方と同じ空を見上げることができる。夜景を見ればこの中の光の一つが、その方の家の窓の光なんだって、そう思えるだけで、わたくしは幸せになれるのです」

古風、下手をすれば田舎者と言われても可笑しくないような、誰かを第一に考える価値観。

だが私は、それをどうしても笑い飛ばしてしまうことができない。

「故郷に帰れば、きつとそれは感じられません。自分の生まれた場所ではあるのですが、そこにはそれがありません。だから、わたくしはこの街に住むことに決めました」

それを聞いて私は、不覚にも涙を流しそうになった。

自分に、そんな感情があるとは思わなかった。

子供の妄言で、成長すれば消える、若きからくる青い純情。

そんな物をいつまでも抱えて、生きていけるはずがない。

頭ではそう思っていたのだが、心のどこか、自分には存在しないと思っていたはずの場所が。

彼女が見ているその世界を、とても美しい、それはとてももうらやましいと。

そう心が叫んでいた。

「今日はありがとうございました。ご縁があれば、またお会いいたしましょう」

「……ええ、そうですね。貴方の言葉を少しお借りするなら、数年に一度くらいは、私が運転するタクシーを貴方が止めてくれるかも知れません」

私の言葉を聞き、彼女は少しだけ驚いたように目を開き、そしてまた微笑む。

「春風と申します、わたくしの名前です。もしまたお会いできたなら、そう呼びくださいませ」

「ええ、必ず……では、さようなら」

そして私は、彼女と別れた。

たった一日だけの、客として出会っただけの女性。

だというのに何故か、彼女……春風さんと別れたその時。

妻だった女性からの留守番電話を聞いた時よりも、寂しい気持ちになった。

やはり、私の日々には「さようなら」が多い。



一週間後。

今日が休日と言うこともあり、朝まで上堂園さんのバーで飲んでいた私は、ボロアパートの扉を叩く音で目を覚ました。

誰だろうか、この部屋を訪ねてくるような人間に心当たりはない。

さては隣に住んでいるホストが、朝帰りで酔っ払って部屋を間違えているのか。

いや、そもそもこのアパートには鍵が掛らないので（正確には掛けても振動で外れる）、ノックなんてしないはずだ。

私はしびしび、申し訳程度に身だしなみを整え、ドアを開ける。

そこに居たのは、見覚えのある弁柄色べんがらいろの髪髪の少女。

「は、春風さん!？」

いや、何故彼女がここに？

「御機嫌よう。本日は風が気持ち良いのです。よろしければ春風を感じに、お出掛けしませんか？ 少しハイカラにサンドウィッチもご用意してみましたの、ふふっ」

驚く私を余所に、そういつてランドバスケットを掲げる春風さん。

優しく微笑むその顔を見て、心に浮かんでいた疑問が消え去ってしまう。

そして代わりに浮かんできたのは――

彼女にまた会えて嬉しい……そんな気持ち。

「あの、わたくしの顔に何か……ああ、花びらですか？ うふふ、風流ですね」

呆然と見つめる私の姿を不思議に思ったのか。

彼女は髪についていた桜の花びらを手に取り、恥ずかしそうに微笑む。

その笑顔に、私は年甲斐もなく胸が高鳴った。

物事には終わりがある。

そして、終わりが来ればまた、始まりもある。

別れがあれば、出会いもあるように。

私の第二の人生、その始まりがいつだったかはわからない。

だがその時、既に私の第二の人生が始まっていたということを知るのは。

——
もう少し先の話である。

『幼馴染』と『重巡：最上』

重巡の艦娘である『最上』^{もがみ}は飛んだ。

自室で布団にくるまるまって眠っていた、彼にめがけて。

「おはよう提督！」

「ぎゃひんー！」

元氣よく飛び込んだせいか、最上のおでこ彼のおでこがごつつんこ。

寝起きに頭突きを食らった最上の提督である彼は、その衝撃と痛みで目を覚ます。

「ぐぐおとおお……も、もがみいいいいいん！」

「あいたたた……ごめんごめん提督、ボク、ちよつと他の艦とよくブツかつちやう癖があるんだけど、なんでだろう？」

赤くなつた彼のおでこをさすりながら、最上は自分のおでこもさすりつつ、ペロりと舌を出す。

「うぐぐぐぐ……もがみんや、それ毎回いつてるけど、おれ以外の物や誰かにぶつかったところ、この二十二年で一回も見たことないぞ」

「そうだったけ？」

彼は己の腹の上に馬乗りになっている最上を見上げながら、あきらめ気味な口調で呟く。

浅黒い肌に、少しだけハネがついたショートカットの黒髪。

改めてじっくり見る、幼馴染みであり彼の艦娘でもある最上の姿。

ごめんごめんといいいながら舌を出して笑う、すつきりとした顔立ちの笑顔はとても柔らかく。

中性的でありながらも、ちゃんと女性らしい愛嬌がにじみ出っていて、正直とてもかわいいい。

さらに視線を下に移す。

胸の大きさは控えめで、成長の余地はたぶんもう無い。

が、実際の所、絶壁というわけでも無い。

なぜ知っているかという点、以前というかその昔。

からかつてブラジャーをつけてるのかと聞いたら、目の前で外して見せてくれたからだ。

そしてそのブラのタグには、確かにBとあった。（※サイズに関しては諸説あります）余談だが、そのとき彼はブラや胸のサイズよりも、目の前で恥ずかしげも無くブラを

外して見せてくれた最上の優しい笑顔に、なによりもドキドキしたとかなんとかかんとか。

さらにゆっくりと視線を下に移す。

余分な贅肉の無い腰は綺麗にくびれており、その下に続く小ぶりなおしりから伸びたほっそりとした脚は、光を反射するほどに張りがある。

つまり最上という艦娘はボーイツシユと分類される女性ではあるが、健康的な色気も確かに備えており、提督である彼はそんな最上に対して、ちゃんと魅力を感じていた。

「ああもう、わかったからどいてくれ」

「へへっ♪」

だが彼にとつて、最上は子供の頃から側にいた存在で、もはや空気のようにいることが当然ともなっており、改めて興奮を覚えるということはあまりない。

とはいいつつも、最上がいなければひどく落ち着かなくなることも、自覚はしているのだが。

ちなみに二人は、まだ自力では立ち上がれない頃に出会った、同い年の幼馴染みであり。

さらに家も隣同士で、今までずっと同じ学校にも通ってきた。

子供の頃は他の子供たちにからかわれたりもしたが、その時の彼にはすでに最上がそ

ばにすることは当然という価値観が構築されており、最上もまた、提督さえそばにいればいいといった空気だった。

そんな二人の無意識に繰り広げられるイチャイチャぶりに、いつしか逆に周りの方が気を遣っていたとかなんとか。

まさにパーフェクト幼馴染み、ついでに艦娘と提督という間柄、倍ドンである。

「それより、今日は楽しみにしてたカムフェスでしょ？ 準備しなくていいの？」

「あー、そうだった。準備しなきゃなあ」

彼はそう呟きながらも、布団の中でもぞもぞするだけで、一向に起き上がる気配がない。

というか、最上が彼の上に乗っかっているせいで、起き上がりたくても起き上がれないのだが。

艦夢守市 野外フェス『通称：カムフェス』

それは、複数のステージが混在する広大な会場で、数日にわたって繰り広げられる巨大ロックフェスティバルであり、その野外フェスには、大小様々な音楽バンドが集結。

時には那珂ちゃんが飛び込みで登場して、ゲリラライブをやるという都市伝説まで存在する。

(※那珂ちゃんのライブは規模が大きくなりすぎるため、基本はソロライブが前提とな

るっていうか、那珂ちゃんはいでるでロックバンドじゃないから！」

「まあ、提督の準備なんて着替えるだけなんだから、すぐできるよ。それより丁度ふともあるし、今から寝ちやだめ？」

なにが丁度なのかという疑問はあるが、彼の答えも聞かずに、最上は布団の中に潜り込む。

「べつにいいけど、時間になったらちゃんと起きろよー」

「そうこなくっちゃ！ 安心して、ちゃんと提督を起こしてあげるね！」

物心ついて、提督と艦娘という関係を彼が自覚する以前から、最上は躊躇無く彼の布団に潜り込んでくる。

最初は少し抵抗した彼だが、まだランドセルを背負っていた頃に艦娘変わりを終えた最上は、当時の彼より遙かに体が大きく、抵抗は無意味であった。

今では最上よりも体の大きくなった彼ではあるが、子供の頃から染みついた記憶というものは中々抜けないものだ。

とはいっても、本気でいやがれば、最上は絶対に言う事を聞いてくれるので、彼も本気でいやがっているわけではないのだが。

そんなわけで、色々長々と説明したが、その結果どうなったかというところ。

寝過ごした二人は無事、野外フェス開始時刻から大幅に遅刻して、会場に到着したの

だった。

『幼馴染』と『重巡：最上』

「あ、ねえ提督、あれうーぴよんだよ」

遅刻したため、お目当てのバンドを見損ねた彼と最上は、空いていたステージの一番後ろの方で、名前も知らないロックバンドの演奏を聴いて時間をつぶしていた。

そんな中、演奏が終わったバンドと入れ替わって現れた、バンドのメンバーに見覚えがあつた最上が声を上げる。

「え、マジかよ。結構な大物が出てきたな……あれ、でも出演の予定とか無かつたよな？

飛び入りライブか？」

一番空いているといっても、そこそこ人は入っており。彼は最上が後ろからの人波に押しつぶされないように、彼女の後ろから手を回して抱きしめながら、目をこらす。

よく見ると、確かに遠くのステージに見えるのは、ロックグループ『ヘルズトリック』のボーカル、駆逐艦の艦娘でもある卯月こと『うーぴよん』だ。

紅い髪に、特徴的な *sanna* Tシャツ、ぎらつく瞳であたりを見渡しながらギターを担ぐその姿は、間違いなく本人。

そんな大物アーティスト、うーぴよんの登場に会場は騒然とする。

「うっ……う”う”う”う”ひ”よ”お”お”ん!!」

が、観客の一人、おそらくうーぴよん親衛隊のメンバーと思わしき男が、のどが張り裂けんばかりの音量でうーぴよんの名前を呼ぶ。

それに呼応するかのようにはじめ、あちこちにいた、うーぴよん親衛隊と思われるメンバーたちが声を上げ始めた。

いつしかその叫びは重なりはじめ、会場はうーぴよんコールで満ちてゆく。

「「うーぴよん! うーぴよん! うーぴよん!」

うーぴよんはそんな観客をうぎそうな顔で見つめながら、スタッフに合図を送る。そしてステージ脇から現れたのは、馬鹿でかい城門のような、歪な形状の物体。

上部に取り付けられているのは、戦艦主砲の砲口のような、巨大な十二個のスピーカーコーン。

更にその下には上部のコーンよりも大きい、人が入れる程の十二個の巨大な四角形の大穴。

かなり歪だが、その特徴的な配置は、バックロードホーン型のスピーカーのもの。

アカシ製『一二式 音響発生装置』

その誕生の経緯は、艦連が巨大製造企業『アカシ』に、可能な限り遠距離まで音が届く、船舶用装備の大型ホーンスピーカーの開発を依頼したことから始まった。

(※余談だが、アカシの企業理念は『提督以外はなんでも創る』である)

アカシの音響機器開発部門に所属する優秀な技術者が、無事開発と必要数の生産を終えた後。

納品の為に倉庫に置かれていた十二個のそれを、たまたま歩いていた艦娘の明石が見。見。

もつと良いものができるはずと、余った予算で更に改造と改良を加えて見た結果。

なぜか一個に融合した、コンサート用のスピーカーが出来上がってしまった……
けど、そのまま納品した。

という謎の開発と完成の経緯を持つ、混沌の一品。

ちなみにそのスペックは、通常の二百ワットスピーカーおよそ百個分。

当然、納品された艦連からは、アカシに問い合わせの電話がいった。

『もしもし明石？　なんで融合して、おまけにコンサート用になってるんですか？　え、今は手が離せなくて電話に出られない？　えっ、なんで？』（迫真）

が、明石は居留守を使った。

艦連と大淀は泣いている。

（もつとも、この後明石は一年間給料無しになって、めっちゃくちゃ怒られた）

そんな狂気じみたスピーカーが、うーぴよんの真後ろに置かれる。

スタッフは手早くコード類を接続し、音量とトーンの設定を確認。

そして設置を終えたスタッフが、うーぴよんにゴーサインを出した。

それを確認してうーぴよんは、調整のためなのか。

軽く六弦のGのフレットを、人差し指でタップした——瞬間。

ギユギヤ!!

たったそれだけで、スピーカーから強烈な音波が発生した。

その音の振動は真正面に立つ、うーぴよんに直撃。

まるで、後ろから強い煽り風を受けたように、うーぴよんの紅い髪が激しく揺れて逆立った。

だが、うーぴよんはその音量と衝撃に全く応えた様子も無く。

むしろ悪くないという風な、ゆがんだ笑みを浮かべ――

ギターをかき鳴らし始めた。

ジャカジャーン!!!!

ジャツジャツジャツジャ♪

開幕から最大全開で放出される、強烈な音の波が空間を切り裂く。

その衝撃をうけて何人も観客が、後ろにひっくり返る。

うーぴよんはそんなことお構いなしに、Gのコードを押さえて、リフを弾き続ける。

野外会場だというのに、まるで箱の中にいるような錯覚。

それはもはや音では無く、熱と振動と音が合わさった爆発。

最前列にいる観客たちの中には、泡を吹き始める者も出ている。

だがうーびよんに「ねてんじゃねえびよん！」と、叫ばれ。

すぐに冥土から戻り、必死に頭を振り始めた。

そして前奏が終わり、うーびよんの歌ソングが始まる。

さつき空母にいたずらしたびよーん！

お次は戦艦にいたずらするびよーん！

「二」 うーびよん！うーびよん！うーびよん！ 「二」

観客たちの訓練された合いの手が、完璧なタイミングで挟まれる。

その曲に聴き覚えがあったのか、彼と最上の近くにいた二人組が驚愕の叫びを上げる。

「この曲は……戦艦騙し!?!」

「マジか!!一曲目からかよ!?!」

熱狂と音量、そしてやがて噂が広がり押し寄せる人波。

小さな会場に収まらない、とてつもない熱量が発生する。

爆発的な熱と音の波に揉まれながら、観客は拳を高く上げ、肩車をして脱いだシャツ

を振り、うーびよんの名前を叫ぶ。

そして曲の最高潮に達するサビを過ぎて、長い間奏が始まる。

うーびよんはマイクを足で引き寄せ、狂ったようにギターをかき鳴らしながらシャウトする。

ぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶくぶー!!

凄まじい速さで発せられる、言葉の弾丸。

まるで機関銃のような高速シャウトが観客を貫く。

「でたー！ うーびよんさんの一秒間十回連続ぶつぶくぶーだ！」

「早すぎて最後以外は『ぶつ』にしか聞こえないぶつぶくぶーだ!!」

そのパフォーマンスにも覚えがあつたのか。

彼と最上の近くにいた二人組が、再び驚愕の叫びを上げる。

「……うわあ、すげえなこれ」

「寝坊してよかつたでしょ？」

反省のない最上の言葉に、彼は「ばか」と嘔き、顎をゴツンと彼女の頭に落とす。

ゴツンとされた最上は「いてっ」と声を上げ、後ろを振り返る。

そして甘えながら「衝突禁止！」と、いつて笑った。



会場のあちこちで行われていた、熱狂的な演奏が終わった夜。

酒を飲んで踊るもの、持ち込んだギターをかき鳴らして歌うもの。

静かに余韻に浸るもの、明日に備えて早々に眠りにつくもの。

そんな観客たちが集まる、テントが沢山張られた広場。

その中の一つ、小さなテントの中に、彼と最上はいた。

「今日は遅刻しちゃったけど、結構当たり引けてよかったね、提督」

「まあ、残り物には福があるってやつかもな。やつぱカムフェスはなにが出てくるかわからんから油断できん……よし、できたぞー」

彼は角型のコツヘル（※携帯用の小型鍋みたいなもの）を、ストーブから放してタオルの上に置く。

ふたを開けると、もわつとした湯気につれて、醤油と鶏ガラスープの香りが立ち上った。

中身はありふれた袋麺から作ったラーメン。

しかし侮るなかれ、野外で味わうと十倍くらいおいしい。彼と最上は、四角いコッヘルに入った一つのラーメンを、二人で、一つの箸を使って食べる。

「提督、ネギがついてるよ。ん、いいよ」

「お、わるいな」

そんなこんなで貧相で豪華な夕食を終えた後。

鍋を片付けた彼は、ごろりと寝転がった。

最上も懐中電灯を消して、彼の横に寝転がる。

彼は最上の腕を枕にし、テントの窓から空を見上げた。

「あー、学生最後の夏もこれで終わりかあ……」

「そうだね」

「軽くいうけど、もがみんさん、起承転結の結が終わっちゃうんだぞ？　なんかこう、ないのですかね」

「学生最後の夏っていつても特にないかな、秋はちよつと寂しくなっちゃうけど」

「そんなもんですかね」

「そんなもんですだよ、ふふ」

最上は、さっと腕を彼の頭の下から引き抜く。

そして今度は最上が彼の腕を枕にして、甘えるように彼の胸に顔を埋めた。

「なあもがみん」

「うん？」

「提督適性者免許、どうしよつかあ」

「あー、そーだねー」

提督適性者免許、適合した艦娘の提督と証明する免許証。

取得することで、官民間問わず、様々な優遇措置を受けることができる反面。

その艦娘に対して、提督として責任を持つという意味合いを含むものでもある。

もつとも、なにか法的な責任が発生する訳でも無く。

ただ、私はこの艦娘の提督だと、そう、証明するだけのものでもある。

重く捉える提督や艦娘もいれば。

貰えるなら貰っておこうという提督や、取りあえずとって貰おうという艦娘もいる。

子供の時から共にいる、最上という艦娘。

彼女に対して、今まで幼馴染みとしてしか接してこなかった彼だが、そばにいたことが当たり前という関係が長すぎたせいかな、その先というか、そもそもそれ以上先があるかもわからず。

彼と最上にとってそれは、昔から一緒にいたが故に、どう扱って良いのか迷うといっ

たものであった。

故にその責任の意味を理解できるようになるまではと、彼はずっと保留にし続けた。

「昔いったけどさ、ボクの考えはそのときからずっと変わってないよ。提督が大人になつて、その判断ができるようになるまでは今のままでいいし。そしてその判断ができるようになったとしても、提督適性者免許を取るのも取らないのも提督に決めて欲しい……今更いうのも恥ずかしいけど、ボクは提督のそばにいられるのが一番うれしい……」

けど、もし提督がなにかを望むなら、そう望む形に関係を変える努力はしてみる……よ」

そう言い終えると、最上は彼をぎゅっと抱きしめる。

遠くからは、未だにどこかで演奏してるステージから聞こえてくる音楽と歌。

そんなBGMを聞き、最上の温かさを感じながら。

彼はなにもいわず、窓から見える満天の星を見上げ続けていた。



翌日。

朝、最上が脱いだ靴の中に、いつの間にかムカデが潜り込んでいたらしく。

そのまま履いてしまい派手に大暴れた結果、テントを壊してしまった以外は特に何事も無く。

彼と最上は今、その日のお目当てである、バンドのライブが行われる中規模の会場にいた。

「が、昨日のうーぴよんのライブがあまりに強烈すぎたせいで、いまいちノリきれない彼。」

そんな理由から、後ろの席でダラダラと眺めていると、急に雨が降り出した。

丁度そのバンドの演奏が終わって、次のバンドの登場まで時間があつたこともあり、テントに戻る観客たちが多く中、テントを壊してしまった二人は途方に暮れる。

「もがみんや、もがみんや」

「い、いわないで提督……」

おそらく通り雨なのだろうが、それ故に雨の勢いは強い。

野外フェスの雨は、火照った体を冷ます恵みの雨だが、まあ、それでも時と場合によるものだ。

「あくあ……せつかくのカムフェスが台無しだよ、もお……。しようがないか、えいっ！」

そう最上が口にした瞬間、彼女の体が一瞬光ったかと思うと、ポンチョタイプの色

い雨合羽姿に変身した。

ただ雨合羽をかぶっただけに見えるが、この茶色い雨具、れつきとした艦娘の戦装束である。

その性能は折り紙付きで、耐水は当然ながら、防寒防雪海水腐食対策に機銃程度では貫けない防弾性能に、自動修復機能 e t c . e t c . . . :

まあ、つまりなにかいいかというところ。

「も、もがみんや、それは戦装束という立派な艦装の一種じゃないのかね」

「な、なんのことかなあ……？」

※艦連からのお知らせ

艦娘は皆、艦装以外にもある程度自由に物を格納できる、秘密の格納空間を持つています。

そのため、普段は秘密のポケット空間（艦装格納庫）にしまつてある艦装同様、しまつてある私物も一瞬で取り出すことが可能です。

ただしこれら含めて使える様（法律的）になるためには、色んな講習や試験を受けた後に発行される免許が必要です。

持つてないのに使うと、大淀さんが怒っちゃうぞ、ぶんぶん。

ちなみに最上は艀装使用に必要なその免許を、めんどくさがって取っていないかったりする。

そのことを知っている彼は、じつとりとした目で最上を見るも。

すぐにまあいいかと、最上の後ろから雨合羽の中に、すっぽりと潜り込んだ。

二人羽織状態になっても余裕のある、大きな雨合羽の中。

最上と彼は、ぼけつと誰も演奏していないステージを眺める。

中々止まない雨。

ステージの上では、スタッフが忙しそうに走り回っている。

そんな忙しさとは対照的に、暇をもてあました彼は、後ろから最上を抱きしめ、首筋の後ろをクンクンとかぐ。

濡れてしっとりとした最上の黒髪から滴る、温かい水滴。

お互いが発する熱と合わさり、雨合羽の中に満ちる水蒸気。

そんな水分が合わさって大粒の水滴となり。

ゆっくりと最上のうなじを伝ってゆく。

喉が渴いていた彼は、それをペロリと舐めとった。

「ちよ、提督、恥ずかしいって……ったくもお……」

「すまんすまん、自分のおいかぐと落ち着くから、その感じでつい、な」

「いやあまあ、別にいいんだけどさ……もう、提督はさみしがりやの甘えん坊さんだね……ふふっ」

「なんでそうなる」

「ちよっ、動かないでよ！ ふふっ♪」

抗議の気持ちを表現するためか、彼はもぞもぞと雨合羽の中で動き回る。

その動きがとてもくすぐったかったのか、最上は恥ずかしそうに身をよじった。

ゴゴゴゴゴゴ……

ゴゴゴゴゴゴ……

そんな夏なのに、青い春な空気を発し続ける二人……に、忍び寄る不穏な振動。

「おい、なんか揺れてないか？」

「ほんとだ、なんだろう？」

ゴゴゴゴゴゴ……

ゴゴゴゴゴゴ……

何事かと二人が振動の発生源と思われる、前方のステージを見る。

二人が今いる会場は、半円形のステージとすり鉢状の客席を備えたもので、客席からはステージを見下ろすような形だ。

ゴゴゴゴゴ……

するとステージの中央がぱっくりと開き、なぜか下からせり上がってくるリフトに乗って、うーびよんが登場した。

ついでにその足下には、うーびよんの代名詞でもある『一二式 音響発生装置』が当然のように鎮座している。

「きよ、今日も出るの!?!」

思わずハモってしまふ二人。

ステージはその構造上、会場が一番低い位置にあるのだが、うーびよんは『一二式 音響発生装置』の上に立っている為、丁度二人と同じ視線の高さである。

そんな二人というか、がらがらの客席をにらみつける、ロックグループ『ヘルズトリック』のボーカル兼ギタリストのうーびよん。

雨なんかにはけるううううう!!

うーびよんじゃあ、ないびよん!!

曇り空を貫き、空間を切り裂き、大地をふるわす、うーぴよんのシャウト。そしてうーぴよんは担いでいたギターを空に投げる。

派手に見えながらも、コードが絡まらずに器用に投げられたギター。

やがて重力に引かれて、数秒後に落ちてきたギターをキャッチ、と同時。

うーぴよんはピック無しで弦を弾く!!

ジャカジャーン!!!!

ジャツジャツジャツジャ♪

調整なし、予告なしでいきなり始まる演奏。

その音の衝撃に、雨すら重力に逆らって方向を変える。

「うっ……う”う”う”ひ”よ”お”お”お”ん!!」

そしてどこかから突然現れた、うーぴよん親衛隊のメンバーと思わしき男が、のどが張り裂けんばかりの声量でうーぴよんの名前を呼ぶ。

それに呼応するかのよう、あちこちから集まってきた、うーぴよん親衛隊と思われ

るメンバーたちも声を上げ始めた。

「うーびよん！うーびよん！うーびよん！」

いつしかその叫びは重なりはじめ、会場はうーびよんコールで満ちてゆく。

彼は最上の雨合羽の中から飛び出し、彼女の手をつかんで走り出す。

「ほら最上！今日は前の方でしっかり聴こうぜ！」

「前に出るの!? そうこなくっちゃ！」

雨と音の波をかき分けながら、提督と艦娘の二人が、うーびよんに向かって進んでゆく。

その背後には、うーびよんの気配を嗅ぎつけた、大勢のうーびよん親衛隊たちの姿。

カムフェス二日目。

古今東西北南、野外フェスは二日目からが本番である。



「終わってみればあつという間だったな。なんだかんだで楽しかったけど、疲れたわ」

「そうだね、でも提督と一緒になら毎日でもいいや」

「いや、毎日はさすがに無理だって」

「そお？」

帰りの路面電車の中、それなりに混雑した車内。

だるそうに手すりにぶら下がる彼と、その横で彼の腕を掴みながら、ニコニコと微笑む最上。

「んー、なあ、もがみんや」

「なんだい提督」

「卒業したらさ、提督適性者免許とるために二人で役所にいくか。そしたらついでに一緒に住む場所も探そう、そういう優遇も受けられるはずだし」

「……え？」

「なんだ、嫌なのか？」

「いや、全然嬉しいというか、えっと、でもそれってえっと……」

珍しく真つ赤になる最上、一方の彼は自然体の様子。

あわあわとなつている最上を尻目に、彼は近くにいた金髪のホストのような男。

そのホストらしき男が持っていた、ギターのハードケースを見る。

「なあお兄さん、悪いけどそのギター五十分くらい貸してくんない？」

ホストらしきの男は「いいつすよ」と、気軽に返事をして、狭い車内にあちこちぶつけないが、苦勞してギターを取りだし、彼に渡してくれた。

因みにホストの後ろには、ショートカットの美女がいて「ふ、二人つきりででかけたことを金剛お姉さまや妹たちに知られたら……ひえええ」とかなんとか、幸せそうな顔で泣いてたとか。

「よっ(っ)っ(っ)よっ(っ)っ」

彼はちやつちやつと弦の調子を確認して一発入れる。

続いて喉の調子を確認し、軽快なフオークミュージックを奏で始めた。

ジャーン・ジャカジャカジャーン♪

ジャーン・ジャカジャカジャーン♪

のんびりとした前奏が終わり、彼は大声で歌い始める。

♪おまえがいつも見てるのは

まだまだ半端なおれだけど

スーツが似合うようになったなら

おまえの目がハートになったなら

そのときや籍でも入れようぜ

そのときや籍でも入れようぜ

二人の結婚式場が、神社教会公園かは

そんなときの稼ぎしただけどお〜♪

ふふふ〜んふ〜ん

おーういえい!!

「——アハツ!!」

彼の歌を聴き終えて、うれしき極まった最上は、涙を流しながら彼に飛びつく。

しかし長い付き合いの彼は、なんとなく最上の行動が読めていたのか、飛びついてきた最上の顔を片手でキャッチして受け止めた。

「ぎゃふん!」

「衝突禁止!」

「それボクの台詞だよ!」

「そうだったけ?」

とぼける彼を見ながら半べそをかいていた最上だが、にやりと笑って彼の手を払いのける。

そして今度は見事、彼の防御をくぐり抜け接近した。

「いっとくけど、ボクの目は提督と出会ったときから、ずーっとハートだよ!!」

最上は飛びこむ、提督である彼めがけて。

結果、彼の前歯と最上の前歯が衝突した。

そんな二人を見て、なぜか車内に拍手が満ちる。

路面電車は進むよどこかまで。

終業時刻までは、いつまでも。

『無職男』と『駆逐艦：浜風』

職が無いと書いて無職と読む。

正確には無い、職がな気もする。

どうでもいいけど、それより風邪ひいたわ、くそう。

陽炎や不知火には水に突き落とされ、磯風の家の屋根を寒空の下で修理し、舞風のダンスに付き合ひ、秋雲の漫画を徹夜で手伝つて、時津風を抱えて全力で走つて汗だくになり、ヒーローショーでは頭から落下する。

陽炎たちと出会つてからというもの、いい歳して結構無茶なことをしてきたが、なにげにあいつらと出会つてから風邪をひいたのは初めてな気がする。

それなりに頑丈な身体だという自覚はあつて、でかい病気なんかはしたことがないし、怪我の治りも早い……のだが、時々思い出したかのように風邪をひくことがある。

つまりいま、まさにそれ、俺、風邪ひいた。

鼻水が放水車レベルにブリブリ出て、咳が不審者百人に囲まれた番犬が吠えるスパン

で出る。

なんて考えてるそばから鼻水が垂れてきた。

枕元においたトイレットパーパーで鼻をかむ、箱ティッシュは甘え。

実際コスト的にも補充的な観点から見ても、トイレットパーパーは優秀な気がする。

見た目最悪だけどな、部屋にトイレットパーパーのロールがあつたら微妙な気分になるヤツもいるだろう。

ちなみに今日は陽炎たちとの草野球の日で、審判のバイトの予定だったがさすがに休ませてもらった。

電話口で微妙に焦った口調で看病に行くと言われたが、風邪がうつつたらどうするんだと言って止めさせた。

真面目に、時津風とかちっちゃいやツらが風邪になったら大変だし、そうじゃなくても貴重な学生時代の夏休みを風邪で潰すとか最悪だろ。

そんなわけで、少しきつめに念押ししたので、多分陽炎たちはこないはずだ。

まあ、風邪なんてひいてしまうと心細くなつて、人恋しくならないでもないんだけど、な。

無職で、風邪とか、もう、フルコンボだけだな……ゴホゴホ。

あーくそ、咳がひどい。

ちくしよー、くそー、さすがに死なないよな？

夏場に自室で孤独死とかもう、色んな意味できつすぎるよな。

冷房はかけっぱにしてるけど、止まったら悲惨なことになるだろう。

渡す遺産なんざ無いけど、遺言状とか用意した方がいいのかな。

あと遺品整理というか、生前整理みたいなのもやっという方がいいかもしれん。

ずいぶん乗ってないバイクとか修理用の工具とかどうしよう。

この前のバイトで知り合った原とかにやってもいい気もするが。

物はあるまり持たない主義なので、処分に困りそうなのはそれくらいだろうか。

ああでも、微妙に本やらなんやらも結構あるな。

まあ賃貸だし、管理会社か家主が勝手に処分してくれるだろう。

ただ、もしもの場合、俺の腐乱死体を発見するのは、恐らく陽炎姉妹の誰かになりそ

うな気がする。あいつらちよくちよく来るからなあ……。

そう考えると、いい加減あいつらとの関係を見直さなければならぬかもしれない

と、今更ながら思う。

陽炎姉妹には感謝しかないところがあるんだが、さすがにうら若き女学生たちがいつまでもこんな無職のおにいさん……いや、いい加減認めねば、あいつらから見れば俺は十分におっさんだろう。

こんな無職のおっさんにかまったり、かまわれたりしてるわけにもいかんだろに。そうだな、ああそうだ、そうと決まればいまからでも電話で……。

なんてこの世でも終わるのかよってレベルの考えが頭に浮かんだので、慌てて振り払う。

アホか、いくらなんでも弱りすぎだろ、俺。

取りあえず風邪を治そう、でも遺言状くらいは書いといたほうが……アカン。

なにも考えるな、寝ろ、寝ろ俺。

寝よう、起きればまた面接にいけるから——

『無職男』と『駆逐艦：浜風』

なにかを煮ているような音が聞こえ、目が覚めた。

痛む首を動かし、横になったまま音の聞こえてきたキッチンの方に目をやる。

そこにはセーラー服の上から黄色のエプロンを掛けた、セミロングで銀色の髪の毛の女の姿。

その女はまるで親の敵でも見るような目つきで、火にかかった鍋をにらみつけていた。

えーつと、誰だっけかこの女、確か陽炎姉妹の一人だよな。

短いスカートから伸びる足には夏場用の薄い黒タイツ。

確かいつ見ても黒タイツはいてるイメージ有るな、こだわりでもあるんだろうか。

とりあえず身体を起こして、トイレットペーパーで鼻をかむ。

その音に反応したのか、少し慌てた様子でこつちに振り向く陽炎姉妹の一人。

「あつ、おはようございます。いま栄養のつくものを作っていますので、もう少しお待ちください」

なんかここに居るのが当然みたいな空気で、無駄にキリツとしたどや顔。

長い前髪のせいか、片方の目が隠れてるけど、それちゃんと見えてるんだろうか？

というかなんだろ、真面目な磯風っぽい感じだな。

なんか色々突つ込みたい気がするんだが、寝起きではつきりとしらない頭では、この

女がなに言ってるのかいまいちよくわからん。

いや、多分様子を見て来てくれたんだと思うけど。

じつと見られているのが恥ずかしかったのか、目をそらすように鍋の方に視線を戻す
陽炎姉妹の一人。

今更だがこの部屋はワンルームで、風呂とトイレの入り口も、キッチンも同じ部屋にあるから料理をしてるっぽい姿がよく見える。

なので匂いの強い料理は危険だ、まあ、そもそもいうほど自炊せんけどな。

「それはいいが、どうやって入って……そう言えば鍵掛けた記憶がないな。つーか、陽炎に言つといたはずなんだが、駄目だろ風邪ひいた男の家なんぞに来ちゃ……えーつと、マシユ風だっけか？」

「浜風です!!」

強烈に気合がのった声で否定される。

触れてはいけないにかだったようだ。

「お、おう。すまゴウエツホゲホ！」

「だ、大丈夫ですか!？」

慌てて駆け寄ってくる浜風。

でかい声でびびったかもしれないが、ただの咳だよ。

と、言いたいのが咳がなかなか止まらない。

浜風はそんな俺を心配そうに見ながら、背中をさすってくれる。

近くで見るとよくわかるんだが、胸がでかい。

多分陽炎姉妹の中でも一二を争う発育の良さ。

でも確か姉妹の中じゃ結構下の方だったはずだよな。

よく見れば、身体に比べて顔は年相応の幼い感じがする。

そう考えればこの女この女っていったけど、この子っていうべきだよな。

頭に巻いてる黄色い三角巾のせいもあるが、その姿は調理実習中の女学生そのものだ。

「あの、本当に大丈夫ですか？」

「そう心配するな。あんまり大丈夫ってわけでもないが、まあ死ぬこともないだろう」
寝る前まで遺言状書こうとしてた男の言葉だが、あまり心配を掛けるわけにもいきま
い。

實際起きる前はヤバイくらい咳と鼻水が出てたけど、だいぶマシになってるし。

「それより、罰ゲームか貧乏くじひいたかは知らんが、風邪がうつる前に帰ったほうがいいぞ、というか帰れ」

「だ、大丈夫です！ 私その、えっと、風邪ひいたことないので!!」

んなアホなと思ったが、もしかしたらそういう人間もいるのかもな。

どうやらこの子は体型に恵まれてるうえに、超健康優良児だったらしい。

「そりゃなんというかまあ、羨ましい限りだな。だけでもしなにかあつたら陽炎に申し訳が——」

「私がここに来たのは姉妹たちの総意であり、また自ら志願したからです！」

「アツ、ハイ」

気迫的な迫力と胸部装甲の質的な迫力におされて、ついつい頷いてしまった。

まあ腹も減ったし、飯くらいは甘えるか。

「ところであの鍋、大丈夫か？」

「は？」

浜風が振り向いた先には、火に掛りっぱなしだった土鍋。

フタがタツプダンスでもしてるのかつてくくらい、パタパタと音を立てている。

つかうちに土鍋なんてあつたっけか？

浜風は慌てて立ち上がり、鍋のもとに駆け寄ろうとして――
「きやあああつ!!」

俺がなんとなくしかけた泥棒対策用のトラップに引っかかって転けた。

あ、すまん。

「……大丈夫、まだ、行動可能です……!」

いや、なんか、ほんとすまん。



「あの、どうでしょう?」

床に直敷きしたマットレスの寝床から身体を起こし、木の器に盛られた微妙に焦げる気がしなくもないおかゆをすくって食べる。

調理方法がいいのか、品種がいいのか、コメの舌触りのよさがヤバイ。

なんか高級な料亭で使ってるんじゃないかと思うレベルだ。

「うまいんじゃないのか、多分。味はよくわからんけど」

「え? ど、どういうことですか?」

「人によるかもしれないが、風邪ひくと味覚が狂うんだわ。塩味くらいならわかるけどな」

などと言ってみるが、正直煙草で365日舌が駄目になつてるので、風邪をひいていなくても味覚は多分狂っている。

おそらくグルメな人間に料理を作れば、この料理を作つたのは誰だあ!? つてマジギレされること間違いない。

しかし、風邪ひいて女学生に看病してもらうとか、またしても叶わなかつた青春イベントを回収してしまつた気がする。

最初、浜風に一口分のかゆを口元まで持つてこられたときには、どうしようかと思つたが。

さすがにそこまで弱つてなかつたので断つた。まあ、ちよつと惜しかつた気もする。

食い終えたあとの食器は浜風が手際よくかたづけしてくれた。

器用なのか不器用なのかよくわからない子だな。

「他になにかご用命はありますか? この浜風になんでもご命令ください」

「いや、特にないが」

「ご命令つてオイ。」

強いていうなら就職先を紹介して欲しい。

なんて言葉がふと浮かんで泣きたくなる。

子供になにを頼もうとしてるんだ、俺は。

「あの、元気がないようですが大丈夫でしょうか？ その……オッパイ揉みますか？」
なんて悩んでたら、浜風の口から衝撃的な言葉が飛び出してきて、一瞬思考が停止する。

反射的に『うん、揉む』と答えそうになった自分を殴りたい。

「……どこでそんな言葉を覚えた」

「秋雲の描いた漫画の中にこのようなシーンがあつて、元気がない異性を励ます方法としてかなり効果的なように見受けられました……なにかおかしかつたでしょうか？」

なに見せてんだあ、秋雲オ!!

と、一瞬思ったが。

思春期に仲間内でエロ本のまわし読みをするなんてのは、よくやることか。

しかしながら、厄介な性癖を背負い込んでしまうのはいただけない気もする。

いや、問題なのはそれが普通だと信じてしまう純粹さか。

「例えばだが、お前は俺のオッパイ揉んで元気が出るのか？」

質問に質問で返すのはアホだと思うことがあるが、これは確認しておかんといかん。

浜風の将来がとて心配だ、性癖云々もあるが、悪い人間に騙されかねない。

「え……？」

我に返ったかのように表情が固まる浜風。

男と女のオツパイが等価値かどうかという難しい問題はおいておいて、自分が言ったことのアホさに気がつい——

「あの、あ、あのっ！ その……はい、元気出ると思いますが……」

真つ赤な顔になってうつむきながら、恥ずかしそうに言う浜風。

よほど恥ずかしかったのか、最後のほうは蚊の鳴くような声だった。

もう一度いうが、この子の将来がとても心配になってきた。

そして思春期の少女に性癖についてカミングアウトさせてしまった罪悪感がすごい。

どうしよう、こんなときどんな顔をすればいいかわからないの。

『先輩助けてくださいこのままだとケツコン（ガチ）してしまいます』

なんか変な電波が飛んできた気がする。

ええいくそう、役にたたない前島め。

「……なんなら試してもいいが、絶対元気なんか出ないぞ」

「いいんですか!？」

なんで食い気味なんだよ。

ああ、うん。という俺の生返事を聞いて、浜風は床に座ったまますりすり移動し、ゆつくりと俺に接近して、寝ているマットレスの上にぼすんと乗り上げる。

そしてそのまま俺の伸ばした足にまたがり対面状態になると、顔を真っ赤にしてじつと俺の胸元をにらみつけてきた、心なしか鼻息も荒い。

「相手にとって、不足なしです！」

いや、不足しかないし、問題だらけだろ。

何度もうががこの子の将来がとて心配である。

そして浜風は、意を決したようにそつと両手を俺の胸元に伸ばし……そのまま脇の間に手を入れて抱きついてきた。

揉むんじやなかったのかよ、いや、揉まれても困るんだが。

浜風はそのまま俺の胸元に顔を埋め、擦りつけるように顔を左右に振った。

なんだろう、なんともいうかもしかしてこの子も例のごとく複雑な家庭環境で、父性に飢えてるような感じなんだろうか？

難しい陽炎姉妹の家族問題、なんだかんだで未だに聞けていない。

しようがない、せめてできることをしてやるか。

「よしよし、どうだ、元気なんか出ないだろう？」

サラサラの銀髪を指ですくように撫でてやる。

しかし根元まで綺麗に染まつてるな、よっほどまめに染め直してるんだらうか。

最近の子……いや、昔からか。女のおしゃれにかける情熱はすごいな。

「クンクン、ハアハア……汗の臭い、すごいです……いいかも……しれない」

父性全開の気分で撫でてたら、なんかすごい言葉が浜風から飛び出した。

思えば風邪をひいてから、夏場だというのに一度もシャワーを浴びてない。

そう考えたらなんだかとても恥ずかしくなってきた。

お父さんクサイ、洗濯物別にして、お風呂は一番最後に入ってよね。

そんな幻聴が聞こえてきそうで泣きたくなる。

「おい、もういいだろ」

涙をこらえて引きはがそうと、しがみつく浜風の頭を掴んで顔をあげる。

……浜風はなぜか恍惚の表情を浮かべ、ヨダレと一筋の鼻血をたらしていた。

「ぎゃー!? おま、ちよ、おまつ!!」

慌てて引きはがすが、両腕でがっちりとホールドされているせいか、ピクリともしな

い。

「くっ! まだ、嗅げます! ああ! あと少し、あと少しだけ!!」

「HA☆ NA☆ SE!!」

なけなしの体力を振り絞って立ち上がるが、浜風は俺の体にへばりつき続ける。

お前、忘れてるかもしれないが、俺、風邪ひいてるんだぞ!!

「すみません、見苦しい姿をお見せしました」

「はあはあ……ゴホゴホ。まあ、別にいいけどな」

あれからしばらく、もみ合いの末になんとか浜風を引きはがした。

浜風も冷静になったのか、いまは恥ずかしそうに床の上に正座している。

しかし、真面目そうな子ほど性欲が強いとは聞いたことがある気もするが、思春期の暴走って女でもあるんだな。

そしてすまん陽炎、お前の妹の性癖矯正は俺には荷が重すぎる、後は任せた。

「なんかもう、ちよつと疲れたから煙草吸ってくる」

体力の消耗が激しいので、ニコチンを補給する必要に迫られる、カラータイマーなっ

てるわ。

机の上においてあつた煙草を手に取り、よっこらせつくすと言いながら立ち上がってベランダに向かう。

夏場や冬場にベランダに出るのは地獄なので、室内で吸うことが多いんだが、さすがに浜風がいるからな。

「なに言ってるんですか!?! 駄目に決まっています!!」

「(ぎ)ふああ!?!」

瞬間、腰にとんでもない衝撃が走る。

後ろからタツクルを食らったんだと気がついたときには、浜風もろとも床に転がっていた。

「かつ、風邪ひいてるのに煙草吸うなんてなにを考へてるんですか!! 死んじやいます!!」

「アホか!! いくら風邪引いてるからって煙草吸ったくらいで死にやしねえよ!!」

コイツの中で風邪は一体どんな恐ろしい病氣という扱いなのだろうか。

いや、それよりも一緒に倒れ込んで絡みつかれているせいか、でかい胸が体に押し当てられて複雑な気分になってきた。

「いいえそんなことはないはずです! それにいい機会です、いつそもう禁煙して長生

きしてください！」

「バカかお前、無理にきまつてんだろなに言つてんだバカなのかバツカじやないのか常識で考えろよ、そりや俺だつてできるなら雨にも負けず風にも負けず、情緒不安定にもならず、タバコも吸わず、むかつくやつにも優しくして、日々清潔な格好をして、よこしまな視線で女を見ず、誰からも尊敬される落ち着いた紳士に俺はなりたいって思わんでもないけど、そんなの常識で考えて無理だろ！ それに禁煙ならしてるよ、俺もうかれこれ六時間も禁煙してるぞ!!」

「それは禁煙とはいいません！ 皆が貴方の意思を尊重してなにも言いませんが、貴方の身体を心配して泣いてる姉妹もいるんですよ！」

「それは申し訳ない気がしないでもないが、俺から煙草を取り上げたら遅かれ早かれどのみち死ぬよ！」

ギヤーギヤーと言い合いながら、さつきと同じように立ち上がって引きはがそうとするが、浜風は先ほどと違い今度は一向に諦める様子がない。

むしろ陽炎姉妹特有のクソパワーと軍隊格闘技みたいな謎の動きで体勢を変えて、俺の頭を太ももで挟み込むと、そのまま俺をひっくり返してマットレスの上に落とす。

そこからさらに、太ももによる拘束を一瞬解いたと思つたら、今度は両手で俺の頭を太ももに押さえつけて、強制的に仰向けで寝かせつける姿勢に持つていった。

訳もわからずなんとか抵抗しようとして身体を動かしたが、ツボでも押さえてるのかと思うような、よくわからない押さえ込み方をされてピクリとも身体が動かない。

え、なんだこれ、なにが起こったんだ？

傍から見たら女の子座りの女学生に、膝枕をしてもらってる感動的な状況だが、そこに持つて行かれるまでの経緯がアグレッシブすぎる。

薄いタイトスの感触が肌をくすぐるが、こちらを見下ろす浜風の表情がめちやくちやおつかなくてそれを楽しむ余裕もない。

「とにかく、いまは寝てください。どうしても煙草が吸いたいなら、風邪を治してください。それまでは絶対に離しません」

「アツ、ハイ」

別にびびったわけじゃないが怖かったので、大人しく従うことにした。

てか、君ら姉妹ほんと、力強いな……。



どれくらい時間がたったのか。

なんか、鼻歌が聞こえてきて目を覚ます。

なんとか隙を見て逃げ出そうともしたが、疲れて眠ってしまったらしい。

しかしなんだっけかこの鼻歌、泣かないで提督つてところのリフレイン、昔聞いたことがあるような。そのときにこの歌を歌つてたのは誰だったっけか。

あー、正直心が死んでるときは、なに聴いてもダメでどうしようもないと思うんだが、なんか、悪くないな。

「なあ、その歌……」

「あつ、すみません起こしてしまつて」

「いや、気にすんな。ただ、その歌どこかで聞いたような……」

「これはえつと、昔の子守歌のようなものですね。艦娘ならだれでも知つて……あつ、えつと、もちろん艦娘じゃなくても知つている、とは思いません」

「そっか、艦娘か……」

「その、もしかして艦娘のお知り合いが？」

「ダチのお袋が足柄サマつていう艦娘だったな。揚げもんばかりだったけど、よく飯食わしてもらつたもんだ。内地に来てからは新聞やテレビ以外で見ないけど……」

あー、そういうえば他にも昔……まで、いま何時だ？」

今更だが明らかに部屋が暗い、つていうか夜だ。

部屋を照らしてるのは、豆電球のオレンジの灯りだけである。

「ええと、フタサンマルマルを少しまわったところですよ」

「ふたさん……ああ、二十三時か。変な言い方するなつてか、さすがにもう帰れ。家のヤツが心配するぞ」

「ええと、その……今日は泊まっていつては駄目でしょうか？」

「……お前それ」

「お願い……します」

いつの間にか握られていた手を、ぎゅつと握りしめる浜風。

家に帰りたくない事情でもあるのだろうか、コイツもコイツで大変なんだな。

「……わかったよ。けど、いつとくが予備の布団なんざないからな」

「なら、今晚はずつとこのままです。抜け出して煙草を吸われてはたまりませんか
ら」

そりや厳しいこつて。

頑固なのが多いな、陽炎姉妹は。

ふつと暗い室内に、軽い風が入り込む。

浜風がいつの間にかエアコンをとめて、部屋の窓を開けていたようだ。

「いい風ですね」

「五階だからな、数少ないこの部屋のいいところだよ」

日中はさすがに暑いが、夜は多少はマシだな。

少し蒸し暑いが、まあ、自然な気温つてのは身体にいい気もする。

知らんけど。

浜風の太ももの柔らかさを感じながら、夏夜の空気を吸つてると、また眠くなつてきた。

このまま寝てしまつてもいい気がするが、それじゃ浜風が可哀想なので、少し喋るところにする。

風邪のせいか眠さのせいか、頭がポケットとしててまともに話せるか自信ないけど、さすがに暇だろうし。

「なあ浜風。今更だけどお前らつて野球好きなのか？」

「……どうでしょうか、好きな子もいるとは思いますが。私は別に好きでも嫌いでもないですね。いえ、むしろ胸の固定が面倒なので嫌いなほうかもしれません」

「え、そうなのか？」

意外ではあるが、まあ、確かに大人数でできるスポーツつてそう多くもないからな。

ここに来て衝撃の新情報ではあるが、消去法で野球になつた説が浮上した。

「もつとも、好き嫌い以前に私たちは皆、ただ現実逃避する為だけにあの河原で遊んでるにすぎませんでしたので」

「なんだそれ、暇つぶしってことか？」

「暇、というのも変なのですが、大切なものがない状況、それを暇というのなら……そうなるかもしれません。暇は精神をむしばみます。暇な時間を持つてしまうと別のなにか、生きる意味を無理矢理考えて……そんなものなんてないのに、そんなものを考えて考えて……心配と不安を膨らませてしまう。だから私たち……いえ、私は仕事に熱中して人生の退屈さを紛らわす大多数の大人のように、あの河原で遊んでたんです」

どこか遠くを見るような目で、窓の外に視線を向ける浜風。
窓から入ってきた風が、銀色の髪を揺らす。

「本当に必要なのに手に入らない大切なもの、それから目を逸らして生きなきやいけな
いんですから……それを直視してしまいかねない暇な時間というのは毒だったんです、
私たちには」

「そりゃまあ、なんか打ち込めるもんでもあれば別だろうけど、お前らの年頃にとつて
暇つてのは天敵みたいなもんだろうからな……いや、大人になつても状況によつては暇
な時間は敵だよ、嫌なこととばかり考える」

暇になると大体ろくでもないこと考えてしまつて、メンタルが下降するからな。

将来の不安とか、というか、いまの無職のこの現状についてとか、もう、ほんと色々。
「はい、でもいまは野球好きですよ。提督とする野球は、ですけど。ですのでこれからも

ずっと提督と一緒に、あ……いえ、なんでも

「なんだそりや。まあ……俺もお前らと野球するのは嫌いじゃない……よ……バイト代もでるから……な……ふあ」

なんだか妙に穏やかな浜風の声を聞いていると、段々意識が怪しくなってきた。

おまけに浜風は俺の頭を優しいテンポで撫ではじめたので、さらに睡魔が加速する。

「ふふ、はい。私も……好きです」

どこか年齢不相応な、儂げな笑みを浮かべる浜風。

その顔を見てなにか不思議な感情が浮かんだ。

が、それがなにかわかる前に、俺の意識は睡魔に負けて落ちていった。



うるさい蝉の声と、強い朝日で目が覚める。

この部屋は東向きなので、夏だと寝ている時間帯から日射しが強く、朝日がえぐい。

まあ、目覚まし代りにはちょうどいいんだが。

どうやら一晩中俺を膝枕してくれていたらしい浜風は、その姿勢のまま固まるように眠っている。

しまった、さすがに悪いことしちまった。

そつと抜け出して、シャワーを浴びる為に立ち上がる。

風邪以来初めて落ち着いて立って見たが、不思議なことにモチベーションにあふれている。

身体はとても軽いし、咳も鼻水もなし、どうやら風邪は完治したらしい。

よし、これで煙草が吸えるな、シャワーよりも煙草が先だ。

いま、俺は煙草を吸うというモチベーションが過去最強に高い。

だが肝心の煙草が机の上にはない。

焦って辺りを見回すと、床に落ちていた。

そういえば昨日浜風にタックルされたときに落としたんだよな。

拾う為に煙草に近づいて……なんとなくしかけた泥棒対策用のトラップに引っかかって転けた。

俺はアホなのか？（正解）

そして不幸にも転げた先には、布団の上に座っていた浜風。

「……あ、あの、おはようございます」

「ああ、うん、おはよう」

結果、浜風を押し倒す体勢になってしまった。

さすがに不味いので、すぐにどうこうとしたのだが、なぜか身体が動かない。

「もしかして……煙草を吸う気だったのですか？」

チラリとファインプレーで転げながらつかみ取った煙草に視線を向けたあと、ハイライトの消えた瞳でこちらを直視してくる浜風。

怖いongo!

身体が動かないのは、どうやら浜風が足で俺の腰をホールドしているかららしい。

なんか腰の重要な場所を押さえられてるからなのか、ピクリとも動かない。

てか浜風って、力も強いがやたら近接格闘技に長けてる気がするんだが。

「オイ待て、誤解だ。いや、誤解じゃないけどもう風邪は治ってる、だから吸わせろ」

「駄目です、なに考えてるんですか、それが本当だったとしても病み上がりなんですよ？」

あと百年は駄目です」

「百年もたつたら死んでるよ!! そんなに吸えなかつたら死んじゃうよ!!」

「駄目です、提督の健康は私が守り抜きます!」

俺のことを思ってくれてるのはわかるんだが、それとこれとは話が別だ。

なぜなら俺は、いま、煙草を、吸いたいんだよ!!

「ええい、離せ! いいから吸わせろ!!」

「いいえ離しません!!」

浜風はさらに俺の頭を胸元に抱え込んで拘束を強める。

んがっ、息が苦しい!!

顔全体が柔らかな感触と仄かな香りに包みこまれる。

つかコイツ、ほんとに胸がでかいなオイ!!

「おはよう提督、調子どう？ あと昨日浜風が来たと思うんだけど帰ってきてないみたいな。もしかして泊まって——」

拘束から抜け出そうと足掻いていたら、部屋のドアが開いて陽炎が入ってくる。

そして俺たちを見て固まった。

「な、な、な、な……なにやってんの浜風————!!!」

うるせえ。

いや、確かに見た目的にも体勢的にも、だいぶ不味いのはわかるんだが。

現状、腰に足を絡められて、頭をがちり抱え込まれて浜風の胸に押さえ込まれてる体勢だ。

でもちゃんと見ればどつちが加害者なのかは明らかだろうに……多分、恐らく、メイビー。

「あ、あ、あ、あんたもしかして、それ、す、吸ってもらってるの?」

「ぶはあ! 頼んでるのに(煙草を)吸わせてくれないんだよ」

何とか拘束から抜け出して、浜風に代わって答えてやった。

一方の浜風は、どれだけ恥ずかしい体勢なのか気がついたのか、顔を真っ赤にして固まっている。

「ぎゃああああああああ!!!」

ツインテールをグワングワンと振り回しながら、頭を抱えてシエイクする陽炎。
うお、なんだそれ、面白いな。

「……脱ぐわ」

「はっ」

唐突に叫ぶのを止めた陽炎が、なんかガンギマリな感じのやばい表情になったかと思ったら、唐突に上着を脱ぎ出した。

オイ、なにやってんだオイ。

「おいまで、なんで脱ぐ!?!」

「長姉たるもの、妹に先を越されるわけにはいかないのよ!!」

「なにのだよ!？」

さすがに色々誤解がやばそうだったので、無理矢理力を入れて立ち上がり、陽炎の手を掴む。

ちなみに浜風はいつの間にもやら体勢を変えて、俺の背中にへばりついている。

「離して提督!!」

「とにかく落ち着けて、ぎゃあ!!」

そしてなぜだか陽炎はジャンプして俺の顔に胸を押しつけてきた。

「どう提督、私だってそれなりにあるでしょ!! さあ吸って!!」

「なにをだよ!!」

「つふ、どうやら吸うものとして認識されてないみたいですねえ」(勝ち誇った顔)

「浜風えええええ! それをいったら戦争でしょうが!!」

こいつらは一体なにを競ってるんだよ!!

「ヌイツ!! つは、心配できてみればなんて羨ましい状況に、加勢します!!」

そしてなぜだか唐突に現れた不知火が、さらに追加で絡みついてくる。

「んがー!! いい加減に離れろー!!」

さすがに我慢ならず、三人を引きはがす為には振り回す。
それでも離れずにしがみついている三人、おいやめろ、腰にくるだろ。

お前ら知らんかもしれんが、俺、病み上がりなんだよ!!

オマケ | 陽炎会議録NO. 5 |

(※NO. は掲載順の番号となり、時系列とは一致しません)

薄暗い部屋、円卓を囲む二十人近い少女らしい者たちがいた。

らしいというのは、なぜか全員が顔を隠すための先の尖った白い被り物をかぶついで、その顔がよくわからないからだ。

そして被り物の額部分にはそれぞれ番号が振ってある。

あと因みに時間軸的には彼女たちの提督が、風邪で草野球の審判にいけなくなつたという連絡を受けた当日である。

「今回の緊急議題は提督が風邪をひいちやつた件よ」

その中で『1』と額に書かれた数字の被り物をかぶつた少女が、被り物の上からでも感じることでできる、本気オーラを放出しながら議題を提示する。

「知つてのとおり私たちの魂のルフラン、生命のカーニバルともいえる週に一度の草野球に提督が風邪をひいて来られないという超弩級のアクシデントに見舞われたわけだけど……それよりも重大なことがあるわ。提督の看病に……行くか、行かないかよ」

神妙な顔（被り物で見えない）で頷くメンバーたち。

普段は余裕を崩さないメンバー含め、誰もがガチな真剣フェイスである。

「提督には家に来ないようにつて言われたけど、それは私たちに風邪がうつらないようにつていう提督の気づかいから。でも私たちは風邪なんてひかない。なら、負担にならないよう一人だけでも看病の為に行くべきなの。提督の命令に逆らうのは身が引き裂

かれる思いだけど、提督の身を案じるなら提督の為に料理したり、おでこの濡れタオルを替えてあげたり、膝枕してあげたり、子守歌を歌ってあげたり、着替えを手伝ってあげるついでに引き締まった身体の汗を拭く手伝いをじゆるりするのはなんらおかしいことではないしハアハア、むしろ推奨されるべき行動だわ」

途中からものすごく早口になる『1』の少女の言葉、心なしか息も荒い。

最も室内にいる全員の息も心なしか荒い、なんでですかねえ……。

「で、問題は……誰が行くかよ」

だが『1』の少女がその言葉を発した瞬間、先ほどまで上昇していた部屋の空気が凍る。

そして次の長姉の発言次第では、この場が戦場になるであろうことを感じさせる空気に変化した。

普段は魂と絆で結ばれた姉妹たちだが、誰もが席から立ち上がってお互い微妙に間合いはかり始め、一部のものは缶の火を入れる準備まで始める。

そんな一触即発な状況。

「落ち着きなさい、誰が行くかは公平に決めるわ」

その言葉に、ふっと力を抜いて椅子に座るメンバーたち。

さすが長姉、威厳がパナイ。

「方法は投票にするわ、一番提督の看病に適しているメンバーをよく考えて、各々が票を入れなさい。ただし、自分以外に投票すること、いいわね？」

異存はない、というふうに頷く一同。

そして投票用紙が一人一枚用意され、配られる。

事前取引ができない、ある意味公平でもある状況。

だが、それでも瞬間的に、それぞれのメンバーの間で激しいアイコンタクトが行き交う。

『ねえ舞風、実は陽炎会議提督規約の⑤に違反したでしょ？』

『そ、そういう萩風だって提督のスプーンを!!』

『秋雲、この前提督が使ったカップで、コーヒー届けてあげたわよね?』

『初風え、帰り際にあの非売品同人誌持って行ったでしょ……』

『なあ嵐、提督がおいでいった下着に興味はないか?』

『ばっ、ばっか磯風、つく、卑怯だぜ!!』

誰もが視線を交わしあい、海戦並に激しい火花が散り、牽制と交渉が行われる。

嘘、駆け引き、交渉、共闘、敵対、思考能力を限界まで駆使した、なんでもありの、目

に見えない仁義無き工作戦が室内のあちこちで行われる。

その結果、なぜか不思議なことが起った。

『まあ、みんな長姉である私を選ぶのはわかってるんだけどねー、どうせだし一票も入らなそうな子に入れておいてあげようかしら……』

『スポーツ医学を修めているこの不知火が選ばれるのは間違いないわ、くくく、今回のことに関しては誰よりもこの不知火が最適！ そうね、おこぼれはあのなんちゃって駆逐艦に……』

『まあうちの料理の腕前は皆知ってるやろうから、うちが選ばれるのは間違いないやろうけど、もしものことがあるさかいな……』

なんて感じで自分が選ばれると信じて疑わなかったメンバーが、なぜか消去法で胸部装甲の豊かさ故に微妙に嫉妬を集めていたナンバー『13』に投票してしまったのだ。

結果、一番多く票が集まったのはナンバー『13』。

ちなみに二番目はナンバー『11』、皮肉にも質量はパワーというのを証明してしまっ

た。
「ふ、ふふふ、ふふふ……っは!? しよ、勝利に浮かれるほど素人ではありません。勝っ

て兜のなんとやら、です。ふ、ふふふふ……」

うれしさが限界突破してしまったのか、テンションがおかしいほうに振り切れてしまったナンバー『13』。

このあと勝利確定BGMが流れる中、拳を掲げたナンバー『13』の胸が揺れ、なんとしてもその座を奪おうとする勢力と、おぼれに預かろうとする勢力がぶつかるといふカオスな状況になり、ナンバー『13』が「さあ、始めます。駆逐艦浜風、突撃します！」と叫びながら窓を突き破って逃げ出し。

それをナンバー『12』と『16』の即席タッグが追ってきて、それを阻もうとするナンバー『7』と『19』とバトルになったり、ナンバー『3』と密約を結んでおかゆを用意してもらったりと、ドツタンパツタンなアクションが巻き起こる……のだが。

文字数の関係で詳細は省く。(メタイ)

あと当然っっちゃ当然なのだ。

そのどったんばったん劇の果てに、浜風がああキツチンに立っていた事実。それを彼女たちの提督は知るよしもないのであった。

『僕』と『正規空母：G r a f Z e p p e l i n』

この世界は一度滅びかけたらしい。

しんかいせいかんという、怪物が現れて世界をめちやくちやにしたんだ。

けどどこからか現れた艦娘と、その辺にいた提督と、あと沢山の人たちが力を合わせてしんかいせいかんをやっつけて平和を取り戻したんだって。

その後、艦娘たちは妖精さん——

「なあ、深海棲艦の模型があるところ先に行こうぜ」

「あ、うん。いいよ」

話は変わるけど、今日は校外学習で艦夢守市の戦史時代博物館にきてる。

この博物館は、深海棲艦と戦争をしていた時代の写真や資料、復元した模型や当時使ってた色々な物、そして関係がある美術品なんか沢山展示されてたり貯蔵されてる、すごく広い博物館なんだ。

行く前は退屈だと思ってる友達も多かったんだけど、最初に博物館の広い庭で上演された、戦史時代の劇がすごくくて、みんな一目で夢中になった。

当時の提督と艦娘たちが深海棲艦と戦う内容の劇で、役者さんで本物の艦娘でもあるお姉さんたちが、すごいアクションとはくしんの演技でみんなの心をつかんでしまったんだ。

もちろん僕も、夢中で見てた。

『川内』っていう艦娘のお姉さんが、何人かの艦娘を率いて庭にある大きな池の上を走るとこもすごかったし。

提督役のおにいさんと、もう会えないかもしれない別れのシーンで抱きしめ合うところなんか、すごくかんどうした。

ちよつとだけ提督役のおにいさんの演技がぎこちなかった気もしたけど、それでも当時とても大変な戦いがあったんだなって、そう思えた。

劇が終わったあとは自由に博物館を見て回って、時間になったら集合してバスに乗って学校に帰るといふ流れ。

放任主義って思ったけど、あとできちんと作文を書かなければいけないので、実はしつかり見て回らないととてもマズイ。

なぜなら担任の先生は、艦娘関係となると本気と書いてマジになってしまうからだ。

もし適当な内容を書いてしまうと、さらに十倍くらいの作文を書く羽目になってしまう。

そんなわけで、友達の健太くと一緒に博物館の一番大きな中央の入り口に向かう。博物館に入って最初に目についたのは、入り口のホールの真ん中に展示されてる、大きな絵……というか、壁像っていうのかな。

海の中を泳ぎ回る女の子たちがたくさん彫られてて、みんなすごく楽しそう。

海の中にいるし、戦史時代博物館に飾られてるので、これは潜水艦の艦娘さんなのかな。

「なんか、スゲーな」

「うん……」

書いてある説明をみると、どうやらこの壁像は『ひまわり』という人が作った『別れ』というタイトルの作品らしい。

戦争が終わってしばらくたった、区切りの年の慰霊祭のために作られたモニュメントというやつらしくて、それを会場から移設したんだとか。

僕たちはしばらくその壁像を見てたけど、ふと、こつちを見ている誰かの視線を感じる。

振り向くと、僕と同じくらいの背の女の子がこつちを見てた。

すごく色の薄い肌と、長い金色の髪に、曇り空みたいな薄青色の目。

最初は後ろの壁像を見てるんだと思ったけど、その女の子は僕に向かって手招きをす

る。

なぜか僕は、その女の子がついてきて欲しいんだって感じた。

後ろで壁像を見続けている健太くんを置いて、僕はその女の子を追う。

どうして友達を置いてって思うけど、そのときはなぜか頭から抜け落ちてたんだ。

しばらく追いかけてっていると、順路の看板や標識が無い通路に出た。

博物館には順路っていう、迷わないように順番に見て回れる道がある。

でもこの博物館はとても広くて、そういうのがない区画もあるらしい。

僕は女の子の後を追って、さらに入り口から離れた奥のほうに進む。

奥のほう、奥のほう、まるで石炭の袋のような暗いほうに。



ふと、先生が出発前に言っていたことを思い出す。

この博物館には、迷子の子供を導いてくれる妖精と、迷子の子供を食べてしまうお化けがいるらしい。

どっちも金色の髪だから判断が難しいので、もし迷子になったときは落ち着いて、近くの大人の人に助けて貰いなさいって。

妖精やお化け相手に、妙に現実的な対応を言っていたような。

……。

しまった、もしかしてこれはマズイのでは？

そんなことが頭に浮かんだときには既に手遅れだったんだ。

幾つもの階段に、幾つもの分かれ道、幾つもの扉。

細い通路や、大きな絵の後ろにある隠してあった抜け穴。

気がつけば僕は、完全に今どこにいるのかわからなくなってしまうていた。

おまけに女の子ともはぐれてしまい、周りには誰もいない。

しかも今いるのはほとんどなにも見えない、暗い通路。

途方に暮れそうだけど、立ち止まっても仕方がない。

なので僕は、奥に見える赤い光のほうに向かう。

近づくと、その赤い光は扉の上についているランプだった。

赤城さんの病院の手術中になると、赤く光るランプに似てる気がする。

どうしよう、いまさらだけど、勝手にドアを開けたり入ったりしていい部屋なのかな。

僕は少し悩んでから、鉄で作られた重いスライド式の扉を頑張つて開く。

「うわ……」

そして現れたのは、ランプのような薄い光で照らされた、なんだかすごい部屋だった。

部屋は図書室にあるような大きな柵で埋め尽くされてて、そこには沢山の紙の束や、書類をまとめた大きなバインダーとかが、無造作に並べられたり積み重ねられてる。

柵以外にも丸められた地図のような大きな紙が、沢山のかごの中に入ってる、その紙の筒には一つ一つなにを示すのかよくわからない数字や記号が書かれてた。

あと別の柵には、なにが入ってるのかよくわからないガラスの入れ物も沢山並べられてる。

理科室の標本で似たようなのを見たことがあるけど、なにが入ってるのか全くわからない。

僕もつと見たくなって、つい部屋の中に入ってしまふ。

部屋の中をゆっくりと進むと、なんとなく部屋の間がわかつてきた。

多分だけど、ほんとには教室くらいの広さの倉庫なんだろう。

壁はレンガで覆われてて、天井は木なんだけど、けっこう高さがある。

天井には木製の大きな扇風機みたいなのがゆっくり回ってる、他にもクジラやシャチみたいな大きな動物の剥製みたいなのも吊してある。

すごい迫力、これでもしかして深海棲艦の模型なのかな。

部屋の中央には、僕の背よりも大きな地球儀が置いてある。

表面にはすごく沢山の線が引かれてて、他にも色々な場所にメモのような紙が沢山貼

られてる。

なんだろう、もしかして世界にある、なにかを探してたのかな？

さらに奥に進むと、社長さんが使うような大きな机や、なんだか手術室にありそうなステンレスの大きな台、水道やコン口のあるキッチンみたいな場所も。

大きな台の近くのガラス扉のついた棚には、なにに使うのかよくわからない不思議な形の工具や刃物が沢山並んでる。

たぶん、見たことないけど、物語に出てくる魔女だったり、それか学者さんの研究室ってこんな感じなんじゃないかなって思う、そんな部屋。

そしてなにより、不思議な匂いがする部屋だなって思った。

古い紙の匂いと、赤城さんの病院でたまに通りかかった部屋から香ってくるような薬の匂いの混じった感じで、えっと、なんだろう。

でも薄い匂いじゃなくて、もっと生っぽい感じの匂いも、これは……血の、匂い？

よく見ると部屋の奥のほうに、入り口とは別の扉がある。

匂いはそのちよつとだけ開いた扉の向こうから流れてきてるみたいだった。

僕は思わず、つばをゴクリと飲み込む。

なんだか、あの扉の向こうには行ってはいけない気がした。

でも、どうしてかその扉のほうに向かって足をすすめ——

「おや……これはこれは、こんな所に珍しいお客さんだ」

突然、入り口のほうから冷たい声が聞こえて、慌てて振り返る。

そして心臓がバクンツ！　って跳ねるくらい驚いてしまった。

だってそこには……

まるでお化けみたいな女の人を立てていたから。

『正規空母：Graf Zeppelin』

女の人をお化けみたいっていうのは、自分でも失礼だと思うんだけど。

赤と黒のラインが入った真っ白な帽子と服。

その軍人さんみみたいな服の、白い部分と同じくらい白い肌。

左右からたれてる長い白金色の髪。

そしてすごく美人なのに、なんだか、美人すぎて怖いのか、怖すぎて美人なのか。

どっちなのかわからない、作り物のような綺麗な顔。

そんな綺麗な顔についてる灰色の目でじつと見つめられると、とても怖くて。

本当にお化けみたいって、思ってしまったんだ。

「まあこんな所にいる以上、望んでこの場所に來たか、迷い込んできたのかの二つに一つだろうが。さて……君はどちらかな？」

「す、すみません、部屋に勝手に入ってしまった。あの、僕、迷ってしまった……それに鍵が掛ってなかったのだから」

「ほう、それは不思議だな」

お姉さんの灰色の目がすつと細くなる。

「え？」

「この部屋の出入り口はここだけで、おまけに扉には鍵が掛っていたはずなんだがな」

そのお姉さんは、開いていた扉をゆっくりと閉めてポケットからとり出した鍵を掛ける。

初めて見るけど、どうやら扉の内側からも外側からも鍵を使ってロックする扉みたいだ。

そしてお姉さんはゆっくりと僕のほうに歩いてきた。

ゆっくり、ゆっくり、コツンコツンって、固い床をならしながら。

沢山あつた棚の一つに背中がぶつかる。

その衝撃で、棚から何枚かの書類がはらりと落ちた。

目の前を舞い落ちる書類。

それ見て、僕は思わず後ずさってたんだって気がついた。

お姉さんは、落ちた書類には目もくれず、僕の目の前で立ち止まる。

そして、とつても冷たい目で僕を見下ろした。

「あ、あの……」

「んっ」

「ぼ、僕は食べても美味しくないですよ……」

「……ふむ」

先生が言っていたことを思いだして、自然に出てしまった僕の言葉に、白いお姉さんは片手を顎に当てて考えるような仕草をする。

そしてゆっくりとかがんで僕と視線の高さを合わせると、こう言った。

「本当かどうか確かめるために、鼻か耳か……それとも目玉か。少し千切って食べてもいいか？」

「え!？」

一理ある気がする。

僕は確かに僕の味を知らない。

でも、食べられるのは困ってしまう。

「冗談だ」

冗談だってこれっぽっちも思えないような無表情。

なにも言えない僕をしばらく見ていた白いお姉さんは、ゆっくり立ち上がってキッチン? のような場所に移動する。

そしてヤカンに水をくんで火に掛けると、コーヒーの豆を小さな機械に入れて挽き始めた。

ゴリゴリゴリ

電気で動くと思っただけど、どうやら手で動かすものだったらしく、白いお姉さんはなんとというか、すごく正確な速度で機械に付いているハンドルをグルグルと回す。

「そう脅えるな。この場所に来られたのは、その資格があったということなんだろう。なら安心するといい、すぐにどうこうはしないさ。君が本当にただの迷い込んだ子供な

ら……だがな」

「あ、あの僕、本当に迷って……」

「ああ、それはさつき聞いた。だが私にも立場というものがあつてな、幾つか君に聞かなければいけないことがある。心配するな、話をして問題がなければ、ちゃんと外まで連れて行つてあげよう。このグラーフ・ツエツペリンの名にかけて約束する。……君が本当に“ただの迷い込んだ子供”ならな」

同じ言葉を、強調するようにもう一度口にする白いお姉さん。

あとどうやらこのお姉さんの名前は、グラーフさんというらしい。でも立場つてなんだろう、もしかしてとても偉い人なんだろうか？

「その、お姉さんはもしかして……この館長さんだったりするんでしょうか？」
ふとそんなことが浮かんだ。

何故ならこの博物館で一番偉い人となると、それは館長さんだからだ。

「館長？ それはどういう意味だ？」

どういう意味つて、改めて聞かれるととても難しい気がする。

館長という言葉の意味は、国語辞典にはどう書いてあるんだろうか？

わからないのでなんとか知っている内容で説明を考える。

「えつと、本や資料がいっぱいあつたり、絵や物がいっぱいあつたり……なんだろう、世

さつきと同じ、冗談だつてこれっぽちも思えないような無表情。

もしかしてグラーフさんは怒ってるんだらうか。

僕はなにか、言つてはいけないことを言つてしまったんだらうか。

グラーフさんは機械で挽き終えた粉を、コーヒーを作る為のカップのようなのに、一杯ずつ、丁寧にゆっくりゆっくり、スプーンですくつて振りかけるように移していく。

「さつきは驚かせたな、私だつて館長の意味ぐらいは知つてゐる。ただ、君の説明があまりにも的を射ていてつい笑つてしまった。——……と、言うのもな、ここは一人の憐れな男の頭の中のような場所なんだよ」

僕はぐるりと部屋を見渡す。

あちこち無造作に並べられてる紙の束だけど、それぞれになんだか、不思議な規則性があるような気もする。

なんでそう思つたかつていうと、棚やかご、ガラスの入れ物、色んなところに数字や記号が書かれていたからだ。

「頭の中……」

ふと、さつき床に落ちた書類の一枚が目に入る。

『調査結果45：戦闘環境（ストレス・疲労等による性能の変化状況）』

個体：観察対象1号 駆逐艦 ■■■

状態：重度の疲労状態 分類名称『赤』

コンディション値：推定 15

補足：観察対象1号は■■■■海域にて

■■■■の攻撃により轟沈。

難しい漢字が沢山あつて意味はわからないけど、なんだか少し怖い。

「そこに座りたまえ、少年」

コーヒーの粉を移し終わったグラーフさんは、大きな机の椅子を動かして僕に向かって座る。

そして僕には近くにあつた丸い椅子に座るようにすすめてきた。

言われたとおり、僕は椅子に座る。

「改めて名乗ろう。私は航空母艦グラーフ・ツェツペリン。ここに所属する正規空母の艦娘だ」

「あつ、ご丁寧にありがとうございます。えっと、僕の名前は——」

「ああ、いい、君は名乗らなくていいんだ少年。君が名乗るのは、私がそれを聞いたときだけだ」

すつと人差し指を立てて、口元に当てるグラーフさん。

なにか違和感がある、えっと、なんだろう。

あれ？ グラーフさんは僕に名乗った？

大切な自分の名前であるはずの艦娘名を？

でも、なんだか赤城さんや加賀さんや、翔鶴さんに瑞鶴さん、今まであつてきた僕を提督だつて言ってくれたお姉さんたちとはどこか、様子が違うような。

「さて、単刀直入に聞こう。君は艦連か例の残党どもか、もしくはそれ以外の組織、その他の個人に送り込まれた存在か？」

「えつと、違います」

「……次の質問だ、君がここに来た目的はこの部屋の破壊、もしくははなにかを盗む為か？」

「え、ち、違います」

一瞬なにを聞かれたかわからなかったけど、なんとか答えられた。

でも、グラーフさんは僕の言葉が信用できなかつたのか、立ち上がって僕の目をのぞき込む。

息が掛るような近い距離、グラーフさんは更に僕の手を取って、手首に指を当てて、なんだろ、わからないけど脈拍を数えてるように思う。

「……嘘ではないか。いいだろう、もし君が嘘をついていたなら、その年で相当特殊な訓練を受けたか、運命によって授かった天性の才を持つ嘘つきということになるな

……」

なんだかとても物騒なことを聞かれてしまった。

いまさらだけど、ここつて本当にとんでもない場所だったのかな……。

「安心するがいい、質問は以上だ。ひとまずは、だがな……まあせっかくだ、コーヒーができるまで少しおしやべりでもしないか？」

安らいだように感じたけど、なんだろう。

グラーフさんはまだどこか、緊張を解いてないような。

でも考えても仕方がないので、僕はその言葉に頷く。

それを確認してグラーフさんは椅子に戻る。

そしてゆっくりと腰を下ろすと、手と足を組んだ。

「ではなにか話題を……そうだな、さっきの話の続きというわけではないが。少年、君は運命というものを信じるか？」

「え、はい」

「おや？ 君は幼いのになかなかはつきりとした価値観があるようだな」

おばあちゃんが話していたことを思い出す。

私たちはみんな、運命を生きているって。

最初はどういう意味かわからなかったけど、艦娘であるおばあちゃんのお母さんのこ

とを教えてくれるとき、必ずその言葉が出てくるので、いつの間にか僕もそう思うようになっていた。

「確かに、命あるものには誰しも、運命がある。生まれた命と等しい数、生まれた意味がある」

グラーフさんは僕のほうをじっと見ながら、淡々と口にする。

「ところでこの部屋の主であるその男は、いったいどんな人間で、どんな運命を歩んだと思う？」

それは答えなきやいけない質問なんだろうか？

でも、怖くてそれを聞く勇気がない。

なので、僕はその質問の答えを考える為に、改めて部屋を見渡す。

グラーフさんの話し方からして、おそらく、もういなくなってしまった人の部屋。

沢山の書類、沢山の本、沢山の地図、沢山のビン。

手術台のような設備、大きな机、深海棲艦の模型。

なにかを隠すように割り振られた分類番号。

そしてなにかを探していたような痕跡がある地球儀。

「えっと、学者さんみたいな頭のいい人だった気がします。でもその……どこか、怖い人だったんじゃないかなって。あとなんだろう、なにか隠すのが上手そうで、そんな感じ

も……学者さんはなにかを調べたり探したりする人のことですよね。ならその、なにかをみつけれられたか、みつけれなかったか、そんな運命でしょうか？」

僕の考えを聞いて、グラーフさんの揺れていた足がピタリと止まる。

そして、ちよつとだけ、どこか驚いた表情をうかべた。

「——君は幼いのに、実に観察力がある。そして考察力も……な」

グラーフさんは組んでいた足を組み替えて、机を指で叩く。

トン、トン、トンって。

そしてなにかを思い出すように、眉間にしわをよせて目を閉じる。

それはまるでなにか辛いことを思い出すようで——

「だが、あまりわかったようなことを言うのは感心しないな？」

すぐく、すぐく冷たい声、背筋が凍るようなグラーフさんの声。

僕は驚いて思わずビクツてなり、グラーフさんは目を開いて僕を睨む。

「いや、わかっているからこそ忍び込んだのか？ 確かにこの部屋の主であった男の正

体を知っていたなら、ここにあるものの価値がわかるだろうな」

「ち、違います、僕は本当に——」

「黙れ」

怖い。

言葉の意味ではなく、グラーフさんそのものが怖い。

僕が子供でも大人でも、男でも女でも、弱くても強くても。

どんな存在だったとしても平等に刺さるような、そんな鋭い怖さ。

まずい、グラーフさんは確実に怒ってる。

「話を戻そうか……そうだ、そうは言ったものの、悔しいが君の考察は正しい。この部屋の主はな、難解な数式すら解明できる頭脳。無垢な子供のような残忍さ。どす黒いタールのような執念を抱えながら、それを微塵も感じさせないような仮面をかぶることができ。口がうまく、周りは元より自分すらだまし抜けるような精神の持ち主だったよ」

その暗いなかかが這い回るような言葉を聞いて、僕はまるで心臓が掴まれた気持ちになった。

グラーフさんが、その人にどんな感情を持っているのかわからない。

でも、たぶん僕には一生かかってもわからないような、複雑で恐ろしく重い感情だと思ふ。

いつのまにか、グラーフさんの視線は僕ではなく、ここにはいない誰かを見てるように感じる。

「騙されてるとも知らず、誰もが男を立派で優秀な人間だと口にしていたな。ああ……だから世界は男を利用しようとした。他人など嫌い、見下し、己の優秀さを自覚して世

界の隅で静かに暮らしながら優越感に浸っていられば楽だったろう。そう男がそう望めば私たちだつて共に……。だが運命が男を逃がさなかつた……。しかし男とてただで利用されてやるような可愛い存在ではない。いや、なかつたはずなんだ、そうさせるものかと私たちも……。その結果があれか？ 何故だ、男は自らの運命を予測できたはずなのに、それを迎え撃つつもりだつた？ それともなにかに利用した？ まさか愚かにも受け入れたのか？ それとも男の望みは叶っていたのか？ それを知りたい、だがもう知ることはできない、できない、できない、できない。——……。ところで君は……。あの結末を、その愚かで憐れな男にふさわしい運命だつたと思うか？」

グラーフさんがなにを言っているのか全然わからない。

僕しかないはずなのに、誰に向けて話してるのかも。

すぐく早口で、ずっと無表情で、口元だけが動いてて。

「え、えつと？」

なにも感情なんてないような表情なんだけど、その、やっぱりすぐく怒つてて、あと悲しそう。

そして僕の答えを聞かず、グラーフさんは突然立ち上がつて叫ぶ。

「ふさわしかったに決まってる！ 何故なら誰も彼もが男を讃えたじゃないか！ 男の犠牲で戦争に勝てたと、尊い犠牲だつたと！ だが……。本当にそうか？ 戦争が終

わって、月日が流れた今となつてはどうだ？ あの愚かで憐れな提督のことを、そして一緒にいった彼女たちの本当の姿を、今、生きて覚えているのは何人だ?!」

両手を高く広げて、まるで世界に問いかけるような。

それまで見てたグラーフさんとは思えないような、悲痛な叫び声。

「考えても、悩んでも、笑つても無関心に時間は進む。だから辛かった過去を思い出し、男がいなくなつた現実も受け入れて、前を向く方が建設的……確かにそうだな!! だがそう簡単に割り切れるものではない!! 誰もが男を過去のものにして忘れることができるように、誰もが前に進めるわけじゃない、誰も、彼もが!!」

火に掛けてあつたヤカンの水が沸騰を始める。

温度が上がることに大きくなるピーピーって音。

「ああそうだ、忘れられるものか、忘れてやるものか!! あの、愚かで憐れで、かわいそうな『私の提督』のこののなにもかもを!! だからここにあるものは渡さない!! ここにあるの、全て!! 誰にも渡してなるものか!!」

限界まで大きくなったヤカンの音が、部屋に響き渡る。

グラーフさんの大きな声と、ヤカンの大きな音が合わさつて、頭の中が変になりそうになる。

でも、それ以上に、グラーフさんの悲しい感情が伝わつてきて……。

「そうさ、だから私はここを守るんだ……」

すつと、グラーフさんの心の波が落ち着くように、静かな声に戻る。

さつきまでの凍るような冷たい声でもなく、火山が噴火するような声でもなく。

ただ、なにかを諦めたような、疲れた、静かな声に。

「全てを秘めて己と周りを騙し続け、なにかを探して探して探して探して、その果てに海の藻屑と散った、愚かで憐れでかわいそうな私の提督の……頭の中のようなこの場所をな」

グラーフさんはコンロの火を止めて、やかんのお湯をコーヒーを作る機械に注いだ。

ちよつとずつ、ちよつとずつ、ゆっくりとたらすように。

まるでそれは、グラーフさんが泣いてるように見えた。

「……あ、あの、聞いてもいいですか？」

「なんだ少年、なにか疑問か？ それともお得意の考察か？ いいだろう、言いたいこと

があるなら今のうちに言っておけ」

グラーフさんの刺すような言葉に、僕は怯む。

確かに今から僕が聞くこととすることや言いたいこと。

それはグラーフさんにとっては、大きなお世話なのかもしれない。

もしかしたらまた、グラーフさんを怒らせるかもしれない。

でもやつぱり、これは聞いたほうがいい。

そして言ったほうがいいことだって、思う。

「えつとですね、他の人はともかく、お姉さんもその男の人……いえ、グラーフさんの提督さんのことを……その、愚かで憐れで……かわいそうって、思ってるんですか？」

「何度もそう言ったはずだが？」

僕が聞いたことに、グラーフさんはその通りだつていう答えを返す。

でも、やつぱりそれは嘘じゃないかなつて思う。

なぜなら、僕たちがいる世界では運命の存在を証明することはできないけど、運命の存在を信じることはできる。そして運命なんて無いって必死に否定する人ほど、運命の存在を強く感じて、それが怖くて必死に否定してるように思う。

だから、僕は思ったんだ。

「でも、グラーフさんは心のどこかで、そう思っていないから、そう思うのが怖いから……だから苦しそうで怒ってるように見えるんです」

「……ほう、なにを根拠にその不愉快極まりない考えに至ったのか、どうか教えてくれな
いか？」

グラーフさんが険しい目で僕をにらみつけてくる。

さつきみたいに背筋が冷たくなるような声で聞いてくる。

そして、僕の襟を掴んで締め上げる。
苦しい、とても苦しい。

手加減してくれてるのか、なんとか喋ることは出来る。

でも、もう黙ってしまいたい。

でも、やっぱり言わなきゃいけない。

昔おばあちゃんに、きらいだつて言つてしまったことがある。

僕は後で、そのことをとてもとても後悔した。

だから、好きな人のことを悪く言つてしまふのは、とても悲しいことのはずだ。

「うっ、ぐう……こ、根拠とか、僕も上手く言えないんですが……僕にはグラーフさんが、その提督さんが愚かで憐れでかわいそうだったからつて、同情の気持ちだけでこの場所を守つてらっしゃるようには見えないんです。……少なくともグラーフさんはその提督さんのことを、今でも大切に思つてるように思えます」

グラーフさんが何度も何度も、彼女の提督に向けて言つてる、憐れだつて、愚かだつて、かわいそうだつて言葉は、そう思い込もうとするために言つてるんだと思う。

でもグラーフさんは今でもその男の人のことを、とてもとても、すごい人だつて、憐れなんかじゃないし、かわいそうでもないつて、そう心のどこかで感じてるはずなんだ。だけど、きっとそう思えなくなるようなことが、グラーフさんに起きたんだと思う。

それがなにかはわからないけど。

「それにこの部屋を見ても、グラーフさんの話を聞いても、その提督さんがどんな最期を迎えられたにしても、とつてもすごい人だったんだなって、そう思います。確かに僕はその提督さんの運命の終わりが、どうなったのかは知りません。でもやつぱり、グラーフさんの提督さんはきつとすごい人だったはずですよ」

グラーフさんが言うには、僕には観察力と考察力があるらしい。

なら、僕がそう思ったなら、それはグラーフさんにとつての根拠になるはずだ。

「そして……もしグラーフさんにそう思ってもらえてたなら、その提督さんは誰がなんと言おうと、愚かでも、憐れでも、かわいそうでもないはずなんです」

「……」

あ、しまった。

つい勢いで、色々と言ってしまった。

わかったようなことを言うなって、さっき怒られたばかりなのに。

僕の言葉に呆れてしまったのか、グラーフさんはゆっくりと手を離してくれた。

「……あの、注意してもらったのに、またなまいきなことを言ってしまったてすみません。

あと、その、そんな大切な場所に勝手に入ってしまったて、本当にごめんなさい」

なので僕は改めて頭を下げる、グラーフさんの大切な人の、その思い出の場所に無断

で入ってしまったことに。

グラフさんはそんな僕をしばらくじっと見ていたけど、ふっと視線を外した。

「はっはっ」

そしてグラフさんは天井を見上げて、ほんの一瞬、煙を吐くように笑う。

ちよつとだけ目に涙をためて、さつきよりすごく短い笑い声で。

でも、さつきよりすごく自然な笑い。

しばらく天井を見上げていたグラフさん。

やがて、さつきの姿が幻だったように、無表情の顔に戻る。

「君は幼いのに、実に観察力がある。そして考察力もな。素直に謝ったことに免じて、失

言と部屋に入ったことは大目に見てやろう」

「……ありがとうございます」

「そうだ、君の分のコーヒーも淹れてやろうか？」

「……僕コーヒー飲めないの」

「それは残念だ、次までにミルクと甘い御菓子を用意しておくでしょう」

ほんの少し、ほんの少しだけど、さつきまでと違う、どこかトゲがとれたような雰囲気。

そしてグラフさんは壁に掛けていた電話を取って、ダイヤルを回す。

「プリンツか？ 時間が無いから手短かに話す。迷子の子供をみつけてな、悪いがこちらに誰か適当な……いや、口が堅くて信用できる者をよこしてくれないか。……大丈夫だ、ただ迷い込んでしまった子供だ、私が保証する。……ああ、わかつてる。だがもう“提督”は必要ないだろう？ ——……ああ、事が大きくなる前に逃がしてやりたい、頼む」

それから色々と話してたけど、内容的にすごく頑張ってお願ひしてくれてる感じ。改めてなんとというか、本当にとんでもない場所に僕は迷い込んでしまったらしかった。

「運がよかったな少年、君はここを生きて出られる」

電話を切ったグラーフさんは、恐ろしいことをさげらりと言う。

「……あの、もしかして生きて出られない可能性があつたんでしょうか？」

「ああ、そうだ」

「じよ、冗談ですよね？」

「……ふふつ、ああ、冗談だ」

不思議な笑みを浮かべ、グラーフさんは扉まで歩いて行つて鍵を開ける。

そして重い扉を軽々と開いて僕のほうを見た。

「ここ出てまつすぐあちらに行け、迎えを呼んだから誰かがいるはずだ。あと、この部

屋に入ったことは絶対誰にも話しては駄目だ……わかったか？」

「はっ、はい」

「よろしい」

「あの、その……ありがとうございます、お姉さん」

「いいさ。あと名前も今更だな、グラーフと呼べばいい」

「えっと、ありがとうございます、グラーフさん」

「うん」

僕がお礼をいうと、グラーフさんは寂しそうに。

でも、確かにちよつとだけ微笑んでくれた。

色々聞きたいことがある気がしたんだけど、急いだほうがいいんだと思う。

グラーフさんが苦勞してくれたんだから、それは無駄にしてはいけないはずなんだ。

「ああ、そうだ言い忘れてた」

急いで扉をくぐろうとしたら、そつと首を抱くようにして背後から絡みつかれた。

耳にグラーフさんの温かい息がかかる。

驚いた僕が思わずビクリつてすると、グラーフさんは囁くように笑った。

そして僕の髪の毛に、整えるというよりも乱すように指を入れてくる。

「^{ありがと}D a n k e . 君のおかげでなにかわかった気がする、なにか……。これはお礼だよ」

チユツっていう音と、僕のほつぺたに柔らかい感触があった。

「……………じゃあな少年。いつか、ここではないどこかでまたあおう」

そう囁いたグラーフさんが、どんな顔をしていたのかわからないけど。

どこか、ずっと背負っていたものが下りたような優しい声に聞こえた。

そしてグラーフさんは振り返ろうとする僕の背中を押して、ドアを閉めた。



暗い廊下、扉の上の赤いランプ。

僅かな灯りしかない暗い廊下。

ちよつと前に通ったばかりなのに、ずいぶんと久しぶりにも感じる。

僕は少し怖かったけど、やっぱりここにずっと立っても仕方が無いので前に進むことにする。

「怖い？」

少し歩いて進んだ廊下の先に、僕が追いかけていた女の子が立っていた。

いや、突然現れたっていうほうがしっくりくるというか、思わずドキツとする。

この子がグラーフさんが言っていた迎えなのかな？

「君は……誰なの？」

僕の問いに答えず、女の子は歩き出す。

しようがなく僕は彼女の後を追う。

どれだけ歩いたのかわからないけど、ようやく一つの扉の前にたどり着いた。

「ハイ」

女の子は、案内はここまでで感じて足を止めて僕のほうを見つめる。

この女の子にも色々と言いたいことがあった気がするんだけど、きつと聞いてもなにも答えてくれないのはわかったので、僕はその扉を開ける。

すぐく眩しい、咄嗟に目をそらしたら、袖をクイクイって女の子に引かれた。

「まって……。ユーの提督から、貴方に伝言がある」

自分の提督。その言葉を使うのは艦娘の場合がほとんどだ。

この女の子も艦娘なのかな？

「例え妖精の気まぐれだったとしても、また、君のその姿を見ることができて嬉しい。どうか息災で。空の守護者、我らのスカイキャプテン………ウツシツシ」

「え？」

「ごめんなさい、ウツシツシはいらなかったみたい」

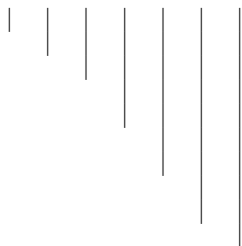
「いや、そうじゃなくてですね」

「じゃあ」

「あ、あのっ！」

彼女はトンツって、僕を押しして扉の向こうに突き飛ばす。

瞬間、周りの景色が不思議な光に包まれて、なにも見えなくなった。



気がつくと、僕は博物館の中にある小さな展示室の、古い写真の前に立っていた。

所々やぶれて欠けてたり、色も薄くなってるし、なにも説明が見当たらないんだけど、

沢山の水着の女の子たちが笑いながら歩いている、なんだかとても優しい感じの写真。

たぶん、戦史時代の潜水艦の艦娘さんたちの写真なんだと思う。

そして気がついた、その中に写ってる女の子の一人。

一瞬見間違いかと思つたんだけど、それはあの金色の髪の毛の子だつて。

どうして見間違いつて思つたかつていうと、その写真の中の女の子は陽に焼けててまるで別人みたいで、なによりさつきまで見ていた感じと違つて、とつても楽しそうに笑つてたから。

僕はもつとその写真を見てたかつたんだけど、僕を呼ぶ健太くんの声が聞こえてきたから、慌ててそつちに行くことにする。

「おま、どこいつてたんだよ」

その言葉に答えようとしてちよつとつまる。

妖精みたいな女の子を追いかけて。

不思議な部屋に迷い込んでしまい。

お化けみたいな女の人と話をした。

改めて思い返してみると、なんだか夢を見ていたような気分になる。

それにグラーフさんは言つていた、部屋に入ったことは誰にも言うなつて。

だから僕は……

「えつと、ごめん、迷つてた」

そう答えた。

「はあ？ まあいいけどさ、もうすぐ集合時間だからひとまず表に行こうぜ」
「うん」

深いことは聞かず、僕を許してくれる健太くん。

普段は空気読まないのに、大事なときだけ空気を読んでくれる僕の友達。

僕は健太くんと入り口に向かって歩く。

途中、庭で誰かに怒られてるびしょ濡れの女の子が見えた。

「ねえ、あれ」

「ん？ ああ、あの子あれだよ、*“大鳳”* って艦娘の。なんか庭の池に立ってなんだっけ、偵察機っていうのを飛ばそうとして失敗したらしいぜ」

「なんで偵察機？」

「さあ、捜し物でもあったんじゃないの？ なんか艦娘変わりの最中だったせいだったのか、うまくいかなかったみたいだけど。池の水が半分くらい舞い上がって、けっこう騒ぎになってたぜ」

「なんだか大変だったんだね」

詳しく聞くと、そのあと博物館の館長さんが慌てて飛んできて、お説教を始めたんだとか。

袖のない白いワンピース姿を着た茶色い髪のお姉さん、あの人が館長さんなのかな。

「あの人が館長さん？」

「そうみたいだぜ、あの人も艦娘なんだってさ」

そっか、やっぱりグラーフさんは館長さんじゃなかったみたいだ。



あのあと、集合時間には間に合ったんだけど、ほとんど時間が無くてなにも見て回れなかった、とてもマズイ。

作文の提出は休み明けなので、もう一回あの博物館に行くしかない。

でもなんとかお土産は買えたので、おばあちゃんに報告してからにしよう。

僕は休みの日にもう一回この博物館に行けるだけのお金が残っているか確認しようとして、ポケットにある財布をとろうとした。

すると、ポケットに入れた覚えのないなにかの冷たい感触。

不思議に思っ取り出すと、鈍い金色で薄い円の金属のようなものが出てくる。

なんだろう、懐中時計に似てるけど。

調べようといじっていたら、カチツと蓋が開いて赤と白の針が浮いてるのが見えた。

コンパス？

『……これはお礼だよ』

グラーフさんの言葉を思い出す。

これはグラーフさんが僕のポケットに入れた物なのかな？

ふと、乗っていたバスが街を見渡せる道に出る。

ここは『艦夢守市（かんむすし）』

大きな港があり、その港と街の周りをぐるつと山に囲まれている、そんな立地の場所。都会とまではいかないけれど、それなりに騒がしくてそれなりに穏やかな大きさの街。

そしてこの街には一つの噂がある。

それは提督適性者が集まるといふ噂だ。

この街には沢山の人間と、いるかもしれない提督適性者たちと、その噂を聞いてやってきた割と多くの艦娘たちが平和に暮らしている。

つまり、ここが僕の住んでいると——あれ？



艦夢守市にある、とある提督が住む家。

その家の一室に正座をしている正規空母の艦娘たちがいた。

もちろんみんな大好き正規空母の、赤城、加賀、翔鶴、瑞鶴だった。

「さて、一航戦と五航戦の皆様方。初めまして、あの子……いえ、皆様方の提督の『姉』である蒼龍です。姉といつても血縁的な意味ではありませんが、おばあさまからはなにかあったときの後見人としてご指名いただいている弁護士でもありますし、生まれたときから面倒を見てきたという自負もありますので、まあ、姉といわせていただきますので」

彼女たちの前に立つのは、ニッコリスマイルを浮かべる艦娘。

彼女の正体は、二航戦のやばいほうと呼ばれる、蒼龍。

彼女もまた、正規空母の艦娘である。

「皆様のことは弟から色々と聞かせていただきました、ええ、色々」

そう言つてニッコリスマイルを、より深く重く浮かべる蒼龍。

その迫力は常人が見たら冷却水を放水するレベル、バラスト全開である。

その証拠に加賀、翔鶴、瑞鶴の三人は、プルプルと震えている。

でも赤城さんだけは申し訳なさそうな顔で平常心、さすが一航戦のやばいほう。

あと改二実装おめでとうございます。

「まあ、皆様と同じあの子を提督に持つ身なので、色々と気持ちはわからなくもないんですけど。あの子が提督であることを受け止められる年齢だって……本当に思われたんですか？」

自らもまた、弟が提督である蒼龍は、そのことを弟には黙っていた。

まだ幼い弟が、艦娘と提督という難しい問題について、ちゃんと考えられる年になるまでは、姉と弟という関係でいたほうがいいだろうという配慮からだ。

もつとも、その配慮は完全に無駄になってしまった訳なのだ。

「あ、あのですね、蒼龍さん……」

恐る恐るといった感じで、トップバッターを飾った百万石の加賀が口を開く。

「お聞きしましょう、隠し撮りの写真を弟に見られて防犯笛を鳴らされた加賀さん」
蒼龍航空隊の急降下爆撃。

着弾、加賀さん大破。

加賀「飛行甲板に直撃。そんな……馬鹿な」

「えっと、それには理由がありました……」

続いて銀翼の姉鶴、翔鶴が口を開く。

「どんな理由でしょうか、なにもわからない弟を抱きかかえてどこかに連れて行こうとして、防犯アラームを鳴らされた翔鶴さん」

蒼龍航空隊の急降下爆撃。

着弾、翔鶴ねえ大破。

翔鶴「やられました！ 艦載機発着艦困難です！」

「ちよ、そんな言いかたって……」

その言葉に幸運の妹鶴である瑞鶴が姉の援護を開始。

瑞鶴航空隊全機発艦する。

瑞鶴「これが私の、決戦だから！」

「あら、初対面の提督に爆撃されたいのと言った方のお言葉を聞かせて貰いましょうか。デパートの中で提督を脇に抱えて暴走した瑞鶴さん」

蒼龍の防空ターン、対空見張りも敵として。よろしくねっ！

瑞鶴航空隊、だめです、艦載機全機、撃墜されました！

瑞鶴「か、艦載機がある限り、ま、負けないわ……」

「そしてなんでしよう、提督のベッドに潜り込んだ赤城さん。それと、おばあさまの手術の件は本当にありがとうございます、心からお礼を」

「あの、私はまだなにも……あと、その件については医師としては当然のことをしたままですので」

ちよつと困り顔の赤城さん、とてもかわい。

あと改めて改二実装おめでとうございます。

気分がとても高揚します。

「……はあ、ですがもう過ぎたことですし、皆さんこれからどうするか話し合われたとお聞きしてます。私もそれに加わりますので、改めて話し合ひましょう……。正規空母の艦種適性なんて前代未聞なので……。正直、私も皆さんが力になってくれるならすごく心強い部分があります……。飛龍はまあ、おいといて」

蒼龍的に真つ先に頼りにしたい艦娘的な相棒である飛龍だが、残念なことに彼女はまだ学生。

艦娘的にはともかく、社会的な力はほとんど持っていない。

いまは少しでも提督の艦娘全員の立ち位置を明確にして、結束と立場を強めたい。

戦後から長らく、艦種適性の提督は数例しか確認されていない、それほどまでに希少。

全体的に総数の少ない正規空母とはいえだ。

いや、正規空母の艦種適性だからこそその貴重さがある。

それこそ少し考えれば、それがどういふ価値を持つのか“子供”だってわかるはずだ。

「ともかく、まずはあの子になんて説明するか——」

蒼龍の声を電話の音が遮る。

話の腰を折られた蒼龍は、少し不機嫌な表情を浮かべて電話を取る。

電話は、赤城が院長を務める南雲病院からだった。

『無職男』と『駆逐艦：親潮』

無職だが無収入ではない。

ちなみに現在の収入は働いてた頃の月収、「自主規制」分の一くらい。

週休六日（たまに七日）の仕事でこれは美味しすぎる気がする。

……これ以上は考えてはいけない。

話は少し変わるが、先日、風邪をひいたせいで中止になった陽炎姉妹草野球。

その埋め合わせが今日ある、っていうか真つ最中。

そんなわけで勤勉な俺は、夏真つ盛りのクソみたいな日射しが降り注ぐ中、河川敷の球場で汗を流しながら審判の定位置についていた。

カゲロウ揺らめく球場では二チームに分かれた姉妹たちが、お互いしのぎを削って戦っている。

マウンドではちようどピッチャーの不知火が振りかぶり、バッターボックスにはそれを迎え撃たんとする嵐。

九回裏、ツーアウト、点差は一点。

その髪の色ちよつと派手過ぎないかと、こつそり思っているピンクの髪を揺らして放たれた不知火の速球は、嵐のシャープなスイングに捉えられた。

カキーンという甲高い金属音、打球はライト前に落ちる。

普段は仲良しだが、それとこれとは別問題といわんばかりな俊敏な動きで、ライトを守っていた舞風がワンバウンドした球をグローブに収め、一塁を守る秋雲に放り投げる。

人数の都合上、俺一人で本来複数人の審判が見る全部のポジションを見なければならぬ。

誤審の可能性があらうと、そして誤審をしようと、審判であるこの俺の判断は絶対である。

でも抗議は認める、その場合はジャンケンで決める。

そんな融通と機転が利かせられる素晴らしい審判である俺は、別にそこまでよくない目を見開いて、秋雲のグローブに球が収まっているのを確認し、高らかに宣言をした。

「アウトウツ!!」

九回を投げ切つてテンションが上がっていたのか、珍しく感情を全身で表現するかのようなガッツポーズをする不知火。

そしてマウンドに走ってきた秋雲とハイタッチ、さらにマウンドには内野だけでな

く、キャッチャーの黒潮や外野を守っていた舞風たちも集まってきて、皆で完投投手である不知火の胴上げを始めた。

青空まで届くように不知火を上げ、全員楽しそうに笑っている。

「ふう、接戦だったわね」

気づけば負けチームのキャプテンである陽炎が隣に居た。

手にはタオルが握られている。

派手に一塁ベースに突っ込んで、土まみれになった嵐の顔を拭く為だろう。

「嵐にや悪いが俺はホツとしてるよ、この暑さで延長戦はかんべんしてほしいからな」

打ち取られて戻ってきた嵐は、微妙に落ち込み気味の表情を浮かべていた。

元気のない嵐にねぎらいの言葉をかけつつ、頭の土を払う為にガシガシと撫でる。

不知火の球をあそこまで運べただけでも大したもんだ、俺なら空振りできるかも怪し

い。

「ちくしょう、不知火ねえの速球と、黒潮ねえのやらしいリードの組み合わせはキツイん

だよお」

嵐が弱音を吐く。

少し前に涙を見られたせいとか、弱気なところを見せることが多くなった気がする。

陽炎いわく、甘えてるようなもんだから特に気にせず接してやって欲しいとのこと。

「くよくよすんな、次がんばれ」

なので、お仕置きと土汚れの拭き取りも兼ねて、汗で湿った自分のシャツをめくり、嵐の頭を腹の中に包み込む。

「きやあああ！ 汗臭いいいいいい!!」

セクハラ全開どころか、下手したらおまわりさんこの人ですと言われる行為。

でもこうすれば、まあそんなことないとは思うが、負けたチームのメンバーたちが嵐に対してなにか思うところがあつたとしても、罰扱いに見えて緩和されるだろう。

「ははははは、悔やむなら打てなかつた自分を悔やむがいいー」

必死に暴れるも、なぜか抜け出そうとしない嵐の顔と、キューティクルに包まれた癖毛の毛のツンツンした感触を地肌に感じながら、嵐の頭をシャツの上から撫で回す。

が、途中ふと視線を感じて周りを見ると、なぜか陽炎姉妹たち全員がこつちを凝視していた。

一部のやつは息も荒い気がする、あ、やばたにえん。

「……ま、まあ、くよくよすんな、次がんばれ」

「え、も、もう終わりなのか？」

嵐を解放すると、なぜか名残惜しそうな表情を浮かべていた。

終わりだよ、汚れも取れたし、これ以上するとなんかお前の姉妹から制裁されそうな

んだよ。

だから特に浜風と磯風、お前らそのネットリとした目つきを止めろ。

「トウツ！」「そりゃ！」

なんて不吉な視線から隠れるようにうやむやにしようとしたら、いきなり時津風と雪風だつたつけかが左右から飛びついてきた。

「ぶへら!!」

陽炎姉妹のちっこい組による左右からのタツクル。

左右からの圧力により肋骨がきしむ、耐えてくれ、俺の肋骨。

「きゃー、ほんとに汗臭いね！」

「あと煙草のクサイ匂いもします！」

「うるせえッ!!」

大人の恐ろしさを教える為、へばりついてきた二人を脇に抱えて、プロレス技のようにくるくる回る。

一瞬驚くも、すぐに適応して楽しそうにキャツキャと声を上げるちっこいズ。

くそう、子供は順応するのが早いな、うらやましい。

「そういうツ！」「ことなら！」

なんて一瞬へこみかけてたら、初風と秋雲が後ろと正面から飛びついてきた。

ややちっこい組の重量がかかり、腰が労災申請。

てか、回転中によく飛びつけたなオイ!?

だが愛と勇気と煙草だけが友達俺にも意地がある。

「なめるなああああ!!」

気合いを入れ直して四人を支えながらグルグル回る。

いや、むしろ遠心力が消えたら崩壊するぞこれ。

そんな不安がよぎる中、次の刺客はじりじりと忍び寄る萩風と舞風。

いや、それ以外の姉妹も隙あらば飛びかかろうとする気配。

アカン、さすがに六人に飛びつかれたら腰が過労死ラインを越える。

今日より明日より職が欲しい俺にだって意地はある。

が、意地の量にも底がある、だから止めて、六人は壊れちゃうから!!

いや、ほんとにやばいって、陽炎お前早く止める!!

と、陽炎に視線で助けを求め……

「えー、俺が叫んでから、みなさんが静かになるまで三秒もかかりました」
審判なのに、試合をしていた陽炎姉妹の誰よりも泥にまみれた男がいた。

俺だった。

どうでもいいけどしがみつかれた人数の記録は八人。

九人目の磯風で倒壊したが、その記録には自分でもびつくりである。
おそらく陽炎姉妹たちの飛びかかるタイミングと場所が完璧すぎた。

ちなみに五人目は顔にへばりついてきた陽炎。

なんで率先して長女のお前が飛び込んでくるんだよ。

「三秒って普通に早くない?」

「うむ、早いな」

「そこ、私語するな」

咳払いをして、地べたに座る陽炎姉妹に連絡事項を伝える。

「えー、青春真つ盛りのおまえらの夏休みに彩りを加える為、なんということでしょう、俺から君たちにサプライズプレゼントがあります」

ざわざわ、ざわざわ

ふふふ、戸惑っておるわ。

「なんと、来週の週末は俺が直々にバスをレンタルして、おまえらを海に連れて行ってやるー！」

『お……おおおおおおお!!』

よほど驚いたのか、微妙に反応が遅れたあとに歓声が上がる。

ふふ、やはり女子は好きだな、サプライズ。

「おまえら、陽炎と相談してしっかり準備しとくように。あと宿題は終わらせとけよ」
どいつもこいつも目をキラキラさせてうなづく。

近くにいた時津風にうれしいかと聞くと、「うれしい！」と叫びながら顔にへばりついてきた。

ギヤー蒸し暑い！ と叫ぶ間もなく、負けじと他の奴らも俺に飛びついてくる。

どいつもこいつも、よほどうれしいのかテンションが高いな。

まさに最高に夏って感じのテンションだ。

でも頼むから飛びつくのは一人づつ順番にしてくれ、頼むんご。



陽炎姉妹の夏まつさかりウエーブから抜け出した翌日。

朝起きてポストを確認すると、結婚式の招待状が入っていた。

無職の人間に結婚式の招待状を送るような、頭のおかしな知り合いを幾人か思い浮かべつつ、差出人を見たら見慣れた『前島』の名字。

前島、結婚するってさ。

おかげで強烈にメンタルが低下した。

最高に鬱って感じのテンションだ。

ついに前島も結婚かと思うと感慨深いものがあるが、どちらかといえば周りの知り合いたちから完全に置いていかれた悲しみというか、惨めさのほうがヤバイ。

別にそこまで願望があるわけじゃないけど、結婚ってどうやったらできるんだろうな。

少なくとも無職じゃ厳しいと思うけど。

近年まれによくある低さのテンションに陥り、布団の上に体育座りをして人生について考える。

目の前には壁、最近時間の流れが早い気もするし、俺はこうして一人で朽ちていくのだろうか。

なんだか今日はもうなにもしたくなくなってしまった。

ぼんやりと人生の終わりについて真面目に考えていたら、インターホンが鳴る音。

やる気のない声で「どうぞ」と返事をすると、ゆっくりとドアが開けられ、長い黒髪の少女が背筋を伸ばして入ってきた。

「し、失礼します。あの、本日はよろしくお願いいたします……」

『無職男』と『駆逐艦：親潮』

ああ、この子が来たか。

というのも、海に行くにあたって必要な物資をホームセンターで買おうかと思っていたのだが。

俺ではわからない陽炎姉妹の好みや、食べる量、その他細かな部分を把握している、荷物持ちを兼ねた助っ人が一人必要だと思つて、陽炎に一人回してくれるようお願いしたので。

できるだけ数字に強くて、心配りができるのを頼むと言つておいたのだが。

この子が来るとは、えつと、いい加減名前覚えてやりたいんだけど、えつと。

「よう、お前が来てくれたのか。えつと、お、お、親し、いや、親風?」

「どうして風にされてしまうんですか!? 潮です、親潮です!!」

個性と属性豊かな陽炎姉妹。

陽炎や不知火といった火属性、黒潮や秋雲なんかの潮とか雲で終わる水属性。

だが最大数はやはり風属性、大体三択、迷ったら一番確率の高いのを選ぶ。

外れたけどな。

余談だが嵐や萩風や舞風と仲の良いのわっち（野分）は多分無属性。

（※『野分』は台風を指す言葉なので正確には風属性となります）

「コホン、えつと改めまして。本日の補佐は不肖、この親潮がお手伝いさせていただきます。万事お任せください」

言動に滲み出る真面目オーラ。
なるほど、確かに適任かもな。

「ああ、よろしくな。そんなじゃあとつとと出発するか」

メンタルは未だ降下を続けているが、情けないところを見せるわけにはいかん。

透けたネコでもかぶっておきたい、男はみんな意地っ張り。

よっこらせつくすといいながら立ち上ると、少しふらつく。

倒れると思つて慌てたのか、親潮が支えるように抱きついてきた。

「だ、大丈夫ですか!？」

「わるい、ちよつと立ちくらみが」

座つて急に立ち上がると立ちくらみがあるのは、年のせいなのだろうか。

着実に積み重なる年齢を実感したくないけど実感する今日この頃。

心配そうにこちらを見上げてくる親潮の頭に手を置いて、大丈夫だといいながら頭を

撫でる。

今更だが、いつの間にかナチュラルに陽炎姉妹の頭を撫でることに、抵抗がなくなつ

てるな。

黒潮によく似た、真つ直ぐな黒い髪。

撫でるたびにさらりさらりと揺れる。

髪もそうだが、顔つきも黒潮によく似てるな。

ただ黒潮よりも真面目というか、クラスの委員長みたいな雰囲気をもとってるせい
か、そのへんきちんと個性が別れてるなってわかる。

半袖の白いカッターシャツに、黒のベストとスカート。

制服のようにも見えなくはないが、おそらくは私服なのだろう。

きちんとアイロンがけされて、ぱりつとした感じはまさに優等生。

私服のアイロンがけなんざ、もう随分としてないけど、親潮は毎日してそうだな。

「あの、どうかなさいましたか？」

「いや、なんとなく黒潮に似てるなって思ってたな」

「そ、そうですか？　ですが黒潮さんは三女でわたしは四女なので、似ててもおかしくは
ないですが」

なるほど、黒潮は三女だったのか。

そういうえば陽炎が長女だとは知ってるが、だれが何番目の姉妹なのかはあまり知らな
かったな。

だが、例のごとく難しい陽炎の家族問題、一つ上の姉である黒潮をさん付けで呼ぶあ
たり、これもまた根が深そうである。

はい、この話おしまい!!

「なるほど、じゃあいくか」

「はー」

会話の流れぶった切り感がいなめなかつたが、親潮はそんなことは気にしないというように元気に返事をする、俺の手を引いて扉に向かう。

子供の手を引くような感じだな、もう慣れたけど。

陽炎姉妹の中では俺は方向音痴という認識でもあるのだろうか。

あと、やっぱり力強いね、さすが四女。



とても気まずい。

郊外にある大型ショッピングモールというか、むしろ大型倉庫じゃないのかこれ？
みたいなレイアウトの外国資本の店。

確か店の名前はコスト……いや『コロラド』だったか。

こういう店は、曜日にもよるが時間が経つごとに混み始めることが多い。

なので、開店前には並んどいたほうがゆつくり見られるだろうから、前日にレンタルしていた軽トラを運転して早めに来てみたわけだが。

夏休みというのもあり、既に開店前から人が並んでいた。

それはまあしょうがないんだが、問題はその列の中に前の会社の同僚がいたということだ。

つまり、とても気まずい。

もつとも、向こうはこつちに気がついてないみたいだけど。

別の部署だったが、同期だったので辛うじて覚えてる。

一緒に研修とか受けたし、懐かしいな、何年前だっけか。

そいつは嫁さんと子供の家族連れで、楽しそうに話をしている。

そういうやもう夏休みだっけか、立派に家族サービスしてるんだな。

かたや仕事も順調で、家族サービスにいそしみ、幸せな家庭を築いた男。

かたや独身恋人無し、上司に暴力をふるってクビ、無職で求職活動も停滞中の男。

同じ時期に入社したはずなのに、どうしてこうも差がついてしまったのか。

家庭を持ち、命を育てる責任を背負っていたなら、俺は上司にラリアットなんざしな

かったのだろうか？

「夏休みだからか、子供連れが多いですね」

親潮が俺の視線の先を察してか、そんなことを言ってくる。

しかしこの暑いのに、ぴったりと隣にひっついてるのは何故なのか。

「そうだな。まあお前もいまは子供だけど、あと十年もすればいい男捕まえて、子供の一人や二人連れて大人側で並んでるだろ。時間はあつという間に過ぎるからな」

学生するとき、一緒にバカをやっていた前島もいつの間にか結婚するし。

「えっ、あの、え、やだ、そんな……恥ずかしい……」

「どこに恥ずかしがる要素があつたんだよ。まあそのときまで俺が生きてたらベビーシッターで雇ってくれ、経験豊かなアドバイザーとしても役にたつと思うぞ」

「え……こ、子育ての経験がおりなんでしょうか？」

「なに言ってるんだ、おまえらの面倒を立派に見てるだろ」

「あ、そう言うことだったのですね。……っは!? それはつまり姉妹の誰とでも、いつでもどこでも子供を作れるというアピールですか!? そんな……ま、まだほんのちよつとだけ早いですよ……」

「……なんでその愉快極まりない考えに至ったのか、どうか俺に説明してくれ。……いや、説明しなくていい、暑さのせいだな、そういうことにしとけ」

思春期の女の子が考えてることは、男には一生わからん。

しかし、親潮が言うように、いまからでも結婚して子供を作れば、現在進行形で終わってる俺の人生はマシになるんだろうか？

このクソみたいな無職状態から好転してくれるのだろうか？

いや、この状態なのは金無し職無し女無しの現状が招いたことだろ。

その状態で結婚とか、あらゆる前提が破綻している……。

改めてどうしようもない自分の現状を悟ってしまい、思わず膝をつく。

前島の件も併せて、ついになけなしのメンタルが着底した。

「ど、どうされました!？」

心配そうにかがんで、肩に手を乗せて聞いてくれる親潮。

体調を心配してくれてるのか、軽く背中もさすってくれる。

「いや、大丈夫、じゃないけど、大丈夫、精神的な問題だ、心配するな」

「し、心配しますよ!?!」 な、なんで急にそんなこと言ってるんですか!?!」

「いや、なんか、急に色々、俺って駄目なヤツだなんて実感してしまったというか……。」

かっこわるいし、無職だし」

「そんなこと絶対ありません! 絶対! ていと……お、おにいさんはステキです……。」

それに定職に就いてるかどうかなんて、わたしたちはそんなの気にしません。確かにそ

の、おにいさんが働いていた頃の姿をわたしは知りませんが……。」

必死になって慰めてくれる親潮。

こいつ、いいやつだなあ……、陽炎姉妹はみんないいやつだけだ。

でも、確かにこいつらの前であんまりアレな姿を見せるわけにもいくまい。

今更だけど、ほんと、なにやってんだ、すっかりしろよ俺。

「おい、なにうづくまつてやがる。並ぶ気が無いなら邪魔だからあっち行け」

心の声を聞かれていたかのような、野太い声の叱責が聞こえて慌てて立ち上がる。

いかんいかん、確かに綺麗に並んでるところでうづくまつてちや邪魔だよな。

ちよつと横柄な物言いだが、言ってることはまあわからんでもない。

見ると、サングラスをかけたゴツイ坊主頭の男。

その後ろには柄の悪い……というか、なんだろ、ギラギラした雰囲気を持つ男たち。

「あ、すみません」

親潮が怖がるといけないので、無難に謝っておく。

「ツチ、まぎらわしいんだよ……しかしなんで俺が下っ端みたいにわざわざキャンプの

準備をしなきゃならねえんだ、ったく」

「シヨウが店の太客連れて山にキャンプに行くなんて企画しちゃったからでしょ」

「準備に手抜きがあるとかバイことになるからって。店長が自分でキャンプ道具を買

いに行くって言っちゃったせいですね」

「そうそう、シヨウに買いに行かせたら、ライターとロウソクくらいしか買ってこなそう

だって、どうなるか冷静にわかっちゃったせいッスね」

「んなことわかってるよー」

引き連れてある男たちに怒鳴る坊主の男。

どうやら店長らしい、何の店かは知らんが。

しかしでかい声だな。

親潮が怖がってないか確認しようとしたら、恐ろしくキツイ目つきで坊主の大男をにらみつけていた。

おいおい、なんて目をしてやがる……。

あ、いやそうじゃなくて、おいバカ。

こういう奴らをそんな目で見たらダメだつて！

「……なんだ嬢ちゃん、なんか文句でもあんのか？」

親潮がにらみつけていることに気がついた坊主の大男が、不機嫌そうな声を出す。

言わんこつちやない、言つてないけど。

「この方は少し体調を崩されてうすぐまっついていらつしやつたんです。列を崩してしまつたのは謝りますが、そのような言い方をされる筋合いはありません」

「んあんだあ？ 威勢がいいじゃねえか、喧嘩売つてんのか？」

「買つてくれるんですか？」

「んだとっ!？」

坊主の大男の迫力に一步も引かず、一步前に踏み出す親潮。

俺のために怒ってくれてるのはありがたいけど、ダメだって。

不味いことになった、ともかくまずは親潮の安全確保をしなければ。

相手も子供相手にどうこうするほどバカじゃないとは思いたい、なにかあつてからじゃ遅い。

「……………ん？ 嬢ちゃんどこかで……………あ、ふえ？」

親潮の前に立つてあととは流れでどうかしようと覚悟を決めた瞬間。

坊主の大男が間抜けな声をだした。

「お、おま、いや、あ、あんた、いや、あなたは……………」

続いて、みるみるうちに顔が青ざめてゆき、異常な量の汗をかき始める。

なんだなんだ、どうしたどうした。

「あー、ゴメンゴメンお嬢ちゃん、この人ツンデレだから。そっちの人がうずくまつてるの見て心配になって大きな声かけちゃったのさ。だから気にしないでYO☆」

「そうそう、普段は胃薬と友だちの苦労人なせいで、ちよつと心配性なんDA☆」

さすがに大人げないと思つたのか、後ろの取り巻きたちがフォローに入る。

ああ、確かに店を預かつてるなら色々と苦労が多いだろうし、なめられないような振る舞いをするのも大事だよな。

てか取り巻き、ノリがチャライな。

だがいまはそのほうがありがたい。

こつちもさつきと謝って、方をつけてしまおう。

「いえ、こつちこそほんと、すみません。ほら、相手さんもこう言ってくれてるし、な？」

「……は？」

渋々といった様子の親潮。

これで手打ち、といきたかったのだが、坊主の大男はいきなり腰を落とす。

不思議に思ったのもつかの間。

流れにのって後ろの取り巻きたちも、その動きにならう。

「し、失礼しました!!」

『失礼しましたッー!! ……?』

なんか任侠映画の謝罪ポーズみたいな格好で謝る坊主の大男、もとい店長。

後ろの取り巻きたちはなんでこんな派手に謝ってるのかいまいちわかってないのか、

ちよつと不思議そうにしつつも、同じように謝る。

つか無駄にコンビネーションいいな。

あと、声でかいよ。

「そ、その、本部付の若頭さんから盃もらってらっしゃる会計士さんとは知らず。と、と

んだご無礼を……」

「いまはプライベートなのでそのことは……」

店長に近寄ってなにか会話をしている親潮。

なんかぼそぼそと喋ってるけど、よく聞き取れん、知り合いか？

「……おい」

詳しく聞こうと近くに寄ろうとしたら、またしても野太い声をかけられた。

振り向くと、先日、時津風と山に入ったときに、一緒に野山を駆け抜けたプロの男たち。

「ブラックのおっさん!? 生きてたのかよオイ!!」

迷彩服じゃないけどゴツイ身体を見せつけるような半袖黒シャツ姿のブラックのおっさん。

後ろにいるブルーとグリーンも変わらず健在の様子。

謎の外人センスにありがちな、『さんま』と書かれたTシャツは微妙に気になるけど。「そう簡単にくたばるか、そっちも無事だったようだな」

ニヤリと笑って互いの拳をぶつけ合う。

共に死地（大げさ？）をくぐり抜けた絆のせいか、お互いの無事を自然に喜びあえてしまった。

「あの……こちらの方たちは？」

頭を下げ続ける店長たちを背後に、警戒するように恐る恐る聞いてくる親潮。

「ああ、えつと、なんだ。俺と時津風が雇ったプロの人というか、恩人というか。まあ、ダチみたいなものだな」

「なれ合いは……いや、今更か」

今更だな、そして今更だけど、プロってなんのプロなんだろう。

なんとなくプロ意識的なものを持つてる人のイメージで使ってるけど。

「あつ、そういうご関係だったのですか。妹から話は聞いています、その節は危ないところを助けていただいたようで、本当にありがとうございます」

礼には礼を返すのスタイルなのか、親潮が丁寧に礼を述べる。

危ないところというか、ただのポルノガイジン現象だった気もするけど。

まあ、もしかしたら大事になってた可能性もあるからな。

「いや、仕事だ。というかアレの姉なのか……」

なぜか親潮をおっかないものでも見るような感じで、気持ち後ずさるブラツクのおっさんたち。

いま思い返せば時津風にもなんかそういう感じだったな。なんだろう、そういう設定なのか、もしくは子供になんかトラウマでもあるのだろうか。

そして、ふと気がつく。

大声を出すゴツイ坊主とその取り巻き。

インパクト抜群な、プロっぽい外国人の男たち。

そんなのに頭下げられたり、親しげに話してたりする俺たち。

あれ、これ目立ってるよな？

恐る恐る元同僚のほうを見ると、目が合った。

そして気まずそうというか、関わりたくないような感じで目をそらされる。

母親のほうなんか、子供に見ちゃいけませんって感じになってる。

やばい、絶対なんか誤解を生んだ気がする。

少なくともまともな人間には見えてないだろう。

同僚が俺のことをなんて口にするのか不安になる。

が、そんなことは関係ないといわんばかりに、勢いよく店のシャッターが開いた。

開店を告げる店員の声。

タイミングが悪いのやらしいのやら。

まあ、元々ろくでもない評判だったろうし。

今更、気にすることもないよな。(諦め)



「そーいやブラック、今日は山に行かないんだな」

「……あまり街には出たくなかったが、必要な装備の調達があつてな」

名前も知らぬ店長たちとは別れ、ブラックとアウトドア用品売り場を目指す。

ちなみに親潮とブルーとグリーンは、別行動中。

時間が惜しいので、先に買うのが決まってるものを確保しに行ってもらつてる。

ブラックのおっさんと行動を共にしてるのは、今日買うのはシートと日よけテント、あとは飲み物とそれを入れるクーラーボックスくらいの手定だつたんだが、便利なアウトドアグッズとかあつたら教えてもらおうという淡い期待。

頼りになりそうだからな、プロだし。

途中でかい十人用のテントとかも売つてて、無駄にテンションが上がったけどスルー。

陽炎が言うには、宿泊場所はビーチのすぐ近くにある、ボロイコテージを予約してるらしい。

男だけならともかく、子供が多いからそのほうが安全だよな。

「で、なにが必要なんだ？」

「えーっと、うきわやらなんやらは陽炎が用意するって言ってたから、日よけテントとシート、あと飲み物とそれを入れるクーラーボックス……は、いま親潮が取りに行ってくれてるな。いまのところ決まってるのは、飯をどうするかで悩んでる感じだわ。バーベキューとかがいいかなとは思うんだが」

初日の飯に関しては、弁当作ったり外食にしたりという案も出てる。

だが、なんせ人数が人数だからな、外食は金がかかるだろうし、弁当は夜更かしや早起きして作る必要がある。

そのせいで行く前から疲れてもかわいそうだし、出来れば普通に海を楽しんで欲しい。

「飯か……人数は？」

「二十人くらい」

「その人数なら専用の大型グリルがいるな……ドラム缶を半分に分けて網か鉄板敷くか、石やブロック積んで作ってもいいんだが、その数でバーベキューをしたいならフタや密閉機能がついた、バーベキュー専用の調理器を使ったほうがいい」

「フタがつくことは、蒸し焼きみたいな感じにするのか？」

「そうだ、特に厚い肉を焼くには火力がある、あれは普通に焼いても中まで火が通らん。普通の食材を調理するにしても、単純に調理時間が短縮できる利点もある。あと専用の

大型グリルには格納式の台や机が付属してたり、吸気調節をして炭を長持ちさせる構造になってるものが多い。これが意外と馬鹿にできなくてな。経験則だが、少人数ならともかく大人数の飯をまかなうなら、多少重くても専用の調理器を持ち運ぶほうが結果的に得することが多い。だがこれは調理器とは別に机を用意してもいいし、燃料は現地でもいくらでも調達できる場合もある。そのへんは場所と予算との兼ね合いだ」

「なるほど」

バーベキュー専用の調理器か。

予定外の出費になるかも知れんが、あつたらあつたでテンションは上がりそうである。

少人数での野宿やらキャンプの経験はあるが、確かに大人数となると条件が大きく変わるか。

正直甘く考えてた、やっぱプロは頼りになるな。

しかし、そういうのを扱うとなると大人がもう一人欲しいところではある。

結婚の準備で忙しいかもだが、前島でも誘ってみるか。

ロリコンゆえに色んな意味で不安だが、色んな意味ゆえに信頼できるし。

なにより参加してくれるのが確実なんだよなあ。

そんなこんなでアウトドアグッズ売り場をさまよってたら、噂のバーベキューコンロ

が置いてある場所に到着。

鉄で作られた、四角いのやら丸いのやら円柱やらのでかい鉄の塊がずらりと並んでる。

マジででかいな、薪ストーブかよってレベルの大きさだ、テンション上がるわ。

ブラックのおっさんの、あーでもないこーでもないという説明を聞きながら色々と勉強。

個人的に正しかりうが間違っていようが、専門知識を持った人間の話はおもしろく感じる。

しばらくそんな感じでブラックのおっさんと駄弁ってたら、別行動で飲み物の確保に向かっていた、親潮とブルーとグリーンの姿。

グリーンが押すどでかい外国規格のカートには、数十本入りのペットボトル飲料が四種類ほど積み込まれていた。

カートの上のカゴにはクーラーボックスが二つ、下の荷台部分にはペットボトル飲料。

二十キロ近くありそうだな、軽トラで来てよかった。

「わるいな、グリーン、ブルー」

いいってことよ、みたいな感じでうなづく二人。

無口だがこいつらもいい奴らである。

「バーベキューコンロをお探しなんですか？」

コテンと首をかしげるようにして親潮が聞いてくる。

陽炎姉妹はいちいちこういう仕草が可愛いんだが、それは四女も同様らしい。

「うぬ、現地で獲ったり買ったりした食材も焼けるし、なにより楽しそうだろう？」

「でしたら、泊まるコテージにレンガ造りのバーベキュー設備が備え付けられていますよ？ あと無粋かも知れませんがそれなりの広さのキッチンや大型冷蔵庫も備わっているので、食材さえ確保しておけば食事については問題ないかと」

「なんだ……と……」

確かに、海の近くのコテージならそういうのがあってもおかしくはないのだろうか。親潮に来てもらっててよかった、危うく最高に無駄な買い物をするところだったぞ。

そしてさらば前島、フォーエバー前島、お幸せに。

しかし最近のポロイコテージは設備が整ってるんだな。

ポロイの定義が壊れそうだ、それとも陽炎の基準が俺と違うのか。

内地の一般的な基準と、外地の基準は時々違うからな。

「なんだ、結構しつかりとしたところなんだな」

「はい、組の幹部が使う保養所というのもありますし。税金対策も兼ねてそれなりの予算が組まれましたので」

なるほど、身内、税金対策、予算を組む。

陽炎姉妹の謎は広く深い。

「ならあとはシートとテント買って、昼飯でも食いに行くか。たしかあつちにフードコートあっただろ、ブラックたちもどうだ？ なんなら今日とこの前の礼もかねて、奢らせてもらうけど」

「悪いがこっちはこっちで用事がある、一緒に行動できるのはここまでだ」

プロはプロで色々忙しいらしい。

「そっか。じゃあまたどっかで会えたら、カレーでも食うか」

「ふっ、そういうええそんな約束もしていたな」

ニヒルな笑みを浮かべるブラック。

なんだかんだで狭くはないが広くもない島だ。

機会があれば、また会えるだろう。



「ほんとにそれ食べられるのか？」

「はいー」

外国サイズのカップに山と盛られたチョコレートアイス。

親潮はそれをモキュモキュと、幸せそうに口に運ぶ。

女子は好きだな、甘いもの。

一方の俺は馬鹿でかいホットドッグと飲み放題のジュース。

食べ物と飲み物を合わせて値段が煙草一箱の半分以下なのはありがたいが、これどうやって元をとってるんだろうか。

「しかし、なんだかんだで結構長いこと見て回っちゃったな」

「あはは……すみません、楽しくってつい」

ブラックたちと別れたあと、日よけテントとシートの他にも、バーベキュー用の炭、でかい寸胴鍋に大量のカレールー、さらに米を二十キロ。

そしてバケツ一杯に入ったグミやら、箱に入った芋菓子やらの菓子類を大量に買ってしまった。

さすがに生鮮食は無理だけど、まあ腐るもんでもないしな、買つといても問題ないだろう。

しかし凄い量の荷物だったな、ほんと。
軽トラに積み込むのも一苦勞だったわ。

「いいよ、二十人分の食いもんだ。沢山あるに越したことはないだろ」

「だったらいいんですが。でも姉さんたちや妹たち、今回のことはすごく楽しみにしてたので……きつと喜んでくれると思います」

「だったら俺も骨折ったかいがあつたつてもんだ」

周りにはこれまた家族連れが多い。

ガキが走り回ったり、うまそうにピザ食つてたり。

なんというか、妙に居心地が悪い。

そんな居心地の悪さから、今回の買い物物の代金を全額親潮が出したのを思い出す。さすがに俺が出すと言つたんだが、なんでも全部経費で落とすから大丈夫らしい。

なんの経費かは知らんが。

あとレジで並んでるときに、既に財布から金を出していて気が早いと思つたんだが。精算が終わる前にぴつたりと料金を計算し終えてた。

あれだけの商品全部の値段を覚えていて、なおかつその合計を暗算してたという事実。
実。

「陽炎には数字に強くて気配りが出来る子をよこしてくれと言つてたんだが、予想の十

倍くらい優秀だったな。助かったよ、ありがとな」

「……つ、喜んでいいただけて、よかったです。頑張った甲斐がありました。……その、お金の計算は得意なので」

そう言つて、恥ずかしそうに頬を両手で挟む親潮。

数字じゃなく、お金の計算が得意、ね……。

ちよつとだけ踏み込んでみるか。

「なあ、陽炎の……おまえらの家つてのはやつぱ金持ちなのか？ 今回の買い物もだけど、正直俺に払つてる金だつて、もらいすぎてるとは思つてる。そりやまあ、大人一人を一日拘束する代金としては妥当かも知れんが、それにしてもだ」

「そうですね……姉妹によりますが、皆ある程度裕福ではあると思います。もつとも、だからといって皆がそれを喜んでいたかといえ……」

親潮の声のトーンと雰囲気が変わつたのがわかつた。

視線を落とし、どこか影を帯びた表情を浮かべる。

「確かにお金というものは価値があるものです、ですが正確にはそれ自体は大切なものではない。なら何故お金には価値があるのか、それは大切なものを手に入れる手段になり得るからです。……ですが、やはりそう言い切れる人ばかりでもありませんし、そう言い切れるものでもありません。わたしは……組織ウチの仕事もあつて、良くも悪く

もお金に関わる沢山のことを見てきましたし、関わってきました。その中で学んだのは、裕福だからといって、必ずしも大切なものを手にできるわけではない……ということですよ」

まるで裕福ではあるが、幸福ではないと、そんな表情。

「……そうか、若いのに賢いし偉いんだな。俺とは大違いだ」

「そんなことありません、おにいさんはステキでかつこいいですよ」

「んな訳ないだろ」

「いいえ、そんな訳あります。だってその……仕事を辞められた理由は……聞いています」

ビクツとなる。

周知の事実でも、女にいいとこみせたくて上司にラリアットした黒歴史。

黙ってる俺を見つめながら、親潮は話を続ける。

「例の行動は、前もって周りに迷惑をかけないように準備して、そして実行されたんですよ。つまりそれは一度、時間を置いて冷静に考えてそうされたということ。その行動の結果解雇され、困窮状態になる可能性があつたのは十分に承知されてたはずですよ。もかかわらず実行されたとすれば、それが、お金より大切なものだと見極め、判断し。そしてそれを手に入れるために、自分が犠牲になるというリスクを払うことになっても、

手に入れるためにその方法を選択できた……ということですよ。色眼鏡を抜きにしても、そういう決断ができる人はなかなか居ません」

「なんだかよくわからんな、褒めてるのかそれ？」

「褒めてますよ、ものすごく褒めてます」

「……そうかい。だがたいそう難しい言い回しで褒めてもらってあれだけだな。カツとなって感情的に動くんじゃないかと、冷静になつてやった結果なだけタチが悪いだろ。そりゃ後悔はしてないが、我ながらなんであんな行動を取つたのかは意味不明だよ。知ってるか、人は俺みたいなやつをアホつて言うんだ」

「まあ、確かにそういう人は会社組織の中で偉くなるのは難しいかもしれませんが……でも、だからこそ、それができるおにいさんはかつこいいんです。それに知ってますか？ 黒潮さんが言うには、アホは褒め言葉だそうですよ」

困つたように優しく微笑みながら、そう断言してくれる親潮。

ずいぶんと買つてくれてるじゃないか、こんな無職のおっさんのことを。

そしてそんな自虐入り交じつた愚痴をこぼしてしまったことが、いまはとても恥ずかしい。

「そりやどうも。ほら、口にクリーム付いてるぞ」

別にはつきりとわかるほど付いてるわけじゃないけどな。

恥ずかしくなったので、会話を終わらせる為に親潮の口を紙ナプキンで拭いてやる。「その、ありがとうございます。あ、おにいさんも口にケチャップ付いてますよ?」

親潮は身を乗り出して、俺の口元を拭ってくれた。

そして何故か拭い終えた紙ナプキンを丁寧にたたんでポケットにしまう。

そのゴミ箱に捨てりやいいのに、律儀な性格だな。

「……なに? 猫かしら……この感じ、違う!」

と、唐突に親潮が変なことを口にしながら立ち上がる。

「ど、どうした?」

俺の問いに答えず、真剣な表情を浮かべ、周りをせわしなく見渡す親潮。

そしてしばらく見回した後「あれは……」と、なにかを見つけたように視線を固定する。

「おいおい、いったいどうしたって——」

親潮が見つめる先、そっちに視線をやると少し離れたところに“虎”が居るのが見えた。

自分でもなに言ってるかわからんが、しましま模様のデカイ虎が実際居た。

確かにネコじゃないな、ネコ科だけど。

「おいやス、あれはなんや」

「ベンガルトラ……ですね。……って、あの、ヤスって誰ですか？」

さすが優等生というべきなのか、種類までわかるとは、やるな親潮。

だが違う、俺が聞きたいのはそういうんじゃない。

あとヤスは学生時代のバイト先の上司、どうでもいいけど社長はマサ。

素でその社長のモノマネをしてしまったくらい驚いている。

「なんで虎がホームセンターにいるんだよ」

「……可能性としては動物園から逃げ出したとかでしょうか」

親潮は何故か不機嫌そうに答える。

この状況で混乱するのはわかるが落ち着け、まだ距離はある。

だが遠目にも虎の目は血走って、牙むいてヨダレばたばたらしってるし、ヤバそうだな。

すぐにも逃げねば。

「きゃ!?! あ、あのあのあの!?!」

「怖いのはわかるが落ち着け、危ないから静かにしてろ」

抱き上げた親潮が焦ったような声を出す。

悪いとは思ったが、いまは一秒でも時間が惜しい。

なぜならいまは誰もが気づいてないか傍観してるが、きつかけがあればパニックが起

きる。

そうなれば、客たちが一齐に出口に向かつて逃げ出し始めるだろうからだ。それまでに急いで出口まで走らないと。

手を繋いでもいいが人波に揉まれたら万が一もある。最悪、俺を餌にしてもコイツはまもらにやならん。

『グオオオオオオオオンンン!!』

覚悟を決めた瞬間、凍っていた周囲をぶちこわすような咆吼。

振動する空気、それが否応なく危機感を刺激する。

「きやああああああああ!!」

わかりやすい女の悲鳴、クソ、遅かったか、やばいなこりや。

悲鳴が伝播するように、一齐に客たちが我先にと出口に向かつて走り始める。

一目散に逃げ出す大人、子供を抱えて走る親、親とはぐれ泣く子供。

飯時だったことも有り、フードコートは一齐にパニックになった。

逃げるものを追おうとする習性からか、虎がゆっくりと出口に向かつて歩き出す。

出口付近は既に混乱状態で、まともに外に出られそうにない。

この様子じゃ逆にこの場所に居たほうが安全か？

虎から目を離さないように、親潮を抱えながら少しづつ距離をとる。

が、虎の進行方向の正面、その通路に合流する柵の間から出てくる誰かの姿。

完全に死角だったためか、虎に気づけなかった誰かの正体は……ブラックたちだった。

あいつら!! 運!! 悪すぎだろ!!

意図せず虎の真正面に立ちはだかってしまった、プロの三人。

虎とご対面し、一瞬硬直したものの、三人はすぐさま散開。

だが虎は狙いを絞っていたのか、ブラックに向かって真っ直ぐに飛びかかる。

しかしさすがプロというべきか、ブルーとグリーンが虎の後ろ足に一本づつロープを絡ませる。

多分購入予定品なのだろう、当然精算は終わっていない。

なんてそれどころじゃない思考が一瞬よぎったのもつかの間。

虎の正面にいたブラックも、虎の左右の前足に一本づつロープを絡ませて踏ん張る。

なんかすげえ!?

素人目に見ても、とんでもなく特殊な捕縛術っぽい技術なのはわかる。

でもなんで土壇場でそれが出来るんだよ。趣味の力ってマジすごいな。

だが、そのあとどうするかを考えていなかったのか。

ブラックと、ブルー、グリーンは顔を真っ赤にしながら踏ん張り続けている。

多分咄嗟に身体が動いたのはいいけど、そのあとの想定した状況に持つて行くには色々たりなかつたり想定外だつたりしたんだろう。だつて虎だし。

ああもう、しょうがない。

一歩、ブラックたちの方向に踏み出して気がつく。

自分の腕の中にいる、守らなければいけないものの存在の重さに。

……。

すまん、陽炎。

親潮をおろし、落ち着かせるようにゆっくりと頬を撫でる。

最初は顔を赤くして怖がついていた親潮だが、じっと目を見つめると、すつと落ち着いた表情になった。

「悪いが……俺はあいつらのところに行かにならん。車の鍵を渡しとく。ひとまずトイレの個室に逃げ込むか、それとも出口から出るか、様子見てどうするか判断しろ……できるか？」

怖がらせないよう精一杯、ゆっくりと言ひ聞かせる。

「……はい、大丈夫です。わたし、頑張ります、平気です！」

そんな無茶な俺の言葉に、凜々しい顔で胸を張って敬礼し、答えてくれる親潮。許してくれてる気がした、俺がいまからやろうとすることを。

心の中で陽炎にわびつつ、親潮の肩を軽く叩き、あいつらのところに向かう。

俺は……やっぱり人の親にはなれないな。

守るべき子供を放って、別のことをしようとしてる。

おまけにアホだし、気分にもうがあるし、あとアホだし。

そりゃ無職になるわ。

だけど……腰抜けじゃない。

借りのある男たちを見捨てるなんてことは、できないんだよ、くそッ！

「ブラック!! 一本渡せ!!」

「おまえら!!? っく、頼む!!」

踏ん張り続けるブラックから、一本ロープを受け取り、ブラックと反対の方向に引つ張る。

これであまく力が分散……ンがッ!? すげえ重てえ!?

『グオオオオオオ!!』

拘束を解こうと、暴れる虎が吠える。

クソッ、ブラックはこんなの二本も支えてたのかよ!!

「な、なんかおまえらと一緒にいると、こんなのはっかりだなオイ!!」

「それはこっちの台詞だ。インビジュアルに比べれば可愛いものだが……あいにく今日はろくな武器の持ち合わせも『機械式AM戦闘服』も装備していない。確かに危機レベルはあのときと似たようなものだな」

「なんで（ビジネス）スーツがないと弱気になるか知らんが、似たようなもののは同意だわ。」

インキンブルやらポルノガイジン現象より、ずつと現実的な危機だけど。

「んぎぎぎぎ、なあ、この虎、腹減つてると思おうか?」

「つぐ、じゃなきやそもそも襲われてないだろうな」

「だよな、つまり四人のウチ誰かが食われてる隙に逃げるしかない」と

「名案とは言えんな、このでかさなら四人分の肉くらい入りそうだ」

「じゃあどうすんだ、なんだっけか、あのエロイナルブルマクラツシュとかいう長い技名のアレでなんとかできないのか」

「何の装備も無しに使える手じゃない、それよりお前の後ろにいるのに相手をしてもら

——」

「アホか、くだらねえこといってんじゃねえ。もつとマシな方法考えろ、そう長く持ちそうにんぎぎぎぎ……ん? 俺の後ろ?」

後ろをチラリと見ると、親潮がいつの間にか俺の腰にしがみついて踏ん張っていた。何故気づけなかったのよ、俺。

「うおおい!?　なんでここにいるんだよおおお!?」

「一人よりも二人で支えたほうが、気持ちと重量的に加算されます!!」

「そういう根性論入り交じった数字の強さは求めてないよッ!」

驚きと、焦り、色んな感情がごっちゃになって、ロープを握っていた手が緩む。

あつ……と、なった瞬間、滑るように手からロープが離れた。

「だめっ!」

が、親潮がすぐに俺の手から離れたロープを掴む。

その瞬間、ズシン、と。

まるで腰にでかい鋼鉄の塊のような重さが加わった気がした。

「は?」

親潮のはずが、親潮ではない錯覚に襲われた、そのとき。

「よくぞ持ちこたえてくれた!!」

状況にそぐわない、気っ風のいい女の声があたりに響く。

「なっ!？」

プロであるブラックすら、驚きの声を上げる。

俺もとっさに周りを見渡すが、声の主の姿はどこにもない。

ズシン!!

と、突然上から降ってきたなにか馬鹿でかいものが、音をたてて虎の真正面に着地した。

揺れる地面、その場にいた全ての人間と虎の視線がその物体に釘付けになる。

「あとは私に任せておけ!!」

突如として現れた、謎の物体の正体。

それは茶色と白の毛皮をまとった、巨大なイタチのような見た目の存在だった。

だが感情のこもってない丸い目に、クソ短い手足はどんな生物にも似ていない。

その姿はまるで着ぐるみのような……いや、着ぐるみだろコイツ。

「おいヤス、あれはなんや」

「艦夢守市のマスコットにして守護者の一柱、ボクカワウソです!!」

目をキラキラと輝かせ、うれしそうに言う親潮。

いや、なんで興奮気味なんだよ。

そもそもなんでそんなのがこんな所に居るんだよ。

『グ、グオオオオオオ!』

カワウソの登場によほど驚いたのか、恐慌状態になった虎がロープを引きちぎる。

「やばッ!?!」

背筋が冷える、不味い、せめて親潮だけでも。

そんな俺の心配を余所に、虎は最大の脅威と判断したカワウソに真つ先に襲いかかった、が。

「甘い!! 長門パンチ!!」

謎の技名の叫びと共に、着ぐるみの腹部を突き破って飛び出した拳。

その拳先が正確に虎の顎を捉え、打ち抜く。

は? いま、このカワウソ、素手で虎を殴ったぞ!?

グーで!! しかもサウス^ひスポー^りで殴ったぞ!?

そして一瞬動きが止まったあと、虎はゆっくりと崩れ落ちた。

おそらく脳がシイクされたんだろう、自分で言ってる嘘みただけだ。

つかマジか、一撃かよ。

というか、いまコイツ長門って言わなかったか?

カワウソじゃないのかよ。

駄目だ、突っ込みが追いつかない。

力が抜けて、腰にひつついた親潮と一緒に床に座り込む。

今更ながら目の前で倒れているデカイ虎をみて、足が震えてきた。

よくもまあ、こんなの相手に踏ん張れたもんだ……。

そして、それをワンパンでぶっ飛ばしたカワウソの存在がマジで意味がわからん。あと腹から飛び出した無駄にシャープで筋肉質の腕とか、もつと意味がわからん。

もうなんなんだよこの状況は。

誰でもいいから説明してくれ……。



「よし、これで最後だな」

「はい、お疲れ様でした」

レンタル予定のバスの荷物格納スペースに、荷物を運び終える。

なんでもこのバス、当日まで他にレンタルの予定が入ってないらしい。

なので荷物は積み込んでいてもかまわないとのこと、サービスイいな。

計算やアドバイスだけでなく、荷運びの手伝いもしっかりしてくれた親潮。

結構重い物もあったのに、まったく疲れた様子を見せない。

おまけにあんなことがあったのに、普通に平常心だ。

さすが陽炎姉妹、力強い。

しかし、こんなちっこい身体のどこにそんな力があるのか。

そういえば、一緒にロープを持つたときに、一瞬コイツの重量が増えたような気がしたが、アレはなんだったんだろうな。

「え？ あ、あの!？」

ひよいと、親潮の脇に手を入れて持ち上げる。

サラサラと夏の日射しに照らされた黒髪が揺れた。

細い手足に、細い腰。

その見た目通りとても軽く、ちっこい。

やはりアレは勘違いだったんだろうか。

あのあと、駆けつけた警察と憲兵によって虎は檻に入れられ、どこかに運ばれていった。

なんでもどこぞの国で密猟された虎が艦夢守市に運び込まれ、逃げだし、様々な偶然の結果『コロラド』の食糧倉庫に気づかれずに忍び込んだらしい。

そして運悪く、俺たちと出くわした、と。

ちなみにあのカワウソはその捜索のために、郊外の食料が豊富で人が集まりそうな場所を、目立たない姿に変装して見回っていた最中だったとか。

つつても駆けつけた警官にめっちゃ「長門署長殿」とか呼ばれて敬礼されてたけど。

長門って、まさかあの戦艦の艦娘『長門』か？

有名な艦夢守市警察署の署長じゃねえか。

正体バレバレやんけ。

あと署長のくせにフットワーク軽すぎだろ。

俺と親潮は、改めて署の方で表彰させて欲しいと言われたが、丁重に断った。

万が一、無職の男が虎から市民を守ったとか新聞に載ったら、載った方も読む方も反応に困るだろ。

そして何故かブラックたちは、そのカワウソ率いる警察官たちに連れて行かれた。

なんでも別件で話を聞きたいことがあるのかなんとか。

そんな感じでゆっくり話もできなかつたが、ブラツクのやつが一言だけ「借りが出来た、この恩は必ず返す」と言つてたな。

アホか、借りがあつるのはこつちだつたつーの、もうごつちやだわ。

「あ、あの……やはり怒つてらつしやいますか？」

いつまで経つても下ろそうとしない俺を不安に思つてか、心細そうに親潮が言う。

「怒つてるけど、あのお前前に、自分でどうするか判断しろつて言つたのは俺だし、考えた上での行動だつたのもわかつてはいるから、怒つてないよ。……怒つてるけどな」

親潮を地面におろし、ちよつと煙草を吸つてくると言つて背を向ける。

レンタカー屋の車置き場には、喫煙所らしい場所がなかつたので、軽トラの荷台に上がつて腰を落ち着ける。

まだ夕方まで何時間もあるというのに、今日はずいぶん色んなことがあつた気がするな。

ポケットと空を見上げながら煙を吸い込む。

暑いな、ほんと、焼けそうだな。

肌と煙草を焼きながら、気持ちを落ち着ける。

そして考える。

このまま陽炎たちと一緒に、いつまでもつるんでいいものかと。

陽炎たちが色々難しいもん抱えてるのはわかるし、助けになつてやりたいという気持ちはある。

実際、あいつらには返しきれんほどの恩があるからな。

でも、このままいつまでも無職のおっさんと一緒にいるのも、よくはないだろう。

今回のことで痛感したわ。

なにかあつてからじゃ、陽炎にも、そして彼女たちの本当の親にも申し訳が立たない。どーつすかな、ほんと。

なんてことを頭の中でグルグルと考えていたら、物音がした。

見ると、どこか不安そうな様子で、荷台のフチから顔を半分出してこちらを見ている親潮の姿。

隠れてるつもりじゃないよな、多分。

突っ込み待ちだよな、さすがに？

「なにしてんだ、そんなところで」

「……隣、座つてもよろしいでしょうか？」

携帯灰皿に煙草をねじ込み、少し考えてから「ああ」と、返事をする。

親潮は少しホツとした表情を浮かべて、軽トラの荷台に足をかけて上がってきた。不可抗力だが、一瞬親潮の下着がちらりと見える。

黒か、最近の子はませてるんだな。

「……その、大変申し訳ありませんでした。おにいさんにご心配をおかけしてしまって。……次は、こんな失敗は絶対にしません！ ……絶対に」

ちよこんと俺の隣に座り、申し訳なさそうにこつちを見ながら。

でも、どこか気まずそうに必死に謝る親潮。

まですつた、変に落ち込ませてしまった。

少し悩ましいが、ここははつきりと俺の問題だと言うべきだよな……。

「……ほんとは、そこまで怒ってはいないんだ、いや、まあ怒ってはいるんだが。ただ、な。それ以上にお前を放り出して自分のことを優先した、俺自身に腹が立つやら情けないやらつーのと、なによりも信じてお前を任せてくれた陽炎に申し訳なくてな……。なんとというか、俺のほうこそ、ほんと、あの状況でお前を放りだしてすまなかつた」

正直気まずさレベルなら、親潮より遙かに上である。

信じて預けてもらった親潮の面倒を、ちゃんと見れず、おまけに危険にさらしてしまつた。

本気で、もう二度と合わせる顔がないレベルだ。

「え? ……あ、そういうことだったんですか。……安心して下さい。陽炎姉さんならあのときの、おにいさんの判断に絶対納得してくれます。そして、わたしがおにいさんの後を追わなかったら、わたしを絶対怒ります。だから、大丈夫ですよ」

「でもな——」

「あそこで、おにいさんの後を追わなかったら、おにいさんが怪我をしていた可能性もあります。だからアレでよかったですよ。それにあのとき、わたしはいないほうがよかったですか?」

「……いや、正直一人じゃ、あのロープを支えきれなかったと思う。そうなっていたら俺も、あいつらも、下手したら今頃あの虎の腹の中だったかもしれん」

あのとき、とつさに俺が離れたロープを掴んでくれた親潮。

その前だって、一人だったら虎の力に引きずられてたかもしれない。

なんだ、つまるところ、親潮は俺たちの命の恩人だったのか。

「なら、本当に良かったです。頑張った甲斐がありましたよ♪」

心底うれしそうに、そう言ってくれる親潮。

まったく、陽炎姉妹には敵わないな、ほんと。

「そうか、なら俺もよかったですよ」

これまでとは別の意味でまいってしまい、夏の空を見上げる。

しばらくそうやってると、ぴたりと、親潮が身体を寄せてきた。

なんでこいつらはほんと、俺なんかにかまってくれるんだろなあ。

「そーいや、さ。今度ダチが結婚するらしいんだ」

今日のメンタルダウン、最大の要因をぼそりと告白する。

「そうなんですか。それはおめでたいことですね」

「はは、まあそうなんだけど、な。……まあそれを知って、急に色々とクルものがあつたというか、このまま俺は一生無職で、死ぬまで孤独なのかって不安になつてな。……なあ、こんな俺でも、いつかは結婚できると思うか？」

子供に、なに聞いているんだろーな、俺は。

そんなスーパー情けない男の吐露を聞いて、少し驚いたような様子の親潮。

だが、すぐにしようがないな、といった風な。

どこか困った微笑みを浮かべる。

そして軽く腰を上げて、俺の耳元に口を寄せてきた。

「……できます、絶対、必ずです、保証します。なんでしたらこの親潮の残りの人生全てを賭けてもかまいません。それくらい……絶対ですよ」

やけに小声で、だがはつきりと聞こえる優しい囁き声。

耳元で囁かれたその言葉は、その声の優しさも相まって脳をふるわせる。

くそ、俺としたことが。

励まされているのか、それともからかわれてるのかはわからんが……それでも、そんなこと言つて貰えたら、うれしいじゃねえか……クソウ。

「……なあ親潮。この車まだ返却するまで時間あるし、ドライブにでも行くか？」

「ッ!? ……いえ、この親潮、うれしつ……いえ、光栄です！ お供します提督!!」

軽トラでドライブに行くの、なにがそんなにうれしいのか。

目尻に涙を浮かべ、俺の手を握ってくる親潮。

いや、喜びすぎだろ。

まあでも、この程度でこんだけ喜んでもらえるなら。

無職の俺でも、そんなに捨てたもんじやないってことかね。

オマケ | 陽炎会議録NO. 6 |

(※NO. は掲載順の番号となり、時系列とは一致しません)

薄暗い部屋、円卓を囲む二十人近い少女らしい者たちがいた。

らしいというのは、なぜか全員が顔を隠すための先の尖った白い被り物をかぶつていて、その顔がよくわからないからだ。

そして被り物の額部分にはそれぞれ番号が振つてある。

あと因みに時間軸的には彼女たちの提督が、虎がらみでドツタンバツタンなイベントに遭遇した日の真夜中である。(緊急招集)

「そして……提督はただ一人、仲間を救うために出口に向かう人波とは真逆の方向に向かって走り出しました！ その姿はまるで波をかき分け敵中に突撃する二水戦のような勇壮さで、わたしはその後ろに続けることが心から誇らしかったです！」

その中で『4』と額に書かれた数字の被り物をかぶった少女が、被り物の上からでも感じることでできる、興奮した様子で語っている。

そして周りのメンバーたち誰もが、同じように興奮した様子でそれを聞いていた。

やがて話が終わり、四番の少女に向けて惜しめない拍手が送られる。

「貴重な報告をありがとう。とても有意義な情報だったわね。あ、四番はあとで詳細な報告書を出すように、今回のことも当然ファイルにまとめるわ」

長姉である一番の言葉に、うなずきあうメンバーたち。

なんということでしょう。彼女たちは定期的にこうやってこつそりと、各メンバーたちが仕入れた提督の情報を、互いに共有していたのである。（驚きの効果音）

「さて、と。では……では次の議題……の前に、四番の行動に対する決議をとります」
「は？」

驚く四番、うなずく残りのメンバー。

「四番がさりと提督にプロポーズまがいのことをして、規約①の抜け駆け禁止、ただし偶然の出会いはいはOK……に、抵触したかの決議。いえ、はつきりと言うわ、四番は……有罪か無罪かの決を採るわ」

ひどく平坦な一番の声。

だがそれにはヒシヒシと伝わる圧力がこもっている。

「ッ!？」

しまった、といわんばかりに衝撃を隠せない四番。

助けを求めるように、四番は三番に視線を飛ばす。

「貴方たち、有罪なら右手、無罪なら左手を挙げなさい」

一番に判断を促され、そして四番からの助けを求められた三番。

三番である彼女は、四番に向かってニツコリと微笑み。

「有罪ギルテイやでー」

と、無慈悲に宣言しながら右手を挙げた。

そして他のメンバーも一糸乱れぬ動きで、有罪を示す右手を挙げる。

「そんな、黒潮さん!?! い、いやあああつ!?!」

叫ぶ四番、ああ、無情。

このあと四番には

・提督接触優先権を最下層に降格、つまり順番は最後。

・一週間、姉妹たち共有の提督写真集の閲覧禁止。

・今回集めた提督の私物これくしよんの没収。

という、大変残酷な処罰が下されることとなる。

つまり陽炎会議は今日も平和だった。

『旅作家』と『軽空母：Gambier Bay』

「ココに昼間から入り浸って小説を書いている、変な人がいると聞いたんですが！」
平日の昼下がりに。

外国語訛りの言葉が、艦夢守市の喫茶店『frost』に響く。

その声に反応した客たちの視線が、声の主に集まる。

そこには、大きなリュックを背負った、金色の髪の女性が入り口に立っていた。
年は二十歳になるかならないかくらいだろうか。

防水パーカーに短パン、厚いタイツで覆われた足には、頑丈そうなブーツ。

その格好から、女性が長期の旅行者であるとわかった。

「はわわ……」

女性は視線を感じて、ピクリと身体を震わせるも、恐る恐るといった様子で店内に入ってきたが、背負っていた大きなリュックが扉に引っかかり派手に転ぶ。

「あいたっ！」

顔を地面にぶつけ、女性のもさもさした金色のツインテールが派手に広がる。

微妙に間があいた後、彼女は顔を赤くし『べーい』と鳴き声を口にしながら顔をあげた。

Gambier Bay (ガンビア・ベイ)

それが店内にいる全員に、なんと鈍くさそうな子だろうと思われている彼女の名前である。

そして彼女は、れっきとした軽空母の艦娘でもあった。

『旅作家』と『軽空母：Gambier Bay』

「は、それであんたは、はぐれた提督を探して旅を続けてると」

「は、ハイ……Admiral、いえ、先生は旅作家なので。この店に昼間から入り浸つ

てずつとなにかを書いてる変な人がいるという噂を聞いて、もしかしたらと思ひ、やって来ました」

ストローでアイスカフェオレを飲みながら、ベイがおどおどと説明をする。

それを聞くのは喫茶店のマスターである朝霜と、彼女の提督である三文小説家。・登場場『三文小説家』と『駆逐艦：朝霜』

ちなみにいまは昼間なので、アルバイトである従業員の初風・登場『無職男』と『駆逐艦：初風』は学校に行っている。

なので現在いる店員は朝霜だけだが、店内には他に客がないのでワンオペ余裕だった。

余談だが別口の賃貸収入が大きいので、経営的にはまったく問題ない。

「そりや残念、うちの提督は小説家じゃなくて脚本家だけ、いまんとこな」

「ちがう、わたしは小説家だ……」

「そういうのは本の一冊も出版してから言うんだねえ」

「ぐぬ……」

痛いところを突かれて、ガクンと頭を垂れる三文小説家。

ちなみに脚本業は好調だが、小説のほうは例のごとく、鳴かず飛ばす以前の問題だった。

「しかし旅作家つてのはあれかい、旅行の体験を書いて本にする仕事だっけ？」

「いい、いえ、先生は文字通り自分で書いた本を売りながら、旅費を稼いで旅を続ける人です」

気つ風のいい朝霜の迫力に未だ慣れず、おどおどと受け答えを頑張るベイ。

彼女は床に置いたりリュックから、一冊の本を取り出しカウンターに置く。

タイトルは『怪傑ポッポ 消えた烈風編』

出版社名は『ふかうみ出版』と記載されていた。

聞いたことのないようなタイトルで出版社だったが、一応自費出版ではないようである。

なにか興味が引かれるものがあつたのか、三文小説家はその本を手に取り、黙々と読み始めた。

「旅をしながらこういう本を書いて。書き上がった原稿を出版社に送って。立ち寄った街の印刷所で製本されたのを受け取って、それを旅先で売る。それを繰り返しながら各地を回っていました……」

「へー、でも本なんてかさばるもんを抱えながら、旅なんて出来るもんなのかい？」

「それは、リアカーだったり、オンボロのバンだったり、あと、わたしが担ぎながらだったり、色々ガンバッテたんです……」

朝霜は馬鹿みたいに大きなベイのリュックをチラリと見て、成る程と納得する。

住所不定のバックパッカーだろうと、艦娘は艦娘、パワーは常人より遙かに優れているのだ。

「旅の本売り作家ねえ。いや、いくらなんでもそれ食ってけねえだろ」

「意外かんですが、traveling expenses（旅費）に困ったことはありませんでした……なぜなら先生は売る場所を見つけるのも、本を売るのも、とても上手でしたので。以前にも——」

『ふええん……Admiral、ココ学校ですよ？ 本当にこんなところで販売なんてするんですかあ？』

『当然だ、学生というのは娯楽と情報にとっても飢えている者が多い、しかも一度人だからを作ってしまったえば砂糖に群がるアリののような状態になる、それが思春期というものなのだ。あとガンビーよ、わたしのことは先生と呼びなさいと言っているだろう。いいか、こういうのは威厳が大事なのだ。大物の空気を出していればいるほど、相手は勝手にこちらの価値を高く見積もる、いざれお前にもやってもらおうから覚悟しておくんだぞ』

『え、えええ！ 無理です先生みたいに売れませんかえええん！ わたしには無理ですう！』

『落ち着きなさい。いいかガンビーよ、大事なものは間合い、そして引かぬ心だ……おつと、ほら客がきたぞ。よく見ていなさい』

『みてみて、なんか本売ってるー。表紙の絵の子もかわいいー』

『……でもちよつと高いねー』

『さて、マケる。マケるから買ってくれ。おもしろいから！』（威厳パージ）

『えー、でもこれ、ほんとにおもしろいの？』

『おおつと、もしかしていま都会、特に艦連指定都市で人気沸騰中のぽつぽつチャンシリーズを知らない？ それはそれは、いいですかい。これはそんじよそこらじゃ売られていない一品だあ。この作品を出版しているふかうみ出版、かの有名な伊八書房から度々宿命のライバルと宣言したとかしてないとかというあの、ふかうみ出版！ おまけになんとこの本、作者のサインまでしてあるつてんだから、こりやあその価値も天にも届くというものだ。花の都会艦連指定都市じゃあ品薄すぎて滅多に見られやしない！ そんな稀少で貴重な本をこのお値段で、いや、さらにマケましようつてんだから驚きだ！ ですがタダでは言えない！ なぜならタダにしちゃうとこの本の続きや、他の本がもう読めなくなつちまうんだ、つまりこの本を買うつて事はこの作家先生のパトロンになるつて話、いよつ、大淀様!! そしてこれを買つたもんなら文芸最前線を支える知性の徒つてことで、学校の成績内申恋愛成就まで思いのまま！ あれ、だつてのに買わない

？ それなら仕方ねえ、そのうちお宝出品番組でこの本に高値がついているのを指をくわえて——』

『え、え、え？ わ、まっつて！ 買う、買うつてば！』

「そ、それ本当かい？」

無理もない、バナナの叩き売りならぬ、本の叩き売り。

そんなものを朝霜は聞いたことがなかった。

「先生は相手によって、とても上手に話し方を変えていました……わたし、一緒にいたっていう気持ちがあるけど、人としやべるのがどうしても苦手で。Admiralみたいな上手にしやべりたいって、そう思って弟子扱いで先生について回ってたんです……」

「そりやまあ、その一緒にいたいって気持ちはよくわかるけどねえ……でも、ならんんであんたはそんな大事な提督と離ればなれになったのさ」

「それは……朝起きたら置き手紙があつて先生がいなくなつてたんです……」

その手紙には、所用で別行動を取ることにする。

本は全部置いていくから、それを売って路銀の足しにしる。

用事はたぶん本が全部売れた頃に終わる、終わったら迎えに行く。

困つたらとりあえず艦連指定都市の艦夢守市に向かうこと。

という内容の文章が、簡潔に書かれていたらしい。

そしてベイの前から提督が忽然と消えたのが、約一年前。

「そりやまた突然だったんだね。で、コレいまままで何冊売れたのさ」

「実はまだ一冊も……」

「い、一年間も売り歩いてかい？」

「はい……」

自信なさげに愛想笑いを必死に浮かべながら、目に涙を浮かべるベイ。

朝霜はあまりに気の毒なその様子になにも言えず、無言で高額紙幣を一枚手渡した。

ベイは最初、その紙幣がなんなのかわからないといったふうに首をかしげる。

朝霜はため息を一つ吐き、三文小説家が先ほどから読み続けている本を指さす。

「釣りはいらぬから、取つときな」

朝霜のその言葉を聞いて、ようやくそれが三文小説家が手にしている本の代金だと察

したベイ。

彼女はプルプルと震えながら紙幣を手に取り、涙を流した。

「売れましたあああ!! 先生売れましたあああ!!」

紙幣を両手で抱きしめて、泣くベイ。

大げさに思うが、無理もない。

なぜならベイにとつて、この本を全て売れば自分の提督が戻ってきてくれる。

そう心に刻みながら、提督のいない日々を旅してきたのだ。

例え小さな一歩だったとしても、一冊売れた。

その事実がベイにとつて大きな希望となったのである。

もつとも、他に客がいないからいいようなものだが、いたらドン引きレベルな泣きっぷりだったので、喫茶店的には軽い営業妨害である。

が、朝霜はため息を吐きながらも、しょうがないという感じで、泣き終わるまで黙ってグラスを拭いて待つてあげることにした。(優しい)

ちなみに三文小説家はガン無視で本を読み続けている。

時折ぶつぶつとつぶやいて怖かったが、朝霜は慣れているし、ベイはそれどころではない。

やがてベイが泣き止み、落ち着いたところで、朝霜が話を再開する。

「それにしても、あんたの提督は今頃どうしてるんだろうねえ。本が手元になんじや路銀を稼ごうにも稼げないんじやねえのかい？」

「わたしが言うのもなんですが、先生は変な人でしたが、とつてもモテたんですう。なぜか旅先旅先でよく女の人にご飯奢ってもらったり、宿を手配してもらったりしてまし

たあ……」

「はー、聞いてる限りじゃアレな感じなんだけどねえ……」

「もしかしてわたし、先生の邪魔になったから置いていかれたんでしょうか？ 確かに

いつまでたつても本を上手に売れないし、方向音痴だし、すぐ泣くから……あ、愛想を
尽かされたんでしょうかあああ？」

ブルブルと目に涙をためながら、カウンター越しに朝霜にすがりつくベイ。

朝霜は少し引き気味になりながらも、ベイのフワフワ髪を優しく撫でる。

「あーもう、泣くんじやないよ。大丈夫さね、あんたの提督は口が達者だから女引っかけ
るのがうまいだけなんだろ。なら女のほうもすぐに気がついて——」

「農耕民と遊牧民、魅力的でミステリアスなのは遊牧民だ。なぜなら人の目には移動す
るものは魅力的に映る、それがなんであれ、な。見知らぬ土地を転々と旅する作家の男
か……狭い村や町しか知らないものにとつてはさぞかし心惹かれる存在だろう。どこ
かで腰を落ち着けて所帯でも築いても不思議ではない」

本を読み終えたのか、突然会話に入ってくる三文小説家。

その言葉を聞いて、ベイの目にたまっていた涙のダムが決壊した。

「うえええん！ やっぱりわたし先生に愛想を尽かされたんですねえええん!!」

「ちよ、提督あんた——」

「それよりも、先ほど話していた手紙を見せてみる。気になることがある」

朝霜の言葉を遮り、珍しく強い口調で三文小説家がそう口にする。

その迫力に、ベイは涙を引つ込め、慌ててリュックを漁り始めた。

しばらくして、防水袋に入れて大事にしまわれていた手紙が、リュックの奥底から出てくる。

その手紙を受け取り、本の文章と手紙を何度も見比べる三文小説家。

「……君の提督は口が軽くて達者だったようだが、文章はその限りでは無いな」

「へ？」

「重厚、いや、武骨といつてもいい。内容もさることながら、文体に太い骨がある」

「え、えつとそれはどういう……」

ベイが疑問を口にするも、三文小説家はそれに答えず、手紙と本の文章を見比べ続ける。

そして手元の原稿用紙になにかを書き込み、ようやく顔をあげてベイのほうを見た。

「わたしも物書きの端くれだからわかるが、この手の人間が書く文章は、文字量が常人より多くなる傾向がある。なぜなら自分の内なる深淵より溢れ出た言葉、その全ては重要で意味があると、そんな信念に基づき確信があるからだ。自分が苦しんで苦しんで絞り出した言葉に愛着が湧く、そう言い換えてもいい」

三文小説家は手紙の文章、そして本の文章を順に指さす。

そして最後に、それらが共通する箇所を書き出したと思われる、原稿用紙の文章を指さした。

「なのに、この手紙は驚くほど簡潔で厳選された言葉が使用されている。しかし文章のクセをみるに書いた人物は間違いなく同じだ。つまりどういうことか……これを書いた人物は、この手紙を読む相手を想っていた。だから自分を律して、信念を曲げてなお、なにかを伝える為にこの手紙を書いたのだ」

手紙を返され、手にするベイ。

ベイはじつと、何度も読み返したはずの手紙にもう一度目を通す。

「一度しか読んでいないわたしにわかったんだ、君もわかってたんじゃないか？ この小説と手紙を書いた人物が同じと知っていたなら、どこかでそれを感じたはずだからな」

「え、じゃあ先生はどうして……」

「それはわたしにはわからん。だが、先ほども言ったように、この手紙は相手を想って書かれている。君の身を案じてか、それとも別の理由があるかはわからんが、誤解無く、簡潔に、君に言葉を伝える必要に迫られてペンを握ったんだらう。うっすらとだが、下に引いていただろう便せんに、複数の下書きのあとがあった。恐らくこれを書く為に何度

も何度も書きなおしたんだろうな」

「わたしの……ため、に？」

ベイは思い出す。

初めて会った日、強引について行くと行って泣き、提督を困らせたこと。

迷子にならないように、手を引いて歩いてくれた、提督の手の温かさを。

提督に会う前は、艦娘として生まれ持つてしまった方向音痴のせいで、いつも道に迷い、一人になることが多くて心細かった。

だが、提督と出会ってからはずっと一緒にいてくれた。

怖いことも驚くことも逃げたくなることも沢山あった。

でも寂しくは、心細くは無かった……そんな、日々のことを。

「……Admiral……テイ・トク……会いたいよお」

大声ではなく、静かに、悲しみにくれて泣き始めたベイ。

朝霜と三文小説家は、その様子を黙って見ていることしかできなかった。

「お疲れ様です、シフト入りまーす」

と、そんな空気の店内に入ってくる水色の髪の少女。

それは学校が終わってバイトに来た初風だった。

初風は店内の空気がつかず、手に本のようなものを持ちながら話し始める。

「いやー、聞いてくださいよ朝霜さん。わたし生まれて初めて本叩き売りつての見
ちやいました。ほらこれ、学校の前で売つてたからつい買つちやつて……つて、あれ？
なにこの空気？」

店内の視線が、初風が手にする本に集中する。

タイトルは『怪傑ポツポ 秋刀魚争奪編』

出版社名は『ふかうみ出版』と記載されていた。

それは、ベイには見覚えのないタイトル。

つまり彼女の提督が書いた新作、そうとしか見えなかった。

「ッ!? Where did you buy it!?」

Who did you buy it from!?」

先ほどまでベそをかいていたとは思えない、真剣で切羽詰まった表情。

そんな顔で、初風に詰め寄り、肩を掴んで揺するベイ。

初風は突然の外国語と、海外艦と思われる艦娘の登場に混乱する。

だが、なんとか言葉を聞き取り「あ、あっち……」と、方向を指さした。

それを確認して、ベイは喫茶店を飛び出す。

「うああああ——! Admiral!! Admiral!! Admiral!!」

ベイは走った。

提督を求め声を上げながら。

提督と別れてからの日々。

今日は売れるだろうか。

今日は見つかるだろうか。

そんな不安を抱えて、旅をする毎日。

自らの提督と出会ってからは、感じなかった寂しいという気持ち。

そんな感情にこの一年間毎日晒され続けた。

だからなのか、ベイはもうためらわない。

チャンスがあれば例え怖くても走り出す。

普通なら初対面の相手に詰め寄って、肩を掴み。

言葉を叩き付けてなにかを聞くななんて真似は、できなかつたはずなのだ。

だが、彼女はそれができた。

一度、手に入れたものを失ったガンビア・ベイ。

図らずも、彼女は失った故にある種のたくましさを手に入れていた。

だからといって、提督がいなくて平気かといえばそうではない。

「あゝもう！ 無理だもん、こんなの！」

『泣くなベイ。わたしは必ず戻ってくる、だからもう少し待っていなさい』

突然、空にベイの提督の幻が浮かぶ。(演出)

恐らく会いたいと願うあまり、ベイの思いが空に浮かび上がったに違いない。あと見た目が気持ち美化されているが、その辺は許して欲しい。

なにせ一年以上も会っていないのだ。

「むーりーでーすー！ もう無理無理無理!!」

ベイは幻に向かって叫ぶ。

もう無理だと、あなたと離れて過ごす日々にはもう耐えられないと。

『まったく、しょうがない弟子だな……』

その言葉に、彼女の提督は困ったように笑みを浮かべる。(幻だつてば)

『だがまだだ、まだ迎えには行けない。許せ我が弟子、ガンビア・ベイよ』

「やだ〜〜！ そんなの……絶対無理!!」

薄れゆく提督の幻の言葉を拒否し、ベイは走る。

その先に、自らの提督がいると信じて――

「あの子、反対の方向に走っていったね……」

初風が示した方向とは完全に逆方向に向かって駆けていったベイ。

その様子を見ていた朝霜は、店内全員の心の声を代弁するように、ボソリとつぶやいた。



「で、昨日も見つからなかったと」

「はいい……無理でしたあ」

一週間後、喫茶店にはメイド服を着たベイの姿があった。

「まあこの街にいるかもしれないってのはわかったんだ、のんびり探したらいいさね。」

今日も仕事終わったら探しに行くんだろ？ なら勤務時間の間はきりきり働きな、サボったらあの本片付けるかんね」

「ひええ、がんばりますう」

住む場所も路銀もなかったベイを気の毒に思った朝霜は、ベイを住み込みの従業員として雇うことにした。あと、たまに隣の部屋に住む秋雲・登場『無職男』と『駆逐艦・秋雲』のアシスタントとしても駆り出されているらしい。

数日ではあつたが働きぶりは悪くなく、そのかいあつてか、ベイは本を喫茶店のレジ横に並べて売ることを許可されていた。

余談だが、三文小説家も自費出版して同じことをやろうと考えた。

が、プライドもあつたのか、葛藤の末あきらめたとかなんとか。

「ううう、Admiral……テイ・トク、わたしがんばるから……それにいまのわたしなら、頑張れば本を全部売って、先生に……喜んでもらえ……る？」

ベイはレジ横にある、綺麗に並べられた本をチラリと見る。

ぱつと見なんとなく売れそうに見えるから不思議だ。

が、貸してもらつた部屋に高く積まれた本の在庫を思い出して、首をぶんぶん振る。

「いやいや、無理無理無理！ やっぱ無理ですよ……先生、早く迎えにきてえ……」

モツプにしがみつきながら、ベイは弱音を吐く。

結局本はあれ以来一冊も売れていなかった、悲しい。

ベイが落ち込んでいると、店のドアベルが鳴り、客がやって来た。

「あ、いらつしやいませえ……」

蚊の鳴くようなベイの声。

入ってきたのはスーツ姿なのに、なぜか無職っぽい男。・登場『無職男』と『駆逐艦：

陽炎』他

男はベイの存在には気がつかず、不思議そうにレジ横に並べられた本を手取る。

「なんで喫茶店で本が売ってるんだよ……しかも高い」

「買ってえ！ マケます、マケますから買ってくださいいい。お、おもしろいですからあ

！」

『無職男』と『駆逐艦：浦風』

季節が巡り、夏が来ようと未だ無職。

そんな無職が日常となつてしまつたある日。

目が覚めて、唐突にあるものが食いたくなつた。

寢床から身体を起こし、支度をする。

外に出ると夏の日射しに全身を貫かれた。

二秒で室内に戻りたくなつたが、ぐつと我慢。

途中で待ち合わせをしていた相手を回収し、とある店に向かう。

行くのはずいぶんと久しぶりだが、まあ今日もやつてるはずだ。

脳裏に、あの雪の日に嗅いだ、焼けたソースの香りが蘇る。

そう、これは俺が無職になつて、まだ日が浅い頃。

つまり去年の冬の話だ。（唐突な過去回想）

冬になると、朝起きて自分の息が白く尾を引くことがある。

四季が巡っている以上当然なんだが、割と突然来るから驚く。

寒い時期は、起きがけに布団に入ったまま一服することがあるので、最初は煙草の煙と見間違えるんだが、どうもいつもより吐く煙が多いというか、もわつとしてる感じ。

そこで、ああ、となつて今度は息だけ吐く。

そして立ち上る白い息を見て、もう冬だなつて実感するわけだ。

普段なら冬の訪れを感じて情緒深くなるのだろうが、いまの俺は二十五社連続でお祈りを食らい、それはもうメンタルダウンが著しい状態である。

おまけに世間は年末ということもあつてか、今年はもう面接の予定すら入れられなかった。

つまり無職のまま年を越すことが確定したわけだ。

そんなわけで、その白い息を見ていると、心だけでなく気温まで低下したんだなあ実感し、それはもうひどい気分になった。

なので布団にくるまって、もうなにもしたくない状態となつた結果。

三日ほどトイレに行く以外は布団から出ず、腹が減れば枕横に置いた水と食パンを適当に口に入れ、そして眠り続けるという、健康なのか不健康なのかよく分らない状況となつたのがいま現在。

さすがに三日もまともに食わなかつたせいとか、無性に温かいものが食べたくなつた。

温かいだけでなく、そう、鉄板の上で作られる独特のあれ。

温かさと同暖かさを併せ持つあの感じ、つまりは鉄板焼き。

おつくうな気分をなんとか奮い立たせ、コートを着込んで外に出る。

そしてあまりの寒さに、二秒で家に戻りたくなつた。

時間を確認してなかつたんだが、外が地味に暗い、夕方だなこれ。

というか、ちよつと、雪、降つてるし。

だがここで戻るのも、なんだかしやくだ。

変な意地を無理矢理張つて、なんとか気持ちの前に進ませようとする。

自転車にまたがり、飲食店が並ぶ通りに向かうが、雪はどんどん強くなつてきた。

もうだめだあ……おしまいだあ……

最悪な気分になりながらも、横殴りに近くなつた雪を避けるため裏路地に避難。

そうやってなんとか目的地向かおうとするが、日も落ち始め、視界まで怪しくなつ

てきた。

日は沈むし、雪は降るし、もう最悪だわ。

そもそも今日って何日だっけか、多分もう大晦日近かつたはずだが。

もしかしたらこの時期だし、早じまいしてる店も多いかもしれない。

そんな中、下町の裏路地っぽい民家が建ち並ぶ間に、ぽつりと垂らされた赤提灯。

赤提灯には雪がべつとりとついていて、なんの店かはわからないが、恐らくなにかの飲食店。

一応のれんもたれてるし、営業はしているとは思う。

なんの料理を出す店かは分らないが、この際なんだつていい。

自転車を店の壁に立てかけ、雪を払って扉を開ける。

のれんをくぐって中に入ると、石油ストーブのおいと、焼けたソースのにおい。

あー、暖かい。

軽く石油ストーブにあたりながら店内を見回す。

驚くべきことにスーパースパイ、テーブルが二つに、一畳ほどの座敷スペースに座卓が

一つ。

店自体は八畳もないんじゃないのか？

だがその座卓すべてが、鉄板付きのお好み焼台だ。

ここに来て変な幸運を引き寄せてしまったか、ふふふ、まさに死中に活だな。

無意味な自信でも、いまはありがたい。

「あゝ、お客さんかのか？ ごめんやけどこの店は会員制なんじゃ……」

そして店の奥から聞こえてくる声、死にたい。

「つーか、会員制ってマジかよ、ここに来て会員制とか、アリかよ。

たぶん提灯かどっかに書いてあるのに、雪で見えなかつたんだな、くそう。

「うちの系列店がもうちいと先に行つたところにあるけえ、サービスするよう言つとくけんそつちに……いい？」

店の奥から顔を出した店員と目が合う。

髪を蒼く染めた、派手な女子学生風の女。

すつきりとした明るい顔立ちに、髪と同じ色の綺麗な蒼い目。(カラコンか?)

反面、地味な色の、薄いニットのセーターと、どこにでも売つてそうな青のジーンズ。

そして使い込まれて色あせた、ピンク色のエプロンが醸し出す生活感のある服装。

華やかで派手な顔立ちと、生活感しかない地味な服装のギャップがすごい。

目をぱちくりとしているが、あれか、家の手伝いしてる店の子供かね。

というか、なんかどっかで見たことある顔だな。

まあいいけど。

「あ、すみません。すぐ出ますんで」

じつと顔を見るのも気まずいので、さっさと店の外に出る。

扉を開けた瞬間、雪交じりの横風が顔に直撃して泣きたくなつた。

あー、くそ、さつきより吹雪いてるな。

俺の人生ろくなこと無いな、ははは。

今日はもう家に帰ってねちまおう、それがいいわ。

そう思つて自転車にまたがろうとした瞬間。

腕をなにかに掴まれ、店内に引きずり込まれた。

『無職男』と『駆逐艦：浦風』

「な、なんで帰るんじや!? ああもう、こんな雪だらけになつてしもうて……いや、そもそもなんでここがわかつたんじや!? って、つべた!? 風邪引いてしまふよもう……あつ、も、もしかしてこんな中でうちに会いに来てくれたん!? そ、そんなら陽炎姉さ

んに連絡をせんとお……で、でも、もしかして二人きりのほうがええん？ もう……おにいさん……あ、食べたいものあるかの？ うちがなんでもつくちやるけん！」

いちどに、そんなたくさん、いわれても、わからない。

「……お好み焼きが食べたい」

脊髄がなんとか記憶に残った最後の単語に反応する。

正直鉄板焼きな気分だったが、ソースの焼けた香りのせいでもうそれしか考えられない。い。

「ええよ！ うちにまかせときー」

そう答えて店の奥に引つ込んだかと思ったら、すぐにタオルを手に戻ってくる少女。

自分事ながら、展開が速くてついていけない。

というかこの子アレか、陽炎姉妹の一人だったか。

確かに自己紹介の時に見た気がしなくもない。

というか一瞬の出来事でわからなかったが、外にいたはずだよな、俺。

なのについてのか店内に引きずり込まれて椅子に座らされていたんだが。

やっぱり君ら人の手を掴むの好きね、あとちから強い。

「すぐ準備するけん、これでしつかり拭きんさい」

と、席に座った俺の頭を軽くタオルで拭く。

乱暴そうに見えて、優しい手つき。

謎の言葉遣いの効果も合わさって、冷えた身体から力が抜ける。

言葉遣いはアレだろうな、アイデンティティを構築したい思春期のあれ。

聞き取れなくもないし、まあそれもいいだろう。

若いうちは大体のことが許される、はず、多分。

「あ、ああ、すまんな」

「ええよ」

俺の部屋より狭い店内、その一角にある調理場。

そこにあるでかい家庭用の冷蔵庫から、材料を取り出す陽炎姉妹の一人。

タオルを渡したときに既に点火していたのか。

目の前の鉄板がじわりじわりと放熱し始める。

前門の熱鉄板、後門に石油ストーブ。

とても暖かい。

「よし、じゃあいまからうちが広島のお好み焼き作っちゃるけん、よう見ときー！」

広島つてどこだろうか。

なんか歴史の授業で習った気もするが、戦史前のどっかの地名だったっけか。

「〜♪」

そんな俺の素朴な疑問もなんのその。

機嫌良さそうに、薄い生地の上に千切りキャベツをのせる陽炎姉妹、の一人。というかキャベツめっちゃ多いな。

だがそれが広島のお好み焼きというのならば、受け入れるべき。

ぶっちゃけソースかけたら小麦粉とキャベツの分量がどうだろうと、味かわらんだろ。(暴論)

そして今更だが、この目の前で機嫌良さそうにしている陽炎姉妹、の一人。の、名前がわからない。

「……なあ、聞きたいことがあるんだが」

「ん〜？ なんなん、焼き上がるのはもうちよつとかかるよお？」

「いや、その、名前……なんだったっけ？」

ガシャン、と、彼女の手から落ちた金属製のヘラが、鉄板に当たって跳ねる音。機嫌のよさそうな笑顔の状態で、表情が固まった。

あ、やべ、地雷踏んだか？

「お、おにいさん？ うち、自己紹介したよね？ そ、そがいに印象薄かった？ 怒らなげえ言うてみ？ ん？ んー？」

ぐぐつと笑顔のまま目と鼻の先まで顔を近づけてくる陽炎姉妹の一人。

笑顔のままだが、恐らくメイビー怒ってる。

そうはいうが、二十人近い自己紹介を一度で全部覚えられるほど、俺は頭がよくない。なんとなく風やら潮で終わるのが多かつた気がするが。

いまだ陽炎黒潮不知火、他数人くらいしか顔と名前が一致しない。

「物覚えが悪くてな……すまん」（素直）

だが長々とした言訳は見苦しいので、さくつと謝罪。

決して固まった状態の笑顔が怖いからではない、怖いけど。

「……もう、しようがないのお……うち、浦風じゃ」

「ああ、浦風な、覚えた覚えた」

と、口にした瞬間、ものすごい驚いた顔でこつちを見る浦風。

え、なになに、もしかして一秒前に聞いた名前を間違えたのだろうか？

だとすればそれはもう、いまの俺にはどうすることもできないので可及的速やかに脳をアンインストールするか土下座するしか理解できないと思うんだが。

「も、もっぺん」

「もっぺん？」

「名前、もっぺん、いいんさい」

「う、浦風？」

なにがそんなに衝撃だったのか。

もう一度名前を呼んだら、浦風が足の小指をダンスの角にぶつけたような感じになった。

「ピョンピョン跳ねながら何かを噛みしめてる感じとでもいえるのか、そんなやつ。」

「つつウ~~~~!! もう、しよ、しよ、しよがないねえもうっ!!」

なにがしよがないのだろうか。

無職には少女の心がわからない。

「しよがないけえ、スペシャルなお好み焼きをやいちやるけん!!」

「あ、おい」

スペシャルなお好み焼きを焼いてくれるのはありがたいが、浦風が手を伸ばしたのは熱せられた鉄板の上に放置された金属製のヘラ。それに無防備に手を伸ばして掴む浦風。

案の定「あつう!」つと、握った瞬間、浦風の手を離れて放り投げられるヘラ。

運の悪いことに、そいつは放物線を描きながら、俺の顔にベチャリと張り付いた。



「ごめんねえ……」

「いや、別にそんなに気にしなくてもいいぞ、ほんと」

ひどくみつともない悲鳴を上げといて説得力ないけど。

あまりに驚いて大げさな叫び声を上げてしまったが、別に大したことはなかった。

が、慌てた浦風に俺は店の奥にある居間に移動させられ、そこに無理矢理寝かされた。

そんな俺に氷袋を当てつつ、のぞき込むような姿勢で泣きそうな顔をしている浦風。

こんな雪の日に突然店に来た、名前を忘れていた何度かあっただけの男を部屋に上げるとは。

さすがに少し心配ではある、が、まあよく考えたら親御さんとかいるか、多分。

「げにごめんね……こがいな失敗いままでしたことなかったんじやけど」

「それはいいけど、なんか焦げ臭いんだが……」

そういうえば、あのお好み焼きは未だ加熱されてる最中だったのを思い出す。

メチャ慌ててたから火も切ってなかったよな、確か。

「いけん焼きつぱなしじやった！ まつとつて、すぐ作って持つてくるけん！」

「あ、ああ、わかった。焦らなくていいぞ」

氷袋を押しつけるように渡し、慌てて店の方に戻る浦風。

ぼつんと居間に一人残される俺。

身体を起こして、六畳ほどの部屋をぐるりと見渡す。

中央のコタツに渋い色合いの桐箆笥、ミカン、急須に電気ポット、小型の石油ストーブに、上に載ったタライと張られた水、小さなテレビ、ゴミ箱等々。

なんとか生活に必要な全部を、ここにぎゅつと詰め込んだかのような空間だな。ワンルームに住んでる俺がいうのもなんだが、なんとかおぼあちゃんの部屋っぽい。

手持ち無沙汰になり、少し冷えてきたこともあつてコタツに足を突っ込む。

と、中に積まれたなにかに当たった変な感触が、足裏に伝わってきた。

反射的にコタツの中に手を入れて、中に積まれていたものを引っ張り出す。

「……」

まあなんだ、あれだ、半乾きの洗濯物だ。

が、問題はなんとというかその、あれだ。

さすがに絵面がヤバイので、手に取ってしまった水色の肌着。(遠回しな表現)

その薄い布の洗濯物をそつと中に戻し、コタツから出る。

極めて気まずい、あと煙草が吸いたい。

「おまちどうさん……つて、なんねーそがいなとこに座つて、コタツに入ったらええの

に

「ああ、まあ、その、なんだ、コタツの中にな、そのな……」

「うん？」

俺の気まずそうな様子を不思議に思った浦風は、焼き上がったお好み焼きをコタツに置き、布団をめくって中をのぞき込んだところで……固まった。

「あは、あははは、その、ごめんねえ……す、すぐかたづけけるけん！」

「いや、なんだ、店の方に戻って」

「いや、ええから！　ちよつとまっつてええ！」

慌ててコタツの中から洗濯物をかき出し、抱えて別の部屋に持つて行く浦風。

ほんと、いったりきたりで大変だな。

俺のせいだけ。



「はあ、なんやせつかく提督が来てくれたのに……今日はええとこなしやわ」

「まあ気にするな、俺なんざここ数ヶ月ずつといいとこなしだぞ」

広島風（不適切表現）なるお好み焼きを食べ終わり、コタツを囲みながら食後の一服。

普通にうまかったな、食後のコーヒーもいい香りだった。

「あと今更だが、この店に来たのはたまたまだからな」

「あはは、やつぱり？　うちも改めて考えたらそうじゃないか思う……あ、灰皿」

「お、悪いな」

子供の前で煙草はと思い、外で煙草を吸おうとしたら未だ吹雪。

十秒くらい扉を開けて悩んでいたら、浦風に怒られた。

そして結局、先ほどの居間で一服させてもらうことに。

「なんかすまん、一本だけにしとくから」

「べつにええんよ、気にせんでも。お客さんにも吸う人はおつたし」

過去形、そういや今更だけど、この店って会員制だったよな。

「会員制の店ってはじめでだけど、どんな客が来るんだ？」

「ここに来るなあ姉妹や、知り合いの人らばかりじゃ。大通りの方に普通にやつとる、それなりに大きい店もあるんじゃないけど、うちはもうそこで働いとらんけえ。いまは一人でこの店切り盛りしちよるんよ」

「あー、昔はそつちで手伝いもしてたけどってことか。んでいまはこの店を切り盛りしてると……若いのに店一つ任せられるってすげえなおい」

そして親が本店？　のでかい店でがんばって、この店は娘に任せてるって感じか

な。

つか姉妹って、多分陽炎姉妹のことだよな？

「任されるいうか任せてるちゆうかやけど……そげなことないよお、ただなんのために頑張つとるんじやろってなつてしもうて、働くのに疲れてこつちの店でほそぼそやる事にしたただけじゃけえ」

働くのに疲れたって、ガキがなにいつてんだ……と一瞬口に出しかけたがゴクリと呑み込む。

というのも、そう口にした浦風の顔が、年不相応な寂しげなものに見えてしまったからだ。

まあそうだよな、何歳だろうとそう思うことはあるよな、確かに。

「だよなあ、わかるわ。なんで働いてんだろなあって……思ったことは俺もある……まあ、いまとなつてはほど遠い悩みだけだな」

ぼろり、共感してこぼしてしまった弱音のような言葉。

それを聞いて、浦風はきよとんとした顔をして、一瞬固まる。

そしてゆつくりと机に両肘をつけて、組んだ両手に顎を乗せるポーズを取ると、首を傾けながらニヤニヤとした表情でこつちを見つめてきた。

「……なんだよ」

「別にいい、ちいと……ふふっ」

年齢に見合わない寂しげな表情を見せたかと思えば、年相応の笑みを浮かべる浦風。この年頃の若い子は感情の起伏が激しいな、まあそれもまた若者の特権か。

うらやましくなんざねえぞ、ちきしよう。

「まあ若いうちは色々とあるもんだが、同じくらい色々なるとかなるもんだから、あんまり深刻に考えなくてもいいぞ、ほんと、マジで、若いってうらやましいわ……ほんと、俺もあともうちよつと若けりや履歴書の段階でお祈りされることも無かつたかもな、ほんと」

そして慰めようとして、ブーメランが刺さる。

ああ、だめ、俺ってまじ駄目なヤツ……

「しゃきつとしんさい！ めそめそ泣き言こぼしちよつてもしょうがないけん！」

俺のほうに身体を寄せて、パチンと背中を叩いてくる浦風。

その衝撃で煙草の灰が落ちかけたので、慌てて灰皿にねじ込む。

「うるせえ、俺は無職だ。泣き言が増えるのは職業病だよ！」

実際この数日の泣き言で作文が書ける。

「まあ今年色々あったじゃろうけど、来年はきつとええ年になるよ。当然再来年もその次の年もじゃ、うちが保証しちやる」

「でたよ、根拠の無い若いやつポジティブ思考……まあ嫌いじゃないけどな、つて、ああそうか、もう今年もあと……二日でおわりか？」

「ふふつ、この店も今年はまだ店じまいじゃけえ、今日来てくれてよかつたわ。うちも明日から陽炎姉さんの屋敷に行くけん」

屋敷、屋敷ときましたか。

うすうす感じてたが、長女である陽炎もまた、いいところのお嬢な気配。

「そうや、提督も一緒に陽炎姉さんとこに行かん？」

「え、やだよ。なんでおまえら姉妹の女子会に俺がまじらにやならんのだ。気まずいつてレベルじゃねえぞ」

できれば大晦日正月は一人でゆっくり過ごしたい派。

まあ、ここ数年は望まなくてもずっと一人だったが。

「そんなん言わんで、な？」

コタツから半分足を出し、俺の腕に絡みつくように身体を預けてくる浦風。腕に伝わる柔らかな感触、コイツ子供のくせに結構オツパイあるな。

子供相手にクソみたいな思考がよぎったので、慌てて振り払う。

「まあ来年、気が向いたらな。今年は予定がある」

一人で過ごすという予定が。

「本当？ 約束じゃよ、やぶったらいけんけえねー」

「気が向いたらゆうとろうが」（広島弁汚染レベル1）

というか、あんまり長居しすぎるのもあれだよな。

さすがにそろそろ帰るか、コタツを抜け出してよっこらせつくすと口にしながら立ち上がる。

ぐぬ、この温もりから離れるのはちよつとつらい。

「まあごつそうさん、そろそろ帰るわ」

「え、もう帰るん？ 雪もふつちよるけん、なんなら泊っていてもええんよ？」

「いや、さすがにそこまで甘えられんわ」

というか、親御さんとか帰ってきたら気まずいってレベルじゃない。

なおも引き留めてくる浦風を軽くあしらい、雪で濡れた靴を履く。

なぜかわからんが靴を履くあいだ、浦風はずっと俺の肩に手を置いていた。

靴を履き終えて立ち上がると、浦風が寂しそうな表情で話しかけてくる。

「のお、提督さん」

「なんじやい」（広島弁汚染レベル2）

「提督さんは、もううちの店の会員じゃけえ、いつでも来てね？」

「ああ、まあ気が向いたらな」

「うん、うち……待つとるけん」

見送りのため、俺の服を軽くつまみながら、とことこと後ろからついてくる浦風。なんか映画でこういうシーンあったな、この後ヤクザが撃たれるかんじのやつ。

止めてくれるなおつかさん、みたいななんかそういうシーンだったな。

「じゃあな」

せめて別れが惜しくないように、笑顔を作る。

「……気いつけてね。こけたりしたらいけんよ?」

「はは、雪も止みかけだし、さすがに——」

などと口にしながら扉を開けたとたん。

先ほどまで小ぶりになっていた雪が、急にものすごい吹雪に変わった。

あれだ、なんだ、ホワイトアウトで感じのレベル。

「……」

「えつと、もうちよつと休んでつてもええんよ?」

さすがにお言葉に甘えた。

くそう、カツコつかねえ。

—— 現在

「のお、提督さん？」

「なんだ？」

「ふふふ、なんでもないけん、呼んでみただけじゃ」

「……」

「わ、わ、わ、無言でデコピンするのやめえや！ ふふ、今日も元気じゃねえ」
クソ暑い中、久しぶりにきてやったというのにおちよくられた。

大人の威厳を保つために浦風にデコピンをお見舞いする、が、かわされる。
くそう。

「……なんなんですか、この甘酸っぱい空気は」

そんなじゃれあい、冷めた目で見ている浜風。・登場『無職男』と『駆逐艦：浜風』
看病してもらったお礼にと、飯をおごると言ったらすごい勢いで食いついてきたの
で、ならばと連れてきたのだが、なぜか機嫌が悪い。

自転車の荷台に乗せて向かう道中は、鼻歌歌うほどに機嫌がよかつたんだが、もつと
いい店に連れて行くべきだったのだろうか。

しかしながら、今日は無性にお好み焼きが食いたい気分だったんだ。

許しんさい。(広島弁汚染レベル3 ※なお誤表現)

「まあ食ってみろって、うまいから」

「いえ、浦風の作るお好み焼きが美味しいのはよく知っていますが……」

焼けたお好み焼きを、もしやもしやと一定のペースを維持しながら食べる浜風。

そして一枚食べ終わったかと思ったら、すぐに追加注文。

しかも海鮮ミックスと豚肉の二枚。

連れてきていてなんだが、よく食うなコイツ。

「のお提督さん、そういえば今年はどうじゃ？ ええ年になつちよる？」

なにがそういえばなんだよ、と、口に出しかけたが。

「そういうや去年の末にそんなことをいってたような、いってなかったような記憶がある。」

いい年、と聞かれれば間違ひなくろくな年じやないのは確かだ。

なんせ先日ついに、新記録の九十五社連続お祈りを達成してしまった。

まあずっと新記録だけだな。

「どうもこうもねえよ、森で変なのに遭遇するし、風邪は引くし、煙草は値上がりするし、前島は結婚するらしいし、職は見つからんし、虎には襲われるし、相変わらず俺の人生

ろくなことねえわ」

「なんねえ、こがいな美人に囲まれとるのに、なにを言いよるんか」

「そうです、提督はもつと私たちと一緒にいる幸せを実感すべきです、もぐもぐ」

「おつ、そうだな」（生温かい笑み）

実際美人だけどな、君ら姉妹。

しかしながら大人の俺には、絵に描いた餅（美人）なので、君らが美人でも大して意味は無い。

そんな感じでよく食う浜風と、せっせとお好み焼きを焼きながら絡んでくる浦風との時間を過ごしていると、なにやら祭り囃子の太鼓の音が聞こえてきた。

「ああ、夏だから神社でお祭りでもやってるのか……あれ、よく考えたら俺、今年一回も神社に行つてない、初詣すら行つてないぞ……というか、もしや今年の九十五社連続お祈りはそのせいなのか？ ……まあそんなこと無いとは思うが、ものは試しで帰りにも寄つてくか」

「!?!」

なんてことをボソリとつぶやいたら、浜風と浦風はすごい勢いでこちらを見たあと、同時になにやら考え込んだかと思うと、ぱつと顔をあげてお互い数秒間見つめ合い、がしつと固い握手を交わす。

なんなの君ら、テレパシーか？

「提督、提案があります」

ググツと身体を寄せてくる浜風。

近い、近いって。

「な、なんねえ」（広島弁汚染レベル4）

「お祭りに連れて行ってください、私と、浦風を！ それはきつとすぐくイイと思います
！」

「そうじゃそうじゃ！ な、なんならうちの浴衣姿もサービスするけえ！」

「べ、別にかまわんが」

なにかイイで、なにかサービスなのかは置いておいて。

どうせ帰りによるついでだし、まあいいかと承諾。

決して勢いに圧されたわけではない、はず。

俺の返事を聞いて、ガッツポーズとハイタッチをする浦風と浜風。

そのあと二人は嬉しそうに店の奥に引っ込んでいった。

なんでも、マジで浴衣に着替えるそうな。

つか浦風、店番はいいのか。

まあ、お祭りなんざずいぶん長いことってなかったし。

たまにはそがいなのもええかもね。（広島弁汚染完了）

オマケ — 陽炎会議録NO. 7 —

（※NO. は掲載順の番号となり、時系列とは一致しません）

薄暗い部屋、円卓を囲む二十人近い少女らしい者たちがいた。

らしいというのは、なぜか全員が顔を隠すための先の尖った白い被り物をかぶつていて、その顔がよくわからないからだ。

そして被り物の額部分にはそれぞれ番号が振ってある。

あと因みに時間軸的には浦風と浜風が、自分たちの提督と一緒にキャツキャウふふと神社のお祭りを楽しんだ日の真夜中である。（緊急招集）

「……いやー、びっくりしたわー。比叡姐さんとこの組の仕事のヘルプに入ってたら、提督と並んで歩く十一番と十三番がいたんだもん」

淡々と、そして静かに『1』と額に書かれた数字の被り物をかぶった少女が、平坦な声で話し続ける。

他のメンバーも皆、無表情（かぶり物で見えない）でその話を聞いている。

ただ十一番と十三番の少女は、なぜかプルプルと震えていた。

なんでですかねえ……

「いやそりゃまあ、聞いた限り見た限りでは？ 別に規約違反らしい違反は？ 無かったとは思うわよ、グレーなところもありそうだけど。でもさ、浴衣よ浴衣、二人で楽しそうに浴衣姿で提督と腕組みながら、浴衣姿で」

余談だが、ゲーム内で浴衣グラが実装されている陽炎型は、多分いまのところ浦風と浜風だけである。（投稿日現在）

※ただしグッズ用の書き下ろしイラストでは、嵐、野分、舞風、萩風などの浴衣姿もある模様

長姉である一番の言葉に、うなずきあうメンバーたち。

そして震え続ける十一番と十三番。

「確かに、抜け駆けの行為の判定的にはセーフだったかもだけどさー。決してネジリ

はちまきに、はつぴ姿を提督に見られちゃったっていうか、なんで私には浴衣グラがないのかとかそういう話じゃないけどさ（私怨）。これは決議案件にすべきかしらねえ……」

「ま、待つてくさい！ それなら途中で合流した四駆（嵐、野分、舞風、萩風）のメンバーも同罪では!？」

とつさに立ち上がって発言する十三番。

そう、実はたまたま浴衣姿でお祭りに来ていた四駆のメンバーたちは、浦風浜風と合流してなんだかんだで一緒にお祭りを楽しんだのだ！

流れ弾が壮絶に命中して、ビクリと震える四駆メンバーたち。

「ま、待つてくれ陽炎の姉貴！ 他の三人はともかくオレはただ後ろからついて行ってただけでなにもしてねえよ！」（早口）

「ちよ、嵐あんた提督のチョコバナナ（意味浅、普通のチョコバナナ）を横から啜えてたじゃない!!」

「そ、そういうマイだって、提督に（金魚すくいの水を）かけられて、そのあと丁寧に拭いてもらったのを喜んでたじゃねえか!？」

「えっと、私は別に……」（目そらし）

「萩は提督がちよつとかじつて飽きたっていうリンゴアメをもらつて、ずっと舐めてい

ましたね。あとそのアメは他のだれにも舐めさせませんでした」（平坦な声）
「う、裏切ったわね野分!? あなただつて、げたの鼻緒がキレたからつて、少しだけ提督にお姫様だつこされてたじゃない!!」

「そ、それは!?!」

そして、四駆の各々が口にする自慢にも似た告発。

その報告されてない事実を初めて聞いた他のメンバー達の目の色が変わる。

その結果、この後、仁義無き法廷バトルの幕が開くのだ……が、その詳細は省く、

結局つまり陽炎会議は今日も平和だったということなので。

『芸術家』と『潜水艦：伊168』

「で、開催まで三年を切ったわけだけど。慰霊祭の計画は進んでるのかしら？」

部屋に響く、気の強そうな女性の声。

指先で机を叩きつつ、女は話を続ける。

「市長の私が言うまでもないけど、今回の慰霊祭は、戦後の節目として過去最大のものになるのよ。特に象徴になる『モニユメント』は生半可なものでは駄目、予算をいくらつぎ込んでも構わないけど、それにふさわしいものじゃないと絶対許さないわ」

艦夢守市の市長である彼女の言葉に、会議室に集まった市の重鎮たちが頷く。

問いかけられた担当者は、少し声を震わせながら進捗状況の報告を告げる。

「モニユメントに關しましては現在制作者の選定を進めていますが、その筋に詳しい誰に聞いても、同じ名前が出てきます。いまこの国で、それを作れるのは彼しかない」と「やはり……『ひまわり』か？」

重鎮の一人が、会議室全員の言葉を代弁するように確認する。

担当者はゴクリとつばを飲み込み、確信を持った表情で報告を続けた。

「はい、私も彼以外には考えられないと思つています」

「しかし、彼は引き受けるのかね。そもそも彼はああいふ立場だ。それに聞くところによると、性格自体もとんでもなく……その、かなりクセの強い男なんだろう？」

別の重鎮が、少し言葉を選ぶように疑問を口にする。

なぜならひまわりの変人ぶりは有名だ。

そしてなにより、その立場も。

「確かひまわりは貴方のところの基地にいたわよね……どうかしら？」

市長の問いかけに、重鎮の一人である長い黒髪の女性が眼鏡を触りながら答える。

「幾つか、条件を呑んでもらえるのなら……やるでしょう、彼は」

「……わかった、彼の件は貴方にお願ひするわ。説得や制作に必要なものなり許可なりがあれば、私がなんとかする。そのときは連絡しなさい」

その言葉に、黒髪の女性は静かに頷く。

これは戦後芸術の最高傑作とうたわれた壁像。

『別れ』を制作した、芸術家ひまわり。

そして彼を支え続けた一人の艦娘の話。

——
会議から七年前

「違う違う違う、彼女たちの美しさはこんなものではないはずだ」

一人の男が作業台に向かいながら唸っていた。

歳は二十代後半か三十代前半。

ぼさぼさの長い髪に、伸ばされたままのヒゲ。

衣服は汚れがついた白衣を羽織っていて、まくられた袖から伸びるのは、硬い素材を扱う彫刻家特有の太い腕だ。

そんな男が血走った目で作業台の上にある、粘土の塊に向かって必死にヘラをふる

う。

「違う違う違う……」

何度も何度も、そう独り言を呟きながら、粘土の塊を削る。

記憶の中にある、色あせた写真、それを必死に思い出しながら。

かりかり、ごりごり、かりかり

ごりごり、ぺたぺた、ごりごり

日の光も届かない、とある屋敷の地下室で。

誰の声も届かない、土の下にある部屋で。

男は来る日も来る日も。

毎日毎日、粘土や石を削り続ける。

かりかり、ごりごり、かりかり

ごりごり、ぺたぺた、ごりごり

そして今日も粘土を削っていたときのこと。

地下室が揺れた。

続いて、複数の人間がこの地下室へと続く、階段を駆け下りてくる音。

気晴らしに作った、似たようで違う、別のモチーフの像。

その像をうれしそうに持って行く、欲にまみれた人間とは違う。

鍛えられた兵士たちの足音。

男はとある屋敷の地下に、閉じ込められていた。

もつとも、本人は全くそう思つてはいなかつたのだが。

むしろ貴重な資料が手に入り、衣食住という余計なものに気を回さなくてすむ、作業に集中できる現状に不満は無かつた。

男にとつてのただ一つの不満は、己の中にあるそれを、形にできないことだけだ。

地下室の扉が開き、二人の少女が部屋に踏み込んで来る。

二人一組の、特殊な訓練を受けた兵士の動きで。

「動くな!! 手を頭の上に置いて、床に伏せろ!!」

二人の少女のうち、黒髪のお下げを垂らした少女が、拳銃を男に突きつける。

もう一人の長い金髪の、赤い目の少女が油断なく室内を見回し、口を開く。

「時雨、他に誰もいないみたいだけど、どうやらここが密造の現場っぽい」

「了解だよ夕立。となるとこの男が下手人か……こつちを向いてくれるかな?」

その警告を受けても、男はぶつぶつと呟き続けながら、粘土を削り続ける。

全く反応が無い男の様子に、時雨、夕立と呼び合った二人の少女・登場『あるじ』と

『駆逐艦：夕立』は、お互い顔を見合わせて、ゆっくりと男に近づいた。

「聞こえていないのかな? 言つておくけど僕たちは艦娘だよ、無駄な抵抗は——」

「……艦娘？」

艦娘という言葉に反応した男の血走った目が、ギロリと時雨をとらえる。

服の下、魂の中までのぞかれるような恐怖を感じ、思わず後ずさつてしまふ時雨。

「今回はまたずいぶんと精巧なモチーフを用意したものだ。だが、素体が目の前にあるのであればどんな硬い石であろうと削り出すのは容易。どれ、こちらに、まずは服を脱ぐんだ」

「な、ななななな、なにを言ってるんだ君は!？」

「ちよ、なんかこのおじさんヤバイッほい……」

手を汚れた白衣で拭きながら、ゆっくりと時雨と夕立に向かつてくる男。

圧倒的な力の差があるというのに、その生理的な恐怖に思わず後ずさりする時雨と夕立。

「ふぬ、どこに行こうというのだね？」

「きゃああああ!!」

じりじりと近づいてきた男に、思わず天下の艦連特殊部隊である獵犬部隊の隊員とは思えない、情けない悲鳴を上げ逃げ出す二人の艦娘、それを追いかける男。

「ちよ、なにやってるのよ時雨！ 早く捕まえるっほい!!」

「そ、そういう夕立こそ捕まえてよ！ 突撃班一の狂犬の名前が泣くよ!!」

「血煙の時雨が言うことじゃないっばい！　そもそも生理的に無理っばいっばいっばい！！」

「僕だつてそうさあああ！！」

作りかけの像や、様々な彫刻用の素材、画材、キャンバス、資料写真などが置かれた室内。

それなりの広さではあるが、物が多いその部屋の中をぐるぐると回る二人の少女と、男。

「やれやれ、物事が早く推移すればそれだけ怠惰が生まれるが、私が君たちよりも速く動く時間に生きているわけではないのだから、そろそろ——ぐべ！！」

部屋に一つしかない出口、それを背に逃げ道をふさぎながら二人の艦娘に迫る男。絶体絶命（生理的に）と思われたその瞬間。

ドアが開いたままの出入り口から、増援として駆けつけた水色の髪の少女が、背後から男の背中を蹴り倒し、動けないように踏みつける。

「アンタら……なに遊んでるのよ」

「遅いよおおおお！　叢雲隊長おおおお！！」

「うえええん！　こわかつたっばいっばいっばい！！」

普段の凶暴で生意気なものとはかけ離れた、情けない部下の姿。

その様子に、叱ろうとしていた『叢雲』と呼ばれた艦娘の部隊長も、思わず怯む。

「え、なんでアンタら涙目になってるのよ……」

「この人が服を脱げつてええええ」

「はあ？ つたく、こんな時代に好きこのんで戦うことを選んだ“ろくでなし”が情けないこと言つてんじゃないの！」

それを聞いて叢雲は部下を一喝し、腰まで届く長さの髪をかき上げ、踏みつけている男を見る。

踏みつけて倒した拍子に頭でも打ったのか、気絶した様子。

「でも、あたしたちにそんなこと言えるなんて。ケチな贗作屋にしてはえらく度胸があるわね」

念入りに動かないのを確認し、叢雲は足でうつぶせになっていた男をひっくり返す。

瞬間、仰向けになった男の顔を見た叢雲の動きがぴたつと止まった。

「む、叢雲隊長？」

様子のおかしい叢雲に、時雨が声をかける。

なぜならその様子はまるで、雷に打たれたかのように――

『芸術家』と『駆逐艦：叢雲』

「で、刑期はどれくらいになりそうなのよ」

「そうですねえ。調べた限りどうも国外旅行中に誘拐されて、強制的に制作を強いられていただけのようですので、そこまで重い罪にはならないかと。裁判次第ですが禁固刑で一年から三年といったところでしょうか。うまくいけば執行猶予も考えられます」

（※禁固刑は懲役刑とは違い労働の義務などが無く、収容される環境にも違いがある刑罰）

この場所は艦夢守市にある艦連拠点の一つである艦連軍基地。

その作戦会議室で『大淀』と呼ばれる眼鏡をかけた艦娘の女性と、叢雲が完了した任務に関しての会話をしていた。

今回の任務の主目的は、艦娘の彫像を密造している国外の現場に踏み込み制圧するこ

と。

というのも、艦娘に關係する物品の作成や販売は、基本的に艦連の許可を受けないと行えず、当然許可なしに行えば艦連法に抵触するからだ。

理由はいくつかあるが、基本的には艦娘の権利などを含めた肖像権に關係するもの一つ。

そして艦娘關係のグッズの売り上げが、わりと馬鹿にならないレベルで艦連の収入源となっていたりするからだ。(※例 島風のステッカー)

特に今回のように美術品レベルの艦娘彫像などは、販売密造を含め放置できない問題なのである。

ケチな犯罪行為に艦連軍特殊部隊が投入されたのは、そのあたりの見せしめも含めた理由があつた。

だがまさか、その投入された特殊部隊の隊長の提督が現場で見つかるとは、さすがに誰が予想できただろうか。

「それで、どうなんですか実際」

「なにがよっ」

興味津々といった風な様子で、眼鏡を光らせながらすすすと寄ってくる大淀。

「提督をみつけた気持ち、というやつですよ」

「……………つるやいこ」

赤くなる顔を手で押さえ、そつぽを向く叢雲。

そんな叢雲を見て、ニヤニヤしながらクイツと眼鏡を持ち上げる大淀。

「ふふふ、ですがまあどうされますか。今後のお仕事に關しては」

「……………ちよつと考えさせてもらうけど、部隊長はどのみち続けられないかもしれないわね。なんというかその、ていと……………ゴホンッ！ て、提督次第って部分もあるけど、幸か不幸か刑期の間に訓練と引き継ぎはなんとかなると思うわ。夕立……………はちよつと難しいわね、すこし経験が足りてない部分もあるけど、時雨なら問題ないはずよ」

提督、そう呼ぶことに恥ずかしさを感じたのか、叢雲少し顔を赤らめながら言った。

それを見て、大淀はクスリと笑う。

「ええ、ご希望に添えるようにさせていただきます」

「悪いわね」

「いえいえ、我々にとつては好ましいことですので」

羽根ペンを揺らしながらニヤニヤと笑う大淀。

憎たらしいと思う反面、いつだってその余裕と事務能力が心強いと叢雲は思う。

思えば大淀とは、彼女が基地に着任して以来の付き合いだ。

数え切れないほどの作戦と、日々の任務を共にしてきた。

そう簡単に大淀との付き合いをやめられるとは思えないので、これからもなんらかの形での関係は続くだろう。

そんな事後報告を含めた話を終え、ひとまずこの辺で……というとき、ドアをノックする音が部屋に響く。

大淀が許可を出すと、憲兵がキビキビとした動きで部屋に入ってきた。

「失礼いたします。今回の作戦で捕らえた実行犯の贖作師……いえ、叢雲様の提督殿の件でご相談したいことが……」

先ほどの入室の様子とは反対に、言いづらそうに言葉を濁す憲兵。

訓練された憲兵らしからぬその様子に、大淀と叢雲は不思議そうに顔を見合わせた。



「つまり、食事のスプーンを使って堂々と壁を掘っていると……」

「はい、どうも昨夜からずっと掘っていたようでして。そのまましておくこともできず、やめるように言ったのですが聞こえた様子もなく。かといって、たとえ罪人であろうと、提督殿を力でおいさめするわけにも……」

今回の件で捕らえられた罪人たちが収監されている、牢屋がある区画。

到着した叢雲と大淀の目の前には、柵の向こうの部屋で、一心不乱にスプーンで壁を掘り続ける男の姿があった。

この収容場所は鋼鉄のコンテナでできており、いざというときに区画ごと切り離して移送ができるように造られている。

そのため内部の壁はコストと重量、また自傷行為防止を考慮し、厚い軟性の石膏ボードのような素材が使われていた。

その為、スプーンなどで途中まで掘り抜くことはできるが、鋼鉄の壁に阻まれてそれ以上は掘ることは不可能だ。

「はあ……開けなさい」

「は？ え、いや、あ、了解です」

叢雲の指示に一瞬戸惑うも、慌てて牢の扉を開ける憲兵。

見た目はか弱い乙女だが、中身は屈強な兵士が何人いようと傷一つつけられない艦娘だ。

そんな艦娘がこの場には二人。

たとえ罪人が何人いようと、危険なのは罪人のほうである。

そう納得した憲兵が鍵を開ける。

「ねえアンタ、こっち向きなさい。あゝゝゝ、コホン。改めまして、て、提督。アンタの

艦娘、特型駆逐艦、5番艦の叢雲よ……。ほら、こっち向きなさい」

どの言葉に反応したのかは分らないが、叢雲の言葉を聞いて男がピクリと反応し、振り向く。

そして叢雲のほうをじーっと見つめたあと、呟いた。

「……違う、君じゃない」

「はあ!? いや、違わないわよ!」

思わぬ否定の言葉に、叢雲は驚く。

焦った様子の叢雲を見ながら、男は視線をそらさず言葉を続ける。

「君は自分がどんな存在だと思う?」

「な、なに? 突然聞かれても……しいていうなら海の上を走って戦う存在かしら。これでも水上での戦闘能力なら世界でも有数の艦娘っていう自負があるわ」

胸を張って、自信ありげな表情を浮かべる叢雲。

その言葉に嘘偽りは無く、艦連の特殊部隊隊長という立場に、弱い艦娘がつけるわけがない。

しかし男はそれに関して知らないのか、それとも全く興味が無いのか。

表情一つ変えずに言葉を続ける。

「水上……潜水艦みたいに潜れないのか?」

「いや、私、水上艦だし。フロッグマンの訓練くらいは受けてるけど」

(※フロッグマン 軍事活動を行う水中工作員の通称)

「フロッグ……蛙？ じゃあやっぱり違う、君のことは知らない」

「私を知らないって、アンタ、もぐりでしょ！」

騒ぎ立てる叢雲、それを無視して男は再び壁を掘り始める。

傍から見ると構ってほしい猫が、飼い主にじやれついているようにも見えた。

その様子を見ていた大淀が、お腹いっぱいといった表情で口を出す。

「ともかく、しばらくはここにいてもらいましょう、なんなら服役もこの基地ですらうっても構いませんし。こう堂々と壁を掘られては他の施設に移すよりも、そのほうがいいでしょう。なにより……叢雲さんも面会が楽でしょうから」

悪い笑みを浮かべながら、クイツと光る眼鏡を触る大淀。

「アンタ、さすがにそれは……」

「権力とは使うためにあるのですよ、ふふふ。まあ司法取引の範疇です。いろいろと情報提供やら証人保護やらが使えないか考えてみますよ。そのかわりといってはなんですが……」

大淀の言いたいことを察した叢雲が、ため息を吐く。

「はいはい、わかったわよ。時雨や他の部隊員たちをどこに出しても恥ずかしくないよ

うに、きちつと訓練するわ」

「ええ、よろしくお願ひいたします」

叢雲は複雑そうな表情で、黙々と壁を掘り続ける男を見る。

それは離れたくない思いからか、それとも自分の提督にいつでも会えるようになる喜びからか。

「じゃあね、また来るわ」

投げかけられた言葉に、男はなにも答えを返さなかった。



「それで、どんな感じなんですか？」

「……なにがよ」

「当然、提督をみつけた気持ちっばい！」

部下の陸上戦闘訓練を終え、書類整理をしていた叢雲の士官室。

そこに次期隊長候補の時雨と、夕立の姿があつた。

「アンタら、他に聞くことないの……」

「ははは、ぼくたちにとって、それ以上聞きたいことなんてないさ。おつと、ないですよ」

「別に、いまは楽に話して構わないわよ」

「わるいね、そうさせてもらうよ」

「教えてほしいっばい！」

時雨も夕立も、甘えるようなくだけた様子で叢雲にすりよってくる。

だが、ほんの僅か……その中には本人たちも気がつかない、切実さのようなものが交じっていった。

「そんなの、艦娘によつて違つてのはよく知つてるでしょ。アンタらも軍人なら誰かの気持ちなんて不確定なものを当てにしてんじやないわよ。それよりも、この報告書に書いてある、意味のなさない妄言のようなものを眩きながらつて部分だけ。なんて言つてたかちやんと覚えてないの？」

「うーん、確かになにか言つてはいたんだけど……」

「えつとね、確か『素体が目の前にあればなんでも作れる』だつたっばい」

「あつ、ちよつと違つた気もするけど、大体そんな感じだね」

「ふうん……」

叢雲の脳裏に、スプーンで壁を掘っていた男。

自らの提督の姿が思い浮かぶ。

あの男は、もしかして脱獄しようとしていたのではなく。

なにかを作ろうとしていたのではないのだろうか。

「まさかね」

だがあんな状況でなにかを作れるはずがないと、すぐにその考えを打ち消す。

それよりも、叢雲は明日から始まる長距離航海訓練で、しばらく基地には戻れない。だからというわけではないが、一応念のため。

今夜もう一度だけ自分の提督の顔を見に行こう。

そんな素直じゃない想いが、叢雲の中にふっと浮かんだ。



自らの提督と叢雲が出会って、ちょうど半月後。

「まずいことになりました」

「帰ってきて早々いやなこといわないでよ」

不幸にも次代の部隊長に抜擢されてしまった時雨と、叢雲から見ればまだまだな部隊

員たち。

彼女らを見つちりしごくための長期外洋訓練から帰還した叢雲を待っていたのは、大淀の不吉な言葉だった。

二人は、叢雲の提督が取監されている牢屋に向かって歩きながら、会話を続ける。

「叢雲さんの提督なんです、どうも「ひまわり」だったようなのです」

「ひまわりって……え、あの「本物の贋作師」ひまわり？」

本物の贋作師『ひまわり』

艦娘をモチーフにした作品を手がける、正体不明のアーティストとして世界的に有名な存在。

その作品には必ずひまわりのマークがあることからそう呼ばれるようになった。

ひまわりの作る艦娘の絵や像は、当然艦連の許可を得ておらず、世間的には違法な贋作師だが、そのあまりの完成度や美しき、そして胸を貫く印象を見るものに感じさせることから、いつしか『本物の贋作師』と呼ばれるようになった。

一部好事家の間では、ひまわりの手がけたとされる作品は天井知らずの高値で取引され、ひまわりの名をかたった、贋作の贋作と呼べる偽物も数多く存在する。

「申し上げにくいのですが、彼の正体が正体だった為、刑期が大幅に伸びる可能性があります。隠蔽も間に合いませんでしたので」

「サラツととんでもないこと言ったわね……いや、でも、それよりそんなの証明できるの？ それこそ自分がそうだって名乗ってるだけかもしれないでしょ」

「彼が名乗ったわけではなく……いえ、見ていただいたほうが早いです」

牢屋の前に到着した二人。

大淀が牢の鍵を開け中に入り、叢雲も後に続く。

そして目の前に飛び込んできた光景に、叢雲は息をのんだ。

牢屋の壁一面に彫られた壁像、それは艦娘と思われる複数の少女たちの姿。

建築用資材の壁をスプーンで彫ったため、当然仕上がりは荒く、精細さなどはほとんどない。

だというのに叢雲はその壁像を目にして、呼吸も、身じろぎも、瞬きも、生きるために取る行動、そのすべてを忘れた。

なぜならそれは、冷たく孤独で寂しく。

おおよそ人が経験する苦悩の感情を、強烈に発しているかのようだった。

それはまるで生命であるように。

それはまるで世界であるように。

それはまるで全てであるように。

その壁像は完全なようで、決定的ななにかが欠落しているように見えた。

なにかがない、それ故にその壁像は完璧であり、見るものの感情を揺さぶった。

「……これを見た憲兵は、言葉を失い、涙を流しました。本物であろうとなかろうと関係ないんです。これは危険なほど素晴らしい、これを作った希代の彫刻家が貴方の提督なのです。言葉にするのが難しいですが、これは——」

「違う、私にとつて彫刻は手段であつて肩書きなどではない」

牢屋に置かれた簡素なベッド、そこでシートにくるまつて眠つていた男があげた声に、大淀と叢雲は驚いて視線を向ける。

もそもそとベッドから這い出してきた男は、自身が彫り上げた壁像を見ながら、心はどこにあるのか分らないような様子で、誰に向けるでもない言葉を続ける。

「もつとも、最初は油絵がやりたかつた。だができなかつた……だからまずは空間を理解しよう、あらゆる角度からの視点が必要となる、彫るということを学んだ。こんなもの、駄作に過ぎん。木に完成がないように、これは未だ、いや……永遠に未完成なのだ、こんなものしか……こんなものしか……私には作れないんだ……」

あとになるにつれ、苦悶の表情をにじませ、絞り出すように言葉を吐く男。最後は言葉すら紡げず、片手で顔を覆い、もう片方の手をベッドに叩き付ける。

この壁像をもつて駄作という底知れぬ恐ろしき、その自分たちには理解できない苦しみを抱えた男のその姿に、大淀と叢雲は気圧される。

だが、スプーンなどという本来の制作道具ではないもので彫り続けた結果か。

ぼろぼろになって血がにじんだ男の指先。

それを目にして叢雲の心の奥底に、このとき小さな種火が灯った。

小さな小さな種火、だがそれは叢雲の中で徐々に燃え広がり、やがて地獄の業火のごとく燃え上がることを……このときの叢雲はまだ、知るよしもなかった。



禁固刑十年。

それが男に下された判決。

男は法廷でその判決を、心ここにあらずといった様子で聞いており。

そして彼の艦娘である叢雲は、その様子をじつと見ていた。

「こんな結果になってしまって、申し訳ありません」

「別に、アンタが謝ることじゃないでしょ」

裁判のあと、誰もいなくなつた法廷の傍聴席に座り続けていた叢雲。

その隣にどこからともなく現れた大淀が腰を下ろす。

「艦連軍基地の敷地内にある、使用していかない倉庫の一つに手を加えて収容場所にする
ことを認めさせました。かなり異例のことですが、なんとか、それだけは」

「は？ いいのそんなことして。そんなことしたら、アンタのキャリア台無しじゃない」
「これでも艦夢守市基地司令官ですので、この程度では傷すらつきませんよ。それに、い
ざとなつても私の代わりはいますので」

「そう、悪いわね」

艦連の基地内に罪人の拘束場所をわざわざ用意する。

そんなことをしてキャリアに傷がつかない、そんなわけはない。

だが、それを表に出さない大淀。

おそらく立場上の権限も、個人的なコネも使い、かなりの無茶を押し通したに違いな
い。

どうでもいいときには借りや貸しを強調してくる彼女が、それを言わないのだから間
違いない。

そう知っている叢雲だったが、大淀の顔を潰さないよう、軽く感謝するだけにとどめ

る。

「倉庫の改装はあと一月ほどかかりますので、移送はそのあとになる予定です。ただ、引き継ぎ訓練が終了するまでは面会時間に制限がついてしまうのですが。ですが終了すればその場所に、刑務官のような肩書きで一緒に住んでいただけよう手を回します」

「……そう、ほんと……悪いわね」



「ほら、今日からここがアンタの収容場所……というか、まあ住居よ」

裁判終了から一ヶ月。

艦連基地の新設された収容場所。

あらかた部隊の引き継ぎ訓練が完了し、その歩哨兼雑用諸々の任務を行う、ただの看守としてのスタートを切った叢雲。

その隣には、叢雲の提督でもあり、囚人でもある男。形式上移送の扱いなので、その手には手錠がはめられている。

二人は艦連基地の使われていない倉庫を改装して新たに作られた、男を収容する建物の前に立っていた。

叢雲はなにも言わない男の手を引いて中に入り、手錠を外して、内部の鍵をかける。室内は元倉庫だけあってやたら広く、大型トラックを複数台並べて停められそうなほどの広さがあつた。

「なんというか、ずいぶんと広いわね。他に使えそうな場所がなかったからしようがないでしょうけど」

室内にはキッチンにトイレに浴室。

最低限のベッドや棚などの家具がすみに置かれていた。

ただ、倉庫の中央には、制作に必要な頑丈な台が置かれており。

他にも幾つかの棚の中に、様々な道具が用意されていた。

自分が用意した記憶が無かつた叢雲は、それが大淀によつて用意されたものだと思察する。

「大淀だったら、気にしなくていいって言つたのに……ほら、あれ以外にも色々道具もそろえてあげたわよ」

叢雲は、積まれたダンボールの中から石粉粘土と呼ばれる、粘土の一種を取り出す。

石粉粘土とは石を粒の均等な粉状に砕き、接着剤など薬品を混ぜて粘土状にしたものだ。

これは固まると石像のようになり、加工も粘土のように容易なため、男が好んで作る

人体像などの制作に適していた。

これは最初に収容された場所で、男が壁を彫らなくてもいいように用意されたものであり、以来男のお気に入りらしかった。

叢雲は男の手錠を外し、拘束を解く。

男は相変わらずなにも言わず、なすがままだ。

「アంత、いま自分がどういう状況なのかわかつてるの？」

自分が囚人で収容されているという自覚がないのか、あまりに反応が薄い男。

叢雲はこれからここで十年間、男と生活を共にすることを思うと不安になり、疑問を口にする。

「別に脳がないわけじゃない。君が誰でなにを言ってるのかも、自分がどういう状況にいるかもわかっている。ただ、たいして意味のないことだから反応をしないだけだ」

そう言つて、男は黙々と石粉粘土をこね始める。

そのあまりにあんまりな言葉に、叢雲は口をあんぐりと開けて固まった。

これからの叢雲との収容生活、いや、叢雲自身にはたいして価値が無い。

そう言われたに等しかったからだ。

うすうす感じてはいたが、どうやら男は叢雲にこれっぽっちも興味を抱いていない。

その言葉に叢雲は、怒りや哀しみなどが湧き上がるよりも、脱力感を感じてしまった。

それから男の囚人と、叢雲の看守としての日々が始まった。

朝、叢雲は男をたたき起こして食事をとらせる。

一応仮にも受刑者なので、一日の行動はある程度規則正しくさせる必要があるのだ。

その後は昼食まで自由時間、というより男の制作時間。

そして、昼食をとらせたら、また自由時間。

その間に叢雲は、食事の用意をしたり、洗濯物などの家事を行う。

もつとも手際のいい叢雲は、それらにあまり時間を必要とせず、結果として男を眺めていることが日中の大半となった。

そして夕食、その後男を風呂場にたたき込み、就寝させる。

一応テレビや本などを読む時間もあるが、放っておくとすぐに粘土をこね始めるので、風呂に入ったあとはベッドに寝かしつける。

男は最初こそ僅かに抵抗してはいたが、叢雲の力強さの前では為す術も無く。

やがて生活に適應するように、早く寝て早く起き、朝から制作を始めるという習慣になった。

倉庫は他の受刑者がいるわけでもなく、面会者もないので基本的には静かだ。

だが、それでも時々、獵犬部隊の隊員が顔を出すことがあり。時雨と夕立、そして時津風などの隊員が、おっかなびっくりという風に様子を見に来ては、叢雲の話し相手になつていた。

そして意外だったのは、誰よりもこまめに顔を見せたのが、基地司令である大淀だったことだ。

艦連軍基地の役割である軍事での日常任務や、国の内外で時折展開される軍事作戦。

それだけに留まらず、市内行政への協力等々。

基地で一番重要な立場にいるため、誰よりも多忙な毎日を送る大淀。

常人を遙かに超える業務遂行能力を持つ大淀だが、それでも潤沢に空き時間が作れるほど暇でもない。

だというのに、彼女は時折顔を出しては、ひまわりの作った作品を眺め、なにかを感じているようだった。

また、ときにはひまわりの作った作品を合法的に譲り受け、それを誰かしらに送つては、なにやらコネや借りを各地に作っている動きもあった。

だが、気に入った作品をこつそりと執務室に飾つたりもしていて、その行動は単なる利益の損得だけでもなかったようだ。

「大淀アンタ、今日も来たの？」

「正確には一週間ぶりですよ」

「いやまあ、そんなだけだよ」

大淀は男が制作を終えた、比較的小型の作品を見つめる。

「それ、昨日完成したやつみたいよ」

「そうですか、今回の作品もいいですね……これこそ芸術です」

大淀はじつと完成した作品を眺めながら、ややトリップぎみに早口小声でなにかを呟く。

「これは——芸術とは感情——それには生存本能を揺さぶるような恐怖——情動を揺さぶる手法を使うのが効果的。だが私たちのような艦娘は、通常の間とは——生まれ持って戦うことができる我々は——特に私のような——だというのに彼の作品は孤独を——ブツブツ」

叢雲は、静かに作品を褒め称え続ける大淀の様子に、少し引いてしまう。

「なに？ アンタそういうのに興味あったの？」

「おや、常に彼の側にいるというのに、叢雲さんはその手の事に関心がないのですか？」
「別にそういうわけでもないんだけどね。ただ私にはゲイジユツ？ ってやつのはわからないわ。まあアイツの作ったものの前に立つとね、アイツの本気さっていうか、真剣さみたいなのはたまに伝わってくるけど。あれ？ ……そう考えると、アイツの

頑張りが作品を通して伝わったってことよね、それってすごいことなのかしら?」「くだらん、別にそんなことを思われたって嬉しくもなんともない」

少し離れた場所で作業をしていた男が、比較的強い口調でそう口にする。

驚いた叢雲と大淀、だがそう言われた叢雲はすこし不機嫌そうな表情を浮かべる。

「なによ、せつかく褒めてあげたのに」

「芸術とは見る人間の問題だ、そこに自我以外のものが挟まる余地は無い。それは芸術ではない」

「はあ? ならなんだったら芸術っていうのよ」

「君が私の作ったものを見て、私に対してなにか思うなんてのはどうでもいいことなんだ。芸術というものは、私が作ったなにかを見て、それを見た者の心が燃え、なにかを起こす。それこそが芸術なんだよ」

「私が……なにかを起こす?」

「そうだ。大事なのは火が生まれることだ。それに比べれば、私を評価したり批評したりなんてのはたいして意味のあることじゃない」

叢雲はなにかを言い返してやろうと思つたが、特に言葉も浮かばず、なにも言えない。そんな叢雲を、大淀は少し愉快そうに眺めていた。

その日以来、叢雲は少しずつ男の身の回りの世話以外にも、制作の補助のようなことを始めた。

補助といつても、男が使った道具を洗ったり、男がブツブツと口にする資料を取り寄せたりする程度だったが。

それは男を理解するための努力を、少しずつ始めたようにも見えた。

ときには男のヒゲを剃ったり髪を切ったり、爪などの手入れもした。放っておくといつまでも伸ばしっぱなしになるため、危なっかしくてしょうがなかったからだ。

そしてその日、散髪後の髪を洗っている最中。

男は叢雲に、乱暴に頭皮を揉まれて思わず苦言を漏らす。

「いたい、もう少し力を抜いてくれ」

「なによ？ 怒ったの？ 小さな男ね」

「……君はずいぶんと好きに言葉を紡ぐんだな」

「ふん、アンタも災難だったわね。私みたいに口が悪くてずばずばものを言う艦娘の提督だったなんて」

「べつに、好きに物事を語るのはい悪いことでは無いだろう」

「へ？」

「誰かに愉快なやつと思われる必要なんてない、誰かに好かれて自分を楽な立場に置く

ような必要もない。例え孤立しようとする自分を貫く覚悟のある姿勢を持っているのは当然なんだ。だが、それを難しく感じる者もいるのだろう。君はそれができているだけだ、だからなにも恥じる必要はない」

「……そんなこと言われたの初めてよ」

叢雲は男の髪の毛を洗い続ける。

その手つきは先ほどよりもわずかに優しい。

「……私に芸術はわからないけど……作品を作ってる時のアンタを美しいなって思うことはあるわ。そう思うと、美は作業の中に宿るのかもね」

「……そうか」

叢雲の心に秘めていた言葉を聞き、薄い反応を返す男。

そんな男の世話を叢雲は続ける。

そんな毎日。

子供の時から夢見ていた、自分の提督との生活。

代わり映えのない毎日だったが、叢雲はそれが嫌だとは思わなかった。

だが、叢雲はそう思ってるのが自分だけだったと……まもなく思い知らされるのだ。た。



「アンタって、時々変なの作るわよね？」

ある日、なんとなく叢雲が口にした言葉。

というのも、男が作るのは基本的に艦娘の石像が多く、稀に絵なども描いていたが、そのほとんどは写実的な作品だった。

だが、時折抽象的、前衛的なものを作ることもあり、決まってその手の作品は男自身の手で破壊されていた。

最初こそ突然破壊されるその様子を見て、驚いた叢雲だったが。

男のような美術作品を作る者にはよくあることなのだろうと、次第になれていった。だからその日も叢雲は、その作品を見て疑問を口にした。

「これって、前衛芸術とか、抽象芸術っていうんだっけ？」

「私は写実作品しか作らない、それは前衛芸術でも抽象芸術でもない」

「え、この水道管に詰まったボクカワウソみたいなのが？」

「……」

男は唐突に、自分の身長ほどの像を倒し、地面に叩き付ける。

そして叢雲が止める間もなく、ハンマーでその像を破壊し始めた。

「ちよ、アンタ急に……え？」

男は泣いていた、涙を流しながら像を破壊し続けていた。

違う、違う、違うと、何度も何度も口にしながら。

叢雲は危険を感じ、とつさに男を押さえつける。

「落ち着きなさい！」

違う違うとうめきながら、男は涙を流す。

叢雲には男がなぜ苦しんでいるのか、まったく見当もつかなかった。

その日から徐々に男は不安定になり、叢雲は男が暴れる都度取り押さえる。

たいていの場合は、押さえなければ大人しくなったのだが、それがいいことなのかは叢雲には判断がつかない。

だが、それでもなにもせずに見ているわけにもいかず、叢雲は必死になって男を押さえる。

艦娘である叢雲にとって、男を押さえ付けるのは肉体的には大した負担ではなかった。

が、男がどうして暴れるのか、なにに苦しんでいるのかがわからず、叢雲の精神的な負担は増してゆく。

何度も何度も自分が無力だと、何度も何度も突きつけられる。

そんなある日、疲れから横になつていた叢雲が目を覚ますと、男が彫刻刀を自分の耳に向けていた。

寝起きの叢雲は最初、それがどういふことなのかわからず、ただ見ていた。

が、男が彫刻刀で自分の耳を突き刺した瞬間、なにをしているのかがわかり、血の気が引く。

「アンタなにしてるのよ!!」

「離してくれ! わからない、わからないんだ、形が、耳の形がわからないんだ!」

「耳なら私のを好きだけ見せてあげるから落ち着きなさい!」

「違う、違う!! 君ではない、君じゃない!!」

「じゃあだれだつていうのよ!」

男から彫刻刀を取り上げ、叢雲は覆い被さるように男を押さえつける。

男は違う、違うと叫びながら、身体を跳ね上げ暴れる。

「かつて世界を救つた提督たちは艦娘を作つた!! 命を作つたんだ!! だというのに私は、私はこんなものしか作れない!! こんなものしか!!」

「アンタの作品だつて充分命を持つてるでしょ! 大淀を見なさいよ! アンタの作品が命を持ちすぎてるから、その毒にやられておかしなことになつてるじゃない!!」

叫ぶ男、それを押さえながら、必死になだめる叢雲。

どれくらい時間が流れたか、ようやく男は大人しくなった。

それはただ、暴れる力が尽きたただけだったのか。

叢雲の乱れた長い髪が、男の顔にかかる。

気がつけば、叢雲は男に馬乗りになって押し倒す体勢になっていた。

男の荒い息が、叢雲の顔にあたる。

そしてそれほどまでに近く、男と向き合ったのは初めてだったことに叢雲は気がついた。

男の顔を、ゆっくりと指でなぞる。

その瞳は叢雲を映しておらず、どこか遠くを見ているようだ。

唐突に、叢雲の目から涙が流れる。

そしてその涙が男の頬にかかった。

叢雲は男の側にいられて嬉しかった。

それは自分の提督だから、艦娘とはそういうものだと言ってしまうばそれまで。

でも、それでも自分の提督の力になれて、満たされたと思えていたのだ。

だが実際はどうだ。

力になれていると思っていたのは自分だけだった。

むしろ自分がいたから、男の苦悩が深まったように感じられた。

「私はアンタにはなにもしてあげられないの？ 私はアンタに……苦しみしかあげられないの？」

「……それを持ってない人間の方がよっぽど悲劇だよ」

叢雲の言葉に、ボソリと男が反応した。

それがなぜか悔しくて、叢雲は湧き出た感情を口にする。

「ねえ、教えてよ。アンタはなにに囚われてるの？ アンタを苦しめてるものはなに、アンタはどうして作品を作るの、私にはわからないわ。どんな理由があつて、そんなにもつらそうに作品を作り続けるのがわからないの。だからねえ、お願いだから教えてよ提督……それは私にはどうすることもできないものなの？」

「……私がまだ何者なのか分らず、漠然と生きていた頃のことだ」

返ってくるとは思わなかった男からの返事に、叢雲は一瞬驚く。だがすぐに、うなずくように男を抱きしめる。

男の言葉だけでなく、その全てを逃すまいとするかのように。

そして男は、ポツリポツリと語り出した……

『ここにいたのですか、さすがこの国で有数の戦史博物館ですね。観るものが多い』
『前島……これはなんだ？』

男は自らが前島・登場『絵描き』と『重巡：足柄』（高雄型適性の前島の父親）と呼んだ男を見ず、壁に掛けられた一枚の写真を観続ける。

前島と呼ばれた男は、男が観ているその写真に目をやった。

『これは……おそらく永Operation Eternal deep blueの深青作戦と呼ばれる、対深海棲艦戦争末期における特殊作戦に赴く、潜水艦の艦娘を写したとされている写真ではないでしょうか……生きて帰れないとされていた作戦だと伝えられています。実際彼女たちは戻ってこなかったとも』

『帰って……これなかったのか……？』

『はい、戦後の混乱期に様々な情報や物証は失われましたが、それだけは確かな事実だと、艦連の公式情報として存在しています』

写真に写っているのは皆、水上艦とは違う艤装をまとった少女たち。

その水着姿の少女たちは、潜水艦という艦種の艦娘だ。

『どうして、どうして彼女たちはこれから死ぬというのに……こんなに、まるでひまわりの咲くような美しい笑みを浮かべているんだ？』

写真に写る、すべての艦娘たちの顔に浮かぶのは満面の笑みだった。

まばゆいほどに、不安などかけらも無いというような、美しい笑顔だ。

『わかりません。ですが、もしかすると彼女たちには一種の確信があったのではないでしょうか』

『確信？』

『たとえ帰れないかもしれないひどく危険な旅路だったとしても、その先に自分たちの求めるものがあるという、そういうたぐいの確信です』

『危険な、危険の先にこそ、危険だからこそ求めるものが……』

「私はその写真に感動した、絶望的に感動した。いや、私はその写真に感動したんじゃない。そこに己の運命を見たんだ。絶望の中で、その運命を受け入れると決意した。あれこそが、私の誕生した瞬間だったんだ」

まるで昨日のことのように鮮明に、男の脳裏にその写真が浮かぶ。

男は涙を流す、それはいかなる感情によるものなのか。

「あのと看見た写真に、彼女たちに心をとらわれてしまった私は、あれ以来なにを描いても、なにを作っても、どこかで彼女たちの影が付きまとう。空っぽだった私の心に入り込み、自分を定義付ける原点となつてしまつたんだ……」

それは例えるなら、恋だったのだろう。

男はそのとき、笑顔で死地に向かう少女たちの姿を見て、どうしようもない恋に落ちた。

そして自らの身を焼く地獄へと、望んで囚われたのだ。

「この身が、この心が、完全に彼女たちへの想いに染められ、殺されてしまう前に……放出しなくては、その想いを外に放出しなければ……だから……違う……違う……きみじゃないんだ、きみじゃ……」

男は違う、違うと呪詛のように、苦しみながら呟き続ける。

「彼女に、彼女たちに会いたい……」

そして、最後にそう呟き、意識を落とした。

叢雲は気がついた、はっと、気がついた。

自分の提督は、芸術家だ、芸術家だったのだ。

そしていま、この瞬間も芸術家として血を流しているのだと。

その日、男は地獄の炎を身のうちに宿したのだろう。

そして己の内にある炎を、外に放出する為に、自らの体を引き裂き続けているのだと。それこそが男にとっての芸術なのだ。

だがこのままでは男は、本当に命を落としかねない。

苦悩の果てに、自ら命を絶ちかねない。

彼に芸術家を辞めさせる？

不可能だ、この男は芸術家そのものだ、つまりそれは、自分の提督を殺すということ

だ。

この男が身のうちにある地獄の中で戦っているなら、自分にはなにもできない。

外側からどんなに自分が寄り添っても、彼が芸術家である以上、この人は孤独なのだ。

この人と、この男と、そして自分の提督と共に歩むには、同じものになるしかないのだ。

生身の関係ではなく、芸術家としての彼と一つになるしか……。

その為には、壮絶な覚悟が必要だ。

なにもかもを犠牲にしても、この男に全てを捧げる覚悟が。

それができるのは、いま、この世界でそれができるのは。

自分だけだ、間違いなく、自分だけなのだ。

それは、男の艦娘である自分にしかできないと、叢雲は気がついてしまったのだ。

「……安心しなさい。アンタを彼女たちに……いいえ、誰にだって殺させやしないわ」

このとき、叢雲という艦娘は、本当の意味で心の底から。

自分の提督のためにその身を捧げると、覚悟を決めた。

以来、叢雲の行動に変化がおきた。

その一つが、文字通り常に男に寄り添い、男の言葉、その全てを記録することだった。叢雲は常にメモを持ち歩き、メモが出来ない時は、あとから全て男が喋った言葉を記録した。

男が眠りにつくつくと、あらゆる美術書や絵画、彫刻、映像、演劇、などの技法書を読みあさった。

男を囚らえている彼女たち、それを放出する術がなにかと調べ、模索し続けた。つがいの鳥と例えることもできたが、それよりも深いものになろうとしているようだった。

例えるなら男の思考の一部に、男の感覚器の一部に、そして自身もまた男の芸術そのものになろうとしているかのよう。

また、戦史博物館に問い合わせをして、その写真のことを聞いたが、どうやらその写真はなんらかの理由で撤去されたらしく、いまは博物館には無いとのことだった。

ならないまはどこにあるのかと、食い下がる叢雲に、博物館の職員は言葉を濁し、自分には分らないと謝罪をした。

当然ながら叢雲はあきらめず、文字通り不眠不休で男のことを考え、男が抱える問題を解決するあらゆる手立てを探し続けた。

やがて月日が流れ、その日叢雲は、男の望みを本人よりも正確に理解し、その目的を

果たすための方法に気づく。

『えつとね、確か〃素体が目の前にあればなんでも作れる〃だったつばい』

かつて部下だった、夕立が口にした言葉を思い出す。

だが、その方法は叢雲が知る限り不可能だ。

艦娘である叢雲は、それを誰よりもよくわかっていた。

「私に出来る事ならなんでもするわ。なにか心当たりがあつたら教えてほしいし、どうにかなるなら力を貸してほしい」

「ん？ いまなんでもって……」

「ええ、なんでもするわ」

「……」

あまりにも真剣な叢雲の返事に、大淀は沈黙する。

朝一番に叢雲が訪れたのは、艦連基地にある大淀の執務室。

叢雲の願いに、大淀は一言「それは無理です」と言い放った。

「貴方も、それは無理だとよく知ってるのでは？」

「だからアンタを頼ってるのよ」

「それはまあ、わかるのですが」

困ったような笑みを浮かべる大淀。

そしてしばらく思案した後、

「心当たりがないわけではないのですが、これに関しては正直、叢雲さんにいくら頑張っていただけでも意味はないんです。というのも、その場所への許可は艦連元老院の承認が必須になるので……」

「どういうこと？ 艦娘の功績は、その提督のものつて扱いはならないの？」

「その心当たりがある場所に足を踏み入れるには、提督や艦娘としての功績だけではなく、その個人としての功績が必要になると思つて頂ければ。それこそ最高位勲章レベルの功績がです」

「……相当厄介な場所みたいね。で、その功績を積む方法はないの？」

「普通なら無理だと言いたいところですが、彼ならあるいは……。数日ほど、時間を頂けませんか。なにか方法を考えてみますので」

「……お願い」

そう言つて頭を下げ、叢雲は大淀の部屋を出て行つた。

その姿を見送つた大淀は、椅子の背もたれに身体を預け、深くため息を吐き、考える。なぜ自分は叢雲の願いを一蹴にしなかつたのか。

ばかげた願いだ、叶えられるはずがない。

それでなくても、既に自分は大きな代償を払って叢雲のために骨を折ったというのだ。

確かに、ひまわりの作品を合法的に扱える立場になって、得られるものは多かった。だとしても、これはそういうレベルの話ではない、それほど厄介な話なのだ。

でもなぜか、叢雲の願いを叶えてやりたいという思いも湧く。

いや、どちらかといえばあの男、ひまわりの作るものを、もつと見てみたいという思いの方が大きいかもしれない。

大淀の目に入ったのは、ひまわりから譲り受けた作品。

なにかを掴むように空、いや、海面に手を伸ばす艦娘の像。

「厄介なものですね、芸術というものは」

ボソリと、言葉にして、大淀は謎の脱力感を感じる。

ひまわりが彫った独房の壁の彫刻を見て以来、大淀の中でなにかがくすぶっていた。

それがいつたいたいのであるのか、大淀はうまく言葉にできない。

「まあ、やれるだけのこととはやってみましょうか」

だが、それが大淀を動かすなにかであるのは、間違いなかった。



数日後、大淀の執務室。

外に聞こえそうなほどの、大声が響き渡った。

「ふざけないで！ 彼は芸術家であつて職人じゃないのよ!! いや、そうだったとしても数百種類の艦娘をモデルにしたレリーフを作るなんて不可能よ!!」

「ですが、それより他に方法はありません。私に考えつく限りはですが」

部屋にいるのは叢雲と大淀の二人。

叢雲は噴火するように怒り、机向かいに對面している大淀は冷静な様子。

机に両手を突きながら激高する叢雲に、大淀は淡々とその方法を伝える。

レリーフとは、薄い木や石、金属等の板に彫刻を施して作成される、浮き彫り細工と呼ばれる技術で作られる美術品をさす。

大淀が提示したのは、その小型レリーフの原型作成。

その原型から金型を作り、艦娘の小型像の大量生産を行うというもの。

艦娘百科や写真、ステッカーのような紙媒体の大量生産は行ってきた艦連だが、様々な事情で立体物に関しては、一点ものなどの美術品を除き、ほとんど許可を出してこなかった。

だが、かの『ひまわり』が作り、それを元に大淀がうまく立ち回れば、恐らく許可

が出る。

そして、もしこれがうまくいけば、艦連が莫大な利益を得るのは明らか。

さらに芸術性の高い作品なら、そのモデルである艦娘のイメージも大きく向上するはず。

そうなれば艦連元老院もその功績を認めるだろう。

それが大淀の考えた方法だった。

だが、その為にはかなりの数の艦娘のレリーフ像を作らねばならない。

一体どれだけの種類に上るのか、数百どころではすまない可能性もある。

「しかもあくまで可能性があるってだけでしょ!?! そんなの……」

「本当に無理かどうか、彼に聞いてみてはいかがですか?」

「無理でもないし、それを引き受けるに決まってるから問題なのよ!!」

そう叫びをあげ、叢雲は大淀をにらみつける。

そして叢雲は気づく、自分が肩で息をしていることに。

どんな激しい運動をしようと滅多に上がらない息が、恐ろしく感情が高ぶった影響で乱れたのだ。

それを自覚して驚きながらも、叢雲は呼吸を落ち着け言葉を続ける。

「だから問題なのよ、手の皮が全部むけても、耳を千切つてでも、どんなものが立ちふさ

がろうと……例えそれがどれだけ危険だろうと、彼はその方向に求めるものがあるなら、そこに向かつて進むのよ……」

目を深く閉じ、しばらく考えにふけてから叢雲は目を開く。

深く暗い闇を湛える瞳、だがその奥底には地獄の炎が燃えているのを、大淀は幻視する。

「……やるわ」

そう呟いた叢雲の様子は、過去どんな困難な作戦に挑んだときよりも、鬼気迫るものだった。



叢雲から事の経緯とその方法を聞いた男は、黙って石粉粘土をこね始めた。

男は喜んだ、なぜなら彼女たちに会える方法が見つかったから。

世界を旅しても見つからなかったその方法が。

意志に道しるべが灯され、男はものすごい勢いで作り始める。

最初に手がけたのは、大淀のレリーフ像。

出来上がったレリーフ像の原型は艦連の上層部に届けられ、審議の末に決定が下され

た。

それは艦娘のレリーフ像の制作と販売を許可するというもの。許可は下りた、だが次の問題が立ちふさがる。

販売するとなった以上、それは市場を考えなければならぬ。

つまり定期的に作り、供給し続ける必要があったのだ。

最終的な目的のためには、巨大な利益を上げなければならぬ。

まず、モデルとなる艦娘をひまわりと会わせる。

ひまわりは呼ばれた艦娘をじっと観察し続け、叢雲がその艦娘と会話をする。

鬼気迫る男の視線に、叢雲の会話相手の艦娘の内面をえぐり出すかのような会話。

当然ながら、ときにはトラブルも起きた。

その日来たのは、金剛連合会という組織の長、戦艦の艦娘である金剛・登場『ホスト』と『戦艦：金剛』。

国内でも有数の権力者で、艦娘に対しても発言力が強い相手だ。

もし怒らせでもしたら、他の艦娘の協力にも影響を及ぼしかねない。

男のえぐるような視線に不快感を示した金剛。

彼女は立ち上がった男の胸ぐらを掴み、男の視線の無遠慮さを問うた。

いわく観察するのならもう少し慎重な視線でみたらどうかと。

その言葉と雰囲気には、僅かながらも殺意が含まれていた。

常人ならすくんでなにも言えなくなる、そんな状況。

それに対して男は、平坦な声でこう答えた。

「目で感じてとらえる、一瞬でも視線をそらせば流れは途切れる、そうなれば全部最初からだ」

男の言葉の意味を計りかね、軽く首をかしげる金剛。

「わからないか？ 遠慮や配慮なんてものよりも、見たものを忘れないようにすることの方が重要なんだ。なぜなら我々は記憶をもちいて作品を作る。私にとって大事なことは、被写体との友好を築くことではなく、作品の被写体を本物にすることだ」

それを聞いて金剛は男の胆力、いや、狂気を肌で感じ、愉快そうに口をゆがめて大笑いした。

そしてその後、他の艦娘に合わせるために力を貸してくれたという。

もつとも、だからといって男の作業が楽になったわけではない。

なぜなら艦娘に会い、聞き、観察し、男の中に入れられた記憶を、その身を引きちぎりながら吐き出し、形にする。

それは身体に入れたもので血肉を作り、そしてできた肉を引きちぎり、血を吐き出すのという行為に近い、想像を絶する苦痛。

それが男の創作行為だったからだ。

だが、それこそが男にとっての芸術だった。

そして求められたのはその芸術によって作られる作品だったのだ。

それを繰り返す、ただひたすらに繰り返す。

そんな日々が繰り返されて……およそ六年が経った。

男が作ったレリーフ像は百五十種類を超えていた。

そしてその出来はどれもすばらしく、だれもが絶賛した。

売れ行きもかなりのもので、作者であるひまわりの名は、世界中で知られるようになった。

かつて裏のほうに有名だった名は、今では表だろろうが裏だろろうが関係なく知れ渡っている。

だがその頃にはもう、ひまわりの手は石のように硬く、そしてボロボロになっていた。

彫刻家特有の太かった腕も、脂肪がまったくいい程無くなり、ただ隆起する筋肉と皮だけ。

ただでさえ怪しかった会話はさらに安定しなくなり、時折なにかを呟くだけの日も多

くなった。

そしてそれを支え続けた叢雲もまた、異質な雰囲気を纏うようになっていた。自らの提督が苦しみ続け、消耗し続ける姿を見続け。

それでも目的を果せるよう男が死なない限界のところを見定めて休ませ、支え続ける。

そんな、精神を摩耗し続ける役目に長い間晒され続けたのだ。

だが、それでもなお、二人の目には地獄の炎が燃え続けていた。

「ほら、しつかり噛みなさい」

叢雲は温かいシチューに浸したパンを、男の口にゆつくりといれて噛ませる。

男は力なく噛みながらも、半分以上がその口元からこぼれた。

「もう、これ以上痩せたら道具も持てなくなるわよ……しょうがないわね」

叢雲は自らの口にパンとシチューの肉を含み、よく租借する。

そして男の口に直接、叢雲自身の口を合わせ、食べ物をも男の中に移す。

それは異性間の愛情を示す行為というより、親鳥が雛の口に食べ物を運ぶような行為。

それを幾度か繰り返し、食事を終えたあと、男の股下から液体が流れる。

叢雲はそれに気がつき、なにも言わず男の衣類を脱がせた。

「今日はモチーフの艦娘に会う予定も無いし、制作中のレリーフも無いから、このままお風呂に入って休みにしましょうか」

レリーフ像の制作を始めてから三年目ほどで、男は徐々に日常生活における行動を自分の意志で取れなくなっていた。

病院で検査を受けたものの、異常は無く。おそらく生物的な本能を超え、男の身体が制作以外に使うリソースをカットしているからではないかと推測されたものの、治療方はみつからなかった。

だから叢雲は支えた、男の日常生活における行動を、文字通り肩代わりした。

最初は涙を流したが、いまではただ無力感が僅かに湧き出すだけ。

叢雲は男を両腕に抱きかかえて、浴室に運ぶ。

「……また、少し軽くなったわね」

浴室についた叢雲は、男を浴槽に入れ、頭からぬるめの湯を優しくかけながら、男の痩せてゆく身体を洗う。

初めて会った頃より、男の身体は小さくなった、そう叢雲は感じる。

もともと小男といったふうな身長だったが、それでもがっしりとした体つきだったの
で、大きく感じた。

だがいまはどうだ、余分な脂肪は身体からそげ落ち、制作に必要な筋肉と血管だけが浮き出ている。

それよりも深刻なのが、男の思考能力だ。以前は多少なりとも意思疎通が取れていたのに、いまではもうほとんど意味のある会話を交わせない。

叢雲の目から、枯れたと思っていた涙が溢れる。

男が望み、男の望みを果たすため……いや、男の望みを果たす役にたちたいと、そう願ってしまった自分の欲望のせいで男はこんな姿になつてしまった。

男を……自分の提督をここまで追い詰めたのは自分だ。

確かにあの日、自分は覚悟した。

だけど、この覚悟はいつまで続けなければいいんだ。

提督の役に立てているという満たされた幸福と、提督を苦しませているという不幸。そんな出口のない、甘い毒に浸されるような日々に、叢雲は苦しんでいた。

「……かゆい」

自責の念に囚われていた叢雲の意識が、男の声によつて現実を引き戻される。

それは久しぶりに発せられた、意味のある言葉。

叢雲は乱暴に自分の目を拭い、明るい声で男に問いかける。

「そう、どこかしら、この辺？」

叢雲は男の頭皮をガシガシと洗う。

「ああ、そこだ……ありがとう……叢雲」

返事を期待したわけではなかったのに、男はその問いかけに反応した。

そして名前を呼ばれたことに、気がついてしまう。

男は、叢雲をちゃんと認識していた。

それがわかった、わかってしまった。

拭ったはずの目から再び涙があふれ出す。

なんて残酷な、自分が悔やんで悔やんで、それでも止められない自分に自己嫌悪していたこのこんなタイミングで、どうして、どうしてそんなに優しい声で自分の名前を呼ぶんだと。

「なんで……なんで私なんかの名前を呼ぶのよ!! どうして!! アンタを、アンタをこんなにしたのは、したのは……」

思わず叢雲は叫ぶ、怒り、哀しみ、悔しき、無力感がごちゃ混ぜになった声で。

「わかってたはずでしょ、こうなることは。こんなことになるのは……わかってたはずなのよ……わかってた、はずで……」

そして叢雲の中に、やりようのない感情が湧き、膝が崩れ落ちそうになる。

そんな時、浴室の外から聞こえる大淀の声。

大淀は二人が浴室にいるのを確認し、扉の前にたつと、浴室の扉越しに声をかけた。
「すみません、お伝えしたいことが」

「無粋ね、浴室で提督と二人っきりの時間を邪魔するなんて」

多少なりとも虚勢を張らないと立っていられないと、叢雲は嫌味を口にする。

「それは申し訳ありません。ですが、一刻でも早くお伝えしたかったもので」

「……なによ」

叢雲の返事を聞き、呼吸を一つおいて大淀は続けた。

「貴方の、いえ、貴方たちの求める方がいらつしやる場所に行くための許可が……ようやく下りました」



西経157度 北緯21度付近

旧名称『ハワイ諸島』

複数の島々で構成されているが、各島が様々な役割を持ったメガフロートと呼ばれる巨大人工浮体によって拡張され続けた結果、現在は島と島の間はメガフロートによって連結され、結果的に一個の巨大な島の体をとっている。

そしてこの地域は、現在世界中のどの国家の領土にも属さない艦娘連絡会の聖域。そこに艦連の本拠地は存在する。

数多くの艦娘に、数百を超える艦艇、軍艦。

そして万をゆうに超える憲兵軍兵士が日々守り続ける場所。

その中でも特に厳重に守られた基地の一つにある滑走路。

そこに一機の軍用飛行艇が降り立った。

「ようこそ艦連の暗部へ。歓迎するでありますよ、大淀殿、それと叢雲殿にその提督殿」男と叢雲、そして大淀が飛行艇のタラップを下りてすぐに現れたのは、黒い軍服を身にまとった、黒髪の女性。

白粉によつて白く塗られた顔に張り付くのは、意図して警戒心を煽るような、不安をかき立てる笑みだ。

身にまとった服装と気配から、恐らく上位の階級を持つと思われる黒軍服の女性。

その証拠に、後ろには憲兵とは違う軍服を着た、幾人もの手勢を引き連れている。

「わざわざお出迎え恐れ入ります、あきつ丸閣下。しかし今日はどうしてこちらに？」

「いやいや、艦夢守市の市長殿に、基地司令官殿が揃って無茶な申請を押し通されたとのことでしたので。気の小さい小官としては心配になってしまったのでありますよ、クク

ク。……して、そちらがうわさの贗作師殿ですか？」

「気安い様子で、腰の軍刀の鍔をカチャカチャと鳴らしながら、あきつ丸と呼ばれた艦娘が男をのぞき込む。」

「まるで笑いながら斬りかかりかねない雰囲気を持つその動きに、叢雲がぴくりと反応するも、それより先に男は暗い目つきであきつ丸に視線を合わせる。」

「次は……彼女を作ればいいのか？」

「……クハッ！ クククククク、クハッ！ ククククク……いやはや、これは失礼しました。しかし成る程成る程、これはなかなか筋金入りの大物のようですね、結構結構。ですが大淀殿、幾ら彼が大物であろうと、規則に関しては重々承知されているのでしうな？」

男から視線を外し、大淀に視線を移すあきつ丸。

だが未だに害意を収めておらず、軍刀の鍔を鳴らし続ける。

「ええ、それは勿論。あきつ丸閣下のお手を煩わせるようなことはいたしませんわ」

あきつ丸は大淀としばしにらみ合った後、ふっと力を抜いてストンと表情の抜け落ちた顔になり、男に視線を向ける。

「贗作師殿、これから貴殿が向かうのは、艦連の長い歴史の中でひた隠しにされ続けてきた、最重要機密がある場所であります。自分はそれを間接的に守る立場でありまして

な。万が一漏れた場合は、それを隠すために街一つ灰にすることも辞さない覚悟であります。自分の身だけではなく、周りの者や、貴殿の艦娘のことを思うなら、ゆめゆめ……そのことをお忘れ無きよう、おねがいするでありますよ」

感情の欠落した能面のような表情で、淡々と言葉を紡ぐあきつ丸。

ねつとりとした重く、言いようのない恐怖が込められた言葉。

その迫力に、歴戦の艦娘である大淀と叢雲、そしてあきつ丸を普段側で見続けている取り巻きですら、その例えようのない暗い圧力に硬直する。

だが男だけは、ただなにも感じていないような顔で、あきつ丸をじっと見つめ、その言葉を聞いていた。

最後まで言い終えたあきつ丸は「それでは」と、きびすを返していずこかに去って行く。

あきつ丸が見えなくなったあたりで、ようやく叢雲が口を開いた。

「初めて見たけど、あれって太宰府長官のあきつ丸よね？」

(※太宰府 艦連の内部監査組織の別称、組織の長には常に陸軍の艦娘が就き、現在ではあきつ丸が就任している)

「はい。今回の申請を通すために色々は無茶をしたもので……おそらくはそのあたりを警戒して、釘を刺しに来たんでしょう。実際申請が通つたのは奇跡に近かったんです

よ

「あんなのが出てくるなんてね……六年前に覚悟は決めたつもりだったけど、今更ながらどういふ場所に行くのかって実感が湧いてきたわ」

「正直、私もその場所に立ち入るのは初めてです。ふふふ、そう考えると私たちはまさに一蓮托生となったわけですね」

「冗談、でも、ないってことか……」

それから、三人は基地の建物の一つに入り、幾つもの手続きを窓のない部屋で行う。

これから見るもの、聞くもの、感じるもの。

ありとあらゆる情報を、外部に漏らさないと約束する書類に署名を記入し。それらの書類の受理と、説明が行われる。

何時間もかけてそれらの手続きを終え、ようやく三人は基地内にある巨大なエレベーターがある場所に案内された。

それは基地の地下、そこからさらに奥深くの場所に下りるためのもの。

エレベーター付近には完全武装の兵士と、セキュリティーが設置されていて、この先にあるものが艦連にとっていかに重要なものであるかが嫌でも伝わってくる。

「いよいよです」

大淀がそう呟くと同時、重い音を立てて扉が開き、三人はエレベーターに乗り込んだ。



ゆつくりと下降するエレベーター。

下降を始めて何分か経った頃、男はボソリと口を開く。

「この先に……彼女たちがいるのか……」

「はい、正確にはそのお一人ですが。この先にいらつしやるのは伊168 様」といふ御名前の……貴方が探し求めておられた、潜水艦の艦娘です」

男はグツと目を閉じ、自らが求め続けた潜水艦の艦娘たちの名を呟く。

その様子を、叢雲はただじつと見つめていた。

長かった、いや、時間の問題ではない。

時間とは垂直線上に立った、一瞬に内包された永遠の地獄。

男は彼女たちに、支配されている。

だから、男は彼女たちを殺さなければならない。

そして、彼女たちに支配されている男を、叢雲は殺すのだ。

やがて、リフトが最下層に到達し、重厚な扉が機械音を立てて左右に開く。

そして目の前に広がったのは、ここが地下なのかと思うような広さの空間。

深い青のライトで照らされ、静寂に満ちたその場所は、まるで深海の霊廟を思わせた。その霊廟のような場所の中央。

そこにライトに照らされ、浮いている人影が見える。

男はおぼつかない足取りで、その人影に向かってゆく。

距離が近づくと、人影が浮いているのは、透明なシリンドラーのようなもの。

その透明な円筒の中に満たされた液体によって、浮かんでいるからだとわかる。

浮かんでいるのは、水着姿の少女。

水着の胸の部分には彼女の名称と思われる『イ168』という文字。

少女は軽く膝を抱えるような姿勢で浮かんでおり、肌の色はみずみずしく、まるで生きていくかのようで。見る角度によって色が変わる緋色の長い髪は、舞うように美しく広がっている。

「……ああ、あああ……ああ、ああああ”あ”あ”あ”あ!!」

膝を折り、円筒に触れた男の慟哭が響く。

それは、あの日、あの場所で、男の魂に刻まれた存在。

ひまわりのように笑っていた、あの写真の少女の一人。

いまはもう……この世界には存在しないはずの艦種の艦娘。

——
潜水艦の艦娘の姿だった。

『潜水艦：伊168』

対深海棲艦戦争、最終局面。

圧倒的に数で劣り、滅亡寸前まで追い込まれた人類。

当時の最高戦力であった、五人の提督たちは最後の賭けに出る。

その中で幾つか実行された作戦の一つが、とある提督の長年による調査で判明していた、深海に存在する敵の本拠地。

海上戦力の大半を使い陽動を仕掛けつつ、その隙をついて、そこに奇襲をかけるというもの。

その作戦のため、鎮守府を構築する上で核となる、妖精炉と呼ばれる設備を搭載した、移動型鎮守府ともいえる巨大な原子力潜水艦に、当時残存していた「全て」の潜水艦の艦娘と、五人の提督の内の一人が乗り込んだ。

詳しい経緯は不明だが、結果として深海棲艦は滅び、人類は生き延びた。

だが、戻ってはこれなかったのだ、その提督と潜水艦の艦娘である彼女たちは。

そしてその後の建造では、なぜか潜水艦の艦娘は現れなかったという。

その為、潜水艦の艦娘の血脈は絶たれ、現在では潜水艦の艦娘は存在していない。

また、その提督は『最終皇帝提督』、若しくは『黄金野獣提督』だったのではないかという説があるが、確かな証拠は未だ見つかつてはいない。

ただ、発掘された五人の提督のものとと思われる日記の切れ端に、その提督のあだ名ではないかと推測されているものが確認されている。

その名前は――

「本来、終戦と定義された日は、深海棲艦と最後の戦闘があつた日とされています。そしてその提督のあだ名も、とある日記の切れ端から見つかったと」

「でしようね、私もそう習ったわ」

「ですが正確にはこちらの伊168様が、勝利を伝えられた日なんです。浜に打ち上げられたクジラの中からはい出てこられた彼女は、『ジョーは勝った……』そう、言い残されて機能を停止されたそうです」

「提督の王『キング・ジョー』……まさか実在してたなんてね。戦史博物館の設立に大きく携わっていて、戦史時代を経験した艦娘の中で三番目に長生きした、ドイツ空母のグラーフ・登場『僕』と『正規空母：Graf Zeppelin』って艦娘は、その存

在を最後まで強く肯定してたつていうのは本で読んだけど」

北海や地中海付近にある国では、必ずなにかしらの物語で登場する存在。

欧州地域の提督の祖であると伝えられている提督、実在は怪しまれてはいるが、その名前が『ジョー』である。

もし伊168が最後に語った言葉が事実として記録されているのであれば、その提督の存在を裏付ける貴重な証拠となるだろう。

「で、なんでその事実は伏せられて、彼女はこんな場所に？」

「色々と事情はあるのですが、大きな理由の一つとしては、大本営の残党どもに御輿にされる可能性があったからです」

「ああ……なるほどね。確かに物言わぬ英霊様のご遺体なんて都合の良いものを奴らが手に入れてもしたら、どういうことになるかなんてのは容易に想像できるわ」

「同様に艦娘百科事典やその他の書籍に、潜水艦の艦娘の写真や情報がほとんど記載されていないのは、大本営の残党によって、似た容姿の女性たちが利用されるのを防ぐ為でもあります。用心のしすぎと思われるかも知れませんが、昔は十二分にその可能性があったので」

「色々考えるもんなのね、アンタら“大淀”ってのは。本当のところ、世間一般で謎つて事になつてるあやふな歴史、全部わかつてるんじゃないの？」

「さあ、それはご想像にお任せします」

大淀はそう言って軽く肩をすくめたあと、壁にある大きなレバーの一つを引く。

部屋が少し揺れたあと、周辺の床の一部分が上昇し、何十何百の大きなアクリルの板や本棚が現れた。

その板の中や書物には、潜水艦の艦娘たちの等身大の写真や艤装の一部、そして当時を写す貴重な写真や情報が収められている。

そしてその中には、戦史博物館から押収された、あの写真も含まれていた。

「艦連が保有する、潜水艦の艦娘に関係する情報のほとんどがここにあります。好きに見ていただいかまいません……ですが、事前に説明したとおり、貴方たちは今後、一生艦連の監視下に置かれますので覚悟してください。そして……」

「わかっているわ、慰霊祭のモニュメントを作るのが条件。わかっている、だからいまだけはあの人をそつとしておいてあげて」

涙を流しながらも、決して瞬きをせず、伊168を見つめ続けるひまわり。

その姿を、叢雲もまた、瞬きすらせずに見つめ続けていた。



「作るんでしょ」

一ヶ月ほど滞在した艦連の本拠地から、艦夢守市へと帰ってきた男と叢雲。

収容所でありアトリエであり住居、その場所に戻ってきた叢雲は、男に向けてそう口にした。

なにを、とも、言わず。なにが、とも言っていない。

だが、叢雲には男がこれからなにをし、なにを作るのかがわかつていた。

だからただ、確認の意味も兼ねてそう聞いたのだ。

作るんでしょ、と。

「……反対しないのか？」

伊168を目にして以来、男は徐々に出会った頃とかわらない様子を取り戻していった。

むしろ叢雲にそう問う姿は、いままでみたことがないほどの不思議な生気に溢れている。

「だって、アンタこのままじゃ死んじやうでしょ。いま自分がどんな状態なのか気づいてないの？」

叢雲の言葉に、男は軽く首をかしげる。

その様子が妙に可愛らしく、叢雲は笑みを浮かべながらそれを教える。

「まるで太陽みたいよ。内側から光が溢れて、爆発しちやいそうだわ」
叢雲の笑顔を見て、男は両手をこれでもかというほど広げ「ボンツ!!」つと、口にす
る。

それがまたおかしくて、叢雲はさらに楽しそうに笑うのだった。

やがて男は一枚の下書きのような、乱雑に描かれた設計図を描き上げた。

叢雲はそれを見ながら、男に確認をとりつつ、寸法や必要な材料などを書き足してゆ
く。

男の構想によると、その壁像はおよそ幅十メートル、高さ四メートル。

さらに叢雲は、形状などを考慮して、作る上でなにが必要で、誰が必要で、どうい
う手順が必要なのかを調べ始めた。

書物だけに拘わらず、巨大製造企業アカシヤ夕張重工、国内の美術作品を製造するア
トリエ。

不眠不休で勉強し、あちこちに頭を下げ、得られた内容を情報として書類にまとめる。
大淀は叢雲から提出されたその書類を受領し、資材の発注を行う。

これまでと違い、今回は市からの公式な要請による仕事だ、いままで以上に手配もス
ムーズであり、なにより資金も潤沢。

すぐさま資材があつめられ、男のアトリエに運び込まれた。

大量の資材は倉庫に並べられ、まずは壁像の骨組みとなる部分をくみ上げる作業を始める。

このサイズになると全てを石粉粘土で作るわけにはいかず、ある程度の骨組みや形は木材や鉄材などで作り、そこに石粉粘土を足していく形になるからだ。

作業には工兵課所属の兵士と、非番の猟犬部隊のメンバーが駆り出され、骨組みと足場の構築を手伝う。

男はあとからその壁像に貼り付けるための造形物を制作しており、叢雲は大本となる骨組みの現場の指揮を、てきぱきととっていた。

「それにしても叢雲さん、よくこんなオブジェ？ の制作指揮なんてできますね」

「別に最初からできたわけじゃないわよ、調べてシミュレートして、調べて、考えて、足りないところは頭を下げて聞いて。色々準備してきた結果よ。いつとくけど、これは優れた軍人にも共通することなんだからアンタらもしっかりがんばんなさいよ」

非番だというのに嫌な顔をせず、自ら手伝いを買ってでた艦娘の問いかけに、叢雲はそう答え、さらに続ける。

「それと……アンタたちもよく覚えておきなさい。いつか会える自分の提督の側にいる

ためには、私たち自身の意志は当然として、その人を愛せるための能力が必要になる。それが身につけられないのなら、例えどんな努力をしたところで意味は無いわ」

それは提督をみつけたあと。

「……まあもつとも、それは私たち艦娘にとつては、ある意味なじみ深いものなのかもね」

その生き方を決めた艦娘が持つ、重みのある言葉だった。



そしてモニメントの制作を開始して一年。

慰霊祭まで一年半に迫った頃に、その艦娘は現われた。

太宰府長官あきつ丸。

巨大組織艦娘連絡会の内部監査組織の長。

本来であれば、長官自ら動くようなことはあまりないが、今回はその長であるあきつ丸本人が、男のアトリエに訪れる。

背後には、何人かの手勢を引き連れてはいるが、あくまでそれは雑事を行うための付き添い。

いざ抵抗されたときには、あきつ丸本人が対象を拘束する心づもりなのだろう。

「さてさて、そこをどいていただけですか、叢雲殿？」

「アンタにはこの場所に入る理由はないはずよ、帰りなさい」

いち早くその気配を感じ取り、アトリエから飛び出してその前に立ちふさがったのは、男の、芸術家ひまわりの艦娘である、元獵犬部隊隊長、叢雲。

「これはこれは異なことを、自分がどこでなにを調べるかは、自分の立場と権限により保障されているでありますよ？」

押し問答は無駄だ、すぐに叢雲は判断を下す。

そして無言で艀装の一部である、接近戦用の鉄の槍をとりだした。

展開した瞬間、槍の重量と缶に火を入れたことによる重量増加が発生、地面が僅かに陥没する。

叢雲は片手で槍を持ち、もう片手を地面に突き、足と手で身体を固定。

その姿勢は、限界まで出力を引き上げられた艦娘の脚力で、爆発的に加速し突撃する技。

獵犬部隊員が陸上戦において好んで使う攻撃手段の構え。

本気だ、本気でやるつもりなのだ。

あきつ丸の取り巻きと、近くにいた基地の兵士たちに緊張が走る。

「……どうやら本気のようにありますなあ叢雲殿。まあこれより自分は叢雲殿を文字通り蹴散らして、中にいる貴方の提督を拘束し、中で制作されているものを破壊することになる可能性がありますので、そうせざるを得ないのはお察しするでありますが……あえて警告させていただくであります。そこをどいて中で制作されているものを確認させていただけますかな？」

「……断わる。この先は芸術の炎に身を焼かれ続ける男の聖域よ。アンタみたいなのが来る場所じゃない」

「そうでありますか……参考までにお聞かせ願いたいのですが。そこまでされるのはあの贗作師が、叢雲殿の提督だからでありますかな？」

「そうよ、そしてそれはきっかけ」

「きっかけ、で、ありますか？」

「……わからない？ それも含めて、いまの私はイツにゾッコンなの」

「まあ、そのいい具合におどろおどろしく狂った眼をみれば、それはなんとなくわかるのであります……」

なにもかもを捨てる覚悟で、武力を以て立ちふさがる叢雲の姿は、傍から見れば正気だとは思えないだろう。

あきつ丸はやれやれといった風に帽子を取って、軽く頭をかき、かぶり直す。

「もう一つお聞きしたいのでありますが。提督以外の部分で、いったいどんな理由でそこまで入れ込まれるのでありますかな？」

叢雲は体勢を持ち上げ、槍先をあきつ丸に向けるような構えに変える。

それはどこか優雅さを含んだような構え。

熱に浮かされたような笑みを浮かべ、叢雲は口を開く。

「それは彼が芸術家だからよ」

「はあ、ゲイジユツカ、で、ありますか？」

「ええ、私もようやくわかってきたんだけど、芸術家っていうのは、生きて地獄を見る人間のことをさすのよ。どんな目に遭っても、どんな世界にしようとも、自分を貫く人たちの事。まあ、周りから見たら変人かろくでなしにしか見えないけどね」

「……」

「そしてアイツはどうして芸術家になったんだろうって考えたら、それがわかってきたの。普通の人間は炎に近づけば、熱さを感じて身を引く。だけどあいつは違うのよ。そこに危険があるといわれても無邪気にそこに飛び込んでいって、その炎に焼かれ続けるの。そんなのだからアイツは、いまも地獄で戦ってるってわけ。……ね？ とつてもステキでしょ？」

あきつ丸を含め、それを聞いた者は皆、そのどこか狂気めいた言葉と表情に気圧され

る。

「さようでありますか。残念ながら自分には理解できないみたいであります」

が、それも一瞬。

すぐに気を取り直したあきつ丸の周囲に、幾両もの『戦車』が突如として姿を現す。

それは一部の艦娘のみが陸上で展開が可能な、陸上型深海棲艦に対抗するための特殊な兵装。

一個基地並みの戦力を持つ、大型の深海棲艦に対抗しうる武器。

祖となった戦車は決して性能が高いものではない。

実際現代の戦車であっても、訓練を受けた艦娘であれば、容易ではないものの破壊は可能だ。

だが、それは普通の戦車であれば、だ。

これは艦娘の兵装なのだ、通常の戦車とは別次元の力を誇る、陸上兵器。

さらにそれを扱うのは、その扱いに特化した本職の艦娘であるあきつ丸。

戦車の砲塔が動き、全て叢雲に定められる。

「では。最後に言い残すことはありますか？ もしあれでしたらゲイジユツに対する恨み辛みなんかでもあれば遠慮無くどうぞであります」

高まる緊張とは対局に、まるで愚痴でも聞くかのような軽さで、あきつ丸は叢雲に問

いかける。

それを聞いて、なにがおかしかったのか、叢雲は顔を伏せて声を押し殺すように笑う。

「く、くくくく」

「ん？」

「芸術つていうのは無邪気で残酷なものよ、そんなものに責任なんて無いわ」

それは果たして本心からの言葉だったのか。

言い終わった瞬間、顔をあげた叢雲の顔に張り付いたほほが裂けるような笑み。

それをあきつ丸が視認するかもしれないかのタイミングで、叢雲の足が地面をけた。

直後、爆発的な加速で先手をとった叢雲の攻撃があきつ丸に迫る。

あきつ丸はすぐさま軍刀を抜き、それを受け止めた。

だが、業物とはいえただの軍刀が、艦娘の兵装である接近戦武器を受け止めるのは不

可能だ。

艦娘の接近戦用“兵装”は、その艦娘が生まれ持つて固有で持つているもの。

それは軍艦と同様の強度を持つ、深海棲艦の装甲すら切り裂く切れ味と重量を持つ。

あとから作ることとはできず、それゆえ接近戦兵装を持つてうまれる一部の艦娘に接近

戦を挑むのは相当の覚悟がいる。

叢雲はその数少ない一人。

「ちよこざいな!!」

受け止めたのは一瞬、圧倒的な重量差の前に、あきつ丸の軍刀がくだける。焦ったあきつ丸は、とつさに槍の攻撃を腕で防御するが、艦娘の防御力を貫きかねないその威力を前に、すぐに距離をとる。

離れば戦車による砲撃、それを避けたい叢雲があきつ丸に追撃をかける。

接近戦において叢雲と対等に戦えるのは、国内でも少数だ。

距離を詰め続ける限り、一対一での戦いであれば叢雲に大きく分がある。

いや、あつたはずだった。

一対一であれば。

あきつ丸が動かす、一台の戦車の砲塔。

それが男のアトリエに向けられているのに、叢雲は気がついてしまった。

とつさに、あきつ丸から離れ、砲塔の前に立つ叢雲。

「クツ!! ぐ、があああああ!!」

ちゆうちよなく発射された砲弾が、叢雲に迫る。

迎え撃った叢雲はその砲弾に対して、あらん限りの重量を槍に乗せて上から斬撃をくわえ、地面に叩き付けた。

爆発。

空気が震え、基地内に爆音が響き渡る。

やがて土煙が晴れると、そこには戦闘の構えを維持し続ける叢雲の姿があった。驚くべきことに、直撃ではなかったので戦闘継続は可能なレベルの損傷、が。

既に勝敗は決している、叢雲は男のアトリエの前から動けない。

「おや、防がれてしまいましたな」

先ほどまでの焦りの表情が嘘だったかのような、あきつ丸の笑み。

叢雲は気がつく。最初からあきつ丸がその気で行動し、演技していたことに。

そして、戦闘の組み立てうんぬんより、その目的の遂行手段を見誤っていたことに。

「終わりであります、叢雲殿」

あきつ丸は静かにそう告げ、全ての戦車の砲塔を叢雲に向けた。

叢雲はゆっくりと世界が流れるのを感じた。

そして様々なことが頭を駆け巡る。

戦車の一斉射撃が来る。

六年間以上実戦から遠ざかっていて、ずいぶんとなまっただという思い。

昨日男に作った夕食のこと。今日の朝に男のヒゲを切ったこと。

全ては切り払えない。

あきつ丸の戦車の攻撃を何発しのげるか、耐えられるか。

男が抜け殻になる少し前に、気晴らしに行つた丘で見た風景。

受け止める、アトリエにあてさせはしない。

時間を稼げば、恐らく大淀がなんとかしてくれるかもしれない。

暴れる男を押さえつけて、初めて近くで見た、あの泣き顔。

守る、だってあそこには、彼がいるから。

当たり所がわるければ、艦娘といえど、耐えられな

独房の壁を彫って、男の、手に、にじんだ血を

アイツの 死ぬのは 芸術家は

あの人の　でも私は　生け贄だ

彼の　果たす　誰かになにかを

提督の　役目　気づかせる――

願い　終わってな　ための――

だからまだ――

「……なんのつもりでありますか？」

砲撃の一斉射撃が始まるその直前。

突如あきつ丸が、叢雲に向けてではない、疑念の声を上げる。

なぜなら、あきつ丸の周囲を複数の艦娘たちが取り囲んでいたのだ。

周囲を包囲するのは、基地所属の特殊部隊である猟犬部隊。

「なんのつもりもどうも、うちの庭でずいぶん好きかってしてくるじゃないのさ」

音もなくあきつ丸の後ろに現われたのは、現猟犬部隊隊長である、駆逐艦『時雨』

ピリピリと放たれる重いプレッシャー。

群をなして戦うことが本分である駆逐艦の艦娘が複数人、しかもそれは数多の実戦を経験した専門の特殊部隊。

そんな相手が敵にまわっている状態に、さすがのあきつ丸も警戒を強める。

「貴殿ら、自分たちがなにをしているのか——」

「私の命令です」

あきつ丸の言葉をさえぎり、その場に現われたのは、艦夢守市の基地司令官であり、最高責任者の大淀。

彼女はいらだちを隠しめせず、いや……明らかに激怒している様子であきつ丸のすぐ前に立つ。

「こまりますね、あきつ丸閣下。連絡もせずこのようなことをされては」

その基地司令官の大淀が放つ圧力を前に、あきつ丸は兵装を収め、武力による闘いから舌戦による闘いへとすぐさま切り替える。

「これは……ですが大淀殿、自分が太宰府の長官であると、うっかり忘れておられるほど耄碌されておりませんか？ それらに伴う捜査権と規則に関しては、重々承知されているはずですがあ？」

「ええ、それは勿論。ですがお忙しいところわざわざこんなところにまで足を運ばれるような、時間が潤沢にあつてうらやましいあきつ丸閣下のお手を煩わせるようなことは致しませんわ。うふふふ」

人をおもった笑みでケタケタと笑うあきつ丸。

一歩も引かずにメガネを光らせながら、暗い笑みを浮かべる大淀。

お互い一歩も引かない、凄まじい嫌味の舌戦が続く。

正直常人であれば近寄りたくない光景。

「……腹黒の毒蛇と腹黒のマンガースが煽り合ってるね」

獵犬部隊の隊長である時雨がこぼした一言が、周囲の心情を代弁していた。

(大淀にバツチリ聞こえていたので、後日減俸された)

そしてそんな光景を、緊張が解けてしまった顔で、ポカンと見つめる叢雲。

あまりに唐突に展開される、別種の闘い。

おかげで先ほどの、刹那の時間に流れた思いが全部吹っ飛んでしまったのだ。

「……たすかった……の?」

「彼女のアイデンティティと、彼女のエゴイステックがぶつかり合っている……い

や、違うな……もはやあれは調和だ」

「あれが調和って……ちよ!? アンタなんで出てきてるのよ!?!」

外に出る前、叢雲は男に、決して外に出てくるなど念押ししたはずだった。

男は空返事ではあったが、確かにうなずいた。

だというのにアトリエから出てきてしまった。

よりによって、一番出てきては不味いタイミングでだ。

「表でこれだけ騒がれれば文句も言いたくなる。で、騒動の原因はきみか。夢か現実で

一度会った記憶があるな」

男は、叢雲の静止も聞かず大淀を押しつけて、あきつ丸の前に立つ。

突然のことに氣勢が乱れるも、あきつ丸は軍刀のつかに手を置いて、いつでも斬るといった雰囲気を放つ。

「私がいま作っている作品についての話だろう、なら判断はその作品が出来上がってか
らにしる。そのあとに問題が出たなら私を好きにすればいいし、その作品も好きにすれ
ばいい」

男は以前より強く意志の感じられる眼で、あきつ丸をにらみつける。

「だが、作品が生まれるのを邪魔することはばかげている。作品を破壊するなら、それは
完成した作品を見てからにしる。見て、君の中に灯された火によつて破壊しろ。その方
がずつと強烈で鮮烈だ!!」

「なにをいふさげたこと——」

その言葉に反応したあきつ丸は軍刀を抜き……かけ、先ほどそれが叢雲に砕かれたこ
とを思い出し、動きを止める。

男は胸元から、くしゃくしゃになつてたたまれた紙を一枚とりだし、あきつ丸に渡す。

あきつ丸は不審そうにその紙を受け取り、開く。

そして……その動きを止めた。

「いま作っているのは、恐らく君の考えているとおりのものだ。だが、だから、破壊する
なら……完成してから、君の手によつて破壊しろ」

あきつ丸は黙って、紙に描かれた絵をしばらく見続けていた。

「あ、あの……長官？」

引き連れてきた太宰府の部下が、恐る恐るといった様子であきつ丸に声をかける。

その声に反応したあきつ丸は、ハツとなつて、らしくない焦った様子で手元の紙を幾度も幾度も引き裂き、破り捨てた。

「作品が外に運び出されないよう、監視は付けさせていただくでありますよ」

捨て台詞のようなものを残し、あきつ丸は大淀にそう告げてその場を去る。

それを見送ることもなく、男はきびすを返してアトリエに戻った。

残ったのはポカんと一連の経緯を眺めていた、大淀と狛犬部隊と基地の兵士たち。

「ま、芸術家は人を驚かせてなんぼってことかしらね」

そしてそう言いながら、どこか嬉しそうに笑みを浮かべる叢雲だった。



そうして月日はさらに流れ、慰霊祭の開催まであと半年に迫ったとき、それは形と

なった。

出来上がった壁像の前に、男と叢雲は立つ。

男はらしくない様子で、どこかそわそわしている。

「創作に虚無は無用だ、先入観を捨てたい、思ったことを言ってくれ」

「感想ならもう大淀が言ったじゃない。魂が抜けたみたいな顔で『素晴らしい……』つて。それにアンタは自分の作品を最初に認めるのは自分つて人だし、人の評価に身をゆだねるような人間でも無いでしょ」

男の叢雲に対する問いかけに、叢雲は素っ気なく返す。

「それでもだ、君の言葉が聞きたい」

だが男は、食い下がりをもう一度問いかける。

「そうね……驚いたわ」

叢雲はやれやれといった様子で、苦笑しながらそう返し、続ける。

「純粹に、ただ驚いた……やりやがったこの野郎、なんてものを作ったんだ!! つていう驚きかしらね」

「そうか!!」

「なによ嬉しそうね。アンタに対してどう思ってるかなんて、どうでもいいんじゃないのか?」

「それはいいんだよ！ 誰がどうして作ったかなんてものを差し置いても、それは君の中に純粹な驚きがうまれたということだ！」

「それは……よかつたわね？」

男が喜び、その姿を見て叢雲にも笑みが浮かぶ。

そして嬉しそうにはしゃいでいた男は、突然叢雲に向かって振り向く。

「そうだ叢雲！ あの丘に行きたい！」

「……あの丘って、アンタが抜け殻みたいになるちよつと前に、気晴らしに行つて絵を描いた、あの丘？」

「そうだ、きつとあそこは今頃ひまわりで満開になっているはずだ、原っぱだったあそこにひまわりの種を蒔いておいた!!」

「アンタそんなことしてたの……言つとくけどあのとき大変だったのよ？ アンタいつまでたつても帰ろうとしないし、雨はふるしで、私はずーつとアンタの為に傘を持つてたの覚えてる？」

「私に過去はない！ だが夜までかかつても描き上がらなかつたのは覚えている」

「ああハイハイ。わかつた、わかつた、付き合つてあげるわ。たく。でもまずはなにか食べましょう。なにか食べたいものある？」

よほど気分がいいのか、男は叢雲を抱き上げてくるくると回りだす。

「君の作る卵料理なら何時でも食えるぞ！」

「……ああもう！ わかった、わかったから！ 作ってあげるから下ろしなさい！ でも外出の許可は高くつくわよ？ それはちゃんと覚えておきなさいよ。貸しにしといてあげるから！」

叢雲と男は、楽しそうに笑みを浮かべ、しばらく回り続けていた。



モニユメントの原型が完成した。

その知らせを聞いて、艦夢守市の市長である『ビスマルク』は、一人で基地を訪れた。長く輝く金色の髪に、手足の長い、美しい西洋人女性の体型。

高いスーツを身にまとい、自信に溢れた歩みでビスマルクは、出迎えた基地司令官である大淀の前に立つ。

「来たわよ大淀。あの許可を出すために、ずいぶんと骨を折ったわ。ろくでもないものを見せたら、本当に許さないから」

国内最大の艦連指定都市である艦夢守市の市長。

それはただの市長よりも遙かに強力な力を持つ。

その証拠に、艦夢守市の艦連軍基地に駐屯する戦力は、市長の要請があれば市内での作戦行動が可能だ。

そしてまた、自身も艦娘、しかも戦艦の艦娘であるビスマルク。

その強い口調には、その立場が持つ力とは別種の、艦娘としての強い力もこもっていた。

大淀はメガネを光らせ、軽くうなずき、ひまわりのアトリエに案内する。

中に入り、大淀はビスマルクに指定の場所に立つように伝えた。

倉庫内は暗く、ビスマルクの目の前には、なにか大きなものがあるのはわかるが、その詳細まではわからない。

大淀に向かって、ビスマルクがなにか不満を口にした瞬間、大淀が電気のスイッチを押して、倉庫内に光が灯る。

一瞬まぶしさに目を閉じたビスマルクは、ゆっくりとまぶたを開いた。

そこに現われたのは、とても大きな緩い半円の形をした壁像。

その大きさは幅約十メートル、高さ約四メートルの巨大なもの。

壁像には、水着を着た少女たちが笑顔で泳ぎ回る姿が彫られていた。

そしてその全ては、潜水艦の艦娘たち。

壁像の中央に立つと、自分が海の中にいて、彼女たちに守られているように感じる。

だが同時に、海の底を連想させることから、艦娘にとつては恐怖をかき立てられる。そう感じられるような、優しさと同時に恐ろしさを感じる、不思議な作り。

ビスマルクはそれを見て、様々な理由から息を呑む。

その壁像が優しかったから。

その壁像が恐ろしかったから。

そしてその壁像に彫られた艦娘の一人。

そこにもう二度と見ることができない、同胞の姿があつたからだ。

「……ゆーちゃん」

それは、会つたこともなく、会うこともできない、記憶の中にのみ存在する戦友の姿。

過去大戦において、海の狼と怖れられた、冷たい無表情の優しい同胞。

ビスマルクの艦娘としての記憶が叫ぶ、これは紛れもなくあの子だと。

「例の騒動の話は聞いてるわ。でもいいの？ 潜水艦の艦娘の像なんて作つて……太宰

府のあきつ丸になにをされるかわからないわよ？」

「……いえ、あきつ丸閣下にも見ていただきました。閣下はこの壁像を出すことによつ

て起きる問題、その全ての対処に関して、無条件で協力することを約束されています」

呼んでもいないのに、この壁像の完成を嗅ぎつけ真つ先に現れたあきつ丸。

この壁像が世に出ることを妨害、いや、破壊するつもりであつたであろうあきつ丸は、

この壁像を見て、彼女らしくない表情で固まった。

それはまるで、いままで強固に構築した価値観が崩れてゆくかのような、そんな表情。長い時間、壁像を見続けていたあきつ丸は軍帽を深くかぶり直し、表情を隠す。

『この壁像が世に出て起きる問題の対処と、これを出すための元老院への説得には自分も協力させていただくであります』

そして、壁像にはなにもせず、そう言い残しただけで倉庫から去った。

ビスマルクは壁像に彫られた、かの国の陸軍所属だった、とある潜水艦の艦娘の一人を見る。

その少女の水着の胸元には、『ゆ』と大きく書かれていた。

「まあそう……でしょうね。それで、私をわざわざ呼んで貴方と二人つきりにしたのには、なにか口にしにくい頼みがあるからでしょ？　なにが必要なのよ」

察しのいいビスマルクの言葉に、大淀は軽く微笑みながら答える。

「これを世に出すための協力と、製造する為の金属です」

そう、これはあくまで『原型』であり、完成ではない。

ひまわりの仕事は確かに終わった、だが次はこれを元に製造する作業があるのだ。

「協力はともかく、これを製造するための金属？　ブロンズ……それとも銀や金でも用意しろっていうの？　そりゃプリンツに頼めばできなくはないけれど……」

「いえ、必要なのは貴方たちの財団が保有している、旧時代の名称である若狭湾に海没していた、呂500潜水艦の残骸です。無論全てではなく、ほんの一部でかまいません」
「はあ!? ……あれが私たちにとつてどれだけ大切なものか、貴方理解して言っているの? もう二度と会えないあの子……その祖となった潜水艦なのよ? それにあれを引き揚げる為にうちの市と財団がどれだけ出資したのかも。たとえもう原形を保っていない鉄の残骸だったとしても。そんな大事なものを溶かしてこの壁像の素材にしろつていうの?」

「不快感が湧かれるのはごもつともです。ですがそんな大切なものだからこそ必要なんです。この壁像に命を与えるためには、生半可な素材ではいけない、絶対に、なにか意味を持たせる必要があるんです。当然ですが、艦守市議会やDKD財団（ドイツ艦娘大好き財団）への根回しには私も協力いたしますよ、たとえば私の立場がどれだけ危うくなるうとも」

「正気じゃないわね、あなた。ひまわりと叢雲の近くにすぎた狂ったんじゃないの?」
「……否定はしません。それで、やらないんですか? それとも……できませんか?」

どこか挑発的にそう問いかける大淀。

ビスマルクは、壁像をもう一度見て、僅かに震えながら呟く。

「……わよ」

大淀は小声で呟かれたビスマルクの言葉が聞き取れない、というような様子で首をかしげる。

だが、その表情はどこか愉快げだ。

その顔を見てビスマルクは怒りの表情を浮かべ、声を荒げながら叫ぶ。

「やるって言ってるのよ！ 私の市長生命やその他諸々にかけて必ず用意してやるわよ

！ やるにきまつてるでしょ！ やってやろうじゃないの!!」

「それを聞いたかった！」

「その顔むかつくううう!!」

そしてビスマルクと大淀、そしてあきつ丸。

三人の立場のある艦娘たちの鬨いが静かに始まった。

「もしもしプリンツ!? そう私よ私!! いいから聞きなさい——え、む……り? 無理っていうのは嘘つきの言葉よ、いいから、やるの!!」

いや、正確にはビスマルクはどうしても議会の認可を得られなかったため、残骸を積んだトラックを自ら運転し「責任は全部私がとるから！ 早くこれを溶かして!」と、力業すぎる行動をとったので、とても大変なこととなったのだが。

そして、三人以外にも壁像を見た多くの人々が、その心に火を灯し、行動を起こした。結果、ひまわりの手がけた壁像は、艦連元老院、いや、艦連全体を動かす力となり。無事、慰霊祭のモニメントとして世に出すことを、艦連に認めさせたのだった。



『——この行動に対しビスマルク市長は答弁で「カツとなってやった、次はもつとうまくやるわ」と述べており、議会は市長の十時と三時のおやつと、給与を三ヶ月99%カットすることを、全会一致で議決しました。この決定に関して、そこは辞任だろ、という記者団の正論に対して議会は「どうせ辞任してもすぐ再選するからこの方が効果がある」と反論し、記者団もそりゃそうか、と納得したような様子で——』

「おや、そこにおられるのは、いままさにそのテレビに映っている、ビスマルク市長殿
ご本人ではありませんか？」

「げっ……」

「そんな嫌な顔をされると傷つきますなあ」

とある喫茶店で出くわした、ビスマルクとあきつ丸。

あきつ丸は無遠慮にビスマルクの隣に腰を下ろす。

「なによ、太宰府にどうこう言われる心当たりなんて……いやまあ、あるっちゃあるけど」

呂500の残骸騒動とは別に、あの壁像を世に出すために、ずいぶんと艦連に対して働きかけたことを思い出すビスマルク。

あきつ丸はその様子を見て、軽く肩をすくめる。

「でしたらいらぬ心配でありますよ。自分は太宰府の長官を解任されてしまったでありますので。いまの自分はただのしがない憲兵軍の一兵卒であります。まあ形式上は辞任であります。なのであまりそう邪険にしてほしくないでありますなあ」

「はあ？ 長官をクビって……それに元太宰府だったとしても、艦娘軍ですらない憲兵軍の一兵卒に？ なにしてかしたのよ……」

「まあさすがに職務と関係ないことに権力を使いすぎてしまったといいですか、まさか自分が告発される側になるとは思いませんでしたなあ……あと再就職先の方は、陸との関わりが多い憲兵軍の方が水が合うと思ひまして。しつかし……せつかく権力の頂点に上り詰めたのに、我ながら景気よく棒に振ってしまったであります。ちなみに後任には姉上が就任予定ですので、自分のように甘くはないでありますよ。あ、マスター、ブレンドを一つお願いします」

喫茶店のマスターに注文すると、あきつ丸はふところから煙草を取り出す。

それを見てビスマルクは嫌そうに顔をしかめる。

「ちよ、隣で煙草吸わないでよ……方が一このあと提督に巡り会えたときに、第一印象でたばこ臭い女だって思われちゃうじゃない」

「はあ、面倒なものでありますなあ。人造の艦娘というのは」

「うつるさいわね……自由に提督を選べる、建造のあんたらとは違うのよ」

「おっと、その発言は艦連機密の漏洩でありますぞ、ビスマルク殿」

「話を振ってきたのは貴方でしょうが、あとその人造って表現は不快でだいッ嫌いだから。今度からは戦史時代の提督と艦娘の愛の結晶である子孫とかそんな感じで呼びなさいよね」

「それ語呂が悪い上に長すぎでありますなあ……」

やれやれといったふうに、煙草をしまつてテレビのニュースに目をやるあきつ丸。

そこには、潜水艦の艦娘に関する、いままで公開されることのなかった写真や映像などの情報が流れていた。

「艦連も先手をとって情報を出し始めたようだな。いやはや、それにしても、艦連が百年以上ひた隠してきた最重要機密の一つをおおっぴらにするとはい、我ながらよく頑張つたであります」

「貴方だけじゃないでしょ……あの壁像を世に出すために、大淀やら私やら、色んなところが手を尽くした結果よ」

あきつ丸はマスターに出されたコーヒーをすすりながら、「まあ、そうですね」と、一言咬いてテレビに視線を戻す。

「しかし、これからのことを考えると、我々は、歴史の転換点にいるのかも知れませんが」「そうですね……でも今回の慰霊祭と今回のことが重なるのは、きつと大事な意味を持つと思うわ。それにさつきはああ言ったけど、貴方もよく頑張ったわね」

「なんだか、改めてそう言われると気持ち悪いですなあ」

「うっさいわよ！ それよりも聞きたいんだけど、貴方はどうして地位を捨ててまで、今回動いたの？ いままで散々大物悪役ムーブ（メタ発言）しといて、あつさり変わったから、そっちの方が気持ち悪いんだけど。なんか裏とかあるの？」

「心外ですなあ……自分は職務に忠実であっただけでありますのに。……まあ、しいて理由をあげるなら、いい加減、堂々と吊つてもいいのではと思ひまして、で、ありますかな……もつともその代償として、自分はこうして一兵卒からのやり直しとなったわけですなあ」

「あら、貴方も案外まつとうな感情があつたのね。いいじゃない、それも。あ、マスター例のやつお願い」

喫茶店のマスターは、うちは酒屋じゃないんだけどね、とぶつぶつといいながら、奥からウイスキーのボトルを持ってくる。

そして、その酒瓶と、よく磨かれた二つのグラスを二人の目の前に置いた。

「おごりよ、飲みなさい」

「これはこれは、ですが自分はまだ職務中……」

「私のお酒を断わるなんて、貴方も相当偉くなったものね！」

「そ、それは嫌味でありますかあ!?!」

実際相当偉かったあきつ丸は、その言葉に思わず声を上げる。

「はあくもう、今日くらいはつきあいなさいよ」

ビスマルクは二つのグラスに、小麦色のウイスキーを注ぎ、片方をあきつ丸に手渡す。

少し悩んだ末、あきつ丸は「まあ、確かにもうそういう立場でも……」と、呟きそのグラスを受け取った。

「そうですな……では」

コホンと咳払いをし、一拍置いてあきつ丸はグラスを掲げる。

「究極の犠牲を遂げた同胞たちと、彼女らの提督の幸せな来世を願って」

それを聞いて、ビスマルクは微笑み、自らもグラスを掲げる。

「その犠牲の先に紡がれる、私たちとまだ見ぬ提督たちとの幸せな未来に」

乾杯。



二人の艦娘が祝杯をあげている頃。

市内の鑄造所に、男と叢雲の姿があつた。

鑄造と最終工程の研磨が終わり、ついに完成した壁像。

全ての足場が取り払われた、壁像の前に立つ二人。

現在はこの鑄造所にあるが、明日にはこの像は慰霊祭の会場に移送される。

そのため、ゆっくり観れるのは今日が最後。

その後は、制作者といえども、刑期を終えるまで見ることは叶わない。

色々の特例が飛び交つてるせいで忘れがちなのだが、男は服役中なのだ。

二人は並んで、壁像の中央、緩やかな半円状の中心となる前に立つ。

離れて観る場合の印象とはまた違い、その場所に立つと違う印象をうける。

それは潜水艦の艦娘たちに包まれているかのような温かさ、同時に彼女たちに置いて

いかれるような寂しさ孤独感。

だけどなぜか燃え上がるなにかを感じるような、不思議な気分になる。

しばらくその気分を味わっていると、男が口を開いた。

「ずっと彼女たちがいたんだ、私の中に……」

「そりゃこんなに沢山いたんじゃない、爆発しそうにもなるわね」

そう言つて、叢雲は呆れたように笑う。

そして二人はしばらく沈黙し、静寂が工房に満ちた。

やがて一つの疑問が湧いた叢雲が口を開く。

「そういえばこの作品、なんて名前を付けるの？」

「……この作品の名前は『別れ』だよ」

「別れ、ね……」

世界を救った潜水艦の艦娘たちに対して、本当の意味での別れを告げるという意味なのか。

それとも誰かにとつての、誰かへの別れなのか。

それはきつと、これを見たもの自身に託される問いなのだろう。

「君たちが好きだった……さようなら」

男は『別れ』に背中を向けて歩き出す。

半歩退いて、叢雲は男の後に続いた。

「で、これからどうするのかしら」

「ずっと彼女たちの奴隷だった、いまは自由でいたい」

「あら、じゃあもう作品は作らないの？」

「何を言う、私に引退はない。また作る」

「ふふ、だと思った」

慰霊祭の会場中央に設置された『別れ』

それが世間でどういう評価を受けたのかは、二人には重要ではない。

だが、その制作過程に関わった者。

作品を世に出すために尽力した者。

そして完成した作品を見た者たちの胸には、確かになにかが灯った。

それこそが二人には、なによりの喜び。

その後、ひまわりは生涯を終える、最後の瞬間まで作品を作り続けた。

また、彼にはその最後の一瞬まで、一人の艦娘が寄り添っていたという。

ひまわりの死後、膨大な数の作品は一部を市内の戦史博物館に寄贈。

そして残りは、その艦娘が作った『ひまわり美術館』に展示された。

艦夢守市の人気スポットとなった美術館にはいまなお、大勢の人々が訪れている。

余談だが、ひまわりは『本物の贋作師』と呼ばれたが、他にも幾つかの肩書きで呼ばれていた。

妖精の手を持つ彫刻師

面会者名簿が豪華すぎる受刑者

贋作屋から成り上がった男

独房暮らしのクリエイター

艦連に魂と喧嘩を売った芸術家

と、いったように敬意や尊敬が込められたもの。

揶揄や皮肉を含むユーモアがあるもの等、様々。

だが、その中でも有名なものがある。

それが

——世界で一番、艦娘を作った提督

『芸術家』と『駆逐艦：叢雲』

そして

『潜水艦：伊168たち』

おわり

『玉子職人』と『軽空母：瑞鳳』

その日、軽空母の艦娘である『瑞鳳』すいほうは落ち込んでいた。

とある海運会社で働く瑞鳳だが、彼女だって艦娘。

人と似てるようで違い、人と違うようでどこか似ている。

つまりは人と同じように落ち込むのだ。

欲しかった服やアクセサリーが買えなくて、落ち込むなんてこともあるし。

野良猫を撫でようとしたら逃げられたりすることも大変多い。

そして今日は、備品として発注した消しゴムの桁が二つ間違っていた。

二つである、二つ。

何度もいうが、一つじゃなくて二つ。

百個のつもりが、一万個。

あわや地獄の釜の蓋が開き、瑞鳳が消しゴムの海に溺れる羽目になる一歩手前。

ギリギリ経理部主任の人が気づき、迅速に対応してくれたので大事にならずにすんだ。

桁が二つ間違つていようと、膨大な数の備品請求書の中のミスに気がつけるのはたぶんすごい。

おまけに消しゴムの数字に違和感を覚えるのは、さすが経理部主任といふべきなのか。

ミスをみつ付けてくれた主任・登場『意識高い男』と『重巡：愛宕』等の人に謝りに行くと、その人はインテリヤクザみたいな人だった。

目が鋭いし眼鏡まで鋭い、雰囲気も立ち姿もスーツも鋭い。

きつと部内ではドライアイスの剃刀とか、そんな感じのあだ名で呼ばれてるに違いない。

その迫力に、プルプルと脅えながら必死に謝罪する瑞鳳。

だが主任の人は特に怒るでもなく、超ウルトラスーパーミラクルい微笑みで慰めてくれた。

おそらく落として上げる手法、恐るべしインテリヤクザ。

もしこの人が自分の提督だったらコロツと行ってしまったかも知れない。

いや、たぶん自分の提督なら、なにをされてもコロツと行ってしまふのだろうが。

だが気になるのは、その主任の人にべったりと張り付く自分の同胞。

なんとその主任の人は提督で、その上司と部下は彼の艦娘である『愛宕』と『高雄』ら

しい。

インテリヤクザと一緒に仕事をする彼女たちは、とても幸せそうに見えた。実際幸せなのだろう。

いいなあ、と、素直に思ってしまった。

純粹に自分の提督と同じ職場で働けるなんて、なんてうらやましい。

いや、贅沢は言わないので、せめて一目だけでも会いたいものだ。

すぎてゆく時間と、増えてゆく年齢。

艦娘なので、見た目に關しては若いままなのでいいのだが、一緒にいられる時間が減るのはいかんともしがたい。

いや、それこそ捕らぬ狸のなんとやら。

それ以前に自分の提督と出会えるかだって怪しいのに。

そんなこんなで落ち込んでいた瑞鳳は、歸りにぶらっと立ち寄った居酒屋に入り、飲んで忘れることにした。

ちなみにお酒を頼むときに、艦娘証明書を提示するのも忘れない。

なにせ瑞鳳の見た目はどう頑張っても見ても未成年。

おそらくランドセルを背負っていても、ギリギリ違和感ないんじゃないかってレベルだ。

ちなみに今の姿は、よれよれになった地味な色のレディースーツ。

そして靴底のすり減った、これまた地味な色のパンプス。

長い髪は邪魔にならないように、三つ編みにして後ろにたらしである。

見た目は若いのに、醸し出す雰囲気は仕事帰りの疲れたOLの風格。

艦娘に詳しい人間が、この姿を見て艦娘の瑞鳳だと気がつけるか怪しい。

瑞鳳自身、もしいまこの瞬間に自らの提督に出会ってしまったら、逃げ出す自信がある。

こんな姿を見られるくらいなら、って意味で。

(なーんて、そんな奇跡を期待するような年齢はとつくにすぎてるんだけどねー)

使い込まれた机に肘をのせて、ははは、と自嘲気に笑う瑞鳳。

元気はつらつで、明るく軽快なイメージを持つ瑞鳳だが、いまの彼女からはそれを感じられない。

(いーもんねー、私には祥鳳ねえさんがいるもんねー)

祥鳳とは、瑞鳳の姉妹艦である艦娘としての姉である。

もつとも実年齢は姉である祥鳳のほうが下なのだが、瑞鳳はよく相談にのってもらっていた。

艦娘としての立場と、実年齢や社会での立場の関係については色々と謎が多い。

しばらくそうしてふてくされていると、お目当ての芋焼酎と玉子焼きが運ばれてきた。

まずはクイツと芋焼酎を飲む瑞鳳。

「くうく、うまい」

嫌なことは飲んで忘れるに限るとはこれのこと、至言である。

そして、あまり期待はしていないが、おそらく焼置きと思われる玉子焼きにハシを通す。

安い居酒屋では料理には期待せずに、適当に引っかけて何軒かハシゴをして楽しむというのが瑞鳳の信条なのだ。

が、予想に反して出された玉子焼きは、フワッフワのホツカホカだった。

じつは瑞鳳、玉子焼きに関しては一家言ある艦娘である。

艦であつた頃の名残なのか、艦娘である瑞鳳はとてつもなく玉子焼きがうまい。

隙あらば玉子を焼き、隙あらば提督に玉子焼きを振る舞おうとする。

それが瑞鳳という艦娘が背負つた宿命だった。

いや、宿命というか衝動というか本能というか、なんかそんな感じだ。

そんな玉子焼きフリークである瑞鳳が驚くほどの、フワッフワな玉子焼き。

厚めに巻かれた玉子焼きは大きく、色もまばゆい黄金色。

焼き目はついておらず、焼きしめるよりもフワフワさを優先させた調理。大根おろしが添えられ、醤油も机に常備されていたが、瑞鳳はなにもつけず、震える手で口元に運ぶ。

口の中に玉子を含み、噛みしめると玉子の優しい香りがひろがる。

二回、三回、そして……四回噛んだ瞬間、突然玉子の旨味がはじけた。

「ふえやああああ……ひやにこれ……おいひいいい……」

口の中の玉子がとろけ、瑞鳳の顔もとろけた。

あり得ない、この瑞鳳をうならせる玉子焼き!?

あまりの多幸感に、思わず変な声を出してしまった。

「なにこれ……おいしい」

飲み込むのが惜しいほどのそれを飲み込み、改めて感想を口にする瑞鳳。

ただいい玉子を選ぶだけでも駄目。

ただ熟練の技でかき混ぜても駄目。

ただうまく焼いて巻くだけでも駄目。

そして、ただ極上の隠し味である、だし汁を入れるだけでも駄目。

あらゆる要素が高レベルでまとまっている。

いや、おそらく玉子に関してはそう珍しいものではないはずだ。

むしろ味や大きさにバラツキのある、まとめていくらの処分用の玉子。

それを格安で引き取って、使っている可能性すらある。

だというのに、ここまでの玉子焼きが作れるのは、玉子のすべてを見抜いているからだ。

おそらく手に取った瞬間に、この玉子焼きを作った人は、その玉子の全てを把握できるのだ。

そこからその玉子に合った調理を、その都度調整しているに違いない。

それはまさに神業と呼ばれる領域。

「あ、あの……すみません」

「はい？ あつ、ご注文ですか？」

この玉子焼きを作ったのは誰だあ!? と、厨房にカチ込むわけにはいかず。

良識のある瑞鳳は、店員にこの玉子焼きを作った料理人に関して聞いた。

瑞鳳の話聞いて、店員は微妙な顔を浮かべる。

「ああ、そいつなら——」

『うるせえ!! 俺は玉子料理以外作りたくねえんだ!! こんな店やめてやらあ!!』

奥の厨房から聞こえてくる大声、なにか物が落ちたり壊れる音。

続いて裏口の扉から誰かが走り去る音が、しっかりと瑞鳳には聞こえた。

「えっと……今し方店を辞めました……」

言いづらそうに、店員はそう続けた。



あの日から、瑞鳳はあの玉子焼きが食べたくてしょうがなくなつた。

しかし、店を辞めたその料理人は若い青年だという以外の情報はなく。

そもそも居酒屋の店長がめちやくちや怒つていて、それ以上は詳しく聞けなかつたのだ。

そんなもはやしたものを抱えながら、日々を過ごしていた瑞鳳だったが。

「うん、いつまでもひっぱつても仕方ないわ！ 気持ちを切り替えないと！」

とか言つて、今日もランチは玉子料理を頼むのだった。

気持ちの切り替えが全然できてないと、はつきりわかる行動である。

あの日から既に一ヶ月。

ランチでは毎回違う店を巡つて、玉子料理を求める日々。

だが、あの日食べた玉子焼きを越えるものには出会えない。

「これじゃないんだよねえ……」

お皿の上にはフリッタータと呼ばれる、とある国の玉子を使った郷土料理。

ふわふわの玉子生地につつまれたベーコンなどの具材。

それらがオリブオイルの風味と相まって、普段なら大満足の一品だ。

だが、求めていたものと違ったそれを一口食べた瑞鳳は、ため息をついてしまう。

運悪くその言葉とがっくりした様子の瑞鳳を見てしまった、その店を経営する某イタ

リア駆逐艦の店主さんは、ガーンという擬音が聞こえてきそうな表情を浮かべた。

そんな日々が続いたある日の夜。

瑞鳳はその日、疲れた足取りで家に帰ると、買ってきたお総菜を机の上に置く。

そして電気をつけて、鏡に映った自分を見て愕然とした。

肌の手入れや化粧など、普通の女性に比べれば融通が利くステキな艦娘。

だというのに、ぼさぼさになった髪や、よれたスーツ。

なにより身にまとう雰囲気、教科書に載るレベルの疲れたOLそのもの。

そこには普段のうらぶれたOLの姿に磨きがかかった、瑞鳳の姿があった。

さすがにこのままでは、色々と不味いと感じた瑞鳳。

女としての自信を取り戻さなければ……という焦燥が生まれる。

そんなわけで瑞鳳は、ひいきのセレクトショップに行くことにした。

幸い、明日は休みである。

次の日。

早めに起きて、洗濯や掃除を終わらせた瑞鳳は、外に出るための服装に着替える。

だがその姿は、普段のスーツ姿ほどではないのもの、髪の毛は三つ編みで、地味な服装。

艦娘凶鑑にのっている、凜々しい弓道着姿の瑞鳳とはえらい違いである。

「だ、大事なものは中身だもん!!」

瑞鳳自身、それはどうかと思う言葉を自分に言い聞かせて外に出る。

ちなみに、店に向かう途中にすれ違った人たちからは、近所を散歩する地味な学生にしか見られていなかった。

そんなことはつゆ知らず、ひいきの店である『ZUI5』に到着した瑞鳳。

この『ZUI5』は、学生と社会人になったくらい年齢層を意識した衣服を取り扱っていて、オーナーである艦娘の『瑞鶴』は瑞鳳と同じ空母の艦娘でもある事から、よく利用している。

今日はステキな服やアクセに会えるといいな……なんてウツキウツキの気分で店の扉をくぐった瑞鳳は、店に入った瞬間、こうつぶやいた。

「……店、間違えた」

なんとということでしょう。

瑞鳳が訪れてしまった店は『ZUI5』ではなく『ZUKA』だったので。

補足しておくのと、落ち着きの出てきたお金のあるそこそこ若いおしやれを意識する女性向け（長い）の商品を取り扱っているのが『ZUKA』であり、狙ってる立場や年代層に瑞鳳はどんぴしゃで当てはまるのだが、見た目的に当てはまっていない。

つまり店、間違えた。

目的地を間違えるなど、まるでペーイとこぼしながら涙を流す、別の国の軽空母・登場『旅作家』と『軽空母：Gambier Bay』ではないか。

店内には、お金を持ってそうな大人の女性ばかりで、肩身がとても狭い。

しかしすぐ出るわけにもいかず、瑞鳳は恐る恐る店内を軽く見てまわることに。

店にあるのは、綺麗で落ち着いた服に、高いヒールの靴、輝くアクセサリー。

そしてお客さんや店員もそんな服に負けない、おしやれで大人な女たち。

悲しくなってしまう瑞鳳は、もう限界と頭を下げてそそくさと店を出ようとする。

だが、その前を横切るアツアラーな戦艦の影。

頭を下げて前がよく見えなかった瑞鳳は、ぼすんと、その大きな胸に激突してしまっ
た。

「きゃ!？」

ぶつかった相手は軽くよろけただけだったが、質量（胸部装甲含め）に差があつた瑞鳳は尻餅をついてしまう。

見上げると、とてもおしゃれな服装をした大人の女性が、瑞鳳を見下ろしていた。

この店のオーナーである戦艦の艦娘、陸奥・登場『服飾家』と『戦艦：陸奥』である。

「あら、あらあら、大丈夫?」

「はい……ごめんなさい」

パンパンとお尻を払いながら立ち上がる瑞鳳。

そして、それでは私はこれで……と、立ち去ろうとして腕を掴まれる。

「……もしかしてアナタ、艦娘の瑞鳳?」

ドキッ!! つと、瑞鳳の鼓動が跳ね上がる。

別にばれたからどうというわけではないのだが、どうにもこの地味な服装で、圧倒的なおしゃれ力を持った陸奥を前にして萎縮してしまったのである。

陸奥は厳しい目つきで、てっぺんからつま先まで、瑞鳳の身体を凝視する。

そしてガバツと、瑞鳳の肩に両手を置き、鼻先がぶつかる距離まで顔を近づけた。

「つひ!? ご、ごめんなき——」

もんのすぐく綺麗なむつちゃんが、普段見せない険しい顔つき。

綺麗な人が怒ったときに発する圧に押され、瑞鳳は思わず謝罪の言葉を口にしようとする。

「……なんて格好してるのよ、アナタ」

「へ、え?」

確かに地味かもしれない、が、そこまでひどい格好でもないと思っていた瑞鳳。

だがそんな瑞鳳の価値観を粉々にする言葉を、むつちゃんは続ける。

「あのね、私たちがみたいに好きになれる男がおもiiiiiiiiiiiiっ!! つきり、限られてる女はね、出会った瞬間相手に、百発百中で好きになつてもらわないと話にならないのよ!」 なのにアナタ、なにその格好は!」

「へ、え、え? ず、瑞鳳の格好、そ、そんなにひどい?」

むつちゃんは無言でうなづく。

瑞鳳はとても泣きたくなかった。

そして、今日新しい服を買いに行こうとしてたのだと言い訳したくなかった。

だがむつちゃんはそんな瑞鳳の気持ちもなんのそのな勢いで、彼女の腕を掴んで歩き出す。

ちなみに脚が長いむっちゃん的一步は、瑞鳳の二歩くらいなので、瑞鳳は引きずられるようにしてその後に続くしかない。そして二人は店の奥、そこにあった階段を上り、服飾工房のような部屋に入った。

そこには、マネキンに着せた白いドレスに刺繍を編み込む、陸奥のパートナーである服飾家。

そして絶世の美女でもある、アヤ・登場『服飾家』と『戦艦：陸奥』の姿。

衣装に向き合う彼女の目つきは真剣そのもので、近寄りがたい空気を放っている、が。「アヤ!! この子に一着素敵なドレスを……それでいいわ! そのドレスをこの子用に仕立て直して頂戴!!」

そんなの関係ねえといわんばかりの大声で、アヤに声をかけるむっちゃん。

アヤはくわえていた針を置き、なに言っただという表情でむっちゃんに言葉を返す。

「は? いや、これ次のセレクション用の——」

大きなデザイナーズショー用に仕立てていた衣服。

かなり気合いを入れて作っていた衣装を、連れてきたどこの誰ともわからない少女の為に仕立て直せという無茶振りに、アヤは当然のように拒否しようとする、が。

「……なにそのひどい格好」

一目瑞鳳の姿をみて、ボソリと呟くアヤ。

多段コンボの追い打ちダメ出しが瑞鳳を襲う！

「その子を早くこっちに連れてきてむっちゃん!! すぐに寸法測るわ!!」

女が外でする格好じゃないといわんばかりな瑞鳳の服装。(実際そこまでひどくない)

それを見たアヤのデザイナードレスに、火がついてしまった。

「お願いアヤ!! こっちはそのドレスに合わせたアクセや靴を用意するわ!!」

いともたやすく行われる、えげつない連携。

アヤに押しつけられた瑞鳳は、すぐに裸にひんむかれて採寸される。

「え? え? ええええええええ!!」

なすがままにされる瑞鳳。

こうしてなぜか瑞鳳は、日が沈む頃には一流の女たちによって、最高に可愛い姿にドレスアップされてしまったのだった。



「いやー、いい仕事したわねむっちゃん。カンパーイ!」

「ええアヤ、また一人、迷える女を救ってしまったわ。カンパニー！」
着飾るのが苦手な女たちの心強い味方。

正義のヒロインである二人が、BAR佐世保の薔薇で祝杯をあげていた。

そんなテンション→→な二人に挟まれるのは、白いドレスを着て、全身コーデを施された瑞鳳。

実際このまま結婚式にだって出られそうな程に、白く輝く美しいパーティードレスと、まばゆいアクセや靴で着飾り。果ては近所の美容院で髪を整えられた瑞鳳は、可愛く美しかった。

問題なのは、どう見ても結婚式とかの帰りとか、年齢詐称のキャバ嬢にしか見えない事だが。

そんな場違いな服装の瑞鳳は、恥ずかしさでプルプルと震えながら芋焼酎をチビチビすすする。

「アンタも災難だったわね、この二人に目を付けられるなんて」
「いえ、そんな！」

パタパタと手を振って、そんなことないですアピールをする瑞鳳。

それを見てBARのマスターである、渋い美中年である上堂蘭は、やれやれといったふうな温かい眼差しを向ける。

「でも、せっかく着飾っても、その……見せる相手も居ないので……」

「なーに言ってるのよ、いつか現われる提督が居るじゃない!」

「ソーだソーだ、普通の男ならその服着て迫ればイチコロだぞ?」

飲みまくって既にちよつと出来上がってる、自称イイ女（実際イイ女）の二人。

その二人に左右から挟まれ、あははと愛想笑いを浮かべるしかない瑞鳳。

「そう絡むんじゃないわよ。あんたもほら、いい物食べさせてあげるから元気出しなさい」

そう言つてマスターが出したのは、よく焼きしめられた玉子焼き。

「あ……どうも。いただきます」

玉子焼き大好きな瑞鳳は、BARという場所に似合わない料理である玉子焼きを、なんの迷いもなく箸を使って口に運ぶ。

焼きたてふわふわの玉子焼きが美味しいのは当然だが、焼きしめられて冷えた玉子焼きもまた別の美味さがある。

だが瑞鳳はそれを口に入れた瞬間、色んな意味でビクリと固まってしまった。

「へえ、どれどれ?」

「お、マスター粋なツマミじゃない」

ヌツとアヤとむっちゃんやんが瑞鳳の後に続くように、玉子焼きを手で掴んで口に運ぶ。

が、口にした瞬間、瑞鳳と同様にビクリと固まってしまった。

「やだ、なにこれ美味しい」

「確かに……玉子焼きってこんなに美味しかったんだ」

そう、その玉子焼きは明らかに普通の玉子焼きとは違う美味さ。

違いのわかるイイ女二人には、それがとてもよくわかってしまった。

「ふふ、そうでしょう。実はいい男を拾っちゃつてね、その男の手作りなの」

なにかにつけて、男を拾ってくるマスター。

店内にいた客の一人である運転手・登場『運転手』と『駆逐艦：春風』は、身に覚えがあるのか一瞬間を伏せる。

隣にいた駆逐艦の艦娘が弁柄色の髪をゆらし、その様子を微笑ましそうに見つめていた。

だがそんな空気とは裏腹に、瑞鳳はそれどころではなかった。

なぜならこの玉子焼きは、間違いなく、瑞鳳が追い求めていた玉子焼きと同じ人間が作ったものであると確信したからだ。

「ま、マスター！ この玉子焼き作った人、どこにいるの!？」

白いドレスの裾をまくり、カウンターに乗り上げて、マスターを問い詰める瑞鳳。

マスターはその勢いに少し驚くも、その質問に答えようとする、が。

「世話になったなマスター、この恩は必ず返すぜ」

店の厨房からヌツと現われる、一人の若い男。

荷物を肩にかけ、爪楊枝を口にくわえた男は、マスターに別れを告げる。

「あら、別に行くところないなら、もうしばらく居たら？」

「つけ、いつまでも軒下借りてられるかってんだ。行くところなんざなくても、なんとでもならあ」

なんとなく、真つ白に燃え尽きたボクサーの見た目に似ている若い男。

彼はマスターに片手をあげて、格好良く立ち去る。

が、その男が店を出ようと出口に向かつて歩き始めた瞬間。

彼の姿を見て、なぜか雷が落ちたように固まっていた瑞鳳は――

「な、なにしやがる！」

なんとということでしょう。

気がつけば瑞鳳は、後ろから猛追してその男にタックルをかましていたのです。

「提督！ 提督！ 提督！」

泣きべそをかきながら、男にスリスリと顔を擦りつける瑞鳳。

その様子を唾然とした顔で見つめる店内の客たち。

「な、なんなんだおめえは!？」

「^ずじゅいほうだよおおお！」

「じゅ、じゅい？ な、なんだか知らねえが、俺はおめえさんみたいなべつぴんの知り合いに心当たりはねえ！」

自分を放そうとしない瑞鳳を、必死に引きはがそうとする男。

だが、手どころか足まで使ってガツツリ組み付いている瑞鳳は、ピクリともしない。焦った男は、マスターに助けを求める視線を送る。

「あー、そうだったわ。彼がその玉子焼きを作った人よ……って聞いてないわね」

泣きながら男に顔を擦りつけ続け、離れようとしない瑞鳳。

なんとなく空気を察したむっちゃんが、瑞鳳に代わって男に説明する。

それを聞いて、男はぶすりとした様子で口を開いた。

「つけ、なんでい。艦娘がなんだかはちったあ知っちゃいるが、俺は俺より玉子を扱うのが下手な女と付き合う気はねえ!! 付き合いてえなら、せめてこの焼置きよりは美味い玉子焼きを作ってみろってんだ……っーかい加減放しやがれ!!」

「え!! これより美味しい玉子焼きを!」

ぼつと顔をあげて、男の放しやがれ発言をスルーし、先ほど口にした玉子焼きを見る瑞鳳。

このレベルの、いや、これを越える玉子焼きを自分は作れるのかと震える。

「っへ、無理だ——」

「で、できるもん!!」

とつさに男の言葉を否定するように、声を上げる瑞鳳。

そこに先ほどまでの気弱そうな瑞鳳の姿はない。

その切り替わりは、高速軽空母の名に恥じないものだ。

というか、もはやスイツチが入ってしまった瑞鳳は、提督の傍にいる為に完全に「エングノ岬のようには……いかないん……だから……！」状態に突入していた。

その大声に一瞬驚くも、男はブスツとした顔をさらに不機嫌そうに変える。

「ああ？ 甘く見られたもんだな、焼置きだろうと俺の作った玉子焼きは——」

「できるもん!!」

「い、いや」

「できるもん!!」

お目々ガンギマリアイな、とんでもない眼光と圧力を放つ瑞鳳。

まさに軽空母だって、頑張れば活躍できるのよ！ 状態。

「なんなら勝負してもいいよ!! 瑞鳳の玉子焼き、すごく美味しいんだから!! 負けたらお嫁さんにでもなんでもなつてあげる!!」

「そ、そこまで自信と覚悟があるなら、その勝負受けてやろうじゃねえか」

「じゃあ瑞鳳が勝つたら、お婿さんになつてもらうからね!!」

そうね、追撃しちやいますか！ といわんばかりの畳みかけ。

提督をみつつけた艦娘の、丁寧なゴリ押しが男を襲う!!

「な!? お、おう、じゃあ俺が勝つたら、いつか店持ったときに一生……さ、三年間タダ

で下働きして貰うからな！」

一生はさすがにかわいそうと思って、とつさに三年に言い換える男。

やさしいのか、実は気が小さいのか、それともマズイ予感を感じたのかはわからない。

「ナニそれ!? 瑞鳳に得しかない!! いいよ!!」

だが、どつちに転んでも提督と一緒に居られるじゃん! と、判断した瑞鳳は満面の笑みで快諾。というか負けたら速攻でいまの仕事を辞めて、貯金はたいて男の店作りの為に全力を尽くす所存である。

「ちよつと勝手に……でもまあ、面白そうじゃない。いいわよ、うちの店使いなさいな。ちよつと玉子も仕入れたところだわ」

あつさり店のオーナーでマスターの許可が下りる。

こうして、BAR佐世保の薔薇で、突如料理勝負が始まった。

「ねえむつちゃん、ちよつと話について行けないんだけど。これって私が変なのかしら?」

「奇遇ねアヤ、私もよ……」

置いてけぼりにされる店内の客たち。

だがいぎ勝負が始まると、徐々にその空気が変わり始める。

なにせ対戦するのは、脅威の玉子焼き技術を魂レベルで継承した、ガチで辞書にもそ

う書いてある伝説の玉子焼き能力をその身に宿す艦娘、瑞鳳。

そしてその相手は、あらゆる玉子の声を聞き、その調理法を身につけたけどなぜか辞めた店は星の数、玉子を愛し、玉子に愛された放浪の玉子職人。

やがて調理タイムが終わり、いよいよ双方の玉子焼きが出そろおう。

それはふんわりとして、いい香りを放つ世界最高レベルの玉子焼き。

金色に輝く玉子焼きに、観客たちの期待値は否応なくヒートアップ!!

そして双方の玉子焼きを口にした審査員たちに激震が走る!

ある服飾家と戦艦艦娘の脳内には舞い散る黄色い薔薇、白い王子と黄色い令嬢が黄金の宮殿でダンスをする情景が繰り広げられ。

またある運転手と神風型艦娘の深層心理には、爆発する火山、力強く脈動するマグマ、それらが合わさった噴火の勢いに乗って、宇宙に到達する自らの姿。

そしてあるマスターからは、口から怪獣の光線のようなまばゆい光が放射され、実際に服がはじけ飛び、思わず「うーまーいーぞー!」と言う叫びがこだまする。

引き分けに次ぐ引き分け、何度も繰り返されるジャッジ。

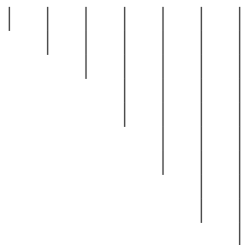
究極と至高のせめぎ合いに、答えは出るのか!?

そしてなにより、瑞鳳と玉子職人の決着は!?

果たしてこの勝負の行方はどうなってしまうのか!?

次回『はい、瑞鳳もご一緒します。勿論！』

来週も絶対見てく——



玉子料理専門店『食籠』たべりゆう

とあるBARのマスターがオーナーである、スナックビルの中にその店があった。というかそのBARの上の階にあった。

余談だが、その店で働いているとある軽空母の艦娘は、店の名前に使われているのが

『鳳』ではなく『龍』である事に若干のもやもやを抱えていた。が、店主は頑固だったので、店の名前を決めるときに口にした彼女の進言は却下された、悲しい。

「なあ黒潮、言つとくがこんな時間にこんな店に入るのはだな……」

「なに言つてはるん提督はん、どこでも連れて行つてくれるつて約束したやん」

その店の前に立つ、一組の男女。

一人は市内でも有数の料亭を取り仕切るとある艦娘・登場『無職男』と『駆逐艦：黒潮』。

そしてもう一人は絶賛求職中の無職の男。

その艦娘におしきられ、男はやれやれと思ひながら店の扉を開ける。

「あ、いらつしやいませー」

扉を開けると、狭いながらも暖かみのあるレイアウトの店内。

そして、可愛い声が迎えてくれた。

近くに居た声の主である店員が、二人をカウンター席に案内する。

愛想のない店主に代わり、この店員が店の顔となっていた。

席に座った二人に、卵料理ばかりがずらりと並んだメニューを差し出す看板娘。

「へー、ほんとに玉子料理ばっかだな」

「店員はん、なんかオススメあるん？」

「そうですね、どれも美味しいですけど。やっぱり玉子焼きが一番です！」
看板娘は素敵な微笑みを浮かべ、そう答える。
そして幸せそうな顔で、こう続けた。

「瑞鳳の提督が作った玉子焼き……たべりゆ？」

『無職男』と『駆逐艦：谷風』

わっちは無職でありんす。

……。

あと数日で陽炎たちと海に行くイベントを控えた昨今。

ポストに分厚い封筒が入っていた。

ついに採用通知が!?

と、震える手であけてみたところ。

入っていたのは、住んでいるアパートの賃貸契約更新の通知。

ざっくり説明すると、いま住んでいるアパートに住み続けるかの確認。

二ヶ月後に契約更新月がくるから、更新するならよろしくねって内容。

ああ、そういえば今年で二年目だったか。

そんな二年に一回の賃貸契約更新のお知らせ。

つまりイコール更新料（家賃二ヶ月分）の催促でもある。

さすがに更新料が家賃二ヶ月十事務手数料十その他保険料ってひどい出費だよな。

と、思う無職の今日この頃。

就職して会社の寮に入ったあとに何年かして、とにかく自由が欲しくなったので、いま住んでるところに引っ越したんだが。

あまり長く住む気がなかったから、立地やらなんやら優先でさっさと決めたため、その辺気にしなかったんだよな。

しかしながらどうしたもんか。

そもそもあと三ヶ月くらいで職が決まらなかつたら、晴れて無職一周年。

なので無職状態で一年ということになり、市の在留許可が下りない可能性が。

その場合、更新しても無駄になるといって、ひどい出費のコンボ。

一ヶ月住むためだけに、家賃二ヶ月分＋ α 払うとか、さすがにひどすぎる。

就職できればいいんだが、そもそもその見通し暗すぎるんだよなあ……。

引っ越し代を考えても、初期費用の安いなんか適当な賃貸探した方が無難かもしれない。

「うーむ……」



そんなわけでやって来たのは、とある古びた不動産屋。

実は先に、以前の住居探しで利用した、会社近くのピカピカした不動産屋に行ったんだが。

最初はニコニコしてたのに、条件と求職中であることを伝えたところ。

『まあ、探してはみませんが……』

と、困った様子の渋い顔で言われて、見つかったら連絡させてもらいますと門前払いされた。

まあ、そんな対応になるのはしようがないと思うが、数日ぶりにメンタルにきた。

くそ、俺は部屋もまともに借りられない男になってしまったのか……。

なので、磯風の家に行く途中の商店街にある、この古びた不動産屋に目を付けて来た次第。

なんか地元密着的な人情感あるし、その辺融通きかせてくれるかもしれない。

そんな一縷の希望に縋る気持ちで、店のドアを開ける。

「お、いらつしや……いっ。」

『無職男』と『駆逐艦：谷風』

「おー、えつと谷……いや、山風だな」

「さては山あり谷ありで山の方を選んだねえ?! 谷風さんだちつくしよーめ!!」
心を読まれてしまった、恐るべし陽炎姉妹。

の、一人がなぜか不動産屋にいた。

外ハネしたショートカットの黒髪に、白いヘアバンド。

ちっこい身体に収まらない元気を、周囲三六〇度に放射してるタイプ。
いるよな、こういうムードメーカーな子。

まあいうて陽炎姉妹は八割以上ムードメーカーなところあるが。

この子は、その一種である谷風。

ちよいちよい浜風磯風浦風とつるんでたよな。

多分、あれ、自信なくなってきた。

ともかくその谷風がでかい机に座って、驚いた顔でこつちを見ていた。ノースリーブの白いワイシャツに黒のサマーパンツ。

なにかの書類を持つ腕には、お洒落な銀色の腕時計が巻かれている。なんつーか、子供のはずなのになぜか様になってるな。

やり手のキャリアウーマンみてーだわ。

「わるいわるい。で、なんだ、家の手伝いか？」

「ん、んー。ま、まあそんなとこだよ。おっと、谷風さんのことはどうでもいいのさ。それよりおにいさんは、なんでこんなところにきなすったんだい？」

「そりゃまあ話せば短いが、いま住んでるところの更新料が高いから、なんか初期費用安いアパートないか探しに来た感じだな」

「ほうほう、そりゃ訳ありのようだねえ。とりまそこに座りなよ」

立ち話もなんだからという流れで、店内にある応接用ソファに座るように促される。

……このソファ、多分なんかの本革っぽいな。

恐ろしいほどに柔らかなソファに、よつこらせつくすと口にしながら身を預け、改めて店内を見回す。

そこまで広くないにしろ、奥には天井まで届く本棚に、びっしりと並べられた資料。

そして空いた壁に掛けられた、幾つもの資格やら許可関係の証明書。

なんか、歴戦の不動産屋を感じさせる内装だな。

「ほい、お茶でも飲んで落ち着きなつて」

「落ち着いてるけどな。お、美味しいなこのお茶……」

店内に見とれてる間に用意したと思われる、お茶を出してもらった。

一口すすると、馬鹿嗅覚の俺でもわかるほどの豊かな香りが口の中に広がる。

おいおい、これ絶対高いヤツだぞおい。

思わず突つ込もうと顔をあげると、足を組んでソファーに座る谷風の姿。

なんだその堂に入ったポーズ、谷風自身からも歴戦の不動産屋の気配を感じるぞ。

何者だ谷風。

「しつつかし、初期費用安くて更新料無しねえ。うちは基本戸建てやら土地をメインで

扱ってるから、賃貸はあんまり紹介できないかもだけどさあ……」

そしてそんな谷風に対する驚きを吹き飛ばす、衝撃的な言葉。

ガンだ、速攻で出鼻をくじかれた。

「マジか、スマン。そう言うことなら邪魔したな」

だが確かに、不動産屋だからって賃貸斡旋だけが仕事じゃないよな。

望みは絶たれた、今日はもう駄目だ。

いや、明日も明後日も多分駄目だ、チキシヨウ。

「い、いや！ だけど全く無いって訳じゃないんだよ!？」

退散しようとしたら、必死な谷風に服の袖を掴まれる。

なんか一気に歴戦の不動産屋感が消えたな。

というかやつぱり強いな、陽炎姉妹。

しかし不動産屋ってノルマとか大変と聞くが、これはそういうことなのだろうか。

いや。さすがに谷風には関係ない、はず。

「そ、それに外ならぬおにいさんが困ってるんだ、この谷風さんが一肌脱ごうじゃないの

！ なんなら全部脱いでもいいんだよお!？」

なんかものすごい脅えた様子で、プルプルと震えた表情。

おまけに、実服のボタンを一つ二つと外しだした。

おいその目やめろ、なんか、俺が犯罪者みたいだろ。

「お、おちつけ！ そ、そこまで言ってくれるならお願いできるか?」

「任せときなよ！ だから帰っちゃ駄目だよ、絶対だよお!？」

「お、おう……」

というかそもそも、このまま普通に谷風に相談を続けていいのか?

だがまあ、どうせ当てもないことだし、頼んでみるか。

「えっと、改めて言うのだな。まず条件は敷金礼金ゼロ、難しいならせめて礼金はゼロの賃貸を探して欲しいんだが」

「ふぬふぬ、間取りとか希望はあるかい？」

「あんまこだわらんが、風呂とトイレとキッチン、あと冷暖房は最低欲しい」
特に夏場はその辺無いと地獄だからなあ。

ベランダやら水回りの位置やら、部屋の形やら広さやら色々こだわりだしたら切りが無いので、ひとまずその辺で絞ってもらう。

「立地にこだわりはあるかい？」

「あー、おまえらの件もあるからな。河川敷のグラウンドから自転車で三〇分以内だと助かる」

「あいあい、そりや大事なポイントだねえ。よし、探してみるさね」

谷風はそういつて立ち上がると、柵の一角からかいバインダーを引きずり出し、すごい速度でめぐり始めた。

おいおい、それちゃんと見えてるのかよ。

「うーん、ちよつとクセがあるけど、こんなのはどうだい？ 初期費用ゼロで風呂トイレ別。駅からも近くて部屋数も多いさね」

「ほほう、どれどれ……」

「いや形おかしいだろ。というか入り口どこだよ」

「部屋の真ん中だねえ、ハシゴを使って出入りするのさ」

「なんで毎日帰宅のたびに、召喚される気分味わわにやならんのだ……」

「いや、地下だから天井からの出入りなんで、どっちかってーと降臨だよ?」

「おま、ちよつとマシな感じに聞こえるが、地下って条件的にはひどくなってるからな
!？」

くそ、俺としたことが真面目に突っ込んでしまった。

つーかマジでなんの目的で作られたんだよ……。

「次だ次、さすがに精神的に良くなさそうだからな」

「ははは、ごめんねえ。じゃあ……これはどうだい?　なんと予算内なのに六〇畳の

広々とした物件だよ!」

「冷暖房の心配はあるけど六〇畳ってのはすごいな、元は倉庫かなんかか?　どれどれ

……」

「……わからん。どこから突っ込めばいいのか、もう、わからん」

「迷路マニアのオーナーが趣味で作ったらしいよ。意味が分かんねえけど、粋だねえ！」
「意味分かん粋ってなんだよ。つかこれ、トイレの場所どう考えても確信犯だろ」

「ははは、高度な便意のコントロールがもとめられるねえ」

「いや、まてよ。壁をいくつか取っ払っちまえばワンチャン……」

「月末に一回リフォームして新しい迷路に作り替えることが条件みたいだから、それは
むずかしそうさねえ。でもリフォーム中は隣の部屋を貸してくれるらしいから安心だ
よー！」

「そこ本来なら必要のない安心要素だからな!? どんだけ住人に迷路を強要したいんだ
よ!!」

月一でリフォームって、明らかに毎月の家賃収入より高くつくだろうが。

マジで金持ちの考えることはよくわからん。

「次、次だ!! 贅沢いえる立場じゃないが、まともな間取りのな!!」

「ちよつとハードル上がったねえ……よし、これならどうだい？ 入り口すぐにキツチンとトイレバス、その先は使い勝手のいい正方形の八畳間だからお得だよ！」

「おお、それは期待できそうだ……な……」

「確かにまともな間取りだな、まあ、うん」

「でしょお？」

「ただなんだ、部屋より遙かにでかいもんが隣にあるが……これ、なんだ？」

「そ、その部屋専用の室内プールだねえ……」

「なーんで、そんなもんがアパートについてんだよ」

「いやなんというか、定期的に水に浮かびたいって欲求がある層が、一定数いてね……その需要を満たすために作られたっていうか」

「でもまあ、別にプールが付いてるだけで家賃は安いし、考えようによつては普通に良い物件なの……か？」

「ちなみに稼働させてないと設備が痛むから、その、強制的に普通の部屋に住む百倍くら

いの電気代と水道代を請求されるけどね……」

「そんなこつたらうと思つたよチクシヨウ!! つか家賃より高い光熱費つてなんだよ!?
そんだけ費用かかつたら引つ越す意味なくなるわ!!」

「あはは、だよねえ……じゃ、じゃあこつというの——」

その後、いくつか物件を紹介してもらつたが、どれもこれも一癖も二癖もあるヤバイヤツばかりだった。

あることにうすうす感じ始めていた俺は、思い切つてそれを聞くことにする。

「なあ……俺に紹介できるような、まともなのが無いなら、はつきりといつてくれると助

かるんだが……」

「あ、あはははは。実はえつとその……ごめんよお……」

「うぐ、やつぱりか……」

どうやら谷風の力を以てしても、無職の俺に紹介できるまともな物件はないらしい。谷風の力がどれくらいなのか、知らんけど。

「あつ、そうだ。おにいさん、ここは一つ発想を変えてみちやどうだい？」

「ん、発想？」

「そうさ、賃貸のアパートとかじゃなくて、一軒家の間借り先を探せばいいんだよ」
「間借り先？」

「うん、いま風に言うるとルームシェアってヤツだね」

「あーつと、つまりなんだ。家持つてて部屋が余ってる人のところに、居候させてもらうってことか？」

確か子供が家を出たり、事情があつて部屋が空いたりした家庭が、収入を得るためにそういうのをするって話は聞いたことあるけど。

内地じゃまったく聞かなかつたけど、そういや外地じゃ珍しくなかつたな。

「だが見ず知らずの、しかも無職の男と同じ屋根の下で暮らしてもいいってヤツなんざいるのか？」

いたとしても、よほど特殊な事情があるヤツだろ。

例えば経済的にめちやくちや困窮してるとか、そういうの。

「まあ確かにその辺の信用問題はあるんだけどさ。そこはほら、あたしや陽炎姉さんが保証するからハードルはかなり下がると思うよ?」

「う、うーむ……。まあ、他に方法があるわけでもないし……。ワラにも縋る思いといっちゃなんだが、頼めるか?」

「まっかせとききなよ!」

ちっこい身体で力こぶを作つて、笑みを浮かべる谷風。

そしてすぐに電話を手に取り、どこぞに連絡をいれ始めた。

なんか一瞬『計画通り!!』みたいな表情を浮かべた気がするが……。

まあ、気のせいだろ、多分。



「戸締まりできたかー?」

「ばっちりさ!!」

谷風は店の扉に『外出中』の札をかけると、自転車の荷台に勢いよく飛び乗った。

「そんなカツコでよく動けるな」

「えへへー。こー見えて、この谷風はすばしっこいんだよ?」

ふむ、思い返せば草野球の試合でやたら盗塁決めてる子がいたような。

草野球のときの服装とギャップがありすぎて気がつかなかったが、あれ谷風だったわ。

「これが磯風や浜風が自慢してたおにいさんとの自転車二人乗り! かあー! だいたいよこれは、粋だねえ。これで勝つる!」

「自慢するようなもんじゃないと思うんだが……」

いったいなにが楽しいのやら。

無駄にテンションが高い谷風。

「じゃあその、会ってもいいって言ってくれた人の家に向かうか。しつかり案内してくれよ」

「がってん!」

驚くことに、無職の男に部屋を貸してもいいという家が三軒もあったらしい。

なんだろ、実は意外とそういうの多いのだろうか?

もしくは陽炎と谷風の信用がすごいとか。

どっちにしろ、まずは顔合わせの必要があるわけなんだが。

まさかのタイミング良く、その三軒とも今日会えるらしい。

さすがにいきなり過ぎるのではと思わんでもない、準備とか一切してないぞ。

だがまあ、むしろこの手の事は、変に飾らない方がいいのかもしれないな。

なんかこう、お互い最初から相手のあるがままの姿を見せた方が、信用できるみたいな。

知らんけど。

そんなわけで、えっちらおっちらと谷風が指示する方向に向けてペダルをこぐ。

しかし暑い。

夏の日射しを受けながら自転車に乗るのは、覚悟していても暑い。

こりやどつかで水分補給でもしないと辛そうだ。

「〜♪」

そんなヒイヒイいつてる俺とは反対に、谷風は鼻歌なんぞ歌い始める。

この暑さだつてのに、マジで元気だな……子供かよ。

……そうだよ、子供だったわ。

すっかり不動産屋の相手してる気分になって、忘れてたけど。

「しかしなんだ、家の手伝いするのはえらいと思うんだが……そんなに楽しいもんなのか？」

「うーん、楽しいかって聞かれたら、そりやまあ色々あるわけよ。やつぱり仕事だからさあ」

まあ仕事だからな。

俺も学生時代は散々バイトしたが、まあ色々あった。

「でもほら、衣食住つてくらいだから、どんなときでも住むところってのは、やつぱり必要なわけさ。だからもし姉妹や仲間が困ったときにさ……この谷風さんにそういう経験やつてがあればさ、助けられる。そう思ったら、やりがいがあるってもんなのよ。現にこうしておに皆さんの力になれてるしね♪」

「……なるほどな」

……驚いたな、ほんと、驚いた。

俺がバイトしてたのは、金つて目的が全てだったわけだが。

どうやら谷風は、俺が思うよりも遙かに立派な志を持っていたらしい。

なんか、谷風つて結構ぶつきらぼうな口調だがアレだな。

優しくて面倒見が良い、姉妹思いの人情味が溢れるヤツなんだろうな。

しかしそんなこと聞くと、俺も次の仕事はこいつら姉妹にとって、なにか助けになれるような仕事をしてみたいなと思うわ。

……まあ、それ以前の問題でずつつまづいてるけどな!!

「あ、朝霜さんだー！」

「んっ。」

なんてサイレントに落ち込んでいると、谷風の口からどつかで聞いた名前が飛び出す。

見ると、よく行く喫茶店のマスター・登場『三文小説家』と『駆逐艦：朝霜』が反対側の歩道を歩いていた。

「ねえおにいさん。実はあの人、お得意さんでさ。ちよつと挨拶してきていいかい？」

ああ、そういや秋雲が住んでる喫茶店の後ろのビル。

あれ確かマスターの持ちビルだって話だったな。

不動産屋の関係で、谷風と縁があるのかもしれない。

「うむ、人間関係は大事だからな。しっかりと挨拶してこい」

「わるいね、すぐ戻ってくるからさー！」

「ゆっくりでいいぞ、俺はその公園のベンチで休憩してるわ」

「がってん！」

荷台から飛び降りて、マスターの方に駆けてゆく谷風。

その姿を見送り、近くの公園に入って自転車をその辺に止める。

しっかし暑いな……。

こう暑くちや、まめに水分補給しないと身がもたんわ。

そんなわけで、谷風の方もあわせて、自販機でジュースを二本買う。

購入した冷たいスポーツドリンクを持ってベンチに向かうと、先客がいた。

座っているのは、瘦身のオールバックに眼鏡の、殺し屋みたいな男。

なんか見覚えあるな……って、前島・登場『意識高い男』と『重巡：愛宕』等じゃねえか。

「おい、このクソ暑い中でなにやってんだよ……」

「え、は？……先輩？」

隣に腰を下ろし、谷風にやる予定だったスポーツドリンクの一本を前島に渡す。

少し癪だったが、なんか妙に憔悴してる感じで、ほつときや干からびそうだったからな。

前島は素直に礼を言つて、それを受け取ると、ゴクゴクと一気に飲み干した。

なんか、久しぶりな気もするが、少しやつれたような気がする。

結婚式の準備とか色々大変なのかねえ。

「つて、そういう招待状届いたわ。つかまさかお前が結婚とはなあ……色々複雑だが、まあ素直に祝福してやるよ。おめでとさん」

「はい……ありがとうございます」

複雑な心境を脇に置いて、素直に祝福したつてのに、どこか辛気くさい様子の前島。

「おいおい、ありがとうつてツラには見えんぞ」

「その、まあ、色々ありまして……」

「色々ねえ……」

なんとなく想像つくけどな、主にロリコンの絡みで。

だがまあ、お互いもう子供じゃないんだ。

いい加減折り合い付けるべきだし、これもいい機会なんだろう。

「そう言えば先輩、前の職場の方たちと、辞めたあとも連絡は取られていますか？」

「辞め方が辞め方だったからな、バツサリだよ。……なんでそんなこと聞くんだ？」

「いえ、実はですね……」

聞くとどうにも、結婚相手の家がでかすぎて、圧倒的に前島側の招待客が足りていないらしい。

前島のお袋さんの関係者や、会社の同僚ほとんどを招待しても、相手側の四分の一にも届かないんだとか。

なんつーか、俺には一生縁の無いことだとは思いますが、やっぱ大変なんだな、結婚式つて。

「あの、そういうわけでして先輩。心苦しいのですがその、当てはありませんでしょうか」

「？」

「あー、そうだな……ご祝儀まけてもらえるなら、あと二十人ほど当てがないでもないんだが」

陽炎姉妹の面々が真つ先に思い浮かぶ。

なんかでかい結婚式場でやるみたいだし、うまいもん食わしてやれるなら、連れて行ってやってもいいかもしれん。

が、さすがに子供にご祝儀出させるわけにもいかん。

かといって、二十人近い数のご祝儀を俺一人で払うのは……正直辛い。

「いえ、ご祝儀に関してはまったく気になさらないでください。その、相手の家が相手の家でして、予算に関しては恐ろしいことに底がなくてですね……」

「予算に底がないって、言葉にするとヤバイなオイ」

「ええ、まあ、ヤバイですね……」

こっちは更新料のためにヒイヒイ言ってるつつーのに。

なんか、スゲー惨めになってきたわ。

つか、今更だが俺はいつまで無職なんだろうな。

思わずため息を吐くと、同時に前島もため息を吐き、微妙に会話が途切れる。

多分傍から見たら、陰気な男が二人してこのクソ暑い中座ってるように映るだろう。

「あの、かくいう先輩もずいぶんひどい顔をされてますが……大丈夫ですか？」

「生憎と顔で食っていく仕事に就く予定は無い、いまのところはな」

「なるほど、いまのところは……とところでその、求職活動の方は……」

「聞くな」

「……はこ」

片や結婚式を控えた、マリッジブルーの男。

片や住居と職を探す、お先真つ暗な独身男。

同じ陰のベクトルなのに、なぜか正反対のネガティブベクトル。

「なーんでこんなに悩まにやならんのか……馬鹿みたいだわ」

「正直……私も自分のことでそう思ってます」

なんだろ。

よくわからんが、お互い、いま最高に無駄な会話してる気がしてきた。

そんなどうしようもない空気が漂う中。

挨拶が終わったのか、公園の入り口できよろきよろしている谷風の姿が目に入る。

「おーい谷風!! こっちだこっち!!」

これ幸いと、陰気な空気を吹き飛ばす気持ちを含め、谷風の名前を大声で呼ぶ。すると一瞬驚いた様子を見せた谷風が、嬉しそうにこっちに向かって走ってきた。つか、速いっつておい。

「おーまーたーせー……提督ううう!!」

谷風はそう叫びながらドカンと勢いよく、俺の胸に飛び込んでくる。

んが、重い!!

質量はないがスピードがキツイ!!

が、さすがに大人としてのプライドがあつたので、ギリギリ耐える。

マジでギリギリだったけどな!!

「ゲホゲホ……悪いが前島。そんなわけで、ツレが来たからもう行くわ。自分で言ってる情けないが、こっちは大体暇してるからな。その追加の参加者の話もあるし、都合ついたらまたいつでも連絡くれ」

「え?! は?! え?! あ?! え?!」

前島はなぜか壊れたロボットの目になつてるが、まあ暑さのせいだろ、多分。

そんな前島を尻目に、飛びついてきた谷風を抱き留めて脇に抱える。

すると谷風は脇から抜け出して背中をよじ登り、肩に乗って俺の頭を抱え込むと、なにが楽しいのか提督♪提督♪と連呼しはじめた。

「ああくそ、なんでお前ら姉妹は頭に上りたがる！」

「えへへへ、いいじゃないのさ！」

まあ、いいけど。

つか、先方さんの都合もあるだろうからな。

とつとと向かうとしよう。



「(ト)(ト)さねー！」

「(ト)(ト)さねか」

再び谷風を自転車の後ろに乗せて、えつちらおつちらと移動すること十数分。

ようやくたどり着いたのは、渋い見た目の一軒家。

いや、というかここは……。

「磯風の家じゃねえか」・登場『無職男』と『駆逐艦：磯風』

「話は（電話で）聞かせてもらった！ この磯風に任せておけ！」

呼び鈴押すより早く、ババーンと玄関を開けて登場する磯風。

まさかずつと待機してたんじゃないだろうな？

「……つーかあれか。もしや磯風の家が、間借りを快諾してくれてる三軒のうちの一軒なのか？」

「そのとおり！」

ハモって答える、どや顔の谷風と磯風。

まあ、確かに磯風の家なら勝手知ったる部分もあるんだが。

だからといって、さすがに若い身空の子供と二人暮らしというのは、色々あれではなからうか。

いやでも、確か磯風一人暮らしだったよな。

うーむ。

「水くさいことは言ってくれるなよ？　この磯風、提督の危機を黙ってみているような女ではない！」

「うんうん。そりや色々と思うところもあるだろうけどさ。その辺ひっくるめて、ややこしいことはゼーんぶ、この谷風さんに任せときな♪」

そう言つて磯風と谷風は、二人して俺の手を握る。

……。

あ、駄目だ。

なんかわからんが、急に来た。

涙が出てきそうになる。

「おおーっ!? なーにー? よしよしされたいの?」

「どうした? ふふふ、この磯風がいる、心配はいらない」

ちよつと泣きそうになってるのを見られたくなかつたのもあつて、思わず二人をまとめて抱きしめてしまった。

嫌がるか怒るものかと思つたが、二人は力を抜いて身体を俺に預けるように傾ける。

あー駄目だ、ほんと、駄目だわ。

こいつらはホントもう。

こんな無職の男に、どこまでも優しくしてくれるんだろうな、ほんと。

……ホントもう、こんなに優しくされちまつたら。

駄目だ駄目だと言つてるのがバカらしくなつてきたわ。

「……よしっ! すまんが谷風、今回の話は無かつたことにしてくれ」

「えー!? どうしたのさ突然?」

「なんかあれだ、ちよつとした心境の変化つてヤツだ」

「そりゃ心変わりがあつたならしょうがないけどさ……いいのかい?」

「ああ、悪いがもうちよつと、根本的なところで頑張つてみることにするわ」
そうだな、そもそもとつと就職決めりやあすむ話だ。

更新料がなんぼのもんじやいクソツタレ。

「ただまあ、そうだな。ほんと、悪いけどさ。やっぱどうしようもなくなったら、そんなきやまた頼めるかな谷風。その……磯風も」

だがやっぱり保険はかけておきたいお年頃。

だつて大人なんだもん。

我ながら情けないけどな。

「ホントかい？ いざつてときは遠慮なんかせず頼つておくれよ？ その、絶対だよ？」

「そうだ、絶対だからな？」

「あーはいはい、絶対絶対」

やたら絶対を推してくる二人。

まあ、こつちの都合で振り回すわけだからな。

絶対くらい安いもんだ、多分。

「それよりあれだ。せつかくだし飯でも食いに行くか。浦風の店で飯奢つてやる。ほら、磯風は後ろ、谷風は前、ここ、棒のところに横向きになつて座れ」

「任せろ！」

「がってん！」

自転車にまたがって手招きすると、一瞬戸惑ったものの、二人とも勢いよく飛び乗ってきた。

ちよつとバランスが悪いが、まあ子供二人くらい軽いもんだ。

だが二人とも強く掴まりすぎだ、暑い、暑いって。

はしやぐ二人を落ち着かせながら、再び夏の日射しの中を走り始める。

「あー、しかし時間的にちよつと早いか。浦風のやつ店開けてるか？」

「それなら心配ないさ。浦風にも提督の件で連絡してあるからねえ、きつと今頃、色々準備して待ってると思うよ？」

「なるほど……って。もう一軒は浦風の家だったのかよ!？」

「ちなみに両方駄目だったら、この谷風さんの家を紹介する予定だったさ！」

「なんだよ、結局全員陽炎の身内だったってことか……」

「えへへー。もしどの間借り先にするかで迷ってるってなったらさ。週替わりや、月替わりであたしら三人の家を泊まり歩いてもいいんだよお？」

「ほほう、それは名案だな！」

「それは名案……なのか？」

しかしまあ、そう言ってもらえて、改めて色々と気が楽になったな。

二人はなにが楽しいのか、名案名案と口に出しながら、お互いの手を叩いてはしゃぐ。おいバカやめろ、バランスが崩れるだろうが。

まったく、若いつてのはうらやましい。

いまが楽しくてしょうがないって感じた。

こつちは職どころか、住むところも無くなるかもしれんのに。

だがまあ、そんなときやそんなときだ。

過去には戻れないし、未来はまだ先のこと。

いまをめいっぱい楽しむってのは、大事なことだよな。

だから、まあ。

もうちよつとだけ頑張ってみようかね。

(※NO. は掲載順の番号となり、時系列とは一致しません)

薄暗い部屋、円卓を囲む二十人近い少女らしい者たちがいた。

らしいというのは、なぜか全員が顔を隠すための先の尖った白い被り物をかぶつていて、その顔がよくわからないからだ。

そして被り物の額部分にはそれぞれ番号が振つてある。

あと因みに時間軸的には、無職が谷風の店に訪れた日の深夜である。(緊急招集)

「……最近緊急招集が多いけれど、今回もこうして全員が集まってくれて嬉しく思うわええ」

淡々と、そして静かに『1』と額に書かれた数字の被り物をかぶった少女が口を開く。「さて、時間も時間だしばつさり聞いわ。14番、提督が住むところを探しているから、姉妹の家に住んでもらおうという計画。結果的に保留になったとはいえ、とつさに考えたにしては素晴らしいわ。お世辞でもなんでもなく、純粹に称賛に値する」

「えへへー」

1番の少女の言葉に、うんうんと頷く一同。

称賛を受けて、まんざらでもない様子の14番。

「ただ、聞きたいんだけど……ええ、あくまでこれは純粋な興味からよ、他意はないわ、ええ。どうして……11番や12番や、さらには14番本人の家を勧めたのかしら？」

ほら、他にあつたでしょ、例えばほら、長姉たるこの私の屋敷とか、ほら」

「いや、さすがに陽炎姉さんの屋敷に居候なんてしたら、提督が食客の用心棒みたいになつちまうよ」

「……普通にあり得そうですね」

「むしろ違和感ゼロや」

「組幹部の陽炎姉さんがかいがいしく世話をする、謎の男」

「確かに事情を知らない人が見たら」

「そうにしか見えませんね……」

「……つく、確かに組員も出入りするし……自分で言つといて無理があつたか……」

1番の家（屋敷）は部屋は腐るほどあるが、姉妹のみならず、部屋住みの組員や女中など。

言訳しようのないくらい、その関係の人たちが常駐しているところでもあつた。

項垂れる1番を尻目に、14番は話を続ける。

「ま、あとは場所だったり、宿舍や寮住まいに、アパート住まい。それに部屋が余つてな

いメンバーとかは除外になるからさ。つまりいざつてときは、谷風さんたちの家に来てもらうつてのは、しかたないよねえ〜」

それを聞いて『こんなことなら市内の中心部に、でっかい一軒家建てておけば良かったああ!』と、心の中で叫びを上げるメンバーが続出。

その様子を見て、勝ち誇る第十七駆逐隊の面々。

(※第十七駆逐隊＝浦風、磯風、浜風、谷風)

なお、どさくさに紛れ込む軍の宿舎住みの13番。

彼女は自らの提督が間借りを決めた家に引越す気満々だった。

彼女たち(第十七駆逐隊)の表情は、カーツつれ〜わ〜! 提督と同居とかつれ〜わ〜

!

毎日一緒にご飯食べたたり、おはようからお休みまで挨拶しなきゃならなくて忙しいわ〜!

とでも言わんばかりの顔である。

敗北にうちひしがれる他の面々。

だが、ここで誰かが放った、何気ない一言が空気を激変させた。

「……あれ? でも待つて。提督が住んでるところの更新が再来月ならさ、もういつそ、

それまでに家を建てちゃえばいいんじゃないの?」

衝撃、走る。

そして波紋が広がるように、姉妹たちが次々と口を開く。

「あれ、もしかしてそれアリなんじゃ?」

「いいかも、だつていつかは皆で一緒に住む場所が必要になるよね?」

「でもいま住んでる場所から離れられない子もいるんじゃないの?」

「いや、必ずしも引越す必要はないでしょ。ただそっちにも自分の部屋があるって感じだ」

「そうなるで一九部屋以上必要よね。……さすがに多くない?」

「まあ、広い土地ならいくらか当てがあるけどさ……」

「ぶつちやけ予算とか姉妹で出し合えば幾らでも用意できるよね?」

「幾ら必要ですかあ?」(本気の眼)

「ステイ、8番はお願いだからステイ」

「でもまあ無理に一九部屋以上造らなくても、四人で一部屋とかでもいっつか」

「そう考えると戦史時代みたいでなんかワクワクするね」

「でも待つて。さらに将来を見据えるなら、やっぱり一九部屋以上必要じゃない?」

「え? ……あつ」(察し)

『……』(何名かが無言で鼻血を拭う)

「その、さすがにそれはほんのちよつと早いかなーって？」

「そ、そうですね。まあ、ひとまずその計画は保留にするのがいいかと」

「……そうね、まあ、いざとなつたら部屋や家なんて幾らでも用意できるわけだし」

「提督もまだ先のことはわからないって言ってるわけだし」

「その時になつたらまた皆で話し合つたらいいよね、ね」

『ねー……』

そんなわけで、めずらしく陽炎会議は今日も平和だった。

『無職男』と『駆逐艦：天津風』

ハロー無職。

昨日意地でも職を見つけてやると決心した……のはいいが。

あいにくと今日は職業紹介所が休日だと気がつき、速攻で膝を折ってしまった。

そんな決意に水をダバダバ差された今日この頃。

夏真つ盛りな日射しに耐えかねたので、冷房代惜しさにとある場所に向かうことにする。

「うーむ」

と、いうわけで、目的地である磯風の家に行って来たわけだが。

頼みの家主である磯風は、長方形の金属箱を見つめながら唸っていた。

店に入っても気がつかないし、よっぽどな感じだな。

「なんだそれ？」

「て、提督ッ!? 昨日会ったばかりだというのにどうしたんだ? い、いや……別にいつ来てくれてもいいんだが……ああ、それよりこの金庫のことだったな。じつはこれはな

突然声をかけて驚かせてしまったせいも、妙に挙動不審気味な磯風の話の話を聞くに。どうも先代の店主の私物を整理していたところ、養母の名前が書かれたダイヤル式の小型金庫がみつかったらしい。

「養母は無駄な私物を持つような人ではなかった。だというのに、大事に保管されていた以上、なにかしら意味があるものだとは思うのだが……いかんせん中身を確かめようにも暗証番号がわからないのだ。かといって中になが入っているかわからない以上、無理にこじ開けて中のものを傷つけてしまう可能性もあるので、どうしたものかと悩んでいた」

なるほど。

捨てるに捨てられず、こじ開けるには問題があり、かといってそのまましておくのは気になってしょうがない。

そんな難物をどうしようか悩んでいたと。

見たところ四桁の簡単なダイヤル式の鍵か、これならなんとかなるかもな。

「磯風、お前誕生日はいつだ？」

「む、6月19日だが……それが？」

「ほいほい。0、6、1、9……開いたぞ」

「な？ どうしてわかったんだ!？」

「お約束というヤツがあるんだよ」

大体この手の暗証番号は、自分か身内の誕生日という場合が多い。

まあ、さすがに一発で開くとは思わなかったが。

あと、そこはかたなく磯風が、とても大事にされていた名残を垣間見てしまった。

「さてさて、中身はなになつと……長方形の金属缶か。またそれっぽいのが出てきたな」

金庫を開けて出てきたのは、薄いスポンジに包まれた金属の缶。

金属の箱の中に金属の缶とは、えらい嚴重だな。

「早く開けてみてくれ、提督」

「わかった、わかったから落ち着け」

後ろから見ていた磯風が、背中に乗っかかって急かしてくる。

なんだかんだで磯風も、陽炎姉妹の中では結構胸があるんだよな。

なんて雑念を払いながら、特に留め具がついていない缶の蓋を開ける。

中には除湿剤の小袋と、衝撃吸収材のぶちぶちというか、気泡緩衝材にくるまれたなにか。

包んでいたシートを剥がすと、中から黒い四角形の物体があらわれた。

結構でかいな、土産物のチョコレートの箱くらいある。

「それは……なんだ？」

「わからん……いや、まて。これたぶんなんかの映像記録媒体だわ、見たことないタイプだけど、ここの透明な部分から、中に巻かれたテープみたいなのが見えるだろ」

「むむう……この手のものには疎くてな。つまりてればじよんに映る、動く写真のヤツだな」

「まあ、一応その認識で間違っていないが」

やたら言い方が古風だなオイ。

だけど思い返せば磯風の家にはテレビがなかったな。

それに養父母もお年寄りだったみたいだし、しようがないのか。

「しかし金庫に入ってるテープって、なんか厄ネタの気配しかないんだが……」

「ふむ、なにも写ってない可能性はないのだろうか？」

「いや、俺もあんまり詳しくないんだが、ここのところが折れてるのわかるか？」

外装の隅っこにある、謎の四角形のへこみを指さす。

そこには、へこみにはまっていた部分を、折って取り除かれた痕跡があった。

「ああ、確かに」

「これたぶん、映像を撮って上書きしないようにするための、安全装置みたいなもんだと

思うわ。つまりこれが折れてるってことは、消したくないなにかが写ってるはずだ、おそろくだけどな」

「ふむ……さすがに養母の持ち物だったのなら、そこまで変なものも写ってるとは思えないが。もしかしたら養父母の結婚式かなにかを写したテープなのかもしれない。養父は恥ずかしがり屋なところがあつたからな、捨てられないように養母が隠した可能性がある」

「どうだろうな、大人は色々と秘密を持ちたがるもんだ。」

と、口に出しかけたが、グツと飲み込む。

まあいい人みたいだったから、確かにその通りの可能性も高い。

もつともいくら恥ずかしくても、金庫にテープを隠すのはどうかと思うが。

「しかし、こうなると中身を確かめたくなくてくるのが人のサガだよな」

「うぬ、同感だ」

だが問題は、この見た事もない種類のテープを再生するための機材。

当然それが必要になるわけだが、じゃあどこで探せばいいかというところ……。

「まあ、あそこに行くしかかないか」

「ん？」

磯風がなんのことだというふうな首をかしげる。

そりやまあ、あそこだよ、あそこ。



はい、というわけでやって来ました。

艦夢守市有数どころか、世界有数の電気街。

電気機器やらその手のパーツは、ここに無いなら世界のどこにもないと誰もが口にする場所。

そう、その街の名前はツ!!

「夏葉原にようこそだニヤン!」

そう、夏葉原だニヤン。

それがこの街の名前である。

「よかつたらお店に寄っていつてくださいニヤン!」

「あ、どうも……」

駅の出口でメイドに差し出されたチラシを、思わず受け取る。

なんというか、まあ、なぜかもらった俺が恥ずかしい。

あとあまり詳しくないが、音楽やら漫画やら映像やら芸能やらの文化も盛んらしい。

さつきみたいにネコ耳付けてメイド服を着た、メイド喫茶とかいう店の客引きがあちこちにいるし、色々と盛んなだろう、うん。

ぶつちやけ両方ともあまり興味が無いから、足を運ぶ機会もなかったんだが。

じつは一回だけ秋雲の付き合いで、この街を回ったことがあったりする。

なんでも欲しい特殊な本があるとかで、街のあちこちにある色んな古本屋？

を、渡り歩いたんだが。

色々と口と口できないものもあつたが、それを探す途中に昔懐かしの初代海面ライダーのファンアートなんかを見られたり。

目的の物を、意地でも見つけてやろうって気になって、宝探しをしているようで楽しかった。

その時はそれ関係の店しか回れなかったが、機会があればまた来てみたかったんだよな。

なので、目的のものが早々に見つかったなら、色々と見て回りたい。

……まあ、とにかくだ。

パツと見渡すだけでも、幾つか目に入る家電量販店。

そこに入って、片っ端から聞いて回れば手がかりが掴めるはずだ。

ちなみに磯風はというと、午後から商談が入っていたらしく、一緒にはこれなかった。

商談をキャンセルしてでもついてこようとしたんだが、責任を持って俺が探してくるということ、なんとか説得に成功。

確かに世話になった養親の物だから、無理してでもつてのはわかるが、さすがにな。

後日改めて一緒に回るといふ手もあったが、俺もいつまでも暇とは限らない。

そうとも、明日突然職が決まる可能性だつてあるわけだ。

……あるわけなんだよ。

というわけで、さつさと再生用の機材を見つけて手に入れなければ。

なにが写つてるかも気になるが、こう、手がかりを探して街をまわるといふ行為そのものがどこか新鮮で楽しくも感じられる。

どうせすぐ見つかるだろうが、ちよつと本気出して探してやろうじゃないの。

そんなわけで、まずは一番手前の、あの店に入って聞いてみるか——

「な、なんの成果も得られなかった……だとう？」

数店舗どころか十店舗以上聞いて回ったわけだが。

全ての店で、こんなテープは見ることがないと言われてしまった。

どうやらこれは、相当な骨董品の可能性が出てきたな。

実際骨董品屋にあったものだし。

しかし、そうなるかどうかのものか。

下手するところの街で探すより、メーカーとかに問い合わせた方がいいのか？

いやでも、一応それらしい「ロゴマーク」はあるが、これがどのメーカーのロゴかもわからん。

最悪既に潰れたメーカーのとかだったらお手上げだ。

というか、ここに無いなら世界中どこ探したって無いって自分で言ったよオイ。

途方に暮れた俺は、とにかく一服しようと思煙所を見つけて、よっこらせつくすと口にしなから腰を落ち着ける。

こりやまいったな、どうしたもんか。

家電量販店とはいえ、この街の店員でも見当が付かないようなものを、俺が特定できるのか？

「うーむ……む？」

ライターを取り出すために、ポケットをまさぐったところ、クシヤツとした感触が。取り出すと、さつき配ってもらったチラシと一緒に、磯風から渡されたメモが出てきた。

ああ、そういえば困ったらこの場所に行くといいつて、磯風に手渡されたんだった。なんでも磯風というか、陽炎姉妹の関係者が働いている場所があるのかなんとか。

メモを開いてみると、簡単な地図と目的地と思われるビル名。

まさかこんな難航するとは思ってなかったってのもあるが。

メモをもらったの、完全に頭から抜け落ちてたな。

ワラにも縋る……とはちよつと違うが。

なんの手がかりも無い以上、行ってみるか。

そういうわけで、えつちらおつちらと徒歩で移動することしばらく。

歩行者天国の通りがある、そこそこ大きな十階建てくらいのビルを見つけた。

ここだと思っただが、ビル看板を見るにどの階にもあれだ、いろんな喫茶店が入ってるな。

一階は自称本格メイド喫茶。

二階はアニマルメイド喫茶。

三階はデレツンメイド喫茶。

四階は連装砲ちやんカフェ。

五階は……って、なんだよ、連装砲ちやんカフェって。

まあともかく五階は多国籍コスプレ喫茶で、六階は普通の事務所みたいだ。

一階から六階は一階層に一フロアの造りで、それより上は住居スペースっぽい。

例のメモに書いてあるのは六階。

なぜだか命拾いした気分。

エレベーターもあるが、多少怖いもの見たさもあつて、表階段を上ることにする。

外から見る限り、どの店も結構賑わってる感じだった。

四階に関してはどうも会員制らしく、外からはよく見えなかったが。

思ったより息が切れていることに、己の加齢を感じて若干へこむも、ようやく六階に到着。

一呼吸置いて息を整え、特になんの看板も掲げられていないフロアの扉の前に立つ。

ガラス扉だが、中はよく見えない。

おそらく四階と同じように、外から中が見えないようなフィルムが貼られてるな。

うーむ、これ、呼び鈴も無いみたいだし、開けていいものなのだろうか。

数秒ほど悩んだが、まあ、なんかあったら素直に謝ろう。

そんなわけで、軽くノックをしてからゆっくりと扉を開く。

瞬間、左右にずらっと並んだ、多種多様なメイドたちの視線が突き刺さった。

『無職男』と『駆逐艦：天津風』

『お帰りなさいませ、ご主人様!!』

我が輩は無職である。

人を雇う余裕は当然無い。

だというのに、ネコ耳やらメイド服やら学生服やら民族衣装っぽい格好をした女性た

ちに、ご主人様呼ばわりされて出迎えられてしまった。

十人ほどだろうか、左右にわかれて入り口から平行にずらりと並んでいる。

「……すみません、店まちがえまし——」

「遅かったじゃない!!」

瞬時に防衛本能が働き、謝罪と同時に退散しようとしたところで、聞き覚えのある声。左右に並ぶメイドたちの正面中央から現われたのは、背が低くて長い銀髪的美少女。少女は、果たしてそれはメイド服なのか？ と、問い詰めたくなるレベルの短いスカートをはひらひらとさせながら、ドヤツとした表情でポーズを決める。

「お、お前は……アマツン!!」

「そう、わたしはアマツン……って、天津風よ!？」
あまつかぜ

知ってる知ってる。

けど、なんとなく、お約束かなと。

「って、なんでこんなところにいるんだ?」

「なんでって、ここで働いてるからに決まってるじゃない。それよりいつまで突っ立てるつもり? ほら、こっちに来なさい」

陽炎姉妹の一人である天津風は、そう言っただけの手を取り歩き出す。

そして相変わらず君ら姉妹は力が強いな。

ここで働いてると自称する、ちっこい天津風に引きずられる無職の俺。

その後ろをぞろぞろとついてくるのは、多種多様のメイド服をきた従業員たち。いったいなんなんだろうか、この状況は。

そのまま応接らしき場所に連れ込まれた俺は、二人がけのソファーに座らさせられた。

「それで、磯風から電話で大体の話は聞いたけど。なにを探してるの？」

すくとソファーの隣に座った天津風が、すすすつと距離を詰めて体を密着させてくる。

近いな。というかスカートの短すぎて中が見えないか心配になる。

「お、おう、これなんだが……」

心を落ち着け、鞆から金属缶に入ったテープを取りだし、テーブルの上に置く。

天津風は「ふーん」とテープをひとしきり見た後、メイドの一人からカメラを受け取ると、パシヤリと一枚写真をとった。

しばらく待つと、カメラから一枚の写真が出てくる。

おおう、まさかそれはインスタントカメラという、撮ったその場で写真として出てくる特殊なカメラじゃないのかね。

なぜメイド喫茶にそんなものがあるのか、謎は尽きない。

(※一部のメイド喫茶にはメイドさんと世界で一枚だけの記念写真を撮るサービスがあり、備品としてインスタントカメラが置いてあります、たぶん)

出来上がった写真を確認した後、天津風は周りのメイドたちに目配せをして頷く。するとメイドたちは、いつせいにテープの写真を撮り始めた。

いや、どきくさに紛れてなんか俺と天津風の写真も撮られてないか？

そんなこんなで、あつというまにテープを写した百枚ほどの写真が出来あがる。

「それじゃあ貴方たち。手分けして聞き込みしてきてくれる？」

『了解です社長!!』

元氣よく返事をして、外に出て行くメイドたち。

え、なんなの、まったく展開について行けないんだが。

いや、それより……社長？

「そういうわけで、もしこの街にあるなら、あの子たちが情報を持って帰ってきてくれるだろうから、」あなた「はここでゆつくり待つてなさい。じゃあちよつと着替えてくるわ、汗臭いのは嫌なの」

「あ、ああ」

色々と聞きたいことがあるのだが、天津風は立ち上がって部屋を出て行く。

もしかして俺の汗のにおいがうつったのか、確かに炎天下で歩き回ったからな。

クンクンと自分の匂いを嗅いでみる、が、正直よくわからん。

なんて馬鹿なことをしていると、どこからか視線を感じた。

見ると部屋に残された数名のメイド服の従業員たちが、こつちをガン見している。

そのなかでもウエーブのかかった長い茶色髪の女と、金色の髪を三つ編みにしてアツプにまとめた女は、かなり興味津々という感じ。

茶髪の方は、少女漫画の表紙にでも出てきそうな見た目だな、ゆるふわ系というヤツだろうか。

対照的に金髪の方は、キリツとした感じというか、なんか、嫌な顔してなんかしてくるのが似合いそうというか……なに考えてんだ俺は。

しかし、なんとなく雰囲気でわかるが、この子ら外国人だよな。

……は、早く帰ってきてくれアマツン、俺を一人にしないでくれ。

ぶつちやけ空気がもたない。

「あのく、ちよつと聞いてもいいですかあ〜」

「その、貴方もしかして社長の特別な人なの？」

なんて祈っていたら、その二人から矢継ぎ早に質問が。

「社長というのが、その、アマツンのことを言っているなら……どうなんだろうな、あいつの姉とは仲良くさせてもらってるが。あいつ自身にとって俺がどうなのかは正直よ

くわからん。なんでだ？」

「え、だつて、ボスが私たちに使うのは『貴方』だけど、おにいさんを呼ぶときは『あなた』じゃないですかあ」

「そう！ とても特別な感じがするわ！」

「わかるわかる」

悪いが俺にはわからない。

「待たせたかしら？」

と、謎の女子トークの渦潮に吞まれかけていたところに救いの声。

「おう、やつと戻つて……つて、なんというか、す、すごい格好だな」

戻ってきた天津風は、なんというか。

肌が透けて見えるような薄い黒のワンピース姿だった。

おまけになんだ、ガーターベルトというやつと、太ももから肩にかけて伸びた下着代わりっぽい紐が、服が僅かに透けていることも相まって見えてしまっている。

一言で言つてその……破廉恥だな。

「そ、そう？、これくらい普通よ！」

普通、普通とはいつたい。

もしかして天津風は家族を人質とかに取られて、この格好を強要されてるのではない

だろうか。

「社長！ さすがにその戦装束は狙いすぎ！ もしかしてこのまま……や、やっぱいい！」

「さてはここで勝負を決める気!? 私たち外に出ていた方がいいかしら!?」

「な、なに言ってるのよ!? デロもパースも、こ、今月の給料減らすわよ!?」

「なつ、今月はマジカルキヨシーの小説版とコミック版、そしてオータム先生の新刊が四冊もでるんですよ!? 私とデロイテルがなんのために、はるばる国外からこの街にやってきたと思ってるんですか!」

「やっぱいい! ただでさえコスプレ衣装に使いすぎてカツカツなのに、これ以上お給料へったら夏イベの那珂ちゃんとうーぴよんのライブチケット買えないじゃないですか!?!」

「この異文化デカルチャーコンビ! そもそもあんたらがもうちよつとやる気出してくれば Big Slope やあの五十鈴なんかにかいかい顔させないし、店も増やせて売り上げも上がって、給料も上げられるでしょ! せめてあんたらもつとシフトに入りなさいよ!」

「いや、さすがに業界のフィクサー五十鈴とやり合うのは無謀です。似たような髪型とキャラの社長でも、色々サイズが違いますし」

「そうそう、社長は夏葉原の顔役兼マスコットキャラとして、私たちとおもしろおかしくやってるほうがいいですよ」

「だ、誰がマスコットキャラよ!!」

すごい服装に替えてきたかと思つたら、俺そつちのけで従業員のメイド二人とじゃれ合う? 天津風。なんだ、いつたい、俺は、どうすれば、いいんだ。

「あ、あの……」

「ん? な、なんだ?」

あんまり目立たなかつたが、部屋に残っていたメイドの一人。

少し地味目のメイド従業員が声をかけてきた。

なんだろう、学生のバイトなのか、ずいぶんと若いような気がするが。

まあ、それ言い出したら天津風はどうなんだという話だが。

「えっと、その。今日は来てくださってありがとうございます。社長、今日はご主人様がお来りかもつて、凄く機嫌がよくて……えっと、連絡があつてからすぐ私たち集められて、その……」

一生懸命なにかを伝えようと頑張るメイド。

が、早口なうえ話の内容がまとまってなくて、なにが言いたいのかわらん。

なんというか、色々と不器用そうで幸薄そうな子だな。

というか、いまだにメイド姿の人間と話すという非日常に適応できない。

「あの二人みたいな人たちもいますが。その、社長は行く当てのない私みたいなのが働ける場所を作ってくれて……あ、このビルに入ってる喫茶店は全部社長が考えた店で、えつと、すごく感謝してらんです。私も空いた時間に勉強見てもらって、えつと、住むところとかも用意してくれたり……私、社長には返しきれない恩があつて、そんな子がここには、いっぱいいるんです。だからその、社長が今日みんなを呼んで、力を貸して欲しいって、もてなしたい人がいるって言ってくれて。みんなすごく張り切つててですね。だから、今日来てくれてありがとうございます」

早口でちゃんと聞きとれなかったが、なんか重いことを聞いてしまった気が。

というかたぶんこの子、感情が溢れてテンパツてる気配がする。

あれか、推測するに天津風は、昨今流行の学生経営者ということなのだろうか。

そしてこの子は天津風への感謝というか、すごさを伝えようとしてくれているのはわかかった。

大丈夫だ、知ってるよ。

だって陽炎の妹だからな。

そもそも、ちゃんと働いてる時点で、君も俺よりすごいぞ。（無職的思考）

「まあ、お礼をいわれるようなことでもないが……アイツはその大事なゲストを放置し

てなにをやつてるんだ……」

視線を戻すと、なぜかとつくみあい発展している天津風と二人のメイド。

というかおいおい、そんな服で暴れたらその、あれだ、色々見えすぎてアカンだろ。

「おい……おいつ！ 天津風！」

「ツ!! な、なにかしら?」

さすがに見てられなかったので、驚かせて悪いが大きい声で名前を呼ぶ。

と、天津風はやけに驚いた表情を浮かべた。

あれ、そこまでデカイ声出したっけか。

いや、それよりもだ。

「えーつとだな、その格好も悪くないんだが、なんだ、よかつたらこの子みたいな服も見たいなと……」

着替えてもらう為の理由が思い浮かばなかったので、とつさにさつきまで話しかけてくれてた地味目のメイドの服装を指さす。

正直、現状の服装で動かれるとその、目のやり場に困りすぎる。

「えっ……そ、そう? というか、そっち系の衣装が好みだったのね……そ、そんなにお願いされたらその、着替えてあげようかしら。つて、べ、別にあんたのために着替えてあげるわけじゃないんだからね!!」

「そうだよ、お前のために言ってるんだよ。（素）

「で、でました。数多のご主人様たちが家を抵当に入れてでも見たいと願いながらも、去年を境に店には滅多にでなくなったが故に幻となった社長のツンデレ対応!!」

「ふうん、そしてこのご主人様は正統派メイド服が好みと、なるほど、悪くないわね」「そしてほうほう、その名前で呼んじやってもオツケーか、なるほどやっばーい！」

なんか後ろの方で他のメイドたちがなんか言ってるが、まあ。

その服はせめて海に行ったときとかにしてくれ、うん。



「でだ。あの子に聞いたけど、この下？　の店を経営してるんだってな」

「えっと、まあね。別に大したことじゃないわよ」

落ちて着いた黒のロングスカートと、レースの入った白いエプロンを組み合わせたメイド服に着替えた天津風が、ふふんと得意げな表情を浮かべながら答える。

まあ、珍しい格好には違いないが、さっきの服装よりは色々と目に優しい。

少なくともこうして落ち着いてしゃべれるからな。

あと余談だが、残っていたメイドたちは、天津風によって外に追い出された。

追い出される間際の、メイドたちのごゆっくりという言葉がなぜか耳に残ったが、まあ。

言われんでも疲れたから、ゆっくりさせてもらうことにする。

「いや、大したことだろ、学生で経営者とかどんだけすごいんだよ。だけどなんだ、大丈夫なのか色々。普通の経営はともかく、子供が社長とかやったらなめられて、食べ物にしようとして変なヤツとかやって来たりするんじゃないのか？」

「大丈夫よ、男手がないわけじゃないし。そもそもこの店……というかこの会社、霧島組の傘下だから」

……とんでもない名前が出てきたなオイ。

確かに『霧島組』は一応表向きは普通の会社だ。

が、ぶっちゃけ金剛連合会という裏社会組織の一角でもある。

この街に住むにあたって、最初に覚えておくべき重要事項。

その中に『金剛連合会の関係者には絶対喧嘩を売るな』というのがあったな。

普通にそれを、入社後の研修で教わったわ。

おまけに外地と違って、この街の裏社会組織というか金剛連合会は、表の行政や司法組織とガツツリ協力関係にある。

公認のズブズブ関係である、新聞とかテレビで普通に触れられるレベルで。

まあ、だからこそ外地より治安が良い部分もあるわけだが。

その霧島組がバックいるとかなら、そりや二周回って安心だろうけどさ。

しかし、そんな店を天津風が経営してるとてのはなんというか。

色々あるってレベルじゃなく色々ありそうなわけだが。

「……そうか。なら安心なんだろうが、まあ、なんか困ったことがあつたら言ってくれ。

今回のこともあるし、なんかできることは手伝うわ」

「えっ!? そ、そんなの、まあ、うん……ありがとう」

そう言うとなぜか顔を真っ赤にして、顔を背ける天津風。

あれ、今頭のとこからハート型の煙が出なかつたか？

いや、さすがに気のせいかな。

「……あの、ね、提督もその……なにかして欲しいこととか、あるかしら?」

「は? して欲しいこと?」

「ほら、えっと、今の私はメイドなわけで、その……ご、ご主人様にご奉仕するのが使命

なわけ、なのよね……」

「ご奉仕、ご奉仕とな。」

「い、いや別に——」

「そうだ浜風! 浜風は膝枕してあげたって自慢してたわね! うん、ならこの天津風

がしない訳にはいかないわ！」

「はっ。」

なぜその情報が漏れているのかも、なぜその結論にいたったのかも、俺には一ミリもわからないわけだが。

それが正義と疑われない様子で断言した天津風は、こつちを見ながら照れくさそうに自分の膝をポンポンと叩く。

……これはいったいどういう流れなんだろうか。

「ええい、じれったいわねー」

アホみたいに停止していた俺にしびれを切らしたのか。

天津風は俺の首根っこを両手で掴み、自分の太ももに押しつける。

ゴツンと、鼻を天津風の太もも部分の骨っぽいのにぶつけて、痛みが走る。

「んっふうっ！」

「ど、どうかしらっ？」

とりあえず鼻が痛い、のと、息ができない。

だがメイド服のロングスカートの生地がいたためか、顔を擦る感触は悪くないような。

が、息をするたびになんだ、密着してるせいで色々と吸い込んでしまっている気が。

「そ、そうだついでに耳掃除もしてあげるわー」

先ほどからこちらの返事を一切聞かず、流れるように次から次へと行動を起こす天津風。

まって、せめて鼻の痛みが引くまで落ち着かせてくれ。

「ほらー！ 暴れないで！」

頭をもつてぐるつと向きを変えられる。

と、今度は天津風の太ももから腹に顔が押し当てられた。

さすがに色々急すぎるので、文句の一つでも言つてやろうと思つたんだが。

呼吸するたびに、へこんだり膨らんだりする、天津風の腹の動きを感じていると、気分と鼻の痛みが落ち着いてきた。

まあ、なんか楽しそうだし、したいようにさせてやるか。

それに、あー、その、なんだ。

落ち着いてみると、そう悪くないな。

天津風の体温を感じながら、身を任せて、耳を掃除してもらおう、か。

なんというか、体験できなかった青春のイベントをまたしても回収してしまつたよう
な。

そもそも、誰かに耳かきしてもらうなんざ……あれ。

もしかして生まれて初めてかもしれん。

「どう？ 気持ちいいかしら？」

「ああ……思ったより悪くな——」

「社長！ 写真のやつを知ってるって人、見つけました！」

と、言いかけたところで飛び込んできたのは、先ほどの地味なメイド姿の従業員。

それに驚いた天津風が、ブスリと俺の耳の奥に耳かきを差し込む。

ひぎやあ。



飛び込んできたメイドに詳しい情報を聞き、地味に痛む耳を押さえながら外に出た後。

なぜか機嫌の悪い天津風に手を引かれ、とあるビルに連れてこられた。

「(ト)ト(ト)ト」

「このビルの地下にある店に、映像機器関連に詳しい店主がいるらしいわ。その店主に写真を見せたら、すぐに現物を持ってくるようにって言われたみたい」

「なるほど」

ビルの横にあつた階段を使つて地下に降りると、「ニシウラ電気」と書かれた店の入り口らしき鉄のドアが。

その扉を開けると、中は倉庫なんだか店なんだかよくわからない感じの場所だった。店内には頑丈そうな棚がずらつとならび、値札のない機械が山と並べられている。

なんだろ、この最高に「Welcome to Underground」つて感じの場所は。

さらにそのアンダーグラウンドな店の奥に進むと、カウンターなのか生息地なのかよくわからないごちゃつとした場所に、仙人かよとつっこみたくなるような、白い髭と髪の毛を伸ばした小さいじいさんがいた。

「遅いぞー。は、早く見せてくれー」

俺たちを見るや、くわつと目を開いて、しゃがれた声で叫ぶじいさん。

おいおい、すぐくそれっぽいけど、ホントに大丈夫か？

一緒に来ていた天津風に視線を送ると、こくりと頷く。

どうやらこのじいさんで間違いないようである。

鞆から取り出したテープをじいさんの前に置く。

じいさんはそれをじつと見つめた後、プルプルと手をふるわせながらテープを持ち上げた。

「写真を見たときはまさかと思つたが……間違いない。こりや百年前に夕張重工が開発した映像記録媒体のテープじゃ。まさか、生きて本物を見られる日が来るとは……」

「ひゃ、百!?!」

「その昔……夕張重工は、千年保存できる記録媒体の開発に挑戦したことがあつたんじゃないよ」

「せ、千年!?!」

とんでもないワードが飛び出したな。

百年前つてワードだけでもやばいのに、まさか千年とは。

マジで骨董品じゃねえか。

「うむ……かつての対深海棲艦戦争で、戦史時代前の映像記録がごっそりと失われた教訓もあつてな。艦連は長期間保存できる強靱な記録媒体の開発を、夕張重工とアカシに依頼したんじゃない。最終的にはアカシが鉱石を使った記録媒体を開発して採用されたんじゃないが。このテープはその開発競争で夕張重工側が開発した映像記録媒体じゃよ……このマークはそのプロジェクトのマークじゃな」

見たこともないロゴマークは、企業ロゴじゃなくて開発ロゴだったわけか。

「マジか……いや、それよりもだ、これを再生する機器とかつてここで手に入るか?」

「馬鹿言え、ワシですらこのテープを初めて見るというのに、再生機器なんぞあるわけな

「いじやろー！」

「おいおい、じゃあどこに行けば手に入るんだよ……」

「うーむ、一般に出回ったものでもないし、そこらを探したところで見つけることは不可能じやろうな。出資者なんぞにサンプルを提供した可能性もあるじやろうが……百年も前となると、世代も変わるじやろうし、それがなにかを知らない人間にとってはがらくたじゃ。まともに動くものが残ってたら、そりやもう奇跡じゃよ……」

「つまりなんだ、このテープの中の映像を見るのは難しいってことか」

「北の艦連指定都市にある、夕張重工の本社にでも行けばあるかもしれないが……艦連との契約があるかもしれないし、そこまで行っても機材を売ってくれる、いや、使わせてもらえる可能性すら低いじやろうな……」

おうふ、ナンテコツタイ。

すまん磯風、今日のところ、俺にできるのはどうやらここまでみたいだわ。



「ごめんなさい、私、役に立てなかつたわね……」

いつまでもテープを手放さないじいさんにラリアット決めて、外に出て歩くことしば

らく。

前を歩いていて天津風が、申し訳なきそうにそう眩いた。

「ん、ああ、気にすることないぞ。というか、俺一人だったらこのテープがなんなのかすらわからなかったんだ。それだけでも十分すぎるほどだった」

「でも、私……せつかくあなたが頼ってくれたのに……」

「らしくないな、そんなんじゃないだろう、えっと、あの地味なメイドの子が言ってたんだ、伝説のツンデレの面目丸つぶれだろ」

「だ、誰がツンデレよ！ 大体あなた来るの遅すぎなのよ！ いつとくけど私もあの子たちもそんなに安い女じゃないんだからね！ それこそあなたの生涯賃金何十回分の

顔を真っ赤にして、流れるように罵倒してくる天津風。

うむうむ、元気が出てきたようだなによりだ。

まあ、実際生涯賃金何回分だろうな。（地味にダメージ）

それに、今日この街に来てわかったことも多い。

例えば、この街では天津風が人気者だつてことがわかったこととかな。

「あつ、社長！ おつかれさまでーっす！」

「はいはい、お疲れ様。暑いんだからちゃんと水分とるのよ」

「あ、社長さんがデートしてる!？」

「でででででで、デートじゃないわよ! ほ、ホントよ!？」

「シヤチョー、イイブツ、ハイッテルヨー」

「あー、秋雲が欲しがってた戦史時代前のアニメータ、ホントに復元できたんだ……あとでうちに持ってきて」

「あたらしいデツキ組んだから相手してくれよ社長!」

「そういうのはまず、うちの下っ端たちに勝つてから言いなさい!」

こんな感じで、街を歩いていると、沢山のやつらが天津風に話しかけてくる。

特に部下らしき客引きのメイドと話している様子は、とても堂々としたもんだ。

まぶしいね、まったく。

「なあ、また今度この街に来るからさ。そんなときや色々案内してくれないか?」

「え? あつ、そうね。あなた一人じゃすぐに迷子になるだろうから、しかたないわね

……もう! しょうがないから、わ、私がいつでも案内してあげてもいいんだからね!!」

おお、まるで流れるようなツンとデレだな。

美少女のツンデレってヤツはほんと、絵になるもんだ。

しかし、やはりテープの件に関しては、悔しいものがある。

百年前の映像が写っているかもしれないテープ。

磯風の養親がなんの目的で、しかもどうやって撮ったのかすらわからない、謎だらけのテープ。

こんなん普通誰でも興味がわくだろう。

まあ、宝箱を開けて中身がしょぼかった、なんてこともあるし。

それならどんなものが写ってるのか、ずっと想像し続けるといった楽しみ方もある。

……と、言っではみるものの、やっぱなにが写ってるのか見てみたかったな。

— エピローグ —

「スマン磯風、再生に使う機器の名前はわかったんだが、機器そのものが手に入らなかった」

「ああ、気にしてくれるな提督」

「あ、提督お帰りー」

磯風の家に戻ると、なぜか陽炎もいた。

いや、まあ、よく考えたらいても全然おかしくないんだが。

「へー、それが例のテープ?」

「ああ、どこまで聞いてるか知らんが、磯風から聞いたならそのテープだ」

俺が手に持っているテープを、陽炎は興味深そうにじつと見つめる。

「なんだなんだ、もしかしてこういうの好きなのか?」

「いや、ここにあるロゴマーク、どつかで見たことあるような……って、あ、これ知り合
いの屋敷にあるテレビに付いてたヤツだ」

「は?」

なにその情報、聞いてない。



「で、それが言ってたテープかしら?」

「……本当に金剛さんも一緒に見るんですか?」

豪華な洋室で、なんだかともなくてもなくえらそうな女と陽炎が話している。

というかたぶんこの女、金剛連合会の組長の艦娘だよな。

新聞なんかで見たことはあるが、さすがに実物にお目にかかるのははじめてだ。

外地のとはかなり毛色が違うとはいえ、その筋の人間には変わりないので、さすがに緊張する。

おまけに陽炎には、なにか聞かれない限り極力言葉を発しないで欲しいと、何度も念押しされたからな。

今ならそう念押しされた理由がわかるわ。

下手なこと言えんオーラすごい、組長やっぱーい。(デロイテル語)

そもそも、なんでその筋の、さらにその親分の屋敷に俺はいるんだ？

確かあの後、陽炎はどこかに電話をかけて

『あ、霧島さん……はい、はい……じつは折り入ってお願いが……はい。いえ、個人的なお願いです、はい。実は金剛さんにお問い合わせ……いえ、金剛さんのお屋敷の一室にあったテレビのことで、はい……』

という感じの会話をしたのは覚えているが。

そこからトントン拍子で話が進み、なぜかこんなところに。

いや、この女が陽炎の親の親類で、テープを再生できる機器がこの屋敷にあるからだというの、陽炎にちゃんと説明してもらったわけだが。

ただ磯風はともかく、まさか俺も一緒に来ることになるとは思わなかったわけで。チラリと組長の女を見る。

雰囲気はおつかないが、まあ、普通に美人の女にしか見えん。

が、確か見た目通りの年齢じゃないんだよな、艦娘つて。

そもそも艦娘とか人間とか以前に、相手の立場がでかすぎる。

怖いもの知らずの十代だった頃ならともかく、さすがに分別がついてしまうと、おっかなくて金玉ちぢむわ。

つまり俺にできるのは、陽炎が言ってくれたように置物に徹することだけだ、が。

身内、金剛連合会の関係者の身内、か……。

余計なお世話かも知れんし、俺が出る幕じやないかも知れんが……クソ。

もしこいつら姉妹がなにか事情を抱えてるってんなら、なんとかしてやらないと。

「貴方も知ってるでしょ、あまり私……金剛の立場っていうのはね、貸しや借りを作るわけにはいかないの。だから、あくまで百年近く前の映像に興味が出たから、機器を貸すことを許したってことにする必要があるのよ。いいから、さつさとそのテープを貸しなさい」

「はい、はい迷惑おかけします……」

などと俺が自問自答を繰り返してる間に話がまとまったらしく。

テープを受け取った組長の女は、テレビと再生機器がセットになった機材にテープを入れ、再生ボタンを押す。

テープを飲み込む機械音がした後、画面には『再生』の文字が表示された。しかし、本当に百年前のテレビなのか、これ。

まったくよどみなく動いてるし、外装も綺麗で新品みたいだわ。

さすが、千年を想定されて造られただけあるな。

なんて感動していると、画面に青空が映った。

真つ青な、雲一つない青空。

おそらく、百年前の空なのだろう。

映像は大昔のものであるにもかかわらず、とても鮮明だ。

画面が切り替わる。

映ったのはどこかの港の風景。

行き交う船に、カモメ、そして道行く誰かたちの姿。

「これ艦夢守市の港じゃない?」

「む、確かにどこか面影がある」

「しっ、黙ってみていなさい」

「あ、はい」

なぜか親分の女は余裕の無い声色で陽炎たちを叱り、その映像を食い入るように見つめる。

何度か画面が切り替わり、似たような街の色々な風景が映し出された。

やがて、画面に海を背景にして、三人の巫女服のような姿の女たちが映る。

「え？」

陽炎か磯風か、それとも組長の女かはわからないが、誰かが驚きの声を発した。

当然だが機械はそれに構うことなく、映像を流し続ける。

『あく、テストテスト、これ、ちゃんと撮れてるんデスカ？ えつと、み、皆サーンって、ちよ、笑わないでクダサーイ！』

『なに言ってるんですか、貴方はもう私たちのお姉さまなんですから。しっかり私たちの名前を呼んでくれないと、おかしくて笑ってしまいます』

『そうですよ、金剛お姉さま♪ 呼び捨てにしていただけでも榛名は大丈夫です』

『うー、やつぱり恥ずかしいデース！』

『はいはい、マイクチェックはもう大丈夫ですから、そろそろ始めましょう』

『それではこれから、私たちのお姉さまが、未来のお姉さまに向けてメッセージを送ります』

『未来のお姉さま、気合い、入れて、見てくださいいね！』

画面に映る三人の女たちは、幸せそうに笑っている。恐らくその笑顔は、撮影をしている相手に向けられているのだろう。

画面が切り替わる。

映ったのは先ほどより海に近い場所の風景。

そこに立っているのは、どこかで見たことのある女。

ああ、これは……。

チラリと横を見ると、画面に映っている女と同じ顔の女が、食い入るように画面を見ている。

『えっと、未来のワタシ、お久しぶり？ 今のワタシデース』

先ほどの女たちが着ていたのと似た服装の女が、くるりと回る。

着慣れていない服を着て戸惑っているようにも見えた。

『……これ、やっぱり照れマース』

女たちの笑い声が響いた。

画面には映っていないが、恐らく先ほどの女たちの笑い声だろう。

画面が切り替わる。

映ったのは、品のある内装の寝室。

ベッドで寝ていた女が起き上がる。

そしてカメラの方向に顔を向け、しゃべりはじめる。

『おはようございます、未来のワタシ。よく眠れましたか？ アナタが見てるのは、アナタから見て何日前の……今日デスカ？』

画面が切り替わる。

室内をゆっくりと写しながら、女が喋る。

『未来のワタシなら知ってると思いますが、今のワタシはアナタに聞きたいことがあります。マース……ワタシは今……一人ですか？』

その言葉を聞いて、陽炎に磯風、そして組長の女がぴくりと震えたのがわかった。

おそらくだが、その質問は彼女たちにとって、とても意味のあるもの……なぜかそう感じた。

『それとも貴方の隣にはステキなヒトていとくがいますか？ まあ、ワタシのことですから、例えば見つけられてなくても、きっと楽しくやっつてるに決まってるデース！』

画面が切り替わる。

映し出されるのは、変わらず寝室の風景。

『でも、きつと、もしかしたら。未来のワタシはそのことで落ち込んでいるかも知れませ
んネ……でも安心するデス、そんなアナタを、ワタシが応援してあげマース』

画面が切り替わる。

映っているのは、草原に立つチアガール姿の女。

手にはチアガールがよく使用する、フサフサの玉。

『では、未来のアタシに向けて、エールを送りマース！』

女ははつらつとした表情を浮かべ、動き出す。

『フレ〜 フレ〜 あっ！ たっ！ しっ！

頑張れ！ 頑張れ！ あっ！ たっ！ しっ！

負けるな！ 負けるな！ あっ！ たっ！ しっ！』

ダイヤモンドのような輝きを放つ笑顔で、未来の自分を応援する女。

わからない。

その姿を見てわき上がってくる感情の正体が。

だがそれは、いまの俺にはとても眩しく映った。

まず脳裏に浮かんだのは、若かりし頃の自分への申し訳なさ。

少年時代の夏休み、太陽に照らされ肌が焼かれるのを感じながら、虫網片手に街や山を走り回ったあの頃。

前島と出会って、年がら年中売られた喧嘩を買っては馬鹿やって、怖いものなんか何もなかったあの日々。

そしてとにかく金が必要でがむしやらにバイトをしまくった日々の中で見た、あの美しい庭園に一人で立つ、初恋の人の儂い微笑み。

おかしい、と、気がついてしまった。

俺はあの頃思い描いた未来の自分とは……かけ離れた自分になってしまったんじゃないかと。

そんな大人になってしまった自分を、鏡に囲まれた場所に立って見せられるような。

……なにを考えてるんだろうな、俺は。

女が応援を終えると、映像はそこで終了した。

やがて画面は、なにも録画されてないことを示す灰色の砂嵐に切り替わる。

「……ヘーイ、陽炎。なにか言うことはありますか？　まさかこれをネタに、この金剛を揺すろうって腹なら容赦しませんが？」

「まつ、待つてください金剛さん!?　え、やつぱり映ってた人って金剛さんご本人だったんですか!?　このチアガール姿のポンポン持ってた人があ!?　あああ！　金剛さん痛い！　痛い！　アイアンクローは痛いですってええええ!?」

「つは！　そういうえば確か養母は、定年まで金剛組の女中をしていたと言っていたな……まさかその時のものなのか？　そう考えると、なるほど。だから養母はこれを金庫に保管したのか……」

「ちよつと磯風ええええ!?　そういう大事な情報をもつと早く言つてよお!!　ああつ！　金剛さん指が！　指が経験したことのないめり込み方を!!　誤解、誤解ですつて!!」

「思い出した……確かに女中の一人にこのテープを捨てておけつて言つた気がするわ。……あの女中が側にいるときに、一度これを見た記憶があるわね……内容を知つてたら捨てるに忍びなかつたのかもしれないけど、まさかとつてあつたとは」

「あああ！　考え事しながらも指が、指が!!　金剛さんお願いです！　誤解が解けたならはなしぶふえ!?　ツつ、いたたた……で、あ、あの。それで、このテープはどうし

「ましよう……」

「さすがに引き取るわ。こんな世に出たら、金剛連合会の看板に傷が付くからね。少し癪だけど、タダでは言わない。このフィルムと引き替えに、なにか欲しいものがあるれば言いなさい」

「い、いえいえいえ！ 私はもう十分よくしてもらってますので!!」

「私もだ。本を正せばこれは金剛さんの物、持ち主に返すのは当然のことかと」

「そう言うわけにもいかないわ。捨てたとはいえ、懐かしい物が手元に戻ってきたんだから。じゃあ貴方、この子たちの提督ってことなら問題ないし、それにこの件に関しても色々骨を折ってくれたみたいだから、口止めも兼ねてなにか欲しい物が……貴方、どうして泣いてるの?」

「へ?」

話しかけられて、はじめて気がつく。

どうやら俺は馬鹿みたいに涙を流していたらしい。

あかんな、年をとるとどうも涙腺が。

おまけに三人がなにか言っていた気がするが、よく聞いていなかった。

ので、涙を拭いながら申し訳ない気持ちで聞き返す。

「あ、すみません、見てたらちよつと色々思い出してしまつて……えつと、ちゃんと聞い

てなくて、すみません、なんでしょうか？」

「……これを持ってきてくれたお礼がしたいって話をしてたのよ。だから、欲しいものを言いなさい。私に可能な範囲ならなんでも用意してあげるわ。お金でも、地位でも、女……は、必要ないでしょうけど。なんでもよ、ほら」

えつと、なんだろ。

急にそんなことを言われても、色々と現実感が無くて思いつかないな。

うむむ。

「あ、あー。えつと、それなら……余計なお世話かもですが、陽炎の姉妹ですね、面倒というか、こいつらになにかあったら助けてやって欲しいなと」

「……なに言ってるの、陽炎は私の身内よ。その辺は言われるまでもない。他にしなさい」

「え、あー」

なんとか脊髄から絞り出した要望を速攻で拒否される。

まいった、その筋の人だろうから、貸し借りを残したくないのはなんとなくわかるんだが。

なんでもいいとはいっても、こういうのって貸しと借りのバランスがあるからなあ。

要は釣り合っていない要求をすると、別の機会にその越えた分の帳尻を合わせる要求を

される可能性があるのです、おいそれとでかい要求をするのは色々とよくない。

うーむ。

「じゃあ、えつとですね。自分の後輩が今度結婚するんですけど。その、どうも相手の家の格がでかすぎて、出席者がその、足りてないみたいなんですよ。一応陽炎たちにもお願いするつもりだったんですけど、まだまだ足りないみたいで。そんなわけで、よければ出席してくれそうな人を紹介したいなーとか……つてのは、駄目ですかね？」

形に残るものをもらうのは、それはそれで困る気がしたので、昨日のこともあつて思ひ浮かんだ前島の件をお願いすることにする。

まあ、いうてこの街の顔みたいなものだし、それくらいなら大丈夫だろう。

と、思ったんだが。

組長の女は、それを聞いて少し驚いたような顔になった。

あれ、もしかしてなにか不味いことを頼んでしまったのだろうか。

「……とつきに出た願いの両方が、自分ではなく親しい誰かのためのもの、か。陽炎、あなたがいふんといいいオトコをみつけたようですね」

「へへー、そうでしょうそれでしょー」

なぜかどや顔で答える陽炎。

と、同じくどや顔で頷いている磯風。

なんだかいわれのない評価を受けている気が、する。

「結婚式なんて、先代の妹たちに出たきりかしらね。……いいわ、妹たちもあわせて、私たち金剛姉妹全員で出席させてもらう。あとはまあ、私のツテで艦連軍基地司令官の大淀と、市長のビスマルクにも声をかけてあげる。その二人が出てくれる可能性はあまり高くないけど。私たち姉妹の出席に関しては、この金剛の名において約束させてもらうわ。それでいい？」

「あ、いえ、その、充分です。ありがとうございます」

まさかの本人出席がいつの間にか決まってしまった。

おまけに、なんかとんでもない名前も出たような気がするが、まあ、たぶん大丈夫だろう。

よかったな前島、立派な結婚式になるぞ。(思考放棄)

「じゃあ詳しいことが決まったら陽炎に伝えておいて。……さあ、私はこれでも忙しいの、用事が済んだならさっさと帰りなさい」

「あー、もしかして金剛さん例のホストクラ……いえ、ナンデモナイデス」

そんなわけで、俺たち三人はさっさと屋敷から失礼することに。

まあ、偉い人間は分刻みのスケジュールで動くからな。

むしろよくこれだけの時間割いてくれたもんだわ。

しかしホストクラブって、なんのことだ？



屋敷から追い出され、磯風を家まで送り届けた後。

陽炎と二人で、夜の街を歩く。

「あー、ほんと、ヒヤヒヤしたわ」

「だな、さすがにもうあの手の経験はご遠慮願いたい」

裏社会組織の大親分と会話するのは、貴重な経験だったけどな。

「だが失言したら人生終わる可能性がある相手との会話は、できればもうやりたくない。
い。」

なんて思いながら、楽しそうに前を歩く陽炎に、気になっていたことを聞いてみる。

「なあ、陽炎」

「ん？ なーに提督？」

「おまえ……いや、おまえら姉妹って……」

「どういう繋がり、どういう親、どういう生まれ。」

などと色々な言葉が浮かぶが、どう聞いていいのかわからず言いよどんでしまう。

なので、言っておかなければならないことを先に言っとくことにする。

「俺だつて馬鹿じゃない、いや馬鹿だけど。でもな、さすがに金剛連合会の親分が『身内』つていつた意味くらいはわかつてるつもりだ。けど、そのあたりの踏み込んだ事情を、俺は聞くべきなのかどうか、それがわからん」

恐らく事情のあるスジモンの親、それともあの親分に育てられた同世代の子供たち。

色々難しい事情なんだろうな、下手したらそれよりも遙かに複雑な。

「……うん」

「こんな言い方は卑怯かも知れんが、話したくなけりや話さなくてもいい。けど、話したいならちゃんと言え。それがどんな厄介なことでもな。……それくらいは恩を感じてる……んだよ」

自分で言つてて情けなくなってきた。

ここでガツンと、お前らが困つてるならなんでもしてやるから話してみろ。

つて、そう言えりやいいんだが。

泣けてくるな、つたく。

「……海にさ」

「ん？」

「海に行つて帰つてきたら、全部話してあげ……ううん、全部話させて。だから……だか

らね。それまでは今まで通り私たちと接して欲しいな……っていうのはわがままかしらっ。」

陽炎は泣きそう、というより。

本当に惜しい時間が終わることが寂しい、そんな表情を浮かべる。

「別にわがままじゃないさ……わかったよ」

だがその表情がどうにも気に入らなかつたので、ご要望通りにしてやることにした。

「へっ？　ちよ、提督?!」

「おらっ、これもいつもどおりだろ?」

陽炎を持ち上げて肩に背負い、肩車の状態にもっていく。

最初は驚いていた陽炎だったが、やがて楽しそうに笑い声をあげはじめた。

「あはははは!　ちよ、提督も若くないんだからそんなに動くと、身体に悪いわよ!」

「うるせー!　俺はまだおじさんって年じゃねえ!」

いや、まあ、そういう年かもしれないが。

だが心はいつだって若々しくいたいと思っっている。

ゆえに、あと十年はおじさんだとは認めない所存。

しばらくそうやって陽炎を肩に乗せてはしゃぐ。

が、さすがに今日の疲れが出て、ばててしまう。

なので冷静さを取り戻した後は、早々に帰路につくことにした。

だがせめてもの意地として、陽炎に肩車は継続中である。

「ねえ提督。海、楽しみだね」

「……ああ、そうだな」

そう耳元で囁いた陽炎の言葉は、地平線を照らす暮れかけた陽光のようなあたたかさ
で。

その夜眠りにつくまで、耳の中で優しく響き続けた。

『食べたい男』と『軽巡：阿賀野』

「おでんが食べたいな」

食の衝動というのは厄介なもので、突然来る。

そういったとき、基本的にはそれが食べられる店に行くものだが。

運悪く真夜中だったり、定休日や大晦日だったりして店が開いていないことがある。

また店側の理由ではなく、例えば金がないとき。

そんな場合はめんどくさいが自分で作ろうか……と、なるわけだ。

思い立ったらすぐ行動を心がけているので、早速スーパーに行つて材料を買うことにする。

ただここで問題が発生した。

大根が一本丸ごと売られている物しか残っていないなかつたのだ。

基本的に自炊をしない私は、あまり食材をストックしない。

たまに何かを作りたくなくても、用意した食材は一回の料理で使い切るのが基本である。

「このままでは、大根ばかりのおでんになってしまふ……」

大根、好きではあるのだが。

いや、好きだから問題だとも言える。

大根を買わないという選択肢が無いからだ。

結果として、大根に合わせた量の食材を買い込んでしまった。

大きな袋を何枚ももらい、食材を詰め込む。

両腕にのしかかる重み、腕がちぎれそうだ。

正直なところ、既に買い物だけで満足してしまつた気もする。

が、当然ここまで用意してしまふと後にも引けない。

帰りの途中、吹き付ける冬の風が身体を冷やし、舞い散る粉雪が頭に降り積もる。

買すぎた食材の事に加え、酷寒ともいえる環境のせいか軽く憂鬱な気分だ。

そんな寒風吹きすさぶ雪の道を歩き続け、ようやく住まいのアパートに着いた。

ふさがつた両手で苦心しながらドアを開く。

すると出るときに切つたはずなのに、暖かいエアコンの風が顔にあたる。

「あ、ていとくうくさんっ！ お帰り♪」

遅れて、奥のほうから女性の朗らかな声が耳に届いた。

『食べたい男』と『軽巡：阿賀野』

キッチン兼通路を抜けて八畳の部屋に入ると、だらしない格好でカーペットの上に寝転がっている女性がいた。

年の頃は十六、八歳といったところか。

カーペットには彼女の艶のある長い黒髪が広がっている。

服装はフード付きの青いジャージ、赤いスカートに白のハイソックス。

短いスカートから伸びる、長くて綺麗な脚がまぶしい。

見る者によつては、これでもかと若さをアピールしているようにも見える。

そんな格好をした彼女は、軽巡洋艦の艦娘『阿賀野^{あがの}』。

一応私は彼女の提督であり、部屋の出入りは自由にしていると合鍵を渡してあった。

もつとも、一人が長かったせい、いまだに家に帰って誰かが居ると少し驚いてしまう。

帰ってきた私の姿を確認すると、阿賀野はそのそと起き上がって私の側に駆け寄ってくる。

そして温まった身体で、冷えた私の身体を包むように抱きついてきた。

「えへへ、待ってたんだから……わっ、つめたーい」

私の肩ほどの身長のア賀野が、懐くようにスリついてくる姿は、まるでネコそのもの。実際、ふらつと家にやって来ては、今のように寝転がったりしてくつろいでいたりするので、大きなネコに居着かれたような感じである。

いや、ネコというより大型犬……むしろ食欲的にはカバ。

「ぬ？ 提督さんいま何か失礼なことを考えませんでしたか？」

「阿賀野を動物に例えようとして、カバを思い浮かべていた」

「ひんげっ！」

余談だがカバはおっとりとした見た目の割に、強くて凶暴な生物らしい。

現地ではライオンやワニよりも、襲われる被害者が多いと耳にしたこともある。

そう考えるなら、例え見た目が乙女だろうと、内に凄まじい力を秘めている艦娘は、カバ以上の存在と言えるだろう。

「すまない、カバなど足下にも及ばない」

「何がどうなってランクアップしたのか、阿賀野わからないんですけど!」

のほほんとした雰囲気のア賀野だが、良くも悪くも感情が豊かでコロコロと表情が変わる。

大きな目をぱちくりさせながら、驚いている表情はなかなか魅力的だ。

「もー、提督さんっていつも無表情で口数少ないのに、とつぜん突拍子もないことを言ったりするから、阿賀野ビックリします!」

「すまない、口数はともかく表情は生まれつきだからな、直すのは難しい。それはともかく、おでんを作ろうと思うんだが……食べるか?」

もう少し意地悪なことを言っただけでもよかったのだが、彼女の機嫌が悪くなってしまう可能性があるため、すつと話題を変える。

「わく、たべまーす!」

基本的に阿賀野は食べるのが好きだ。

それ故に、色々と気持ちよくよかである。

普通の人間と違い、艦娘はどんな食生活でも殆ど体型が変わらないらしい。

が、それでも生活環境次第では、微妙に変わる可能性があるんだとか。油断大敵、という警告を阿賀野にするべきかと、一瞬思い浮かべる。

「おっでん！ おっでん！」

しかし、喜ぶ阿賀野を見ると、多少のふくよかさなどどうでもよくなるので不思議だ。

若い子のノリについていけないこともあるが、まあそこはあまり気にならない。

というのも阿賀野は――

「阿賀野、いま何歳だったか？」

「キツラリ☆ 四十二歳よ！」

私より「二桁」歳年上である。（※プライベートに配慮しています）

なので気にならない、まあ、うん。

「だから提督さあーん、次の誕生日ケーキのロウソクは四十三本でよろしくね☆」

「しまった、カラシがない」

買ってきた食材をキッチンに並べてから気がつく。

おでんにはカラシを絶対つける派なので、これがないと非常にまずい。

わざわざおでんを作る意味が無いまである。

「阿賀野、わるいがチューブのカラシを買ってきてくれ」

「ちよ、提督さん、阿賀野の事、都合のイイ女扱いしてないですかあ〜!? まあ、全然いいんですけど」

そんなつもりはないのだが、確かに見ようによつては、多少雑な扱いになっているように思われても仕方ないかもしれない。

だが、こればかりは私の思考パターンの問題なので、どうしようもないのだ。

もつとも、そんな私でも阿賀野は許してくれているように感じるので、そこは甘えさせてもらっている。

思い返せば、ひよんな事からそんな彼女の提督になってしまった私だが、もともと女つ気がなかったこともあり、今のところはこのような緩い感じの関係を続けられている。

別に阿賀野が望むのなら、籍を入れて同居してもかまわないのだが、お互い特に今の関係に不満が有るわけでもないの、しばらくはこのままで良いかという空気になっていた。

「ふぬ……なら阿賀野が冷たい水に手を浸しながら、食材の下ごしらえをしてくれるか？」

「えへっ、ちょうど買い出しで活躍したかったのよねえ。最新鋭軽巡、阿賀野、出撃よー!」
食べるのは好きだが、作るのはそこまででもない阿賀野は、おつかいの選択をしたよ

うだ。

コートを着て部屋を出て行った阿賀野を見送り、食材の包装を解きはじめる。

だが、半分ほど包装を解いたところで、忘れ物でもしたのか阿賀野が戻ってきた。

阿賀野は外の空気を浴びて少し冷えた身体で抱きついてくると、私の頬に軽く口づけをする。

「阿賀野、提督さん大好き♪ キラリン☆」

頬を赤らめ恥ずかしそうに言うと、阿賀野はウィンクをして急ぎ足でまた外へと出ていった。

阿賀野にキスされた頬を手でなぞり、改めて彼女を見送ると、気を取り直して下ごしらえをはじめめる。

まずは大根の皮剥き、薄く剥いてしまうとダシが染みこみにくいので厚めに剥く。

十字に切れ目を入れるのも忘れずに行う。

並行してゆで卵も作る、これはあまり手をかける必要もないが、軽く塩をひとつまみ。こうすることで、お湯が吹きこぼれにくくなるらしいが、あまり効果を実感したことはない。

コンロの数の関係で、少々アレだが。

こんなにやくの湯通しも、ゆで卵の鍋で行うことにする。

料理は手際九割愛情一割。

愛情の部分は食べる人のことは最低限考えるくらい。

食べるのは私と阿賀野だから、この辺りは気にしなくていいだろう。

そんなことを考えながら、ボイル済みで売られていた牛すじを等分に切り分け、串に刺す。

そして巾着、チクワ、はんぺん、厚揚げなどの具材をパレットに並べてゆく。

わかっていたが、予想通り多い。

収納から大きな寸胴鍋をとりだし、水で満たす。

大根の量が量なので、この鍋位のサイズじゃないと厳しい。

下ごしらえした大根を入れて、火を点ける。

下ゆでが終わったこんにやくを切り、ゆで卵の皮を剥く。

必要な食材の下ごしらえが終わったところで、阿賀野が帰ってきた。

「ううう、さむくい！ 寒い寒い、寒い！ 阿賀野、この季節はほんつと苦手……」

「お帰り、カラシは？」

「ちゃんと買ってきましたよ！」

「ふぬ、寒い中ありがとう。もうすぐ下ごしらえが終わるから、部屋で温まっていくれ」

「そうしますよー。……あつ、でもその前にお鍋のお湯、いただけますか？」

「これを？　大根の煮汁だぞ？　少し待ってってくれるなら温かいお茶でも入れてやるが」

「いえいえ、それがいいんですよ」

変なものをほしがるなと思いつつ、この寒い中でわたしのミスで外に買い物に行つてくれたのだ、それくらい当然だろうと、茶碗に煮汁をそいで手渡す。

阿賀野は差し出された茶碗を両手のひらで包み込むように受け取り、軽く息を吹きかけて口をつけると、ごく、ごく、ごく、と、うまそうにのどを鳴らして飲みほした。

これがコーンスープやコンソメスープならわかるのだが、彼女が飲んでいるのは味もない大根の煮汁だ。

だというのに阿賀野は、これがいいと、無上のごちそうのように味わい、さらには飲み終えた後に唇をぺろりとなめる。

「ただのお湯なのに、ずいぶんとうまそうだな？」

「ふふふーん。提督さん、じつは『温度』っていうのも立派なごちそうなんですよ？」

「ほう、詳しく」

「あら、興味ありますか？　えへへ、あのですね……」

阿賀野いわく。
人間の味覚は基本五種類。

甘味、塩味、酸味、苦味、旨味で、これらが『基本味』とされている。

また、他にも辛味や渋味、えぐ味などという感覚はあるが、それらは味覚としては分類されていないという。

そして基本味が他の要素（嗅覚、視覚、記憶など）で拡張された知覚心理学的な感覚としての味などは、風味（ふうみ）と呼ばれるらしい。

だが「温度」というのはそういった味覚には該当しないものの、それ単体で立派なおいしさになるんだそう。

「例えば寒い海の上で食べる豪華だけど冷たいおせちと、暖かい食堂で食べるホカホカの塩おにぎりだと、断然おにぎりの方が美味しいんですよ。って、ちよつと純粹な温度がご馳走になる例えとは違うかな……えーつと、そうだ、昔読んだ本の話なんですけど——」

阿賀野は指を顎に当てて少し考え、話を続ける。

いわく、戦史前の書物に『木枯らし紋次郎』という物語があるそうなのだが。

彼が旅の途中、冬の風や雪にさらされながらたどり着いた民家で、

『すみません、白湯を一杯いただきたくてえ』

と、所望するシーンがあるらしく。

先ほどの阿賀野のように、ひどくうまそうにのどを鳴らしながら出された白湯を飲む

らしい。

腹も減ってるし疲れ切っているのだろうが、その状況で紋次郎がなによりも望んだのは、腹にたまるような食べ物ではなく、疲れが取れるような甘い菓子でもなく、ただの白湯なのだそう。

まさに純粋に温度を味わえるその白湯こそが、そのときの彼にとつては無上のごちそうであるように書かれていたらしい。

「なるほど」

そう言われてみると、確かにそうなのかもしれない。

時や場合によつては、シンプルな方が正解というのはままあることだ。

しかしながら、阿賀野は見た目の割に、時折ハツとするような知識を披露することがある。

「へっへっへ、でも阿賀野的には、もっと美味しい温度があるんですよ！」

意外な阿賀野の博識ぶりに感心していると、彼女は茶碗を置いて一度部屋に戻る。

そして冷えたコートとパーカーを脱いで薄着になると、両手をわきわきさせながら再び近づいてきた。

「それは提督さんの温度！　というわけで、いただきますーす！」

「ぬう」

阿賀野はセクハラオヤジのような事を叫ぶと、私のシャツをめくって頭を差し込んでくる。

さらに手を差し込んで「よいではないか、よいではないか」と口にしながら肌をまさぐって来た。

温まりきっていない彼女の身体の冷たさに、一瞬冷やつとする。

だが私はそんなセクハラオヤジのような阿賀野に対して、煩わしさやうつとうしさよりも、哀れみが湧いてしまった。

基本的に精神とは肉体に依存するものと思われるので、阿賀野の精神は若いと言ってもいいのかも知れないのだが。

それでも長く生きていると、艦娘といえど逃れられない、精神的な加齢があるのかも知れない。

つまり知性有る生物は皆。

オヤジギャグやオバサンギャグ汚染というものからは、逃げられないのだろう。

いつか私もそうなる日が来るのだろうか。

(もしくはもう来ている)

などと考えながら、もぞもぞと動く阿賀野をそのままに。

火を止めて茹でていた大根の煮汁を捨てる。

そして再びその中に水を入れ、ダシパックを三つほど入れた。さらに用意していた他の食材や調味料を入れ、火を点ける。

時間を別けて煮たほうがいい食材もあるが、今回は面倒なので一緒に煮ることにした。

煮る時間は、中火で一時間ほどにしておくか。

足りなければまた煮ればいいだろう。

タイマーをセットしたところで、ずっと服の中でもぞもぞと動いていた阿賀野が、私のシャツの襟口から顔を出す。

首元が大きくあいたVネックのシャツだからよいものの、普通のシャツなら伸びきっていただろう。

反応のない私の無表情を間近で見たためか、ばつが悪そうな表情を浮かべる阿賀野。

「えへ、えへへ……その、提督さん怒ってます?」

「いや。調理は終わったから部屋に行こうか、あと一時間ほどかかる」
「わ、わーい、阿賀野楽しみ〜」

るんたつたーるんたつたーと、私を抱き上げて部屋に戻る阿賀野。

そしてすぽつと抜け出すと、幸せそうに微笑む。

「まあまだしばらくかかるわけだし、私は油污れが少しいてしまったから軽くシャ

ワーを浴びる。適当にくつろいでおいてくれ」

「はい、阿賀野、了解です！」



『あッ、あのッ、のッ、のッ……』

オットセイの真似だろうか？

そう思いながら、手を掴んで必死に何かを伝えようとする阿賀野をじつと見つめる。必要な書籍があつて訪れた本屋で、初めて彼女と出会ったとき。

阿賀野は私の手を掴み、一時間以上何かを伝えようとして、失敗を繰り返していた。口をパクパクとさせて、なんども瞬きを繰り返し、表情を変える阿賀野。

そんな彼女の顔は、毎日鏡に映る自分の無表情とは違い、まるで移り変わる四季のよう美しくかった。

私はその様子に見とれてしまい、用事も忘れてブーツと彼女を見つめてしまう。

『あッ、あッ、あッ、あッ……こ、こんにツチは』

『……こんにちは』

飽きないその表情の変化を、どれだけ見続けたらだろうか。

ようやく阿賀野はたどたどしい挨拶の言葉を紡ぎ出した。

『あつ！ あの……』

『なんででしょうか？』

『あたし、あ、阿賀野……』

『……そうですか、阿賀野さんとは初めまして……で、よろしかったですか？』

何度も、何度も必死に首を縦に振る阿賀野。

私はそれが興味深くて、じっと見つめる。

『きつ、きつ、きつ……』

『きゅっ……』

『きつ……キツラリ☆』

『…………？』

『…………きらりくん！』

『??？』

涙目になりながら謎の言葉を口にし、ポーズを決めてウインクをする阿賀野。

私は阿賀野が何を伝えたいのかよくわからず、無言でその様子を見つめ続ける。

『あの……』

そこに様子をうかがっていた書店員がやって来て、遠慮がちに声をかけてきた。

そして私が探していた書籍がないこと、さらには発注しても、届くまでにどれだけかかるのかわからないということ、申し訳なさそうに伝えてくれる。

『あつ、はい!! はい!! はい!! 阿賀野!! その本がある場所知ってます!!』

だがその話を聞いていた阿賀野は、猛アピールするような大声を上げる。

『……詳しく、聞いても?』

その書籍が必要だった、という理由だけでなく。

目の前で必死に主張する彼女に興味を湧いた私は、そう阿賀野に聞いた。

『キラリン☆ 任せて♪』

満面の笑みでそう返事をする阿賀野。

それが、私と彼女の出会いだった。

□□□□□

シャワーを浴びて戻ると、阿賀野がちやぶ台に向かって座っていた。

どうやら、分厚い本に何かを書き込んでいるようだ。

前に聞いたことがある、たしかあれは——

『これは、提督日誌です! うふふっ♪』

そう、提督日誌。

何が書いてあるのかを聞いたかどうかは覚えていないが、多分聞いていなかったと思う。

だがチラリと見えた表紙には、No. 124という数字が記されていた。

それを見るに、恐らく私が彼女と会う前から書いているものなのだろう。

だがはて？ 確かはじめて見たときのNo. は60番台だった気がするが。

「あつ、提督さん！ 阿賀野、意見具申！ お昼寝しましょう♪」

「もうしばらくすれば、おでんが出来上がるんだが。……だけどまあ、冷ましてもう一度煮れば味も染みこむし、それもいいかもしれないな」

「やったー！」

その返事を聞き、阿賀野は立ち上がって、私の手を取りベッドに引きずり込んだ。

マットレスに倒れ込むと、阿賀野の長い髪がフワツと顔にかかり肌をくすぐり、柔らかな匂いが香ってくる。

顔にかかる髪を手で払うと、阿賀野が隣で幸せそうに目を細めてこちらを見ていた。

「嬉しそうだな」

阿賀野は私の言葉には答えず、がぶり、と、うつすらと湿った首筋を甘噛みする。

これはいったいどういう事だろうか、少し考えたが、なるほど。

おそらく阿賀野は、私の温度を“食べて”いるのだろう。

首筋から肩、そして腕、指にそって阿賀野は口を動かす。

さらに当然のように、その間も甘噛みを続けている。

その様子があまりにも美味しそうで、私は少し興味が湧く。

なので仕返しの意味も込め、阿賀野の上着をめくりあげて、ふつくらとした腹肉を露出させた。

「きゃっ!」

驚く阿賀野を横目に、私はその透き通るような白い腹部に噛みついた。

無論、咬みちぎるつもりは毛頭なく、阿賀野と同じく甘噛みをするだけだ。

はむはむと何度か噛みついてみると、成る程と少し阿賀野の気持ちりが理解できる。

モチを食むような柔らかな感触と、うっすらとした湿り。

それらと合わさって唇に伝わってくる、阿賀野の体温。

これは……なかなか味わい深い。

その瞬間。

キツチンの方からセツトしてあったタイマーが鳴る。

私にはそれが、こつちを食べろ、と、おでんが言っているように聞こえた。

ああ、そういうえば私はおでんが食べたかったのだった。

だが――

「……提督さん。阿賀野のお腹、どう？ 美味しい？」

昔、初めて出会ったときのことを思い出す。

あのときも、最初は書籍を手に入れるのが目的だったはずなのに。いつの間にか、楽しそうな様子の阿賀野と、少しでも長く一緒に居ることが目的になっていた。いまもそうだ。

最初に食べたかったのはおでんだったはずなのだが。

いつの間にか、阿賀野の体温の方を味わいたくなっている自分がいる。

少し気恥ずかしくなった私は、返事の代わりに軽く歯を立てた。

それに対して阿賀野は短い悲鳴を上げたあと、私の耳元に口を寄せ、

「ふふ、阿賀野、嬉し♪ いっぱい食べてね？」
と、囁いた。

■提督日誌1日目■

キラリーン☆艦娘変わりが無事に終わって一年たった、最新鋭軽巡の阿賀野でーっす

！

折角の記念なので、今日から提督日誌をつけることにしました。

まあ、提督さんは見つからないから、いまはまだ、ただの日記なんだけど、何を書いたらいいかわからないし、何を書くかも全然決めてなかったり。

阿賀野、こういうの苦手なんだけど、ちやんと考えなきゃね。

■提督日誌2日目■

キラリーン☆今日は夕食にカレーを食べて美味しかったよ。

ちなみにお昼は秋刀魚定食でした！

秋は色々美味しい物が増えて、阿賀野ピーンチっ！
え、食べなきやいって？ そんなわけにはいかないのです！

■提督日誌7日目■

キラリーン☆阿賀野気がついたの！

さすがに毎日食べ物のことばかり書いててもしょうがないって！

だから今日から日誌の名前通り、いつか出会える提督さんがどんな人か予想します！

えっとね、きっと阿賀野の提督さんは――

■提督日誌90日目■

キラリーン☆さすがにもう書くこと無いかも！
でもいいこと思いついちゃった。

阿賀野あんまり勉強とか好きじゃないけど、いつか出会える提督さんを退屈させない
ような、すつごいおしやべりができるように、色んな事を知っておこうって！

なので、今日は図書館に行って本を借りてきたよ！

毎日一冊読んじやおつかな。

可愛くて頭がいいなんて、最新鋭軽巡すぎかな？

■ 提督日誌91日目 ■

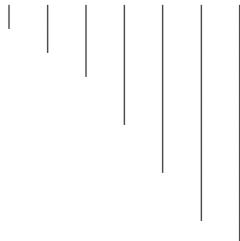
キラリーン☆借りてくる本間違えたかも!?

がんばって読もうとしたけど、10ページもよめなかった!

これ、全部読めるのかな……。

でも、これくらいでへこたれる阿賀野型ではないのです!

いつか出会える提督さんのために、頑張れ阿賀野!!



■ 提督日誌150日目 ■

キラリーン☆今日はビッグニュースがあります!

なんと阿賀野、一日で一冊本を読めました！

といつても、児童向けの本だったから当然なんだけど、えへへ。

でもこれが続けられたら、阿賀野もつと、きらりくん♪

あつ、あと今日から本の名前や感想は、別の読書記録？

つて名前のファイルに、まとめることにするね。

感想も一緒に書いてたら、提督日誌がパンクしちゃう！

■ 提督日誌365日目 ■

キラリン☆今日は何と、提督日誌をつけ始めて一周年です！

そしてさらになんと今日は、活字の本を一日で一冊読めたよ！

阿賀野の本領、発揮しちやった！

でもこれ以上阿賀野が性能良くなっちゃったらどうしよう……。。

なーんて、まだまだ阿賀野型の実力はこんなもんじやないんだから！

提督さんのために、これからも頑張るね♪

■提督日誌1000日目■

キラリン☆おめでとって、言っがいいのかわからないけど、ついに四桁日！

殆ど毎日通ってたら、図書館の司書さんと友達になっちゃった！

面白そうな本とかオススメしてくれるし、ほんと助かつちやう！

■提督日誌1825日目■

キラリン☆って、もう五年もたっちゃったの!?

閏年とかあるから、正確にはちがうかもだけど……。

それでもさすがに提督さん待たせすぎ!!

聞いてますかまだ見ぬ提督さん!

阿賀野型一番艦、阿賀野がここでずーっとお待ちしてますよ。ね、提督さん?

■提督日誌8760日目
読了三冊。

詳細は別途読書記録に記載。

■提督日誌8761日目
読了五冊。

詳細は別途読書記録に記載。

■提督日誌8762日目
読了七冊。

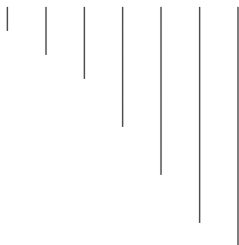
詳細は別途読書記録に記載。

■提督日誌8763日目
読了四冊。

詳細は別途読書記録に記載。

■提督日誌8764日目
読了八冊。

詳細は別途読書記録に記載。



■提督日誌9986日目

図書館にある全ての本を読み終えた。

新しい本も入るようだが、毎日確認するために赴くのは非効率。
今後は本屋に赴き、購入して読むことにする。

■提督日誌10000日目■

こんにはーっ！ 最新鋭軽巡の阿賀野でーっす。

えへ、えへへ……ちやんと書きたいんだけど、感情の整理がつかないや。

でも、阿賀野やったよ。

提督さん、みつけたよ。

詳しくは、きつと、あした書くから。

絶対、書くから。

■提督日誌・改！ 365日目■

ずっと思い描いていた提督さんと、実際の提督さんは全然違つて。

でも全然ステキで、無表情で口数も少ないけど、たまにドキツとすることを言つてくれたり、ドキツとする表情を浮かべたりするんだ。

提督さんに反応して欲しくて、阿賀野はあの手この手で日々アプローチしてるの！
やっぱり沢山本を読んで役にたつたね！

あと提督さんは阿賀野のこと雑に扱つてるんじゃないかって時々悩んでるんだけど、

全然そんなことなくて、とっても大切にしてくれる。

今日なんて、阿賀野のために大きなお鍋一杯のおでんを作ってくれたの。

提督さんはたまにしか料理しないんだけど、とっても上手なんだ。

それでね、作るときは阿賀野がたつくさん食べられるように、たつくさん作ってくれ
るんだから。

もう提督さん大好き♪

あと何でこんな事を今更書いてるかって言うかね、今日は特別な日だから！

提督さんと出会って、ちょうど一周年なんだ。

つまり提督さんと阿賀野の、特別な日なの！

提督さあーん、これからも阿賀野のことを、どうぞよろしくおねがいたしまーっす

！

うふふっ、一周年一周年、阿賀野……嬉しい♪

キラリン☆

『無職男』と『駆逐艦：野分』

我無職、故に我職無し。

夏葉原騒動・参照『無職男』と『駆逐艦：天津風』の翌日。

朝っぱらから電話がかかってきた。

出てみると、なんと相手は市警察。

寝ぼけ頭に炭酸水をかけられた気分になり、思わず布団の上で正座する。

はい、はい……と、かしこまりながら内容を聞くに、先日、例のベンガル虎捕獲に協力した件についての事つばい。

なんでも、もし可能なら今日、非公式に感謝状を渡したいとの旨と、そのついでに聞きたいことがあるとかなんとか。

正式な感謝状に関して辞退したのは承知している。

が、これは受け取って欲しいとかなんとかか。

感謝状に公式非公式があるのかは疑問だが、警察にそこまで言われたら行くしかあるまい。

国家権力にはなるべく従順でありたいお年頃。

まあついでだし、警察行く前に、職業紹介所にも行って求人を探すか。

先日のももあり、久しぶりに求職活動に前向きになっている。

フレ〜フレ〜 あっ！ たっ！ しッ！

つてな感じでみてろよコンチクシヨウ。

今度こそ内定を勝ち取ってやろうじゃないの。

『無職男』と『駆逐艦：野分』

「終わったな……」

と、警察署のロビーで椅子に座りながら呟く。

警察署という場所で傍から聞くと、思わずギョツとする台詞だが、実際似たようなもんだ。

端的に言うと、内地での再就職が絶望的になった。

どうにも面接した幾つかの企業が、職業紹介所にクレームを入れたらしい。

いわく『面接をすつぽかした』『落ちるのが目的のような横柄な態度』等々。

当然のことながら、全く身に覚えは無い。

これはおそらく、いまだに怒りが収まっていない元上司の陰謀だろう。

いい大人がよくもまあ、そこまでネチネチと根に持てるもんだ。

いやまあ、大人だからかもしれないが。

なにはともあれその結果、職業紹介所から、あなたに紹介できる仕事はありません。

と、バツサリ宣言されてしまった。

色々と言いたいことはあったし、色々頑張ればそれは間違いだと証明できるんだらうが。

まあ、これも自業自得かと思って引き下がることにした。

腹が立たないわけでもないが、因果応報というヤツだろう。

いまさらだが、さすがに物理攻撃は不味かったよな。

そう考えると、人は誰も自分がやったことの報いをうけるものなのかもしれない。

しかしこうなつた以上、賃貸の更新待つまでもなく引越したわ、とほほ。職業紹介所が使えんからには、内地での再就職は絶望的だし。

ともかく、陽炎たちを海に連れて行つたら引越しの準備しないとなあ。

家具や食器その他諸々に関しては、全部処分しちまうか。

外地に引越しとなると、持つて行くより必要になつたら買うほうが安上がりだろう。

着替えと必要なあれこれまとめても、ダンボール数個とキャリーケース一個で事足りるだろう。

立つ鳥跡を残さず、ダンボールを地元で郵送したあとに、夜逃げのようにささつと消えるか。

グツバイ内地、アイウイルバック外地。

そしてフォーエバー陽炎姉妹。

明日から行く海水浴は、なんか変なおつさんと過ごした一年の思い出の締めくくりとして、美しいもの……は、無理だが。

せめて楽しい思い出にしてやらんと。

恩返しというわけじゃないが、最後だし。

それに……ちようどよかったのかもな。

いまはまだ大丈夫だし、自覚もあるが。

人間追い詰められると、自分を見失ってなにをするかわからん。

むかし地元で、自分で掘った特大の墓穴に落ちそうになり、助かるためならなんでもするようになったやつらを何人か見たことがある。

タチの悪いことに、大抵そういうやつらつてのは、その行為がさらに墓穴を広げることにつかぬ。

おまけにいざ落ちるときは、必ず周囲の誰かを道連れにするんだよな。

つまり……俺がそうならない保証は無い。

そんな感じで、俺がいま以上に追い詰められたとき。

陽炎たちの側にいたらきつとすごい迷惑をかける。

だからまだ余裕があるうちに、アイツらの側を離れるのが正解だろう。

アイツらの側が日だまりみたいに心地よくて、ずるずるここまできちまった。

だけど本来、そこはきつと別の誰かの場所で、いつまでも俺みたいなのが居ていい場

所じゃない。

だから――

「あ、あの……お久しぶりです」

そんなおセンチな気分におぼれかけた瞬間。

よく通る綺麗な声で話しかけられる。

声の主がいると思われる方を見ると、ちっこい銀髪の美少女がいつの間にか隣に座っていた。

この暑い中、半袖の白シャツの上に黒いベストを着込み、きつちりとネクタイを締め
た服装。

だがそれを苦ともしないような鋭い雰囲気のせいかな、不思議と暑そうに見えない。
そしてなにより目を引くのがその綺麗な顔……だが、どこか表情が硬い。

ツンとしている……に近いな、だから美人にみえるのかもしれないが。

というか、この娘あれだ、あれ。

「おー、のわっちじゃん」

「……野分のわきです」

しってる、が。

先日、一部の陽炎姉妹と一緒に神社の縁日を回ったとき。

嵐や舞風が、この娘のことを、のわっちのわっちと呼ぶのでうつつてしまった。

「で、なんでこんなところ（警察署）にいるんだ？」

「あつ、いえ……ここは昔の古巣入田審査官というか、いまの居場所審査官の関係で、こちらに少し用事が

ありまして……」

「いまの居場所？」

「はい、去年おにいさんにお会いした後に、定時で帰れる場所しごとに移ったんです。おかげでいまは、以前より自由に時間がとれるようになりました」

古巣や居場所って、おそらく学校のことか。

しかし、そういうことなら、なんか理由があつて転校したんだよな？

「まあいま問題ないならそれに越したことはないんだが、なにか困ったことがあつたら言うんだぞ」

「え？ あつ……はい。お気遣いありがとうございます」

つつても、なんとかかしてくれるのは陽炎だろうけどな、多分。

それにしても転職（転校）に成功とか、うらやましい限りだ。

しかし野分……だったか。

なんか夏祭りのときにちよつと絡んだけど、あんまり表情が変わらないせいか、いまいち感情が読めないんだよな、この娘。

いまも変わらずツンとした感じなんだが、なんだろう、もしかしてなんか困ったことでもあるんだろうか。

「どうした、浮かない顔だな。悩み事か？」

「……これが地顔です。すみません、表情が乏しくて」

おふ、どうやら地雷と言わないまでも、コンプレックス的ななにかを刺激してしまった気配。

気持ち機嫌が悪くなったような……いや、かわらんか。

「あ、あの……それよりもおにいさんのほうこそ、随分と落ち込んでいらしたようですが……なにかあつたんですか？」

「あ……見られてたか、恥ずかしいなオイ。……まあ、のわつちと違って転職がうまくいかなくてな」

というか、もう転職とかじゃないけど。

無職期間も一年近いし。

「そ、そうだったんですか……。でも、いまさらですが、おかしいです。どうしておにいさんを採用しないのでしょうか？」

「そりやまあ年齢やら経歴やら運やら資格やらだろうけど……そもそも世の中ってのはおかしいことが多い。だがまあ……だいたいのところ説明がつく。結局はなんか理由があるんだよ」

「理由？」

「リアットとかな」

俺がボソリと言ったその言葉を聞いて、野分の纏う空気がずっと鋭くなる。

特に表情だっただりの変化はなく、硬い表情のままなのだが。

なんだろう、ちよっと鋭い感じとでもいうか、誰かになにか気がつかれたなっとき感じる瞬間の気配の切り替わりというか、そんな感じ。

「もしかして、おにいさんの元上司が原因ですか？」

「まあ、どうだろうな」

鋭い、というか当たってる。

だがここで変に心配をかけるのも情けないので、大人の余裕っぽい感じではぐらかす。

が、その答えを聞いて野分の纏う空気が、さらに鋭いものになった。

決してびびってるわけではないが、とても怖い。

「……おにいさんは、そのセクハラ上司に落とし前を付けてやろうとは思わないのですか？　なんでしたら私がお手伝いいたしますが」

「落とし前って物騒だな……。思わんわ、もう終わった事だし。つかバカな事を考えるんじゃない、あんなやつにお前の貴重な青春を浪費するなんざバカらしすぎるだろ」

「そうでしょうか……ですが——」

「そうなんですよ、だ」

そもそもラリアットが落とし前みたいなものだし。

微妙に不満そうな気配を漂わせている野分をなだめるように、頭を軽く撫でる。

ふと、無表情だと思っていた野分の目尻が、わずかに下がっている事に気がついた。わかりにくいのが、ちゃんと表情が変わってるんだな。

それがなんだか興味深くて、野分の頬に軽く両手を添え、じつと目をのぞき込む。

野分は嫌がる風でもなく、目をそらさず、その銀色の瞳でじつと見つめ返してきた。

綺麗で、真つ直ぐな目だ。

あまり話したことはなかったが、この目を見ているとなんとなく野分の性格が見えてくる。

きつと真面目で、曲がったことが許せなくて、芯が強い娘なんだろうな。

それゆえ融通が利かなくて、周りから反発を買いそうではあるが。

そういうえば転校したとか言ってたな。

考えにくいのが、もしかして周りから嫌がらせとかされてたんだらうか。

いまはいい学校に移れたみたいだから、ひとまず安心だが。

しかし……いつの時代、どんな場所だろうと、そういうのが好きなのがついているんだよな。

弱かったり、孤立している人間はいつだってどこにでも存在するから、なくならん。

おまけに一度やると、自分が勝者になったかのような優越感を味わえるからやめられ

ない。

思えば、俺の元上司も常に勝たないと気が済まないヤツだった。

だから出世したんだろうけどな。

しかもあの手の人間にとって、負けは存在意義の否定になるんだ、だから絶対認めない。

まあ、一連のあれやこれやは、つまりそれが理由なんだろうが。

「あの……その……」

困惑した様子の野分が口を開く。

考え事をしていたせいで、随分と長いこと同じ体勢だったことに気づいた。

「ああ、わるいわるい」

慌てて添えていた野分の頬から手を離すと、「あつ……」と、名残惜しそうな感じ。

それがなぜか急に撫でるのをやめられて、世界の終わりみたいな顔になった犬のようにも見えて、謎の罪悪感が湧く。

ちよつとばつが悪かったので、コホンと咳払いをし、なにか話題をひねり出すことにした。

「因果応報って言葉がある」

「それはしってますが……」

「まあ聞け。いまの俺の現状つてのは、因果応報……とは少し違うかもしれんが、俺が行動した結果に起こったことだ。起きたことにどう対応するかはおいといて、なんでそうなったかってのは、きちんと受け止めにやならん」

ラリアットの結果とか、なんか字面にすると大変マヌケっぽいが。

「そして人つてのは自分の行動に責任をとる必要があつてな。それは法律とか社会の仕組み的な理由もあるが……行動の結果起こった事実を素直に受け止められないと、自分が存在するつて自覚が持てないからだ。事実を認めず、いつまでも否定したり、歪んだ受け止め方をしちまうと、永遠に自分の存在を感じられず心が不安定になったり、歪んだりするんだよ。ちよつとずつ、ちよつとずつな」

さすがに百社にお祈りされた現実を受け止めるのは、骨が折れたが。

つか、いつそ全部否定して、気楽になったほうがよかつたまでである。

だけどまあ、そうなるわけにもいかなかつた。

「だから俺は辛い現実ものみ込んで、目をそらさず起きてしまったことも受け止めて、自分を見失わないようにしてきた、無意識に、注意深くな」

……いまなら、なんでそんなにがんばれたのかがわかる。

それはこの娘らとの関係を失いたくなかつたからだ。

人生のどん底でみつけた、温かな光。

それを、ずっと浴びていたかったんだろうな。

「それができたから、お前ら……野分ともこうやって仲良くもなれた。俺が馬鹿になつてたら、陽炎がきつとお前ら姉妹に俺を近づけさせなかっただろうからな。つまりだ、俺にとつてはお前ら巻き込んで馬鹿なことになるほうが、よっぽど不幸なんだよ。だから、俺のことはこれでいいんだ」

「……………提督、野分はいま、とても幸せです」

「どうした急に？」

「いえ、きちんと言っておいたほうがいいと思ひまして」

「そうか……なら大事にしとけ。幸せつてのは簡単には掴めないうえに、しがみつけないとすぐどっかに行くからな」

「はい……………絶対離さないようにします」

「それがいい」

そういえば昔、俺は絶対離してはいけなかったものを離してしまった気がする。

その考えに連鎖するように、先日蘇った初恋の記憶が脳裏をよぎる。

思えばあれ以来、俺の人生つて……。

と、開けたくない記憶の扉が開きかけた瞬間。

野分は立ち上がつて俺の正面にくると、そのまま俺の太ももの上に座つて抱きついて

きた。

細い腕が背中にまわされ、胸に野分の頭が押しつけるように擦りつけられる感触。なんとというか、傍から見ると対面座位のようにも見えて大変見た目がマズイ。

さすがに警察署のホールでこの体勢は事案では？

「……なにやつてるんだ？」

「いえ、離さないようにと」

だがその体勢とは裏腹に、真剣な声色で、祈るようにそう口にする野分。

野分の表情は見えないが、震える吐息が胸に当たり、どこか必死さが伝わってくる。

「……そうか」

だから、引きはがそうとも思ったが、したいようにさせてやることにした。

しかしなんだな、うぬぼれでもなく、陽炎姉妹たちには随分と好かれたものである。

こう素直に好意を向けられると、例え駄目だとしても、叶うならずっとこいつらと一緒にいたいと思ってしまう。

だつてそうだろ。

自分の人生を肯定してくれる、穏やかな感情。

心配ない、大丈夫だと安心させてくれるなにか。

それを求めるのは悪いことか？

悪くない、はずだ。

だけど、それを自分から壊すことに耐えられるのか？

破滅に大切な恩人達を巻き込むなんて、できるのか？

できないよなあ……。

職は無いが、誇りはあるし礼儀もしってるつもりだ。

だからこそできない、だからこそ、もうこの街にはいられない。

……けど。

野分の細い体を抱きしめる。

嫌がるかと思ったが、野分は負けじと強く抱きしめ返してきたので、嫌がってはいな

いようだ。

『いえ、離さないようにと』

ついさっきの野分の言葉が脳裏に浮かぶ。

……そうだな。

俺も離したくないよ。

形容できない感情と、野分の温もりに身をゆだねていると、ホールにアナウンスが響く。
どうやら誰かの呼び出しらしいが、それを聞いた野分がぴくりと震えたのがわかつ

た。

「あれ、のわつちのこと呼んでるんじゃないのか？」

「……野分です」

「わるいわるい……で、呼んでるぞ」

「……」

「呼んでるぞ野分」

「……はい」

ゆつくりと、名残惜しそうに離れる野分。

見ると随分としよぼくれた表情だ。

「そう暗い顔するな、明日は海にいけるぞ？　だから元氣出せ」

「……そうでした、また明日になれば……会えますよね」

「ああ、じゃあ、また明日な。集合時間に遅れんなよ」

「はい、了解です」

そう返事をして、野分は軽く微笑む。

一瞬見間違いかと思つたが、野分はいまこの瞬間も、確かに桜の花のように柔らかな笑みを浮かべている。

「なんだ、ちゃんと笑えるんだな」

「それはあなたが笑顔をくれるからですよ、私だけじゃなく、姉妹のみんなにですけど」
「そうかい……。それじゃあ、たまには俺も笑うことにするよ」

「はい、そうしてください」

野分は微笑みを浮かべたまま軽く一礼し、去って行った。

その背中を見送りながら、自分の顔を触る。

「笑顔、ねえ……」

そういえば、ここ最近ちゃんと笑った記憶がない。

年のせいで記憶が薄れてるだけの説もあるが。

「うらやましいですね」

「ツ!?!」

気が緩んでいたところに、突然陰気な声を後ろからかけられビクツとなってしまう。

慌てて振り向くと、殺し屋みたいな目をした眼鏡の男が、気配を殺して後ろに座っていた。

おまけに進撃してくる巨人の漫画に出てきそうな、絶望的に影のある表情を浮かべている。

唇を噛みしめながら、目尻に涙をためプルプルとしているその表情は、正直とても怖い。

一瞬誰だかわからなかったが、よく見なくても前島登場『意識高い男』と『重巡・愛宕』他だった。

「ま、前島……お、お前なんでこんなところにいるんだよ」

「いえ、先日巻き込まれた銀行強盗の犯人らしき人物をつかまえたので、その面通しをして欲しいということで呼ばれました。そんなことよりも先輩、先ほどの彼女は……」

「あ、ああ。草野球のコーチというか審判のバイトの関係で、面倒見てる姉妹の一人だよ。なんでかしらんが姉妹全員が俺にやたら懐いててな、それもあって、まあ、どこから見てたかしらんが、あんな感じだ……邪推すんなよ？」

「なんでかしらんが……やはり、そうですねか」

そう呟きながら、目に炎を灯す前島。

いや、実際炎が灯るわけじゃないんだけど、目に力が入るといいうか、そんな感じ。

確か、昔こんな感じになった前島を何度か見たことがある。

どんなにヤバイ状況だろうと、一秒で覚悟を決めて行動に移す瞬間。

コイツはこんな目になった。

「やはりって、なにがだよ？」

「いえ、事情があるようなので私からなにか言うのは止めておきます。ところで先輩、折り入ってお話があるのですが」

「んあ？　なんだよ」

なにか覚悟を決めたような、ただ事じやない前島の様子に思わず身構える。

「ウチ……前島家の養子になりませんか？」

「はあ!？」

あ、覚悟決めたとかじゃなくて、コイツ単純に馬鹿になっただけだわ。

なんか受け入れがたい現実から目をそらし続けたのだろうか？

身構えて死ぬほど損したわ。

「なんで俺が、お前と、兄弟にならにやいかんのだ」

「私の母親は艦娘です」

「しつてるよ、散々世話になったからな。確かアシガラ様・登場『絵描き』と『重巡：足

柄』他だっけか……つかいまさらだろ」

「はい、なので養子になれば行政関連の優遇含め、色々之恩恵があります。特にこの街で

暮らすには」

「そりやちよつと興味が引かれるが……話が唐突すぎるし訳がわからん、なにが目的だ

?」

「純粹に先輩と兄弟になりたいだけですよ」(邪悪な笑み)

「純粹に兄弟になりたいとか意味わからんわ!？」　つか顔が怖ええよ!？」

「ああ、そういうえば現在悲しいことに新居を建てている最中なんですが……どうでしょう、家族になればその家で一緒に住めますよ?」

「はあ? お互いそれに、なんのメリットがあるんだよ」

「私には計りしれないほどのメリットがあるのですが。先輩にはそうですね……家賃光熱費食費その他諸々、食と住にかかる費用は全て私が持ちましょう」

「ちよつとぐらついたけど、よく考えたらお前もうすぐ結婚するだろ。新婚の新居に居候とかしようもんなら死ぬわ、精神的に」

「そんな些細なことを難しく考える必要はありませんよ……さあ、私と家族になりましょう」

「OK OK、落ち着きたいから、とりあえず一発殴っていいか?」

などと過去最強に意味のわからないやりとりをしていると、警官を引き連れたデカイ女が現われた。

どこかで見たことが……って、着ぐるみ姿で虎に左ストレートぶつ放した、例の警察署長じゃねえか。

「すまない、待たせたな。警察署長の長門だ」

「どうもご丁寧に、火野です。お気になさらず」

さすがに相手が相手なので、失礼のないようによつこらせつくすと言いながら慌てて

立ち上がり、挨拶を交わす。

ついでのなかはわからないが、前島も一緒に名乗りをして簡単な挨拶。

なんでも警察署長の『長門』という名前は艦娘としての名前らしく、本名は別にあるらしいのだが、公職の関係でもあって艦名を名乗っているとかかんとか。

確か艦娘ってそういうマナー的なのがあるんだっけか。

「それで感謝状を渡す前に君と……その彼、前島君にも用事があったんだが、知り合いか？」

「義理の兄弟です」（なにひとつよどみのない自然な受け答え）

「そうか、なら一緒にでもかまわないだろう。来てくれ」

「え、は？」

署長は前島のふざけた言葉を、特に突っ込むことなく受け入れて歩き出す。

慌てて否定しようとしたが、謎に覚悟ガンギマリしている様子の前島の顔のせいで、タイムリングを逃してしまった。

「お前、なんか既成事実化しようとしてないか？」

「さあ……どうでしょう」

手段など選んでられないという強い意志を感じる。

多分、気のせいだと思うけど。

……気のせいだよな？



「ブラックたちじゃん、なにやってんだあいつら」

「お知り合いですか？」

「なんやかんやと説明を受けて、銀行強盗犯かもしれない相手の面通しに同席することになった……のだが。」

「なぜかマジックミラー挟んだ向こう側には、ブラックとグリーンとブルー・登場『無職男』と『駆逐艦：時津風』他が立っていた。」

「そしていまさらだけど、俺ブラックたちのちゃんとした名前しらんわ。」

「時津風や親潮と遊んでたときに世話になったというか、そのときに助けてもらってな、命の恩人みたいなもんだわ。ああ、その二人は面倒見てる姉妹のことなんだが」

「なるほど、時津風に親潮ですか……」

「二人の名前を反芻するように何度か呟く前島に、署長が問いかける。」

「それで、前島君は彼らに見覚えはあるか？」

「いえ……銀行強盗達は全員覆面をつけていましたので、正直なところ、彼らだったかど

うかはわかりません」

「そうか……」

その後、ブラックたちの声を前島に聞かせたり、俺との関係を聞かれたりしたが、と
りあえず結論としては証拠不十分だとかなんとかかんとかみたいなのがチラツと聞
こえた。

まあ、ブラックたちが銀行強盗だとしても驚かんが、思えばなんかプロっぽかったし。
だが、それが本当かどうかわからないなら、少なくとも俺とはいままで通りの関係で
いいだろう。

色々あったけど、一応命の恩人であるわけだし、それくらいはな。



「なんかいろいろありすぎて、腹が減ったな」

「以前行き損ねた料理店に予約を入れてあるんですが、一緒にいきますか？ 車で来て
ますので足もありますし」

「ああ、例のイタ飯屋ね。そうだな、行くか」

面通しの後、署長室に移動して感謝状をもらってから、先に用事を終わらせた前島と

合流した。

ブラックたちと話したかったが、まだ容疑が晴れたわけじゃないらしく、さすがに会わせてもらえなかったけど。

一応また会えたら会おうと、俺が言っていた旨の伝言を頼んでおいたので、機会があればまた会えるだろう。

「ところで先輩、先ほどの養子の話ですが……」

そんなわけで、飯屋に行くために前島の車に乗り込んで走り出すことしばらく。

終わったと思っていた話をほじくり返された。

「本気だったのかよ……とりあえずその話は今度おばさん（足柄）と一緒にのときにでもにしてくれ。さすがに、よくわからなすぎる」

「そうですか、まあ母なら喜んで許可しそうですが、考えておいてください。ふふふ、はつきりと拒否されないということは、可能性はゼロではなさそうですね」（愉悅顔）

「こつちも色々事情があつてな……しかし、こんなよくわからんことを考えなきやならん日が来るとは……」

まあ、前島家の養子になれば市の在留許可がおりるかもしれん。

もつとも、死ぬほど面倒なあれこれして養子になったところで、蜘蛛の糸程度の希望だ。

陽炎たちと一緒にいたいって欲が出なきや、こんなアホなことで悩まなくてすむんだらうが。

それもこれも全部、職が見つからないのが悪いんだけど。

「そういえば、明日海に行くとか言ってましたね」

「お前どこから聞いてたんだよ……まあ、バス借りてアイツら姉妹全員を海に連れてくことになってな。でもなんせ二十人近いから、男手や用心棒や保護者の意味も兼ねてお前も誘おうと思ったんだが、なんか結婚の準備とかで忙しそうだし——」

「行きます、やはりあなたは私の兄だ」

「ギャーツ!? ハンドルから手を放すなあああ!!」

急にハンドルから手を放して、俺の腕を握ってくる前島。

とつさにショートアツパーを打ち込み、ハンドルを握らせる。

「な、なに考えてんだ馬鹿野郎この野郎!?!」

「すみません、少し感極まってしまって……」

「つたく……ともかく、ついてきてくれるなら助かる。でもお前の性癖とモラルの高さもしつてるが、一応言つとくと、指一本でもアイツらに触れたらぶつ殺すからな」

「誓います、少女達が怖がるようなことはいたしません」(鋼の意志)

ならいいんだけど。

ただ、よく考えたらコイツ仕事やら用事やらどうすんだ。

「つかほんとにいいのかよ。勤め人がいくらなんでも急すぎるし、婚約者？　も、いい顔しねえだろ」

「問題ありません、優秀な上司や部下がいますし。それにまあ、婚約者もよく出来た人なので」

おうおう、良い会社に勤めてるやつは言うことが違うな。

そしてサラッとのろけられた。

ははは、コイツの頭に隕石とかおちないかな……。

などと、大人として当然のジェラシーを感じていると、けっこう前のほうを走っていたバスから、煙が上がっているのが見えた。

「……おい、あのバスなんか変じゃないか？」

「エンジントラブルでしょうか？　後ろのエンジン部分から煙が上がってますが……」

その瞬間、ハンドル操作を誤ったのか利かなくなったのかはわからないが。

バスが左右に揺れたかと思うと、バランスを崩して派手に音を立てながら横転した。

「まずい!？」

追突しないように、慌てて前島がブレーキをかける。

シートベルトで胸が圧迫されるが、後続車も近くになく、乗っていた車は無傷で停車。

痛む胸をさすりながら顔をあげると、横転したバスが火花を上げて道路を削りながら、20メートルほど滑ったところで停止したのが見えた。

農業地帯の道路を走っていたのが幸いな。

人気も少ないし、道路も広いからひとまず通行人やらのけが人はいなさそう。

前島が冷静に路肩に車を移動させ、俺も周囲を確認して車から降りる。

バスは停止したはいいものの、後ろから小さな炎が上がっていて、消える様子がない。

まずいな、消火器もないから下手に消せん。

「おいおいおい、えらいこっちゃんおい」

「これは……すぐに助けを呼ばないと」

「だな。俺は前で発炎筒を焚いてくる。お前は警察への連絡と、後ろに三角置いてこい」
(※三角＝三角表示板：追突を防ぐために設置する視認性に優れた三角形の赤い表示板のこと)

警察への連絡を前島に任せ、二次災害を防ぐために発炎筒を焚き、バスの10メートルほど前方に置く。

続いて、横転したバスの乗客を確認するため、フロントガラスの方に移動する。

中では運転手が血を流して気を失っており、バスガイドと思われる女も動かない。

まずいな、早く中から助け出さないと……って、おいおいおいおい！

「嘘だろ……」

そしてなにより最悪なのは、バスの乗客は殆どが小学生くらいの子供だった。

夏合宿か校外学習かはわからんが、かなりの数の子供がバスの中で倒れている。

「後ろから来ていた車に乗っていた方に、警察への連絡をお願いして、三角表示板を設置してきました。それで中の乗客は——」

手際よく事故処理を終えた前島が、バスの車内を見て言葉をのみ込む。

バスの後ろから出火、中の乗客は子供が多数のうえ意識がない、おまけに横転しているせいで通常の出入り口も非常口も使えない。

恐らく俺と同じく、早く中から助け出さないと最悪の事態になると確信したのだから。

だが一刻を争うからには、横転したバスをよじ登り、横の窓を割って、さらに上からこの数の子供やらけが人を一人一人引っ張り出してたら、色んな意味で間に合わん可能性が高い。

「……このバス、屋根か床に非常口があるタイプか？」

「天井側にはありませんでした。床側ならあるかもしれませんが……いえ、探す時間も外から開ける手段を確認する時間も……」

「……フロントガラスを破るしかないな」

後ろから出火してるので、そうするしかないわけだが。

でもこの手のバスのフロントガラスって、かなり頑丈に作られてるんだよな。ダメ元で拳に上着を巻き付けて殴ってみるが、やはりビクともしない。

事故の衝撃で割れてないあたり、わかってたんだが。

おそらく、複層構造で中に樹脂なんか挟まってる強化ガラスなんだろう。

「前島、車こつちに回してこい。ジャッキと手持ちの工具でこじ開けられないようなら、最悪、俺が車をぶつけてでもブチ破る」

「……いいんですか先輩、万が一があれば破滅しますよ？」

無駄を省いた短い言葉での確認。

だが言いたいことはわかる。

救急隊やらが来る前に、素人が下手に救助活動して、もしなにかあればどう責任をとるつもりなんだという意味。

そしてその結果、事態がさらに悪化したなら、当然罪に問われることを、罪を負うことになること。

もしかしたら、いまの無職の状況なんざ比にならないくらい最悪なことになるだろう。

わかってるさ。

「そうだな、だがこの状況でなにもしないわけにもいかん。俺も人生棒に振りたいわけじゃないが、そこは譲れないところなんだな」

「そうですか」

「だけどな、やるにしろやらないにしろ、決断をする必要がある。」

「そしてその決断が例え間違ってたとしても、責任はとるさ。」

「後悔はしない……とは、言い切れないのが情けないが。」

「だけどいまの状況だと、遅くなればそれだけ事態が悪くなるからな、のみ込むよ。」

「それに人生の破滅は既に経験済みだ。二度目が来たからどうってことないとは言わんが……まあ、慣れる。お前に迷惑……は、かけちまうが、責任は全部俺がとるから安心しろ」

「……馬鹿言わないでください、当然私も一緒ですよ。ここで死力を尽くし、少女らの命を背負えないようなら児童性愛者の名折れです」

「アホ。もうすぐ結婚するヤツがなにいつてんだ。大人しく——」

「悔しいが結婚を控え、伴侶と前途のある前島がわざわざ貧乏くじを引く必要はない。」

「そう思つて俺が思い直すようにと説得する前に、前島は車に向かつて走り出す。」

「……そうだったな、お前はいつだって俺より決断が早い。」

「いつだって、人生や命をかける決断を一瞬でやる。」

確かに、これ以上モタモタしてられん。

ふと、わずかに手が震えている事に気がついた。

ガラスを殴ったせいかとも思ったが、どうにも違う。

こりや多分……びびってるんだらうな。

でもなににだ？

『……いいんですか先輩、万が一があれば破滅しますよ？』

破滅、破滅か。

「……アホか、俺は」

昔に比べて随分と臆病になった自分に対して、思わず舌打ちする。

わかっている、わかっているよ。

例え、次の破滅が『アイツら』との別れになるかもしれない。

いまこの場には、俺と前島くらいしかない。

だから、やるんだ、俺が、前島が。

「頑張れよ、俺。頑張ってくれ」

自分が不甲斐なく泣きたくなるが、そうもしてられない。

目の前には助けを必要としている、アイツらとそう変わらない年の子供たちがいる。

だから、頑張れよ、俺。

— エピローグ? —

野分は警察署での用事を済ませた後、遅い昼食をとるために、陽炎型の姉妹達がよく顔を出す飲食店に向かって歩いていった。

だがその表情はどこかさえない。

というのも、もつと提督と一緒にいたい、可能なら一緒に昼食をとるという当然の気持ちがあつたので、自分の用事を早めに済ませた後、警察署前で提督が出てくるのを待つていたのだが。

知り合いらしき男と連れ立ってどこかに行く提督の様子が見えて、そうできなくなつたからだ。

車に乗り込む提督の後ろ姿を見て、出来るなら一緒について行きたい、だけど迷惑になるかもしれない、そんな考えが渦を巻く。

そうしている間に、提督を乗せた車はどこかに去って行った。

野分は明日になればしばらくはずっと一緒にいられる、だから今日はいいいんだ。

そう、自分に強く言い聞かせた。

もつとも、そう言い聞かせるために、ずいぶんと時間がかかったが。

さらに心を落ち着かせるため、ゆっくりと時間をかけて歩く。

そうしてラーメン屋『大湊』に到着すると、店内には十人ほどの陽炎姉妹達が食事中だった。

あまり大きくない店なので、ほぼ貸し切り状態である。

たまにこの店で複数の姉妹と出くわすことはあったが、今日の人数は最多記録かもしれない。

「あら、野分じゃない。今日は随分と妹たちに出くわす日ね」

そしてその中には、長女の陽炎の姿もあった。

陽炎は野分を見て片手をあげる。

霧島組の仕事なのか、黒服姿でラーメンをすすする陽炎。

その隣には、陽炎の妹で部下でもある、同じ服装の親潮がいた。

野分は軽く挨拶をし、陽炎の近くの席に腰を下ろす。

先ほど提督と会ったことを話すべきかとも思ったが、そう口にした瞬間、この場が陽

炎会議の会場になり、会議が始まるのは確定的あきらか。

なので報告はするつもりだが、せめて昼食を終えてからにしようと、野分はラーメン・チャーハン定食を注文する。

注文を終えた野分は、先ほどの出来事を思い出す。

それは自分の、自分たち姉妹の提督とのこと。

提督と出会う前、野分は姉妹達と一緒にいるだけで、自分はじゅうぶん満たされていると思っていた。

———

「離すものですか……」

満たされてなんていなかった。

提督をみつけたあの日、自分の中にはずっと空っぽだった場所があったことに気づいてしまった。

そしていまでは、様々なものがその空っぽだった部分に流れ込んでくる。

あの人に求められる自分になりたい、もっと触れたい、能力が欲しい、思い出が、共に過ごす時間が……。

野分は慌てて胸を強く押さえ、強く湧き上がった情動を抑え込む。

前はこんなに強く、感情が動くことはなかった。

だというのに、いまではほんの些細なきっかけでこういう事が起こる。

とくに今日のようなことがあった場合はなおさらだ。

どうしてこうなってしまったのか、それはわかる。

野分は刑事だった頃、そしていまの入国審査官の仕事でも、沢山の人間を見てきた。目に見えるものから目に見えないものまで、人は全て違う。

多種多様な、本当に数多くの人間と関わり、見てきた。

そして、気がついた。

その違いは、『なに』を持っているかどうかだと。

国籍、信仰、資産、知識、家族や仲間、価値観、心に身体。

なにを持っていてなにを持っていないかが、人の違いなのだ。

だが仕事上、どんな相手だろうと、野分は一切の情を挟まずに対応した。

そうである事を求められ、必要とされたからだ。

感情を制御できなければ、正確な行動を取れないのだから当然だ。

それは姉妹の磯風が、骨董品の鑑定をするときに求められる類いの能力なのかもしれない。

感情が薄い、そう思われるかもしれないし、実際そう言われもした。

だけど、仕事にはそれが必要だったし、そうであることは苦ではなかった。

そして、それはいまも変わらない。

変わったのは……いや、自分が手に入れたものは――

「あつ、のわつちやつほー」

「舞風・登場『無職男』と『駆逐艦：舞風』ですか」

思考の海に深く潜っていたところに声をかけられ、意識を現実に戻す。

見ると、新たに店に入ってきた同じ四駆の舞風がそこにいた。

隣に座った舞風と世間話をしていると、昼ドラを流していたテレビ画面が急に切り替わる。

映ったのは、どこか余裕の無さそうなニュースキャスターの姿。

『緊急速報です。きょう昼頃、艦夢守市第二農地区画で、多数の小学生児童を乗せた大型バスの事故が発生しました。バスは校外学習から戻る道中、エンジントラブルと思われる出火が原因で横転。横転後バスからは火の手が上がり、車体は炎に包まれ現在も炎上中です。また、消防隊や救急隊はいまだ現場に到着しておらず』

緊張したニュースキャスターの声と、語られる内容。

そのただ事ではない様子に、店内の視線がテレビに集中する。

『けが人などの詳しい状況は不明ですが、事故発生時、現場に居合わせた男性二人が現在も救助活動を行っており、バスが炎に包まれる前に、多数の児童が車外に運び出され救

出された模様です……あつ、はい、いま現場と中継が繋がりました!」

「マスコミが救急隊より早く現場に着いてるのつて、どういうことつすかね?」

「あー、この現場さつきやってた昼の生中継の番組、『ひるどき艦夢守市』だったか……あれのすぐ近くじゃねえか。多分事故が起こつてすぐに駆けつけたんじやろ」

店主と、従業員の会話が聞こえてくる。

彼らも厨房から身を乗り出して、テレビを見ていた。

画面が切り替わり、慌ただしい現場の様子が映し出される。

道路に寝かされた多数の子供たち、その間を走り回る人々。

そして、炎に包まれているバス。

どうやら救助にはテレビクルーたちも加わっており、カメラマン以外はみな走り回っている。

スタジオからの声についた現場のレポーターが、とつきに状況説明を開始しようとした瞬間、炎に包まれるバスから一人の男が飛び出してきた。

男は両脇に児童を二人抱えており、何故か上半身は裸だ。

その為か男の身体には生々しい火傷があちこちに見える。

その男に、これまた同じようにポロポロになった男が近づいて声をかける。

『先輩！ その子らで最後ですか!?!』

『ゲボフオゲホツ……いや、あと一人残ってるツ！ 足が引つかかって引つ張り出せん！』

『わかりました、ジャツキを使いましょう』

『よし、もってこい！』

片方の男が脇に抱えた子供を近くにいたクルーに預ける間に、もう一人の男が道路に転がっていた工具を手を持つ。

そして準備を終えると、その男二人は燃え上がるバスの中に躊躇無く飛び込んでいった。

「すげえっすね……あの炎の中に生身で突っ込んでいくなんて」

「大した男どもだ、ありや憲兵軍の強襲陸戦隊並みのクソ度胸だぞ」

ラーメン屋の店主と従業員が、そう口にする。

だが、それを見ていた陽炎型の姉妹たちは、信じられないものを見ている気分だった。
なぜなら――

「嘘だ……」

魂が抜けた声で、そうこぼしたのは、どの姉妹だったのか。

だけど、野分にはその気持ちが変わった。

なぜなら炎の中に飛び込んでいった男の一人、それが彼女たちの『提督』だったから。嘘、なぜ、どうして、あれ、でも提督なら、でも、やめて。

その場にいた陽炎姉妹たち全員の頭のなかで、ぐるぐると同じ言葉が浮かんでは消える。

彼女たちの心配を余所に、テレビにはようやく消防車と救急隊が到着するところが映っていた。

だが、消火作業に入る前に、先ほど炎の中に飛び込んだ二人の男が、少年を抱えてバスから飛び出してくる。

少年の口には布がまかれており、よく見るとシャツかなにかだとわかる。

それが男の一人が裸だった理由だと、テレビを見ていた一部の人間は気がついた。

飛び出してきた二人の男のうち、一人は意識を失い倒れる。

一瞬だったが、倒れた男の服は背中側が焼け落ち、赤黒く焼けただけに見える。慌ててカメラは少年を抱えた男に駆け寄る。

男は少年を道路に寝かせ、呼吸を確認し、心臓に耳をあてるが、その表情が厳しいも

のに変わった。

『……まずい、息も心臓も止まってる』

その場にいる、誰よりも深い火傷を負っているだろうに。

その場にいる、誰よりも疲れ果てているだろうに。

『頑張れ！ 頑張れ！ 頑張れ！』

男は、必死で少年に頑張れ、頑張れと叫びながら、心肺蘇生を繰り返す。

そのかいあつてか、何度目かの人工呼吸の直後、少年は咳き込み、息を吹き返した。

『よかった……よかった……』

男はそうこぼしながら、ボロボロになった手を挙げて救急隊員を呼ぶ。

そしてフラフラと立ち上がると、倒れたもう一人の男を担ぎ上げ、バンパーの凹んだ

緑の乗用車に向かって歩き出す。

慌てて別の救急隊員が男たちに駆け寄ったが、男はそれを制して口を開く。

『俺らはいいいから、子供を、子供を優先しろ……コイツは俺が病院に運ぶから……』

その言葉に、救急隊員はどうすべきか難しい判断を求められた。

確かに、バスからは助け出されたものの、いまだ多くの子供たちには手当が必要だ。

現状では救急車の数も、人手も限りがある、優先順位を決めなければならない。

しかし、二人の男の傷も軽いものではない。

むしろけが人の中では一番ひどいかもしれない。

一人でも多くの命を救うのであれば、この二人を優先すべきなのは確か。

だがその傷を負ってなお、仲間を担ぐ、力強いその姿。

それを見ると、もしかしてこの二人なら……という考えが湧いてしまったのだろう。

しかしその男は、仲間の男を担いで歩き出そうとしたところで、力尽き地面に倒れ込む。

慌ててカメラが倒れた二人に寄ったところで、画面がスタジオに戻った。

そのことに気がついたキャスターが、ハツとなって現場の混乱を伝える。

だが、その顔は真っ青だ。

なぜなら最後に映ったあの二人の男、その傷は素人目に見ても、かなり危険な状態だと……。

野分は足下が崩れるような感覚に襲われそうになる。

いま、この瞬間、おおきな傷を負って命の危機にある提督がどこかにいる。

助けに行かないと、まず頭に浮かぶが、身体が言う事を聞かない。

頭も、あしも、動いてくれない。

(え、あ……え?)

「野分ッ！ あんたは途中で時津風拾って、一緒に現場、第二農地区画に向かいなさい！」

陸おかならあんたらの脚が姉妹で一番速いし、現場なれもしてる！ 提督が搬送前なら二人で最善の判断を下して！ どころかの病院に搬送後で、協力を求められたら野分が残つて、時津風は提督最優先で動くように！ ともかく到着したらすぐ連絡！」

姉妹の殆ど誰も、頭が真っ白になってしまっていた中。

長女が叫んだその力強い言葉で、姉妹たちがハッと意識を取り戻す。

「野分ッ！ 返事は?！」

「りよ、了解です!!」

「よしッ！ 磯風は浜風に連絡して、軍の医療設備が使用出来ないか確認、繋がらないなら基地に直接行ってきなさい！ 不知火ッ、アンタは役所に行つて萩風に例の手続きを進めるように伝えて！ 最悪治療に提督適性者免許がいる!」

「任せろ!」

「わかりました!」

「黒潮は残つた姉妹とで手分けして、ここにいない姉妹に連絡、そのあと提督が運ばれそうな病院に散らばつて！ 電探つかつてもいいから、連絡は密に！ 私と親潮はここで指揮をとる！ さあ、行きなさいッ!!」

冷静な陽炎の判断、陽炎姉妹達の長女に対する信頼はとても強いが、いまほど陽炎の存在を強く感謝したことはない。

だがその一方で、野分の頭に一瞬『どうしてこの状況でそんなに冷静でいられるんだ……』と、何度も誰かに言われた言葉が浮かぶ、が。

「お願い、私たちからとらないで、お願い、死なないで、生きてて、お願い、死なないで、お願い、生きてて、お願い、お願い、お願い……」

そうブツブツと小声で、凄く速さで呟き続ける陽炎、彼女の震える手。

それを見て、野分は姉妹の誰よりも早く店から飛び出した。

そうだ、この状況で動揺していない姉妹なんていない。

だけど、私たちは艦娘だ。

どんな状況だろうと、動くことができる……いや、動けなければならぬ。

「離す……ものですかッ!!」

野分は歯を食いしばり、機関に火を入れ、時津風の元へと駆けだす。

ようやくみつけた大切なものを、けっして離さないために。

『僕』と『正規空母：蒼龍』

この世界は一度滅びかけたらしい。

しんかいせいかんという、怪物が現れて世界をめちやくちやにしたんだ。

けどどこからか現れた艦娘と、その辺にいた提督と、あと沢山の人たちが力を合わせてしんかいせいかんをやっつけて平和を取り戻したんだって。

その後、艦娘たちは妖精さん——

「なんか焦げ臭い?」

「ほんとだ、なんだろ」

校外学習で行った戦史時代博物館から帰る途中のバスの中。

クラスメイトの誰かがそう言ったのが聞こえた。

確かに後ろから焦げ臭い匂いがする。

なんだかおかしいなと、みんなが後ろを見たそのとき。

急にバスがぐらぐらと揺れて、世界がひっくり返った。

気がつくと、僕は道路に寝転がっていた。

周りには僕と同じように、仰向けに寝ているクラスメイトたち。

その間をたくさん大人のたちが走り回っている。

少し遠くには燃えるバスに水をかける沢山の消防車。

そして沢山の救急車が、クラスのみんなを乗せて発進してゆく。

僕はうまく体が動かさなかったのもあって、おとなしく寝ていることにした。

きつと無理に動こうとしたら、迷惑になる。

なんとなく空を見上げると、とっても深い青色だった。

まるで、蒼ねえちゃん髪の毛の色みたいだ。

『僕』と『正規空母：蒼龍』

『はわわわわわわ』

『あら、どこの子かしら?』

お父さんとお母さんの記憶はほとんどないけど。

蒼ねえちゃんと初めて会ったときは覚えてる。

たぶん三歳くらいだったと思う。

恐らく僕が覚えてる一番古い記憶のひとつ。

いまより小さい蒼ねえちゃんに抱きしめられて、それを見てたおばあちゃんが微笑んでた。

『は、始めましておばあさま! 私は隣の家のもので、それから航……艦、蒼……です!』

『まあ! じゃあもしかして……娘さんなのかしら?』

『はい、私は艦……で、えっと、実はこちらの……は、私の……みたいなんです』

『あらあら……でも見ての通りこの子は……だから大きくなるまで……ね』

『あ……確かにそうですね……』

『ごめんなさい、でもよかつたらそれまでは、この子のお姉ちゃんになつてもらえるかしら?』

『……』

『い、いいんですか!? お、お任せくださいおばあさま!!』

楽しそうに笑う二人の顔。

それが、僕と蒼ねえちゃんの最初の出会い。
たぶん。

それから蒼ねえちゃんは、気がつけばいつも側にいてくれた。
強くて優しく、でも僕が言うのもなんだけど、ちよつと甘えたがり。

『蒼ねえちゃん、僕のお腹に顔をうずめてなにしてるの?』

『お姉ちゃんは弟くん成分を摂取しています……すーはーすーはー』

『なにそれ?』

『定期的に摂取しないとお姉ちゃんが死んじゃう成分です』

『えっ!? それって大変なことなんじゃ……』

『そのとおり。なので弟くんにはごめんなさいだけど、たまにこうさせてもらいます。
すーはーすーはー』

『うん、それで蒼ねえちゃんが元気でいてくれるなら、幾らでも吸っていいよ』

『……ああ、だめ。どこまでお姉ちゃんを夢中にさせるのもう……すーはーすーはー』

……よしっ! お礼に弟くんにもお姉ちゃん成分を沢山吸わせてあげる!』(バリバリ)

『え、別に僕は吸わなくても平気だからいいよ……』

いまでは冗談だったつてわかるけど、当時は本気になっていた懐かしい思い出。
まあ、いまでもしょつちゅう吸われちゃうんだけど。

あと、恥ずかしくて友だちには言えないんだけど。

蒼ねえちゃんはいまでも僕と一緒に、お風呂に入りたがる。

この前も、

『ねえ蒼ねえちゃん……』

『ん？ なにかな弟くんよ。百数えるまでは、湯船からでちゃダメだよ？』

『いやそうじゃなくて、あのさ、さすがにもう僕一人でお風呂くらいは入れるよ……』

『な、なにいつてるの!! もし溺れちゃったらどうするの!!』

『だって、他の友だちに聞いても一人で入ってるつて言うし。それに、さすがに二人ではいるにはもうこの湯船狭いよ……』

『余所は余所、うちはうちだから！ それに湯船が狭いつていうならお姉ちゃんパワー（物理＋財力）で大きくするわ!!』

『えええ……そういう問題じゃないような……』

『むむう、ただでさえ出張でしばらく会えないのに、そんなこと言うならお姉ちゃんにも

考えがあります。ストライキです』

『すーとらいき？』

『そうです、お姉ちゃんはこのお風呂から出ません、あと弟くんも出られません。交渉がまとまるまでは、ずっとこのままです！』

『それって、お風呂のお湯が冷めちゃうんじや……』

『そうです、ほかにもお風呂につきりすぎてシワシワになってしまいかもしれません。それがいやならお姉ちゃんの要求を受け入れるのをおすすめします』

『えーつと……拒否しますっていうのは駄目？』

『それはおすすめしません、そうなった場合、お姉ちゃんは弟くんを脅迫罪と権利侵害の罪で訴えます。理由はもちろんお分かりですね？ 弟くんがお姉ちゃんとお風呂に入るのをやめるって言ったからです！』

『でも僕が訴えられてえつと、裁判になって刑務所に入ったら、どのみちお姉ちゃんとお風呂には入れなくなるんじや……』

『……つは!? うー……やだやだやだやだー!! 弟くんはお姉ちゃんと一生一緒に風呂に入るの!!』

結局蒼ねえちゃんが泣き始めちゃったので、そういうことになってしまった。

僕はなんとなくそのとき、蒼ねえちゃんには逆らえないのでは？ と、気がついてし

まった。

でも、そんなこともあるけれど、やっぱり蒼ねえちゃんは優しくて。

いまでも昔も、いつでも僕の側にいてくれた。

『弟くんは、その……お父さんやお母さんがいなくてさびしくない?』

『さびしくないよ、どうして?』

『……おばあさまから聞いたの。この前の授業参観のこと』

『えっと、確かに授業参観はあったけど、なにかあったかな?』

『うらやましそうに、父親と母親の両方がきてるクラスメイトのことを見てたって』

『うーん、うらやましいって言うより、ちよつとめずらしいなって思ってただけだよ』

『めずらしい?』

『うん、普通は片方だけなのに、両方來てるからめずらしいなって。それに僕にはおばあちゃんも蒼ねえちゃんもいてくれるから、ぜんぜんさびしくないよ?』

『そつか。お姉ちゃんもね、弟くんがいてくれるから……うんうん、他の誰にも埋められない寂しさを弟くんが埋めてくれるから、ちいいいつとも! 寂しくないよ!』

『あらあら、相変わらず仲良しさんねえ。ほんと、蒼ちゃんが母親がわりになつてくれるおかげで、助かるわ』

『はいおばあさま！ 弟くんのお世話はお任せください』

どうやら蒼ねえちゃんは僕の母親がわりらしい。

不思議な話、どっちかという姉がわりなきもするけど。

でも母親か……。

『ねえおばあちゃん、そう言えば僕のお父さんとお母さんは、どこにいったの？』

『お、弟くん!? ……それはその、ね……』

『いいのよ蒼ちゃん。そうね、ちゃんと話しておかないとね』

おばあちゃんは蒼ねえちゃんに抱きかかえられた僕の頭を優しく撫でる。

そして少し寂しそうな表情で話し始めた。

『ぼんのお父さんとお母さんは、お空にいるの』

『おそら?』

『そう、飛行機に乗ってただけど、高く飛びすぎてもう帰ってこれない遠いところについてしまったの』

『飛行機に乗って、もう帰ってこれない遠いところに……じゃあ僕もそこに行ってみないな』

『だ、だめ!! 弟くんはずっとお姉ちゃんと一緒にいるの!!』

『ふふふ、おばあちゃんもいつか行くつもりだけど、でも、そこに行っちゃうともう帰っ

てこれないところだから。ぼんが行っちゃうとおばあちゃんもさびしいわ……だから、まだ行くのは我慢してくれるかしら?』

『うん、僕もおばあちゃんと会えなくなるのは嫌だから、その、蒼ねえちゃんとも』『弟くん……ううう、お姉ちゃんはながあつてもずっと一緒にいるからね……』

ちよつと苦しいくらいに、蒼ねえちゃんが僕を抱きしめる。

蒼ねえちゃんは自分のことよりも、僕のことを大切にしてくれてるんだなって、なんとなく感じた。

『そうだ、まだずっと先だと思うけれど、もしおばあちゃんが死んじゃったら、ちよつとでいいから遺骨を空にまいてくれないかしら?』

『はいっ?』

『そう、死んじゃったあとに身体を焼いて骨だけにするんだけど、その骨を細かく砕いて海にまいたりすることがあるの。だから、おばあちゃんもいつか、ぼんのお父さんやお母さんのところに行けますようになって。おまじないのために、骨をちよつとだけ空にまいて欲しいのよ。もちろんいまよりもずっと先の話、ぼんが大人になってからでいいから』

『………おばあちゃんがそうして欲しいなら、僕、頑張るよ』

『ふふふー、そんな日は当分こないだろうけれど、もしもそのときはお姉ちゃんに任せな

さい弟くんよ。いまはまだ秘密だけど、お姉ちゃん実は空のことに関しては色々と専門家で——』

そんな思い出の光景が、映画みたいに流れては切り替わっていく。
あれ、これってもしかして、そうまとうってやつなのかな？

「よかった……ぼん、本当に良かった」

目を覚ますと病院のベッドの上で、側にはおばあちゃんがいてくれた。
どうしてこんなところにいるのかわからない僕に、おばあちゃんはゆつくりとなにが

あつたか話してくれる。

どうやら僕たちが乗っていたバスがえんじんとらぶるってというのが原因で、事故を起こしてしまつたらしい。

とてもひどい事故だつたみたいだけど、幸い僕の怪我はたいしたことなくて、クラスメイトや先生、運転手さんやバスガイドさんも全員無事だつたらしい。

よかつた。

「心配かけてごめんね、おばあちゃん」

「いいの、いいの……ぼんが無事で本当に良かった……」

怪我はたいしたことなかつたんだけど、僕はあの後けつこう長い間。

だいたい丸一日くらい眠っていたんだとか。

そのあと、様子を見るためにやって来た看護婦さんに薬をもらつて飲みつつ、これからのことを聞く。

怪我は大したことはないんだけど、いちおう精密検査？

とかで、まだ入院の必要があるんだって。

検査は明日の朝にするそうだから、今日はゆっくり休むように言つて、看護婦さんは出て行った。

「お、弟くんが目を覚ました気配!!」

「あ、蒼ねえちゃん」

「おろろくんよがっだよおおおおおお!!」

看護婦さんと入れ替わるように、蒼ねえちゃんが病室に入ってくる。

そしてすぐに僕を見て、蒼ねえちゃんは僕の方に飛び込んできた。

僕は泣きながら抱きついてきた蒼ねえちゃんを抱きしめる。

「心配かけてごめんね、蒼ねえちゃん」

「いいのおおおお、おとうとくんが無事だっただけで、それだけでほんとうによがだのおおお!!」

泣いちゃった蒼ねえちゃんが落ち着くまで抱きしめてあげて、しばらく。

さつき飲んだお薬の効果らしく、だんだん頭がぼわつとしてきた。

「あれ、ちよつと頭が熱くなってきた……」

「ああ、お薬のせいね。大丈夫だよ弟くん、ゆっくりおやすみ」

「わかった、おやすみ……」

ずつと寝てたから眠いわけじゃなく、意識はなんとなくあるんだけど。

僕は言われたとおり、目を閉じて大人しくしていることにした。

「……それで、例のぼんたちを助けてくれた方たちの容体はどうなのかしら？」

「軍の医療施設に運ばれて、特殊な緊急再生治療を行ってるそうですが……おそらく」

人は助からないだろうって。それともう一人も重体で、意識がもどるかも怪しいそうです」

頭がブーツとして身体も動かないけれど。

なんとなくおばあちゃんと蒼ねえちゃんが、なにかを話しているのが聞こえる。

「そう……なにか出来る事があればいいのだけれども」

「あとあまりよくないことなんです、どうもバスの運営会社がその二人が事故の原因じゃないかって方向で、訴える準備をしてるって噂もあります。あつ、当然そんなことをさせるわけなくてですね。うちの法律事務所の所長、竜崎っていう艦夢守市で一番の弁護士が、そのうちのお一人の義父に雇われたそうで、絶対そんなことをさせないと思います」

「よかったわ……ごめんなさい。この歳になっても怒ってしまふことつてあるのね……ちよつとドキツとしちやつたわ」

「はわわ、大丈夫ですかおばあさま!? なんてしたらここで横になられて、あ、弟くんの入院手続きやら学校との連絡やらは全部私がやっておきますので、ほんと心配なさらず！」

「……本当にありがとう蒼ちゃん。あなたがいてくれなかったら、きつとここまでぼんを育てられなかった」

「え、そ、そう言っていただけるのは光栄ですけど……どうしたんですか突然？」

「ふふ……ご存じの通り私はおばあちゃんだから、残された時間はあまりないの。だから言えるうちに、きちんとお礼を伝えておかなくちゃって思ってた」

「なにを言うんですか!？」 おばあさまは、まだまだ長生きできます!」

「そうだよ、なに言ってるのおばあちゃん。」

おばあちゃんはお父さんやお母さんみたいに、どこかに行かないよね？

「あら、怒られちゃったわね。……でも、どうにもこの歳になると、死について考えることが多くなるの。できることなら眠ったまま逝きたいわね。ここ最近は何朝目覚めると、今日もまだ生きてる、よかった、妖精さんの贈り物だって、そう思うことも多くなった」

「そんなことにはなりません。赤城さんもいらっしやいますし、この病院にいるなら——」

「そうそう赤鬼先生、彼女には根負けしたわ。あの精密検査を受けてください、この精密検査を受けてくださいって何度も言うものだから、入院が長くなっちゃってね。本当は、はやく退院したいのに」

「当然ですよ、おばあさまを心配してるんです、勿論わたしも」

「ふふ、私にはぼんの夏休みの宿題の方が心配ねえ……。そうね、少し弱気になってた

わ、ごめんなさい。確かにいつ死ぬかはわからないけど、いまこのときを大事にしな
きや。それにまだ死ねないわね、ぼんが寂しがっちゃうから」

「そうですよ。でも意外です、おばあさまが病院嫌いだったなんて」

「病院が嫌いな訳じゃないのよ……若い蒼ちゃんにとつて、一日はとても早く感じるか
も知れないけど、いまの私にはとても長くて貴重なものなの。だから病院で過ごすのは
勿体ないって思っちゃってね……」

「むー、艦娘といえど私も若輩者には違いありませんから。むむむ、人生経験を持ち出さ
れてしまうとかないません」

頭がぼわつとしてるので、話の内容はよくわからないけど。

おばあちゃんと蒼ねえちゃんは、なんだか楽しそうに喋っている。

「ふふ、伊達に歳は食ってないから、その分色んなものを見てきたわ。戦争も経験した
し、親しい人や大切な人との出会いも、別れも沢山経験した。

もちろんいいことも沢山あったわ。新婚旅行で南の島に行ったとき、ホテルで三代目
の那珂ちゃんをすぐ近くで見たことがあったの。生の歌も聴けてね、とてもステキな
ひとときだった。

そうそう、五歳の時には、マザー鳳翔の結婚式にも参列したわ。世界中から集まった
人たちのパレードが本当にすごくて、いままだ生きてあの光景を見たことがある人は何

人いるかしら?。」

(※マザー鳳翔：戦史時代最初期に建造された軽空母鳳翔の艦娘。歴史上最も長く生きた艦娘であり、艦連や鳳翔街の設立に関わった)

「思い返すと本当に沢山のものを見てきたけれど、まだまだ見たいものがあるわね……。せめてぼんの卒業式には必ず出たいわ」

「はいはい! それ私も出たいです!」

「ふふふ、そうね、一緒に出ましょう」

なんだろう、卒業式はまだ先のことのはずなんだけど。

なぜかそこにはおばあちゃんや蒼ねえちゃんだけじゃなくて、赤城さんや加賀さん、翔鶴さんに瑞鶴さん、飛龍さんやアークロイヤルさん、他にも沢山の誰かがいる風景が浮かんだ。

不思議。

「古い先短いからこそなのか、いまの私には一つ一つの出来事がなによりも大事なの。蒼ちゃんみたいに若い人にはわからないことかもしれないけど……」

「わかります、弟くん……いえ、提督との一つ一つの出来事は、私にとつても、なにより大切なものですから」

「あらあら、そう言われちゃったら、今度はこつちがかなわないわねえ……ふふふ」

あれ……もしかして、蒼ねえちゃんは艦娘なのかな？
つて、そんな考えがふわつと浮かんだ。

『あねーたん？』

『はい、蒼おねえちゃんですよー』

『あおねーたん』

『あーもう、可愛すぎる……さすが私の提督、かあわいい♪』
『てーとく？』

『コホン……そうですよ提督、私は航空母艦、蒼龍です。空母機動部隊を編制するなら、私もぜひ入れてね！……なーんて、ね』

『そうりゆう？』

『………つは!? いけないいけない、危うくミッドウエーに突入するところだったわ……でも、嬉しいなあ。提督に名前を呼んでもらえるのがこんなに嬉しいなんて……嬉しいなあ』

ああ、確かに昔、そう言つて嬉しそうに笑つてた蒼ねえちゃんの思い出が蘇る。
そうか、それは、それなら……そういうことなんだなつて。

不思議と当然のように、僕は受け入れることができた。

赤城さん、瑞鶴さん、加賀さん、翔鶴さん、飛龍さんにアークロイヤルさん。

僕を提督と呼んで、僕の艦娘だと言ってくれた彼女たち。

気がつけば当然のようにその場に、そうであるようにいてくれて。

それでいて、いまだできる自分の役割を自然に果たすように生きるお姉さんたち。

きつと蒼ねえちゃんもそうなんだとしたら、なんだか不思議と落ち着けた。

だってそれは、ずっと蒼ねえちゃんと一緒にいられるということでもあるから。

「失礼します!! 提督!! 大丈夫!?!」

「ちよつと瑞鶴、ここは病室よ、もうちよつと静かに……」

「これだから五航戦は……」

「にやにい!?!」

「はいはい二人とも、提督はお休み中のようですから喧嘩しないように。あとこの病院で私の提督の眠りを妨げておいて、無事でいようだなんて甘い考えを持っているなら捨ててくださいいね?」

「ッヒ!?!」

「ほんと、静かにしてくれ……」

なんだろう。

たぶん赤城さんと木曾さん、それに瑞鶴さんに翔鶴さんと加賀さんかな？

五人が病室に入ってきたみたい。

お見舞いに来てくれたのかも。

「あ、おばあさまでしようか。私はその、お孫さんの艦娘の翔鶴です」

「は、始めまして私は瑞鶴です！」

「ご挨拶が遅れて申し訳ありません。私は艦娘、加賀と申します」

「あらあら、これはご丁寧に。みなさんのことは孫からよく聞いています。類い稀な縁の巡り合わせではありますが、これも運命。どうか孫のことをよろしくお願いいたします」

おばあちゃんがそう言うと、挨拶した三人が慌てて頭を下げたあと、ホツとした様子の空気が伝わってきた。

よかった、おばあちゃん艦娘、特に正規空母の艦娘さんが好きだから。

僕が紹介できなかつたのは、ちよつと残念だけど。

「ところで、提督のベッドの下にいるのはどちら様かしら？」

と、赤城さんがそう言った瞬間、ピリツとした空気になる。

僕だけじゃなく、部屋みんなが驚いた気配。

しばらくして、ベッドの下からもぞもぞと誰かがはい出てくる音が聞こえた。

「……あなたもしかして艦娘の大鳳？」

「……………だつたらなに？」

「あらあら、これは可愛い艦娘さんねえ。もしかしてぼんのガールフレンドさんかしら？」

「そのとおり……の、予定」

「……え？」

赤城さんと加賀さんと、蒼ねえちゃんと翔鶴さん瑞鶴さんの声が重なって聞こえた。僕も思わず心の中で「え？」って言ってしまった。

どうやら大鳳さんは僕のガールフレンドらしい。

「そつ、そんなの提督の最初の艦娘にしてお姉ちゃんであるこの蒼龍が認めないわ!!」

「最初なだけ、一番は私」(プイツ)

「こ、この泥棒猫!! ていうか……あれ、大鳳ってこんな性格だつたっけ？」

「艦娘変わりの最中じゃないかしら？ あの時期は性格や身体が不安定になりがちですから。私にも覚えがあるわ」

「あー、確かに翔鶴ねえって艦娘変わりの時期、スケバンみたいになかつこや言動してたつて誰かから聞いたことがあるような……」

「ちよ、瑞鶴それはいわないで!!」

「私も少し覚えがありますが……赤城さんはどうでした?」

「わ、私はこれと言っておりませんでしたよ……」

「あ? 嘘つけ院長。あんた艦娘変わりのあたりはバリバリのゴスだっただろうが。黒いレースをこれでもかかってあしらった衣装着てドギツイメイクしてたし、あと棺桶の中で寝たりしてたのしつかり覚えてるぞ」

(※ゴス＝独特の衣装や思想をさすサブカルチャーの一種、の、はず)

「……………木曾婦長の〈ダークネス＋墮天使〉に比べればかわいいものですよ。たしか黄金郷の瞳って書いて、エルドラードアウゲンって読むんですたっけ?」

(※〈ダークネス＋墮天使〉||いにしえの時代より一万年周期で生まれでる、伝説の闇の末裔。〈ダークネス＋墮天使〉はその身に暗黒を宿しながらも、闇の波動に呑まれないように抗いつつ、前世で離ればなれとなった己の半身(提督)を探し、封印されし片目(黄金郷瞳)を輝かせながら夜の街を駆け抜ける!! あと、赤城と木曾は幼馴染)

「OKだ院長、俺たちは艦娘変わりの時なにもなかった。……そう言うことにしようじゃないか」(震え声)

なるほど、木曾さんは〈ダークネス＋墮天使〉

エルドラードアウゲン
そして黄金郷瞳……なるほど。

「それよりも大鳳さん！　なんで弟くんのベッドの下なんかにしたの!？」

「……私が近くにいれば怪我なんてさせなかった。だからこれからはずっと離れず側にいる。起きてるときも寝てるときも、もう絶対離れない」

「ぐっ、それは確かに一理ある……な、ならこれからはこの蒼龍がずっと近くにいるわ!!」

「あら、弁護士の仕事は大変でしよ蒼龍さん。それよりも比較的自由のきくこの私が——」

「百万石海運重役の加賀さんがなに言ってるんですが、ここは私が——」
「Pentagon海運重役の翔鶴ねえもいつしよでしよ。それより提督さんの側にはこの私が——」

「モデル業にシヨップ経営にデザイナ―、そんな多忙な瑞鶴さんに務まるとは思えませんが……ですが安心してください。提督にはおばあさま共々ずっとこの病院にいてもええれば、私が常に側にいられますから」

「いや院長、あんたがある意味一番激務だろうが。自宅に帰ったのもう何ヶ月前だよ……」

「おばさん」　「私たちは自分のことで手一杯、つまり私が一番」

「「「「あ？」」」」

「あらあらあら、ふふふ、ぼんは女の子にもてるはねえ。まるでおじいさんにそっくり、ふふふ」

おばあちゃんがとても嬉しそうに微笑んでいるのが、なんとなくわかった。

「ほんと、こんな沢山の艦娘様に慕われて……ぼんは幸せ者ね。おばあちゃんも安心だわ」

うん、僕にはなぜか沢山の艦娘さんがいてくれるし。

なによりおばあちゃんがいてくれるから。

間違いなく幸せ者だ。



そしてその次の日の朝。

僕は検査の結果、無事退院できることになった。

なので、その報告のためにおばあちゃんの病室に向かう。

病室に入るとおばあちゃんはまだ眠っていた。

早起きのおばあちゃんにしては珍しい気がする。

起こすのも悪いので、部屋の椅子に座っておばあちゃんが起きるのを待つことにし

た。

おばあちゃんが起きたらおはようって言って、それから……そうだ、戦史博物館で会ったグラーフさんの話をしてみよう。

グラーフさんがくれたコンパスのことも、おばあちゃんならなにか知ってるかもしれない。

僕は他にも沢山話したいことがあったので、なにかから話そうか色々考える。

ふと、病室の窓から見える景色が目に入る。

この部屋は一番景色がいいって、赤城さんが言ってた。

その窓から見える、街の景色は確かにとても綺麗だ。

ここは『艦夢守市（かんむすし）』

大きな港があり、その港と街の周りをぐるっと山に囲まれている、そんな立地の場所。都会とまではいかないけれど、それなりに騒がしくてそれなりに穏やかな大きさの街。

そしてこの街には一つの噂がある。

それは提督適性者が集まるという噂だ。

この街には沢山の人間と、居るかもしれない提督適性者たちと、その噂を聞いてやってきた割と多くの艦娘たちが平和に暮らしている。

つまり、ここが僕とおばあちゃんの住んでいるところだ。

でも、そのあといつまで待っても。

おばあちゃんは目を覚まさなかった。

『二人の男』と『潜水艦：まるゆ』 前編

あの笑顔を、忘れません。

彼らはあの旅を映画みたいだ、そうおっしゃってました。

アウトローの二人が、途中でヒロインを拾って旅をする、そんな内容の。

残念ながら、ヒロインはこんなですけど、えへへ。

でも、あの人たちは間違いなく、映画の主人公みたいでした。

とても、とてもすてきな……人たちでした——

■さいしよの日■

うだるような暑さの中、辺りには蝉の声が鳴り響き、空には噴煙のような入道雲。

まさに夏真つ盛りの季節の空、その下に広がる森に通った一本の道路。

その道路脇には緑の乗用車が停まっており、車の前には二人の男が立ち尽くしていた。

「おい前島、どこどこだよ」

「山道でしよう、どこか、見知らぬ土地の」

「つまりなんだ、迷ったってことか？」

「……その認識であっているかと」

「なーんでそんな事になってんだよ」

「火野先輩がかっこつけて、走行中の車窓から地図を投げ捨てたからですよ……」

「あれ、そうだったか？　つか、いちいち名字付けなくてもいいぞ、どうせ二人しかないんだ」

言葉を交わし合う二人の男。

どちらも瘦身長躯ではあるが、その印象はまったく違っていた。

火野・登場『無職男』と『駆逐艦：陽炎』等と呼ばれた方は、おおざっぱさを絵に描いたような風体で、短くなつた煙草を口にくわえながら、そこらの格安の床屋で雑に切りそろえられた髪をガシガシと掻いている。着ている服も薄手の黒のジャケットで、おまけに乱暴に袖をまくっているので皺だらけ。さらにその下は、よれて黄ばんだ白のT

シャツだ。

よく言えばワイルド、悪くいえば無頓着といった着こなしである。

もう一方の前島・登場『意識高い男』と『重巡：愛宕』等と呼ばれた方は、綺麗に固められたオールバックの髪型に、品のあるメガネ。服装も丁寧にアイロンがけされた白のポロシャツに、色落ちのないジーンズと、爽やかなもの。だが、どうにも鋭すぎる目つきで、ヤクザの若頭かなにかが避暑地で過ごしているようにしか見えない。

「そもそも、これじゃ目的地以前に、どっちに行けば海があるのかもわからん」

火野は古ぼけた写真を手に、そうこぼす。

写真にはエメラルドグリーンの海岸と、その近くに建つ灯台の風景。

そして砂浜に向かって歩いていく、水着姿の少女たちが小さく隅に写っていた。

「せっかく母の車を借りたんですから、そのステキな眺めの海岸にたどり着きたいですね。古い写真に写った海岸をあてもなく探すという、正気を疑うような目的の卒業旅行ですが。せめてなにか思い出の一つでも作りたいものです」

前島がため息を吐きながら、そうぼやく。

先日、バイト先で見つけたという写真を持ってやって来た火野が「この海岸見つける旅にどうぞ！」と、言っただけの前島の元にやって来た。

特に夏休みの予定も無かった前島は、そのどう考えても計画性ゼロの思いつき旅行

に、無理矢理付き合わされた体である。

「しようがねえだろ、国外や国内の名所旅行に行けるような金なんざねえんだからよ」
「だからって卒業旅行も兼ねる事は無かったでしょうに」

「つつてもどうせお前、一緒に行くようなやついねえだろうが」

「……まあ、そうですけどね」

因みに火野は一浪して大学に入ったため、二人とも今年卒業である。

苦虫をかみつぶした様な表情の前島、火野が吸い終えた煙草を地面に落として踏みつける。

「おら、次は俺が運転するから替われ」

「……ぶつけないでくださいよ」

火野は「さあな」と吐き捨てながら運転席に乗る。

前島は肩を軽くすくめて助手席に乗り込んだ。

火野は前島がドアを閉めるかどうかのところで、アクセルを踏み急発進。

シートベルトもしていない状況での急発進に、前島が顔をしかめる。

「せめてドアが閉まるまでは待つて欲しいのですが……」

「うるせえ」

火野は前島の抗議もお構いなしに、片手で器用に煙草を取り出しくわえる。

そして使い捨てのライターで火を点け、車の窓を全開にした。

「おい、ラジオつけろ」

「じゃあ窓しめてください」

「は？　なんでだよ」

「音が外に漏れて迷惑ですから」

火野は人つ子一人居ない森に囲まれた山道をちらりと見て、呆れたように「アホか」と呟く。

「迷惑って、狐や狸にか？　お前いつのまに動物愛護団体に入ってたんだよ」

「基本的なモラルの話ですよ。それに誰かいるかもしれないでしょう」

頑なな前島に言う事を聞かせるのが面倒に思えた火野は、渋々煙草を消して窓を閉める。

だがどうにも釈然とせず、一言文句を言ってやろうと口を開いた。

「あのなあ、こんな山道に……居たわ」

「は？」

火野が前を見る、つられて前島も。

進行方向の前方に見えるのは、山道の端で片手をあげてヒッチハイクをする、背の低い子供の姿。

運転していた火野は少し考え、前島に問いかける。

「どうする?」

「止めましょう、少女が助けを求めているなら応じるべきです」

火野はそれを聞いて「またいつもの病気だよ……」と、つぶやき子供が居る場所の二十メートルほど前で停車する。

サイドブレーキを引いて、エンジンを止めずに待つ火野に前島が問いかける。

「前に止めすぎでは?」

「いいんだよここで。お前の言うとおりさっきのが女の子なら、こんな怪しい男二人の車に乗るか迷うだろ。考える時間くらいやれ」

前島はバックミラーを見ると、がらの悪い二人の男が映っていた。

自分の姿ながら、随分と厳しい見た目だと前島は改めて思う。

「まあそれは否定できませんね」

「だろ。どうだ? あの子が乗ってくるか今日の昼飯賭けるか?」

「……じゃあ乗ってこない方に賭けます」

「この賭けは無しだな……」

苦笑する二人、そして火野はサイドブレーキを戻そうとしたが。

コンコン

車内に、運転席側のドアをたたく音が響く。

二人が窓に目をやると、ドアを叩いた人物の頭の部分だけが見えた。

背が低いので、頭の半分ほどしか見えないのだ。

二人はお互い少し戸惑った表情で顔を見合わせる。

少し間を置いて火野が窓を開けると、先ほどヒツチハイクをしていた、大きなリュックを背負った十歳くらいの小さな子供が立っていた。

所々に泥がついた白いＴシャツと半ズボンの服装に、少し日に焼けて薄汚れた肌をみると、少年のようにも見える。だが、艶のある短い黒髪と大きくてぱっちりとした黒い瞳が、その子が少女である事を感じさせた。

火野をじつと見上げていた少女は、もごもごとなにかを言いたそうにしているが、火野のしかめ面に驚いたのか、うまく言葉を紡げずにいる様子。

「……………どこに行きたい?」

しかめ面をしていた自覚があった火野は、なるべく優しい口調で少女に聞く。

その声に少しだけ緊張がほぐれたのか、少女はヨシつと聞こえてきそうな間を一拍置いた後、胸を張って口を開く。

「あ、あの……………どこでもいいので、海まで乗せていってくれませんか?」

か細くかわいい声だが、どこか力強くもある不思議な声。

その言葉を聞き、前島をちらりと見る火野。その視線に力強くうなずく前島。火野はため息を一つ吐くと、後ろのドアのロックを解除した。

「乗れよ、どうやら目的地は同じみたいだ」

「はい！　ありがとうございます！」

火野の言葉を聞いて、少女は力強く返事をした。

『二人の男』と『潜水艦：まるゆ』

この世界は一度滅びかけた。

その昔、深海棲艦という未知の生命体によつて、人類が絶滅寸前に追い込まれた為だ。だが、もはやこれまでと思われたそのとき。艦娘という麗しき少女たちが現われる。かつての艦船の魂を宿し、勇ましく戦う超常の存在である彼女たちは、生き残つていた人類、その中に存在した『提督』と呼ばれる適性を持った人物たちの指揮下に入り、長きにわたる戦いの末に深海棲艦を滅ぼした。

そうして人類は救われたのでした、めでたしめでたし。

それはこの世界でおとぎ話のように語られる、現実に起こつた昔話。

そして、その昔話には続きがある。

人を遙かに超越した生命体である艦娘たちはその後、提督と呼ばれた者たちとの間に数多くの子孫を残し、その子孫たちからも艦娘が生まれるようになった。

やがて世界は徐々に復興し、ようやく深海棲艦が現われる少し前ほどに文明も元に戻つた現代。

深海棲艦が消え去つたその世界は、大きく分けて二つの種族によつて成り立つていた。

——人間と、艦娘である。

※ ※ ※

「海つつつても色々あるけどよ、どこら辺とか希望あるか？」

「えっと、できれば南の方、太平洋側だと助かります」

「おつ、いいね。あっちの方は海が綺麗だろうからな、んじやまあひとまず南に進路をとるぞで」

「ありがとうございます！」

少女の答えを聞き、火野は辛うじて車に残った最後の希望である、方位磁石を頼りに車を走らせる。

前島はその様子を見て、どこかあきらめたような表情を浮かべる。そして意識を切り替えるように、少女が座る後部座席に視線を向けた。

「しかし、どうしてあんな所でヒッチハイクしていらしたの？」

「はい！ まるゆは海にいきたいんです！」

まるゆと自ら名乗った少女は、車の後部座席に座りながら力強く答える。

彼女の隣には、その小さな身体と同じくらいの大きさに見える、パンパンに膨れたリュックサックが置かれていた。

「いや、それはお聞きしましたが……あの、まるゆさんとお呼びしてよろしいでしょうか？」

「はい！ えっと、おにいさんたちは……」

「俺は火野だ、よろしくな」

「私は前島と申します。よろしくお願いしますね、まるゆさん」

「はい！」

「それでその、まるゆさんは……」

少し探りを入れるような慎重さで話を進めようとする前島。

その言葉に純真な瞳で受け答えをするまるゆ。

火野はそんな二人を横目に、ラジオのスイッチを入れる。

ジジジッと、一瞬電波を受信するような音が鳴るが、どうもうまく周波数が合わない。

そのうち受信するかもしれないという一縷の望みにかけて、火野はスイッチを入れっぱなしにしておき、ひとまず運転に集中しようとした、が。

バックミラーに映る謎の物体を見て固まる。

「……おい、後ろのアレ、なんだ？」

「は？」

「はい？」

前島とまるゆの二人が同時に後ろを振り返る。

見ると三人が乗る車の後ろからすごい勢いで迫ってくる、黒いもやのようなものをま

とった巨大な物体。

「田舎はすごいな、あんなのがいるのか」

「私もあのような存在を目にするのは初めてですね……しかしアレはいつたいたいなんでしょうか？」

「なんだかブヒブヒ言いながら走ってます」

「ぶひぶひっ」

まるゆの言葉を聞いて目をこらす二人の男。

よく見ると確かにそれは、四足歩行で走るなにかの動物に見えた。

問題はそのサイズだ、明らかに三人が乗る車より大きい。

それはまるで、神話の時代に存在した森の主のような巨大さである。

「もしかしてあれ、イノシシかなんかか？」

「なるほど、確かにイノシシのようですね。サイズは規格外ですが」

「……なんでそんなのが追ってくるんだよ」

「あつ、そういえば森の中で迷子になってた、この子を拾ったんでした」

まるゆはなにか思い出したように、リュックの中からボールくらいの大きさの、毛むくじやらの物体を取り出す。

毛むくじやらの物体は、ブヒ？ と、一声鳴いて、つぶらな瞳で車内の三人をみつめ

てきた。

「お母さんを探してあげようと思ってたんですが……えへへ、すっかり忘れてました」
照れを隠すように、笑う少女。

全てのものを吹き飛ばす勢いで、走行中の車に猛追してくる巨大なイノシシ。
その勢いは、子を奪われた親のそれ。

男二人の脳内に、恐竜の玉子を奪った研究者が、その親に追いかけられる映画の映像がフラッシュバックした。

「あの先輩、私わかってしまったんですが……」

「言うな前島、俺もだ」

その瞬間、スイッチを入れっぱなしだったラジオが電波をキャッチ。車内に受信された音楽が、大音量で流れ始める。

「デデンツ！ と勢いのある入りで始まるのは、国民の九割以上が知っている伝説の演歌。」

「なーんでこのタイミングで、これが流れるかねえ」

「あつ、これお母さんが好きだった曲です！」

「そ、それより先輩早く振り切ってください！ 追いついてきますよー！」

「え？ あ、あの、この子を森に帰してあげたほうが……」

「賭けるか？ 俺は車止めた瞬間に、三人ともスクラップにされる方に賭けるぞ」
「なにをのんきなこと言ってるんですか先輩!? ダメですまるゆさん！ あの親イノシシは怒りで我を忘れています！」

「へ？ へ？ へ？」

「面白くなつてきたなオイ。掴まってる、舌噛むぞ！」

「頼みますから丁寧に扱ってくださいよ!! 傷でも付けたら母に殺されてしまいます!!」

どこか楽しそうな表情で、峠を攻める走り屋顔負けの運転をはじめめる火野。

見た目の割に気が弱いのか、情けなく叫ぶ前島。

なにが起きているのかよくわかっていないまるゆ。

これが……これから始まる三人の旅。

その出会いと始まりだった。

※ ※ ※

「おい前島、ここどこだよ」

「廃園したテーマパークでしょう、おそらくですが」

「てーまばーくですか？」

「なーんでそんなところに、俺らはいるんだよ」

「火野さんがすごい運転で、イノシシさんと追いかけてこしたからですね！」

「……ご解説どーも」

ちなみにイノシシからは辛うじて逃げ切った……というより。

開いた車の窓から、イノシシの子供であるうり坊が逃げ出したおかげで、なんとか見逃してもらえた形になっただけであるが。

だがその代償とでも言うべきか、土地勘の無い場所を地図もなしに逃げ回った一行は、見知らぬ場所に迷い込んでしまっていた。

「ところで先輩、ここは海からどれくらい離れてるんでしょうか？」

「知らん。が、多分近くはないだろうな」

「どうしてですか火野さん？」

「どうしてって、海の近くならカモメが飛んでるだろ」

めんどくさそうに煙草を吸いながら、空を指さす火野。

つられるように前島とまるゆが空を見上げる。

上空には、カモメどころか生き物がまったくいない夏空が広がっていた。

「しかし……よりによって遊園地かよ」

「えっ、ここって〃遊園地 〃だったんですか!? まるゆ、初めて見ました!!」
「頭に〃廃墟の 〃がつくけどな……」

げんなりとした火野と対照的に、目を輝かせて辺りを見回すまるゆ。

もつとも、廃園してずいぶんたつのか、遊具は塗装が剥がれ錆びだらけ。おまけにツタやその他の雑草に覆われているものもあり、当時の華やかさを感じさせる面影は一切ない。

だがそんな遊具でも珍しくてしょうがないのか、まるゆは近くで見ようと駆け出す。

「あ、まるゆさん。あまり大きな遊具や施設の近くに行くのは危ないですよ」

「おいおいおい、どこいくんだよ?」

あわててその後ろを前島が追う。

子供とはいえ、先ほど出会ったばかりの他人だというのに、本気で心配する様子の前島。

おまけに、これはなんですか、あれはなんですかと聞くまるゆに対し。一つ一つ丁寧な説明を嬉しそうにしている。

そんな前島を見て、火野が苦々しく愚痴をこぼす。

「つたく、あのロリコン……」

そう……なにを隠そう。前島という男は少女を神聖視する、基本『触れない、話しか

けない、恐がらせない』が信条の、一部界限では紳士と呼ばれ揶揄されることもある……清く正しい意識の高いロリコン（児童性愛者）なのである。しかも、かなり重度の。

あまり遊園地に良い思い出のない火野は、すぐにでもここから離れたかったのだが。まるゆが興味津々な様子であれこれ見て回っている後ろから、幸せそうについてゆく前島を見て、出発は当分先になりそうだなとあきらめる。

「つか、遊園地が初めてねえ」

山道で一人、おまけに薄汚れた格好でヒッチハイクしていたまるゆ。

いかにも恵まれない家庭の、訳ありな子供という気配に、火野は面倒ごとはごめんという心境だった。

が、だからといってこんな場所に、一人置き去りにするような事もできない。

もやもやとした気持ちで、しばらく前島とまるゆの様子を見ていた火野だったが、付き合いきれないというように、二人から離れてあてもなく歩き出す。

「……観覧車か」

園内をしばらく歩いて現われたのは、小型の観覧車。

小型といっても25メートルほどの高さがあり、中心から伸びたアームの先には、色とりどりのゴンドラが取り付けられている。

もつとも、他の遊具同様にかつての面影はなく、塗装は剥げ落ち錆びだらけ。

おまけに風で揺れるたびに鳴る、キイキイときしんだ音が、閉園後の長い年月を感じさせていた。

「これは……なんですか？」

しばらくボケツと観覧車を眺めていた火野の後ろに、いつのまにかまるゆが立っていた。た。

火野は前島の姿を探すが、近くに見当たらない。

「……別になんでもいいだろが」

あまり深く関わりたくない火野は、まるゆの疑問にそっけなく返す。

その冷たい物言いに、まるゆは驚いた様子でキュツと口を閉じ、うつむいた。

それを見てどうにもいたたまれない気持ちになった火野は、ガシガシと頭をかきながら口を開く。

「観覧車つつつてな。乗るんだよ、あのぶら下がってるカゴみたいなのに。んで、あれが水車や風車みたいにグルグル回るんだ」

「あ……そうなんです、教えてくれてありがとうございます！」

素直な感謝の言葉に、自らの大人げなさが恥ずかしくなったのか、火野は周りに設置されている柵をくぐり観覧車に近づく。

「ほら、こっちこい。動かないけどゴンドラに乗れば、ちったあ気分が味わえるぞ」

「え、あ、はい！」

手招きする火野に、まるゆは嬉しそうに駆けよる、が。

「あぶない！」

急に火野の手を掴み、強い力で引つ張り寄せるまるゆ。

その直後、火野が立っていた場所に、アームの一部である短い鉄の棒が落ちてきた。錆びてもろくなっていた鉄の棒は、地面にぶつかりカーンと硬い音を立てて跳ねる。

「……あつぶねえ」

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「あ、ああ……よく落ちてくるのがわかったな……てか、お前見た目の割に力あるな」

「えへへ……」

火野の言葉にまるゆは、心配と、気まずさが交じったような曖昧な笑顔を返す。

その顔を見て火野は、自分が素直に礼の一つも言えないことが恥ずかしくなり「アホか俺は……」と、小さくこぼす。

「車に戻るか……つたく、やっぱ観覧車はろくなことがねえ」

「火野さんは観覧車がお嫌いなんですか？」

「まーな。昔、観覧車の下で女に告って振られた……って、そんなのはどうでもいいんだよ。つーか、前島どこに行きやがった」

「前島さんなら飲み物を取ってくるって、車のほうに行かれました」

「はあ？　子供ほったらかしてなにやってんだよアイツは……」

火野がイライラとしたふうに頭をかく。

その不機嫌そうな火野の様子に、ビクツとしたまるゆ。

彼女は慌てたようにポケットに手を入れ、透明な包装紙にくるまれたなにかをとりだした。

「そ、そうだ火野さん、お礼にもならないかもしれませんが……これ、どうぞ！　甘くて美味しいですよ！」

突然差し出された贈り物に、火野はしばらく戸惑うような間をあげたあと、それを受け取る。

包装紙を開くと、サイコロくらいの大きさの、黄色がかった透明な飴らしきものが出てきた。

火野がポイと口に入れると、シンプルな砂糖の甘みが口の中に満ちる。

「べっこう飴か、また懐かしい味だな」

「おいしいですか？」

「ああ、甘いよ」

「えへへ、お母さんが作ってくれたんです」

「……さよか」

無垢なまるゆの笑顔。それを見ていたたまれない気持ちになった火野は、車に向かって早足で歩き出し、まるゆは、あわててその後を追う。

しばらく歩いてみると、二人の前方に水筒を抱えた前島が、焦った様子で走り回っていた。

「こつちですー！」

まるゆが声を掛けると、それに気がついた前島が、慌てて二人に駆け寄ってきた。

「よかった、一緒だったんですね」

「お前、子供から目を離すなよ。怪我したらどうすんだ」

駆け寄ってきた前島の頭を、火野が軽くはたく。

「そうですよね……すみませんでした、まるゆさん」

「い、いえ！ まるゆも勝手に動いてしまって、すみません！」

お互いに対して何度も謝罪を繰り返す二人。

いつまでも終わらないその行動にげんなりとした火野は、いい加減にしろと言ってやめさせた。

「んで、これからどうするよ」

「えつと……あ、ままごとをしてみたいです！」

「わかりました」（即答）

「なんの遊びをするか聞いたわけじゃねえ！　つかままごとお!」

「こんなこともあろうかと、シートも持ってきました」

「えへへ、じゃあまるゆがお母さん役やりますね!」

「では私はお父さん役を、ふふふ、まるゆさんと夫婦ですね」（恍惚）

「もしもーし！　聞いて！　俺の話聞いて!!」

「え、やらないんですか?」

「なんでそんな信じられない……みたいなツラしてんだよ!?　やらねえよ!!」

まるゆと前島に突っ込みが追いつかない火野の叫びが遊園地にこだました。

火野は呼吸を落ち着け、咳払いを一つする。

「とにかく……もう遅いしあれだな、今夜はここでキャンプするか」

「もう十六時ですか……確かに、夜の山道をあてもなく彷徨うのは危険ですからね」

「そんなわけだまるゆ、たき火に使うから、その辺探して乾いた木を集めてこい。ただしデカイ施設には近づくなよ」

「あつ……はい！　まるゆ、了解です!」

火野に頼られたのが嬉しいのか、まるゆはニッコリと笑みを浮かべて返事をする。

「あと危ないから前島も連れてけ」

「当然かと……つぶ!?」

当然のように当然だと言う前島に微妙にイラツとした火野は、前島の頭を強めにはたいた。

※ ※ ※

「アレわかるか?」

「あれははくちよう座です!」

日が沈み、夜の帳が下りる頃。

夜の山道は危険だったので、適当な空き地に車を駐めてキャンプをすることにしたら行。

レトルトの夕食をとったあと、三人は満天の星々を眺めながら会話をしていた。

「正解ですね。まるゆさんは星座にお詳しいので?」

「はい、星座は方角を見るための基本的な知識として備わってますから」

「備わっている? あの……それはどういう意味で?」

「はい! じつはまるゆは艦、あ、いえ、それは違って……」

「おいまるゆ、アレ何座かわかるか?」

「あ、あれはわし座です！ その隣のこと座と、さっきのはくちよう座を合わせて、夏の
大三角形と呼ばれてるんですよ」

「あー、なんか名前だけは聞いたことがあるな」

火野はまるゆの説明を聞いて、ふむふむと興味深そうな様子で頷く。

「でも前島さんすごかったですね！ ポケットや荷物からいつぱい道具が出てきて驚き
ました！」

「ふふふ、それほどでもありませんよ」

「ニンジャみたいだろ？ コイツのお袋さんの教育でな、馬鹿みたいになにかとポケッ
トに入れてるんだよ」

「備えあれば憂い無しといひまして、まあ、日常生活ではそうそう使うものでもないの
で」

「まあ、お前がいるとキャンプが楽でいいよ」

昼間の遊園地でのこともあり、やや打ち解けた様子の三人。

そのあたりの空気を読んでか、火野は気になっていたことを切り出した。

「で、今更だがお前、なんであんなところでヒッチハイクなんざしてたんだ。そもそも親
はどうした？」

「お母さんは先日亡くなったのでもういません、だから海に行くことにしたんです」

「いないって、いや、それより……」

火野は気まずそうに前島をチラリと見る。

続きはお前が聞け、そう言わんばかりの無茶振りを確かに感じ取れてしまった前島は、これまた気まずそうに口を開く。

「あの、その年齢で保護者無しに外を出歩く、しかも旅をしているというのはさすがに危ないかと……」

「え、まるゆに保護者はいませんか？ でも提督はいます。海に行くのは提督やみんなに会うためです！」

「て、提督……ですか？」

「はい、まるゆは艦娘なので。あ、これは言っちゃ駄目なんです……え、えっと、心配されてたなら大丈夫です！ まるゆはこう見えても強いんですから！」

小さな手で握り拳を作るまるゆ。

二人の男の心に、それぞれの思いが湧いた。

火野の感情は、厄介なやつを乗せてしまったという後悔と、さっさと警察に預けてしまいたいという思い。

これは普通の人間であれば真っ先に浮かぶ、一般的な感情だろう。

なぜなら話を総合すると、この少女は母親が死んで、身寄りが亡くなったことで、ど

こかがおかしくなつて自分が艦娘だと思ひ込んでゐる。しかも最悪、海に行つて身投げする危険をはらんだ厄介な少女だ。

一方、前島の感情は火野と似ているようで、まったく違つていた。

それはこのかわいそうな少女を、一刻も早く安全な場所に連れて行かなければという、誓いにも似た使命感だつた。

「そうですか、それは心強い。安心してください、必ず私たちがまるゆさんを目的地まで連れて行つてあげますよ」

「私、たち、ねえ……」

幼い頃より、艦娘である母親から受けてきた愛情深い教育。

危険から身を守るよう、前島は特殊部隊の兵士も逃げ出しかねない、地獄の訓練をたたき込まれてきた。

その反動で、前島が幼い少女しか愛せない性癖になつてしまったことを知る火野は、げんなりした表情を浮かべる。

「なあまるゆ、ほんとにお前を探してるやつつてのは居ないんだよな？　実は家出でし

たつてなると、俺らが誘拐犯扱いになつてやばいんだが」

「えつと、はい、いないはずです……だ、大丈夫です！」

火野の問いかけに、微妙に目が泳ぐまるゆ。

「まあまあ先輩、まるゆさんも大丈夫だと言ってることですし」

「ありがとうございます！」

「……わあつたよ。ほらまるゆ、もう眠いだろ。車の後ろの席で寝とけ」

「は、はい。ではお言葉に甘えて……」

まるゆは疲れていたのか、車の後部座席に乗り込み横になると、すぐに眠りについた。たき火を囲んでいるのは、火野とその対面に座った前島の二人だけになる。

ちなみに二人は、車の近くに設置したテントで寝る予定である。

「で、どうする。明らかに怪しいけど。お前のアレ的に、アイツを安全なところまで連れて行くのは決定事項なんだろうがよ」

「そうですね……事情はわかりませんが。どのみち、いまこんなところで放り出すことはできません。せめて大きな街の警察組織、理想を言えば艦連指定都市にある保護施設、そこに連れて行くべきでしょう」

前島は火野の問いかけにしばらく考え込んだ後、強い断言口調でそう答える。

艦連、正式名称は『艦娘連絡会』と呼ばれる、艦娘たちの相互扶助組織。

もつとも、愛らしい名称とは裏腹に、その実態は国家より強大な軍事力と経済力を有し、それを背景とした政治的な影響力を持つ巨大組織である。

そして艦連指定都市とは、その艦連の影響力が強い各国に存在する都市の呼び名であ

り、無用の争いを避けるために、各国の艦娘たちは基本的にそこで生活をしていた。艦連指定都市は基本的に他の都市より、行政サービスの質が良い。

訳ありの子供であれば、親身になって面倒を見てくれる行政機関も存在するだろう。前島の発言は、それを知ってのことである。

「俺はとつとと、地元の警察に引き渡したほうがいいと思うがな。……それにしてもアイツ、本当に艦娘だと思うか？」

「……おそらくはそう思い込んでいるだけかと。名前はわかりませんが、あのような容姿の艦娘は、私の知る限りではいなかったはずですよ」

艦娘に対して理解の浅い火野と違い、前島は自身の親が『足柄』と呼ばれる重巡洋艦の艦娘であることもあって、艦娘の知識に関して自主的に勉強する機会が多かった。

特に艦娘百科事典と呼ばれる、艦連が発行する存在する艦娘たちを記した書籍を何度も読み返していたことから、大体の艦娘の容姿に関しては見分けられる自信があった。

もつとも、変装などしていなければ、という前提ではあるが。

「あの歳で自分を艦娘だと思い込まないとやってけなかつた状況か。どんなだったかあんまり想像したくはねえな」

「ええ、どこまでが本当のことなのかはわかりませんが、必ずやしかるべき安全な場所に届けなければなりません」

「旅行一日目にしてトラブル発生とはな、まいったぜ」

「いえ、むしろまるゆさんに出会えたのは、あらゆる意味で幸運だったかと」

前島の言葉に、火野はロリコンに付ける薬はないなど、諦めに似た表情を浮かべ、軽く天を仰ぐ。

それからしばらく、二人は無言でたき火を見ていた。

「なんでアイツ、海に行きたいんだろな」

追加の枯れ木をたき火にくべながら、火野がボソリとこぼす。

「まるゆさんの言葉を信じるなら、提督に会いに行くため、ということですけどね」

「提督に〃会いたい〃か……」

火野は、会いたい、という部分になにか思うところがあつたのか、重い感情がこもった声色で呟く。

ときおり過去の艦娘と提督たちの子孫から生まれる艦娘。

そんな現代を生きる艦娘である彼女たちは、一つの運命を抱えて生きている。

それは、艦娘一人に対して、たった一人の提督適性者としか恋に落ちることができないという運命。

生物学的な話をすれば、会えるかどうかともわからない、世界のどこにいるかもわからない、波長が一致したたった一人の人間との間にしか子供を作れないという特性であ

る。

その波長が一致する適性を持った者こそが、現代における『提督』と呼ばれる存在であつた。

これもまた、この世界における一応の一般常識である。

それは幼い少女たちが一度は憧れる、運命の相手と結ばれる物語。

その物語のヒロインになりきっている様子のまるゆ。

幼い少女の背景を改めて想像し、二人はまた胸が締め付けられる思いに駆られる。

「なにか、まるゆさんのためにできることは無いのでしょうか？」

「俺らにできるのは、せいぜいアイツを途中の街まで乗せてつてやるくらいだ」

「本当にそれだけでしょうか？」

「なにを期待してるのか知らんがそれだけだよ。むしろ他になにかできることがあるか

？」

「……自分の無力さを痛感します」

前島は悔し涙がこぼれないよう空を見上げ、つられるように火野も顔をあげる。

どんよりと雲のかかったような二人の心とは対照的に、夏の夜空には満天の星々が輝いていた。

■けんかした日■

『会いたい……』

そうこぼしながら泣く、赤い目をした金色の髪の女性。

初恋の人であるその女性が泣いているのに、火野はなにもできない。

会いたければ、会いに行けばいい。

その言葉を呑み込む。

なぜなら彼女はここを動けない、いや、動かない。

それはこの庭園も、彼女にとって大切なものだから。

だから彼女は今日も待ち続ける。

帰ってくるかもわからない、誰かを。

『会いたい、会いたいなあ……』

火野は、唇が切れるほど強く噛みしめる。

自分の無力さが、悔しくてしょうがなかった。

※ ※ ※

「朝だー！ もぐもぐもぐ……zzzz」

「オイ前島、後ろの幸せそうに寝てるアホをそろそろ起こせ」

「無理です」（まるゆの寝顔をガン見中）

紳士のボーナスタイムである、まるゆの寝顔に、前島の意識が釘付けになってしまったため、寝起きで運転する羽目になった火野。

こうなった前島がテコでも動かないことを知っている彼は、あきらめて煙草を一本取りだしくわえたが、ちらりと眠っているまるゆが視界に入り、ため息を一つはいて煙草を戻す。

せめて眠気覚ましにと思い、火野が軽く窓を開けると、朝の日射しと一緒に夏の朝風が車内に吹き込んできた。

いま一行が走っているのは、山を下りて平野となった農村部。

もつとも、山道を走っていたときから見える風景は、相変わらず緑一色だ。

「ちっ、売店の一軒もねえのかよ」

「このあたりは山間部ですからね、おそらく移動販売に頼っているか、あつても小さな雑貨屋程度でしょう」

「なーんでそんな田舎道を俺らは走ってんだよ」

「先輩が地図投げ捨てて迷った話、もう一回しますか？」

「……だからこうやって必死に、地図売ってそうな店探してるんだろがよ！」

「逆ギレで大きな声出さないでくださいよ……まるゆさんの眠りの妨げにな——」

キキツー！ つと前島の抗議の声をさえぎるように、急ブレーキの音が響く。

と同時に急停止の反動で、首をひねって後ろを見ていた前島の首が面白い方向に向き、後部座席で寝転んでいたまるゆが悲鳴を上げながら転げ落ちた。

「はわ、はわわ!!」

「ぐっ、ぐびが……先輩……なんですか急に……」

火野は無言で、うんざりしたような表情でフロントガラスの先を指さす。

前島とまるゆがその先を見ると、道路に牛が多数寝そべっていた。

「なーんでこんな所に牛が居るんだよ」

「種類的に食肉用の牛ではないでしょうか？」

「あれ……牛さんですか？」

「おはようございます、まるゆさん。ええ、おそらくあれはアングス牛の一種でしょう」

「あんがす？」

前島がまるゆと楽しくおしゃべりを続けるのを尻目に、火野は外に出て近くで牛の様

子を見ている老人に話しかける。

火野は老人としばらく話した後、あきらめた様子で車に戻ってきた。

「午前中から昼まではここから動かないんだとき、クソツタレ」

「足止めですか」

「つたく、これだから田舎はいやなんだよ」

火野はふてくされたように座席を倒し、身体を横にする。

「寝る、牛がどっかに行ったら起こしてくれ」

「まあ、この状況では仕方ありませんね」

「あ、あの！ まるゆ牛さんを見てきてもいいでしょうか？」

「あ？ ああ、好きにしろよ。食われんようにな」

「え、ええい！ う、牛さんまるゆを食べちゃうんですか」

火野はまるゆの言葉には答えず、グースカといびきをかき始めた。

反応のない火野、まるゆはさすがのように前島を見つめる。

「食べませんよ、牛は草食動物ですから。ですが身体が大きくて危ないので、私と一緒に

見に行きましょう」

そうまるゆに向けて言った前島の表情は、まるで守護天使が浮かべるようないい笑顔

だ。

つまり今日も前島のロリコン信仰は絶好調の様子。

だがまるゆはその微笑みを見て、前島がどうして自分にそこまで優しくしてくれるのか、そんな疑問が湧く。

「あの……どうして前島さんは、まるゆに優しくしてくれるんですか？」

「はい？」

自身にとつて『なぜ息をするのか？』に近い質問。

そんな質問になんと答えを返したら良いものかと頭を悩ませる前島に、まるゆは言葉を続ける。

「あの、失礼かも知れないんですが、普通はその……火野さんみたいに迷惑そうとか、損だなんて思われるのがあたりまえなのかなって……。でも、前島さんは最初からずっと、まるゆの為に色々してくださって、とつても親切で。それがちよつと気になつてしまつて……」

まるゆの疑問を聞き、前島は思わず黙り込む。

そしてしばらくして、辛そうに口を開いた。

「私は……児童性愛者、俗に言われるロリコンと呼ばれる性癖を抱えているんです」

幾らでも言い様はあつた、家訓だとか、人には親切にするのが当然だとか。

だが、真つ直ぐとこちらを見つめてくるまるゆの無垢な瞳に、前島は嘘をつけなかつ

た。

「ロリコン……ですか？」

「はい、まるゆさんのように、幼い少女にしか魅力を感じられない、そういった人間のことでず」

「あつ、えつと、それはその……」

「身も蓋もない言い方をすれば、その。まるゆさんに優しくしているのは、下心というものです」

驚いた様子のまるゆ、それを見て前島は慌てて言葉を続ける。

「も、勿論、なにかを要求したり、怖がらせるつもりはありません。それに普段は、なにかを求められない限りはあまり近づかず。そつと遠くから見守る程度なんです……それでも、褒められたものではありません。あつ、まるゆさんを目的地まで安全にお連れするのはその、当然なに見返りを求めるつもりもなくてすね、ただ、一緒にいられるだけで充分こちらにとつても益があると云いますか、その……」

なにを言つても言い訳にしか聞こえないことに気がつき、前島は口と目を閉じて軽く頭を振る。

どんなに言葉を尽くしても、きつと自分はまるゆを怖がらせてしまうだろうと後悔するよように。

「正直、このような性癖を抱えてしまった自分を、恥ずかしく思います」

そう言つて、前島は地面に腰を下ろし、顔を下げる。

まるゆは自分より遙かに大きな身体の前島が、まるで泣きそうな子供のようにつむくのを見て、その手を取つた。

「えっ?」

驚いた前島が顔をあげると、そこには優しい表情を浮かべたまるゆの顔があつた。

「恥ずかしがる必要なんてないと思います。だつて、好きな人には……優しくできます。なら前島さんがそういうえつと、性癖なのは……きつと、まるゆみたいなお小さい人に優しくなれる、そういうすてきな人になるためで。そして、将来前島さんが愛する人がそのうであるから、そうなつた。そういう、運命みたいなもののためなんだと思います」

「運命……ですか?」

「はい。だからそれを恥ずかしいだなんて、思う必要はないとおもいます! ……あつ、なんだか偉そうなこと言つてしまつてすみません」

パタパタと手を振りながら紡がれたまるゆの言葉は、空気を伝い前島の耳に入る。

そしてその言葉は彼の身体中を駆け巡り、最後に心に届いた。

前島は心を覆っていた重い雲が晴れてゆくように、気持ち晴れやかになつてゆくのを感ずる。

「……………いえ、そう言っていただけで、楽になりました」

それは、まるゆにとつてはなんでもない、ただの慰めだったのかも知れない。

「ありがとうございます、まるゆさん」

だが前島にとつてその言葉は、彼のその後の人生を決める言葉となった。

それほどまでにその言葉は、前島の人生の全てを肯定してくれるような、優しく燃える炎のような熱さを持つていたからだ。

前島は、ひざまずき、すがりつきながら感謝を叫びたくなる衝動を必死に抑えながら、努めて短い言葉で感謝を述べる。

馬鹿みたいに叫び、涙を流しながら感謝を述べれば、きつとまるゆを怖がらせてしまふと知っていたから。

「あつ、そうだ。前島さんにも、これをもらってください！」

「これは……飴でしょうか？」

まるゆはポケットから、火野に渡したものと同じ飴を取り出す。

前島は差し出されたそれを、震える手で受け取った。

「はい！ お母さんとまるゆの手作りです！」

「……ありがとうございます。大切にいただきますね」

「えへへ、前島さんみたいなステキな人に食べてもらえたら、おかあさんも喜ぶと思いま

す」

「……しかしこんなに素晴らしいものをいただいちゃってしまつては、まるゆさんを必ず海までお連れしなければなりませんね、ハハハ」

わずかに震える前島の言葉に、まるゆはニツコリとした笑顔を返した。

※ ※ ※

「クソツ！ 今年もユーリーの独走かよ」

年季の入ったテレビに映っているのは、世界的に有名なバイクレースの模様。

その中継を、食い入るように見ていた火野が悪態をつく。

牛のストライキから脱出した一行だったが、脱出したからといって特に向かう当てがあるわけではない。

そもそも、この小さな農村を抜け出す道もよくわかっていないのだ。

だがそんななかで奇跡的に存在した、小さな食堂を見つけた一行は、そこで遅めの昼食を摂ることにした。

「先輩。それは悪態をつくようなことなんですか？」

「ユーリーも嫌いじゃねえけど、俺は島のファンなんだよ！ ほら、あのKUREって書

いてあるチーム、あのチームのレーサー！」

「はあ。しかし点数表を見るに、ずいぶんとポイントが離れてるように見えますが？」
「いや、まだシーズンも前半だ。島なら後半で追いつく」

テレビには、二位を圧倒的に引き離してゴールした夕張重工所属の選手であるユーリーが、チームのメカニックである女性と抱き合っている様子が映し出されていた。

ちなみにKUREは、艦連指定都市である艦夢守市を拠点とするチームである。

レースが終わり、内容が表彰式や解説に切り替わって興味をなくした火野は、前島の質問に投げやりに答えると、すっかり伸びた蕎麦をすすり始める。

「……ほら、隣町までの地図描いてあげたわよ。あと、そこに書いてある宿の予約もしといてあげたから、感謝しな」

店の奥から出てきた、恰幅の良い中年の女性が、火野に手描きの地図と宿の連絡先が書かれた紙を手渡す。

「おお！ サンキューなおばちゃん」

「知り合いがやってる宿をわざわざ予約してあげたんだ、必ず行くんだよ」

中年の女性は、火野の感謝に抑揚のない念押しで返し、のっしのっしと奥の厨房へと戻っていく。

「……地図描いといってもらってあれだけど、愛想の無いおばちゃんだな」

「田舎の食堂ですし、よそ者は警戒されるんでしょう。ですが宿の予約までしていただけた以上、根は親切な方なんだと思いますよ」

「いや、ありや馬鹿な旅行者をカモってやろうって腹かもしねえぞ」

「警戒しすぎですよ……」

「あ、あの。火野さんはあのバイクって乗り物がお好きなんですか？」

先ほどから珍しそうにずっとテレビを見ていたまるゆ。

彼女は興味津々といったような、キラキラとした表情で火野に聞く。

「んあ？ まあな、バイクはいいぞまるゆ。一度乗って走れば、自分が最高に格好良く思えるからな」

「すごい!? バイクに乗れば、まるゆもかっこよくなれるんでしょうかー」

「オメーの短足じゃ、まず乗れるバイクが……あーいや、夕張重工のバイクでなんかちっちゃいのがあったな」

「危険な乗り物をまるゆさんに勧めないでくださいよ……まるゆさん、大人になってから乗るなら、車の方がいいですよ。まだその方が安全ですので」

「はー、これだから浪漫のないヤツは。おいまるゆ、お前将来コイツみたいなつまんないヤツになるなよ」

「前島さんは優しくもいい人ですよ？ さつきも牛さんのことを沢山教えてくださいま

した！」

「まるゆさん……」（チヨロトクウン）

前島とまるゆのやりとりを聞いて、火野は眉をぴくりと動かし、おもむろに告げる。

「……まるゆ、お前便所行つとけ。これからまたしばらく走るようになるからな」

「へ、あ、了解です！」

まるゆは少し強引な火野の言葉に驚くも、素直に従つて席を立つた。

火野はまるゆがトイレに行つたのを確認し、前島の目を真つ直ぐ見て話し出す。

「前島、お前アイツにこれ以上入れ込むのは止めろ」

「は？ 別にそんなつもりは……」

「入れ込んでんだろ、どう見ても」

「……だとしてもなにか問題が？」

「いい機会だからこの際だからはつきり言つとく。お前それ治せ、じゃないといつかえらい目に遭うぞ」

「それは……どういふことでしょうか？」

前島の性癖を昔から知っているのは、前島の母親と目の前の火野だけだ。

火野はそれを知つた上で、前島の性癖を尊重してきた。

だからこそ彼らは友好関係を保つてこれた部分がある。

その火野が、珍しく真剣な目で前島のその部分に踏み込んできたのだ。

「いいか、お前と、いつかできるかもしれないお前の家族のために言うんだぞ。人間ってのは、社会的にこうあるべきって外せないもんがある。それに逆らうと幸せには生きられねえ。ロリコンってのは生物学的には正しいのかもしれないが、いまの社会的ルールだとアウトだ。どんなに気をつけてても、一歩間違えりや犯罪者になっちまうかもしれない。そうなれば家族にまで被害がいく。運が悪けりや村八分だ、嘲られ、虐げられる。お前の周りを巻き込んでな」

「……例えそうなっても後悔はしませんよ。それになにかを愛せる人生は幸せです」

「頼むから愛についてごちやごちや言うな。そもそも定義が曖昧なものを押しつけりや戦争が起きるのは当然だろうが」

火野はガシガシと頭をかきながら、感情を抑えるような表情で、言い聞かせるように言葉を続ける。

「アイツを保護してもらえるところに送り届けるのは、まあお前のそれ抜きにしても納得してやる。だけどお前はアイツに対してある程度ドライに接しろ、じゃないと別れがつらい」

「……ですが」

「代わりに俺が適当に相手してやる。向いてないだろ、お前はそういうの」

「私が先輩とは違うタイプだからですか？」

「ああ、そうだ」

前島は苦虫をかみつぶした様な顔をしたが、意を決したように口を開く。

「お断りします。私はせめてまるゆさんを安全なところに送り届けるまでは、楽しい思い出を作っていたきたい」

「……なあ、おい。わかっていると思うが俺らは卒業したら、そうそう顔を合わせることもなくなるだろ。いままで色々とお前の尻ぬぐいをしてやってきたが、これからはそうもいなくなる。お節介は重々承知だが、俺と一緒にいられるうちはそれを治す手伝いをしてやれる。だからな、黙ってということ聞いて——」

「お断りします」

「……俺の忍耐にも限界があるぞ」

「お断り——」

火野は前島の襟首を掴み、にらみつける。

普段のいい加減な様子と違い、本気で怒っている、そうわかる表情。

前島はそれに怯むことなく、真つ直ぐににらみ返す。

「あ、あの！ だだいま戻りました。えっと、その……」

どのあたりから見ていたのかわからないが、トイレから戻ってきたまるゆが二人の争

いを止めるようなタイミングで声をかける。

火野はまるゆをチラリと見たあと、乱暴に前島の襟首から手を離れた。

「行くぞ。代金払つとけ」

「……」

まるゆはどこか険悪な二人の様子を見て、なにかを言おうとする。

だが、なにを言えばいいのかわからず、結局なにも口に出せなかった。

※ ※ ※

「そこ、真つ直ぐです。しかし今日も暑く——」

「そうか、いいからナビ以外は黙ってる。お前の声聞いとると耳が腐るよ」

「……」

食堂を出て車を運転することしばらく。

目に見えて不機嫌な火野のせいもあり、車内には険悪な空気が満ちていた。

そんな険悪な空気の発生源である火野は、タバコを取り出して吸おうとする。

が、車内にいるまるゆをチラリと見て、ため息を吐くと煙草をしまう。

そして路肩に車を停め、サイドブレーキを引く。

「ちよつとシヨンベンとタバコ吸つてくる」

火野は短くそう言い残して、車外に出る。それを無言で見送る二人。

昨日なら気さくに話しかけてくれるはずが、今日、というより先ほどからずっと黙っている前島。

恐らく自分が原因なのだと察していたまるゆは、そのことに罪悪感のようなものを感じる。

「……あの、ごめんなさい」

「はい?」

「まるゆのせいなんですよね。その、火野さんと前島さんがギクシヤクしてるのって」

「ああ、まあ、先輩はしよつちゆうあなるので、あまり気にされなくても——」

「いえ、気にします! あの、まるゆはここからでも歩いて海まで行けますので。どうかお気になさらず置いていってください!」

まるゆの決意のこもった言葉。

それを聞いて前島は少し驚くも、眼鏡を外して心を落ち着けるように軽く目を揉み、ゆつくりとかけ直す。

そして深呼吸を一つ置いて、微笑んだ。

「……それは難しいですね、私がどうこうと言うより、先輩的に」

「へ？」

「先輩はまあ、あの通り粗暴で短慮なところもありますが、それ以上に親切で心優しい人なんですよ。実際私の様な人間と友人でいてくださっているのが、なよりの証拠です」

まるゆはその言葉を聞いて不思議そうに首をかしげる。

前島は少し昔を思い出すように軽く顔をふせて、再びまるゆを見た。

「昔、先輩の友人の妹さんが、難しい病気になったことがありました。あとから聞いたんですが、先輩だけだったようです、毎日お見舞いに行つてたのは」

「難しい病気ですか？」

「はい、少し説明が難しいのですが、細菌性の要因による病気だったんです。つまり妹さんと接触する人間は、特殊なワクチン接種を受ける必要があります。先輩はわざわざそれを受けてまで毎日、お見舞いに行つていたそうです」

前島は無意識に自分の手を握りしめる。

当時、話を聞いたときの感情がそのまま蘇ってきたのだ。

「そのおかげで先輩の友人は、つきつきりで看病する間の休憩が取れて、食事したりトイレに行くことが出来たと言っていました。ですが容態が急変して、その妹さんが亡くなったとき、友人の方は家で休んでらっしゃったようで。代わりに妹さんのそばには先輩が

いて、最後までずつと手を握っていたと——」

前島は語っているうちに、自分が感傷的になつていることを自覚し、ハツとした表情を浮かべる。

そして一回咳払いをして、微笑みを浮かべた。

「まあその、なにが言いたいのかというです。大丈夫ですよまるゆさん、先輩は一度決めた以上、なにがあろうと貴方を海に連れて行つてくれます。無論、私も全力を尽くしますよ」

無論、という部分を強調するロリコン紳士前島。

色々と理由はあがるが、結局のところ前島にとつて大事なのはそこだった。

「それに、先輩が怒っているのはまるゆさんのことではなく、私の……まあ、性癖のことです。何度も言いますが、まるゆさんはなにも悪くありませんよ。むしろ私たちの方こそすみません、まるゆさんに気を使わせてしまつて」

前島がそう言い終えたところで、火野が車に戻つてくる。

そして二人をチラリと見て、ため息を一つはいた。

「……待たせたな」

「いえ……あの、どうされました？」

だがいつまでたつてもエンジンをかけない火野に、前島が声をかける。

「やらかした、ガス欠だ」

「は？」

「微妙に残っちゃいるが、このままだと村境の峠あたりで切れる。くそッ、ガソスタの場所も聞いてくんだった！」

「……戻ってガソリンを分けてもらいますか？」

「考えて物言えよ、戻る距離考えたら進む距離の方が近いだろが！」

「……なら、私が車を押しますよ」

「言ったなオイ。おら、ニュートラルにしてやったぞ、ほら、とつとと表出て押せ——」

「あ、あのっ!! まるゆにおまかせください!!」

言い争いを始めた二人の言葉をさえぎるように、まるゆが声を上げる。

「んあ? なんだよ、そのリュックの中にガソリンでも入ってんのか？」

「い、いえ。まるゆがこの車を後ろから押しますので！」

「は? お前なに言つて——」

火野がどういふことか聞き返すよりも早く、まるゆは車の外に飛び出す。

そして「行きます！」と、掛け声を響かせ車を押し始めた。

火野たちが乗る車は、確かに押せば前に動かすことはできる。

だが、それはある程度力や体重がある男性だったらの場合。

当然ながら、まるゆの体重や力では少し進ませるくらいがせいぜいだ。

火野と前島は、慌ててまるゆを止めるために車から降りようとする、が。

驚くことに、車がゆっくりと、そして徐々にスピードをあげて動き出す。

流石にエンジンがかかった状態とまではいかないが、それでも大人が走るくらい
のスピード。

車が曲がりそうになったため、火野は慌ててハンドルを握る。

そして前島が後ろを振り返り、後部座席の窓から外を確認した。

「お、おい、どうなってる？　もしかして昨日のイノシシが後ろにいるのか？」

「……いえ、まるゆさんが、車を押しています」

「はあ!?　なに言ってるんだお前!」

「私も自分の目を疑いたくなりますが、間違いありません」

火野はチラリとバックミラーで後ろを確認する。

見ると確かに、まるゆのものと思わしき、黒い髪の毛が揺れているのが見えた。

「……どういふことだよ」

「もしかすると、いえ、間違いありません。まるゆさんは……艦娘です。そうであれば、
艦装を展開せずとも、普通の成人男性より強い力やスタミナを持つてはいるはずなので、
車を押して走るくらいは可能なはず……です」

「……マジか、てことはなにか？ アイツはお前のお袋さんと同じってことか？ 漬物石でお手玉するようなあのお袋さんと？」

「まあ、母のアレは缶に火を入れた状態でもあったので」

艦娘の陸上での性能は、艦種や個体で大きく差があるのだが。総じて缶と呼ばれる、艦娘独自の機関に火を入れることで、数トン以上の重さの艀装と呼ばれる兵器を背負って、海の上で戦うことができる。

ただしそれは海の上で浮力を発生させることができる、水上靴と呼ばれる艀装を装着した上での話だ。

その状態でないと、陸上では増加した自重を支えることができない。

もし訓練を受けていない未熟な艦娘が、陸上で缶に火を入れれば、爆発的に増加する出力に応じた分、体重が増加し、最悪脚が壊れる。

また、それによる身体への反動で行動不能に陥るのだ。

熟練の艦娘であれば、一キロ単位で出力を調整するなどして、身体への影響が出ないレベルで身体強化が可能なのだが、普通の艦娘ではそれが難しい。

「あー、その艀装やら缶やらはよくわからんが。つまりなんだ、やっぱりアイツはマジでそのアレなのか？」

「……はい、艦娘です」

自分を艦娘だと思い込んでいる、頭が少しおかしくなった気の毒な迷子の子供。そう思っていた相手が、本当に艦娘だった。

想像もしていなかった衝撃の事実には、いつの間にか車内の険悪な空気は消し飛んでいた。

※ ※ ※

途中で見つけた民家でガソリンをわけてもらい、なんとか目的の旅館にたどり着いた一行。

だがガス欠のトラブルもあり、町外れにあった小さな旅館に着いたのは、辺りが暗くなつてからだった。

一行が旅館に入つて予約の件を伝えると、男二人に子供一人という組み合わせが珍しいのか、じろじろと受付に見られる。

火野と前島は、受付の一人がどこかに電話したように見え、通報されたかと心拍数が一瞬跳ね上がった。

が、どうやら杞憂だったらしく、特に問題なく宿泊の手続きを終えると、三人は十畳ほどの広さの客室に案内される。

そこでようやく三人は、腰を落ち着けてくつろぐことができた。

「おいまるゆ、お前本物の艦娘なんだろ?」

そんな穏やかな空気だったところに、火野はまるゆの不意を突くように質問を投げかけた。

その内容に、まるゆはビクリと震える。

「そそそそそそ、そんなことないですよお?」

目に見えて動揺するまるゆを、じつと見つめる火野。

「あの、まるゆさん。さ、さすがに車を何キロも押しして走り続けるのは、まるゆさんくらいの年齢の方には不可能なのですが……」

「じ、実はまるゆは見た目より若いので、それくらい平気なんです!」

「アホ。お前の体格で車押しして走るなんざ、若かろうと歳食つてようと関係ねえよ!」

「ふえ!?」

「……別に、だからってお前をとって食いやしねえよ。このままお前を海、それかお仲間のところまで連れて行ってやるのはまあ、いいんだよ。ただなんだ。艦娘だつてのを隠さなきゃならん事情やら聞いとけば、その辺に配慮してやれるって話だ!」

「……言えません。言えばお二人に迷惑をかけてしまいます!」

「まるゆさん……!」

黙り込むまるゆ。

部屋に重い沈黙が流れる。

「……まるゆ、お前トランプか花札できるか？」

「え、は、花札ならできますけど」

「よし。じゃあ賭けといこうじゃねえか。もし俺か前島が勝つたら、事情を話せ。俺らが負けたらなにも言わなくていいし、お前を行きたいとこまで連れて行ってやる。いまなら大サービスで勝負を受けるだけで、旅の旅費は全部俺ら（前島九割）が持つてやる。どうだ、受けるか？」

突然の提案にポカンとするまるゆ、と、前島。

「わかり……ました。その勝負受けます！」

だが勝負事には慣れていいのか、まるゆはふんすと気合を入れるポーズをして、その勝負を受けた。

「よし。前島、フロントで花札貸し出してないか聞いてこい、んで借りてこい」

「え、は、はい……あの、まるゆさんをいじめないでくださいね？」

渋々という風に部屋を出ようとして、立ち止まった前島が振り返る。

火野はその背中に「はやくいけ！」と、大きな声を浴びせかけた。

「……ぐめんなさい。まるゆのせいでお二人の仲を悪くしてしまつて……」

「あ？ ああ、別にあんなのはいつものことだよ」

「でも……あの、いまからでも遅くありません。まるゆは一人でも海にいけると思いますが、すから——」

「無理だな、お前の短い足で何日かかんだって話だ。つーか、そんな泣きそうなツラでなに言ってるやがる」

「ふえ？」

「それにな、俺がはいそうですかかって納得したところで、前島のヤツが絶対納得しねえ。うすうす気がついちゃいると思うが、あのアホは子供（少女）が困ってるのをほっとけねえんだよ。病気みたいなものだから、なんとかしてやろうと思ったこともあったが……多分ありや死んでもなおらんだろうな。つまり……俺がどうだろうと、アイツがお前を死んでも海まで連れてく、だから運がよかったか悪かったか思ってた最後まで付き合え」

「ですが……」

火野は煙草をとりだし口にくわえ、火を点ける。

そして大きく一回吸い込み、机に置かれた大きなガラスの灰皿に灰を落とした。

「そーいや昔な、大雨が降って地元の川が増水したことがあったんだよ……。雨は止んだが、次の日も川の水は引かなかった。で、俺と前島が橋を渡ってたときのことだ。上

流からお前くらいの歳のガキが流れてきた、多分足を滑らしたんだな。いまにも溺れそうだったが、川の流れがやばすぎて俺たち……いや、俺にはどうしようもなかった。情けない話、俺はブルってなんもできなかつたんだよ。

でもな、あいつは一瞬だよ、なんの躊躇もなく川に飛び込みやがった。信じられるか？ めちゃくちゃ増水してて流れも速くて、茶色く濁った川だぞ？

そしてあいつはそのガキを掴んで、なんとか中州に生えてた細い木に掴まって、ガキを抱きながらずっとその木にしがみついてやがった。俺が助けを呼びにいつて、消防隊が到着して救出されるまでの間……なん時間もずっと、ガキを励ましながら木にしがみついてやがったんだ」

火野は煙がまるゆにかからないように吐き出し、もう一度吸って吐く。

「だからな、あんま気にするな。そういうやつなんだよアイツは。多分俺らが理解できる損得勘定じゃねえところがあるんだろ……。そんなわけで何度も言うが、お前にどういふ事情があるうと、俺がどうだろうと、アホで頑固なアイツが海まで連れて行つてくれる。だから勝負がどうなるうと、安心して後ろに乗つてろ」

「……ふんふん」

「ああ？　なんか変なこと言ったか？」

まるゆは軽く口に手を当てて、年不相応な、大人びた優しい笑みを浮かべる。

そんな優しい表情を、久しく誰からも向けられた記憶が無かった火野は、思わず尻の据わりが悪くなった。

「いえ、前島さんも同じようなことをおっしゃってました。自分がどうだろうと、火野さんが絶対海まで連れて行ってくれるって」

「そりゃあのアホの妄想だ。俺は最初から、なんかあつたらお前を捨ててくつもりだったつーの」

「はい、まるゆもそれが当然だと思えます」

再びどこか落ち着きのある、まるゆの言葉に、火野はまたしてもいたたまれなくなり、頭をガシガシとかく。

「でも、そんなお二人の関係がなんだかおかしく、いえ、うらやましくて。ステキなお母さんはいてくれましたけど、まるゆにはそういう人が……近くにいませんでしたから」

「……それはお前のお仲間……艦娘のことか？」

まるゆは少し考え込み、軽く首を縦に振る。

「ここは楽園だと思っていました。深海棲艦の存在しない平和な、一見満ち足りた世界。でもまるゆには大事なものが欠けていました……仲間たちと提督です。一緒に寄り添って、日々を生きようと思える大切な人。まるゆにはその人が必要なんです、だからまるゆは……」

後悔の入り交じった表情を浮かべ、うつむくまるゆ。

その握られた手は少し震えており、火野はそれに気がついた。

「……助言だ、若気の至りでなにしたか知らんが、重荷は下ろせ。この先の人生、重くなるばかりだからな」

「……はい」

「戻りました。すこし古いですが借りられましたよ」

話の区切りがついたタイミングに合わせるかのように、手に花札を持った前島が戻ってきた。

「よし、覚悟するんだなまるゆ。いっとくが俺の花札の腕前は名人級だぞ?」

「先輩、それ初耳なんですけど……」

「ふふふ、負けませんよ! 花札はお母さんと沢山しましたから!」

まるゆは前島から花札を受け取り、慣れた手つきで札を配り始める。

その様子に、火野は少し冷や汗を垂らす。

「おい、俺らどれくらいカモられると思う?」

「先輩が名人級なら、大丈夫ではないでしょうか。ちなみに私はルールを知っているくらいです」

「……よし、やるぞ」

結果からいうと二人は、この後めちやくちや敗北した。

※ ※ ※

「くそ、ほんとにケツの毛までむしり取られるところだったぜ。ありや幸運の女神かなんか付いてるな」

「そういえば艦娘は、艦によって自身の運が数値でわかっていたと聞きますね」
「げ、マジかよ……なんで黙ってやがった」

「名人級なら大丈夫だと思いましたが。じつさいあれはまるゆさんの腕がよかったからかと思いますが」

宿の露天風呂につかりながら、愚痴をこぼす二人。

結局二人は、まるゆにすってんてんになるまでボロ負けしてしまった。

「まあ負けは負けだ、だからアイツは海まで連れてつてやる。それでいいんだろ」

「別に賭けに負けなくても連れて行くのが当然だとは思いますが、ええ。あれだけ負けてしまった以上当然かと」

「つたく……まあ、しょうがねえ。ついでだし、途中で観光地でもあつたらぶらつくか」
「……私がいうのもなんですが、あまり長いことまるゆさんを連れまわすのはリスクが

ありますよ？　もし職務質問でも受ければ、お互いせっかく決まった内定が取り消しになるかも知れませんが」

「アホ、内定取り消しが怖くて卒業旅行ができるか」

「いや、できるでしょ、普通」

呆れたように火野の言葉に突っ込みを入れる前島。

だが、その目はどこか嬉しそうだ。

「男が細かい心配してんじゃねえよ。まだ夏休みはアホほど残ってる。お前の言うとおりになるのはしやくだが、まるゆにちつとは楽しい思い出つくってやりたいなら、もうちよつとくらしいのんびりしてもいいさ。それにお前もアイツと仲良く遊びながら旅ができるなら、願ったり叶ったりだろ？」

「まあ、そうですね……しかし、いいんですか？　先輩の言うところの入れ込むことになりますし、私の性癖のことでいっておられた、社会的なルールとしては間違っていますよ。」

「あほ。ルールってのは、自分で判断できない馬鹿野郎が縋るもんだ」

「言つてたこととまったく違いますが……」

「俺がなんか間違つたことを言つたらな、それはジョークだと思え。そして笑え」

「……ハツハツハ」

棒読みで笑う前島の頭を、火野はパチンと一発はたく。

「……お前、まるゆになんか言われたのか?」

まるゆへの親切に対して、自分のことのように喜ぶ前島。

その事に、いつもと違うなにかを感じた火野が聞く。

「トゲのように心に刺さっていたものを、まるゆさんに抜いていただけました。例え児童性愛者だろうと、ありのままの自分でいいと、その事にはきつと意味があるからと……そう、教えていただいたんです」

「……押し込んだの間違いじゃねえのかそれ」

「だったとしてもですよ。だからまるゆさんには返しきれない恩ができました。……そういうことですから先輩。私の希望を聞いていただけなこと、感謝します」

「お前のためじゃねえ、賭けに負けたからだよ」

「それでもです、ありがとうございます」

「……そうかい」

前島の真つ直ぐな感謝と褒め言葉に、火野はばつが悪そうに頭をかく。

「まあ、こつちも今更だがなんだ、こんな思いつきの旅行に付き合ってくれて……ありがとよ」

「は、いまなんと?」

「……………ありがとうよって言ったんだよ」

「やはり、そうでしたか」

「あ?」

「すみません、二度聞きたかったもので」

先ほどより強く、火野は前島の頭をはたいた。

『二人の男』と『潜水艦：まるゆ』 後編

■おおさわぎの日■

まるゆは夢を見た、自分が目覚めるずっとずっと前。

おそらくまだ世界に深海棲艦がいて、仲間と自分の提督が戦っていた時代の夢。

『ようやくお会いできましたな、まるゆ殿。もう少ししたら提督殿が起こしてくれるで
あります、多分』

意識はないけど、確かに誰かにそう言われた言葉。

でも、まるゆは棺のようなものの中にいて、目を開けることも返事もできない。

『まるゆ殿とリンクを繋げておいて、起こしもせず自分に丸投げとはひどい提督です
なあ。まあ事情があるのでしようが、多分』

毎日来ては、自分に語りかける誰かの言葉が聞こえる。

そしてもう一つ。誰か、恐らくリンクを結んでくれた提督から流れってくる温かいなにか。

『……最終作戦が開始されたであります。我々は留守番のようですな。ですがもうすぐでありますよ、まるゆ殿。もうすぐこの戦いは終わるであります。そしたら……外に出られるでありますよ、多分』

慌ただしい外の気配、でも、それでも聞こえる誰かの言葉。

まるゆは、起こして欲しい、自分も戦うと声に出したいが、それは叶わない。

『ちよつと騒がしいですが、すぐ片づけてまいります。なに、自分がいれば深海棲艦など恐るるに足らずであります、多分』

どこかに、自分を運んでいる、誰かの——最後の言葉。

ゆつくりと、ゆらゆらと、どこか、高い場所に——

『さようならであります、まるゆ殿。別れはつらいであります、また別の自分が貴方に会いにくるであります……必ず——』

それから、どれくらいの日が流れたのか。

誰かが、自分の入っていた棺のふたを開け——

※ ※ ※

「は、はえ？」

夢から目覚めたまるゆは、どこか違和感を覚えながら、まずは立ち上がりとして転がった。

そこではじめて、自身が太い鎖でぐるぐるに巻かれていることに気がつく。

「な、なんですかこれ？」

見回してみると、そこは窓のない小さな倉庫のような部屋だった。

おそらく旅館にある布団などを仕舞っておく、リネン室と呼ばれる場所。

そして近くには鎖ではなく縄で、手首と足首の二カ所を縛られた、火野と前島が床に転がっている。

「ひ、火野さんと前島さん!? 大丈夫ですか!？」

「……あたまがいてえ」

「つく、母に睡眠薬を飲まされたときと、同じ感覚がしますね……」

まるゆの大声に反応したのか、火野と前島がうめき声を上げながら目を覚ます。

「あつ……よかつた！」

火野と前島は自分たちが縄で縛られていることに驚くも、身体をなんとか起こして座る姿勢をとった。

「くそつ、多分寝る前に持ってきた酒だ……アレになんか入ってたな」

「油断しましたね……まさか先輩の言うとおりだったとは」

「……あれ、なんで酒飲んでないまるゆまで、つかまつてるんだ？」

「艦娘であるまるゆさんには薬が効かないはずなので、普通に眠られていたんだと思います」

火野が微妙に非難がましい目でまるゆを見ると、まるゆは気まずそうに目をそらす。

「しつかしカモつつつても、せいぜいぼったくられるくらいだと思ってたが。まさかここまでされるとは思わなかったな」

「……いや、やはりおかしいですね。ならなぜ、まるゆさんだけ鎖で縛られているんでしょうか？」

「んあ？ そりやお前、よく知らんが艦娘なら縄ぐらいちぎれるからじゃねえのか？」

「そこです。まるゆさんが艦娘だと知っていなければ、鎖で縛ろうなどとは思わないはず」

艦娘であるまるゆにとって、鎖を引きちぎるのはさすがに機関に火を入れないと難しいが、ロープであれば素の状態で引きちぎれる可能性がある。

親が艦娘である事から、そのあたりの知識がある前島は、その事について疑問を持たた。

「あー……じゃあなんで追いはぎ宿のやつらは、まるゆが艦娘だつて知ってたんだ？」
「……わかりません」

「おいまるゆ、お前なんか恨まれるようなことでもしたのかよ？」

「先輩じゃあるまいしそんなわけ無いでしょ……。推測ですが、艦娘凶鑑にはまるゆさんの写真が載ってるかもしれないので、それで知った可能性があります」

「お前、見覚えはないって言つてなかったか？」

「私も人間です。見落としが無かつたとは言いきれません」

二人の話を聞いて、なにか不安そうに顔を曇らせていたまるゆが、恐る恐るといった様子で口を開く。

「まるゆは……少し前に人を傷つけてしまいました。そのせいかもしれません……」

「なんだ、カツアゲでもしたのか？」

「だから先輩じゃあるまいし……って、え、それは本当ですかまるゆさん？」

「まるゆは——」

まるゆがなにかを言おうとしたその時、部屋の扉が開く。

部屋に入ってきたのは、顔に傷のある蛇のような目つきをしたスーツ姿の男と、旅館の従業員の服を着た男。

「こちらです支部長。判断がつきかねたので、同じ部屋にまとめておきましたが……」

「ふむ、連絡を受けたときはまさかと思ったが……大当たりだ。よくやった」
部下と思われる従業員の服装の男が、顔に傷がある男に説明をする。

支部長と呼ばれた男は、まるゆの姿を確認し、口をゆがめて嬉しそうにそう言った。
「おいお前ら、こちとら貧乏旅行中の学生だぞ。金が欲しいならハゲでデブのおっさん狙えよ。……まさかホモでロリコンだとか言うんじゃねえだろうな」

「……ふん」

火野の言葉を聞き、支部長と呼ばれた男は火野の顔を蹴る。

縛られた状態で受け身のとれない火野は、その蹴りを受けて床に叩き付けられた。

「先輩?！」

「火野さん!!」

「軽口は慎むんだな」

支部長と呼ばれた男は、ゴミを見るような目で倒れた火野を見る。

その様子を見ていた前島が、相手を刺激しないようにゆつくりと口を開く。

「……あなた方は、こちらの方がどなたかご存じなのですか?」

前島はチラリと、鎖で縛られたまるゆに視線をやる。

そして不安そうなるまるゆと目が合い、再び入ってきた男たちを険しい表情でにらみつ

けた。

「当然知っている。でなければこんなまねはしないさ。くく、くくく……このような僻地にまわされたときは我が身を呪つたものだが、まさかこんなチャンスが回つてくるとはな」

支部長の男は、喜びを抑えられないといった表情で、前島の疑問に答える。

そして大げさに両手を広げ、言葉が続けた。

「しかし貧乏旅行中の学生がこれを拾つていたとはね、見つからんわけだ。まあもうすぐ我々の仲間がここに到着する。それまでちゃんと大人しくしてたら、その艦娘を引き渡した後に解放してやろう。我々も無益な殺生をする気はないんだよ」

「仲間……ですか」

「ああ、そういうえば彼女を見つけたという者たちも一緒に来るそうさ。なんでもつかまえてようとした時に突き飛ばされた傷が痛むとかで、お礼がしたいそうだが」

まるゆが先ほど言おうとしていた、人を傷つけたというのはその事かとピンときた火野が、呆れた表情を浮かべる。

「なんだそりや、自業自得なマヌケの逆恨みかよ」

「まあ、私もそう思うが。それはそうと艦娘、変な気は起こさないほうがいいぞ？　ここは三階で下はホールだ。うっかり艀装を展開して鎖を引きちぎろうとすれば、床が抜けて君は大丈夫でも、その二人や無関係の宿泊客たちが無事ではすまないだろう」

支部長の男の忠告を聞き、まるゆはビクリと震える。

そして心配そうに火野と前島を見た。

その表情には、後悔と罪悪感がありありと浮かんでいる。

「ああそうだ、念のため本当に艦娘かどうか確かめておこう……おい」

「はっ！」

まるゆが大人しくなったと判断したのか、支部長が部下の男に指示を出す。

部下の男は短く返事をする、ナイフをとりだしてまるゆの手を掴もうとした。

「いやぁー！」

だが、男がその手を掴む前に、前島がその間に割り込み、身体を張って阻止する。

「……どけ。邪魔立てしても得にはならんぞ？」

「得かどうかは私が判断します。まるゆさん、念のためお聞きしますが、この方たちはお

知り合いでしょうか？」

「し、知ってますけど、知らない人です！ この人たちは、前からまるゆを捕まえようと

してる人たちなんです！」

「なるほど」

その言葉だけで全ての答えを得てしまった前島。

少女の守護者である彼は、縛られた状態で器用に立ち上がり、まるゆを守るように部

下の男の前に立ちふさがる。

「そちらの事情は存じませんが、あなた方にまるゆさんを触らせるわけにも、お渡しするわけにもいきませんね」

丁寧な言葉でありながら、恐ろしく冷たい口調。

おまけに全身から強い威圧感を発するその姿は、縛られているにもかかわらず、仁王像のような恐ろしさ。

その迫力に男たちは一瞬たじろぐも、部下の男は持っていたナイフを前島に向ける。

「貴様、大人しく——」

だが男は型どおりの脅し文句を言い切る事もできず、後ろから膝裏を蹴られて体勢を崩す。さらに後ろ襟を掴まれ、そのまま壁に叩き付けられた。突然の攻撃によるダメージ。男はその混乱から立ち直る前に、追い打ちで顎を蹴り抜かれて意識を刈り取られる。

そして支部長と呼ばれた方の男は、突然攻撃を仕掛けてきた相手の正体を確認しようとする。その前に首にラリアットを綺麗に入れられ、勢いよく床に叩き付けられる。さらにおまけのような追撃で、下段のかかと蹴りを顔面に入れられ、同じく意識を失った。

「たいそうなこと割ってた割に、あんま強くねえなあ」

「ひ、火野さん!？」

その喧嘩慣れという域を超えた、えげつない攻撃を目にしたまるゆが思わず叫ぶ。

一瞬で二人を片付けたのは、前島が二人の意識を引きつけている間に、関節を外して縄の拘束から抜け出した火野だった。

だが外した場所が少し痛むのか、火野は親指根元の関節部分を軽くさすつている。

「相変わらず躊躇がないですね先輩、昔を思い出します」

「別にお前だつてこれくらいできるだろうが、つたく。それにどうせ、まるゆ渡せば逃がしてやるつて言うのも嘘だろうからな、手心なんざくわえられるか」

「え、えつと火野さん、あんな素早くえつと、な、なんだつたんですか!？」

「おいおい、聞きたいことがあるのはこつちだつーの」

火野はぶつくさと文句をたれながらも、先ほどまで自分を拘束していた縄で、倒した二人の身体をお互いに縛つて身動きがとれないようにする。

「アレはなんと言いますか、私の母の趣味に巻き込まれたと言いますか……少し護身術をですね。母は足柄・登場『絵描き』と『重巡：足柄』等という艦娘なのですが、その、眉唾ですが昔は戦いを生業にしていたようでした……」

いつの間に手に取つたのか、前島は部下の男が持つていたナイフで縄を切りながら、なんとも言えない表情でそう口にした。

「まあなんでも暴力で解決できると思ってた、アホだった頃の話だ。喧嘩に負けたのが悔しくて、コイツのクソおっかないお袋さんに、ちよつと鍛えてもらったんだよ。つっても控えめに言つて地獄みたいなしごきで、頼んだことを後悔したけどな……」

普段あまり弱音を吐かない火野の言葉に、前島もトラウマが蘇ったのか、片手で顔を覆い表情を隠す。

「つたく、それにしても、こういうのはガキの時に卒業したつもりだったんだがな」

苦々しい表情を浮かべながら、頭をガシガシとかく火野。

そして芋虫のように鎖で縛られたまるゆを見て、前島に声を掛ける。

「おい、そいつらまるゆの鎖留めてる、錠前の鍵とか持つてないか？」

「……ありませんね。ただ拳銃を所持しているようです」

「はあ？ てっぼうなんざ持つてたのかこいつら？」

火野が聞く前から倒した男たちの持ち物を探っていた前島が答える。

二人の息のあつた動きに、まるゆはポカンと見守ることしかできない。

「聞きたいことは山ほどあるが、こりやとつととずらかつた方がいいな……確かこいつら三階つて言つてたよな。て事は、ここは俺らの泊まつた部屋があつた階か」

「ええ、浴衣姿で動き回るのも厳しいですし、なにより車の鍵を取りに行かなければ」

「だな。幸いまだばれてねえだろうから、こいつらが騒ぎ出す前にとつと取りに行く」

ぞ」

てきばきと計画と行動の予定を立てる二人。

まるゆはそんな二人の姿を見て、生まれてはじめて感じる類いの思いが湧く。

それは……仲間、戦友、そう呼び合える相手に抱く、信頼の感情。

「あの……なんだかお二人とも、すごいですね……」

だからなのか、鎖で縛られて、得体の知れない相手に追いかけているという状況。例え艦娘だったとしても、心穏やかではいられない状態だというのに、まるゆはまったく不安を感じなかった。

「まあ、ガキの頃から色々あつて慣れてるからな」

「私もそれに付き合わされたので、慣れてるんですよ……」

黒歴史を思い出すかのような、なんとも言えない表情を浮かべる二人の男。

その様子がなぜかおかしくて、まるゆは小さく吹き出してしまった。

※ ※ ※

幸いなことにリネン室から脱出した三人は、誰とも出遇うことなく部屋に戻る事ができた。

そして無事着替えと荷物の回収をすることができたのだが、部屋を出てすぐに何人も人間がこちらに向かってくる足音が聞こえてくる。

とつさに廊下の角に身を隠していると、宿の従業員らしき男たちが慌ただしげに目の前を走りすぎていった。

「……不味いな」

「このままでは外に出る前に見つかってしまいますね……」

鎖で縛られて身動きできないまるゆを抱えた状態で、追手に見つからずに宿の外に出るのは困難。

即座にそう判断した火野は、まるゆを抱えた前島をチラリと見る。

「火でもつけるか？」

「一般の方に被害が出ますので、さすがにそれはどうかと……」

「だ、だめですよ火をつけるなんて!？」

「冗談だよ冗談……しようがねえ、ジャンケンで決めるか。負けた方が困だ」

「……こういう派手さが求められる役回りは、先輩の方が向いてそうですけど」

「あ、あの！　まるゆが困になります！」

不安そうに前島にお姫様だっこされた状態のまるゆが、声を上げる。

その大声に、火野は「しーッ!？」と、大きな声を出さないように注意すると、まるゆ

は慌てて口をきつく結んだ。

「……お前さらうのが目的なのに、お前が囿になってどうすんだよ」

「それにジャンケンしようにも、まるゆさんその格好では手が出せませんよね」

「鎖切る道具をどつかで調達してやるから、いまはそのまま我慢してろ」

そして火野がグツと右手を前に出し、前島もそれにならう。

小さなかけ声のあと、グーとグーを出す二人。

そして何度かあいこが続いたあと、火野のチョキに対して前島が出したのはパー。

「私の負けですか……」

「けけけ、派手に頼むわ」

「しょうがありません、では玄関前で」

「遅れんなよ」

前島はまるゆを火野にそつと手渡し、鞆からなにかとりだしたあとに飛び出す。

そして近くの火災報知器のボタンを押しこむと、先ほど鞆からとりだした丸い玉を床に放り投げる。

「火事だああアアアアアああ!! にげろおおおおおお!! 焼け死ぬぞおおお

おおおお!!」

前島が叫びながら、大きな音を立てて廊下を走りだした直後、丸い玉から大量の煙が

噴き出した。

丸い玉の正体は、旅立つ前に前島の母親（元傭兵）が持たせてくれた、お手製の煙玉である。

妙高型重巡の艦娘である足柄が、イイ笑顔で親指を立てている光景が目に見え、まさか本当に使うことになるとは本人も思っていなかっただろう。

やがて廊下を白い煙が満ち、朝方で目が覚めていた客たちが騒ぎ出す。

さらに非常ベルの音も合わさって、騒ぎが大きくなるのにそう時間はかからなかった。

「文句言ってた割にノリノリじゃねえか。ったく、火つけるより派手だな……うし、いくぞまるゆ」

「はっ、はい！」

部屋から出て我先にと非常階段に向かおうとする人混みに紛れて火野は二階に降り、駐車場に面した窓を近くにあった消火器でたたき割る。

そしてそこからまるゆを抱えて、躊躇なく飛び降りた。

「よいしよおおお！」

「ひゃああああ!!」

ドカンと音を立てて火野が着地したのは、誰のものともしれない車の上。

大した高さではないものの、大人一人と子供一人分の重さの衝撃を吸収したボンネットがべしやりと凹む。

「保険に入っててくれよ!」

火野はまるゆをわきに抱え、着地してすぐの場所に駐めてあった車に乗り込む。

縛られた状態で後部座席に放り込まれるまるゆが、受け身をとれずに短い悲鳴を上げるも、火野は運転席に乗り込み車を急発進させた。

そして、宿の出入り口のすぐ側に急停車。その勢いで、まるゆが後部座席から転がり落ちる。

「びゃん!?!」

「おら前島! 早く乗れ!」

火野が叫ぶと、ちょうど宿の入り口から飛び出してきた前島が、慌てて助手席に乗り込む。

前島が車内に入ったのを確認すると、火野はアクセルを全開に踏み込んだ。

急発進の勢いでまるゆは再びシェイクされ、前島は慌てて開けっ放しだった、車のドアを閉める。

「きゆう……」

「せめてドアが閉まるまで待つて欲しいのですが……」

「ちんたらしてたら追手が来ちまうだろー」

そう言つて火野は、運転をしながら片手で煙草を取りだし火を点ける。

そして苦々しい表情を浮かべながら、バックミラーを確認して少し速度を落とした。

特に後ろから追つてくる車両が、見当たらなかつたからだ。

「で、まるゆ隊員よ。賭けで負けといて聞くのもあれなんだがな。さすがにそろそろ話

してもらおうじゃないの。なーんで君は、あんな物騒なやつらに狙われとるのかね」

「えつと、その、えつと……」

まるゆはなにかを伝えようと口を開くが、グツと我慢するように黙り込む。

その様子に火野は特に催促せず、まるゆが自ら語り出すのを待った。

「まるゆさん、大丈夫ですよ。どんな理由であれ、私たちは必ず貴方をお守りします」

「俺、は、時と場合と理由によるがな」

ひとくくりにされたことが不満なのか、そう口を出す火野。

そんな言葉は聞こえませんと言わんばかりの、穏やかな表情を浮かべる前島。

まるゆは、厄介ごとに巻き込まれたにもかかわらず、自分の味方であり続けてくれる

二人を見る。

そして先程から感じる、いままで湧いたことのない『仲間』に抱くような感情。

その気持ちを噛みしめるように、軽く目を閉じる。

やがてすつと目を開いたまるゆは、決心したような様子で、ゆつくりと語り出した。

※ ※ ※

まるゆは生まれたとき、とある洞窟の中に置かれていたらしかった。

置かれていた、というのは、『艦桶』と呼ばれる、特殊な箱の中に入っていたからだといふ。

現代に存在する艦娘は、人から生まれてくる、いわゆる『人造』の艦娘が大半だ。

だが、その昔。まだ妖精炉と呼ばれる設備によって艦娘が『建造』されていた頃。

彼女たちは『艦桶』に格納された状態で、生まれてくるものだったらしい。

しかしなんの因果か、まるゆは戦中に建造されたものの、なぜか艦桶から出されなかった。

そしてそのまま一世紀以上の期間、その場所に安置されていたらしいのだ。

だがそういった戦中に建造され、艦桶から出されることなく戦後になっても長年放置されていた艦娘がいなかったわけでもない。まるゆのように月日が過ぎてからようやく開封され、目を覚ましたという事例も、珍しいがゼロでは無かった。

ただ、問題だったのは――

「まるゆは……艦娘、潜水艦の艦娘なんです」

「ツ!? そうか、どうして気がつかなかったんだ……まるゆ、そうだ、潜水艦まるゆ。間違いないですね、艦娘ですよ!」

「うるせえ、艦娘だつてのはわかってたことだろうがよ」

「問題なのは潜水艦の、というところですよ!!」

「んあ?」

前島はゴクリと唾を飲み込み、なんとか心を落ち着けて説明を続ける。

「過去の大戦で人類は、提督と呼ばれた人々と、艦娘のおかげで深海棲艦に勝利しました。ですが大きな犠牲もあつたんです……その一つが、潜水艦と呼ばれた艦種の艦娘たちです」

「潜水艦?」

「艦娘たちの中にも駆逐艦、軽巡洋艦、重巡洋艦、航空母艦、戦艦などの種類があつて、潜水艦はその一つです。当時存在した全ての潜水艦の艦娘たちは、潜水艦を率いることに長けた提督と共に深海棲艦の本拠地に突入し、敵を打ち倒しました。ですが……誰一人として戻つてはこれなかったと……伝えられています」

「……つまりなんだ、まるゆは絶滅危惧種っつーか、絶滅動物みたいなもんなのか?」

「艦連的にはそんなレベルじゃないんですが……概ねその認識であってます」

「いまいちわかつてなさそうな火野の解釈に、前島は曖昧な肯定を返す。

「まるゆは前島の説明が一区切りついたのを感じて、続きを話す。

「まるゆを起こしてリンク……えつと、提督と結ぶ繋がりのようなものなんですが。それを結んでくださった方を、まるゆは提督として認識するはずだったので……まるゆはどうも起こされる前に提督とリンクを結んでいたみたいなんです」

「現代では廃れてしまった方法ですね」

「はい……本来建造された艦娘は、起きた後じゃないと提督とリンクを結べないはずなんです……多分、そういうことが可能な提督だったんだと思います。……おぼろげなんです、リンクを結んだ感覚は残ってるんです。とても温かくて、提督と他の潜水艦のみんなと繋がったような、すてきな感覚で……そして、とても薄くなってしまっただけですが、まだそれが残ってることを、少し前に気がつけたんです。だから海の向こう、その先にみんなが待つてるってわかったので……だからまるゆは、そこに行きたくて……」

「……おいまで、そのなんだ。戦争つてもう百年以上前の話なんだろう？ いっちゃなんだがお前となんだ、リンク？ を結んだその提督は、とつくにくたばってるんじゃないのか？」

「そのはず……なんですが、確かに感じるんです。その先に提督や……みんなが、いるんだって」

まるゆは自信なさげだが、どこか確信を持ってもいるような表情で、二人にそう伝える。

「……まあ、スピリチュアル的な話はよくわからんからおいところ。それでまるゆ、じゃあお前の母親つてのはいつたい何者なんだよ？」

「まるゆをたまたま洞窟で見つけて、そして艦桶を開けてくれたお年寄り……その人がまるゆがお母さんと呼んでた人なんです。起きたばかりのまるゆはなにもわからなくて……お母さんはそんなまるゆの手を取って、一緒に暮らそうって。それから山奥のお母さんしか住んでいなかった集落で、まるゆは何年も、お母さんと二人で暮らしました……」

まるゆの穏やかな声色が、その日々が穏やかで幸せなものだったことを感じさせた。

「お母さんはまるゆが潜水艦の艦娘だと承知で、とても優しくしてくれて……。いまの世の中のことや、色々沢山のことを教えてくれました。でも、高齢だったお母さんは、ある日眠るように亡くなってしまつて。まるゆは、お母さんを土に埋めて……その時、気がついたんです」

「それがさっきの感じるってアレか？」

「はい。とても細かい、けど確かに繋がってるなにかがあるって気がつきました。漠然とした感じなんですけど、でもそれはきつと海に行けばもつとはつきりわかるって感覚もあつて……だから、まるゆは海に向かうことにしました」

そうして漠然とした不安、焦燥、そして期待。そんな気持ちを抱いて、まるゆは旅に出た。

「でも、山を下りたところにあつた村を通つたとき、まるゆを見た人が……すごい顔でまるゆを捕まえて……本部に連絡しろ、潜水艦の艦娘を捕まえたつて。まるゆは怖くなつて、その人を……傷つけて、すぐに逃げ出しました。それから山の中を一週間くらい彷徨つて……多分、もうあきらめてくれたんだらうと思つて道路に出たんです。そこをちようど通りかかつてくださったのが……」

まるゆは顔をあげて、前の座席に座る二人に目を向ける。

「俺たちだつたつてわけか……しかしなんだ、その突然まるゆを捕まえようとしたアホやさつきのやつらはなにか？ 前島のご同類かなんかか？」

「そんな人の風上に置けないような汚物と一緒にしないでくださいよ……。おそらくですが、あの男たちは『大本営の残党』と呼ばれる、戦後に世界を手にしようとした組織の生き残りの可能性が高いですね。もしまるゆさんが彼らの手に落ちれば、艦連との取引材料や組織再興の旗印にするなど、最低な言い方になりますが、かなりの利用価値が

あると思うので」

「おつふ、思ったよりやばそうなのやつらだなオイ。知らん間に巨大な陰謀に巻き込まれた気がするぜ。このままじゃ犠牲者が出そうだから」

「実際巻き込まれてますし、もう出てますよ……」

世界的に重大な事件のただ中にいる。

だというのに変わらない二人の様子に、まるゆは嬉しく思うのと同時に、無性に申し訳なくなった。

「あの、やつぱりまるゆをここで降ろしてください。このままだと本当にお二人にご迷惑を——」

「なにを言ってるんですかまるゆさん。言ったでしょ、必ず貴方を海までお連れすると」
「なんでお前はいつも一秒で覚悟を完了するんだよ……」

「……先輩？」

「そんな目で見ると、わあってるよ。こうなつた以上、最後まで付き合つてやる。いくつか借りもできちまつたからな」

火野は吸い終えた煙草を灰皿にねじ込み、再び煙草をくわえる。

「そーいや昔の映画でこういうのあつたな。アウトローの男二人が銀行強盗しながら、途中で女一人拾つて旅するつてやつ。配役的に俺はタフでハゲのほうなのが気に食わ

んが」

「ああ、あの映画ですか。さしずめ私はあの痩せた神経質男のほうですかね」

「じゃあまるゆはえつと、も、もしかしてヒロイン……」

「うるせえちんちくりん、お前なんざペット粹だ」

「も、もぐらじゃないもん!?!」

ぶんすかと怒るまるゆを見て、ケラケラと笑う火野。

少し暗い雰囲気になっていたまるゆが、元気になった様子に前島の頬も緩む。

「面白い映画だったんですが、続編が出ないのはその男二人が蜂の巣になったからなんですよね……」

「この状況で縁起でもねえこと言ってるじゃねえよ馬鹿……しっかし、そうなるこれからどこに向かえばいいんだ?」

「そうですね……やはり海でしょうか。海に出てしまえば、艦娘、特に潜水艦であるまるゆさんを追うことも見つかることもできなくなると思いますので。ですが……あつた、昨日旅館の方に地図を用意していただいたのですが、艦連軍のレーダー基地が、ここからそう遠くないところにありますね。ええと、あれだ。あの山の上に向つすらと見える、あれです」

前島が指さす先にある山の上に、遠くからでもその形がわかる大きなパラボラアンテナ

ナが三つ並んでいる。

「艦連軍ねえ……大丈夫なのかよ」

そのアンテナの巨大さに、艦連という組織の力を重ねて感じたのか、火野がボソリとこぼす。

「大丈夫に決まっていますよ。艦連軍、特にそのなかの憲兵軍にとって、艦娘の守護はその存在理由ですのぞ」

「そりゃまあ、お仲間だったらそうなんだろうけどよ。個より組織つつーか、まるゆが絶滅動物なら逃がさないように閉じ込められたりしないのか？」

「あつ……」

火野のまさかとも思われる考え。だが前島はその可能性がゼロではないと思い、眉をひそめる。

「じつはお母さんもその事を心配していました。だからまるゆも、その事が少し気になって……そもそもまるゆを仲間と思ってもらえるのかわかりませんし。だから一人で海まで行きたかったんです」

「つつても艦娘にとつての味方には変わりないんだらうから、一時的に助けを求めるとかはできないもんかね。憲兵だっけか、あいつらの仕事のことはよく知らんが。問答無用で捕まえられたりとかはせんだろ？」

「まるゆさんを害するという意味では絶対にしないはずですよ。ただ……私たちの方が艦娘を害する存在である可能性が僅かでもあると判断されたなら……その瞬間、彼らはその排除を行うための装置と化す。特にまるゆさんが潜水艦の艦娘だと知ったなら、彼らはなんとしてでも保護しようとするはずですよ」

「お母さんも、まるゆが潜水艦なら艦連がどういふ対応をとるのか……それは全く予想できないって、そう言っていました」

「なんか俺はお前のお袋さんが、なにもなかったのかのほうに気がなってきたぞ……」
まるゆが母と呼んだ女性の言葉、それは危機感に慎重さ、そして知識がないと出てこないものだ。

だが、火野がそれを詳しく聞こうとしたところで、サイレンの音が後ろから聞こえてくる。

ハツとなって三人が後ろを確認すると、警告灯を光らせながら追ってくる警察車両が見えた。

「やべ、ちよつとスピード出しすぎてたか？」

バックミラーに映ったパトカーの姿を見て、各々が微妙に違う反応を浮かべる。

普段の素行の悪さもあって、何度か世話になったことのある火野はビクリとし。

現状自分たちだけでは手に負えないと思っていた前島は、どこか安堵の表情を浮かべ

る。

そしてまるゆは、どこか不安がっている様子。

なぜなら、いま現在の状況でまるゆにとって信用できるのは、火野と前島の二人だけだからだ。

「まるゆは警察さんにはじめて会うんですが……大丈夫なんでしょうか？」

「ここで振り切ってもしやあない。ひとまずとぼけて、あれなら正直に言っただけでもらうか」

火野は路肩に車を寄せて停車し、慌てず警官が降りてくるのを待った。

パトカーは三人が乗る車の少し後ろに停車。そして助手席に座っていた警官が降りて、前島が座る方の窓を叩く。

運転席ではなく助手席の窓を叩いたのは、三人が乗った車のハンドルの位置が、一般的な車とは逆についていたためだ。

「スピード違反です、免許証のどこ提示をッ!？」

その事を伝えようと、前島が窓を開けた瞬間。言いかけた言葉を中断した警官の顔が目に見えてこわばった。

そして運転席に残っていた警官にむけて、大声を上げる。

「応援を呼べ！ 少女を鎖で縛って誘拐しようとしている凶悪犯だ！」

「あつ」

「あつ」

「ふえ?」

そこで三人はようやく、まるゆがまだ鎖で縛られたままだったことに気づく。

確かに後部座席に鎖でぐるぐるに巻かれて座るまるゆの姿は、どう見ても誘拐された女兒にしか見えない。

想像の斜め上をゆく事態の悪化に、思わず一行は硬直してしまう。

「ちようど近くで検問をしていた機動隊が、全員連れて駆けつけてくれるそうです!」
「ちよ! おま! ばつ!」

さらに追い打ちを掛けるように、パトカーに残った警官が増援の連絡を伝える。

それを聞いて、火野が言葉にならない声を上げた。

「いたいけな少女を拘束し誘拐するなど…… ゆるさん!! 観念しろよ貴様ら! 逃げてても無駄だ! はやく車から降りろ!」

「前島のご同類かよ!」

「誤解です! ちゃんと説明しますから——」

「あつ、やべ」

まるゆに協力してもらいながら、正直に説明しようと前島が窓から身体を乗り出す。

が、なにかに気づいた火野が、慌てて車を急発進させる。

そして運悪く、窓から出していた前島の腕が、警官にクリーンヒットして吹き飛ばした。

「いふあっ!」

華麗な三回転半を決めて、地面に崩れ落ちる警官。

そして彼が地面にキスをする瞬間を見届ける前に、一行が乗った車はその場所から遠ざかる。

「あっ!」

「あっ」

「ふへ?」

前島は警官の顎に勢いよく当たった自らの拳と火野に、何度も視線を往き来させる。

あまりの出来事に、思考の整理が追いつかないのだ。

「……なにしてくれてはるん」

「いっつ、こっつ、こっつ……こっつちの台詞ですよおおおおお!」

混乱して火野につかみかかる前島。

運転中にもかかわらず高速で揺さぶられる火野。

「い、いや、しょうがねえんだよ。後ろ見てみる」

言われて振り返ると、何台もの車とバイクが向かってくるのが見える。

そしてその先頭を走る車には、旅館で支部長と呼ばれた男の喚き散らしている姿があった。

「あれは……」

「てっぼう持つてるやつらが、あの数の車に乗ってるなら、多分警官にかまわず撃つてるぞ」

例え状況を説明し、助けを求めたところで警察車両一台に警官二人。

だが追手は複数台の車に、頭に血が上った武装テロリストの集団。

ぶつかればどちらが負けるかは、子供でもわかる。

「まさかカーチェイスすることになるとはな……振り切るのはちと自信がねえが、まあなんとかなるだろ」

「火野さん……」

「あとな前島。言つとくが俺は正直、追ってきてるやつらも、まるゆが抱えてる事情がどれだけヤバイかもよくわかってねえ。でもな、もう引き返せないところにいるつてのはなんとなくわかる。だからアクセルをべた踏みしてるわけだ、後に引けないなら、突っ切るしか道はねえからな」

火野はくわえていた煙草を灰皿にねじ込み、両手でしっかりとハンドルを握る。

そして、頼れる父親が子供にそう教えるような声色で、前島に向けて言葉を投げかける。

「だけどな、お前は俺よりいまの状況がどれだけヤバイかってのがよくわかってるんだろ。なら、警察ぶん殴つたくらいでおたおたしてないで、とつとと腹くくれ」

その火野の言葉で、前島はハツとなる。

本能で動く火野にはわかっていたこと、この状況の深刻さ。

前島の脳裏に、つい昨日のまるゆの言葉が蘇る。

その言葉に、どれだけ自身が救われたかを思い出す。

ならば、今度は自分が……。

「……いえ、まるゆさんを守るためならば、誰が相手だろうと戦います。先輩も力を貸してください」

「そうかよ。まあ俺は成り行きじょうしゃーなのだが、お前にそうご丁寧に頼まれちゃ断れんな」

先ほどまでと違い、明らかに覚悟が決まった前島の顔。

それを見て、火野は楽しそうな子供のようになつた。

「でも警官を殴ってしまった件の釈明には、必ず付き合ってもらいますから」

「お、おう」

※ ※ ※

「来てるか!？」

「いえ、大分引き離せてるようです!」

「うっし、このままぶつちぎってやる!」

「す、すごい速いです!」

タイヤが焼ける匂いが車内に漂ってくるほどのコーナリング。

フロントガラスから見る景色が横に滑るような、激しい運転のかいもあってか、一行は追手から距離を離すことに成功していた。

「この先にある、山間にかかった橋をわたってしばらく行くと、艦連軍の基地と海に続く分岐があるみたいです!」

窓の上についたアシストグリップを片手で握り、必死に身体を支えながら、もう片方の手に持った地図を確認していた前島が叫ぶ。

「もう一回確認しとくが、海にさえ出ちまえば、誰もまるゆを追えないんだよな?」

「ええ。海で艦娘と渡り合えるのは同じ艦娘か、もう滅んだ深海棲艦くらいですよ!」

「よし、ならこのまま海まで突っ切ってやる! それにしてもクソツたれ。アイツらが

いなきや、廃墟じゃない本物の遊園地に連れてつてやりたかったんだけどな！」

「火野さん……」

ギリギリの状況で火野がこぼした言葉に、まるゆが目を潤ませる。

もつとも、蓑虫のようにグルグルに鎖で巻かれて、揺れる車内でシェイクされている状態なので、その目の潤みがどういう意味なのかは判別がつかないのだが。

やがて車は長い直線道路に入り、前方に橋が見えてくる。

そこそこ大きな橋らしく、遠くの方はかすんでよく見えない。

「コイツが例の橋か？」

「はい、大きさ的にも間違いないかと」

が、橋に進入してしばらく、真ん中を越えたあたりで前島が異常に気がつく。

壁。そこに有ってはならないもの、それが橋の先にあつたのだ。

「あれはまさか……警察の検問です！」

「え？ え？ え？」

「ハア!? さすがに対応早すぎるだろ!？」

壁の正体。それは橋の出口を封鎖する、警察車両や装甲バスだった。

しかも道には、タイヤをパンクさせるスパイクがついたものが設置されている。

「ふざけんな!？」

いち早く気付いた火野がブレーキを踏むも間に合わず、ニードルを踏んだ四つのタイヤ全てがバースト。

コントロールを失いながらも、火野はなんとか車を停車させる。

「……おい、平気か？」

「なんとか……」

「は、はい！」

『連絡は受けている！ いたいけな少女を誘拐した犯人ども！ 大人しく車から降りて少女を解放しろ！』

全員の無事を確認したのもつかの間、拡声器を使つての警告が聞こえてくる。

声が聞こえてきた方向には、装甲バスの前に駐められた警察車両を盾に、銃をこちらに向けている多数の警官。

人質と思われるいるまるゆがいるので撃つてはこないだろうが、威嚇としてはこれ以上ないほどの状況。

「この地域の警官つてのはどいつもこいつも前島のお仲間なのかよ……どうりで対応早いわけだクソツタレ。で、どうするよ、大人しく投降するか？」

「あの、まるゆが正直に話せば許してもらえないでしょうか？」

「この状況をうまく切り抜けられるなら、嘘ついても許されそうだけどな。ほら、嘘も方

便っつーだろ」

「なるほど。こういう時は嘘をついてもいいんですね！」

「……いえ、状況が状況です。我々の立場がどうなるかはわかりませんが、まるゆさんの安全を考えるなら、素直に投降した方がいいかもしれません」

「まあなんにせよ、しばらく俺らは牢屋入りだろうけどな」

「ろ、牢屋!? ま、まっつてください、まるゆに考えがあります！」

ドアを開けてくれとお願ひされ、前島は迷うように火野に目配せし、少し悩んだ末に後部座席の扉を開けた。

まるゆは転ばないよう、ゆっくりと車を降りる。

『よおし！ 素直に人質を解放するとはいい心がけだあ！』

「違うんです！ 火野さんも前島さんも……えっと、この人たちは悪い人たちじゃないですー！」

『大丈夫だから！ 嘘をつく必要はない！ ゆっくりこっちに来なさい！』

予想に反して、あっさり人質を解放したと思つた警官隊長。

だが、その隊長を真つ直ぐにみつめて、まるゆは声を上げる。

「ホントに違うんです！」

『鎖で身体を縛られてるといふのに、なにが違うといふのだね！』

「えっと、これはえっと……まるゆの”性癖”なんです!!」

まるゆがそう叫んだ瞬間、緊迫状態だった橋の上が一瞬で凍り付いた。

え? 性癖? 鎖で自分の身体を縛るのが性癖?

警官たち全員の中の、グルグル回る銀河が浮かぶほどの混乱が生じた。

まるでそれは、なぜか宇宙の広さを認識してしまったネコが、なにがなんなのかわか

らず、魂がどこかに飛んで行ってしまっているような状態。

「……誰だよ、アイツに性癖なんて言葉教えたの」

「その、私が……口にしてしまった気がします」

「……どうすんだよ、この空気」

「先輩が時には嘘をついていいなんて言うからですよ……」

『ななななっ!! つ、つまりそれはお嬢さんと、その二人の趣味と言うことかね!』

「そ、そうです!!」

そうしてちよつとだけ混乱が収まった隊長が、声を震わせながらまるゆに問いかける。

まるゆはその問いかけに対し、微妙にどもりながらもはつきりと答えを返した。

『う……うらやまけしからん!! わ、ワシだってッ!!』

えっ、そっち?

と、突っ込みたくなるイケナイ願望を抱えた隊長が、顔を赤くして叫ぶ。

他の警官たちも頷きながら「じつは俺も興味があつて……」「俺はあの眼鏡に縛って欲しい」「俺はあつちのワイルドな方だな」「はあはあ、俺はあつちのお嬢さんに」「俺は……縛りたい」と、イケナイ欲望を口々に呟く。

そんな警官たちを、どこか哀れむように見る前島。

「まったく、度しがたい人たちですね。少女の願ひならともかく、成人した男女の歪んだ願ひを我々が叶える理由など、一欠片だつてありはしないでしように」

「巻き込まないでくれ。頼むから、俺を巻き込まないでくれ……」

ただでさえどうしようも無い状況だというのに、追加で別の意味で絶望に襲われた火野が顔を伏せた。

だがその混乱した状況に、さらなる混乱が来襲する。

「おいおい……」

火野がバックミラーに目をやると、迫り来る大本営の残党の車両が映っていた。

彼らは前方に展開する警官隊のバリケードに気がついたのか、急ブレーキをかける。

複数台の車から焼けたタイヤの煙が立ち上り、あたりを包む。

『なんだあ!?! 誘拐犯どもの新手か!?!』

ちやうど警官隊と火野たちの車の距離と同じくらい離れた場所で停車した、追手の車

両。

車から降りてきたのは、それぞれ拳銃などで武装した大本営の残党たち。

「あ、あの人たちこそが、まるゆをつかまえようとする悪い人たちなんです！ 本当はこの鎖も、あの人たちがえつと、とにかく火野さんと前島さんはわるくないんです！」

『むむむ!!』

まるゆの言葉に、現状の把握が追いつかない隊長。

警官隊が混乱する中、最後に車から降りてきたのは、火野に顔を蹴られた支部長と呼ばれる男。

支部長は鼻を押さえながら、顔を真っ赤にして叫ぶ。

「やっと追いついたぞきさまらあ！ 大人しくソイツを渡せ!!」

『なんだとお!! このお嬢さんをどうするつもりだあ!!』

支部長の叫びと共に、武装した大本営の残党たちは、車を盾にして銃を構える。

だが前方の集団を、まるゆ（少女）にとつての脅威と判断した警官隊も、いつせいに銃を大本営の残党に向けた。

山間部に架かったのどかな橋の上で、一瞬で銃弾が飛び交うキルゾーンになりかねない状況に変わる。

「ああもう、めちやくちやだよ……」

「ど、どうしましょう?」

「どうにもならん。ほんと、今日は朝からずっと最高の日だな」

焦る前島を横目に、火野が煙草を吸いながら天を仰ぐ。

そして一呼吸おいて窓を開け、まるゆに声を掛ける。

「おいまるゆ。とにかくお前はあつちの警察に保護してもらえ。俺らはここで蜂の巣になる」

「……それが、最善でしょうね」

「蜂の巣、ですか?」

いまがどういう状況か、いまいち把握できていないまるゆ。

そんなポンコツ具合に、どこか穏やかな気持ちになった火野は、わかるように言い直す。

「いま俺らが外に出ればドンパチが始まるかもしれない。そこで位置的に撃ち合いになれば、俺らは助からん。だからまあ、お前だけでも逃げろって事だ」

「え……? そ、そんなの絶対駄目です!!」

「いや、でも、そうはいうがなあ」

「駄目です!!」

絶対にそんなことはさせない。

そう感じさせる強い意志をもった叫びをあげるまるゆ。瞬間、まるゆの立っている場所が少し陥没し、橋がわずかに揺れる。

「まるゆだって、やればできるんです！」

まるゆはそう叫び、鎖を引きちぎった。

まわりが啞然として見つめる中、まるゆがドスンドスンと音を立てながら、火野と前島が乗った車の下に潜る。

そしてまるゆは……二人が乗った車を、持ち上げた。

「お、おい。この車、浮いてるぞ」

「これは……まるゆさんが持ち上げてる!？」

視界が、子供一人分高くなった事に驚愕する二人。

そしてそれを外から見ている者たちは、か弱い見た目の少女が乗用車を両手で持ち上げているという、現実離れた光景を目の当たりにして、二人以上に驚愕した。

『か、艦娘か!？』

「しまった!?! やつら逃げるぞ!!」

警官隊長と支部長、二人がそれぞれ叫びをあげると同時に……まるゆは車を持ち上げた状態で“ジャンプ”する。

そうして高く飛び上がったまるゆは、警察のバリケードを文字通り飛び越えた。

「うっそだろおい!？」

「んなあ!？」

そして車内の火野と前島は、子供一人分どころか。

警察の装甲バス以上高さになったフロントガラスからの視界に、驚愕の叫びをあげる。

遅れて橋が大きく揺れ、橋を出た場所にまるゆが着地する大きな音が響く。

「なんじゃこりやああああ!？」

「ぐふお!？」

着地の衝撃を辛うじて座席のクッションで吸収するも、揺れは止むこと無く、さらに続く。

「おっ、おいおいおい、どうなってんだおい!？」

「ま、まるゆさんです！ まるゆさんが車を持ち上げた状態で走ってます!？」

「はあ!？」 押すのと持ち上げるのじや全然違うだろ!？ とんでもねえなアイツ!!」

火野の驚愕の叫びと同時に、後ろから複数の銃声が響いた。

おそらく、驚きのあまり追手側が発砲し、それに警官隊が反撃を開始したのだろう。

「うっほ、あつちは大騒ぎみたいだなオイ」

「ホントに映画さながらですね……」

火野は開いた窓から顔を出し、外の状況を確認する。

位置的にまるゆの姿は見えないが、ドスンドスンと重い音が響いていた。

「おいまるゆ！ やるじゃねえか！」

「えへへ！ 缶に火を入れるのは初めてなんですけど、うまくいきました！」

火野がご機嫌そうに大声を車の下に投げかける。

嬉しそうなまるゆの声が、車体の下から返ってきた。

「スゲえな艦娘ってやつは……うっし、このまま海まで——」

「いえ、これは……マズイかもしれませんが」

「なに？」

前島は火野の言葉を、深刻な表情でさえぎる。

「母に聞いたことがあります、陸上での艦装展開は非常に燃費が悪く、おまけにコントロールが難しいと。もしまるゆさんが、陸上で缶に火を入れるのが初めてなら……燃料だけでなく、身体に不調が出る恐れがあります」

「つまり、どういう事だ？」

「例え海に出たとしても、燃料がなければ艦娘は艦装の展開も出来ませんし、そうなる動くことも出来ません。おまけに、まるゆさんの身体に異常をきたすのであれば……修理が必要になる可能性もあります」

「よくわからんが、それ駄目じゃねえか。海に行っても逃げ切れねえだろ」
「……はい」

深刻そうに前島が頷いたところで、後ろから迫ってくるエンジンの音。

二人が慌てて後ろを見ると、猛スピードで追いかけてくる一台のオフロードバイク。
「あのバイク、例の人さらいどもの仲間か？」

「どうでしょうか……ッ!?!」

瞬間、バイクに乗った人間が、車に向かって銃を構える。

そして銃口が二回火を噴き、発砲音が一行の耳に届いたと同時に後部座席の窓が割れた。

「撃ってきやがった!!」

「だ、大丈夫ですか火野さん!?!」

「いいからまるゆ! このまま道の真ん中を真っ直ぐ走れ!!」

「はっ、はい!」

「……おい、わかってるな?」

「母になんと言われるか……」

「一緒に殺されてやるから、タイミング合わせろ。どっちから来てもいいようにな」

威嚇射撃にも動じず走り続ける車（まるゆ）に、バイクの運転手は車の前に出ようと

スピードを上げる。

「せーのツ!!」

そして道路中央を走る車の脇を通り抜けようとした瞬間。

タイミングよく二人が車の左右のドアを開くと、火野が開けた方のドアに追手がぶつかり、ドアが吹き飛ぶ。

ちようど開いたドアの高さが顔のあたりだったため、追手は頭を軸に派手に回転しながら道路に落ちて転がった。

「ああ……ドアが……」

「いまは忙しい、お袋さんへの言訳は旅行が終わってから考えるぞ」

「警察への言訳より遙かに難しいですよ、それ……」

「あの……すみません、もう持つてられなくて」

火野の企みがうまくいったのもつかの間。まるゆはつらそうな声でそう言ったあと、ゆつくりと道路の脇に車を下ろす。

地面に下された車から前島があわてて降りると。まるゆが辛そうに足を押さえ、車脇の地面にうずくまっていた。

「ま、まるゆさん！ 大丈夫ですか!？」

「あの、はい……でも、なぜか足がうまく動かなくて……」

「動かさないでください、機装を地上で展開した反動の可能性があります」

「まるゆ、よくわからなくて……これは、治るんでしょうか?」

「……わかりません。ですが、こうなったら艦連軍の基地に向かうしかないかと。それ
にまるゆさん、燃料の残量はわかりますか?」

「え? ……あ、あれ? 半分以上減ってます……」

「やはりですか」

前島がまるゆの状況を確認する中、火野はバイクに乗っていた追手が気絶しているの
を確認し、念のため銃を遠くに投げ捨てる。

そして転がったバイクをなれた手つきで起こし、勢いよくまたがった。

「よし、まだ動くな……ともかくここを離れるのが先だ! 早く後ろに乗れ!」

「そのバイクに三人で乗るんですか!」

「まるゆを間に挟んで、お前がしっかり支えりゃいけるだろ。早くしろ!!」

「わっ、わかりました! まるゆさん、失礼しますね!」

「え? あっ、わわわ!」

前島がまるゆの両脇を抱え、バイクにまたがる。

体勢的にはまるゆを火野と前島がサンドイッチしている状況。

一瞬前島の脳裏に、圧倒的役得!!という文字が浮かぶ。

「まるゆ、俺の腰に手を回して離すな」

「はっ、はい！」

「……先輩、運転を代わりっぐ!？」

そつちのポジションも良いかも……と、思った前島がうらやましそうに呟きかけた瞬間、急発進するバイク。

「わっ、わっ、わっ!？」

風を切って高速で移動するという、はじめて体験する状況におどろくまるゆ。

剥き出しの身体で感じる、流れる景色に大気、そして空気を震わせるエンジン音、すべてが未知のもので頭の処理が追いつかなかった。

だがしばらくしてなれはじめると、そのどれもが、とても刺激的な感動に変化してゆく。

その溢れ出る感動を抑えられないというように、まるゆは火野に聞こえるよう、嬉しそうに声を張り上げる。

「こ、これがバイクなんですわね！」

「どうだサイコーだろ!!」

「はいっ！ すごい風です！」

やがて三人の乗ったバイクは交差点にさしかかった。

標識には大きく『艦連軍レーダー基地』と書かれ、その下に書かれた矢印が左を指している。

「別れ道か、どっちだ前島!？」

「左です! 艦連軍の基地に向かってください!」

「いいんだな!？」

「こうなった以上、まるゆさんの修理と燃料の補給をするためには、それしかありません!」

「わあつたあ!!」

前島の返事を聞き、火野は左に進路をとった。

そして平坦な道路をしばらく走った後、山道に入る。勾配の付いた道で速度が落ちるのを感じた火野は、さらにアクセルを開けた。

物資の輸送のためにトラックなどの大型車両が走ることも想定されているためか、山道の幅はそれなりに広い。

だが、その為緩やかな上り坂が続き、思った以上に登るのに時間がかかる。

一行が乗ったバイクが、何度か折り返しを繰り返して山道を登ったところで、火野が声を張り上げた。

「半分くらいは登ったな、下の方見えるだろ」

「はいっ！ 橋も見えます」

「追手は見えるか!？」

「いえ、さすがに見えませんが。あきらめてくれてるといいんですが……」

前島がそう答えた瞬間、一行が走る前方の道。

眼前になにかが横切ったのを火野が感じた瞬間。

閃光、ほんの僅かに遅れて爆音が空気を震わす。

そして最後に爆風が広がり、三人とバイクを吹き飛ばした。

※ ※ ※

「につ、逃がすな!？」

とつさに出た支部長の指示に、いち早く反応した一台のバイクが警察車両をジャンプ台にし、バリケードを突破。

そして大本営の残党の一人が、車を抱えて宙を飛ぶまるゆに向けて発砲する。

それにたいして、誰よりも先に反応したのは警官隊の隊長。

『我々ならともかく、少女に向けて発砲するとは……ゆるさん!! 全員構え、以後の発砲は任意、てえ!!』

それを皮切りに、橋の上で西部劇のような銃撃戦が始まった。

お互いの車両に穴が空き、ガラスやランプが割れる。

お互い死者は出ていないが、それ故に完全な膠着状態におちいつていた。

「支部長撤退しましょう！ このままではやられてしまいます！」

「できるかあ！ ここまで派手にやって対象を確保できなければ、私はおしまいなんだぞ?！」

進言してきた部下の襟を掴み、血走った目で叫ぶ支部長。

事実、これだけのことをしてなんの成果もえられなければ、彼の未来には破滅しかない。

「増援が到着しました！」

が、天はまだ支部長を見放していなかったらしく、大本營の残党側に響き渡る起死回生の報告。

その報告とともに後方から姿を現したのは、大きなタイヤを八個つけた装甲車。

しかもその上部には、戦車に搭載される巨大な砲が備わっていた。

「まにあつたか!!」

まるゆという存在の重要性を強く説き、捕らえた後の護送に必要ななるだろうと考え、本部に要請していた虎の子の装甲車。

その反則ともいえる増援車両に、支部長は急いで乗り込む。

『戦車だとお!? 馬鹿な、退避、退避だあ!!』

一方の警官隊は、隊長の指示で慌てて逃げ出す。

さすがの警官隊も、戦車のような装甲車の相手は専門外だ。

速度の乗った戦車の突撃によって警官隊のバリケードは破壊され、その後に残りの大

本営の残党たちも続く。

「アイツら……絶対にくるさん!」

支部長は、痛む鼻を押さえながら憤怒の感情を爆発させる。

自らのキャリアに砂を掛けたあの男二人、特に顔を蹴った方の男は絶対に許さないと

心に誓う。

「見えました! レーダー基地に続く山道を登っているようです」

その願いがなにかに届いたのか。

装甲車に搭乗していた目のいい人員が、一キロほど先の山道を走るバイクをみつける。

「よしッ! 撃て!」

「は? 正気ですか!? 艦連軍の基地が近くにあるんですよ!」

「艦娘ならこの程度では死なん! それにアイツを確保できなければ全て無駄になる!

偉大なる大本営復活のためだ、いいからやれ!!」

「はッ、はい!」

正気を疑う命令だったが、よく訓練されているのか、砲手はバイクの前方に向けて榴弾を発射。

砲撃音が響いてしばらく、双眼鏡を覗いていた搭乗員が報告する。

「着弾確認! 目標は爆風で吹き飛ばされた模様!」

「よくやった! 他の車両はいまのうちに追いついて確保だ!」

支部長は装甲車から顔を出し叫ぶ。

指示を伝えられた他の車が、速度を上げて鈍足の装甲車を追い抜いてゆく。

だが装甲車の力に酔い、冷静さを失った支部長は気がつかない。

艦連基地の近くに砲撃を撃ち込むという、その致命的な過ち。

そして自分がどんな巨大な相手に牙を剥いているのかを。

※ ※ ※

「いつてえ……」

「火野さん! よかった!」

どれだけ気を失っていたのか、火野はぼやける頭と痛む腹部を押さえながら身体を起す。

あたりを確認すると、崩れた山道に倒れた木々、いまだにくすぶる土煙。そして這いながら火野に近づいてくる、まるゆの姿が見えた。

「なにが、起きた？」

「……多分、砲撃を受けたんだと思います」

「砲撃い!? マジかよ……まったく、なんなんだよ今日は……まるゆ、お前大丈夫なのか？」

「はい、足はまだ動かないんですけど、なんとか」

「そうか……くそつ、腹がいてえ……。まるゆ、前島が大丈夫か見てこい」

「えつ、あ、はい！」

火野はうめき声を上げながら立ち上がると、砲撃によって倒れた木を掴み、道路をふさぐように動かす。

そして前輪が無くなっているバイクを、道をふさぐ木の近くまで引きずって動かし、ガソリンタンクのフタを外した。

タンクに残っていたガソリンがこぼれだしたのを確認し、火野は少し離れるとライターに火を点けて、バイクに投げる。

少し間を置いて、火がついたガソリンが一気に燃え上がった。

「あー……砲撃ってなんだってんだおい。つーか、なにやってんだろうな俺は。いくら前島がどうこう言ったつっても、こんなガキ拾って、なんの得があるってんだ……。まったく、馬鹿みたいだ……。でもな、会いたいっていわれちゃ、な……」

着弾の衝撃が抜けきらず、いまだに意識が混濁している火野が、ボソボソと呟きながら燃えさかる炎を見ると、湿った木とガソリンの燃える匂いが満ち始めた。

しばらく燃え続けそうな状態になったのを確認し、火野は前島を揺さぶっていたまるゆに声を掛ける。

「おい、そつちはどうだ？」

「えっと、お身体は大丈夫みたいなんですけど、まだ起きられなくて……」

まるゆに揺さぶられても起きない前島。

だが大きな傷も無いその状態を見て、火野は軽く安堵の息をつくが、危機的な状況は変わらない。

「……まずいな、俺もちつとキツイみたいだわ」

「火野さん？」

「……まるゆ、這うぐらいなら出来るだろ。一人で先に行け」

「い、嫌です！ お二人を置いてなんて行けません！ それにまるゆだってやればでき

るんです！」

「そりゃ知ってるよ。だけどな、いまはちよつとでも早く逃げろ」

「いやーでーす！」

「お前も前島に似て頑固だな……なら前島だけ連れていけ」

そう言い終えると火野は疲れたのか、その場にへたり込む。

「ひどいです火野さん!? いまのまるゆにそんなこと出来るわけないじゃないですか！

立ってください!!」

「一緒に行けるなら行ってやりたいけどな。おりやもう疲れたんだよ」

「なに言ってるんですか！ ならこのまま引つ張つ……え？」

そう言つて火野の手を掴むまるゆ。

だが押さえていた手をどかすと、血のにじんだ腹部があらわとなる。

恐らく砲弾の破片かバイクの金属片が、腹部に突き刺さったのだろう。

服越しで傷の様子はわからないが、決して浅いものではないことを、出血の多さが物

語っている。

「な……なんですかこれ？」

「……よく聞けるまるゆ。ひとまず道はふさいだが、どけりやあ直ぐに車で追いつかれちゃうし。それにあいつら馬鹿じゃない、その気になりや車から降りてでも追つてく

る。このままじゃ全員捕まっちゃう」

だから行け。そう訴えかける火野の目。

「嫌です……火野さんは……なんの得にもならないのに、まるゆを助けてくれました。だから今度はまるゆが助けます！」

「そりやただの気まぐれだ」

「ならまるゆもそれです！」

「はは……お互い損な性格だな……」

火野は軽く息を一つ吐くと、まるゆを真つ直ぐと見つめる。

「なあまるゆ、こんな状況になって俺も後悔がないって言ったら嘘になるけどな。人生つてのは……大体悪い方に転がるもんだ、だからそれは気にすんな。でもな、お前はまだまだ転がる方向を変えられる、会いたいやつにだつて会いに行ける、だから——あきらめ……る……な」

出血のせいか、力なくそう呟くと火野は意識を落とした。

まるゆは何度も呼びかけるが、火野は目を覚まさない。

腹部から流れる血、人の身体のこととはわからないが、とてもとても苦しい状態に違いないことは、まるゆにもわかった。

この人は、こんな状態になっても……最後まで自分の為を思ってくれていた。

まるゆのなかでなにかがこみ上げ、やり場のない感情が暴れ出す。それはやがて一つの決意へと変わった。

助ける……そう決心したまるゆは、泣きながら缶に火を入れる。

だが本来艦娘は陸上で、力を発揮できる構造をしていない。

それでも……ここで彼らを見捨てるという選択を選ぶくらいなら、まるゆは死んだ方がましだった。

「できません、まるゆは……まるゆなら、できますー！」

まるゆは機関の力を使い、動かない足を無理矢理動かすような状態にすると、火野と前島の襟首を掴んで引きずるように歩き出す。

決して速くはないが、一步一步を踏みしめ、少しでも遠く、長く進むための歩み。

だが百メートルほど進んだところで、まるゆの身体から力が抜ける。

「なんで……なんで！ 動いて、動いてッ!!」

おそらく限界を迎えたであろうまるゆの身体は、足だけでなく、腕すらまともに動かすこともできなくなる。

「こんなところで……動かないと二人が……動いて、動いてッ!!」

何度も何度も動けとまるゆは叫ぶも、彼女の身体はもはや殆ど動かない。

だが、その悲痛な叫びが届いたのか、前島がうつすらと目を開ける。

「うぐつ……まるゆさん……先輩？」

「ま、前島さん!? よかった……すみません、まるゆは動けなくて。それより火野さんが大変なんです！ はやく、はやく助けないと！」

「先輩が……？」

ふらつく頭を押さえながら、前島は立ち上がる。

腹から血を流して気を失っている火野。

こちらを見て泣きながらなにかを叫ぶまるゆ。

「これは……」

「前島さん！ 火野さんを助けて……お願いします！」

瞬間、前島は思考が一気に覚醒していくのを感じた。

状況が全て把握できたわけではない。

だが、いま自分がなにをすべきかを一瞬ではじき出す。

バイクは使えない、道は恐らく火野がふさいだ、火野とまるゆは動けない。

だが、自分はまだ動ける。そして走れる。

「ここからなら走っても充分たどり着けるはず……安心してください、まるゆさん」

「ふえ？」

前島は負傷した兵士を運ぶように、火野を肩に担ぐ。

そしてまるゆを脇に抱え、一歩一歩、足に掛る負荷を確かめるように歩き出す。まるゆと火野、二人の重さを合わせると八十キロ近い。

それは前島自身の体重より重い。

だが、この状態でも自分であれば走れる。

そう判断した前島は、ゆっくりと速度を上げて走り出す。

「ま、前島さん!？」

「頑丈な身体に産んで、鍛えてくれた母にいまは感謝ですね」

マラソンのような速度だが、悪くない走り出し。

だが、道をふさいだ木の向こうから、車が急停車する音が聞こえる。

そして複数の追手が、車から降りてなにかを叫ぶ声。それは間違いなく、大本營の残党の追手。

「追手がきましたね……急ぎましょう、少し揺れますよ」

「ま、前島さん!　まるゆはいいですから、火野さんを!!」

「ここにまるゆさんを置いていくという選択肢はありませんよ。それより口を閉じていてください、舌を噛みますので」

前島はまるゆの言葉をさえぎり、走りながら森の中に逃げ込むことを考える。

が、この状態では舗装された道を守るほかない。

それに追手との距離はそれなりに離れている。ならそう簡単に捕まる距離ではない。しかしそれは、追手よりも速く走り続けられればの話だ。

何人かの追手が、燃える木を飛び越えて遠くを走る前島たちに気がつく。

静止を迫る声が聞こえてくるが、それを聞くつもりは当然前島にはない。

しびれを切らした追手が、走って追いかけながら拳銃を発砲した。

銃弾が地面にあたって跳ねる音が、前島とまるゆの耳に届く。

「あぶない！」

「大丈夫です、そう簡単に当たるものではないはずですよ」

「でも当たったら前島さんも、火野さんも！」

「大丈夫ですよ」

そして例え当たったとしても、いまの自分なら走り続けられる。

なぜかそんな確信が前島にはあった。

だから身体と魂を燃やし、疾走する感覚、衝動。

それに身をゆだねて前島はただ走る、走る、走る。

「……まるゆはわかりません。どうやって、なにをしてお二人に報いればいいのか」

まるゆは感じる。火野も前島も、命を、命そのものを。

ただ自分のために燃やしてくれていることを、確かにそう感じるのを。

そして自分は、それに対してなにも返すことができない。

まるゆは悔しさと一緒に、とめどなく涙がこみあげるのを止められない。

そんな涙を流しながらまるゆがこぼした言葉を聞き、前島は笑みを返した。

「でしたら私には不要ですよ。もうすでに返しきれない素晴らしいものをいただきましたので」

「へ？」

「牛を見ていた時に言ってくださった言葉……運命について、ですよ」

「え、運命……あつ」

「ずっと……水の中で生きているような息苦しさをどこかで感じていました。ですが、まるゆさんのおかげで世界が変わったんです。貴方の言葉は、まるで私にとって太陽のように暖かく素晴らしいもので、あの言葉だけで私は生まれてきた価値があつたんだと、そう確信できました」

前島は笑う、それはなにかが可笑しくてではない。

嬉しいから、いまこの瞬間が嬉しくてしょうがないから。

「そしてわかったんです。まるゆさんがおっしゃってくれたように、人には運命があるのであれば……きつとこれが、私の選んだ運命です。私がこう生まれて、こうなるように育つて……そして大切に思えるまるゆさんを安全な場所までお連れするのが……私

の運命なんです。ええ、間違いありませんよ」

「前島さん……」

怖れるものなどない。

そんなどこか嬉しそうな表情の前島の様子に、まるゆは自分でもわからない感情があふれ出す。

だがその瞬間。

追手が発砲した一発の銃弾が、前島の背中に突き刺さった。

※ ※ ※

艦連軍レーダー基地。

戦後、電波の常識が崩れたこの世界において、正常に電波を中継、発信するための重要拠点。

艦連及び国家のインフラや防衛をになう、非常に重要な施設であるこの場所は、艦連軍によって厳重に警備されていた。

「あきつ丸基地司令官殿！ 先ほど山道に向けて砲撃してきた何者かが、この基地に向かって来るようです！」

「こんな僻地のレーダー基地を襲撃する気ですか？ まったく、めんどくさいでありますなあ」

巨大組織『艦娘連絡会』

かつてその内部監査組織の長官であったあきつ丸。

いろいろあつて・参照『芸術家』と『潜水艦：伊168』降格&降格、および転職するはめになった彼女は、いまでは辺境にあるレーダー基地の司令官となっていた。

(※『憲兵軍』は艦娘のみが所属する『艦娘軍』の下部組織。両軍を併せて艦連軍と呼ばれている。また、艦連軍内で呼称される『憲兵』は、人間の兵士全てを指す言葉であり、実際にはあらゆる軍務を遂行する)

実際立場としては充分上の方ではあるのだが、本人的には左遷されて辺鄙な基地に収まった程度の認識である。

「この国で艦連に真正面から喧嘩を売るような馬鹿はいないと思うのですが。見張り台及び外周警備に連絡、警戒レベルを上げておくでありますか。あとこの件の関与について、国への確認を急ぐでありますよ、戦争したいのかとね」

「了解です！」

「まあ、訳ありの難民が亡命でも求めて逃げたのを、国境警備の部隊が追っているとかわかりますでしょうが」

警戒開始からしばらく、確認のために外壁の上にある通路に移動したあきつ丸は、基地に続く道から現われた、逃げているように見える民間人らしき存在を確認。

遅れて、それを追っているらしき銃器で武装した集団が姿を現す。

「あー、やはり訳ありの亡命者と、その追跡部隊と言ったところですか？」

「基地までたどり着いてくれたなら、一時的に保護はできますが。あの様子では厳しいかもしれないですね」

「そうはいつても、我々の立場的にはこの基地だけが治外法権。こちらから出向いて迎えに行くわけにもいかんですからなあ」

副官は通信兵に警戒及び、危険があれば任意での発砲を許可する内容の命令を出す。

そして出した命令の内容を改めてあきつ丸に伝え、大きめの双眼鏡で基地に向かって走ってくる男の姿を確認する。

「どうも大人一人を肩に担いで、脇に子供を抱いているようです……おまけにずいぶんと負傷しているようですね。しかし……その割によく走る」

「それはまた、ずいぶんと体力がある難民のようですね……ん、子供？」

あきつ丸は、出力を調整して自らの身体性能、そのごく一部を海上戦闘状態まで引き上げる。

強化されたのは『目』の部分。焦点を追われている男、その脇に抱えられている少女

に合わせた。

その少女の顔を確認した瞬間、あきつ丸は頭に砲弾をくらったような衝撃を受ける。それはかつて存在した、あきつ丸と同じ陸軍に所属していた潜水艦を祖とする艦娘。

「……まるゆ……殿？」

「は？ いまなんと？」

「そんなはずは……いや、あれは……ま、まるゆ殿で、あります……っ！ 撃つな！ 彼らを撃つてはなりませんぞ！」

瞬間、副官は迅速に動き、命令を発する。

「ッ、伝令!! 本基地に向かつてくる難民を絶対に撃つな！ 現在基地に向かっている中の一人に、保護を求めていると思われる所属不明の艦娘がいる模様！ 機動戦車部隊を出せ！ 命令は艦娘と思われる女兒とそれを抱いている男たちの保護！ 及びその後ろを追う武装集団の排除だ、急げ、急げえッ!!」

副官が命令を発すると同時、あきつ丸が五メートル近い高さの外壁から飛び降りる。

さらに十数秒遅れ、外周を警備していた兵士と待機していた兵士たちが乗った装甲車両が、一斉に基地を飛び出した。

（くっ、急がなければ！）

あきつ丸が焦るのは、もし、もしも本当に彼女がまるゆであるなら、その装甲は艦娘

の中でも最も薄く、弱いものだど知っているからだ。当たり前所次第では、ただの小銃でもダメージが通ってしまうかもしれない。

陸上での高度な出力調整訓練を受けたあきつ丸は、常人よりも遙かに早く地を駆ける事が可能だ。が、いまはその一秒一秒がひどく遅く感じられた。

そして、あと数秒走れば届く距離まで来たとき。

初めて見るし会ったこともない、だけど記憶には確かに存在する同胞の姿を見てあきつ丸は確信する。

ああ、間違いない、これはやはり――

「まるゆ殿!!」

「あ、あきつ丸さん!?!」

その呼び声に、前島を励ますように叫び続けていたまるゆがあきつ丸を見て、その名を呼ぶ。

まるゆもまた、初めて会うはずのあきつ丸の名を知っていた。

彼女たちがお互いが呼び合う声を聞き、もはやどうして走っていられるのか、どうして立っていられるのか……いや、なぜ生きているのかもわからない傷だらけの前島は足を止めた。

そして肩に担いでいた火野が、ドサリと地面に落ちる。

遅れて追従していた複数の装甲車両があきつ丸に追いつき、まるゆを抱えている前島の盾になる位置に停車。

さらに車両から一騎当千の兵士たちが降車し、左右を固める。

「信じられない……ほ、ほんとうにまるゆ様なのか……」

「お、俺は夢でもみてるのか……まさかそんな……」

訓練されたはずの憲兵軍兵士たちの一部から、私語に近い言葉が口々に漏れる。

無理もなかった。

なぜならそれは、いまではもう存在しないはずの、かつてその身と引き替えに世界を救った潜水艦の艦娘。

憲兵たちは皆その身に刻む。彼女たちへの感謝、そしてそうさせてしまった人類の無力さを。

故に二度と繰り返すまいと、そう心に誓って生きると決めた日のことを。

そんな憲兵たちに見守られ、意識が残っているのかも怪しい、まるゆを抱えた前島は再び歩き出す。

そして、あきつ丸の前で止まり、ゆっくりと膝をつく。

「……」の方を、どうか……まる……さんを……」

前島は満身創痍であるにもかかわらず。

自身にとつて、なによりも尊い存在を扱うような優しい動きで、まるゆをあきつ丸の前に掲げた。

あきつ丸は震える手で、火野と前島の血に濡れたまるゆを受け取る。

「前島さん！ 前島さん！ しっかりしてください！」

まるゆは必死に声をかける、それにこたえるように前島は微笑み……崩れ落ちた。

その男がどういう存在で、どういう人間なのかは、あきつ丸にはわからない。

だが、おそらく千鬼衆でもなく、ましてや憲兵でもないただの一般人。

だというのに、もう助からない、そう思えるほどの傷を負ってなお……それでも男はここまで走った。

左右を固めていた兵士たちの幾人かが、前島に向けて無意識に、胸に手を当てる敬礼の姿勢をとる。

「た、助けてください、前島さんを！ 火野さんを助けて！ お願いですあきつ丸さん、

この人たちを、助けて!!」

涙ながらにそう叫ぶまるゆ。

「……お任せください、まるゆ殿」

あきつ丸の鋭い目が、追手の歩兵と遅れて現われた、支部長が乗った戦車の姿を捉える。

追手の部隊は艦連軍の姿を確認するも、止まることなく進んでくる。

その様子はまるで、この数の戦力と装甲車があれば勝てる、そう確信しているような動き。

それを見てあきつ丸はほほが裂けるような恐ろしい笑みを浮かべ、自身の能力である陸戦用の艦装を展開した。

出現した複数台の『戦車』の兵装が、まるゆを確保しようと迫ってくる追手に照準を向ける。

それに続くように歴戦の憲兵たちが一斉に射撃姿勢に移行。

「舐められたものでありますなあ？ たかがその程度の兵力と戦車一台で、このあきつ丸を……そして、我ら艦連軍をどうこうできると思ってるのでありますかなあ？」

瞬間。あきつ丸と憲兵隊が、向かってくる追手に向けて一斉に攻撃を開始した。

放たれた銃砲弾は正確に追手たちに着弾。特にあきつ丸が放った砲弾は、周囲を巻き込む爆風を発生させて、追手の大部分を吹き飛ばす。

冷静さを失っていた支部長が、艦娘に真正面から武力で挑むという自分の過ちに気がついたのは、あきつ丸が放った砲撃を受けて、乗り込んだ戦車が身動きのとれない鉄の棺桶へと変わったあとだった。

「もう大丈夫、大丈夫でありますよ。まるゆ殿」

「あきつ丸さん……」

あきつ丸は前島から受け取ったまるゆを抱えたまま、基地に向かって走り出す。そして傷だらけになった火野と前島と一緒に、急ぎ基地に運び込まれた。

■ たびだちの日 ■

『おはようございます、あきつ丸』

『どうも姉上、お久しぶりでありますな』

艦桶の外に出て、あきつ丸がまず目にしたのは、神州丸と呼ばれる艦娘。

同じ軍を祖とする姉の姿に、あきつ丸は頬を緩める。

『して、早速であります。が現在の状況を教えていただけますかな？』

『はい、こちらに』

生まれたばかりでも、既に戦えるのが『建造』で生まれた艦娘だ。

だが、生まれた場所や時代に適應するためには、やらなければならないことも多くある。

その一つが、既に持っている記憶や知識、それと現在の状況をすり合わせること。

『いやはや、しかし寝起きに姉上の顔を拜見できるとは、なかなか幸先がいい。贅沢ついでに、まるゆ殿にも早くお会いしたいですなあ』

『それは……難しいでありますね』

前を歩いていた神州丸の足が止まる。

なにか不味いことを聞いてしまったのかと、あきつ丸は不安に思いながら問いかける。

『は？ それはどういうことでありますか？』

『すべて説明するでありますよ。自分がこの時代で目覚めたあの日に……貴方ではないあきつ丸が語ってくれたことを。今度は自分が、そのまま伝えるであります』

神州丸はフードを脱ぎ、振り返って真っ直ぐにあきつ丸の目を見る。

あきつ丸を見つめる神州丸のその表情は、鉄仮面で知られる彼女のものとは違い、とても……深い悲しみをにじませるものだった。

※ ※ ※

ただひたすらに白い部屋。

目を覚ました火野は、あらゆる光を反射する、そのまぶしさに目をしかめた。

(なんだこりや?)

火野は自分が、薄い緑色の液体に満たされた浴槽の中に入れられ、固定されている事に気がつく。

徐々に視界と思考がはつきりとしてきたが、のどに挿入されているチューブのせいで、声が出せない。

「ああ、おはようございませ先輩。すぐに誰かが来ると思うので、動かないでください」首を振り、身体の拘束を剥がそうともがいている火野に気づいたのか。

隣で同じように緑の浴槽に入れられ固定されていた前島の声が部屋に響く。

「ばえじばおばえばるびゆは(ご)ほ(ご)ほ!!」

「……あと喋らないでください。というかなんでのどにチューブが挿さった状態でしゃべるんですか」

非難するような目で、前島をにらみつける火野。

前島はその視線を受けて、やれやれといったふうに状況を語りだす。

「私もしっかりと状況を把握できているわけではないのですが、まるゆさんは無事ですよ。ここは艦連軍の基地、その医療施設のようですよ」

前島の言葉を聞き、火野は安心したのか、それともあとからきた激痛を自覚したのか。

緑の液体に沈みこみ、再び意識を落とした。

火傷に骨折に裂傷、そして銃傷。

実際のところ二人の傷は、そのまましておけば確実に命を落とす深さだった。

だが幸いだったのは、基地には世界でも最高レベルの医療設備が備わっていたことだ。

艦連のみが保有する移植技術や、強制的に新陳代謝を進ませ、傷を治癒するといった応急再生治療技術。

それはある程度の寿命（老化が進む）と引き替えではあったが、何ヶ月もかかるような傷の治癒を、僅か数日に短縮することができるものだった。

そういったことを医療担当の兵士から聞かされた二人だったが、彼らがもつとも知れたかったまるゆの状況に関しては、その質問に答えられる権限がないと、教えてもらえずにいた。

「せつかく地獄から帰ってきたつてのに、することねえな」

「帰つてこれたあたり、随分近いところにあつたんですね」

「おう、そんなに遠くじゃなかったぞ。なあ、それよかあいつどうなつたと思う？」

のどのチューブを外されて、自力で呼吸が可能になつた火野。

もつとも傷はまだ癒えておらず、引き続き身体を固定されて動くことができない彼は、暇でることがないことも相まって、そんな質問を前島に投げかける。

「悪い状況になることはまずないでしょう。ただのレーダー基地といつても、ここは艦連軍の兵士、そして艦娘が詰めていますから。大本營の残党が幾ら数をそろえたところで——」

「アホ、そう言うことを聞いてんじゃねえよ。聞いているのはアイツがちゃんと海まで行けるかどうかだ。なんつったか、確か珍しいなんかの艦娘なんだろ。そうなりや一生モルモットとか監禁されたりとかあるかもしれないだろうが」

「いや、さすがにそれは——」

「まさかのまさか、それは考えすぎでありますよ」

前島の言葉をさえぎったのは、いつの間にか医療室に入ってきていた黒い軍服姿の女性。

まったく気配を感じなかった火野と前島は、驚いた表情をうかべる。

その様子を見て女は、どこか作り物めいた笑顔を貼り付けながら、二人がつかる浴槽の前に立つ。

「こうしてきちんとお目にかかるのは初めてでありますな。自分はこの基地の司令官であるあきつ丸であります。まあ気軽にあきちちゃんとも呼んでいただいでけっこうで

ありますよ」

嘘か本当か判断が付かないような言葉。

そしてあきつ丸はかぶっていた帽子を脱いで手に持つと、肩口まである長さの黒髪を垂らしながら、深々と頭を下げた。

「あなた方のことは、まるゆ殿から聞かせていただきました。お二人とも。我々の同胞を救っていただき、そして……自分のとても大切な友人を守っていただいたこと、誠に……感謝するであります」

人を食ったような言動そのものだった相手がみせた、心の底からの感謝。

その様子を目の当たりにして、前島は思わず固まった。

それはその相手が、艦娘の中でも特殊な存在である揚陸艦だと気がついたからだ。

揚陸艦、正確には『陸軍の艦娘』と分類される艦娘は、総じて特殊な役職や立場に就く。

その事を含め、母親から『くれぐれも陸軍の艦娘にはかかわるな』と強く言い聞かされてきた前島は冷や汗を流す。

「ああ、まあその辺は気にすんな。それであきちちゃんだっけか、アイツは無事なのか？」
が、それを欠片も知らない火野は、冗談で言ったであろう呼び名をあつさりを使う。

まさか本当にちゃん付けで呼ばれるとは思わなかったあきつ丸は、ポカンと口を開け

一瞬固まった。

「が、すぐに気を取り直し、ニヤニヤとしながら動けない火野の医療浴槽の縁に腰掛けた。

「まるゆ殿は自分にとつても大切な友人でしてな。ご心配なさらずとも、無事は保証するでありますよ。あと地元の警察相手への大立ち回りの件も、取りはからっておきましたのでご安心を。まあ向こうも自分らの管轄に、大本營の残党の拠点があつたとなれば、それどころではないでしょうが」

「さよか、なら腹に穴空けたかいがあつたつてもんだよ」

「……火野殿、でしたかな？ 貴殿らには艦連にとつても個人的にも、返しきれないほどの借りができてしまったでありますので、いずれお返しさせていただきますが。急ぎなにか要望などはありますか？」

「あー、俺らが乗つてた車はどうなつた？ あれ借りもんなんだわ、コイツのお袋さんの」

「そちらはまるゆ殿にもお願いされておりましたので、既に回収済みであります。今頃はうちの腕利きが修理と整備を終わらせているはずですよ」

「そりや助かるわ、コイツのお袋さんに殺されずにすむ」

火野はゆつくりと浴槽に沈み込み、目を閉じる。

「この医療室を出られるくらいまで回復するのは、もう数日とかからんでしような。医官もお二人の回復力にはビックリしておりますたでありますよ」

「そりやありがたい、退屈でしょうがなかつたんだわ」

動けない日々鬱屈としていた火野は、それを聞いて嬉しそうに浴槽から身を起す。

が、遅れてやってきた傷みに悲鳴を上げて再び浴槽に沈みこんだ。

あきつ丸はその様子を、とても好ましいものを見るような目でみつめていた。

「いてててて、クソツッ！ あー、そりやあきつちゃん。煙草あるか？」

「傷に障りませぞ？」

そう言いながらも、あきつ丸は内ポケットから煙草をとりだし、火野にくわえさせイターで火を点ける。

が、火野の呼吸能力が落ちているためか、うまく煙草に火が点かない。

あきつ丸は、火野がくわえていた煙草を手に取り、自分でくわえ火を点ける。

そして、自分の口を火野の口元まで近づけ、ゆっくりと吐き出した。

「傷が治るまではオアズケでありますな」

「この程度の傷で情けねえ……治ったらカートンで吸つてやる」

この程度って、先輩は私よりも重傷だったんですよ!?

と、前島は心の中で叫ぶも、声に出せず口をばくばくとすることしか出来ない。

あきつ丸はそんな火野の言葉を聞いて、愉快そうに口元をゆがめる。

「くくつ……火野殿はなかなかいい男でありますなあ。どうでしょう、いつそ憲兵軍に入つて、自分の提督になりませんか？」

「んあ？ ああ、悪いけど余所で内定もらつてるから遠慮するわ」

「……そうでありますか、それは残念であります」

嘘か本当かわからない、残念そうな表情を浮かべるあきつ丸。

「そういや、俺らの着てた服はどうなった？ ポケットの中に財布とか煙草とか入れてあるんだが」

「ああ、残念ながら服については、治療の際に全部切り裂いてしまったようでした。ですがここから出る時に、着替えを用意しますのでご安心を。あとポケットの中身に関しては、その棚に置いてあります……煙草など駄目になった幾つかのものは廃棄しているかと」

「そうか、まあその辺はしゃーない……あー、写真は残つてるか？」

「写真でありますか？」

「旅行の目的地がそこなんだわ。つつても詳細不明で、どこの海岸かもわからないのだけだな」

「それはまた、ずいぶんと若者らしいと言うかなんというか」

だが、少し興味が湧いたのか。あきつ丸は火野の了承をとって、棚からトレイに入れられた中にある写真を手に取った。

「……この写真、どこで手に入れられたの？」

「なんか古い蔵を壊すバイトで、床下にあつた箱の中にあつたんだよ。あんま褒められたもんでもないんだが、なんか気になつてな、持つて帰つちまつた」

「なるほど……」

あきつ丸はじつと写真を見つめ、咳払いを一つする。

そして少し真面目な表情で、火野に視線を向けた。

「さすがに詳細な場所まではわかりませんが、生えてる木やら海の透明度を見るに、これは南方……その昔にパラオと呼ばれた地域かもしれないな」

「パラオ？」

「国外にある、遠い異国の群島地域でありますな。この写真の端っこに写っているのは潜水艦の艦娘〴〵であります。つまり戦史時代、それもおそらく末期……だとしたら、パラオ泊地の可能性が非常に高い。末期のパラオ泊地には、当時最強の潜水艦艦隊と、彼女らを率いる提督の拠点があつたと伝えられてましてな。一昔前ならこの写真は艦連機密に抵触したであります……まあ、それはいいであります」

「さよか、その写真がなかったらこんな事にもならなかっただろうが……まあ、まるゆもどうなつてたかわからんのを考えると、アイツのお仲間が俺らを助つ人によこしたのかも知れんな」

なんてな、と笑い飛ばす火野。

だがあきつ丸はその言葉を聞いて、驚いた表情を一瞬浮かべた。

「……おやおや、火野殿は中々にロマンチストでありますなあ」

が、すぐに人を食つたような笑みを浮かべ、くつくくと笑いながら、あきつ丸は写真をトレーに戻す。

そして「仕事がありますので、今日はこの辺で」と言い残し、部屋から去って行った。

「なーんか顔はいいけど、胡散臭いヤツだったな」

「艦連軍の基地司令官に、しかも陸軍の艦娘に……い、胃が痛い……」

「なんだお前も腹に穴空いてたのか、風呂にちやんとつかつとけよ」

※ ※ ※

二日後。

ほほ傷もふさがり、暇をもてあましていた二人の元に、まるゆがやってきた。

旅の途中に着ていた、薄汚れた白いシャツと半ズボン姿ではなく、おろしたての白いワンピース姿。

一瞬それが誰だかわからず首をかしげる火野と、恍惚の表情を浮かべる平常運転の前島を見て、まるゆはクスリと笑う。

「あの、遅くなつてすみません。ようやくお二人にお会いする許可が出たので。その、お加減はいかがですか？」

「お前、まるゆか!? いい服着てるから、一瞬誰だかわからなかったぞ。こっちは心配すんな。明日にはこの風呂から出られるつてよ」

「その服、とても似合つてますよまるゆさん。あと私の方も体調は問題ありません、もうほとんど治つていますので」

「つかまるゆ、お前こそ大丈夫なのかよ。足プルプルしてなかったか？」

「えへへ、その節はご迷惑を。大丈夫です！ 燃料ももらったので、いまのまるゆは元気いっぱいです！」

二人の変わらない笑顔に、まるゆはホツとした表情を浮かべ、笑顔と言葉を返す。

だがその表情が、すぐに少し沈んだものになる。

「今日は最後にお別れを言いに来ました」

「んあ？」

「明日、まるゆは艦連の一番大きな基地に連れて行ってもらえることになったんです」「さよか……。最後まで送ってやれんかったのは心残りだが、まあその方がいいかもな。当然だが、ちゃんとその基地に着いたあと、お前のなんか大事なヤツのところに、連れて行ってもらえるんだよな？」

そこだけは確認しておかなければならない。

火野が念を押すように確認をする。だがその言葉を聞いて、まるゆの表情が目に見えて曇った。

「……あきつ丸さんは、正直に言ってくれました。まるゆはその基地に連れて行ってもらったあと……ずっと、守ってもらえるって……でも、外に……海に出るのは、難しいだろうって……」

「は？ そりやどういいうことだよ、お前の会いたいヤツはその基地にいるわけじゃねえんだろうが、なんでそこから出れないって話になるんだよ？」

「先輩、まるゆさんは世界でただ一人の潜水艦の艦娘なんです。これは彼女たち、艦娘全体に関わる難しい話で——」

「うるせえ、そういうこといってんじゃねえ！ おいまるゆ、お前それでいいのかよ？」

「え？」

「会いたいヤツらがいるんだろ、だからいままで頑張ってきたんだろ？」

「……まるゆは……まるゆ……は……」

火野の真つ直ぐな言葉が、まるゆの心に刺さる。

その問いになにも答えられないまるゆ。だが……心の奥に閉じ込めていたものが、その言葉であふれ出してしまったのか、まるゆの頬を伝って涙がこぼれた。

「会いたいんです……です、会ったことはなくても、いえ、会ったことがあるはずなんです。まるゆの、まるゆの提督と……仲間たちに……会いたいんです」

やがてようやく心から絞り出された、まるゆの本当の気持ち。

それを伝えられた火野は、無言で身体中に刺さっていたチューブや点滴を引き抜き、拘束を無理矢理外す。

前島もそれに続くように、同じように力尽くで拘束を外し、身体に刺さった針や線を引き抜いた。

「ふえ？ あ、あの……だ、ダメですよじつとしてない!?」

「いでで、おい前島、そっちの棚にガムテープかなんかないか」

「そんなものあるわけ……ダクトテープがありましたね、なぜでしょう……」

「うし、それでちよつと穴空いてるところふさいでくれ。んでまるゆ、お前はそこに掛けてある医療リユックの全身全部だぜ。そんでもってそん中入れ」

「え、え、ええええええ!」

「もつとこう、ましなプランをですな……」

「ぐちぐちうるせえ、こういうのはどれだけ早く動くかの方が大事なんだよ」

「あ、あの！ ど、どうしてですか!？」

「んあ？」

「はい？」

動揺を隠せないまるゆの大声に、火野と前島が同時に振り向く。

だがまるゆは、自分でもよくわからずに「どうして？」と、聞いてしまったことに、遅れて気がつく。

どうして、なぜ……この二人の男はどこまで……。

うまく言葉に出来ない疑問の意味を、まるゆは必死に考える。

「あんな……あんなにいつばいご迷惑を掛けたのに、どうしてまた……助けてくれるんですか？」

きつと二人はわかっている。

まるゆの願いをきけば、またしても困難な状況に直面すること。

下手をすれば、また命が危うくなるだろうことも。

「ああ……いまさら水くさいことを言わないでください。それに、ここでもしなのは児童性愛者の名折れです」

「俺、は、コイツみたいになりたいそんな理由じゃなくて。遊園地で助けてもらった借りと、飴もらった礼と、ボロ負けした賭けの約束があるからってただけだけだな」

「それだけあれば、先輩のも充分たいそんな理由だと思いますが」

「そうか？」

だというのに二人は二人にとっての理由を軽く口にし、お互い顔を見合わせ愉快そうに笑い合う。

まるゆはそんな二人を見て、涙があふれ出し、ついには泣き出してしまった。

※ ※ ※

「よし、人影はないな……いくぞ」

「ちなみに先輩、出口がどっちかは……」

「知らん、が、多分こっちだ」

「……そうで、す、か……」

基地の冷たい廊下を、裸足で歩く病衣姿の二人の怪しい男たち。

先頭を歩く火野が、あたりを見渡しながら歩を進め、後ろにまるゆが入っているリュックを背負った前島が続く。

「あの、そっちであつてます」

リュックの隙間からひよっこり顔を出して、小声でまるゆが伝える。

「ああそうか、泣き虫まるゆは知ってたんだっけか。よし、しつかりナビ頼むぞ」

「は、はい！ でも泣き虫は余計です!!」

「ちよ、うるうせえ静かにしろ！」（そこそこ大声）

「あの……二人とも頼みますから静かにしてください……」

抜き足差し足忍び足のつもりで歩きつつも、明らかに声が響いている。

そんな三人が無事、基地から出られるはずもなく……。

「どこに行かれるのでありますかな？」

すつと彼らの前に立ちふさがる、あきつ丸と十人ほどの憲兵たち。

さらに火野たちが通ってきた後ろの通路から、別の憲兵たちが現われ逃げ道をふさぐ。

完全な挟み撃ち状態、逃げ場はない。

「あー、あきちゃん。世話になったな、俺らはそろそろお暇するからよ、そこをあけてくれ」

「そんな格好でありますかな？」

「ナンパでもしようと思つてな、セクシーだろ？」

「……火野殿。まあ、自分と火野殿の仲でありますから、どうしてもこの基地を出たいというのであれば、やぶさかではありません……が。前島殿が背負つてらっしゃる、その

リュックの中身を置いていっただけですかな？」

ピクリと、カバンの中のまるゆが震える。まるゆがリュックの隙間からそつと外を見ると、あきつ丸と目があつた。

あきつ丸は優しい目でまるゆに向けて手を軽く振る。そこにいるのはお見通しだと言わんばかりのいい笑顔だ。

「……断る」

「どういうつもりかは知らないですが。いいですかかな火野殿。自分は艦娘、そしてまるゆ殿も艦娘。つまりはまるゆ殿は我々の保護下、いえ、我々と共にあるのが正しいことなのであります。ですから——」

「断わるつつつてんだろ」

「……火野殿。あなたは自分がなにを言っているのかわかっておられるので？」

「くだいんだよ」

「……わからんでありますなあ」

繰り返される火野の明確な拒否の言葉を聞いて、あきつ丸の笑顔が固まる。

そして夕日が沈んで夜の闇が満ちてゆくように、ゆつくりと感情の無い表情に変わった。

「前島殿、あなたがそこまでまるゆ殿に肩入れされるのは、なんとなくわかるであります

す」

「かちゃん、かちゃん、と。」

腰に差した軍刀を軽く叩いて音を立てながら、前島をじつと見つめるあきつ丸。

「貴方の目は憲兵、しかも千鬼衆のそれに近い。恐らくなんらかの信念に基づいて行動された結果なのでしょうな。なればこそ、自分の言うことの正しさは理解していただけるかと思うのであります」

あきつ丸の言うとおり、この方法が正しいのかという疑念が前島の頭にはあつた。

それを鋭く指摘され、前島は思わず視線をそらす。

あきつ丸はすつと視線を隣の前野に移し、刺すように見つめる。

「ですが前野殿、貴方に関してはおわかりません。我々に対する知識はほとんどなく、かといって命の足し算引き算の勘定ができないほど馬鹿というわけでもない。だということになぜそこまでされるのですかな？ 重ねて言うであります、まるゆ殿にとってなにか幸せかなど、普通に考えればわかるのでありますように」

「はっ、それはどうだかな」

前野は強い口調で否定しながら、床に血の混じった唾を吐く。

「言つとくと、俺は間違つちまつた決断や、引いちまつた貧乏くじから逃げるような男じゃない。そりゃ世の中の賢いヤツは、オレみたいなのを、おめでたい馬鹿だつて思う

んだらうさ、それは自由だ。……だがな、俺が言いたいのは、そんな馬鹿な俺でもこれは間違つてゐるって思うことだ。なんで間違つてゐるかなんぞ聞くなよ？ それくらいわかれ」

「申し訳ありませんな、聞き分けのいい大人になるには世界を見過ぎたのでありますよ。なのであえてお聞きするであります。〃なぜ〃それが間違つてゐるのかという根拠を、ご教授願えますか？」

あきつ丸が鳴らし続けていたかちちゃんかちちゃんという、軍刀を叩く音が止む。

それは、これが最後に許される答弁だという無言の圧力に感じられる空気。

前島とまるゆ、そして回りの憲兵ですら。その重いタールのような殺意の籠もつた重圧に、本能的に息を止める。

自分の存在を少しでも消さないと、この恐ろしい強者の意識から消えないと命がない。

そう感じるような、本能的な防衛行動。

「……昔な、結婚したいくらい惚れた女がいたんだよ」

だが、その間違つた返答が許されない状況で、火野だけが。

「昔！ 結婚したいくらい惚れた女が！ いたんだよ！」

火野だけが烈火のように息を吐き、声を上げた。

「……一度言わんでも、聞こえてるでありますよ」

なにを言っているんだ？

あきつ丸だけでなく、その場にいた全員が火野の叫びを聞いてそう疑問に思った。

この状況で過去の色恋の話など持ち出してどうしようというのか。

だが火野はお構いなしに叫び続ける。

「その人は誰もいない館ですつと、庭の手入れをしながら誰かを待つてた……はじめはその人と会ったとき、アホな俺でもわかつたよ。この人はすぐくつらいことがあつて……でも、弱音なんか見せないすげえ強い女なんだつて……」

火野は拳を握りしめながら、昔を思い出すように目を閉じる。

あの日に見た、奇跡のように美しい庭が火野の脳裏に蘇る。

それはもう取り戻せない青春の日々。

もうなにも手につかないほど、誰かに恋をした火野の思い出。

「だがな、俺はある日そんな人が泣いてるのを見ちまつた。『会いたい会いたい』つてこぼしながら……泣いてたんだよ……まるゆも同じだ！ 会いたくてしようがねえのに、なにか大事なものを守らなきゃいけないから、動けなかつたんだ！ あきつ丸！ それに凶体のかいお前らのことが大事だからつて、それを隠してやがる。でもやつぱ会いたくてしようがないから、また俺らを頼つて！ だからいま逃げようとしてんだらうが

よ！」

初めて会ったときから、火野はまるゆが言った『会いたい』という言葉に引つかかりを覚えてしよがなかつた。

それが無意識にいらだちになり、前島に当たつていた部分もあつたのかもしれない。だつたからこそ、見ず知らずの少女だつたまるゆの為に命を張れたのかもしれない。

火野はその引つかかつていたなにかが、いまようやくわかつた気がした。
だからこそその、いまの、この状況なのだ。

「なあ……行かせろよ。別に世界を滅ぼしたいとか、そういうこと言つてんじやないんだよ。まるゆは会いたい奴がいて、俺らはこいつをそいつに一日でも早く会わせてやりたいただけなんだ。お前ら軍人だし頭いいんだろうが、なのになんでそれがわからねえんだよ……」

火野の言葉は、あきつ丸の問いかけに対する反論にすらなつていない。

だというのに……だからこそなのか。

誰もがその言葉に心を打たれてしまう。

その場にいる誰もが、火野よりも艦娘のことを想つていたし、知識を持つていた。

あきつ丸はまるゆが自分の側にいることがなによりも安全で、幸せなことだと信じて疑わなかつた。

憲兵たちは、大恩ある潜水艦の艦娘であるまるゆを、今度こそ自分たちが保護し、生涯をかけて護ると心を震わせていた。

艦娘を親に持つ前島は、艦連に保護してもらうことが、まるゆにとつてなによりもためになるとわかつているつもりだった。

だが、そのどれもが正しくはあつたが、間違つていた。

この中で火野だけが、誰よりも艦娘に対して知識を持たないはずのこの男だけが。

まるゆの望みを正しく理解していた。

そして全員が火野の言葉を聞き、そのことに気付いてしまったゆえに、動くことができなくなった。

己の使命、果たすべき命令、なにより望み。

その全てが否定されたような心境。

火野はその隙を見逃さず、瞬時に動き、あきつ丸の腰のホルスターから拳銃を奪う。

そしてその銃をあきつ丸の背中におしつける。さらに後ろからあきつ丸の首に腕をまわし、軽く締めた。

「こうなったら手段なんざ選んでられるか。おい、こいつの命が惜しかったら道を開けろ」

「あ、あの先輩ですね……」

艦娘に拳銃を向けるといふ無意味さ。

発砲したところで、撃つた方が暴発か跳ね返った弾で怪我をする。

そのことを当人である火野だけがわかっていない、おかしな状況。

「前島！ 持ってきたダクトテープがあつただろ、それでこいつの手を縛れ！」

「……えーつと」

「なにぼさつとしてやがる！ 早くしろ！」

「わ、わかりました……」

前島はあきつ丸と憲兵たちを交互に見ながら、あきつ丸の手をダクトテープで縛る。

その様子を見て、さすがに幾人かの憲兵が取り押さえようと動く、が。

「……動くな、で、あります」

憲兵たちは最初、その言葉が自分たちに向けられたものだとはわからなかった。

なぜならその言葉を発したのは、単身で戦車だろうが、完全武装の憲兵軍一個大隊だろうが相手にできる、数百万を数える艦連軍の中でも最上位に位置する陸上戦闘能力を持つあきつ丸。

いまこの瞬間に、自分に向けられている銃を奪い取り、赤子の手をひねるように取り押さえることなど、あきつ丸には瞬きする間に、一呼吸以上の余力を残して行えるはずだ。

そのあきつ丸が――

「自分は死にたくないであります、お前たち、そこを動くなであります。彼らを刺激せず、言う通りにするであります」

まるで、無様に命乞いをする小悪党のように、震えた声でそう言ったのだ。

それは、間違いなく演技だ。

その場にいる憲兵の誰もが、そう確信していた。

だからこそ戸惑う。

それはいつたい、どういう事なのかと。

「ええい、この間抜けどもめ！　いいからそこを退くであります。責任は全て自分がと

るでありますから、そこを退いて、彼らの車がある格納庫までの道をあけるであります

！　これは命令であります！」

その言葉を聞いて、憲兵たちは今度こそ正確にあきつ丸の意図を理解した。

あきつ丸は、まるゆを、彼らを行かせるつもりなのだということをした。

「……司令官殿の命令だ。いいから全員道を開けろ」

あきつ丸を除き、その場で一番階級の高い副司令官が道を開けるよう指示を出す。

その命令に、その場にいた憲兵たちは強く胸を押さえながら従った。

※ ※ ※

「お、着替えあるな。よし、まるゆちよつとコイツ見張つててくれ」

「あの先輩、その……」

「おら前島、とろとろしてんじゃねえ。いつまでもノーパンでうろろうろしてられるか」

「はあ……」

車両の格納庫につくと、まず火野が車のトランクを開けて、中の荷物が無事かを調べはじめた。

幸い着替えと予備の靴を発見し、あきつ丸の見張りをまるゆにまかせ、いそいそと着替え始めた。

一方の前島は、チラチラとあきつ丸の方を確認する。

あきつ丸はそれに対し、あきらめたような表情でぴらぴらと手を振った。

前島はその姿を見て、軽く一礼し、自身も着替え始める。

「自分はなにをしてるんでありますかなあ……」

「えつと、その……ごめんさい、あきつ丸さん」

まるゆはあぐらをかいて地面に座るあきつ丸に近づき、ペこりと頭を下げる。

「まるゆ殿、いまからでも考え直しませんか？ 他の艦娘は勿論のこと、自分も姉上

も、陸軍の者たちは皆、あなたに会えるのを……いえ、正直に言うなら、自分はずっとまるゆ殿に会えるのを、そしてまた共に生きられるのを夢見ていたのであります」

「……まるゆも、あきつ丸さんには会いたかった、そんな気がします。まるゆがこれまで生きていられて、目を覚ませたのはきつと、あきつ丸さんのおかげだって……おぼろげなんです、そんな記憶があるんです」

「まるゆ殿……」

あえぐようにまるゆの名を呼ぶあきつ丸。

離れたくない。ただその想いが溢れる。

「でも、まるゆは行かなきゃならないので……みんなと、提督が待つてますから」

「——……まったたく、まるゆ殿の提督に嫉妬してしまいますなあ」

感情を隠し、軽口を叩くあきつ丸。

彼女は弱々しきを見せないように、素直な笑みを浮かべる。

「まるゆ殿、自分が言えた義理では無いかもしれませんが。もし、我々艦娘に神が存在するならば……まるゆ殿の旅路の幸運と、そしてその先で、まるゆ殿が無事提督殿と出会えることを祈らせていただくであります。どうか……お元気で」

「……きつと、また会えます。昔、あきつ丸さんじゃないあきつ丸さんが、言ってくれたような気がするんです。自分ではない自分かも知れませんが、きつと、きつとまた会え

ますつて。だから、まるゆじやないまるゆかもしれません……またきつと会えます」
まるゆはそう言つて膝をつき、あきつ丸を抱きしめた。

あきつ丸もまた、手を縛られたまま器用にまるゆを抱きしめる。

「よしつ、行くぞまるゆ！」

そんなしんみりとした空気を吹き飛ばす、火野の大声。

それを聞いて、先ほどまで浮かべていた穏やかな表情とは一転し、拗ねた表情になるあきつ丸。

「火野殿おく。今生の別れだというのに、無粋でありますぞ？」

「うるせツー！ こっちは見た目どおり一杯いっぱいなんだよ！ あとあきちゃん、煙草！」

「あー、はいはい。持つてくでありますよ」

あきつ丸は手の拘束を紙をちぎるように外し、ポケットから煙草とライターをとりだす。

そしてライターを煙草の包装紙にねじ込むと、火野に放り投げた。

内心かなり焦っていた火野は、あきつ丸の一連の動作に違和感をもつことなく、投げられた煙草をキャッチする。

「ありがとなー！」

律儀にお礼をいう火野に、あきつ丸は思わず吹き出してしまった。

「まったく……大した男でありますなあ」

そして三人が乗り込んだ車が動き出し、格納庫から出て行く。

あきつ丸はそれを見送るとため息を一つ吐き、格納庫内にある連絡機器を手に取って基地正面入り口に繋いだ。

「こちら基地司令のあきつ丸であります。いまそちらに向かっている緑の乗用車でありませんが、通してかまわないでありますよ。ええ……では——」

「よかったですか？」

「今更、階級が二つ三つ降格したところで気にせんでありますよ」

受話器を置き、去って行く車を見つめていたあきつ丸の背後から、いつの間にか立っていた副官の声がかけられる。

それに驚くこともなく言葉を返すあきつ丸。

「……艦連本部にはなんと？」

「誤報であつたと、連絡を入れておくようにであります。くれぐれも自分、あきつ丸が確認を怠り、手柄を焦つて連絡を急がせた。本人が確かにそう認めていると、伝えておくように」

「本当によろしいのですか？　恐らくいま向こうは大騒ぎですよ。唯一生存する潜水艦

の艦娘、そしてキング・ジョーの手がかり、当然元老院も太宰府の神州丸様も動かれているかと」

「よろしいでありますよ。何度も言うように責任は全て自分がとる、そう言っているであります」

「……了解です」

副官は伝令の一人に指示を出し、走らせる。

あきつ丸はその指示を聞き流しながら、空に立ち上る入道雲を見上げる。

「別れは告げられましたので、後悔はないと……。ですが、いざとなると……。想いがつまってしまいますなあ……」

両掌で、涙が流れないよう目元を押さえ込むあきつ丸。

副官はその様子をしばらくそっと見守ったのち、声をかける。

「あきつ丸様とまるゆ様ほどの縁あらば、因果の果てに必ずや再び会えましょう」

「……ふん、知った風なことを言うでありますな」

「ええ、知った風に物事を述べるのが副官でありますので。それで、これからいかががされますか？」

「それはもう、決まっていますよ。我々を散々コケにくれた二人を、地の果てまでこっそり追跡してやらねば」

そう言いながら振り向いたあきつ丸は、いつもの副官が知る彼女の表情。

聖人だろうと悪鬼羅刹だろうと、だまくらかして食い殺しかねないような笑顔だった。

その様子に副官はニヤリとした笑みを浮かべ、背筋をただす。

「……了解であります。実は独断ではありませんが、既にとびきりの精鋭による追撃部隊の編成と出撃準備が完了しております」

「それはまあ、ずいぶんと手回しがいい」

「処罰は後日いかようにも。なにせ、天下の艦連軍を相手にしての大脱走を行い、我ら憲兵軍相手に艦娘のことを考えろと啖呵を切った傑物が相手ですから。あの二人には相応の礼をしてやらんとなりませんので。して、現場指揮官は……」

「当然、自分がやるでありますよ。汚名返上のチャンスであります、ククク」

そう言つて、いままで副官が見たことがないような、愉悦に満ちた笑みを浮かべるあきつ丸。

砲弾の着弾にも動じない副官だが、その笑顔を見て背筋に経験したことのない震えが走る。

そして数分後。あきつ丸と精鋭の追撃部隊が、三人のあとを追うため出撃した。

※ ※ ※

「念のため確認させていただきたいのですが……」

「なんだよ」

「方向はこつちでいいんでしょようか」

「おう、多分あつてる」

「なんでわかるんですか？」

「カモメが飛んでるだろ」

火野が指さす方向を前島とまるゆが見ると、カモメが二羽ほど気持ちよさそうに飛んでいた。

そのある意味いつもどおりな火野の適当さに、なぜかとても心が安らぐのを感じた前島とまるゆが軽く微笑む。

そうして一行が基地を出て山道を下り、大きな通りを走ることしばらく。

ようやく三人は、太平洋に面した浜辺に到着した。

浜辺に車を止め、三人は無言で車を降りる。そして浜辺の砂を踏みしめ、そこでようやく海に着いたことを、全員が実感した。

三人の目の前には静かな太平洋の海が広がっており、夏空の蒼穹に負けないくらい、

青く輝いている。

「あの防波堤の先つぽあたりまで歩こうぜ」

火野の提案に、静かに頷く前島とまるゆ。

砂浜から伸びる防波堤に向かって火野が前を歩き、その少し後ろを前島がゆつくりと歩く。

その姿を見て、思わずまるゆは立ち止まる。

空の入道雲を背景に前を歩く、二人の男の後ろ姿。

それが……なぜかこの世界で一番美しい光景に思えて、ずっと見ていたくなったら。

「どうしましたまるゆさん？」

「なんだ、便所か？」

「いえ……なんでもありません」

立ち止まっていたまるゆに気がついた前島と火野が振り返る。

少し惜しい気もしたが、まるゆは二人に駆け寄った。

そして防波堤に到着し、海に向かって突き出ている先に向かってまた歩く。

夏の日射しに照らされて熱くなったコンクリートの上を二十メートルほど歩き、防波

堤の先にたどり着く三人。

そこから使われているのか怪しいぼろぼろの灯台の近くを、カモメが飛んでいるのが見えた。

静かな波の音と、きらきらと光る海が、ただただ美しかった。

しばらくその風景を眺めていた三人だったが、火野が煙草を取り出し、火を点けようとす。

が、使い慣れていないあきつ丸のライターではなかなか火が点かず、カチカチという音が何度も響く。

まるゆはその音を聞いて少し微笑み、振り返って二人と向かい合う。

「本当にありがとうございます、お二人が居なければたどり着けなかったと思います」
ようやく火が点いた煙草をくわえながら、火野が笑う。

「ハハッ。いまだから言うが、まさかあの時お前が車のドアをたたくとは思わなかったよ」

「自分で言うのもなんですが、まともな見た目ではありませんからね、私たちは」

確かに二人の見た目は、背の高いチンピラとインテリヤクザだ。

苦笑しながらまるゆが口を開く。

「確かに初めてお二人を見たときは、少し怖かったです。でも……いまなら、いまだから

こう思えます……本当に、あのとき止まってくれたのがお二人でよかつたって、ドアを叩いてよかつたって」

まるゆの脳裏に、この数日の思い出が蘇る。

はじめて目にした二人の男、そのあとのイノシシとのカーチェイス。母の話聞き、いつか見てみたいと思っていた静かな遊園地の風景。

たき火を囲んで話をした星座のこと、その星空の美しさ。

のどかな農村の風景、初めて見る牛という動物。

少し怖かった二人の喧嘩、そして宿について三人で遊んだ花札のこと。

宿からの脱出劇、そして警察との問答、やって来た大本营の残党。

持ち上げた車の重さ、はじめて乗ったバイク。

そして……自分のために、最後まであきらめなかった二人の男の姿。

まるゆは一つ一つの出来事を噛みしめるように、脳裏に焼き付けてゆく。

決して、決して忘れないようにと。

「いままで生きてきて、最高の出会いが三度ありました。目が覚めて最初に出会えたお母さんと、あきつ丸さんと出会えたこと、そして……この旅でお二人に出会えたことです。われながら……われながらいいことを言いました……」

泣きそうになりながら、なんとかさそう口にするまるゆの言葉を聞いて、二人の男が笑

う。

「そりや光栄だな、でも涙は四度目の最高の出会いのためにとつとけ」

「貴方の提督や仲間に出会えるのを心から祈っていますよ、まるゆさん」

そう言つて、ぼろぼろになった二人の男が笑う。

縁もゆかりもなかったまるゆを、命を賭してここまで連れてきてくれた二人の男が笑う。

たった数日の、長い人生のごく短い一時期。

だが間違ひなくまるゆにとつて、そして男たちにとつて。

それは、とても濃密で深い、忘れ得ぬ日々だった。

まるゆは、例えこの旅の果てになにが待つていようと。

二人との日々と、その笑顔を決して忘れないと心に誓う。

そしてきつと、かならず——

もし自分の提督に会えたら、この男たちの話をしよう——

まるゆは、気を抜けば溢れそうになる涙をこらえ、笑い返した。

「はい！ それではさようならです！」

まるゆは元氣よく返事をして二人に背中を向け、防波堤から飛び降りた。

そして艀装を展開しながら海に飛び込む。

着水し、振り向きたくなくなる気持ちをまるゆは抑え込む。きつと、いま振り返れば自分は泣いてしまう。

別れは済ませた、なら最後に彼らの思い出に残るのは……自分の笑顔がいい、自然とそう思ったのだ。

「まるゆ、もぐります!!」

そして二人に出港を知らせるかのように声を張り上げ、まるゆは青い海の中へと消えた。

まるゆの去って行った方向をただ静かに眺める二人。

そうして一時間ほど海を眺めてから、火野がボソリと言葉をこぼす。

「あいつ、本当に艦娘だったんだな」

「そのようですね」

それはいまさらな事ではあったのだが、前島は素直に頷いた。

「……腹も減ったしそろそろ行くか、焼き肉でも食いに行こうぜ」

「目的の海岸を探さなくていいのですか？」

「さすがに海外まで行く気にならんわ。それにな、こんな海を見て、他の海を探そうなんてのはアホらしいだろ？」

ああ、その通りだ……と、前島は思う。

寄せては返す波の音、火野が吸う煙草の匂い。カモメの鳴き声、潮の香りが舌のうえをなぞり、のどを通る感覚。肌を焼く太陽の光に、それを反射して輝く波のきらめき。身体で感じる感覚全てが、どれも最高に鮮やかだった。

いまの自分にとって、この海岸よりも美しく感じられるものなど、世界のどこにもありはしない。

確かにそう思えた。

「そうですか……いえ、そうかもしれません」

「さてと……俺はもう一生分運転した気がするから、次はお前が運転しろ」

「せっかく直したばかりですからね、異存はありませんよ」

二人は車に乗り込む、運転席には前島。

そして助手席に座った火野は、大きく足を広げて伸びをする。

「窓を開けてラジオをつけろ、アイツに聞こえるくらいにな」

「……了解です」

すべての窓を全開にして、前島がラジオのスイッチを入れる。

途端、デデンツ！ で始まる、国民的演歌が鳴り響く。

「……よりによつてこれかよ」

「まあいいじゃないですか」

苦笑いを浮かべる二人の男。

まだ旅は途中だ、ならどんな曲が流れても不思議ではない。

まるゆは陸を離れ、航海をはじめたばかり。

男たちも、これからの道中になにが待っているかわからない。

そしてこの曲が終わっても、また次の曲が始まる。

またその曲が終わり、旅が終わっても、また次の旅が始まる。

それこそ、生まれてから死ぬまでが旅なのだとしたら。

これからも三人は行く先々で、色々な誰かと出会おうだろう。

そう、まるゆの旅も、男たちの旅も

——まだ、これからのだから。

『二人の男』と『潜水艦：まるゆ』
おわり

「どこかに、行くでありますかなあ？」

と、言いながら。

いつの間にか後部座席に忍び込んでいたあきつ丸が、二人の肩を叩く。飛び上がるほどというか、実際飛び上がって驚く火野と前島。

それは二人の男の旅に、新たな仲間が加わった瞬間だった。

ほんとおわり

『無職男』と『駆逐艦：雪風』

このまま目を覚まさない可能性が高い。

燃えさかるバスの中から、子供たちを救出する際におつた重度の火傷。

それに伴う内臓へのダメージ、煙を吸いすぎたために肺は特にまずい。

そのため酸素不足の状態が続き、脳へのダメージが深刻だ。

他にも挙げればきりが無いが、つまり意識不明の重体である。

自らの提督の状態を、長女の陽炎に努めて冷静に伝える軍医。

その言葉を傍で聞いて、陽炎型の艦娘『雪風』はどこか他人事のように感じた。

だって現実味がない。

だって先日、提督に抱きついた感触が残っているのに。

だって明日、みんな海に行くと約束していたのに。

だって、提督は、だって

だって、行くと、だって

だって、約束を、だって

世界がぐらりと傾くを感じ、とっさにバランスをとる。

なんとか倒れるのは回避できたが、姉妹の何人かは床にへたり込んでいた。

落ち着け、まだ目を覚まさない可能性があるだけだ。

なら、目を覚ますまで待ち続ければいい。

——…待ち続けられれば？

それはいつたい…いつまで？

姉妹の中には、既に提督の倍近い時間を生きている者もいる。

だが提督がいれば、その姉妹は除籍日※艦娘の寿命を指す言葉が近い年齢だろうと、何十年でも寿命を伸ばすだろう。

艦娘の寿命の増減は、身体的な劣化ではなく意志の劣化によるところのほうが大きい。

しかし、ずっと目を覚まさず、どれだけ語りかけようと言葉を返さず。

ただやせ衰えてゆく提督の姿を見続けて、いつまで姉妹たちは正気を保ち続けられるだろうか。

そうだったなら、たとえば提督が生きていようと、その意志の強さを維持できるのか？

「そう、状況はわかったわ。ありがとう」

「はい、それでは今後のことなのですが……」

「その前に少しいいかしら？」

「なんででしょうか？」

姉妹たちのほとんどが呆然とその会話を聞く中。

長女の陽炎だけが、冷静に軍医と話を続ける。

「その辺のことは提督と話さないと決められないから、まずは話せる？」

「はい？」

「提督とまず話をさせてって言ってるの」

「……気を確かに持つてください、先ほども申し上げたように——」

ああ……長女、陽炎でも正気を保てていない。

もつとも、それが一時的なものだというのは雪風にもわかる。

だけど、それが一時的でなくなってしまう日がこないとも限らない。

音や風景が遠のいていく。

真つ暗になった世界で脳裏をかすめるのは、己の祖となつた軍艦の記憶。

姉妹艦が全て沈み、最後の一隻になったあの日の記憶。

もしかして、また自分は一人になってしまうのだろうか。

……だけど。

だからこそ、せめて自分だけは最後まで提督と共にいよう。

自分なら大丈夫だ、『雪風』の記憶を持つ自分なら、きつと耐えられる。かつて幸運艦と呼ばれた艦娘は、一人静かに、そう心に誓った。

無職は滅びんツ!! 何度でも蘇るさ!!

……うるせえわ。

全身にスゴイかゆみを感じて目が覚めた。

とりあえず掻きたくなって手を動かそうとしたが、なぜか動かない。

「うう、おいこッ!? げっおげふお!!」

さらに声を出そうとすると、のどがメツチャかさかさしてて上手く発声できん。

というか、のどの内部に違和感が。

多分なんか管みたいなののがのど元に直接挿さってる。

ぼやける視界であたりを確認すると、なんか仄かに発光する緑の液体。

その怪しげななかに満たされた風呂に入られていた。

さらに目をこらすと、なにやら両腕両足やら腰やらが器具で固定されている。

ちなみに普段はシャワーで済ませることが多く、湯船には滅多に入らない。

たまに磯風の家でチョイチョイ入るくらいだ。

変な入浴剤だな、いったいどこの温泉の素だよ。

までよ、昔こんな感じの風呂に入ったような気が……って、までまで。

なんで俺は起きたら風呂に入っていたのか、そっちの方が問題だろ。

しかもなんか、拘束されてるし。

あと身体かゆい。

って、これさっき言ったわ。

なんとか動く首を動かして辺りを見回すが、なんか半透明のカーテンで360度囲まれているせいでよくわからない。

というか、さらによく見たら身体から色んな管が伸びてて、よくわからん計器やら点滴やらに繋がってる。

とても不安になってきた。

もしかして無職を拉致して怪人にでも改造する、悪の組織にでも捕まってしまったのだろうか。

自分が正義のヒーローになれるとは到底思えないので、そっちよりはマシかも知れないが。

かといって、何時ぞやのヒーローショーのバイトのときみたいに、キーキー叫びながら黒タイツで暴れ回る存在になるのはかんべんしていただきたい。

あれ？

でもそれって悪の組織に就職できるということなのか？

そう考えたら、やはり悪くないかもしれん。

福利厚生とかどうなんだろう、賞与とかでるといいんだが。

ついでに次の上司は、なんだっけ、あのヒーローショーの悪の女幹部。

あれくらい美人の女だと気持ち嬉しい。

しかし腹が減った。

かゆ、うま

違う、そうじゃない。

どうにも頭がボワボワするし、身体中がかゆいし、腹は減ってるが。

取り急ぎここがどこで、いまはいつなのかを知ることが優先だろう。

えっと、というか俺なんでこんなところにいるんだ？

確か前島がなんだっけ、陽炎たちと海に行くから急遽参加って話を車の中でしたような。

そうだ、海だよ海、陽炎たちを海につれて行く予定があつたはずだ。

ともかくにも優先すべきは陽炎たち姉妹の――

「はえ？」

そんな感じでじわじわ不明瞭な記憶を掘り起こしていたら、半透明のカーテンを開けて、茶色い髪色のショートカットで、どこか不思議な温かみを感じさせる美少女が現れた。

幼い見た目に反して、どこか大人びた落ち着きがある雰囲気の娘だ

丸っこい顔立ちの名残がそこはかとなく見えるが、恐らく年齢は12〜15歳つてと
こか？

ランドセルから通学鞆に持ち替えてしばらくたつたくらいな感じかね。

もつとも女つてのは早熟だから、見た目と年齢が合わないことはままあるが。

つか確かこの娘、陽炎姉妹の雪風だったか。

えつと、あれ？

……もつと幼かった気がするんだが。

「げふお!! う、あーつと、だじが……ゆぎがじえ？」

メツチャ喉がつまって変な発音になった。

ちよつとはずかしい。

「い、い、い……」

「い？」

「いまは丹陽です。雪風、いまは、丹陽って……よろしく……お願いしま……ふっ、ふええええん!!」

『無職男』と『駆逐艦：丹陽』

あるうええ???

いや、確かに雪風って名前だったはずなんだが。

おかしい、もしかして俺の知らない雪風の姉とかだろうか？

まて、「いま」はっていったよな確か。

親の関係で名前や名字が変わったのか？

もしくは結婚でもして名字が変わったのか？

見ればけっこう成長した感じだし。

いやいや、それよりいまはこのガン泣きしているえつと、丹陽だっけか。

この娘を落ち着かせるのが最優先だよな。

しかしながら現在俺は手足を拘束されて風呂に入れられてる関係上、なんにもできない。

おまけになんだ、さつきから喉の様子がどうにもヤバイ。

なんというか、何十年も使わずに野ざらしにしていた、自動車のエンジンみたいな感じだ。

あんまり無理をして動かすとろくな事にはならないだろうが、そうにもいかない。

「おご、おぢづげゆぎがじ……あー、だんやん？」

「は、はい……ヒック、ヒック……ふえええええん!!」

アカーン!!

落ち着いたと思ったら、再び泣き出す丹陽。

こうなった子供のあやし方は、御菓子あげるかP O I S O Nの曲を聴かせるか、頭を撫でてやるくらいしか知らん。

状況がよくわからんが、このままだと俺が丹陽を泣かせたと思われてしまう。

信用というのはコツコツと積み上げるのが大変なわりに、崩れるときは一瞬だ。

しょうがないので、メチャ苦勞して手足の拘束を力ずくで引きはがし（火事場の馬鹿力感）、身体中に挿きつていたチューブを引き抜く。

手足の拘束は意外となんとかなかったが、このチューブ抜いてもよかつたのだろうか？
あとから弁償しろとか言われないよな。

まあいいか、そんなときやそんなときだ。

ある場所のチューブを引き抜いたときはさすがに痛くて泣きたくなつたが、既に泣いてる丹陽の手前、泣くわけにもいかん。

「ぼら丹陽、大丈夫だがら泣くなずう。え!？」

風呂から出て丹陽に触れようとして転けた。

「て、ていとくう……」

「あ、すまん」

おまけに巻き込んで押し倒してしまつた、なんてこつたい。

まあ、泣き止んでくれたからヨシとしよう。

すぐにどここうとしたが、腕に力が入らない。

いま気がついたけど、なんかめつちや筋力落ちてないかこれ。

つか、いまさらだけど、なんか髪の毛もめつちや伸びてるよな。

……あれ、これって白髪か？

うお、なんか下の毛まで全部白い!?

「あ……」

俺につられて、俺の俺を見てしまう丹陽。

ふう……やばいな、大変ヤバイ。

このままでは前島の亜種になってしまう、色んな意味で死ぬ。

「す、すまん、力が上手く入らなくてな。すぐにどくから……」

「だ、大丈夫です。丹陽こそ急に泣いてしまつてごめんなさい。無理に身体を起こさなくても、しばらくこのままで平気ですから。落ち着いて、動かないでください」

真つ赤な顔をしながら、俺の背中に手を回す丹陽。

さすがにそれはと思う。

だつて俺、全裸だし。

が、なぜだかガツチリホールドされてるせいかな、身体がまったく動かない。

なんか前にもこんなことあったな、あんどきや陽炎がいきなり入つてきて大変だった。

……つて、さすがにこの状況は言い逃れが難しすぎるぞ。

「お、おい。さすがにダメだつて、こんなところ陽炎にでも見られたら」

「……」

「お、おい、どうした？」

急に口ごもる丹陽。

なんだなんだ、もしかしてアイツらになにかあつたのか。

「そうだ、陽炎姉さんは、みんなは……」

え……？

まで、までまでまで。

なに深刻そうな顔してるんだ？

落ち着け落ち着け。

まで、そういえば他の奴らは？

お前らはいつだつてこう、みんな固まって行動してたりするんじゃないのか？

なんでいまは丹陽しかないんだ？

いや、まで。

そもそも、俺は“どれくらい”寝てたんだ？

「今日は実に野球日和の晴天ね丹陽！ さあ早く河原に行きま——」

なんて焦っていると、ガラガラと勢いよく扉を開いて部屋に入ってきた陽炎と目が合った。

なんだ、普通に元氣そうじゃねえか。

滅茶苦茶心配しちまったぞちくしょう。

しかしながら問題は、全裸で丹陽にのしかかる俺、真つ赤な顔の丹陽。

あ、やべ。

「ま、待て、さすがにこれは誤解だ！」

俺の姿を見て、まるで氷でもできてるのかというくらい、完全に硬直してしまった陽炎。

無駄だと思いつつ、必死に言訳を考えるが……これ、無理だろ。

無言で見つめ合うしかない状況。

永遠とも思えるような間だったが、ようやく陽炎がプルプルと震えはじめる。

マズイ、これは恐らく怒りで噴火する直前のタメだ。

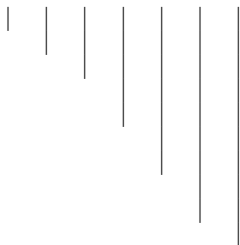
ああ、せめてもう一度内定が欲しいだけの人生だったなあ……。

「ふ、ふ、ふ……」

「ふっ。」

「……ふつ、ふええええんん!!」

「つて、お前も泣くんかーい!!」



「てなわけで、バスに乗ってた人たちはみんな無事だったけど、提督は十ヶ月くらい意識不明の状態だったわけよ」

あの後、病院中をひっくり返したような大騒ぎで、検査やらなんやら諸々無限にあれやこれやし、色々すったもんだした上で再び緑の風呂に戻された。

なんでも色々無理して引きちぎったせいで、なんか傷が開いたとかなんとか。

つつても、あと2〜3日で出られるから、身体は一部だけしか固定しないでいいみたい。

長風呂つてレベルじゃないが、まあ、十ヶ月も入つてたなら誤差みたいなもんか。

あとこの風呂の液体は、なんか軍用の特殊な治療用の溶液を長期使用用途に薄めたものらしく。

普通なら副作用やら機密やら利権やらなんやら諸々あつて、軍人以外使用できないところを、陽炎や俺の知り合いとかいう関係者のコネでなんとか使わせてもらつてるらしい。

はて、軍人の知り合いなんていたっけか？

まあ、そしてようやく落ち着いたところで、そのへん込みの簡単な顛末と、寝てた期間を陽炎に教えてもらったわけだが。

え、なにそれ。

朝起きたら楽しみにしていた、誕生日とクリスマスと正月が全部終わつてたレベルじゃん。

いや、実際終わつてたわけだけど。

思わずショックで白髪になつたわ。(笑えないジョーク)

まあ、実際は治療の副作用らしくて、いつか元に戻るらしいが。

「マジか……」

「マジよマジ!! ほんともう、どれだけ心配したと思ってるのよ……ICU（集中治療室）に297日いて、その間に七回も危ない状況になったのよ？ その度に私たちがどれだけ心配したと思ってるのよ!？」

「いやほんと悪かった、なんつーか、色々悪かった。そういや海に行く約束とかもしてたよな……完全にブッチじゃねえか。いや、バスとかのレンタルどうなってるんだろう……」

他にも賃貸の更新とか、市の在住許可とか。

つかICUに297日って、治療費いくらだろ……絶対家建つ額だよな？

だめだ、無限に頭が痛くなってきた。

前島に金借りるしかないだろうか。

でもさすがにこれから家庭を持つヤツに、そんな余裕は無い気がする。

そういやあいつ結婚式とか、どうなったんだらうか。

金剛連合会のお偉いさんやらの顔に泥ぬってたり……って。

「あ……そういや前島、俺と一緒にいた殺し屋みたいなの目つきしたヤツ。アイツはどうなった!？」

「あ、前島さん？ あの人ならいつとき提督より危なくて、生死の境を彷徨ってみたいだけ。事故から一週間後くらいに急に覚醒したらしいわよ。後遺症の関係でまだリハビリ中みたいだけ」

「おふ、ならよかった……」

前島のことだから、急に起きたのは近くで子供が泣いてたとかが理由だろうけど。

正直、もしもがあつたらアイツのお袋さんや婚約者にマジで申し訳が立たなかつた。

お互い自分の意志で、覚悟してやったこととはいえ、それはそれだからな。

それからしばらく、俺が寝てた間に起きた出来事やらなんやらをざつと説明してもら

う。
とりあえずなぜかバス会社に訴えられそうになつたらしいが、なんか前島の義父（予定）が雇つた凄腕弁護士が上手いことやつたとかなんとかで、治療費の件は心配しなくていいのかなんとか。

ついでに前島の結婚式は延期になつたとか、もしかしたら市やらなんやらから表彰されるかもとか。

表彰つてなんだよと思つたが、なんかあの時の救助の様子がテレビで流れて、色々大変なことになつたらしい。

そういう医者や看護婦から握手を求められたな。

特に院長とか言つてた女医は、めっちゃ泣いてた気が。

まあその手の話はみんな好きだからな、そういうこともあるか。

それはともかく、賃貸の更新はできなかつたので、俺の荷物は谷風の不動産屋が所有して倉庫に、全部保管してあるとか。

……ナンテコツタイ。

治療費はなんとかなつたものの、いよいよ無職でホームレスという、過去一マズイ状態に突入したぞオイ。

やばい、なんか色々、浦島タロー状態だわこれ。

実際白髪になつちまつてるし。

これマジで磯風とかに土下座して、居候させてもらわにやらんかもしれん。もしくは退院したら、速攻で市外に夜逃げするか。

ああでも、なんか何ヶ月かはリハビリあるみたいだから、すぐには無理か。やたら筋力が落ちてたこと含め、日常生活に戻るのはまだかかるみたいだ。

正直辛い。

肉体的にも、精神的にも。

「あー、そういえばさ。提督がラリアットした元上司いたじゃない」

「ん？ ああ、それがどうした？」

色々情報が多すぎて頭パーになりかけていたところで、割とどうでもいい情報の氣配。

情報の箸休めにちょうどいいけど、懐かしいな、もう顔も思い出せんが。

ただ、結果的にあの上司がいなければ、陽炎たちと出会えなかったとも言える。

なのでプラマイゼロでギリギリ感謝してやらんでもない気もするが、やっぱりもう一発くらいは入れときゃよかったな。

「なんか知り合いから聞いた話だと、クビになったみたいよ」

「え？ あー、まあセクハラ癖が治らん以上、いつかはそうなるとは思ってたが……」

「いやさ、今回のニュースを見た職業斡旋所の職員が提督のこと覚えてたみたいでね。色々思うところがあつたのか調べてみたらいいのよ。そしたらなんか提督を面接した企業の面接官に圧力がかかって、虚偽のあれこれをさせられたってあっさりゲロつたみたい。そこから芋づる式に調べていったら、会社の看板使つて好き勝手やつてたみたいでさ。色々あつてクビになつたんだって」

「そりやお気の毒なこつた。俺の事なんざほつときゃよかったのになあ」

「私に言わせれば当然だし、ぬるすぎるくらいだけどねー。でもコケにされた就職斡旋所が随分おかんむりみたいでさ。再就職は大変そうよ」

因果応報という言葉が頭をよぎる。

てつきり俺限定の概念と思つていたが、そうでもなかったようだ。

恐らくこれからは就職斡旋所に足繁く通うことになるだろう上司に、祈りを捧げる。俺はもう出禁になったから、バツタリ会うこともないだろうが。

まあ、あそこ夏場はクーラーが効いてるからお奨めだぞ。

「他にも色々と心配だろうけど、全部なんとかしとくから、大人しく療養しといて。まあ、ほんとならいますぐにでも、みんなを呼びたいけど、今日はゆっくり休ませてあげる。ただし明日は覚悟しといてよね」

「なんかいろいろスマンかったな、お前らの貴重な時間をその……海のこととかも、約束破っちまったし……」

実際、姉妹全員途切れることなく様子を見に来てくれたり、時にはつきつきりで看病もしてくれてたとかなんとか医者から聞いたけど。

家族でもなんでもないのでそこまでしてくれた、この娘らの優しさが無限大すぎて泣きたくなる。

「そう思うならしつかり身体を治して。そしてその分たつくさん、私たちのために時間を使つてもらおうから。じゃあ丹陽、あとはお願いね」

「はいっー」

ヒョコツと、いつの間にやら風呂の横に座っていた丹陽が返事をする。

うお、いつの間に、気がつかなかった。

陽炎がぴらぴらと手を振って部屋から出て行く。

いや、一緒に連れて帰ってやってくれ。

「えつと丹陽、お前ももう帰つてもいいんだぞ？」

「いえ、これからは常に私たち姉妹の誰かが提督のおそばにいます！」

「は？　なんで？」

「もう二度とあんなことがないよう、ずっとずっとお守りするためです！」

「あ……ああ、うん」

覚悟ガンギマリしてるような目だなオイ。

多分心配をかけすぎてしまったせいかな。

色々迷惑かけた手前、しばらくはコイツらのしたいようにさせてやるべきか。

「本当に……目がさめてよかったです……ていとくう」

しばらくボケツツとしてると、目尻に涙を溜めながら、丹陽が震える声で呟く。

かける言葉が見つからず、頭を撫でてやる。

なにやってるんだろうな、俺は。

こんな良い娘達に、こんなに心配かけて。

俺にそんな価値なんざないってのに。

「姉妹のみんな、もうずっと元気がなくて。暗い気持ちをなんとか明るくしようって、陽炎さんは無理して明るく振る舞って。でも、そうしてるうちに陽炎姉さんはどんどん……」

なるほど、陽炎が部屋に入ってきたときに、やたらハイテンションだったのは、そういうことか。

「悪かったな、心配かけて」

「帰ってきてくれたから、許してあげます、でも、明日みんながお見舞いに来たら、いっぱいいっぱい優しくしてあげてください」

「ああ、頑張るよ……」

見舞いに来てくれる人がいるって、よく考えると凄いわ。

俺みたいな人間は特に、人間性がチョットねじれてるからな。

そのことに気がついてからは、なんとか普通になろうと頑張ったもんだ。

まあ、結局ラリアットで全部台無しになったわけだが。

おまけに今はこのザマだ。

これからの人生、いろいろと見通しが暗すぎるな。

「そうだ、忘れてました」

「ん、なんだ？」

丹陽が浴槽の縁に腰掛け、そつとこちらに手を伸ばす。

そして顔を近づけ……丹陽の唇が俺の頬に触れた。

「……毎日、提督の頬にキスしてました。どうか目を覚ましてくれますようにって祈りながら。丹陽は他の姉妹の誰よりも運があるので、ちよつとでも足しになるならつて、毎日、欠かさず……効果あつたみたいですよ、えへへ」

とても深い悲しみを湛えた瞳。

年頃の娘がしている目じやない。

おそらくこの娘も、そして陽炎たちも。

俺が想像する何倍も心配してくれていたのだろう。

ヤバイ、涙が止まらなくなりそうだ。

申し訳なさも勿論あるが、なぜかそれ以上にそう想つて貰えたことが嬉しい。

つたく、昔はちゃんと感情を抑えられた気がするが、もうそんなに強くなれん。

なんでかな？

「ああ、ありがとな丹陽。……そしてすまん、そろそろ寝るわ」

男は涙を見せぬもの、という以前に泣いてるところを見られるの恥ずかしいので、適当ないいわけをして目をつむる。

起きたら色々ありすぎたせいかな、実際疲れた気もするし。

十ヶ月も寝てたつてのに、情けない話だ。

「はい。目が覚めたら……また、みんなと——」
そうだな。

目が覚めたら、またお前らと一緒に。
もう少しだけ、一緒にいさせてくれ。

「んが？」

なんだか全身に生温い感触を感じながら目を覚ます。

ああそうか、俺風呂に入ったままなんだっけか。

そんな状態での目覚めというのは、何度味わつても慣れないものだ。

目がぼやけてるので擦ろうとしたが、それより早く、なにかに視界を塞がれた。

「あ、起きた？」

陽炎の声が聞こえ、濡れたタオルかなにかで顔を優しく拭かれる。

「おう、なんだもう来てたのか」

「当然よ当然。散々心配かけといてまた起きなかつたら、姉妹全員でたたき起こしてあげようと思つて昨日の晩……あ、朝一で集合したわ！」

「そりゃ豪勢なこつて……つて、うええ!？」

顔を拭い終わつた陽炎がタオルをはなしたので、よつこらセックスと言いながら上半身を起こして目を開ける。

と、マジで狭い室内に陽炎姉妹があちらこちらにひしめいていた。

が、驚いたのはそれが理由じゃなくて。

「なんでおまえら全員水着なんだよ」

黒、白、赤、青、ピンク、紺、黄、緑、e t c.。

様々な原色や模様の水着を身につけた陽炎姉妹ズ。

なんというか、あれだ。

この娘らの容姿が良いのは知ってるし、見慣れたつもりだったが。

それ以上に肌色の露出の多さも相まって、ちよつと心臓に悪いな。
立场上認めたくないが……。

ぶつちやけコイツら可愛すぎじゃなからうか？

おかしい、俺はロリコンじゃないはずなんだが。

「理由は色々あるけど……提督と海に行けずに埃をかぶつてた水着を一刻も早く披露したかったからとか？」

「なんで疑問系なんだよ……」

「しょうがないじゃない。会議でそう決まったんだから」

会議、会議で決まったのなら仕方ない、のか？

つか会議ってなんぞや。

あとパラソルやら浮き輪やらまで、なんで病室に持ち込まれてるんだよ。

「で、どうかしら。私たちの水着姿は？」

そう言つて、白いビキニ姿の陽炎が両手を天に伸ばし、扇情的なポーズをとる。

続いて他の姉妹も各々、何ヶ月も練習したんじゃないやなからうかつてくらい見事なポーズを披露。

おおう、なんというか、あれだ。

見た目もさることながら、俺はこの娘たちの性格がどれだけ良いのかもよく知って

る。

ただの知り合いの男を297日もつきつきりで看病してくれて、俺を想って泣いてくれる娘たち。

おまけに自意識過剰つてのを加味しても、多分全員俺のことが好きだ。

そんな娘たちの水着姿を見てどんな感想が湧くかっていったらそりや——

「……全員、最高に可愛いな。歳が近けりや嫁さんにしたいくらいだよ」

と、寝起きでこんなに情報量が多い光景を見てしまったせいもあつたのか。

なんか、煩惱モロ出しのイカレタ感想がポロリとこぼれてしまった。

「へ？」

「あ、いや、いまのナシ」

バカか俺は、前島か俺は。

失言に血の気が引くが、それ以上に自分の顔が赤くなつてるのもわかる。

が、陽炎姉妹たち全員の顔は、多分それを超えるレベルで真っ赤だった。

「なつ、ナシ無理でーす!! はい言質とつたー!! ケツコンしたいていわれちゃつたー!! 勿論返事はオツケーでーすツ!!」

「し、不知火も構いませんよー」

「う、うち……ほんま嬉しいわあ……」

「あ、あの、ううっ……親潮も準備万端です！」

「えへへ、早潮もオツケーですよ」

「な、夏潮も当然大丈夫です！」

「やだ、嬉しい……初風も……いいわ／＼／」

「へ?! あなた、ホントに私でいいの? ありがとう……お礼は言うわね」

「ありがとう♪うんっ」

「あ……提督、うち嬉しいんじゃ……ふふっ♪」

「えっ……あつ、あの……この磯風も、ずっと貴方と共に……ある」

「……浜風も……その、光栄です!!」

「かぁーっ!! なんてこつたいーっ!! もちろんこの谷風さんもオツケーだよ!!」

「提督、大丈夫! 野分、いまフリーですし!」

「おほっ! ……お、おお……? さ、サンキューな提督……」

「あ、ありがとうございます。萩風、うれしいです!」

「提督う、ありがとう! 嬉しいなあ、踊ろうっ踊ろうよー!」

「いよいよ提督も、秋雲の魅力に気づいちやったの? えへ、えへへへ……」

陽炎姉妹各々が体をクネクネさせながら、なんか言うてはる。

滅茶苦茶可愛いけど、なんか、いや、どうしよう。

ちよつと脊髄から言葉が出てしまったただけなのに、どうして……。

これもうだめだ、取拾が付かない。

というか、なんか知らない娘の名前も交じつてたような。

(※未実装艦に関しては雰囲気で書いています)

……あれ、つか誰か足りなくないか？

ざつと病室を見渡すと、昨日までずっとそばにいてくれたはずの、丹陽がいない。

はて、便所に行つても行つてゐるのだろうか。

何てことを考えてたら、ドタバタという足音が聞こえて病室の扉が開く。

「陽炎型駆逐艦8番艦、雪風！ て・い・と・く！ 雪風、帰つてきました。これからも、

ずつと、よろしくお願いします！」

『無職男』と『駆逐艦：雪風』

そう宣言しながら、極めてカオス状態な病室に入ってくる丹陽……って。

あれ、雪風？

なんだろう、よくわからんけどまた名前が変わったというか戻ったらしい。

後一応、なんか白いパーカーを羽織ってはいるが、雪風も水着のようである。

しかもスクール水着っぽい。

よく知らんが特殊な水着っぽいから、他の姉妹より着替えに手間取ったのだろうか？

「えっと、雪風……でいいんだよね？ お、おかえり？」

「はいっ！ 帰ってきましたよ、て・い・と・く！ みんなと貴方のために。絶対、大丈夫！」

マジか、大丈夫なのか。

この状況をどうにかしてくれるなら、マジで頼む。

「お帰り雪風!! ちょうどよかった、いま提督に姉妹全員ケツコンしてくれってプロポーズされたところよ!!」

「え、ええええええええええええ!! そ、それって雪風はのけ者ですかああ!!」

「そんなわけないでしょ!! だからさあ提督、もう一回言って!! 私たち陽炎姉妹全員

とケツコンするって!!」

アカン!!

このままだと認識の違いが、なにかとんでもない形に変えられて真実になっちゃう!!
「い、言っとらんわ!? お前ら全員可愛すぎて、思わず嫁さんにしたいって口にしちまっただけだろ!!」

「「「んほおおおおお!!」」」

つて、なんか勝手にみんな倒れた。

え、なに、なんで? 大丈夫なの?

「ああー! 姉さんたちが嬉しさでおかしな事になってる!? こんな表情、この秋雲さんが描いてる同人誌でも見たことない!」

水着姿でガシガシとスケッチにいそしむ秋雲。

だがスケッチするくらい冷静さを保てるなら、この状況をどうかしてほしい。でもなんかいつもの3倍くらい目のクマが濃い。

よくわからんがこの娘も見た目以上にやばいのかもしれん。(修羅場mod)

しかしなんか勝手に沈静化したのは良いもの、どうしたものかと思惑停止している
と、プルプルと陽炎と雪風が立ち上がった。

おふ、無事だったか、よかった。

ついでに頭冷やして冷静になってくれていると、もつといいんだが。

「……ねえ雪風。私たちも色々あったけど、ほんと、頑張つて待つて探して、みつけれ
て良かったわ。……生きてさえいれば、いいことあるもんね」

「はい……陽炎姉さん。雪風、いま幸運の女神のキスを感じちやってます！」
幸運の女神のキスつて、さすがに盛りすぎだろ。

でも、いいこと、いいことか……。

まあ、この状況がいいことかはともかく。

そうだな、思えば陽炎。

そしてこの娘らは……間違いなく俺に訪れた幸運の女神だな。

もしかしたら俺は、あの日あの河原でくたばつていて。

あの時お迎えにきてくれた天使たちが、この娘たちなんじゃないだろうかと思えるほ
どに。

じわりじわりと、陽炎たちと過ごした日々の思い出が蘇ってくる。

「まあ、確かにその通りだけだな」

「へ？」

陳腐な言い回しだが、ふとした瞬間、世界が光り輝いて見えることがある。

夜明け前の町を歩いているときや、春の穏やかな空気を感じたとき。

でも人生つてのはそんな瞬間ばかりじゃないし、むしろ悪いことのほうが多い。

なかでも自分でも理解できない最悪なことが起こったとき、人間つてのはいつたいたいどうしてそうなったんだってキレる。

そんなもつて、そうなつてしまつた全ての理由をなんかに押しつけようとする。

他人や法律や国なんか、その中でも一番押しつけやすいのは世界だな。

じつさい世界つてのはクソだ。

だからこんな事になつたのは、世界そのものが残酷だからだつて決めつけたほうが腑に落ちる。

この世界が悪いつてことにしたほうがわかりやすいし、なにより簡単に憎しみをぶつけやすい。

つまりそうすることで心のバランスを保てるわけだ。

なんでわかるかつて？

そりゃ経験者だからな。

でもその一方で、どんなに辛いことを前にしてなお。

憎むのではなく、なにかを愛そうとする人もいたことを、俺は知っているはずだ。

この世はクソの海か？

ああ、まさしくその通りだ。

だけど……そこに咲いてる花もある。

だからまだ、この世界でやってく気が欠片でも残ってるっていうなら。

目を開いて、鼻つまんで、クソの海を泳いででも。

休みながらゆつくりでもいい。

その最中に傷つき、疲れ果て、絶望にうちひしがれたとしても。

花を、自分が愛せるなにかを、探すことはやめるべきじゃない。

たとえ最後までにも見つからなかったとしても、求め続けろと。

そう、陽炎たちを見てると思わせてくれる。

まあこの花（陽炎姉妹）は、ただ見てるだけにしとくのが正解だろうけどな。

実際、こいつらにいつまでも迷惑はかけられんから、身体が動くようになったら、こ

の街から出て行くことになるだろう。

そしてその先の俺の人生には暗闇しかなくて、辛い人生になるって確信がある。

無職のホームレス、おまけに身体も前みたいに動かせるようになるか怪しいからな。

だけど、たとえそうだったとしても。

愛せるものが、この世のどこかに必ず存在するとわかってるだけで。

どんなに辛いことがあると、この世界は……生きるに値すると思えるはずだから。

生きててよかったよ。

この娘たちみたいいな存在がいてくれると、知ることができた……ただそれだけでな。

「確かに生きてりやいいことあるもんだつてな。……俺にとつてそれは、お前らと出会えたことだ。陽炎、あの日河原で、俺をみつ付けてくれて……ありがとな」

「……ねえ提督？」

「なんだ」

思わず感傷的になって、変なこと口にしてしまったなと顔を上げると、陽炎とその姉妹全員がなんか、めっちゃ覚悟完了したみたいな顔でこつち見えた。

え、なに。

またなにか、まずいことでも言ってしまったんだろうか？

「お嫁さんにしたいって言葉は確かにちよおおつと、都合良く解釈しちゃったかもだけど。その発言に関してはつまり……100%双方合意したつてことよね？」

「なにかだよ」

いや、なにをだよ。

……つて、なんで部屋の鍵をかける。

あと、なんで水着を脱ごうとしてる。

まてまて、全員でジリジリよってくるな。
浴槽に入ろうとするな、身体に悪いだろ。
というかよく考えたら俺、いま服着てねえ!!

オマケ | 陽炎会議録NO. FINAL |

(※NO. は掲載順の番号となり、時系列とは一致しません)

提督覚醒。

その知らせは、またたく間に陽炎姉妹全員に伝えられた。

各々が涙し、歓喜し、そしてひとしきり近くの姉妹と喜びを分かち合った後。
姉妹たちはいつもの場所に集結したのだった。

薄暗い部屋、円卓を囲む二十人近い少女たち。

いつもなら白いかぶり物をかぶっているのが、少女「らしい」という表現になるのだが、今回は超大急ぎだったので全員素顔だった。

というか、バレバレだけどハッキリ言っておくと、陽炎姉妹たちが集結していた。

あと因みに時間軸的には、陽炎が提督の病室から出た数時間後である。（超緊急招集）後もろもろの事情で、NO.08（丹陽）は欠席。

というか、今後は護衛の関係でずっと誰かしらが欠席することになるのだが、それはともかく。

「……みんな、今日までよく耐えてくれたけど、あと一日だけ耐えて。検査で目立った異常が無かったとはいえ、当然無理は禁物だから」

淡々と、そして静かに長女である陽炎が口を開く。

その言葉に、一同は深く頷く。

目を覚ましてくれた、そしてまた話せる。

そしてなにより、提督の健康こそが第一。

なら、後一晩くらい耐えられるはずだ。

多分、おそらく。

「……でも、提督が眠ったらこっさり病室に入って、じつと提督の寝顔を観察するくらいならセーフだと思っただけどうかしら？」

「「「セーフ!!」」」

ダメっぽかった。

しかしそれも無理はない。

正直彼女たちの心は色んな意味でいっぱいだった。

陽炎と不知火と黒潮と親潮は、雨の日も雪の日も台風が来ても雷が鳴っても、毎日野球日和だと言つて、提督が無事目を覚ましてくれることを願い、一万回ノック（各自一人ずつ）を行い。

初風と天津風と時津風と秋雲は、提督が喜んでくれるだろうと、メイド服を着たり、作ったり、描いたりしながら、提督の写真を貼り付けたマネキン相手に接客を行い。

浦風と磯風と浜風と谷風などは、浦風がお好み焼きを焼き、磯風がそれのできばえを鑑定し、谷風が建築がごとくそのお好み焼きを積み上げ。

そのお好み焼きを積んだそばから浜風が食べて崩すという、疑似賽の河原状態に陥り。

野分、嵐、萩風、舞風に至っては、シンプルにお酒を毎晩がぶがぶと飲んで、不安で押しつぶされそうな心を誤魔化そうとしていた。

余談だが、提督覚醒の報を聞いた瞬間。

くしてる場合じゃねえ!! 状態になったのは言うまでも無い。

「ところで、提督はこれからリハビリとか色々大変な毎日が待ってるわけだけど……私たちはまず、どうするべきかしら?」

「む……やはり、寄り添ってお世話をするのが一番なのでは?」

「それは当然よ。ゴメン言い方が悪かったわね。これから大変な提督を元気づけるために、私たちが真つ先にできることはないかしら?」

この議題に、会議は紛糾した。

やれ食べ物、やれ娯楽が。

いや、病み上がりの提督にそれは等々。

ともかくにも、まず明日目を覚ました提督のために、真つ先に自分たちが出来ることはなにかないのかと小一時間。

そんなとき、ふと陽炎が思い出したようにボソリと呟く。

「そういえば提督……私たちを海に連れて行けなかったこと、凄く申し訳なく思ってるみたいだった……」

静まりかえる会議場。

あの日、提督が治療施設に運ばれた日から。

誰もが海のことなど、頭から抜け落ちていた。

ああ、確かに、あの日あの時まで。

自分たちは次の日を、あんなにも楽しみにしていたのに……。

レンタルバスの返却手続きを事務的に処理した担当の親潮は、思わず手を握りしめる。

いや、親潮だけではない。

姉妹各々が、個人的に海のために準備していたあれこれ。

中にはやるせなさから処分してしまったものも沢山ある。

早計だった、もつと、自分たちが提督が必ず帰ってきてくれると信じていれば……。

「……待つてください。それはつまり、提督は私たちの水着姿を見れなくて後悔しているということでは？」（名推理）

そんな重い空気が漂う中、なぜか不知火から飛び出た言葉。

恐らくだが、水着回を望む外世界からの電波を受信した可能性がある。

だが、あれ、それ正解なのでは？

という、謎の納得が満場一致で肯定される。

「つまり水着に着替えた私たち全員で提督を看病しつつ、病室を海に見立てたバカンス mode に移行するのが正解ってことね!!」

「さすが不知火姉さん!」

「さすがヌイ!!」「さすがヌイ!!」「さすがヌイ!!」

超ナイスアイデアじゃんそれ!!

となった姉妹たちの行動は早かった。

というかいっそもう、病室を可能な限り海っぽくしようと、アカシやら夕張重工に頼んでみては？ などと、病室の模様替え計画まで本気で練られはじめる始末。

とまあ色々あったが、陽炎会議は久しぶりに平和だった。

そして、恐らくこれからもきつと、ずっと。

『無職男』

と

『驅逐艦：陽炎：不知火：黒潮：親潮：早潮：夏潮：初風：雪風：天津風：時津風：浦風：
磯風：浜風：谷風：野分：嵐：萩風：舞風：秋雲』

おわり

『嘘つき』と『駆逐艦：卯月』

「提督を見つけたびよん！」

「えええ!? 本当ですか卯月さん!？」

卯月と呼ばれた紅い髪の少女が、興奮した様子で受付の女性に報告する。

小さな身体がびよんぴよんと飛び跳ねるたび、長い髪が激しく揺れ、彼女の喜びを表現しているように見えた。

ここは艦夢守市、市役所、艦娘課。

そしていままさに卯月の提督発見の報に対応しているのは、その職員であり、駆逐艦の艦娘である萩風・登場『無職男』と『駆逐艦：萩風』等。

「おめでとうございます卯月さん!!」

萩風は興奮した様子で、卯月の報告に手を叩きながら、自分のことのように喜びの声を上げる。

「すぐに提督を連れてくるから、書類を用意しておいてほしいびよん！」

「はい、喜んで!!」

卯月が去ったあと萩風はすぐに書類を用意してニコニコしながら待っていたが、待てども待てども、一向に卯月は現れない。

そして終業時間まで待ち続けた結果、萩風は一つの結論にたどり着く。

「あれ……もしかして嘘だった？」

「あ、卯月さん来ました？ 毎年四月一日のエイプリルフルは、誰かしら引つかかるんですよね……私も昔やられました。まあ、萩風さん新人だから引つ掛けやすかったのかもしれないね」

近くを通りかかった、同じ課の先輩である初霜から衝撃の事実がさらりと語られる。ポカンとする萩風。

この日、艦夢守市の各地で嘘の内容に違いはあれど、似たような事案が大量発生した。

そしてこれこそ後のロックバンド『ヘルズトリック』のボーカル兼ギタリストである卯月。

そして『うーぴょん』と呼ばれた彼女がデビューする以前の、四月一日の風物詩であった。



「くくく、うまく騙してやったぴよん」

ご機嫌な様子で、町はずれの廃寺を歩く卯月。

流石にあちこちで派手に嘘をつきまくったので、ほとぼりが冷めるまで隠れることにしたのだ。

たしかに四月一日は嘘をついても許される日。

しかしだからといっても限度はあり、ときにその限度を超えちゃうこともまたあるわけ。

過去にはおつかかない相手（金剛連合会関係者）に嘘をついて、逆さづりにされた経験が卯月にはあつたりする。

そんなわけで、毎年四月一日の午後は嘘をついたあと速やかに撤退し、誰も寄り付かないこの場所でほとぼりが冷めるまで過ごすのが、いつのまにか恒例となっていた。

「子供？ 何かご用ですか、お嬢さん？」

が、寺の裏にある墓所をうろうろしていた卯月に、突然かけられる男の声。

驚いた卯月が振り返ると、そこには黒い僧衣を着た男がいた。

痩せ気味で髪が長く、どこか陰鬱な空気を放つ男で、あまり僧侶と言う雰囲気ではない。

どちらかといえば幽鬼的なところがあり、場所のこともあつて、墓守りと言われたほうがしつくりくる。

が、それよりも問題なのは――

「ふえ？」

男が彼女、卯月の提督であつたことだつた。

『嘘つき』と『駆逐艦：卯月』

「て、提督が、提督がいたんだぴよん!？」

「あー、ハイハイ。インパクト強いけど、あんたそのネタ去年もやったわよ」

艦娘寮の同室である川内・登場『独り身男』と『軽巡：川内』等が、卯月の衝撃発言

を軽くあしらう。

二人とも幼い頃より艦娘寮に預けられた身の上だったため、ある意味肉親と変わらぬ付き合いの長さだった。

そんな川内と卯月は見た目こそ軽巡と駆逐艦であるため違うのだが、年齢が同じのため、寮では同室に割り振られている。

ちなみに川内に関しては、艦娘としての常識を学ぶために入寮している。なので、定期的に家には帰るし、大学入学後は両親と暮らす予定だった。

「そうじゃなくてほんとにいたんだびょん!!」

「そっかー、よかつたわねー」

「てめーに相談したうーちゃんがかバカだったびょん!!」

そう言つて卯月は川内の脇腹にミドルキックを一発。

モロにそれをくらい「うごっ!」っと変な声を出してしまった川内。

彼女はそこでようやく、卯月がかつて見たことがないレベルの、真剣な目をしていることに気がついた。

「え、もしかしてマジ?」

卯月のただ事ではない空気に、流石にどこか変だと感じた川内。

川内は脇腹をさすりながら、慌てて卯月の対面にあぐらをかいて座る。

「ど、どうすんのよ?」

「ど、どうしたらいいんだびよん? おめーは仮にも提督もちだびよん、何かアドバイスするびよん!」

「いや、私だってまだ見つけたばかりだし……。そ、そもそもどんな人なのよ」

「えっと、痩せてて陰気な感じで、髪の毛が長くてぼさぼさで、汚い坊さんの格好してて……超ステキなんだびよん!!」

「ごめん、どこにステキな要素があるのか、まったくわかんないんだけど?」

身振り手振りを駆使して、必死に自らの提督のかっこよさを伝えようとする卯月。
だが、川内は聞けば聞くほど、その提督のどこに魅力があるのかが理解できない。

「でも、うーちゃん恥ずかしくて、すぐに逃げちゃったんだびよん……」

「え、逃げてきたの? 艦名の契りもしてないの? ちよ、それってつまり、あんたのこ
と艦娘だつてこともわかつてないわけ?」

「だ、第一印象は最悪かもしれないびよん……」

「と、とりあえず、また明日会いにいつてみたら?」

「うう……そ、そうするびよん……」

その後、二人の作戦会議は夜遅くまで続いたのだった。



「ああ、あなたは。こんにちは、また来たのですか」

「こんにちはだぴよん！ また来たぴよん!!」

昨日突然逃げ出した相手にもかかわらず、特に気にした様子がない男。

そんな提督の対応に、卯月は嬉しくて元気よく挨拶を返す。

「しかし、ここはあなたみたいに前途のある人間が来る場所ではないのですが」

「へ、なんでぴよん？」

「それはまあ、見たらわかるように墓場ですのて」

「じゃあなんで、て——」

「て?」

「て、テメーはここにいろびよん!」

提督と打ち明けるのが恥ずかしい年頃なのか、それとも卯月という艦娘ゆえの個性なのか。

卯月は素直に提督と呼ぶことができず、テメーと言いなおしてしまふ。

男はそんな卯月の言動を特に気にした様子もなく。

「それはまあ、私この寺の住職ですから」

「へ、ここは廃寺じゃなかったのかびよん？」

「……奇特な方がいましてね、この土地を買い取ってこの寺を再建することになったんですよ。私はもともとこの寺にゆかりがある者だったので、まあ渡りに船だったと言いますか」

少女の見た目である卯月にも、丁寧な言葉で対応する男。

卯月はそれがなぜか嬉しかった。

「な、ならそれを卯月が手伝ってやるびよん！」

「はあ、お気持ちだけで結構です」

「な、なんでだびよん!？」

即答でお断りされて、衝撃を受ける卯月。

しかし冷静に考えれば、男の返事は当然だろう。

なにせ卯月の姿は、どうがんばっても12歳以上には見えない。

「いや、あなたくらいの年頃であれば、学校に行くのが普通かと。勉強の一つもできなければ、将来ろくな人間になれませんよ」

「学校なんて行く必要ないびよん! このうーちゃんが手伝ってやるっていつてるんだからありがたく手伝われるびよん!」

「……行く必要、がないですか」

男は卯月のその言葉に、何か思うところがあつたのか。

少し考え込んだ後、卯月の目をまっすぐ見る。

「お供え用のお菓子がありましてね、食べられますか？」

「た、食べるびよん！」

どこか同情的な表情を浮かべる男の言葉に、卯月は心のそこから同意の返事をする。

御菓子で子供をつるといふのは、世間一般的に見ればとても怪しいことなのだが。

艦娘的には、提督からのお誘いは尻尾を振ってついて行ってしまうものなのである。

男は崩れかけた本殿には危ないから近づかないように言った後、近くに建てられた小さな小屋に卯月を案内した。

小屋には生活に必要な最低限のものしかなかったが、部屋の隅に大きなスピーカーが鎮座しており、それにエレキギターが立てかけられている。

坊主の部屋にエレキギターがあるというちぐはぐ感。

だがその一方でそれだけが、生活感のない部屋に人が住んでいることを感じさせた。

「なんで楽器があるびよん？」

なぜ僧侶の住む場所にギターがあるのか。

当然のように疑問に思った卯月が疑問をぶつける。

「ああ、私の私物です。色々捨てたんですが、これだけが……捨てられませんでした」

男は茶菓子とお茶を用意し、卯月にの前に置く。

そしてギターを手にとって軽快で派手な音を奏で始めた。

演奏されたのは、テンポが速く激しいロックのギターソロ。

出された瞬間に茶菓子をくわえていた卯月は、その音にびつくりしてポロリと茶菓子を口からこぼしてしまう。

男はそれに気がつかず、頭を振りながら夢中で演奏を続ける。

そして一曲弾き終えたあと、固まったままの卯月に気がついた。

我に返った男は、気恥ずかしそうに頭をかく。

「すみません、人前で演奏するのは久しぶりだったもので……」

「す、すげーびょん!! こんな聴いたことねえびょん!」

「ほう、これの良さがわかりますか……だとしたら危ないかもしれませんね」

「へ、なんでびょん?」

「ろくでなしの才能がありますよ」

「ひどいびょん!!」

「はは、冗談ですよ。ではお詫びにもう一曲……」

そう言って再びギターを弾き始める男。

演奏を聴いて「すげーびょん! すげーびょん!」と、手をたたいてはしゃぐ卯月。

その様子に男は口元を緩め、ギターを卯月の前に掲げる。

「君もやってみますか？」

「やるびよん！」

卯月は手渡されたギターを、がむしやらに弾く。

ただの騒音でしかないその演奏を、男は優しい目をして、じつと聴いていた。

夢中になってギターを弾いていた卯月は、途中ハツとなつて顔をあげる。

そして恥ずかしそうにもじもじと身体を動かしながら、口を開く。

「うーちゃん、これからここに……で、てめーのところに来ていいかびよん？」

「……ええ、あなたの気が済むまで、好きにして構いません。あ、いや、ただし来るのは必ず昼でお願いします。夜はいろいろと……危ないですから」

「およ？ わかったびよん！ 来るのは昼にするびよん！」

「ええ、そうしてください。まあせっかくだので、ギターの弾き方くらい覚えましょうか」

「あ、ありがとうだびよん！」

こうして、卯月が学校に居場所がない寂しい子供だと勘違いした男と。

男が提督だと言い出せない卯月の、おかしいな関係が始まった。



「ちよつと卯月。さすがに毎晩毎晩ギターかき鳴らされるとその、いくら防音きいてるからって、周りの部屋から苦情が……」

「うるさいびよん！　そもそも夜うるさいのはてめーの専売特許だろうがびよん！」

「このところ毎晩、寮の音楽室にあったギターを部屋に持ち込んで、ギターをかき鳴らす卯月。」

さすがに苦言を呈する川内だったが、普段の自分の行いを突っ込まれてしまう。

「うぐつ!?　な、ならせめてヘッドフォンしなさいよバーカ！」

「てめーの目は節穴かびよん、このギターはアコギだびよん！　バーカ！」

「そんなの知らないわよバーカバーカ！」

「どうせおめー明日にはこの寮から出ていくんだから、今日ぐらい我慢しろびよん！」

無事大学に合格し、今年から自らの提督が通う大学に、自宅から通うことになった川内。

子供の時から、ちよいちよい入退寮を繰り返していた川内だったが、大学生になった以上、戻ってくることはおそらくもうない。

卯月の言葉で、ルームメイトとして過ごす最後の夜ということを思い出す二人。

決して短くはない時間、苦楽をともにした相手との別れに、柄にもなくしんみりとしてしまう。

「……まあそうなんだけど。あんたそれって提督の影響なの？」

「……うん。提督はギターがとつても上手だぴよん。だからうーちゃんも練習するんだぴよん」

「そう。まあ、これで安心してここから出れるわ。提督がいるなら、あたしがいなくなつて寂しくて泣くなんてことないだろうしよ」

「ふん、せいせいするぴよん。おめーもせいぜい提督とのキャンパスライフ楽しむんだなぴよん」

「あんたもね。まー……あと、さっさと自分が艦娘だつて言ったほうがいいわよ？」

「お、大きなお世話だぴよん！」

雰囲気やを和らげようと、ニヤニヤと笑いながら卯月にアドバイスをする川内。

卯月はその言葉に顔を赤くしながらも、笑いながら言い返す。

翌日、川内は艦娘寮を後にし大学へ、卯月は廃寺に。

お互いの提督が待つ場所に向かって、歩き出した。



「そういえばテメーの教えてくれる曲は、全部同じような曲ばかりだぴよん」

「気質の問題もありますが、私にとつての音楽は、ロック以外ありえませんで」

「へ？　なんでだぴよん？」

「うーん……信じられないかもしれないかもしれませんが、この世の全てはロックで説明がつくんですよ、むしろロックではないものは存在しません」

「え、それはなんでだぴよん？」

「なんというか、この世のなにもかもがロックなのです。もう、そうとしか言いようがないのかもしれない。ロックとはなにか？　と考えると、結論を打倒（ロック）せざるを得ないため永久に結論が出ないんですよ」

「????」

「まずこの世の全ては無常である。無情にして無常である。諸行無常。いわゆる。あとお釈迦様も基本的に『この世は苦界である』みたいなことを言つてらっしゃいます。つまり世の中クソ。そんな世界で存在する意味なんてあるのか？　それにイエスともノーとも答えず『うるせえ』、これがロックだと思いません。つまり人類が逆上に目覚めた瞬間からロックンロールは鳴り始めたんです」

「ぜ、全然意味わかんねーぴよん!」

「そうですね……私もあなたも、まだしばらくはこの世で生きてゆくわけですが。申し上げたようにこの世は苦界です。だというのに人は、生きることを目的とし誕生します。誕生してしまつたがゆえに、生きるに値するかわからない、この世界で生きなければならぬ」

「へ？　世界は生きるに値しないのかびよん？」

「……残念ながら、そう感じられないことのほうが多いのが確かです。現世はとにかくしがらみが多い、気が付けば誰もが何かの鎖でがんじがらめになっています。くそつたれ、馬鹿野郎、消えちまえ、そう叫びたくなることばかり。真剣に生きようとすればするほど、生きることの価値があるなんて答えは出せなくなる。かといつて逃げ出したところで意味もなく。答えのない問題が脳にこびりつき続ける。まさにこの世はクソ、苦界でなくなんであるか……ですがロックはそのどうしようもない問題に、ただただ中指を立てることができるとですよ」

「うーん……やつぱりなんかよくわかんねーびよん！　というかそんな難しいことばかり話してもつまらないびよん……ぶつぶつぶよー！」

「ははは、少し難しかったかもしませんね」

「でもうーちゃんロックが好きだびよん！」

「そうですね……あなたにはよくロックが似合いますよ」

「……あなたじゃねーびよん。うーちゃんの名前は卯月だびよん」

「卯月？ ああ、あなたの名前ですか。そういうえばまだお互いの名前も知りませんでしたね。私は——」

男は名乗ろうとするが、外に人の気配を感じ口を閉じる。

そして「少し待っていてください。決して外に出ないように」と、卯月に言い残して小屋の外に出ていく。

いつもと違う男の様子。

不安になった卯月が窓から少しだけ顔を出して見ると、男が誰かから何かを受け取り、そして何かを渡している様子が見えた。

それを見て、卯月はどこか胸騒ぎのようなものを感じる。

なにか、悪いことが起きるような、そんな予感。

数日後。

卯月のその予感は現実のものとなった。



その日、卯月が廃寺に行くと、警察車両が何台も停車していた。

また、寺の周囲には多数の警官が、やじ馬が入ってこないように封鎖している。「た、たいへんだぴょん！」

卯月は静止する警官を押しわけ、男の、自らの提督がいる小屋に向かつて走る。

小屋の前につくと、男が警官に付き添われて歩いているのが見えた。

男の手には手錠がはめられており、逮捕されたことがうかがえる。

おまけにその場所には艦娘と思われる刑事だけでなく、艦夢守市警察署の署長で、戦艦の艦娘でもある長門の姿もあり。

男がかなり大きな事件にかかわっていることを、思わせた。

全く抵抗する様子がない男の様子に、卯月はとつさに叫ぶ。

「どこに連れてくびょん！　そ、その人は、うーちゃんの提督だぴょん!!」
「ましてー！」

並の力では止められない艦娘である卯月。

だが、そんな卯月の腕を長門がつかむ。

卯月はその手を振り払おうと暴れるが、艦種差や体格差もあり、振りほどくことができな
きない。

「はなして！　はなして！　提督をどこに連れて行くんだぴょん!!　うーちゃんの提督
がなにしたっていうんだぴょん！」

「……あの男は、外地の犯罪組織の協力者だ。確かに元はこの寺の住職の親類で、市籍も持っているようだ。ここを違法な薬物や盗品の保管場所として管理していた証拠が山ほど出てきた以上、見逃すことはできない」

長門は厳しい口調で、卯月に言い聞かせるように言葉が続ける。

「だが、もし本当に君の提督であるなら、裁判で考慮される可能性もあるが……」

「そうたびよん！ その人は、卯月の提督——」

「違います。私はその娘の提督ではありません。例えそうだったとしても、私自身は認めません」

「へ？ な、なに言ってるんだびよん？ うーちゃんが艦娘だって、だ、黙ってたのは悪かったびよん。でもいまからでも遅くないびよん！ このままだと提督は刑務所に行かなきゃいけないびよん！」

「……私は罪人です。若くて愚かだった私は、世界を見ようと飛び出し、そしてどうしようもない人生を歩んできました。落ちて落ちて、堕ちたその先でたらされた蜘蛛の糸。ですがそれもまた罪を重ねることだとわかっていても、もう私にはどうすることもできなかつた……人を利己的にしすぎた世の中を末法と呼ぶのか、末法という言葉が人々を利己的にしたのか……どちらにしろ、私が提督以前に罪人であることに違いはありません。なら罪は償わなければ……」

「じゃあ待つてるびよん！ 卯月、提督が刑務所から出てくるまで待つてるびよん！

それに毎日会いに行くびよん！ うーちゃんまだギター全然上手に弾けないびよん！」

「……もし、私とその娘の提督ならこう言うでしょうね。私のような犯罪者のことは忘れて、二度と目の前に姿を見せるなど」

「で、でも提督は、提督はいつでも会いに来ていいって、好きにしていって！ 言ってくれたびよん!!」

「……嘘ですよ、全て？です」

突き放すような男の言葉を聞いて、固まる卯月。

男はそんな卯月を一瞥し、背を向ける。

「もう一度言います。二度と、二度と私の前に姿を見せないでください」

「……そ、それは、命令なのかびよん？」

「はい、そうです」

提督の命令。

艦娘にとつて、もつとも守るべき言葉。

その事実を知ってか知らずか、男ははつきりとそう断言した。

卯月は限界まで目を見開き、提督を見る。

背を向けていてわからないが、わかった。

提督が、泣いているのが、わかった。

「……馬鹿野郎だぴよん、提督は、馬鹿野郎だぴよん……わかつたぴよん、うーちゃんは、うーちゃんは提督の言うことをしつかり聞く優秀な艦娘だから、ちゃんと、ちゃんと命令を、め、命令、聞くんだぴよん……だ、だから提督とうーちゃんは……これで……お別れぴよん……」

「……すみませんでした、卯月さん。お詫びと言つては何ですが、あの小屋にあつたギターはあげます。よかつたら使つてやつてください」

卯月はぼろぼろと涙を流しながら、その言葉にうなずいた。



提督と別れた日を境に、卯月は寮の部屋からほとんど出てこなくなつた。

部屋からは朝から晩まで、一日中カシャカシャと弦を弾く音が漏れ。ときどきそれに乗せて、卯月が叫ぶ声が聞こえてくる。

事情を知る者たちは、何も言わない。

自分たちができるのは、悲しみに暮れる卯月をそつとしておくことだけだと、知つていたから。

そして、半年ほどがたったある日。

卯月は、まるで難破した船から命からがら脱出し、何ヶ月も海を漂流して奇跡の生還を遂げたかのように、変わり果てた姿で部屋から出てきた。

映すものすべてを輝かせていたかのような純真な瞳は、まるで朽ちた骸骨の暗い眼窩のように落ち窪み、溢れるようだった無邪気さは、死に神に取り憑かれたかのような陰気さに取って代わられていた。

かつての明るい輝きはそこにはない。

だが鬼気迫る決意のようなものが、卯月を幼い少女の姿から、強烈なカリスマを放つなにかに変えていた。



「で、うちのロビーで暴れてた馬鹿ってそいつ？」

「はい、何でも一番偉いやつを出せと騒いでたみたいで……」

「まあ普通の警備員に、艦娘の相手しろってのは酷な話よね。ありがと羽黒、あんたがいて助かったわ」

「いえ……」

艦夢守市で最も有名な芸能プロダクション『Big Slope』

その会社のロビーで暴れていた卯月を、たまたま通りかかった『Big Slope』所属の重巡洋艦の艦娘羽黒・登場『絵描き』と『重巡：足柄』『無職男』と『駆逐艦：嵐』等が取り押さえた。

だが、取り押さえたのが艦娘の卯月だったため、判断に困った羽黒は、社長である五十鈴・登場『意識高い男』と『重巡：鳥海』のもとに連れてくることにしたのだ。

「で、なんであんたは暴れたのかしら？」

「……提督がうーちゃんにはロックが似合うって言ってくれたから、それを証明するためびよん」

羽黒に首根っこをつかまれ、ボロボロになった卯月がぼそりとつぶやく。

常人であれば、平静を失いそうになるような、ぞつとするような重い声色。

もつとも五十鈴も羽黒も、その程度で思考をかき乱されるほど弱い艦娘ではない。

ただ二人は『提督に』の部分にピクリと反応した。

「つまりなに？ あんたうちのプロダクションに所属したいってこと？」

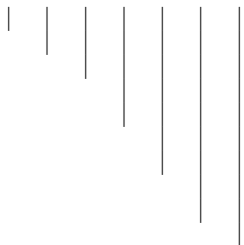
「所属してやるびよん、だからとつとと離すびよん」

「随分と自信があるようね？」

「うーちゃん作詞作曲のロックなら、このくそつたれな世界に中指突き立てられるびよ

ん

「……ふーん、おもしろそうじゃない。下の階のスタジオで一回だけ聴いてあげるから、やってみなさい」



「ひどい演奏ね……リズムキープができてない。あとサビ前に入れてる弦飛びだけどスベってるわよ。覚えたてがたまにやるんだけど、それって私は技術ないからこれで隠そうとしてるんですーって叫んでるようなもんなの。そもそもっと基礎的なところ、フォームが乱れてピッキングもフィンガリングもガタガタじゃない。そんなんでよくあんな大口叩けたもんね」

演奏を終えた卯月を横目に、五十鈴は煙草に火をつけながら、そうバツサリと口にした。

「まだまだあるけど、なにより自分で作った曲のフレーズくらいはしっかり覚えなさい。頭にしっかり入ってないフレーズひこうなんて、あんたには十年早いわよ馬鹿」

己の実力のなさを淡々と指摘するその言葉に、卯月は唇をかみしめる。

「でもまあ、歌詞は悪くないわね。ギリギリ合格」

「びよん?」

五十鈴は煙草の灰を落とし、試すような目つきで卯月を見る。

「うちで面倒見てあげるってことよ。ただし、デビューさせるかはまだ保留。最低でも半年はみっちりレッスン、曲もあと三十曲は作りなさい。それができたら、チャンスもあげてもいい。どうする?」

「……やってやるびよん」

手が壊れそうなほどに強くこぶしを握りながら、返事をする卯月。その様子を見て、五十鈴は意地の悪そうな微笑を浮かべた。



「はじめまして、Big Slopeメイド長の香取です。心配しないで……。色々と優しく、指導させて頂きますから。うふふふふふふ」

「うるせえびよん、その眼鏡割ってやるぴよギャフ!!」

「はい、では卯月さんにはまず、最低限の礼儀から覚えて頂きますね」

「……なんでうーちゃんが、メイド服なんて着なきやいけないんだびよん」

「ふふふ、何故なんて疑問は、まずきちんとお茶を運べてから言いましょうね?」

「……ふつふくぶ」

「やりなおしね。そこは変にいじらなくていい、対象の美しさをそのまま表現するストレートな〃生〃感を出しなさい。いまのままだと、一般人の感性からしたら『死ぬほど気に食わない』でしかないわ」

「オメー、社長なのになんでうーちゃんのレッスンを担当してるんだびよん? 暇なのか

びよん?」

「五十鈴が直々に見てあげてるっていうのに、あんた他に言う事無いの? ……まあ、五

十鈴は艦種的に耳がいいから、下手なコーチよりの確な事がいえるのよ。いいから、言われたとおりのやりなさい」

「……………うふふふへへへへ」

「じゃあ卯月さん、今日はダンスのレッスンをしましょうか」

「アツ、ハイ」

「えーつと、あの、五十鈴さんや香取さんには反抗的なのに、なぜ私にはそんなにかしまつてるんでしょうか……」

「イエ、そんなことありませんぴよ、ぴよん。は、羽黒さんの気のせいだぴよ、気のせいです」

「まあ、真面目にやってくれるならいいんですけど。……それと、レッスンは終わったあとお時間があればその、卯月さんの提督さんのことを聞かせて頂けますか？」

「……それは、命令ですか、ぴよん」

「……いえ、お願いです」

「面白い話じゃないぴよん」

「それでも、提督にまだ会えていない艦娘からすれば、どんな話より価値がある話ですから」

「ぴよん……」

そうして卯月にとってはあつという間であり。

とても長くも感じる時間が過ぎてゆく。

作詞作曲、レッスン、演奏演奏演奏。

狂ったように濃密な音の海で溺れ続けた。

それでも、提督に届けたい。

提督のギターで紡がれるロックを届けたい。

その一心で、卯月はがむしゃらに走り続けた。



そうして時は流れ、卯月が提督と出会って丁度一年後。

つまりは四月一日。

それが卯月がデビューできるかを、テストする日に決まった。

あなたにはお似合いの日でしょと、気だるげに告げた五十鈴に、卯月は中指を突き立てる。

それを見て、愉快そうに笑う五十鈴。

五十鈴が指定した場所は、百人も入れればいっぱいになるような、汚くて小さなライブハウス。

おまけに集まったのは、お世辞にも上品とは言えないごろつきのような客ばかり。卯月がステージに立つと、容赦のないブーイングやヤジが飛んでくる。しかし、どんなにボロクソに言われようとも、卯月は揺るがない。むしろ据わった目つきで客をぐつとにらみつけ……そして叫んだ。

「うるせえびょん!!」

マイクを通していないにもかかわらず、箱全体が揺れるような大声。あつけにとられるろくでなしの客たちが我に返るより早く、卯月の演奏が始まる。

誰かの嘆く声がある

どうやらこの世はクソらしい

全くもってその通り

おしやか様のお墨付き

吐き気で涙がとまらない

ただど涙を流すくらいなら

ただど涙で海をみたすなら

声で世界をみたしてやるぴよん！
あたしの声で染めてやるぴよん！

その小さな体のどこにそんな力が埋まっていたのかと、疑いたくなるようなヘビーな演奏。

ピックを何枚も砕きながら紡がれる、一曲目の激しいギターソロの時点で、ライブハウスにいた全員が総立ちになった。

さらに、二曲目の『戦艦騙し』が始まるころには、ほぼ酸欠ギグの様相を呈しており、ライブハウスにいた客は残らず、卯月ことうーぴよん（芸名）の親衛隊になることを心に誓うほどに、そのすべてに魅了されていた。

小さな体に見合わないヘビーな演奏のギャップに、心をわしづかみにするような曲。なにより相手が誰であろうと、なんであろうとも打倒（ロック）してやるという意志が、痛いほどに伝わってくる内容の詩。

そのせいも、ろくでなしであるほどに、うーぴよんの歌は彼らの心に響いた。

そしてこの伝説のデビューライブを始まりに。

うーぴよんは、ロックスターの道を駆け上っていくことになる。

翌年の四月一日に行われたライブは、デビュー時の会場より一桁収容人数が多かった。

さらにその次の年の四月一日は、もう一桁、翌年には更に一桁。そうしていつの間にか、四月一日は卯月にとつて嘘をつく日ではなくなり。ただ踏みこえるだけの、階段と変わらない日でしかなかった。



提督、聴こえてるかぴよん？

うーちゃんの声、聴こえてるかぴよん？

うーちゃんの曲、聴こえてるかぴよん？

うーちゃんの歌、聴こえてるかぴよん？

提督のギターの音、聴いてくれたかぴよん？

うーちゃん、ちゃんと演奏できてるかぴよん？

提督が似合ってるって、言ってくれたロックだぴよん。

うーちゃん、あの日からずっとずっと、ずーっと、考えたぴよん。

なんで提督が、うーちゃんにあんな命令したのか。

なんで提督は、うーちゃんに嘘をついたのか。

提督は、提督は、提督はって何度も。

提督のことばかり考えたぴよん。

わかったことも、わからなかったことも、沢山あるぴよん。

わかったことは、確かにこの世はクソだってことだぴよん。

少なくとも、うーちゃんと提督にとつては、クソだぴよん。

わからないのは、どうして提督はあのととき、卯月を使わなかったんだぴよん？

うーちゃんが艦娘だつてわかったなら。

自分の命令を聞く艦娘だつて、理解したなら。

もつといい命令が、あつたんじやないのかぴよん？

提督が命令してくれたら、うーちゃんなんでもしたと思うぴよん。

なのに、どうしてうーちゃんを遠ざけたんだぴよん？

いつか、この苦界から解放されたなら。

提督はその理由を、教えてくれるかぴよん？

……うんうん。

やっぱり、教えてくれなくてもいいぴよん。

全部忘れていいぴよん。

だから、だから……



止まることなく溢れ出てくるなにかを吐き出すように、卯月はひたすら歌い続けた。歌い続けることだけが、今の卯月が提督のためにできる、唯一のことだと信じて。提督に貰ったギターで。

提督に教わった弦捌きで。

自分が奏でるロックを、塀の中にいる提督に届け続けるために歌い続けた。

歌って、歌って、歌い続け。

うーぴよんと呼ばれた彼女はその後、ついにはロック界の頂点に上り詰めた。

だがその一方で、艦娘としての卯月は『二度と姿を見せるな』と、そう告げた提督の命令を生涯守り続け。

——文字通り二度と、自らの提督と再び会うことはなかった。

『嘘つき』と『駆逐艦：卯月』
おわり

「……なあぐんで、うつそぴよーん！」

「アハハハハハ!! か、香取さん見て見て! あの馬鹿、マジでロツク歌ってるwww
アハハハハハ!! 刑務所の慰問ライブでロツクって、本物の監獄ロツクよwww お、
おなか痛いwww」

「痛いのは私やマネージャーの頭ですよ五十鈴さん。これ、どう收拾つけるんですか
……」

「ヒーヒー……どうしようかしらねホント……見て! あのへんの囚人全員、泡吹きな

から頭振ってるwww みんな坊主頭だから、まさしく転がる岩みたいwww アハハハ!!」

「くれぐれもロツクは禁止! 塀の中にいる提督を待ち続ける艦娘の、切ない心情を綴ったブルースなら……って条件で許された刑務所の慰問ライブだと、卯月さんには何回も確認したはずなんですけど。……まんまと騙されてしまいましたね」

「ヒツ、ヒツ、フー……そういえば今日は四月一日だったわね、ここ数年おとなしかったからすっかり油断してたわ。あつ、ほら、あそこでボロボロ泣きながら頭振ってるあの男、あれが卯月の提督らしいわよ……ぶふお!? か、看守に所長までwww頭振ってるwww もうwめwちwやwくwちwやw アハ、アハハハハ!!」

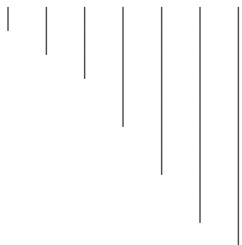
「変なツボ入ってますね五十鈴さん……まったく。一年に一度、嘘が許される日だからって、約束を反故にしたり、命令を破ったりしていい日というわけではないのですが……。どんな苦情が来るか、いや、苦情で済むでしょうか……」

「ハアハア……香取さん、そういうときに使える魔法の言葉があるの知ってる?」

「……なんですか?」

「ふふふ、アレよ」

「うるせえびよん!!」



あさに鏡を見てがっかりした
まだ自分がここにいることに

いつその日が来るのかと

ずっとずっと待っている

でも飽きたから、もうやめた

ずっと楽しみにしてたけど

飽きてきたからもうやめた

それに今回あえたからって

次回があるかはわからない

今日ならちようど都合がいい

錨をあげて、汽笛も鳴らして

世界を憎む、あの嘘つきに

世界を恨む、あの嘘つきに

世界を嫌う、あの嘘つきに

うづきの海ライラを見せに行くぴよん

うづきの海セカイを見せてやるぴよん

『意識高い男』と『重巡：摩耶』

初めて提督をみつけた日のことを思い出す。

何か、必死に辛いことを我慢して耐えているような顔のひと。

まやにはわかった。

ああ、このひとは、きっと。

——笑わないひとなのだ。

一目で、すぐにわかってしまった。

どうにかしてやりたい、笑わせてやりたい。

そう思つて、いてもたつてもいられず、まやは自分にとって大切な今日のおやつである飴をあげることにした。

「あめたべるか？」

少し驚いた顔をした提督。

提督はまやの母親に確認を取った後、跪き、まやの手を包み込んで感謝を述べ

笑った。

どこか、作り物めいた笑顔だったが、確かに提督は笑ってくれた。まやは、この笑顔を守ってあげたいと、そう幼いながらも心に決めたのだった。

『意識高いロリコン』と『重巡：摩耶』

「いや、あなたはわかっていない。お言葉ですが私はしがない平社員です。あなたがおっしゃっていたように、とてもお嬢さんを幸せにできるような立場でも収入でも、それこそ結婚式すらまともにしてあげられません。そもそもそれ以前に、自分で言うのも何ですが私はまっとうな人間じゃない。だというのにどうして——」

「君のような素晴らしい人格者であるなら、そんなものは瑣末なことよ！ それになーに水を臭い、儂のことはお義父さんと呼んでくれたまえ鉄雄くん！」

(※意識高い男のフルネームは前島 鉄雄)

あなたが駆逐艦の艦娘の父であったなら、神の名を呼ぶ尊さでそう呼ばせて頂く。しかし残念ながら、あなたは私の神（駆逐艦の父）ではない。

補足すると今はメイド喫茶『Big Slope』・参照『意識高い男』と『重巡：鳥海』を訪れ、鳥海と出会った日の翌々日。

先日、母からの電話で、なぜか私が結婚する事を知らされた。

だが私が結婚するというの情報も、なぜ私が知らなかったのか、これがわからない。

「それに心配はいらない。結婚式については予算も準備も、全て任せておきなさい。我が本多家※この話に登場している鳥海の家名、艦夢守市有数の名家の総力を挙げて盛大に執り行おうじゃないか！」

心配しませんが？

「ふふふ、気が早いとは思ったが、実は既にこの街で一番大きい式場を押さえてある！」

【検索】『式場キャンセル料 最大級 相場』（カチャカチャターン！）

思考が乱れた、ともかくだ。

「……ほ、本多さん。とにかく話が急すぎます。ここは一先ず冷静になつて——」

「君も男なら覚悟を決めたまえ。それに我が娘に何か不満でも？」

本多のご老体の後ろに立つ鳥海が、不安そうな表情を浮かべる。

え、なに、私何かしただろうか？

そもそもこの老人、以前と言っていることが天と地程も違うじやないか。

何諦めてるんですか、老人は頭が固いのが取り柄でしょうに。

もつとがんばってくださいよ、あきらめんなよ。

しかし何を言っても無駄な気がして、言葉が出てこない。

こめかみに手を当てて、何かいい打開策がないか必死に考える。

「本多さん、ご存じないかも知れませんが、私には他に艦娘が——」

「うむ、知っておる」

ここで私には将来を誓い合つた女性が……と、言えれば楽だったのだが。

極めて残念な事に、未だ私と人生を共にしてもいいと言つてくれる天使は見つかつて

おらず、一先ず高雄や愛宕を引き合いに出そうとしたがどうやら知っていたようだ。

事前調査は完璧と言うことだろうか。

「だったらー！」

「……性分なのだよ、困ったことに」

目を伏せ、重い空気を纏って話し始めるご老体。

「誰がそうしろというわけではない。中には儂にはそれがお似合いだというような親切な輩もいるがね。主に儂を嫌う連中だが。確かに儂は以前まで自分の中の正しさを押し通すだけの意固地な人間だった」

唐突に始まる懺悔。

あと、意固地なのは今もだと思えますよ。

「ああ、そう。今もかも知れないがね」

……顔に出ているのだろうか？

私を見て、皺だらけの顔をゆがめるご老体。

それはいつか見た怒り狂った短気な老人のものではない。

人生の酸いも甘いもを噛み分けてきた、老練な男の顔だ。

これが本来の彼なのだろうか。

その肩書きに恥じぬ重厚なプレッシャーを前に、思わず唾を呑み込んでしまう。

「想いというのは中々届かないものだ、届かぬ故に人はすれ違い涙を流す」

その言葉には100%同意するが、同意できない。

「それに高雄様と愛宕様のことなら心配ない。実はもう話を通しておいた」

「はあ……それはどういう？」

なんだろう、あの二人には私から手を引くよう交渉してくれたのだろうか？

確かに数だけ見ればあの二人より、鳥海一人を相手にするほうが楽な可能性があるが。

「お二人には事情を説明して、娘と一緒に結婚式をあげてはどうかと提案してね」

「は？」

「難しいかとも思ったんだが……快く承諾いただいた！」

私の承諾は
??????

「そ、その……鳥海さんはそれでよろしいのでしょうか？」

「はい！ 姉さんたちと一緒に結婚式をあげられるなんて、私も嬉しいです！」

そのあと、持てる力を全て使ってなんとかできないものかと抵抗するも、歴戦の銀行員である鳥海の父親相手に交渉で挑むのは無謀だったらしく。

気がつけば次回の打ち合わせでは、結婚式の参加者リスト（暫定）を持つてくることが決まっていた。

『まえしままえしま！ 今日は何にして遊ぶ？』

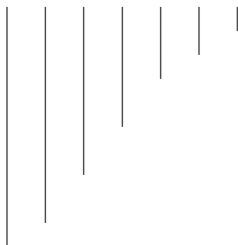
『まえしまー！ めしくいにくいこうぜー！』

『まえしま、あんまりむりすんなよ！』

『まえしま、げんきないな、あめたべるか？』

『しようがないなまえしまは、あんしんしろって』

『このまやさまがずっと一緒にいてやるからさ！』



っは!?

あまりにも直視出来ない問題を前に、気付けばここ最近の幸せだった時間(ごく一部)の記憶で脳内を満たしてしまっていた。

ここのところ、こうして現実逃避する時間が増えてしまっている。

非常にまずい、解決策が何一つ思いつかないまま、時間だけが過ぎてく。

そう、解決策。

なぜなら私は、自らの性癖の都合で結婚したくない。

ゆえに、なぜか結婚するはめになったこの事態を乗り越えるための解決策が必要だ。だが、それが全く思いつかない。

これまで数々の試練を乗り越えてきたつもりだった。

だが、今回のものはそれが霞むほどに困難だ。

というか本多のご老人による、好意と善意による搦め手の波状攻撃が強すぎる。

今や会社では、私と高雄と部長（愛宕）の結婚式の話題で持ちきりだし。

ほぼ毎日のように会社に会社の送り迎えに現れる、メイド服姿の鳥海のこともあるが、内外に私が高雄型の提督だと周知されるようになってしまっていた。

この状況で「性癖の関係で彼女たちとは結婚できません」と言えるほど、私は社会的強者ではない。

しかし……高雄に愛宕に鳥海、そしていずれ艦娘変わりを終わるであろう摩耶。

重巡洋艦の艦娘である彼女たち。

別に私は彼女たちが嫌いなわけではない。

むしろ能力や性格的には好感さえ感じている。

だが、愛しているかと聞かれると、うなずけない。

なぜなら私はロリコン（児童性愛者）だからだ。

そして、私はその生き方を貫くため、一つの夢を持った。

夢、それは少女の姿のまま老いることのない、駆逐艦の艦娘と結ばれること。だがその為にはまず、駆逐艦の提督適性者でなければならぬ。

そして私は恐らく、重巡洋艦である高雄型の提督だ。

ただでさえ少ない提督適性者の中で、さらに希少な艦型適性を持つ提督。

このうえ、更になにかしらの駆逐艦の適性を持つてる可能性は、ゼロに近い。

だが、それでも私は――

「おい、このクソ暑い中でなにやってんだよ……」

「え、は？ ……先輩？」

苦悩に満ちた現状をどうすべきか、誰にも見つからない公園のベンチで、考えを巡らせていたところ。

先輩が突然現れ、飲み物を差し出してくれた。

それと同時に、座る前は日陰だった場所が、陽のあたる位置になっていたことに気がつく。

さらに飲み物を差し出されて、自分がどれだけ汗を流していたかを自覚する。

夏場だというのに、随分と長時間日光に当たり続けていたらしい

どうりで思考がまとまらないわけだ……。

差し出された飲み物をありがたく受け取り、一気に飲み込む。

冷たいスポーツドリンクが、ゆだっていた身体に染み渡り、一息つくことができた。

私と同じく、色々な苦悩を抱えているらしき先輩と話をする。

どうやら、未だ職が決まらず苦勞しているらしい。

ふと、こんな暑い夏の日、卒業旅行にでかけたあの頃を思い出す。

いつそのこと、もうなにもかもを投げ捨てて、先輩と二人でどこか遠いところに旅立つのもいいかもしれない。

もしかすると、またあの時のようなステキな出会いがあるかもしれない。

そんなことを考えていたその時。

「おーい谷風!! こっちだこっち!!」

ん? 谷風?

聞き覚えのある艦娘の名前を口にする先輩。

呼びかけた方を見ると、凄い勢いで走ってくる少女の姿。

あ、本物の谷風・参照『無職男』と『駆逐艦：谷風』だ。(艦娘識別検定1級)

「おーまーたーせー……提督ううう!!」

嬉しくてしょうがないといわんばかりに、先輩に抱きつく少女。

無駄に魂レベルで確信してしまう、先輩は駆逐艦谷風の提督だと。

「ゲホゲホ……悪いが前島。そんなわけで、ツレが来たからもう行くわ。自分で言ってる情けないが、こっちは大体暇してるからな。その追加の参加者の話もあるし、都合ついたらまたいつでも連絡くれ」

「え?? は?? え?? あ?? え??」

(※魂レベルで確信したからといって、頭で理解出来たとは言っていない)

先輩が、駆逐艦の艦娘である『谷風』の提督?

「ああくそ、なんでお前ら姉妹は頭に上りたがる!」

「えへへ、いいじゃないのさ!」

は? お前ら姉妹?

駆逐艦『谷風』の姉妹艦?

それはつまり……陽炎型の駆逐艦たちは、先輩の頭に上りたがるということ……か?



あれから一晩、嫉妬と祝福と怨嗟と欲望をグツグツと脳内で煮詰めながら考えてみたのだが。

もしかして、これはチャンスなのではなからうかと、ひとまず結論づけることにした。
 (※結婚の問題はひとまず考えないものとする)

私は確かに駆逐艦の艦娘と結ばれたい。

そんな夢を掲げている。

なぜそんな夢を掲げているかというと、それが私の性癖であり信仰だからだ。

そして信仰の果てに、私は幸せになりたい。

だがその一方で、私は少女たちの幸せも願っている。

つまり少女たちの幸せが私の幸せであるなら、それを間近でずっと見ていられた場合。

高確率で私もまた幸せであるということになるだろう。

よって駆逐艦の艦娘の『提督』と家族になれば。

それは駆逐艦と間接的に結ばれるということだ！ (証明終了)

……ちよつと無理がある気がしなくもない。

だが、目の前にぶら下がった蜘蛛の糸。

難しいことは、それを掴んでから考えよう。

「……なにやってるんだ？」

「いえ、放さないようにと」

目の前で抱きしめ合っているいちやつく二人・参照『無職男』と『駆逐艦：野分』も幸せは掴んで放すなど、そう言ってますし。

ええ、このチャンスは、絶対手放さない……（漆黒の決意）

というのも、たまたま警察に呼び出されて訪れた警察署。

そこでまたしても私は、駆逐艦の少女と仲むつまじく触れあう先輩をみつけてしまったのだ。

そして谷風の次は、野分ですか……。

これでほぼ間違いなく、先輩が陽炎型駆逐艦の提督だということが判明した。

陽炎型駆逐艦の数は19隻。

ああ先輩、やはりあなたは私の家族になってもらわなければ。

ただ恐らく会話の内容的に、彼女たちはまだ、自分が艦娘だと先輩に伝えていない様子。

なにか理由があつてのことだろうから、そこに触れるのはよしておこう。

むしろ伝えていない状況だからこそ、先輩を説得する理由が増える。

なあと、善意ですよ、善意。（ニキヤア）

しかし……傍目から見ても、駆逐艦の少女である野分は、とても幸せそうである。まったくもつてうらやましい、ほんと、代わって欲しい。

やがて呼び出しの放送がかかり、野分さんは先輩から離れてどこかに去って行く。さて、ここからが正念場だ。

大胆かつ慎重に物事を進め、先輩を身内に引き入れる。

その為には第一声は、なるべく爽やかで違和感のないような挨拶を——
「うらやましいですね」（闇を煮詰めたかのような怨嗟に満ちた声）

「ツ!？」

しまった、つい本音が。



その後、お互いの用事を終えて警察署をあとにする。

幸い先輩は午後からの予定がなかったらしく、予約してあった行きつけの店で食事をすることにした。

以前一緒に行こうと思っていたのだが、あの時はトラブルが起きたため行けなかったのだが。

今日はこれからの二人の未来について、ジツクリと話し合うため、是が非でも一緒にして貰わなければ。

などと、ロリコンとして当然の欲求にしたがって思考を巡らせていると、前方を走っていたバスから煙が上がっているのが見えた。

「……おい、あのバスなんか変じゃないか?」

「エンジントラブルでしょうか? 後ろのエンジン部分から煙が上がってますが……」
が、その瞬間。

バスは横転し、事故を起こす。

火花をあげ、道路を滑りながら停止するバス。

私たちは慌てて車を停めて、二次災害を防ぐための処置を行うために動く。

後続車の運転手に警察への連絡を頼み、先輩の元に戻ると、かなり深刻な表情でバスの中を見つめていた。

なんだろうかと、私もバスの中を覗いてみる。

そこには、児童と思われる子供たちの姿。

……不味い。

一刻も早く救助を行わないと、手遅れになる。

だが、素人が下手に行えば、何かあったときに責任が生じるかもしれない。

大きな事故が起これば、それだけ人や社会は、沢山の誰かに償わせようとする。

難しい状況だ、立ち回り次第では破滅しかねない。

いや、責任だけではない。

何よりもし自分が余計なことをしてしまったが故に、子供達の命が失われてしまったのならば……。

そんな最悪の未来が頭をよぎり、それどころではないというのに、どうしてか足がすくんでしまう。

昔なら、こんな事は考えなかったというのに。

いつのまに、私はこんなに弱くなってしまったのだろうか？

「前島、車こっちに回してこい。ジャッキと手持ちの工具でこじ開けられないようなら、最悪、俺が車をぶつけてでもブチ破る」

そんな弱気になった私の心に響く、先輩の言葉。

「……いいんですか先輩、万が一があれば破滅しますよ？」

心にともる光、その興奮を抑えるように、先輩に問いかける。

「そうだな、だがこの状況でなにもしないわけにもいかん。俺も人生棒に振りたいわけじゃないが、そこは譲れないところなんだな」

「そうですか」

譲れない。

まるでこの人の生き様を体現するかのような言葉だ。

「それに人生の破滅は既に経験済みだ。二度目が来たからどうやってどうつてことないとは言わんが……まあ、慣れてる。お前に迷惑……は、かけちまうが、責任は全部俺がとるから安心しろ」

先輩は、あの頃と変わらない。

社会、正義、法律、道徳といった大多数の誰かの価値観ではなく。

いつだって己の中の信念を軸に、成すべき事をなす。

信念は、恐怖や愛と同じく受け入れるしかないものだ。

この世の仕組みを理解し、受け入れるように。

信念は人生の航路を決定付ける。

「……馬鹿言わないでください、当然私も一緒ですよ。ここで死力を尽くし、少女らの命を背負えないようなら児童性愛者の名折れです」

なら私も、自身の信念に従おう。

いつの間にか弱り切っていたはずの心は、かつての頑強さを取り戻していた。

「先輩！ その子らで最後ですか!？」

「ゲボフォゲホツ……いや、あと一人残ってるッ！ 足が引つかかって引つ張り出せん！」

救助を開始してしばらく。

近くにいた人たちが、駆けつけた救急隊の力もあつて、状況は悪くない。

これなら犠牲を出さずにすむかもしれない。

そう思っていた矢先、最後の最後で困難が立ちふさがる。

既にバスは炎に包まれており、このタイミングで飛び込むのは自殺行為。

「わかりました、ジャツキを使いましょう」

「よし、もつてこい！」

だが、ここで迷っている時間は無い。

ジャツキを持って、先輩と共に炎の中に飛び込む。

バスの中は炎と煙で充満している。

口が開けないため、先輩が指さす。

みると、その先には先輩のシャツで口元を押さえた少年がうずくまっていた。幸いまだ炎は少年に届いていないが、時間の問題だ。

ジャツキを隙間に差し込み、バスの座席の隙間を空けるが、中々引きずり出せない。

もう炎はすぐそこまできていて、このままでは少年が危ない。

そして、先輩も。

私は炎と二人の間に身体を移動させる。

先輩は一瞬私を見て、軽く頷いた。

文字通り背中が焼ける。

ひどい痛みだが、ここでどくわけにもいかない。

「ぐうらあ!!」

先輩が力づくで少年を引っ張り出し、そのまま抱えて外に向かう。

私は酸欠と痛みで飛びそうな意識をなんとか持たせながら、それに続いた。

昔を思い出す。

先輩の背中を追いかけ。

そして隣に並び、何度も一緒に駆け抜けた日々を。

そんな記憶が、脳裏を駆け抜けてゆく。

バスから飛び出し、私は崩れ落ちる。

どうやらここまでのようだ。

薄れゆく意識の中。

誰かに担ぎ上げられるのがわかった。

何となく先輩なんだろうかと、妙な確信があった。

「はやく救急車に乗せろ!! 最優先だ!!」

「聞こえるか!? あんたらが助けた児童たちはみんな無事だぞ!!」

「バイタル低下!! 意識ありません!!」

「エピネフリンは1mg注射! 除細動器急げ!」

「頼む! この人たちを死なせないでくれ!!」

「わかってる!! わかってるが……こっちはもう……」

……ああ。

子供たちはみんな無事そうですね。

よかつ——

私はロリコンだ。

このような性癖になってしまったのには理由がある。

私は大人の姿をした女性に恐怖に近い感情を持ってしまう。

それはつまり、大人の女性を愛することができない人間だということ。

私はロリコンだ。

そうでなければならぬ。

なぜならそうでなければ、自分を愛さない人間と結ばれる誰かが生まれてしまうか

ら。

だから私は、駆逐艦の艦娘と結ばれたい。
そうであれば、誰も不幸にせずに住む。

私はロリコンだ。

自らが夢と定めたそれが、歪んでいるというのは自覚している。

だが、そのようなありようになってしまったことをいまは受け入れている。
あの日、自分がそういう性癖になったことは運命なのだ。

きつと私が将来愛する誰かを、愛することができるようになるようにと。
そう教えてくれた彼女のおかげで。

私はロリコンだ。

今日、私は私の愛する存在を救うために死力を尽くした。

それは私がそういう存在でなければ、救えなかつた命だ。

そして、私の命で私の愛する者を救えたというのなら。

これ以上幸せなことはないだろう。

私はロリコンで……よかった。

私は誰かと結ばれるために歪んだのではなく。

誰かを救う為に、こうなったのだと。

いや、私は歪んだのではない。

これこそが正しい形だったと、証明出来たのだから。

ああ、満足だ——

……ほんの僅かに残っていた意識が、沈む。

深い深い暗闇に落ちてゆくかのようなこの感覚。

何度か経験したことがある。

恐らく、私はもうすぐ死ぬ。

それは冷たく、暗い海の底に沈んでゆくようで。

やはり何度経験しても慣れない。

だが、これでいい。

これで愛してもらえない存在と、一緒になる艦娘を解放することができる。
だから、これでいいのだろう。

『……しま!! ……まえ……!!』

はて、誰だろう？

誰かが大声で私を呼んでいる。

泣きながら、大きな声で。

確認しようとしたが、やはり意識が落ちるのを止められない。

まるで、これは夢だとわかっていても、起きられないような、そんな感覚。
どれだけ意識を覚醒させようとしても、どうにもうまくいかない、感覚。

どうか泣かないでくださいと、伝えたい。

私は私の信じる道を、最期まで貫けたのだから。

私の役目はもう終わりました。

だからこのまま眠らせてください。

『……しま!! ……まえしま!!』

困ったな。

どんな意識はなくなるのに。

だれかのこえだけは、しっかりとときこえる。

どうやら、その声の少女は、わたしにしないでほしくないらしい。

わたしは、あなたをかなしませたくないのに。

このままねむってしまったら、あなたはかなしんでしまう。

困ったな、こまったな。

『まや、いいこにするから!!』

いいこにするのか、すでにいいこなのに。

これいじょういいこになってしまったらどうなるのか。

しかし、しようじよをかなしませてしまうのは、とてもいけないことだ。

なんとかならないかと、からだにきいてみる。

からださん、からださん、なんとかありませんか？

『しんじややだ！ しんじややだあああ！』

……なんとかありませんか？

じゃ、ねえんだよ。

お前がなんとかしろ。

お前は、あのこの提督だろうが。
それ以前に。

ガキを悲しませて、涙を流させて。

なーにがロリコンだ。

これからはオッサン好きの看板でも掲げる馬鹿たれ。

……あれ、せんばい？

しんがいですね、わたしは、わたしは？

ああ、そうか……わたしは——

『おねがいでいとく!! めをさましてええええ!!』

私は——ロリコン「だッ!!」

「「「「???」」」

!!!???

足りない肉体部分を精神で動かし、立ち上がる。

その勢いで、なにかの液体が辺りに飛びちった。

どうやら艦連軍の人体用高速修復液に浸されていたようだ。周りをぐるりと見渡す。

医療関係者だけでなく、母さん、高雄、愛宕、鳥海。

そして……まや。

皆、泣きはらしていたのか、眼を赤くしている。

ああ、随分と心配をかけてしまったようだ。

さすがに申訳ないという感情が湧くが、それよりまずは……。

「おはようございませす、まやさん」

「……ま、まえしま？」

「はいまやさん。すみませせん、少々寝坊が過ぎました」

「……まえしまあああん!! うえ、ほ、ほんとにまえしま？」

「はい、まえしまですよまやさん。どうか泣かないでください、大丈夫、ここにいますよ」
涙を流しながら、両手を私の方に伸ばすまや。

優しく彼女を抱き上げ、抱きしめる。

「死なないで！ ていどぐううう！ まや、おいてかないでえええ!!」

「はい、提督ですよ。私はあなたの提督です、どこにもいったりはしません、一人になんてさせません……大丈夫です。あなたがそう願ってくれるなら、必ず……生きて……みせ……ます……か……ら……」

そう、何があるうと、あなたがいてくれるなら、私は生きられる。

どこにも行ったりしません、あなたの側にずっと一緒に――

「ば、バイタルが安定してます」

「……信じられん」



まさか愛が奇跡を起こす瞬間にまた立ち会えるとは。

一週間後、死の淵から舞い戻ったあと、また意識を失い。

再び目を覚ました私に向けて、軍医はそう口にした。

奇跡、それは科学では証明出来ない現象を指す言葉。

どうやら私は、文字通り現代医学的に見てあり得ない状態から、息を吹き返したらし

い。

しかしながら、我々のような人種からすれば、当然のことなのだが。少女の願いを叶えるためであれば、ときに命すらかけるし。

必要であれば死のひとつやふたつ、超越してしかるべきだろう。

そして目を覚ましてから更に数日後。

状態が落ち着き、軍の医療施設内の集中治療室から、一般病院の病室に移った私を訪れたのは、うさんくさい笑顔の弁護士だった。

「やーやーやー！ はじめましてかな？ 僕は舞鶴法律事務所の竜崎、よろしくね！

さてさて、早速だが君と火野さんは現在、バスの運営会社に訴えを起こされそうなのはご存じかな？ 僕はその辺その他諸々、君達の控訴関係の法律的弁護を頼まれてね。ああ、あらかじめ言っておくと依頼者は君のお父上（義理）さ。ついでに弁護費用その他諸々の経費は前金含めはずんでもらってるから、なにも気にしなくていいよ！」

背中に圧力をかけない特殊なベッドから、起き上がることができない私を気にすることなく。

彼は時は金なりといわんばかりな速さで挨拶を終え、ついでに現状説明を開始する。

そしてどうやら、私が意識を失っている間に色々と面倒なことになっていたようだ。

先輩が未だ意識不明の状態で、悲しみにくれる陽炎型の艦娘たちのことが気がかりす

ぎて、割とどうでもいい情報ではあるが。

だが、先輩なら時間はかかっても必ず目を覚ますだろう。

なぜなら、そういう人だからとしか言えないが。

「そうですか、よろしくお願ひいたします竜崎先生。ただ失礼ながら、義理父は時折短気で勢いが強くなる人ですから、もし無理に依頼されたりといった経緯があつて、気が乗らないようでしたら——」

「ああ、それは気にしすぎさ。そもそも、バスの運転手とバスガイドと教師の三名、そして児童四十人を命がけて救助したなんていうヒーローの弁護士なんていう事務所や僕個人の評判を最高に上げてくれる美味しい仕事、降りるわけがないじゃないですか。はは!! まあそれと……最高の弁護士である僕だけでも充分なのに、世論行政司法権力者込み込みで全部味方だから、もう裁判するまでもなく勝ち確定してつていうのもあるけどね」

聞く限り、バス会社は手の込んだ破滅が望みなのかと疑いたくなる状況のようだ。

いや、相手がただの一般人だと決めつけている可能性も充分あるのか。

だとしたら、ご愁傷様としか言えない。

「そうですか。まあお互いに利益のある事なら、私としてはどちらでもいいんですが、くれぐれもやり過ぎないようにしてくださいね」

「おや、君はあのバス会社に弱みでも握られてるのかい？　いまならセットで請け負ってもいいけど？」

「いえ、賠償金を払う前につぶれて貰ったら困りますので。じっくり絞れるレベルを見極めてお願いします」

「……あはっ！　いいねえ君、任せてくれ。それじゃあ今日はこの辺で。次会うときは、いくらとれるかの報告になるよ」

そう言い残し、早口の弁護士は部屋から出て行った。

私のことはいいが、恐らく先輩はいつ目を覚ますかわからない状況。

先輩には陽炎型の艦娘たちがっている以上問題ないだろうが、蓄えはいくらあっても困ることはないだろう。

なら多少なりとも、もらえるものは貰っておいた方が……恩を売れるでしょうし（義理の兄を心配する弟の綺麗な心の声）

といつても、こちらも未だ背中の筋肉は完全に回復しきっておらず、このあとも状況を見て、何度か手術を行う必要があるらしく。

元通りに歩けるようになるまでは、リハビリ期間を含めてどれだけかかるかわからないらしい。

次あの弁護士と会うときまでに、せめて身体くらいは自分で起こせるようになってお

きたいものだ。

などと考えていると、コンコンと遠慮がちなノックの音。

そして静かに扉を開けて入ってきたのは、まやさまと高雄愛宕鳥海の四人。

真つ先に病室に飛び込んできたまよさまは、恐る恐るといったように私の手に触れた。

「まえしまあ……ほんとに、ほんとにもうだいじょうぶなのか？」

彼女はベッドから起き上がることができない私を、心配そうに見つめている。

銀行強盗の際に入院してお見舞いに来てくれたときは、私の胸に飛び込んでくれたのだが。

さすがに怪我のこともあつてか、遠慮している様子。

いいんですよまよさま、あなたが抱きしめてくれるなら、どんな傷みでも耐えられる。

と、言いたいところだが、それは彼女が望まないので我慢しよう。

「はいまよさん、大丈夫ですよ。ご心配をおかけして申し訳ありませんでした」

「ごめんなまえしま、わたし、えらそうに言つて、まえしまをまもつてあげられなくて、

ごめんな……」

「そんなことはありませんよまよさん。深い深い場所に沈んでいく夢の中で、私は確かにあなたの声を聞きました」

「……まやでいいぜ、まえしまは提督だからな」

「はは、わかりました。ありがとうございます……摩耶。私を守ってくれて」

「……うん。えへへ、いいかおだせていとく！」

作り物めいているであろう、私の笑顔。

それをいい顔と言ってくれるまやさま。

これだけで、私は生きててよかったと思えてしまうのだ。

それからしばらく。

まやさまは疲れていたのか、鳥海の膝を枕にすやすやと寝息を立てて眠りについた。

高雄と愛宕と鳥海は、穏やかな様子でそんなまやさまをみつめている。

……ある意味、今なら丁度いいかもしれない。

「ひとつ話しておかなければならないことがあります」

「はい、なんででしょうか？」

死の淵から帰ってきたからというわけではないが。

まだしばらく生きていく以上、はつきり言っておかなければ。

「……申し訳ありませんが、あなたたちと結婚はできません」

「え、それはそうですよ。こんな大げからですから、何よりも先にお身体の回復を——」

「ちがうんです」

言葉を遮り、高雄と愛宕、そして鳥海の目を見る。

私を提督としてしまった、ある意味不幸な艦娘たち。

彼女たちを愛することはできないが、せめて誠実ではありたい。

「私は……あなたたちを好ましくは思っていますですが、どうしても精神上の問題で、あなたたちを女性として愛することが難しい。ですので結婚は……しません」

そう、はつきりと告げる。

彼女たちは少し驚いた様子だったが、やがて各々が薄い笑みを浮かべ口を開く。

「……それが、提督のお望みでしたら……従うのが私たちにとつての幸せですわ」

「ちよつと残念だけど、提督がそう言うならしょうがないわ」

「私も同じ気持ちです提督。その、父には私から伝えておきますので、なにも気になさらないでください」

驚かれる、罵倒される、説明を求められる、泣かれる。

色々と覚悟していたが、笑顔で受け入れてもらえるのは予想外だった。

「いいんですか？」

「はい。ですがお側にいることは……お許しただきたく思います」

「高雄……あなたたちを愛せない存在である私と一緒にいれば、不幸になってしまうかも

「しませんよ？」

「一緒にいられないくらいなら、不幸でも一緒にいられるほうがいいわ！」

「愛宕……そうですか」

「お邪魔にならないよう、仕えさせていただきますね」

「鳥海……苦勞をかけます」

……人生とはままならないものだ。

「まえしまゝむにやむにや、いつしよ……」

「摩耶……」

自分の幸せよりも、愛する者の幸せを願える彼女たち。

私には本当に、もったいない艦娘たちだ。

彼女たちのような艦娘たちには、幸せになつて欲しい。

そう願わずにはいられないほどに。

だがその一方で、どこかその有様が自分と重なる。

愛してもらえない相手を、それでもと愛し続けるその有様が。

もしかすると私と同じように、彼女たちもまた。

その在り方を貫くことに誇りを持っているのだろうか。

都合のいい、私の独りよがりな妄想かもしれない。

だが、そうであるならいいなど。
そう思わずにはいられなかった。

—— いつか遠くない未来 ——

審判の日、きたる。

今日は、高雄、愛宕、摩耶、鳥海との結婚式。

結局私は、彼女たちとの結婚式をあげる事となつてしまった。

一度は引き下がった鳥海の父親による「カットー！　なんか最近身体の調子よくないわー！　これももう長くないかもしれんわー！　ならせめて死ぬ前に娘の結婚式みたいわー！」ムーブの丁寧なゴリ押しに屈してしまったせいだ。

義理の父親が強キヤラ過ぎる。

もつとも、最終的には私自身思うところがあつて、自身の意志で結婚式を挙げることに決めたのだが。

その理由のひとつは、先日まやさまが無事艦娘変りを終えて、摩耶になつたからだ。といつても彼女は、まだ人間の法律的には結婚出来る年齢ではない。

(※ただし艦娘の法律的にできないとは言っていない)

だが、他の三人を待たせるのは嫌だと本人が主張し、摩耶の両親がなぜか非常に乗り気だったこともあつて、せめて形だけでもということで行行と相成つた。

いつかこの日が来るとは思っていた、そして来てしまった。

そして来てしまったものは仕方がない。

……ずっと一緒に、側にいると。

そう、あの日約束したのだから。

覚悟を決めよう。

……決めようと頑張つてはみたが。

私は花婿の控え室で、項垂れずにはいられなかつた。

もう少し、せめてもう少し摩耶がまやさまであつてくれたらと思わずにはいられない。

ほんともう、ほんと、あと少し、ほんのちよつとだけ、五十年くらいでよかつたのに。

「よう幸せもん、調子はどうだい！」

そんな私の心境をぶちこわすように、突如として来襲する先輩。

式に陽炎型の駆逐艦を引き連れてきてくれたのは非常に嬉しいんですが。

ついでに金剛連合会の最高責任者やら、艦夢守市艦連軍の最高責任者やら、艦夢守市の最高責任者（市長）やらを引き連れてくるのはどうしてなのか。

「……つて、もうすぐ結婚するってヤツのツラじゃねえな。なに悩んでんだ、マリツジブルーか？」

「自覚はありますが、ならどんな表情をすればいいんですか……」

「俺を見る、これがもうすぐ結婚するやつツラだ」

「へ？」

「しかも19人とな。ならせめておれの19分の1くらいはいい顔しろよ……ああ、そういうおまえは4人とだけか、ならえーつと……」

「待つてください、え、え、え？　結婚なさるんですか？」

「まあな。初風のやつが、今年で学校卒業しちまうから、もうそのの言い訳で逃げられねえんだわ。つまり、近いうちに俺もおまえと同じく人生の墓場だよ。しかし立派な式場だなおい、俺もこれくらい借りたいけど、いくらかかるんだろな。陽炎は姉妹で出すつて言ってるけど、俺にも意地があるから、せめて結婚式の金くらい……。ははは、あ、だめだ、なんか俺もちよつとおまえと同じ顔したくなってきた……」

なんでだよ（素）

逃げる必要なんて1ナノメートルもありはしないでしようが。

資金だつて駆逐艦19隻と結婚出来るなら、銀行強盗してでも用意するのが自然の摂理ですよ？

なんだろ、幸せじゃないオーラ出すのやめてもらえます？

などと理解出来ない疑問が脳裏に渦巻き、無性に腹立たしいやら、悔しいやら、情けない気持ちになる。

まあ信仰の都合上、致し方ないことなのだが。

「そうだ、いいこと教えてやるよ」

「はい?」

「おまえいいやつだよ、よく覚えとけ」

項垂れてしまった私を心配してか、先輩がらしくない言葉をかける。

「いいひとというのは、ときに悪い意味を持ってしまうこともあります」

「俺が言ってるのは良い意味だ、幸せになつてもいいんだぞつてことだからな。お前も知つてると思うが、艦娘つてのは悪くないぞ。自分が一人じゃないんだつて、そう思える瞬間は特にな」

「それは……確かにそうですけど」

高雄、愛宕、鳥海、摩耶。

あれからもずっと側にいてくれた艦娘たち。

彼女たちとの日々は悪いこともあつたが、いいこともあつたように思う。

少なくとも、私は孤独ではなかつた。

「そういうこつた。まあこれからもよろしく頼むわ、同じ提督のよしみでな」

「全く同じではない部分もありますが……まあ、よろしく願います火野提督」

「ああ、よろしくな前島提督」

茶化し合うようなやりとり、お互い自然と笑みがこぼれる。

……思えば先輩とは、随分と長い付き合いになつてしまつた。

そしてその付き合いは、恐らくこれからも続くだろう。

漠然としたものではあるが、そんな確信があった。

「提督やっぱりここだった〜！」

「駄目じゃないですか一人になっちゃ！」

「悪い悪い。ああこら、ひつつくな」

「あつ、前島さん、この度はおめでとうございます！」

「おめでとうございます！」

そんなことを思っていると、雪風、時津風と呼ばれる、陽炎型の中でも特に私好みな駆逐艦が控え室に飛び込んできた。

明るい笑顔とは裏腹に、よほど不安だったのか。

先輩の衣服をグツと掴んで離さず、おまけに時津風さんのほうは、先輩の背中に抱きついている有様。

前世でなにすればその立場になれるのか、是非教えて頂きたい。

今世が無理でも来世、来世でワンチャンあるなら、何でもしますから。

「おつ、そろそろ時間だ。おら気持ち切り替えろ新郎様、悩みなんて置いてけ。たいして価値のあるもんでもねえし、必要になったら取りに戻ればいいんだよんなもん。どうしてもって話なら、新しいのを作ってもいいしな」

「そうそう、それよりキレイなお嫁さんが待つてますよ」

「あ、え、ええと、まあ」

そう言つて笑いかけてくださる雪風さん。

いや、いまこの瞬間あなたより美しい存在は私にはないんですがそれは。

「こいつ、照れてやがる」

「幸せになつてくださいね」

そう言つて、どこか儂げで、とても優しい表情を浮かべる雪風さん。

どこかで似た表情を見たことを思いだす。

それはあの夏の日に出会つた、潜水艦の艦娘の笑顔。

「はい……そうですね、ええ、なつてみせますよ」

幸運艦の彼女に、そう言われてしまったなら。

そうなるべく全力を尽くすのも、また自然の摂理。

ある意味地獄への道行きではあるが。

先輩と駆逐艦の少女たちが共にいてくれるのであれば、心強い。

結局私は未だ正しくロリコンのままである。

つまり彼女たちと結婚したところで、幸せにできるかも、幸せになれるかもわからない。

い。

だが……大丈夫だろう。

私が、皆が幸せになれる方法を探す時間はまだある。

そして、たとえ見つからなかったとしても。

私には共にそれを探してくれる“私の”艦娘たちがいるのだから。

まずは難しくとも、信じることから始めよう。

もしかしたらそれがきつかけで、いずれ愛が生まれるかもしれない。

愛というものは目には見えない。

ただの言葉、形のない幻想、そう語る人も多い。

だが、あるはずのないものを信じるからこそ、人は前に進み続けられる。

そして私は生きていく以上、まだ前に進む必要がある。

だから例え難しくとも、その先に絶望が待っていないようにも。

いまはただ信じて、進み続けてみよう。

幸せは……きつとその先にあると願いながら。

『意識高い男』ロリコン

と

『重巡：高雄：愛宕：摩耶：鳥海』

おわり

「そーいや披露宴の飯作つてくれる、おまえの一押しの一押し飯屋の……なんだっけ。ああ、リベツチオとかいうちっこい店主。俺見て雷落ちたみたいに固まってたけど、アレなんだったんだろな？」

「……………」

もしかして私が幸せになるためには、やはり高雄たちより先に、先輩と家族になるのが最短の正解ルートなのでは？

『パパ活男』と『重巡：鈴谷』

「おじさん元気ないね、なにか嫌なことあった？ よかったら話を聞いてあげようか？」

——ガキの頃から勘の良さと逃げ足には自信があった。

「それともカラダで慰めてほしい？ 鈴谷どっちも得意だよ♪」

——だが本物の捕食者が相手では、そんなものはなんの役にも立たない。

『パパ活男』と『重巡：鈴谷』

ビルの隙間から吹く風が冷たくなり始めた季節。

艦夢守市の繁華街から少し外れた夕方の裏通り。

女か男を買う側と売る側が集まる場所で、そいつは俺に話かけてきた。

深い翠玉色をした長髪の間隙から覗くのは、綺麗に整った眉と冴え冴えとした瞳。

顔の形はかなり整っていて、おまけに成人前の若々しい肌の潤いがある。

それは年を重ねた女が、どんな対価を払おうと二度と取り戻せない若さの証明だ。

そして顔の形もさることながら、厚い学生服の上からでもわかるほど見事な身体。

大きな胸に細い腰、そしてミニスカートから伸びる長い脚はニーソックスで引き締め

られており、わずかに見える素肌の部分はとても白く、学生服という希少性も相まって、

男の欲情をこれでもかと誘う。

本当に学生かはともかく、他にもっと金を持ってそうなスケベオヤジがいくらでもい

る。"こんな場所"で、あえて俺のような男を狙って話しかけてくるあたり、相当の場数

を踏んでいるのだろう。

だというのに物おじもせず、警戒心すら感じさせないのは、痛い目を見たことがない

せいか、それともこの若さで男を手玉に取ることに自信があるのか。いや、優秀なケツ持ち（背後組織）がついている可能性もあるか。

だがなにより気になるのは、俺の直感がこの女はヤバいと告げていることだ。

人並み以上に女の相手をしてきたが、経験上この手の女に手を出したり借りを作る
と、馬鹿みたいに高い代償を払う羽目になる。

たとえ相手にこちらを騙す気があるうと、なかりうと……だ。

「いや、いい。悪いが別をあたってくれ」

「え……」

そもそも、この手の場所では買う側が話を持ち掛けるのが普通だろうに。

こんな突っ立ってるだけでも買う側が寄ってくる上玉が、自ら売り込んでくるのは妙
だ。

ゆえに直感に従ってなるべく角が立たないよう断ったつもりだったが。

鈴谷と名乗った女は、この世の終わりのような表情を浮かべた。

よほど自分の見た目に自信があったのか、断られるとは思っていなかったのだろう。

「う、うわー、マジありえないんだけど？ 鈴谷好みじゃなかった？ え、えつと……」

そつ、それならかなり嫌だけど、好みの女の子紹介してあげよつか？　す、鈴谷この辺りじゃ顔だから任せてよ!!」

先ほどの余裕はどこに行ったのやら。

女は俺の腕をがっしりとつかんで、必死の形相でまくし立ててくる。

なんだなんだこの女は。

「いや、結構だ……」

「えつ、もしかして狙ってるのは……男ッ!?!」

「……違つ」

場所柄そういう人種も集まるのは確かだが、あいにくその手の趣味はない。

だというのに女は否定した後も、あーでもないこーでもないとしつこく絡みついてくる。

厄介なのに目をつけられた。

力尽くで引きはがすこともできるが、それは最後の手段にしたい。

ただでさえ不慣れなこの地、この街で下手に目立つのは避けるべきだ。

万が一にも地元組織に目をつけられたら、動きがとりにくくなる。

「わかつた……いくらだ?」

「え、いいの!? やつた!!」

「いいから、早く値段をいえ」

「あつ、えつと、こういうときは確か……ホ込み本アリNNオツケーの……いつ、イチゴで!!」

「……は？」

提示された値段を聞いて耳を疑った。

呪文のように聞こえるが、これは内容と価格の提示で、この場合ホテル代込みの——
……なにを説明しようとしてるんだ俺は。

ともかく、どう考えてもホテル代込みで1万5千は安すぎる。

むしろホテル代だけで足が出る可能性もあるだろ。

「たつ、高かった!? ならしたい事したいだけできる、フルオプション付きの5kとかでも全然オツケイだよ!!」

「……違う逆だ、お前なら20でも30でも出す奴いるだろうが。……まあいい」

俺は提示された二つの額、その中間の金額を女……鈴谷に握らせる。

鈴谷はきよとんとした様子で、俺が握らせた一枚の高額紙幣を見ていた。

「おしゃべりも慰めもいらんが、聞きたいことがある。確かこの辺りの顔だつて言つてたな……この写真の女を見たことあるか？」

取り出した写真には、そこそこ派手目な化粧をした茶色い髪の毛、比較的若い女の姿。

いい加減、強い言葉で追い払ってもよかつたのだが。

それとは別に、俺自身こんな場所にいる「理由」もあつて、ダメもとで聞いてみる。鈴谷はその写真を受け取ると、穴が開くような様相で写った女をにらみつけた。

なんというか、焦るといふか後がないような感じで見てるな。

ふと、昔知り合いが飼つてた犬が、主人の役にたちたくて必死になつてる仕草を思い出す。

別に知らなかつたからつて、なんかするつもりもないんだが。

「……………これいつ頃の写真？」

「二年ほど前だ」

「二年……………」

鈴谷は写真から目を離して、俺をじつくりと見る。

先ほどまでの明るさに満ちていた表情や、焦つてわたわたする表情でもない。

歳不相応の、冷酷にこちらを品定めするような据わつた目つき。

この歳の女がしていい目つきじゃない。

さつきからこの女を相手にしていると、妙にちぐはぐな印象を受ける。

一体なんなんだ、この女は。

「おじさん外地……………この島の外の人だよね？　しかもコレ関係の」

鈴谷は指で頬をすつと切るようなジェスチャーをする。

俺はそちらには触れず、まあそうだと、曖昧な答えを返した。

「この人……おじさんのなに？ 見つけてどうするの？」

「聞いているのはこつちだぞ……まあ詳しいことは言えんが、人探しを頼まれてな。まずは見つけないとなんとも言えんが、悪いようにする気はない」

あくまで、俺は……だが。

この女に刺されて金を持ち逃げされたスジ者の幹部が、捕まえた女をどうするかは想像にたやすい。

「そつか……えつと、二年も前の写真だし、女は化粧でいくらでも化けられるからあてになんないけど……少なくとも鈴谷は見たことないと思う……ごめん」

鈴谷は本当に申し訳なさそうに、渡した金と写真を差し出す。

その表情に嘘は無いように感じるが、本心はどう思ってるのだろうか？

「いやいい、気にするな。もう行っていいぞ」

まあそれはともかく、もともと期待していなかったし、その答えは半ば予想はできていた。

俺は差し出された写真だけを受け取り、この妙な女を追い払うことにする。

「ねえ、他にはなにかない？ 鈴谷なんでもするからさ……」

鈴谷は捨てられた子犬のようにうなだれながら、上目遣いで見上げてきた。しかも継るように、俺のコートの端を掴まみながらだ。

妙にしおらしい様子。

だがそれを見て俺は、なぜか絶対に逃がさないという強い意志を感じた。

さつきから感じていた妙な感覚の正体がわかつてくる。

それは本能的というか原始的な、なにかに狙われている感覚。

もつと言えば、鈴谷と話していると捕食者に見つけられた気分になるのだ。

しかも鈴谷からは、理性の挟まる余地の無い、根本の欲求からくる衝動を感じる。

正直信じられないが、身もふたもない言い方をすれば、こいつは単純に俺とやりたいのだろう。

いや、俺とというか、強そうな男とやりたい本能的な欲求に忠実なのか。

……だとしたら、とんでもないビッチ（肉食系女子）だ。

しかし……男としては、その挑戦に乗ってみたい気持ちもわずかだがある。が、もう若くもないし、そもそもいまはそんなことをしている余裕もない。

俺にはあまり時間もあとも無いのだ。

「……なら……こらを縄張りにしてる組織の情報か、欲を言えば伝手があるやつ知らないか？」

「へ？」

俺はとつとこの女から離れるために、別の情報を聞くことにする。

「この島に来てまだ数日なんだが。初日に花屋の店員に聞いたら、金かけずに外から流れてきた女を探すなら、店を回るよりここで腰を据えて探したほうがいいって言われてな。まあ他に当てもないし試しに張り込んでみたんだが……見ての感じだ」

(※花屋：娼婦、売春、売春宿などを指す隠語)

探している女がこの街に居るのは、比較的確かな情報なのだが。

だからといって、街の中に潜んでいる一人の人間を見つけ出すのは簡単なことではない。

しかし水商売をした女は、どこに行こうと結局水商売に身を染めることが多いのも確か。

なのでこの島で一番大きい繁華街に目を付けたまではよかったのだが。

やはりそう簡単なわけもなく、なんの手がかりもないまま時間と金ばかりが消えていった。

ならば、もっと片っ端から聞き込みをしまくれればいいものなのだが。

こういった場所では必ず、その手の裏組織が幅を利かせているものだ。

その場合、下手に動くと目をつけられてえらいことになる。

「どう動くかはまだ考え中だが、どのみちこれ以上目立つ動きをとるなら、地元の組織に協力はともかく、最低限の挨拶くらいは通しとかなないと面倒があるかもしれないからな。その辺の伝手があるならお前から紹介してほしいんだが……」

この辺りで花を売っているであろう鈴谷なら、地元の組織との伝手がある可能性もな
くはない。

だが……俺の狙いは別にある。

それは、その手の組織に誰かを紹介するということの意味。

なにかあったときは、その責任をすべて負う羽目になるということ。

つまり、俺がなにかしでかせば、その落とし前は俺だけではなく、鈴谷にまで及ぶ。

短い時間だが、そのリスクを理解できないほど馬鹿な女ではないのはわかっている。

さあ渋れ、それでこいつとの関係は終了だ。

「……え、そんなのでいいの!?! いいよいいよ!! 鈴谷にお任せえ!!」

だが予想に反して返ってきたのは、何一つ迷いのない快諾だった。



そうでかでかと看板が掲げられたビルの中に、事務所の一室。

正面に座っているのは、白いスーツを着た大柄の男。

おまけに一目でこちらの世界の男と分かるほどの迫力。

それを証明するかのように、胸元には霧島組の代紋をかたどった金バッジが輝いており。

男がこの地域最大の裏組織である、霧島組の組員だと証明していた。

「遠いところからよくおいでなすった、まあ掛けてくれや」

「いえ、こちらこそ突然押しかけてしまって……失礼します」

深々と礼をしたあと、高級なソファーに腰を下ろす。

かなり格下の形をとって受け答えをしているのは、俺が組織の看板を背負ってではなく、個人で来ていることもあるが。

それとは別に、相手が出す空気が明らかに格上なのを感じ取ったことだ。

目の前の男は、おそらく若頭。

艦夢守市の組織は艦娘と呼ばれる女の姿をした化け物がトップを張っているはずなので、おそらく組長ではないはずだが。

目の前の男は、外の組織なら文句なしにトップを張れるすこみがある。

「しかしよかつたぜ、あと数日来るのが遅れてたらこつちから会いに行つてたところだ」

「何分不慣れな地とはいえ、どちらにお伺いしていいかわからず、不甲斐なく思っています」

座つてすぐに、刺すような言葉が飛んでくる。

こちらの正体も動向もすでに把握されていたと暗に伝える内容。

俺はそれに対して、自身を恥じる思いを表す言葉を選ぶ。

それを聞いて白スーツの男は、にやりと口をゆがめた。

不快にもさせず、見下されるわけでもなく、ちようどいい塩梅の気分にもっていったらしい。

しかし、事前に鈴谷の忠告が無ければ、完全に虚を突かれていたところだ。

『誰かにこの人のこと聞いた？　お願い、正直に答えて』

『ん、ああ……さつきも言ったように花屋の店員に——』

『そのときに、なにか情報出した？　名前や年齢、出身地とか、名刺とか所属組織とか』

『まあ、協力的な店員だったからな、聞かれて問題ないことは答えたが……』

『そうなんだ……直系店のボーイに聞いちやったのかな……』

『なんのことだ？』

『えつとね、艦夢守市、特にここら繁華街はまるつと金剛連合会、霧島組の縄張りなんだ。ほかの組織もないことはないんだけど、基本そういつたところは全部霧島組の顔色うかがいながらやつてるの。』

でね、ここからが問題。その昔、外から来た組織が結構派手に街で暴れたことがあつて、それ以来金剛連合会つて、個人はともかく他所の組織とつながつてるっぽい人がくると、まずは親切な振りして情報収集するの。で、それはすぐその手の情報網に伝わっちゃうんだ』

『な!? てことはつまり……』

『うん、おじさんのこともなんらかの形でもう連絡が入つてると思う……あつ！ でも鈴谷を通すからその辺はもう大丈夫だから安心してオツケーだよ!!』

—

—

—

……まあ、感謝はしている。

が、まさかその辺の小さな組織ならともかく。

一番上の組織、しかも組長クラスにいきなり会うことになるとは予想できなかった。

普通の会社に例えるなら、駄菓子屋の店員に仕入れ先を紹介してと言ったら、世界最大の菓子メーカーの本社、しかも社長クラスを紹介されたようなものだ。

つまり「加減しろバカ!!」という気分である。

「くくく、まあ……こつちとしてはあんたをどうこうする気はないから安心してくれ。それに人捜しのことば聞いている。それに関しては、対価を払ってくれりゃあ、相応の協力もさせてもらうさ」

白スーツの男は「当然、こつちの顔を立ててくれるうちはだが」と、付け加える。

「で、どうする？」

「あいにくと、ご納得いただけるとは思えないので……」

「ま、一人で動いてるってことはそうだろうな。あてができたらいな、そつちが得意な人手やイイ情報屋紹介してやる」

「はい、そのときはよろしくお願ひします」

そのあと、多少の情報を交換というか、この辺のルールのようなものについてクギを

刺された。

まず霧島組には表と裏の部門があり、白スーツの男は裏の部門に属しているらしい。簡単に並べると、表の部門では、飲食、宿泊、賭博、貸金、合法売春、不動産などなど多岐にわたるシノギを扱っていて。

裏の部門は表のシノギを潤滑にすすめるための、自治（みかじめ）、用心棒、交渉代行、仲介、トラブル解決などがあり、それらのアガリも馬鹿にならないらしい。

ただし強請に脅し、詐欺や違法なコピー品なんかはグレーで、組織としては扱ってないし、派手にやって目につけば警察と連携して司法に引き渡す。

銃器なんかの武器や危険物、そしてクスリは明確にNG。

流通してないわけじゃないが、扱ってるやつがいたら警察を通さず潰すこともある。つまり国内や島内の法律に明確に抵触する行為は基本的にアウトだ。

そんなのでやっていけるかと思うのだが、どちらかと言えば金剛連合会は自警団的な組織のため、それくらいでないかと思う問題があるんだとか。

当然清廉潔白なわけでもなく、裏で汚いあれこれのシノギを行うこともあるだろうが。

少なくとも地元の人間に支持されているのは間違いなさそうだ。

「俺もこつち来たときは面食らったけどな。まあ、それだけ組織の力が裏だけじゃなく、

堂々と表にも通用するから成り立つ構造なんだろうさ」

「なるほど……」

「どうやらこの男も島外の出身らしい。」

元は外の組織に所属していたであろう部分もあつて親近感がわく、が。

外様出身というハンデを負つてなお、ここまで出世していることを考えると。

やはり素質や才能といった部分はもとより、男として一段上のものを持つてゐるのだらう。

俺みたいなパツとしない日陰者からすれば、まぶしい限りである。

そういつたことを話しながら、キリがいいところで、どうしても伝えておかなければならないことを切り出す。

それは……自分が外の組織ではなく『個人』で来ていることにしてほしいということ。

それを聞いて、白スーツの男の顔色が変わった。

当然と言えば当然だ。

つまり俺がなにかやらかしても、それは組織ではなく。

俺個人がやったことだという形にしてくれと言つてゐるようなものだからだ。

それが通るなら、俺が鉄砲玉になつて誰かをとつた場合、組織は知らぬ存ぜぬを通せるといふこと。

そんな鎖のついてない危険人物、普通ならプチとつぶされても文句は言えない。

だが事情が事情なので、これだけはどうしても通しておく必要がある。

さあ、ここからが勝負どころだ。

「……普通なら、ふざけたこと言ってんじやねえと灰皿で頭一つはカチ割つてるところだが。まあいいだろう。あんたを紹介した相手が相手だからな……つたく、どんな気まぐれなんだか」

「は？」

実際、一発か二発は何かしら食らうのを覚悟して身構えていたが。

白スーツの男は、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「どこまで聞いているかは知らんが……うちの若頭カシラや組長の関係者だ。それ以上は本人に聞け。変なこと言つて恨まれるのはごめんなんぞ……」

「あッ、ハイ」

このクラスの男が面倒を避けたがる相手？

……鈴谷のことがますますわからなくなってきた。

が、やはりただの女じゃなかったらしい。

いまさらだが、相当マズイ相手に借りを作ってしまったようだ。

「艦娘あつちの関係者に手間かけさせるのも面倒だ。表向きは同郷のよしみつて理由にしとい

てやる。俺も元はネオ大和町の出身だからな……あんたもだろ？」

「ええ、まあ」

「だからそつちの組織のことは一応把握してる。個人で動くからつて油断して、派手なことはしないようにしろ。なにかやらかしたら、俺が直々にケジメをつけてやる」

「ここらが落としどころといった感じで白スーツの男は締めくくる。

正直かなり譲歩してくれた形、つまりそれだけ鈴谷に借りを作つた形になつてしまつた。

「ところであんた、どこの高校に行つてた？」

白スーツの男が唐突に話題を変える。

いや、同郷つながりだから唐突ではないか。

「南高です」

「へえ……だれが頭やつてた時代だ？」

「頭というわけじゃありませんでしたが、火野と前島つてコンビが幅を利かせてた時期ですね」

「なんだ、同世代じゃねえか。俺は北高だつたが、あいつらとやりあつたこともあるぜ。まあボコボコにされてばっかりだつたけどな」

白スーツの男は愉快そうにカカカと笑う。

俺もつられて笑みを浮かべる。

若さだけが取り柄だった頃、毎日が祭りのようで、勢いと勢いと勢いにあふれていた。

「ということは、南高ウチチの体育祭のカチコミにも参加されてたんで？」

「なつかしいなオイ。それ聞くつてことは、あんたも参加したクチか？」

「はい、もしかしたらお互いそこで顔を合わせてたかもしれないね」

「ははっ、かもしれねえな」

火野と前島、当時は南高のデストロイヤーとアイアンマンつて呼ばれてた。

物騒なあだ名だが、実際まわりからは相当ビビられてたな。

とは言つても、直接かかわりがあったわけじゃない。

そりやすれ違ったことくらいはあったかもしれないが、正直赤の他人。

こつちからすりゃ、あいつらが派手に暴れるせいで、北高に絡まれて迷惑してたくらいだ。

俺でもそう思ってたんだから、学校のほとんどの奴らもそう思ってただろう。

だが、百人近い北高の奴らが体育祭の最中にカチこんできたあの日。

たった二人だつてのにミミも臆さず、グラウンドのど真ん中で北高の軍団を迎え撃つたあいつらを見て、俺の中に熱いものが込みあげてきた。

俺だけじゃない、不良もガリ勉もパンピーも。

気が付けば二人を助けるために拳一つで乱闘に参加したあの日のことは、いまでも夢に見る。

思えば渡世の泥に染まり、汚いことも平気でやれるようになった現在と違い。

あの頃が人生で最もまつすぐに輝いていた時期だったかもしれないな。

「……ありや楽しかった、いや、あの頃は何もかもが——」

「ええ、最高でしたね」

噛みしめるようにつぶやく白スーツの男。

もしかしたら俺と同じ思いなのかもしれない。

そのあとも色々あったが、確か北高の頭の妹だったかが火野に助けられたとかもあって、北高と南高の間で同盟というか、お互い手を出さないみたいな暗黙の協定が結ばれたんだっただか。

ほっとした反面、当時は火が消えたみたいで寂しく思ったりもしたな。

「しようがねえ、南高の兄弟つてことなら、ちつとは手を貸さねえわけにはいかねえか……持つてきな。そいつを出せば、この辺の店なら聞き込みくらいはタダで協力してくれるだろ」

「ありがとうございます、頂戴いたします」

手渡された男の名刺を見て驚く。

なぜなら金縁で大きく『霧島組』と書かれている文字の横にある男の名前。その上には『若頭補佐』の肩書き。

そういえば、若頭と組長の関係者が云々と言っていたな。

つまり最低でも若頭クラスだと思っていたこの男は、いまだ補佐だということ。

それらは裏組織の中では低くはないがそこまで高くなく。

むしろ男の格からすれば低いと言わざるをえない地位だ。

当然、霧島組の組員である時点で相当なものなのだろう。

だがその一方で、このクラスの男で若頭補佐程度なのかと驚く。

一体上にはどんな化け物があるのやら。

そう考えると、背筋にうすら寒いものが走った。



「ねえねえ、どうだった!？」

ビルを出てすぐ、入口あたりで待っていた鈴谷が話しかけてきた。

俺はそれを無視して鈴谷の手を握り、近くの喫茶店に向かつて歩き出す。

傍から見れば、通報されそうな気もするが、そうならそうならいい。

もつとも鈴谷は嫌がるでもなく。

むしろ嬉しそうに俺の手を握りながら、器用に空いてる方の腕を絡めてきた。

「わっ、わっ。鈴谷どこに連れてかれちゃうんだろ？ もちろんどこまででも行っちゃうよ♪」

「別にどこでもいいが、どこか静かに話ができるところだ……よく考えたらここらに詳しくない。……この辺でその手の店はないか？」

「あつ、それならいいところ知ってる！」

女の手を握つといて、リードの一つもできないとは情けない話だが。

それを聞いて鈴谷はうれしそうに声を上げる。

そうして鈴谷に腕を引かれてやってきたのは、繁華街の一角。

派手なネオンのともった通りではなく、怪しい輝きを放つ建物が立ち並ぶ場所。

身もふたもない言い方をすれば、まあ、ラブホテルが立ち並ぶ場所だ。

場所柄的に、連れ込み宿として使われることが主になるのだろう。

島外の繁華街にも必ずこの手の一角があるが、街の構造というのはどこも変わらないな。

「つて、まてまて、どこに連れていくつもりだ？」

「飲み食いできてカラオケもできるうえ、お風呂もベッドもある多分静かで休まる素敵
な場所♪」

この女……俺をホテルに連れ込む気か!?

どうする、逃げるか?

いやダメだ、もし逃げたら鈴谷は霧島組経由で俺を探すだろう。

そうなれば、あの白スーツの男の顔をつぶすことになる。

クソ、やらかした。

もはや打つ手なしという状況。

俺は鈴谷に引つ張られるがまま、ひととき大きなホテルに連れ込まれる。

しかたない、毒を食らわば皿までだ。

こうなったらとことんこの女、鈴谷を利用してやる。

結果なすがままホテルの部屋に連れ込まれたわけだが。

なんというか、入るときに裏口からだったり。

そのとき鈴谷が「一番いい部屋お願い♪」と従業員に指示してたりで。

どうにもいちいち虚を突かれるというか、気がそがれてしまう。

つまり単純に気が乗らないのだ。

情けない話、相手の得体がしれなさすぎて気がしぼんでしまう。

「ねえねえ、おじさんも一緒にシャワー浴びる?」

「……その前にいいか」

ブレザーにカーディガン、さらにスカートを脱ぎ捨て、ワイシャツ一枚になった鈴谷が首をかしげる。

どう考えても見た目通りの女じゃないと分かっているが、動作が幼いというか、若い。反面、欲情を誘うような紫色の下着が透けて見えるせいも、そのギャップもあって、いちいち煽情的だ。

「ん、なにになに?　すぐにナニする?」

「違う、最初に話があるといっただろ」

鈴谷はトコトコとこちらに寄ってきて、俺が立ってる横のベッドに腰掛ける。

俺は少し離れたソファアに腰掛け、なるべく鈴谷を見ないように話し始めた。

「まず紹介してくれた、霧島組の組員との話し合いはうまくいったよ。正直助かった」

「ああ、いいっていいって。キリユーちゃんが対応してくれたんでしょ?　ごめんね、ほんとは陽炎……えーっと、本部長とか若頭っていうんだっけ。もつと上の人紹介してあげたかったんだけど、ちよつち忙しかつたみたいでさ」

勘弁してくれ。

白スーツの男相手でも寿命が縮む思いをしたというのに。

あれ以上のが出てきてたら、そのままぼっくりいってしまいかねない。

ともかくだ、それとは別に、いい加減はつきりと聞いておかなければならないことがある。

それは絶対に普通じゃない目の前の女、鈴谷の正体だ。

「……なんでお前が、あんな奴らと伝手があるのか聞いてもいいか？」

「え、マジで聞きたいの？ 聞いてもいいことないよ？」

「……聞いても問題ない範囲で頼む」

鈴谷は少し悩んだ後、ごろりとベットに寝転ぶ。

そして足を。パタパタさせながら、選ぶように言葉を絞り出した。

「立ちんぼって呼ばれる子たちがいるじゃん？」

「路上の花売りだな。というかお前もだろが」

「ははは、でもやっぱフリーでやるのってトラブルとか多いんだ。だからみんなケツモチ（ボディガードみたいなもの）が欲しいわけ。そりやまあ、お店に所属するのが一番いいんだけど、訳アリの子たちもいるからさ。じゃあどうするかって話なんだけど、霧島組の息がかかっている特定のホテルを使うの。そういうところには組員がいて、何かト

ラブルがあればその場で仲介してくれるわけ。買う側も売る側も下手なことできないから、その手のホテル使えば安心も買えてwin-winって仕組み」

「このホテルもそうなのか？」

「うんそう、その関係のここらで一番大きいホテルだよ。すごいっしょ」

見えてきた、つまり鈴谷は霧島組にとって金づるといえるわけか。

いや、だったとしても霧島組の規模からすればたかが知れてるだろ。

どんな経緯で若頭や組長クラスと伝手ができたんだ？

「それでえつとね、引かないでほしいんだけど……このホテル、鈴谷の持ち物っていうか、鈴谷がオーナーなの……」

「は？」

キャバクラでマンション買ってくれとおねだりする嬢はボチボチ見たことあるが。

まさかホテル丸ごと買ってくれとおねだりでもしたのか、この女は。

いや、そういうえば裏口から入ったり、従業員を顎で使ってたな。

「嘘は言っていないよな……」

「……うん、マジのマジ」

もしかして金持ち相手に賭け事でもしたのだろうか。

麻雀とかカードとか普通のギャンブル的のじゃなくて。

なんというか肉体と肉体の勝負というか、先にイったら負けとか、その手の勝負。いや、ホテルを賭けてとか、相手誰だよ。

垂金権造（宝石商）とか、豚尻孕蔵議員（49）とか鷲巢巖（アカギ）とかか？

おいおい、とんでもないな鈴谷。

どんな手段で手に入れたにしろ、絶対まともな経緯じゃないだろ。

「そうですか……」

「あ、あ、あ、ちよつと引いたでしょ!？」

「……引いてない、です」

嘘、引いた。

めっちゃ引いた。

「というか、それなら幾らでも金持つてるだろ……なんで売りなんかしてるんだよ……」
「そりやまあ……色々。どっちゃかっていうと、なにも知らずに売ってる子たちを、このホテルに勧誘するのが本業というか、まあ、うん」

「で、たまに目についた男を味見する感じか」

「いやいやいや!?! そんなのしないって!?!」

「なに言ってるんだ、その身ひとつでホテルを手に入れたミラクルビッチ鈴谷さんともあろう人が」（混じりつけ無しの敬意）

「鈴谷ビッチじゃないし!?」　そもそもしたことな……つか!!　はじめて名前呼んでくれたのに最悪なのついてたんですけど!?

いや、さすがにそれを否定するのは無理があるだろ。

というかあれ、名前呼んだのははじめてだったか?

「じゃあなんで俺に声かけた、やるのが目的じゃなかったのか?」

「そりゃまあそうなんだけど……それはその、運命的なモノというか……行くつきやない感じだったというか……ああでもしないと、鈴谷に興味持つてくれないと思ったから無理したというか……」

要領を得ない感じの内容、おまけに最後の方はゴニョゴニョと小声でほとんど聞き取れない。

というか、キングオブザビッチみたいなのムーブしといて、なにをいまさら純情気取ってるんだコイツは。スーパービッチ純情派とでも言いたいのか、アホなのか?

「うゝゝゝ!!」　というかおじさんはさ!!　鈴谷とするの……嫌?」

ワイシャツ一枚の姿で、いじらしそうに手を組み、恥ずかしそうに上目遣いでこちらを見る鈴谷。

人並み以上に女の経験はあるが、ここまでそそられる仕草は中々お目にかかったことがない。

だが嫌だ。

というか無理だ。

手を出したら最後、なにもかも吸い尽くされる未来しか見えん。

「正直言えば、かなり気が乗らん」

「えっ、なんで!?!」

「手を出したら残りの人生全部持つて行かれそうだからだ」

しまった、つい本音が。

「ひどい!? そんなことない……かな?」

なんで首をかしげる。

マジか、マジで俺を丸ごと食う気なのか?」

「でもまあ……鈴谷としても、おじさんの気分が乗らないなら、それはそれでいいかな」

「……いいの?」

「うん。別に絶対したいって訳じゃないし。おじさんがしたいならバツチこいだけだ」

「だが、それじゃお前に得がないだろ。正直借りを作つたままつてのも怖い、代わりになにかあるか?」

「別に気にしなくていいのに。うーん……じゃあさ、鈴谷のお願い聞いてくれる?」

「お願いか……」

正直内容次第だ。

腕一本とか、内臓のどつつかとか要求されなきゃいいが。

「うん、三つでいいよ♪」

「三つ!? 一つじゃなくて三つか!? このいやしんぼめ……まあいい、言うだけ言ってみろ」

「えへへ。まずね、この島にいる間はここに泊まつて。もちろんタダだよ♪」

「……いや、どう考えてもお前が損するだけに聞こえるが?」

「いいのいいの。ただし鈴谷もここに泊まるから♪」

「……まあ、いいだろう」

正直なところ、かなり助かる提案だ。

金が無いわけじゃないが無駄金を使える状況じゃないのも確か。

部屋を借りようにも、この街では市籍がないとまともに部屋は借りられない。

そうなれば、宿をとり続けなければいけないのだが。

当然そのぶん金がどんどん減っていく。

ただ毎晩鈴谷に狙われるリスク……と呼べるかわからないものはあるが。

「やった! じゃあ二つ目。明日からその女の人捜すのに、鈴谷もついてくね」

「は?」

「まずここらで聞き込みとかするんでしょ？ なら鈴谷連れてけばフリーパスだよー」

「いや、紹介してくれた霧島組の名刺が……」

「いちいち名刺出して聞くの？ それに霧島組の名刺出したからって、みんながみんな協力してくれるわけじゃないよ？ フリーの子たちなんかはお金にならないこととか結構シビアだし。その点、鈴谷ならここらの顔でホテルの割引券とか持つてるの知ってるし、みんな喜んで協力してくれると思わない？」

「それはそうだが……まあいいだろう。ただし邪魔したりしたら置いていくからな」
「やりい!! うんうん、絶対邪魔にならないようにするから♪」

なにが嬉しいのか、寝転びながら両手でピースサインをつくってアピールしてくる鈴谷。

まあ、実際女に話を聞くなら、女を連れていた方が聞きやすいのも確かだ。

「それで、後一個はなんだ？」

「最後はね、えーっと、おじさんのこと、その、あの……て……と……って呼びたいというか」
「なんだ？」

「て、て、ていと……うー／／／ やっぱ恥ずかしいし／／／」

いや、そんな格好で男誘つとして、いまさらなにを恥ずかしがることがあるんだ。

「いいから、言ってみろ」

「うー……じゃあ、おじさんのこと、ば、パパって呼んでもいい？」
「……………」

「うわっ!! すっごい嫌そうな顔!!」

嫌だ、嫌だが。

マンションやホテル買ってくれと言われるよりは、はるかにマシか。

「いや、いい。好きにしろ」

「え、いいの？ アザーツス!!」

しかしよりによって『パパ』とはな。

まあ、下手な呼び方をされるよりはいい。

買われた女と買った男の組み合わせなら、ここらじゃ珍しくもないだろう。

「もういいな……じゃあ俺はもう寝る。今日はいろいろあつて疲れた……」

俺はひとつしかないベッドに寝転ぶ鈴谷を余所に、座っていたソファアに横たわる。

鈴谷はいそいそとベッドの掛け布団をはいで俺に被せた。

「ふふ、お休み。パパ♪」

「……………つたく、散々な一日だったよ」

「そう？ 鈴谷は最高の日だったけどね♪」

「おい、狭い」

「いいじゃんいいじゃん♪」

そう言つて布団の中に潜り込んでくる鈴谷。

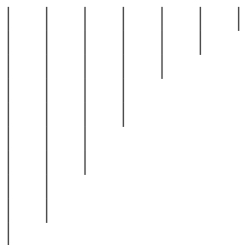
まあ、どうせ寝苦しくなつてすぐベッドに戻るだろう。

「ほんとに疲れてるからな、死ぬほど疲れてるから、頼むから変なことして起こすなよ？」

「オツケーオツケー♪」

疲れ果ててさつさと寝たいので、もう引きはがす気も起きない。

そうして俺は、肌寒い季節にちようにどいい女のぬくもりを感じながら意識を手放した。



『これで童貞卒業だね、おめでと♪』

……なつかしい夢を見た。

もう思い出すのも難しいほど、昔のこと。

いや、普通の男にとっては忘れられないであろう記憶。

妙に生々しい夢だったが……コレが原因か。

狭いソファから落ちないように、ガツツリと絡みついて眠っている鈴谷を引きはがす。

「ぎゃふん！」

変な声を上げて床にころがり落ちる鈴谷。

もしかして一晩中こうしてへばりついてたのか、この女は。

「やだ……痛いしい……！」

尻をさすりながら、ジトっとした目で見てくる鈴谷。

それを放置して洗面所に向かう。

簡単に身だしなみを整えて、コートを羽織る。

置いていこうと思ったが、鈴谷は俺よりも早く準備を終えていた。

女の支度には時間がかかるはずだが、鈴谷はそうでもないらしい。

「攻撃襲撃追撃に対応出来るように、鈴谷たちはいつでも臨戦態勢だから!!」

「そうか」

顔に出てたらしい。

まあ、いいか。

時間は昼前。

ホテルを出て、既に開いていた付近の書店に入って地図とペンを買う。

今日から本格的に街で聞き込みをするわけだが、なるべく効率的にやりたい。間違つても道に迷つて、同じところをグルグル回るようなことはゴメンだ。

朝飯をのんびり食つてる余裕はないので、そこでパンを買い、歩きながら食べることにする。

意外なことに鈴谷は昨日約束したように、俺の行動に文句も言わず、決して邪魔もしない。

かといつてなにもしないわけでもなく、迷いそうになつたときにはフオローを入れてくれる。

また言つていたように、路上の花売りが相手のときは、男女問わず鈴谷に協力的じゃないやつはいなかった。

いまさらだが、ほんとにこの辺の顔だつたらしい。

そして昨日までと違い、店への聞き込みもスムーズに進む。

協力的じゃない店も当然あつたが、白スーツの男の名刺を出して説明すれば、コロツと態度を変えて、店長クラスの人間が対応してくれた。

だが協力的とはいつても、やはり一店一店回るのは時間がかかる。

それに相手の事を考えるなら、この手の店は夜が稼ぎ時なので、夜の聞き込みはさけない。

なので、日が沈むまでになるべく多くの店を回る必要がある。

そういった理由から昼飯も食わず、さんざん歩き回っているというのに。

鈴谷は疲れたの一言もこぼさない。

ただただ楽しそうに後ろからついてくるのだ。

なにかそんなに楽しいのやら。

—
—
—

「普通のラーメン、特にこだわらないから基本で適当に作ってくれ」

「あつ、鈴谷も同じのでよろしく♪」

とまあ、一週間くらいしらみつぶしに当たってみたわけだが。

やはりというか、予想通りというか。

女の手がかりはなに一つ得られなかった。

「なかなか見つからないね〜」

「そうだな」

さすがにこの一週間、昼飯もゆっくりとらなかつたため。

今日くらいはと、目についたラーメン店に入つて、少し遅めの昼食をとることにした。別に鈴谷のことを思つてとかではなく、煮詰まつたときはこうして腰を据えて周りを見渡すことも必要だからだ。

事実花屋やキャバクラばかりを回つていたが、よく考えれば、こういった普通の飲食店で働いている可能性もあると気がつく。

島の外だとよそ者を嫌う土地が多いことなどもあつて、普通の働き口なんかは紹介がないと採用すらしてもらえないことが多い。

おまけに採用されても従業員を人と思わない扱いをする経営者が多いので、特に女の子の場合は、逆に夜の水商売の方が稼げるし、経歴不問が多いため、いろいろとやりやすいのだ。

だがこの街は独自の法律や、警察と裏社会の力のバランスがとれていることもあつてか、これらの飲食店や働き口でも普通に採用される可能性があるし、安全に働けそうだ。

……これは一度方針を見直すべきだろうか？

「ほんとに……（艦守市）にいるの？」

「ああ、それは間違いない……はずだ」

「どうしてわかるの？」

「この女を捜して……もう二年になる」

「え、二年も探してるの!？」

「ああ、女がここにくるまえ、最後に寄った街で得た情報だと、この街にいくとこぼして
たみたいでな。実際色々と情報集めたり準備をしてた証拠もあった」

「なるほどね。でもさ、そりや車で五時間も走れば一周出来るくらいだから、そこまで
広いわけでもないけど……人一人捜すなら狭くもないよこの島? 他に繁華街がある
地域もあるわけだし」

「……探すさ、何年かかってもな」

「ふーん……ねえパパ、ほんとにその女の人、誰かに探してつて頼まれただけ?」

「そうだ」

「それにしちや必死すぎない? 何年もかかって探すとかさ、普通やんないっしょ?

あー、でもあれか……もしかしてパパがいる組の関係?」

「さあな、推測するのは自由だが、言う気はない」

「……ねえパパ」

「なんだ」

先ほどまでと違い、少し真剣な顔になる鈴谷。

短い付き合いだが、あまりこういう顔を見たことはない。

「霧島組にさ、ある程度お金払えば、探すの手伝つてくれると思うよ?」

「ああ、向こうさんにも言われたよ。けどそんな金は——」

「鈴谷が出したげよつか?」

……危険な表情だ。

こういう顔をした女を、山ほど見てきた。

相手に尽くしたい、必要とされたい、愛されたい。

そのためなら、自分が持つてるもの全てでも差し出せる。

山ほど男を手玉にとつてきたであろう鈴谷でも、こういう顔をするらしい。

まあ演技の可能性も当然あるが……。

「結構だ」

「えー、なんでなんで、絶対その方が確実だよ?」

「もし女が既に島の外に行つてたら、金借りたままだと追えないだろ」

「べつにいいよ、ついてくから」

「はあ? ……あのなあ、別に自分の金をどう使おうが勝手だが、男に貢ぐなんて最悪の

使い方だ。お前だつて見たこと無いわけじゃないだろ、男に入れ込んだ女の末路」

というか、路上の花売りの何人かに一人はその類いだろうに。

「そお? 好きな人に戦果を捧げるのつて、めちやくちや気持ちいいんだよ?」

「……救えんな、女つてのは。アホの極みだ」

「なにそれひどーい！」

頬を膨らませる鈴谷を無視して水を飲んでいたら、ラーメンがやって来た。

こここのところ朝にパンを食ったら昼は抜いて、夜は帰りに買った冷めた弁当をホテルで食うサイクルだった。

見かねた鈴谷がホテルのサービスの使つてくれと言つてきたが。

この生活がどれだけ続くかわからない以上、へたな贅沢に慣れると後がづらい。

当然何年かかっても見つけるつもりではあるのだが。

その為に手持ちの金は、なるべく温存しないといけないからな。

とはいっても、やはりどこかで英気は補充しないといけない。

むしろ本当にたまにであれば、多少の贅沢はした方が効率が上がる。

なので温かい食事は久しぶりだ。

「あ、そうだパパ、あのね——」

「後にくれるか。久しぶりに座って食う温かい飯なんだ、ゆっくり食わせてくれ」

「あ、ごめんごめん。じゃあ待ってるね」

そう言つて鈴谷も一緒に来た同じラーメンをすすする。

遊び慣れた軽い見た目とは裏腹に、物を食うその動作はやけに上品だ。

いまだによくわからないが、もしかしたら元々はどこかのお嬢様だったのかもしれない。

家が没落したが、その身ひとつで這い上がってホテルのオーナーになったって経緯があつたとしても、いまなら驚かないだろう。

「で……なにを言いかけてた」

食べ終えて一服しようとしたが、店内禁煙の張り紙を見て気がそがれる。

いい街なんだが、繁華街まわりの飲食店ですら禁煙になつてゐる場所が多いのは、未だになれない。

「えつとね、さつきパパがトイレ行つてるときに、霧島組の使いの人が来て伝言もらつたの。キリュウちゃんが話があるから事務所来てほしいんだつて」

「そういう大事なことは早く言え……」

「パパの願いと、パパとゆつくりご飯食べる方が大事じゃない？」

「大事じゃないだろ……」

しかしなんの用事だ、なにか手がかりがあつたのか？

と、良い内容の可能性を思い浮かべてみる、が。

あいにくと俺の勘は、嫌な予感を告げていた。



霧島組の繁華街支部についてすぐ、前と同じ場所に通される。

だが、前回と違い空気はかなり重い。

なぜかついてきた鈴谷と一緒にため、幾分中和されてはいるが、それでもだ。

空気が重い理由のひとつは、前と同じ場所に座る白スーツの男。

その後ろに、前と違い何人かの舎弟らしき男たちが立つてこちらを睨んでいるからだ。

おまけに部屋の奥の方では、ゆらゆらと動く日本刀が見えた。

馬鹿でかい椅子に座って後ろを向いているため、背もたれに身体が隠れているが。

アレはおそらく若頭クラスの人間が、日本刀の手入れをしているのだろう。

つまりあそこに座っているのは、正真正銘、霧島組の幹部。

薄ら寒いモノが背中中に走るが、まずは目の前の男、キリユウに挨拶だ。

「遅くなりました、それでご用とは——」

「昨日あんたの組のヤツが事務所に来た。……いや、かつてあんたが『いた組』といったほうがいいか」

硬く低い声で、キリユウが俺の言葉を遮るように口を開く。

そして内容は短く、簡潔で、最悪のものであった。悪い予感が当たった、しかも二重の意味で。

「まあ座れ」

促されたため、軽く頭を下げたソファに座る。

気を遣われたわけではなく、ゆっくり話をするためでもなく。

逃走防止のために座らされた。

さすがにそれに気がつかないほど馬鹿じゃない。

キリユウはちらりと、俺の背後に立つ鈴谷を見た。

つられるように俺もそちらに目をやる。

驚くことに鈴谷は、最初に会ったときに見た、あの目をしていた。

それは歳不相応の、冷酷にこちらを品定めするような据わった目つき。

だがそれはいま、俺ではなくキリユウに向けられている。

キリユウは鈴谷を座らせるかどうかを考えているのだろうか。

少し間を置き、やりにくそうに頭を掻いた後、口を開いた。

「まあ俺の腹ん中はともかく、あんたは個人で来てることにしてくれとキチンと言ってた。だから別にそのことであんたを責めたりはしねえさ。俺が勝手に深読みして、あんたに肩入れしただけだからな……」

キリユウの感情としては善意を利用されたことの怒りが半分。

単純にしてやられたことの悔しさや憤りが半分といったところか。

「何度も言うが、そつちは呑み込んでやる。だけどな、そうなるとお前が元いた組相手に、こつちがどういいう話をしたか、いちいち言つてやる義理もなくなるわけだが……」
まずい、想像はつくが、その情報は今の状況で喉から手が出るくらい欲しいものだ。
この状況をどう切り抜けるかも当然あるが、この後どう動くかはそれ次第になつてくる。

「……だけどまあ、あんたの後ろに立つてるそちらの人と、地元の兄弟つてとところに免じて最低限のことは教えといてやる」

そちらの人、それが鈴谷を指していると気付くのに少し時間がかかった。

振り返ると鈴谷は少しづつが悪そうに目をそらす。

一瞬ものすごい形相で、キリユウをにらみつけていたように見えたが。

気にはなつたが、いまはキリユウの話が先だ。

俺は深々とその場で頭を下げて、感謝を示す。

「俺も甘いな、つたく。……まずだ、ここに来たのは、あんたが元いた組の奴らが三人。うち一人は女に刺されて金を持ち逃げされた本人だ。

女に逃げられて、おまけに刺されて金取られるなんざ恥以外のなにもんでもないが

な、隠すことなくそのところもキチンと話して、払うもんも払ってくれたよ。まあそこまで筋通されちやこつちも応えないわけにもいかねえ」

三人……いや、幹部であればもう何人か連れてきている可能性が高い。つまりいざというときに、俺一人で荒事対応するのはほぼ不可能。

「だから教えてやったのさ。そいつらが探してる女の状況と居場所をよ」
「え？」

どんどん状況が悪くなる情報が積み重なる中。

それを越える、とびきりに最悪なことを告げられた。

「じつはあんたが捜してる女の居場所や状況については、既にある程度手に入ってたのさ」

「な!？」

「くくく、最初にいったらどう？ 払うもん払えばいい情報屋紹介してやるって。金剛連合会で一番情報に強いのは比叡組でな。ちと手間だが、じつはそっち通せばある程度の情報はすぐ入ってくる」

何で教えてくれなかつたんだという怒りが一瞬わき上がった。

が、先に騙すような真似をした以上、こちらの方が悪い。

俺の驚きと悔しさがにじんだ顔を見て溜飲が下がったのか、キリユウは愉快そうに頬

をゆがめる。

「女の居場所、知りたいか？」

「……それをタダで教えてくださいと言えるほど、面の皮厚くはないつもりです」

本音を言えばなにがなんでも知りたい情報だが。

さすがにそれを要求出来る状況じゃない。

キリユウは「結構結構」と愉快そうに呟き、話を続ける。

「まあ安心しな、場所がわかかってるって言っても、事情があつてあちらさんはまだ女に手が出せない状態だな。いまはこの繁華街にあるホテルで、こつちの追加情報を待つてる状態だ。まあ、それを伝えた後にどうなるかは、あちらさん次第だが」

首の皮一枚、繋がった。

だが、悠長にしていられる状況でもない。

「それでちよいとまけてやるのを条件に、相手さんにあんたのことを聞いたのさ。そしてたら驚いたぜ、知っちゃいるが二年以上前にとくに組を抜けたって言うじゃねえか。しかも金がないからって、代わりに指を詰めてな。」

まんまと騙されたぜ、なんせあんたの指は全部きちんとしてるんだからよ。つまり

その小指……義指かい？」

「ええ、そうです」

左の小指を掴み、強く引く。

すぼんとキャップのように被っていた小指の義指がとれる。

コイツを落としたときは涙が出るほど痛かったが。

それでも、やるしかなかった。

「そうかい……。まあ、教えてやれるのはここまでだ。そもそも、あんたいまは堅気かも怪しい風来坊みたいなもんだろ。そつちの人がいなくなったら、とつくに事務所から叩き出してる」

「……おっしやるとおりです」

どうやらここまでのようだ。

ただ状況は確かに悪いが、最悪ではない。

実際に叩き出さないので、いま、俺が自ら出て行けと暗に示してのこと。

霧島組との関係はここまでだが、五体満足でこの事務所を出られるのは大きい。

最悪この身体ひとつあれば、勝率は低い、相手と刺し違えることもできる。

そうと決まれば、早いほうがいい。

「キリユウさん……。短くも数奇な縁ではありましたが、自分のような者によくしていただき、本当にありがとうございました。今世でお返し出来るかはわかりませんが、このご恩は生涯わすれません」

「ん、お、おい」

キリユウに頭を下げ謝罪する。

実に極道らしいいい男だった、得にもならないのによくしてもらった。

本心で申し訳ないという気持ちかわき上がるが、いまは時間がない。

そして鈴谷の方を向き、頭を下げる。

「さんざんお世話になったっていうのに、あなたの顔に泥を塗ってしまい、誠に申し訳ありませんでした。同じく今世で返せるようなものはありませんが、このご恩は生涯忘れません」

「へ？」

ぼかんとした様子の鈴谷。

なんだかんだでこいつにも世話になった。

変な縁ではあったがここまでだ。

これ以上俺に関われれば、本当に危険なことになる。

一抹の寂しさを覚えるが、やはりいまは時間がない。

この繁華街にあるホテルは少なくともはないが、ここ数日である程度把握もしている。相手の格を考えたら、ある程度数も限られてくる。

いや、この事務所を張って、出てくる人員の後をつけてもいい。

やりようはある、指の一本や二本ではすまないだろうし、最悪命も取られるかもしれない。

だが、まだ出来る事はある。

腰に差しした匕首の感触を確かめるように、軽く握る。

いよいよ後はなくなってきたが、その分腹も括りやすい。

「おいおいおいおい、まだ話は終わってねえぞ！」

「はい？」

「焦りすぎだ、ったく。いや、もったいぶった言い方した俺のせいか……まあ落ち着け、その上で、こつちにとつても、そつちにとつても悪くない提案があるんだよ」

よほど焦ったのか、キリユウは中腰になって引き留める手をこちらに伸ばしていた。

俺はそれを見て冷静になり、ソファアーに座り直す。

キリユウは俺が腰を下ろすのを見て、コホンと一つ咳払いをしたあと、遅れて腰を下ろして話を続ける。

「あんた、元の組織にいたときは花屋の店長として、中々にいい仕事してたらしいじゃねえか。それだけじゃねえ、女勧誘したり、逃げた女連れ戻したり、色々と手広くうまいことやってたつてな。人捜しのノウハウもその辺で身につけたんだろ」

「ええまあ。女の扱いについてはそれなりに素質があったみたいでして……」

「それだけじゃねえ。悪いがこの一週間のあんたの動きを見張らせてもらってたが、たいたもんだった。堅実とかストイックって言うのかね、こつちの世界でああいう事が出来るやつは中々いねえもんだ」

おそらく褒めてくれているのだろうが、意図が読めない。

キリユウはいつたい、なにが目的なのだろうか？

「男を売る商売としては地味かもしれねえが、その一方で、信頼に足る堅実な仕事ができるつてのは、言い方はよくねえかもしれねえが……需要がある。

でだ、別の組にいるならちよいと面倒だったんだが。まあ、幸か不幸かあんたいまフリーなわけだろ……それでだ、俺と杯を交わして兄弟分にならねえか？」

「……………はい？」

「俺みたいな男はどうにも脇があまくなつちまう。その点、あんたみたいなのがいてくれりゃあ心強い。そりゃ探せばその手のやつは幾らでもいるかもしれねえが、こつちの世界の生き方知つてて、同郷出身、おまけに気が合う男つてなるとなかなか……」

天下の霧島組といえど、最近は人手不足なのだろうか。

いや、話を聞くにかなりこちらを買つての提案のようだが。

ただ島の外の組織とは、形態やしきたりが違う可能性もある。

いやいや、外地出身のキリユウが、兄弟分になると言う事の意味を間違えるだろうか。

……本気か？

「さすがに五分の杯とはいかねえが。俺の弟分になれば、あんたがいま抱えてる問題も、全部引き受けて面倒見てやれると思うが……どうだ？」

正直、かなり悪くない提案に思える。

なにか裏がある可能性も当然あるが、霧島組の若頭補佐の下につけば、外地の組織相手でも充分相手にできる。

当然リスクはあるが、本当に女を先に見つけて問題を解決出来るなら安いものだ。

……しかし、もし万が一にも女が島の外に逃げたら？

そうなったら、鈴谷に金を借りるのは比べものにならないほど、追うのが難しくなる。

当然そうなったらキリユウもある程度融通を利かせてくれはするだろうが……。

「……まあ時間がないとはいえ、多少は考える時間も必要か」

俺が悩んでいるのを見かねたのか、そうキリユウが口にする。

畳みかければ落ちただろうに、甘い……いや、懐の深い男だ。

「そうだな、じゃあ待つてる間にでも、あんたの事情を聞かせてくれや。

それ次第じゃ、条件のほう譲歩してやってもいいし。おもしろい話ならもうちつとこつちの情報をやってもいいぜ」

前言撤回。

俺を欲しいと言うのは本音だろうが、どうやら俺の事情に興味があるのも確かである。

変なところで好奇心が旺盛なのだろうか。

だがまあ、確かにどんな情報屋だろうと、そのところはわからないか。

「わかりました、お話しさせてもらいます」

時間はないが、時間を稼ぐ必要はある。

馬鹿にされ、嘲られ、呆れられる類いの事情ではあるが、その為なら幾らでも話してやるさ。

「……捜してる女ってのは……俺の娘なんです」



かつて、ほとんどの男がそうであるように。

俺にも女とやりたくてやりたくてしようがない時期があった。

そして幸か不幸か、煙草や酒を覚えるよりも早く。

俺はある人のおかげで、女の味を知ることができた。

その人は地元の花屋で働いていて、結構な稼ぎ頭だったらしい。

彼女はある夜、街をさまよひ歩いてた俺を見つけて声をかけてきた。

まあ、その人にしてみれば気まぐれだったのだろう。

あとはまあ、なすがままってやつだ。

気がついたらドツブリさ。

向こうはプロだから、こっちはもう夢中だよ。

たまに無茶なお願いをされたりしたが、俺が渋ると決まっってこう言った。

『私で童貞捨てたくせに』

これを言われると、なにも言えなくなった。

思えば、どこか鈴谷に似た女だったな。

こつちを手玉にとるのがうまいというか。

まあ、そういう女だった。

二ヶ月ほどだったかな、その関係が続いたのは。

で、ある日パツタリさ。

店を辞めて余所の地域に移ったのか、足を洗ったのか。ガキながら必死に探しはしたけど、見つかるわけもない。

俺はその時知ったよ。

女つてのは自分勝手に、こつちを好き勝手にして。

飽きたらポイって捨てちまうような奴らなんだつてな。

いまにして思えば若かった。

女には女の事情つてのがある、それが理解出来なかつたのさ。

そして何年かたつて、奇跡的に学校も卒業して。

まわりのその他大勢の馬鹿同様、俺は地元の組織に入った。

他より経験があつたからか、女の扱いがうまくてな。

気がついたら花屋にまわされて、それからずーっと、女の世話ばかりだった。

面白いことにまわされたのは、あの女が働いてた店だった。

ともかく、花屋つてのは正直そつちの世界で出世できるような場所じゃない。

ずーっと、組織の下っ端としてせつせと働いて、女から絞った金を組織に納める毎日

さ。

そんな仕事だからか、女房や子供を持つとうと思えなくてな。

気がつけばずっと独り身だ。

そんなある日だよ、近くに新しい飲み屋ができたってんでいって見たのさ。

ビックリしたぜ、俺の童貞食った女が働いてた。

随分歳いつてたけど、間違いないくあの女だったよ。

苦労したのか、シワ隠すために凄い厚化粧しててな。

もう四十も過ぎてるだろうに、若い女に交じって頑張ってた。

俺を見て驚いてたけど、まあこつちも客だ。

他に女を指名するような客も居なかったから、ずっと俺の相手することになつてな。

といつても、別になにか恨みがあるわけじゃねえ。

けどなんだ、どうにも気になってしょうがなくてな。

毎日毎日、仕事終わりに通つたよ。

向こうもちよつとずつ、身の上話をするようになってな。

実は娘がいる。

親子二人三脚で頑張ってきた。

ただ、娘がこつちの世界で働き出した。

おまけに変な男と付き合ってる。

そんなことや、これまで色々苦勞した話やらを聞いたよ。

でな、ある日女が血相を変えて俺の店にやってきた。

聞けば、娘が付き合ってた地元の組織の幹部刺して、おまけに金を持ち逃げしたってな。

男と女だ、なにがどうして、どっちが悪いなんてのは端からはわからん。

ただ問題は刺して、金を持って逃げたってところ。

どっちかだけならまだなんとかなったかもしれない。

だがその両方だと、向こうにも面子があるから絶対に見つけなきゃならない。

だから血眼になって探してらって話で、見つかったらどうなるやらだ。

で、女に頼まれたわけだよ。

娘を助けてやってくれってな。

こっちとしてはそんな義理はない。

おまけに、自分の組織の幹部だ。

むしろ探すのを手伝わされる。

そう言ったんだが、女は聞く耳持たなかった。

で、こう言ったのさ。

『私で童貞捨てたくせに』

それを聞いた瞬間。

……なんだかいままでの人生が全部巻き戻った気がしたよ。

頭にかつんと、でかいもん食らったような衝撃だった。

で、それでも助けられないなら本当のことを教えてやる。

あの娘は、あんたの子供だって……な。

それ聞いて、なんていうか、そういう事だったんだって妙に腑に落ちた。

なら守ってやらないといけないって感じたよ。

それが空っぽだった俺の人生の意味だって。

年甲斐もなく思ってしまったんだろうな。

気がつけば頭真っ白になって、組を辞めてた。

娘はとつくにどこか別の地域に逃げてる。

だからこつちも身一つで追いかける必要がある。

いくらかかるかわからないが、組抜けるのに金は使えない。

女も出すといったが、向こうも楽な生活じゃないはずだ。

そもそも、俺の娘だっていうなら、俺が守ってやらなきゃいけないよな。

だって、それが父親のつとめだろうから。



「……じゃあなにか？ あんた自分の童貞切った相手のために、指詰めて組やめて、何年もその娘を助けるために探し続けているのか？」

「ええまあ、そう言われてしまうと恥ずかしい限りですが……。でもどつちかかって言う
と娘のため——」

「アホか!? おれと同年代なら、どんなに若いときに相手してもらったからって、二十歳超えた娘じゃ数字が合わねえだろ!! あんたそんなこともわからねツ!? ……ツチ、なんでもねえ」

キリユウの言う通り、娘が俺の子供である確率は限りなく0だ。

そんなことは俺も、あの女もわかってた。

でも、それでも、わかってて騙されてやろうと思っただんだ。

あの女にとつて、頼れるのが俺しかいなかっただろうから。

「まあ、なにひとつ父親らしいこととしてやれなかったんで、せめてこれくらいはと思いまして。今風にいえば『パパ活』ってやつですよ」

「バカだ、バカだよあんた……。いまさら綺麗な生き方ができるとでもおもってんのか？
さんざん女を苦界に沈めて飯くってきたくせに、いまさら女一人ために身体張るって

「どんな了見だよ……まるで損得があわんだらうが……つたく」

「……おっしゃるとおりで。……アホの極みというやつですかね」

鈴谷や男に入れ込む女のことをアホだ馬鹿だと思つてはいたが。

よく考えたら、俺も人のことは言えんな。

「全然そんなことない……カツコイイよ」

すつと肩に手を乗せられる。

振り向くと鈴谷が、少し目尻に涙をにじませながら、こちらを見ていた。

「鈴谷そういうのなんて言うのかよくわかんないけど、凄くカツコイイ……」

いままで一切話に口を出さなかつた鈴谷。

それは自分が口を挟めばややこしくなるからというのを、きちんと理解してのことだ。

ただ、だとしても、それを言いたかつた。

そんな想いが伝わってきた。

「『任侠』って言うのよ」

「へっ？」

「その手の生き様のこと、任侠つて言うの。このご時世じゃ絶滅危惧種みたいなもんだけどね」

気がつけばそこに少女はいた。

ただそこに居るだけなのに、異様な存在感。

左右に髪をくくった髪型、ツインテールというやつだろうか。

黒いスーツに黒いシャツ、ネクタイも黒い。

ただ、左右の髪を束ねるリボンだけが白く、それがよりいつそう違和感を抱かせる。

そしてその後ろには、同じような年ごろの少女がもう一人。

そこらの中学校で委員長でもしてそうな見た目だが、同じく黒いスーツに黒シャツの姿。

極道の事務所にはひどく不釣り合いな存在。

ただ、先ほどまで座っていたキリユウが立ち上がり、少女にたいして直立不動の姿勢をとっていることから。

相手が霧島組の若頭補佐よりも、格上の存在だと相対的に理解出来た。

『艦夢守市の組織は艦娘と呼ばれる女の姿をした化け物がトップを張っているはずなので、おそらく組長ではないはずだが』

過去の自分の考えが脳裏に蘇る。

そして目の前の少女、情報が噛み合い一つの答えを出す。

つまり、これが……艦娘。

「か、カシラに本部長……」

「鈴谷がついにこじらせて、おかしな事でもやり始めたかと思っただけ。自分の提督でもないその男を、あんたが気に入った理由はなんとなくわかったわ。なるほどねえ……」

もつたいぶるような動作で、ゆっくりとこちらに近づいてきた少女。

咄嗟に立ち上がり、キリウウと同じような姿勢をとる。

「話は聞かせてもらったわ。個人的にその心意気は買ってあげたいけど、だからって組を抜けた外地出身の風来坊の為に、タダで仲介人やってやるほど、こつちも善人じゃないのよ。霧島組長ならワンチャンあったかもだけどね。つまり結局のところ、力貸して欲しいなら払うもん払ってもらいましょってことよ」

どこか渴いた目で、ドライな言葉を口にする少女。

いや、先ほどのキリユウの眩きを信じるなら、彼女が霧島組の若頭なのだろう。

そして、その後ろに影のように立っている黒髪の少女が本部長。

「キリユウ」

「はっ、はい！」

「あんた向こうの組織にいくら積まれたの？　あと持ち逃げされた額っていくらくらいよ」

「さ、三百です、積まれた分です。持ち逃げは百行かないくらいと聞いてます」

「まあそんなもんか。後は治療費と手間賃考えて、二千も積めば手打ちにできるでしょ。

向こうの格的にもうちと揉めてもいいことないだろうし、むしろ渡りに船なんじゃない？」

ああ、あと霧島組の仲介料は千よ。つまり三千出せば、あたし預かりでなんとかしてあげるけど……どうする？」

くるりとこちらに振り向く若頭。

話が早い、ついて行けない部分もある。

だが相手の話し方は、時間をかけて安いシノギをやるのは割に合わないといった、シビアな感覚をもった極道のテンポだ。

ここで下手に値引き交渉したり渋るとバツサリといかれる、絶対に引けない。

それに霧島組の若頭が仕切る仲介であれば、格的にも確実に話はつけられる。
ここだ、のるのはここしかない。

「三千、すぐには用意出来ませんが、どんなことをしてでも、必ず耳そろえてお支払いさせていただけます。できなきや指三本、キツチり落としてケジメつけてください」

「指もらつてもつて言いたいところだけど……どんなことをしてでもつていうのは、極道にもどつてうちで働く覚悟もあるつてこと？」

「はい、お役に立てることでしたらなんでも」

「そう、確かに覚悟はあるようね……。キリユウ、あんたこの男欲しかったんでしょ、代わりにあんたが三千出す？」

「出します。三千でこの男が手に入るなら安いもんだ」

「そう、なら——」

「ちよつと待ちなさいよ!!」

良い形に話がまとまりそうなところで、突然鈴谷が大声を上げた。

鈴谷は顔を真っ赤にして目や唇をゆがめ、若頭とキリユウたちをにらみつけている。

ちよ、おま、ぼツ!?

「さつきからなに勝手に話進めてるの? なんで鈴谷おいて話進めてるの? 指三本?

三千? ふぎけないで!! 絶対絶対嫌!! パパは鈴谷のだもん!! 指一本どころか髪の毛一本だつて絶対誰にも渡さない!! お金なら必要なだけ鈴谷が出す!! だいたい三千つてなによ、馬鹿にしてんの!? 鈴谷ならその十倍でも百倍でも出すよ!! 陽炎、親潮!! 鈴谷のホテル欲しいつて前言つてたよね!? どれでも好きなの好きなかだけあげるから鈴谷に払わせて!! だってその人は鈴谷のなんだから!!」

とんでもない勢いでとんでもない内容をまくし立てるように叫ぶ鈴谷。

やばい、なんども見たことがある、女がテンパツてヒスつたときの感じだコレ。完全に認識を誤っていた。

鈴谷のやつは、想像する何倍も俺に入れ込んでいたようだ。

というか、いくら関係者らしいからって、霧島組の面子相手にその啖呵はアカン。終わった、本気で終わった、え、あ、え、これどうするんだ……?」

「……………あつ」

「……………あつ」

「「……………あっ」」

頭の中が真っ白になって、思わず念仏を唱えそうになったのだが。

霧島組の面子、若頭に本部長、そしてキリユウ、まわりの組員までもが間の抜けた声を上げた。

そして各々が手を頭に当てて天を仰いだり、両手で顔を覆ったり、どこか遠くを見たりと。

まるで現実逃避をするような仕草をした。

「…………いきなり話が簡単になったけど、その倍くらいややこしくなったわね」

腕を組んで天を仰ぎながら、若頭がそうこぼす。

背後の本部長も、あーあ…………って様子で、斜め上方向を見ている。

そして両手で顔をおおってなぜかシクシクと泣くような声を出すキリユウ。

慰めるようにキリユウの肩に手を置く組員たち。

最後にとうの鈴谷は真っ赤な顔でうつむいていて、お前、もうお前なんなの。

「別にホテルとかイイから。鈴谷、あんたが三千出しなさい。いつとくけど3kとかじゃないからね、三千万だから、間違えないようね」

「え、あ、うん。それは大丈夫……」

すつと最初に正気に戻ったであろう若頭が、話を進める。

まつて、おいてかないで、どうなってるんですか。

「キリュウ。向こうが二千で渋るなら、うちの千から上乗せしなさい。この件はあんたに任せる、私の名代として、向こうとキツチリ話つけてきなさい。必要なら荒事になつてもいいけど、そつちの男には絶対とばつちりがいかないように、いい？」

「……はい、承知いたしました」

「はい、じゃあさっさと動く。親からのわび入れつてことなら筋も通るでしょ。そもそも、その逃げた女つてのが、艦娘にかくまわれてるといふか、陸奥の店で働いてる時点で市籍持ちに手を出す以上にどうしようもない状況になってんだから。向こうも渡りに船だろうし、喜んでのつてくるでしょうが」

まるでついて行けない俺を余所に、話がどんどん進む。

というか、女というか、娘はどうやら艦娘にかくまわれていたらしい。

あれ、それつてつまり、俺はなにもしなくてよかつたのか？

「なに、あたしが仲介に立ち会わないのが不満？」

「い、いえそんなことは……」

「いいっていいって」

若頭の言葉が呑み込めず、彼女の方を見ていたら、なにか勘違いをされてしまったらしい。

マズイと思い、すぐに頭を下げる。

「立ち会つてもいいんだけど、このナリじゃ無礼られちゃうから。かといつて、いちいち外地の人間に艦娘だつて説明するのも億劫なのよ。説明の度にわざとチャカで撃たれたり、相手の腕折つたり、なにか壊さなきやいけない気持ちわかる？ そんなことしたら、まとまるもんもまとまんないわよ……ねえキリユウ？」

「いえ、その節は綺麗に折つていただいて。かえつて頑丈になりました、はい……」

え、キリユウさんの腕、折られたの？

そつか、そうだよね、まあ、そうなるの……か？

「ていうか、なんかもうめんどくさいし鈴谷が全部プチツとしてこようか？」

「あーやだやだ、堅気の艦娘さんつてのは、なんでもすーぐ力で解決しようとする……」

「極道さんに言われたくないつてのツ!!」

「そもそも『めんどくさく』したのはあんたでしょうが……なんで最初に自分の提督だつて言わなかったのよ……」

「シー！ そのことはまだ黙っててよ……だってその、恥ずかしいじゃん……もう、わかんないかなあこの気持ち」（クネクネ）

「はあ？ なに純情気取ってんのよ、ビッチのくせに」

「鈴谷ビッチじゃねえし!？」

鈴谷と若頭がなにか話している気もしたが。

既に情報過多となって、オーバーヒートしていた俺の頭にはなにも入ってこなかった。



交渉、正確にはわび入れがまとまり、車で去って行く元の組織の面々を見送る。

相手側は終始、俺を見て何か言いたそうな顔をしていたが。

話がややこしくなるのを怖れてか、最後までなにも言ってこなかった。

あと刺された組幹部の男は、最後に見たときよりもかなりげっそりとしていたな。

交渉がまとまり、ホツとしたように気を緩めた姿は妙に印象的だった。

じつさい向こうも、艦守市で下手に動きたくはなかったのだろう。

だが男を売る商売な以上、女に落とし前つけさせないわけにはいかなかった。

ただ蓋を開けてみれば、あいては艦夢守市の市籍持ちとなっており、下手に手が出せない。

おまけに、艦娘にかくまわれてると知ったときは、この世の終わりのような表情だったとか。

俺がこの二年、放浪するようにあちこちを巡って色々とおったように。

あちらはあちらで、色々とおったようだ。

しかし一時は切った張ったや、最悪命賭ける覚悟してたというのに。終わってみれば割とあっさりど解決してしまい、肩すかしの気分だ。

まあ、俺らしいっちゃ俺らしいか……。

「パパこれからどうするの?」

ずっと後ろに立っていた鈴谷が、俺に声をかけてくる。

いつのまにか、こいつが常に傍にすることが当たり前になってしまってるな。

「当分の間はこの街にいるつもりだ。相手が諦めてない場合もあるし、しばらくは睨み利かせないといかんからな」

「ふーん。じゃあキリユウちゃんどこにお世話になる感じ?」

「いや、もう極道はこりこりだ。それに……」

「ん?」

振り向くと、鈴谷が不思議そうに首をかしげてこちらを見ていた。

正体不明で謎の女、鈴谷。

俺はこいつに三千万の借りがある。

安くない、こいつにとつてどうだろうと、俺にとつては。

「切った張つたの商売じゃ、あの組幹部みたいに、いつブスツと刺されてあの世行きになるかもわからんからな……そうなつたら、返すもんも返せん」

「はあ!? そんなの絶対駄目だし!!」

「そうだな……だからなにか仕事を紹介してくれないか?」

「え、いいの!? じゃあ鈴谷の仕事手伝つてよ!!」

「お前の仕事っていうと、ホテルの勧誘とかか? まあそれなら慣れたもんだとは思うが……」

あまりいい仕事ではなかったとはいえ、昔の経験が役にたつなら、いまはありがたい。なににせよ恩のある鈴谷の仕事を手伝えるなら、それはそれで丁度よかつたか。

「じゃあ借りた金はその仕事で返させてもらう。……でもな、それとは別に恩もできたわけだが……取り急ぎ俺が用意出来そうなもので、恩返しになるような、なにか欲しいものあるか?」

「うーん、前と同じく別にいいよって感じだけど。じつは鈴谷、いま一つだけ、

とーとーとーつても、欲しいものがあるんだ」

「なんだ、三つじゃなくて一つか、今回は慎ましいな……でも俺に用意出来るもんにしてくれよ？」

「うん、むしろパパにしか用意出来ないものだよ」

「……まあいい、言ってみろ」

俺の返事を聞いて、鈴谷は恥ずかしそうに身体を左右に揺らす。

つられるように深い翠玉色をした長髪が揺れ、太陽の光を反射して輝いた。

鈴谷はしばらくそうやって身体を揺らしていたが、意を決したように俺を見つめる。

「えつとね、ていと……コホン。パパの残りの人生、鈴谷に全部チャージダイ！」

そして嘘か本当かわからないような調子で、しれつととんでもない要求をなげつけた。

おねだりにしては重すぎる、どんな高級な嬢でも、もうちつと加減するぞ。

……しかしよく考えれば、こいつはなにかしらの手段でホテルを手に入れた女だったな。

そう考えたら、鈴谷にとって俺の残りの人生なんざ安いモノなのだろう。

それに借りてる額を考えれば、返済にはそれ位かかりそうでもある。だが、それはそれとしてもだ。

改めて、俺は自分の直感と経験は間違つてなかつたと痛感した。

やはりこの手の女に借りを作ると、馬鹿みたいに高い代償を払う羽目になる。

『パパ活男』と『重巡：鈴谷』

おわり

『雷巡：北上』と『雷巡：大井』

「ねえ大井っち、本当にアタシたちにできると思う？」

「なに言ってるんですか北上さん、できるできないじゃなくて、やるんです」

「いや、そういう言葉遊びはいいからさあ」

「しつかりしてください北上さん。このためにわたしたちは、めんどろな手続きを終えて夫婦になつたんですよ？」

「うっ……それを言われると……」

「そもそも、ここで帰るなんて選択肢はないんですから、覚悟を決めてください！」

「まあ、そりやそうなんだけどねえ……ほら、そもそもうまくいくかわからないしき」

「そこは正直わたしも不安がないといえば嘘になりますけど……でも、わたしと北上さんならきつとうまくやれるから大丈夫ですよ！」

「でもさあ……あ、ついちゃった……この部屋だよね？」

「そうですね……あの、入らないんですか？」

「いや、なんだか緊張しちやって。大井っち、ドア……開けてくれない？」

「もうっ、しょうがないですね」

『雷巡：北上』と『雷巡：大井』

「……親ってなんだよ？」

「中々シンプルに核心つく質問がきたね……はい、大井っちどうぞ」

「ええ!? えっと……そうですね。世間の一般的な意味だと、養育する子供の優先順位をなにもおいても高く扱う存在でしようか」

「ゆうせんじゆんい？」

「他の誰より、アンタのことを一番に考えて行動してあげるってことよ」

「……よくわかんねえ」

「まあそれはおいおい知っていけばいいことで。そんなわけです。さうだ目をして
いる少年。今日からアタシたちがあんたの身元引受人改め保護者、つまり『親』よ。よ
ろしくね。」

「……なんでだよ」

「理由はいろいろありますけど、一番はあなたと血の繋がったおじいさんに頼まれたか
らですよ」

「そういうこと、普通なら断るんだけどね。」

「あなたのおじいさんね、わたしたちの『提督』だったの」

「提督?」

「まあそのへんも家に帰ってからおいおい教えてあげるわ。」

「大丈夫、えらい人たちからの許可だったりしちゃんと取ってありますから。わたした
ちと一緒に行きましょう」

「ここよりもマシなところなのか?」

「ここ暮らしはよく知らないけどね。まあお望みとあらば、ここよりもおいしいご
飯とふかふかの寝床を用意してあげようじゃないの」

「……わかった、あんたらについて行くよ」



「そんなわけで、アタシらが看護婦として働いてた病院に運ばれてきたのが、あんたのおじいちゃんだったわけさ」

「あなたの祖父にあたるその方が、艦娘である、わたしと北上さんの提督だったわけですけど、入院した時点ですでに認知症が随分と進行されてね……」

「まーともかく、あんたの祖父でおいきさん……長いからこれからは提督って言うけど、若い頃は結構なろくでなしだったらしくてねー。飲む打つ買うを体現したみたいな人だったんだって」

「一応あなたのお母さんが生まれてしばらくは真面目に頑張っていたみたいですけど、結局借金もあって、妻と娘を捨てて逃げちゃったみたいですね。まあ家族を借金取りから守るためだったのかもしれないけど」

「その後もうくでもない生活してたみたいなんだけど。風の便りで、娘が父親のわからない子供……あんたを産んだって聞いたらしくてね。せめて仕送りをもってことで、老体にむち打って頑張って働いた……結果、まあ、いろいろあつてうちの病院に担ぎ込まれてねえ……そこでアタシら二人と出会って、提督として適合したのよ」

「さつきも言ったように、出会ったときには認知症が進んでいて、ほとんど意思疎通もで

きませんでしたし。一ヶ月もたたずに亡くなってしまったので、一緒にいられたのはほんのわずかだったんですけど……最後にあなたのことを頼むって、その瞬間だけはつきりと口にされてね……」

「まあこっちは寝耳に水だったけどね。それから仕事やめて、あんたたちがいるらしい外地に行つて必死に探したんだけど。ようやく見つけたあんたのお母さんは亡くなつてたし、あんたは路地裏の悪党どもにいいように使われてたしで焦つたわ。まあさんざん走り回つた末に、方々手を回してあんたを保護してもらつたわけよ」

「……なんかよくわからないところもあるけど、朝に食わせてくれた飯みたいなのをもらえるならなんでもいいよ。あの泥水みたいなやつとかうまかつた」

「おつ、北上様が作つたみそ汁のよさがわかるとは、いい舌してんじゃん」

「そりやまあご飯くらいはしつかりと食べさせてあげますし、寢床だつてキッチンと用意してあげますよ。だから安心してくださいね」

「うんうん、じゃあ事情のすりあわせが終わつたところで、まず最初にお互い呼び方を決めようじゃないの。アタシはあんたのことを……そうねえ、『マイサン』って呼ぼうかしらね。別の国の言葉で自分の息子って意味。あとほまあ……『あんた』って呼ぶことにしますか。そしてマイサンはアタシのことを『母様』って呼ぶように、よろしくね」

「わたしは『あなた』や『息子』って呼ばせてもらいますね。あとわたしも母様だとわか

りにくいので『ママ様』って呼んでください」

「……変な呼び方だな、そんなややこしいことしなくてもおれの名前……はともかく、北上に大井だっけ、その名前で呼んだらいいじゃん」

「いろいろあんのよ、いろいろね。それになによりマイサン、あんた自分の名前だいッ嫌いぢやよ。」

「名前を呼ばれるたびに、心底嫌そうにして顔を背けてましたから、バレバレですよ？」
「……勝手にしろよ」

「しっかし欲のない子だねほんと。一緒に暮らし始めて一ヶ月もたつのに、アレしたいコレしたいって聞いたことないわ。こっちはアレして欲しいコレして欲しいっていっぱいあるのに」

「安全な寝床と食事が毎日ちゃんと得られる。それ以上が望めない環境に長くいたからでしょうけど……そのせいでなにをしたらいいか、なにが欲しいかわからなくなつて

る感じでしょうか……因みにわたしは一度くらいママ様と呼んで欲しいんですけど」

「本はよく読んでみたいだけだね。まあアタシの漫画とかだけ。しつかしそろそろアタシらがある程度勉強教えて、年相応の学校に行けるようにしてあげないといけないわねえ。読み書きも満足にできないようじゃ、漫画くらいしか読めないだろうし。それとアタシもさ、そろそろ母様って呼んで欲しいな」

「……」

「てなわけでマイサンよ、あんたなんか欲しいものとか、やりたいこととかないわけ？」

「——……別にない」

「あれ、なんか妙に間があつたね。もしかしてなんかあるわけ？ よし、この母様に言ってみなさい」

「別にないって言ってるだろ」

「おうおう、口にするのとはばかられるような望みかな？ さてはアタシや大井つちのおっぱいでも揉みたいのかこのこの」

「違うよ……っていうか言ってるそばから押しつけるなよ……」

「なら言いなさいよ、このこの」

「しつげえな……いやだって！」

「あらあら、あんまり強情にならないほうが人生幸せに生きてけると思うけどねえ」

「……いいえ、強情でいいですよ」

「大井つちち？」

「意地が強いことはいいいことですよ、なにかをなすときの力となりますから。ですが……わたしたちはあなたの親です。なにかして欲しかったら、わたしたちにはきちんと言ったほうがいいです。なぜなら、その願いをしっかりと聞いてあげるのが親というものですから」

「ほほう、なるほどなるほど……というわけだマイサン、大井つちちもこう言ってくれてることだし、ここはひとつ素直にゲロつてみないかね？」

「……なに言っても怒らないか？」

「まあよっぽど酷いことや無理難題は叶えてあげられませんが、可能な限り叶えられるよう頑張ってみますよ」

「……海賊になつてみたい」

「……………マジか、海の守護者たるアタシらにそれを言うのか」

「もしかして北上さんが集めてる、あの海賊漫画の影響ですか？」

「そう、ノコギリザメの海賊が好き」

「しかもよりによってあのクソ野郎かい。アンタの将来が心配だわ」

「違う、アーオンはサメ海賊らしく生きようとしただけだ」

「サメらしくつてなによ」

「違う、サメ海賊らしく」

「ゴメンちよつと違いがわかんない」

「でも海賊をやるなら、小型のクルーザーやヨットじゃカツコつきませぬね。ツテと貯金を使えば、中古の哨戒艇くらいなら買えるかもしれないが……外装はどうしましよ？ 木板を張るわけにも……木目のシート……ペイント？ マストや帆、海賊旗とかも必要ですよね……こういうのつてアカシヤタ張重工みたいなところに相談した方がいいかしら……」

「なんで前向きなの大井っち!? いや、それよりアタシら自前なので海を走る免許はあるけど。普通の船の免許持つてないでしょ!？」

「法規は免除されるので、そこまで難しくないかと思えますよ？ 銀行の定期解約してきますね」

「いや大井っち親バカすぎじゃない!？」

「できないなら別にいいよ……」

「で、できらあ!!」

「いやー、免許とって船を用意して海に出たまではよかったけど。ほんとに略奪したり、村を支配下に置いたり、航海士脅して海図描かせるわけにはいからささ」

「同じ海賊なら好き放題できるんですが、艦守島の周りで海賊行為しようものなら、お祭り騒ぎみたいに艦連軍基地から艦娘軍人たちがとびだして乱獲してしまうので、このあたりには海賊がいらないですよ」

「そーゆーわけでさ、悪いけど木曾、ちよつと海賊になつてよ」

「見た目もそのものですから適任です♪」

「すまねえ姉貴たち……なにを言ってるのかさっぱりわからねえ!!」

「……誰だよこの人」

「ああ、この人は木曾つて名前の艦娘で、わたしたちの妹ですよ」

「血縁はともかく、立場的にはマイサンの叔母さんにあたるひとだねさ」

「眼帯してる……あんたは……海賊なのか？」

「なんでそんな期待した目でみるんだ、んなわきやねえだろ。おれは看護婦だつっの」
「海賊じゃないのかよ……」

「え、なんでこんなに落ち込んでるんだコイツ?」

「あんたうちの子になって顔させてるのよ」(低音平坦声)

「うへ? なんて北上の姉貴真顔でキレてるんだ!? こええよ!!」

「ねえ木曾、うちの子は海賊になってみたいらしいの。だからお願い、叔母さんでしよ?」

「そんな『役目でしょ?』みたいなノリで言うなよ!? 〜〜ッ!! わかったよ、やりや

いいんだよやりやあ!!」(ヤケクソ気味で艀装展開しながら海上ダイブ&着水)

「おお、改二の艀装束をまとして艀装まで装着してくれるとは……やるじゃん木曾」

「さすがわたしたちの妹ですね」

「俺に勝負を挑むバカはどいつだあ? この真の海賊であるこの俺がああああ!!
本当の戦闘ってヤツを、教えてやるよおおおお!!」(ヤケクソ×大盛り)

「……かつこいい」(ボソ)

「~~あ~~」

「なんだあれ、海の上に立ってる、見た目もヤバイ、黒いマントに金色の刺繍、サーベルとか、すごいかつこいい」(熱い眼差し)

「ふう〜くん、マイサンはああいうのが好きなのか。男の子だねえ……ふーん」

「ふふふ、わたしや北上さんの前で息子の視線を独り占めしようだなんて。うふふふ」

「え……なんだよ姉貴ら、目が怖いぞ？」

「(略奪) やつちやいませよー」

「はい、北上さん♪」

「いやまて、やめろ、眼帯をむしるな!! サーベルを、マントをとらないでくれえええええ!!」

「……母様とママ様もかっこいい」



「はく、今年のお海賊記念日改め、マイサン誕生日会も楽しかったわ〜」

「今年は球磨姉さんと多摩姉さんも参加してくれましたから、にぎやかでしたね」

「いつの間にか毎年恒例のイベントになっちゃったわね〜」

「誕生日がわからなかったこの子の、誕生日にした日ですから。お祝いになって、楽しんでくれたなら嬉しいんですけど……」

「大丈夫大丈夫、今年も楽しそうにしてたし。まあこの子が自分も海面に立とうとして

海に飛び込んで、ギリギリのところまで球磨姉さんに首根っこ掴まれたときは焦ったけど……でもほら、はしやぎすぎて体力使い果たしたんでしょ、よく寝てるじゃん」

「いくつになっても楽しんでくれるように、来年はもつとがんばりたいですね。最近はこうして川の字になって寝るのも微妙にいやがるようになってきましたから……」

「そうね……って、いまさらだけどさ。アタシも大井つちも、ずいぶんと親っぽくなってきたわ」

「なに言ってるんですか。あの扉を開けたときから、わたしたちはずっと親でしたよ」

「まあそうなだけどさ……」

「……………」

「……………」

「いまなに考えてました？」

「えー、夫婦だからって頭の中まで共有するのはちよつと恥ずかしいかな」

「あら？ 一応法律上はそうだけど、なんか恥ずかしいから夫婦って言葉を使いたくないって言ってた北上さんが……珍しいですね」

「ぬう……」

「ふふふ、変な顔してますよ北上さん……それで、なにを？」

「そう、まあ……そうね……眠ってるこの子を見てると、ちよつと提督のこと思い出し

ちやつて……一回くらいこんなふうには、提督とも一緒に寝てみたかったなつて、ちよつとね」

「……そうですね、わたしもです」

「まとも意思疎通なんかできたことなかったけどさ。なに言ってるのか全くわからなくて、すっかり目を見てるとね、なんとなくして欲しいことがわかったりするときがあつたんだ」

「確かにそんなときがありましたね……そうそう、わたしは食事介助のたびに、何度も何度も謝られたのを覚えてます」

「あはは、アタシも覚えてるわ。必ず暴れながら謝つてたね」

「随分と酷い環境で長い間働いてたせいかな、ちよつとでも怖いことがあると必死で謝つて——」

「……」

「……」

「……たぶん耐えきれなくなつて逃げ出して、艦夢守市にたどり着いたんでしようけど。ゴミみたいに道ばたに横たわつていたところを、病院に担ぎ込まれてなかつたら、きつと出会うこともなかつたつて考えると……ははは、ままならないもんね」

「もつと早く提督をみつけてあげられたらよかつた、そうしたら……」

「提督つてさ、あの見た目でアタシたちより年下だったじゃん。なのに身体は実年齢よりも何十歳もボロボロになって、どんな環境にいたのか想像もつかないけどさ……そんなひどい状態でも、仕送りだけはしっかりしてたみたいだし……まあ大したもんよね」

「それだけ……大切だった……いえ、それしかなかったのかもしれないけど。寿命を削るように働いて……正気を失って……それでも最後までこの子のことを思ってたんですから……立派でした」

「まあ、臨終の前日に『ワシの……あゝ孫！ 娘と孫をたのむ！』って、いきなり叫んだときはびつくらこいたけど……あのときだけは、やけにはつきりと喋ってたからもしかしたら調べてたら、本当だったからね」

「……ふふふ、そうでしたそうでした……でも、最後にそう命令してくれてよかったです。もしそれがなかったら……」

「なかったら？」

「……きつとあんなになるまで提督をこき使った誰かを探し出して……刑務所に入るようなことしてたかもしれません……」

「おお怖い怖い……まあ、その気持ちもわかるけどね……」

「……」

「……」

「この子がいてくれてよかった……この子は……必ず守ってみせる……」
「うんそう、そうねえ……それは間違いなく……そうだねえ……」

「……………」



「おいおまえ」

「……なんだ」

「おまえんちって、両親とも母親なんだろう？」

「……だったらなんだよ」

「なにそれ、おつかしー」

「百合ってヤツだ、やーい！ やーい！」

「……」

「グフオ!!? なんだこの野郎やんのかこの野郎!」

「この野郎バカ野郎この野郎んほお!?!」

「だいたい二対一で勝てると思って……いてッ!」

「いてててえてッ! 意外とつええぞこいつ!」

「誰が残ってるの? もう下校の時間はとづくに……あんたたちなにしてるの!」



「で、喧嘩して事情を聞いた先生に怒られて、二人はわたしたちに謝りに来た」と

「お、大井様だ……」

「あら、わたしのこと知ってるのかしら?」

「まあ艦夢守市育ちならそういうこともあるよねー。とりあえずお菓子でも食べて行きなよ、北上様特製の魚雷エクレアだぞ」

「……魚雷」

「駄目ですよ北上さん、子供たちの前で魚雷なんか出しちゃ」

「エクレアツつってんでしょ!?!」

「き、北上様だ……」

「……母様とママ様のこと知ってるの?」

「しッ、知ってるにきまつてんだろ!?」 戦史時代の提督たちが信じ崇めてた、まさに完璧で究極の雷巡!! 天才的で弱点なんて見当たらない、無敵で最強のハイパースだぞ!?
むしろなんで息子のお前がしらねえんだよ!」

「雷巡? ハイパース?」

「雷巡ってのは重雷装巡洋艦って魚雷攻撃特化の艦種の略称で、ハイパースってのは戦史時代を駆け抜けた球磨型軽巡洋艦の3番艦と4番艦の艦娘である、北上様と大井様の二人組を指す異名だよ。実際記録に残ってるだけでも、ものすごい戦果を上げてる最強の艦娘なんだぞ!」

「無敵でもないし弱点も結構あるけどね。まあ天才的で最強の一角なのは事実だけと」

「というかこの子たちやけに詳しいですね……」

「初めて聞いた……二人って最強の艦娘なんだな……」

「ええ!! 大河戦史ドラマとかで見たことないのかよ、たとえば『双雷がゆく』の38話とかマジで最高なのに」

「わかる、大井様の雷撃でひるんだ深海棲艦を、北上様がゼロ距離から『ぶっ散れえええー!』って叫びながら魚雷発射するシーンとかな」

「あー、あれねー……大井っちと一緒に見たわ。やってやれないこともないけど、あの距離から魚雷発射はさすがにないって」

「ですが普段はひょうひょうとした北上さんとのギャップもあって、なかなか心躍るシーンでしたね。俳優の娘もなかなかいい演技してました。まあ実物のほうが百倍格好良くてステキですけど♪」

「……おれだけ見たことねえ」

「おお、そんな顔すんなって」

「うちに録画したのあるから今度見せてやるよ」

「……いいのか？」

「いいんだよ、なんせおれら今日からマブダチだからな」

「そうそう、生まれた日は違うけど死ぬときは一緒だぜ」

「……あれ、この子たち喧嘩して謝りに来たんですよね？」

「子供はすぐ喧嘩するけど、仲良くなるのも早いわね」

「ほんとですねえ。でも友達ができたようで嬉しいです」

「アタシも嬉しいけどさ、変な影響受けないか心配だわ……」



「この場所はこつちが先に使ってたんだよ!!」

「なんだてめえ……年下のくせに生意気だぞ……」

「うるせえ! 一学年しか違わないのにいばってんじゃねえ!!」

「つち、生意気なガキが……潰すぞ!!」

「アニキ!! やつちまっつてください!!」

「やれやれしようがありませんね……ああ、ちなみにわたしの親は金剛連合会の関係者です。ですがもちろんフルパワー（親の権力込み）で戦う気はありませんからご心配なく……」

「でたぜアニキの得意技!! 初手で親の権力を自慢して相手の戦意を削ぐ作戦!!」

「一応言つとくと、アニキの親はマジで金剛連合会の関係者だぞ!!」

「おうおう、親の立場でマウント合戦か?」

「上等だあ、受けて立つぜ……コイツがなッ!!」

「……え、普通に殴つちやダメなのか?」

「ダメッ! さすがに二学年上はキツイ!!」

「それに見てわかるようにやつは重量級、衝突は避けるのが……得策!!」

「おれたちの頭脳担当がこう言ってるんだ、ここはまず権力勝負が最善!!」（裏方担当）

「そうかなあ……多分膝あたり狙えばいけるぞ？ それに……母様とママ様の名前気出すと、あとがめんどくさいんだよ……」（戦闘担当）

「おやおや、戦う前からママに泣きつく算段などは、男の風上にも置けませんねえ」

「さすがアニキ!! 初手で親の権力自慢しといて、いざとなったら泣きつくつもり満々なのにその言動ウツ!!」

「自分に都合のいい解釈しかしないそのスタイル、そこに痺れる憧れるう!!」

「ふふふ、おだてすぎです二人とも。ですが……これ以上逆らうようなら、母様だかママ様だか知りませんが、わたしの力（親の権力）であなたもろとも土下座することになりますよ?」

「あ、ちよ」

「おま、ば」

「……………」

—

—

—

「ほんと——に、この度はうちの馬鹿が申し訳ございませんでした……」（土下座）

「いやいや、こちらこそうちの息子が、そちらのお子さんに怪我をさせちゃって」

「い、いえ、それはこちらもですし……それに二学年も上だつていうのに、年下相手に喧嘩売つてこの有様、もうその時点で本当にお恥ずかしいかぎりです……ほら、お前も謝りなさい！」

「す、すみませんでした……」

「はい、ご丁寧にありがとうございます……というわけでほら、あんたも謝りなさい」

「は？　なんでだよ」

「切っ掛けや結果がどうあれ、あんたにも多少なりとも非があつた。だけどこうしてお相手の親御さんと本人が誠意持つて謝罪してくれたんだから、あんたも頭を下げるのがスジなの」

「スジって……おれが勝つたんだから、謝る必要なんてないだろ」

「……そう、ならアタシが代わりに頭下げるわ」

「え？」

「……この度は当家の息子が、そちらのご子息に怪我をさせてしまい、大変申し訳ございませんでした。本日不在ではありますが、母親である大井のぶんもあわせて、いまここ

で謝罪させていただきます」

「きうツ!? おおお、お顔をあげてください北上様!! 艦娘様のお子様にご怪我をさせた時点で悪いのは全てこちら側、どうか、どうか……」

「いいえ、そういう訳にもいきません。確かにわたしは艦娘ですが、それ以前にこの子の親であります。よって当然ながら全ての責は親であるわたしにあるところ。わたしとしてはしつけが行き届いていなかったことを悔い反省しております」

「——これが北上様……わかりました、謝罪を受け入れさせていただきます。この度のことはお互い非のあるところであったということ、どうぞご放念ください」
「はい、ありがとうございます。それでは今後のごことです——」

「……………」

——

——

——

「……………なんでだよ」

「なにが〜？」

「なんで……母様が頭を下げる必要があったんだよ」

「あんたが下げなかつたからでしょうが……いや、ちがうか。むかし大井つちが言ったでしょ？ 親っていうのは、養育する子供の優先順位をなににおいても高く扱う存在だって。つまり普通親つてのは、子供を守るもんなのよ」

「……別に守つてもらわなくても、あれくらい自分でなんとかするよ」

「言つておくけど今日来た親、普通の家ならそれなりに厄介なことになってたわよ。まあこつちが艦娘だから向こうも下手に出てくれたけど」

「金剛連合会つてやつかよ」

「そう、艦夢守市で一番大きな組織のひとつよ。まあ堅気にどうこうつてことはないだろうけど、それでもあそこに所属してる人たちは、表でも裏でも守らなきゃいけない面子つてのがあるのよ。だから普通はこつちから謝りに行くのがスジだったんだけど……あんたが黙つてたからややこしくなったの〜」

「でかい組織だからつてなんだよ、やってみなきゃわかんないだろ……」

「ははは、やらなくてもわかるもんもあるのよ。あんたは組織つてももの凄さも、自分の力の大きさも小ささもわかつてないし、使い方もわかつてない。まあ子供だから当然なんだけど」

「……だからってあんな奴らに頭下げなくたって」

「そう？ 向こうの親御さんなかなか強かな人たちだったわよ？ 最初は怒鳴り散らしそうな勢いだったけど、こつちが艦娘だつてわかったとたんに態度が変わったでしょ。

あれはなんでかかっていうと、子供を守る為よ。社会的な立場もあるけど……艦娘つてのは純粹に強い。昔あんたが目にした悪党みたいなのが何百人いたとしても、まともに戦ったら絶対にアタシらには勝てない、それが艦娘なの。

だからあそこですぐに切り替えて、自分が持つてるもの全部捨ててでも、子供だけは絶対を守るために土下座したのよ……悪いことしちゃったわ」

「なんだよそれ……母様強いんだろ？ じゃあやつぱり謝る必要ないじゃん」

「だから、あそこで一番よかったのは、あんたが頭下げて、その後にはアタシも軽く頭下げておしまいにすることだったのよ。でもあんたが下げないからこの北上様がめいっばい頭下げたの。」

なんでかかっていうと、まあ当然それだけじゃない部分もあるだろうけど、向こうは子供を守るためだったら、なんだってしかねないくらい追い詰められてたからよ。

対応を間違ったらあんたに危害が及ぶ可能性だつてあつたの。まあさすがにそこまではいなくても、学校だったり普段の生活で厄介なことが増えたりとね。そしてそれは向こうも同じ。

だからこつちもちゃんと頭下げて、お互いこれで恨みっこ無しにしましょうって確認しあう必要があったの。お互いがお互いの子供を守るためにね」

「……わかんねえよ」

「まあちよつと難しかったかな？」

「わかんねえけど……わかるかったよ。頭下げられなくて、おれのしりぬぐいさせて」

「いいのよ、アタシはあんたの親なんだから。まあとにかくほら、大井つちが帰ってくる前にお風呂に入ってきなさい。まだ泥が落ちてないでしように」

「……はい」

「あと、大井つちになんて説明するかも考えときなさいよ。一緒に怒られてあげるけど、なるべく怒らせないようにうまい感じのお願いね……マジで、お願い」（まあまあ余裕のない表情）

「う、うん、がんばってみる」



「あ？ 憲兵軍に入る方法？」

「なんでまたそんなのが知りたいんだよ？」

「……世界で一番強い力を持つてる組織だから」

「まあそらそうだけどさ」

「確かにそう考えると、入ってみたい気持ちもわかる」

「いちおう訂正しとくと、一番強い“人間の”組織だけどな」

（※憲兵軍は艦娘軍の下部組織で、両者をあわせて艦連軍と呼ばれている。また憲兵軍には基本的に艦娘は所属しておらず、艦娘は艦娘軍の所属となっている。例外：あきつ丸）

「でもお前には世界一強い艦娘のカーちゃんがいるんだから必要なくね？」

「二人はおれの親だけど、おれはあの人たちにとつての特別じゃないよ……あの人たちがおれの親なのは、おれのじいさんがそう命令したからだ」

「ん？ それどういうこと？」

「どうでもいいだろ……それで、知ってるのかよ」

「んー……そもそも憲兵って、鳳翔街で育つたやつらか、憲兵軍のひとりの子供がなるのがほとんどだからなあ……あーでも、艦連指定都市の市籍があればなれないこともないんだっけか？」

（※憲兵軍は思想や帰属意識の関係で、憲兵軍人の子供や鳳翔街出身者専用の採用枠があり、一般の採用枠は多くない。また鳳翔街とは艦連が運営する、孤児を養育する都市

のこと)

「市籍があれば入隊試験が受けられるってだけだな。でもふつうに高等学校卒業してからとか、二十歳超えてからとかだと、特殊な資格とかない限り、入隊試験受けてもほとんど落とされるんだろ？ ほら、なんかあの『憲兵人生』ってドラマでそんなシーンあっただろ。主人公が高等学校卒業してから入隊試験受けて、メチャクチャ大変そうだったじゃん」

「あー、あつたあつた、一回試験に落ちるんだっけ。で、特殊な組織だから入隊年齢がどうとかで焦るシーンが……アカンうろ覚えだ。もう一回あのドラマ見直さないと」

「しかも入隊してからも、ライバルで上官になるエリート憲兵様としよつちゆう比べられるんだよな。憲兵軍の専門の教育機関卒業してから入隊したえーつと、たしかあれだ……憲兵軍幼年学校だ！」

「そうそう、この学校でも十年に一人か二人進学する学校……あつ、そうだ！ あそこに入学できればほぼほ憲兵軍に入れるんじゃね!? ……って、いや駄目だ。たしか入学試験がメチャクチャ難しいんだつた」

「むずいな、激ムズだ。おまけに入学できたとしても、まわりは鳳翔街出身とか憲兵軍区画の出身者ばかりで、肩身がめっちゃせまいらしい」

「そうか……わかった。いまから先生に相談しに行ってくる」

「は？　いまの話聞いてた？」

「聞いてた、でも関係ねえよ」

「そんなに憲兵軍に入りたいのか？」

「……入らなきゃいけないんだ」

「そつか……ならしようがねえなあ、おれも一緒に行つてやるよ」

「あつ、おれもおれも。受験対策とか勉強ならまかせとけて」

「いいって、おまえらまで憲兵になる必要はないよ」

「なにいつてんだ、おれらマブダチだろうが」

「死ぬときは一緒だつて言つただろ？」

「……憲兵になったら、医者になれないだろ。将来の夢だつて言つてたじゃん」

「あまいぞ親友。憲兵軍にはな、衛生兵というものがあつてだね……さらに医官つてのになれば、軍病院の医者としても働けるんだ。まあそれじゃなくても、おれ頭いいから別にどこだろうとやつてけるし、気にすんなつて」

「……そつちは、レーサーになりたいって言つてただろ」

「あー、じつは気がついたんだけどさ。おれつて別にレーサーじゃなくて、なんか速い乗りもんを運転したいだけっぽいんだわ。ついでに裏方としてあちこち物を運んだり、サポートするみたいなの？　つまり憲兵軍に入れば、速い乗り物よりどりみどりで選り放

題つてことよ」

「ほんとに……いいのかよ」

「おう。だけど覚悟しとけよ、マジで難しいらしいからな」

「まあ少なくとも一人でやるよりは絶対いいからよ」

「……ありがとう」

「いいつてことよ」「うんうん」

—
—
—

「認めません、憲兵軍……憲兵軍幼年学校に入るなんて絶対ダメです」

「うお、マイサンの言うことならなんでもホイホイ聞いちやう大井つちが、珍しく反対してる……まあ、その気持ちもわかるけどね」

「……なんでダメなんだよ」

「ごめんね……北上様はときどき人の話が聞こえないの」

「もうっ！ 都合が悪くなるといつもわたしに説明させる！ だいたいあなた海賊にな

りたいんじゃないかったの!? そりゃ海賊に比べたら憲兵軍のほうが……いえ、それでも反対です!!」

「そうだそうだ、海賊になつて巨乳の航海士はべらせたんじゃないのか?」

「海賊なら毎年なつてるだろ! それに海賊はなつてみたかっただけで、将来海賊になりたかつたわけじゃない。あと航海士はどうでもいい。それよりなんでダメなんだよ!」

「……いろいろありますけど、一番の理由は憲兵軍だろうと入隊すれば軍人になるからです。もちろん自国や地域の財産を守つてくれる軍人の方々には敬意を払うべきですが……でもそれは、あの人たちの職務の中に、いざというときは死ななければならぬ、ということも含まれるからですよ」

「別に軍人じゃなくても死ぬときは死ぬだろ」

「もちろんどんな仕事だろうと、日常生活だろうと死ぬときは死ぬ。ですが……軍人は死ぬ可能性が高いとわかつてなお、その職務を果たさなければいけないことがある。その機会が他の仕事に比べて圧倒的に多いの。わたしたちはあなたの親で、あなたを守るように提督から願われました。だから……あなたを死という一番怖いものから守らなきゃいけないのよ」

「……結局それかよ。あんたらがおれの親をやつてるのは、提督の命令だからなんだろ。」

おれのじいさんがそう命令したからなんだろ!! おれはそんなの頼んでねえ!!」

「なっ!!」なに言ってるの!!」

「……まあ、そう、そうねえ。アタシらがマイサンの親をやっているのはその通り。あんたのおじいさんがアタシたちの提督で、そう命令されたからだわ」

「北上さん!!」

「つまりあんたのおじいさんが、もしアタシたちの提督じゃなかったら、あんたはどこぞの裏路地できつくにくたばってたでしょうね……でもそうはならなかった。それのなになが不満なのさ?」

「別に不満なんかないよ。でも、もしじいさんが生きてて、家族捨てたじいさんが、おれも捨てるってなったら……あんたらそれでもおれの親だったのか?」

「……あんたの言いたいことはわかる。だからはつきり言っておける……提督がそう望んで命令したら、アタシたちはそれに従う。それが艦娘つてもんだからね」

「もちろん、わたしたちにも意思がありますし、艦娘によってはそういう考えや価値観では無い個体もいるわ。それにその命令が理不尽だったり間違っていれば説得します。なんなら力尽くで止めることだってある……ですが、基本的にわたしたちは提督の命令を優先する。でも、だからこそ……わたしたちはあなたを守るために親になつたの」

「顔も見たことないだろうけど、あんたのおじいさんはあんたのことを大切に思ってた。」

こうだったなら、ああだったならってネガティブになるかもしれないけど……そこそこは忘れて欲しくないかな〜」

「……おれがじいさんのおかげで、二人のおかげでいまも生きてるってのはわかったよ」「そう、なら……」

「でも、それでもおれは憲兵軍に入る」

「なんでそうなるのかな〜。あの世でアタシらが提督……あんたのおじいさんに怒られちゃってもいいの〜?」

「ツ〜!! 入るったら入るんだ!! 決めたんだよ!! 邪魔すんなよ馬鹿!!」

「あつ、ちよつと!!」

「……いつちやつたね〜。夕飯までに帰ってくるかな?」

「はあ……どうしてわかってくれないのかしら」

「保護者つてのは厄介だねえ……」

「守ってるはずなのに、恨まれてしまうなんて……いえ、ともかくいまは追いかけないと」

「……ねえ大井つち。憲兵軍幼年学校に入ったからつてさ、別に必ず憲兵になるわけじゃないんでしょ?」

「え? ええまあ、任官拒否の自由はあるでしょうから」

「ならいいんじゃないかな、憲兵軍幼年学校にいかせるくらいさ」

「本気で言ってるんですか？」

「怖い怖い、顔が怖いよ大井っち。そもそもさ、憲兵軍幼年学校ってかなり難関でしょ？」

「そんなところに合格できるかはわかんないし、合格できなかったらあの子も諦めるでしょ。それにできたらできたで、それだけ凄いつてことじゃん」

「……そりゃあの歳でしつかりとした将来の目標を持つて勉強に取り組んだなら、確かに得られるものも多くなるでしょうけど……」

「いろいろ複雑だけどさ、応援してあげてもいいんじゃないかなって思うわけよ。受験まであと二年くらいあるわけだし、それまでずっと喧嘩してるわけにもいかないでしょ。あの子頑固だし、割と平気で二年間アタシらと口きいてくれなくなるかもよ？」

「うっ……それは嫌ですけど……」

「でしょ？ 海賊記念日に、マイサンが木曾や球磨姉さんに多摩姉さんたちと仲良く話してるのに、アタシらとだけ話してくれないの想像してみ？」

「……ああああああああ!!」（精神不安）

「アタシもきつついわく。だからそんなわけで、そこんとこ含めて改めて話してみましようか……あと、いきなり憲兵軍幼年学校だとか言い出したあたり、どうにも裏で糸引いてるのが（友達二人）いそうな気配がするのよね」

「ああ、あの二人ですか……って、それはともかく、早く探しに行きますよ北上さん!!」



「日に30時間の勉強という矛盾のみを条件に存在する合格通知! それこそが……ああ、光が見える……これが……ララア」

「クソツ! 裏方担当が勉強のしすぎで、またおかしくなった! ……ソオイ!」

「ぎゃふん!? ぶ、ぶったな!? 不特定多数にしかぶたれたことないのにツ! ……つは!」

「正気に戻ったか、いいから次の問題に取りかかかって……ほら、落ち着いて一問ずつな。さてそっちはどんな感じになって——」

「数字とは算数、そして数学、つまりこの公式こそがアンサー。くそ、なんでこんな問題がわからなかったんだよおれは……つまり三次元の壁を越えるための方法はブツブツブツブツブツブツ」

「ちよ、まで! その先は地獄だぞ! とうるか進路が変わっちゃう! 数学の井戸に沈むな、しつかりしろ! これが終わったらお前の大好きな体力トレーニングだぞ!!」

「もう……(頭腦的に) がんばらなくていいの……か?」

「そうだ、お前はよくがんばった。だから……もう
 $\lim_{x \rightarrow 0} n/x \parallel \infty$ 頑張りだ！」

「……そうか、あともう $\lim_{x \rightarrow 0} n/x \parallel \infty$ がんばりでおれは——」

「……」

「なんかさ、あの頭脳担当の子。じつはものすごく優秀だったりしない？」

「運動はうちの子がみんなを引っ張ってるし、教材の確保や下調べは裏方担当の子が頑張ってくれてるみたいだし……絶妙に噛み合ってますね……」

「……」

「……」

「まさかほんとに合格しちゃったりしないわよね？」

「全国の艦連指定都市から受験者があつまってきたし、鳳翔街や憲兵軍区画出身の優秀な子供たちも受験しますから、そんなに甘くはないはずですけど……」

「……」

「……」

「でもさ、なんか締め切り前の漫画家くらいがんばってるよね」

「追い詰められてると紙一重なようにも見えますけど、はい、必死ですね……」

「……」

「……」

「とりあえず、特製魚雷エクレアでも差し入れしてあげますか……」

「そうですね、わたしはお茶をいれますね……」

—

—

—

「まさか本当に合格するとは……しかもうちのムチュコたんはともかく、あんたら二人も一緒になんて……読めなかった、この北上様の目をもってしても……」

「……はい受かってしまいました」

「……ええ、受かってしまいました」

「三人同時に合否通知を開けて、全員合格してたのはさすがに……ビックリしましたね」

「……うん、三人とも受かった」

「マジでよかったよ、これで誰か落ちてたら空気最悪だったからな」

「全員落ちるよりつらいぞそれ。まあ、だからって全員受かるとは正直思わなかったけ

ど」

「学校にも連絡いったらしくて、さつき壮行会するって電話がきた」

「そりや十年にひとり受かればいい超難関に、三人同時に受かったからな」

「ぶつちやけ学校創設以来の快挙だろ。うちの親ぜつたい泣くわ、もちろんいい意味で」
「ほんとにねえ。あなたたちが一生懸命頑張ったのは知っていますが、だったとしても可能性はかなり低かったでしょうし……」

「とりあえず、あんたら二人は家に帰って家族に伝えてきなさいな」

「確かに、まずはしっかりとお話ししてきなさい、これからが本当に大変なんですから……」

「そう……そうですね、じゃあひとまずこれで」

「んじやいったん帰ります、また明日学校でな」

「あ、うん……ありがと……また……」(心ここにあらず)

「……さてさて、じゃあうちはお話ししましょうかね」

「そうですね、大事なことですから」

「……はっ!? と、とにかくこれで文句ないだろ! 憲兵におれはなる! 絶対になるからな!」

「はいはい落ち着いて……しかし、まさかマイサンがそんなに憲兵にたいして熱い思いを秘めていたなんてねえ……」

「思い直して欲しい気持ちもありますが……なにを言おうと絶対に変えないのでしようね……」

「あたりまえだろ！」

「まあいいけどさ、一個だけ教えて欲しいことがあるんだ」

「……なんだよ？　いつとくけど絶対行くからな」

「別にいまさら反対はしないけどさ……憲兵になりたい理由わけを聞かせなさいな」

「理由？　なんでだよ？」

「あんたも知つての通り、たとえ血が繋がってなくてもアタシたちはあんたの親。だから可能な限りあんたを守り育てる義務があんの。でも……あんたは憲兵、軍人になっちゃうかもしれないわけでしょ？　だからあんたがもし実戦なんかに出て万が一にもなにかがあつたとき、親としてはちゃんと、どういう理由があつたのかっていうのを知っておきたいの」

「……べつに理由なんて」

「ないわけではないですよ。この二年、目的もなくあんなに必死に勉強できるわけではない。あの二人はまあ、ちょっとわかりませんが……あなたは目的があつたはずですよ」

「アタシらは艦娘だから、身も蓋もない言い方だけど、生まれ持つて戦えるようにできてる。だから生き残る術つてのは、ある程度知ってるつもり。」

「でね、その術つていうののひとつが理由なの。どうして理由が必要かっていうと、どうにもならない状況、武器も体力も仲間もなくて、敵に囲まれてる……そんな状況でさ、それでも頑張れるか頑張れないかどうかが生死を分ける……それを左右するのが、理由”なのよ”」

「そんな状況なら誰だつて生きようとするだろ……」

「自分の命が大事だからなんてのは当然だし、本当に大事なら軍人なんかやらない。そしてどうしようもない状況で、自分のためだけに頑張れる人は多くない。だから聞かせなさい、理由をさ。それを聞いておかないと、アタシたち安心できないのよ」

「……母様がまえに言っただろ、おれは組織の凄さも、自分の力の弱さも強さも使い方も知らないつて……なら、世界一強い組織に入れば、強いから、強くなれて、できることも沢山ふえると思つたんだよ」

「……そう。あんたも男の子つてことか。まあ……しょうがないのかしらね」

「そもそも、合格したら認めると言つてしまった以上、認めないわけにもいきませんから

……わかりました」

「それじゃあ!!」

「ただし! 最初の一年は寮生活が義務づけられていますが、二年目からはうちから通いなさい。あと、一年目も毎週必ず顔を見せなさい、いいわね?」

「……う、うん」

「よし、じゃあ一先ずお風呂に入ってきたなさい。あがったらご飯にしましょ」
「わかった、入ってくる!」

「……」

「……」

「どう思う?」

「本当のことも言ってるけど、隠してることもありそうな感じでしたね」

「だよね。男ががんばる理由って、基本的に女なんだろうけどさ……あの歳でそれが理由っていうのはちょっと考えにくいわ」

「あの子を見つける前に、あの子がどうやって生きてきたかを、わたしたちはしつかりと知りません。もしかしたら、そのあたりになにか理由があるのかもしれない……」

「いつか本当の理由を聞かせてくれるのかしらねえ……ところで大井っち」

「なんですか北上さん？」

「最初の一年は寮生活ってこと、なんでしってたのさ〜」

「……合格した場合に備えて、一応調べておいたんです。確率は低かったでしょうけど、合格するかもしれない……そう思えるくらいがんばってましたから」

「そっかー」

「はい」

「……ほんととはさ、すぐくすぐく褒めてあげるべきなんだろうね」

「そうですね……憲兵軍幼年学校じゃなければ、すぐくすぐく褒めてあげたいです」

「ははは、そういうえば卒業式もそうだけど、入学式に参列するのは、はじめてだね〜」

「着物か洋服……どちらがいいんでしょうか……」

「そうねー。卒業式はアタシが洋服で、大井っちは着物。入学式はアタシが着物で大井っちは洋服とかどう？」

「……ふふふ、いいですね。そうしましょうか」



「ねー大井っち」

「なんですか北上さん？」

「あの子、何時に帰ってくるんだっけ？」

「予定では12時、お昼までには帰ってくるはずですよ」

「そつかく、あんがとねー」

「いえいえ」

「……」

「……」

「ねー大井っ——」

「予定では12時、いまは11時半ですよ」

「おおふ、なんでわかったのさ……」

「昨日からその質問、三十四回目ですよ北上さん」

「……だつてさー、まさか最初の三ヶ月は帰宅禁止なんてさー、思わないじゃん」

「そうですね、電話も禁止でしたから」

「寮になんて入らないで、家から通えばいいのにねー」

「まあ、規則ですからしょうがないですよ」

「……しつかし、あの子がいないとこの家ってこんなに広がったんだね」

「広いというか……静かですよね」

「この家買ったときはさー。まさかこんなことになるなんて思わなかったわ」

「そうですね……まさか提督のお孫さんとだなんて」

「なにいつてんの大井っち。提督の孫だけど、わたしたちの子供でしょー」

「あつ……そうでしたね」

「……」

「……」

「元氣だといいいけど、正直ちよつと心配だわ」

「そうですね……子供は目を離すとすぐに成長するというのは知ってますが……さすがに三ヶ月となると……」

「身長とか伸びてるかな？」

「伸びてるかもしれないね……あつ」

「ん、どうしたの大井っち？」

「いえ、玄関のほうから気配が……帰ってきたかもしれない」

「……ツ!!」

「早っ!? ま、まっってくださいよ北上さあん!!」

「……おかえり〜」

「……おかえりなさい」

「……………タダイマ、モドリ、マシタ。キタカミサマ、オオイサマ」

「!?」
「!?!」

—
—
—

「あんた一年たって、ようやく自宅から通えるようになったんだからさ。せめて家にいるときくらい、そのかたつくるしいしやべり方やめない?」

「……さすがにそれはできね、できません」

「ほら無理してる。いいじゃん、誰も見てないんだしさ」

「……できません」

「えゝなんでさ」

「自分は見習いとはいえ憲兵ですので。艦娘であるお二人には、常に敬意を持って接す

ることが求められます」

「なにが敬意だ！ アタシや艦娘の前に親だオラア！」

「艦娘であり親であればなおさら敬意は必要かと思うのですが……」

「ふーん。バシバシ……ねえねえ、怒った？」

「いえ、ほとんど痛くないので怒っていませんが……なぜ自分は突然腹部を殴られたのでしょうか？」

「親子のコミュニケーション」

「そうですか……」

「バシバシ……ちよつと強めに叩いたから痛かったよね？ ねえねえ、怒った？」

「……怒っていません」

「なんでよ、昔なら『なにすんだ、いつてえなこの！』って言ったのに！」

「どうして母様が怒ってるんですか……」

「どうもこうもあるか！ いまさらだけどきてはあれか、鳳翔街の連中の影響だなテメエー！」

「いや、あいつら……ゴホン、彼らほど狂信的ではありませんよ。ですがまあ……自分は、彼らと近い立場にいたこともあって、鳳翔街派閥……と呼べるほどのものではありませんが、ある程度彼らと親交があるのも事実ですので、全く影響を受けていないとは

言いきれませんが」

「やつぱりかこのく。しっかし派閥ねえ……他にはどんな派閥があるのさ」

「自分たちのように全国から集まった、艦連指定都市生まれの一般派閥に、憲兵軍の生活区画で育った、憲兵軍人の子息たちの派閥でしょうか。まあ、一般の派閥は普段はなれ合わず、必要になれば集まる程度の薄い関わりですので、実質はその2つの派閥で占められているといつて差し障りないかと」

「てことは、憲兵軍人の子供らの派閥とは親交ないの？」

「授業の内容次第では、派閥をこえて協力しあうこともあります。ですが、とくに最初の一年は対立こそはありませんでしたが、なれ合うこともないといった空気でしたので、授業以外で関わることはありませんでしたね」

「あー、そういうえば憲兵軍の中にもそういう派閥の違いがあるのを、聞いたことあるような気がするわ。なんか相容れないもんでもあるのかしらねえ」

「そうですね……両派閥とも、艦連や艦娘に対する信仰に近いなにかが根底にあるのを感じます。それゆえに、必要であればすぐに協力し合える……のですが。少し誤解をまねく表現ではありませんが、養殖物と天然物のような微妙な違いがあるように思えます」

「養殖物と天然物？」

「はい、そうであることを望まれた者たちと、そうであることを望んだ者たち……とでも

言いましようか……結果ではなく、過程が違った。そういった違いです。ただ……そもそも憲兵軍幼年学校に入れた者たちは、各派閥の中の生え抜き、さらにその上澄みですの……そういった思想が強いのでしょうか。鳳翔街出身者も憲兵軍生活区画出身者も、その他大勢のその手の意識については、艦連指定都市生まれの人間に毛が生えた程度かと」

「……ふーん。その基準で言うともイサンは、望んでそうなった者ってことなの？」

「……………」

「なーんで黙るのさ〜」

「いえ、なんとこたえたらよいものかと思案しておりました」

「そっか、まあ言いづらかったら別にいいけど。でもマイサンは鳳翔街の派閥と関係があるから大丈夫なんでしょうけど、あの二人はそんな環境でやっていけるの？」

「意外に思われるかもしれないのですが、あの二人はそれぞれの方面で優秀ですので、派閥関係なく頼られている事が多いのです。ですので、自分などよりよほどうまくやっていますよ」

「おっふ、意外だけど……それなら確かにと思えなくもないわ……まあ、全員うまくやれるならよかったわよ」

「はい、おかげさまで」

「といつても、そのガタイなら喧嘩売られることも早々ないか……つて、いまさらだけど身長ずいぶん伸びたわね」。いつの間にかアタシや大井つちより高くなつちやつてまあ」

「はい、幼少の頃よりお二人に作っていただいた食事のおかげです」

「そつかそつか……ふんツ!!」

「ごお!? な、なにすんだ、いつてえなこの!?!」



「いよいよ卒業か〜」

「ほんと、あつという間でしたね」

「あつ、大井つちあそこあそこ、卒業生に敬礼されてる着物姿のちつちやい女の子……あれ多分、アタシらと同じ立場の艦娘だわ……駆逐艦かしらねえ」

「ああ……ものすごく複雑な顔してますね……わたしたちと同じくらい」

「親の心子知らずとはよく言つたもんねえ……」

「北上様に大井様、こんなところにいらしたんですか。この度我々三名、無事に憲兵軍幼年学校を卒業し、艦夢守市所属の軍団に配属されることになりました!」

(※憲兵軍には陸軍海軍空軍などの区分けがなく、各艦連指定都市の軍団 or 師団があり、その中で兵科ごとに分けて配属される)

「自分は衛生科に配属予定となつてまして、この後専門の学校に進学し、学位を取つた後は衛生科の医官になる予定です!」

「自分は航空科に配属になりました、適性があるみたいなのでヘリの操縦士になる予定です、ゆくゆくはホエールライダー(特殊大型飛行艇パイロットの愛称)になるつもりです!」

「おー、よく頑張つたわねあんたら」

「そうですね、はじめてうちに来たときはあんなにちっちゃかつたのに。いまじやいっぱしの軍人さんのしゃべり方まで身について……」

「で、マイサン。あんたはどこにいくの? 恥ずかしながら母様についてみなさいな」
「事務科とか兵站科だと嬉しいんですけど……」

「自分は海兵科……強襲陸戦隊に配属されることとなりました」

「は? か、海兵科の強襲陸戦隊?」

「ちよちよちよ、殴り込み部隊に配属なんて聞いてない聞いてない。なんでよりによって死傷率が一番高い兵科の、そのまた死傷率が一番高い部隊に配属されることになつてるのよ!」

「海兵科のトップ直々の指名らしいですよ、なんでも現役海兵相手の模擬戦で、最後の一人になってからも諦めず、二十三時間戦い抜いたのを見込まれたみたいで」

「……ちよつとシバいてくるわソイツ」

「面子潰されたからつて、危険な任務でうちの息子をすり潰すつもりですか……」

「お二人とも落ち着いてください、これは自分も望んだことです。それに危険も多く厳しい兵科ではありますが、それゆえ自身の能力を限界まで伸ばせますし、将来的に『必要』なことでもありますので」

「面子つていうより、本当に指名しない理由がないんですよ。自分もその模擬戦のときにいきましたけど、教官も強襲陸戦隊員か特殊部隊員になるために生まれたような男だつて言っていました。それに仕留めた海兵の狙撃手も、コイツがあと三人いたら負けてたかもしれません……つてこぼしてたみたいで、本当に凄いい適性があるんですよ」

「ぐぬぬぬ……怖れていたことが起きてしまった……」

「ねえ、いまからでも配属を変えられないの？」

「……変えられませんが、変える気もありません」

「どうしても？ ママ様がどれだけ頼んでも？ あなたになにかあるかと思うと、わたしも北上さんも不安で不安で死んじやいそうになるのに……それでも？」

「……お二人に親不孝者と呼ばれてしまうのは覚悟しております。ですが……すでに憲

兵軍もまた、自分にとって大切な場所ですのぞ」

「そう、ですか……正直納得できない気持ちですが……あなたがそうなりたいた望んでしまったのなら、受け入れるしかありませんね……納得できませんが」

「アタシも正直反対つちや反対だけど……それだけ頑張つて結果出して、あんたが望んでるなら……まあ、認めるしかないよねえ……」

「はい、ありがとうございます」

「でもさ……これだけは覚えたいしてほしいんだ」

「はい、なんででしょうか？」

「アタシも、大井つちも……これからもずっと、あんたのことを思つてる。あんたの姿が見えないときは、いま誰といるんだろうな、いまだここにいるんだろうな、お腹空かせてないかな、怪我してないかなつて、きつと、ずっとずっと、自分達の寿命が尽きるその瞬間までね……これでもかつてくらい毎日あんたを心配してる存在がいる……それだけは忘れないぞ」

「……は……」

「あまり心配をかけないで……というのは無理かもしれませんが。できるかぎりはうちに帰つてくるようにしてね……休日は当然ながら、最低月四日以上は顔を見せてくださいな」

「……善処いたします」

「はい、これも持って」

「……あの、まだ買われるのですか？」

「そうよ、まだ買うわ。この貯めてあった百貨店の金券を全部使いきるまで買うわ」

「自分は療養中なのですが……」

「いいのよ、傷の治りが遅くなれば戦場に戻されなくてすむでしょうに。いつそのまま悪化して医療除隊したらいいのよ」

「それについては——」

「あなたが戦場で負傷したって連絡がきたとき。アタシと北上さんが、どれだけ、心配したと思ってるの？」

「……面目次第もございません」

「ふんッ!!」

「……」

「……」

「本当に心配したんですよ」

「……はい」

「そもそも、卒業して二年目で実戦に参加させられるなんて……早すぎでしょうに」

「それについては……自分が志願したからです」

「はあ？ ……どうしてよ」

「必要なことでした」

「……なにを焦ってるか知らないけど、死んだら元も子もないっていうこと……わかっ
てないの？」

「臆病者はなにも手に入れることができません、特に自分がいる兵科においては」

「それについては……同意できる部分もありますけれど。だからって最前線に出ること
はないでしょうに。欲しいものがあるなら、まずはコネとかを使いなさいよ」

「ママ様は本当に欲しいものを、それらの手段で手に入れられたのですか？」

「わたしは……まあ、自分の努力でどうにかしましたけれど」

「それは母様、北上様の心などでしょうか？」

「……そうよ。しようがないじゃない、わたしは“大井”なんですから」（顔真っ赤）

「存じております。自分は憲兵、そうでなくとも、比翼連理であるお二人の関係は幼少のころより見てまいりましたので。もし機会があれば、お二人のなれ初めなども聞いてみたいものですね」

「そんなの聞いてどうしようっていうのよ……」

「母様とママ様が惹かれあうのは艦娘としての本能というべき部分なのでしょうが……だったとしても、お二人の仲がいいのは、息子である身としては喜ばしいことです。その始まりを知っておきたいのかもしれませんが」

「……／＼／＼」

「喉が渇きましたね。飲食フロアに移動して、適当な喫茶店に入りましょう」

「はあ？ わたしはまだ買うものが——」

「喉が渇きました……ママ様」

「……しようがないわね」

「えっと、わたしはオレンジジュースをおねがい」

「自分はアイスコーヒーを」

「は、はい！ ありがとうございます！」

「……可愛い子じゃない、あの店員の子」

「浮気は感心しませんが……」

「違うわよ!？」

「冗談ですよ」

「ずいぶんと生意気になったわね……それよりあなた、恋人とか作らないの？ さつき
の娘、あなた見て顔赤くしてたわよ？ モテないわけでもないでしょうに」

「自分は憲兵ですので……いえ、それとは関係なく、いまは必要ありませんから」

「必要ないってことはないでしょうに、男なら溜まるものもあるでしょ？」

「それについてはまあ、訓練や薬でどうにでもなります」

「……そこまで行くと二周して不健全じゃない？」

「冗談ですよ。あまり母親に話す内容でもありませんが、憲兵軍の区画にも赤線（※公娼
区画の隠語）はありますので」

「ふうん、まあそのあたりのことまで心配するつもりはないけど……北上さんも言っ
ていたように、いざというときに踏ん張れる理由をつくるなら、やっぱり家族を持つのが
いいと思いますよ……と、まあ、人生の先輩からのアドバイスです」

「はい、胸に刻んでおきます」

「うん、よろしい」

「お待たせしました、オレンジジュースとアイスコーヒーになります!」

「はい、ありがとう」

「ありがとうございます」

「あつ、いえ……ご、ごゆつくりどうぞ！」

「……そういえばあなた、さつき別行動とったとき、どこにいったのかしら？」

「トイレですが？」

「嘘おつしやい、さすがに長すぎでしょ。それに腰ポケットの膨らみ、バレバレよ」

「……ママ様に隠し事はできませんね」

「べつになんでもかんでも話せとは言わないけど……」

「いえ、まあ、お二人が一緒のときにお渡ししようと思っていたのですが……これです」

「これって……指輪？」

「はい、そうです」

「なんで指輪なのよ？」

「初任給とはいえませんが……育てていただいた母様とママ様に、なにか給金で贈り物を買いたく思ったのです。お二人は夫婦なのに、指輪をされていない。なにか理由があるかとは思ったのですが……もし問題なければ、結婚指輪として身につけていただけらと思ひ購入いたしました」

「……………」

「……あの、ママ様。やはり不味かったでしょうか？」

「その指輪……はめてくれる？」

「は？ いえ、さすがにそれは母様に……」

「いいのよ、北上さんもきつと……あなたにはめてもらいたいでしょうから」

「では失礼して……よかった、サイズは合っていたようです」

「……ふふふ、そうね、確認するわけにもいかなかったでしょうから……ぴったりよ。でも結婚指輪か。わたしも北上さんも……考えもしなかったな。はは、結婚して十年以上たつてたのに……なんでかしらねー」

「なるべく長くもつよう、頑丈な素材で作っていたのですが……もし気に入らなければ処分していただいてもよろしいので」

「なに言ってるの。息子が身体に穴開けて稼いだお金で買ってくれた、大事な大事なプレゼントよ……処分なんてするわけないでしょ。お墓まで持っていくわ」

「……光栄です」

「……きれいなね。帰ったら……忘れず北上さんにもはめてあげてね？」

「喜んで……もらえますでしょうか？」

「喜んでくれるわ、きつとね」

「……」

「……」

「ありがとう、大事にするわ」

「……はい」



「はい、お茶どうぞ。あの子はちょっと買い物に行ってるけど、すぐ戻ってくるからちょっと待っててね」

「しっかし幼年学校卒業してもう四年ちよつとか。ギリギリ未成年っていつても、これだけ勤めたならもう立派な憲兵だねえ……」

「はい、今日は来られないんですが、おれたちの頭脳担当だったあいつは学位も取得できず、予定通り衛生科に配属される予定みたいです。ただ在学中に書いた論文が軍病院の院長の目にとまったみたいで、脳外科への勧誘がきてるみたいですけど」

「あらまあ、今度会ったときは先生って呼ばなきやいけないかもね」

「そういえばあなたはホエールライダーになれたのかしら？」

「ははは、ちよつと試してみたんですが、小回りの利くへりの方が性に合ってたみたいでして……もうへり一本でやっていくことになりそうです」

「ふーん、まあ自分に向いてることやるのが、一番結果出せるからいいんじゃない？」
「雷巡として特化された北上様にそう言ってもらえると、説得力がすごいですね。あつ、いまさらですが、今日は突然お邪魔して本当にすみません。その、用事が済んだらすぐ帰りますので……」

「そんな焦らなくても、あの子も喜ぶだろうし、別に泊まっていてもいいけどねー」
「外泊許可はとってきてないの？」

「いやいやいや、お二人があいつと過ごさせるのは、今日と明日で最後なのに……邪魔なんてできませんよ」

「……どういうことかしら？」

「なになに、なんなのさー……ちよつと穏やかじゃない雰囲気ね」

「え？ だって、え？」

「……」

「……」

「……本当ににも……聞いてないんですか？」

「そうね……たぶん聞いてないと思うわ」

「そこまで深刻になるような話は……聞いていませんね」

「あの馬鹿……」

「もし話せるならば、話してもらえますか？」

「なんか嫌な予感がするから……あんまり聞きたくないけどさ」

「……おれから言っているかもしれないことなのかわからないんですが。いや、このままだとあいつ最後まで黙っているかもしれないなら、なおさらのこと、お二人は知っておくべきだと思うので……言います。あいつ……申請が受理されて、試験に合格して……憲兵千鬼衆に配属されることが決まったんです」

「※憲兵千鬼衆：憲兵軍の特殊部門。主に艦連法を犯した重犯罪者、または艦娘や提督などが関わる犯罪捜査に捕縛任務。そして悪意を持って提督を殺害した存在に対して、徹底的な報復行動を取ることを最大の目的とした組織。その特殊性ゆえに機密が多く、隊員である『鬼』は、その経歴を消し、顔を変え、過去との関わり一切を絶つことが義務付けられている」

「……憲兵……千鬼衆？」

「あー……想像してたより百倍最悪だわ」

「元々……幼年学校時代から志願していたみたいで。適性試験も受けてたんですけど、結果は……教官も驚いてました。千鬼衆になる上で必要な素質をほとんど持っていて、適性が馬鹿みたいに高いって」

「幼年学校時代か……ら？」

「……鳳翔街の連中の影響って、そういうこと……ね」

「身体的なものは当然ながら、特に高かったのは精神的な部分だったらしいです。自分には信念や思考とか精神構造的な専門の説明はできないんですが、教官が言うには『善のために悪を成すことをいとわず、その悪がどれだけ身体にへばりついて、まったく意に介さない逸材』ってことらしいですけど。」

あと部隊での連携は当然なんですけど、単独行動時において能力が跳ね上がる特性もあつたらしくて……幼年学校のとときの現役海兵との模擬戦のときにそのあたりも判明したみたいで……上層部もそのつもりで兵科の配置選定やキャリア（実戦経験）を積ませてみたいですよ」

「……そんな、千鬼衆だなんて……そんな……」

「………悪いけどさ、今日はもう帰ってちょうだいな。ちよつと、余所様には見せられないことになると思うからさー」

「………はい。その、こう言っちゃなんんですけど、おれたちも止めました。だけど、あ

いつあの性格だから……三人での別れはもうすませたんですけど、どうしても最後に言いたかったことがあって。それだけ伝えてもらっても——」

「ただいま戻りました。ああ、靴があつたからもしかしたらと思つたが……来てたんだな」

「……すみません。やっぱり自分で言います」

「……」

「……」

「もしかして……話したのか？」

「むしろなんて言つてなかつたんだよ馬鹿。……だけど、よかつたよ。おまえ最後まで黙つていくつもりだつたんだろうからな……いろんな意味で……よかつたよ」

「そうか……悪かつた」

「まつたくだ。まあ、いいさ……今日来たのは、この前言いそびれたことを言いに来たんだ。どうしても前に言えなかつたことだ……だけど、これを言わずに別れたら、きつと後悔すると思つてな。あいつと相談して、おれが伝えに来た。あいつとおれから、最後の言葉だ……」

「……なんだ？」

「……………初めて会ったあのとき、お前にとって世界で一番大切な人たちのことを侮辱して……………本当にすまなかった」

「……………あのとき、おれも殴って悪かったな」

「はは、ありやいいパンチだった……………おれは最高のヘリパイロットだから、これからもあちこちの作戦で招集される。いつかお前と一緒に作戦にもかちあうだろうさ。でも、今度会うときはきつと……………おれはお前のことをお前だつてわからないだろう……………けど、そのときはよろしくな」

「ああ……………そのときはよろしく頼む」

「じゃあな、親友」

「……………達者でな」

「……………さて、あの子も帰ったことだし……………しつかり聞かせてもらいましょうか」

「そこに座りなさい」

「……………はい」

「憲兵千鬼衆になると聞きましたが……………嘘ですよね？」

「嘘だつたらいいなく……………ほんと、嘘だつたら」

「いいえ、本当のことです。自分はこの度、憲兵軍総司令部からの正式な辞令を受け、憲兵千鬼衆に就任することとなりました。お二人には、これまで育てていただきました恩をお返しで——」

「ふざけないでツ!!」

「……思えばママ様に叩かれたのは……はじめてですね」

「おつ、大井っち落ち着いて、落ち着いてって」

「これが落ち着いてられますか北上さん!! とにかく……あなた、憲兵千鬼衆つてのがどういうものなのか、本当にわかっているの!?! あの人たちはね、文字通り『鬼』なの。自分から望んで、生きたまま鬼になることを選んだ人たちなの。」

そりや世間じゃかつこよく語られることもあるかもしれない。実際千鬼衆には沢山の役目があるからね……でもそれはあくまで一つの側面にすぎない。あなたは千鬼衆の真の役割がなんだかわかっているの!?!」

「……悪意を持つて提督を殺害した者に完璧な報復を行い、世に究極の復讐装置である無数の鬼たちが実在することを知らしめ、そのようなことが二度と起こらぬよう抑止力として恐怖をまとい、破滅の象徴とまかりなることです」

「そうよ!! でもそれだけじゃない。報復や復讐っていうのは綺麗事じゃないの。その過程で他の誰かの大切な人を傷つけるし、終わらない憎しみの螺旋が生まれる。千鬼衆はその過程で生まれた恨み憎しみを全部引き受けて、誰からも怖れられて、つらくてつらくて普通の人じゃ耐えられないような役割を、わたしたち艦娘のために引き受ける鬼なのよ。」

実際に千鬼衆は必要なら専門の思考訓練も積んで、提督たちを害し、艦娘たちを悲しませる人たちを殺し尽くしたくてしょうがないって、心のそこから本気で思うようになるときもあるの、それこそ本物の鬼……いえ、深海棲艦とかわからないような存在になっちゃうのよ!」

「全て承知しております……そのうえで、自らそうならうと決めましたので」

「どうして!? なんでなのよ!! 言っておきますけど、わたしたちは絶対に認めませんからね! あなたがどれだけ望もうと、相手が憲兵軍だろうと艦連だろうと、わたしたちの息子を鬼にするなんて絶対に許しませんから! そうですよね北上さん!」

「……アタシはさ……まあ、この子がそう望むなら……しょうがないかなって」

「なっ?! どうしてですか北上さん!? 千鬼衆になったら過去も現在も未来も消され

て、わたしたちの息子じゃなくなってしまふんですよ!? この子はまだ二十歳にすらなっていないのに!! この子はわたしたちの息子なのに!! この子にはまだ母親が必要なのに!!」

「それはまあ、うん、そうねえ……」

「もうこうなったら手段なんて選んでられません。親として艦娘として艦連に申請して、憲兵軍も除隊させましょう!! だってこの子には、親として愛して、守ってあげられる母親がまだ必要です!! それが提督の望みだったはずですよね!」

「……うん、そうねえ。でもさ……大井つちにさ、提督の願いをたてに、この子の望みを……人生を矯正する権利ってあるのかなって思うわけさ」

「そんな言い方!」

「当然アタシにもあるのかなって……」

「あるにきまっています!! だってわたしたちは親なんですよ!! ……駄目なんですか?

幸せな人生を歩ませてあげたいって考えるのは……憲兵軍ならまだしも、千鬼衆だなんて……鬼にはなつて欲しくないって、そう思っちゃ駄目なんですか!」

「……昔、大井つち言ったよね。子供の願いをしつかりと聞いてあげるのが親というもの……だって」

「それとこれとは……」

「いまがそのときなんじゃないかなって、思うわけさ」

「ツツ!! そんなわけありません!! わかりません!! 絶対間違ってます!! 北上さんの馬鹿ツ!!」

「あつ……あく……いつちやつた」

「……追いかけるべきでしょうか？」

「自分の部屋にこもっただけみたいだし、まあ、大丈夫でしょ……大丈夫じゃないでしょうけど……」

「……」

「……」

「まあ取りあえずさ、晩ご飯の準備しよつか。知ってるでしょ、あんたが帰ってくる前日には、大井つちがご馳走作るために凄い時間かけてさ、用意してるの」

「……はい」

「ん、冷蔵庫からお味噌とって」

「はい……どうぞ」

「ありがと。あとはそのネギ切って、5ミリ刻みでね」

「了解いたしました」

「……」

「……」

「母様は……反対されないのでしょうか？」

「反対して欲しいの？」

「いえ……」

「でしょ。まあ自分でもちよつと驚いてる。たぶんアタシはなんとなく……あんたが海兵隊の強襲陸戦隊に配属されるって話をしたときに、いつかこういう日が来るんじゃないかなって覚悟してたのかもね。勘違いならよかつたんだけど……あはは、やつぱアタシって天才的だわ……」

「……」

「憲兵千鬼衆はさ……辞めることもできるけど、辞めたら特定の都市区画で住むことが決められてて、そこからは二度と出られないのは……知ってるでしょ。だから……北上様特製みそ汁もさ、もう飲ませてあげられないからさ……沢山飲んで……うっ……う、う、うッ……」

「はい……いただきます」

「……ゴメンゴメン、ちよつとタマネギが目染みたわ。それと……今日は三人で川の字になって寝るから」

「ですがママ様は……」

「ああ、大井つちなら大丈夫大丈夫。ね……大井つち」

「……」

「ツ!? ……いらしたのですか」

「……北上さんはお菓子とお味噌汁しか作りませんから」

—

—

—

「んじやお別れだね。たまには帰ってきなさい……って、そうだったそうだった。もう帰ってこれないんだったわ……はははは」

「はい、そうなります」

「まったく……この親不孝もんが」

「返す言葉もございませぬ……」

「自分で決めたことですよ、だったらそんな顔しなさんな」

「……はい」

「じつはさ、昨日からずっと考えてたんだ。文字通り鬼籍にはいるあんたにむけて、最後にどんな話をしようかってね。で、それをいまから話すからさ……聞いてくれる？」

「……はい、拜聴させていただきます」

「うむ、それでは母様である北上様が、最後にありがたいお話をしてあげようじゃないの
さ」

「お願いいたします」

「……昔ある艦娘が絶体絶命のとき、提督に言ったらしいの。もはやこれまで、提督、一緒に深海に行きましょう……って

そしたらその提督はこう言った。馬鹿言え、深海に行くのはお前らだけだ、おれみたいな人間様が行くのは地獄だーってさ。

でね、それを聞いた艦娘はこう言い返したんだって。……ならわたしは深海棲艦の鬼になつてもお伴します。絶対離れません……ってね」

「……」

「こんなナリだけどアタシらはもう老人つて歳だし。あんたはこれから鬼になつて、この世のありとあらゆる争いの渦中に臨んで飛び込むような、ひどい闘いの日々を送ることになる。たぶん……そう遠くないうちに両方墓に入るでしょうよ。

そりやできれば、親よりは長生きしてほしい、そう思つてるけどさ……。まああなたが

言いたいかつていうと、さつき話したように、アタシも大井つちも、きつと死んだらろくでなしだった提督がいるであろう地獄に行く。

だから……あんたも来なさい、生きたまま鬼になるようなあんたは、死んだあとでも鬼でいるのがお似合いよ」

「……はい。憲兵千鬼衆としての役目をまっとうした後には、必ずやお二人と祖父……提督殿の元にはせ参じさせていただきます」

「よろしい……ほら、大井つちもなんか言っただけな。最後……なんだからさ」

「……いまならまだ間に合います、考え直す気はありませんか？」

「……ありません」

「考え直して、憲兵軍にいられなくなつたとしても……ずっとずっとわたしたちが守つてあげます。それでも絶対に絶対に絶対にありませんか？」

「はい、絶対にありません」

「考え直してくれるなら、千鬼衆なんかにならないって言ってくれるなら……わたしも北上さんもなんでもしてあげますよ？」

「……考え直しません、自分は憲兵千鬼衆になります」

「そう……そうですか……」

「大井つち……」

「なら……今日の別れは、あなたとわたしたちとの、今生の別れとなります」
「はい」

「……あなたは艦娘と提督たちの安寧のために、心身……そして文字通りこれまでの人生とこれからの人生、それら一切合切の全てを捧げることになるでしょう」

「覚悟しております」

「それだけではありません。生きて苦しむもの、老いに嘆くもの、さまざまな障害や病気の残酷さ、死を前にして絶望するもの。常人よりも遥かにたくさんたくさんの苦しみと死を目にして、自身もそれを味わうでしょう」

「……はい」

「愛するものと別離する者たちを目にし、ときに自らもそれと向き合うことになる。

誰かを怨み憎んでいる者と出会います、そしてあなたも怨み憎まれることでしょう。

どんなに力を入れても、求めるものが得られないことが付きまといまいます。

そして、自分自身のことだというのに、思うがままにならないことばかりなはずですよ
「すべて……幼少の頃、そしていままで生きてきて、人一倍経験してきたことです」
「だとしても、もう一度……いえ、これから何度も何度も経験することになる、それがいいわけがない。まさに生きて地獄を見る……それでもですか？」

「それでもです」

「そうですね……なにがあるかと、あなたは鬼になるのですね」

「はい」

「………わかりました、ならもうわたしは止めません。あなたは……鬼に〴〵なつてくれる〴〵。であれば、足を引つ張るようなことはもう言えません。なぜなら……忌むべき大義を掲げ、憎むべき役目を果たすために鬼になつてくれる。あなたが、あなたたちがいてくれるからこそ、わたしたち艦娘はこれからも人類を憎み滅ぼそうとした深海棲艦のようになることなく、人類を愛する側でいることができるからです」

「……」

「どうか現在と未来の提督と艦娘たちの平穏のために、提督を害した者たちをひとり残らず殺しつくし、世にこれより恐ろしい存在はないと知らしめ、恐怖を振りまく存在となつてください。」

わたしたち艦娘は、その献身を輪廻の先まで忘れません……そして、そして……うう……」

「……大井つち……ありがとね……アタシの代わりにいつも大切なことを言ってくれて……アタシもさ……同じ気持ちだよ……ほら、泣き止みなつて。大井つちが……アタシらが愛した子との、最後のお別れなんだから、笑顔で見送つてあげなきや……ゆつくりでいいから、最後まで言つてあげな……」

「……………あい？ あいした？」

「はい……………北上さん……………そして、そして願わくば、そんなつらい生を送ることになったとしても……………どうか一日でも長く……………生きてください。それが……………あなたの……………あなたを愛した母だったものたちの……………最後の望みです——」

「……………ああ、そうか……………おれは……………おれはとつくに二人の特別になれてたんだな

……
」

「……なにいつてんの。あんたはわたしたちの息子で、ずっと特別だったでしょうに」
「もう、なにあなたまで泣いてるのよ……言葉使いまで昔みたいになっちゃって……」
「……失礼を。恥ずかしくも、自分は祖父の……お二人の提督に願われ、母様と

ママ様に子として「愛して」いただいていたことを理解しておらず……それがどれほどの「特別」であつたかも……いまようやく……知ることができました」

「いまさらか、ようやくこの北上様の胸一杯の愛情を実感したのか、遅いぞこの」

「……そうですよ、あなたのことを愛していました。北上さんと同じくらい……」

「はい、おのれの不明を恥じるばかりです……ですが、であるなら……もはやわたしにはこれ以上求めるものはない。自分という存在がなによりも欲していたであろう、この胸を満たすあたたかな想いさえあるなら、もうなにも……必要ない」

「もつと沢山あげたいものあつただけどね」

「……でも、あなたに必要だつたものをあげられてよかつたですよ」

「充分です、もうなにも望むものがないほどに……充分にいただきました。」

……そして、もうなにも求めぬなら、わたしは自身の存在に執着する必要はもうありません。であれば、いまやこの身命がおのれのものであることへの未練はすでになく。世界を救いし艦娘という存在のためにこの身、魂魄の一片まで捧げるに一切の迷いも無し。その為であればいかなる残虐非道な行為をなすこととわず……すなわち、この身は鬼と成るにふさわしい」

「……」

「……」

「最後にこれ以上ない手向けのお言葉をいただけただけなこと、ありがたく存じます。それでは母様、ママ様。……いえ、北上様、大井様。どうかお達者で」

「はいよ、あんたもね」

「ええ、さようなら」

「……いつちやったね」

「そうですね」

「ははは、なんていうか……ずいぶんとおつかないもんになっちゃったね、わたしたちの息子はさ」

「そうですね……でも、根っこのは変わってませんよ」

「まあそう……そうねえ……あの強情さは最後まで変わることもなく、日に日に強くなつて、ついには憲兵千鬼衆になるに至っちゃったからねえ」

「はい、それに北上さんのお味噌汁がすきなところも……昨日の晩も朝も、鍋いっぱい

作ってあったのに……全部飲み干して。正直ずつと気にしてたんですよ、北上さんの作るものばかりおいしそうに食べるから」

「ははっ、そうねえ……マイサンは帰ってくるたび、アタシの味噌汁をおいしそうに飲んでたわ。でもさ、大井つちの作るご飯もおいしそうに食べてたじゃないのさ。それにさ、アタシも何度か大井つちがいないときにご飯作ってたけど……見ててわかるんだ、大井つちのが作ったご飯のほうがおいしいんだろうなーって」

「えっ、ほんとうですか？」

「嘘言っただうすんのさ」

「そうか、そうだったんですね……」

「意外とき、アタシたちあの子のことなんにもわかってなかったのかもねー」

「そうかも……しれません」

「……」

「……」

「これからどうしましょうか……」

「そうねえ、いつそあの海賊船で世界一周旅行でもしちゃう？」

「それいいですね♪ 三人で……いえ、夫婦水入らずで世界一周旅行を——」

「大井つち？」

「でもやつぱり……この家にいましょう。必ずどちらかが、いるようにしましょう」

「……あーそう、そうねえ……あの子が……帰ってくるかもしれないもんね」

「ええ、そうなったときはきつと憲兵軍から追われる身になってることでしょうから。わたしたちが守ってあげないと……」

「そうね、守ってあげましょ」

「……」

「……」

「そうなったら……それはそれで嬉しいですね」

「……嬉しいね、そうなったらこの街逃げ出して、三人で……本物の海賊にでもなっちゃおっか?」

「いいですね……海賊しながら世界一周旅行しちゃいましょう♪」

「ふふ……」

「はは……」

「……愛してるよ、大井っち」

「……はい、わたしも愛してますよ北上さん」

いまか昔かあるところに、二人の艦娘に育てられた一人の子供がいた。子供はすすくと育ち、一人の男になり、そして憲兵になった。だがある日、男は親代わりであつた艦娘たちに別れを告げた。

憲兵千鬼衆になるためだ。

なぜ、どうして、なにが原因で男が鬼になろうと思つたのかはわからない。

確かなのは、男は自らの意思で、鬼になると決めたということだけ。

そうして男は名前と顔を変え、過去を消し、鬼になった。

鬼は世界で最も過酷な心身の訓練と身体改造の日々を越え。

数多の任務、作戦、戦闘をくぐり抜け。

生きて味わうこの世の苦しみ、その全てを常人の何十倍も浴び。

それでも忌むべき大義を掲げ、憎むべき役目を果たし続けた。

やがてときがたち、歴戦の憲兵千鬼衆となった鬼に特殊任務の指令が下される。

それは、とある提督を殺害した犯人の正体を握るとされる証人の捜索だった。

鬼は艦連と協定を結んでいない敵地ともいえる国に、ナイフと無線機だけを手に潜入。

そうして二年間潜伏したのち、証人を見つけ、その人物の確保に成功した。

だが、鬼は回収に来た憲兵軍のヘリコプターに証人を護送する最中。

それを妨害しようと追ってきた敵からの銃弾を頭部に受け、負傷してしまふ。

しかし鬼はその状態で証人をへりまで運び、離陸の時間を確保するために戦闘を開始。

そして離陸の成功と安全を確認したのち、機内で息を引き取った。

鬼の最後の言葉は“次”の作戦への参加を告げるもの。

そして“遅く”なってしまうことへの謝罪だったという。

優秀な鬼を失った憲兵千鬼衆たちは、鬼の損失を惜しみ。

報復戦の最終段階に参加できない鬼の無念を想った。

だがその鬼の尽力で証人は確保され、その証言と証拠を基に報復作戦は完璧に遂行された。

報復戦を指揮した艦娘は作戦終了後、鬼たちが眠る墓の前ですつと手を合わせていたという。

憲兵千鬼衆が死亡した場合、鬼たちは共同の墓に葬られる。

だが鬼になった時点で、人だった頃、過去の名前は存在しない。

ゆえに、墓石に男の名前が彫られることはないし、男の死が誰かに伝わることもない。

しかし鬼たちには、その存在を証明する認識番号が存在する。

こうして憲兵千鬼衆の共同墓石に、新たな番号が刻まれた。

それはいまか昔か、あるところ。

とある雷巡の艦娘たちに愛された誰かの認識番号だった。

『雷巡：北上』と『雷巡：大井』
おわり